
ネギま！ 神様から頼まれたお仕事。

たいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 神様から頼まれたお仕事。

【Nコード】

N7417N

【作者名】

たいち

【あらすじ】

事故で死亡し、真っ白な世界にたどり着いた主人公。

普通に転生させてやるといってゴネ始める。

その結果、ある仕事を引き受ける代わりに

ネギま！の世界に転生すること・・・

この作品には微妙なアンチ要素、原作の改変、キャラの崩壊などの要素が含まれます。

そう言った要素に不快感を覚える方は読まないことをお勧めします。
主な原作作品 ネギま！ 天地無用（一部設定のみ）

神様から頼まれたお仕事。 その1（前書き）

ある程度書きあがったのでテストで投稿。

神様から頼まれたお仕事。 その1

「と、言うわけでテンプレでございます。」

「いや、テンプレと違うし……」

あたり一面真っ白なくせに、今座っている床は微妙に柔らかい、

芝の上にも座っているような感覚だ。

そして目の前には幼女が……幼女？

3

（とりあえず、知らない天井だ……？）

「天井無いし。」

「思考を読むなよ。」

「……とりあえず、私どもの不手際であなたは死にました。」

「無視か・・・」

「そこで転生の輪に戻っていただくに当たって、

あなたには生まれる場所と時代を選ぶ権利が与えられます。」

「・・・っは？、普通テンプレなら特殊能力とかじゃない？」

「だからテンプレとかなんですか？」

どうもこの幼女は特殊能力とかをくれるタイプの幼女じゃないよう
だ・・・。

「それで、どうしましょうか？」

希望の時代とか家柄とかありますか？

どこかの皇帝の皇子とかでもいいですよ？」

「いやいや、権力闘争に巻き込まれて暗殺とかイヤだろう、普通」

「じゃあ普通の一般家庭とか、虫とかでもいけますよ？」

「せめて人間でありたいです・・・。」

「注文の多い人だなあ。」

えっ？俺が悪いの？

確か不手際で間違えて殺したって言ったよね？

「あなたが想像するような能力もらってどこかの世界で好き勝手とか……」

やりたいですか？」

「できるんすか！？」

「……そうですね、コレも何か縁かもしれません、

ちょっと待ってくださいね。」

幼女がなにやら携帯(?)を取り出してどこかに連絡してるが……

この幼女、何で園児服着てるんだ？

ご丁寧に黄色の安全帽子までかぶって……。

「はい……ええ、以前……はい……」

・ちようど今・・・・・・・・はい・・・・

分かりました。・・・・・・・・はい」

話が終わったようだ。

幼女は携帯（？）を園児が持つてる黄色の鞆にしまってこっちを見た。

「今確認したところ、ある条件を飲んで私どもの仕事を手伝ってもらう条件で

あなたの想像する能力をもらって好きに暮らせる世界があります。

「本当ですか!？」

「ただし、先ほど申したように、私どもの仕事を手伝ってもらいます。

仕事といっても特に何かをするわけではありません。

ただその世界で生きていただくだけです。」

「どづいつことですか?」

「先ほど話した転生という話の通り

この世界は魂が輪廻転生を繰り返して回っています。

ですが、たまに今のあなたのように予定外の死であったり、
転生の輪から外れる事象が最近観測されています。

多くの場合、先ほど提示したように、転生先の時代と場所、生まれ
る家などを

選んでいただいて転生し、人生をやり直していただくのですが、

これは根本的な解決になりません。」

「なぜ解決にならないんですか？

輪廻の輪からこぼれた魂なら戻せばいいんじゃないですか？」

「そもそも、通常ならそんなことはありません。

薄々あなたも感じているかもしれませんが、私共はこれでも神の名
を冠しています。

その私共が作ったシステムでそのようなことは起きないんですが、
ここで予想外のことが起きました。」

「予想外のことですか？

神も全知全能ってわけじゃないんですね（w）」

ゴッ!!

神（幼女）の拳が脳天に突き刺さる。

「全治にして全能なのは唯一神だけです。」

私共は神とはいえ世界を管理する役割ですので

それぞれの担当部署の案件以外それほど全能なわけではありません。

「

「・・・殴らなくてもいいんじゃないでしょうか？」

「その程度ですんで、ありがたいと思ってください。」

「・・・それで、どんなトラブルがあったんですか？」

「コホン、トラブルというほどのことじゃないんですが

この世界、太陽系には生物が生息する星は地球しかありません。

最近あなたの生きていた時代でも人口問題が上がってると思います

が魂の量が飽和状態になってきたんです。

これは、ある意味システムが完璧すぎた故の誤算ともいえます。」

「人が多すぎて転生先が順番待ちという感じですか？」

「そうとっってもらって結構です。」

本来なら別の星などで新しい生命が生まれて そちらに送ればいいんですが

システムがうまく行き過ぎて転生先が追いつかない状態なんです。

そして不具合が起きて輪廻の輪からこぼれたり、あなたのように

本来死ぬべきじゃな人が出てきたりします。

といっても、数百年に1人程度ですが。」

「ある意味俺は運が良いということですか？」

「転生の輪から外れて運が良いも無いと思いますが、稀有なことであります。」

ここで一息入れるのか、幼女が園児バック（通称）から

ジュースを取り出して・・・」どうぞ「俺にもくれた。

絶対自分一人で飲むと思ってたのに！

くやしい、この幼女冷たいようで地味に優しい！

（ビクンビクン）

「それで、先ほどの仕事というのはどういうことですか？」

「仕事といいますが、先ほど申したように転生先が足りないので

急造で新しい転生先を造るという案が以前より挙がっていましたが、

我々神が関与して新しい世界を作ると

どうしても調和が取れすぎて争いの無い平和な世界になりがちです。

」

コクン………あ、このジューズうまい

「それはいいことなんじゃないですか？」

「それがそうでもないんです。

争いが無く調和の取れた世界は進化が無く、ただただそこで植物の
ように

生きていくだけなんです。

それでは転生先の罰や魂を磨くことが出来ないんです。」

「どうゆうことですか？」

「たとえば前世で姦淫の罪が酷い男がいるとしましょう。」

地獄で一応罪の穢れは落とすんですが、次の転生先に前世の業が付
きまとうんです。

具体的に言うと、カマキリに転生して、雌に食われます。」

「ぶふうううっ!」

「きたないですねえ……」

話を戻しますが、魂を磨くとは善行を積むことです。

人を助け悪をなさず求めるところは少なく……」

「林の中の象のように。 ですか?」

「以外に物知りなんですね。」

そこまでは申しませんがそんなようなことです。」

「宗教じみてきましたね。」

「宗教とは基本的にモラルを体現したものです。」

多くの宗教で殺人を禁じ、盗みを禁じているように法律の無い時代の
法律書みたいなものです。」

それゆえに大雑把に考えれば同じような内容になります。

己を律し、他者を助ける、みんな仲良く暮らしましょうということ
です。」

「分かりやすすぎます・・・」

「話を戻しますが、あなたにはあなたの知る特定の物語の世界に入
って

そこで人生を過ぎしてもらいます。」

「キターーーー!!!」

・・・?

でもそこでおれが生きることがなんで転生先の確保になるんですか
?」

「ただ物語の世界を作っただけでは物語が終わった刻に 世界が閉
じてしまいます。」

そこであなたの役割が出てきます。

あなたという存在が物語の中で生きることによって

あなたの想像力で物語の終焉の先が生まれるのです。」

「?????」

幼女のくせに一々話ことが小難しい。

「……具体的に説明しますとAという魔王がBという勇者に倒されました。」

本来ならここで物語りはおしまいです。

ですがあなたがこの物語の先にどういう展開があると思いますか？」

……少し考えてみる。

「単純に考えれば魔王を倒した勇者が新たな魔王になって男を皆殺しにして

幼女だけの国を作った挙句、子供の絶対数が足りなくなって人類滅亡。」

ですか？」

「……どこまで極端なんですか。（人選間違えたかしら？）」

「ジョーダンですよ、ジョーダン。」

アレは真面目に考えてアレなんですわ……

「コホン、ようはそういうことです。

あなたが世界で生きていればその物語の続きはそういう世界になるんです。」

「人類滅亡じゃないですか!！」

「あなたが言い出したんでしょうが!！」

ゴッ!!

神（幼女）の拳が脳天に突き刺さる。

「2発目が・・・」

「数えなくていいんです!！」

ゴッ!!

神（幼女）の肘が脳天に突き刺さる。

「そつれつでっ!！」

あなたが生きてける限りあなたの無意識の想像によって世界が続いていきます。

つまり、あなたには不老不死になってもらって世界で生きてもらおうんです。」

「・・・不老不死って結構悲惨ですよね？」

知り合いがどんどん先に死んでいくと流石に鬱になりますよ？

その内達観して仙人のように山奥で植物のように暮らすのは流石に・・・」

「ですから お仕事だといったんです。

ですが私共も流石に事故でここに来たあなたに

そんな生活を強いたんじゃないので

ある程度精神力などを強化したり、あなたが先程から言っている

能力なるモノを授け、出来るだけ快適に過ごしていただくつもりです。」

「なるほど、つまり星がある限り生き続ける苦行に耐えられる体と精神を

用意していただけると。」

「・・・そこまで言いませんが、人類が滅亡とかしたら

こちらに戻っていただきます。

その段階で罪を清算し、次回の転生に行って頂きますが
長いときを生きるというのはそれだけで苦行です。

仕事を依頼したというのもあるので、報酬分罪の減刑を計算します。
ですので、戻っていただいても

次の転生はそれなりに幸せなモノになると思いますし、
うまく新しい世界が軌道に乗ったら、その世界で管理神として
神格を得られる可能性もあります。」

「すごい優良な職場ですね！」

「・・・まあ、あなたも薄々感じていると思いますが
長く生きるということは、同時に長い苦しみがあるということですよ。
生きるだけで多くの命を奪いますが比例するように苦しみも増えて
いきます。」

それが分かってるあなたなら大丈夫だと私は思いますがどうします？

この仕事を引き受けてくださいますか？」

・・・うん

この話はつまみもあるが幼女神も言ってるように苦行だ。

最高の出世が神になれるというのは、恐ろしいほどの出世コースに乗ることになるが・・・。

「仕事を請けるかどうか決める前にどんな能力がもらえるんですか？

それを聞いてから決めようと思うんですが？」

「そうですね、そこも話しておいたほうがいいでしょうね。

まず物語の世界は 『魔法先生ネギま！』 を予定しています。

これは長寿の生命が存在したりある程度の争いがあり

それでいて平穏に暮らそうと思えばそれが出来るであろう世界だからです。

それにあなたの生前の部屋の棚に31巻まできれいに揃っていたので好みにも合ってると思います

あと、先ほど申したように、基本的に不老不死です。

これは具体的にはあなたの記憶から読むと「勝手に読むなよ、この幼女神！」」

ゴッ！！

神（幼女）の拳が脳天に突き刺さる。

「話を続けますね、月姫という物語の真祖のような能力を予定します。」

吸血衝動などのマイナス要素を除いた状態です。

あなたの生存が世界の生存に繋がるので世界の意思も

あなたの非常に協力的です。

力、移動速度、反射速度などは本気を出せば世界で最高クラスですね。

魔力も世界から直接もらえるので無限です。」

「なんとというｗｗｗｗチートｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「ですが魔法はほとんど使えないと思ってください。」

「何でだよ！」

あの世界に行つて魔法使えなかつたら意味ないじゃないですか！！」

「理由は説明します。」

あなた自身の魔力は今のあなたを参考にしていますので

一般人並かそれ以下です。」

「それも増やしてくれてもいいじゃないですか！！」

「そこまでサービス過剰には出来ません。」

なんとという幼女の勝手理論。

月姫の真祖はよくて魔力のチートはだめとは……

「それですね、あなたが星の魔力を使って魔法を使おうとすると精霊が受ける魔力の許容量を超える為、精霊が混乱し魔法が発動できません。」

つまり魔力が大きすぎるんです。

かといってあなた自身の魔力は本当に少ないので、人並以下なので使える魔法も知れています。」

「2回言うほど大事なことなんですか……（涙）」

「大事ですね。」

「もういいです……。」

「そういうわけで魔法は覚えられますが期待しないでください。

その代わりに先ほども申したとおり、

月姫の真祖のペナルティ要素はありませんので………

「

「……なんですか、その気持ち悪い」

「

ゴッ！！

神（幼女）の拳が脳天に突き刺さる。

「なんででしょうか？（涙）」

「驚いてくださいね、」

空想具現化 を好き放題使えます。」

「俺の時代がキターー!!!」

「でも出来るだけ使用は控えてください。」

「……っは？」

「なんでですか？」

「空想具現化は世界に干渉し、あなたの想像通りの世界を作りますがその振り返しもききます。」

具体的に言えば水を生み出すとその分どこかで補うために水がなくなります。」

大気の水蒸気であったり海水であったり さまざまですが無くなつた水を補うために

またどこかで振り返しがきます。」

一部で海水が無くなればそこによその海水が流れ込み波を生む感じですか。」

「つまり大規模な空想具現化になるほど世界の修正力が働き、

さらにその修正で因果が波立つという分けですか？」

「あなた・・・頭良いのか悪いのか分かりませんね。

つまりは、そういうことです。

ですから使用は出来ませんが、なるべくなら控えてください。

また使用するならその対価を用意するといいいですね。」

「金を生み出すなら元素の近い鉛を用意するとか

ダイヤを生み出すなら炭素を用意するとかですか？」

「その通りです。」

なるほどこの能力、幼女とはいえ流石神が進めるものだ

元の能力が使い勝手がよすぎるが使い方次第で

ペナルティ要素を最小に抑えられる可能性があるわけか。

少なくとも金で困ることはなさそうだ。

フヒヒ

「気持ち悪い笑い方はやめてください。」

「……………」

「それとあと一つ何かお好きな能力を差し上げますが

そもそも今の時点で チートw なのである程度自重してください。

あまりにも酷かったら却下しますので。」

「……………そうですね、魔法は期待できないんですよ？」

それならなにか防御の方法が欲しいですね。

痛いも怪我するのもイヤなので。」

「あの世界の魔法は障壁無いと辛いですからねー。

……………ふむ、あなたの知識の中であるものだと……………」

(頼むから勝手に脳内を読むのはやめて欲しい、

性癖とか思いつきりばれてるんじゃないかねーのか?)

ニヤニヤw

(こいつ絶対今俺の性癖を調べた!!! / /

あっちの世界に行く前に死にたくなってきた……。(

「コレなんかどうでしょう？」

ニヤニヤ

天地無用の光鷹翼 ですね。

あなたの年齢が分かりますね」

(この幼女神ほこら……幼女に暴力はだめだな、

ぬちよぬちよにしてええええ〜!!)

「私に欲情するのはいいですけど夜のネタにするのはやめてくださいね。」

(悪魔だ……的確に脳内を読んでくる。)

「まじめな話に戻りますが、

そのまんま光鷹翼 というのは流石に無理です。

あんなの造れたらちよつとした間違いで月を壊滅させたり地球を破壊されたりしたら困ります。」

(しかもOVA3期か・・・)

この幼女神かなりオタ臭い、同属のニホイがする!)

「ネギまの世界には世界樹がありますね、

アレを媒介にして光鷹翼を6枚展開できるようにします。

その代わり性能は星の魔力依存ですので落ちますし、地球は破壊できません。

とはいっても、光鷹翼を抜くのは事実上不可能でしょうね。

絶対防御w とか やってもいいですよ。」

「もうやだこの幼女。」

「そういうわけですので世界樹、蟠桃を皇家の樹の代わりとして使いますので

世界樹と魔術的リンクを造って世界樹の管理も一緒をお願いしますね。」

「仕事が増えてませんか？」

「能力が使えるようになってんですから、これくらいいいじゃありませんか。」

・ 「あの樹っているんな組織に狙われてて思いっきりやっかいだし・

原作に直接絡むんですが？」

「原作崩壊w とかやらないんですか？」

「痛いのはイヤです。」

「まあ、がんばってくださいよ。」 w

(もう適当だな・・・この幼女、早く何とかしないと)

「では、容姿はどうしましょう？」

「応選べますから銀髪のおッドアイにしましょうか？」

「もう勘弁してください。」

「そうですね・・・・・・13歳くらいで黒髪で長髪は皆中の真ん中くらい、

黒目の日本人形風美少女、

「……ただし男の娘」

「キタWWW変態キタWWW」

「もうこれ以上掻く恥は無いんだよ！！（涙）」

「あなた最高W」

「選んでよかった！WWW」

俺はもうこの幼女には生涯頭は上がらないんだろうな……

「少し待ってくださいね」

なにやら幼女神がキーボードのようなものを叩きだした。

「はい！できました。」

「こんな感じでどうですか？」

幼女神がどこからか鏡を出して俺の前に差し出す。

なに、この美少女　　／／／／

俺がこんなにかわいくなってしまって、コレは間違いなく襲う。

．．．．．まで、よく考える．．．．．俺が．．．襲われる!?

Illllozz

「ちよっ、まった、コレはまずい、俺がまずい、俺の（後ろの）貞操がまずすぎるだろ!」

「キャンセルは受け付けませーん。」

こいつ．．．わざとだ、平穩に暮らさせるつもりがまったく無い!!

「あと本来あの世界では仮契約というの　「仮契約キターー!!」
があると思いますが．．．」

コホン、本来仮契約の人数に上限はありませんがあなたにはありません。」

orz 絶望した……

いや、ハーレムなんか造る気はないが

可能性をつぶすことは無いんじゃないだろうか？

「落ち着いてください、話の続きがあります。」

上限の人数は7人です、この数字は某国民的アニメの家族の人数が7人だからです。」

「……？んっ？あの家7人家族でしたっけ？」

「いえ8人ですよ。祖父母、夫婦、子供3人……そしてペットの猫」

それは、俺がその猫のポジションだということか？

違いますよね？

違うよね？

「その代わりにあなたと仮契約を結んだ人はあなたを通じて世界の魔力を

供給されることになるので、 『なあにコレ？』 って感じでチートになります。

具体的には、魔力はほぼ無尽蔵になります、ですが

個人で一回に使える魔力量は限りがあるので

どこまで行ってもその人の一回で出せる全力以上の魔力は出せません。

逆に言えば、全力全壊の魔法攻撃を打ち放題ともいえます。

・・・まあ、魔力はあっても精神的に疲れるし、体にかかる負担もありますけど。」

「十分にチートですね、分かります。」

「確かにチートですがコレには理由があります、

これは副次的な要素に過ぎません。」

「メインの能力があるんですか？」

「はい、メインの方は仮契約によって受ける世界の魔力の恩恵によつて

寿命があなたと同じ、不老不死になります。」

「酷すぎませんか?」

「酷くありません、コレは あなたの タメなんです。

・・・あなたはこれから人が過ごすには長すぎる刻をすごしますがそれが一人ではいくら精神を強化したとはいえ心が磨耗して

良くて植物・仙人のような暮らし、悪くて精神崩壊して自殺、となるでしょう。」

「・・・そのために仮契約で伴侶なり友人を作つて確保しろ、ということですか。」

確かに数百数千年も生きていたら精神崩壊か精神が磨耗した

世捨て人となるか・・・想像したくも無いが十分考えられるから怖い。

「そのための措置です、仮契約者を何百人も作つて

その人達との限らない死に別れより、

心の近い7人で共に生きて欲しいという、ささやかな少女の贈り物です。」

自分で少女とか言うのか……

コンプレックスがあるかと思っていたが。

「で、暗い話はコレくらいにして、住む時間軸はどうしますか？

……もちろん600年前ですよね。」

そういつてにこやかに（いやらしく）少女は微笑む。

「もう好きにしてください……」

「じゃあ原作開始666年前にします。

いわゆる修行帰還ですね。」

「なんでその数字なんだよ！！お前本当は悪魔だろう？」

「そうなんだろう！！絶対そうだ！！」

……ニコッ

///

つく……この俺がニコポされるだ！

「さて、あなたをからかうのはこの辺にしておきます。

あなたが住むのは原作開始から666年前のヨーロッパあたりの森
の中です。

サービスとして、家を建て数キロの結界を敷いておきます。

この結界は10年は最低解けません。

その間に力の制御方法を学んでください。

家の中には各書物を用意しておきます、

これらを読むのも放置するのも自由ですが

魔法、科学の本から料理本、各種言語から 夜のおかず まで揃えてあります。」

「今何か不穏な言葉が混じってませんでしたか？」

「いえ、混じってません。」

「そうですか。」

「そうです。」

それでこれから大事な話をします。

よく聞いてこれは忘れないでください。」

「重要な話ですか・・・。」

「はい、あなたの第1目標は生きることです。」

次に世界樹の守護、ヨーロッパ方面に最初に送るのはささやかな

親切心ですが、ある程度、そうですね・・・2000～3000年経つ
までには

一度世界樹を確認しに行ってください。

これは送る時間軸の魔法科学では世界樹をどうしようすることは出来ないでしょうが

数百年経つたら もしかしたら何らかの干渉方法が生まれる可能性があるからです。

最悪世界樹を枯れさせられたら光鷹翼はもちろん展開できませんし世界の樹木、草花に大きな影響が出るものと思ってください。

出来たらある程度世界樹の近くに居を構えるなり転移方法なりを確立してください。

空想具現化をうまく使えば、空間転移もそれほど難しくありませんので。」

「分かりました、なるべく早く行くようにします。」

「お願いします、それとコレがある意味一番大事なんですけど」

造物主 ですが、これの消滅を確認してください。」

「なぜそこで造物主が出てくるんですか？」

「彼はある意味この世界において魔王です、そして勇者はネギ君です。」

勇者であるネギ君が死んで魔王が生き残ったら世界は世界はどんな
と思いますか？」

「普通に考えて魔王が幼女を」「もういいです！」「そうですね・
・・」

「彼の目的はあなたの記憶から読むに

魔法世界の再構成、または消滅かと思われます。

これはあなたの原作知識が単行本31巻で止まっているので

結末が分からないためです。

単純に考えても魔法世界で大規模な改変がおきれば地球の世界にも

大きな影響があります、それは決して良い影響ではありません。」

「影響はあると思いますがどうしてもそこまで大きく影響があると思
うんですか？」

「これはあなたの想像力で世界の構成を補っているためです。

あなた自身が彼を物語の悪役だと捕らえているから

そついう方向に影響が大きく出るんです。」

確かに、物語の先を想像力で補う役目が俺の役目なら

造物主は間違いなく現段階で悪役だ。

きつと彼はネギが死んで原作から外れた時点で　そういう方法に動き出すだろう。

「分かってもらえたようですね、別にあなたに　倒せ　と言ってるんじゃないかもしれません。」

倒されるのを　『確認』　して欲しいんです。」

「確認じゃなく倒すのだとどうなりますか？」

「問題はありません、むしろ都合が良い面もあります、

確実に確認できるという点では本来あなたが直に倒してもらったのが一番いいです。」

最悪ネギ君が死んでもあなたが倒してくればそれでかまいません。

「

「・・・造物主は強いんですか？」

「いえ、正直な話あなたの能力なら瞬殺出来ます。」

「・・・え？」

「彼がどんなに物語の中で強い存在でもあなたは規格外なんです。」

別に直接殴るとかじゃなくていいんです、

彼を空想具現化で火星の大気上、真空の中に放り出す、でもいいですし

血液を沸騰させる、とか彼の脳内に釘でも空想するとか、

直接『消えろ』と空想してもいいんです。」

「え……そんなにあっさり行くんですか？」

「そんなもんですよ。」

重要なのは彼が物語からいなくなることです、方法はかまいません。

「

「そーなんですか……（ものすごい強い印象があっただけと言われてみれば

そういうものなのかもしれん。

生き物である以上脳を破壊するなり真空に放り出されたらひとたりもあるまい。」

「彼の性質が悪いところは狡猾なところです、部下を使って自分は姿を現しません。」

あなたの知識でも彼が姿を見せたのは2回くらいですよね？

しかも1回目のナギはある意味失敗ですし。

2回目がある時点で……。」

確かにナギ・スプリングフィールドは造物主を倒したとされているが
しつかり復活している。

ある意味失敗と言われればそうだといえる。

まあ、だからこそ物語の主人公がネギになるわけだけど。

「私のお勧めはネギ君PTに参加、もしくは隠れて付いていき
ネギ君が主役として仕留めるのを確認、しくじったらあなたが空想
具現化で消す、

の2段構えとかお勧めですね。」

原作通り進めても失敗する可能性があるのか？

……俺がいるからか。

俺が存在するというだけで すでに原作から離れているのか。

「わかってもらえたようですね。」

あなたは異物であり同時に世界の重要な起点でもあるんです。

あなたのお仕事はそちらの世界で神になることでも

暴れまわって破壊することでもありません。

長く生きること、世界の延命なんです。」

「そういうことですか……。」

「あなたにはあの世界で好きに生きる権利がありますが

神の使途として仕事を請けたあなたには世界の延命という義務があるんです。

それだけの力を与えていますし同時に責任も生じます。

失敗しても輪廻の輪に人として戻るだけでペナルティはありませんが

あなたは『 私が選んだ 私の使途 』 なんですから

期待を裏切らないようにお願いしますね 』

「思いつきりプレッシャーがかかったんですが……。」

「大丈夫ですよ

あなたの性格も思考も 性癖 も知ってる私が言っんですから」

性癖を強調したところにそこはかたない悪意を感じるのは

気のせいだろうか？

「さて、長々とお話しましたが確認です。

一つ、あなたには魔法先生ネギまの世界で人生を謳歌してください。

年代は原作開始666年前です。

一つ、あなたには2つの能力、

月姫の真祖つばい能力と光鷹翼つばい能力が与えられます。

一つ、あなたの結べる仮契約者は7人までその代わりに特別な恩恵が受けられる

不老不死と膨大な魔力供給。

一つ、向こうの世界で過ごすに当たっていくつかのサポートをします。

家、書物、一時的な結界、精神の強化など

あと、人生相談、恋愛相談、結婚相談、なんかも受け付けますよ

一つ、あなたには私との契約に基づきいくつかの義務が発生します。

世界、及び自身の延命、世界樹の守護、造物主の生死の確認。

一つ、あなたの容姿の改変、13歳くらいで黒髪で長さは背中の中くらい、

黒目の日本人形風美少女、……ただし男の娘

あと、先ほど言ったとおりお悩み相談は頭で私に念じるように

話しかけて頂ければいつでも相談に応じますよ。」

「もう帰っていいですか……」

「特に質問は内容なのでそろそろあなたを向こうの世界に送ろうと思います……」

「そういえば名前、どうしますか？」

「そうですね、アルトルージュとかアルトリアとかアルトというのが型月で気になったんで

ソプラノってのはどうですかね？」

「男の娘なのに？」

「男の娘なので。」

「黒髪、黒目なのに？」

「黒髪でこの名前じゃまずいですか？」

「……いいんじゃないですか？」

「かわいい……？……し……？？」

「なんだかんだ言っても発症してるのか……例の病気を……」

「なんか酷い扱いを受けているような気がしますけどどうでしょう？」

「遅れてきた厨二病乙。」 W

幼女に言われるとなんか心の変なところに効くな……

涙が出てきた。

「じゃあソプラノちゃん

そろそろ向ここの世界に送りますね。」

「はい

よろしくお願いします。」

「あの……なんていうか、がんばってね。」
—————

「はい」(涙)

足元になんとも表現しがたい文様が浮くと、不思議な浮遊感が感じられた。

「それじゃあがんばってね」

「ソプラノ、行きます。」

うつすらと体が光に包まれ体なくなるような感覚が訪れる。

「痛々しいのでやめてください。」
—————

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬も有り、ですね。」

「この娘もうだめだわ……」

不意に視界が真っ白になり最後に何か声が聞こえる。

「最後に言っとくけど、私も男の娘だよ」

「ちよっ……お前もかよ、幼女神!!」

そんなこんなで、旧姓

新ため、『ソプラノ』の新しい人生が始まった。

神様から頼まれたお仕事。

その1（後書き）

本日中に5話まで掲載予定。

神様から頼まれたお仕事。

その2（前書き）

2 話目投稿。

神様から頼まれたお仕事。 その2

「じわあああああああ~~~~~.....あ？」

「.....」
「//////」

テンプレによると意識がある場合は落ちるはずなのだが
しっかりと地面に足がついている。

「天井は.....無い。」

「.....まずは状況の確認ね。」

この世界に来て最初に学んだことは
都合の悪いことは忘れることだった。

『安心して、私がちゃんと見てたから』

「ちよっ、お願い！」

なにも言わないで!！」

『なんで女言葉が様になってるのさ……』

「あなたを参考にさせていただきました。」

『……………』 / / /

「……………」 / / /

『ど、どころで後ろにあなたの家が見えると思っただけ確認してみて。』

「了解、早速中を見せていただきますね。」

2つ目に学んだことは、お互い触らぬ神に祟りなしということだった。

家は3LDKと表現すればいいのだろうか？

玄関を入れて左側

本が大量にあることにより書庫とおもわれる場所を中心に、向かって右が寝室。

逆の左側は現在は空室のようで特に何も置いてないようだ。

玄関は行って右側にはトイレ、洗面、浴室と並んでいる。

突き当たって、

居間は日本風に表現すれば1.5畳くらいでキッチン・ダイニングが並び

キッチンの床に扉があつてそこにはある程度の食料が貯蔵されている。

どうもみても日本のよくあるマンションの配置に似ています。

『仮の住処だから分かりやすくしてみました。』

「いや、それはありがたいんですが……なんか、違う。」

『まあまあ、とりあえず電気は無いけど謎の力でトイレとお風呂は現代風に入れるようにしましたよ。』

なに、その無駄な神の力

『男の娘ならちゃんと身支度しないとね。』

「それでこの格好なんですか？」

それは誰がどう見ても黒のゴスロリドレス

明らかに時代考証があつてない。

「なにかおかしいですか？」

「コレを不思議に思わないあなたの頭とかどうですか？」

『・・・・・・・・』

なに言ってるのこいつ？

みたいな視線と心理的圧力を感じる。

え？私がおかしいの？

『ともかく、身だしなみは大切だと思うんですよ。』

「まっとうの事いわれているはずなのに、なぜかキモイ。」

『ところで気になってたんだけど、何で男の娘なの？

普通に幼女になって百合プレイとか好きそう」 「ちょっとまって

!!

名誉毀損で訴えるわよ!!」 え、違っただ……」

すごい意外そうな顔をされた。

『突っ込みもちゃんと女言葉なとこにプロ根性を感じるわ……』

で、なんで男の娘なんです?』

「せっかく容姿を好きな風に変えてもらえるなら 綺麗な方がいい
って言うのと

少女完璧に演じ切っていきなり 「実は私 男なんです……」
とか言ったら

すごいびっくりするでしょう?。」

『それは確かにすごいびっくりすると思いますけど、』

なに? ただの悪戯のためって事……』

すごいあきれたため息を感じる。

『あなた、絶対長生きしますよ。』

「ありがとうございます」

『（イラ）……………外に出なさい、能力の確認をしましょう。』

「はい。」

なにやらすごいつめき声やら苦悩やらが聞こえる。

どうやら奴の弱点が少しずつつかめてきた。

私がかわいらしく演じることで自分を鏡で見てるような錯覚に陥るんでしよう、

胃がキリキリと音を立てて締め付けられるような感覚があるけど

奴にはそれ以上のダメージを与えられてる確かな手ごたえを感じる。

『さて、じゃあ早速だけど普通にしてる時はあなたの身体強度は普通の人とそれほど変わりません。』

そこで、戦う意思というか……やったほうが早いですね。

その丸太をとりあえず思いっきり殴って見てください。』

「これを？」

これって結構痛いんじゃないですか？」

『大丈夫、中途半端に力を抜くと返って痛いから、』

とにかく思いっきり本気でやってみてください。』

「でも痛いんですよ？」

『……さっさとやれ。』

「しょうがないか……本気で……ふっ！」

ゾブツ!!

「え？」

物殴った音じゃないし、手もぜんぜん痛くないし、なにコレ」

目の前には一部、ちょうど手の大きさが納まるくらいの大きさで何かでえぐりとったような形の丸太が転がっている。

『ね、大丈夫だったでしょう、それが今のあなたの力なの。』

あなたが本気で人なんか殴ったらそうなるか、弾け飛ぶかのどちらかだから

気をつけてくださいね。』

「軽く言ってますが、それってかなりグロイですよね・・・」

想像しただけでご飯3杯は吐けそう。

『それじゃあ次は手のひらで、そうね、野球のサイドスローでボールを投げる感じで』

思いつきり手を振ってくださいます?』

「いえ、もういいです、だいたい想像つきました。

どうせソニックブームが発生してあたり一面吹き飛ばすんですね、わかります。」

『物覚えのいい生徒で先生助かります。』

口頭で説明してもらえればよかったんじゃないか？

殴らなくても石を握りつぶせとか言われれば力の確認くらい出来るように……

『……何か馬鹿にされた感じがするんですけど。』

「私……先生を尊敬しています！」

『ぐ……くっ……』

幼女(?) 神の何かに決まった。

『じ、じゃあ次は空想具現化ですね。』

特に何か儀式や詠唱は必要ないから、つ、強く想像すればその現象
が起きる筈だから。』

まだ、精神が立ち直ってないように見える、

今ならだめ押しすれば精神的優位に立てるかも・・・

「はい

がんばります!」

『ぐぶっ!.....ゴホッゴホッ.....』

あ、あの、続きは 自分で がんばってくださいあね。』

勝った!

お母さん、幼女(?) 神に勝ちました!

勝利を収めたのはいいですが、

今日はもう連絡取れないような気がする。

彼女（？）の大事な何かが回復するまで仕方が無いので一人でがんばってみますか。

丸太の先に小さい火をつけるイメージで……

アレから何回か試したけど空想具現化は酷い、

なにが酷いって想像したことが確かに起こるんだけど

制御が難しいなんてものじゃない。

最初小さな火をイメージして10秒くらい経ったあたりで確かに火が点いた、

点いたんだけどその後がまずかった。

つい調子に乗って火が大きくなるのを想像したら……この様だよ！

あたり一面綺麗さっぱりと焼き尽くし、あとにはなにも残らなかつた……

「コレはまずい……本気で練習しないと妄想が現実になって大変なことになりかねないよ。」

家に被害が無いのは幼女(？)神の御加護でしょうか、

この日初めてあの神に心から感謝した。

今日はこのまま綺麗な気持ちであの神さまに感謝しながら寝よう……

次の日、神さまも精神的に持ち直したようで

私も心を入れ替えて真面目に 一生懸命がんばって力の制御方法を学んだ。

（心を入れ替えて真面目に一生懸命がんばったのに神さまの様子が徐々におかしくなっていく、なにがまずかったのでしょうか？）

そんなこんなで日が落ちる頃。

『ひ、ひとまず力の制御は日常生活で練習する機会がたくさんあるから

空想具現化の制御をがんばってみてください。

私はしばらく仕事があるので1週間後くらいに様子を見に来ますね。

」

なにやらあわてた口調だったので、「忙しいところお手数かけてすみません。」と

謝罪してその日の念話は途切れた。

私もおなかが減ったので調理を開始する。

この調理だが意外に力の制御の練習になることに気がついた。

私の通常時の筋力じゃフライパンが重いのだ。

それでフライパンを振るために少しだけ力を入れる、

軽すぎず重過ぎないように集中して力を制御してふと焦げ臭いことに気がつく。

「・・・あゝ、チャーハンが焦げちゃったよ

これは真剣に制御方法おぼえないと一人で生きてもいけなくなっちゃっよ。」

初期の目標として戦闘云々よりも

日常生活を送れる程度の制御方法の確立が課題と分かった。

それから1週間ごとに神さまが様子を見に来て

私は1週間の修行の成果を見せるといって日々が続きましたが、ここで問題がおきた。

「食料庫の在庫が……」

『あゝ修行のほうは順調だったんですけど、そっちばかりにかまけてたのが

まずかったですね。』

「どうしよう、一応想像して生み出すことは出来るけど変な生き物とか

牛肉を丸ごととか想像したら大変なことになりそうな気が・・・」

『そうですね、基本的にあなたは食べなくても問題ないので

しばらく狩りの練習をすればどうでしょう?』

「そうですね、力の制御も最近は精神的に段階を分けることで

何とか出来てきましたので、そろそろ戦闘訓練もかねて

狩りの練習をして見ます。」

『狩をするに当たってなにか方法は考えてますか?』

「現代っ子だったので狩りと言うと弓や銃で打つイメージが強いですが

どちらもないので、私の力を生かして石でも投げてやっつけようか
と思います。」

『なかなかいい考えですね、

もう少し力の制御がうまくなれば、普通に走って首を刈る、などで
狩りは出来ますが

私の立場から言えば ちゃんと狩で倒した獲物は食べてくださいね。

』

「え？狩りのやり方の説明じゃないんですか？」

『いや、私がいつまでも付きっ切りで念話でサポートできるわけでもないのよ』

なるべく自分で考えて見てください。』

「でわ、とりあえず石でやってみようと思います。」

『がんばってくださいね。』

いい加減神さまも私の女言葉に慣れたのか最近では普通に会話が成立する。

いきなり動物に投げても当たらないのでとりあえず木に適当なものをぶら下げて練習をしてみる。

「せいのっ」

シュッ！

.....

『当たってませんよ。』

「いや、流石にそれは分かります。」

「よっ」

シュッ！

・・・・・・・・・・・・・・・・カッーン

『的には当たってませんよ。』

「はい・・・・・・・・」

そのあと数十回投げるも当たらない。

石を投げるという行為がここまで難しいものとは思わなかった。

『あの・・・通常時の筋力で投げたら当たるんですよね？』

「・・・・・・・・・・3回に1回くらいは・・・・・・・・グスッ」

『き、今日は何か空想具現化で食べ物作りましょう！』

明日またがんばりましょうよ!」

「……………はい」

神さまの慈愛が痛い…………

そんなことを1月繰り返したころ

ようやく2回に1回は当たるようになった。

といったも的の中心にはまだまだ当たらないが、ふと思いついたことがある。

「神さま、この投石なんですけど空想具現化で補助したらどうでしょうか？」

何か世界に大きい影響とかありますか？」

『そうですね石もあるし投げる威力もソプラノさんの力がついてるので

方向性を微調整すると思えば特に大きな問題は無いと思います。

少し力を余計に入れてその分の力を微調整に使うようにイメージするなんてどうですか?』

「少しイメージが複雑になりますが練習にもなりそうですし
ちょっとやってみますね。」

「ほいっとー!」

シュ!

ガッ!

「え? 一発で当たった?」

『何回か繰り返してみてください。』

「分かりました。」

シュ!

ガッ!

シュ!

ガッ！

シュ！

ガッ！

・ ・ ・

「なんか・・・今までの苦労ってなんだったんだろう?」

『でも今までの苦労があったからこうやって実を結んだんですよ!』

「そ、そうですね！」

そうですね、今までひたすら石を投げ空想具現化でご飯を作った
努力が報われるときが着たんですよ!」

こうしてひたすら石を投げ続ける訓練を終えた私はとうとう本番の狩りに挑むことになった。

しかしここで思わぬ誤算が発生することになる。

某日夕方

『ほらほら、ソプラノさん！』

あそこ！あそこに鹿がいますよ！』

「あの、神さま、念話とはいえあなた見た目幼女なんですから

アソコアソコ連呼しない方がいいですよ。」

『／／／／な、なに言ってるんですか！』

鹿を見つけてあげただけですよ！！セクハラですよ！！」

「あの、私もあなたも男の娘ですから、一応同姓ですけど

セクハラって成立するんですか？」

『い、いいからさっさとあの鹿を仕留めちゃってください！』

「分かったよお母さん。」

『誰がお母さんか。』

仮にも神さまが殺生を進めていいのか？

「距離は50mくらいはあるな、流石真祖の目

この距離でもはっきりと見える。」

私は気配を隠す術をまだ練習してないので

あまり近づくとばれてしまう、この距離なら練習で何回も当ててるので

問題は無いはず！

シュツ！

ガツツ！

「やった！

やった〜！鹿肉ゲットだぜ〜！」

『やりましたね！

今まで練習の甲斐がありました！』

「早速今日は鹿で焼肉だー！」

と、このとき私はなにも疑うことなく幸せをかみ締めていた。

……まさかあんなことになるなんて。

「あの……神さま……」

『なんですか？』

さっさと解体して処理しないと肉がまずくなっちゃいますよ?』

「あの……私肉捌いたこと無いんですけど。」

『あ……初めての人には難易度高いですかね?』

「変に精神強化されてるので吐くまで行かないしかとって

気軽に捌けもしないので……すごく複雑な気分です。」

なんか血の匂いやら内臓の色がはつきりとわかってしまうこの目が今は憎らしい。

誰よ！石で鹿を狩ろうなんていった奴！！

下手に命中率よすぎて脳天直撃コースだよ！！

あああ、鹿の目が……目があ……。

こうして鹿を何とか捌いたものしばらく脳がアレで目がアレな鹿に追われる夢を

見続ける日々を送ることになりました、ソプラノです。

イノチ ダイジ。

そんな生活を数年送りつつ、それなりに平穏な日々を送ってきました。

大分一人暮らしに離れました、この数年一番ショックな事件は、鹿を解体していた時に血の匂いに寄ってきた熊！

びっくりしたので近くの石を全力で投げたんですがコレが・・・

私の力で全力で投げると某超電磁砲並みの威力って言うかそれ以上というか、

目の前で熊の頭がパーンッ！って弾け飛んだ時は流石に心臓が止まるかと思えました。

しかもそのあとソニックブームであたりが酷いことに……

拳句に神さまのありがたい一言。

『ちゃんと狩りで仕留めた獲物は食べなさい！』ニコ

あのとときの笑顔は生涯忘れないと思う。

あのタイミングじゃなかったら確実にニコポされてたけど

あのすばらしい笑顔からは悪意しか感じなかった……。

あとは熊と格闘したりオオカミと格闘したりウサギ追いかの山々したり

……正直熊はもう見たくない。

熊を見ると頭が破裂した思い出と同時に爪で引き裂かれた痛みが襲ってくるし

拳句にその日の夜に夢にまで出てくる始末。

もう 本当に 熊は 見たくない。

どうやら最近では神さまも忙しいのかこちらから呼ばないと

顔？（念話）を出してくれなくなりました。

神さま曰く

『ソプラノさんは生活能力はもうついてるし、基本的な能力もすでに把握して

いらっしゃるので私も仕事があるのでこれからは何か特別な用事があるとき以外は

自分でがんばってみてください。』

と仰られた。

まったく持ってその通りなので少しさびしくはなりましたが
そろそろ魔法の勉強や光鷹翼の展開実験もしたいと思ったので
とりあえず書庫から魔法関係の本と初心者用の杖を
引っ張り出して読む日々が続いています。

ある程度本を読んだ中で簡単に言えば

私の意志を魔力の乗った呪文に乗せて精霊に伝えて現象を起こす。
こんな感じだと思うので早速魔力を感じるための瞑想をしてみた。

いや、正直魔力は感じてたんですよ、この体になってからずっと。

そもそも私は生前は魔法の無い世界の住人なので、

魔力のあるこの体に移った時違和感を感じてたんですよ。

「この感じがたぶん魔力よね、なんか力が沸く気がするし

肌に貼りつく感じがするし、回りにも弱いけど同じような感じがする。」

よし、今ならできる感じがする！

「プラクテ ビギ・ナル “火よ灯れ（アールデスカット）”」

・・・／／／

思わず私を周りを見回して誰も見ていないことを確認した。

さて人間失敗は付き物です。

問題は失敗を次に生かせるかどうかです。

と、自分に言い聞かせもう一度瞑想・・・

今度は杖の先にこの力を集める感じで。

「プラクテ ビギ・ナル “火よ灯れ（アールデスカット）”」

・・・・／／
／／／／
「っ！」

「あ~~~~~」

思わず手で顔を覆う。

なにかいけなかったのかまったく分からない。

そういえば神さまは私はこの世界の魔法はあきらめた方がいいと仰っていた、

そもそも今感じているこの力は魔力なんだろうか？

そういえば光鷹翼もどきもこの世界の魔力で展開すると仰っていた。

さっきの瞑想でこのもやもやはある程度意思で動かせることが分かっている、

コレを一箇所に集めるイメージで・・・

集まったところで今度は光鷹翼をイメージ・・・

目を開けるとそこには・・・

1枚の光鷹翼が。

しっかり触れる、ためしに殴ってみたがびくともしない、手が痛い。

伸びるイメージをすると伸びた。

「なんで？」

おかしい！魔法は失敗したのに光鷹翼はあっさり成功！！

どういう事！私には魔法の才能はまったく無いということ！？」

「まで、落ち着くんだ、クールになれ私。

神さまはなんていった、

光鷹翼の展開は世界樹を介して世界からの魔力で展開する。

それに比べて魔法は世界の魔力を使つては精霊の許容量を超えると
いつてたはずだ。」

……つまりさっきの瞑想で私が感じてた魔力は世界の魔力で

私自身の魔力じゃないということか！

「オーケー分かった、すべたがわかった。

つまり魔法を使うためには私自身の魔力を感じれるようにならない
とだめということか。

逆に光鷹翼の場合はこのままこの感覚を伸ばしてもっと早く複数展
開できるように

練習すればいいんだ！」

よし、明日から瞑想の時間を増やして光鷹翼の展開の練習をしよう。

そうして、また数年、力の制御も大分出来るようになり

今ならナデポしても頭をつぶさない自信もあるし

空想具現化も脳内にスイッチのようなものをイメージすることで

妄想が現実になる心配も無くなった。

光鷹翼も無事6枚展開できる、ファンネル見たいに自由に飛ばしたりは出来ないけど

緊急時に2枚なら瞬発的に展開できるのでもう熊に急に襲われても怖くない、

・・・ただ熊はもう見たくない。

しかし魔法だけは本当に致命的にだめみたい、これは誰か先生に付いて教えてもらったほうがいいと思う。

一応火は灯せるようになったけど、それも数秒ですぐ消える始末。

しばらく瞑想はしたくない。

そんなこんなで、神さまが展開してくれた結界もそろそろ解ける時期のはずなので

一度確認のために神さまに連絡を取ってみることに。

「神さま〜

神さま〜

.....

「おかあさん おk 『誰が母さんか!』.....いるなら返事してくださいよう」

『いや、無視されて途方に暮れるソプラノちゃんを眺めようかなど。

』

「言ってくれば泣いてかすれた声で縋ってあげますよ?」

『やめて、それ昔私もやったから思い出しそ?。』

やっぱりやったことがあるのか.....

『で、今日は何のようですか?』

「今日は神さまが敷いてくださった結界がそろそろ切れる時期だと思っんですけど」

それがいつなのか確認したくて。」

『そうね、確かにそろそろ切れる頃だけど、ソプラノちゃんはどうしたい?』

切れた方がいい?』

「それはあった方がいいと思いますけど、延長とかしてくれるんですか?」

『私自身が張りなおしたり延長とかはやるのは無理ですよ。』

「神さまだからね、あまり特定の個人に肩入れするとまずいですから。」

「ならどうしてわざわざどうしたいか聞いたんですか?」

『いや、今のソプラノちゃんなら自分で結界敷きなおせると思っ』

「え、私そんなこと出来るんですか?」

『あれ?書庫に結界関係の本もあったよね?』

読んでないの?』

「あゝその関係は読んでません。」

『そうなんだ、じゃあ、結界が解けるまでまだ数ヶ月あるからその間に読むといいよ。』

言わなかった私もすっかりしてたけど、結界関係はなるべく早めに覚えた方がいいですよ。』

「・・・自分の安全な住処を用意しておくためですか、

いわれて見れば神さまの結界に頼ってたので気がつきませんでしたがるべく早めに修得しておくべき技能かもしれませんね、

特に私のような追われる可能性のある人間には。」

『そうだね人間かどうかは怪しいけど、それを抜いてもソプラノちゃんはやんは

力を見せたら魔女扱いで終われる可能性あるし、この辺じゃ珍しい黒髪で

かわいいから変な貴族に見つかったら、下手したら監禁調教とかさねますよ?』

「え、マジ？」

『マジ』

「うわー、初めては好きな人と決めてる私としては今すぐにも覚えなないと。」

「・・・後ろの始めては生涯守り通すつもりですけど。」

『それ、あんまり人目でいわないほうがいいと思うよ・・・』

「私も言っただけでちょっと引きました。」

同じ境遇の二人してへこむ。

『話は戻るけど結界自体は正確に敷いてあとは込める魔力によって強度が変わるから』

世界の魔力使えるソプラノちゃんが本気で敷いた結界は誰にも破れないと思うよ。

あ、ここに来る前に世界樹を一回見に行っただけで欲しかった話あるじゃないですか？』

「ありましたね。」

『そのときに世界樹の周辺に結界敷いておくといいかも知れませぬね。』

あれを魔法関係者が見たら絶対利用しようと思いますからね。』

「そうですね、それと同時になるべく法的に地権者になれるよう

手続きも同時に行えるか検討してみます。」

『それでいいと思いますよ。』

「今日はありがとうございました、とりあえず結界の勉強して

このあたりの結界強化して家にいつでも逃げ込めるようにしておこうかと思えます。」

『ん〜がんばってくださいね。』

あ、あとコレは直接ソプラノちゃんには関係ないんですが、

あと150〜200年位して世界が安定していたら、

虫に転生する人を試験的にこの世界に入れようという話が上がっています。』

「そうなんですか？

そういうえばそういうスケジュールって今までで聞いたことが無いですね。」

『そうですね、一応予定では200年くらいで虫、それから魚や両生類、鳥や哺乳類などで

造物主の消滅が確認されて安定していたら人を入れる予定です。』

「やはり人は慎重になるんですか。」

『そうですね、命に貴賤は無いのですが、どうしても人の影響力が一番大きいので慎重になるんですよ。』

人だけですよ？ 突出した能力が時に世界の滅亡につながるの。』

「言われてみればそうですね、一人の指導者のせいで戦争がおきて世界の地図が変わるなんて事、人意外じゃあまり考えられませんがね。」

『ソプラノちゃんはそこまで深く考えなくてもいいですよ。』

あなたの仕事はこの世界で長く楽しく生きることですから。』

「楽しくが増えてる気がします、そうありたいと思います。」

この人（神さま）はおちゃらけてる所もあるけど流石神さま、しっかりしてる。

しかも私の幸せを神さまに願ってもらえるなんてよく考えたら

すごいことなんじゃないだろうか？

『あやや、なんかすごい尊敬されてる気がしますよ。』

「それ誰の真似ですか・・・」

『知ってるくせに』

「・・・じゃあ私は家に戻って結界関係の勉強してきますね。」

『はい、がんばってくださいね。』

『それでは』

さて、私ももうひとがんばりしますか。

神様から頼まれたお仕事。

その3 (前書き)

3話投稿

神様から頼まれたお仕事。 その3

60年後・・・

この世界での生活にある程度慣れて、

生活のリズムも決まりつつある。

私の生活リズムは基本こうだ。

朝、日が昇る頃に起き、洗顔、朝食の用意をしつつ食料の残りを確認
午前中に足りない食料を確保しに森へ。

昼、食事は日に2回しか食べないので特に食料などに不備が無い限り、

書庫から本を引っ張り出し布団に引きこもって読書。

夕方から夜にかけて能力の修行や読書で得た知識の確認などの作業。

あとは軽く食事を取って就寝。

こんな生活を送っていた。

40年ほど前から森を出て周囲を散策した結果、

この森の周辺にはいくつかの村が存在し、そのうちの一つからは街道が伸び

ちよつとした町があることが分かった。

近隣の村で食料や衣類を交換したり、この世界の情報を得たり

村人とのコミュニケーションもわりと円滑に進んだ。

目立つ容姿なので、たまに口説かれもしたが

この経験が生きたのか、口説かれた際の対処方法も学ぶ事ができた。

村人からの情報で、町の位置が分かったので

町なら金をお金に換金できると思い立ち、少し足を伸ばして町に向かうことにした。

しかし、この町の思い出は実はあまりいい思い出ではない……。

この時代、街道は危険が多く、最低でも数人で、

出来れば警護をつけて旅をするものである。

しかしこの当時、私は人に接する機会が村人以外ほとんど無く、

村の人達が結構善良で親切なため人の悪意に無警戒だった。

当然見た美少女が街道を一人で歩いていれば鴨がネギをしょったよ
うなものである、

その結果人生初めての盗賊との出会い、殺人、正当防衛とはいえ気
分のいいものではなく

精神が強化され、熊などとガチの喧嘩を経験している分、

冷静に対処したので その分はつきりと記憶に残ってしまっている。

おかげで数日眠れなくなるわ、食事もろくに取れなくなるわで

かなりやつれた状態ですごした。

多少マシになったとはいえ 数年対人恐怖症気味になって

私も流石にコレではまずいと思った。

「今はまだいいけど、これから年が経てば科学も進歩して

人の行動範囲が広がる、どうしても人との接触は避けられない。

このままこの家に引きこもってすごすわけには行かないでしょうね
・・・」

人との接触が避けられない以上、危険を回避する手段が必要ということ
ことで

ひたすら書庫に籠って危機回避の対処方法を研究した結果

練習用の火を点ける魔法を除いて、一番最初に覚えた魔法（？）は
認識阻害（？）の魔法だった。

本来の魔法とは違い、私の使う認識阻害の魔法は

結界術の応用である、私は魔法が正直使えない。

しかし私が生きていくうえで認識阻害系の魔法は必須項目ともいえる。

魔法が使えないでは済まされないので何とか工夫出来ないかと研究した結果・・・

認識阻害魔法は単体ではろくに使えない。

私の魔力コントロールは持久力が無いのだ。

私は2種類の魔力を持っている、自分本来の小さな魔力と

世界から供給される絶大な魔力だ。

世界の魔力が大きいのでどうしてもそっちに意識が引っ張られ、

自分の魔力のコントロールがおぼつかなくなる。

かといって世界の魔力を抑えるとそっち意識が引っ張られ

自分の魔力は使えなくなる。

(並列思考でも使えればいいんでしょうが無袖は振れないからどうしよう?)

などと、数年試行錯誤した結果、宝石に認識魔法の認識障害部分、つまり、「私の姿を他者にこっ見える。」という部分を宝石に刻み指輪の金属部分に小規模の結界を展開するよう刻んで

宝石に登録してある認識障害魔法を、指輪の結界範囲内で強制認識させる。

こっすることによって指輪に魔力を使うだけで

私を中心に半径数10m内に強制認識魔法結界を敷くことができた。

この研究は応用範囲が広く、たとえば剣を結界の触媒にした場合
刀身、鐔、柄、などのパーツごとそれぞれに目的を持たせることに
より

多数の効果のある結界を張ることが出来るようになる。

刀身に結界、鐔に認識阻害、柄に進入不可、などの場合

その結界は外から見えず、入れない結界となる。

通常の陣を敷く結界なら、陣一つで同じ効果を出せるが

同じ規模の結界を起動させる陣を書くのには数日はかかる。

しかしこの方法なら持ち運びが出来、陣を敷く時間を0にできる点で

認識阻害の魔法結界を張れない私にはすごく役に立つ研究となった。

この世界に来て大分時間が経った

もう私も見かけ美少女のおばあちゃん。

認識阻害魔法や対人戦闘の経験もある程度こなし、

盗賊などに襲われても冷静に無力化し

時に正当防衛とはいえ、人を殺めた時にも割り切って考えるように

なった。

神さまからも半年に数回、安否確認の念話がある位で

人との接触は、買い物や情報収集で話すくらいで

基本的に一人で過ごしていた。

「布団に引きこもっても誰にも文句を言われない生活サイコー！」

私の引きこもり志向も極まってきた。

ある日の昼ごろ、

布団で読書をしてるときに神さまから珍しく念話が来た。

『やほ、元気？』

「やほ、私は元気ですよ神さま。

この時間に話かけてくるなんて、何かあったんですか？」

神さまはいつも就寝時に話しかけてくるので

昼のこの時間に話しかけてくるのは珍しい。

『今日は、ソプラノちゃんの興味がありそうな話題を持ってきました。』

「私の興味ありそうな話題ってなんかありましたっけ？」

熊のいない地域とか、おいしいケーキの店ですか？」

『・・・あなた、その世界がネギまの世界だっていうこと完全に忘れてますよね？』

・・・完全に忘れてたよ。

「そ、そんなことないですよ！／＼

ちゃんとおぼえていますよ！

え〜つと今はネギのお父さんが生まれたくらいでしたっけ？」

『違います。』

「違いますか。」

『60年以上過ごしてたらしょうがないかもしれませんが

もう少ししっかりしてくださいね！

そうでないと、あなたをそこから追い出すために大量に熊を放ちますよ・・・』

「了解いたしました！」

(だめだ、熊をと聞くとまだあの時の記憶が蘇る・・・)

あの時以来熊が相手の場合のみ力の制御がうまくいかず

大抵スプラッタなことになっている。

『それで、興味がありそうな話題についてですが、

そろそろエヴァちゃんが真祖にされますよ。』

「とうとうと、原作開始500年前ですか。」

『600年前です。』

「・・・やだなあ、ちゃんとわかってますよ？」

『なぜ疑問系なのか深くは追求しませんが

たまにはちゃんと思いついてくださいね。』

とりあえず何か正座をしなくちゃいけないような気がしたので正座をする。

『どうするかはソプラノちゃんが決めてください。』

「そうですね、真祖にされるのはかわいそうなんですけど

邪魔すると原作が大きく変わることになるし・・・」

（真祖にされるのはかわいそう、でも邪魔すれば原作から変わるので

先の予想がまったく立てられなくなりますし。

かといって邪魔するにしても居場所すら分からないし犯人も分から

ないのでは・・・)

「情報ありがとうございます、とりあえず助けるかどうかは

もう少し後で決めますが、情報収集しながらエヴァちゃんがどこに住んでるか

探してみようかと思えます。」

『はい、がんばってくださいね。』

あとこれから私も今ほど頻繁に話しかけられなくなると思えます。

上の方からも、少し干渉しすぎじゃないか？と注意されてますので。

』

「神さまも大変なんですね・・・」

(中間管理職の悲哀ってやつでしょうか?)

分かりました、今までありがとうございます。」

『今生の別れって言うわけでもないんですけど・・・』

「そうですね、死んだらまた合えるでしょうし。」

『縁起悪いよ・・・』

とりあえず干渉は出来ないけど見守ってるし、重要な出来事の際にはまた連絡しますよ。』

「でわ、見守っていてくださいね。

・・・でも時と場合を選んでくださいね。」

『大丈夫！生温く見守っていくよ！』

「・・・・・・・・大丈夫でしょうね？」

『安心してよ。』

昨日は2回とかそんなとこ見てないから』

「あ”あ” ああああ~~~~~.....!!!!」 / / / /

床を悶絶しながら転げまわる。

(ハアハア・・・もうだめだ・・・この駄神殺して 死ぬしかない！！)

『な、なんか目のハイライト消えてるけど、書庫の本が役に立ってるよ。』

「……そ、それじゃあまたね!」 ブツ

「……ええ、今度またじっくりと O・H A・N A・S H I し
ましようね……」

そんなこともあり家の結界強化（寝室を嚴重に）をして

エヴァちゃんを探す旅に出ることにしました。

（エヴァちゃんの名前がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
だから

とりあえずマクダウエル家を探す方向で情報収集をしますか。

「……そういえば某情報によるとA・Kの部分は「Athanas
ia K i t t y」で「不死の子猫」

と、言うそうでミドルネームはあまり当てに出来なさそうですね。

親が子につける名前にしては宗教関係で不死がまずそうなので

ここはやはりマクダウェル家をまず探しましょう。(

それから村や町を回って、服を買ったり、口説かれたりしながら情報収集をし

数年時を過ごした。

(女装はもう普段着みたいになつたからいいけど男に口説かれる時の

嫌悪感はいつまで経つてもなれないですね、

慣れたら男として終わってしまいそうです。(

そんな折、旅の行商人からマクダウェルという家名を持つ家があり、

その使用人らしい男がなにやら変な買い物をしていると言つと言う話を聞いた。

その場所に向かう途中でいろいろ変な話を聞いた。

話によると普通誰も使わないような薬草や家の規模にしては大量の家畜を買い集めているそうだ。

（しかし、この時代でこんな噂になるような怪しい買い物なんかして

大丈夫なんでしょうか？

変に目をつけられて近くで疫病なんか起きたら

魔女扱い受けること間違いないでしょうに。）

そんなこんなで情報を集めながら邸の大体の場所を

特定することが出来たので、

近隣の村に宿を取り、早速その晩に一度様子を見に行くことにした。

ガサツ・・・

邸が見回せる高台の木の上で邸の様子を見ているが

何か様子がおかしい。

今は深夜なのに邸の明かりが明るすぎる？

いや！空が赤い・・・焼けていると言った感じだ！

(もしかしたら・・・)

「そつだ、月は！」

空を仰ぎ見るとそこは満月

(なんてタイミングなんだ・・・今日がエヴァの誕生、真祖になる日か！？)

急いで邸に向かいながら今後の対策を考える。

（あの様子からして儀式はすでに終わっていると思われる。

そうなるこの段階で私に出来ることといえば・・・

・ 邸から逃げ出す前後にエヴァ保護する。

・ 家族や使用人の生存確認または確保。

・ 犯人と思われるものの確認または確保。

・ 傍観

こんな所でしょうか・・・。）

邸の門が見えたあたりでふと視界をよぎる人影が見えた。

視線を向けるとなにやらフード付のローブを来た人間が

荷物を抱えて邸から反対方向に駆け出しているようだ。

（火事で逃げ出してるにしては何かおかしい・・・

ほかの人を気にした様子もないし、一目散に逃げているように見える。

・・・あの格好はいかにも怪しいです！って感じですよ。）

すぐさまその人影に向かい声をかける。

「そこのお人！このような時間にそのような荷物を抱えてどうなされたのですか？」

・・・人影足を止めたが様子がおかしい、

こちらを振り向く様子が無い、なにやらブツブツと声が微かに聞こえる。

「このような時間では明かりがないと大変でしょう、

もしよかったらこの近くのお邸にでもお世話になったらどうですか？」

(邸に向かうようカマをかけて見たがどうでる・・・)

逃げだすか、誘いどおりに邸にm ツ！魔力反応！)

小声で魔法を詠唱していたようで

人影は振り向きざまに魔法の矢を放つ。

「魔法の射手 闇の5矢!!」

急いで光鷹翼を1枚展開準備、着弾までの間人影を確認するが男のよう

青い目の金髪、白人男性と確認した。

魔法の矢が着弾する寸前に光鷹翼を展開、

着弾時に小規模の爆煙が起こった瞬間に移動し木陰に隠れる。

「くくつく 馬鹿な女だ、邪魔をしなければ死なずにすんだものを。」

男が勝利を確認したのか気を緩めた隙に無言で横から左腕を狙って殴りつける。

「なっ！」

「ボキッ！」

「グアアッ・・・！」

男は折れた腕で抱えていた書物をいくつか落とし、
すぐに気を取り直したのか、あわてて数歩下がる。

side ????

「き、貴様、何者だ！！・・・っぐ」

(・・・なんだこの女、

見かけはただの子供だがさっきの動きも力も人間の物とは思えん。)

112

少女を見るが無表情でほとんど感情が感じられない、

出来のいい人形でも見てるような気分になる。

(この腕ではまともに戦うことも出来ん、どうする？

このままでは近くの村人が火事に気がついて

こちらに向かってくる可能性がある、そのときに目撃でもされたら
まずい。)

数秒とも数分ともいえる時間がたったときに不意に少女が囁く。

「あの邸で真祖の実験をし、火を放ったのはオマエカ？」

ビクッ！？

「ツク・・・」

（なぜこの女が知っている、この女何者だ！？）

s d e ソプラノ

私は無表情で男を見つめる、

こちらの思考を読ませないように気につけながら相手を観察する。

（やはりこの男で間違いないようだ。

落としたあの書物は真祖、もしくは魔法関係の書物か？

アレは持っていかせるわけには行かないな、

ここで殺す気は無いから逃げてくれるとありがたいんだけど・・・

などと、男の出方を見ているときに不意に子供の叫び声が聞こえる。

「キヤーーー！」

私がそちらに視線を向け確認しようとしたとき、

男が小瓶のようなものを足元に投げつけてくる。

あわてて私は数歩下がるが、地面に落ちたビンからは閃光と煙が巻き起こる。

とっさに光鷹翼を2枚前後に展開して自分を覆うように防御したが
攻撃が来る様子がない。

煙はまだ晴れず、男の方が気になるがさっきの悲鳴が気になるので
先に

悲鳴が聞こえたほうに急いで向かうことにした。

悲鳴が聞こえた先には邸からうまく逃げ出したのか

一人の少女（幼？）が倒れていた。

（あゝ……この子ってどう見てもアレですよ……エヴァンジェリンですよね）

金髪のロングヘアで見た目10歳前後、

色白で歯を確認すると……とがった犬歯 （唇やゝらけ）

ヒラヒラのピンクの……ネグリジェ？ この年で？

どうみてもエヴァンジェリンです、ありがとございます。

「困ったな……」

（もう少し観察する時間があれば干渉するか傍観するか決められたけど

この状態で放っておくのは流石にまずいよね・・・

思いつきり好みの幼女ですし「フヒヒ

最後のみ声に出ていた。

その姿はどう見ても変態だったそうなの・・・

(と、とりあえずさっきの男のほうも気になるしエヴァの家族も気になるから

抱えていきますか・・・そこに下心は無い！・・・きっと無いはずだ)

気を失っているエヴァをお姫様抱っこで抱えて邸のほうに向かうが邸はもう全焼寸前、この様子では少なくとも中にいる人は手遅れのようだった。

邸の周辺にも人の気配が無いので、次は男と出会った場所に向かったが

やはり男もすでに逃げたあとのようだが、落としていった書物の内いくつかがそのまま置き去りにされていた。

（左腕を折っておいたのが効いたかな、

流石に全部は持っていけなかったようでよかった。

この中から何かあの男の手がかりでも見つければ

エヴァの敵討ちなり、新たな真祖の被害を防ぐことも出来そうです
しね。）

一先ずもう一度邸の方に戻り、生存者の確認をするが

やはり生存者はいないようだ、周りにも特に目立つ形跡も無いし

逃げ出せた人もいないようで、（もう少し私が早く来れたら・・・）
と思わずにいらなかった。

エヴァをこのままにしておくわけにはいかないので

一度起こそうと思ったが、ふと不安がよぎった。

(そついえば真祖の吸血鬼は吸血鬼の弱点を克服した、

と言う話があったと思うが、エヴァの場合どうだろうか?)

人間から真祖になった吸血鬼も真祖と言うが、

最初から弱点が克服されていたのか、600年の研鑽で克服したのか

記憶に無かったので、とりあえず日の光に当たらずにすむ場所まで

移動してから起こすことにした。

マクダウエル邸の近隣の村、

私が観察のため逗留しようと思って

宿を取っておいたが、まさかその当日にこんなことになるとは予想にシなかった。

(さて、こまった・・・)

いや、悪戯するのに困ったんじゃないよ。

起こすのはいいが、なんて説明しようか？

私のことは火事があったときに倒れているところを見つけた、

とでも言えばいいか。

家族のことは・・・実際邸を見てもらうしかないか・・・。

問題は真祖化のことと犯人のこと、

両方とも素直に話すしかないのかな・・・

ほっつておいても自分が真祖になったと気がつくだろうし

家族や邸のことを知れば敵討ちに出るに違いない。

下手に教えずに勝手に動かれて

エヴァが酷い目に（いやらしい目に）合うのは忍びないし・・・

(あの男は絶対変態だ！)

そうでないと10歳児の美幼女を真祖にする意味が分からない。

それに奴からは同属(変態)の匂いがする!!)

いつそ手の届く範囲で動いてもらった方が私の精神衛生上いいか。

少し変な知識がある分卑怯な気もするけど

このままほっておくよりは酷い目にあうのは少なく出来るはず。

こうやって保護してしまった以上エヴァには力をつけてもらいつつ

原作よりは穏やかに暮らしてもらいたい。

side エヴァンジェリン

ふにふに・・・

くにくに・・・

ぷにぷに・・・

(ん〜・・・せっかく寝てるのに・・・)

くちくち・・・

むにむに・・・

「ああ〜！　うっとうしい！〜！」

さっきから顔を触ってきた手を振り払い上半身を起こす。

・・・は？

「知らない〜　「目が覚めました」　・・・だれ？」

目が覚めるといきなり知らない女の人が目の前に、

そっ、キスでもするかのような距離で・・・

「いやあああああっあ〜〜〜！！！！！」

バチン！！

side ソプラノ

頬にもみじを咲かせた私はエヴァにここにいる経緯を（真祖化のこ
とを除いて）

簡単に説明した。

「あの〜・・・ごめんなさい、ほっぺ　大丈夫ですか？」

涙目で上目がちに私を見つめてくる・・・

これは誘っているのだろうか？

「うや、ういのよ。

いきなり目に前に知らない人の顔があったらびっくりもするでしょうから。

いや、正直私だったからよかったけど、

これが普通の人だったら今頃スプラッタなことになってるはず・・・

恐るべきは真祖の力、単純な力は私ほどじゃないけど

石を握りつぶすくらいは簡単に出来そうだ。

「でも、あの、助けてくれた人をいきなりたたいては・・・」

「あゝ気にしないで、それよりもあなたの話をしましょうか？

え〜っと、とりあえずお名前教えてくれる？」

エヴァはもじもじしながら答え始めた。

「あ、はい。」

エヴァンジェリン・マクダウェルといいます。」

「これはこれはご丁寧に、私はソプラノと申します。」

営業のような挨拶を交わし本題に入る。

「それで、さっきも話したけどエヴァンジェリンちゃんの家が火事になって

私が確認した限りじゃ、助かった人はどこにもいなかったんだ・・・
ごめんね。」

「いえ・・・ソプラノさんが悪いわけじゃありませんし、私を助けてくれたんですから。」

「で、その近くに非難したと思われるエヴァン」 「言にくいでしょうからエヴァでいいですよ。」

それじゃあ、失礼してエヴァちゃんが倒れていたんだけど・・・

エヴァちゃん、自分のことどこまで知ってる?」

ビクッ!・・・

あえて別の意図を持って質問してみるが・・・これは当りかな。

「あの・・・私のこと、どう見えます?」

「ん、かわいい美少女?」

「ち、っ違います! そっついうことじゃなくて・・・」 / / / /

そっついうとエヴァちゃんはなにとも言えなくなる。

「・・・吸血鬼ってことかな?」

ビクッ!

「・・・あの、私・・・」とりあえず、まずは私が知ってることを話ことにしようか「・・・はい」

エヴァちゃんは自分の体を抱きしめて少し震えている。

「まず、私がああ場所にいた理由だけど、私はこの村に宿を取ってね

散歩をしてるときに空が赤くなってるのを見点けたんだ。

おそらくエヴァちゃんの家が火事になってるときだと思う。

そしてそこに駆けつける途中に黒いローブを来た怪しい男がいてね、

話しかけてみたらいきなり攻撃されて 「あの！

その男のこと詳しくおしえてもらえませんか!?」 . . . 落ち着いて、

順番に話すから、 . . . ね?」

「 . . . はい。」

「続きを話すね、その男と少しもめたあとにエヴァちゃんと思われる子供の悲鳴を聞いてね、そっちに気が行った隙に逃げられちゃってね。」

「そうですね . . .」

「それで悲鳴が聞こえた方に駆けつけたらエヴァちゃんが倒れてるのを

見つけたんですよ。

そのあとにエヴァちゃんを運んで邸を見に行ったんだけど

邸に着いたときにはもう火がかなり回っていて、私にもどうするこ

とも出来なかったんだ。

周りにも逃げ出せた人もいないようなので、とりあえずエヴァちゃんを連れて

この宿に戻ってきたんです。」

エヴァちゃんは静かに私の話を聞いている。

「あとはエヴァちゃんが起きるまでここにいた、と言う訳なんです。」

「……ありがとうございます。」

この年にしてはエヴァちゃんは非常にしっかりしている。

家族が亡くなったであろう話を聞いてもちゃんと理解しようとしている。

流石に私も60年一人で過ごしていたので

この姿を見ると身につまされるものがある。

「あ……いくつかお聞きしたいんですけど。」

「なにかな？」

「……なぜ　私が吸血鬼だと分かったんですか？」

「その質問に答える前に、質問で返すように悪いけど……」

エヴァちゃんって魔法って知ってる？」

「魔法ですか……私自身は知りません……。」

そういうとエヴァちゃんは少し震えだす。

「私をこの体にしたと思う男が口にするのを……聞きました。」

「そう……」

エヴァちゃんの今後にも関係ある話だと思っから正直に言っけど

私　魔法、に関する知識を持っているんだ。

私自身は本当の基本の魔法しか使えないんですけどね。」

「……ソプラノさん、魔法使いなんですか？」

そういうとエヴァちゃんは警戒するような仕草を取る。

「あゝそんなに警戒しないで、吸血鬼だからってどうしようとか思っていないから。」

え〜っと、話を戻すけど、私が魔法を知っているからその関係で

エヴァちゃんの体が人間のものとは違っていて分かるんですよ。」

「そういうことですか・・・。」

もう一つ、いいですか?」

「どござ、どござ。」

エヴァちゃんならどんな質問でもいくらでもどござ。」

エヴァちゃんは、引きつった顔をするがすぐに気を取り直したのかさっきより落ち着いて切り出す。

「・・・あ、あの、どうして吸血鬼だと分かってるのに、

私を助けてくれたんですか?」

「エヴァちゃん、自分で望んで吸血鬼になったわけじゃないでしょ?」

「はい・・・。」

「それに、私の血を吸って吸血鬼にするの？」

「し、しませんよ！ 絶対にしません！！」

「なら別に私が助けてもいいんじゃない？」

私にとっては、かわいい女の子なんだし。」

「……そういう問題なんですか？」

「そういう問題じゃない？」

私別に某宗教関係者じゃないですし。」

「……くすっ、ソプラノさんおかしい人ですね。」

「そうかな？」 / / /

エヴァちゃんも今は安全だと悟ったのか落ち着いたようだ。

「さて、少し大事な話をするけど、エヴァちゃん、これからどうしたい？」

「……まずはお家を見に行きたいです。」

家族がどうなったのかも確認したいですし。」

「そっか・・・じゃあ・・・って、その前に少し確認したいんだけど。」

エヴァちゃんちょっとこっち着てくれます?」

窓際に向かって行きエヴァちゃんを手招きで呼んだ。

「? どうするんですか?」

「今はちようどお昼少し前なんだけど外は晴れてるからお日様が出てますよね?」

「そうですね。」

「エヴァちゃんは真祖の吸血鬼、だと思っんですけど、お日様が大丈夫な

デイルイトウォーカーなのか、お日様が苦手なのか確かめておこうと思っで。」

ビクッ!

10歳児なら当然だけど

まだ自分が吸血鬼だという現実を受け入れられないのか、

怯える様子を見せる。

「ああ、大丈夫、いきなり外に放り出すとかしないですから。

今からカーテンを少し開けますので、手を少しお日様にあてて

様子を見てもらえますか？」

「・・・私のことですもんね、・・・わかりました。」

少し怯えながら太陽の光に手をかざすが・・・

特に何か起こる様子は無い。

「どう？何か痛いとか熱いとかありますか？」

「いえ、特にそういうのは無いです。」

でも・・・なんていうか、少し嫌な感じがします。」

「そう、なら少なくとも外に出ていきなり灰になるとかはなさそうですね。」

なら明るいうちに一度エヴァちゃんのお家を見に行きましょうか？」

「お願いします、早く見に行きたいので。」

そういうとエヴァちゃんは外に出ようとドアに近づくが……

「あ〜とちょっと待って！」

エヴァちゃんその格好で外に出るつもり？

ちよつと魅力的過ぎないかな？」

「え……？」

そういうと今気がついたのか、エヴァちゃんは真っ赤になって布団にもぐりこむ。

（なんで10歳児にあんなにネグリジェが似合うんだろう？）

「じゃあ少し大きいけど私の服貸してあげるからそれに着替えて行きましょう。」

そういうと私の鞆から服を取り出してエヴァちゃんに渡す。

私の服も黒のヒラヒラドレスでどう見ても目立つが、

ステスケネグリジェよりは、遥かにましだと私は思う……

「あ、ありがとございます。」／／／

（ソプラノさんこんな服しか持ってないのかな？

なんかすごいかわいい服だけど。）

そう言つと・・・

な、なんと 目の前で10歳美少女の着替えシーンが！！

（ぶふう！ （鼻からあふれ出す愛） 人生60余年、生きててよ
かった〜！

神さまに男の娘ボディにしてもらって女の子を演じてきた甲斐が！！

ここに来て今までの苦勞が報われた！！

・・・これは心のHDDに保存してブロックかけないと！）

この男の娘、どこまでも変態であった。

「さて、着替えも済んだようだし一緒に行きましょうか？」

「はい。」

私は用意した荷物を持ち宿を出て、道と一緒に並んで歩きながら手を差し出すとエヴァちゃんのほうも自然に握ってくれた。

(やゝらけゝ やゝらけゝ あゝもうこの娘、一生守り通すわゝ、誰にも渡さない！)

表面上は可憐な少女も脳内は穢れまくっていた。

小1時間ほど歩いたところで焼け落ちたマクダウェル邸が見えてきた。

知っていたとはいえ、今まで住んでいた家が灰になっているのを見るのは

10歳の娘にはきびしいのか、握っていた手を強く握り締め(メリッ)、

私もそつと握り返してあげた。

(真祖の力で握ってくるから

痛いのに……)(涙)(メリメリ

エヴァちゃんはゆっくりと灰になった邸を見て周る。

私も見て回ったが、軽く見た感じ人骨が無い。

邸の大きさからして数人は使用人がいてもいいのだが

その様子は無い。

そんな中エヴァちゃんのほうを見ると下を見つめてじっとしている。

「エヴァちゃん、何か見つかりましたか？」

「・・・あ、ここ、地下室の入り口があったんです。

瓦礫が邪魔で入れそうも無いんですが・・・」

「ちょっとまってくださいね。」

そついうと私は瓦礫をどかし始め

大きな柱をどかすと確かに入り口のような物が現れた。

「…………ソ、ソプラノさんって、力持ちなんですね。」

エヴァちゃんが呆然とした表情で尋ねる。

「そう? ……あまり嬉しくないだろうけど、エヴァちゃんも出来ますよ。」

「私そんな力ないですよ。」

「……厳しい言い方かもしれないけど、エヴァちゃんが認めたくなくても」

エヴァちゃんはまだもう真祖の吸血鬼なんですよ。」

「……………」

「今はまだ受け入れられないと思いますが、

いずれエヴァちゃんはその力を使いこなせるようになるいいけません。」

すぐになんていいません、ゆっくりでいいですから……ね?」

そう言って腰を落とし視線を合わせてエヴァちゃんの手をそっと握る。

「…………はい。」

エヴァちゃんもゆっくりと手を握り返してくる。

メリ

(いたたたたっ!!! (涙))

これはゆっくりなんていつてる余裕はね〜!!!)

話の後二人で地下室に下りる。

その途中 「私昨日、目が覚めたらこの地下室にいたんです。」

話と昨日状況から考えてこの地下室が真祖化の現場だと思われる。

地下室は真っ暗で途中に落ちていた瓦礫に火をつけて

たいまつ代わりにしてゆっくりと進む。

その先に祭壇のようなものがあり、回りには魔方陣が書かれた後があるが

火を放ったのか所々煤けていた。

・・・!?

「エヴァちゃんちょっとあっち向いててくれる？」

「何かあったんですか!？」

「確認してから教えるから、そこにいてね。」

「・・・分かりました。」

そう言っつてエヴァちゃんを待たせて奥に向かう・・・

そこには中途半端に焼けた死体の山、

折り重なっているので人数は正確には分からないが5人分はありそうだ。

エヴァちゃんの下に戻って邸に昨日いた人数を確認する。

「昨日は確か私を合わせて7人いたはずですよ。」

奥の死体の数と昨日の男、エヴァちゃん・・・合わせて7人。

(本当なら見せるべきではないんですけど・・・)

最後の別れにもなるからエヴァちゃんに状況を話して確認してから
決めますか……)

エヴァちゃんの手を握りなるべく優しく話しかける。

「……エヴァちゃん、落ち着いて聞いてくださいね。」

何かを悟ったのか、エヴァちゃんも私の目をしっかりと見て答える。

「……はい。」

「この奥に5人くらいの遺体が、中途半端に焼けた状態にあります。」

ビクッ

「こちらの方はお墓は土葬だと思いますが、東のほうでは火葬と言
って

死者を火で焼くことによって現世の罪を浄化して弔う方法がありま
す。

あの状態では満足に土葬もできないと思いますので、

火葬で吊ってあげようと思いますが・・・その前にエヴァちゃん
最後のお別れをしますか？」

「・・・・・・・・どうしても、火で焼かないと駄目なんですか？」

「正直に言いますが、中途半端に火をかけられて焼けている状態
です。」

その遺体の状態も悪く、誰がどの遺体か分からないし

荷物のように積まれていて、5体満足かどうかも確認できません。」

「・・・・・・・・火で焼いた後はどうするんですか？」

「その後は骨を集めて邸の庭にでもお墓を作って皆で入ってもら
うかと考えています。」

中途半端に焼けるよりはしっかりと焼いてお墓を作って

天国で皆で仲良く暮らせるようにしてあげようかと思えます。」

「・・・・・・・・分かりました、ソプラノさんにお任せします。」

だけどその前に、一度見せてもらっていいですか。」

「エヴァちゃんは見ない方がいいと思いますが・・・・・・・・」

「どんな姿でも家族です・・・最後くらいは見送ってあげたいんです・・・」

「分かりました。」

「じゃあ、あちらなので一緒に行きましょう。」

エヴァちゃんの手を握り一緒に家族の遺体を確認する。

予想通りエヴァちゃんは吐き気をもよおした様だが我慢してしっかりと見つめている・・・

本当にしっかりした娘だ。

憔悴したエヴァちゃんを休ませ私が穴を掘り遺体を地上に運び

近くの木材を集め用意していた聖水で遺体を清め

油を撒いて布をかけ遺体が見えないようにし準備が終わる。

「後は火を放つだけです。エヴァちゃんが送ってあげますか？」

「はい。」

一言そういつとエヴァちゃんが火を放ち遺体が焼かれる。

私達はそれをそっと見守る。

火が収まる頃にはもう日が暮れていた。

火が収まった後に遺体が焼けた後の穴に2人で土をかけ

最後に十字に組んだ木を刺してお祈りした後無言でマクダウェル邸を後にした。

神様から頼まれたお仕事。

その4（前書き）

4話投稿。

神様から頼まれたお仕事。 その4

マクダウェル邸での出来事後、私はエヴァちゃんと村の宿屋に戻ってきた。

二人とも酷く汚れていたので順番で体を拭き服を変えて

今日は眠ることにした。

この宿屋当初一人で泊まるつもりだったので当然ベットは一つしかない

宿屋の店主には一応2人分支払ったものの部屋はすぐには変えられない・・・

ここに来て本日の最大イベントと同時に（エヴァの）貞操の危機がやってきた。

「今日はもう疲れたでしょうし食事も喉を通らないでしょう？」

もう寝ましようか？」

「そうですね・・・なんにも食べる気になれませんし・・・」

「じゃあエヴァちゃんベットを使ってください、私はその長椅子で寝れますから。」

「え？ ソプラノさんも一緒に寝ればいいじゃないですか？

私達ならこのベットで十分2人寝れますよ。」

タラー

鼻から愛が漏れ始めた。

「あのね、エヴァちゃん、私達嫁入り前なんですから

はしたないので別々に寝たほうがいいと思います よ？」 / / /

「なに言ってるんですか、女の子同士で。」

「・・・それに、このままだと今日は眠れそうに無いので一緒に・・・」 / / /

（あんな思いをした後じゃしょうがないですね・・・

流石にここで手を出すほど私の愛も下劣ではないでしょうし・・・
・大丈夫ですよね？）

「し、しょうがないですね、じゃあ今日は一緒に寝ましようか。」
／／／／　ニヤニヤ

「・・・なんか背筋に寒気が走ったんですが。」

「大丈夫ですか？風邪なんか引いたら大変ですから、ほら！

一緒に寝ましよう！」　ハアハア

（なにかすごく失敗したような気がする・・・）

ソプラノが先にベットに入りその後エヴァが続いて入る。

「それじゃあ明かりを消しますね。」

「はい・・・おやすみなさい。」

・
・
・

「……」　ハアハア

「……スー」

（我慢だ私！　今手を出したら私はただの変態に堕ちてしまう。

私は変態じゃない！変態と言う名の紳士だ！！）

ギョッ

「ビクッ！！………？？？」

寝ているエヴァちゃんが私にしがみついてきた。

（かなり疲れてたから寝つきはいいけどしょうがないか、

まだ10歳だもんね……）　父親モードに切り替わったようだ。

うなされているようなのでそっと頭を撫でると安心したようで

寝息が落ち着き始めた。

メキメキ！

（いっただだだだ　だっ・・・っ！！！！）

骨が折れる！　何か出るっ！　何か出ちゃいけないものができちゃおう！！！！）

真祖の能力が制御できるようになるまでエヴァの貞操の安全は確保された。

幼女との人生初の朝チュンを迎え、エヴァちゃんも熟睡できたようので交代で洗顔、その後二人で食事を取りながら今後の相談をすることになる。

「食事しながらいいから聞いて欲しいんだけど、

エヴァちゃんこれからどうするっ？」

ピタリとエヴァちゃんのフォークが止まる。

（うつわ、私の馬鹿！！）

こんな話食事中にする話じゃなかった！）

「あ、ご、ごめんね、食事中にする話じゃなかったね。」

「い、いえ いんです。」

いつかしないといけない話ですから。」

「そうだね・・・それで、何か考えはある？」

「・・・私は・・・ソプラノさんには何も恩返しが出来なくて
申し訳ないんですけど、

あの男を探そうと思います。

私の家族を殺して無茶苦茶にしたあの男を・・・」
ギリツ！

そう言ったエヴァちゃんの顔をよく見ると、目の瞳孔が変化しつつ
ある。

（あゝ昨日までの様子であまり目立ったところが無かったから気にならなかつたけど

吸血鬼の破壊衝動がありますね〜・・・と、言うことは吸血衝動もあるのかも。）

「エヴァちゃんのやりたいことはわかりましたが、何か当てはあるんですか？」

「・・・いえ、私が覚えているのはあの男の・・・あの悪辣な顔だけです。」

「そうですね・・・エヴァちゃんのためにあえて言いますが今すぐ敵討ちに行くことはお勧めしません。」

ガタツ！

エヴァちゃんが勢いよく立ち上がる。

「なぜですか！ ソプラノさんはあんなことをした男を見逃せと言うんですか！」

「落ち着いてください、エヴァちゃん

見逃せとか、許せとか言ってるんじゃないありません。

今はまだ早いと言ってるんです。」

「……………どういことですか。」

「エヴァちゃん、自分で気がついてますか？」

あなた今、吸血鬼の破壊衝動に動かされていることを。」

「え……………？」

「エヴァちゃんはまだ若いですから分からないかもしれませんが

以前のあなたと比べてみて、今のエヴァちゃんは少し攻撃的だと思いませんか？」

「あんな目にあえばあの男を殺したくなって当然でしょう!!！」

叫びながら握ったエヴァちゃんのスプーンは変形し

もはや原型を留めていない。

「それですよ、今のエヴァちゃんの状態が危険だと言ってるんです。」

飯に今のままエヴァちゃんがああ男の前に立つことが出来たとしてもしょう、

今のエヴァちゃんだと間違いなく真っ直ぐに殴るなり噛むなりしようとするでしょうね。」

「それはそうですね！」

あの男を殺すためにはそうするでしょう！」

「それがまずいんですよ、あの男は腐っても魔法使いです。

そんなところに真正面から突っ込んではおに落ちたて捕まり実験動物にでも

されるのが分かりきってます。」

「じゃあ、ソプラノさんはどうしろと言っんですか!?!」

そう叫びながらエヴァちゃんはテーブルを叩く。

ドガッ!

テーブルのエヴァちゃんが叩いた部分が砕け散った。

「……え？」

「昨日地下室の入り口で廃材を動かしたとき話しましたよね？」

同じことがエヴァちゃんにも出来ると。」

「え……こんな……私こんな力が………本当に化け物になっちゃたの……？」

エヴァちゃんは涙ぐみながら自分の体を抱きしめる。

私はエヴァちゃんのそばへ行きそつと肩を抱き話し続ける。

「あの男がどんな目的でそうしたかは分かりませんが

エヴァちゃん望まないとは言え真祖の吸血鬼なんです。

あの男に復讐するなどは言いません、でも今のままでは返り討ちにあってしまいます。

エヴァちゃんの家族の敵を討つためにも、エヴァちゃんがこれから幸せになるためにも

その力を訓練して制御できるようにしましょう？」

「こんな化け物になって……私、幸せになれるんですか？

家族も、お手伝いさんの皆もいなくなって……」

「難しいですが……無理じゃありませんよ。」

「ソプラノさんは……」

ソプラノさんは吸血鬼じゃないからそんなこと簡単に言えるんですよ……」

「エヴァちゃん……エヴァちゃんちょっとこれを見てください。」

そう言っつて私は壊れたテーブルの破片を持ち……握りつぶす。

「え……！？　なんでソプラノさん……普通の人間じゃ……」

「後こんなことも出来ますよ。」

そう言っつて光鷹翼を3枚展開して自分とエヴァちゃんを包み、

これからやることで外に影響が出ないようにする。

「……………」

そして普段抑えている世界の魔力の一部を開放し

エヴァちゃんに魔力で圧力を与える。

「つく……」 カタカタ

エヴァちゃんが震えているので魔力を抑え光鷹翼を解除する。

「さてエヴァちゃん、真祖の吸血鬼をも怯えさせる私は 化け物
ですか？」

不幸に見えますか？」

「……いいえ、ソプラノさんはすごくやさしいですし、

昨日も、少なくとも不幸には見えませんでした。」

「私もそれなりに辛いことはありませんでしたが、

人間生きていれば辛いものです、エヴァちゃんの場合はそれがちよ
つと早くて

すごく大変でしたけど、ほかの人と違ってエヴァちゃんはこれから
が長いんですよ？」

真祖の吸血鬼の寿命はほぼ無限です、時間はいくらでもあるんです
から

大変なことも多いですけどその分幸せになればいいんですよ。」

「……でも、私もう一人ぼっちで家族も家のみんなもないのに……」

「私も家族も友達もいないですよ、ずっと森の中でしたから。」

「……」

「そうですね、いきなり家族になろう……っていつのも早いので

エヴァちゃん、私とお友達になりましょう。」

「え……お友達？」

「そうですよ、私が友達としてエヴァちゃんの幸せをお手伝いしますよ、

その代わりにエヴァちゃんは私を幸せにしてください。」

「友達……」

いいんですか？

「……私みたいな化けも」「エヴァちゃん！……エヴァちゃんは化け物なんかじゃないですよ。」

はい……。

「……私と友達になってくれますか？」

「もちろんいいですよ」

side エヴァンジェリン

（ソプラノさん・・・私が吸血鬼になっても友達になってくれるって・・・）

さっきはちょっと怖かったし人間とは思えない力があるけど、

こんなにやさしい人が化け物のわけが無い。）

ソプラノさんの顔を見ると自然と涙が溢れてくる。

恥ずかしいのと嬉しさでソプラノさんに抱きつく。

（お父さんやお母さん、家の皆がいなくなっちゃったけど

まだ私にはソプラノさんがいてくれる。）

抱きしめる力が強くなる。

メキメキ

「グエー！」

（ソプラノさん、さっき家族になってくれるって言いかけたけど

私はこれからあの男を・・・殺す！

人を殺したら本当に化け物になってしまうし

そんなことになったら私が近くにいるだけでソプラノさんに迷惑がかかってしまう・・・

けど、それでも、もしソプラノさんがもう一度家族になってくれるって言ったら・・・）／／／／

さらに抱きしめる力が強くなる。

メキヤ！

「・・・」ピクピク

こうして私に新しい友達が出来た。

名前はソプラノさん、私よりすこし年上だけど

とてもそうとは思えないほどすごく大人っぽい人。

こんな人がお姉さんになってくれたら私でも幸せになれるかもしれない……

そんなソプラノはエヴァンジェリンの手によって今にも人生を終えようとしていた……

同日昼、ようやく死の淵からソプラノが帰ってきた。

「ソプラノさん！大丈夫でしたか！！」

「ご、ごめんなさい！ 私まだ力のコントロールがうまくいなくて・・・」

「い、いや、いいのよエヴァちゃん、

私は大丈夫だから、ね」

「本当にごめんなさい・・・」

あ、あと私のことは「エヴァ」と呼び捨てで構いませんので

これからはそう読んでください。

あと敬語もなしでお願いします、友達ですから。」 / / /

「そう？ わかった、じゃあ私も呼び捨てでいいからね。」

「は、はい・・・あ、でもソプラノさん年上ですし・・・ほかの呼び方でもいいですか？」

「好きに呼んでくれていいよ。」

何か呼びたい呼び方もあるのかな？」 ニヤニヤ

／／／「……あの………姉様でもいいですか？」

ゴフツウ！！

口から愛があふれ出す。

「キヤーー！！ 姉様大丈夫ですか!？」

「大丈夫よ………私はまだ死ねないから……

たとえエヴァが私を萌え殺そうとしているのだとしても

私はエヴァが幸せを掴むまで死ねないの!!」

ソプラノのLPはもう0だった

「と、言うことでエヴァには破壊衝動と吸血衝動を抑えるのと

力の制御、後は魔法を覚えて欲しいと思います。」

「いきなりですね、・・・姉様。」

カフツ

口から愛があふれだす。

「は、話を続けるわよ、将来的には衝動は完璧に抑えられた方がいいけど

今はそこまでは求めなくていいよ。

あの男を目の前にした時に一息でいいから状況を考えられる程度でいいの。」

「なぜですか？」

「私は一度あの男と戦ったと昨日話したよね？」

そのときの感じだと、あの男自体はそんなに強くないの。

多分研究者なんだと思う。

その分あの男が隠れてる場所は罾が仕掛けられてると考えられるの。

だからエヴァには罫を見破るか、

罫にかかってもある程度回避できるだけの判断が出来れば

後は真祖の能力で補えると思う。」

「なるほど、さすが姉様ですね！」

(この子はわざと私を萌え殺そうとしてるのかしら・・・) / / /

「そ、それでね、魔法を覚えてもらうのは相手も魔法使いだからと
いうのと

遠距離攻撃の手段と魔法の防御方法、後は魔法を覚えたらそれで

相手がどう戦つか想像がつくでしょう？

力の制御については・・・もう分かってるわね。

私の身の安全のためよ！

・・・いくら私が丈夫でも手をつないだり抱きつかれたり

骨折してたら身が持たないの。」

「……………す、すみません。」

「エヴァが私とスキンシップとってくれるのは嬉しいけどね」

「……………」

「それと訓練中に気が散るといけないだろうから

今のうちに教えておくけど、これを見て。」

私はそういつとあの夜男が落とした数冊の本を机の上に置く。

エヴァはそれを流して読み出すが、徐々に表情がこわばる。

「もう分かっているとと思うけどその本はあの夜にあの男が落としていたものよ。」

私が回収して もう読んでおいたわ。」

「これは1冊は私達家族の観察……日誌ですね……」

数年前から書かれてるところを見るとかなり前から計画していたんですね……………」

「……………そうね、後の2冊は真祖化の魔方陣の組み方の研究資料、

もう1冊はなんていうのかしら？ 物資の納入記録……在庫の記

録とでも言つのかしら。

あの男が魔法の研究のために購入していた物資の目録みたいなものね。」

「そう……ですか」

「エヴァの気持ちが生んでるところ悪いけど

これはある意味喜んでいいことなのよ?」

「どういうことですか………」 #

「……あのね、気持ちは解るけど怒らないでねエヴァ。」 1

11

「……話を進めてください。」

「了解しました！」

マクダウエル家の観察記録と物資の目録を比較参照すれば

あの男の隠れ家や潜伏先の手がかりになるかもしれないのであります!」

「本当ですか！」

今すぐ行きましょう!」

「いや、ちょっとまって、落ち着いて。」

「はい、・・・姉様。」

「エヴァはとにかくまず訓練のほうを重視して、

あの男の居場所は私が調べるから。」

「私の復讐に姉様を巻き込むのは・・・」

「私達友達でしょう？」

復讐がエヴァの幸せにつながるかは解らない、でも それをしなくては

先に進めないのは解るわ、エヴァが先へ進むために、エヴァの幸せのため、

私が力を貸すから、エヴァは私を幸せにしてね。」

「・・・わかりました、納得は出来ませんがそれしかないのならばお力を借ります。」

その分私が姉様を幸せにしますから！」

「うん、期待してるからがんばってね。」

さてと、そういうわけで訓練をするにもここでは人目に付きすぎて

すぐに噂を流されて魔女狩りの生贄にでもされたら困るし・・・

私の家に行きましようか。」

「姉様の家ですか？」

「そう、私の家、さっき話したけど私は森の中に家を建てて

そこで一人で暮らしてるの、そこなら人が入れないように結界が張ってあるし

多少暴れても安全に訓練が出来るわよ。」

「そんな場所があるんですか、さすが姉様です！」

「なんかエヴァキャラ代わってない……？」 / / /

「気のせいですよ。」

「そう？ ならいいけど……」

「ええ、そうですよ。」

(もともと利発な子だと思っけど真祖の影響が出始めたのか……？
本当に10歳児かな？ なんか小悪魔とでも話してるような気がする
るんだけど。

私の心のツボをガンガン突いてくるし……)

「じゃあ片付けて日の昇ってるうちに行きましょうか、

ここからそんなに遠くは無いかから歩いて数日で着くと思っよ。」

「はい」「ニコ」

「／／／／」

(馬鹿な！？、この私がニコポされるだー!!)

つく、これはまずい、私が攻略されてエヴァのハーレム入りさせられる!?)

その後村を出て少し歩いたところでエヴァに認識障害結界を刻んだナイフを渡し

道中は盗賊や 熊 に合うことも無く 無事に家まで着いた。

「ここが姉様のお家ですか」

「そう、二二でずっと暮らしてたのよ。」

「私、姉様ってどこかのお嬢様かと思ってました。」

「そう見える?」

「ええ、どこか品がありますし。」

「ごめんなさいね、期待に添えられなくて。」

オホホ

上品に振舞ってみる。

「……………それは無いです。」

「すみません少し調子に乗りました。」

あえなく撃沈、私にはお嬢様は荷が思いようだ。

だが完全に女と思われれると言うことに勝利の愉悦を感じざるを得ない。

「それじゃあ、今日はこのまま食事の後寝て

訓練は明日からにしましょうか。」

「はい、解りました。」

こうしてエヴァの訓練が始まった。

エヴァにはまず瞑想してもらいつつ、私がエヴァの手を握って魔力を送り込んで

それを感じてもらおうようにする。

この訓練は成功なのか、エヴァは数日で火を灯すことが出来るようになり

魔法に関してはあっさりと、数日で抜かれてしまった。

正直ここから先、魔法に関しては私の教えられることは何も無いので

エヴァには書庫の魔法関係の本を渡して独自に覚えてもらう。

私のすることは初期の魔法を覚える順番を少し相談したくらいで

魔法の弟子としては あっさり卒業してしまった。

力の制御に関しても、私が最初に神さまに教えてもらったことを参考に

自分の全力を先に知ってもらい、適度に加減を学んでもらうようにした。

こればかりは経験するしかないので教えることも特に無かった。

破壊衝動については魔法の修行での瞑想が役に立っているので

それを継続して続けてもらう。

エヴァの破壊衝動は元の性格がおとなしいのか、あの男に限定して現れるように

日常生活や狩りにおいて得に問題にはならなかった。

そこで問題なのが吸血衝動だ。

最初の1週間くらいは普通に過ごしていたのだが

どうも狩りに一緒に行った時の獲物の血で興奮していたらしく

しばらくは我慢していたようだが限界がきたのか深夜私の部屋にや
つてきて

どう抑えたらいいか相談に来た。

これは正直困った。

血を見なければおそらくそれほど強烈な衝動にはならないと思うの
だが

食べるために狩をする以上どうしても見てももらうので

ここはおとなしく血を飲んでももらうしかない。

しかしここには人間は私しかいないので当然私の血を飲むことにな
る。

これにエヴァが猛反発した。

徹夜で説得した結果噛み付かずには手を切ってそこから舐めてもらう
ことで

妥協したのだが・・・これがまずかった。

一部音声を抜粋

「んふう・・・ぴちゅ・・・ぴちゅ・・・あふ・・・はあ
く」 / /

「んっ・・・ちゅ・・・ちゅび・・・くち・・・」 /
/ / /

「はあ・・・はあ・・・ぺろ・・・くちゅ・・・ぴ
ちゅ・・・あっ・・・」 / / / / /

「・・・あむ・・・くちゅ・・・ちゅ・・・はむ・・・
・・・ぷはああ・・・」 / / / / / /

こんなことが10数分続くのだ!!

もはや悪夢としか言いようが無い、今日だけでも耐え抜いた私には

ア　ネスが表彰に来るべきだ。

しかもエヴァと一緒に暮らしている間これが数日おきに確実に起きるのだ。

別のところがおつきして大変なことになる。

吸血終了時にエヴァが涙目、上目使いで「姉様あ……ありがとうございました。」ハアハア

と、きつちり止めを刺しにくるのでたまらない。

LPが0になっても攻撃を食らう気持ちがありました。

例のあの男、エヴァを真祖にした男だが調査の結果

ある隠れ家にずっと籠っているようだ。

これは私が関与した結果なのだが

あの夜、男が落とした書物の真祖の魔方陣の研究記録だが

これがかなり重要な本らしく、これがないと新たな真祖を生み出せないようなのだ。

私が本を回収した後に男が探しに来ていたようだが

本は私が持ち去ったので当然無い。

エヴァが討ち取られた噂も流れていないので

あの男はエヴァか私が持ち去ったと思っているようだ。

そこで自分を餌に隠れ家で罖をはって待ち構えると言っ

手段に出たようだ。

これはある意味私達にとっては好都合だった

私達には無限の時間があるがあの男には無い、

しかもあの男は私の持つてる本が無いと 真祖を新たに生み出せない、

本人は罫を張っているつもりだろうが私達が行かなければいいのだ。

エヴァは自分の手で殺すことにこだわるだろう

あの男もいずれどこかで痺れを切らして外に出てくる、

その瞬間こそがチャンスだ、私達はそれまでエヴァの訓練を進めていけばいい。

仮に出てこないとしてもこちらはエヴァが中級か上級の攻撃魔法を

覚えた段階で隠れ家の外から魔法を撃ち込めばいいのだ。

真祖の魔力で撃ちこまれた攻撃魔法があつた隠れ家の結界で

防げるはずが無い。

あの男はすでに詰んでいる。

エヴァの復讐は必ず成功するだろう。

そうして半年が過ぎたが、男のほうにも動きが無い。

荷物の搬入があるようなので中にいるとは思うが心配になったので一度中を見に行った。

いらいらした様子で同じところをぐるぐる回っていた。

左手の骨折が治療が悪かったのか悪化していたのも都合がよかった。

さてエヴァの訓練のほうだが、力の制御は通常ではほぼ完璧

感情が高ぶったときなどに少し暴走するが昔ほどじゃないので

後は特別な訓練をする必要が無く日常生活で上達していくと思う。

破壊衝動も順調に抑えられるようになった。

これは吸血衝動の方が消化されているからだ。

吸血衝動が満たされていないと、イライラして破壊衝動につながる。

冷静に考えれば普通の人間と同じことだ、

おなかが減ればイライラする。

魔法はもうなんていうか……メインキャストの優遇っぷりはチートレベル。

もう中級魔法普通撃ってるし、初級の魔法の射手は無詠唱で撃つし・

私に10分の1でいいから才能を分けて欲しい。

ちなみに私は今だに火を点けることしか出来ない……

エヴァに慰められるのが辛い。

エヴァが上級魔法撃てるようになったら、私、エヴァに魔法習うんだ……

そうしてさらに半年経った頃

ついにあの男が動き出した。

1年で痺れを切らして隠れ家から出てきたのだ。

男の目的地は方向だとマクダウエル邸が方角にある、

後は中規模の町。

マクダウエル邸に向かってくれるならある意味舞台としては最高だ。

両親と家の人達の前で敵が討てる。

しかし町のほうに行かれると最悪だ。

人ごみに紛れ込まれると戦いにくいと言うのもあるが

教会に行かれるのが最悪のケース。

いくらエヴァが真祖の吸血鬼とはいえ、人間の数には勝てない。

それに教会に手配書でも流されたら今後の平穏な暮らしにも触る。

エヴァと相談した結果マクダウエル邸と町へ向かう街道の

分かれ道で討つことにした。

ある街道

認識阻害結界を張ってその中から通行する人を観察する。

エヴァの希望で私は直接の戦闘にはかかわらないことになったが

最悪の場合には躊躇せずに行くことにする。

s i d e エヴァンジェリン

とうとうこの日がやってきた。

父や母、そして家のみんなのためにも

あの男をこれ以上生きていさせるわけには行かない。

まだか・・・

ここで見張りを始めてからもう半日は経つけど

あの男が現れない。

以前の私だったら痺れを切らして道に沿って探しに行っていたに違いない。

あいつを殺したい、殺したい、コロシタイ、アノ男ヲ ヤツザキニ・
・

だめ、落ち付いて・・・ふう〜

姉様にはいくら感謝してもし足りない。

私に戦う力をくれた、この忌々しい真祖の力の抑え方を学んだ、

復讐するための情報を集めてもらった、邸の皆を弔ってもらった、

そして吸血鬼という人に疎まれる存在でも幸せになれる希望をもらった。

今の私は破壊衝動を抑えるのは簡単だ、

姉様のことを考えればいい、破壊衝動に飲まれた私を見て悲しむ姉様を

見たくないと考えればそれだけでいいのだ。

後はあの男を討ち姉様と共に生きるだけ。

side ????

ふう、忌々しいあの女のおかげで俺の計画は狂いっぱなしだ。

あの女があそこに現れなければ腕を折られることも無かったし

真祖の研究が滞ることも、わざわざ実験体の餓鬼を探すような手間

も無かったんだ。

しかしあの餓鬼どこに行つたんだ？

どこからも吸血鬼が現れた情報は出てない。

奴は真祖とはいえ餓鬼だ、家族を皆殺しにされ吸血鬼にされ

憎しみが沸かないはずは無い、すぐにでも破壊衝動か吸血衝動に飲まれると思つたが

実験が失敗してどこかでのたれ死んだのか？

あの段階で成功はしたが真祖化に失敗してだたの吸血鬼を作つただけで

朝日に焼かれて死んだなんて最悪の結果だ。

わざわざ探しやすく一箇所に留まって情報まで流してやったのに

探しにも来ない・・・これは餓鬼は諦めて、

本を探すことに専念した方がいいかも知れんな。

あの餓鬼がうまく捕まえられればいい玩具になつたのに、っち。

s i d e エヴァンジェリン

そろそろ日が沈む、あの男も馬鹿じゃないので

日が沈んだら流石に動かないと思うけど………来た!!

あの男……馬鹿なの？

吸血鬼に狙われてるのに日没まで移動に使ってどうするのよ……。

あ、姉様に言われてたっけ、

まずは相手を観察すること。

魔力は普通の人より多いくらいか、

魔法使いだから当然ね。

左手が不自由のようね、姉様が折ったって言ってたっけ。

魔法触媒は杖と……指輪はしてない。

ローブの中に何か隠しているようだけど

姉様が以前戦ったときに閃光と煙を出すピンを投げてくると言っていたので

ほかにも何かありそうだから注意しないと。

気になるところはこれくらいか

だけど護衛もつれてないなんて人間の魔法使いはよっぽど

自分の魔法に自信があるのかな？

私の装備は魔法触媒は指輪を2つにナイフを1本

万が一のときのためにと姉様からもらった使いきりの防御結界のネットレス。

後は魔法の防御効果のある外套。

男は周囲の警戒はそこそこに徐々に近づいてきた。

よし そのまま来い、もう少し……まだ……
1歩……今!!

私は無言で足にこめた力を解放し一気に男に接近し

男の杖を持つ手を引き裂く。

ゾッ!

「ぐああ!……?」

な、俺の腕が!? 俺の腕が無い”いい!!!”」

男の腕を引き裂き杖を奪いすぐさま折った。

そして私は男から10歩は離れた正面に立つ。

「ククク、ようやくこの刻が来た、

貴様に殺された我が両親、我が家に使えた愛する家臣、

そして貴様に真祖の吸血鬼に変えられた恨みは忘れたことが無い！

貴様の命、この場にてエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルが滅してくれる！」

このセカンドネームは以前姉様に「エヴァってセカンドネームは無いの？」

聞かれたが、まだ子供だったので無いと答えた時に姉様が

「誇りを持って戦うときに名乗りなさい。」

アタナシア・キティ 「不死の子猫」 あなたはその子供の姿のまま

成長することは出来ないけど死ぬことも無い。

敵にとってあなたの姿は油断に繋がるけど自分の姿に誇りを持って戦いなさい。

その姿と名がいずれ あなたに仇名す者すべての恐怖になる。

真祖として成長できない姿に誇りを持ってなんて酷い事いってると思
うけど

今のあなたがあるのは間違いなく、ご両親と家みんなのおかげよ。

真祖として誇りを持たなくていい、家族に誇りを持ちなさい。

あなたを 生んで 育てて 不幸にも真祖の吸血鬼になってしまっ
たけど

それも含めて今のあなたがあるのは家族のおかげよ。

だから名を名乗ったときは家族に誇りを持って戦いなさい。」

189

・ 姉様はそう言ってくれた、確かに真祖荷なんてなりたくなかった・

でも今の私があるのは家族のみんなのおかげ、

この姿が幼く見えるならそれも受け入れる、

家族がくれたものだから。

たとえここでこの男を殺して化け物に堕ちようと

家族を誇りにして気高く生きる！

「貴様あ！ マクダウエルの餓鬼か！！

なぜ貴様が今まで生きていられる！

お前のような餓鬼はすぐに吸血鬼の衝動に飲まれて化け物として

殺されるはずなのにいい！！」

「誇りも無い屑には理解できまい。

もはやお前のような屑と話す事すら我慢ならん、

早々に消し去ってくれろ！」

「つく、餓鬼が言わせておけばぐだぐだと！

この俺の腕を奪った代償は高くつくぞ！！

ただの腕力しかない真祖など俺が倒して実験動物にしてやる！！」

そついい終わると男は懐からいくつものビンを取り出し

不自由な左腕でこちらに投げてきた。

私に当たるビンはほとんど無く当たるコースでも

魔法障壁に傷一つ付けられずすぐに消える。

ビンの中身は魔法の射手や酸、毒などいろいろあるようだが

まったく効かない。

さまざまな魔法の瓶の効果で当たりが煙で包まれた。

「くはっはあ！ 馬鹿が、魔法が使えない真祖など

俺の魔法薬の敵ではないわ！」

あの男、なにを思ったのかこれで私を倒したつもりらしい、

煙がちょうどいい煙幕になったので木陰に隠れて一気に止めを刺そうかと思っただけ

それは何か違うと思ったのでやめた。

煙が晴れ男の姿と私の姿がはっきり見え始めた。

男は明らかに動揺している、腕を引き裂いたときの出血が止まらないのか

血を流しすぎたのかその場へたり込む。

私は警戒を怠らずにゆっくりと男に近づいていった。

「な、何で生きてるんだああ!!」

アレだけのみ、魔法薬を食らって 無傷だなんて……」

男の数歩手前で立ち止まり男を見下し、よく観察してみた……

……が、見れば見るほど情けない男だった。

私の家族はこんな屑に殺され私は真祖の吸血鬼にされたのか……

「ダメレ」

男の顎を蹴り飛ばす。

これでもう口は利けないはずだ。

「ああア……かひゆ、ひゆ……ひゃ、ひゃひゆけ……ア
あア

ヴアアア~~~~!!」

私は未完成の「断罪の剣」を右手に発動し……

「消え去れ！」

一気に振り下ろした。

これで私の復讐は終わった……

達成感はない、恨みも憎しみも消えたような気がしなかった。

家族や家、人間としての体、人としての生、

たった一人の屑のおかげで多くのものを失ったが

新しく得るものもあった。

新しい家族、失った家族の誇り、魔法の力、望まずに手に入れた真祖の体

化け物としての生。

むなしさを感じる一方で、ひとつ確信を持つてることがある。

「これで私はようやく前に進める。」

神様から頼まれたお仕事。

その5（前書き）

5話投稿。

神様から頼まれたお仕事。 その5

無事に復讐を果たしたエヴァが空を見上げてそっと呟く。

「これで私はようやく前に進める。」

私はエヴァに近づきそっと肩に手を触れる。

「……………終わったね。」

「……………ええ、……………終わりました、姉様。」

「帰ろっか。」

「はい。」

その後、家まで二人とも無言だったがエヴァは少し考え事でもしているようだった。

表情は暗くないので深刻な事ではないと思うが

思うところでもあるのだろう、しばらくはそっとしておいてあげようと思った。

家の前に着き、特に言葉も交わさず家に入ろうとするが

玄関の扉の前でエヴァが一瞬入るのを躊躇する。

「……姉様。」

「ん？なに、どうしたのエヴァ？」

「私、真祖で人も殺しちゃったけど、姉様と　一緒にいていいんですか？」

「……エヴァは私と一緒にいたい？」

「一緒にいたいです。」

「じゃあいいよ。」

そう言いエヴァの手を握り多少強引に家の中に入る。

「・・・おかえり。」

「・・・ただいま。」 / / /

エヴァも今日はいろあって疲れているだろう、

今日はもう寝た方がいいと思うが、このまま一人しておくのも少しよくない。

「エヴァ、今日は一緒に寝ようか？」

「・・・は、はひ！」

よろしく願いします！」

一度部屋で着替えのために別れ、寝巻きに着替えたエヴァが私の部屋に来て

今日そのまま二人で抱き合うようにして眠った。

流石に変態の私も紳士として責任ある行動をするために・・・

エヴァの匂いとぬくもりとやわらかさを堪能するに留め、紳士として静かに眠る。

・・・ちょっと背中を撫でただけで何もしてない。

明朝、

私の方が寝つきが遅かったせいか、エヴァの方が先に目が覚めていたようだが

ずっと私にしがみついていた。

「おはよう、エヴァ。」

「おはようございます、姉様。」

私達はそれぞれの部屋で着替え、洗顔、

食事の準備をし、今で食事を取った。

ちなみにエヴァは箱入りのお嬢様だったのか料理が出来ない。

お茶を入れるのはうまいのだが、料理はまったく出来ないの

この家では私が料理を作っている。

私の料理の腕は長い一人暮らしのおかげで

そこそこ自信はあるが、家庭の味止まりである。

そうして食後、エヴァにお茶を入れてもらって二人で寛いでいた。

「ねえ、エヴァ。」

「なんですか姉様、後名前を伸ばして言わないでください。」

「わかったよ。」

「だらけきってますね。」

（それはしょうがないと思う、昨晩は日が昇る寸前まで

エヴァ分の過剰補給してたんだから寝不足なんだよ。）

「それで、なにか用事ですか？」

「用事ってわけじゃないんだけど、エヴァのこれからのことだね。」

エヴァこれからどうする？」

少し空気が重くなる。

「……そうですね、どうしましょうか？」

家族の皆の敵は取れましたし、特に何かやりたいことも今は無いで

すじ。」

「・・・そうだね、今はしょうがないと思つよ？」

昨日の今日だからね、だから今すぐには考えなくてもいいから

少しずつゆっくりと何かやりたいことを探すといいよ。」

「分かりました、姉様。

ありがとうございます。」

「え、何でそこでお礼なの？」

「姉様が私を心配してくれているのは分かりますから、そのお礼です。」ニコ

「・・・」
「／／／／」

（これはまずい・・・、もう私のLPは一桁だが

紳士として今のエヴァには手を出すわけにはいかない。

11歳で、もうここまでニコポを使いこなすとは、末恐ろしい娘！）

「え、えつとね（　　） やりたい事とかは今はいいんだけど、

魔法の修行とか、力の制御の訓練とかは続けた方がいいとおもうん

だ。」

「確かにもう少し続けた方がいいと思いますが、今のペースですか？」

「ペースは少し落としてもいいと思うんだけど、

あの男は エヴァも気がついたと思うけど魔法が使える分

普通の人達よりは強いんだけど、魔法使いとしてはあいつは

そんなに強くは無いんだよ、研究者みたいだったし。」

「そう、かも知れませんがね。」

私も、もう少ししてこずるものだと思ってましたし。」

「世の中にはね、もっと強い魔法使いもいるし

魔法は使えなくても強い人はいっぱいいるんだよ。

それに、エヴァは身をもって知ってると思うけど、

吸血鬼がいるって事は、ほかの妖怪や、悪魔のような生き物もいるんだ。」

「……っ！、そうですね、私のような存在がいるんですから

いてもおかしくは無いですね。」

「それで、エヴァにはもう少し力を付けてもらって

自分の身を確実に守れるようになって欲しいんだ。

エヴァに何かあったら私が心配で眠れなくなっちゃうしね。」

「分かりました！ 私もっと強くなって、

姉様を守ってあげますから！」 / / /

「うん、お願いね。

今は私がエヴァを守るから、いつか私をエヴァが守ってね。」

「はい！」

「……でも、もう魔法に関してはエヴァの方が強いんだけど
ね」 or z

「だ、大丈夫ですよ？」

姉様も魔法使えるようになりますよ……？」

魔法に関してはもうすぐエヴァにも見放されそうな予感がした。

s i d e エヴァンジェリン

姉様とこれからのことで話をしたが

昨日までの私は復讐がすべてだと思っていたので、

それが終わってなにをするか？ などと考えたことも無かった。

姉様はゆっくり考えればいい、と言ってくれたが、

よく考えてみたら一つやりたいことと言っか、希望はあった。

（姉様と家族になりたい。）

私にはもう家族がない、真祖にされたことで人間では友達も満足に作れないだろう。

そう考えたとき今の私には姉様しかない。

姉様は私の友達になってくれたが、友達だといつか離れてしまうかもしれない。

（私は姉様とは離れたくない！）

姉様とはもっと深く、絶対に切れないつながりが欲しいと思ってしまっ
まうのは

しょうがない事なのかも知れない。

前は無意識にソプラノさんのことを姉と呼んでいいか？

と聞いたが、今ならその気持ち分かる。

今のようなただ姉と呼ぶだけじゃなく本当の意味で姉と呼べるように

これからがんばろうと思う。

（……………姉様が男の人だったら好かったのにな、それなら結
婚できるし…………） / / / /

エヴァンジェリンははまだ知らない。

ソプラノは、ド変態の『男の娘』だと……

そうして数十年、私とエヴァは修行をしながら穏やかな生活を送った。

エヴァの魔法の才能はすごい、反則だ。 o r z

回復魔法こそ苦手だが、攻撃魔法については

どんどん新しい魔法を覚えて中級魔法なら無詠唱も可能と言つ反則

技。

あの男を倒したときに使った断罪の剣も完成させて

もう個人の戦闘なら並みの魔法使いじゃ相手にならないだろう。

ただしやはり今は竜種や悪魔、上位の魔法使いに連携を組まれるなどの

上位種族や数の暴力にはまだ対処できないので気をつけるようになる。

そろそろ闇の魔法の開発に着手するよう促した方がいいと思う。

私の介入によってエヴァは『原作』ほど酷い目に合うことにはなっていないはずだ。

これからは分からないが、いずれにしても作って損は無いはずなので早いうちに開発してもらおうようにする。

それと、エヴァの魔法技術が上がったので私もそろそろ本格的に一つでいいから魔法を使いたいのでその旨をエヴァに伝えたら

微妙な表情をしていたが、教えてくれるようになった。

魔法で熊を消すのは無理だそうなので、空を飛ぶことを目標にした。

日常生活では、たまに認識障害をかけずに村へ買い物に行き

二人して声をかけられたり、

村を襲おうとしてる山賊などを退治したり、狩りをしたり。

以前村で買ってあげた人形が気に入ったのか、

エヴァが暇なときに手作りの人形や、それに着せる服を作ったりしている。

人形練りも練習しているらしく部屋で自作の人形で遊んでいる姿をよく見る。

何年か練習した時に一度見せてもらったが、

どついう原理で10体もの人形を動かしているのかまったく分から

なかったが、

書庫に人形練りの本があったらしくそれを呼んで練習したと言う話だ。

エヴァが熊の人形を作った事があったが私の部屋には持ち込まないように

O・H A・N A・S H I した、熊はだめなの。

最近私達が着ている服も半分以上エヴァの手作りだ。

相変わらずフリフリが多いが似合っているのでいいんだと納得する。

もっ少し控えめでヒラヒラなほうがいいけど・・・。

s i d e エヴァンジェリン

姉様と暮らし始めて数十年、もうほとんど家族のようにお互い接している。

だけど、やっぱりはつきりと口にするか、何か形に残るようなもので家族として明確にしたいと思うのは贅沢な悩みなのかもしれない。

姉様と暮らし始めてみて分かってきたのだが

あの人は 少し おかしい。

悪意のある意味じゃないけど、人と少し感性がかけ離れているのだ。

たとえば村に買い物に行くときに着て行く服、

何か本人なりにこだわりがあるのか可愛いドレスのような服しか着ない。

目立ってはいけない私達がわざわざ目立つ服を着ていくのは
まずいんじゃないかと思って一度話したことがあるけど

「絶対にイヤでござる！ 絶対にこの服を着て行くでござる！」

と駄々をこね始める。

じゃあ可愛ければいいのかと別の日に、フリフリのたくさん付いた服を

すすめれば今度は 「そんなにフリフリの付いた服は恥ずかしい！」
などと言い出す。

どう違うのかいまいち判断が付かないが、一つ分かったのは

ヒラヒラはよくてフリフリはだめだと言うことくらいだ、意味が分からない。

以前から、狩りの時に異様に熊を怖がり、魔法を教えて欲しいと頼まれた時に

どんな魔法が使いたいのかと聞いたが、

「この世から熊を消し去る魔法。」

と躊躇せず答えた。

人形ですら熊を嫌がる姉様に、熊のなにがそんなに嫌なのか聞いたがなかなか答えてくれない。

粘りに粘って聞き出したところ

以前狩をして鹿を捌いていたところ熊に襲われたそうだが、

それだけなら普通の話なのだが、どうも先があるようだ。

続きを聞くと、急に震えだし語りだした。

話が所々飛ぶので要約すると、

その時とつさに投石して熊を倒したのだが

その石が熊の頭に当たり熊の頭が破裂、かなりスプラッタなことになったのだが

その熊を誰かに 無理やり 食べさせられたそうだ。

どうもそれ以降、熊に向かって投石するとなぜか全部頭に当たってスプラッタな様子が再現される。

しとめた獲物なので出来るだけ食べなければいけないと言う強迫観念に襲われ

仕方なく食べるのだが味が何も感じられなかったか。

そんなことを繰り返すうちに熊に対するトラウマが植え付けられたと言う話だ。

はあく……しょうもない。

後、あの人は女の癖にと言っているのか

やたらと可愛い女の子が好きだ。

村や町で出会うと付いて行って回ったり、話しかけたり、お菓子をあげたりしている。

私は年をとらないのですと姉様の好み(?)の女の子でいられるのは

真祖の体の数少ない利点だ。

一度客観的にその様子を眺めたていた時に姉様から何かどす黒いものを感じた。

女の子の頭を撫でようとしてあわてて手を引っ込めたり、手を繋ごうとした時の表情はなにやら興奮していた。

一番近くにいる私に何かをしたことは無いので

いきなり女の子に何かを言うことは無いと思うし

やってることは遊んであげてお菓子をあげるだけなのでなにも問題は無い、

無いのだが何か……ムカツとする。 #

(姉様も何かしたいことがあるなら私にすればいいのに!) #

あまりにもイラついて姉様も挙動不審だったので

一度問いただしたことがある。

「姉様はなにがしたいんですか！

頭を撫でたいなら普通に撫でればいいのに　なぜ　あんなに挙動不
振になるんですか!？」

「あの子に手を出したらただの変態じゃない！」

「何でそうなるんですか！」

「（性的な）スキンシップはしたいけど　YESロリータ　NOタ
ツチ　なのよ！」

「じゃあ私に（スキンシップ）してくださいよ！」

「私はいつでもいいですよ！」

「エヴァに（性的に）手を出したらただの変態じゃない！」

「私は変態でも紳士なの、紳士と言う名の変態なの!!！」

「なんでですか!!！」

「そもそも姉様は淑女でしょ！」

「エヴァはまだ幼女じゃない!!！」

「なっ!？」

「どこが幼女ですか!」「少なくとも見た目は」「うるさい!」

#

ゴッ!!

ソプラノの頭にエヴァの拳が突き刺さる。

「こっ見えても私はもう17年くらいは生きてます!

幼女じゃありません!!!」

「少女じゃない!」

「言葉尻を取るな!!!」

ゴッ!!

ソプラノの頭にエヴァの拳が突き刺さる。

「いいですか!

今後はスキンシップを取りたくなったら私にやりなさい!!!

分かりましたね、姉様!」

ソプラノの意識は無い。

「ふんっ！」

#

）はぁ……………まったくあの人は、

でも、こつやって遠慮無く付き合えるのは家族として

ちゃんと付き合えてるって事だからいいよね。

明日からもう少し姉様と仲良くしよう、きっとさびしいんだよ、姉
様も。）

そうやって魔法の訓練をしたり、狩りをしたり

近隣の村をこっそり守ったり、姉様が奇行に走ったら殴って止めたりしながらすごしていた。

s i d e ソプラノ

闇の魔法の開発を促して数年、ある程度開発が落ち着いた頃、エヴァに従者について話してみた。

どの段階でチャチャゼロを作ったのか分からないが私がいたせいでチャチャゼロの登場が遅れている気がするので話をしてみることにした。

「エヴァもかなり魔法が強くなってきたけどそろそろ従者を持ってみない？」

「従者ですか？」

特に必要と思つた事は無いですけど。」

「普段は私がいるから、戦闘になつても落ち着いて魔法を詠唱できるけど」

万が一私と離れて戦わないといけない時にはいた方がいいでしょ？」

「それはそうですね・・・誰が私の従者になつてくれるんですか？」

知ってる人にそんな人ないと思いますけど。」

「人じゃなくていいんだよ、たとえばエヴァが好きな人形とか。」

「人形を従者ですか、それはいいですね。」

人と違って人形ならずっと一緒にいられますし。」

「そうそう、魔法で契約結んである程度自由意志で動く人形に出来たら」

新しい 家族 ができるしね。」

「家族！」

（今しかない！！）

今なら姉様と家族になる話を持ち出してもおかしくない！（）

「ね、姉様？」 / / /

「なに？」

「姉様は昔私に友達になるって話をしたときのこと覚えてますか？」

「覚えてるけど？」

「あ、ああああ、あの時家族になるのはいきなりとか早いとか言
ってましたよね！」

「ああ、確かにあの時いきなり家族になるって言うのは

おかしいからね。」

（なんか、今日のエヴァはすごい気迫が籠ってるな・・・）

「い、今でもまだ早いですか！？」

私と家族になってもらうには早いですか！？」

（言ったあゝ！！ ついに言っちゃった！） / / /

「もうエヴァとは何十年も一緒に暮らしてるんだから、家族同然だ

よね。」

「違うんです姉様！」

家族同然じゃなくて「家族」になりたいんです！！」

「……………エヴァ、私と家族になりたいの？」

「……………なりたい。」

もう一人は嫌……………友達じゃなくて姉様には「家族」、って言うてもらいたいんです。

姉様が好きだから、姉様に家族になつて欲しい……………。」

「エヴァ……………」

「姉様は女の人だから結婚は出来ませんが、家族に……………」

（キターー！この瞬間を数十年待っていた！

今こそ、長く眠らせていた男の娘ネタで攻める刻とき！）

「そう……………ごめんねエヴァ。」

「え、何で姉様が謝るんですか？」

「私がこんなだからエヴァを苦しめて……………」

「姉様はなにも悪くありません！」

私が勝手に姉様を好きになって家族になって欲しいなんて……」

「私もエヴァと家族になりたい、

でもエヴァが私の事知ったら嫌いになるんじゃないかと思うと怖くて……」

「私が姉様を嫌いにあるなんてあるわけ無いじゃないですか！」

私はエヴァに縋り付くように抱きつき上目使いでエヴァを見つめる。

「私のこと……好き？」

「す、好きです！」 / /

「愛して くれる？」

「あ、あああつああ 愛しています！」 / / / /

「私を、捨てないでね？」 < 涙目

「姉様……はい。」

「エヴァ……」

ゆっくりと目を瞑る、目じりには涙がたまり唇をそっと突き出す。

「姉様……」

『エヴァから』 口付けをした。

「ん……」

「……ちゅ」

「ん……はぁ〜」 // // //

「姉様あ……」 // // //

「エヴァ……」

「姉様……」

「エヴァ、私ね……」 // // //

「なんですか？ 姉様。」

「私 男の娘なの

」
/
/
/
/
/
/

「……………つは？」

「私、男の娘なの。」

(え???? 姉様が男の子……???)

姉様が? 兄様で? ?女???)

「私は男の娘だからエヴァとも ちゃんと結婚できるよ。」

「え? ?けっこん??、姉様と?

姉様と私は……?家族?」

「エヴァ……私、嬉しい!」

「んむう!」

エヴァにキスをしながら一気に布団に押し倒す。

そのままエヴァの両手を握り指を絡める。

「んふう!……んう……くちゅ、ちゅ」

「……………ん……………!……………んぶ……………くち……………ん……………
ちゅく」 / / / /

(姉様がキスをしっ! 舌が入ってくる!)

だめ、私達女なのに……？あれ？でも姉様は男で兄様だから

でもどう見ても姉様は女で姉様で、でも兄様で女で……？ あれ？

なんかキスが気持ちよくて、なにも考えられない……

あ、姉様の舌……気持ちいい……もっと欲しいな……

頭が真っ白、でも姉様は 男の子で……？男の子ならいいの？

……もっと……姉様の舌、唇……気持ちいい

「ん……ぷはっ！」

エヴァ……愛してるよ。」

「ねえさまぁ……」

s i d e
H ヲァンヂェリン

「チュン チュン」

「チュン チュン」

アッ
-----!!!!

(あれ？私……あ、そうか昨日姉様に家族になってもらおうとして……？)

ん？私誰に抱きついて……？あ、姉様か。

あれ？なんかすべすべしてあったかい？

！？何で私裸に！
裸あ！！？

昨日はなにが………)

ポフツ！ // // // // // //

「~~~~~!!!!」 // // //

(き、きいきつきき、昨日の夜は姉様が男の子で、姉様がキスしてくれて

なんか気持ちよくなって、途中ですごく痛いけど幸せで、熱くて、

気持ちよくて……)

「あああつあああああつあ~~~~~! / / /

再起動中

「はあはあ……」

なんってこと!……姉様が実は男だったなんて……

何十年も一緒に暮らしてたのにまったく気がつかなかった。 o

r z

今までずっと一緒にいてずっと黙ってて、昨日私が姉様に好きって
言って……

告白!?

私姉様に告白して受け入れられて私からキスして、男って言われて

キスされて痛くて気持ちよくて気がついたら朝で……

しばらく悶々と思考の海に浸っていたが不意に隣から声が聞こえた。

「ん〜……………エヴァ〜……………んふ。」ニヤニヤ

(この変態姉は……………!!!)

隣で美少女の皮をかぶった変態が気持ちよさそうに眠っている。

(……………はあ〜 気持ちよさそうに眠って、

女装癖の変態で私から告白したとはいえ手を出してきて、どうしようもないけど

やさしくてあったかくて、頼りになって、一緒にいると幸せになれる姉?……………兄?)

「はあ〜……………」

(もう、だめなのかな、私……………姉様から離れるなんて考えられない、

昨日家族になっちゃったし、家族？恋人？結婚？婚約？なんだろう？
だけど・・・変態の男だってわかってても好きな気持ちじゃぜんぜん代
わらないし。）

「しょうがないっか・・・」

そう思いつつも私は頭を抱えた。

この日、私は大切なものを失い、同時に大切なものを得て、

開きたくなかった新しい悟りを開き、

新しい苦悩の日々が始まった・・・。

ゴッ……!

「いぢぢぢあじぢ……」

姉のあまりに気持ちよそそな寝顔に腹が立ったので殴っておいた。

神様から頼まれたお仕事。

その5（後書き）

本日はこの話で投稿終了。

神様から頼まれたお仕事。 その6

エヴァと暮らし始めてもうどれくらい経っただろうか……

そんなある日。

「最近エヴァの私に対する態度が酷いと思います。」

「そう？……とりあえず今は手が離せないから後にして、姉様。」

「……………グスン」

エヴァが最近冷たい、出会った当初はあんなに素直で可愛かったのに、

今ではこれだ……

どうしてこうなった……？

「姉様うるさい、今日は一緒に寝てあげるから少し静かにして。」

どうしてこうなった………

日に日にエヴァの態度（主に口調）が悪くなっていき、

どこで教育を間違えたのか悩む日々を送っていたが、とうとうチャ
チャゼロが完成した。

「姉様、前に姉様が言っていた人形タイプの従者が完成したよ。」

「お、やっと完成したんだ。もう動くの？」

「いや、これから起動の魔法を使うんだけど、姉様も一緒に見たい
でしょう？」

「みた〜い」

「ん、それじゃあ魔法陣の中心に人形を置いて……っ」と

そう言ってエヴァは人形を陣の中心に置き、魔法陣のチェックをしている。

「名前はもう決まってるの？」

「一応決まってるよ、チャチャゼロって言う名前にした。」

「へー、なんか変わってるね。」

「可愛いでしょ？」

「……………そうだね、可憐だね。」

わたしは目を逸らした。

「よし、問題なし、それじゃあ魔方陣を起動するよ。」

「いつでも来い！」

「姉様は関係ないでしょう。」

「……………エヴァ、私の事 愛してる？」

「すごく愛してますよ、もう姉様無しの世界は考えられないくらい。」

「

………棒読みなのに？

グスン

「じゃあ行きます。」

そういつとエヴァは魔方陣に魔力を流し込み

魔方陣が光りだす。

エヴァが呪文を詠唱し魔方陣の様子を確認、人形に宝石を埋め込み
自分の指を切り、宝石に血をたらす。

「エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルが命じる、
契約に基づき、目覚めよ！」

人形が一度ビクリと動いた後ゆっくりと立ち上がる。

「………オハヨウゴザイマス・マスター。」

ゴメイレイヲドウゾ。」

「うむ、まずは最初の命令だ、お手！」

ゴッ！

エヴァに思いっきり殴られた。

倒れた私の右手をチャチャゼロがそつと握る。

「ちがぁうう！！」

マスターは私だ！！」

「イエス・マイ マスター」

「まずは貴様の名前だ、貴様の名前は 『チャチャゼロ』 だ。」

「イエス・マスター、チャチャゼロ ヲ ワタシノ ナマエトシテ
ニンシキシマス。」

「それとあそこに転がっているのは、ソプラノ・マクダウエル、不
本意ながら私の姉だ。」

「イエス・アノジンブツヨ マスターノ フホンイナ アネト ニ
ンシキシマス。」

「ちよ、まってエヴァ！」

不本意な姉っでどういふこと！あんなに愛し合ったのに！！」

「・・・命令は第一を私とし、次に姉様だ、それ以外の命令は基本的に無視していい。」

「イエス・マスター」

無視・・・・・・・・出たよ無視・・・

クスン

こうして、私達に新しい家族が生まれた。

「ヨロシク オネガイシマス、セカンドマスター」

そつとチャチャゼロの頭を撫でた。

チャチャゼロは基本的な戦闘技術は組み込んであるとはいえ

まだ真つ白の状態だ、これから体を動かして知識としての戦闘技術を
経験にしなければならぬ。

そこで戦闘訓練の相手として、ついでに私も個人の戦闘技術を学ば
うと思ひ

チャチャゼロと一緒に訓練することになった。

私は打撃力は鍛える必要が無いので

回避や相手を押さえ込んだり無力化するための技術として

中国の八卦掌と太極拳を練習することにした。

午前中にチャチャゼロと型や素振りを練習、午後にチャチャゼロは短い木刀を使い

私と実践訓練、その間エヴァは闇の魔法と新たに別荘の研究を開始していた。

チャチャゼロは人形だから表情は無いが態度が素直で可愛い。

お手を命じればお手をしてくれるし、抱っこしても じっとしていてくれる。

エヴァは最近お姫様抱っこ以外だと暴れだすので困る。

向かい合ってコアヲみたいなの抱つことが出来なくなっていました。

チャチャゼロは教育を間違えないようにしよう と 心に固く誓った。

そうして数年過ごし、エヴァも闇の魔法と別荘ver1の開発に成功。

チャチャゼロと私も戦闘技術がかなり向上し、

私は、人間並みに体力を落としても 並みの傭兵くらいなら軽く対処できるようになった。

魔法の方はいまだに浮かぶことすら出来ない……

「エヴァ！ 旅に出よう！..!」

エヴァが始めて見る虫を見つめるような目で私を見る。

「はあ……姉様、どういことですか？」

「私達つてこの辺の村や町しか知らないじゃない？」

エヴァもチャチャゼロも安心できるくらい強くなったから

世界を回って新しい発見をしようと思うの！」

「……まあ、言いたいことはなんとなく分かりますが

いきなり旅に出よう、なんて言い出さないください。」

「でもっ！ でもお！」

「分かりましたから、行かないなんて言っていないでしょう。

でも行くにしてもまずは準備をしてからです。」

「ありがとう！ エヴァ！ 大好き」

「私は愛してますよ。」

何で棒読みなの？

エヴァは基本的にベットとか以外では愛してるとか言ってくれない。

少しさびしい……。

(い、いいいいいきなり大好きとか言われても、対応に困る！)
／／／／

ツンデレだった。

こうして準備を整えた私達は森の結界を強化して

家を別荘ver1に入れ、いつれ帰る森を荒らせれないようにした後、旅に出た。

南へ行き、海を渡り各地でおいしい物巡りをしたり、

認識阻害をかけて教会でお祈りして外で爆笑したり

ドレスを買って新しい服の参考にしたり、鉄砲を買って改造して遊んだり。

東の方へ行き砂漠にうんざりしたり、死海で死海文書を探してみたり。

さらに東へ行きシルクロードの長さにうんざりしたり、石油を掘り当てようとしたり

菩提樹を見に行ってカレーを食べたり、

パンダに熊の面影を見て殺そうとしたところをエヴァに殴って止められたり。

そうして東に東に進路をとり各地の言葉や文化を肌で感じつつ

エヴァの性格の変異に悩みながらも

ついに日本にやってきた。

「姉様は東に東に行きたがるけど、これ以上は流石に海が広いので無理だ、」

何か目的でもあったのか？」

「エヴァ……もう少し上品な口調に出来ませんか？」

姉さんは悲しいです。」

「……………誰のせいであんなになったと思ってるんだ？」

「何でもかんでも人のせいにするのはいけないと姉さんは思っよ。」

「きさまのせいだろうか!!」

旅する各地、各地で馬鹿ばっかやりおって!!

私が止めなかつたら今頃指名手配がかかって賞金首だ!!」

「ごめんね、エヴァ、姉さんが不甲斐ないばかりにお前に苦勞をかけて、ゴホッゴホッ」

「……………氷付けにして持ち運んだ方が疲れないだろうな。」

「やめて!!エヴァ、愛してるから!!」

私は泣いてエヴァに縋り付く。

「わかったから H A N A S E 、私も愛してるから！」

周りから奇異な目で見られたのでその場から移動した。

「それで姉様、この国にはなにがあるんだ？」

「いい質問です、姉さんの旅の目的はこの国に来ることだったんです。」

「初めて聞いたぞ、そうならそうと言えば、もっと早くこの国に来るのに。」

「旅をするならその経過も楽しまないと。」

「……なにか納得できない。」

「それでね、この国はエヴァも気に入ると思うんだけど、

もう少し東のほうに 『世界樹』 って言う木があってね、」

「おいちょっと待て！世界樹ってあの世界樹か！」

「そうだよ、昔はもっと眷属の木があったらしいけど

今は枯れちゃってるね、馬鹿な人達がいぢるから。」

「なぜ姉様がそんなことを知ってるんだ……?」

「だって私世界樹と管理契約結んでるもの。」

「……………は?」

「だから、世界樹とk「そうじゃなくて! 何であんな物と契約など結べるんだ!」

世界樹と言えば文字通り世界の樹の頂点に立つ木だぞ!」 いや、
だってえ!」

「だってじゃない!」

「まあ、あまり気にしないでよ。」

「気にするわ!」

「木だけに?」

ゴッ!

頭に拳が突き刺さる。

「はあはあ……もういい！」

姉様がどういつつもりかわからんが、まずはその木の元に向かうんだな？」

「はひ……そうです。」

「ならばさっさと行くぞ！」

私もその木には興味が出た！」

「途中の町とかも見て行ってね、エヴァはこの国の文化、気に入ると思うから。」

「……わかった、姉様がそういうならそうなんだろう。」

「チャチャゼロはもう少し我慢しててね、人目に付くから。」

「………ッケ」

なにがあった………？

京都

「ほらほらエヴァ、アレが慈照寺（銀閣寺）だよ、

この間できたんだって。」

「おお、すごいな！」

「……な、なあ姉様、アレ別荘に入れて持って帰ってもいいか？」

「だめに決まってるでしょ！」

「こういうのは現地に見に来るからいいんだよ。」

「確かにその通りだな！ さすが姉様だ！」

「これが日本の茶か！」

「なんと言っか、この静かであっさりできる雰囲気がいいな、和む。」

「あ、エヴァあ、お茶もういっぱい。」

「黙ってる！」

ゴッ!

エヴァが茶碗を投げつけてきた。

「和服はいいな、もう10着くらい買っていくか。」

「エヴァ、もう鞆いっぱいだつて。」

(テメーラ イイカゲンニシヤガレ!

モウ ミウゴキモ トレネージャーカ!)

「そんなもの別荘にでも放り込んでおけ!」

「中に、チャチャゼロが入ってるんだつて。」

「チャチャゼロとこの着物! 姉様はどちらが大切だというのだ!」
「?」

「.....この幼女メンドクセー!」

「ほら、エヴァ、もう行くよ」

「待ってくれ姉様!

もう少し、後一ヶ月だけ！」

「もう二ヶ月もいたからいいでしょう!!」

さっさと付いてこないといっていくわよ!!」

「姉様は世界樹と京都、どちらが大切なんだ!!」

「世界樹よ!!」

「なん…….…….だと…….…….??」

泣き喚くエヴァを引っ張ってようやく世界樹のある森にやってきた。

予断だが、私達は認識障害で30代の浪人に見えている。

泣き喚く30代の男を引っ張って歩く同じく30代の男、

かなりムサ苦しい事になっている。

ムサ苦しい浪人に誰も近づいて来ず

旅は順調に進んだ。

「この森の中に世界樹があるの、でも普通の人は

この森の中では方向感覚が狂って入っても別のところから森の外に出てくるのよ。」

「世界樹の魔力が自然に影響していると言っことか？」

「そう、でも私と一緒に入れれば大丈夫、逆に世界樹が自分の元まで

案内してくれるから。」

「……管理契約のおかげか。」

「さあさあ、行きましょう。」

今日中に世界樹の所に着いて家を建てないといけないんだから。」

「まあ、野宿は嫌だからな。」

「とにかく行くよ。」

私達は森に入り、奥に進んでいく。

道が無いはずの森なのにもかかわらず、なぜか草や木が

私達の進む方向から逸れて、道を明けているような感じがする。

そうして2時間くらい歩いたのだろうか？

見上げるとそこには視界一面を埋め尽くす樹皮、

樹齢何年だろうか、想像もつかないほど大きな木が聳え立っている。

「さて、世界樹の元に来たわけだけど、エヴァ感想はどう？」

「え・・・ああ、いや、ここまで大きいとは思わなかったな・・・
内包してる魔力量も想像がつかん。」

「ナンカ コノマリヨクニ ヨクフレテル キガスルゼ。」

「チャチャゼ口鋭い！」

「どづいつことだ？」

「この魔力、私が使ってる魔力と元が同じなんだよね。」

「……まさか、姉様が世界樹の魔力の元になってるなんて言わないだろうな？」

「そんなこと言わないよ。」

「マリヨクノシツハ ソックリダゼ？」

「そうだろうね、まあ、詳しい話はまた今度と言っことで、

まずは今夜泊まるための家を建てよう。」

「……わかった、姉様の事でどうこう言っても始まらないな。」

「とりあえず、ちょっと待っててね。」

（世界樹、こんにちわ。

このあたりで、私達の家が建てれそうな開けた場所はない？

あったら教えて。）

そう頭の中で問いかけると少し離れた場所の風景が

頭の中に流れ込む。

（ありがとう）

「エヴァ、場所が見つかったから行くわよ。」

「わかった、後、名前を伸ばして呼ぶな。」

世界樹から教えてもらった場所に行くよ

かなり開けてて、整地でもしたかのような平らな場所に出た。

「こんな場所が会ったのか・・・」

姉様、ここに来たことがあるのか？

「ないわよ、なぜ知ってるかは、企業秘密よ。」

「・・・納得がいかない。」

「まあいいじゃない、土地をならす必要も無いみたいね。」

エヴァ別荘から、仮設用の家をだして。」

「うむ、わかった。」

エヴァが別荘を置いて、魔方陣を新たに書き、仮設用の家を出した。

「とりあえず今日はここで休みましょう。」

明日私はちょっと大きい仕事があるから、エヴァとチャチャゼロはこの辺で

のんびりしておいて。」

「その仕事とやらはなんなんだ？」

手伝わなくてもいいのか？」

「大丈夫よ、私以外には出来ないし、誰かを倒すとかそういう荒事じゃないから。」

ちよつと大きくて強力な陣を敷くだけよ。」

「姉様がそういうなら私は明日は世界樹を見に行こう。」

「あ、待ってエヴァ。」

「なんだ、まずいのか？」

「世界樹を見るだけならいいけど、何も干渉するようなことはしないでね。」

魔法をかけたりとかしたらだめよ。」

「む、少し研究してみたいんだがだめなのか？」

「だめ。」

これだけはお姉ちゃんの言うことを聞いて、

いくらエヴァでも世界樹への干渉は認めるわけにはいかない。」

「むゝ・・・ほんの少しも？」

「ほんの少しも、もし約束を破ったら・・・で、したあげく、

そのまま気絶しても私は、を、るのをやめない!。」

「ワ、ワカリマシタ オネエサマ!

ワタシ、オネエサマノ イウコトナラ ナンデモ キキマスカラ!」

「EEEEEE ガクガク

「わかってくれてお姉ちゃん、嬉しいわ

さすが私の可愛いエヴァね。」

「ハイ!」 ガクガク

「じゃあ今日はもう寝ましよう、明日言つことを聞いて

お行儀良くしてくれてたらご褒美に、血をあげるから。」

「本当か!」

「本当よ。」

「よし、任せろ!

明日は、世界樹を見るだけでなにもしない!!」

「いい子ね

じゃあお休み。」

「ああ、お休みだ!」

「ナニヲ サレタラ アノゴシユジンガ アソコマデ スナオニナ
ルンダ……?」

翌日、私達は簡単に食事を済ませて、エヴァに見送られて世界樹の元へ向かった。

「さて、昨日は挨拶できなかったけど、おはよう、蟠桃。」

『……オハヨ ウゴザイ マス』

「じゃああなたと会話するのはあなたに負担だろうから、イメージを伝えるから」

それで今のワタシの状況と、これからやることを理解してね。」

そうして私は世界樹に額を着けて、記憶を蟠桃に送り込む。

・

・

・

「よしっと、これでわかったもらえたかしら？」

『リヨ ウカイ』

「じゃあ私はここを中心に3kmの守護結界と今あなたが森に干渉してる

認識阻害の結界を強化する補助結界をしくから。

両方ともあなたの通常放出してる魔力の一部を使って結界を維持するようにする。

緊急時にはあなたか私の認証で結界の魔力の出力を

上げたり下げたりできるようにしておくから、私のいない間は任意に対応してね。」

『リヨウカイ』

「じゃあ行って来るわね。」

そして私は、半日以上かけて世界樹の周辺、空中に何層もの陣を

立体で書き終わる頃には、辺り一面びっしりと魔方陣で埋め尽くされていた。

最後の仕上げに私以外世界樹への干渉を出来ないようにする

結界の陣を内包した剣を世界樹の根元に突き刺し仕上げとした。

この剣は私以外誰にも抜けない、抜こうと思ったらそれこそ

世界と同等の力を必要とするので事実上抜くことは不可能だろう。

これ以後は世界樹が生えているこの山を買い取って立ち入り禁止にすればいいが

今の時代でそれをやっても戦争中に権利が有耶無耶になりかねない、無駄かもしれないが一応近隣の領主にお金を積んで譲ってもらい近隣の村に面通しだけで済ませておく。

「ふい〜、つかれた〜。」

『オツ カレサマ デシタ』

「あいー、ありがとね。」

とりあえず、これでこの結界内には私かあなたの許可がないと誰も進入できないから。

私の仕事も一つ完了かな？」

周囲を見回し結界の動作を確認するが、どつやらつまく起動しているようだ。

「あ、あと昨日の私達が泊まったところに、家を建て直したいんだけどいい?」

『モンダ イアリ マセン』

「ん、じゃあ、今日は帰って寝るね。」

明日はエヴァと一緒に来るだろうからもうしばらく話せないと思うけど、

何か緊急の用事があったら私とつながってるパスで言ってきてね。」

『リヨ ウカイ』

今度来的时候は、ここに直接飛んでこれるように空間転移のアイテムを

設置できるように準備しておいた方がいいかも。

出来たら前の家とココと魔法世界に何箇所か個人用の転移ゲートを
用意したいな。

あとでエヴァと相談してみよう。

「姉様、帰ったか。」

「エヴァにゃんただいま。」

エヴァに抱きつくが、すぐに剥がされる。

「にゃん とかいうな、

さつきすごい大きな魔力の反応があったがアレはなんだ？」

「あれは、私のお仕事だよ。」

世界樹とその周辺に結界を敷いたんだよ。

疲れたから癒してー」

「あー はいはい、よくがんばりましたねー えらいえらい。」

「………妹が冷たい。」

「これくらいで十分だろう。」

「・・・チャチャゼロ癒してー」

「マカセロ オレサマガ コノナイフデ ラクニシテヤルゼ。」

チャチャゼロはナイフを取り出した。

「・・・どうしてこうなった。」

どこで家族の教育を間違えたんだ・・・？」

「なるべくしてなったんだろう。」

「ナニモ オカシクハナイゼ。」

私は絶望した！

翌日から数日かけて私達3人で新しい家を立てることにした。

世界樹の指示で切つていい木を選び使えそうな石を運び
材料を集めたところで空想具現化で家を組む。

「姉様は魔法が使えないとかゴネてたけど、その力で十分じゃないか？」

魔法どころの騒ぎじゃないだろう、反則過ぎるぞ。」

「これはこれで、使い勝手は悪いんだよ。」

「どこがだよ！」

家の材料集めただけで家が組みあがるような能力のどこが悪いんだ！」

「某錬金術でも言ってるでしょ、等価交換だよ。」

大きい現象を起こせばどこかで大きい影響が出て被害がでかねないんだ、

だから多用しちゃだめな力なんだ。」

「理解は出来るが、そんなもの大なり小なり皆同じだろう？」

「それでもだよ。」

まあ、気にしないで、私はエヴァの愛があればそれでいいんだから。

「

「……まあいい、はぐらかせておく、だから今日はやさしくしろ。」

「ん。」

エヴァの頭を撫でる。

新しい家が完成して、しばらく3人でのんびり暮らすことにした。

この言えはエヴァの要望で日本の武家屋敷を基本として建てられている。

居間はフローリングだが5部屋ある個室のうち2部屋が畳で

残りはフローリング、地下に2部屋倉庫と隠し部屋でエヴァの研究

室がある。

エヴァが思いのほか日本を気に入っているので

この家を拠点に日本観光（主に京都）をしながら、のんびりと過ごす。

「本で読んで気になったんだが、姉様は魔法世界について何か知ってるか？」

「ん〜、話で軽く聞いたことがあるくらいかな、

旅行してる最中に何箇所かゲートもあったね。」

「姉様なら行った事ありそうな感じだったのだがな、無いのか。」

「そりゃー私引きこもりだったし。」

「……自慢できるようなことじゃないぞ？」

「……で、なに？」

「エヴァ魔法世界に興味あるの？」

「興味はあるな、魔法世界って言うくらいだから

私が見たこと無いような魔法とかアイテムがありそうだからな。」

「そだね、私の知ってる限りじゃ、

魔法世界は人間以外にも獣人や妖精、悪魔なんかも住んでいたり

この世界と違って魔法がオープンなんで魔法使いもたくさんいるね。

魔法が隠匿されてない分 魔法技術が進んでいるから

エヴァの好きそうなアイテムもたくさんあるだろうね。」

「おお、本当か。面白そうなところだな。」

「あと各地で戦争って言うか、小競り合いが頻発してるので

治安はあまりよくないね。」

「マジカ！ スグニ マハウセカイニ イコウゼ！」

「チャチャゼロ・・・少し落ち着こうよ・・・」

「そうだぞ馬鹿人形、そんな面倒な戦闘に首なんか突っ込めるか！

そんなものより魔法のアイテムを探しに行く方が重要だろう。」

「……エヴァも落ち着こうよ。」

魔法世界に行くのはいいけど、準備は怠らない方がいいと思う、

さつきも行ったけど魔法の技術が進んでるから

もし私達の認識阻害が破られたら私達なんかすぐに襲われかねないよ。」

「なぜだ？ あそこの世界に行ったことも無いのに。」

「エヴァも十分知ってると思うけど

真祖の吸血鬼って言うのはそれだけで狙われる対象になるんだよ、危険なものとしても希少なものとしても。」

「まったく……世知辛いな、忌々しいことだ。」

「そこで襲われて返り討ちにするのはいいけど、下手に情報が漏れたら

あつという間に賞金首だよ。」

「それは御免被りたいな、面倒くさい。」

「そういつわけで、行くのはいいんだけど準備してから行い。」

「うむ、わかった。」

「メンドクサーケド ショウガナーナ。」

こうして私達の次の旅の目標は魔法世界になった。

ちょうどいいのでゲート技術と長距離転移魔法の技術を、

・・・エヴァに学んでもらうことにしよう。

クスン

神様から頼まれたお仕事。 その6（後書き）

今後はネギが学園に来る辺の話まで、
1日1話投稿する予定です。

神様から頼まれたお仕事。 その7

次の旅行の目的地を魔法世界と決め、

数ヶ月準備に費やし、魔法世界へ出発する当日。

「皆準備できた？」

「ああ、必要な物は持ったし抜かりは無い。

「ナアナア オヤツハ イクラマデ モツテッテイインダ？」

「おやつは300両までだよ。

バナナはおやつに入りません。」

「ソソナニ モツテイッテ イイノカ!？」

「………持って行ってもそんなに食べられないでしょ。」

「馬鹿なこと言っていないでさっさと行くぞ、

一番近くのゲートでも2週間はかかるんだぞ。

姉様も途中で馬鹿なことはやるなよ、今回は真っ直ぐゲートまで行

くからな。」

「……いつも寄り道するのはエヴァなのに。」

「何か言ったか？」

エヴァが断罪の剣を発動する。

「は、早く出発しよ!!」

(理不尽だよ……)

「……よし、行くぞ!」

こうして私達は出発、

エヴァが途中で寄り道したせいで予定より時間がかかったが、

3週間かけて魔法世界へのゲートまでたどり着いた。

「じゃあ捏造した書類と認識障害の確認をしたらゲートに入ろう。」

「うむ、……両方とも問題ないぞ。」

「それからエヴァ、ゲートの魔方陣や、移動時の魔法の発動状況確認しておいてね。」

「ん？ それは私も気になったから確認はするつもりだったがどうしてだ？」

「魔法世界でも調査はするけど、

このゲートを魔法世界に何箇所か設置して世界樹の私達の家と

繋ごうかと思ってるんだよ。」

「ゲートの設置は便利そうだからいいが、世界樹近隣の場所に設置はちょっと危険じゃないか？」

「少し離れた所に専用の施設を作って

安全策を何重にも取った上で設置する予定だから

問題は無いと思うんだけど、設置するときにもう一度確認はするよ。」

「わかった、その時には私も参加させる。面白そうだ。」

「エヴァはもちろん参加だよ。」

「………私一人じゃそもそも魔法使えないから設置できないし。」

「あゝ………」

「げ、ゲートが開くみたいだぞ、早く行こう！」

私はエヴァに引きずられながらゲートの魔方陣に入った。

こうして私達は魔法世界にたどり着いた。

魔法世界は彼らから言う 旧世界とは違い、

魔法の隠匿がされていないため、建造物などにも魔法が使用されている、

旧世界の物理法則を無視したような構造の建造物があったり、

いろんな場所で当たり前のように魔法が使われる場面に遭遇した。

各地の町で本屋や図書館のような場所を回り、本や情報を集めながら

ら観光。

エヴァも今まで見たことの無い本や、魔法のアイテムに目を光らせ道中で度々物取りに襲われるも、チャチャゼロが歓喜して撃退する。

魔法を使う物取りが多いためチャチャゼロも今まで以上に 戦闘を楽しんでる。

もうチャチャゼロの更生は手遅れだろう……。

数年かけて魔法世界の大きな町はあらかた回ったところで

エヴァがゲートや魔法の研究のために

少しゆっくり研究出来る場所が欲しいと言い出した。

私も魔法世界で新たな魔法の教育方法をいくつか参考にし

空を飛ぶ魔法を成功させるべく修行をしたかったので、落ち着ける土地を探すことにした。

そうして探しているうちに、ある三つの小国の隣接する場所で、魔物によって滅ぼされた城があると云う話を聞いた。

話によるとこの城は周辺の土地と一緒に名目上 三国で共同管理をしているが

どの国も各地での小競り合いや自国の治安維持のために

この城付近のの魔物を討伐する余裕が無く、

もてあましている状態だと言つことだ。

そこで私達はこの城を土地ごと買い取り、拠点にするべく活動を開始。

三国にそれぞれ交渉し、購入に必要な金額を提示、

それぞれがその土地をもてあましており、

自国の治安維持のためにも有効と判断したのか

購入費用は安く済む代わりに、魔物は自分達で処理する、

その際に税金を払わなくていいが魔物討伐や城の維持管理は実費で、

城と土地の領有権は私達に移譲、三国は不干渉の中立地帯とする、
と 言う内容で決まった。

かなり私達に都合のいい内容で決まったが、

どうも私達が魔物討伐に失敗し死ぬか、

すぐに根を上げて土地を返上する と思っているようだ。

その思惑を裏切るべく、私達は城に真正面から突入、

住み着いていた魔物をあっさり討伐し、城を奪取。

魔物自体は強くは無いが、瘴気が濃いので浄化に苦労した。

数日かけて簡易結界を敷き、その後数週間で城と周辺の土地を覆う
守護結界を張りなおした。

こうして私達は魔法世界の拠点を手に入れ、
しばらくは研究と修行の日々を送り始めた。

後で気がついたが、このお城、レーベンスシュルトと言っらしい。

そんなある日、

「エヴァにゃくん、ゲートの魔法の研究どう？」

「にゃんっていうな、

大体の目処はついたぞ、後は時間をかけてテストをして

実際の設置場所の検討、材料の確保をすれば運用できるようになる。

」

「さすがエヴァにゃん、私にできない事を平然とやってのけるッ

そこにシビれる！ あこがれるウ！」

「黙れっ！」

ゴッー

容赦の無い一撃が頭に突き刺さる。

「じゃあ、そろそろ魔法世界の設置場所の候補を考えておくよ。」

「ん、場所が決まったら教える。」

「……………ねえ、お姉ちゃんエヴァ分が最近不足してるの、

エヴァにゃんの愛が……………欲しいの!」

「わかったからもう少し静かにしろ、今本を読んでるんだ。」

「じゃあ、エヴァにゃんの愛をくれるの?」

「あげるから静かにしろ。」

「お姉ちゃんうれしい!」

そうやって私は座ってるエヴァの太ももに顔を埋めほお擦りをして

柔らかさを堪能していると チャチャゼロがやってきた。

「オイ ゴシユジン ナニカ ジョウモンノマエニ ヒトガキテル
ゼ。」

「今研究で忙しいから放っておけ。」

「今エヴァ分を補給してるの、後にして！」 スリスリ

「ワカッタ ソプラノガコイ」

チャチャゼロが私を引きずっていく。

「何で私なのよ！」

今エヴァ分を補給してるって言ったでしょ！」

「ソナノ 2ジカンマエニ ホキユウシタダロウ。」

「2時間も前の話を持ち出さないで！」

「ダメッテ ツイテコイ！」

城門につくと 確かに誰か来ていて私達の声が聞こえたのか

呼びかけてきた。

「すいませんが、お願いしたいことがあります！」

話だけでも聞きたいただきたいので、この門を開けていただけないでしょうか？」

何回かそういって、こちらの対応を待っているようだった。

「どうする？」

「ドウスルモ オマエノ シロナンダカラ スキニスリヤ イージヤネーカ。」

「ん、じゃあ、話だけでも聞きましょうか。」

私は門を少し開け顔だけ出す。

「えっと、なに御用でしょうか？」

「あの！？ このお城に住んでられる方ですか？」

「そうですよ、わざわざこんな所までいらして

どのような御用でしょうか？」

訪ねてきたのは、男女5人ほどの獣人？ 普通に人にも見えるがハーフだろうか？

そういった一見よくわからない、人達だった。

「お城の城主様が、土地の管理をしている方にお取次ぎをお願いしたいのですが？」

「私に話してもらってかまいませんよ、

一応この城と土地は 私と数人で管理を任されていますから。」

(用件がわからないから一応ごまかしておこうか。)

「そうなんですか！

それで今日はこのお城の周辺の土地について

お願いがあるので こうして伺ったわけなのですが。」

「どうぞ、続けてください。」

「はい、私達はある村で農業を生業にしているのですが

その村で人口が増えすぎて土地が足りなくなりまして、新しい土地を探していたのですが、

最近このお城が買われ 棲みついていた魔物が討伐され

人が住めるようになったと聞いたのです。

そこで、できたら私達に農地用の土地を貸していただきたいと思って

伺わせていただきました。」

「そういう理由ですか。

わかりましたが、土地を貸すとなると 私達も無料で貸すと言っわけには参りませんが、

その辺りはなにか用意はされているのですか？」

少し空気が重くなる。

この当時、魔法世界では獣人はいい扱いを受けていないはずだからそれほど蓄えがあると言っ感じじゃなさそうだ。

「……その、申し訳ないのですが、私達も旅の資金にも苦勞してしまっ

今すぐお支払いするようなお金はありません。

ですので、土地を貸していただければ、作物を売ってそこから

少しずつでもお支払いしたと……」

「そうですか。」

「あ、あのそれ以外にも私達をお城で下働きさせていただいたり、

力仕事には自信がありますのでお城の補修なんかも出来ると思いま
す！」

（さて、どうしたものか……

土地を貸すこと自体は無料でもいいけど私達の事が広まるのは避け
たいな。

見た感じいい人達みたいだから追い返すのも忍びないし、

お城の補修をやってもらえるのは ありがたいし……ふむ。

獣人やそのハーフなら異種族への差別意識も低そうだな、少し試し
てみようかな。）

「・・・わかりました。」

いくつか質問をさせていただきますがよろしいでしょうか？」

「は、はい！」

「あなた達は見たところ獣人かそのハーフ、

もしくは先祖から獣人などの血を引いていると見受けられますが
あつてますか？」

「はい、私はハーフで、後の4人もハーフと獣人です。」

「でわ、率直に申し上げますが、何らかの迫害や嫌がらせをされて
村から追い出された、と言うわけではありませんね？」

「・・・正直に言いますと、追い出されたわけではありませんが、
私達のいた村では人間種が最近増え 肩身が狭いのはありました。

ですが先ほど言った、人が増えて土地が足りなくなったのは本当で
す。」

(皆顔色が悪くなりましたね、と言うことは理解はあると見ていい
のか・・・)

「それで、この場所で土地を借りて農業をするのはあなた達5人だ

けですか？」

「もしよろしければ、私達の村に住んでいる知り合いも連れてきたいと思っています。」

もともと私達は新たな土地を探す役割で旅をしていましたので。」

「わかりました。」

では、いくつかの条件を飲んでいただければ、土地をお貸しします。」

5人から歓声が沸きあがる。

「本当ですか!？」

で、その条件とは。」

「後で強制証文で書面を作って皆さんにはそこにサインをしてもらいますが」

条件はこうです。

・私達は農地とあなたが住む場所、お城の空き部屋を貸すか、

家を建ててもらってかまいませんが、それを貸与する。

あなた達はその対価として、出来た作物のうち一部を私達に謙譲する。

これは私達が食べる分ですので量は多くはならないと思います。

それ以外に、城の補修を請け負う。

これは完全に直さなくても結構です。

出来る範囲でかまいません。

あと、お城の清掃や維持管理に少しお力を貸してください。

・私や、この城の城主、城の住人の情報を一切外に漏らさない。

あなた方ならある種族がその種族と言うだけで迫害を受けると言うことを

よくわかってらっしゃると思いますので、理由はわかりますよね
「？」

「はい。」

「主にはこの二つです、証文には明記しませんが、

当面の生活費用や補修、維持管理に使う経費、開墾などの費用

後引越しの費用も少し出しましょう。」

「そ、そこまでご面倒をかけては……」

「それは気にしないで結構です。」

あなた方はおいしい野菜を作って私達に食べさせてもらえればいいですから。」

「はい、がんばります！」

「「「「ありがとうございます（！）」」」」

「それでは今日は疲れたでしょう？」

部屋を用意しますのでそちらで休んでください。

なにぶん人手が足りないので食事や寝具の用意はあなた方でやってもらいますが

体を休めるには十分だと思いますので。」

「はい、お世話になります。」

「明日にでも証文にサインしてもらった後で多少のお金を渡します、全員で行ってもらっては困りますが、何人かで村の人を呼びに行ってください。」

残った人には部屋の準備や食料の買出しなどをしてもらいますから。

「なにからなにまでお世話になり、なんとお礼を言ったらいいか・

」
「そこは、今後の皆さんの働きで返してもらいますので結構ですよ。

「はい、がんばりますのでよろしくお願いします。

あ、今頃になって申し訳ないのですが、私 と申しますが、

差し支えなければあなたと城主様のお名前を教えてくださいたいのですが……」

「私の名前は ソプラノ と申します。

城主は女性の方で エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと申します。」

(フヒヒ 最近私に対する愛が足りないお仕置きだ！

城主にして面倒ごとを押し付けてやる！)

「ソプラノ様にエヴァンジェリン様ですね、これからよろしく願
いします。」

こうして新しい住人兼使用人と新鮮な野菜を手に入れる手段を手にした。

後日、かつてに城主をエヴァにしたことがばれて

酷いお仕置きと言う名のプレイを夜通し強要された。

魔法の修行をしつつ、たまに土地に侵入する魔物の退治、

農地も広がり住人も増え、ちょっととした村と言えるようになり

お城もかなり綺麗に維持管理され快適な暮らしを送っている。

この頃からエヴァと私が変な二つ名で呼ばれるようになった。

私は 『籠の黒百合』

エヴァは 『黒百合の主』

エヴァは魔法世界で暴れていないので賞金が付いたり、

二つ名は今まで無かったのだが、

いつしか城下の住人の間でこの名が呼ばれるようになった。

幾人かの証言を集めた結果、エヴァと私に同性愛疑惑が浮上しており、

私の髪の色、城主がエヴァ、住人との謁見のときに私がエヴァの従者のような

態度を取っている、などのことが原因で住人の妄想を掻き立てこのザマですよ！w

私はチャチャゼロと大爆笑したのだが、エヴァは大激怒！

w

その日酷いプレイを強要され、エヴァをなだめるのに

1週間ほどかかった。

一部その様子

「キサマが！

貴様が馬鹿なことをしたおかげで私が同性愛者だと！？」
リグリ
グ

「ごめんなさいい！

お姉ちゃん、ちょっと遊び心が沸いただけなのお！

あっ……だめえ！そこは感じすぎちゃう！」 / / /

私は怪しく縛られ仰向けにベットに固定された状態でエヴァに踏みつけられる。

「アホか！なにが遊び心だ！

姉様の遊び心なんかよりその辺の政治謀略の方がよっぽど可愛いわ！」

「可愛いなんて……あっ……ごめっ！ごめんなさい！」

「そもそも何で自分で城主だと名乗らなかった！

姉様が自分で名乗っていればこんなことにわ！

！」 グリグリ

「だってエヴァが最近冷たかったんだもん、

少し気を引こうとしただけなの！」

エヴァは私に馬乗りになり私を責め続ける。

「だからと言って城主はまだしも、何故私が同性愛者扱いを受けなければならぬのだ!!」

「んう!・・・ん!

うあ・・・くちゅ

ぷはっ

それはっ エヴァから 　ん!　そういうオーラでも出ていたんじゃ・・・

あっ・・・だめ　もう我慢できないッ!」　　／／／

「そんなもの出てない!!」

そもそもなぜ　姉様　は　!

人前に出るときあんなにしおらしい　んっ　態度を　取っているんだ!」　　／／／

「だって　その方がエヴァがそれっぽく　　じゃなくて、

エヴァの　尊　厳が保たれ　　ああ　　ると思っで・・・んあ!?

お願い!　もうだめえ　　んう・・・　　お・・・ねがい!」

／／／／

「それっぽくっ!?

最　初からそのつも　りだったのか!」　　#

「しゅめ　っんなさい!!--

もう(多分)しないからああ！
／／／／
もう
かせてよお！！」

「だめだ！

今日と言う 今日 徹底的に 教育してや っる！！」
／／／

(フフフツ ツフツツ ハハハハッ！ 可愛いぞ！

可愛いぞ姉様ああ！
ハアハア ！／／／／ これこそ正しい私達の立ち位置だ！！」

「そっ ……んな！」
lllllll

「フハハハハハッ！」

数年経ち、エヴァのゲート研究が完成し、

使用する魔力効率は悪いものの 個人レベルで設置できるものが完成した。

これによってエヴァと設置場所を検討した結果、一つは

この城の地下に隠し部屋を作りそこに設置し 周囲を強力な結界で隠匿する。

あと魔法世界に数箇所、私達以外が侵入したら自爆するよう罠を張って

ゲートを設置、私は一度旧世界に戻り、守護結界内でも

世界樹から距離がある場所に転移魔法を利用した出入り口の無い地下室を作り

そこにゲートを設置し、世界樹に管理を頼んだ。

世界樹の生えている土地の権利はやはり予想通り戦乱の中で有耶無耶になり

権利書を提示したものの土地の権利は認められなかった。

腹が立ったので当時の大名の城壁を軽く破壊してやった。

エヴァのお土産の和服とチャチャゼロの小太刀を買って魔法世界に帰った。

エヴァの長距離転移魔法の開発は移動した居場所に座標をマーカーを設置することで マーカーの場所なら転移できるようになった。

いわゆる某RPGの ーラだ。

私の飛行魔法の訓練は難航したが、ようやく浮かぶことが出来るようになった！

この調子なら後100年もあれば飛ぶことが出来るだろう。

これで私も、もう少しで魔法使いだ！

そう思い高笑いをしていたら、エヴァに母親が我が子を見るような

目で見つめられた。

「見るなあ・・・そんな目で私を見るなあ!!!」

エヴァのゲートの研究も終わり暇そうにしていたので

話し合いの結果、私の武器を作ってもらうことにした。

私は基本素手での戦闘か、拾った石や枝などを投げる戦い方をしていたが

あまりに格好がつかないので何か遠距離用の武器が欲しいと話した
結果

某カレー大好きシスターの黒鍵を作ってもらうことにした。

これは柄だけで持ち歩き、私が魔力をこめると刃が形成される。

普通に剣としても使えるが、投擲用に使うので投げても

ある程度時間が経ったら戻ってくるようにしてもらった。

その代わり何の魔的な付加能力はない、

ただの投げたら戻ってくる剣である。

とりあえず10本ほど作ってもらい、投げる練習を始めたが・・・

当たらない、ひたすら当たらない、でも投げる力だけはすごいので

練習場が壊れまくる、修理してくれる皆に悪いので

これは早急にうまくなる必要がある・・・。

結局まともに当たるようになるのに10年かかり

何本かまとめて投げて当たるようになるのに30年以上かかった・・・

その間 小銭に困った人は練習場近くの城壁に行けば

常に仕事があると言うことで一部に感謝された。

城下に住んでいる住民も何世代も変わり、人も増えて城の中も維持管理担当の

人が結構な数出入りするようになった。

この頃エヴァの正体が真祖の吸血鬼だとばれてはいたが、

税金が無く、労働を対価に土地が借りられ、魔物の脅威も無いということで

住人の評判も良く城主のエヴァや私、チャチャゼロはそれなりに感謝されていた。

そんな中、一部の少女がお礼と称して、夜伽に来る事件が何件か起き、

エヴァの神経をすり減らせていた。

エヴァは敵には容赦無いが味方には 基本 やさしい。

百合疑惑が起きているせいで 少女による夜伽なんて発想が起きた

のだが、

感謝から出ている行動なので頭ごなしに怒ることもできず

かといって同性愛者扱いされて面白いわけも無く、

そういう少女が現れるたびにエヴァはストレスで胃を痛め、

私とチャチャゼロは、腹を抱えて笑い、

翌日、私はエヴァにきついお仕置きを受けていた。

そうやってお城での生活を送っていたある日、

城下に住んでいるある人から不穏な話を聞いた。

話によると、ある新参の住民がもともとの領地を持っていた三国の内の

ある国の作戦に協力者として 契約をしたと言ったことだった。

その作戦を詳しく聞くと、数百年に渡り私達がこの土地を維持していたおかげで

この土地はそれなりに豊かになり。魔物の脅威も減った。

しかし三国は依然小規模の戦争を各地で起こしている状況で

内政の状態悪く 食料も不足していると言っ。

そこでこの土地を一気に攻め自国の領地にし 食料や資金の問題を解決しようという話のようだ。

他の2国も気がついていて、作戦決行にあわせて

他の国に取られないように同時期に軍事行動を起こしかねない状況だ。

まだ決行までに時間があるので何とかして欲しい、と言っ話だ。

その時点では早期に検討すると伝え一度帰ってもらい、

エヴァと相談することにした。

「……………度し難いな。」

「エヴァにゃん、どうする？」

今回の追い返すことは出来るけど何回も来られたり共同で攻められると 面倒くさいよ?」

「イイジャーネーカ ミナゴロシニ シテヤレバ」

「お前は黙ってる。」

はあ……………本当に面倒くさい。

あとにゃんって言うな。」

「どつしよつね、どつせ奴らに交渉なんか持ちかけたら

金と食料よこせ! って一方的に言われるんだから無駄だし。」

「いつそんな城くれてやるか?」

「それだったらお城は持っていこうよ、別荘ver2・5に放り込んで。」

「そつだな、住み慣れた城だからもったいないな。」

「住民の皆はどうしてもらおうか？」

「ほっとくのもな・・・少し金を渡して避難するように言い、それぞれ好きな所に

引っ越してもらおうか、どうせここは私達がいなくなったら魔物に占領されるだろう。」

「じゃあ、私達は旧世界にそろそろ帰ろうか？」

世界樹の所の家でまたのんびり暮らそう。」

「しかし、せつかくここまでやってきた土地をただでやるのは気に食わんな。」

「少し痛い目にあわせてやろうか？」 ニヤ

「姉様なにか面白い案でもあるのか？」 ニヤ

「奴らがここに攻めてきた時に結界の魔力と私達の魔力を使って暴走させて

爆破してやろうっぜ。」

「・・・過激だな。」

「だって私達が長年過ごしてきた土地を奪う侵略者だよ、

攻めてきた奴らをボコにするくらいは当然の権利だよ。」

「……………ふむ、そうになると下手したら賞金首になるがどうする？」

面倒くさい。」

「この計画に住人が協力してるらしいから、もうエヴァにやんの情報

流れてると思った方がいいよ、攻めて来る理由もどうせ

『真祖の吸血鬼に支配された住民を救出し、真祖を討伐する！』

とか、そんな所だろうね。」

「あゝ目に浮かぶ……………」

「ほんとしょうも無い。」

そついうわけだから住民の皆には明日から避難してもらって

私達は城を別荘に入れる準備と暴走魔力爆弾を作ろう。」

「オレニモ ナニカタノシイコト ヤラセロヨ。」

「お前は住民が避難するときの護衛だろう、襲ってくる奴は

皆殺していいぞ、もうこの土地から去るんだから多少派手にやってもかまわん。」

「ヨシ ハデニ ヤッテヤルゼ！」

「あんなこと言っているの？」

あいつ無茶苦茶やると思うよ。」

「……はやまったか？」

「もういないし……」

「……」

「……あぁ、そうだ。」

今回の敵の作戦とか経緯を証拠としてまとめて何かあった時

正当性を主張出来るように用意しようよ。」

「準備はいいが意味があるのか？」

「すぐには意味はないと思うけど数十年後とか数百年後には意味が出ると思うんだ。」

「……私のことか？」

「そう、今回は先手を打たれたからもつどつしようもないけど将来的にエヴァの正当性を主張出来るようにして起きたいんだ。」

たとえば、

今回の戦争は不当な理由によって攻め込まれたが

住民の生存を重視したエヴァはすぐさま避難を開始し、土地を明け渡して

戦争を回避しようとした。

だが、攻め込まれた際に一部の兵士が結界を解除するとき失敗、

結界に使用されていた魔力が暴走を起こし爆発。

エヴァの指示により住民を避難させていたおかげで住民には一人も

死傷者が出なかったが攻め込んだ軍は全滅。

これが記録として残ればエヴァは住民を救ったヒロイン。

攻め込んだ国は不当な理由で攻めたことにより神の罰が下った。

こう歴史が残ればエヴァの賞金も取り下げられるよ。」

「姉様……それは今考えたのか？」

「褒めてくれる？」

「不本意だがな……」

「じゃあ今夜ご褒美頂戴」

「はぁ・・・もう、好きにしろ、まったく。」

「わーい。」

こうして罨の準備は着々と進行した。

予想外だったのは、住民に避難を指示したときに初期の頃からいる一部の一族が

私達が引越す時に、自分達も連れて行って欲しいと言ったことだ。

何でも私達がいなかったら自分達の家系は途絶えていただろう事。

先祖からも、当時の話が伝わっており

なにがあっても仕え続けるよう家訓が残されているとか。

ありがたいことなので、引越しの準備を手伝ってもらい

人数も数十人なら世界樹の森周辺に土地を用意できそうなので、

旧世界に行くことや、もう2度と帰ってこられないだろうことを伝えて

もう一度良く考えてもらおうように言った。

結局、全員着いてくると言うことになったので、

見た目で獣人と判断の着く人には認識阻害の指輪を用意し、

旧世界の文化と言語を勉強してもらおう。

私とエヴァはゲートで旧世界に戻り、皆が住める土地と家の確保と

結界の効果範囲の調整など準備に追われ、

魔法世界に帰ってもさまざま準備明け暮れた。

私達が非難を開始したことに焦りを見せたのか、

当初予定していた時期より早く三国の軍が動き始めた。

私達は城の最も高い塔の上で監視をする。

「エヴァにゃん、準備のほうはどう？」

「避難も完了しているし他の準備も完了した。

後は城を別荘ver2.6（調整した）に収納して暴走魔力爆弾を
時限式で起動。

その後最後に私達がゲートを通って旧世界に行けば終わりだ。

あと、にゃんって言うな。」

「オレハ アバレラレナクテ ツマンネーゼ。」

「了解い。

なに？ チャチャゼロ暴れたいの？」

「アタリメーダロ！ グンタイ アイテナンテ モエルジャーネーカ。」

「ん、今回は我慢してよ。

一応映像記録残してるからチャチャゼロが戦闘してるところが写ると

後で証拠として使うときに、押しが弱くなるからまずいんだよ。

出来るだけ一方的に攻められた様子がいいからね。」

「シヨーガネーナ ムコウニツイタラ スコシアイテシロヨ。」

「お手柔らかにね。」

「おい、馬鹿やってないで移動しろ。

砂煙が見えたからもうすぐ来るぞ。」

私達は塔から飛び降り城の外に出てエヴァは城を別荘に入れる作業に入った。

ちなみに私は浮くだけは出来るので、

調節すれば塔から飛び降りても大丈夫なのだ。

エヴァによる別荘への城の格納作業が終わり、私は暴走魔力爆弾の起動に入る。

「しかしこの暴走魔力爆弾、ネーミングもそのまんまでアレだが、

威力大丈夫なのか？

ゲートを破壊されたらまたここに来るとき面倒だぞ。」

「それは任せてよ、ゲートの隠匿、守護結界は私が本気で陣を組んだから、

隕石が落ちてクレーターが出来てもしっかり残るよ。」

「なんだ、その非常識な結界は……。」

「……よし、暴走魔力爆弾起動完了！」

今から1時間経つか私以外の誰かがこれに干渉したら爆発するよ！

触るっ。」

「触らんー!!」

「じゃあ、旧世界にっ。」

「さっさとコッチに來い、転移魔法を使っぞ。」

「はい。」

私はエヴァに後ろから抱きついた。

「……………行くぞ。」 / / / /

こうして私達はゲートを通り旧世界に帰った。

後日、皆で他のゲートから魔法世界に行き、

作戦が成功したか確認しに行った所。

『先日の大規模爆発事件の続報です。』

『爆発事件がおきた現場は 国の直轄領内にある、

レーベンスシュルト城ですが、現場に調査隊が派遣されましたが

生存者は無く、瘴気が溢れており魔物が徘徊している状態となっております。』

『目撃者によれば、数十km離れた場所でも光が見えたと言う証言もあり、

その爆発の威力が窺い知れます。』

『この事件の実行犯についてはレーベンスシュルト城を当時占拠していた

真祖の吸血鬼、

「闇の福音」 「不死の魔法使い」 「人形遣い」 「黒百合の主」
などの

様々な二つ名を持つ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル
が

最重要容疑者として指名手配されており、

賞金は600万\$で生死を問わず となっております。』

『なお、確認できている所、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

には従者が2人確認されていますが、その情報は不明で、

「籠の黒百合」と「殺人人形」という二つ名が記録されているに留まっています。』

『犯人、及び従者の情報については最寄の捜査機関、もしくはt・・・』

「なぜだ！！！！？」

何故あんな二つ名が呼ばれるんだ!!

名前だけでいいじゃないか!?

全国放送でこんな不名誉な二つ名が呼ばれて……私はもう生きていけん……」

「エヴァにゃん、いいじゃない? 皆意味はわからないって。」

「ソーダゼ ゴシユジン キニスンナツテ。」

「これもすべて姉様が悪いんだろっが!!

どうしてくれるんだ!?

どう 責任 を 取ってくれるんだ!!?」

#

「エヴァにゃん、そんなに怒らないで、お姉ちゃん謝るから。」

「五月蠅い!

にゃんっていうな!!

……ああ、もう私は全国規模で同性愛者扱いなんだ……これではもう嫁にも行けん。」

「エヴァは私と結婚するって前に言ったじゃない?

私がちゃんとエヴァは通常の異性愛者って知ってるから、ね？」

「……そんな可愛く言ってもごまかされんぞ！」

ならば今すぐ私と本契約しろ！式場に行くぞ！ほらっ！この書類にサインしろ！」

「何で婚姻届なんて持つてるの……」

でも、エヴァ、私本契約も仮契約も7人できるんだけどいいの？」

「うるさあい！だまれっ！」

姉様は黙ってこれにサインして式場に行って本契約すればいいんだ
！！」 / / /

「でも私がお妾さんもらっても怒らない？」

「怒らないわけないだろう！」

そんなことはどうでもいい、正妻は私だ！

ほら、さっさと、サイン式場本契約！！」

鬼気迫る表情でエヴァが私に詰め寄る。

「わかったから落ち着いて？」

「こんな全国放送で辱めを受けて落ち着けるか！

いいから来い！！」

「あ、エヴァ、ちょ、おま・・・」

エヴァに引きずられて私は連行された・・・

パアアアアア・・・!!

「何で私が従者になってるんだあああ——!!」

「落ち着いて確認しないからだよ。」

「っ——!!」

ゴッ!!

愛が頭に突き刺さった。

エヴァと契約しました

神様から頼まれたお仕事。 その7（後書き）

7 話目投稿

神様から頼まれたお仕事。 その8

「と、言つことばで君達には殺し合いをしてもらいます。」

「ほう、じゃあ私が真つ先に貴様を殺してやるつ。」

「オレサマニモ テツダワセロヨ ヨジユジン。」

「嘘です、調子に乗りました。申しわけございませんでした。」

O r z

即 土下座、余裕です。

「馬鹿なことやってないで、さっさと姉様も手伝え。」

「今行きますから。」

今、私達は魔法世界から一緒に引越してきた人達の畑を耕す作業を手伝っています。

「まったく、なんで吸血鬼がこんなに陽が昇ってる中でこんな面倒くさい作業などせねばならんだ。」

「エヴァにゃんは座って指示出してるだけじゃん。」

「私は頭脳労働向きなんだよ。」

あと、にゃんていうな。」

「チャチャゼロ、こっちにも水持ってきて。」

「ジブンノ チデモ ナメテロヨ。」

「姉様も指示出してるだけじゃないか。」

「私は皆が手伝わせてくれないんだよ。」

「籠の黒百合さまに畑仕事なんかさせたらご先祖様に顔向けできね
よ。」

畑仕事をしている村の住人が禁句に触れた！

「貴様あ！ その名を呼ぶな！！」

「お〜こわい、こわい。」

城主様はおっかね〜な。」

「ハハハハッ！ W」

「キサマらわッ！ ……黙って作業している！！」
／／／

流石に引っ越してきて1年目は作物が出来てないので

こうして皆で一刻も早く出荷して生活の糧を得られるように作業して
ます。

畑と皆の家を建てる土地はすんなり交渉できたが、

世界樹が生えてる山が問題だった。

戦国時代が終わり、長いこと幕府が治める体制になっていたの
土地の売買の交渉をしようと思うと、いろんな部署を通さないとい
めだったので

とにかく時間はかかったが、何とか購入することは出来た。

購入の交渉より、本来の美少女の姿を見せて交渉に臨んだので

その後の大奥への勧誘をかわすのがかなり面倒だった。

途中で面倒くさくなってエヴァに魔法を使ってもらって追い返したが
もっと早くこうすればよかった。

私達についてきてくれた人達の農地も順調に作物が育ち、
たまに交代で魔法世界に行ってわ結婚相手を探したり

地元の人と結婚したりして、村の維持は、人員面では問題が無くな
った。

そうやってのんびり生活する中、幕末が近づき、脳内が永遠の厨二病の私は、

やはり新選組が見たくなり、エヴァとチャチャゼロを誘って 京都にしばらく家を借りた。

新選組が結成する前に京都へ入り、

エヴァが京都を満喫している間、私は一人 壬生村に行くことにした。

目的は試衛館に行き天然理心流を学ぶことだ。

私は黒鍵を作ってもらったのはいいが、剣術は使えない、

せいぜい力任せに切りつける位だ。

折角ある武器を使えないのはもったいないと思い

今なら試衛館に入っても局中法度で抜けなくなることは無いので

剣術を習うついでに有名な皆さんを見に行った。

私は認識障害で20台の男に見せているのだが、

身体能力を人並みに抑えているので、容赦なく打たれる。

とにかく痛い、実践向けの剣術のせいか、とにかく容赦ない。

倒れてもとどめばかりに打たれる、変な性癖に目覚めかける。

道場の中でも私は落ちこぼれたのだが

稽古が終わると皆急に優しくなっていて心配してくれるので

危うくギャップ萌えするところだった。

将来の副長と、出入りしてた斉藤さんに例の平突きを覚えてもらい

将来的に某漫画の牙突を通常の奴でいいので使えるようになりたい
と思った。

試衛館の皆が京都に行くそうなので、見送りをした。

落ちこぼれの私は当然の如く置いていかれた、

京都に来た際は遊びに来い、と誘われたので、

「その時は、よろしくお願いします。」とっておいた。

この人達、身内には（稽古の時以外）優しすぎて怖い。

ただし 身内以外には鬼のように怖くなる。

沖田さんは他流試合で笑いながら突く、とにかく突く、親の敵のよ
うに突く。

ちなみに、この世界の斉藤さんは牙突は使えませんでした。

私が見つくと牙突を再現して見せますから！

京都の家に帰ってきたらエヴァが合気道を覚えていた。

実験台にするのはやめて欲しかった。

徳川慶喜による大政奉還された少し後に

一度、新選組の屯所に挨拶に行った時、近藤さんから、

これから大きな戦争になり生きて帰れるかわからないが、

隊士の家族や戦争で負傷する隊士の事で力を借りれないか？

と、相談されたことがある。

隊士の中には試衛館時代の知り合いもいるし、その後屯所に遊びに行った時に

知り合った人もいるので、戦後の事はできるだけのこととはする。と言った所、

朝敵になる可能性もある中、協力してくれて感謝する旨告げられ、

協力に対し、何も返せるものが無いが、同じ道場の釜の飯を食べ、

隊士の為尽力してくれた事に対し、局長として誠の一字を預けるに相応しいと言われ、

近藤さんの持っている新選組の予備の羽織りを貰った。

戊辰戦争後、生き残った隊士と、その家族の世話をし、世間が落ち着いたら後、

近藤さんの処刑後、東本願寺に遺体が引き取られたと言う話を聞いたので

お参りに行き、頼まれていた隊士や家族の事などを報告し

以前貰った羽織りを大事にしまった。

明治維新が起き、国内が色々と騒がしいある日、

森の中で牙突の練習をしていた時、

畑の住民の人から「この森の所有者か、管理している人と話したい。」

と異人さんがやってきた、と、連絡があった。

森から出て村のほうに行くと、戦闘が出来る村の人が異人さんを囲んでいた。

「こんにちは、何かお話があるそうですが、どのようなご用件でしょうか？」

異人さんは、白人の男で 制御された魔力を感じるので魔法関係者は間違いない。

と、いうことは……

(世界樹に係る話かもしれないな。)

「こんにちは、失礼ですが あなたがこの森を管理している人でしょうか？」

意外そうな顔をした後、私を観察するような目を向けられる。

「ええ、そう思ってもらって結構ですよ。」

「これは失礼しました、ずいぶんとお若い上に女性の方で、

この国では少し珍しいので不愉快に思われたなら謝罪します。」

「いいえ、良く言われるので。」

「そうですか。」

でわ、話しに入る前に自己紹介を、私は . . . と申します。

失礼ですが お名前を聞いても？」

「私は『源 静』と申します。」

思いつきり偽名である。

「源さんですか、「静で結構ですよ。」 それでは静さんで。

今日ここに来たのは実はお願いがありました、

この森のことで少々お願いがありました。」

「先ほど連絡を受けたものからそう聞いています。

この森がどうかいたしましたか？」

「私、海外で樹木などの植物を研究しているものでして、先ほど、この森を調査しようとしたらここは私有地だそうで、許可の無いものは立ち入りを禁止しているとか？」

「ええ、この森は先祖から残された森でして、今は私が管理しておりますが

危険なので立ち入りを禁止しております。」

「そうなのですか、よろしかったら調査のために森に入る許可を頂きたいのですが？」

「それは出来ません、先ほど申しましたが、この森は慣れているものでないと、迷ってしまったって危険な場所なのです。」

「私はいくつもの森や山を歩き、持っている装備も方位の確認できる道具や

森での活動に必要な装備を揃えているのですが、それでもだめでしょうか？」

「申し訳ありませんが許可をすることは出来ません。」

「どうしても無理でしょうか？」

「重ねて申しますが、許可をすることは出来ません。」

目的を偽るような殿方には特に。」 ニヤリ

ゾクリ

s i d e ? ? ? ?

なんだこの少女は!?

私の調査の目的が把握されている?

と、言うことはこの少女も魔法関係者か……?

それにあの笑顔・・・アレを見た瞬間背筋に寒気が走ったが
すべて見透かされているような錯覚を覚える笑顔だ・・・。
見かけどおりの年とは思わない方がよさそうだ。

これは中途半端に嘘を重ねると世界樹を確認するどころか
森に入ることもし・・・あるいは命さえも・・・。

(ここは慎重に言葉を選ばないと大変なことになるな・・・)

side ソプラノ

「さて、お話はこれで終わりですよろしいですね？
それでは失礼いたします。」

そう言って私は帰ろうとする・・・振りをする。

「ちよ、すいません、待つてくださいー!!」

「まだ何か御用があるのですか？」

「先ほどは申し訳ありません！」

貴女がどこまでこちらのことを知っているか解らなかったので

あのように偽るような言い方になってしまいました

決してあなたを偽る気持ちがあったわけではありません!

「……あなたの気持ちがどうであれ、結果的に嘘について

森の中に入ろうとしたんですね？」

気持ちはどうであれ、動かない事実はあるのじゃないでしょうか？」

「そのことについては本当に申し訳ないと思っています。」

ですので もう少し話をするお時間をいただけないでしょうか？」

私は少し考えるような態度を取り、間を空ける。

「……ふう、殿方にそのように熱心に誘われては、嫌とは申せませんわね。」

「本当に申し訳ない、ですが何分重要で、私達にとっても一般の方に軽々と教えられるようなものではないので、

出来たら人払いをお願いできないでしょうか？」

「ここにいる人は皆さん関係者なのでかまいませんですよ。

こういった方が解りやすいでしょうか？」

魔法使いさん？」

男の緊張した表情がさらに強張る。

「いや、そういうことでしたら、こちらもかまいません。

女性に対しみだりに人払いをお願いするのも気が引けますので。」

「あなたが紳士でよかったですわ、

あまりに酷いようだったら帰ろうかと思いましたが。」

「……コホン　それで話をもどさせていただきますが、

率直に申し上げますと、この森にはある大きな木が生えていると思われず。」

「ええ、生えていますよ。」

世界樹に御用があるのかしら？」

「……っ、そこまでご存知でしたら話が早いです。

私のお願いはあなたが管理するこの森を譲っていただきたいと思っております。」

「まあ、私達が先祖代々守ってきたこの森を取り上げてしまおうと？」

「結果的にそうなってしまふので弁解はしません、

あなた方が望むならこのまま住んでいてもらって結構なのですが

ご存知のようにあの世界樹は我々、魔法関係者にとってかなり重要なものです。

そのため扱いにも細心の注意をしなければなりません

私達の組織でならそれが出来ます。

ですので、この森、世界樹を譲っていただきたい。」

「お話は、それで終わりでしょうか？」

「何か質問がありましたら、答えられるものはすべてお答えします。」

「そうですね……ではいくつか。」

今の話ですと、世界樹があなた方には重要で、あなた方は世界樹を使って

何かなさるうつとしているようですが、何をなさるうつとしているんですか？」

「……話が少し長くなりますがよろしいでしょうか？」

「でしたら、あちらの方で席を設けますからそちらでお話しましょう。」

そして私達は村の人に用意してもらった野点の席で話を続ける。

「足を崩してもらって結構ですよ。」

海外の方には正座は慣れてないでしょうから。」

「申し訳ありません、それではこの土地で何をしますが……」

彼らは西洋の魔法使いの組織で戦争や犯罪の防止、魔法の隠匿を

している組織で、今回極東で世界樹が発見されたのでそこを本拠地にして

極東支部を作り、魔法使いの育成や管理、隠匿

対外組織への交渉など様々なことをする拠点を作ろうと言う話だった。

（確か原作だと、ぶっちゃけメガロの犬じゃなかったっけ？

麻帆良の上部組織って確かMMの元老院だったような気がする。）

その拠点の防衛と世界樹の保護のために世界樹の魔力を使い

結界や施設の維持管理など様々なことに使おうということだ。

343

「お話はよくわかりました。

ちよつとすいませんが村の方々にお聞きしたいのですが、

確か最近この近隣の土地が次々と誰かに購入されていると言つ話ですが本当ですか？」

私が村の人に質問しようとする、それを遮って男が答える。

「それについては私がお答えします。

我々が働きかけていることです。」

「なるほど、あなた方でしたか。少し強引なんじゃないでしょうか？」

「確かに土地を買って回るのは少し強引だとは思いますが、

それぞれ納得した金額を提示していますし、

強引な手法は使わないように指示してあります。」

「指示してある と言うことは、あなたが直接買い付けているわけじゃないんですね？」

「……部下を使っていますが、何か問題でも？」

「部下の暴走が無いと……いいですね？」

「……」

「言いたいことはわかっただけですか？」

男が少し考え込むが、数秒で眉をひそめ答える。

「……あなたは、組織というものを信用していない。」

「聡明な方で、尊敬いたしますわ」

「……………答えをお聞きしても？」

「嫌ですわ、わかっていらっしやるくせに」。

「……………お断りしますわ。」

「どうしてもですか？」

「しつこい殿方は嫌いですわ。」

「……………残念です、静さんならこの後どうなるか、ご存知なのは？」

「……………女を力ずくなんて、……………いやらしい。」

少しからかい過ぎたのか、男は激高して話します。

「そこまで解っておられるなら何故です！」

そうなればあなただけではなく、この村の人にも被害が出るんですよ！

「お願いの次は脅迫ですか？」

そもそもあなた方、何か勘違いしていらっしやいませんか？」

「何がですか？」

「組織のやり方はどうであれ、

あなた自身が誠意を持って対応してください。だから申し上げますが、

あなた方が世界樹を利用しようとするのは不可能です。」

「……どういことですか？」

「あなた方は世界樹というものを解っていない、なにも解っていない。

大事なことなので2回言いました。」

「……あなたはなにを知っているんですか？」

「世界樹には意思があります。」

あなた方のように無理やり従わせようとしたら、すぐに枯れるか暴走してしまいますわ。」

「そんなこと……信じられません。」

「強情な殿方ですこと。」

「……ふう、しょうがないですね。今から起こる事は他言無用ですよ。」

「なにが起こるんですか？」

「あなたなら 今でも世界樹の魔力を感じていらっしやるはず、
注意して感じて御覧なさい。」

「なにが……」

「蟠桃、お願い。」

私がお願いすると世界樹が反応し、守護結界が強化され
放出される魔力が一気に高まる。

「なっ！？ こんな……馬鹿な……」

「もう良いわよ、蟠桃、ご苦労様。」

「いったいなにが……？ あの強力な結界と魔力は……」

「ご覧になったかしら？」

「あ……はい……」

「さて、あの結果、あなた方に抜けるかしら？」

「……………無理……………です。」

「そうですね、あれでも半分以下の強度ですよ。」

「なっ!?!……………あれで?」

「あなた方のように余計な事をしなくても、

ただ一言お願いすれば聞いてくれる、いい子なんですよ。」

「あなたは……………いつたい何者なんですか?」

「女性の秘密を知ろうなんて、いやらしい。」

「ゴホッ　　ゴホッ……………」

「さて、どうしましょうか?」

「買い上げることも出来ない、奪うことも出来ない。」

「……………後は協力してもらおうか……………」

「本当に聡明な方　　そういう方、私大好きですわ。」　　ニコ

「ゴホッ……………」　　///

(エヴァで数百年鍛えられた私のニコポ！ これに逆らえるものはほとんど無い！！)

「では、『本題』に入りましょうか？」

「はぁ……最初からこうなると解っていたんですね……」

「ここまでやられたらどうしようもありませんので、早速条件交渉に入りましょうか。」

「まず、そちらからどうぞ。」

「解りました、今の段階で私達の望むことは世界樹の魔力を貸してもらつこと、世界樹について研究させていただくこと、

あとはここに拠点を作るに当たって土地を貸していただくことです。」

「今でも周りのたくさんの方の土地を持っていらっしゃるのにまだ必要なのですか？」

「拠点を作るに当たって、最終的には世界樹を中心に ある程度の都市と呼べる規模の

商店や施設、民家そして育成のための学園を予定しています、

特にあなたの管理する森は中心部に近いですから。」

「そこまでの規模なんですか。」

「よほど世界樹の制御に自信があたりだったんですね。」

「私自身さっきのアレを見るまでは何とかなると思っていました．．．」

「あの魔力を攻撃に変えて、その都市とやらに向けてみたら面白そうですね。」

「．．．．．冗談でもやめてもらえませんか。」 111111

「あなたなら、これで解つていただけたらと思うて。」

「もう十分理解してますから。」

（彼女の意思を無視してここに拠点を築いても

一瞬で破壊することが出来ると言うことか．．．．）

「では、先ほどのそちらの条件ですけど、すべて飲めません。」

「．．．．妥協案はどういったものになりますか？」

「まず世界樹の魔力は防御のための結界の維持にのみ 一部お貸しします。」

世界樹の研究については無理です。土地については一部お貸しします。」

「研究は無理ですか・・・？」

「あなたはとうですか？」

いきなりわけのわからない人がやってきて、

「ご自分の体を好き放題いじり切り刻む、我慢できますか？」

「・・・無理ですね。」

「ですよ、私も嫌です。世界樹も当然嫌です。」

「解りました、本国に今の条件で打診して見ます。」

それでそちらの条件は？」

「こちらの条件は、

ここには私以外にも家族や私達を慕って着いて来てくれた人達がい
ます、

その人達に干渉しないこと。

世界樹に対しての調査行為などの干渉をしないこと。

指定した土地以外に建造物を立てたり無断で進入しないこと。

後は常識的な範囲で賃料を頂きたいですわ」

「あなたやご家族に干渉しないとは会話すらもだめ、と言っわけではないですよね？」

「もちろん常識的な範囲で会話や交流はいいですよ。」

この場合の干渉は敵対行為といわれるものです。

監視、洗脳、誘拐、許可無く記憶を探る魔法をかけるとか攻撃するなどの。」

「解りました、その内容で確認を取ってみます。」

「あなたもがんばってくださいね。」

うまくいかなければ お互い不幸になりますから。」

「こちらが一方的に蹂躪されて終わりのような気もしますが……」

「畑を荒らされたら食べるものに困ってしまいます。」

男は疲れ切ったような表情を浮かべた。

「はあく……解りました。」

今日はわざわざ時間をとっていただきありがとうございます。」

「いいえ、たいしたおもてなしも出来ません。」

「最後に一つお聞きしたいのですが・・・あなたは何者ですか？」

「私は静ですよ、蟠桃のお友達です。」

「・・・解りました、それでは失礼いたします。」

「道中お気をつけて。」

この後も幾度か交渉したが、結果的に当初の交渉で決めた内容で

契約が決まり、麻帆良学園の第一歩が始まった。

初代の学園長は最初に交渉に来た紳士に決まった。

「……この辺りも騒がしくなったな。」

「文明が進歩したらどうしても騒がしくなるよ。」

「なんだ、その物言い。」

「私はエヴァにゃんの姉だからね。」

「わけが解らん、あとにゃんっていうな。」

「ナー アイツラ キザンデモイイノカ？」

「今はやめてね。」

「アトデナライイノカ？」

「ん〜良くなるかもね、数十年、あるいはもっと後だけど。」

「イミネージャーネーカ。」

「姉様はあいつらが裏切ると？」

「今の学園長は大丈夫でしょう、でも次とか それ以降はわからないね。」

「じゃあ、私は次の次が裏切るほうに賭けよう。」

「お姉ちゃんはエヴァが癩癩を起こすほうに賭けよう。」

「わけが解らんわ!」

「ほら起こした。」

ゴッ!

エヴァの愛が痛い・・・

「オイ、ヒマダカラ イッチョ キリアオウゼ。」

「嫌だよ、暇なら私の牙突の練習に付き合ってよ。」

「オモシロソウダナ イーゼ。」

この後初代学園長が数十年に及ぶ任期を終え、二代目に変わり、

二代目も初代の意思を継ぎ、数十年無事に任期を勤め終えた。

そして三代目、数年は問題はなかったものの、

エヴァの予想通り、世界樹を調査、支配を目論み森に住むエヴァや私を弱体化させるため

学園都市を覆う結界を改造し、魔の属性を封じる効果を結界に乗せる。

これにより学園側の契約の破棄と見なし

世界樹の魔力供給をカット、村人達を世界樹の森に避難させ

守護結界を強化し一切の進入を不可能な状態にする。

学園側はすぐさま謝罪を申し入れてきたがこれを拒否、

その後関西呪術協会や外部の組織などから様々な攻撃を受け

麻帆良学園都市は甚大な被害を受ける。

死傷者あわせて千数百人、あとで知ったのだがその中に 相坂さよ

も含まれていた。

組織に対する報復措置で取った行動とは言え、当時一般生徒だったと思われる

彼女に被害が出たことには心が痛んだ。

後日、三代目学園長は更迭、四代目学園長が就任、その日に謝罪に現れるが拒否、

再三の謝罪、再契約の請願により再度契約交渉の席を迎える。

この席において三代目学園長が 忙殺 された報告を受けた。

学園側の契約内容に、私達の知る世界樹の情報公開が含まれていた。

これは三代目の暴走を経験に一部過激な魔法使いが己の功名のために世界樹に干渉することを抑えるため情報を公開し、それを抑えると
言う名目だったが、

この項目を読み上げた瞬間に離席し、その日の交渉は終了。

後日再度交渉の席を設ける旨連絡があったが、

学園側が自分達の都合で契約を一方的に破棄し、その上再交渉の席で

自分達に都合のいい項目を上げ、情報を公開しないこちらが悪いよ
うな物言いだ

項目を追加した事に対し先日の謝罪は形式のみで、

誠意はまったく無いものと判断する とし、

現在私が保有する土地の人間を即刻退去させる旨を通達した。

さらに後日、旧世界における組織の最高責任者が来日、

先日の今までの行為に対する謝罪と損害に対する賠償についての説
明、

新たな契約内容についても先日の世界樹に関する項目を削除し

以前と同じ契約内容で再契約を求めてきたが、

こちらから新たな項目を追加するよう要請。

新たな追加項目として、

・学園都市内での一切の行動自由権。

これは最悪学園都市内で誰を、何人殺害しても罪に問わない。

・ 契約を一方的に破棄した場合学園都市内の生物すべてを抹殺しても罪に問わない。

吹っかけ過ぎである。

これについて旧世界魔法使い組織の上層部や、メガロメセンブリア元老院で

議論が紛糾したが、新しい契約を飲まないと極東での活動や他組織への牽制が出来ず、

世界樹の魔力を利用した守護結界の恩恵の大きさ等から、

今後学園の運営を極東における最重要項目とし、

私達への対応には最新の注意を払い、場合によっては元老院が直接動くことになる。

そして再契約について 追加項目についての修正案を出してきた。

一つ目の項目について

行動の自由は認めるが殺人などの場合は

事前に理由や証拠を提示、本契約にかかわる内容や犯罪などの場合は許可。

緊急時においては後日説明をする。

二つ目の項目に付いては

契約違反時の攻撃に際し一般人を巻き込む場合は事前通告をする。

一般人の避難猶予を与える。

等項目を、追加調整することで新しい契約を結ぶ

よくもまあ、この内容で飲んだものだ。

この契約の後 四代目学園長より契約破棄の攻撃の項目について
力を示さずにいると一部の過激派から 出来るわけが無い、などと

軽く見られる可能性があるので何らかの戦力があるならば
確認させてもらえないかと頼まれた。

めんどくさいので目の前で光鷹翼を1枚展開し内包されている魔力
を計らせる。

その後、「この魔力を都市の中心で爆発でもさせたらどうなるでし
ょう?」

と、言ったら納得したようだ。

それ以降は学園側の動きも表面上おとなしくなり

四代目も無事任期を終え、五代目学園長が就任した。

五代目も無事任期終了、そして現れた六代目学園長、近衛 近右衛
門。

近右衛門は歴代の学園長と違い 何かと私達に干渉したがる。

敵対行動ではないので良いが油断ならないのは言うまでも無い。

一度 近右衛門と昔の話をしたことがある。

三代目の時に結界の魔力をカットし、いろんな組織から攻撃を受けた際

近右衛門も学園の魔法生徒として戦闘に参加していたが

そのときに何名がクラスメイトを亡くしたそうさ。

当初、供給魔力を切った私達を恨んだそうだが

色々と事実を知り、当時の三代目の愚考や他組織と関東の組織との繋がりなど

思うことがあり、学園長になることを考えたそうさ。

そんな話をしたり、エヴァと暮を打ったりと近右衛門とは

それなりに腹を探り合う関係を築いた。

ちなみに近右衛門にあった当初は『麻倉 美津里』と言つ偽名を名乗った。

面倒くさくなつて途中でやめたが、

エヴァから思いつきで偽名を名乗る癖を何とかするよう

肉体言語と調教プレイで O H A N A S H I された。

そうして原作の最初の大規模イベント

大 分 烈 戦 争 の 始 まり である。

神様から頼まれたお仕事。 その8（後書き）

8話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その9

大分烈戦争勃発！！

「と、言っても なにもしないんですよ。」

「いきなりわけのわからないこと言ってる暇があったら私の足を舐める。」

「いいよ〜。」

エヴァが足を舐める言つので、入念に舐め、しゃぶってやる。

ペロ ピチャ

「ひゃあっ！ あっ ばか！ 本当に舐める奴があるか！

！ / / / /

「なんだよう、そういうプレイがしたいのかと思ったのに。」

「朝っぱらからやるかー!!」

「……濡れた？」

ゴッー

今日もエヴァは元気です。

お茶を飲んで気を取り直す。

「この間学園長から聞いたんだけど、

魔法世界が何か大変なことになってるらしいけど、エヴァも話聞いた？」

「ああ、今まで小規模で散発的だったが、大規模な戦争に入ったらしいな。

暮を打つてるときにはやっていたぞ。」

「ナニカ オモシロソージャーカ アソビニイコウゼ！」

「遊びに行くのは勘弁して欲しいな。」

まだ私達の賞金は掛かったままなんだから下手に顔とかばれて

ここに賞金稼ぎやら勇者気取りが押しかけてきても困るから。」

「イイジャーネーカ ミナゴロシニ シテヤロウゼ。」

「私はそんな面倒くさいことは嫌だ。茶もゆっくり飲めんではないか。」

「トシヨリクセーナ。」

「この口か！ この口がそんなふざけたことを言うのか！！」

チャチャゼロの口が伸びて大変なことになる。

「チャチャゼロ、エヴァにゃんはババア、じゃ無いよ、ロリババアだよ。」

「何だそのどつちつかずで不名誉な呼び方は！」

あと、にゃんって言うな！」

「可愛らしいってことだよ。」

「ババアが入ってるのにそんなわけあるか！」

「まあ、それはいいとして」「よくないわっ！」 魔法世界が大変
なんだけど

「私はお仕事で これからちよくちよく魔法世界に行こうと思うから。」

「・・・また仕事か？ 姉様は何の仕事をしてるんだ？」

数百年の歴史を持つ 選ばれしニート じゃないのか？」

「そんなこといったら、エヴァもニートじゃん。」

「私は・・・・・・研究者だ！」

「今考えた・・・。」

「イマカンガエタナ・・・。」

ゴッ！

ゴッ！

エヴァの拳が2人に突き刺さる。

「そういつわけで、たまに出かけるからよろしくね。」

「私達は行かなくていいのか？」

「エヴァたちはここにいて、大丈夫だと思うけど学園の方も本国内でこの戦争状態だと

なにすらかわからない所あるから。」

「・・・危なくは無いだらうな？」

「戦闘行為とかは無いよ、ちょっと調べ」と、確認したいとがあるだけだから。」

「そうか・・・すぐに帰ってこい。」

「長くて1週間に一回は帰ってくるよ、エヴァ分を補給しに。」

私はエヴァをそっと抱きしめる。

「そんなわけのわからん成分など私には無い！」 / / /

「心配してくれてありがとうね。」

「ふんっ・・・あっ、」

「やめっ・・・うんっ！・・・」

砂糖の在庫不足が無い家族であった。

私は今魔法世界に来ている。

主な活動は、戦争の状況確認、裏で暗躍してる某組織の存在、行動確認、

メガロ元老院の動きの確認、紅き翼の活動状況の確認、造物主の戦力を削ぐ、

クルト・ゲーデルとの接触、交渉。

あと出来たら天ヶ崎 千草の両親のこと、これについては知識が役に立たないし

大戦がこの戦争のことなのか、

他の戦争のことなのかはつきりしないので情報が集まるかどうか
て所。

結構やることいっぱいである。

そしてなにより、空を飛ぶことである！

私は長年の研鑽により、ついに 飛行魔法 を会得した！

火が出せて（魔法学校で最初に習う魔法）、空が飛べる！

これはもう完全に魔法使いと名乗って問題ないだろう、

今後私の称号は「悠久のニート」から「魔法使い（W）」に変更さ
れることだろう。

当初、紅き翼に接触するかどうか迷って一度見に行ったが、通常の
戦闘で

全滅することはなさそうだったので情報を仕入れるだけに留める。

元老院に忍び込んで 適当に怪しそうな顔をしてる議員を捕まえて
エヴァ特性自白罪を投与して情報を吐かせた。

飲ませる時は一度意識を奪ってから投与するのだが、

「大気中に含まれてる酸素の比率は21%、

その酸素含有率を6%にまで低下させた気体を

ほんの一息吸ったところで人は意識を失う！」

そして、気を失ったところで自白罪を投与。 柳さんの教えは素晴らしい。

この薬は、投与後数分で効果が出てその後2時間分の記憶を失うのでその間に知りたい情報を聞き出す。

暗躍してる組織の情報やそれぞれの議員の後ろ暗い情報を聞き出し、

裏を取り、証拠として確保する。

私がこうして活動している間も戦争はどんどん進み 世界は廻る。

紅き翼にラカンが参加、グレートブリッジの戦い、ガトウとタカミチが参加

アリカ姫の接触、そして反逆者としての逃亡生活。

（いや）、元老院を調査中に行きなり紅き翼が来た時はびっくりしたよ。

とりあえず一連の流れを映像記録には取ったけど、これすごい情報になるんじゃない？

アーウェルンクスの顔もバッチリ写ってるヨ。）

エヴァ分補給に旧世界に戻ってきてる時に世界樹の発光現象が起こ

った。

前もって連絡は受けていたので、折角のこの魔力、無駄にするのも勿体無い。

世界樹に話、エヴァと協力して放出される魔力を凝縮、

世界樹の樹液として精製、加工して指輪を作った。

合計で8つ出来たが、私とエヴァで一つずつ。

残りは厳重に保管しておいた。

この指輪、正直私とエヴァには指輪として記念になるだけで意味は無いが、私達以外の場合だと最高クラスの魔法具に分類されると思う。

魔法触媒として最高クラスの効果を持ち、尚且つ指輪自体が膨大な魔力を

内包し、魔力を使っても世界樹の近くにいれば補充される。

魔法使い垂涎の一品だろう。

でも私達は、私自身がそれ以上の世界の魔力を使え、その本契約者であるエヴァも

魔力供給を受けることが出来るので意味は無い。

私との契約の劣化版みたいな感じである。

それでも私とエヴァにはなによりも大切な 愛の結晶！

まだ6つあるけど。

魔法世界に戻り情報収集を再開。

紅き翼の夜の迷宮への救出作戦、アリカ姫のクーデター、

そしてついに最重要局面、「墓守り人の宮殿」での決戦である。

私の仕事の一つである造者主の死亡、消滅確認。

このため 先行して墓守り人の宮殿に進入しアーウェルンクスがいる広間を

観察できる位置で待機する。

私の認識障害は、それだけでも強力ではれないと思うが

今は失敗は許されないのでさらに空想具現化で光の屈折を変え、空間を遮断し、

完全に知覚、認識されないようにする。

(あいつ異様に周囲を警戒してるけど私を探している？

単純に警戒心が強いのか、確信はないけど誰かいると思っているのか。

うかつなことはできないな、背中に「コーヒーが主食」と書いた紙を

貼ってやるつもりだったのに・・・)

そうしてナギ達がやってきて口上を述べ戦闘開始。

(あいつらマジチート、酷い、こんなの普通の魔法使いとかが見たら

自信なくして廃業するに違いない。)

そうしてアーウェルンクスも倒され、ついに造物主の登場、この時ばかりは真面目に観察する。

最悪の状況だと私が倒さねばならないので、できるだけ誰にも知覚されずに瞬殺が好ましい。

戦闘が開始されナギ以外が戦闘不可能状態になる。

展開を知っているとはいえ不安になるが冷静に観察、

ついにナギが造物主を倒し黄昏の姫御子ことアスナちゃんを確保！

（っていうか？ アレ、ゼクトだよな？ アレが造物主だったのか？

あの消え方って死んでないフラグ？）

そして墓守り人の宮殿が崩壊を始めるが、ここからが私の今回の目的！

造物主の持つ杖、「造物主の掟」の確保。

ナギ達が姿を消した後急いで杖を確保するが、

3種の内の2つ目 Grand Master Key だと思われる。

確か7本あるとか言う話なので

ここで1本くらい貰っても問題ないだろう。

造物主達が躍起になって探しそうだが封印処置をして

私の本気結界で世界樹の結界内に3重で封印しておけば見つから無いだろう。

そういうわけで今回の私のミッションは終了。

あの造物主が本物かどうか分からないが、あの消え方からして

まだ出てくるはずなので今の内から徐々に力を削いで置こう。

こうして大分烈戦争は終結、紅き翼が英雄となり、アリカ姫が投獄される。

次に魔法世界での目的一つ、クルトとの接触を開始する。

「こんにちわ、小さな英雄さん。」

「……どなたですか？」

それに僕は英雄なんかじゃありません。」

軽い言葉のジャブを入れてみたがアリカ姫の一件がかなり効いてるのか、

年齢に相応しくない威圧感のある表情に変わる。

「そんな顔しないで？ お姉さん怖いわ。」

「……すみません……それで僕になんの用ですか？」

私を警戒し、刀を抜きこそしないもののいつでも戦闘態勢に入れるようにしている。

「突然ごめんなさいね、今日はあなたにお願いがあつて着ましたの。」

「僕のような子供にお願いですか？」

「どのようなことでしょうか？」

「……あなたは今回の戦争で大切なことを学んだはず、突出した個人戦力も組織の前では脆いと言うことを。」

「……っ！」

「あなたがこれから目指す所に行くために有効な情報をあげる、その代わりに私のお願いを聞いてくださる？」

（よし、食いついた。）

「あなたは……なにを知っているのですか。」

「私になにを知っているかは後で話すとして、

今は私のお願いを聞いてくれないかしら？」

「願いを聞くかどうかは別として話は聞きます……。」

「ありがとう　それで、私のお願いは　無実の罪で賞金を賭けられた　ある少女の

賞金を取り下げてもらおうことよ。」

「何故僕なんですか？

僕のような子供にそんなことは出来ませんよ。」

「今は無理でしょうね、でもあなたはこれからそれが出来る地位に立つ、

その時に取り下げてくださいわい。」

「……わかりました、次の話に移りましょう、

僕にくれる情報とはどういう情報ですか？」

「一つはさきほど話した少女の無実の証拠。

一つは元老院議員の不正の記録、もう一つは今回の戦争の裏の記録。」

「……っ！　あなたは今回の戦争の裏を知っているのですか？

「私の持つてる記録があればアリカ姫の無実を晴らす大きなカードになるでしょうね。」

「ならっ！ それがあればすぐにでも姫の無実の証明が出来るのですか！？」

「それは無理ね。」

「何故！ 姫はあの状況で最善を尽くしたのに！」

「姫様個人がいくら高潔で最善を尽くしたとしても周りが許さない、組織が許さない、

それによって富を得るものが彼女を、状況を利用する、そういうものでしょう？」

「……つく！ クソツ！！」

「それがわかったから紅き翼を離れたのでしょうか？」

「……」

「さて、この情報があればあなたは政治の世界で力を持つことが出来るでしょう、

そしてその立場でなら、少女の無実も、アリカ姫の無実もいずれ証明することができる。」

「……確かにその通りです、今の僕がどれだけ真実を語っても誰も耳を貸さない。」

でも、組織の、政治の世界で力を持てば……！！」

「あなたの声を皆が聞くでしょうね。」

クルトの目が力を取り戻し、表情も陰はあるものの先ほどよりはすっきりとしている。

「わかりました、情報を確認後、問題なければあなたの頼みを聞きます。」

「しっかりしてるわね、でもこれからはそれくらいしっかりしていないとね。」

では、これがその情報よ。」

クルトは端末や書類を受け取り情報を確認していく。

.....

「なっ！.....真祖の吸血鬼、闇の福音が.....」

それにこの元老院の不正、.....ここまで腐っているのか！

.....あなたは.....議長の襲撃現場も、最後の決戦の時も、

その場にいたんですか……?」

「その答えに答えることが、今必要な事なのかしら?」

「これほどの情報と力があれば、もっと……」

「知ってるでしょう?」

個人之力と組織之力、それぞれできることが違うのよ。」

「……そうですね、さっきもそれを思い知ったばかりなのに……」

わかりました、僕が上に立つたらこの情報を元に闇の福音の無実を証明します。」

「お願いね」

「はい。」

この数年後、エヴァにかけられた賞金を取り下げられた。

当時の城下の住人やその子孫から語り継がれ続けた話を裏付ける記録が次々と出て、

クルトの発言力も有り、

今は無くなった、小国の歴史書を疑問視する声などが上がり、

歴史書の修正作業が一部の学者により進められた。

それでも真祖の吸血鬼ということ、取り下げられたとはいえ賞金首であったこと、

魔法世界において一時は恐怖の代名詞ともなっていたこともあって

エヴァが英雄視されることは無く、

あい変わらず 絶大な力を持つ真祖として危険視されていた。

「エヴァにゃんの賞金取り下げられてよかったねー。」

「ああ、それに関しては感謝している。」

あと にゃんって言うな。」

「これで堂々と古都観光とかできるし学園のほうにも普通に顔出し出来るよ。」

「観光に行けるのはいいんだが、この学園で私が堂々と歩くものなら」

馬鹿が突っかかってきて五月蠅くてかなわん。

いい加減消滅させるか引っ越さないか？」

「まあまあ、昔みたいにいきなり襲われただけ良しとしようよ。」

「まだ襲われた方が楽でいい、襲ってくる奴を殺せば済むからな。」

「エヴァって、チャチャゼロに似てきたよね……」

「なっ!?! どういうことだっ!」

いくら姉様でも言っていていいことと悪いことがあるぞ!?!」

「ホメラレテンジャ ネーノ力？」

「お前……自分の性格がこの世で最高にすばらしいとも思っているのか？」

「サイコウジャーカ。」

「……………」

「……………」

「ナ、ナンダヨ？」

「まったくあの馬鹿共のせいでこっちはいい迷惑だ。」

「紅き翼だとかいって暴れまわったおかげで、変に英雄にあこがれる馬鹿が増える一方だ。」

「まあ、アレはアレで紅い翼がどうこうよりも、

それを利用しようとしてる奴らが調子に乗ってるからね。」

(オレノ セイカクツテ モンダイアルノカ……???)

「あゝ、ストレスがたまってたかなわん。奈良に行って大仏見たい。」

「もう少し落ち着いたら行こうよ。」

私も新撰組の屯所があった所や 東本願寺に行きたいし。」

「姉様はあいつらと仲がよかったからなー、あの技は完成したのか？

牙突とかいう。」

「一応並みの相手だったら通用するくらいにはなったよ。」

「ほう」

「でも本気でやると音速の壁突破して剣とか突きとか関係なくなるから困る。」

「何だそれ。」

「音速超えて人間に突撃したらトマトみたいなものだよ。」

「もう、ただの体当たりでいいんじゃないか……」

「だめだよ、斉藤さんに捧げる技なんだからちゃんとした技じゃないと。」

「まあ、好きにしてくれ……。」

(オレノセカイツクッテ……アレ?……ベツニオカシクハ……???)

奈良にやってきました。

「待ちに待った時が来たのだ。

多くの英霊が無駄死にで無かった事の 証の為に！」

観光客で大仏殿は人がいっぱいだ。

「このような人ゴミなど！」

エヴァが一人暴走して大仏殿に駆け込む。

「再び京の理想を掲げる為に！」

仏の道成就の為に！

大仏よ！私は帰って来た！！」

「保護者の方ですか？

お子さんはちゃんと手を繋いで はぐれないようにしてください。

「本当にすいません。ウチの妹が。」

「H A ・ N A ・ S E 姉様！ まだ柱の穴をくぐってない！！」

「ほら、エヴァちゃん行くわよ、

皆さんに迷惑だから静かにしなさい！！」

「はあなあせえー！！」

宿に帰って本日の反省会。

「エヴァにゃんもいい加減にしなさいよ、

古都が好きなのはわかるけど、あんなにはしゃぎまわったら迷惑でしよう。」

「……いや、わかってはいるんだが

つい、東大寺に着いたらテンションが上がって……。」

「まだ何日もいるんだからゆっくり回り回れるでしょう、

明日からはもう少し自重してよね。」

「う、うむ、わかった。」

明日からはちゃんと大和撫子のように慎ましく振舞うから……」

「ほら、じゃあ今日はもうお風呂に入ってらっしゃい。」

明日は早いんだから。」

「わかった、わかったんだが……その子供をあやすような物言いは何とかならんか？」

「今日のエヴァにゃんを見たらしょうがないでしょう。」

「つく……」 / / /

「さっさとお風呂に入ってらっしゃい、今日は一緒に寝てあげるから。」

「……チツ……まったく……ブツブツ。」

就寝後深夜。

関西呪術協会の管理する湖でリョウウメン スクナノカミが復活している頃。

「……ん……姉様あ、もうだめえ、そこはちがっ……」

・。 ムニヤムニヤ

「・・・エヴァ、もう許してえ・・・お願い、イかせ
てえ・・・ ムニヤムニヤ」

寝ていた。

数年後、

麻帆良学園敷地内、某日

side ????

「はあ〜……………やっぺらんねえよ。」

私はベンチで一人座り込む。

大体なんなんだココは、映画の世界じゃあるまいし、

何で大学でロボットが暴れてるんだよ。

陸上選手並に走り回る小学生とかなんだよ。

なんで忍者が学校に通ってるんだよ。

他にも言い出したらきりがない……………

（あ〜もうだめ、頭がおかしくなりそうだ……………

みんな何事もなかったようにしてるし……………私がおかしいのか？）

「お嬢ちゃん、こんな所でそんな顔してどうしたの？」

「えっ？」

なに、この綺麗なお姉さん・・・ / /

side ソプラノ

「なにか疲れた顔してるけど、どうしたの？」

「あ、いえ・・・何でも・・・ないです。」

「そう？」

ならいいけど、もう少ししたら暗くなるから 日が沈む前に帰った
方がいいわよ？」

「は、はい、ありがとうございます。」

夕日の沈む中、二人でベンチに並んで座る。

「私こんな髪してるけどソプラノって名前なんだ、お嬢ちゃんのお名前聞いていいかな？」

「あ……私は、長谷川、千雨……です。」

（どこかで見覚えがあるような顔してると思ったら、ちうたんか。

ということはこの頃から認識障害は掛かってないみたいね。

難儀なこと……）

「なにか困ったことでもあるの？」

落し物でもした？」

「いえ、そういうのじゃないんです……。」

「お友達と喧嘩でもした？」

お話 聞いてあげられるようなことかな？」

「大丈夫です、……ありがとうございます。」

そういうと千雨ちゃんは俯いてなにも言わなくなる。

15分くらいか、そうして二人でゆっくり夕日を眺めたりしていると不意に大きい爆音が聞こえてきた。

「キヤツ！・・・なに？」

振り向くと向こうから金属の塊のような、ロボットの破片が勢い良く転がってくる。

「・・・え・・・えええ！？」

破片が千雨ちゃんにぶつかりそうになる前に私が千雨ちゃんを抱えて横の芝生に転がり込む。

何とか無事に回避して、二人で起き上がり

千雨ちゃんに怪我がないか調べていると破片が転がってきた方から大学生らしき数人が走ってきた。

「すみませ〜ん、大丈夫でしたか？」

その内の一人が私達の様子を見に来た。

「ええ、私達二人とも怪我はせずに済んだわ。」

「すみません、ロボットの実験中に暴走して爆発してしまつて。」

苦笑しながらそう語る学生は一般的には異常な態度だろう。

しかし、この麻帆良では正常な態度だ。

「ロボットが爆発つて、何でこんな所でそんな危ない実験をしてるんですか！」

この子に怪我があつたらどうするんです!？」

あんなものが当たれば下手したら怪我じゃすみませんよ!」

「すみません、いつもは爆発なんてしないんですが、なぜか今回は・
・・」

謝罪はするものの 起きた状況に対しては謝罪が軽い。

回りもそれほど大きな事件が起こつたような感じではなく、

よくあることのような態度ですぐにどこかへ移動していった。

そうして大学生といくつか問答を繰り返して最後に頭を下げて帰っていった。

千雨ちゃんと私は二人残って芝生に腰を下ろした。

「何であいつら・・・あんな爆発が起こったのに・・・。」

「千雨ちゃん大丈夫だった？　怖くなかった？」

「あ、大丈夫です、ありがとございました。」

「助けてもらって。」

「そう、怪我がなくてよかった。」

「だけどアイツらなんであんなに軽いんですか・・・私達死にかけたのに。」

「そつだよね、まるでこんなこと当たり前のようにしてたね。」

「逆に起こられてびっくりしていたような。」

「おかしいよ！　アイツらも他の皆も！」

あんなことがあったのに誰も警察に言わないし、救急車を呼ぼうともしない！

クラスの皆もそうだ、陸上の選手より足が速い奴がいたり屋根まで飛び上がったり、

おまけに忍者みたいな奴がいるし！

「……もうおかしなことばかりだ。」

そつと千雨ちゃんの頭を撫でる。

「お姉さんが聞いてあげるから、言いたいこと言ってみなさい、ね？」

「あ……はい……」

そうして千雨ちゃんは今までであったことを少しずつ話し始めた。

クラスで感じた違和感や異常な出来事、

やがて自分の方がおかしんじゃないかと悩み始めたことを。

「そつか、でも千雨ちゃんはおかしくなっていないから安心して、

私は千雨ちゃんがおかしいなんて思っていないから。」

「はい、ありがとうございます。」「ございます。」

話したら少しだけ すっきりしました。」

「そっか・・・また、何かあったらお姉さんが聞いてあげるから。」

「はい・・・」

「今日はもう遅いから帰りなさい、途中まで送っていくから。」

「すぐそこだから大丈夫です。」

「そう・・・そうだ、明日またココで会いましょうか？」

学校が終わった夕方にでも。」

「・・・いいんですか？」

「千雨ちゃんもまだ聞いて欲しいことあるでしょう？」

私も千雨ちゃんとお話するの楽しいから。」

「ありがとうございます。」「／／／

「じゃあ、また明日ね。」

「はい、また 明日・・・。」

それから私と千雨ちゃんは頻繁に会ってはいろんな話をした。

これでストレスが解消され何とか日常を受け入れられれば、と思ったが

彼女の悩みは深刻で、クラスも学園長によって選ばれたクラスのため

一部のクラスメイトの異常性から 彼女の悩みが晴れることは無く、

学園長に連絡しようか迷ったが、連絡したところで

問答無用で記憶を操作され認識阻害の魔法をかけて監視されるのがオチなので

学園長には連絡しなかった。

私はエヴァと相談し千雨ちゃんに魔法のことを教え、

その後どうするかを自分で選ばせることにした。

「ソプラノ先輩、わざわざ家に呼んでもらってありがとうございます。いま

今日はなにか大事な話があるとか？」

「今日はちょっと時間が掛かるし大事な話だから家に来てもらったの。」

後この子は血は繋がって無いけど私の妹でエヴァンジェリンって言うの。」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。」

「長谷川 千雨です。」

エヴァと千雨が挨拶している間にお茶を用意する。

「さて、今日は千雨にとっては きっとためになる話だと思うんだけど」

早速話を始めましょうか。」

「はい、どんな話なんですか？」

「……千雨がこの学園で感じている違和感の話よ。」

一瞬で千雨の表情がこわばる。

「先輩……は、なにか知ってるんですか？」

「知ってるわ。」

「それを、教えてくれるんですね。」

「本当は教えるつもりはなかったの、

でも、千雨が苦しそうにしてるのが放って置けなくてね。

私と話すことで落ち着けばいいと思ったんだけど……だめだったようだし。」

「……最初に私と会った時は、狙っていたんですか？」

「あれは本当に偶然、あそこで早めに千雨に会えて良かったと思ってる。」

「それじゃあ、違和感について教えてください。」

それから私は魔法が存在すること、魔法使いの組織があり

この学園を運営していること、魔法は基本的に隠匿されていること、

魔法が発覚した時の処置、この学園には結界が敷いてあり

その効果で異常な出来事もある程度看過されてしまうことなどを話

した。

「そんな・・・先輩までそんな冗談みたいなのを。」 1111

「冗談でも嘘でもないのよ、そうね実際自分の目で見てもらった方がわかるでしょう。」

エヴァにゃん、お願い。」

「・・・にゃんっていうな」

そうしてエヴァいくつかの魔法を見せる、

火をつけたり、氷を生んだり、空に浮いたり・・・・・・本当なら私がやりたかった・・・

「実際自分の目で見てどうだったかしら？」

「・・・実際に見ても、いまだに信じられな・・・ません。」

「そうでしょうね、今まで知っていた事とあまりに違いすぎて混乱すると思うけど、こう考えてみて。」

今ココには酸素があるけど干雨は実際に見たことある？」

「……ありません。」

「じゃあ月にロケットが飛んで行って人間が月に立ったけど

千雨は実際に見たことがある？月に行ったことがある？」

「……どっちないです。」

「そうね、千雨は学校で今までいろんなことを勉強して、

それが 有る と教えられたけど

実際に見て触って感じたものはそれほど多くないんじゃない？」

そう考えると魔法だって千雨が今まで見ることが無く、教わることも無かった、

だけど確かにそこにあって、ある法則で存在してる。」

「……」

「どっ？」

まだ信じられない？」

「魔法が存在するのは、わかりました。

けど、何で今になって教えてくれたんですか？」

「このままじゃ千雨が壊れると思ったからよ。」

あなたは変に利口すぎるの、自分の教わったことや体験したこと
そこから現実を認識して自分の常識を作り上げる、
ただあなたはそのが強すぎて実際そこにあっても
自分の常識で理解できないものは拒絶しようとする。

否定しようとする、でも回りはそれを認めている、自分には理解で
きない、

そうして酷い時は自分すら否定しようとしていた。

皆が認めているのに自分が認められないのは自分がおかしいからだ・
・・・と。」

「・・・・・・・・っ!」

「心当たり・・・あるよね?」

「・・・・・・・・はい。」

「あなたは頭のいい子、でもそれだけに理解できないことを
無理に理解しようとして出来なくて苦しむ。

無理しなくていいの、あなたはまだ若いんだから

わからないことも知らないこともたくさんあるわ、

ある程度のごとは一時保留して、そういうものなんだと考えなさい。」

「……さっきの魔法にもちゃんとした法則やルールがあるんですか？」

「ちゃんとあるわよ、酸素が見えないようにこの大気中には魔力があり

精霊が存在し、魔法を使う法則もある、勉強して訓練すればもちろん千雨にも使える。」

「じゃあ、この学園にいる少し異常な人たちも……」

「無意識に魔法を使って体を強化したりしてる人もいるでしょうし学園内にかかっている魔法の効果で少し行動が暴走する人たちもいるわね。」

「……あのロボットの大学生のように。」

「そうだったんですか……」

「さて、これでもう千雨が無理に考え込んで悩まないでいいわね。」

「はい、今日はありがとうございました。」

「まだ、少し混乱してますけど、前よりは大丈夫だと思います。」

「うん

よかった、よかった。」

私は笑顔で千雨の頭を撫でる。

「姉様、そろそろあの話をしたらどうだ？」

「そうね。」

「なんの話ですか？」

「千雨は魔法の存在を知った。」

そのことは、私達には問題ないんだけど、

この学園の人たちや魔法使いの組織にいる人たちには、少し都合が悪いの。」

「魔法を隠そうとしてる人ですか・・・」

「魔法使いは魔法を自分達だけのものになりたい、それを公にされると困る、

だから隠そうとして一部の記憶を消そうなんてことをする。」

「じゃあ、私の記憶も・・・」
「—————」

「だから千雨にはこの先のことを選んでもらう。」

「……………」

「幾つかあるけどこんな感じよ。」

・魔法の事実を覚えたまま普通に生活を送る。

・私達が千雨の記憶を操作して今日のことを忘れてもらう。

・私達が千雨に魔法を教えて自分の身を守れるようになる。

・このどれも選ばずに千雨の好きにする。

こんなところかな、細かいところはその時説明するとして。」

「記憶を消されるのはイヤだ…………前みたいな生活に戻るの嫌だ！」

「…………このまま普通に生活していて魔法使いに魔法を知ってること
がばれたら

どうなるんですか？」

「記憶を消されるとか？」

「それだけではすまないだろうな、誰に聞いたか聞かれたり

場合によっては少し拘束されたりするだろうな。」

「じゃ、エヴァー！」

「事実だ、今の内に知っておいた方がいいだろう。」

「そうだけど千雨はまだ小学生なのよ。」

「ふんっ、私が真祖になったのはもっと早かったぞ。」

「もっっっ！」

エヴァも昔を思い出して少し感情的になったのか、

そっとエヴァの手を握る。

「今すぐ答えを出さないとだめ……ですか？」

「いいえ、家に帰ってゆっくり考えなさい。」

でもあんまり時間をかけてもまずいから1週間くらいでいいかしら？

「はい、わかりました。」

「言い忘れたが貴様が魔法を学ぶなら対価をもらっぞ、貴様の血だ

「！」

・・・・・・・・・・ビクッ！

千雨が顔を青くする。

「何だ貴様、人から教えを乞おうと言つのに対価を払わんつもりだつたのか？」

「こらっ、エヴァ。」

大丈夫よ血をもらつて言つても週に1回くらいでお猪口に一杯くらいだから。

怪我もしないし傷跡も残らないわよ。」

「姉様！」

私はもつと欲しいぞ、ジヨッキに一杯くらいよこせ。」

「そんなに取つたら貧血でまともに生活も出来なくなるでしょ！」

もう、後で私の血を少しあげるから。」

「む、約束だぞ！ 忘れるなよ！」

「はいはい。」

「そういつわけだから心配しなくてもいいわよ。」

「は、はい。わかりました。」

「それじゃあ近くまで送るから行きましょう。」

「はい、ありがとうございます。」

その後千雨を寮に送り、私は帰宅した。

「ただいまー。」

「ん、帰ったか、姉様も餓鬼のお守りで大変だな。」

あの餓鬼の何がそんなに気に入ったんだ？」

「え、千雨たんかわいいじゃん、

あのままお持ち帰りしたいのをずっと我慢してたんだから。」

「なっ!？」

「浮気かつ!? 堂々と浮気を企んでいたのか!」

エヴァが私の胸倉を掴んで揺すりまくる。

「ちよっ、……首っ……締まるって!……」

「浮気って、千雨たんまだ小学生じゃない。」

「私に手を出した姉様を信用できるはずがないだろう。」

「……それを言われると……。」 / / /

「とにかく! 浮気は許さんからな!」

「本気ならいいの?」

「なお悪いわ!」

ゴッ!

エヴァの嫉妬が突き刺さる。

「ま……まさか、姉様、私に飽きたのか?」

「倦怠期と言う奴か?……そういえば最近回数が減ってきて

るような……」

「回数が減ってるって桁は変わってないじゃない。

一回の密度は増えてるし……」 / / / /

「いいや！ 減ってる……！」

倦怠期にこのまま何の策も練らなかつたら家庭崩壊に繋がりがねん！

数日は寝かせんから覚悟しておけ……！」

「数日っ！？」

「さあ逝くぞ！」

道具や衣装の貯蔵は十分か……！」

「ちよ……まっ……いやあああああ……！」

数日後、チャチャゼロによって寝室で干からびている2人が発見さ

れた。

「だから密度が増えるのに回数増やして何日もシテたらこうなる
って。」

「……すまん、反省している。」 / / / /

「もう、今度からもう少し落ち着いてね。」

回数が愛じゃないんだから。」

「でも、浮気されると思ったら……。」

「だから浮気じゃないって言ってるのに。」

それにエヴァが結婚を迫ってきた時、お妾さんとっても良いって言
わなかったっけ？」

「そんなこと言ってない！」

やっぱり浮気しようとしていたのか……！」

「ちっ違っつて……！」

「あ……今噛んだ！ 噛んだな……！」

やっぱり浮気を企んでいたんだな……！」

このままでは……。」

数日前に戻る。

神様から頼まれたお仕事。

その9（後書き）

9話目 投稿。

神様から頼まれたお仕事。 その10

翌日

「そういつわけでエヴァにゃん、千雨さんに魔法教えてあげてよ。」

「イヤだ！」

なんで浮気相手になるかもしれん女の指導などせねばならんのだ！

にゃん とか たん とか言っつな！」

「浮気相手って……もうすぐ600歳にもなろうつという大人の女が

十数歳の幼女に嫉妬してどうするのよ……

嫉妬してくれるのはうれしいけど。」

「黙れ、女なんてものに年は関係ない！」

年が幾つだろうが これと決めた相手には容赦はないものだ。」

「容赦無いつて、なんの話に変わってるのよ……」

「とにかく私は嫌だ。」

チャチャゼロに目線を送って合図をする。

向こうも気がついたようで頷いた。

「……しょうがない、じゃあ、私が『マンツーマン』で教えるしかないか。」

「ふん、勝手にしろ。」

「イイノカヨ ゴシユジン、アイツトソプラノガ フタリツキリデ スゴスンダゼ?」

「……なん……だど?」

「ソプラノガ フタリツキリデ アノガキトイテ ナニモセズニイラレルカ?」

「それは無理だ、姉様のことだ半日ともたずに手を出すに違いない。」

「ちよつ、そんなわけないでしょう!」

「これはまずいな……」

「お姉ちゃんの話の聞きなさいよ!」

「オウゴジュジン ココハアエテ ゴシユジンガ

キツチリト キョウイクスベキ ナンジャネーノカ？」

「どついう事だ？」

「ダカラヨ ゴシユジンガ マホウヲオシエナガラ ジブンノ
チバツテモノヲ

キツチリト オシエコムンダヨ。」

「そうか、それだっ！」

チャチャゼロでかしたぞ！

フハハハハ！ 待っている長谷川千雨！

この私が直々に貴様の立場というものを教え込んでやるわ！！」

エヴァが机の上に仁王立ちして高笑いを始めた。

エヴァ家では割とよく見ることの出来る光景だ。

私は約束の日まで時々千雨にあつて細かい質問を受けていた。

やはり記憶をいじられるのは嫌だが、魔法を覚えて身を守るうとすると

戦闘になりお互いがケガをしたり、時には死に至らしめるので

そのあたりで葛藤があるようだ。

実際この世界の魔法は戦闘に使われる魔法が多い、

防御や逃げることに特化しようとしても

どうしても足止めのために攻撃する必要などが出てくる。

まだ小さい上に優しい子なので難題ではあるが

できるだけ自分で考えて結論を出して欲しい。

私もできるだけ話をして後悔の少ないようにしてあげたい。

そして約束の一週間がたち、千雨が私たちの家に来た。

「よく逃げずに現れたな、長谷川 千雨!!」

「えっ?・・・何?」

「何をグズグズしている!

さっさと魔法の修行を始めるぞ!!」

「・・・は?

私まだ返事してないんです・・・けど?」

「黙れ、私が貴様に魔法を教えると決めたのだ、さっさと付いて来い!」

「は、はぁ・・・あの先輩?」

「ごめんね、エヴァにゃん何か変なスイッチが入っちゃってるらしくて。」

「うるさいぞ姉様、長谷川千雨は私についてこればいいんだ。

何だそれとも記憶を消されたいとも言っくんじゃないだろうな?」

「い、いや、魔法は習おうと思っっているんですけど・・・」

今日は返事を聞いてくれるんじゃない・・・???

「魔法を覚えようというなら何も問題はないな。」

こっちだ、さっさと付いて来い。」

「オ、オイ、引っ張るな。」

「グズグズするな時間が惜しいんだ。」

「痛いって！　なんでお前そんなに偉そうなんだ！

年だってそう変わらないくらいだろう？」

あまりのエヴァの傍若無人さにとうとう千雨も地が出始める。

うんうん、いいことだ。」

「お前の五〇倍以上は生きてるわ！」

「嘘つくんじゃないよ、明らかに私と同じか年下じゃねーか！」

「私の方が全てにおいて遙かに上だ！」

「何が全てにおいてだ、明らかに私より背も小さいじゃねーか。」

「なんだと貴様！」

それが師匠に対する態度か！」

「いつどこで誰が師匠になったんだよ！」

「貴様に魔法を教えるのは私なんだから私が師匠だろう。」

「お前じゃなくて先輩に教わるからいいよ。」

「なん……だと……？」

貴様、やはり姉様を狙っていたのか！！

「なんの話だよ！」

「言い訳は無用だ！」

とうとう本性を表したな、貴様からはいやらしい雌の匂いがする……

やはり、私がきつちりと自分の立場というものを教え込まないといけないようだな。」

「何が雌の匂いだ！」

女の私が先輩に何をすって言うんだ！」

「ナニをする……だと……？」

きさ ま・・・その年で・・・もう・・・？

「何の想像をしてるんだ！

あゝ もう！！先輩！ この女なんとかしてくれ！！」

「姉様まで・・・まさか貴様達、もう そういう関係なのか・・・？」

「あゝ、この妹面白いけどメンドクセー。」

千雨にとって運命の日とも言えるこの日は、

このように有耶無耶で終わった。

この日からエヴァによる千雨矯正計画（エヴァ談）が開始され、

かなりスパルタな魔法教育が始まった。

まず私のチート能力が炸裂し、以前作った世界樹の指輪を改造し

指輪を嵌めている間なら老化が一時的に止まるようにした。

この指輪を千雨に渡すときに、またエヴァと一悶着あったが

私が三日間エヴァに弄ばれることによってなんとかなだめることができた。

千雨の持っている魔力は一般人より若干少なく、

魔力の効率運用が直近の課題となった。

本人の意向もあり、攻撃よりも防御優先で魔法を覚え、

魔力が少ないため攻撃魔法は中級に止め、魔法の射手などの初級魔法で

魔力をあまり込めず無詠唱で弾幕を張るように撃ち、

その隙に逃げる、と いうような戦法を基本とするようにした。

もちろん、大火力主義のエヴァが難色を示した。

しかしエヴァも教える以上無駄死をされるのが嫌なのか千雨用に

雷属性の魔法の射手を改造し、威力を落として障壁貫通能力を持たせ
当てることで数秒、体が麻痺する、魔法の痺矢を開発してくれ
た。

私は嬉しさのあまり、その晩エヴァを寝かさなかった。

千雨の修行をエヴァと一緒に見ている傍らで

学園の方に千雨を私たちの身内と認識するよう働きかけ、

学園長の頼みもあって、

交渉の結果私とエヴァが中学から学園に籍を置くようにした。

この交渉は当初千雨を引き抜いた形になったため

私たちが不利に進んだが、その原因を作ったのは学園側の

魔法や生徒の管理のずさんさが引き金となっていたので

そこを突き、どちらにも貸を作らない形で収めた。

貸しを作ることができたらこの段階から京都の千草さんの件で

調査を依頼しようかと思っただが、なかなかうまくいかないものだ。

木乃香を守るという方向で貸しも作れたが

そうなる私の原作介入が本格的にネギに近くなってしまっただ

その方向では貸しを作らないことにした。

千雨に魔法を教える時点でダメだとは思っただ

あのタイミングで偶然出会って放り出すこともできなかったのだ

そのへんのバランスを取ることに注意する。

「そういう事でエヴァにゃんと私は中学から学校に通います。」

「私はお断りだ。」

あと、にゃんって言うな。」

「そんなこと言わないで一緒に学園生活を送ろうよ。」

「なんで今更ガキ共と学園生活など送らねばならんのだ。」

「今さらも何も、エヴァ学校行ったことないじゃない。」

「必要な知識は習得しているという意味だ。」

このままじゃ埒があかないので別の方向から攻めてみることにする。

「・・・お姉ちゃん、エヴァのかわいい制服姿が見てみたいなあ。」

「じゃあ、今から着てやるから行く必要はないな。」

「・・・エヴァと学園で青春ドラマみたいな学園生活送りたいなあ。」

「つ・・・べ、別に学園じゃなくてもいいんじゃないか？」

「エヴァはお姉ちゃんと一緒に登校したり

一緒にお昼食べたり部活を一緒に楽しんだりしたくない？

二人の学生が夕日の沈む中肩を寄せ合って学校から帰るんだ、

帰りに寄り道してお茶を飲んだり、遊んだりして、そんな時不意に気がつくんだ

『私この人の好きなのかもしれない・・・』　そしてお互いを意識しだして

不意に手が触れた時に顔を赤くして 二人は……

「ゴクリ……」 続きは？」 / /

「エヴァと一緒に学園に通えたら実際に体験してわかるんじゃないかな？」

「くっ……」

「ほかにも、エヴァも弟子の千雨ことが心配でしょう？」

「私はアイツのことなんか心配してない！」

「そう？お姉ちゃんは心配だな。」

「……じゃあ、そんなに嫌なら私だけ学校に通うよ。」

「……」

「それで千雨とドラマみたいな学園生活を送ろうかな？」

「ちよつと待てー！」

「私も行くぞー！」

「でも、エヴァ行きたくなかったんじゃないの？」

「で……弟子のことが心配だからな！」

「でもさつき……」

「私が育ててるんだからそこら辺の奴にやられるか！

だ、だが奴もまだまだこれからだ

中途半端なところで潰されてはかなわんからな、一応保険として付いていくだけだ！」

「エヴァの弟子になれた千雨は幸せだね。」

「……そんな目で私を見るな。」 / / /

（そんな目で見られたら奴を放って置くわけにはいなくなるだろう……）

「優しい妹を持って、お姉ちゃんは嬉しいです。」

エヴァを包み込むように抱きしめる。

「姉様……」 / / /

「キティ……」

「姉様は卑怯だ……こんな時だけその名で呼んで。」

「一緒に学校行くところか？」

「……うむ、一緒に行こう。」

「よし、そうとなったら制服買いに行こうぜ！」

「……っは？」

「ほらほら、立って制服を買いに行こう！」

「え？ 今の雰囲気は？」

「すごくいい感じだったから今日はこのまま……あれ？」

「ほらエヴァ〜行くよ〜！」

「行くから！ 行くから今の雰囲気をもう少し！！！」

「H A H A H A！ エヴァにゃんは甘えん坊だなあ！」

「もう一回！ もう一回さっきのをやれえ〜！！！」

戦闘訓練中の千雨とチャチャゼロ

「なあ、チャチャゼロ、今かなりイラツときたんだがなんだったんだ？」 #

「オマエモ ゴシユジント ソプラノニ ドクサレテ キテルンジヤナイノカ？」

「何言ってるんだ！ 先輩は女の人だぞ！」

「・・・オマエコソ ナニイッテルンダ、

イロボケシテンノカ？」

「・・・・・・・・っ」 / / /

（ツチ、大体あの人達が悪いんだ！

いつもいつもイチャイチャと・・・色ボケ姉妹め・・・・・・・・でも先輩と・・・・・・・・） / / / /

「セントウチユウニ カンガエゴトトハ ヨユウダナ！」

「っち、 待て！ チャチャゼロ！」

お前今本気で狙っただろう!!」

「イロボケシテル ガキニ カツヲ イレテヤッタ ダケジャネー
力。」

「ちよつとまで! タンマ タンマ!」

「ホラホラ ドンドンイクゾ!」

「ちよつ、当たるって、……きやあああつあああ!?!?
……」

千雨が小学校を卒業し、春休みを利用して集中的に修行をしていた頃、

ある少女二人が、エヴァを訪ねてきた。

「お初にお目にかかるネ、私 超 鈴音というネ。」

「私は葉加瀬 聡美といいます。」

「私を訪ねてきたなら挨拶はいらんな。」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル サンでよろしいかね？」

「ああ。」

「そちらの方は初めてお目にかかるが、名前をお聞きしてもよろしいか。」

「私は、エヴァちゃんのお家でお世話になってる、 『山咲 椀』
といます。」

「よろしくお願いします。」

「・・・また、姉様の悪い癖が始まったか・・・」

「思いつきで偽名を名乗る癖はなんとかならんのか？」

「今回は思いつきじゃないよ、ちよつとこの子は注意が必要な娘だからね。」

「・・・まあ、いい。私に用事のようにだから私に対応してもいいな。」

「ええ、まかせるよ。」

「私は目下の扱いにしておいてね。」

「くくく、じゃあせいぜい可愛がってやるか。」

(あれ？まずった……？)

「もみじサンネ、こちらこそよろしくネ。」

「よろしくお願いします。」

「さて、早速話に入らせてもらいたいんだけど、出来ればエヴァン
ジエリンサンと

私たちだけで話がしたいネ。

悪いけど人払いをお願いできないか？」

「なんの話かわからんが、こいつは私のモノだ。」

姉様がいなければできない話なら用は無い、帰れ。」

「あらラ、それはちょっと困ったネ。」

「……裏の話なのだ、がもみじサンも関係者かネ？」

「問題ない、姉様も知っている。」

「……ならばしょうが無いネ。」

このまま話を続けさせてもらおうネ。」

「ちっちと話せ。」

「まずは、簡単に要件のみ説明させてもらつた、

私とこの葉加瀬とで作っているガイノイド、簡単にいえば人形ロボ
ットなのだが

コレの魔法科学の分野でエヴァンジェリンサンの力を借りたいネ。

あと実際の試運転もそちらでお願いしたいネ。」

「ほう、なかなか面白い物を作っているな。

それで、私がそれに協力することにより利益はなんだ？」

「まずはこのガイノイドを作成する上での科学分野の技術を提供、

それから、この機体を作成後、試運転や実戦データなどを取り

ある程度の目処が立った時点で所有権を完全にエヴァンジェリンサ
ンに譲るネ。

その後のメンテナンスも基本的に私たちの方で引き続き対応するネ。

「

「ふむ・・・悪くない話だが、こちらの理が多い気がするな。

何を隠している？」

「・・・さすがにエヴァンジェリンサンには隠しきれ無い力、

・・・私はある計画を立てているが、そちらの方で協力して欲しい

ね。」

「それは私に貴様の下につけということか？」

「そう言うことではないネ、その計画を実行するとき

機体を一時的にこちらで優先的に使用させて欲しい、というのと、

エヴァンジェリンサンには何もせずに傍観していて欲しいネ。」

「計画の内容は今話せないということか。」

「こちらに協力してもらえるならその時に話すネ。」

「……よし、詳細を話せ。」

「わかったネ。」

葉加瀬、書類とデータの見えるPCを用意するヨ。」

「はい、もう用意出来ています。」

「それではこちらを見て欲しいネ……」

それから数時間に渡りエヴァと超、葉加瀬の話は続いた。

(……トイ……花を摘みに行きたひ……)

「よし、だいたいの事は話終えたな、

姉様・・・って、どうしたそんな青い顔をして。」

「な、なんでもないよ。」

エヴァちゃんも話は終わった？」

「ああ、私はこの話に乗ろうと思うが姉様は何か言うことは有るか？」

「私はエヴァちゃんがいいならそれでいいよ。」

私自身には何も頼まれたりしてないし。」

「あ、もみじサンにも一つお願いがあるヨ。」

ここで話したことを一切他言しないで欲しいネ。」

「はい、わかりました。」

「ありがとうネ。」

もみじサンには口止め料として、何か欲しい物とかあったら

行ってくれば出来る範囲で用意するヨ。」

「わかりました、何かできたらその時にでもお話します。」

「姉様のことについては私が保証しよう、

私とこうして一緒にいるんだ、その手の事は慣れているからな。」

「了解したヨ。」

それでは明日にでも早速こちらの研究室に着て欲しいネ。」

「わかった、では明日の朝に迎えに来い。」

案内しろ。」

「わかったヨ、それでは明日の朝。」

「ああ。」

「エヴァンジェリンさんの協力が得られてよかったですね。」

「そうネ、ある意味一番神経を使う所だったからね。」

それにしても問題は あの山咲 椋と言う人ネ。」

「何か問題になりそうなんですか？」

「ある意味大問題ヨ、私の知る知識の中じゃ今の時点で

エヴァンジェリンの従者は自動人形が一人、あの人はいないはず・
」

「……超さんの介入で過去が変わっている、ということですか？」

「その可能性はあるね、私は過去に来て表立った動きはほとんどしてないガ

それでもあの人が現れたということを見ると、計画を慎重に進めない」と

大変な事になりかねないネ。」

「そうですね、計画を少し練り直す必要がありそうですね。」

「慎重にいかないとダメだが、時間も限られているネ。」

「……とりあえずあの人の事を調査することが先決ネ。」

「研究所に戻つたら早速調査してみます。」

「大至急頼むヨ。」

（あの人を見ていると、何か嫌な予感がするネ。

何か今の段階で見落としたことがないか、もう一度調べ直す必要があるネ。）

思いつきで名乗った偽名のためか、その後超たちが全力で調査したにもかかわらず、

山咲 椛の情報は何も集まらなかった。

次の日からエヴァも参加した茶々丸開発が進み、

素体の方はほとんど出来上がっていたので

エヴァによる魔力回路の出力増加、エネルギーの効率化、

魔法や気の使用の可能性追求が主な研究になった。

何回かの起動実験も順調に進み、

魔法や気の使用については引き続き研究するということだ

ととりあえずの試験運用と実践データの収集を始めることにした。

名前は原作通り、絡繰 茶々丸 に決まった。

茶々丸起動予定日

「さて、早速茶々丸を本格的に起動するヨ！」

「了解です、すべての数値安定値を記録しています。

魔力の供給量も問題ありません。」

「よし、でわ早速起動スイッチを押すぞ！」

「エヴァちゃん私に押させてくださいよ。」

「だめだ！これはマスターとなる私が押すんだ！」

「ちょっと待つネ、総指揮をしている、私が押するのが普通ヨ！」

「何言ってるんですか、ここは一番開発に携わっていた

私が押するのが科学的に見ても正しいんですよ！」

「こういつ時くらい私に押させてくれてもいいじゃないですか？」

「だめだ、姉様にも貴様ら二人にもこれは譲れん！」

「こちらこそコレばかりは譲れないネ！」

「科学的に見ても研究時間を計測しても私が押するのが最も成功率が高いんです！」

「じゃあ、しょうがないから私は遠慮しますね。」

「私も大人気なかった、ここは譲ろう。」

「何言ってる力、私が遠慮するネ。」

「私もデータと起動時の観測をすることにします。」

「いや、私が譲りますよ。」

「私が遠慮してやると言ってるんだ！」

「私が今回は譲るって言ってるネ！」

「私が見てますから誰か起動スイッチ押してくださいよ！」

「もうっ、しょうがないから私が押しますね！」

「」「」「どっぞ、どっぞ。」「」

「ポチっとな！」

ブーン

「」「」あれ（レ）？」「」

「 問おう。 貴方が、私のマスターか！？」

再度起動実験後、茶々丸は無事起動し

エヴァの住み込みの従者として家に来た。

中学校入学式当日

「エヴァにゃくん、茶々丸うっ、用意できた？」

「ん、できてるぞ。」

あと学園では にゃん なんて絶対に言うなよ！」

「こちらも用意できました。」

私の事は茶々丸とお呼びください。」

「わかってるよ。」

あ、私学園では病弱な薄幸の美少女で売り出す予定だから

エヴァも茶々丸もあわせてね。」

「了解しました。」

「なんでそうワケの分からないことをするんだ？」

「面白そうじゃん。」

「……はあ。」

「設定はこうだよ、

エヴァの遠い親類で、今年から中学に通うためにエヴァの家に居候
していて、

体が弱く、今まで入退院を繰り返していたけど

中学から休みがちながらも健気に学園に通う美少女。」

「普通に私の義理の姉ではだめなのか？」

「それは普通すぎる。」

「目立たなくていいじゃないか。」

「色々細かいところで不都合なんだよ。」

学校や体育を休んだり、身体測定とか肌を晒すイベントを回避したりするためには。」

「ああ、そういうことか。」

そんな形でも一応男だったな。」

「男の娘と言って欲しい。」

「男の子だろう。」

「オトコノコ。」

「・・・何が違うんだ？」

「とにかく、学園長には話を通してあるから問題ないはずだよ。」

「あのジジイがよくそんなこと受け入れたな。」

「結構ノリノリで協力してくれたよ。」

「何考えてるんだ・・・」

三人で家を出て学園に向かう。

「それにしてもエヴァちゃん、少しスカートが短すぎませんか？」

「……もう演技入っているのか。」

制服を発注した店で聞いたが、これが標準らしいぞ。」

「制服の規定を考えた人は何を考えているんでしょう……。」

「校則では膝上5cm、膝下5cmとなっています。」

「姉様は長めなんだな。」

「膝下5cmは乙女の嗜みですよ。」

「ご丁寧にとッキングまで履いて……。」

「これはストッキングじゃないですよ、ガーターです。」

「お前は何を考えてるんだ！」

「肌を隠せて、トイレに行く時に都合がいいと思っていますよ。」

「……っぐー！」

「理由の八割はこっちの方が可愛いからですけど。」

「……もう いい。」

行くぞ……。」

なにやら元気がないエヴァと一緒に校舎に行き、

掲示板でクラスを確認したあと教室に向かう。

事前に学園長から報告を受けているので

クラスメイトは確認してあるが、原作通り+私で構成されていた。

入学式も無事？（話が長いのでエヴァが学園長に殺気を叩きつけた
りしたが。）終わり

クラスでの自己紹介で私は完璧な演技で病弱薄幸美少女を演じ、

千雨とエヴァ、超、葉加瀬がそれぞれ妙な態度を取ったが

新しく学園生活を始めることとなった。

千雨の魔法修行も順調に進む中、魔法を利用したコスプレができな
いか

エヴァと相談していたので、私も参加し某管理局の悪魔をベースに開発を開始、

超や葉加瀬の協力もあり、魔法発動体としての機能を持ったAI搭載の杖

レイ八さんや、SLBを模した魔法の開発した。

この魔法は主人公ネギが使う雷の暴風のような直進性のある魔法に

私の魔力を一部送り込み暴走状態にして、

雷をショートさせ、無理やり威力と射程を跳ね上げる

私との契約者か世界樹の指輪を装備した状態での専用魔法となった。

バリアジャケットは作れなかったので、おとなしく千雨制作の衣装で補うことにした。

早速魔砲を実験するために着替え、

レイ八さんを構える千雨の表情は輝いていた。

魔砲自体は成功したものの、中距離ではまず回避され長距離でも

射程はずば抜けているが相手に感知される外から狙撃するくらいしか
現段階では運用できそうもなかった。

学園での生活は特に目立った動きはない、

超と葉加瀬は計画を進めているようだし、私とエヴァ、茶々丸は
私の看病をネタに休みがち、千雨はクラスの人間とは積極的に関わ
ろうとしない。

千雨にはウチのクラスの人間が、

意図的に集められたクラスではないか？ と疑問をもっているのだ

学園の魔法使いや組織に不信感を持っている千雨は

私達以外のクラスの人間と関わることに、警戒感を抱いている。

時折高畑先生が話しかけているようだが、逆に情報を探りに来たの
では？

と不信感を煽る結果になってしまっている。

高畑先生におそらくその気はないのだろうが・・・。

そして待望の夏休みに突入。

エヴァは北海道の方に行きたいと言い出したが

茶々丸のメンテナンス等の理由で断念。

千雨も交えて四人でエヴァの別荘で修行を兼ねて避暑を満喫していた。

「ちうたんも もう二十歳以上になるんじゃない？」

「これだけ別荘利用としてると。」

「精神的にはそうだけど、肉体的に十二歳なんだから一二歳なんだよ。」

「辛い現実と戦わないと。」

「うつせー。」

そういえばエヴァンジェリン、昨日教えてくれた内容に仮契約とかいうのが

あったけど、お前も誰かと契約したりしてんのか？」

「ああ、私は一応契約してるぞ、ほら。」

「……………やっぱり先輩との契約か、けどなんでこんなドレスなんだ？」

これどう見てもあれだろ？ ウエディングドレス。」

「やはりそう見えるか。」 / /

「なんで少し嬉しそうなんだよ……………」

「エヴァは嬉しいんだもんね。」

「だ、黙れ！」

私は嬉しくなんかないぞ！ / /

「……………お前らやっぱりそういう関係なのか？ 百合か？」

「ちょっと待て長谷川千雨！！」

それはどういう事だ！ 私は断じて百合なんかじゃないぞ！！！！」

「いや、どう見てもお前ら怪しいだろ。」

「どこがだ！　どこも怪しくなど無いだろうっ！」

「ちつたんちつたん、エヴァは百合じゃないよ。」

「いや、だって……なあ。」

千雨が茶々丸に視線を合わせる。

「マスターとソプラノ様の関係が何か問題あるのでしょうか？」

「あ……茶々丸じゃわかんねーか。」

「エヴァはちゃんと好きな男の娘がいるよ。」

「ちょ、マジか！」

「姉様っ!?!」 / / /

「こんなちんちくりんの癖に、色気付きやがって。」

へー、お前がねー。」

「黙れ　長谷川千雨！」

「そんなに怒るなよ、別にからかったりしないから。」

「ちつたん誰か聞きたくない？」

「姉様っ！！！」

「さすがにそこまで野暮じゃねーよ。

あといい加減ちつたんって言うな。」

「ちえー、千雨がどうしても聞きたいって言うなら教えてあげよう
と思つてたのに。」

「私も同じ状況になつた時そこまで突つ込まれるのも・・・ちよつ
とな。」

「お二人が好きなのはソプラノ様じゃないんですか？」

「「ぶふうううー！！！」」

茶々丸の意外な方向からのツツコミに二人が吹き出す。

「ちよ、なんでそうなるんだよ！」 / / / /

「茶々丸！ 貴様という奴はあゝ！！！」 / / / /
リギリ ギ

「あ、 ああ・・・ そんなに螺を巻いてはいけません。」

「茶々丸はどうしてそう思ったの？」

「お二人の視線、体温の上昇や発汗、脈拍、動悸、などから判断しました。」

「私はそんな趣味じゃないぞ！」

「そ、それにほら！ エヴァが好きなのが男なら先輩だとおかしいじゃないか！」 / / /

「ソプラノ様は男性ですから問題ないと思いますが。」

「……………っは？」

「ソプラノ様は男性ですから問題ないと思いますが。」

「……………ナニ、イッテルンダ？」

私は笑い転げ、立ち直ったエヴァもお腹を抱えてうずくまっている。

「え？・・・お　とじっ？」

「千雨、こっちを見て。」

私は千雨に近づいて頬をそっと撫で、こちらを向かせる。

「・・・せ　んぱい？」

「千雨は私のことが好きなの？」

「え？　ちっちがつ！　　う・・・」

千雨が直ぐに目をそらせる。

「千雨、私の目を見て、私を　「嫌いって」　　言ってみなさい。」

「そ、そんな・・・事言えるわけ・・・」

「じゃあ・・・好き？」

「・・・っづ。」　　／／／／

「どっち・・・？」

(先輩のことは好きだけど私は女で先輩はお
あれ男? んな・・・?)

でも、そう言うのは関係なく先輩は・・・好き・・・だ
けど。)

「あ・・・・・・・・あう。」 / / / /

「千雨・・・・・・・・」

私は目を瞑って千雨の顎をそっところちらに引く。

千雨は反射的に私の胸に手を置いて服を掴む。

(あ・・・・・・・・先輩の唇・・・・・・・・近づいて・・・・・・・・)

「せんぱい・・・・・・・・」

ギリギリで千雨の顎を引くのを止め千雨の動きに任せる。

「んっ・・・・・・・・ちゅ・・・・・・・・」

「……ん…………ちゅ…………」

(あ…………先輩とキスしてる…………柔らかくて…………きもち…………) / / / /

「…………んう…………ぷはっ」

「千雨…………」

「せんぱあい…………」

「フフツ…………千雨？」

「な、なん…………だよ。」 / / /

「千雨…………もう男とキスはしたのかい？」

「まだだよなァ 初めての相手は女ではないッ！ このソプラノだッ！ ……」

「……………うん。」 / / /

「…………え？」

「私の……初めてのキスは、先輩。」 // /

「え？ ……ネタにマジレス??？」 // // /

「私の……ファーストキスが先輩……」 // // /

「どうやらまだスイッチが入ったままだしいな。」 #

私は数歩後ずさる……

「……見るなあ！そんな目で私を見るなあ！！」 /
// // /

「姉様はどうしたんだ？」

腹は立つが、ここは喜ぶ所じゃないのか？」

「ソプラノ様には素直に態度を表したほうが効果があるようですね。」

「やめろ！ そんな純真な目で汚れた私を見るなあ!!?」

O r z

数時間後、スイッチが切れた千雨

「あああああつああつああつああああ~~~~~!!!?」
「?」 / / / / / / /

千雨が頭を抱えながら床を転がりまわる。

見かねたエヴァがそつと千雨の肩を抱く。

「千雨、そう恥ずかしがるな、私も通った道だ……」

「エヴァンジェリン……も?」

「ああ、私にも同じように……」 / / /

「エヴァンジェリン・・・」

「エヴァでいい、お前の苦悩はよく・・・わかる。」

「エヴァ・・・」

「千雨・・・強く・・・強く生きていこう！」

「エヴァア~~~~~!!」

「千雨っ!!」

「新しい友情が生まれるって素晴らしいですね、姉さん」

「アレハユウジョウ ッテイウノカ？」

タダ キズヲナメアツテル ダケジャーネーノカ？」

「友情です。 マスターに千雨さん、素晴らしい友情が 今 生ま
れたんです。」

「わたしはあゝゝダメな にんげんだあゝゝゝ
lll or zlll」
l

神様から頼まれたお仕事。

その10（後書き）

10話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その11

ある日の夕方、千雨が家に泊まりに来るので迎えに行き

一緒にエヴァの家に向かう途中で、綾瀬 夕映と出会った。

「こん……ばんわ？」

「「こんばんわ。」

「二人でこんな時間にどうしたんです？」

「私達はこれからエヴァの家でお泊り会なんだ。」

綾瀬さんこそこんな時間に一人でどうしたの？」

「私は図書館島の帰りです。」

「そうですね、じゃあ途中まで一緒に行きましょう。」

学園の敷地内とはいえ、女の子が一人でこんな時間にいると危ない
ですから。」

「ありがとうございます。」

2人パーティーから3人に増え、モンスターに備える。

「教室ではお二人が一緒のところをよく見ますが、知り合ってから長いんですか？」

「ん〜、どうだろう千雨ちゃん。」

「私が先輩と知り合ったのは小学校の高学年の時くらいだったかな。」

エヴァの別荘生活で長い時間過ごしているので

昔の記憶が曖昧になっていた。

「そうなのですか。」

ソプラノさんは中学からこちらに来たと聞いたので、

それにしてもおふたりとも仲がいいと思っていたのですが。」

「そう見える？」

私達なかよしに見えるんだって、千雨ちゃん。」

千雨の腕を組む。

「ちよ、バカ、やめろよ！ 人が見てるだろ。」 / /

「フフ、千雨さんのそう言う顔は珍しいです。」

「ほ、ほら先輩もさっさと離れるよ。」

「……千雨ちゃん。」

涙目になって千雨を見上げる。

「……わかった、こっ、このままでいいから、な？」

「うんっ！」

「本当に仲がいいですね。」

ですけどなんでソプラノさんが先輩なんです？

同級生ですよね？」

「あ、それは初めて千雨ちゃんと出会った時に

年上だと勘違いされてね、そのままその呼び方が定着したんだ。」

「そうなんですか。」

「初めて公園で千雨ちゃんにあった時は可愛かったな〜、

落ち込んだのか、泣きそうな顔してベンチに座ってて・・・」

「ああ〜〜〜！！もういいから先輩は黙ってるよ！」 / / /

「そんなことがあったんですか。」

「それ以来たまにあっては話しをしたり、色々勉強を教えたりね。」

「でも、ソプラノさんって中学からこちらに来たんですよね？」

「あ、それはね、こっちに住むようになったのは

中学からでエヴァちゃんの家にはもう何回も着てるの。」

その時千雨ちゃんに会ってね。」

私、海外で過ごしていたから、その国の言葉を教えたりしてる内に

仲良くなってね。」

「おい、先輩、そろそろまずいぞ。」

「わかってる、でも勉強を教えたのも嘘じゃないし、

魔法も海外の言葉といえは嘘でもないから大丈夫。」

「外国の言葉がわかるんですか！」

それならこの本は読めますか？」

「ん、ちょっと見せて。」

そう言つて夕映が見せた本はフランス語の小説だった。

「これはフランス語ですね、

え〜つと Le d?but de la quatri?me
et de.....」

「すごいです！」

読めないところがあるので今度は非教えて欲しいです！」

「あ、昼休みとか放課の時間だったら、少しは.....」

「ありがとうございます！」

これでこの本の続きが読めます。」

『いいのか？ 先輩。』

『ちうたん、嫉妬してくれるの?』

『違うよー!!』

綾瀬とあまり仲良くしてボロを出したりしないかってことだよ!』

『学校に通ってる時だけにするし、本を読んであげるだけだから大丈夫だよ。』

心配してくれてありがとうね。』

『べ、別に先輩を心配してるとかじゃ・・・』

『ツンデレ乙』

『私はツンデレじゃねーよ!』

「あ、私は寮なのでここでお別れですね。」

「そうだね、それじゃあ気をつけてね。」

「はい、お休みです。」

「「おやすみ(なさい)。」」

(先輩、なんか変なフラグ立てちゃった気がするが大丈夫かよ・・・)

秋も深まり、山が赤く染まり始めた頃。

超と葉加瀬を交えて家でお茶会を開いてみた。

「最近寒くなってきたネ。」

「そろそろこたつをだそうかと思ったんだけど

家には小さいこたつしか無いのでみんなで入れないんだよね。

そうだ、超作ってよ。」

「私の科学の力は、そんな物を作るためにあるわけじゃないヨ。」

「待ってください、超さん！」

たとえこたつと言えど科学の力で生まれた人類の英知です。

そんなモノとはどういう事ですか！

ここは前人の偉業に応え、すべての知識を総動員して

現代最高のこたつを創り上げ後世に私達の偉業を残すのです!」

「……どうしたネ、ハカセ。」

(何か今日の葉加瀬おかしくない?)

どうせまた超が何かしたんでしょう?)

(おい、超鈴音、アイツに何をしたんだ?)

(なにもしてないネ!)

(本当に? 実験で変な薬飲ませたりしたんでしょう?)

怒らないから言ってみなさいよ。)

(お前……そんなことしたのか。)

(超 鈴音……そこまでやらなくてもいいと思います。)

「だから、私は何もしてないヨ!」

「超さん! 科学者の端くれとして何もしないとはどういう事ですか
「!」

「い、いや、違うネ。」

「なにが違うんですか！ あなたは世界最高のこたつを作り気がするんですか？」

「……わかったネ、作る、世界に一つしかないすごいこたつを作るネ！」

「そうですね、では早速今夜から作りましょう。」

「今夜！？ それは少し急ぎすぎじゃないかな……？」

「今から突貫で作業しないと冬に間に合いません！」

「………わかったよ……やるよ、やればいいんでシヨ。」

エヴァ家に未来の科学を結集したこたつが備え付けられた。

冬休みから年末にかけて、冬休みの宿題を数日で終わらせた超の宿題を

みんなで写し、実家に帰郷した千雨、葉加瀬を除いたメンバーをエヴァ家を集め、年末年始を楽しんだ。

「このこたつ最高、もうこたつと結婚したい。」

「な！？こたつと浮気とはどういう事だ！」

「マスター落ち着いてください。」

「なら私はこたつの親だから、ソプラノさんのお祖母さんかネ？」

「おばあちゃん、お年玉くださいな。」

「中学生にそんなこと言う子にはあげないヨ。」

「じゃあ、エヴァおばあちゃん、お年玉くださいな。」

背後から馬乗りになり、しこたま殴られた。

「それにしても今年はいろいろあったねー。」

「そつだな、今年は学校に通わせれたから

周りが騒がしくてかなわん。」

「でも来年はもっと騒がしくなると思っヨ。」

「……縁起でもないことを言っな。」

これ以上騒がしくなったら私は学校やめるぞ！ 姉様あーっ！

「マスター、甘酒の用意ができました。」

「……ん、ご苦労だ。」 / / /

「恥ずかしいならやらなきゃいいのに、茶々丸私にも。」
「私も飲むヨ。」

「はい、お二人の分も用意してありますので。」

「そういえば、初詣はどうする？」

「京都か伊勢に行きたいな。」

「それはちよっと遠くないか？」

「遠距離転移魔法のマークが付けてあるからこの人数なら行けるぞ。」

「じゃあひと眠りしたら着替えていこうか？」

「どうせなら全国の有名所の神社全部回るか！」

「そんなに回つたら神様も誰が願いを聞いていいか大変ネ。」

「全部バラバラの願いしたら神様同士で戦いが起こったりして。」

「普通にどの願いも聞いてくれないと思うヨ。」

「私にとっては作ってくれた超鈴音やマスター、葉加瀬が神になるので」

三人にお参りをすればいいでしょうか？」

「この3人だと誰もまとも聞いてくれないから私にお参りするといいよ。」

「わかりました、そうすることにします。」

「「ちょっと待て（待つネ）！！」」

「なに？」

「まとも聞かないってどういう事ネ！」

少なくとも私はちゃんと茶々丸の願いを聞くヨ！」

「私だって自分の従者の願いくらい聞くぞ！」

「茶々丸気をつけなよ、二人共こう言ってるけど、」

おもしろがって実験されるか面倒くさがって聞かないかのどちらかだから。」

「はい、わかりました。」

「なんで姉様の言うことは素直に聞いて私の言うことは聞かないんだ！」

「そうヨ！ それに、私だって実験なんかしないネ！」

「日頃の行いだよね。」

「それについては黙秘します。」

二人がかりで茶々丸に詰め寄る。

「二人共その辺にしてあげなよ、茶々丸も困ってるから。」

「むう、後できつちりと話を聞くからな。」

「後でデータを直接見るネ。」

「それじゃあ、今日はもう寝ましようか。」

明日朝起きたら、皆で初詣に行きましよう。

超は今日どうする？ 泊まっていくな？」

「五月も家に帰ってるので泊まっていくな」とにするヨ。」

「茶々丸、部屋を用意してやれ。」

「わかりましたマスター。」

超は一度部屋に着替えを取りに行き、その間に茶々丸が部屋を準備、皆でパジャマパーティーを開いた後就寝、明朝初詣に行った。

三学期に入り、女子中学でもバレンタインイベントで賑わいを見せる頃。

「エヴァにゃんはバレンタインとか参加する方？」

「いつ頃からだったか毎年それを聞いてくるな。」

あと、にゃんって言うな。」

「やっぱり男の娘としても欲しかったりあげたかったりするわけですよ。」

「そういうものなのか？」

「そういうものなのですよ、ね？　ちうたん」

「うえ?!　私かよ。」

「ちうたんは誰かにあげる？」

「上げるも何もウチは女子校だろ、

あげる人なんか先生か家族くらいしかいねーじゃねーか。

あと、ちうたんはやめろ。」

「女の子にもあげればいいじゃない。」

「エヴァじゃあるまいし、私にその趣味はねーよ。」

「ちょっと待て、長谷川千雨。」

それは私に喧嘩を売っていると判断していいのか？」

「客観的に見て、そう見えるっていうことだよ。」

客観的にエヴァの行動を・・・見る・・・？

朝、私、茶々丸と一緒に登校。

寝ぼけている時は、私が腕を組み支える。

甘えて腕を組んで歩いているようにも見える。

授業中、普段は寝ているか、私が保健室に行く時は同行。

昼、3人で食事、千雨もたまに参加。

茶々丸や私に食べさせてもらったり、口を拭いてもらったり。

第三者が見ると甘えているようにも見える。

夕方、授業終了後、3人で帰宅。

荷物を茶々丸に持たせ私と手をつないで歩く。

「エヴァって……」

「な、なんだ？」

「ううん、いいの。」

エヴァはそのままです。」

「マスターは今ままでいいんですよ。」

「なんで二人して急に優しくなるんだ！」

おい、やめろ！」

「その内、学園の百合姫とか噂が流れだしたりしてな。」

「そんな噂が流れたらこの学園を消滅させてやる！」

「それなら私が夕方に屋上に千雨を呼び出してチョコをあげるよ。」

「やめろ！」

「……………どうして？ 千雨は私の気持ち……………受け取ってくれないの？」

もう……………私のことは、どうでもいいの？」

科を作って千雨に縋りつく。

「……………っ！ そういう言い方はマジでやめて下さい、先輩。」
「／／／」

「千雨フラグが順調に立っているようです。」

「私はまだお前達の浮気を認めたくはないんだからな！」

「千雨と私は純愛だよ」「違うから!」・・・純あ「違う!」
「.....」

「長谷川千雨! 姉様との仲を認めて欲しかったら、まずは私に勝つことだ!!!」

「千雨、私のために頑張つて!」

「.....もういい。」

「千雨さん、元気をだしてください。」

私には応援することしかできません。」

疲れ切った千雨を横に置き、バレンタインの話で盛り上がりました。

ちなみに、エヴァと茶々丸、千雨と超、葉加瀬からもチョコを貰いました。

「なんか下駄箱にチョコが置いてあるけど誰が置いたんだろう？」

宛先は……私だ。」

謎の相手からのチョコも1つ貰いました。

(私はこういうイベントとは無縁と思ってましたが、

義理チョコとは言え、参加してみるとドキドキするものです。)

／／／

1年の学園生活の締めくくり、終業式。

「うち、あのクソジジイめ、相変わらず話の長い……」

「マスター、もう少しの我慢ですから。」

「姉様のように保健室に逃げ込めばよかった。」

「マスター、ソプラノ様にサボらないように言われているので、
もう少し我慢してください。」

「大体、なんでお前は私の言うことより姉様の言うことを聞くんだ
！」

「マスター、お静かに。」

みなさんこちらを見つめます。」

「……………つく。」

教室に戻り、学年最後にして最大のイベントが開始される。

「では、これから通知表をみなさんに渡しますので

呼ばれたら順番に取りに来ててください。」

ぞわ……………

ぞわ……………

1年の締めくくりの行事、・・・・・・・・通知表配布・・・・・・・・!?

・・・・生徒の絶望と希望が彩る・・・・・・・・教室・・・・・・・・！
教師による運命の配布・・・・・・・・っ！

生きる者は生き・・・・・・・・っ！ 絶望に染まる敗者を・・・・・・・・嘲笑う
・・・・・・・・っ！

そして敗者は・・・・・・・・！ ・・・・・・・・只々ひたすらに・・・・・・・・絶望の
闇を・・・・・・・・さ迷っっ！！

・・・・・・・・この地獄からは・・・・・・・・誰一人逃げられない
っ！

逃亡は・・・・・・・・許されない・・・・・・・・！！

「変な顔して姉様は何をやっているんだ？」

「さあ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルよ・・・・・・・・っ！

貴様は勝者か・・・・・・・・！？ それとも絶望をさ迷っ・・・・・・・・敗者か
・・・・・・・・っ！?」

エヴァと千雨に殴られ正気を取り戻す。

「それで、みんな成績はどうだった？」

あ、超は言わなくていいから。」

「ひどいヨ！　なんで私は仲間はずれカ！」

「勝者の哀れみなんて受けたくありません。」

超以外の全員が同意する。

「私はいつも通りだな、特に問題は無いよ。」

「ちうたんは勝者側か、理数系が高評価だし。」

「私もだいぶいい成績でしたよ……一部の教科以外は
1111」

「葉加瀬はやっぱり体育や音楽とか美術が良くないんだ……」

私は可もなく不可もなくですね、もう少し平均的に上げたいです。

「五月ちゃんは……狙ったように平均的な評価ですね。」

これを狙ってやってたなら、超の強力なライバルになれるね。」

「私は体育以外はちよつとまずいアルね。」

「古ちゃんは日本語を覚えるのが先だからハンデがありますね。」

「私とマスターはこの通りです。あまりいい成績ではありません。」

「こらっ！ 茶々丸！ 勝手に見せるな馬鹿者っ！」

「エヴァはもうすこし真面目にやりなよ、お姉ちゃん悲しいです。」

「エヴァが成績あげないと茶々丸が上げられないじゃないですか。」

「なぜ私のせいなんだ！」

「茶々丸はエヴァに合わせてるんだから当然でしょう。」

「……………つく！」

真面目にやるのは嫌だが、私のせいにされるのも嫌だ……

どうすれば……………？」 ブツブツ

「そついうソプラノちゃんはどつだつたネ？」

「私の大事な秘密を……………無理やり見るんですか……………？」

「そつ言つのはいいからさつさと見せろよ先輩。」

「ちえく、最近慣れてきたみんなの対応にお姉ちゃん、寂しさを覚え
ます。」

私の通知表を見せる、内容は文系が平均より下で体育が最低評価。

英語だけは高評価だった。

「まあ、普通に納得出来る評価ネ。」

体育はずっと参加してないからしょうが無いし、

英語が得意なのも住んでいた所を考えれば。」

「面白みは無いな。」

「無いアル。」

「はっ、姉様も私とそう変わらんじゃないか。」

「そんな事言ったって、私はエヴァや古ちゃんのようにオチ担当じ
やないですし・・・。」

「誰がオチ担当だ(アル)!!!」

みなさん無事に進級できたからいいじゃないですか。

「そうですね、補習も無く春休みを迎えられたんだから良しとしま
しょう。」

通知表の配布も終わり、教室の阿鼻叫喚の地獄絵図も収束し
帰宅するもの、部活に通うもの、皆それぞれ教室を後にした。
私とエヴァ、茶々丸も帰宅する。

「姉様は春休みどうするんだ？」

「私は家にいるけど、少し魔法世界に行ってくるよ。」

「また行くのか？ 大きい休みのたびに行ってるが

向こうで何をしてるんだ？」

「情報収集と村のみんなの手紙を出しに行ったりとかかな。

あ、チャチャゼロ借りていい？」

最近千雨の修行くらいしか暴れてないから欲求不満でしょう？」

「オ、オレモ ツレティツテクレルノカ？」

「うん、盗賊や賞金首でも倒して旅費とおみやげ代を稼いでよ。」

「アバレラレルナラ ナンデモイイゼ。」

「そういう事なら連れて行って構わんぞ。

じゃあ私は近場の温泉でも巡るか。」

「マスター、お供します。」

私は長期の休みを利用して、定期的に魔法世界に行っている。

主な目的はメガロなどの大国の動きを知ると、クルトに合うためだ。

以前クルトにエヴァの賞金の解除を依頼して以来魔法世界での

情報収集を頼むことが多い。

私とクルトは元老院の正常化、「完全なる世界」による魔法世界への干渉阻止と、

その他にも目的が共通する部分が多いため協力関係を築いている。

「お久しぶりです、ソプラノさん。」

「お久しぶり、クルト、……なんか合うたびに老けてきてるね。」

「老人の中にとくとくと精神はともかく、肉体も老けるのですかね？」

「若さを吸われてるのかもしれないね。」

「それはゾツとしませんね。」

それでは依頼されていた件の報告ですが……」

そうして書類を見ながら報告を受ける。

主な報告は、在職する議員や周りの汚職の証拠を集めたり

見込みのある議員の引き込み工作の進捗、対外折衝の効果等

様々な内容である。

長期の運営により膿のたまった現在の元老院を

内部から変革し、同時にクルトの発言力を高め、

いつの日かアリカ姫の汚名を返上し、元老院を新たな体制で運営することが

クルトの目的の一つでもある。

「進捗は順調のようね。」

「そうですねアタナの協力のおかげで汚職の証拠集めや摘発は

かなり順調ですが、思ったよりも数が多いので捗らない状況ですね。

」

「そっちはかなり酷いみたいだね、なにこれ？」

旧世界の村を襲うとか何考えてるの？」

「あ、それですか、ソプラノさんはナギを知っていますよね？」

「あの紅き翼の赤毛ね、何回か見たことあるよ。」

「そのナギの息子がその村で育てられてるんですが

英雄の息子として祭り上げるために思想誘導の為、襲ったみたいですよ。」

以前から情報はあったのですが今回証拠固めが終わったので報告書に載せました。」

「そう、なりふり構わずやってるね、だから組織って嫌い。」

「私もここまでやるとは思いませんでした。」

一刻も早く元老院を正常化しないと「完全なる世界」の対応でまず

いことになりますね。」

「タカミチ君にもう少し情報あげれば「完全なる世界」の残党狩りも進むんじゃないの？」

「彼は彼で英雄願望が強いので、扱いが難しいんですよ。」

あまり重い情報を与えると突っ込んでいって殉職なんてしかねません。」

「そうだね、アーウェルンクスか造物主の情報なんかあげたら部隊率いて絶対突っ込んでいくよ。」

「そうそう以前あった神楽坂さんの情報、あれ助かったよ。」

ウチのクラスにあんな爆弾が放り込まれてるとは思わなかったよ。」

「あの学園長も何を考えてるか理解出来ないところがありますから。学園で保護するのはいいとしてもネギ君と一緒に扱おうとするとは。」

「ネギ君って例のナギの子供ね。」

（神楽坂さんのこともネギ君のことも原作知識で知ってはいるけど、

特に神楽坂さんは絶対に死守しなきゃいけないんだから

ネギと一緒にするのはおかしいよね……

英雄の息子と運命のヒロインって……あ、この世界、漫画の世界だった。

実際に住んでるとつい忘れちゃうわ。(

「ネギ君といえば来年……あなたにとっては2年の3学期ですか、その時期に

彼をあなたのクラスの担任として派遣するそうですよ。」

「もう、何でもありね。」

10歳の社会経験もない子供に学校の担任とか……

魔法がバれるのは確実、クラスの人間引きこんで、従者作る気まんまんだね。」

「彼自身悪い子じゃないんですよ、成績も優秀だし真面目で素直だと聞いてます。」

周りというか、元老院も焦ってきてるんですかね、少し性急すぎる気がします。

もう少しゆっくり育てれば英雄はともかく、魔法使いとしても政治家としても

優秀に育つ器はあるんですが……」

「クルトが躍起になって現行の元老院の権力を削いでるからだった
りして。」

「・・・やめてくださいよ、罪悪感がわきますから。」

クルトの頬がヒク付いている、心当たりがありすぎて罪悪感が湧いた
ようだ。

「まあ、そのことは今後できる範囲でサポートしてあげてよ。」

それで、個人的に頼んでた件はどう？」

「そうですね、頼まれていた天ヶ崎 千草の親の情報ですが、

その時戦闘をしていた部隊と救援要請を断った味方部隊の隊長や関係者、

あとその家族の現在の住所などかなり綿密に情報が集まっています。」

「ありがとう、これだけあれば彼女との交渉をかなり有利に持って
いけるわ。」

報酬はお金でいいんだっけ？」

「ええ、振込は確認してあります。」

あなたの作る結界魔法具も魅力的なのですが、

現在は運営資金のほうが逼迫してましてね、なにぶん汚職の数が多いので

人員が必要でして。」

「少し多めにだそうか？」

貸しとまではいかないけど、なにかの時に優遇してくれたらいいよ。

「

「そうですね、貸しと取っていたただかなくていいのならお願いします。」

「クルトもしっかりしてきたね。」

「元老院でもそうですが、あなたにもいろんな目に合わされましたから。」

「ためにはなつたでしょう。」

残念ね、クルトが女の子なら放っておかないのに。」

「・・・ハハハ。」

「じゃあそついう事で追加分は帰ったら振りこんでおくよ。」

「ありがとうございます。それではまた次回。」

「またね。」

結界を解いて撤収の準備を始める。

クルトはもう転移したからあとは私が撤収するだけ。

「さて、チャチャゼロを迎えに行きますか

派手にやってなけりゃいいけど……無理だろうな。」

新学期を迎え、始業式が終わった頃学園長に呼び出された。

どうでもいいけど私達を呼び出すのに校内放送を使うのは

恥ずかしいのでヤメテ欲しい。

「何だジジイ！ 始業式の長い挨拶では飽きたらず

私達になにやら演説でも聞かせてくるのか？

くだらない話だったらその髭とも今日でお別れだと思えよ。」

「ホッホッホ、始業式の挨拶は気に入ってもらえなかったかのう。」

「話が長いんだっ！」

「今後は少し短めになるよう前向きに検討するから勘弁して欲しいのう。」

「短くする気はないんだな……」

「今回二人、茶々丸君も着ておるが、まあいいかのう。」

二人を呼び出したのは緊急の用事があるわけではなく、

事前報告と言う感じの話じゃ。」

「何かあるんですか？ 病弱な少女を学園長室に呼び出すような報告が。」

「呼び出したのは悪かったよ、何分こちらも時間がなかったの。

それで、事前報告という話じゃが、君たちのクラスの担任の教師が

来年、3学期位に変わるのでそれを連絡しておこうと思っただの。」

「で、ジジイ、誰が来るんだ？」

わざわざ私達に報告するくらいだ、なにかあるんだろう?」

「特別二人に関係する話じゃないんだが、

二人はナギ・スプリングフィールドを知っておるかの?」

「話くらいはな、私は実際あったことはないが、

姉様は何回か見たことがあるんだったか?」

「そうね、何回か見たことあるね。」

「ナギ・スプリングフィールド、大戦の英雄である紅き翼のリーダーで

千の呪文の男という名で有名ですね。

10年くらい前に死亡が報告されていますが死体などは確認されていません。」

「それだけ知っているなら話は早い、

ソプラノ君があったことがあるというのは初耳じゃがの。」

「遠目に見たという程度ですよ。」

「……………そういう事にしておこうかの。」

それで、そのナギの息子なんじゃが今年魔法学校を飛び級で卒業見込みでの

卒業試験としてこの学園の教師として働くことが内定しておるのじや。」

「・・・何を考えているんだ？」

魔法学校を飛び級で卒業をするということはガキじゃないか！」

「子供に教師をさせるなんて・・・労働基準局に報告したほうがいかな？」

「・・・ツヒヨ！それは勘弁して欲しいのう。」

ともかく本国の方で決まった方針なので、儂としても逆えんのじやよ。」

「貴様らの都合などどうでもいい、

別のクラスにでもしろ、私のクラスにされても迷惑だ。」

「そうはいつでものう、なんとかならんかの？」

「私は仕方なくこの学園に通ってるんだ、これ以上やかましくされてもかなわん。」

「まあまあ、エヴァ落ち着いて。」

私達の担任になるとは言っても、直接私達に何かするって言う事じやないんだから

放っておけばいいじゃない、どうせエヴァは授業サボりがちなんだから。」

「……姉様だってサボってるじゃないか。」

「私は病欠だもの。」

「……くっ、私もその設定で行けばよかったのか。」

「取り合えず今回は事前の報告という形で理解してくれんかの。」

「まあいい、あまりひどく私達に干渉してくるようだったら消せばいいからな。」

「そのことについては注意しておくからあまり手荒な真似は勘弁して欲しいのう。」

「そのガキ次第だ。」

話はそれだけか？　なら今日はもう帰るぞ。」

「わざわざ呼び出して済まなかったの。」

「ふんっ、

行くぞ姉様、茶々丸。」

「はい。」

こうして新学期を迎え穏やかでも僅かな闇を孕んだ日々を過ごし、

2学期を終え、3学期に入り何日かすぎた頃、

子供先生ことネギ・スプリングフィールドが来日した。

「エヴァ、早く起きないと遅刻しちゃうよ。」

「……………ん……………姉様あ……………抱っこ……………」

「

ズキューーン!!!!

(なん……………だと……………っ!?)

今のエヴァが……………甘えた声で抱っこ……………だと!?)

「そっだね！ 学校なんかどうでもいいよね、抱っこしよう！」

鼻から紳士汁を垂らしながらエヴァに抱きつき布団と3Pに入る。

「マスターもソプラノ様も早く起きて着替えてください。」

「……………ん……………茶々丸……………ねむい……………」

「……………今日は欠席と学園に連絡しておきます。」

「さあ、マスター、今日はもう寝ましょう。」

エヴァを起こすことを数分で諦め、欠席した私達だった。

神様から頼まれたお仕事。 その11（後書き）

11話目 投稿

これで、ネギ君が学園に来るまでの話が終わりました。

以降の更新は話のストックができたなら投稿というペースになります。1〜2日で1話ペースで作っているので、何か無い限りそれほど日は開かないと思います。

ここまでで何件か感想を貰いました、ありがとうございます。

色々指摘箇所がありました。地名等簡単に修正できる所は修正しますが、容易に修正できないところや、原作と少し設定が違う、などというところは、そういうものなんだと思って、生暖かく見ておてください。

それでは。

神様から頼まれたお仕事。 その12

翌日、学校に登校した私達の前に

憔悴しきった千雨が目に飛び込んできた。

「……………千雨……大丈夫？」

「……………ああ、先輩か……おはよう。」

「おい長谷川千雨、何だその顔は。昨日何かあったのか？」

「マスター、昨日は担任の教師が新しく赴任した先生に変わったという連絡を受けています。」

「ん？ 昨日変わったのか。」

「何？新しい先生がどうかしたの？」

幽鬼のようだった千雨が急に鬼のように変わる。

「……………どつもどつもねーよー!!」

なんであんなガキが教師なんかやってるんだよー!」

「お、落ち着いて千雨、ね？」

『おい千雨、こっち（念話）で話せ。 皆こっちを見てるぞ。』

『ああ、悪い。』

『何？ 事前に子どもが先生に来るかもしれないって連絡行っ
てな
かった？』

『連絡は来てたよ・・・確かに子どもが先生として赴任してきた・
・・』

『ただよう・・・あれはないだろう。』

『・・・そんなに酷かったのか？』

『酷いなんてもんじゃねーよ！』

あいつ本当に魔法使いか！？ 魔法の学校卒業したんだよな？

魔法隠す気あるのか!？」

『落ち着け千雨、とりあえず詳しく話してみる。』

『思い出すと頭が痛くなる・・・』

そう言うと千雨がポツポツと語りだした。

教室に入る時に障壁を展開して怪しまれ、早速神楽坂に詰問される。
双子姉妹の罫をコンプリートする。

授業後の歓迎会、生徒が見てる前で高畑先生に読心の魔法を使う。
その後神楽坂に報告していたことから早速バレてる可能性が濃厚。

だんだん興奮してきたのか口調が荒くなって所々罵倒の台詞が混入されたが

概ね この内容だった。

『あゝ……なんというか、大変だったな。』

『先輩達はいいよな、昨日は欠席してたから。』

こっちは、いつ巻き込まれて私のこともバレるんじゃないかと

一日中気が気じゃなかった……グス』

『あの……千雨、泣かないで、今日家に来ない？』

千雨の好きなご飯作ってあげようか？』

『先輩……私、もうダメかも。』

こんな生活が続くんだったら、

山にでも籠って一人で暮らしてたほうがずっといいよ。』

千雨の落ち込み方が半端じゃない、

私とエヴァ、茶々丸で千雨を慰め、しばらくしてようやく落ち着きを取り戻した。

『おい、あの千雨がこんなことになるなんてマズインじゃないのか？』

『だけど私達じゃ、どうにもこうにも……とりあえず学園長辺りに』

注意してもらおうと言っくらしいか……。』

『そうだな、今日一日私達が実際に様子を見てから』

放課後、ジジイのところにも行くわ。

……さすがに、このままでは千雨が哀れだ。』

『そつだね、私も一日でこうなるとは思わなかったよ……』

エヴァ・茶々丸と一緒に千雨を慰めていると鐘がなり

HRの時間になった。

『おい、早速来たようだぞ。』

『双子も今日は軽い畏のようだな。』

『昨日コンプリートしたみたいだから加減してるのかな？』

「き 起立——」

「気をつけ——」

「礼い——」

「「「「「おはようございます。」」」」」

「着席——」

『ふむ、今の所普通だな。』

『いいんちよに隈回避してもらってなかったら障壁展開したのかね？』

『昨日はあれで一発目からやらかしたんだよ……』

1時間目の英語の授業が始まり、今のところ平穩無事に進行する。

子供先生が教科書を読み進め、英訳を答えてもらおうと辺りを見回した……

「いまのところ誰かに訳してもらおうかなあ、えーと……」

自信の無い生徒が一斉に目を逸らす。

「じゃあアスナさん。」

「なっ……何で私にあてるのようっ!?!?」

『神楽坂が狙われたか……ん？ 神楽坂は何で名前と呼ばれてるんだ?』

『ああ、どうも学園長の指図であいつらの部屋に先生が同居してる

らしい。』

『……もう完全に魔法をバラす気なんじゃないのか？』

『でも、もう神楽坂さんにはバレてるらしいんだよね？』

学園長がそのまま部屋を変えないということは隠す気はないよね。

普通の魔法使いだったら、

もう監禁されて神楽坂さんも記憶操作されてるだろうし。』

『英雄の息子だから特別扱いなのか、引きこむ気なのか……はあ』

『もういい加減にしてくれ……私に普通で平穏な生活を送らせてくれ……』

(千雨ちゃん重症だな……)

「えーと……骨が……木の……」

「アスナさん英語ダメなんですわねえ。」

「アハハハ」

『あつ！ ちうたんが頭抱えだした！？』

『お、おい、千雨っ！ しっかりしろ！』

『・・・・・・・・・・』 #

『ち、千雨ちゃん、今は魔法関係ないって！！』

子供だからしょうがないだけで、まだ、大丈夫だよ！』

『そっだぞ千雨、大丈夫だから！』

『あ、神楽坂さんが先生に詰め寄った！？』

『これだけ大勢の前でガキに笑いものにされれば普通怒るだろう。』

子供先生に神楽坂さんが詰め寄った時に神楽坂さんの髪の毛が

子供先生の鼻をくすぐったのか、子供先生がくしゃみをしようとする
と……

「ハ……ハ……」

『まずい！ ガキの魔力が暴走するぞ！』

『ちうたんしっかりして！』

『アハハハハ……』

「ハクション!!!」

子供先生の魔力が暴発し強い風が巻き起こる。

先生の方を確認したら神楽坂さんの服が……

「ちよっ……アスナさん、何を突然 服を脱いでいるんですか！」

いいんちよの指摘で自分の状況を確認したのか……

神楽坂さんが子供先生を殺気を込めた目で睨む。

「こ……殺す！」

「ひっ……！」

子供先生が神楽坂さんにボコにされ、

落ち着いたところでジャージに着替える……が

終始、子供先生を睨み続けていた。

『なんというか・・・私も流石に神楽坂が気の毒になってきた。』

『共学の学校だったら、登校拒否起こしてもおかしくないよね。』

『私は明日から学校休む。』

エヴァ、別荘貸してくれ、3年くらいしたら戻るから・・・』

『なんというか・・・貸してやるから向こうで2〜3日休め、な?』

『私達が学園長に注意するように言っておくから、千雨は少し別荘でゆっくりしておいで・・・』

「・・・雲になりたい・・・」

重症の千雨を茶々丸に任せ、私達は学園長室へ乗り込んだ。

「おい!ジジイッ!! 何だあのガキは!」

「ヒョッ！ ネギ君がどうかしたのかわかる？」

「どうもどうもあるか！！ あのガキのせいでこっちは大変だったんだぞー！！」

「学園長、あの子本当に魔法学校卒業してるんですか？」

いくら子供と言っても酷すぎますよ。」

「詳しく話してもらえんかの・・・」

昨日からの一連の話を学園長に聞かせ、

神楽坂さんにすでに魔法がバレている可能性や、

このままではクラスメイトどころか世界中に魔法がバレかねない件や

私達にも影響が出て、このまま改善しないようなら

処分も辞さない旨を伝える。

「・・・ワシも 昨日高畑君から話は聞いていたがそこまでとは・・・」

「ごまかすなジジイ！ どうせ貴様のことだ、監視していたんだろ

う!？」

「……ムウ。」

「知っっていながら放置してこの様だと言っならば、私が直接手を下してやるっか!？」

「ちょ、ちょっと待ってくれんかのう！」

ワシからキツク言っておくから、もう少し様子を見てくれんか?」

「長くは待たんぞ！」

……と、いうか 千雨が……持たん。」

「学園長、本当に宜しくお願いします……よ?」

学園長室を出た後 急いで家に戻り、別荘で千雨の接待を開始した。

肉体的には13歳だが精神的にはすでに20代後半なので

お酒の入った接待となり、千雨が酒が入るとセクハラに走るといっ

新たな一面が発見され、茶々丸がひたすらお酌をし、

チャチャゼロが千雨を煽り、エヴァと私がセクハラの生贄となることなどなんとか

千雨は落ち着きを取り戻した。

（原作で知っていたとは言え、見るのと実際に巻き込まれるのでは
こつちも違うか。

でも、ネギ君の性格は原作通りだと確認できただけ 良しとするか。
)

その後、学園長から連絡があり、ネギ君の魔法を日常生活でくしば
らく封印し

魔法の暴走をなくすため、魔法の制御訓練と隠匿に関する授業を追
加し、

神楽坂さんへの謝罪と制服代金の賠償、

高畑先生をしばらく監視に置くことで様子を見ることとなった。

(原作より少し早いけど、魔力の制御方法を学ぶのは

早くて困ることはないから今の内からやってもらうのもいいよね。)

別荘から戻った所で超と葉加瀬が訪ねてきたが、学園長が注意する前に

魔法で惚れ薬を作り、大騒ぎになったと聞いた千雨が再度別荘に引きこもった。

超と葉加瀬には千雨のセクハラの生贄になってもらい、

私とエヴァはようやく眠りについた。

この日以降魔法が使えないことで、子供先生による魔法関係のトラブルは無くなり、

子供故のトラブルは頻発したものの、千雨の精神の安定は保たれた。

放課後の補習や高校のクラスとのドッジボール対決、等で

精神的にも少し成長し、

クラスの一部からも教師としてそれなりの信頼を得ていた。

3学期期末試験の少し前、

魔法が封じられた生活にもなれた子供先生がHRでおかしなこと
言いました。

「今日のHRは大・勉強会にしたいと思います。」

次の期末テストはもう すぐそこまで迫ってきています。」

・
・

・

・

「今度は何を言い出したんだ？」

「期末テストの日時なんて大分前から分かってるよね？」

「あのガキのことだ、どうせろくな事じゃねーよ。」

「マスター、期末テストは来週の月曜日からです。」

「それを私に言って、どうしろというんだ？」

「エヴァにゃんにも、もう少しテストを頑張ってもらいたいんじゃない。」

「なぜ私がそんな面倒臭いことをせねばならんのだ？」

「そんなの決まってるじゃない、

エヴァが良い点取らないと茶々丸の成績が悪くなるからでしょう。」

「エヴァも従者の気持ちを分かってやれよ、自分の主人が成績最低クラスなんて

従者としては恥ずかしいんじゃないのか？」

三人がかりでエヴァを責める、さすがに応えたのか、

だんだんエヴァが余裕のない態度になる。

「私はワザとそうしてるんだ！」

今更中学の試験などまともにやってられるか!？」

「エヴァはそれでよくても、周りはそうは思わないんじゃないかな？」

情けない主と、哀れな従者に見えるとか？」

「姉様といえど聞き捨てならんな、私が情けない主だと？」

よし、わかった！　そこまで言うなら次の試験は真面目に受けてやるう。

茶々丸、お前も本気でやって構わんから、私の従者として相応しい姿を見せてみる！」

「はい、マスター。」

私達が次の試験のことで話していると教室では椎名桜子発案の、

英単語野球拳が行われ、バカレンジャーが下着姿の上

さらに脱がされようとしていた。

「おい、ところであのバカ共は何で教室で服を脱いでるんだ？」

「何か、英単語野球拳を初めて集中的に狙われたようネ。」

エヴァの疑問に人ごみの方からやってきた超が答える。

「ん？ 超か、何でそんな下らないことをやっているんだ……」

「あのガキはどうして止めないんだ!？」

「何か考え後としていて気がついたら始まっていたようですよ。」

「葉加瀬も止めるよ……こんな事他の先生にバレたら

クラス全員居残りで掃除か何かやらされるぞ……」

雲行きがおかしくなってきたので、戦略的撤退行動に入る。

「……私、体の調子がおかしいので保健室に行ってきます。」

「ソプラノ様、私がお供します。」

「あ、ズルイぞ茶々丸！！ 先輩私が保健室について行くよ！」

「まて！ ここは妹たる私が行くこつ！」

「私、超人気者だね！ 今ならハーレム結成も夢じゃないね。」

「馬鹿なこと言ってないでさっさと保健室に逃げるぞ。」

「私も一緒に行くヨ。」 「私も一緒をお願いします。」

6人で保健室に駆け込み、当然のごとく私以外追い返された。

翌日教室に入ると、いいんちよがクラスの皆に詰め寄り大騒ぎしていた。

「なんですつて！？ 2・Aが最下位脱出しないとネギ先生がクビに~~~~！！？」

ど、どうしてそんな大事なこと言わなかったんですの！ 桜子さん
!?!」

「あぶぶっ だって先生に口止めされてたから。」

「なんだ、あのガキとうとう首になるのか。」

おい、茶々丸昨日の話は無しだ、今回も適当にやれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした、茶々丸。」

「エヴァにゃん！茶々丸は都合が悪くなるとすぐに前言を翻す主に
呆れているんだよ。」

「なんだと！ 私が悪いというのか？」

「だって、考えても見なよ、

昨日と今日で言うことが違う主を従者が尊敬すると思っ？」

お姉ちゃんはそんな言葉の軽いエヴァ嫌いだな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なん・・・・・・・・だと・・・・・・・・っ!」

「・・・・・・・・」

エヴァが顔を真っ青にして数歩後ずさる。

「ねー、茶々丸も嫌だよね？」

そんな言葉が軽い威厳のない主は。」

「・・・いえ、私はどのような 愚かな マスターにも従うのみです。」

「茶々丸、エヴァの従者なんかやめて先輩か私の従者に ならないか？」

「ガイノイドの私には一度登録されたマスターに逆らう権限はありません。」

それがたとえどのような 言葉の軽い、 威厳のない、 幼い金髪の幼女 でも。」

「茶々丸・・・」

3人でそろってエヴァを見つめる。

「なんだよ・・・やめろよ・・・そんな目で私を見るなよ。」
「――」

「どつするの、エヴァ？」

こんな 優秀で 忠誠心の高い 従者の期待にどう答えるの?」

「マクダウエル……もう少し茶々丸のことも考えてやれよ。」

「あ”あ~~~~もう!! わかった!

わかったから、ちゃんと今度のテスト真面目に受ければいいんだろ
う!」

我慢できなくなったエヴァがヤケクソ気味に答える。

「茶々丸よかったね、エヴァにもまだ従者を思っ心は残っていたよ
!」

「よかったな茶々丸、今日は私がゆっくりとネジを巻いてやるから。」

「御二人共……ありがとうございます。」

「何で私がこんな目に合わねばならんだ……」 Illorz

その日のHR、何時まで経ってもバカレンジャー+1 (木乃香)
と子供先生は

姿を表さず、HR直前に宮崎さんと早乙女さんが駆け込んできた。

「みんなー大変だよ！」

ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に……!!」

クラスが学年順位を上げることに絶望する中、高畑先生が代わりにHRを行った。

行方不明のメンバーは高畑先生が学園長に連絡し、搜索手配をすることです。

クラスの一応の動揺は収まった。

昼休みの屋上、

屋上に結界を張り、

いつもの4人+超と葉加瀬も一緒に食事を取る。

「今日は空が青いな・・・。」

「そうだな、雲も穏やかに流れて・・・雲になりたい。」

エヴァと千雨が老人のような、悟った態度で空を見上げ、

茶々丸が日が当たらないように日傘をさす。

なにやら あの3人の周りだけ老成した空気を醸し出している。

「ネギ坊主がいないだけでこうも違うものかね。」

「いや、超さん、バカレンジャーの5人もいないですよ。

ネギ君とあの5人+1がいないからですよ。」

「あの二人、よほどストレスを溜め込んでいたようネ。」

千雨、エヴァ達を見た超が不意にこぼす。

「エヴァさんは今朝の件があったと思いますが、千雨さんは色々ありましたからねー。」

「千雨は、いつ自分のことがバレるんじゃないかと

いつもビクビクしてたからねー、もう少し慣れるか、吹っ切ってもらうといいんだけど。」

「どうにかならないもの力？」

「うーん、荒療治はあるんだけど、

千雨が納得しない限り、あまりこの手段は使いたくないな。」

「荒療治ですか・・・？」

「・・・どんな方法か興味あるネ。」

葉加瀬と超が怪しい目で私を見つめる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・チヨット感じちゃう

「んー、私と仮契約を結ぶんだよ。」

私との契約は少し特殊だね、それをきっかけに千雨には吹っ切ってもらって

魔法使いとして、日常を送ってもらう方法もあるかな」と。

「今の千雨さんは、魔法を使える一般人 という認識だから

強引に魔法使いが一般の生活を送る という認識にさせるといってとかネ。」

「そんな感じだね、後は契約によって私の魔力が常時使えたり

アーティファクトができれば身を守る力になるだろうし・・・」

さらに怪しい感じになった超が質問を続ける。

「ソプラノと契約を結ぶと何か特殊な事が起こるのかネ？」

「超ちゃんはそういう事興味ありそうだね。」

「ソプラノ自信にも興味津津ネ。」

「超ちゃんみたいな娘にそんなこと言われると、

お姉ちゃん、超ちゃん欲しくなっちゃうな。」

私と超がお互いを怪しく見つめ……不意に微笑む。

「フフ、今日のところは深く聞かないネ、

情報の対価として私自身が要求されそうだからネ。」

「ちえー、前の口止め料と合わせたら、超ちゃんGETできそうだったのに。……残念。」

「危なかったヨ……」

「今日はお預けか。」

まあ、私との契約がどういう効果なのかは、

実際超ちゃんが体験してからの楽しみということだ。」

「それまで楽しみにしておくヨ。」

「……葉加瀬もね」

「えっ？ 私もですか!？」 // /

「葉加瀬も狙ってるんだけどな。」

「そ、そっつうのは……ちょっと……」 // /

「あれ？ 私が男の娘だつて知ってるよね？」

ピクッ

超の頬が少しだけ動く。

葉加瀬はあからさまに動揺する。

「ほらね。」

「・・・やはり 茶々丸は露骨すぎたかネ？」

「そりゃ、茶々丸がどんなにプライベートのプロテクトかけてても

超や葉加瀬ならその気になれば抜くだろうからね。」

「いや、そういうの というのは、

同性でそういう関係になるということでは無く、

肉体関係とかそういう事はまだ早いというか、お互いをよく知って
からと言いますか・・・」 / / /

「あれま、勘違いだったか？」

でも、知りたいことは知れたからいつか。

葉加瀬も研究ばかりかと思ったら以外にそっち方面の興味も？」

「~~~~~！」 / / / /

「それで、どうするネ？」

「別にどうもしないよ、エヴァも気がついてるし、

その上でエヴァも私も何もしてないでしょ？」

「……でも、私の恥ずかしいところも見てるよね？ それはちょっと許せないな。」

超の体全体を舐めるように見つめる。

「……こういう事はお互い同意で行為に及ぶべきだと思うネ。」
/ /

「私も変態だけど、紳士を自称してるので。

無理矢理もいいけど、お互い愛がないと引いちゃうからな。」

「……とりあえず貸しにしておくよ。」

いずれ同意の上、超の恥ずかしい姿を見せてもらおうというので。」

「……なんかすごく大きな貸しを作ってしまった気がするヨ。」

「あ、もちろん葉加瀬もね。」

「わ、私もですか!？」 / / / /

「ここまで来ると、ワザと見せつけてくれたような気がしてならないヨ……」

「そつちの話は終わったか。」

この変態姉は堂々と浮気の話を進めおって……

「今日はエヴァにゃんは静かだったね。」

「千雨があんなになっていては、私が騒ぎ出すわけにも行くまい。」

千雨と茶々丸は真っ赤になって頭から煙を吹き出している。

「あゝ途中から聞いてたのか。」

「聞いてたも何も、聞かせてたような気がするが……」

「千雨には直接話すのもいいけど、

間接的に聞かせて考えさせるのもいいかなと思って。」

「まあ、何でもいいが 浮気は認めてないからな！」

「と、いうことはエヴァンジェリンは本気なら認めてくれるのか。」

超がここぞとばかりに私にしなだれ掛かってくる。

「ちゃ、超、ちょっと待った！ 今はまずい!？」

「本気も浮気も認めるか！ バカ共があゝゝ!!！」 #

エヴァに追い掛け回されボコボコにされる。

「やられっぱなしだったからネ、ちょっとすっきりしたヨ」

神様から頼まれたお仕事。 その13

3学期、期末試験当日。

「せつかく私が試験を真面目に受けてやるつというのに、バカ共とガキはボイコットか。」

いい身分だな……。」

「まあまあ、子供先生達がいようがいなかつが関係ないからいいじゃない。」

「マスター頑張ってください。」

「ふん、誰に物を言っているのだ？」

この私が中学程度の試験で醜態を晒すわけがないだろう。」

「……これは、フラグを立てているのか？」

「そうだよね、明らかにフラグ立てたよね。ちつたんは試験勉強大丈夫？」

「ちつたんって言うな。」

私は、それなりに大丈夫だよ、先輩。」

試験担当の先生が教室に入り、試験の説明をしている時、
窓際で椎名さんや村上さんが、外を見て騒いでいる。

「あつ、見て!!」

「アスナーっ」

早く早く~~~~っ

始まつちやうよー!」

「バカレンジャー+3は間に合ったみたいだね。」

「……っち、こなくていいんだ。」

「っていうか、完全に遅刻じゃねーのか？」

試験受けさせてもらえるのか？」

担当の先生がプリントを配りながら注意をする。

「はいはい、静かにしなさい。」

あまり騒ぐようだったら試験妨害とみなしますよ。」

遅刻してきた8人は別室で試験を受け、

私達はそのまま教室で試験を受けた。

当初の公言通り、エヴァ、茶々丸は今回は真面目に試験を受けているように

国語や社会でエヴァが異様に張り切って解答欄を埋めていた。

後日、クラス成績発表、答案用紙の返却日。

クラス成績はエヴァ、茶々丸やバカレンジャーが、いつもより成績を上げ

もともと学年上位者が多数居たため、途中で集計ミスがあったもの
私達のクラスは、見事学年トップの得点を出した。

その後教室で答案が返却される・・・

「なぜだ!!」

なぜ私が茶々丸よりも点数が下なんだ!？」

「フラグ回収お見事です。」

「訳の解らんことを言うな千雨!!」

なぜ歴史のこの答えが間違いなんだ!!」

私はこの時京都にいて、実際に見たんだぞ!!」

「あゝそのせいだよ、ほら 教科書を見ると茶々丸の方が正解にな
ってるじゃない。」

「ならば教科書が間違っているんだ!!」

私は、実際に この目で 見たんだぞ!!」

「そう言っても歴史にはこの通りに残っているんだから、

エヴァも諦めなよ、こればかりはしょうがないって。」

諦めきれ無いか、なおもエヴァが食い下がる。

「私の方が正しいのに誤って伝えられたせいで従者の下につけと
うのか!? 姉様は!」

「今回は特別なんだって、何もエヴァが茶々丸の下だなんて思っ
てないから・・・」

「長く生きてるところこういう事もあるんだな。」

まあ、真実に近いのはエヴァだが試験としてみたら茶々丸の方が上
だということだな。」

「千雨も余計なこと言わないでよ・・・」

「うがぁ~~~~っ!!!」

納得がいかん!! 貴様ら付いて来い! 文科省に文句を言いに行
くぞー!!」

殴り込みにも行くかのような気迫でエヴァが立ち上がり出て行く
うとするのを

3人で押しとどめる。

「エヴァも無茶言わないでよ、文句を言いに行ったって聞いてくれないって。」

「実際此処に生き証人がいるのだ！ 聞かざるを得まい。」

「お前みたいな少女が」その時生きてました「って言っても

子供の妄想扱いされるに決まっているだろう。」

「しかしこのままでは私の主としての面目が・・・」

「マスター、私はマスターが正しいと分かっています。」

マスターは私の誇りですから安心してください。」

「・・・む、しかしだな・・・」

茶々丸の説得でエヴァが折れそうになる、ココぞとばかりに私達は
畳み掛ける。

「私もエヴァが正しいって分かっているから、ね。」

今日は皆でおいしいものでも食べて、パーツと騒ごうよ。」

「そうだが、今日は超の店にでも行って、おもいっきり食おう。」

「……しょうが無い、貴様らがそこまで言っのなら……
それにしても納得がいかな……」

放課後、超に連絡を入れ席を予約してもらい、

今夜は皆で盛大にパーティーを開いた。

私達以外の生徒も寮でパーティーを開いていたようで

翌日の授業は 皆疲れきって散々なものとなった。

試験も無事 (?) 終わり、残るは終業式や春休みとなった頃、

私とエヴァは学園長から話があるという事で、学園長室に着いて
いた。

「何だジジイ、私はこれからポケ　ンの育成で忙しいんだ、
用事があるならさっさと見え。」

「ふおっふお、それは次の対戦が楽しみじゃの。」

(・・・え？　学園長もやってるの!?)

「それはそれとして、今日は少し頼みというか聞いてほしいことが
あつての。」

「なんで私達が貴様の頼みなど聞かねばならんのだ。」

「そんなこと言わんで、とりあえず話だけでも聞いてくれんかの?」

「まあ、いい。聞いただけ聞いてやるから一番いい茶を出せ。」

「うむ。用意してある。」

学園長は高畑先生に指示し、用意してあつたお茶と茶菓子を並べる。

「それで話というのはじゃな、ネギ君のことなんじゃ。」

「帰るぞ、茶々丸、姉様。」

「ヒョッ、ちょっと待ってくれんか、話だけでも聞いてくれるとさっき言わなかったかの。」

「あのガキが絡むとろくな事にならんことは 今までのことで分かっている。」

「とりあえず聞いてくれんか……」

「……っち、さっさと話せ。」

「う、うむ。 簡単にいえばネギ君と魔法で戦ってもらって経験を積ませて欲しいんじゃ。」

「そんなもの、貴様らの誰かでやればいいじゃないか、

そこの高畑とかで十分じゃないか。」

「僕じゃ、どうしても甘さが出てしまうので彼のためにならないんだよ。」

高畑先生が恥ずかしそうに答える。

「分かっても出るようじゃ救いようがないな……」

それで、経験を積ませると言う事は潰さない程度にボコボコにすればいいのか? 「

「言い方は悪いがそんな所じゃ。」

彼は魔法学校でも主席で卒業し、周りからも少し甘やかされた面がある。

実際に彼の魔法の腕は戦闘に突出している物の、それなりの腕じゃ、それ故に、天狗 とまでは言わんが妙に魔法に自信がある分 以前のように

何でも魔法に頼ったり、何かとあれはすぐ魔法を使おうとする所がある。」

「以前は酷かったからな、常時障壁を貼ったり肉体強化に頼ったりそれもあり神楽坂に魔法がバレ、罰として期間限定で魔法封印されていたな。」

エヴァがうんざりしたように昔のことを思い出す。

「そこで、エヴァに頼みというのじゃが、できたら正面から魔法で一度叩いた後

戦闘の技術でネギ君と戦って欲しいのじゃ。」

「また面倒な……」

「エヴァの察しの通り、自分よりも強い魔法使いはいくらでもいる

と言つ事を

分からせるのと同時に、魔法に頼ってばかりじゃダメだと理解してもらいたいんじゃない。

どちらか片方なら学園の魔法先生で問題ない。

その両方を 確実にこなせるとなると 少し心許なくての・・・」

「そこで私か、私ならそのどちらも問題なく、確実にこなせるからな。」

「ネギ君はエヴァが魔法使いだと知らんから、以前から学園の噂として流れてる

吸血鬼の話でも利用して、戦ってもらおうと思つての。」

「……………そうだな、私と姉様千雨が今後学園に一切通わなくても卒業証書を出すというのと、

以後この学園に一切関わらなくてもいいなら考えてやらんこともない。」

「それはちよつと……………のう」

エヴァがおもいつきり吹っかけた条件を提示し、学園長も困つた様子だ。

「この学園に通うようになってからろくな事がない。

ここらで以前の暮らしに戻って、のんびりと研究でもしていたほうが良いからな。」

学園長はエヴァや私との関係を友好に保ちたい、

エヴァはエヴァで 面倒な事はさっさと終わらせてのんびり暮らしたい。

この学園に通っているのも当初は千雨が心配だということ

私を通うから一緒に通っているということだけだ。

千雨も子供先生が来てからストレスが溜まっているので

学園に通わなくても卒業証書が貰えるとなったら

通わないと言い出しかねない。

(ん？ コレはチャンスか、ここで学園長に貸しを作っておけば

超や千草さんの時に一つのカードになるか。 となれば・・・)

「学園長、私がエヴァを説得しようか？」

「なっ、姉様！ なぜそこで姉様がジジイの側に立つんだ！！」

「ソプラノ君が説得してくれるなら心強いが・・・後が怖いとう。」

「さっきのエヴァよりは、安く済むお駄賃になると思いますよ？」

私がエヴァを説得してネギ先生と戦ってもらえたら・・・、

後で何かお願い聞いてほしいなあ。」

「・・・・・・・・それは僕が出来る範囲に収まる願いで済むかの？」

私の提案に学園長が警戒感を示す。

「大丈夫だと思いますよ。」

そうですね、せいぜいエヴァと私の家を建て直して欲しいとか、

夏休みの宿題免除して欲しいとか、お手伝いさんを雇いたいのので許可してくれとか

そんな感じで済む程度ですよ。」

ふむ、この話、先に例えに出した二つはどれも

その気になれば彼女達ならいくらでも好きにできる話じゃ。

それをあえて例えに出したということは最後の「人を雇いたい。」
コレが本命じゃろう。

彼女がこの学園都市内に入れたい人物とは？

世界樹の管理をしてる彼女じゃ、学園都市に害を与えることは考えにくい。

僕らに対してのスパイ？ 考えにくい、彼女の諜報能力は計り知れん・・・

実際本国の情報も把握している節がある。

この学園に追加でスパイや作業員が必要とは思いにくい。

ふむ、単純に知人と一緒に住みたい？

わざわざこちらに伺いを入れてくるような知人・・・

そもそも、彼女の知人というと エヴァや千雨君、エヴァの従者の二人以外に

クラスメイトの数人……コレくらいしかこちらの情報でも上がっていない。

ますますわからん……が、事前に儂に貸しを作って許可を得るくらいだから

それほど学園に害になる人物とも考えられん……

ここで下手に断ってエヴァが変な条件を言い出すか、断られるより今聞いておいたほうがよさそうじゃな……。

はあ、頭が痛くなるのう。

sideエヴァンジェリン

姉様のこの言い方……家は自分で好きなように作れる人だ、

宿題なんか元から人のを写してる、となると……また私の知らない浮気の計画か!?

しかし、私の知る限りそんな相手はいないはず……っ
!?

そういえば！ 姉様は長期休暇のたびに魔法世界に出かけていた、
そこで新しい女でも囲ったのか？

しかしそれならジジイに貸しを作る意味がわからんな、普通に連れてこればいい。

ジジイも個人で使用人を雇うといえば余程のことがない限り断れんはずだ。

と、いうことは余程の相手か？

うち、情報が少ないが、今ここで姉様の思い通りにさせると
ろくな事にならん気がする……、かと言ってガキのお守りなどや
りたくもない。

それに姉様に頼まれると断り切る自信もない、

ジジイの方からこの話をなかつた事にさせるのが最善か……

ジジイめ、厄介な話を持ち込みおって……

side ソプラノ

「おい ジジイ、姉様の話など聞くなよ！ どうせくなことにならんぞ！」

「酷い……エヴァ……。」

「マスター……。」

「……何だ二人共、その目は。」

「エヴァは無実とはいえ、昔賞金首で皆から悪く思われていた頃があつて、

そのままだとエヴァが生活しにくいと思ったから、

だから 少しでも良くなるように お姉ちゃん頑張つて、

エヴァが普通に生活できるように色々やってるのに・・・

エヴァはそんな風に思っていたんだね・・・私がろくな事をしないなんて・・・。」

「マスター、ソプラノ様がせっかくマスターの為に頑張ってくださいるのに」

それは少し言い過ぎだと思えます。」

「エヴァ君・・・僕もすこし言い過ぎだと思つよ。」

元担任教師としてもう少しお姉さんの事を分かってあげたほうがいいと思つよ。」

「エヴァ・・・妹を思う姉の気持ちを少し分かってやってくれんかのう。」

エヴァの周りは敵だらけ、まさに四面楚歌の状態だ。

「なんだ・・・私が悪いのか？・・・やめるよ・・・私をそんな目で見るなよ・・・。」

「エヴァ・・・お姉ちゃんがもう少しエヴァとお話して、エヴァの言うことも」

聞いて上げればよかったんだよね。

エヴァはいい子だから、お姉ちゃんが少し慌てすぎただけだよね。」

「マスター……」

「エヴァ君……」

「エヴァ……」

「………わかったよ!! やるっ! やればいいんだろっ!!」

「エヴァ!」

分かってくれたんだね! お姉ちゃんエヴァならきつと分かってくれると信じてたよ!」

私はエヴァに抱きついて頭を撫でる。

「姉様、苦しい……」 / /

「今日はエヴァの好きなもの作ってあげるからね!

夜も一緒に寝ようねっ!!」

「マスター……よかったです。」

「エヴァ君……信じてたよ。」

「エヴァ、いいお姉さんを持ったな・・・」

こうしてエヴァを説得（？）し、

ネギ先生の今後の為の模擬戦を仕組むことに成功、学園長に貸しを作ることができた。

・

・

・

「・・・・・・私が一方的に損をした気分なんだが。」

「エヴァには仕事が終わったら私が何かしてあげるから、機嫌直してよ。」

「本当だろうか？」

「あまり無茶なことと言わないでね。」

「じゃあ、これが終わったら アノ方法 で血を飲ませろ。」
／
／

「アレかー、痛いけどエヴァのためだからしょうがないか。」
／
／

「よし！、約束したからな！！」

「わかったから落ち着きなさい。」

その後学園長や高畑先生を交え、シナリオを作り、模擬戦を行うのは

新学期が始まりしばらく経った後と決まった。

新学期前日

双子姉妹が女子寮内で変な噂を流した結果、子供先生を追っかけ回す女子生徒達、

その頃、千雨は自室でHPの更新作業をしていた。

(・・・うるせーな、こっちは次の更新のネタ考えるのに苦労してるってのに。)

何バカ騒ぎしてるんだよ・・・ったく。)

メガネを掛け直し、千雨は外に様子を見る為部屋の扉を開けた所、
出会い頭で超と葉加瀬と鉢合わせた。

「おっ・・・と、悪いな。・・・超に葉加瀬？」

「こちらこそ。」

「それで？ この馬鹿騒ぎはなんなんだ？」

「どうやら鳴滝姉妹が変な噂を撒いた結果らしいんですが・・・」

「どうも、噂ではネギ坊主がどっかの小国の王子らしくて

この学園に着たのはパートナー探しが目的らしいヨ。」

「はあ？　なんだそれ。　そんな話真に受けてこの騒ぎか？」

「どつやらそのようです・・・」

「ウチのクラスはお祭り好きだからネ。」

「はあ・・・くだらね！」

しかしこの騒ぎだと落ち着いて作業もできないな、先輩の所にも行くか。」

「千雨サンはもうパートナー決まってるから余裕だネ。」

「ぶふうう〜っ!？」　／／

「そうですね、千雨さんのパートナーに関してはあの人しか考えられませんから。」

「わ、私は先輩とそういう関係になりたいなんて思っただけぞ！」

「語るに落ちたネ。」　「落ちましたね。」

「・・・・・・っ〜!」　／／

「私達が言うことではないが、もうそろそろ腹を括ったらどうか？」

ソプラノも心配していたヨ。」

「そうですね、この間の屋上での話、千雨さんも聞いていましたよね？」

「・・・・・・・・・・」 / / / /

「千雨サンも 魔法を習った時に薄々は分かっているはずネ、

一般人のままではいられないと。」

「・・・・・・・・でも私は、魔法使いとしてなんて生きたく 無いし。」

「あの人は千雨サンにそんなこと望んでないと思うヨ。」

「そうですね、あの人が千雨さんに望んでいることは、

千雨さんに好きなように生きてもらう事と・・・・・・・・あとは少しエッチな事くらいでしょうか？」 / /

「・・・・・・・・・・」

「魔法使いで一般の生活をしてる人だつて大勢いるヨ。

いつまでも意地を張っているより、割りきってソプラノにキスでもして仮契約してもらおうネ」

「な、なんで急にそこに飛ぶんだよ!!」 / / /

「ソプラノは間違いなく 『変態』 ネ、

このまま千雨サンがウジウジと時間を引き伸ばすと身体が成長してソプラノのストライクゾーンを外すことになるネ。

そうなるってエヴァの一人勝ちになってしまうヨ。」

「そうですよ、今の内にせめて仮契約を結んで

エヴァさんとの差を縮めておかないと、後で後悔することになりますよ！

これは彼女の行動パターンから科学的に分析しても明らかです！！

「……何かスゲー納得できるような、できないような。」

「ちょうどいい機会ネ！ これを使って一気にチューして仮契約するといいヨ！！」

超が懐から怪しい球体を持ち出し、千雨に渡す。

「なんだよ、これ？」

「コレを地面に叩きつけると仮契約の魔法陣が展開されるネ、効果時間は5分くらいの簡易型だが、使用には問題ないヨ。」

「何でテメーがこんななもの持つてるんだよ！？」

「そんなことは今はどうでもいいネ！

エヴァンジェリンも今日は学園長とポ モンの交換をしてるはずだ

ヨ、

今すぐソプラノの所に行けば誰にも邪魔されないネ!!」

「そうですねよ! さあさあ、逝きましょー!」

「どこに逝かすつもりだよ!

ちょよ、引つ張るな! 別に今日じゃなくてもいいだろう!」

「何言ってる力! 思い立ったが吉日という諺もあるネ、

ここで一発決めなかったら、千雨サンのことネ、どうせ先延ばしにするに決まってるヨ。」

「そうですね、今までの千雨さんの行動を分析するとそうなるに決まっています。」

「ま、まで! 別に方法はキスじゃなくてもいいだろう!」 / /

「何言ってる力! もう一回やってるから1回も2回も同じ事だヨ。」

「ちがつ! あの時は気が動転して・・・っ!

って! 何でお前らが知ってるんだ!」

「茶々丸のデータに動画が保存してあったネ。」

「あのクソロボがああっつあああああ~~~~!!」 #

「途中までソプラノさんが誘導してましたけど、

結局最後は千雨さんの方からしてましたよね！」 / /

「うあああつあつあああああつあ〜〜〜！！！！！！」 / / / /

「さあさあ、時間も無いし さっさと逝くヨ！」

「逝きましようー！」

超と葉加瀬が二人でエヴァの家に千雨を引きずっていく。

そしてドアを蹴り開ける。

『パンツ！』

「「お邪魔するヨ（！）します（！）」「

「……………え？ 何？」

「今日はお日柄も良く、良い仮契約日和ネ。」

「……………は？」

「今日は千雨さんがソプラノさんと仮契約を結びたいと言いましたので連れてきました！」

顔を真っ赤にした千雨が二人に両腕を拘束されている。

「……………（ボツ）」 / / / / /

「千雨さんがソプラノと仮契約を結びたいけど、

踏ん切りがつかないようなので強引に連れて来たヨ！」

「え？ 千雨 私と仮契約……結びたいの？」

「ちっ！ 違っ！？ ……」 / / /

「何言ってる力！ もう心は決まってるくせ二！」

「そうですよ！ ここまで着て恥ずかしかがってやらなかったら女が廃りますよ！」

「千雨……………（ニヤ） やっと私のモノになってくれる気になったのね！！！」

「……………モノっ！？」

「さあ、やりましょう！ 今すぐやりましょう！ 千雨を私のモノ

にしましよー!」

「あ……ああ、そうネ、すぐに準備するからこの娘捕まえて欲しいネ。」

超は私に千雨を押し付けてきたので逃がさないように正面から抱きしめる。

私と千雨の身長は、千雨の方が高いので、千雨が私を見下ろす形になる。

その間に葉加瀬と超がボールのようなものに叩きつけると

その場に仮契約の魔法陣が展開された。

「さあ、準備完了ネ! この魔法陣は5分しか持たないから早くするネ!」

「さあ、超さん私達は向こうに隠れていきましょう、こう言うのは雰囲気大切ですから。」

千雨にとっては雰囲気も何も最悪の状態である。

「千雨……」

「……先輩。」

「千雨が本当に嫌なら、ここで止めてもいいのよ?」

「……………」

「……………千雨。」

私は千雨を抱く力を少し弱める。

「あつ……………先輩……………」

「本当に嫌ならこのまま私を突き飛ばして逃げてもいいよ……………」

「……………イヤ……………じゃ、無いんだ。」

「……………このまま魔法の世界に入ったら、今までの生活、世界が壊れ
そうな気がして……………」

「大丈夫、魔法使いになっても普通に生きていられるよ。」

私も手伝ってあげる、千雨が望むなら、どんな形の未来も手に入る
から。」

二人で お互いをしばらく見つめ合う……………」

「先輩から……………してくれないか? 私を先輩のモノにしたいんだ

る？」

「ダメ……私は千雨を私のモノにしたいと思ってるけど……正確には違う。」

千雨に私のモノになって欲しい。

千雨はどう？ 私のモノになりたい？ それとも 私をあなたのモノにしたい？」

「……………わからない、両方のような気もする。」
//

「欲張りな娘ね なら私を千雨のモノにしてみなさい、そして私のモノになって。」

目を瞑り、そつと唇を千雨の方に向ける……

「センパイ……………んっ……………っ！」
//

「……………んっ……………ちゅ……」
//

魔法陣が光だし二人が光の粒に包まれ……一枚のカードがその

場に落ちる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・ぷはっ・・・・・・・・！」 / / /

「・・・・・・・・・・・・・・・・フッフ・・・・・・・・息は止めなくてもいいのよ。」 / /

「・・・・・・・・・・・・・・・・」 / / / / /

「ん？ アーティファクトが出たみたいね、どちらが主かな？」

落ちていたカードを拾い、確認するとそこにはコスプレの衣装を着た千雨が

描かれていた、某魔砲少女のバリアジャケットにも似た衣装で

超に以前作ってもらったレイ八さんにカートリッジが付いたようなデザインだ。

「千雨の姿が写ってるということは私が主ね。」

どうやら千雨は私のモノになりたい願望の方が強かったのかな？」

「・・・・・・・・・・っ！」 / / /

真っ赤になる千雨、それでも一向に私から離れようとしぬい処が可愛
い

そんな様子で二人でいちゃついていた時・・・

「すごかったですね！ 超さん！！」 // /

「私とした事が、チョット興奮したヨ・・・」 // /

部屋の隅の方から2人が出て着た。

「あ・・・あう・・・」 // /

「千雨サンよかったですネ。」

「よかったですね、コレで悩みも少し解消できたし、エヴァさんとの差も縮まりましたよ。」

「それにしても、ソプラノといい千雨サンといい、言う事や、やる事が一々変態っぽいネ。」

『千雨に私のモノになって欲しい。』とか『・・・わからない、両方のような気もする。』とか

中学生の私には少し刺激が強すぎるヨ。」 / / /

超は懐から取り出したレコーダーで先程の会話を再生しながら話す。

真っ赤になった千雨が慌てて取り上げようとするが、超にかわし続けられる。

「おいっ！ よこせ！！ なに勝手に録音してるんだ！！」 / / /

「さっきの仮契約の魔法陣の代金ネ、後で動画と一緒に編集してDVDにして

千雨にも渡すから安心していいヨ、ちゃんと最高画質で録画済みネ

「ばっ！ バカ！！ 消せっ！ 今すぐ消せっ！！」 / / / /

「コピーして配布したりしないから安心していいヨ。」

「そういう問題じゃねーんだよ！！」 / / /

「千雨さんよかったですね。」

「まあ、これで少しは吹っ切れて学園生活が楽しく過ごせるようになったらいいね。」

その頃、学園長と交換したポモンを育てているエヴァ達は……

ピキーン

「……ムツ!?!」

「どづしたんじゃ?」

「今、姉様が浮気をした気がする!?!」

「マスター……熱はないようですね。」

「あるわけないだろう!?!」

「そうですか。」

「何か……強大な敵が姉様を籠絡しようとしている気が……」

「……学園長、すみませんがマスターはこれから精神科に行くので今日はこれで失礼いたします。」

「ん、わかった。お大事にの。」

「まで、茶々丸！ 私はそんな所に行く必要はない！！」

今すぐに姉様に会って確認しないと！！」

「マスターは少し疲れているんです、少しお休みになれば大丈夫ですよ。」

「だから違つと言っているだろうがあゝ！！」

神様から頼まれたお仕事。

その13（後書き）

13話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その14

3年生に無事進級し4月、始業式を迎える。

学園への登校時

「ごきげんよう、エヴァンジェリンさん。」

「………変なもので食ったか？」

澄み切った青空の元、爽やかな朝の挨拶に毒舌がこだまする。

穢れきつた心身を包むのは茶色のブレザー。

スカートは乱れ、下着をはだけさせるのが ここでの嗜み。

遅刻ギリギリで走り去る生徒などといった はしたない生徒だらけ。

麻帆良学園 本校女子中等部……

「もついいから黙れ。」

「……………エヴァンジェリンさん、性根が、曲がっていてよ？」

無言でエヴァにボコボコにされる。

始業式は保健室で迎える事となった。

ふと横を見ると、クラスメイトの佐々木さんが体操服で眠っている。

以前、学園長と計画したネギ君、ボコボコ作戦の決行日が本日から
ということ。

思い出したが……………春の陽気でどうでも良くなったので 眠るこ
とにする。

しばらく居眠りをしていると、子供先生としずな先生、

それに一部のクラスメイトが保健室に駆け込んできた。

「ど……どーしたんですか まき絵さん……と、ソプラノさんも!？」

「まき絵さんは桜通で寝ているところを見つかったらしいのよ。」

ソプラノさんはエヴァさんが 「いつもの発作だから放っておけ。」
と言っていたわ。」

「何だ大したこと無いじゃん。」

「甘酒飲んで寝てたんじゃないかな？」

「昨日暑かったし、涼んでいたら 気を失ったとか……」

鳴滝姉、椎名さん、近衛さんが三者三様の感想を話す。

(桜通りで……?)

子供先生が、佐々木さんを観察するが、異常を感じたようだ。

(い……いや、違うぞ！)

ほんの少しだけど……確かに 「魔法の力」 を感じる……)

私は途中で目が覚めたが狸寝入りをしながら、

子供先生の様子を観察する。

(子供先生、エヴァが残した微量な魔力に気がついたようだね。)

急に黙りこみ考えこむような様子になった子供先生に

心配になったのか、神楽坂さんが声をかける。

「ネギ　　ネギ！」

ちよつとネギ、なに黙っちゃってるのよ」

「あ、はいはい、すみませんアスナさん。

まき絵さんは心配有りません。　ただの貧血かと・・・

それとアスナさん、僕　今日帰りが遅くなりますので　晩ご飯いり
ませんから。」

子供先生は神楽坂さんにそう言うと、保健室から慌てたように退室
する。

私はその様子を寝た振りをしながら観察していた。

（さて、餌に食いついたか。

あとは今夜エヴァがうまくやれば第一段階はクリアかな。）

いずれエヴァも子供先生が餌に食いついたことに気がつくと思うが念のため、エヴァに念話で連絡をすることにした。

『ごきげんよう、エヴァンジェリンさん。』

『……なんだ、まだ仕置が足りなかったのか？』

『エヴァンジェリンさんの根性が曲がっていてよ。』

『よし、帰ったらは・3でお仕置きだな、姉様。』

『ごめんエヴァ！ あれは後半変な気分になるから堪忍してえ』
『。』

『……それで、なんのようだ？』

『……お仕置きは許してね。』

それで真面目な話なんだけど、子供先生が餌に食いついたよ。』

『ほう、思ったよりも早かったな。』

『ちょうど今保健室で佐々木さんを調べていったよ。』

『わかった、今夜のお仕置きは勘弁してやる。』

ぼづやの子守があるからな。 ククク』

子供先生を生贄に差し出すことで

私のお仕置きは回避された・・・ありがとう！ 子供先生！！

今日からはちゃんとネギ先生って呼ぶからね！

始業式終了後、生徒は帰宅する者や、部活動に参加する者など、それぞれが

思い思いに行動し、学園都市は活気にあふれる。

そうして日も沈み始めた頃、私とエヴァ、茶々丸が

桜通りからやや離れたビルの屋上に集まった。

「それじゃあエヴァ、もう少し暗くなったら桜通りで待機してね。」

「ああ、わかったが……しかしあのジジイの酔狂もホドホドにしないといつか痛い目に会っぞ。」

こんなことせずとも 呼び出してボコボコにすればいいんだ。」

「計画を練るときはエヴァもノリノリだったじゃない。」

「いざやってみるとなあ……面倒くさくて。」

「もう……いい、桜通りで適当に通った女子生徒を襲って、

ネギ先生が出てきたら広場に誘導、

その後学園長が施設に障壁を張るから、あとはエヴァが魔法でボコボコにする。 OK?」

「ああ、わかった。面倒臭いがしょうが無い。」

「……もう少しやる気出してよ、

ここで下手にネギ先生に粘られたりしたら、元も子もないんだから。」

「そつは言っがな、大佐。」

「……ポケンのセーブデータ消されなくなったら真面目にやりなさい。」

「ま、まで！ ようやくバッジを6つ取ったんだ！」

「じゃあ、真面目にやりなさい。」

「わかった！ やる！ 真面目にあのガキをボコボコにするー！」

「エヴァが素直な子でお姉ちゃんうれしいわ。」

「ああ、姉様セーフデータのために最高の結果をだそう！」

「・・・まあ、いいわ。 エヴァ頑張ってね。」

「では、マスター、広場でお待ちしています。」

私は茶々丸と一緒に広場へ向かい、

途中、学園長に念話で配置についたことを伝える。

広場の所定の位置に付き、あとはエヴァが来るのを待つのみとなったので

茶々丸と雑談しながら待っていた。

「茶々丸最近体の調子はどう？ 超に変なことされてない？」

「ボデイの調子は良好です、ソプラノ様や姉さんのおかげで

初期の段階より性能は8%上がり、

戦闘経験に関しても予定より12%ほど早く、プログラムを消化しています。」

「そう、よかった。じゃあ何か困ったことはない？」

「重要な案件は有りませんが、猫が増えたため、

猫の餌代やトイレの砂代が かさんでいることくらいでしょうか。」

「じゃあ、もう少しお小遣い増やしてあげるけど、あんまり甘やかしすぎてもダメだよ。」

あと、去勢や避妊してない猫を見かけたら早めに処置すること。」

「わかりました、ソプラノ様。」

「茶々丸が優しいのはいいけど、下手に猫を増やしたせいで苦情が増えて

保健所が猫を捕まえに来た、なんて嫌でしょう？ 気をつけてね。」

「お気遣い感謝します。」

ですが私はガイノイドなので優しいという表現は適切ではありませんせん。」

「……ふむ、では茶々丸、あなたはなぜ猫に餌をあげてるの？」

そして普通に流せばいい 優しい という言葉に反応して、なぜ訂正を求めたの？」

「それは……申し訳ありません、適切な答えを出せません。」

「そう、じゃあ、宿題にしておくから、いずれ聞かせて頂戴。」

「わかりました、ソプラノ様。」

(今はまだ焦らなくていいか、少しずつ育っていくのを見守っていいのかな。)

茶々丸との会話から、茶々丸の心が少しずつ育っている感触を掴むことができた。

超や葉加瀬がこの会話のデータを聞いたら喜ぶことだろう。

そうして茶々丸と話している内に、向こうからエヴァがネギ先生を引き連れてやってきた。

「待ちなさいーい！

エヴァンジェリンさん、どーしてこんなことするんですか！

先生としても許しませんよー！」

「ふん、ここら辺でいいだろう。」

ネギ先生を引き連れたエヴァが広場に降り立ち、続いてネギ先生も降りる。

それに合わせて学園長が建物に障壁を貼り被害が出ないようにした。

準備ができたことを確認したエヴァが臨戦態勢に入る。

「さて、私がどうしてこんなことをするのか？ だったか。」

答えは簡単だ、血を吸うためだ。

さっきも言ったが世の中には

魔法を良い事に使う奴もいれば悪いことに使う奴もいる。

そして吸血鬼の私が血を吸うために魔法を使えば、一般的には悪となる。

さあ、ネギ先生、生きるために血を吸い、

そのために魔法を使う私を先生はどうするのか？」

（またエヴァの悪い癖が出た・・・魔法で倒すだけでいいのに

精神的にもボコボコにするつもりか・・・)

「うう・・・で、でも魔法を使って人を襲うことは悪いことなんです！

エヴァンジェリンさんも人を襲うのはやめて下さい！」

「ならばネギ先生は私に死ね、ということか。」

「そんなことは言ってますん！」

人を襲うのをやめて欲しいんです。」

「しかし、私は血を吸わねば生きていけないぞ、つまり死ねということだろう。」

「そういう事じゃなくて・・・。」

エヴァの問に答えを出せないネギ先生が考え込む。

落ち着いて考えれば、幾つかの妥協案を提示できる問なのだが

魔法学校で偏った教育を受けたネギ先生には答えを出せないようだ。

そうして思考の迷路にはまっている間にエヴァが挑発を始める。

「ほら、どうしたんだ先生、血を吸うために宮崎を襲った私を許せないんじゃないのか？」

吸血鬼の私を退治するんじゃないのか？」

「ううう……っ」

「ほら、どうする？ 何もしないなら私は戻って宮崎のどかの血を吸うとしよう。」

「……っ！ ダメです僕の生徒は襲わせません！！」

ラス・テル・マ・スキル・マギステル……」

宮崎さんを襲うというのが引き金になったのか、

答えを出すことを止め、エヴァを止めるために攻撃をしようとする。

「魔法の射手 連弾・光の11矢！！」

「それが答えかほーや！ 八八八！ 氷楯！」

ネギ先生の魔法の射手がエヴァに向かうが、エヴァが出した氷楯にあっさり止められる。

「な、僕の魔法があんなに簡単に止められた・・・」

「なるほど、先生の答えはよくわかった。」

だが私も命が惜しいのでな、ここで先生を倒すことにしよう。」

「・・・つく！ ラス・テル・マ・スキル・マギステル 来れ雷精
風の精！」

「ハハハ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来れ氷精 闇
の精！」

「え？」

「フフン」

「雷を纏いて吹きすさべ 南洋の嵐！」

「闇を従え吹雪け 常夜の氷雪！」

「雷の暴風！」 「闇の吹雪！」

エヴァとネギ先生が同種の魔法を撃ちあうが、一瞬こそ持ったものの

魔力の練りこみ、術の構成、基本的な魔力量すべてが上回る

エヴァの闇の吹雪があっさりと押し返しネギ先生の障壁を貫く。

「うあああああつああ~~~~~!!」

障壁を抜かれ、威力が減衰したものの間の吹雪の直撃を食らい
吹
き飛ぶネギ先生。

魔法の硬直が終わったエヴァが、止めを刺すために空に浮かぶ。

「さあ、先生止めだ！ 真祖の力、思い知るがいい!!」

「あ……ああ……!!」

同種の魔法であっさり打ち負けたため、

戦意を喪失し、怯えるネギ先生。

学園長や高畑先生も心配のようだが、ここまでは計画通りのために
動く様子はない。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い 我に従え
氷の女王。」

来れ とこしえのやみ えいえんのひょうが。」

ネギ先生を中心にあたり一面が極低温の空間が発生する。

エヴァがさらに魔法の詠唱を続ける。

「全ての命あるものに等しき死を。 其は 安らぎ也。」「こおる
せかい」！！」

エヴァのお得意、広域殲滅魔法が炸裂する。

今回は「こおるせかい」のため、ネギ先生の氷漬けが完成する。

「ハハハツハ！！ どうだジジイ見事にやり遂げたぞ！！」

エヴァが調子にのって高笑いをしている時、

すごい勢いでこちらに向かって走ってくる人影が見えた。

「ちょ……なにコレ……」 1111

勢い良く現れた神楽坂さんも流石に

あたり一面に立つ氷の柱に流石に驚いたのか、思考停止状態に陥る。

「何だ神楽坂か、何をしに来た？」

空に浮いたエヴァに話しかけられて、

ようやくエヴァの存在に気がついた神楽坂さんがエヴァに問い詰める。

「なによこれ・・・これ、エヴァちゃんがやったの・・・？」

そつだ！ ネギは！？ ネ・・・・・・・・ギ？

「ぼーやならその氷の中にいるだろう。ほら。」

「あ・・・ああつあ・・・・・・・・ネ・・・・・・・・ギ・・・・・・・・つ。」

「それでは、私の用事は終わったので これで失礼するぞ。」

放心状態の神楽坂さんを置いてエヴァは飛び去る。

あとに残ったのは氷漬けのネギ先生と放心状態の神楽坂さん。

その後、学園長が事前に渡しておいた解凍術式の魔法薬を使いネギ先生を解凍し

神楽坂さんを一緒に連れて連れて医療魔法使いが準備している場所へ移動していった。

こうして無事に死者も出ること無く ネギ先生ボロボロ計画 のフ
エイズ1が終了した。

「さて、ネギ先生と神楽坂さんも無事に学園長達に回収されたし

あとは任せて私達も撤収しましょうか。」

「了解しました、ソプラノ様。」

家に帰る前に、一応学園長に念話で連絡をしておく。

『学園長聞いてますか？』

『おお、ソプラノ君か聞こえておるぞ。』

『そちらの回収作業も確認したので、あとは任せてこちらは戻りま
すね。』

『うむ、了解した。あとはこちらで面倒を見るから

そちらは戻ってもらって結構じゃ。』

『はい……それにしても、予定通りとはいえ、エヴァも派手にやりましたね。』

『……はあ、少々派手にやりすぎじゃがな。』

おかげでこちらは今回の件に関与してない魔法先生を抑えるのに――
苦勞じゃ……』

『その辺は学園長にお任せしますよ。　言い出したのは学園長なんですから。』

『うむ、そこは任せてくれ。』

『それじゃあ、私達は明日は学園を休みますので。』

『うむ、一応周囲には警戒しておいてくれんかの。』

今回のエヴァの事は情報として流れてはおらんが

どこから漏れて暴走する魔法先生がいなかわからんからの。』

『了解しました。　次は発電施設のメンテナンスの日ですね。』

『うむ。』

『では、おやすみなさい、学園長。』

「じゃあ、茶々丸帰ろうか。」

「はい、ソプラノ様。」

夜が深まり、先程の戦闘で周辺が慌しくなってきた前に
茶々丸と私は家に帰った。

「ただいま。」

「只今戻りました。」

家に帰り居間に着くとエヴァと千雨がワインを片手に
そしてチャチャゼロが千雨の頭の上でくつろいでいた。

「ああ、姉様 戻ったか。」

「先輩、お邪魔してます。」

「ナンダ ソプラノカヨ。」

「……なに三人で飲んでるのよ。」

「仕事の後の一杯くらい構わんだらう。」

「・・・もう、私にも一杯頂戴。」

「では、私は何かつまみになるものを用意いたします。」

「ありがとうね、茶々丸。」

「オウ イモウトヨ チーズヲワスレンナヨ。」 「わかりました姉さん。」

茶々丸がキッチンに向かい、私は千雨に渡されたグラスにワインを注いでもらい、

4人で軽くグラスを重ねた。

「それにしてもエヴァ、いくらなんでもあれは酷くねーか？」

「何を言っている、氷漬けにただけではないか。」

殺すつもりなら氷を砕いているぞ。」

「ゴシユジンモ アマイゼ、ゼンゼン チガ ミレナカッタ ジャネーカヨ。」

「いや、アレ私も前に食らったけど、かなりキツイぞ。」

・・・軽く数日寝込んだし。あの子供先生にはやりすぎな感じがするぞ。」

「調子に乗ったガキの鼻を折るには、あれくらいやったほうが効果的なんだ。」

「言いたいことはわかるが、トラウマになって

下手したら明日から学校にこなくなるんじゃないのか？

教師が登校拒否とか洒落になんねーぞ。」

「そうだったらそこまでのガキだったということだ。

今ここで五体満足で手を引かせたほうが 将来的にガキのためになる。」

二人は少し間を開けてワインを口に含む。

「ネギ先生のことは学園長に任せて、今日はもうのんびりしましょ。」

「そうだな、あのガキがどうなるのが興味がない。」

「まあ、学園長に苦労してもらおうか。」

「みなさん、オツマミができました。」

「オウ ヤットキタカ！」

私達は、後のことを学園長にすべて丸投げした。

「ありがとう、茶々丸。 それにしても千雨は今日は何でウチに来たの？」

「ああ、それが 私が連れてきた。」

「エヴァが？」

「あの広場から帰る途中で千雨を見つけたんだ。」

あのままにしておくとな下手に疑われてもかなわんでな、連れてきた。」

「そうだったの、じゃあ千雨 今日泊まっていって？」

「そうだな、今帰ると不審に思われるかもしれないから泊まっていなくよ。」

「では、千雨様の部屋を用意しておきます。」

「お願いね、茶々丸。」

「オイチサメ ネルマエニ ヒトシヨウブ ヤロウゼ。」

「今からかよ……明日にしてくれよ。」

こうして波乱の始業式の夜も更けていった。

翌日、エヴァと私、茶々丸は当初の予定通り学園を休み、

早朝に千雨は一人着替のために寮に戻っていった。

4人でまったりと平日の昼を満喫していた頃、

結界内に小動物が侵入してきた。

「ん、姉様気がついたか？」

「何か結界内に侵入してきたね、入ってこれたから害にはならないけど」

「反応があったんだから何らかの精霊か使い魔、そんな所だろうね。」

「どうする？ 消すか？」

「学園の方でも確認しているはずだから、私たちは様子を見よう。

世界樹の結界に引っかかるようだったら、その時に消せばいいと思
うよ。」

「そつだな、面倒くさい。」

「一応村の方には連絡だけして、被害が出るようなら対処しよう。」

その後、私達は再度平日の昼間を満喫するべく

ソファのに座り、肩を寄せ合い昼寝をすることにした。

暖かい陽気の中、うとうととしていた私の肩を誰かが揺する。

うっすらと目を開けるが、寝起きで頭がボーッとしていて

目の前にいるのが誰か判断がつかない。

「ほら、……………ぱい……………おき……………て……………い。」

「ん……………なに……………」

「先輩、起きてください。」

ようやく頭が働き始めたのか、千雨が目の前にいるのが認識できた。

「あ、千雨、おはよう。」

「おはようじゃないよ、もう夕方だぞ。」

「ん〜・・・じゃあ、明日の朝にもう一回起こしてよう。」

「何馬鹿なこと言ってるんだよ、こんな下で寝てたら風邪ひくぞ。」

「・・・わかった、わかったよお母さん。」

「誰が母さんか、ほら これ飲んで。」

千雨が目覚めにと よく冷えた水を差し出し

それを私は受け取り口をつける。

隣に一緒に寝ていたエヴァはもういなくなっていた。

「ん〜美味し、それで 千雨は今日はどうしたの？」

「どうしたもこうしたもねーよ、あの子供先生、酷い落ち込みようだったぞ。」

教室に入るときもスゲー怯えた様子で、

エヴァがないのを確認したらほっとしてたぞ。」

「まあ、子どもがあれだけの目にあえば落ち込みもするよ。」

「まあ、確かにな。」

それはいいんだけど、今日学園に変な小動物が紛れ込んで

魔力反応が少しあったから先輩たちが何か知らないかと思って。」

「ん〜昼ごろに学園に侵入していた小動物のことかな？」

特に害は無いようだったからでは出してないよ。」

「そうか、知ってるならいいんだ。」

で、先輩、明日学校はどうするんだ？」

「そうだね、明日は行こうかな。」

私はともかくエヴァが何日も休んでいたらおかしいからね。」

「そうか、それじゃあ私は今日は帰るから明日教室で。」

千雨は私が明日登校するのを喜んでくれるのか、

少し明るい表情になって寮に帰っていった。

翌日

エヴァと私、茶々丸といつものメンバーで登校すると玄関先でネギ先生と神楽坂さんに近衛さん、

それにネギ先生の肩にイタチのような小動物が乗っていた。

「おはようございます、ネギ先生。」

「おはよう、ネギ先生。」

挨拶に反応してこちらを向くネギ先生、

だが エヴァの姿を確認した瞬間に震えだし、怯えて後ずさりながら杖を構えようとする。

「おっと・・・勝ち目はあるのか？」

校内では大人しくしていた方が お互いのためだと思つがな。」

「くっ・・・」

「そうそう、高畑先生や学園長に助けを求めようと思うなよ？
また生徒を襲われたくはしたくないだろう。」

「うぐ……うわああーん！」

エヴァに校内で仕掛け無いよう釘を刺されたネギ先生が

泣き出しながら走り去って行く、神楽坂さんもそれを追って走り去っていった。

side ネギ

「ネギ！待ちなさいよ！」

「ネギの兄貴 しっかりしろよ！」

「うつつ…… 言い返せないなんて 僕はダメ先生だ……」
orz

「あの三人っすね！？ あの三人がその問題児なんスね！？

許せねえ！ ネギの兄貴をこんなに悩ませるなんて！！

舎弟の俺っちがぶっちめて来てやんよぉー！！」

「……あの、エヴァンジェリンさんは実は吸血鬼なんだ……
しかも真祖……」

「く……故郷へ帰らせていただきます。」

そう言っただけで逃げようとするオコジヨ妖精、カモミール（通称カモ）
の尻尾を

アスナさんが握る。

「一緒にいた茶々丸さんがエヴァさんのパートナーのようだけど、

この間 僕はエヴァンジェリンさん一人にすら惨敗したんだ。」

（なるほど、あの三人に契約の力を感じたのはそのせいか……）

「それにしてもよく生き残れたな兄貴……」

吸血鬼の真祖って言やあ、最強クラスの化物じゃないツスか。」

「この間はネギは氷漬けにされただけで……どうも見逃してもらったよ……」

「なるほどな……フフ でも安心しろよ、

そーゆーコトなら 手がないわけでもないぜ。」

「え！？ 何か勝つ方法があるの！？」

「ネギの兄貴と姐さんがサクッと仮契約を交わして、

相手の片一方を二人がかりでボコツちまうんだよ！」

カモは映画のチンピラのような悪人顔でネギとアスナに語りかける。

「え……え……っ！？ 何それっ！」

「僕とアスナさんが仮契約！？」

「姐さんの体術は昨日の風呂場や脱衣所で見せてもらいやした。

いい……パートナーになりますぜ。」

「で、でも、二人がかりなんて卑怯じゃ……」

「ひきよーじゃねーよ！ 兄貴は一对一で負けたんだろう！？

勝つためには二人がかりでいくしかないッスよ！

やられたらやり返す、漢の戦いは非情さ！

それに相手は吸血鬼、バケモンじゃないツスカ!!」

その後もネギとアスナがなんとか反対しようとするも

カモの口車には勝てず、先日負けたことや、自分の生徒を守ること正義の名を出すなど様々な方向から攻められ、

エヴァンジェリンに対する恐怖も後押しし、しゅしゅ一回だけという条件で

仮契約を変則的な形、額にキスという方法で結び、

茶々丸、エヴァンジェリンを各個撃破する作戦を実行する事になった。

side ソプラノ

茶道部で、エヴァと茶々丸、私の三人でお茶を楽しみその帰り、

高畑先生がエヴァに、学園長が話があると呼びに来たので

エヴァは高畑先生と学園長室に向かった。

茶々丸は、私と二人で猫の餌やりに向かう途中で、いつものように困ってる子供やお年寄りを助けたりする。

そうして二人で猫の餌やりをしている広場に向かう途中、先程から感じる不審な気配について小声で茶々丸に確認する。

（茶々丸、聞こえる？）

（はい、ソプラノ様。）

（私達をつけて来てる人が複数いるのに気がついてる？）

（いえ、確認します……………確認しました、

ネギ先生と神楽坂さん、ネギ先生のペットらしきオコジヨを確認しました。）

（……………ふむ、ろくでもないことを企んでいそうね……………少しお仕置きしてあげようか。

茶々丸、念話の回線を開いて。）

（了解しました。）

小声で周りに聞こえないように会話をしていた私達は
会話を念話に切り替える。

『さて、あの様子からするとエヴァの情報を探るために私達に目をつけた、又は

エヴァを狙わずに従者と公言してる茶々丸が、

義理の姉である私を各個撃破で狙うか、人質にとるか……

情報を探る程度ならかわいいものだけど、

私が茶々丸に手を出すようなら、少し考えを改める必要があるかもね。』

前回の戦いでは原作と違い、茶々丸は手を下していない。

ネギ先が茶々丸を狙う理由は、エヴァの従者をしてるという点のみ、私の場合はエヴァの家族だからという点、ネギ先生が正義の立派な魔法使いを

目指しているなら 私達に今ここで手を出すのは明らかに歪んだ教育の賜だ。

今ここで 茶々丸や私を狙うようなら……いいや、やめてお
こう。

でも、お仕置きはきっちりしておかないと

『どうしますか、ソプラノ様？』

『このまま広場に行き様子をみるよ。』

手を出してきたときはお仕置きするわ。』

『ソプラノ様が直接手を出すのですか？』

『いいえ、なにも殴ったり魔法を使って傷めつけることが

お仕置きじゃないということを教えてあげる。』

特にあの二人のような性格の子供には良く効くと思うよ。』

『私が多少怪我をするかもしれないけど、茶々丸は私の指示に確実にしたがつてね。』

『了解しました、ソプラノ様。』

私達は付いてきている二人+1と周囲に警戒をしつつ

広場に向かう、途中茶々丸が猫を助けたり、

子供に纏わり付かれたりしたが、広場に到着し猫の餌やりを始めた。

そうして一通り猫の餌やりが終わり、片付けも終わった所で

時計台の影から二人の人影が現れた。

「……こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん。」

何かごようでしょうか?」

「茶々丸さん……あの……エヴァンジェリンさんに人を襲うのを止めるよう」

言ってもらえませんか?」

「申し訳ありません、マスターの命令には逆らえませんがし

マスターの行動を邪魔するような事もできません。」

「……ソプラノさん、お願いできませんか?」

「……ごめんなさい……私もエヴァちゃんを止めることはできななんです……」

「……どうしてもダメですか?」

「すみません。」 「ごめんなさい……」

ネギ先生はどうしていいか困った様子で、

神楽坂さんも同じくどうしていいかわからないようだ。

そんな中で、ネギ先生の肩に乗っているオコジヨが二人になにやら囁く、

それを聞いた二人が動揺するものの、交渉を諦めたのか

ネギ先生が杖を構え こちらを見据える。

「……………しょうがないです……………行きます！」

契約執行10秒間！ ネギの従者 『神楽坂明日菜』！

ネギ先生による神楽坂さんへの魔力供給が行われ

続いてネギ先生は魔法の詠唱に入る。

私は、怯えた様子で立ち竦む演技を始める。

(オコジョに唆されたとはいえ・・・こうなっちゃったか。)

『茶々丸！ 神楽坂を足止めして!!』

ネギの魔法が貴方に向かった時は私が盾になる、

私に向かってきた時は無視しなさい!!』

『っ!・・・了解しました。』

そうして茶々丸は神楽坂とデコピン合戦を繰り広げ、その間にも

ネギの魔法詠唱は完成を迎える・・・

「早い、素人とは思えない動き・・・!!?」

「・・・集い来りて・・・魔法の射手 連弾・光の11
矢!!」

(茶々丸か!)

私は茶々丸とネギの間、射線上に走りこむ!

「・・・!! 追尾型魔法 至近弾多数 避けきれません。」

すいませんマスター、もし、私が動かなくなったら猫のイサを・・・」

「や・・・やっぱ」「ダメエエエー！！」・・・えっ！？」

「ソプラノちゃん!!?」

通常筋力では間に合わないので瞬間的に筋力強化し

着弾寸前に光鷹翼を瞬間展開し、茶々丸を抱えて数m程地面を転がる。

途中で集中を切らせたせいで魔法の射手の誘導できなくなり

その幾つか茶々丸が居た地面に着弾、

2発ほど光鷹翼で防ぎ、その他は離れた地面に着弾する。

魔法の着弾で周囲に砂煙が起こる、その間に仕込みで私は舌を少し噛み、

砂煙が晴れた頃茶々丸が居たところより2m程先に

茶々丸を抱き抱えた私が「血を吐いて」転がっている。

「あ．．．あああ．．．．．ぼ．．．僕は．．．．」

「．．．．．あ．．．．．ソ．．．．．プラノ．．．ちゃん？」

そんな中一番驚いていたのは茶々丸だった。

「ああっあああ〜〜〜！！ ソプラノ様あっ！！」

広場には、茶々丸の叫び声だけが響いた．．．

神様から頼まれたお仕事。

その14（後書き）

14話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その15

「ああっあああ~~~~!! ソプラノ様あっ!!」

しっかりしてくださいっ!! 目を、目を開けてください!!
「!?!?」

(ちょ、茶々丸! あなたがそこまで動揺してどうするの!?)

「ソプラノ様! しっかり!...ああ、どどこを? どどこを怪我されたのですか!?!」

普段あれほど冷静な茶々丸が、かなり重度に動揺している
ので

二人+1もどうしていいかわからない。

茶々丸が私の怪我を確認しようと服を脱がします。

このままではまずい事になるので、念話で茶々丸に話しかける。

『茶々丸！ 落ち着いて！ 大丈夫だから、演技だから大丈夫よ！』

「ソプラノ様！ お気を確かに！ ああっあ、どうしたら・・・？」

『落ち着いて茶々丸、私は大丈夫だからこのまま家まで抱えて行って！』

「ああ・・・家？ そうだマスターなら!？」

(あゝ駄目だ・・・完全にパニックになってる・・・)

「今すぐ家に向かいますから！ しっかりしてくださいっ!!」

茶々丸は私をお姫様抱っこで抱え込むとネギと神楽坂、オコジヨを放って、

周囲の目などお構いなしに、最高速度で家に向かって駆け出した。

このままでは家についたらどうなるかわかったものじゃないので、

念話で学園長に簡単に報告し、エヴァには 急ぎ超と葉加瀬を呼び出してもらおうよう連絡し

私は、パニック状態の茶々丸に家まで運ばれていった。

茶々丸が私を抱えて家に帰った時には、まだエヴァも超、葉加瀬もいない状態で

3人が家に来るまで茶々丸のパニック状態は続き、

倉庫から出てきたチャチャゼロが奇異な物を見つめるような目で私達を見守る中、

私は茶々丸の頭を抱いて落ち着かせようと、背中を撫で続けた。

超と葉加瀬が先に着き、続いてエヴァが千雨を連れて帰宅、

6人がかりで茶々丸をなだめ、超と葉加瀬が簡易のシステムチェックをし

ようやく茶々丸は落ち着きを見せた。

「皆様、申し訳ありませんでした。」 / / /

「・・・やつと落ち着いた力？」

全く、最初に見つけたときはびっくりしたヨ。」

「そうですね、ハードには何も問題がないし

システムも特にコレといった問題は無いのですが、

AIの一部が暴走して一部の思考がループしてましたからね。」

「では、茶々丸はもう大丈夫なのか？」

「ええ、大丈夫ですよ。今はすべての数値が正常値です、

若干一部発熱が起きてますが許容範囲内です。」

皆も安心したようで、お茶を飲み一旦気分を入れ替える。

「それで、どうしてこんなことになったネ？」

「あゝ簡単に説明すると、私が茶々丸を庇う形で抱き抱えたあとに少し血を吐いてね、それを見たら・・・こうなった。」

茶々丸が私の手を握って離さない。

実は、茶々丸が落ち着いてシステムの簡易チェックを始めた時からずっと茶々丸は私の手を握っていた。

「どうしてそんな状況になったのか詳しく話せ、姉様。」

私を睨みつけるエヴァの視線に怯えながら

私はエヴァと別れた後のことを話した。

話の最中に超から所々質問が入り、超や葉加瀬にも　ネギボロボコ計画　の事が

知られることになり、結局計画初期の頃からの話もすることになった。

「つまり、アレか？」

茶々丸は姉様が自分をかばってケガをしたと勘違いしてパニックになったのか。」

「申し訳ありません。」　／／／

「うーム……これは凄いことかもしれないヨ。」

ハードもソフトも問題ない、プログラムはパニックを起こさないからネ、

AIが自己進化して感情が芽生え始めているということかもしれないヨ。」

「そ、それは凄いことですよ!!」

確かに茶々丸に組みこんだAIには、そう言った可能性があると研究されていますが

まさか茶々丸が感情を持つなんて!? コレは早速調査しないと!」

「落ち着けよ葉加瀬、そんなの後で出来るだろ。」

「何を言ってるんですか千雨さん!!」

こんな凄いこと、1分1秒でも早く研究してデータを集めないと!! プログラムによる新たな人工生命の発見につながるかもしれないんですよ!!」

「あゝもう! うるせ〜よ! おい、超、こいつどっか連れていけよ。」

「葉加瀬は少し放っておいていいネ。」

興奮してブツブツと何か言い出した葉加瀬は放っておいて、

ネギの件に話を持っていく。

相変わらず茶々丸は私の手を離さない。

「それにしても、あのぼーやがそんな思い切った手に出るとはな、呆れ半分、見直したのを半分といったところか。」

「ネギになんか変な助言者が着いてるみたいなんだよね、オコジヨの妖精っばいんだけど、ソイツが何か吹き込んだみたいなんだよ。」

「先輩、あの先生の呼び方どんどん変わってるな、子供先生からネギ先生、次は呼び捨てか？」

「色々と思うことがあってね、オコジヨの助言に乗ったとはいえ実行犯はネギと神楽坂だからね。」

「葱坊主はもう少し正義に凝り固まってると思ったが茶々丸を狙うとは、なかなかいい根性してるじゃないか。

いい感じに正義の狂信者に育ってきてるネ。」

「それはいい根性っていうのか・・・？」

「ネギ先生、根性が曲がっていてよ。」

「それは否定できん。」

「できねーな。」

「できないヨ。」

「否定できません。」

エヴァ、千雨、超、茶々丸、皆にネギの根性が曲がっていることを肯定される。

「ネギの根性の矯正は学園長に任せて。」

エヴァ、次はどうする？ 少し予定が狂ったけど。」

「そうだな・・・逆にこれを利用するか？」 ニヤ

「どづいつ事だよ？」

「あのぼーやは姉様に怪我をさせたと思ってるだろ？」

ならば、そこを突いて 私がぼーやと神楽坂に復讐のため決闘を申し込む形にするんだ。」

「あーなるほど、それならあの二人は断れないし、

あの先生の性格なら邪魔も入らないか。」

「この決闘で正々堂々、正面から魔法を使わずにボコボコにすればジジイの依頼も終了だ。」

「でも、エヴァが生徒を襲ったことを持ち出されたらどうするんだ？」

「そんな事は関係ないと一蹴してやればいい、家族の敵討ちだと強気で押しこむ。」

そもそも吸血鬼騒動にしたってジジイが言い出したことだ、

もともと、ぼーやをボコつたらネタばらしして収めるつもりだったんだから

考える必要はないだろう。」

「じゃあ、明日にでも学園長に連絡して準備してもらおうか。」

「そうだな、私は場所と日時が決まったら早速あのぼーやに

手袋でもぶつけてやるとするか。」

「そうになると、ソプラノはしばらく学校に行かない方がいいネ。」

超が不敵に微笑み、悪巧みでもするような表情になる。

「ソプラノはしばらく重症で入院したとか言っていると面白そうネ。」

「・・・超、それはちょっとやりすぎねーか？」

超の二人の精神を抉る策に、千雨が若干引く。

「なにを言ってるカ！ コレは葱坊主にも明日菜サンにもいい勉強になるネ！」

オコジヨの口車に乗って自分達が取った行動がどうという結果を生んだのか

今の内から経験しておけば葱坊主の根性の矯正にもなるヨ。」

「確かに、納得はできるんだけどな・・・」

「そつだぞ千雨、今回は姉様が機転を利かせて、

ぼーやの精神を抉る作戦を考えたお陰で怪我人も出ていないんだ。

姉様の底意地の悪さのお陰で怪我人も出さずにこんな経験をできるんだ。

ぼーやは姉様の性根と根性の悪さに感謝しないとな。」

「……………エヴァ、もうそろそろ勘弁してくれないかな？」

そこまで言われると、お姉ちゃん 涙でちゃう……………」

「ソプラノ様は優しい方ですよ、私がかかっていますから安心してください。」

「茶々丸……………」 「ソプラノ様……………」

繋いだ手を両手で握り締め、二人で見つめ合う。

「何をやってるんだこのポケロボはっ！！」

エヴァが茶々丸のネジを巻きまくる。

「あ、マスター……………そんな……………に、一気に巻いては、あっ！」

ようやく茶々丸の手が離れたところで

話を元に戻すことにする。

「それじゃあ、明日にでも学園長に計画の修正を頼んで、結構日時が決まったら、エヴァがネギに決闘を申し込む。」

私は明日からしばらく学校を休んで……

外に出たり、誰かにあったりしない方がいいのかな。」

「そうだな、姉様は家に引きこもってもらったほうがいいだろう。」

「今日はもう遅いから、ココでみんなでご飯食べようか？」

「では、食事の準備をします。」

「茶々丸、私も手伝うネ。」

「あ、私も手伝うよ。」

茶々丸、超、千雨で食事の準備をし、私、エヴァ、チャチャゼロは食前酒を楽しむ。

……葉加瀬はまだ「ブツブツ」 独り言を言っていた。

食事も出来上がる頃に再起動した葉加瀬も含め、皆で食事を取り、

一通り騒いだあと、超、葉加瀬、千雨は女子寮に帰っていった。

翌日以降

早速学園長にエヴァが作戦の変更を連絡し、

再度計画を練り直し、決闘の場所を検討を開始。

茶々丸襲撃当日、私からの報告を受け迎えに来た高畑先生に学園長室へ連れられ、

学園長から茶々丸を襲った経緯、負傷した私の話、など話した後

注意&お説教を食らったネギと神楽坂+1は寮に帰されたが、

その翌日、ネギは学校を休み姿を消した。

ネギが失踪して1日が経った頃、神楽坂に森で発見され寮に連れ戻された。

その日の授業後、ネギと神楽坂+1が私のお見舞いに、と家に来たが態度にこそ現れないが、明らかに激怒している茶々丸に追い返された。

数日間、エヴァや茶々丸を見ては怯えたり気まずそうにする

ネギ、神楽坂+1を除けば、平穏な日々を送っていた。

ある日の夕方、ネギが一人になった時を見越してエヴァがついに動いた。

「ネギ先生、少し話があるんだがいいか？」

「・・・エヴァンジェリンさん。」

エヴァはポケットから白い上品な手袋を出し、ネギの顔面に叩きつける。

「わぶっ！ な、何をするんですか!？」

「ネギ先生、貴様と神楽坂、使い魔のオコジヨに決闘を申し込む！」

「・・・・・・・・け、決闘って、何ですか!？」

「なぜだと・・・・・・・・？ 私の姉にケガをさせておいてそのままにできるわけ無いだろう?」

「あつ・・・・・・・・あれは・・・・・・・・」

「私を狙うのなら理解もできる、貴様がなぜ茶々丸を狙い、私の姉にケガをさせたかは知らん。」

だが、従者を襲撃され家族を傷つけられ黙っているほど

私はお人好しじゃないつもりだ。」

「・・・・・・・・」

「決闘の日時、場所はこの手紙に書いてある。」

その日その場所に神楽坂と使い魔のオコジヨを連れてこい!

私は一人で相手をしてやるつ。」

「・・・・・・・・その決闘に僕が勝ったら、学園で人を襲うのをやめてくれますか?」

「そんな戯言は勝ってから言う方がいい、

この決闘、大義は私にある！ 家族を背負う私が負けるはずなど無いからな。

では、さらばだ。 ハハハハッ！」

「……………どうしよう。」

ネギに渡した手紙にはこう書かれていた。

我が親族を襲いし愚かなる者達よ

月満つる日 子の刻

外界との境界の橋に

影は四つ。

「……………ほとんどなんて書いてあるかわからない。」

イギリス育ちのネギには理解不可能な文面だった。

side ネギ

僕は急いで女子寮に帰宅、アスネさんにエヴァンジェリンさんとの
会話を

手紙の内容を相談するが

アスナさんにも解読不可能な文面だったが、同室の木乃香さんが文
面を解読してくれた。

私の家族を襲った愚か者達よ、次の満月の日の午前0時、

境界の橋で4人で会おう。

「多分こんな感じや」

「ありがとうございます木乃香さん！」

「これで場所と日時がわかったわね。」

「はい……4人というのは、

僕、明日菜さん、カモ君、そしてエヴァンジェリンさんのことですね……」

「……」

茶々丸さんを襲って、ソプラノさんにケガをさせた時のことを思い出したのか、

アスナさんの表情が暗くなる。

「ネギ君この手紙どうしたん？」

あんまり穏やかな感じがせえへんで。」

「いいえっ、！ 何でも無いんです！」

「そう？ ならええけど……」

「明日菜さん……ちょっといいですか？」

「うん・・・木乃香、私達ちよつと出てくるね。」

僕とアスナさん、カモ君と一緒に部屋を出て、女子寮の裏へ行く。

「・・・・・・・・どうしましょう、アスナさん。」

「・・・・・・・・どうするも何も・・・・・・・・エヴァちゃんにとっては、私達は

お姉さんに怪我させた・・・悪人？ になるのかな・・・」

「でも・・・・・・・・エヴァンジェリンさんは吸血鬼で・・・・・・・・宮崎さんを・・・

」

「それをやったのはエヴァちゃんだけで、茶々丸さんやソプラノさんは

関係ない・・・・・・・・のよね。」

「姐さんっ！ 関係ないとはいえ吸血鬼の従者と姉ですぜ！」

「黙ってなさいよバカカモ！ だからって言って、あの二人を襲っていいわけないでしょう！」

「二人共落ち着いてください！」

確かに今冷静に考えれば、あの時僕たちが取った行動は

決して正しい行動じゃないんです……

でも、僕たちは茶々丸さんを襲い、ソプラノさんにはケガをさせてしまった……」

「……その後、高畑先生や学園長にも怒られたなあ……。」

昨日、学園長室……

『ネギ君、アスナ君、先日エヴァが君達のクラスメイトを襲い、それそネギ君が阻止した、

そこまではいいんじゃない、担任の教師として間違っていない。

じゃがの、その後の追撃や、今日の広場での出来事……

これはどういう事かの？

前も話したが、追撃の時は事前に儂らに相談してくれればよかったし

今回の広場で茶々丸君やソプラノ君にやったことは明らかにやりすぎ、

この国の法律に照らし合わせても傷害罪じゃ。』

『そつだよ二人共、先日の吸血鬼事件のことでネギ君の証言があったから

エヴァを呼び出して話を聴こうとしてたら、いきなり学園長室から飛び出して行って、

あわてて僕たちも追いかけたら広場で君達を見つけ・・・この状況だ。』

『ネギ君、君はどういうつもりなんじゃ？

君は3-Aの担任教師じゃ、警察でも軍隊でも、ましてや英雄でもない、一教師じゃ。

その教師が吸血鬼の従者や家族だからと言って、襲うとは何事じゃ。

ましてや二人は君の担当する生徒じゃろ、

話を聞くなり、穏便なやり方はいくらでもあつたはずじゃ。

担任教師が自分の生徒を襲ってケガをさせるなど・・・』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「はあ」」

日が沈みかけ、空を闇が覆う頃、

3人はため息を吐き頭を抱え込む。

「どうでしょうか、兄貴・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ネギ。」

「とにかく今の僕たちにはどうすることもできません、

ソプラノさんや茶々丸さんに謝ろうにも、会うことすらできません
・

出来る事と言ったらエヴァンジェリンさんの呼出に応じて、

茶々丸さんを襲ったことや、ソプラノさんにケガをさせたことを謝
ることくらいしか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うん、それしかないかな・・・・・・・・。」

「ただどうも、兄貴・・・・・・・・あのエヴァンジェリンが素直に許して
くれるはずねえですか?」

「……それでも、僕たちにはこうするしか……」

「それだったら兄貴、身を守る準備だけはして行きませうぜ。」

「……でも。」

「謝りに行っても向こうに襲われたら身を守るくらいしねーと、

姐さんもいるんですし、ココはしっかり準備はしていくべきですぜ。」

「

僕はしばらく考えこむ、確かに僕だけならともかくスナさんやカモ君も一緒だから

何かあっても身を守って逃げることで済むようにしておくべきかもしれない……

「わかったよ、カモ君。身を守って逃げれるくらいの準備はしていくよ。」

「ネギ……」

「兄貴、分かってくれたんですね!」

こうして僕たちは次の満月の夜、エヴァンジェリンさんに会うため

の準備を始めた。

それぞれの思惑をはらみ、表面上平穏な日常が数日間続き、

とうとう 大規模停電のなか、満月の夜がやって着た。

s i d e ソプラノ

私と茶々丸、エヴァは境界の橋の吊り橋を支える塔の上に立つ。

「さて、エヴァにゃん、あと少しで約束の時間だよ。」

「うむ、学園の魔法使い共は防衛のため出払っているからココに邪魔は入らん。」

高畑やジジイ、医療担当の魔法使いも配置についているな。

後は、私が橋へ降り立ち、ぼーや共を待てば準備が完了だ。

あと、にやんって言うな。」

「あ、そうそう、神楽坂には魔法が効かない能力があるかもしれな
いから。」

じゃあ、私のために頑張ってね。」

「ご武運をマスター。」

「うむ、任せておけ!!」

……って！何だその能力は！ 今始めて聞いたぞ!？」

「今始めて言ったから。」

気にしないでよ、今は好都合でしょう。」

「全く姉様は……もういい！ 行ってくる!!」

エヴァはそう言うと、塔から飛び降り橋へ降りていった。

side エヴァンジェリン

約束の刻限まで、後数分。

私は橋の真ん中に立ち、ぼーや達を待った。

橋に降り立ち月を眺めていると学園内全域に放送が流れ始める。

『こちらは放送部です・・・これより学園内は停電となります。

学園生徒のみなさんは、極力外出を控えるようにしてください・・・
・ザッツ。』

「時間だな・・・」

放送終了と同時に学園全体がメンテナンスのための停電となり、

月明かりが照らす明かりのみの世界になった。

「来たか、ぼーや、神楽坂、そして淫獣。」

「誰が淫獣でい!!」

「ワタシが知らぬと思っっているのか？」

貴様、下着泥棒の常習者だそうじゃないか。」

「……ぐっ!!」

「あんだ、どこまで有名な下着泥棒なの……」 「カモ君……」

「」

「い、今はそんなこと言ってる場合じゃないですけど、兄貴、姐さん!!」

しばらくし、気を取り直したぼーやと神楽坂が私を見つめる。

ぼーやの方は杖を背負って、着ているローブも不自然に膨らんでいる。

神楽坂は制服のまま、特に何かを持っているような感じはない。

「エヴァンジェリンさん……まずは謝らせていただけませんか……」

「ふん、今更なにを謝るといふんだ？」

「エヴァちゃん……」

「……茶々丸さんや、ソプラノさんに僕達がしたことは

どう考えても間違ったことでした、それとケガをさせたことを含めて謝りたいんです。」

「貴様らがいくら謝るうが、事実は何も変わらん。

許すつもりもないし、決闘を止めるつもりもない。」

「エヴァンジェリンさん……」「エヴァちゃん……」「……」

「約束の刻限になり、役者もそろった、後は私が貴様らを討ち倒すのみ!!」

絡繰茶々丸が主であり、ソプラノ・マクダウエルが妹

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルが推して参る!!」

その頃境界の橋の塔、様子を見ていたソプラノや茶々丸は……

「どうしてエヴァはこう時代がかった言い方ばかりするわけ?」

「マスターは最近、シグイヤ覚悟のスメ、蛮勇力などの本を愛読していました。」

その影響かと思えます。」

「何でまた……影響受けすぎでしょう。」

橋では、真っ直ぐに襲いかかってくるエヴァに対して、

ネギと神楽坂+1が臨戦態勢にはいるとする。

「つく！ 兄貴ここまで来たらやるしかないっス！！」

「しょうが無い！ アスナさん、エヴァンジェリンさんを足止めしてください！」

その間に僕が拘束魔法で抑え、話を聞いてもらえるようにします！
「！」

「わ、わかったわ！」

「契約執行90秒間！ ネギの従者 『神楽坂明日菜』！！」

ぼーやの魔力供給を受けた神楽坂が私を正面から迎撃しようと相対し、

額にデコピンを仕掛けてこようとす。

「甘いな！」

私はその手を横からいなして神楽坂のつま先の前に私の足を踏み込み
いなした腕を引きつけ腕を取り捻り、重心を崩して地面に叩きつけ
る。

「キヤッ！」

受身を取れないのか神楽坂が肩から背中にかけての部分で、地面打
ち付け

一瞬呼吸が取れなくなる。

「カハッ！」

「アスナさん！！　っち、魔法の射手、戒めの風矢！！！」

神楽坂が突っ込んできた間に詠唱を完成させたばーやの拘束魔法が
私に向かって飛んでくるが、倒れた神楽坂を楯にして防ぐ。

「……ゴホッゴッホ、え？　ちょ、まったっ！　ネギ、私に当

たるって!!」

「あ、アスナさん！　まずっ！」

神楽坂が拘束魔法で一瞬拘束されるも、なぜか魔法が消える。

（コレが姉様の言っていた能力か・・・普段なら厄介だが今なら最高の盾だ！）

意図せず魔法が解除されて驚くネギと神楽坂、

その隙に私は糸で神楽坂の両腕を後ろでに拘束し立たせる。

647

「いたたたたた！　痛いつてエヴァちゃんっ！」

「さあ、ぼーや、いくらでも好きなだけ魔法を撃ってくるがいい。」

「・・・っ！　アスナさん!？」

ぼーやが動揺している間に神楽坂の膝裏を足で小突き重心を崩させ立ち上がるうとする体の反応を利用し、勢い良く前進させ、ぼーやに突っ込ませる。

私は神楽坂の真後ろについてぼーやに接近し

神楽坂をぼーやに当たるよう誘導し、突き飛ばす。

「えっ？ ちょっと、ネギ 避けて！ 避けてって!？」

「アスナさん!? あぶなっ・・・!ぶふう!!」

神楽坂とぶつかった衝撃でボーヤが杖を離す、

私がお隙を見逃すことは無く、杖を蹴飛ばし、

ついでに目を回していた淫獣を掴み川へ放り投げる。

「キュッ!・・・ちよ、痛っ!・・・ってっおっおっおっおっ
~~~~~!」

淫獣は星になった。

神楽坂はぼーやとぶつかった時に目を回し、

ぼーやは立ち上がろうとした所で腕を蹴り飛ばし体制を崩す。

体制を崩したときに目を回したぼーやを神楽坂と一緒に糸で拘束、

糸で拘束され、手足が絡まった二人を仰向けにし、最後の通告をする。

「・・・いつつっ！ どうなったの？ あれ？ 動けないい！？」

「痛た・・・酷いですよ、アスナさん・・・って、何で、動けないんだ？」

「クツクツク、無様だな。」

「えっ？ エヴァちゃん！？」

「エヴァンジェリンさん！！」

「さあ、ぼーや、神楽坂、これで決着だ！」

私は二人に死刑宣告と同時に右手に断罪の剣を発動し、突き刺すように構える。

「え、エヴァちゃん・・・冗談・・・よね？」

「エヴァンジェリンさん！ やめてください！！！」

「冗談でも何でも無いぞ？ 決闘の決着は古来より相手か己の死！

決闘といえば剣、私のこの断罪の剣で貴様らの罪を断罪してやるっ。

「

「ちょっと……エヴァちゃん……やめっ……！」

「エヴァンジェリンさん!？」

「さあ、これで……止めだ!！」

「キヤアア~~~~~!！」

「じわああっつあ~~~~!！」

止めを宣告し、二人……の頭の間で断罪の剣を突き立てる。

「……………っ……？ え？ いき……てる？」

「……………あ~~~~っあ？ あれ？」

「……………ツクツクツク、アーハハツハツ!! ジジィ!

コレにて終了だ!！」

そう私が終結を宣告すると、学園長が高畑、医療担当を連れ出てきた。

「うむ、エヴァ、お疲れじゃったの。」

「エヴァ君、お疲れ様。それにしても最後はヒヤヒヤしたよ。」

医療担当の魔法先生が二人の糸を切り、治療を始め、

それを二人は何が起こっているのか理解出来ないのか

目立った反応を示さず、おとなしく治療を受ける。

「では、私は帰るからな、姉様との約束を忘れるなよ、ジジイ。」

「うむ、確かに承った、皆にもお疲れ様と伝えておくれ。」

「ふんっ、じゃあな。」

もうこんな面倒くさい事持ってくるなよ。」

最後にそういって私は姉様の待つ塔の天辺に行き、

皆で家路についた。

side ネギ

僕とアスナさんは今、治療を受けている。

特に目立った外傷は無いようで、すぐに治療は終わった。

「何が起こったんでしょう・・・？」

「さあ、・・・私にも何がなんだか・・・。」

「フオッフオッフオ、二人共無事で何よりじゃのう。」

何が起きたか理解出来ない僕達の前に、

心配そうに学園長とタカミチが現れた。

「学園長、タカミチ、いったい何が起こったんですか？」

「ふむ、実はの、一連の吸血鬼事件から此度の決闘まで、

儂らがネギ君の修行と明日菜君のため、エヴァに頼んで立てた計画だったんじゃない。」

は………？

「ええええつつつええ~~~~~~~~!!!!??.?。」

こうしてネギの修行と、

明日菜の魔法の世界へ関わるための覚悟を見るため計画された

ネギをボコボコ作戦は終結を迎えた。

side ソプラノ

その日の夜、エヴァンジェリン邸にて

「さあ、姉様!! 私への報酬を支払うのだ!!」

「今からなの？ 痛いからできたら変えて欲しいんだけど・・・」

「駄目だ!! さあ、さっさと舌を出せ!!」

「・・・・・・・・もう・・・・・・・・しょうがないか・・・・・・・・。 あ〜ん。」  
//

「フフツ、この方法で血を飲むのも久しぶりだ・・・」 //

エヴァンジェリンが要求した血を飲む方法、

それは、ソプラノの舌をエヴァが噛み、血を流させ

ディープキスをしながら血を飲む、傍から見たらただのいやらしい行為だった。

「んっ……痛う……ん、ちゅ……ぴちゅ……」

「ん……カリ……くち……ちゅ、ぴちゅ、……んっ……コクン……」

「……はぁ……んっ……ちゅく……ぴちゅ……あっ。」

「……んふ……ちゅ、……コク……んっ……ぺ口……ちゅ……」

二人の口の端から血が流れ、首筋、鎖骨に向かって垂れ、それをエヴァが舐めとる。

徐々に二人の息もしだいに荒くなり、頬も紅く染り、行為もエスカレートしていく。



茶々丸はいつ終わるともわからない二人の行為を凝視し

体内のモーターが熱暴走を起こしながらも、最高画質、最高音質で録画、

コピーを幾つも複製し嚴重にブロックをかけ何箇所にもバックアップを取っていた。

後日、超や葉加瀬、千雨も動画でその様子を視聴、

二人と目を合わせるたびに赤くなり会話もままならない状態が数日続くことになる。

「ゴシユジンヤ アイツラノ カンガエルコトハ ヨクワカラネー  
ぜ。」

性的知識や性欲のないチャチャゼロのみが、いつも通りだった。

神様から頼まれたお仕事。

その15（後書き）

15話目 投稿

2010/09/28 修正

神様から頼まれたお仕事。 その16

side 神楽坂 明日菜

私達は境界の橋でのエヴァちゃんとの決闘後、

治療を受け、今はネギと学園長室にいる。

目の前には学園長が椅子に座り、高畑先生がその脇に立っている。

「つまりこういう事ですか、今回の吸血鬼事件から、

さっきのエヴァちゃんとの決闘まで、

ぜんぶっ 学園長たちが仕組んだことなんですね。」 #

今にも怒りが爆発しそうな私の怒りが伝わったのか、

学園長と高畑先生は申し訳なさそうな、なんとも言えない表情になる。

「……簡単にいえばそういう事じゃ。」

「何でそんな事をしたんですかつ!!」

「こっちがどんな思いで……さっきなんか本気で死ぬかと思ったんですよっ!!」

「そうですね、学園長! いくらなんでも酷いですよっ!!」

ネギもさすがに怒ったのか、学園長に二人で詰め寄る。

「……そうは言うがな、ネギ君、明日菜君。」

君達二人が今回とった行動、それをよく思い出してくれんかの。」

それを言われると、私達も辛い……

最初のエヴァちゃんに氷漬けにされたネギはともかく、

その後の私達の行動は今考えると、

色々と追い詰められていたとはいえ酷い……

茶々丸さんを襲ったりソプラノさんに怪我をさせたり、

エロガモの口車に乗ったとはいえ、実際にやったのは私達だ……。

ネギも思うところがあるのか、俯いていて明らかに落ち込んでいる。

「二人共もう身に染みてわかったように、魔法の世界というのは危険と隣り合わせで、

その力の使い方を間違えると一般人が簡単にケガをしたり時には命を失う。

ネギ君の使う初級の魔法でも、それだけの力があるのじゃ。」

「僕も二人が茶々丸君を襲ったと聞いたときは本当にびっくりしたよ、

確かにエヴァ君にあれだけ圧倒的な力を見せられ焦っていたとはいえ

あれは一步間違えば君の卒業試験失敗どころで済む話じゃなくなる  
ところだったんだよ。」

ネギの使う魔法でも人が死ぬかもしれないと聞いて、

ゾッした……自分が今立っているのかどうかも分からなくなる。

あの時私達は一步間違えば……茶々丸さんソプラノさんを

殺す ことになっていたかもしれない。

ネギも顔を真っ青にしている、それはそうだろう

協力した私でさえまともじゃいられない、

実際に手を下したネギはもっと酷い事になっているだろう。

「君達はまだ若い、ネギ君は魔法学校を卒業したばかりで10歳じゃ、

明日菜君もまだ中学生じゃ、しかも魔法の事を知って日が浅い、

二人に口頭で説明しても、儂らが望む段階では理解しきれんじやろう。

ならばどうするか？ と考えエヴァに協力してもらったのじゃ。」

「こんなこと言うとネギ君は怒るかもしれないけど、

ネギ君は魔法学校を飛び級で卒業し、成績も最優秀、

周りの大人も褒めてくれたことだろう、だけどそれ故にネギ君は少し天狗になるといっつか、

何でもかんでも魔法に頼るふしがあった。」

ネギが慌てて高畑先生の言葉に否定する。

「そんなことはっ！！」「ネギ君！」・・・そんなことは・・・」

「ネギ君がこの学園に来てからのことを思い出してみるといい。

主に明日菜君が被害者だが、武装解除の魔法の暴走、

それに怒った明日菜君の機嫌を取るために、僕に読心の魔法を使っ  
たね、

生徒を助けるために身体強化と浮遊魔法、コレはまだ許せるけどね。

まだあるよ、惚れ薬の作成、移動のために良く空も飛んでいたね。

そして度々の問題行動を受け罰として魔法が封印され

魔力制御の訓練を受けて　なんとか魔法の暴走もなくなった。」

次々と並べられるネギの悪行というか失敗体験・・・

流石にここまで並べられると壮観だ。

「膨大な魔力を持ち、才能もある、だが故にネギ君は事あるごとに魔法に頼ろうとする。」



魔法は隠匿されるべき物、それについてどう考えておるのか？

それにネギ君、君が逆の立場になったらどうじゃ？

いきなり自分の思考を魔法で読まれたり、

好きでもない相手から惚れ薬を使われ強制的に好きにされる、どう思う？」「

「……………」

もう何もいえないだろう、私も逆の立場になったらと考えると

嫌悪感で鳥肌がたつ。

「だから多少無茶でも、早急にネギ君に知ってもらう必要があったのじゃ、

魔法は便利だがそれ以上に危険な物で、容易に人を傷つける、身も心もな……

それに天狗になった鼻を折るためにも、今のネギ君など相手にもならない、

圧倒的に強い存在が居ると言う事を学んでもらう必要があったのじゃ。

どうじゃ？ 今回の出来事、儂らも二人には悪いことをしたと思っ  
ておるが

学ぶこともたくさんあったんじゃないかの？

明日菜君はどうじゃ？ 君はネギ君の魔法の隠匿に協力し、

今回の吸血鬼の事件にも積極的に協力したが、

こちらの世界がどういうものか、少しはわかったんじゃないかの？」

学園長と高畑先生に諭され考える。

確かに私はネギが放っておけないという気持ち優先して

あまりにも簡単に魔法の世界に足を踏み込んだ。

その結果・・・一歩間違えばクラスメイトを殺すところまで着てし  
まった。

確かに学園長が心配して当たり前だ。

「・・・はい、今回のことで、魔法の世界がどういうものか  
よくわかりました。」

「うむ、じゃがのう明日菜君、君が今回学んだ魔法の世界の事はまだ、一端でしか無い、今回のことすべてが分かったように気持ちにならぬようにな。」

まあ、今回は悪い面が目立ったが、魔法は使い方次第でいい面もある、

明日菜君がこちらの世界に来るといふなら、今度はいい面も勉強して貰わないと。う。」

「はい・・・」

「ネギ君はどうじゃ？何か思うところはあるかの。」

「はい・・・今回のことで今まで僕がどれだけ容易に魔法に頼っていたか、

それに無意識の内に調子にのっていたと思ひ知らされました。」

「うむ、それが少しでも分かってもらえたら」

今回のことを計画した甲斐があったというものじゃ。

分かってもらえたところで、良い知らせがあるのじゃが。」

「いい知らせ・・・ですか？」

「どういふ事ですか、学園長？」

これだけの事をしていい知らせとはなんだろう？

私とネギは想像がつかないのか、キョトンとした表情で学園長の言葉を待つ。

「うむ、君達がケガをさせたソプラノ君じゃが、実は彼女は軽傷での、

口の中を少し切っただけで後は軽いコブができたとかその程度のケガで済んでおる。」

学園長の話を聞いて二人で喜ぶ、よかった、ソプラノさんは体が弱いし

学校を休んでいるのでもしかしたら

取り返しの付かないケガをさせたかも？ と心配だった。

「はあく……よかったあ、学校にも来ないから凄く大怪我でもしたかと思ってた。」

「僕も、とんでもない大怪我をして休んでるのかと思ってました。」

ネギと二人で安心する、確かにいい知らせだ！

私達がやったこととはいえクラスメイトにケガをさせていい気分ではないが

たいしたケガじゃなくて本当によかった。

「うむ、とはいえやったことはやったことじゃ、

後で茶々丸さんとソプラノ君には謝っておくようにな。」

「「ハイツ!」「

「それともう一つ、これはネギ君のことじゃが。」

「僕ですか?」

「今回のことで自分の未熟さと、

世の中にはもっと強く優秀な魔法使いがいるとわかったはずじゃ。

今のネギ君なら、素直に農らの教えも聞いてくれると判断し、

学校に所属する魔法先生の中から何人が得意分野ごとに

ネギ君の教師になってもらって、魔法や戦闘、魔法隠匿、一般常識などを

勉強してもらおうと思う、そのために一時的に学園で管理している  
ダイオラマ魔法球の限定使用を許可する。」

「ダイオラマ魔法球・・・ですか？」

「うむ、簡単に説明すれば現実世界と切り離された小さな世界、  
時間の流れも現実世界と異なり、この魔法球の中では

現実世界の1時間が1日となる。

あまり多用すると一気に年をとってしまいが、

限定的に使用を許可しよう、自習などで有効に使えるじゃろう。

「・・・女性の教師は絶対に使いたがらんがの。」

「あ、ありがとうございますっ！」

今回の出来事だと思うところがあったのだろう、

学園長から新たに色々学ぶことができるようになり

ネギはさっきとは一転、嬉しさ満点の表情に変わる。

「さて、明日菜君はどうするかの？」

「私ですか？」

「うむ、今回のことで思うことがあったらどう、

君が望むなら我々で色々なことを教えることもできるし、

ここで魔法の世界から出て、一般人として普通の生活に戻ることもできる。

慌てて考える必要はないが、なるべく早めに答えを聞かせてもらおうとありがたいがの。」

「はい、ありがとうございます。」

「明日菜君、しっかりと良く考えて、後悔の無いようにね。」

「はい、高畑先生！」 / /

こうして、今までの私達の人生の中で最も大きな事件が起きた一日は終りを迎えた。

side ソプラノ

あの満月の日、エヴァに散々血を吸われたため貧血でさらに1日学校を休み、

ようやく学校に通うことができるようになり、登校、教室に向かうと私を発見した神楽坂がすごい勢いで私の目の前にやってきて

衆人環視の中ひたすら私に頭を下げ、謝罪をし続けるという羞恥プレイを食らった。

ようやく終わったと思ったら、今度はネギにより、HR中にもかかわらず

同じように羞恥プレイ、周りの生徒は何事かと訝しむが

あまりにもネギが必死なので、誰も口を挟むことができずに

私がいくら許すと言ってもHR中ずっと羞恥プレイは続いた。

あとで聞いた話だが茶々丸もやはり同じような目にあったそうだ。



その日の授業後、夕映ちゃんから、定期的に行われている  
外国語の小説を翻訳して読み聞かせるという、勉強会に呼ばれ、  
女子寮の夕映ちゃんの部屋に招待されていた。

「しかしソプラノさん、貴方あの二人に何をされたんです？  
ただごとじゃなかったですよ。」

「……あはは……アレは見なかった事にしてもらえないか  
な……」

あんな羞恥プレイ受けたの生まれて初めてだよ……」 / /

「確かに……アレは私も受けたくないです。」

生涯の恥になりかねないです。」

「そ、それよりも今日は何の本を読むの？」

夕映ちゃんはカバンから本を取り出し私の前に差し出す。

「今日はこの本をお願いします。」

「ん、わかった。それじゃあ、早速読んでみようか。」

「あ、その前にお茶を入れるですから、ちょっと待っててください、いつもの紅茶でいいですか？」

「うん、紅茶でいいよ。」

夕映ちゃんがお茶を入れてる間に、軽く本の内容を確認してみる。

以前までは、ジャンルは無茶苦茶で、推理小説もあれば哲学書、

娯楽小説や、軍事関係の書物など、様々だったが、

最近は恋愛小説や、ちょっとインモラルな小説など、

ある方向性が出てきてる。

（夕映ちゃんもおとしごろなのかなあ？

それにしても、コレ同性の恋愛小説か？

女子中学校だからそういう方向も興味あるのかも。）

「お茶が入ったです。どうぞ。」

「ありがとう。」

夕映ちゃんがいれてくれたお茶を私の前に置く。

最近入れなれたのか、夕映ちゃんのお茶はなかなかいい味を出している。

以前は渋かったりでミルクを入れたりしていたが、

最近は普通に何も入れずに飲んでも美味しい。

「それじゃあ早速読んでみようか。」

「お願いします。」

そうして数時間ほど、部屋でふたりつきりで並んで座り、本を読む。

本を読みながら単語の意味を少しずつ教えたりして、

いずれ自分一人で読めるように教えながら読み続ける。

夕映ちゃんは学校の成績はあまりよくないが、物覚えはすごくいい。

自分の興味があることには集中力が増すようだ。

本を読み続けていくと、この本はちょっとまずいことに気がついた。いわゆる18歳禁止まではいかないが、15禁くらいの内容なのだ。話が進むに連れて、ある描写も増えていく、それ自体は別にいいのだが、

読まされる私にはたまったものじゃない、完全な羞恥プレイだ。

(コレはまずい！今日は朝から羞恥プレイの連続だ、今日は羞恥プレイ記念日なのか？)

「・・・二人の手が重なり、二人の心情を表すように徐々に指が絡まっていく。」

「・・・ふむふむ。」

「・・・」「何も考えなくてもいいの、身体が求めるように感じて。」

「・・・」 / /

「・・・私は先輩より身長が低い。」

下を見れば先輩の胸、まるで真珠のような白い肌が見え、

正面を見ると先輩の首筋、白い肌がうつすらと紅く染まり静かに脈打つ、

そして上を見れば、薄い桃色でほんのりと艶やかに湿る先輩の唇。

・・・私はまるで花に誘われる蝶のように、先輩の唇に吸い込まれる。

赤い夕焼けが彩る教室の中で、私は先輩と初めての口付けを交わっていた。」

「・・・・・・・・はうつ・・・・・・・・」 / / / /

夕映ちゃんが顔を真っ赤にして口を押さえている。

「あ、あのね夕映ちゃん、今日はここまでに・・・・・・・・しておかないかな？」 / /

「・・・・・・・・っは！ そ、そうですね！ 今日はここまででいいです！」 / / /

私が声をかけると夕映ちゃんがポーツト私の目を見つめるが

数秒ほどで今の状況に気が付き、慌てて私から離れながら答えを返す。

夕映ちゃんが離れるまで完全に私と夕映ちゃんは密着して、本を読んでいた。

「あ、おっ、お茶がつ！ 冷めてしまったようなので、入れ直す！」 / /

顔を赤くした夕映ちゃんが慌ててカップを持ってキッチンに逃げ込む。

side 夕映

（さっきはまずかったです。まさかあんな内容の小説とは思わかなかったですよ・・・）

あう、まだ顔が火照っています。（ / /

さっきまでの自分の痴態を思い出す、

クラスメイトに学園恋愛物（百合物）の小説を朗読させる私、

読み進めるに連れてお互いの身体が密着していく・・・そして見つめ合う二人・・・

ボツ・・・ / / / / /

（こ、コレでは私が ま、まるでそっちの世界の住人みたいですよ？） / /

慌てて自己否定をする。

・・・が、一度火がついた妄想、そう簡単には鎮火されない！

しばらく妄想が暴走したが、ヤカンのお湯が湧いた音で正気を取り戻し

お茶を入れなおし、ソプラノさんの所に持っていく。

「おっ、お、おませです。」 / /

「ありがとつ夕映ちゃん。」

お茶を差し出し、先程の本の話題に触れないように雑談をする。

「そういえば夕映ちゃん、今日は本屋ちゃんは？」

確か一緒の部屋だったよね。」

「今日のはどかは、ネギ先生達と一緒に勉強会に行ってるです。」

「そうなんだ、本屋ちゃんも頑張るね！」

あの初々しさで見ているこっちも少し恥ずかしくなってくるよ。」

「のどかはこう言ったことは初めてですから。」

ネギ先生とは年齢差もあるので問題も多いですが、うまく行くとい  
いです……。」

「そうだね、障害はかなり多いけど。」

どちらにしてもいい経験にはなるとおもっよ。」

「……そういう夕映ちゃんはそういう相手はいないの？」

「なっ、な、何を言うんですか！？ 私にはそう言うのはまだ早いで  
す！」 / /

「そうかな？ 中学3年ならそういう話があっても早くはないと思



「うよ。」

「……………私には、人を好きになるとというのがどういふ事なのか、

イマイチよくわからなです…………。

もちろん、のどかやハルナの事は好きですが、恋愛や愛情という話になると…………」

「そっか…………」

二人はしばらく無言でお茶を飲む…………

不意に、無意識に私の口から言葉が漏れ出す。

「ソプラノさんは…………そういう気持ち、わかるですか？」

言い終わった後に、自分でも何を言い出したのかびっくりする。

「私？ うん、口で説明するのは少し難しいかな。」

「難しいですか？」

自分でも何を言っているのか混乱してる中、

ソプラノさんの目を見つめ、さらに問い続ける。

「ソプラノさんは・・・そういう気持ちになったこと有るですか？」

「・・・私はあるといえばあるかな。」

でも私の場合は少し変わってるから参考にならないかも。」

「・・・よかったら教えてくれないですか？」

ソプラノさんの場合の話を。」

私がそう問いかけると、ソプラノさんは少し困ったような顔をして考えこむ。

「あんまり参考にならないかもしれないけど・・・いい？」

「お願い するです。」

ソプラノさんは私の正面に座り、私もソプラノさんを正面から見つめる。

「私にも実際、愛情とか恋愛感情とかはわからないんだ、

でも私に分かることといったら……そうだ、夕映ちゃん、  
ちょっと私の手を握ってみて。」

「……？ はいです。」

そう言って私はソプラノさんの手を握る。

「どひっ？」

「どっ、と言われても……暖かいです。」

「今夕映ちゃんはなんの疑いも抵抗もなく、私の手を握ったよね？  
これが知らない人だったり、そうだな……鬼の新田先生だっ  
たらどう？」

今と同じように握った？」

「っ！ こんな風には握らないですよ！！」

「アハハッ、そうだよね。」

つまり夕映ちゃんは多分私のこと友達だと思ってくれるからこうし  
て握ってくれたけど

新田先生はそれ以外の、先生だとか怖い人っていうカテゴリーに入  
ってると思うから

抵抗があると思うんだ。」

「……………そう、ですね。」

「それで、私の場合はね、こうして……………」

そう言っているとソプラノさんは握った手を一度放し、今度は指を絡めるように握る。

「ね、どう？ さっきの握手より少し近くなったような気がしない？」

「……………そうですね、さっきよりも なにか近くなったような気がします。」

「こんな手の握り方は普通のクラスメイトじゃないよね、

でも夕映ちゃんは抵抗もなく受け入れてくれた。」

つまり、夕映ちゃんは私を普通のクラスメイトより近い存在だと

思ってくれている、という感じかな？」

「……………」

「私の場合はこうやって、触れ合いたいとか、

一緒にいたい、もっと近くに来て欲しい、くっついていたい、とか  
そういう感じで好きになるのが深まっていく？ っていうが友情と  
は違う、

多分、恋愛感情になるんじゃないかな？ と思ってる。」

「……それが、ソプラノさんの場合ですか。」

「そうだね……」

しばらく二人の会話が止まる、その間私達は正面を向きあい、

両手で指を絡めて 手を握り合い、緩やかな時を過ごす。

「ねえ、夕映ちゃん……夕映ちゃんのこと 「夕映」 って呼び  
捨てにしてもいい？」

「……いい、ですよ。 私もソプラノさんのこと 「ソプラノ」  
って呼びたいです……」 / /

「そうなんだっ！ じゃあ、今度からそう呼んで 私も夕映って  
呼ぶから。」

「はいですっ！」 / / /

「これで、またすこし夕映と仲良くなれたね、

お互い、コレが恋なのか友情なのかわからないけど、ね。」 / /  
そう言うとソプラノは頬を染め、はにかむように笑った。

私は、何も言葉が返せず、ただボーッとソプラノの笑顔を見つめる。

その笑顔を見ると頬と胸が熱くなり、

私の心のどこか、よくわからないけど大事な場所にソプラノがいることに気がついた。

（まだ私には恋愛感情や恋という物はわからないです・・・

でも、ソプラノが私にとって大事な人だという事だけは はっきりと分かったです。

それがのどかやハルナと同じなのか、それとは違うものなのか・・・  
）

この日、結局私の疑問はわからないまま・・・

だけど それ以上に大事な事がわかった。

しかし・・・同時に新たな悩みも増えた。

（違うんですっ！！ 私にはソプラノが大事な人だということはいんです！！）

でも、決して私はそういう趣味じゃないんです！！

女の子が趣味だとかそういう事じゃなく人間としてソプラノが大事な人なのであって

ソプラノとそういう事がしたいわけじゃっ・・・・・・・・でも、もう少しくっついていたいとか・・・

あゝあああっつぁ~~~~~違うんです！ 違うんですよお！！

でも、最初に手を握ってきたのはソプラノで・・・ああ~~~~！くあ  
wse driftg~~~~！！） / / / /

神様から頼まれたお仕事。 その17

学園での吸血鬼事件も一段落つき

もう学園で吸血鬼の噂も聞くこともなくなったある日。

エヴァ邸

「おい千雨、このアイテムどうやってとるんだ？」

「それは先に進んでひでんわざ取らないとダメだから先に進めろよ。」

「先に進んだら、また戻ってこないとだめなのか!？」

面倒臭いじゃないか。」

「いいから先に進めろよ！ 何回同じ所で馬鹿みたいにころちよろしてるんだよ。」

エヴァと千雨は二人でポケモンをやっていた。



「二人共、ゲームやるのはいいけど、

もう少ししたら晩ご飯なんだから きりのいい所でやめなよ。」

「そうは言うがな、姉様、このアイテムを取らんことには・・・」

「だから！ それは先に進まないと取れないって言ってるだろうが  
！」

「・・・もう、茶々丸食事の準備をしましょう。」

「はい、ソプラノ様。」

「チャチャゼロ、このお肉切つてー。」

「ニクヲキルノニ イチイチオレヲ ヨブンジャーネーヨ。」

「姉さんのナイフはよく切れますから。」

文句は言ってもちゃんと頼んだことはやってくれるチャチャゼロ。

ゲームに熱中してる二人をよそ目に、私達は食事の準備を進める。

夕食の準備も進み、あとは食べるだけとなっても

まだ二人はゲームをやめようとしなない。

「ほら、二人共、ご飯ができたからすぐにゲームをやめなさい。」

「姉様もう少し、あと5分待ってくれ。」

「先輩あともう1戦だからもう少し待ってくれよ。」

「今すぐやめないと晩ご飯抜きにするよ。」

「…………むう、しょうが無い。」…………わかったよ。」

エヴァ家では基本的に食事は参加者全員で食べる決まりだ。

その法を犯すものは何人たりとも 許されない。

689

「姉様、その醤油とつてくれ…………ああ違う だし醤油の方。」

「チャチャゼロ、私にも少しワイン頂戴。」

「テメー！ ソレハオレノ ワインダロウ！！」

「千雨、私のエビ食べて、エビ嫌いなのに入ってるのよ。」

「食べれないなら、皿に分けたときに取るなよ、ったく。」

「マスター、野菜も食べてください。」

「ちゃんと食べているだろう。」

「いいえ、1日の摂取量に足りていません、ほうれん草をもっと食べてください。」

「……………うるさい従者だ。」

5人も集まると騒がしい食卓であった。

食事も終わり、食後のあたりタイム突入。

「エヴァにゃん〜膝枕して〜。」

「茶々丸にでもしてもらえ。」

「ソプラノ様、どうぞこちらに。」

茶々丸が私のすぐ横に来て女の子座りをして膝をポンポンと叩く。

「エヴァも、昔はやってくれたのに……………もう私の膝枕は茶々丸しかないんだね。」

「ワタシでよければいつでも言ってください。」

「……………先輩、人がいない時だったら私、やってもいい……………」

よ。」「／／

「膝枕追加しましたあ！」

「馬鹿なこと行ってる暇があったら、足を伸ばせ、私の枕にしてやる。」

「だが断る。エヴァ枕所望、エヴァが私の抱き枕になれ。」

「断固拒否する、私の威厳を守るために姉様が枕になれ。」

「威厳wwww。」

お腹に一発いいのを食らった。

やむなくエヴァの枕に地位を落とすこととなった。

「じゃあ千雨が枕になる？ 千雨枕。」

「い、いや、今は遠慮しておくよ。」 1111

凄い顔でエヴァが千雨を睨みつけていた。

「そついえばエヴァにゃん、あれから学校ではどつ？」

ネギ先生とか神楽坂さんとはうまくやれてる？」

「姉様がまだ休んでいたときは、かなりうつとおしかったぞ。

ちよろちよろ遠目に見てくるもんだから睨みつけてやったらおとなしくなったが。」

「アレは笑ったな、向こうもどう対応していいかわからなかったんだろうな。」

「私はいきなり謝られて困りました。」

「あゝそれ私も、皆のいる前でいきなり泣きながら謝ってくるんだもん、

皆の視線が痛いわ、恥ずかしいわでひどい目にあつた。」

「そつえば超がその様子を動画で保存してたぞ。私も見せてもらつた。」 w

「超めっつ！ いずれ覚えてろよ！

メイドの格好させて」「ご主人様」 って呼ばせてやる!」

「私がやりましょうか?」

「茶々丸は今度お嬢様って呼んで。」

「呼ばせるのかよ・・・」

千雨にゴミでも見るかのような目で見られる。

「千雨はなんて呼ばれたい？」

「え？ 私はそう言うのはいいよ。」 / /

「じゃあ茶々丸、明日1日千雨を」「千雨お姉さまあ」「って呼んであげて。」

「それはやめろ、クラス中に広まりかねん。」

心底嫌そうな表情だ。

「おい、私には聞かんのか？」

「エヴァはもう決まってるじゃん。」

「ほう、何だ、言ってみろ。」

「ピカ ユウ。」

太ももを齧られた。

「先輩……髪の毛の色だけで適当に言ったよな。」

「ナニモ カンガエテ ナカッタンジャーノカ。」

「バカ姉がつ！」 ガジガジ

「ソプラノお嬢様、これで涙をお拭きになってください。」

「犬歯っ！ エヴァの犬歯が足に刺さったあ！！」

翌日の放課後、エヴァ邸

「超鈴音！！ 黙ってメイド服を着て私を 「ご主人様」 と呼びなさい！！」

「2時間3万円でもいいヨ。」

「……数字がリアルで嫌だ。」

今日は超と葉加瀬が家に来ている。

エヴァは学園長と将棋を打ちに行っている。

「葉加瀬酷いんだよお、超ったら私の恥ずかしい動画を勝手に撮ってるんだよ。」

「いつものコトじゃないんですか？」

「いつものことだよ。」

「……………私、友達はもう少し選んだほうがいいかもしれない。」

とりあえず気を取り直す。

「それで？ 今日には二人は何の用だったの？」

「今日は茶々丸のことね、今のボディでデータも集まってきたから今度新しいボディを設計することになってね、その相談だよ。」

「今までのボディはあくまでテスト用ですから、実際に運用してみても色々問題点や改良点が出てきてるんですよ。」

そこで、どうせボディを新しく作るなら茶々丸の意見も聞くことと思



「いまして。」

「へー、じゃあ私の案も聞いてよ。」

「……おっぱいミサイルとかは却下ネ。」

「……ドリルとかは却下です。」

「……や、やだなあ、そんなこと言っわけ無いでしょう？  
アハハ……」

二人の懐疑の視線が痛い。

「イモウトニハ ハモノガタリナイ！」

「チャチャゼロ、いたんだ。」

「シタデネテタラ オマエラガウルセーカラナ オキテキタ。」

「茶々丸に刃物……カ。」

「いや、止めましょうよ、銃刀法違反で捕まったら警察に説明するのが大変ですよ。」

「ならばウォーターカッターならどうカ？」

「内蔵する場所の確保が大変ですし、水の確保も面倒ですよ。」

「ダカラ シコミナイフヲ ツケルンダヨ。」

3人が茶々丸の武装化について議論を交わし始める。

「何でみんな、茶々丸をそんなに物騒な娘にしたがるの？」

茶々丸に必要なのは武器じゃなくてもっと違うものでしょう!？」

「・・・ふむ、確かに武装も大事だけど 「そこは譲らないんだ。」  
他の機能も大事だったネ。」

「なるほど、それでソプラノさんは、どんな機能が茶々丸に必要なだ  
と思うんですか？」

「S 「性交渉が出来る機能だと言ったらぶっ飛ばすネ。」  
・・・」  
「1111」

( ) ( ) あれは本気で言つつもりだったな (ナ) ( ) ( ) ( )

「・・・お、お洒落できる、とか。」

「次のボディは人工皮膚を使うことで、

かなり人間に近づくから、露出の多い服でも大丈夫になるネ。」

「・・・そ、そうだ！ エヴァが茶々丸方が身長が高いのを気にしていたから・・・」

「それは茶々丸の希望じゃなくエヴァンジェリンさんの希望です。」

「・・・ググウ・・・ツ・・・」

もはや退路は立たれたのかっ！

このまま私はアイデア一つ出せないまま終わるのかっ！？

とその時救いの神あらわる。

「只今戻りました、超鈴音、葉加瀬いらっしやいませ。」

「ち、茶々丸うゝ・・・」

「茶々丸お帰り。」 「おじゃましてます。」 「カエツタカ。」

茶々丸帰宅っ！ 茶々丸帰宅っ！ 茶々丸帰宅っ！！

「茶々丸っ！ 何か！ 何か新しく欲しい機能無い！？」

「・・・どういう事でしょうか？」

私は急いで茶々丸の新しいボディを製作中で、

何か希望はないか超と葉加瀬が聞きに来たと説明をする。」

「そういう事ですか。」

そうですね、一つ希望があります。」

「どんなことネ？」

「私達にできる事なら大抵の機能は付けてあげるよ。」

「ソプラノお嬢様を 気持よくしてあげる 機能が欲しいです。」

超と葉加瀬に踏みつけられる。

「貴女という人はっ！！ な、何を！ 私の茶々丸に何をしたんですかっ！！？」

「ソプラノ……見損なつたネ、茶々丸が何でもいうことを聞くと思つて」

そんなことをやらせていたなんて……。」

「オー サスガワイモウト ゴシユジンカラ アネヲネトロウト  
ハ ナカナカヤルジャネーカ。」

「ちがっ！ 違う！！ 私は何もやってないっ！！ 茶々丸に変なことをしてないって！」

一通り責められた後で、茶々丸が疑問を口にする。

「皆さんどうかしたんですか？」

「どうもこうもないですっ！ 私の茶々丸が汚されたなんて……」  
「茶々丸、私達が悪かったネ、ココに茶々丸を預けたことが間違い  
だったヨ。」

さあ、すぐに私の部屋に来るネ、綺麗に洗つてあげるカラ。」

「……私は……なに……も……してない……」  
「よ。」

茶々丸が私達の台詞や状況から推測する。

「何か勘違いしているようですが、私はソプラノお嬢様に汚された  
ことも

何か特別な命令もされていませんか？」

「じゃあ、なんでさっきはあんな　「ソプラノお嬢様を気持よくし  
てあげる機能」　なんて

言い出したのヨ。」　／　／

「先程のは、先日ソプラノお嬢様を膝枕してあげた際に、

私の膝は硬いので寝苦しいと思ひまして。

それならば気持よく寝ていただけるようになったらいいと思ったの  
ですが。」

「」「」  
「」

「わ、私はソプラノを信じていたヨ。」

「私もですよっ！ ソプラノさんがそんなことをするわけ無いじゃないですか。」

「ツチ ツマンネーノ。」

私は3人を見つめるが、誰も目を合わせようとしない。

「取り合えず、超と葉加瀬は後で O・H A・N A・S H I しよ  
うよ。」

「……ちよつと用事を思い出したネ。」 「あ、私も研究室に用  
事が……。」

「二人共逃げたら……ワカッテルヨネ？」

「「はい、ソプラノお嬢様。」」

「……？」

この後、茶々丸の改造案は人工筋肉と人工皮膚を多用した素体を作る  
ことになり

茶々丸の膝枕はさらに快適な物になった。

私は、超、葉加瀬の二人を別荘に招待し、

今まで相互理解が不十分だったようなので

じっくりと O・H A・N A・S H I をして二人には私の事を  
良く理解してもらった。

数日後 3 - A 教室、H R 中

「えーと皆さん、来週から僕達3 - Aは

京都・奈良へ修学旅行へ行くそーで・・！！

もー準備は済みましたか！？」



「「「「はい!」「」」」」

昼休み、屋上で千雨を含めた4人で昼食を取っている。

「しかし、何で子供先生はHRの時、あんなにテンションが高かったんだ?」

「京都・奈良だぞ! テンションも上がって当然だろう!!」

「マスター、うれしそうで何よりです。」

「この二人は放っておくとして、どうも学園長の話だと

以前 京都にあの子のお父さんが住んでいた家があるとかで、

お父さんの情報が手に入るかもしれないって事で喜んでるんじゃないかな?」

「へー、子供先生の父親はどうかしたのか?

そんな情報を欲しがるとしたら普通じゃないんだらう?」

「あのぼーやの両親は色々複雑でな、

以前話したかもしれんが、父親は英雄、母親は災厄の女王?

「二親とも消息不明、死亡したとかいう情報が流れてるな。」

千雨の表情が少し曇る。

「そうか、子供先生も苦労してるんだな。」

「あの子の変な英雄願望とか正義に固執するところは、その影響が大きいだろうね。」

「まあ、あのぼーやの事などどうでもいい。」

問題は来週の修学旅行だ！ 茶々丸準備は抜かりなく行えよ。」

「了解しました、マスター！」

「修学旅行の準備くらい自分でやれよ。」

「エヴァが自分でやったら、かえって邪魔なんだよ。」

「あー確かに……」

「どういう意味だ千雨。詳しく話してみる。」

エヴァが千雨に食いかかる。

「エヴァにゃん、千雨のことは置いておいて、

今日帰ったら修学旅行にもって行く小物とか、下着を買いに行こうよ。」

「・・・む、そうだな。よし、さっそく放課後に買いに行くぞ。」

『先輩助かったよ。』

『ういっい。』

皆で食事を再開、その後軽く雑談をして午後の授業に戻る。

そして、放課後。

「よし！ 姉様 茶々丸、修学旅行の準備のため、買い物に行くぞ  
！！」

「はいはい、茶々丸、行こう。」

「はい、マスター、ソプラノ様。」

3人でショッピング街へ行き、歯磨などの洗顔用品、下着、

旅行用カバンなどを物色、購入し、

一旦休憩のため、近くの店で軽く食事をする。

「この紅茶は少し甘いねー。」

「やはり家で茶々丸がくれたほうがうまいな。」

「ありがとうございますマスター。」

「……ん？ あそこにいるのネギ先生に神楽坂さん、近衛さんの3人じゃない？」

道端でネギ先生と神楽坂さん、近衛さんがなにやら集まって談笑している。

「……あゝ面倒なのがいるな。無視しろ。」

「でも、ほら。近衛さんが持つてるカード見て。」

「……なんだ？ アレは仮契約の時に出るカードじゃないか？

神楽坂とぼーやは確か仮契約していたな。

あの様子だとジジイの孫にも魔法がバレてるのか？ 契約でもしたのか？」

「どつだろつね、あの淫獣なら契約のパスを調べられるんだろつけど、」

私達には無理だね。」

「それにしても淫獣の飼い主だけあって、あのぼーやも相当なものだな。」

あれは将来ろくな男にならんぞ。」

「……………」

「…………ん？ 茶々丸どうかした？」

茶々丸がなにやら考え込んでいるような仕草を見せる。

「少し、気になったのですが。」

近衛さんは学園長のお孫さんで、関西呪術協会の長の子供ですよね。

今回の修学旅行、京都・奈良ですが、そこに英雄と災厄の女王の息子ネギ先生に

近衛さん、偶然にしては少々気にかかるのですが……………」

「…………ふむ、確かにな。 ジジイに探りを入れてみるか、」

せつかくの京都・奈良の観光なのに、厄介ごとを持ち込まれてはか

なわんからな。」

「そうだね、あの学園長の性格からして、これだけのメンツ集めて何も無いなんて考えられないね……。」

「まったく、あのクソジジイろくなことをせんな。」

原作では私や、エヴァ、茶々丸は修学旅行には参加せず、

最後の最後で参戦だったが、最初から修学旅行に参加していたら

どんな厄介事に巻き込まれるかわかったものじゃないし、

原作通り進めないと千草さんと接触も難しくなる可能性もある。

ここは、先手を打って私達の不干涉を確約させて、

原作通りの状況で進むようにしておいた方がいいかもしれない。

幸い、ネギ先生の修行も原作より進んでいるし、能力的にも精神的にも

原作より成長している、アーウェルンクスが厄介だが

状況が悪い方向へ行く可能性は少ないだろう。

「じゃあ、明日にでも学園長室について、確認してみようよ。」

「そうだな、向こうでいいように使われるなど我慢ならんからな。」

「それにしても茶々丸、よく気がついたね。」

「うむ、さすがは我が従者、いい仕事をしているぞ。」

「恐悦至極。」

翌日、私達は真相を確認するべく、学園長室へ乗り込んだ。

「ジジイ！ 貴様何を企んでいる！！」

「ヒョッ！？ いきなりなんじゃエヴァ、老骨にはそういう入室の仕方はきついんじゃないかの。」

少し落ち着いて話してくれんか？」

学園長室では学園長が一人で事務をしているようだ。

「黙れジジイ、ネタは上がっているんだ！ 貴様、修学旅行で何を企んでいる？」

「な、何のことじゃ・・・？」

言葉を詰まらせる学園長、エヴァの聞き方も問題があり、すこし押しが弱いようだ。

「学園長、今回の修学旅行、なぜ京都にしたんですか？」

関東と関西の仲の悪さは知っているはず、それに今年は近衛さんやネギ先生がいます

普通に考えたら問題を避けるため、

関西は避けて修学旅行を行うほうがいいんじゃないでしょうか？」

「話によるとネギ先生のご両親の以前暮らしていた家が京都にあるとネギ先生に教えたのは学園長だと聞いていますが。

「う、うむ、確かにのう・・・」

「さあ、答えろジジイ・・・まさか向こうで私達まで巻き込もうとしていないだろうな？」



ここまでネタを揃えられ、何も無いとは流石に言えないのか、  
学園長は観念したように、話しだした。

「・・・確かに今回京都・奈良への修学旅行はただの修学旅行では  
無いんじゃない、

ネギ先生には今後、関東と関西がもう少し仲良くやっていけるように  
親書を持たせ、関西の長の所へ持って行ってもらうつもりなんじゃ。」

「しかしそれは少し問題があるんじゃないですか？

ネギ先生が持っていくのはいいとしても、

わざわざ修学旅行じゃなくてもいいんじゃないですか？

ただでさえ近衛さんが関西の地に足を踏み入れるとなると

向こうの人間も黙っていないでしょう、これを気に奪還しようとし  
てもおかしく有りません。

近衛さんやネギ先生の護衛の関係からも問題が多すぎると思います  
が？」

「そのあたりは向こうの長とも話は付けてある。」

下の者が暴走しないように釘をさしてある。」

「ジジイ・・・ボケたな、組織などそんな思うようには動かんぞ。

まして向こうの長は貴様の婿養子だろう？ そんな長の言うことを下が聞くものか。」

学園長も思うところがあるのか表情が芳しくない。

「確かに二人の言うこともわかるが、コレはチャンスでもあったの、ネギ君が新書を持っていけば、関東も関西も うかつには動けんし、それでも尚不審な動きをする者を排除すれば

今後の関東と関西の仲を良好なものにする第一歩となるのじゃ。」

「・・・まあ、貴様の言いたいこともわかるが今回はリスクが大きすぎるな。

貴様の組織や婿養子に対する信頼が貴様の思う通りであることを祈ってやるよ。

何にせよ、私達は今回の修学旅行では、何もせんからな。

学生の本分として修学旅行を楽しませてもらうとしよう。」

「うむ、関東や関西の組織のことは僕らの話じゃ、君達は修学旅行を楽しんできてくれ。」

「その言葉、確かに受け取ったぞ。」

「それならついでにお願いがあるんですが、

修学旅行での班分けで私達……と千雨の4人で別に班を分けてくれませんか？

私の看病とか緊急時に修学旅行を中止して入院や帰宅するからとか理由つけて。」

学園長が訝しんだ顔をする、何か裏があるように思われているのか・

「別に特別な理由はありませんよ、私の事がクラスにバレるのを防ぐためには

私は別の班で、部屋に浴室が着いてる部屋の方がいいと思っただけです。

この4人なら見られて困るようなことはないですし。」

少し考え込む学園長……

さっきの話の後にこの話では裏があると思われるのかもしれない。

(4人で班分けしてもらったほうが、何かと動きやすいから何でけどね。)

しかし特別反対する理由もないのか、しぶしぶ学園長は了承する。

「まあ、確かにのう。わかった、君達の班を分けて、

部屋も浴室が着いてる部屋に変更しよう。」

「ありがとうございます。」

女子中学校に男の娘が一人紛れ込んでいたなんてことになったら問題ですものね。」

「……つ、そ、そうじゃな。」

(甘いね学園長、部屋割りくらいで修学旅行中に何かあった時に私達を

動かす 貸し にしようなんてさせる訳ないじゃない。)

これで、今回の修学旅行で何か起きても私達が関与する必要はなく

なり

班分けや部屋割で問題もなくなった。

翌日、教室にて終始ご機嫌のネギ先生の元、

修学旅行の注意事項や日程の説明、班分けが行われた。

1班

鳴滝姉妹、椎名、釘宮、柿崎

2班

古、超、葉加瀬、長瀬、春日、四葉

3班

雪広、那波、村上、朝倉、ザジ、相坂

4班

佐々木、明石、和泉、龍宮、大河内

5班

近衛、神楽坂、綾瀬、早乙女、宮崎、桜咲

特別班

マクダウエル姉妹、絡繰、長谷川

欠席

相坂さよ

ほぼ原作通りで委員長の班から千雨を抜いた状態で決まった。

「貴様ら！ 特別班の班たる私指示に従い

今回の修学旅行で京都・奈良を完全に制圧するのだ！」

「なんで軍事行動になってるんだよ。」

普通に自由時間に観光するだけだろう。」

「長谷川千雨！ そんな不拔けた態度で京都・奈良を観光できると思っているのか！？」

私など3桁に及ぶ観光行動を経ても、未だすべてを観光しつくしていないというのに！」

「それはお前が無駄に寄り道するからだろう。」

千雨の指摘通り、エヴァが京都や奈良に行くと必ず予定通りの行動にはならず

ひたすら目に止まったものに突撃していくのだ。

「無駄とは何だっ！ あの素晴らしい町並み、すべての神社、仏閣、一般家屋を見ても

絶妙なバランスで調和がなされ、一部の隙もないではないか！」

「……おい、先輩。こいつ病院に連れていったほうがいいんじゃないか？」

「エヴァの中ではもはや神格化されてるからどうしようも無いんだよ……」

「マスター……おかわいそうに……」

「貴様ら何をグダグダと言っている！ 今日放課後私の家でミーティングだからなっ！！」

「うん、わかったよエヴァ。 エヴァの思った通りにやろうね。」

「その……なんだ、元気だせよエヴァ。」

「マスター、私はどんなマスターでもお側に使えています。」

「……う、うむ。 わかったらいいんだ。」

放課後、エヴァの家で入念に修学旅行の日程を組み

準備もほぼ終わり、あとは修学旅行を待つのみとなった。



side 千雨

修学旅行数日前、エヴァの魔法球内、別荘地下倉庫にて。

「……ん？ おい、千雨、そんな所で何をしている？」

ギクウツ！

倉庫入り口で（明らかに挙動不審な私が）エヴァに見つかった。

「え、エヴァか？ 何か用か？」

「いや、お前が何か用事があるんじゃないか？」

わざわざ、倉庫まで来て。」

「い、いや、私は魔法の修行に結界魔法具を使ったから取りに来たんだ……？」

「なぜ、疑問形なんだ……まあ、いい。」

お前用の魔法具だったら右の棚の3段目辺りだ。」

「ああ、ありがとうなエヴァ。」

エヴァは自分の用事を済ますとさっさと倉庫から出て行く。

（ふう、危なかった・・・コレを持ち出したのがエヴァにバレたら、必ず使用用途を聞かれるからな、そうなったら誤魔化しが効かなくなるしな。）

私は倉庫から先輩作の最高クラスの結界魔法具を探して持ち出した。

この結界魔法具は、普通の魔法使いが使っても起動しないが

先輩との契約者や世界樹の指輪をはめた状態で使えば

最高の硬度を誇り、結界を張った時点で外部の侵入者を完全に防ぐ完全な密室を作る。

（この魔法具があれば誰の邪魔も入らない。

身体年齢こそガキみたいなモノだが、生きた時間はもう数十年くらいはたったし、

もう、私もそれなりの年の女、そろそろ先輩との関係もはっきりさせないと。

修学旅行、旅の宿、温泉、二人っきりの部屋・・・シチュエーションは完璧だ。

後はタイミングだけ、今回の旅行で先輩と・・・・・・・・・・（  
／／／／／

エヴァの立てた完璧な旅行計画を乱す敵は外部だけではなく、

内部にも存在していた・・・

（待ってるよ、先輩っ！ あの時の仮契約の約束通り、

身も心も先輩のモノになって、先輩を私のモノにしてやるからな！」  
／／／／／

後半は妄想が声に出っていたが 今回の修学旅行、

確かな決意の元、長谷川千雨の女の闘いが分岐点を迎える！

神様から頼まれたお仕事。

その17（後書き）

17話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その18

修学旅行当日、早朝

「O・K I・R O 貴様らっ!!」

まだ日も登ったかどうかの時刻、昨夜よりやたらテンションの高いエヴァにより

私達は叩き起こされた。

前日より、団体行動の規律がどうたらこうたらと、エヴァがのたま

強制的に千雨もエヴァ邸に泊まることになっていた。

「……………なんだよ……………今何時だよ……………」

まだはつきりと目が覚めない千雨が携帯で時刻を確認し……………

「……………おい、ふざけんよ……………まだ5時になるかどうかじゃねーかっ!!」

こんな朝に起きて何をするんだよ!!」

「何を言っている、今から朝食を摂ったり、着替や身だしなみを整え急いで駅に向かわないと、列車の時刻に間に合わなくなる可能性があるんじゃないか。」

「ねーよっ!! お前は今からフランス料理のフルコースでも食べるつもりか!？」

十二単でも着るのか!？ どう考えても時間が早過ぎるだろ!!」

「途中で列車が故障するかもしれんし、敵襲があつたらどうするつもりだ!」

千雨が心底呆れた様子でエヴァを見つめる。

「なあ、先輩・・・こいつ旅行の時はいつもこうなのか?」

「・・・日本に着てからはずっとこうなんだよ。」

「なにがこいつをここまで狂気に走らせるんだ・・・」

今更二度寝するわけにもいかず、しびしび私と千雨は起床し

とりあえず部屋着に着替え、お茶を飲んで気を落ちつける。

よく見るとエヴァはもう制服に着替え、荷物の再点検でもしているのか、

昨夜せつかく茶々丸が綺麗に収納した、旅行用バックを引つ掻き回していた。

「・・・茶々丸、ごめんね。家の妹が・・・せつかく昨日綺麗にしまってくれたのに。」

「いいんです、マスターの望みを叶えることが従者の役目ですから・・・」

無表情の中にも、哀愁と疲労を茶々丸から感じる。

妹が迷惑をかけたお詫びというわけではないが、心を込めて茶々丸の螺を巻いてあげる。

暴走するエヴァを傍目にのんびりと朝食を摂り、

始発電車が動き出すかどうかの時間に抵抗とするエヴァを

茶々丸が科学の力で黙らせ、のんびりと食後のお茶を楽しんだ後に

チャチャゼロの見送りを受け、予定時間の20分前に集合場所につ

くよつに家を出た。

修学旅行、集合場所 大宮駅内某所。

「……私達以外、皆もう集合してるんだけど。」

「始発に乗って集合した奴もいるらしいですよ、先輩。」

「皆さん元気ですね。」

「貴様らがチンタラやっているから、遅れを取ったじゃないか!!」

集合場所には3・Aは相坂さんを除き、

すべての生徒、教師がすでに集まって雑談をしていた。

「それでは京都市の 3 A 3 D 3 H 3 J 3 S の皆さん、

各クラスの班ごとに点呼をとってからホームに向かいますよ。」



しずな先生の号令の元、各クラス動き出しホームに移動、新幹線に搭乗する。

「おい、先輩エヴァがいねーぞ、どこに行ったんだ？」

「エヴァなら……」 「マスターならすでに新幹線に乗りました。」  
「……はあ〜」

「アイツが一番団体行動を乱してるじゃねーか……」

「全く……しょうがないね、エヴァは。」

「アイツは放っておて行こうぜ、先輩。」

私は千雨に手を握られて指定座席に連れていかれ、

茶々丸はそんな私たちの後に続く。

クラス全員、座席に着き点呼を終える。

こうして私達の波乱に満ちた修学旅行が幕を開けた。

## 新幹線車内

『車内販売のご案内をいたします。』

これから皆様に席に……』

新幹線車内に車内販売のアナウンスが流れる中、

クラスの皆はそれぞれ思い思いに旅を楽しむ。

カードを使ったゲームをする者、本を読む者、音楽を楽しむ者、

車内で中華まんじゅうを販売する者、様々。

そんな中で私は今回の旅の目的のため、動く。

「エヴァにゃん、ちうたん、茶々丸う、私ちよっと甘いモノを買ってくるね。」

「うむ、私にも何か駅弁を買ってきてくれ。」

あと、にゃんって言うな。」

「先輩、悪けど私も何か飲み物を頼むよ。」

ちうたんってここで呼ぶな。」

「ソプラノ様、私が行きましようか？」

それと、私は茶々丸です。」

「大丈夫だよ、茶々丸、駅弁と飲み物ね。じゃあ行ってくるよ。」

席を立ち隣の車両に向かい足を進める。

1つ車両を挟んで2つめの車両との間、目的の人物を見つける。

（彼女で間違いなさそうだね、魔力の反応が強くなってる。

式神を使っているのかな？）

「ちょっとすいません、その綺麗なお姉さん。」

いくつか欲しいものがあるんですけど。」

車内販売員になっている 天ヶ崎 千草 に最初の接触する。

「っ？ はい、どのような御用ですか、お客はん。」

「甘いお菓子と、何かご当地の駅弁と飲み物、あと他にも欲しいものがあるんですけど。」

「毎度おおきに、駅弁は名古屋の駅弁がありますな、

飲み物はお茶にコーヒー、あとミネラルウォーターにオレンジジュースが、

甘いモノはチョコレート、おまんじゅうがありますが どうですか？」

話かけた瞬間こそ警戒の色が見えたものの、それ以降は単にお客と思っただのか、販売員としての対応をしていた。

「それなら、名古屋のお弁当とコーヒー、チョコレートをお願いします。」

「はい、少々お待ちおくれやす。」

千草さんはテキパキと注文の品を包み、値段を計算、

私はお金を払い、お釣りをもらっ……

「はい、これ お釣りどす。」

「ありがとうございます。後もう一つ欲しいものがあるんですけど……。」

「なんやろか、このワゴンにおますか？」

「大丈夫です、ココにありますから。」

そう言いながら私は千草さんの手を握り、メモを渡す。

「ワタシの欲しいものは貴女ですよ、天ヶ崎千草さん。」

私を知るはずのない自分の名前を呼ばれたせいで一気に警戒され臨戦態勢に移ろうとするが、手を握られているせいで私から離れることができず、

式神を現在進行形で使っていることもあり術も使用できない。

「……どないなことやろか？」

ウチにそっちの趣味はあらへんで、それにあまりいい趣味とは思えへん……。」

目付きが代わり綺麗な顔が警戒と敵対心で歪む。

妨害工作中にいきなりこんなことを言われれば無理もないか・・・

「そんな怖い顔しないで下さいな、貴方の邪魔をしようとか

そういう事じゃないんですよ?」

「・・・・・・・・・・」

「とりあえず今日は挨拶だけです、今 手の中にある紙はメモで、

私の携帯の番号が書いてあります。」

「・・・・挨拶ちゅうなら、そちらの名前もお知えてくれやらんやろ  
うか?」

「あ、コレは失礼しました。」

私の名前はソプラノです、ソプラノ・マクダウェルですよ。」

名を名乗りながら握った手を軽く振り、友好をしめそうとする。

「こらこら丁寧に、ウチの名前は天ヶ崎千草です。」

「あまり長居して、仕事のお邪魔しても悪いので、

今日はこれで失礼しますね。」

「そんなら、ウチも仕事がおますさかいこれで失礼します。」

「ええ、また近いうちに会いましょう、千草さん。」

「ほな さいなら ソプラノはん。」

挨拶を済ませた私は、社内に戻りエヴァ達の待つ席に戻った。

「姉様遅かったな。」

「ちょっと車内販売のお姉さんが綺麗だったから口説いてたんだよ。」

「はいはい、先輩が年上の人を口説くなんてありえねーよ。」

「……なぜ？」

「だって……なあ？」 「なあ？」 「そうですね。」

3人に完全にロリコンのレッテルを貼られているソプラノだった。

「それにしても何か騒がしいわね？」

何かあったの？」

「あゝ、さっきいきなり大量のカエルが出てさ、捕まえていたんだよ。」

「……何で新幹線で、カエルが出てくる……」

「ぼーやに対する関西の嫌がらせだろう。」

どうも生き物じゃなく召喚か、関西なら式神とでも言うのか、そういう類の物だったしな。」

「ふーん、まあ、私達には関係ない話か。」

あ、エヴァ、これ駅弁、千雨はコーヒーでよかった。」

二人に頼まれた物を渡し、礼を言われる。

こうして新幹線車内で、トラブルはあったものの、

無事に京都に着き、下車、本日の京都観光にうつった。

清水寺



「京都おーっ！っ！！」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「誰かつ！ 飛び降りれっ！」

「でわ、拙者が。」

「おやめなさい！！」

「しかしこれから飛び降りるって大した事ねーよな、

私がエヴァにたたき落とされた塔の方が数倍は高いぞ。」

「……千雨も大概一般人からは逸脱した思考になってきてるよね。」

「あそこではしゃいでる金髪少女のお陰だ。」

千雨の指差す方向を見ると確かに金髪の少女がはしゃいでいた。

「おい！ 見ろ！！ この絶景、すばらしい！」

今は、木々も青いままだが紅葉の時期に来たら さらに素晴らし  
いものになるだろう！」

「マスター、そんなに身を乗り出しては落ちてしまいます。」

「ここから落ちるなら本望だろう!?!」

「あの幼女とはしばらく離れて行動しようか・・・」

「そうだな・・・」

そうして暴走している金髪幼女から離れた時に、

少し離れた場所から夕映のが聞こえてきた。

「・・・そうそう、ここから先に進むと、恋占いで女性に大人気の

地主神社があるのです。」

「「「恋占い!?!」」」

夕映の豆知識に触発されたメンバーがネギ先生を連れ

走って神社に向かい、他のクラスメイトもそれに続く。

「ちうたんは恋占いは興味ないの?」

「その呼び方は二人っきりの時にしてくれ・・・」

私は神社の恋占いには興味ないな。

そんなものより頼りになる物を用意してあるし。」 / /

「そうなんだ、千雨らしいよね。」

エヴァも遅れてクラスに合流し、

全員で恋占いで有名な地主神社にたどり着いた時には惨状が広がっていた。

「あのバカ共はなぜ土に埋まってるんだ？」

そういうお参りの方法なのか？」

「それはいくらなんでもないだろう・・・」

私達が着く頃には委員長と佐々木さんが穴に埋まり、引き上げられている最中だった。

「そういえばこの先には音羽の滝があったなっ！！」

早速水を飲んでいこう！ 付いて来い、貴様ら！！」

「マスター、お待ちください。」

「まったく、あの少女はしょうがねーな。」

「まあまあ、ほら千雨、行こ。」

千雨の手を取り音羽の滝に向かう。

「エヴァはどの水を飲むの？」

「データによると右から健康、学業、縁結び、だそつです。」

「私は健康で行く！」

「健康に気を使う吸血鬼www。」

「じゃあ私達も同じのにしようか。」

「お供します。」

「そつだな。」

はもう必要ないからな。」

・・・縁結び

私達が健康の水を飲んでいる時にクラスが合流し、

何か言い合いの後、こぞつて縁結びの水を飲みだした・・・が

様子おかしい。

「おい、あいつらどうしたんだ？」

「なんか顔が赤いね。」

水を飲んだお陰でクラスメイト全員で百合カップル大量成立の予感。

「

「馬鹿なことを言い出すな！！ そんなことがあつてたまるか！！」

1111

エヴァが急に怒りだし その場を離れようとする、千雨や茶々丸は何にそんなに腹がたったのか理解出来ない様だ。

「先輩、エヴァはどうしたんだ？」

「何がマスターの気に触ったんでしょうか？」

「ああ、それはね。 エヴァは昔私とチャチャゼロと3人で暮らしていた時に

近くに済んでた村人、今はその子孫が世界樹の森のそばで暮らしているけど、

その人達から 『黒百合の主』 って名で呼ばれたことがあってね。

「

」「黒百合の主?」「

「そう、その時私は『籠の黒百合』って呼ばれてて。」

「……まさか。」

「そのまさか、エヴァが同性愛者で私を囲っている、という感じで噂されてね。」

「……ップ!」

千雨が笑いを堪え、茶々丸は赤くなり煙を吹いている。

「あの金髪幼女のエヴァが百合でしかも先輩を囲っているって。」

WWW

「エヴァには内緒にしておいてね、村の人達も悪気があったわけじゃないから、

エヴァも怒るに怒れなくて、その名を呼ばれるたびに顔を引きつらせて大変だったんだから。」

千雨はお腹を抱え、茶々丸は無表情で煙を吐いていた。

「今度何かあったときは黒百合をプレゼントしてやるうぜ。」 W

日頃の生活でに何か溜まっていたんだろうか？

千雨は一人、エヴァへの日頃の気持ちを伝える方法を企むのだった。

修学旅行初日も終わりを迎え、旅館へと移動、

それぞれ宛てがわれた部屋に移動し、全員での食事、

お腹を満たし、それぞれが温泉で1日の疲れを癒すのだった。

side 千雨

「じゃあ私は大浴場にはいけないから皆で行ってきなよ。」

「先輩は一人で大丈夫か？」

「姉様も子供じゃないんだ、風呂くらい一人では入れるだろう……  
……寂しいなら私が……」

「マスター、入浴時間が決められているので、すぐに向かいましょ  
う。」

「あ、こら、茶々丸、離せ！」

「それでは、ソプラノ様、行ってきます。」

「せ、先輩またな。」

（流石に初日にはいきなりはまずいか？ エヴァもなにか怪しいし、

今日は様子を見るか……い、一応身体は念入りに洗ってお  
こう。）

私とエヴァ、茶々丸三人で温泉に向かう途中……

「ひゃあああ〜っ！」

女の子の悲鳴が聞こえてきた。



「なんだ？ 温泉の方から何か悲鳴が聞こえてきたぞ。」

「大方覗きでも出たんじゃないか？」

「それか今朝方からの関西のくだらん嫌がらせの続きだろう。」

「マスター、どうされますか？」

「私達には関係ない話だ。 少し時間を置いてから温泉に入ればいだろう。」

関西組織の嫌がらせ？

「……まてっ！？ コレは……使える！！」

私の脳細胞がフル回転する。

（これを口実に、用心のため単独行動をしないように先輩に言えば

明日の入浴時間に私と先輩で二人つきりになるチャンス！

エヴァは茶々丸とセットだから必然的に私達の二人になる。 完璧

だ！） / /

「おい、千雨顔が赤いぞ、どうかしたのか？」

「い、いや、何でもない！・・・そ、そう！ 覗きだったら嫌だなと思っただけだ。」

「そうか？ ならばいいが・・・」

（あぶねー、エヴァはこういう事には妙に勘がいいからな。 注意しないと。）

こうして私の計画は順調に進む・・・決戦の日は近い！

side ソプラノ

私が部屋で入浴し、くつろいでいた頃に旅館全体に結界の魔力反応が発生した。

原作通り桜咲さんが旅館に式神返しの結果を敷いているのだらう。

（ということは千草さんは今夜仕掛けてくるか・・・

アーウエルンクスのこともあるし、様子だけ見に行くかな。

うまくすれば、千草さんにもう一度会う機会もありそうだし。）

私が今夜の事について考えていると予定より少し遅れて

エヴァ達が部屋に戻ってきた。

「姉様、気がついたか？」

「旅館の結界？ 桜咲さんが敷いたんだと思うよ。」

「・・・姉様は、なにか企んでいるのか？」

エヴァに怪しまれる。

やはり隠し事をしているように見えるのがまずいだろうか？

エヴァ達にはそろそろ話しておいた方がいいようだ。

「企むって言うほどのことじゃないよ。」

今回関西の組織がネギ先生に嫌がらせしてきているじゃない？

その関係者の中に知ってる人がいてね。」

「姉様の知ってる人間か……女だな。」

「……っ！ な、なんでエヴァはそう思うのかな？ かな？」

「姉様が男のために動くか。 ありえん。」

「無いな。」 「ないですね。」

「こういう事での私の信用は0のようだ……」

「そういえばさっきも風呂場で誰か悲鳴を上げていたな？」

「声から判断すると、近衛さん、神楽坂さんの悲鳴でした。」

「相変わらず茶々丸はこういう時にいい仕事をするよな。」

「恐悦至極。」

茶々丸がどこかの某系使いのバトラーのようなポーズを取る。

「と、いうことはネギ先生の親書の妨害だけじゃなく、

やはり近衛さんも狙われたということだね。」

「予想通りだな、ジジイめ、ざまあみる。」

「面倒くs……!?!?」

side 千雨

「面倒くs……!?!?」

(違っつ!?!? 今この時こそ勝負の刻!?!?)

「せ、先輩っ! 私達も用心のために単独行動は控えたほうがいいんじゃないか!?!?」

「え? ……そう言われればそうだね、千雨も強くなったとはいえ、

実戦が少ないから不安だよな。」

「何だ、千雨、あれだけしごいてやったのに不安なのか?」

「い、いいだろ! 別に。」

「ふむ、まあいいだろう。」

ならば明日から単独行動は控えて、最低2人ずつで行動するようにするか。

私と姉様、茶々丸と千雨でいいだろう。」

「何でそうなるんだよ！！ 最強のコマが二人もそろってどうするんだよ！」

普通エヴァと茶々丸、私と先輩だろう！？」

エヴァがありえない人員配置を言い出す。

この幼女はこれだから油断ならない。

「貴様に茶々丸をつけてやるだけありがたいと思え、長谷川千雨。」

「エヴァ、流石にそれはないと思うよ、私と千雨、エヴァと茶々丸でいいじゃない。」

「……むう、姉様がそう言うのなら仕方がない。」

ならば明日からは4人行動を基本にして最悪、どーっしてものは二人行動にするぞ。」

さすが先輩！ 私ににできない説得を平然とやってのけるッ

そこにシビれる！ あこがれるウ！

（よし、確実に状況は進んでる・・・後はチェックを仕掛けるタイミングのみ！！）

千雨の策は緩やかに、ただし確実に進んでいた。

side ソプラノ

「それで、話を戻すけど。

今夜辺りもう一度仕掛けてくると思うんだよ。」

「ぼーやがあの様ではなあ、舐められても当然か。

結界を敷いたから、流石に今日はもう来ないだろうと油断してるだろっからな。

疲れ切った所で一気に勝負をかけるか。」

「そうだね、ここでどこを狙うかで相手の本命がわかるね。」

原作通りなら、まず間違いなく近衛さんだ。

千草さんに親書を狙う意味はほとんど無い。

関西の組織内の人間なら親書をすり替えるなり奪うなり意味があるが、

千草さんが動いている以上、近衛さんが本命で間違いないだろう。

「それで、先輩は何かするのか？」

「私は特別に何かはしないけど、知ってる人が着てたら挨拶だけしようかと思ってね。」

「女ですかっ!?! 女に会いに行くんですか!?!」

「ちよ、千雨、落ち着いて。何か最近エヴァに似てきたよ。」

「……っな!?! ……なん……だと?」 1111

千雨のどこか危険なところにヒットしたらしく、千雨の顔が絶望に歪む。



「貴様っ！ その態度はどういう意味だ!？」

「マスター、落ち着いてください。」

絶望に染る千雨に、茶々丸になだめられるエヴァ、

しばらくその光景が続いた。

私達の部屋でカオスが繰り広げられている内に

廊下の方から大きな物音と夕映ちゃんの「もるです〜」と

心の叫びが聞こえてきた。

「ほらエヴァ、千雨、馬鹿やってないで！ お客さんが来たようだよ。」

「……はっ！ そうか、来たか。」

「私は見に行くけどエヴァはどうする?」

「ワタシも行こう、どんな女かこの目で確かめてやるっ!!」

「先輩、私は?」

「千雨と茶々丸は留守番していて、二人の隠行では少しきついと思

うから。」

二人にそう伝え、私とエヴァは侵入者を追う。

外に出てすぐに人を抱えた猿（？）の着ぐるみを追う

ネギ先生、神楽坂さん、桜咲さんを見つけたので、

見失わず、気取られない距離で5人（？）を追いかけていく。

「エヴァにゃんの浴衣姿はマニアックで色っぽいね。」

「何を馬鹿なことを言っているんだ！」 / /

「照れてるし〜。」

「……………ほら駅の方に向かうぞ。」

「電車に乗るようだね。猿の着ぐるみが抱えてる子 誰か見えた？」

「近衛木乃香だろうか？ この状況であの姿形、決まりだろ。」

猿と近衛さんを追う3人も合わせた、5人（？）は列車に乗り込み、

発車する列車内で攻防を繰り返しているようだ。

水の術か魔法を使ったのか、列車から水飛沫が吹き出し夜の闇の中、列車の明かりに照らされる水しぶきは綺麗だった。

「エヴァにゃん！ あれ見て、綺麗えーだねえ。」

「今度私達もやってみるか？」

私とエヴァが上空から軽口を叩きながら様子を見てみると、列車から降りた猿がさらに逃走、しばらく走り続け長く長い階段で一旦止まり、

猿から中の人が見れる。

「ほらほら、エヴァにゃん、アレが私が知っている人だよ。」

天ヶ崎千草さん。」

「ほう……あの女が……. . . . .大  
丈夫そうだな。」

姉様の好みとは正反対のようだ。」

「……………エヴァは私の好みがどういう人だと思ってるのさ？」

「聞きたいのか？」

「……………やっぱりいいです。」

見た目金髪の少女に、「お前はロリコンだ！」と言われて、耐えられる脳の構造に 私の脳はなっていないようだった。

ネギ先生と相対した千草さんがなにやら話した後、符を放ち術を使う。

「喰らいなはれっ！ 三枚符術 京都大文字焼き！！」

「おおっ！？ あの女分かってるな！

この京都の地でこの地形！ そしてあの術、姉様！ あの女見所あるぞっ！！」

エヴァの変なスイッチが入った。

「……………陣の風、風花 風塵乱舞!!」

神楽坂さんと桜咲さんがうろたえる中、ネギ先生が呪文を使い、

大文字焼きを消しにかかる。

「ああ~~~~~っ!! あのクソガキ!! 何をしているっ!?

せつかくの大文字焼きがあ!!」

エヴァが絶望に染まっている間にも、千草さんとネギ先生たちの戦闘は進む。

神楽坂さんに魔力供給をして身体強化をし、武器（?）のハリセンを装備、

桜咲さんと二人で突っ込むが、千草さんも応戦し、式神を二鬼召喚。

しばらく打ち合つが神楽坂さんがあっさり一鬼を送還し、式神を神楽坂さんにまかせ

桜咲さんは千草さんの元へ跳ぶ。

・・・が、そこに新たに二本の刀を持ったゴスロリ風の少女が割って入る。

「あの二刀流の女、いい趣味をしているな、なかなか参考になる。」

「……何の参考だ？ 服か？ ゴスロリに二刀流というセンスか？」

対人戦闘に慣れていないのか小回りがきかないのか、

桜咲さんは二刀流のゴスロリ少女に押され気味で、

その間に千草さんが逃走を図るが、

ネギ先生に不意を突かれ魔法攻撃を受けそうになる……が

とつさに楯にした近衛さんにケガを指せるのを恐れたネギ先生が、魔法を逸す。

「ぼーやの修行も甘いんじゃないか？」

千雨なら、うまく誘導して千草にだけ当てれるぞ。」

「千雨とたんと比べたらだめだよ、彼女も別荘で十数年私達が鍛えたんだから。」

この頃の千雨は高畑先生相手でも正面から……逃げれるだけだ

けの技量がある。

戦って勝つことはできないが、そもそも生存に特化した千雨の戦闘方法は

高畑先生相手でも逃げ切れるだけの技術があるのだ！！

場面は戻り、千草さんが近衛さんのおしりをぺしんぺしん叩く。

「うわっ！？ エロツ！ あれやりた~~~~っい！！」 / / / /

「……姉様、いい加減にしてくれ。」

「エヴァにゃん！ 家に帰ったらあれやらせて！..！」

「断るっ！！」 / / / /

「なん……だと……？」

皆が真面目に戦闘を繰り返している上空で、締まらないマクダウェル姉妹だった。

千草さんのセクハラにキレた、神楽坂さんと桜咲さんが千草さんに突っ込み

そちらに気を取られている間にネギ先生による

武装解除という名のセクハラ魔法が千草さんに炸裂。

続いて神楽坂さん桜咲さんにボコにされ、近衛さんを奪還する。

「やった！ 京都美人のヌード動画GETだぜええ！！」

「いつの間に撮影していたんだ・・・」

「超印の超小型カメラナリ。」

（これは交渉に使える！ これは某ゲームなら肉 隷ルートに入れるネタ！）

「おい、姉様あいつら撤収して行くが追わなくてもいいのか？」

エヴァの声で正気に戻る私。

下の状況を見ると千草さんとゴスロリ少女が撤収を開始しており、

ネギ先生達も近衛さんを奪還し、ケガがないか確認しているようだった。

「そうだね、ネギ先生達も無事、千草さん達も撤収したし、



力量も見れた、お宝動画もゲットできたから今日はもういいかな。」

「……あの女も哀れな………どうでもいいが姉様、そのカメラをよこせ。」

「………っは？」

「カメラをよこせといったんだ。妹としても正妻としても、

姉が性犯罪に走るのには看過できん。よこせ。」

「私が苦勞（？）して手に入れたこの宝を奪うというのか？  
我が妹よ。」

「いいから さっさとよこせ。」

「嫌だ！ 断るっ！！」

急いで反転し逃げようとするが、飛行魔法でエヴァに勝てるわけもなくあっさり捕まる。

「姉様ッ 貴女がッ 渡すまで 殴るのをやめないッ！」

エヴァにボコボコにされ、カメラを奪われた。

こうして私の修学旅行初日は終わった……

だが、エヴァは知らない……超が科学の粋を集めて作ったカメラに

通信機能が無いはずはない事を。

ソプラノの家のPCには、きちんとお宝動画が最高画質で保存されていた。

神様から頼まれたお仕事。 その19

修学旅行2日目、朝

「朝だぞっ！ 貴様ら、起きんかつ！！」

早朝・・・まだ深夜と言ってもいい、朝日が昇るかどうかの時間に、

エヴァが、朝だとか叫びだした。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・今何時だ？」

「現在の時刻は午前4時32分です。」

「・・・・・・・・おい、茶々丸、あのバカ幼女を3時間くらい黙らせる。」

「了解しました、千雨様。」

茶々丸が起き、エヴァに近づいていく。

「お、さすが我が従者、一番に起きてきたな。」

早速 朝風呂に入ってから旅館の庭園を見てまわるぞ。」

茶々丸はいつものようにエヴァの背後に周り……………  
バチッ！

「ピギヤッ!?!……………パタ。」

「ミッションコンプリート RTB。」

「…………おやすみ」

修学旅行2日目は2度寝から始まった。

その頃、私は昨夜のエヴァの折檻により簀巻きにされ、押入れに放り込まれていた。

宴会場にて、生徒全員での朝食。

我が3 - Aの生徒の大半は頭痛や一時の記憶障害、

先日の音羽の滝で飲んだ水（？）により、二日酔いの症状に悩まされていた。

そんな中、ネギ先生の周りではいつものごとく、大騒ぎになり、

昨夜の一件で仲が良くなったのか、

桜咲さんが朝食のお盆を持って近衛さんに追いかけていた。

「まったくバカどもめ、朝餉くらい静かにできんのか・・・」

「・・・朝の4時半に大声で騒ぎ出した少女の言えることじゃねーよな。」

「なに？ またエヴァが騒いだの？」

「マスターは本今朝の4時に起床されていました。」

「フツ、当然だ。温泉旅館に来て朝風呂に入らんとどうする？」

無い胸を精一杯張り、当然のように宣うエヴァ。

私達はその様子を、我が子を見るように暖かく見つめた。

「エヴァはそのままできてね。」

「ああ、そうだぞ。エヴァはそのまま元気に育ってくれ。」

ほら、この玉子焼き食べるか？」

「マスター、口の周りが汚れていますよ。」

「何だ貴様ら、ようやく私を敬うようになったのか？　ハハハッ

！」

エヴァにはこのまま健やかに育って欲しい、それが私達3人の願い。

朝食が終わり、各自部屋に戻り

今日の自由行動に向けて準備を進めている。

「それでは今日の自由行動は、私についてくるが良い!!」

「了解しました、マスター。」

「ちゃんとまともな所を、移動と休憩も考えて選べよ。」

「エヴァはちゃんと計画を建てられる子だから大丈夫だよな。」

私達の態度に妙な違和感を感じるのか、

多少違和感を感じているようだが、

気を取り直してエヴァ指揮の元、修学旅行2日目が始まる。

「今日は奈良で班の自由行動がある。」

奈良と言えば、大仏は基本だ、そこで奈良駅周辺の仏閣を見つつ

東大寺、大仏の元へ向かう。」

「……まともだ、公園で鹿が見れそうだな。」

「さすがマスターです。」

「もう何回も行ってコースだからね……」



私にとってこのコースは、もう5回は廻っている。

今では、奈良観光における、エヴァの鉄壁コースとなったが

最初の頃なんて酷いものだった……

移動のことなどまるで考えず、行きたいところに行き、

観たい思ったら立入禁止だろうがお構いなしに忍び込む。

奈良で観光していたかと思ったら、京都の仏閣で茶が飲みたいと言  
い出し

転移魔法を使い出す……あの頃は無茶をしたものだ……

いい加減まともな観光ができるようになってもらわなければこっち  
が持たない。

エヴァの成長を生暖かい目で見守りながら、私達は奈良観光に向か  
う。

「よし、貴様ら！ ここから東に向かい進路を取りつつ、幾つかの神社を見ていくぞ。」

「……はい（了解しました）。」「」「」

三条通りを東に進路を取り、途中幾つかの神社を見学し、まずは奈良公園を目指す。

「茶々丸、画像を保存するデータの空きは大丈夫か？」

「はい、大丈夫ですマスター。」

「何枚写真取るつもりだよ……」

なあ、先輩、もう何回も奈良や京都には来てるんだよな？」

「……………エヴァの気の済むようにしてあげて。」

「……………先輩も意外なところで苦労してるんだな。」

「大丈夫、妹の笑顔のためだから。」

「先輩、そこでお茶でも飲んで休憩していこう、奢るからさ。」

「……………ありがとう、千雨。」

エヴァの暴走で精神を削られながらも、合間で千雨に癒されながら私達は奈良公園に向かう。

しばらく歩いていき、奈良公園に差し掛かろうという時、見知った顔を見つけた。

「ねえ、千雨、あれってウチのクラスのメンバーじゃない？」

「ん？ ……ああ、疫病神だ……………」

「貴様ら少し静かに……………何だばーやと神楽坂の班じゃないか。」

「彼女達も奈良公園に来ていたのですね。」

ネギ先生と神楽坂班を見た瞬間に、明るかった千雨の表情が暗くなる。

「千雨しっかり、目的地が一緒になっただけだから大丈夫よ。」

「……………あいつらと同じ場所において、今までろくな事がないです

よ、先輩。」

「ガキ共は放っておけ、ほら、千雨鹿にエサをやりに行くんだろ？  
時間が押してるんだ、鹿せんべいを買に行くぞ。」

「そつだよ、千雨、行こう。」

千雨の手を引き、奈良公園へ入り、鹿せんべいを売っている売店を  
探す。

ネギ先生一行も目的はほぼ同じらしく、鹿に餌をやったりして談笑  
している。

鹿せんべいの売店を見つけ、千雨が鹿せんべいを買おうとしている  
時……

「千雨、鹿におせんべい上げるのはいいけど気をつけてね。」

「気をつけるってどういう事だよ？」

「……あれを見て。」

そう言って私はネギ先生たちの方を指差す。

そこには鹿に餌をやるうとするネギ先生や、神楽坂さん、本屋ちゃん  
しかし物の数秒後、大量の鹿に蹂躪され、鹿せんべいはすべて取られ  
服を噛み付かれ、スカートは脱がされかけ、  
持っていたと思われるお菓子も奪われたボロボロのネギ先生達の姿  
が・・・

鹿のことを知っていたのか、近衛さんと桜咲さんは避難をしていた。

「この鹿は、昔ほど温くはないよ・・・」

「・・・私、鹿にせんべいを上げるのは止めとくわ・・・」

近年の鹿の凶暴化は半端じゃなかった。

鹿にボロボロにされたネギ先生一行は、別行動を取るようで一時的散  
開、

私達、エヴァとゆかいな仲間たち班は、そろって大仏殿に向かう。

「とうとう今年も来たな……大仏殿っ！」

「千雨、茶々丸、ちょっとこっち来て。」

エヴァが大仏に気を取られ騒いでる間に二人を避難させ、他人のふりをする。

「おい、貴様らさっさと来い！ 中に入るぞ！！」

「静かにしろエヴァ！ 周りが見てるだろうが！」 / /

「マスター、落ち着いてください。 人目を引きます。」

「エヴァにゃん、また警備員のお世話になりたいの？」

そうして騒いでいると向こうから警備員が走ってきて

私達を取り囲むが、年をとった、熟練の警備員という感じの人が

エヴァを見るなりため息を吐き、無線で連絡、多数の警備員が集まり

私達を大仏殿の方へ先導してくれた。

「……なあ、先輩、エヴァってこの警備員に完全にマークされてるじゃねーのか？」

コレって傍目VIP待遇だけど、完全に私達を要注意人物扱いして  
るよな。」

「何回も来て大騒ぎしてたらね……エヴァはここでは有名で、  
こうして入り口で騒ぐたびに警備員に囲まれて大仏を鑑賞、外に出  
るまで

ずっと警備員に張り付かれるんだ……」

「マスターはなにやら満足気ですが？」

「エヴァの事はそつとしておいてあげて……」

警備員に囲まれ、周囲からどこぞの要人が来たのか？ と衆目を集  
める中、

なにやらネギ先生と本屋ちゃんが騒いでいるが、こっちはそれどこ  
ろじゃない。

千雨は羞恥で真っ赤になり私にしがみつき、

エヴァはご満悦で大仏鑑賞を楽しみ、茶々丸は従者として静かに佇  
む。

私は千雨に顔を隠すためにしがみつかれ身動きがとれない。

時間が経つことに私達は周囲の野次馬に何事かと騒がれ、写真を取られたりする。

また、警備員がご丁寧に、周囲の人を追い払うような行動をしたり、写真撮影を禁止するよう注意するものだから

余計に衆目を引く……

悪夢の時間が終わり、大仏殿から出た後、

警備員の皆さんに「これで皆さん食事でもどうぞ」と白い封筒を渡して

私達はそそくさと立ち去り、ようやくこの悪夢の時間から開放された。

「大仏は今日も最高だったなっ!!」

「マスター、よかったですね。」

「……………もう2度とここに来たくない。」 Illorz

「……………千雨、帰ったらおいしいもの食べよう。」



帰ったら千雨の好きなコスプレしてあげるから元気出して。」

修学旅行2日目、エヴァ以外の3人は心に大きな傷を負った。

宿に帰り、夕食をとるが、どんな味だったのか全く思い出せない。

エヴァ以外の3人共同じ症状で、部屋で休憩をしていると、

旅館を妙な結界を覆った。

「ん？ 何だこの・・・結界じゃない？ しかし攻撃性も防御性も無い・・・」

エヴァ、旅館になんかした？」

「私は何もしていないぞ。」

エヴァは今日の写真を確認し、千雨は燃え尽きている。

「何か外が騒がしいな。」

「……またあのガキ何かやらかしたのか？」

「マスター、先程皆さんが休憩されている間に朝倉さんより

このようなメモが回ってきました。」

「見せてみる。」

メモを皆で見ると、どうやらネギ先生の唇を賭けた競争が行われるようだ。

朝倉さん主催による賭けも企画され、参加要項などが書かれていた。

「……まったくだらん事を。」

「でも何でわざわざ唇なんだろう？」

「……まさか朝倉さんに魔法がバレたのか？」

「では、さっきの旅館を覆う結界のような魔力は淫獣の契約結界か？」

「何を考えているんだ？ 敵が襲ってくるかもしれないこの状況で。」

「……ネギ先生や神楽坂さんは関係してないんじゃないかな？」

今の二人なら簡単にこっちの世界に引きずり込もうとはしないだろ

うし。」

「ならば淫獣と何も知らん朝倉の独断か。

・・・面倒だ、放っておこう、あのガキ共がどうなったって自業自得だ。」

「ん、使い魔の管理不十分になる・・・のかな。

ネギ先生は何やってるんだか。」

エヴァと二人で話していると、千雨が復活してきた。

「なにかあったのか？」

「ぼーやの使い魔と朝倉のバカが騒いでいるだけだ。」

「・・・？ 何だその組み合わせ、最悪じゃねーのか？」

「知らん、放っておけ、何かあっても自業自得だ。」

私は写真の整理で忙しいんだ」

「マスター、そろそろ入浴しないと入浴時間が過ぎてしまいますが？」

「ん、そうか。 ならば先に温泉に行くか。」

茶々丸、用意しろ。」

エヴァと茶々丸は入浴のための準備をする。

千雨はどうするのか気になったので千雨の方に視線を送ると……

怪しく微笑む千雨の姿があった。

s i d e 千雨

(ついに来た……今夜こそ先輩と結ばれる時!!)

エヴァと茶々丸が風呂に入る準備をしている間、ついに待ちに待った時間、

私の胸は緊張と期待、先輩への愛で一杯になる。

「・・・千雨？　どうかしたの？」

先輩が心配そうに私に声をかける、どうも表情に出ていたようだ。

「何も無いよ、先輩！」

「そう、ならいいけど・・・千雨お風呂はどうするの？」

もう少しで入浴時間終わるよ。」

「昨日話してた単独行動は取らないように、ってことで

私は先輩の後で部屋のお風呂を使うよ。」

「先に入ってもいいけど？　千雨は女の子だし、私の後じゃ嫌じゃない？」

「大丈夫っ！　先輩の後で大丈夫だから気にしなくてもいいよ。」

「マスター、準備ができました。」

「む、ならば私達は大浴場の温泉に行つて来る。」

「行つていきます。」

「いつてらっしゅい。」　「い、いつてらっしゅい。」　／／

エヴァと茶々丸が部屋を出て、先輩も入浴の準備をしている。

二人が帰ってくる前に部屋に結界を貼らないといけない。

「じゃあ、悪いけど干雨、先にお風呂に入るね。」

「あ、ああ、ゆっくりして行ってねっ！」

先輩が脱衣場に入り衣擦れの音と、私の心音が聞こえる。

(・・・っは！ ボーツとしている暇はないぞ、早く結界を張らないと。)

私のカバンから結界魔法具を出し急いで部屋に設置していく。

設置したらエヴァに念話で、今夜は別の部屋で寝るように連絡をし、

先輩の魔力供給を受け、一気に結界を張らないと

エヴァが殴り込みに来かねないので時間との勝負だ。

(よし、魔法具の設置は完璧、確認もした。

後は念話を入れると同時に先輩の魔力を借りて

結界を起動すれば二人っきりの密室が完成だ。）

『……………エヴァ……………ごめんっ！今夜は別の部屋で寝てくれ』！

「……………は？何だ今のは？……………まさか……………千雨えっ！？」

『おい！！千雨っ！！』

「どうかしましたか？マスター。」

「……………あの女ああ！！！」

茶々丸今すぐ部屋に戻るぞ！！」 #

「？了解しましたマスター。」

エヴァに連絡後、すぐに先輩との仮契約の魔力を借り、

私にできる最大の出力で、結界を張る。

その頃、急いで着替え部屋に向かって全速力で走るエヴァと茶々丸。

「・・・っ！ この魔力の大きさ、千雨め！ 姉様の魔力を使つたな！？」

クソッ！ 魔力制御の修行ばかりさせたのがこんな所で裏目にでるとは・・・」

「ソプラノ様と千雨さんに何かあったのでしょうか？」

「何かもクソもない！ 千雨が裏切つたっ！？」

「千雨さんが！？ まさか・・・それはありえませんかマスター。」

「あの女・・・私を裏切つて、今夜姉様と一線を越える気だっ！！」

「・・・？ 一線？ ・・・っ！？」 #

エヴァと茶々丸が部屋にたどり着くころには、すでに結界は張られた後だった。

「よしっ！ 間に合った！！」

「・・・フッフ、先輩・・・待っていてくださいね。」



side ソプラノ

さっき千雨から魔力が引き出され、かなり強力な結界が張られたので  
急いで浴室から外に出ると、汗だくで俯いて黒い笑みを浮かべた千  
雨がいた。

「千雨、どうかしたの!？」

辺りの様子を伺うが、特に変わった様子はない。

部屋には進入禁止の強力な結界が張られただけで、  
それ以外は特に問題はない。

「先輩・・・早かったですね。」

「千雨？ 私から魔力を借りてまで結界を敷いて、何かあったの？」

「何もないです、大丈夫ですよ……先輩。」

千雨が微笑みながら私に近づき、すぐ目の前まで来る。

「……先輩。」 / /

「……千雨？」

千雨が私の手を取り、指を絡める。

「先輩……ついにこの日が来たね……」

「この日って……？ 千雨……今日、何かあるの？」

「今日は大事な日です、先輩と私にとって……」 / /

千雨が頬を染めて私をまっすぐに見つめ、千雨の顔が近づいてくる。

もう、数cmで唇が触れる距離になる……

「……今夜、先輩に私のすべてをあげます。」 / / /

「……え？　すべてをあげるって……まさかっ？……そのために結界を？」

「そうだよ、今夜誰も邪魔が入らないように旅行前から準備しておいたんだ。」

今夜はこの温泉宿に二人つきり、最高のシュチュエーションだよ、先輩。」 / / /

「え、エヴァと茶々丸は……？　締め出したの？」 / /

「……二人で夜を過ごすのに、他の女の名前は聞きたくない……先輩。」

さあ、私をあげる……だから私にも先輩を頂戴。」 / / / /

その言葉と同時に、瞳からハイライトが消えた千雨が私にキスをする。

両手は指を絡めて握りあい、口は千雨に塞がれ、舌も千雨に弄ばれる。

「……ん……はぁ……ちゅ……う……」

「……んうっ……くちゅ……ぷ……ち……千雨っ……」

「・

「……くちゅ……ちゅ……くちゅ……ち……んう……」

「んぶう・・・ちゆく・・・はあ・・・ん・・・ちゆ・・・」

千雨の上手とはいえないが 熱心で執拗な舌使いに、私も徐々に熱くなってくる・・・

どれくらい時間がたっただろうか、不意に千雨の唇が離れ

唾液の橋ができ、千雨を見つめていると敷いてあつた布団に押し倒された。

「んっ！ ちょっと、千雨、落ち着いて・・・ね？」

「無理だよ、先輩・・・先輩とやっと一つになれるのに、落ち着くなんて。」

「こら、千雨っ！？・・・んっ。」

押し倒された私に千雨が覆いかぶさり、唇にキス、続いて頬、耳、首とキスの雨を降らし

首筋、鎖骨の辺りを唇でついばんだり舐めたりする。

「・・・んうっ！・・・もう、どこでこんなこと覚えて・・・きたのよっ！」

「大丈夫だよ先輩、知識として知ってるだけで経験は今日が初めてだから。」

「そういう……んっ 事じゃな あん くって……っ。」

「先輩、先輩………せんぱあい………」 / / /

千雨は私に甘えるように顔を擦り付けてはキスをしたり舐めたり、身体を擦り付けるように押し付けてきて、足は絡まり、

私の太ももの辺りには、千雨の腰や大事なところが押し付けられている。

「ん………先輩い………」 / / /

「………もう、困った娘だね、千雨は。」

千雨が切なさうに私を見つめる、両手を握ったままではこの先には進めないが

手を離せば私が逃げるかもしれないと考えているのか、

千雨は私を困ったような、切ない表情で見つめる。

「ほら、私は逃げないから手を離して、千雨。」

「先輩……」

「千雨にここまでさせて、私が逃げるわけないでしょ。」

ゆっくりと怯えるように指が解け、千雨の手が離れる。

私は、そっと千雨の頭、頬を撫で、落ち着かせる。

「本当に困った娘だね、千雨は。」

「……先輩。」

「それにしても今のは少し強引すぎるよ、それにエヴァも締め出して、

千雨がそんなことされたら悲しいでしょ？」

「……うん、……でもっ!」

「わかってる……千雨がどうしても今夜私と結ばれたかったから

こうするしかなかった事は。」

千雨が私の首元に甘えるように顔を埋め、キスをする。

私はそんな千雨の頭を撫で続ける。

「もう落ち着いた？」

「……うん」

「初めてがこんな無理やり押し倒すようなのじゃ嫌でしょう？」

エヴァには悪いけど、今夜は二人つきりで……ね？」

「うんっ!!」 / / /

「結界が解けてエヴァと茶々丸にあつたらちゃんと謝るのよ。」

「……うん、分かってる。」

千雨の頬や耳を撫で、顔を少し離させ、千雨の目の縁にたまってる涙を拭いて上げる。

もう完全に落ち着いたようで、目のハイライトも通常の5割増だ。

「ほら、千雨、最初の時のように、千雨からキスして……」

「先輩……」

「……ん……ちゅ……千雨……」  
/ / /





「うがあああつつつあ~~~~!!」 #

ガスッ!! ドッ!! ゴッ!!

「マスター、無理です。」

この結界はソプラノ様の物ですから

私やマスターが解除作業をしても失敗の確率は98.236%です。

「

「1.764%で姉様の貞操が守れる可能性があるなら!!」

「……マスター。私も加勢します!!」

部屋の外、結界に締め出されたエヴァと茶々丸は、

徹夜で結界の解除作業をしていた……

神様から頼まれたお仕事。 その20

修学旅行 3日目 早朝

「・・・・・・・・・・」 #

「・・・・・・・・・・」 #

「・・・・・・・・・・本当に申し訳ございませんでした！」 orz

「・・・・・・・・・・ゴフッ」

エヴァが仁王立ち、茶々丸が脇に仕え、千雨が着崩れた浴衣で土下座、

私はボロ雑巾のように横たわる。

「長谷川 千雨・・・・・・・・貴様、よくもやってくれたな・・・・・・・・」

「今回の事は悪かったと思ってる・・・・・・・・だけどっ！」

私も先輩の事は本気でっ!!」

「……………黙れ。」

「……………はい。」

「……………」

「……………」

エヴァと千雨がにらみ合いを続ける中で、ボロ雑巾にされた私は放置されている。

「……………はあ……………全くっ!」 #

「……………エヴァ。」

「貴様がいずれこういう行動に出ることは分かっていたが……………まさかこのタイミングとは……………」

「マスター、千雨様もこうして謝っているので寛大な処置をお願いします。」 #

流石に二人の様子を見かねたのか、茶々丸が千雨を庇う。

しかし、茶々丸も庇いはするが様子がおかしい・・・特に私に対しての目付きが。

「別に千雨をどうしようとは思っていない。」

私もこうなることは予想していた、中学卒業位の時期に

はっきりと立場を弁えさせた上で、・・・おもいきり腹は立つがそれなりに譲歩するつもりだった。」

「エヴァ・・・。」

「千雨が本気なのは分かっている、

私も姉様とその辺の女と浮気するなら殺してでも止めるが、

千雨ならば・・・腹は立つが理解はできる。

私が正妻というのは揺るがなが、それなりの立場でなら許すつもりだった。」

「エヴァ！ それじゃあっ!？」

エヴァの意外な言葉に千雨が歓喜の表情を見せる。

「だがっ！ 今回のこの行動を許すわけにはいかんな。」

私の京都、奈良の観光をぶち壊しにしてくれたんだ、

「……………私だって姉様との温泉宿での夜を楽しみにしていたのに……………」  
「／／」

「……………申し訳ございません。」 orz

再び、エヴァの仁王立ち、千雨の土下座の構成に戻る。

「……………ふむ、長谷川千雨、貴様の今回の行動の罰は……………」

「……………」  
「ゴクリ」

「修学旅行期間中、姉様との接触、手を握ったりする事を禁止する。」

「……………なん……………だと……………？」  
「llll」

千雨の表情が絶望に染る。

「昨晚は私が締め出され臍を噛む思いをしたんだ、

これから家に帰るまで、

貴様は私達のラブラブの様子を眺めて　せいぜいくやしがるがいい  
！！」

(・・・え？　そんな事でいいの？)

エヴァの意外に優しい罰に私は驚くが、千雨の様子がおかしい・・・

「そ、そんな・・・だって・・・エヴァ、お願いっ！　それだけ  
は・・・！！」

「ならんっ！！　決定事項だ！」

「そんな・・・」　L110RZ

「千雨さん、良かったですね。」

正直、私もこの程度ですんでよかったと思ったが千雨には凄い罰に  
なっているようだ。

「フツ　フフフ、長谷川　千雨、貴様の今の心境、

私には手に取るようにわかるぞ？

初めての夜を過ごした相手と触れ合うこともできず　自分はただ見

つめるのみ、

まして、他の女とイチャつく様子を見せつけられる苦しみ、凄まじいものだろうな？

ハッハッハハハハッ！！」

「・・・グググッ！！」 #

千雨が親の敵でも見るような、ハイライトの消えた瞳でエヴァを睨みつける。

一通り高笑いをしたエヴァが、ボロ雑巾の私の元へやってきて、目の前に座り込み、私の頭をそつと自分の膝に乗せる。

「ほら姉様、 昨夜 は疲れただろう？」

エヴァのかける声は優しいが、同時に凄まじいプレッシャーを感じる。

今下手なことをしたら・・・殺られる！？

「千雨、お前は風呂に入って来い。」

そんな匂いをさせて朝食の時にクラスのカキ共の前に出るわけには  
いかんだろ。」

「……………あぁ、そうさせてもらおうよ。」

千雨はかなり落ち込んだ様子で、少しぎこちなさそうに内股で歩いて  
脱衣所に行く。

そうして部屋には私とエヴァ、茶々丸が残され、味方はいなくなっ  
た……………

「さぁ、姉様とはもう少し、お話ししようか？」

「ソプラノ様、私もお話があります。」

私の救いはなくなった……………



千雨がお風呂から上がり、真っ白に燃え尽きた私もお風呂に入り、汗などの体液を落としすっきりとする。

千雨は少し眠れたものの、目の下には多少隈が見えるが体調は問題ないようだ。

精神的にはかなり問題あるようで、昨晚とは打って変わって、目が虚ろだ……

その後茶々丸のいれてくれたお茶を飲み、朝食の時間になったので移動、

食堂では、一部のクラスメイトの様子がおかしかった。

特にネギ先生と神楽坂さんが酷く深刻な様子で、なにやら話し込んでいる。

朝食後、ロビーで本屋ちゃんを囲んで人集りができている、様子を伺つと、昨晚のネギ先生の唇を奪つとかいうイベントの商品が授与されているようで、なにやらカードのようなものが手渡されている。

『エヴァ、あれって仮契約カードだよな？』

『ん？・・・そうだな、ぼーやと宮崎のか。』

『それで朝食の時のネギ先生と神楽坂さんの様子がおかしかったのか。』

『やはり昨夜のイベントは淫獣と朝倉が仕組んだ仮契約の従者集めか、

ぼーやの唇を奪つとか・・・よくそんな話に乗るものだ、理解できん。

・・・そういえば姉様は千雨の大事なモノを奪っていたな？

何か商品をやるうか？』 #

『け、結構ですっ！！』 1111

『遠慮することもないだろう？ 帰ったら別荘に1週間ほど籠ろう』

か。』

帰った後も私の地獄は続く。

酷く落ち込んだ様子で私とエヴァを見つめる千雨、

食事などの時以外ずっと手をつないでいる私とエヴァ、それに続く茶々丸。

食後4人で一度部屋に戻り、今日の予定を確認する。

「よし、では今日の予定を言っぞ。」

今日は京都を少し回った後にシネマ村に行き 着物を着る！」

「着物なんか何着も持ってるじゃない、十二単もあるし。」

「馬鹿者、シネマ村で着物を着てあの町並みを歩くのがいいんじゃないか。」

「そういうものですか。」

「そういうものだ、私と姉様で、一番いい着物を着るぞ。」

茶々丸と千雨も着るがいい、千雨は禿の格好でもいいぞ?。」

「それを着るのはお前の方が似合うだろう!!」

「どこがだ! 私が似合うのが姫か花魁辺りだろう。」

( ) ( ) (花魁は無い。 ) ( )

部屋で準備を済ませた私達は京都観光に出発した。

今日は観光地よりも古い町並みを楽しみ、お茶を飲んだり、

チャチャゼロへのおみやげ買ったりしながら、シネマ村の方へ向かう。

京都 太秦シネマ村

「お〜いいなココは、古い町並みで、着物を着てる奴が多いから昔を思い出すようだ。」

「結構皆着物とかの衣装を着てるね。」

「思ったよりも衣装着てる奴が多いな。」

「マスター、貸し衣装屋はあちらのようです。」

茶々丸がシネマ村入り口脇の貸し衣装屋を見つける。

「よし、早速着替えるぞっ!!」

「っと、エヴァ、いきなり走りださないでよ。」

「マスター、手をつないだまま走ると危ないです。」

「……………はあ、先輩……………」

4人で貸し衣装屋に行き、借りる衣装を選ぶ。

エヴァは公言通り一番いいお姫様の着物を借り、私もその色違いを借りる。

千雨は文句を言いながらもコスプレ魂に火がついたのか、

巫女服を借り、茶々丸はお城の奥女中の着物を借りた。

「なかなか、似合っているな。」

千雨、貴様が奥女中の着物ならいい感じにそろったのに・・・空気読めよ。」

「う、うるさいな！ 何が悲しくてお前の女中にならなくちゃいけないんだ！」

「姉様の女中ならいいのではないのか？ ……ん？」

「……………っく」

「皆さん、よくお似合いです。」

「茶々丸もいい感じだよ。」

「ありがとうございます。」 / /

貸し衣装屋での着替を済ませた私達はシネマ村の観光を開始。

お姫様衣装効果なのか道を歩くと人が避けていってくれるので

移動はかなり楽だった。

エヴァも時代劇や映画で見たことのあるセットに興奮し、それを押さえる茶々丸。

千雨も朝の機嫌を持ち直したのか、楽しんでいるようだ。

何箇所か周り、一旦休憩のために茶店に入り、お茶とお団子を注文、お団子を食べながら休憩していると、入り口の方角から

クラスの知り合いがやってくる。

コスプレしているので最初はわからなかったが、

近衛さんや桜咲さん、その他にも綾瀬さんや委員長の班の人達もいる。

綾瀬さんが私に気がついたようで、手を振ると答えてくれた。

そうしていると入り口とは反対方向の方角から馬車が勢い良くやってくる。

「どうも〜神鳴流です〜・・・じゃなかつたです。

そこの東の洋館のお金持ちの貴婦人にございます〜」。

そこな剣士はん、今日こそ借金のカタに、  
お姫様を貰い受けにきましたえ〜。」「

馬車に乗っていたのは修学旅行初日の夜、

千草さんと共闘していたゴスロリ少女、月詠ちゃん。

原作通りに近衛さんを攫いに来たようだ。

「ほ〜なかなか凝った演出だな。」

アレはこの間 符術を使う女と一緒にいた二刀流のゴスロリ女。  
なかなか面白い見物になってきたな。」「

「先輩あのドレスの女知ってるのか?」

「あの子は修学旅行の初日にネギ君を襲った奴らの仲間なんだよ。」「

「……いいのかよ、こんな人目に付く場所で。」「

「逆にココなら多少のことがあっても映画の撮影か

イベントだと勘違いしてくれるからいいと考えたのかもね。」「



「お、あのゴスロリ女桜咲に手袋を投げつけたぞ、よく分かってるな。」

私達が話し込んでる間に向こうも話が進んでいるようだ

月詠ちゃんが桜咲さんに手袋を投げつけた。

「エヴァはこういうの好きだよね、ネギ先生の時もやってたし。」

「ここそと動くより、正面から手袋でも投げつける方が潔くていい。」

「そういうものかねー。」

「それにしても、あのゴスロリ少女もかわいいねー。」

「「どういう事だ！ 姉様（先輩）っ！！」」

「……ちよ、二人して、……落ち着いて二人共。」

「「また他の女に手を出すつもりか！？ 堂々と浮気か！？」」

「お二人共息がぴったりです。」

「「……こいつと一緒にするな！？」」

「……」

「……………」

エヴァと千雨、二人共顔を赤くしてにらみ合う。

「ほ、ほら二人共、向こうの話がついたようだよ。

30分後にシネマ村正面横の日本橋で決闘だつて。

今の内に場所取りに行こ。」

「う、うむ……………行くぞ。」

「……………ああ。」

「お代はここに置いておきます。」

茶々丸が代金を置き、私達4人で決闘の場所がよく見える所へ移動、

先程のイベント（？）を見ていた人がいたのか、

結構な人集りができている。

しかしココでもお姫様コス効果が発動したのか、

私達の周りは人が避けていくようだ。

誰かが持つてきてくれたのか、長椅子に私達が腰掛けて

お茶を飲みながら待っていると、委員長を先頭に

桜咲さん一行が現れ、橋の方には月詠ちゃんも現れた。

「ふふふふ？」

ぎょーさん連れてきてくれはっておおきにー、

楽しくなりそうですなー？」

月詠ちゃんに気がついたのか、桜咲さんが睨みつける。

「ほな、始めましょうかー、センパイ？」

このか様も刹那センパイも・・・ウチのモノにしてみせますえー？」

「ウチのモノ」 と言つ言葉に反応したのか千雨が赤くなる。

「ふふふふ？」

月詠ちゃんに気圧されたのか、近衛さんが桜咲さんにしがみつく。

「せ……せつちゃん、あの人……なんか怖い。」

き、気をつけて……」

「……安心して下さい、このかお嬢様。」

何があっても私がお嬢様をお守りします。」

「せ……せつちゃん……」

桜咲さんのいい笑顔と演技（？）で周りの観客も沸き立つ。

「ほう、桜咲め、なかなかいい演技をするじゃないか？

役者でも食っていけそうだな。」

「桜咲はアレなのか……百合の園の住人なのか？」

「……なにっ!? あの女……危険だな。」 1111

百合という単語にエヴァが過剰反応を示す中、

桜咲さんと月詠ちゃんの決闘が始まった。

月詠ちゃんが式神を召喚し、邪魔になる委員長達の足止めをする。

桜咲さんはその間に、張り付いていたと思われるネギ先生の式神を

人間サイズに変換し、近衛さんを避難させる。

「おいおい、あのゴスロリ女無茶するなー、こんな人目の多い場所で式神をあんな数呼び出して。」

「……私チヨット向こうにいつてていいか？　こんな所でバシたくない。」　「――」

「じゃあ、私と一緒に近衛さんを追いかける？」

「い、いいつ！　遠慮する！　向こうのほうに子供先生がいる分危険そうだ。」

「なんだ、姉様は見ていかんのか？」

「近衛さんの方が本命っばいからねー」。

あっちの方に行けば千草さんに会えそうだから。」

「何だ、あの露出狂の符術使いか。」

「あの娘は露出狂じゃなくて、ネギ先生に脱がされただけだよ……」

「・

「ならば千雨はここに残れ、茶々丸、姉様についていけ。」

「了解しましたマスター、ソプラノ様よろしくお願ひします。」

／／

「お願いね、茶々丸。早速だけど、この格好で走るとはしたくないから」

お姫様抱っこで、近衛さんを追いかけてくれる？」

「かしこまりました。」／／

桜咲さんと月詠ちゃんが剣を交えてる間、私は茶々丸に抱き抱えられ近衛さんを追いかける。

私を抱えた茶々丸が凄く速さで、ネギ先生と近衛さんを追う。

「わー、ネギ先生より……はやーい！」

「ソプラノ様、その台詞は危険です。マスターの前では言わないでください。」

「……そう？ わかった？」

よくわからないが茶々丸に注意された。

そうしている間に、ネギ先生と近衛さん、二人はお城の中に入っていく。

「茶々丸、あそこのお城の脇に生えてる木に登って。」

「了解しました。」

茶々丸は、私を抱えたまま、一気に木の枝まで飛び移る。

すぐに私は木の枝に認識障害の小規模結界を刻んだナイフを刺し

見つからないようにする。

ちよつどこのあたりからなら、お城の中も少し見えるし、外もよく見える。

お城の中を見ると、千草さんと白髪の少年、アーウェルンクスがいる。

そこへ、近衛さんを連れたネギ先生が現れ、誘い込まれたことに気がついたようだった。

「声がよく聞こえないなー、茶々丸聞こえる？」

「はい、ネギ先生が実体でないことが相手に認識されたようです。」

「あ、千草さんが式神を呼んだ。」

千草さんが式神を召喚するとほぼ同時に、ネギ先生は近衛さんを連れ

お城の屋根に上がる。

「お嬢さまっ！」

下から聞こえる歓声の中から一際大きく桜咲さんの声が響く。

ネギ先生は千草さんの式神に矢で狙われ、どうにもできない状態、

桜咲さんはまだ下で月詠ちゃんに抑えられてる。

そんな中、アーウェルンクスがきよろきよると、周囲を見回している。

(あゝ・・・やっぱり、前もそうだったけどアイツ、私の存在に気がついてるっばいな。)



「聞ーとるか お嬢様の護衛、桜咲刹那！」

この鬼の矢が二人をピタリと狙つとるのが見えるやる！

お嬢様の身を案じるなら手は出さんときー！！」

千草さんが桜咲さんに警告し、ネギ先生に近衛さんを渡すよう要求する。

ネギ先生もどうすることもできず、近衛さんも怯えているようだ。

「どうしますかソプラノ様、私ならあの式神を仕留められますが？」

「今回は手を出さなくていいよ。」

この場で近衛さんを連れ去られても私達には関係ないからね。」

「……了解しました。」

「茶々丸は優しいから助けたいんだと思うけど、今ここで私達が動くこと」

今後学園の奴らは私達を頼って来るようになって、エヴァも私も巻き込まれる可能性が高い。

それに、私達は今回の件、事前に学園長には警告してある。

それを聞かなかった結果がこれなんだから自業自得だよ。」

「……………はい。」

「私達には全ては助けられない、私は家族を助けるためには手段を選ばないけど

彼らはその枠には入っていない。

茶々丸も、今は解らなくていいからゆつくりと考えておいてね、

自分の手で助けられる人を選ばなくてはいけない時が来るかもしれないから。

その時に誰を助けるのか？ エヴァと私、どちらかしか助けられない場合

貴女はどうするのか？ 今の内から考えておくといいよ。」

「……………了解しました、ソプラノ様。」

茶々丸の表情は少し暗いが、話したことは理解してくれたようだ。

本来プログラムで動く茶々丸なら、この取舍選択は容易なはずだが

心が生まれているせいか、迷いが生じている。

(茶々丸にとってはいいいことだと思っけど、超や葉加瀬にはどうかな……)

「それにね、安心して茶々丸。今回は多分大丈夫だよ。」

「私にはよくわかりませんが？」

「手段を選ばなければもつと簡単に近衛さんを奪えるはずなのにそうしないでしょ？」

千草さん達はなんだかんだで優しいから攫われたとしてもそんなに酷い事にはならないし

攫われた後で学園長に連絡してやれば彼らも本気で動くでしょう。」

818

「学園長には事後連絡でいいのですか？」

「本来は連絡だつてしなくていいんだよ、教えてやることで貸しを作つてやるんだ。」

「了解しました。」

茶々丸に話をしてあげてる間にも何かあったようで、

近衛さんが落ち着いたように見える。

にらみ合いをするネギ先生と千草さん、桜咲さんは月詠ちゃんを―

巨突き飛ばし

ネギ先生のもとに行こうとしている……その時、

強い風が吹き、近衛さんがよろけそれを支えるネギ先生、

それを見た千草さんの式神が逃げると判断したのか？ 矢を放つ。

「あー！？ 何で打つんやーッ！

お嬢様に死なれたら困るやろーっ！！」

急いでネギ先生が盾になろうとするが、簡易の式神故に耐久力が無く矢が貫通し、

近衛さんに向かう……が桜咲さんが盾になり近衛さんをかばう。

そのまま衝撃で体制を崩した桜咲さんが屋根から落ちる。

「せ……せつちやーん！」

落ちていく桜咲さんを追って近衛さんも屋根から飛び降り、空中で桜咲さんを捕まえる。

周囲がざわめき、二人が地面に激突したかと思っただ瞬間、

近衛さんの魔力が暴走（？） 、または覚醒したのか

二人は無事に地面に降り立ち、矢に射られた桜咲さんのケガもなぜか治っているようだ。

「ちっ……しまった。」

千草さんが逃げられたことに不満を漏らす。

周囲の目も近衛さん達に向けられ、千草さんたちも撤退の好機と見て撤収しようとするが、私は結界のナイフを抜き姿を見せ、千草さんに向かって手を振る。

「はあゝい　綺麗なお姉さん。」

いきなり現れた私達にアーウェルリンクスが警戒して構え、

月詠ちゃんも遅れて剣を構える。

・・・千草さんはあっけに取られているようだ。

「なっ・・・あんさん、何でこないなとこに・・・」

「また会いましたね、千草さん」

「天ヶ崎さん、彼女達は知り合いですか？」

「あの御二人は、このかお嬢様のクラスメイトですか？」

「千草さんとは将来を誓い合った仲です。」 / /

「あらまあゝゝ」

「・・・個人の趣味には何も言いませんが・・・」

「ちゃうわっ!?　ウチはそないな趣味ではおまへん!!」 / /

軽口を叩いて様子を見るが、アーウェルンクスには流石に隙が無い。

「・・・あの黒髪の嬢さんとは、新幹線の中で妨害工作をしてた時に知りおつたんや。」

なんでか知らへんが、ウチの名前を知っていてな・・・」

「それはまずいんじゃないですか？

向こうに僕達の情報が渡っているとしたら・・・」

アーウェルンクスが剣呑な様子を見せ、それに反応した茶々丸が私の前に出ようとすする。

「そのの僕、そんな怖い顔しないで、お姉さん怖い・・・」

「ちよい待ちい、新入り。」

ほんで、ソプラノはんやつたな、あんさん今日は何の用や？」

「今日は千草さんを見かけたので挨拶に来ただけですよ。」

「・・・ほんまやるな。」

千草さんたちの表情があからさまに不審そうだ。

この状況でいきなり現れて挨拶しに来ただけと言っても無理だろう。

「今日ここで会ったのは本当に偶然ですよ？」

シネマ村を観光していたら いきなり千草さん達が現れたんですか  
ら。」

「・・・挨拶に来はっただけなら今日はこれで失礼したいんやけど  
？」

「せっかく会ったんですから もう少しお話しませんか？」

丁度いいので聞きたいことも有るんですけど。」

「なんや？ 聞くだけ聞いてみてもええけど。」

「それじゃあ、千草さんたちは近衛さんを攫って何をするつもりで  
すか？」

今の状況からしたら当たり前の質問、

千草さんにもそれほど不審に思われてはいない感じだ。

「それにウチが答えて なんかええことでもあるんやるか？」

「今の 千草さん達にはそんなにいい事は無いですね、」



将来的には千草さん個人にはいい事ありそうですけど。」

「ほんなら今答えることはでけへんな。」

「そうですか、残念です。」

それじゃあ、最後に一つだけ、千草さん 新幹線で私が言った言葉覚えてますか？」

「……ウ、ウチが欲しいとか言うったことか？」 / /

「そう、それです。覚えていてくれて嬉しいです。」

私達はあなた達の邪魔をしようとは思ってませんので好きなようにしてください。

今回のお仕事が終わったら、私に連絡くださいね。」

きつと千草さんの望みが叶うお仕事を紹介できますから。」

千草さんの表情が一気に険しくなる。

「あんさん……ウチの望みが何か知ってはるんですか？」

「知ってますよ？ 私が頼むお仕事は千草さんが私の願いを叶え、

私は千草さんの願いを叶える。 良い条件の仕事だと思ってますよ。」

「

「・・・分かった、だが残念やったな、今回の件でウチの望みは叶うから」

あんさんのお仕事は受けれそうになさそうやで？」

「本当に その方法 で叶うといいですね。」

千草さんを取ってはならみ合い、私に取っては見つめ合い、しばらくそうしていると、アーウェルンクスが声をかける。

「それで 天ヶ崎さん、彼女達どうしますか？」

僕としては黒髪のお嬢さんと少し話したいことがあるんだけど。」

「ウチはその背の高いお姉さんと切りおつてみたいんですが。」

「・・・今はここまでや、帰ります。」

二人は少々不満そうだが、千草さん達は、屋根から飛び降り、帰っていく。

「それじゃあ、千草さん、また今夜〜。」

「今夜ですか？ ソプラノ様。」

「そう、今夜。 楽しみだなー。」

私と茶々丸もエヴァの元へ戻り、シネマ村観光を続けた。

神様から頼まれたお仕事。 その20（後書き）

20話 投稿

この話を読んでくれている皆様のおかげで、  
20話まで 無事たどり着くことができました。

ありがとうございました。

感想も何件かいただき、誤字などの指摘や感想、  
中には話しを楽しみにしてくれている人もいるようで  
ありがとうございます。

今後も今まで通り、話のストックができれば投稿 と言う感じで行  
きます。

それでは駄文ではありますが これで失礼します。

神様から頼まれたお仕事。 その21

修学旅行3日目 夕方

「それで、姉様は何をしていたんだ茶々丸？」

「ソプラノ様はネギ先生の敵対組織の人を引き抜こうとしているようでした。」

「……それは女か？」

「メガネを掛けた和服の女性です。」

「……あの女か。」

旅館の私達の部屋では、エヴァによる事情聴取が行われていた。

「姉様はそんなにあの女が欲しいのか？ どこがいいんだ？」

「京都弁で黒髪和服、オマケにメガネだよっ！ 完璧じゃない!!！」

「意味がわからんわ!!！」

「いや、かなり高得点だろう。」

千雨は私の言いたいことを分かってくれているようだ。

「さすが千雨、かなり高得点だね、私的には花丸あげたいよ。」

「変な属性を付けていじるよりも自然な感じで、

いてもおかしくなさそう、でもめったにいない感じがいいな。」

「お前たちの言うことはワケがわからん……」

とにかく、あの後その女とあと2人のガキと話をしただけなんだな。

「その通りです、マスター。」

「……ならばなぜお前はさっきから姉様の手を握っているんだ。」

茶々丸は千草さん達との話の後、隙あらば私の手を握っている。

「……ソプラノ様の健康状態をチェックしています。」

「……離せ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・了解しました。」

「うち、なぜ語尾がおかしくなる、

これは超に一度メンテナンスしてもらったほうがよさそうだ。」

事情聴取も一通り終わり、各々が好きなように寛いでいる。

「あ、エヴァ、まだお風呂には行かないで。」

「ん？ なぜだ姉様、今夜は最後の温泉だから楽しもうと思ってるんだが？」

「今夜は多分出かける事になると思うから服はそのまま私服でいて。」

「意味がわからんぞ、何か用事でもあるのか？」

「近衛さんを攫おうとしてた奴らにとっても

今夜が最後のチャンスになるからね、動くと思っただ。」

「だが、あいつらは近衛の実家、関西の総本山に行っただらろう？」

さつきそついう連絡が教師共からあったではないか。」

「千草さんにしたって関西の人間だよ、内部犯行の可能性が高いのに

その組織が当てになるわけ無いじゃん。」

「そんなの放っておけ、私達には関係ないことだ。」

「学園長から依頼があったらどうする？」

この件で動けばかなり大きな貸しが作れると思うんだけどな。」

「……ふむ、アレか、今後一切授業に出なくても卒業できるよ  
うになるかもしれんな。」

「そ、それ 私もできるかっ!？」

ノートPCをいじっていた千雨が私達の話に食いつく。

「できるとは思いつけど、ちつたんが学校に行かなくなったらネギ先  
生とか

クラスメイトが寮の部屋に押しかけてくるよ?」

「……っち、それはそれで面倒だ。」

あと、二人きりの時以外でちつたんって呼ぶな。」

「そうだな……千雨はお金貰って寮の部屋を引越してエヴァの  
家に来れば？」



部屋はまだ空いてるよね？」

「空室は何室があるが千雨が来るのか？ ……まあ、千雨ならいいか。」

「引越しとお金か？ ……お金はいくらあっても困ることはないからな。」

「エヴァと茶々丸は図書館島の禁書の閲覧許可とか、家の改築費用とか

茶々丸の改造パーツ代金とかでいいんじゃない？」

「私の改造費用ですか？」

「超がこの間人工皮膚とか人工筋肉がどうか言っていたじゃない？」

アレだっというものにしようと思ったたら費用がかかるから大変だと思っただ。」

「そうですね、どうせなら最高品質でお願いしたいです。」

「図書館島の禁書か、まあ、研究の足しにはなるだろう。」

4人で当たる前の宝くじの使い道を相談するように妄想を語り始める。

やれ猫と住める家が欲しいだの、最新のスパコンが欲しい、クラス

を変えてもらおうか？

ネギ先生をクビに、学園長の頭を解剖してみたい、など様々な妄想が繰り広げられる。

4人で妄想を語っていると、エヴァの携帯、次いで私、茶々丸、千雨と

次々に携帯が鳴り始めた。

「ホラ来たよ」

「やったな！ コレであのジジイの頭蓋骨の構造がわかる！！」

「猫と住める家が・・・」 「平穏な暮らしとパソコンが！」

妄想が暴走する4人、一息付けてそれぞれが携帯に出て

話を聞くと急いでエヴァに連絡を取りたい、

という内容だったのでエヴァの携帯で学園長と話す。

「何だ、ジジイ 私はこれから温泉に入るから忙しい。」

くだらん用事だったらこのまま京都にしばらく住み着くぞ。」

「大事な用件なんじゃ！ 今すぐ動ける人材で事を収められるのは君達しかおらのじゃ！」

「何のようだが知らんが、私達が知ったことが。」

どうせばーやか貴様の孫のことだろう？

せっかく事前に警告してやったのに無視した報いだ、自分で何とかしろ。」

「その事についての謝罪は後でいくらでもするから力を貸してくれんかの？」

西の本山が襲われて、長……婿殿までやられたようなんじゃ。

その上木乃香も攫われて、もはやネギ君達では収集がつかん状態じゃ、

急いで西の本山に急行して事態を収めて欲しい！！」

「ハッ！ 良い気味だ、平和ボケしたバカ共が。」

だがよく考えろよ？ 私達を動かすんだ、西の組織や貴様らも

並の対価で済むと思うなよ？」

さすがにエヴァは以前から城主をやったり

貴族として教育を受けているだけあって交渉はうまい。

「動くのは私と姉様、茶々丸に千雨の4人だ。」

それぞれに報酬が必要だぞ？ それでもいいのか、近衛 近右衛門  
？」

「……ぐっ、わ、わかった。」

今は時間が惜しい、急いで向かってくれ！

君達への報酬は儂に可能な事なら何でも聞く！」

「駄目だ、貴様の組織と西の組織、関東魔法協会と関西呪術協会に可能なことだ！」

「……分かった。東はともかく、西は長がやられ本山は壊滅状態じゃ、」

今は組織として機能しておるまい、確約はできんが西には儂から話して説得する。」

これで納得してもらえんか？」

「……まあ、いいだろう。」

約定を違えたときはどうなるか分かっているな？

三代目学園長の悲劇、忘れたとは言わさんぞ?」

麻帆良学園 三代目学園長、私達との契約を破棄した故に、多数の死傷者を出し

最後には忙殺された学園長・・・

「わかっておる・・・儂もその時に学園にいたんじゃからの。」

「ならば行ってやろう、西の本山を襲ったとかいう奴らを撃退すればいいんだな?」

「それで頼む、必要以上に動いてもらうより、撃退してもらうだけにしてもらえたほうが

向こうのメンツも立つじやろう。」

「ふんっ、メンツか・・・話は終わりだ、私達はすぐに向かう。」

「頼んじゃぞ、エヴァ。」

エヴァが携帯を切り私達に向かって笑いかける。

「やったぞ姉様、コレであとは本山を攻め込んだバカ共を潰せば・・・ククク。」

「よし、早く行って終わらせようぜ。」

「装備の確認は完了しています。」

「じゃあ、私は見学で。」

「ああ、よく見ている姉様。私が決めてやるからな！」

修学旅行に随伴している先生には学園長から連絡してもらい、

私達4人は関西呪術協会、本山へ向かう。

その少し前、夕映から連絡を貰った長瀬、古、龍宮の3人も本山へ移動を開始していた。

修学旅行3日目 夜 関西呪術協会 本山

私達が本山に到着した頃、建物の中にいた人達は石化されたようで、

動く人影は見当たらなかった。

その中にはクラスの知り合いもいたが、ネギ先生達や千草さん達もおらず、

少し離れた場所で戦闘が行われているような怒号が聞こえ、光の柱が見えた。

「どう？ エヴァにゃん、目標の場所は把握できそう？」

「うむ、あの光の柱辺りで強力な魔力反応があるな、

あそこが本命で間違いないだろう。

そうすると、騒がしいところは進行方向から見ても足止めだろう。

あと、いい加減にゃんって言うのをやめろ。」

「じゃあ、その戦闘が行われている場所を少し迂回して様子を見ながら

光の方に行こうか。

あと、エヴァがにゃんを付けられることを受け入れる。」

エヴァに肉体言語でお話された。

「戦闘が起こってるところは放置でいいのか？」

「私達が着てからもまだやってるんだらう？」

ならば光の方をどうにかして、

まだやっているようならまとめて氷漬けにでもしてやればいい。」

「エヴァは面倒くさくなるとやるのが大雑把になるよね・・・」

「じゃあ、姉様がやるか？」

「凍りづけでいいんじゃない？」

「・・・・・・」

「と、とりあえず、光の方に行こうか？」

私達は、本山の建物からでて、戦闘が行われている広場の脇の森の方から迂回し、

誰が戦闘を行っているか確認する。

「茶々丸見える？ 誰か知ってる人いる？」

「現在神楽坂さんと、桜咲さんが敵に囲まれています。」



あと、なぜか古さんと龍宮さんもいます。」

「その二人旅館にいなかったか？」

「ワケがわからんが、見た感じ大丈夫そうだな、

奴らに任せて私達は光の方に向かうぞ。」

「りょーかい。」

「千雨はそろそろアーティファクトの用意をしておけ。」

「え？ 私もやるのか？」

「当然だ、せつかくの実戦だ、いい経験になるからお前も参加しろ。」

「……チャチャゼロとの訓練がもうすでに実戦だよ……」

文句を言いながら千雨がアーティファクトを呼び出し、私も千雨に魔力供給を開始する。

森の木を隠れ蓑にしながら光の方に移動をしている最中、

少年と戦闘中の長瀬さんと木陰に座り込んでいる夕映を発見した。

「あゝあれだよエヴァ、あそこに夕映がいる。」

夕映が龍宮さんたちや長瀬さんと呼んだんだよ。

バカリリーダーだから。」

「ふむ……まあ、面倒なことが一つ減ったから良しとするか。」

お、長瀬の方も勝負か付きそうだ………って」

長瀬さんの方が勝負か付きそうなときに、光の柱の方で魔力が一際大きくなり

この一からでも見える巨大な鬼が現れた。

「おいおい、まじかよ………でけーな。」

「ふむ……あんな物でかいだけだ。だがあれの召喚が目的だったようだな。」

「マスターどうしますか？」

茶々丸の間に少し考えたエヴァが不敵な笑みを浮かべ答える。

「おい、千雨、貴様の初陣には上出来な相手だ。」

最初はお前がやれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？　なんで私何だよ！！」

お前がやればいいじゃねーか！」

「私は止めをやるから、最初の攻撃はお前に譲っていやる。」

「最初も最後までお前がやれよ！」

「おちつけ、千雨。　何もお前に倒せと言ってるんじゃない、

お前のあの魔砲があつたら？

アレがどの程度の火力が観るのにあのデカブツは好都合だと思わんか？」

「・・・・・・・・そりゃアレなら外しようがねーし、威力を見るならうってつけだろうが・・・・・・・・」

「そういう事だ、お前の魔砲ならここからでも十分届くだろう？」

射程と威力だけは規格外な砲撃だ、私が作るのに協力したんだから当然だな。」

エヴァの説明にしぶしぶ納得する千雨。

「まったく・・・・・・・・ここからぶち込むだけだからな、近くにはいかな

「ぞ。」

他の連中にバレたらろくな事にならないんだから。」

「夕映や長瀬さんはどうする?。」

「あいつらも関係者だろう?。そうじゃなくてもここまで首を突っ込めば」

ジジイが口止めするだろう、私達の知ったことじゃないな。」

「でも、凄いいこっち見てるよ?。」

「「……………はあ?。」」

長瀬さんや夕映の方を確認すると……………すごいこっちを見る。

エヴァと千雨、茶々丸は空を飛び、私は茶々丸にお姫様だっこされてる様子が

バッチリと見られている。

「……………姉様、認識阻害は張ってないのか?。」

「エヴァが貼ってると思ってた……………どうしようか?。」

「……………見なかったことにしよう。」

「……………マジか？」

「長瀬さんと綾瀬さんがこちらをずっと見てますが？」

「知らん！！ 気のせいだ、千雨！ さっさとあのデカブツを殺つて帰るぞ！！！」

「いや……エヴァ、流石にもう無理だって、あの二人には口止めだけはしておかないと。」

「裏切るのか千雨！！！」

「二人は放っておいて、茶々丸二人のところに降りてー。」

「了解しました。」

茶々丸に抱かれて、二人の元へ降りる、長瀬さんが若干警戒しているようだ。

「こんばんわ、二人共。 こんな所で何してんの？」

「それはこっちの台詞でござるよ、ソプラノ殿達はいったい何をしてるんでござるか？」

「ん〜、私達はお仕事かな。 学園長に頼まれてきたんですよ。」

「ソプラノ達が……学園長に？」

「夕映も長瀬さんも、そのうち学園長か、ネギ先生から説明があると思うけど」

「私達の事は皆には内緒にしてくれないかな？」

「……状況がわからない内はそういうわけにはいかんぞござるな。」

「長瀬さんが忍者だって言うのは内緒にするから。」

「拙者、何も見なかったぞござる。」

長瀬さんの変わり身の速さに夕映がずっこける。

「ね、夕映もお願い。忘れるとは言わないけど皆には内緒にしておいて？」

「……後でしっかりと説明してもらつですよ。」

「内緒にしてくれるならね。」

「なら、一つだけ聞きたいことがあるです、ソプラノたちは何しに此処に来たんですか？」

「私達は学園長の依頼で今回の件を収めに来たんだよ。」

「……………わかったです。ソプラノを信じるです。」

「拙者もお手並み拝見でございます。」

「ん、じゃあ二人共そういう事でよろしくね。」

あ、そこに転がってる僕は、

後でネギ先生か関西の組織の人たちにも引き渡せばいいから。」

「分かったでございます。」

「じゃあね、茶々丸行こう。」

「はい、ソプラノ様。」

とりあえず二人の口止めをして、エヴァ達の元に戻る。

二人の口止めは帰ってから学園長と決めたほうがいいだろう。

「遅かったな、姉様。あのデカブツもそろそろ動き出すぞ。」

「二人の口止めしてきたよ、とりあえずは大丈夫だと思う。」

細かいことは帰ったら学園長と相談してきめようよ。」

「ならばあとはデカブツだけだな、よし千雨。」

さっきの話通り、貴様がここから砲撃して私が止めを刺す。」

「エヴァはどうやってトドメを刺すつもり？」

「このまま正面から行って氷漬けの後に粉碎だが？」

「正面から行くのはおすすめしないな、あのデカブツよりも厄介な奴がいるはずなんだよ。」

白髪の子どもなんだけど、アレには気をつけて、エヴァでも油断すると痛い目に会うよ。」

「そんなのがいるのか？」

「うん、西の本山を襲ったのも多分その子供だよ。」

何であの子が千草さんに強力しているかわからないけど、あの子どもだけは注意して。」

「わかった、ならばそのガキの影でも利用させてもらうか・・・クツクツク。」

エヴァが悪巧みを開始したようだ、アーウェルクスご愁傷さま。

「よし、千雨がココで砲撃後、茶々丸は空からデカブツに近づけ、

私は白髪のがキの影から様子を見て一発お見舞いしてやる！」



「じゃあ、私は千雨と一緒に。」

「よし、行くぞっ！」

号令と共にエヴァが影に潜み、千雨は魔砲の詠唱開始、茶々丸は空に待機し砲撃を待つ。

私は千雨の魔砲のサポートしつつ、視力を強化して千草さんの様子を観る。

千雨の詠唱中に幾つか巨大鬼こと、

リヨウメンスクナノカミに魔法の攻撃が向かったが全く効いてない様子。

あの魔法は、おそらくネギ先生の攻撃だ。

『エヴァ、ネギ先生が鬼の所にいるから注意してね。』

『わかった、あれに死なれると報酬にケチがつきそうだからな。』

千雨の詠唱が終わり、膨大な魔力と電力が杖の先端に収束する。

「カートリッジフルロード！これが私の全力全壊っ！！！」

決め台詞を忘れない千雨に改めて惚れ直す。

レイ八さん（改） に搭載されてるカートリッジには1発で千雨の最大魔力と同じ量の

私の魔力が圧縮されている。

そのカートリッジ6発をすべて使いさらに収束する魔力を上げる。

「瞬く星を 撃ち砕けっ！！」  
《Starlight Break  
er》

レイ八さん（改） のお決まりの台詞の直後、振り下ろした杖先端から

雷の轟音と共に魔力と雷が収束した1本の光の線がリョウメンスクナの左胸に突き刺さる。

千雨のコスプレ衣装も相まって、まさに某魔王がここに再現された。

千雨が放った魔砲が徐々に消えていくにつれて、光が通った跡にはバチバチと静電気が発生するだけで、それ以外には何も存在していない。

直撃したりヨウメンスクナの左胸にはポツカリと穴が開き、  
傷の再生に力を使っているのか、動く様子もない。

この時、私と千雨は声を交わしたわけでもないが、同じことを考えていた……

（ブラスタービットも再現しよう。）

side エヴァンジェリン

（ふむ、さすが私が制作に関わった魔砲だ、威力だけなら上級魔法

にも引けを取らないな。)

千雨がうまくやったようで、リヨウメンスクナの動きが完全に止まり、

召喚した符術の女も白髪の子も鳩が豆でっばうでも食らったような表情で笑える。

笑いを堪えながら白髪の子の影に潜み様子を伺うと

ぼーやがまだ諦めてないのか、神楽坂と桜咲を召喚する。

(あのぼーや・・・桜咲も従者にしたのか、将来の死因は痴情の纏れか・・・)

白髪の子が石化魔法を放つが・・・躲されたようで白煙の跡には誰もいない。

魔法の詠唱速度や込められた魔力を見ると、

手を抜いているのか、本気を出せないのか分からんが、

姉様の言つとおり並の術者では無いようだ。

白髪のカキがぼーやを見つけてるが・・・桜咲に羽が生えている？

正体を晒す決意をしたのか、桜咲が近衛を救出するために飛び立ち、ぼーやと神楽坂がその援護をする。

(ぼーやも神楽坂もそれなりに鍛えているようだが、相手が悪かった。

この白髪相手ではよくやっっている方が・・・)

ぼーや達は完全に防戦一方だが目付きはしっかりしている、

まだ諦めていないのか白髪の間を伺っているようだ。

「・・・目指して射よ、石化の邪眼！」

白髪の石化魔法がぼーやと神楽坂を襲い、神楽坂がぼーやを庇い魔法に耐える。

(・・・無効化した！？ 神楽坂は完全魔法無効化の能力か！？

ジジイがぼーやにつけようとするのも理解できる。(

「やはり、魔力完全無効化能力か？」

「まずは君からだ、カグラザカアスナ。」

ガキイイツ！！

「ぐう……くっ！」

「アスナさん……だ、大丈夫ですか……？」

「うん、ネギ……大丈夫よ。」

「イタズラの過ぎるガキには……おしおきよっ！！！」

「白髪のガキが神楽坂を狙い拳を放つ……がぼーやに捕まれ、

その隙に神楽坂の一撃で障壁が破壊された。」

「うおおおおっ！！！」

障壁の破壊された白髪のガキにボーヤが全力で魔力を込めた拳をぶち込む。

桜咲の方も無事に近衛を救出する事が来たようで

近衛を抱いて離脱している。

「や……やったの？」

神楽坂が倒せたのか気にしているようだが、甘い。

白髪レベルの相手がこの程度で倒せるわけがなく、大して効いていない様子はない。

「……体に直接拳を入られたのは……初めてだよ

ネギ・スプリングフィールド。」

白髪がぼーやに襲いかかる。

(このあたりがぼーやにしては及第点か。)

「……っ!?!」

「そのぼーやがやられると少し困るのでな……手を出させてもら  
うぞ?」 若造。

私は影から出て白髪にガキの腕を掴み、殴りつける。

「あっ……エ……」 「エッ……エッ……」

「「エヴァンジェリンさん!」」

「この貸しは高く付くぞ? ぼーや、神楽坂。」

私は白髪のがき池にを殴り飛ばしたが、出てくる様子がない。

『マスター、結界弾セットアップ。』

『やれ。』

『了解。』

上空から茶々丸が結界弾を発射、リョウメンスクナの動きを封じる。

『マスター、この質量相手では十秒程度しか拘束できません、お急ぎを。』

『十分だ、撤収の用意をしておけ。』



『了解。』

「ぎゃあああ!?!」

( ) . . . ? あそこで騒いでいるのは姉様が狙ってる女か？ まあ、どうでもいいか。( )

「さて、ぼーや。 そんな所においては巻き添えでまた氷漬けになるぞ?」

「. . . つ!?!」

「ネ、ネギ、早く逃げるわよ!」

ぼーやと神楽坂が引くのを確認しつつ、私は上空へ移動し、最後の締めにかかる。

「ハハハ、行くぞデカブツ!」

リック・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い 我に従え 氷の女王。

来れ とこしえのやみ えいえんのひょうが。」

私の氷結魔法でリョウメンスクナが氷漬けになり、

千雨の砲撃も合わさって完全に動きが封じられた。

「つつつ 次から次へと何や、何々やー！？ あんた何者や！！」

「くくくく、相手が悪かったな、女・・・」

ほぼ絶対零度、150フィート四方の広範囲完全凍結殲滅呪文だ。

そのデカブツでも防ぐことは適わぬぞ。」

「そ、そないなアホな・・・せつかく喚び出したリヨウメンスクナ  
ノカミが・・・」

まだ、何もせえへん内に・・・。」 1111

「我が名は吸血鬼、エヴァンジェリン！！ 「闇の福音」！！」

最強無敵の悪の魔法使いだよ！！ アハハハハッ！！」

「ノ・・・ノリノリねー、エヴァちゃん。」

「全ての命あるものに等しき死を。 其は 安らぎ也。」

「な、なああああっ！？」

「「おわるせかい」 砕ける。」

以前ぼーやにかけた魔法とは違い、今回の魔法は敵を殺す魔法、あのデカブツも凍らされ砕かれては復活できまい。

「アハハハハッ！ バアカめっ！ 伝説の鬼神か知らぬが、私の敵ではないわ！！」

完全に砕け散ったデカブツが池に沈んでいき、召喚した符術の女の姿が見えない。

今回は敵の撃退が目的で捕らえることでも皆殺しでもないからジジイに頼まれた仕事はコレで終わりでいいだろう。

「・・・ガキ共生きてるか？」

ぼーやと神楽坂を確認に行くが・・・少しやりすぎたか？

トラウマでも刺激したのか、ぼーやの様子が多少おかしい。

「・・・何考えてるのよエヴァちゃん！！ やりすぎよ！

ああ、もうっ！ ネギなんか前のこと思い出して震えてるじゃない

「！」

「・・・・・・・・」 カタカタ 111

「あー・・・まあ、あのデカブツを仕留めるにはあれくらい必要だったんだ。」

生きてるんだから気にするな。」

「まったく・・・もう・・・。」

震えるぼーやを神楽坂がなだめるが、様子がおかしい。

よく見ると腕が石化しかかっている。

白髪のがきの石化魔法を少し食らっているようだ。

「む・・・石化しかかっているぞ？ 大丈夫かぼーや？」

ズ・・・

「・・・・・・・・」

「エヴァンジェリンさん！ 後ろっ！！」

「ぼーやが私に向かって走りこんでくるが蹴り飛ばし、そのまま後ろを振り向く。」

「甘いぞ？ 白髪。」

「・・・っ、障壁突破、「石の槍」」

白髪のガキの石の槍が私に向かって伸びてくる、

私は一步横に移動し難なくかわす。

「エヴァちゃん！」 「エヴァンジェリンさん！」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル 「黒百合の主」」 か。

「ブチッ」

「私をその名で呼ぶなっ！！！」

全力の魔力を乗せた爪で白髪のガキを思いつき引き裂く。

「……なるほど、相手が吸血鬼の真祖では分が悪い、

今日のところは僕も引くことにするよ……」

「逃げるな貴様っ！！　ここで死んで逝けっ！！！！」

白髪のがきは水の幻像を利用していたようで、逃げられてしまった。

「うがあああつあつあ~~~~~！！！！」

くそっ！！　あの白髪めっ！　次あつたら必ず殺してやる！！」

「マスター、物に八つ当たりしないでください。」

「よかった……エヴァンジェリンさん……う……」

「あゝぼーや、大丈夫か？」

「ネギ先生！？」「ネギ、ちょちょちよっ」と！！

「兄貴っ、ひでえっ、右半身が石化を……」

ぼーやが石化の影響で倒れたところに、ちょうど桜咲と近衛がやってきた。

「ネギくーん！」 「ネギ先生！」

「あ、このか！ 刹那さん！！」

ネギが！？

さらに森のほうからは長瀬と綾瀬、龍宮、古が制服のガキを連れてやってきた。

「どうしたでござるか？」

「楓さん、夕映！」

容態を見ていた茶々丸から、簡易の診察結果が告げられる。

「危険な状態です。」

ネギ先生の魔法抵抗力が高すぎるため 石化の進行速度が非常に遅いのです。

このままでは 首部分まで石化した時点で呼吸ができず、窒息してしまいます。」

「……ど、どうにかならないの エヴァちゃん！？」

「わっ……私は治癒系の魔法は苦手なんだよ。」

姉様ならなんとでもなるんだが・・・」

「そんなっ・・・」

「昼に着くつていう応援部隊なら直せるだろうが・・・間に合わねえっ。」

「ソプラノならなんとでもなる・・・?」

それぞれが何かできないか思案する中、桜咲と近衛が前に出る。

「お嬢様・・・」

「うん」

あんな・・・アスナ・・・

ウチ・・・ネギ君にチューしてもええ?」

「なっ何言ってるのよ!」のか、こんな時に。」

「あわわ、ちやうちやう、あのホラ　パ・・・パクテオーとかいうやつや。」

「え・・・」



「みんな・・・ウチせつちゃんに色々聞きました・・・ありがとうございます。」

今日はこんなにたくさんの方のクラスの人に助けってもらって・・・

ウチにはコレくらいしかできひんから・・・」

「・・・そうか！」

仮契約には対象の潜在能力を引き出す効果がある。

このか姉さんがシネマ村で見たあの治癒力なら・・・」

「ハイ。」

淫獣が急いで仮契約の魔法陣を書き、

近衛がぼーやに近づきぼーやの頭を抱える。

「ネギ君・・・しっかり・・・」

パアアア・・・

仮契約の完了した光が輝き、ぼーやの呼吸が落ち着きだす。

「ん・・・」

このか・・・さん・・・？

よかった・・・無事だったんですね・・・」

ぼーやが目を覚まし、周囲のクラスの連中が喜びに湧く。

これで今回のジジイの依頼は完了。

後は応援の連中やぼーや達に任せてもいいだろう。

(・・・それにしても姉様は何をしてるんだ？)

side ソプラノ

「お疲れ様でした、千草さん。」

「・・・あんさん・・・何でこないな所に・・・。」

私と千雨は千草さんと森の中で会っていた・・・

神様から頼まれたお仕事。

その21（後書き）

21 話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その22

「お疲れ様でした、千草さん。」

「……………あんさん……………何でこないな所に……………」

私と千雨は千草さんと森の中で会っていた。

「どうですか？」

千草さんの願いは叶いましたか？」

「……………いけずなお人やな……………知っててそないな事を聞きはる。」

視線をそらす千草さんが、辛そうな顔で答える。

「でわ、質問を変えますが。」

リヨウメンスクナ、あの鬼の力を得てどうするつもりだったんですか？

西の本山はアーウェルンクスによってすでに壊滅状態、

明日までは応援も来ないでしょう、その間にリョウメンスクナを従えて

「……京都の街でも焼き払いますか？」

「そ、そないな事はせえへん!!」

心底嫌そうに千草さんは答える。

「では、あの鬼で何をしますか？」

「……ウチは、ただ西洋の魔法使い共に……」

「復讐はできましたか？」

「……」

千草さんは何も答えずただ黙りこむ。

「私言いましたよね？」

千草さん願いが 「その方法で かなうといいですね。」 と。

「

「……何が言いたいんや。」

「千草さんの願いは両親の復讐、

西洋魔法使いなんて・・・本当はどうでもいいんじゃないかなかったですか？」

「そないなことあらへんっ！！　ウチは・・・西洋魔法使いが大っきらいや！..!」

「それですよ、千草さんは西洋の魔法使いが嫌いなのは感情でしょう？」

「願いと別なものじゃないんですか？」

「.....っ!？」

千草さんは酷く驚いたような、悲しそうな表情を見せる。

あまり追い詰めるのもかわいそうだとは思っが、

あえて千草さんにためにさらに追い詰める。

「貴女が今回行なったこの事件・・・とでもいいでしょうか、

確かに東の組織、西洋魔法使いには凄い嫌がらせになったでしょう、

でも同時に貴女の所属している西には大打撃になったでしょうね。

リヨウメンスクナが暴れていれば組織が壊滅していたほどに。」

「……………そんな……………ウチ……………そないなつもりは……………」

「ご両親の復讐は結構です、私も千草さんと同じ立場になったら

この娘、千雨が殺されたりでもしたらきつと復讐します。

でも、今回の件……………復讐になりましたか？

「ご両親の仇は討てましたか？」

千草さんが腰が抜けたように座り込み、目からは涙がこぼれ落ちる。

「あ……………ああ……………ウチ……………ウチは……………」

「千草さん。貴方が今回やったことは……………無駄でしたよ。」

「ああああ……………うわああア……………!!!!」

千草さんをしばらく好きなように泣かせてあげ、

私はそんな千草さんの頭を抱き、胸を貸す。



千雨は何も言わずにただ私達を見つめている。

そうして数分・・・数十分か・・・どれくらい時間が経ったが分からぬが

千草さんの泣く声が収まり、多少落ち着きを取り戻したようだ。

「少しは落ち着きましたか？」

「・・・・・・・・・・はい・・・・えろつみっともないところお見せしました・・・・・・・・」

目は真っ赤で、目の端にはまだ涙が溜まっているものの、話ができるくらいには落ち着いたようだ。

「さて、千草さんのこれからの話をしましょうか。」

「ウチの話ですか・・・？」

「そうですね、千草さんの話です。」

「千草さんはこれから幾つか選択肢があります。」

「一つは、このまま逃亡生活を送る。」

これはお薦めしませんね、捕まったら良くて西の組織に一生監禁、悪くて処刑です。

一つは、自ら西か東の組織に出頭、温情で処刑はないかもしれませんが

長期の監禁、投獄は免れないでしょうね、東はオコジヨにしようと動くかもしれませんし

謀殺の危険もあります。

一つは、自らでケリを付ける。 ようは自殺です。

お薦めしません。

そして最後、 私のモノになる。

私が千草さんを守ってあげますよ、西にも東にも貸しがありますので千草さんを 私の元で死ぬまで強制労働という名目にして保護します。

オマケに千草さんの望みもかなえてあげますよ。」

最後の選択を告げる間に千草さんの頬を撫で、涙を拭く。

「……あんさんは……すべて……ここまですべて仕組  
んではったんやね……」

千草さんの顎を指で少し持ち上げ私はにこやかに笑う。

「正解です」

その瞬間千草さんの目が怒りに染るが、すぐに諦めの表情に変わる。

「最初に新幹線で顔を覚えてもらいました。

次に、修学旅行初日で千草さん達の技量と戦力を見ました。

3日目、シネマ村で会いましたね、あの時に千草さんの気持ちを確  
認しました。

間違った復讐方法を選んでましたね。

そして今、千草さんのやりたいようにやらせて その結果が無駄だ  
と突きつけました。

最後に千草さんの未来の選択を絞り込みました。」

「……どこからウチの計画が漏れていたのか、ウチの願いを

どこで知りはったのか・・・

聞きたいことは山ほどあるんやけど・・・どうせ教えてくれへんのやろ?」

「それが今必要ですか?」

「あんさんのモノになったら・・・ほんまにウチの願いは叶うんですか?」

「千草さんの敵を直接討たせてあげることにはできません。

誰か限定できないからです。

でも千草さんのご両親が戦っていた部隊の指揮官、

部隊員の名簿、家族構成、現在の所在地等の情報。

あとは千草さんのご両親が戦っていた時、救援要請を出したにもかかわらず

それを無視した部隊の指揮官の名前、家族構成、所在地も調査済みです。」

「・・・そ、そこまで調べてはったんですか?」

千草さんが私に縋りつく。

「この人達を皆殺しにすることは正直進めません。」

「なんでや！　なんで……」

「彼らも好き好んで戦争に参加したわけではないんですよ。」

「……かと言って千草さんの気持ちも収まらないでしょ？」

私は彼らを千草さんお得意の呪いで呪ってやるのがいいと思いますよ。

指揮官や救援要請を無視した人は殺してもいいかもしれませんが、

皆殺しはちょっと……個人的にお薦めしないかな。」

「……せやかて……」

「今すぐ決めなくてもいいですよ、ゆっくり考えましょう。」

呪いに必要な道具は揃えてあげますし、殺すなら気は進みませんが

一時的に自由に行動してもらっても構いません。」

「……」

私の服を掴んでいた手を離し、これからのことを考えているようだ。

「ほんまに……ほんまにあんさんのモノになったら……」

その情報と必要な物をくれはるんですか？」

「もちろん、そのために集めたんですから。」

「……どうせ、このまま逃げたかて敵も討てずに野垂れ死ぬだけやろうな。」

「……最後に聞かせてください、なんでそこまでしてウチみたいな女が欲しいんですか？」

「人生をかけて家族の仇を討とうというほど情に厚くて、美人。」

オマケに言うなら京都弁があつて黒髪和服でメガネっ娘、

男なら欲しがつて当然でしょう!!」

途中若干暴走した……

千雨の視線がブリザードのように冷たい。

「……プツ……そないな理由ですか……って!

あんさん男かいなっ!？」

「こつ見えて男の娘なんです」

千草さんが千雨に確認を取ろうと視線を移す。

「・・・何の冗談か、先輩はこんな成りして立派に男なんだ。」  
／／

立派にの部分に千雨の何か複雑な感情を感じる。

「・・・はあく、なんか阿呆らしゅうなってきたわ。

わかりました、今日からウチはあんさんのモンになります！

よろしゅうお願いします。」

少々やけっぱちだが、千草さんの台詞に私の頬は緩みっぱなしになる。

「やった〜！！ 千草さんゲットだぜ〜！！」

やったよ ちうたん！ 長年の苦勞が報われたよっ！！」

「馬鹿なこと言ってるなよ先輩っ！！」

浮気なんか私とエヴァが許さねーからな！！」  
／／

喜びのあまりちうたんに抱きつくが、すぐに殴られ 突き放される。

「浮気つて……あんたら、そういう関係なんか？」

しかもエヴァって……あ……っ！！ さっきのあのちんちくりんの金髪の吸血鬼！？

あんたらグルやってんかつ！！ 無しっ！ 無しや！！さっきの話は無しやつ！！」

「もうダメですう、千草さんはもう私のモノですう。」

「そないな事卑怯やつ！ あんさんがウチの計画ぶち壊しにしたんやんか！！」

「アレは東の組織の長から東と西に貸しを作るためにやったんですう。」

そのおかげで千草さんの身柄引き渡し交渉を進められるんだからいいじゃない。」

「そんなんあきません！ ずるっこい！ 卑怯もんのすることやつ」

「あ……もう！ ……どつでもいいじゃねーか……」

「」「良くない……」



「千草さんはもう私のモノなんだっ！」

「そんなずるっこいことウチは認めまへんえっ！！」

「お前らづるせーよ！！先輩のモノは私だけでいいんだよ！！」

「何言うてんのや！ウチかてもうこの旦那さんのモノや！」

「お前さっきは嫌だつて言つたじゃねーか！」

「嫌なんて言うてません！納得がいかない言うてんのやっ！」

「やった、千草さんも認めたよっ！」

「納得はしてませんで！！」

「あゝゝゝどつちなんだよっ！違つ！どつちでもいいんだ  
よ

先輩には私だけでいいんだよ！！」

「せやからウチかて……」

……

……

こうして多少問題はあるものの、無事に千草さんの身柄を確保することができた。

修学旅行3日目 深夜 旅館

「何がどうなったらこういう状況になるんだ……」

「理解不能です。」

現在、私達は旅館の部屋で千草さんを足した5人で居るが、

私を中心に左手に千雨、右手に千草さん、二人が私の腕を組んで離さない。

「修学旅行に来るまでは私だけだったのに、

なんで3日かそこらで一気に2人増えてるんだっ!!」

エヴァが地団駄を踏み癩癩を起こす。

「最悪だ！ 修学旅行になんか来るんじゃないかった！！」

「何言ってますの、この金髪のチンチクリンが！

旦那さんが着てくれへんかったらウチの願いが叶いまへんやろ！」

「修学旅行に来なかったら先輩とひとつになれなかっただろう！！」

「あ、あぁっあゝゝゝ、やかましい！！ 姉様の正妻は私なんだっ

！！」

・

・

・

数十分後・・・

「はあはあ、もういい・・・それで、こいつはなんなんだ、姉様。

」

「旦那さんがわざわざ言っこともありません。

ウチは天ヶ崎千草です、これから旦那さんのモノになりましたんで

旦那さん共々よろしゅうお願いします。」

「……………後できつちり話をつけるぞ、天ヶ崎千草。」

「……………後できつちり話をつけましょか。」

「私は絡繰茶々丸です。こちらのマスターの従者をやっています。

ソプラノ様はセカンドマスターに登録されています。」

にらみ合う二人をよそに、茶々丸はマイペースで自己紹介をする。

「茶々丸はんですか、これからよろしゅうお願いします。」

「今は、千雨を除いた3人ともう一人 エヴァの従者の人形と一緒に暮らしてるんだけど、

学園に戻ったら千草さんも含めた5人になるね。」

何が気に入らなかったのか千雨が噛み付く。

「ちよつと待った！ 帰ったら私も一緒にエヴァの家で暮らすからな！」

「お前は来なくていい。」 「あんさんはこなくてもよろしゅう  
おす。」

「お前らだけで先輩を任せられるか、私も行く！」

「では、帰ったら早速部屋の掃除をしないと。」

「茶々丸やらなくていいぞ、千雨はそのまま女子寮に住むそうだ。」

「あー茶々丸は何もしなくていいぞ、私が勝手に掃除するから。」

「ウチは少し力貸してもらえますやるか？」

引越しの荷物は大丈夫なんやけど、

必要なものを買出しに行かんとあかんから 手が必要なんです。」

「わかりました、お手伝いします。」

「ほんまに、ありがとう。」

「ウガア~~~~ツ!!」 なんでお前はこついつ時に私の言うことを聞  
かないんだ!!」

エヴァが暴れだし、私と茶々丸で部屋に被害が出ないように押さえ  
る。

「はあはあ……つち、このままでは話が進まん。」

貴様らとは後できつちり上下関係を叩き込んでやるからな……」

「それはウチの台詞や、力だけが家での上下関係を決めるもんやあらしまへん。」

ウチの家事技能でこてんぱんにしたるさかい、よう覚えときや!」

「フフン、いいだろう。茶々丸、存分に相手をしてやれ。」

「お前は何もやらねーのかよ……」

「マスター、ココはマスターが自ら戦わなくては家での地位は向上しません。」

「……っち、よからう。私自らが示してくれる!」

「……なあ、先輩。エヴァって料理とかできるのか?」

「エヴァの得意料理は丸焼きと氷漬けだよ。」

「……全く駄目なんだな。」

修学旅行3日目の夜は更け、新たに千草さんを家に迎え、修学旅行最終日を迎える。

「夕映え〜こつち向いて〜！」

神楽坂さんはもう少し大胆に・・・って、

ブツ、神楽坂さん・・・天然のパイ　ンなんて、乙なお出迎えあり  
がとつございますっ！！

本屋ちゃんのレアなヌード！　茶々丸！！　ちゃんと最高画質で録  
画してるでしょうね！」

「もちろんです、ソプラノ様。」

「さすが茶々丸、これからもいい仕事を頼むよ！」

「恐悦至極。」

「おい、アレ桜咲が用意した式神だろう・・・いいのか？」

「わ、私に聞くなよ！　こつという事は専門家がいるだろう！？」

「まあ、技量が低い術者が式を作ると本能的になる言いますし・・・

「

現在進行形でクラスメイト含めた私達の目の前では、

神楽坂さん、桜咲さん、近衛さん、本屋ちゃん、夕映、早乙女さんの式神による

ヌードショーが繰り広げられている。

「おい、エヴァ止めなくてもいいのか？　なんていうか・・・両方共。」

「まあ、桜咲のバカがやった事だしな。　笑えるからいいんじゃないか？」

「せや、こないなおもろい見せもん、止めたら勿体ないやんか。」

「・・・私も写真にとっておくか、何かのネタになるかもしれないし。」

千雨にも見放された彼女達の式神によるヌードショーはこの後しばらく続いていた。

旅館内では、朝倉さんが各所で盗撮という名の記念撮影を行い、

クラスメイトに追っかけまわされ



自由時間を利用してネギ先生達は、昔ネギ先生の両親が一時住んでいた家に向かい、

私達は千草さん案内の元で、最後の京都観光を楽しんだ。

### 修学旅行最終日 京都駅

「それじゃあ千草さんには悪いけど、電車内では別行動で、ね」

「気にせんといってください、お嬢様達と今顔を合わせるわけにはいきまへんから。」

「おい、千草、貴様の術で大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫ですやろ？ 実際に何回か桜咲さんとも顔を合わせたんやけど」

「今までバレてませんし。」

「……アイツ本当に護衛としてやっていけるのか？」

「マスター、そろそろ集合の時刻です。」

「うむ、千草おとなしくしているよ。」

「ウチの旦那さんの顔に泥を塗るような真似はしまへんよ。」

「また後で、千草さん。」

「それではこれで失礼します。」

「また向こうでね、千草さん。」

京都駅で一時千草さんと別れ 私達はクラスと合流し、学園都市へと帰っていった。

帰りの車内では皆疲れたのか早々に寝てしまう者や、

軽く雑談するものが大半で、私達も修学旅行の写真をチェックしたり

思い出を語る程度で、何事も無く学園都市まで到着。

クラスが解散した後、千草さんと合流しエヴァの家に帰宅した。

「それじゃあ、帰って直ぐで悪いんだけど、

茶々丸う千草さんの部屋を掃除しておいてくれないかな？」

「わかりました、ソプラノ様。

それと私は茶々丸です。」

「ん、姉様はどこに行くのか？」

「千草さんと一緒に学園長の所に行くよ。」

千草さんも疲れてるところ悪いけど、もう一頑張りしてくれるかな？  
「？」

「かましまへんで、好きなように使おうておくれやす。」

「……使おうて何だ、先輩。」

「こ、今回はそういう話じゃないって！ 早めに学園長に千草さんの事と

西の本山での事で釘を刺しに行くんだよ。

千草さんの買物途中にネギ先生や桜咲さんとばったり、なんてゴメンだからね。」

「そういう事ですか、確かにはよう話しつけといたほづがええやろ  
うな。」

「私は疲れたから行かないぞー。」

「私は直接は会いたくないから、報酬の件とかは先輩に任せるよ。」

面倒くさいエヴァ、厄介ごとに巻き込まれないためにも学園長に会いたくない千雨、

二人の行動ががだんだんと似てきているように感じる。

本人達に言ったらきつと怒るだろう。

「それじゃあ、千草さん。行く前に少し打合せしようか。」

「わかりました。それとウチの事は呼び捨てで構いまへんで。

旦那さんの所有物にいちいち敬称つけてたら旦那さんの格に触ります。」

「ん、ありがとう、千草。」

「はい」

呼び捨てで呼んだらすごく喜ばれた・・・千草さんの中で何があったんだ・・・？

エヴァと千雨がこっちを睨んでいるが、私は何も悪くない！

「そ、それとなんで私が 「旦那さん」 なんですかね・・・？」

せめて人前では男の呼び方は控えて欲しいんだけど。」

「わかりました、家の人達の前以外では・・・お嬢様と呼びましょか？」

「んゝ・・・そうだね、学園には私の使用人ということで通すつもりだからそれで行こうか。」

「かしこまりました、お嬢様」

その後、十数分かけて、千草と学園長やその後のネギ先生達との対応について

打ち合わせをし、学園長に電話で連絡を取り、学園長室に向かう。

同日 学園長室

「学園長」 こんにちわ。」

「オーソプラノ君か、昨日はお疲れじゃったの。」

それで、なにか大事な話があるとか？」

「そうなんですよ、それで少し重要な話なので、ここに結界敷いていいですか？」

「通常の結界じゃダメなのか？」

「ダメです、大事な話なので。」

後高畑先生にも聞いてもらっておいた方がいいかもしれないんですが、いますか？」

「高畑くんは少し出ておっつての。」

数日は帰ってこれんのじゃ。」

「それじゃあ、帰ってからでいいです。」

「それで、そちらのお嬢さんはどなたかの？」

学園長が干草に視線を送り、問いかける。

「彼女のことも含めた話なので、まずは結界を敷きますね。」

ポシエットからナイフ形の結界魔法具を取り出し、床に突き立て結界を起動する。

「これでよしっと、それじゃあ話しましょうか。」

「うむ………昨晚のことか?」

「察しが良くて助かります。」

細かいことはネギ先生の方が詳しいと思うのでそちらに聞いて欲しいんですが、

こちらの彼女、天ヶ崎千草 と言いますが、彼女が昨晚の件の主犯です。」

「な、なんじゃとっ!」

いきなり目の前に孫の誘拐グループの主犯が現れたので

さすがの学園長もびっくりしたようだ。

「今回私が話しに来たのは彼女の身柄の扱いについてですが、

結論だけ先に言いますと、彼女は私の所有物になりましたので、

東西の組織ともに手出し無用をお願いします。」

「……む、むう、流石にその話を聞いて はい そうですね、  
というわけにはいかんのじゃが、

詳しい話も聞きたいしのう。」

「では、少し話が長くなるので座って話しましょうか。」

私は学園長室の応接用のソファーに座り、学園長も正面に座る。

「それじゃあ、千草。 事件を起こした動機、簡単な経緯を話して  
頂戴。」

「かしこまりました、お嬢様。」

千草の使用人のような態度に学園長が意表を疲れたようだが、すぐ  
に気持ちを立て直す。

その後千草が淡々と事件の事を話します。

事件を起こした動機、大戦での両親の死による西洋魔法使いへの憎  
しみ。

関西の組織に所属し関東の組織へ敵愾心を抱いていた事、

東西の宥和的な交渉により協力関係を結ぶ事への拒否感、



そこに着てネギ先生や東に移った近衛さんが関西にやって来る修学旅行、

関西の強硬派による妨害工作の立案、実行、

さらに近衛さんの魔力を利用して関西で強力な武力を得るためにリヨウメンスクナノカミを

召喚し、使役しようとしたこと。

アーウェルンクスによる関西本山の一時的な壊滅、エヴァによるリヨウメンスクナの滅殺。

作戦の失敗により逃亡を図ったが私に捕縛され、その際の契約により私の所有物として今後死ぬまで人権すら失う処罰を受けたこと。

そして今に至る・・・

「これが今回の事件の簡単な経緯です。」

「・・・むう、そういう事じゃったのか。」

そういう事となると、なおさら今後のためにも千草君の身柄はこちらから関西で引き受け

強硬派や今回の作戦の実行犯などを捕らえんとまずいんじゃないか。

「

「今回の首謀者は4人でそのうちの一人は関西で保護してるし、もう一人は私が所有している。」

あとの二人、月詠とアーウェルックスは逃げたよ。

千草、逃げた二人の事は何か情報ある？」

「あの二人についてはウチも細かく把握してません、

金で雇った外部の人間やさかい・・・」

「そういうことだって、学園長。」

「ふむ、しかしのう・・・」

学園長の組織としての立場上、簡単に千草の身柄は諦められないか・

なんとか身柄を引き受けようと学園長も引こうとしない。

「そつね、このまま交渉しても平行線だろうから・・・」

今の学園長の立ち位置は私に取っては好ましいものだから

あまりこつこついう事はしたくないんだけど、はっきりさせてもらっわ。

「

「・・・・・・・・」

学園長もまずいと思ったが、それでも次の案が無いようで黙りこむ。

「今回の事件、私達が忠告したにもかかわらず修学旅行と親書の配達を強行、

その上関西に置いては本山に近衛さんをかくまったにもかかわらず奪われ

長を含めてほぼ壊滅、リヨウメンスクナを復活される。

拳句にネギ先生や派遣していた教師じゃどうにもならず私達に依頼。

学園長・・・あなた達に何ができたのかしらね？」

「・・・・・・・・むう。」

「忠告を無視、防止も失敗、事件の解決も私達に任せて、拳句に手柄の千草を寄越せ？」

そんなことが通るの？」

学園長も苦虫を噛み潰したような表情になる。

千草さんは私の横に控えたまま、ただじっとしている。

「し、しかし、儂や西の組織としても……のう。」

それに千草君が今後何か問題を起こすようなことがあっては……」

「くどいわよ、学園長。」

それに貴方私に幾つか貸しがあったわよね、今回の事件の報酬も頂いてないし……」

そうね、この間の吸血鬼事件でエヴァを説得した件、覚えてるかしらっ。」

「……まさか、あの時の使用人の話は……」

「そう。その使用人を入れる話、千草にさせてもらっわ。」

「ま、待ってくれんか!? それは……」

「諄いっ!?!」

「……っ!」「……っ。」

「組織の長が一度口にした言葉を翻すような真似をするな!! 格が疑われる。」

私の一喝に学園長と千草が吃驚する。

日頃の私を知ってる人は特に驚くだろう。

「……まあ、私もそこまでアコギじゃないつもりよ？」

今回の修学旅行での事件での私への報酬は

東西の組織を説得することで勘弁してあげる。」

「……はあ、ずいぶんと高く着いてしまったのう。」

「貴方や貴方の一族を皆殺しにされるよりはいいでしょう？」

学園の、いや、貴方の私情に私達を巻き込んだのよ？

約定から言っても次の学園長に変わってもらっても良かったんだし。

貴方だって今回の事をエヴァに依頼するとき、

最悪自身の命くらいは差し出すつもりだったでしょう？

それを考えたら安いものよ、千草に目をつぶればいいだけなんだから。」

「分かった、この件については何を言っても無駄なようじゃ……  
はあ、胃が痛いわい。」

「エヴァに頼んでいい胃薬を用意するわよ、サービスで」

精神的な疲労が効いたのか、珍しく学園長が弱気な態度を見せる。

「千草君については本当に大丈夫かの？」

説得はするが今後何かあつては流石にかばいきれんしう。」

「大丈夫よ……そうねえ。」

私は少し考え……私の人指し指を出されていたお茶に浸け、千草に差し出す。

「指が汚れたわ、綺麗にしてください。」

「……っ！ かしこまりました。」

千草が袖口からハンカチを出し拭こうとするが私がそれを静止する。

「何をしているの？ 布で拭いて指が傷ついたらどうするの？」

貴方の舌で綺麗になさいな。」

「……はい、かしこまりました。」 / /

頬が赤く染まり目が潤む千草、見る人が見れば怒りと屈辱で染まっているように見えるが

私には、悦んでいるようにしか見えなかった。

千草はゆっくりと私の指を口に含み、舌で執拗になめまわしていく。

しばらくそんな淫靡な光景が続き、さすがの学園長も放心状態で見守る中、

指の掃除が終わったのか千草が口から私の指を出し、着物の胸元で拭く。

「ふう……終わりました。」

「そう、」苦労さま。」

最後に労いとばかりに千草の頭を撫で一連の行動を終わる。

「コレくらいの躰はしてるけど……何か問題有る？」

私の質問で気を取り直す学園長。

「い、いや 問題はないっ！」

「そう、学園長くらいのも流石に今のは興奮したかしら？」

「……まったく、人が悪いにもほどがあるのう。」 / /

学園長の変なところを刺激してしまったようだ。

表面上は穏やかな私も、仕込みとはいえ千草のさっきの様子にドキドキしていた。

(千草さんエロすぎっ！ 和服のお姉さんにあんなことされたら……  
……やばっ……)

思い出したら大変なことになりそうなので話をすすめる。

「それにしても、数日でそこまで忠実になるとは……いったい何を  
したのやら……」

「誠心誠意正面から対応することかしら……ねえ？」

「はい、お嬢様。」

「……まあ、これには触れない方がよさそうじゃ。」

それで話はこれで終わりかろう？」



「まだ、あるよ。ネギ先生や、本山で戦いに参加、被害にあった娘達の口止めがあるんだけど。」

「それはこちらでもやるつもりじゃが、なにか有るのかの?」

「エヴァや私達のことについて もう少し厳しく緘口令・・・とでも言うのかな?」

厳しめに口止めしておいてほしいのよ。

後になって私やエヴァの所にこられても困るし、そっちも困るですよ?」

朝倉さんあたりが余計なことをしそうで・・・

それと千草のこと、学園都市のどこかで彼女と会ったときに

いきなり襲われたりしたら流石に身を守るためにそれなりの対応はしなきゃいけないし

それを口実に千草を罰する、とかになってもまずいし。」

「ふむ・・・確かに、それなら彼らには少し悪いが、

今すぐ呼び出すことにしようかのう。情報統制は早いに越したことはないし。」

「それじゃあ、私と千草は別室で待機してるから、結果はこのまま

にしておいて

千草さんの話になったら呼んで、本人から謝罪と説明をしたほうが  
いいだろうし。」

「うむ、分かった。 それでは呼びだすので別室で待っていてくれ。」

「ん、じゃあ、行こうか千草。」

「はい、それでは失礼いたします、学園長。」

私と千草は学園長室を出て、すぐ横の控え室に入り二人で待つ。

しばらくすると全構内放送で、関係者が学園長室に呼び出される。

呼び出されたのは、ネギ先生、神楽坂さん、近衛さん、桜咲さん、  
本屋ちゃん、夕映、

早乙女さん、朝倉さん、長瀬さん、龍宮さん、古ちゃん、総勢11  
人。

しばらくして呼び出された人達が学園長室に集まったようで、

学園長から話をされているようだ。

暇なので千草と歓談する。

「それにしても千草の指舐め・・・あそこまでやらなくても良かったのに。」 / /

「興奮しましたやる？」 / /

「いやいやいや、危なかったよ、あの後千草唇から少し涎が垂れたでしょう？」

キスして舐めそうになったもん。」

「してくれはってもよかったのに・・・」

「いやだよ、人前でなんて。」

「あら？ あれだけ大胆なこと言わはるお人にしては、ウブなんやね。」

「・・・もうっ、もうっ！ そ、それに千草のそんな所人に見せたくないし・・・」 / / /

「・・・優しい旦那さんで、ウチ・・・嬉しゅうおす。」 / /

そんなこんなで いちゃついてると内線電話が鳴り出し、千草さんが呼ばれたようだ。

さて、ようやくウチの出番がやってきはった。

仇討ちの為にも、いっちょ気張りましょか。

学園長室に再度向かい、扉を開け　まずは挨拶をする。

「学園長はん、お呼びになりましたやるか？」

ウチが学園長室に入ると同時にそこにおった人らに注目される。

「なっ！　貴様、天ヶ崎！！」　「え、この人っ！？」　「・・・  
ああ〜！！」　「??？」　「だれ？」

様々な反応が起こるが、とりあえず無視しそのまま学園長の脇まで進む。

「学園長・・・関係者から説明するとは聞きましたが、なぜこの女がココにいるのですかっ!!」

直情的な刹那はんがいきなり騒ぎ出す。

「刹那君、まあ落ち着きなさい。」

「しかしっ!・・・お嬢様、私の後ろに。」

このかお嬢様を中心に、皆さんが守るように立つ。

せやけど、この場に置いてこの反応、少し酷過ぎやおまへんか・・・

「・・・しょうがないのう、千草君、悪いがこのままでいいから話をしてくれんか?」

「どこから話したらよろしゅうおますか?」

「最初からでお願いできんかの。」

「・・・わかりました。」

学園長はんの指示で最初の動機から皆さんに話し始める。

所々でそれぞれ表情を曇らせたり、主に刹那はんが怒りを表したり。そうして時間をかけ説明し、事件についての話を終わる。

「簡単ではありませんが、こういう経緯です。」

「皆、今回の経緯は分かってもらえたかの？」

「……貴様の立場には 同情するべき点もあるが、

それにしてもこのちゃ……お嬢様を狙ったことを許すわけにはいかないっ！」

刹那はんが怒りをむき出しにしてウチに話しかける。

「その事については ほんに申し訳ないと思ってます。」

ウチはこのかお嬢様に向かって正座しそのまま頭を下げ、土下座をする。

「このかお嬢様、この度はウチの私怨に巻き込んで、

ほんに申し訳ありませんでした。」

いきなりウチの土下座に驚いたのか、このかお嬢様が慌ててウチの元に戻ってきて

頭を上げるよう諭してくる。

「そなたっ！ もうええんよ、千草さん。　　ウチのおじいちゃんとお父さんも

皆にちゃんと話をせずに無理に進めようとしたのも悪いんやから。」

「お嬢様っ！　危険です、離れてください！」

「せつちゃんも　もう、許したげて。

千草さんの話も聞いたやろ？　両親をなくしはって悲しかったんや・

皆大変やったけど無事に済んだんや、こうして頭まで下げてくれはつたんやから

もうええんか・・・な？」

「この・・・お嬢様・・・」

流石に刹那はんも、当事者のこのかお嬢様にこうまで言われては

何も言えん様で、しぶしぶ黙りこむ。

そんな時に褐色のお嬢はんが学園長に問いかける。

「彼女の話と事件の経緯は分かった。

それで、彼女の処遇はどうなるんだい？ 学園長。」

「ふむ、千草君はこの後エヴァ君の姉、ソプラノ君の下で過ごすことになる。」

「どういふ事ですか、学園長っ！」

「落ち着いてくれんか、刹那君。

この事は西の長にも話を通すが、今回の事件、儂らや西にも色々不備があつての、

その後始末をエヴァに頼んで ようやく事を収めたんじやが、

その後にエヴァと話して、千草君への罰としてソプラノ君の元で

今後死ぬまで使用人として働くことに決まったんじや。」

「なぜそんな事になるんですか？」



皆にも納得がいかないのか、不満の声が上がる。

「ふむ、今回エヴァを動かしてしまった事で、

ソプラノ君が一人になってしまった時間があっての、

大事はなかったんじゃないがそれを心配したエヴァが、度々こういう事で呼び出され

自分の姉に何か会ったら困るという話になってのう、

今回の事件を収めたのもエヴァ達で千草くんを捕らえたのもエヴァ達じゃ、

そもそも僕らの不手際で起こった事件を無理に頼んで収めてもらって手柄とでも言うのか、千草君まで寄越せと言っても聞いてもらえないので。」

「しかしそれでは・・・。」

「刹那君の言うこともわかるが、考えてみてくれんか？

あの時エヴァ達がいなかったら君達全員、あそこでどうなっていたか・・・。」

皆さんがあの夜の事を思い出しているようで、中には顔を青ざめさせている娘もいる。

「儂らにできたことは遅れて救援部隊を出すことくらいじゃ。

何も出来んかった儂らが　すべて収めてくれたエヴァ達に何か言える身分かの？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

この場の全員が黙りこむ。

あの場でチンチクリンの金髪やウチの旦那さんがおれへんかったら

ウチらは勝ってたやろからな。

何も言われへんやろう、この場にリョウメンスクナを止められる人  
なんかおれへん。

今思えばウチの望みには意味の無い事件やったけどな・・・

「そういう事で、エヴァが千草君に今後死ぬまでソプラノ君の所有物として

使えることで、千草君の罰とする。　そういう事になったんじゃ。」

「・・・しかしそれでも・・・彼女がこの学園で何かしたら。」

「それについては君達が心配しなくてもいいことじゃ。

千草君が今後自主的にこの学園で何か問題を起こすということは無  
い。

ソプラノ君の命には確実に従うし僕も確認してあるから大丈夫じゃ。

「

「ウチのこの身この心はすでにソプラノ様に捧げております。

今後ウチが自主的にこの学園に仇なすような行為や

このかお嬢様に手を出すということはありません。」

「……天ヶ崎 千草、どうして今になってそんな気になった・  
・

もう少し早くその気になっていれば。」

刹那はんが苦虫を噛み潰したような表情で聞いてきはる。

「ウチは先だつての事件で、当時できる事すべてやりました。

ネギはんを妨害し、このかお嬢様を攫い、

ウチの思いとはかけ離れたことになりましたが、本山も一時的に壊  
滅、

リヨウメンスクナも復活させましたが、エヴァンジェリンはんに潰されてもって・・・

逃げることもできずに捕らえられ、ふと考えたんです。

ウチは何をやってるんやろうか？

両親の仇を討つはずが、やったことといえば西と東の組織に打撃を与え

リヨウメンスクナを復活させて・・・

エヴァンジェリンはんに潰されなかったらどないしたんやろうか？

ウチの育った京都の街を焼き払う？ 東の組織にカチコミを掛ける？

それがどないして両親の仇を討つことになるんやろうか？・・・  
と。」

皆黙ってうちの話聞いてくらはる。

「今考えて見ればエヴァンジェリンはんに感謝してるんです。

ウチをあそこで止めてくれはって・・・あそこで止まれへんかったら何をしてるかと思うと・・・

ここまでの事件を起こして本来なら、一生投獄か処刑されてもおかしくあらしまへんに

エヴァンジェリンはんがウチに最後の機会を与えてくれはったんです。

ウチを止めてくれはったエヴァンジェリンはんへのご恩返しと、

両親の墓を守る機会を。

ウチは御恩に報いるためにエヴァンジェリンはんのお姉さんにご奉公していくつもりです。」

ウチの話を聞いて誰も文句をいう人はおらへん、

刹那はんでさえ表情から顔が取れ、他の人にいたっては泣いてはる人も居る。

「こういつことなんじゃ、分かってもらえたかの？」

「はい……」

「千草さん……」「……うう。」「……グス」「……」

「さて分かってもらえた所で、話を戻すんじやが。」

千草君は先の話通りにソプラノ君と同居して世話をすることになる。

学園都市内や教室で顔を合わせることも度々有ると思うが

仲良くしろとまでは言わぬが問題は起こさぬようにの。」

「「「「「「「「「「はい。「「「「「「「「「「」

「あと関西の本山での出来事や、魔法のことなどを口外したり、

今回の件のことなどでエヴァやソプラノ君達に変な説明を求めたり  
干渉しないように。」

あまりに酷い干渉があった時は、最悪学園都市から追放もあるから  
の。」

「……つ、追放ですか？」

「うむ、ネギ君の場合は卒業試験は失敗、その他の皆の場合は退学  
じゃ。」

それを聞きはった皆さんがどよめく。

「これで話は終わりじゃ。」

修学旅行から帰ったばかりで疲れている所を申し訳なかったの。

解散してもらって結構じゃ。

千草くんも控え室でソプラノ君が待つておるじゃろう、戻ってもらって結構じゃよ。」

「それでは失礼します。

皆さんもこれからよろしゅうお願いします。」

最後に皆に頭を下げ退室し、旦那の元へ戻る。

その途中で刹那はんから声をかけられる。

「天ヶ崎……その……さっきは済まなかった。

私も少し言いすぎた……」 / /

「ええんですよ、どないな理由があってもこのかお嬢様をさらったのは事実ですから。」

「いや、しかし……お前の立場を思えば少し言いすぎたと反省している。」

「ほんならこの話はここでおしまいにしてしましょ。

ウチもこれからはこちらでお世話になるんです、

前みたいにいがみ合っつんじゃなくて、挨拶くらいきもちやつできる

ようになりましょ。」

「ああ、分かった。」

「ほな、お嬢様がまつてるよつて、お先に失礼します。」

「っ！ 私もこのかお嬢様が待つてるんだつた。ではまたな。」

刹那はんはそう言つてかけ出していきはつた。

（ほんに、ええ娘やね〜。少し騙してるんで気が滅入るわ。

ほな、ウチの旦那さんの元に帰りましょか！

つて！・・・あかな、契約の上での話のはずやのに。

このままやつたら・・・ほんまにあの人のモノにされてしまいそつや。

今はもう少し辛抱せんと・・・せめて仇討ちが終わるまでは。）



side ソプラノ

控え室の扉が元気よく開き、千草が小走りで駆け寄ってくる

「旦那さんただいまあ〜」

「おかえり〜、どうだった？ うまくいった？」

「もう、旦那さんの言った通りや。」

あの理由で皆信じてくれはったで。」

「基本的に皆いい娘だからねー、多少無理はあるけど、この手はよく効くと思うよ。」

「なんかえろろ最悪感が湧いてしもつて・・・」

「まあ、全部が全部嘘ってわけでもないからそこは我慢しようよ。」

「そうですね、ウチが改心したのも、旦那さんのモノになったのも嘘やおまへんから。」

「改心は・・・どうなんだろう？ 復讐が明確になったただけで諦

めてないんだし。」

「ええやおまへんか、もうこの学園で騒ぎを起こしたりしまへんで?」

「まあ、いいのかな?」

「ええんや、さあ! 帰りましょ。」

「うん。」

「あ、旦那さん……今夜すぐに伽に呼んでくれても……かまし  
まへんで?」 / /

「ぶぶううづうつ……!」 / / /

「あはは、ほんま、ウブな旦那さんや」 / /

「もつっ! 本当につっ!」

・ (ほんまにウブな人……でも呼んでくれはつたらどないしよ……

ウチそんな経験あらへんから、困ってしまつわ。) / / / /



神様から頼まれたお仕事。

その22（後書き）

22話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その23

side 夕映

女子寮

先日学園長から聞いた話・・・天ヶ崎 千草さんの話

おそらく私と楓だけ・・・

あの夜ソプラノと千雨さんがいた事を知っている私達だけが

あの話におかしい点があると気がつくはずです。

彼女の話には本山でソプラノと千雨さんが居たという話が全く出てきてないということに。

千草さんはエヴァンジェリンさんに恩があると言っていました

知る限りエヴァンジェリンさんは千草さんと接触を持つ機会があるはずなのです。

エヴァンジェリンさんはあの大きい鬼のような物、リョウメンスクナというらしいですが

あれを倒しましたが、その後私達と一緒に池にいたはずですよ。

逃亡した千草さんを捕らえれるとしたら……あの場にいなかったソプラノと千雨さん。

実際石化したネギ先生を木乃香さんが治療した時、

エヴァンジェリンさんは「姉様ならなんとでもなる。」と言っていたはずですよ。

これはつまり、ソプラノ自身もかなり高位の魔法使いかそれに準ずる者。

それに千草さんが仕えるのが、

エヴァンジェリンさんじゃなくてソプラノというのも気になります。

そう考えれば、千草さんを捉えたのがソプラノで、説得も彼女がしたんでしょう。

その結果千草さんがソプラノに仕える・・・ならばなぜ素直にそう  
言わないのか？

別に素直に話してもおかしくはないですし・・・問題があるとすれ  
ば・・・

ソプラノ自身が魔法使いであることを知られたくない・・・？

千雨さんが魔法使いであることを知られたくない・・・？

むう〜まだこの話裏がありそうです。

ソプラノ・・・貴方にいったい何があるんですか？

私には、教えられないことなんですか？

(もっと貴女の事を知りたいです・・・)

side ソプラノ

## エヴァ家

「千草、準備終わった？」

「えろっ おまたせしてすんまへん。 ほないきしょか？」

修学旅行から帰り、学園への千草の受け入れも完了した次の日。

私と千草で日用品の買出しをすることとなった。

「千草は何が必要なのかリストとか持ってきてるの？」

「ちゃんとリストを作ってもってきましたえ。」

あと、和服の店も教えてくれへんやろか。

旦那さんウチの和服気に入ってくれてるんやろ？」

「そりゃあね、千草といえば和服、できたら日常的に着ていて欲しいからね。」

「ほなら、ご期待に答えへんといけませんな。」



こうして二人で買い物にでかけた。

一方その頃・・・

side エヴァンジェリン

「姉様達は行ったか・・・」

「お二人で買い物にでかけました。」

「では、会議を始めます。」

エヴァ家 エヴァンジェリンの部屋

「今日の議題は天ヶ崎千草の危険性についてだ。」

「千草様に何か問題でもありましたか？」

「問題あるだろう！」

「????？」

我が従者ながら情けない……茶々丸はあの女の危険性に気がついていないようだ。

「いいか、茶々丸、あの女狐は危険だ。」

必ずそのうち姉様に手を出すに違いない。」

「手を出す？ 攻撃するのですか？」

「違うよ！ 千草さんは先輩に……その……あの……」  
／／

「貴様もやったことだろうがっ！！ 今更照れるな！！」  
／／

「やったとかいうな！ お前と違って私は……純粹なんだよ！！」

「何が純粹だ！ 私は忘れておらんぞ、

貴様が修学旅行で姉様を強姦まがい押し倒したことを！！」

「ばっ！ そんなことしてねーよ！！ チョット迫っただけだっ！」  
／／

「お二人共、今日は千草様の話なのではないですか？」

「・・・う、うむ、そうだった。」 「・・・わりい。」

「話を戻すぞ、天ヶ崎千草だが、あの女狐h 「そこまで戻らなくていいんだよ！」 う、うむ。

それで、何とかしてあの女狐が姉様に手を出さないようにしなければならんのだが

どうしたものか・・・？ 何か案はないか？」

「案って言ってもなく、なるべく二人つきりにさせないとか・・・？」

「もうすでに二人つきりで買い物に出かけていますが？」

「・・・なん・・・だと？ あの女狐！ もう姉様に手を出すつもりか！？」

まだ出会って1週間も経ってないだろう？ は、早すぎないか？」  
／／

「わ、私でさえ時間で言えば10数年は我慢してたのに・・・恐ろしい女だ。」

「私など……わ、私のことはどうでもいいっ!」

「誰も聞いてねーよ! 今は千草さんのことだよ。」

「そうだった……とにかく今は奴の情報が少ない。」

「そういえばあの人の事あんまり知らないな? ……あの人が何歳なんだ?」

「20代前半から後半でしょうか?」

少々若く見える分があるので正確にはわかりません。」

茶々丸の年齢判断に私達は驚愕する。

「……適齢期じゃないか、もう、いつ結婚してもおかしくない……」

「まさか……なあ……あれ? 千草さんってあれ以来ずっと先輩にくっついてるな。」  
「……」

「千草様はかなりソプラノ様に好意を持たれている様子です。」 #

「……あの女、何でそんなに数日足らずで姉様に入れ込んでるんだ?」

おい、千雨、あいつを引き込む時お前もいたんだろう、何があった

？」

「なにがあったって……割かし高圧的に先輩が話しを進めていたぞ？」

正直私も何であの話し方であそこまで先輩に好意をもつのか不思議なくらいだ。」

私達は3人で唸る。……あの女に何があったんだ？

「千雨順番に話せ。」

「ん〜、まず最初は千草さんの行動を全否定してたな、無駄だとか言ってる。」

「ふむ、悪くない交渉方法だな。一度叩き潰すのは。」

「その後大泣きしてたな、先輩が千草さんの頭を抱いてしばらく泣きっぱなしだったぞ。」

「……ふむ、一度叩いて優しくする作戦か？」

「それから幾つか選択肢を上げてたようだけど、酷かったぞ。」

ほとんど死ぬか先輩のモノになるかの二択みたいなもんだった。」

「精神状態が不安定なところにその選択肢か、姉様もなかなか……」

」

「その後で千草さんの敵討ちを先輩が手伝うとかいう話になって

千草さんが先輩のモノになるって決めてたな。」

「ふむ、特に問題ないな。」

「え？・・・問題無いのか。」

その後は・・・千草さんが何でそこまで欲しがるのか？ とか聞いて

後は先輩のフェチな欲望垂れ流しで千草さんが欲しいとか騒いでたな。

その後に先輩が男だとバラして千草さんの毒気が一気に抜けて、

エヴァがグルだとわかって千草さんが卑怯だとか喚き出して

後はもう無茶苦茶、お互い好き放題言っただけで腕組んで旅館に帰ってきた。」

「」「」どつしてこつなつた・・・？」「」

「ワケがわからんぞ！！ どこに姉様に惚れる要素があるんだっ？」

「私にもわかんねーよっ！！ ありのまま起こったことを話したんだよ！」

な… 何を言ってるのか わからねーと思うが

私も千草さんが何をされたのかわからなかった、

頭がどうにかなりそうだ…」

「……あの、もしかしたら千草さんは特殊な性癖の持ち主んじゃないでしょうか？」

「どういう事だ…？」

「超の入れたデータによると、

DMです、押しに弱い、カづくでモノにされることに喜びを感じるという件に該当します。」

「そんな女いるわけねーだろ！！ 超もどんなデータいれてるんだよ！ エロゲかよっ！！」

「いや……まで……それならば納得がいく。」 1111

「……いや、お前がちょっと待てよ？ 何考えてるんだ、大丈夫か？」

私の推測が気に入らないのか千雨が何が凄いバカにするような目付きに変わる。

「最初に精神的に叩き潰して、優しく胸で泣かせて、

選びようがない選択で身動きがとれない様にして病的な好意をぶつける……」

千草のような変態の完璧な攻め方じゃないか……っ!?!」

「……あの人が変態扱いかよ。」 1111

「セオリー通りですね。」

「オマエも待てよポケロボ、データベース入れ替えてこいよ。」

「姉様……そこまで計算していたのか……恐ろしい娘  
っ!?!」

「さすがソプラノ様です。私のセカンドマスターに相應しい仕事  
です。」

「こいつら……もうダメだ……. . . . .なんとかしん……  
私には無理だ。」 orz



こうして私達の第一回 千草対策会議は終了。

天ヶ崎 千草は 真性ドMという認識で一致した。

「いや、してねーよ・・・」

side 千草

「・・・クチュンツ！」

「ん？ 千草大丈夫？ 寒いの？」

「あ、すんまへん、誰かウチの噂でもしてはるんやろうかね？」

なんもあらしまへんよ、大丈夫です。」

「で、さっきの話に戻るけど、千草ってどうしてそんなに素直に私

について来てくれたの？

自分で言うのもなんだけど、かなり強引に有無をいわさず連れてきたつもりなだけど？」

「……つまりそれだけウチのことが欲しかったんやろ？」

女がそこまで真っ直ぐ男に思われて、甲斐性まで見せられたら……

惚れてしまうてもしょうがあらへんやん……」 / / /

「……ご、ごめんね！ 変なこと聞いて。」 / / /

「ええんよ、ウチはもう旦那さんのモンなんや、なーんも隠すことなんかあらへん

いつでも好きなようにつこーておくれやす。」 / / /

千草のDM疑惑はまだ始まったばかりだった。

修学旅行から数日後のエヴァの家にて

「エヴァ〜私これから魔法世界に行くけど何か欲しいものある?」

現在今ではチャチャゼロを頭に乗せた千雨がエヴァと

ノートPCでなにやら探し物をしている。

「ん、今は特にないな。」

何か良い酒か面白そうなものがあつたら買ってきてくれ。

おい、千雨この方法が効率よくないか?」

「ん〜了解。」

「これは金だけで経験値はうまくねーよ。」

「オイ、コンカイモオレヲ ツレテイケヨ。」

「チャチャゼロは今回は我慢してくれる？」

「ナンダヨ オモシロクネーナ。」

「先輩、私には土産はないのか？」

「千雨は私と一緒にいくから必要ないじゃん。」

「・・・は？ 私も行くのか？」

自分も一緒に行くことが意外だったのか、千雨は素っ頓狂な声を上げる。

「今回は向こうの協力者との定時連絡なんだけど、いい機会だから

千雨も一緒に連れていこうと思ってね。」

「あゝ・・・とうとう私も魔法世界デビューか・・・」

「まあまあ、今回はホントに何も無いから、向こうで観光でもしようよ。」

「ウチは連れていってくれへんの？」

庭の方から千草が洗濯物を抱えてやってきた。

「千草は今回はお留守番してて、今回会う人は魔法使いの人だからあまりいい気分もしないでしょう?」

「ウチは旦那さんと一緒に居たいだけなのに・・・」

「・・・おい、お前の目的は敵討ちだろう。」

「それはもちろんそうや、けど人生恨みだけじゃあらしまへんで。」

「とにかく今回は家で待っててよ、日帰りの予定だから夜までには帰るし。」

「そうですね・・・なら、今日はおとなしく旦那さんの部屋で枕を濡らして待ってます。」

「おい、千草 自分の部屋があるだろう、何でわざわざ姉様の部屋に行くんだ。」

「そんなんウチの勝手やおまへんか。」

「だめだ！ この家では私がルールだっ！！」

お前は自分の部屋で泣いてろ!!」

「あんさんかて、散々旦那さんの部屋で鳴いたやろ、ウチがどこで泣こうがウチの勝手です。」

「ば、馬鹿者！ 誰が姉様の部屋で泣くか!!」 / /

「嘘や！ 昨日の晩かて、旦那さん部屋の方からエヴァはんの鳴き声が聞こえてきてたで！」

「……………は？……………昨日の夜？……………  
……………ば、バカッ！！

それは意味が違うだろう！！」 / / / /

エヴァと千草二人でギャーギャーと言い合いを繰り返す。

「あの二人は放っておいて、千雨 一五分くらいで着替えて装備を整えて玄関に集合ね。」

「ああ、分かった……………けど先輩、昨日の夜の事は後できつちり話してもらっからな。」

出発前からいきなり憂鬱な気分になった……………

同日 魔法世界MMのある宿屋

「先輩、ココで待ち合わせなのか？」

「そうだよ、もう少しで相手の人が来るからお茶の用意しておいてくれる。」

そう頼むと千雨がポットやカップを用意し始める。

「OK……そういえば相手はどんな人なんだ？」

「この国、メガロメセンブリアって言うんだけど、そのエリア人だよ。」

「ふん、何でそんな人と先輩が知り合いなのか聞いてもいいのか？」

「今ここでは待って、帰った時に時間を見て話から。」

「ん、分かったよ。」

そうして千雨の用意したお茶とお菓子を食べながら、しばし雑談という名の

詰問会が開始され、昨晚の事について詰問されていると、

部屋の入口から不規則なノックが聞こえてくる。

「はい、開いてるからどうぞー！」

私の呼びかけの後、ドアが開き、クルトが一人で入ってくる。

「こんにちは、見た感じ元気そうね。」

「ソプラノさんも元気そうで何よりです。そちらの方は？」

クルトは千雨を見ながら問いかける。

「この娘は私の従者、の長谷川 千雨って言うの。」

可愛いからって手を出さ無いでよっ。」

「は、長谷川千雨です。よろしくお願いします。」

「コレはご丁寧に、私はクルト・ゲートルです。こちらこそ宜しくお嬢さん。」

現在千雨はメガネを外し、髪をアップにして変装している。

「それじゃあ、早速用事を済ませましょうか。」



「そうですね。では、現在の国家間の状況から・・・」

私とクルトが現在の魔法世界の動きや国家間の緊張具合などの情報を交換している間

千雨は椅子に座っておとなしくしている。多少緊張しているようだ。

そうして定時連絡での情報を交換し終えた後、別の話題に移る。

「そうそう、クルトの情報のおかげで、天ヶ崎千草さん、無事に契約に応じてくれたよ。」

助かったよ。引き続き、リストの人間の状況だけは確認お願いね。」

「わかりました。彼女うまく応じてくれましたか、さすがですね。」

どんな娘ですか？ 貴方が欲しがるなんて興味がありますね。」

「いい娘だよ、京都弁で黒髪、和服が似合って、オマケにメガネっ娘だよ！」

「・・・あの、そう言うことではないんですが・・・」

「・・・」

千雨がおもいつきり呆れている。

「え、えつとね・・・術者としては平均よりは優秀だよ、こつちで鍛えればもつと伸びそう。」

ちよつとおつちよこちよいな所もあるけど、謀略系の素質があるね。

クルトが欲しくなるかもね。」

「それは是非ともお会いしたいですね。」

「彼女の用事があるからね、すぐには言わないけど、もう少ししたら連れて来るよ。」

彼女の力も私達の力になるからね。」

「その時を楽しみにしていますよ。」

それと元老院の状況ですが・・・まずはこの書類を。」

当初の工程より多少遅れています。申し訳無いです。」

クルトの差し出した書類を見ながら説明を聞く。

「あゝ、これはクルトの責任じゃないからしょうがないよ。」

前の情報通りに数が多いね。」

「はい、以前追加で貰った資金のおかげで多少進んだんですが

それ以上に内部が酷い状況で、こちらの協力者は予定以上に増えているんですが

予算の都合で、摘発の進みが悪いです。」

「ん〜・・・これは少してこ入れが必要かもね。

・・・そうだ、クルト 私のお願いを聞いてくれない？ 対価は資金の追加で。」

「お話次第ですね、貴方のお願いは油断すると とんでもない事を頼まれますから。」

「前のアレはそんなに変なことじゃないじゃない・・・。」

「アレは、私の精神に重大なダメージを受けたんです。

あんなのもうコリゴリですからね。」

「・・・先輩、何を頼んだんだよ・・・。」

クルトはその時ことを思い出したのか、冷や汗を流している。

「そ、その事はもういいじゃない。」

それと今回のお願いはそんなに变なことじゃないよ。」

「そう願いますよ・・・。」

「今回は元老院の掃除が終わって立て直した後、

MMに8〜10人くらい、の戸籍が欲しいんだ。

希望者が出たらもう少し多くなるかもしれないけど。

あと出来れば税金や保険の面で優遇措置とか着いたらいいな。」

「ふむ、それくらいならなんとでもなりますが、どうしてそんなものが必要なんです?」

「元老院の掃除が終わってこの国が暮らしやすくなったら、

私の家を立てて皆で住むことも考えててね。

今の家もいいんだけど、最近何かとうるさくて ゆっくりできない  
って・・・エヴァが・・・。」

「あゝ、ネギ君関係ですか。この間は大変だったらしいですね、

こつちにも連絡が来ましたよ。」

「そうなんだよ、学園長も悪い人じゃないんだけど身内に甘いところがあるからね。」

今回はそれがおもいつきり悪い方向に動いちゃったね。」

「彼の気持ちも理解はできます。極東に置いて関西の組織と協力体制を組めれば

ほぼ安定するでしょう・・・が、今回は急ぎすぎて足場を固めるのが疎かでしたね。」

「まあ、そのおかげで千草さんと仲良くなれたからね、感謝してるよ、学園長には。」

私達のカップにお茶がないのを確認した千雨が

新しいお茶を作って入れ直す。

「ありがとうございます、それでは戸籍の方は準備しておきますので、

人数や、希望者ができたら連絡をください。

税制面は頑張りますが、あまり期待しないでください、後犯罪歴のある方は

少し難しい部分が出るかもしれません。」

「了解、追加の資金は多めに出すよ・・・これくらいで足りる?」

「……そうですね、十分足りませんが……もう少しおまけしてくれませんか？」

貴女の家を立てる時の土地の申請などで融通が効くようにしますの  
で。」

「まったく……クルトもおねだり上手になっちゃって……」

何でクルト女の子じゃないんだろう？ 絶対放っておかないのに。

「……っと、これでいい？」

「ありがとうございます。私は男でよかったと思ってますよ？」

貴女に目をつけられずに済みますから。」

元老院関係の書類を燃やして処分し、次の話に移る。

「で、アイツらはどう？ 最近動きが激しくなってきたようだけ  
ど。」

「そうですね、高畑君が優秀なので末端の組織はかなり潰せていま  
す。」

以前の大戦のように好き勝手暴れまわる事はもうないと思います。」

「そっちに連絡行ってるかな？ 京都の件でアーウェルンクスが出

てきてたの？」

「表立って私の所には来ませんでした。裏から情報が来ました。」

「じゃあいいね、その情報を握りつぶした所はチェックしてる？」

「今までチェックを抜けていましたが、今回の件で調べてる最中です。」

「進捗はいいので潰せるとしますよ。」

「・・・鍵は見つかってる？」

「・・・流石にきついですね、Master Keyが数本しか集まってません。」

「私、Grand Master Key 1本持つてるけど、そこから解析したらもう少し集まらないかな？」

「できれば10〜20本くらいは欲しいんだけど。」

「・・・貴方が1本持つてたんですか・・・そうですね、可能性はあると思います。」

「それじゃあ解析を始めるしか無いか・・・封印を解くと感知される可能性があるから」

「やりたくはないんだけど、時間ももうあんまり無いしね。」

「エヴァに頼んで解析してもらおうよ、データを送るからそこから鍵を」

集めてみて。」

「……了解しました。最優先で動きます。」

それからも、幾つか案件を話し、気がついたら陽が傾き始めていた。

「それじゃあ今回はこんな所かな？」

何か忘れていたこととか無い？」

「こちらは問題有りませんね。」

「それじゃあ……あ、そうだ！」

「何か有りましたか？」

「この街の名物のお酒とか、最近流行ってる魔法のアイテムとか無い？」

「おみやげ頼まれてるんだ。」

「……そうですね、西地区の方に最近良いワインを作っている所が、地図を書きますね。」

最近流行っている魔法のアイテムですか……

まほネットに接続できる新しい端末が出てますね、機能がかなり上がって、私も使ってます。」



「ありがとう、早速買いに行ってみるよ。」

「それではこれで失礼しますね、長谷川さんも、

彼女の相手は疲れると思いますがお元気で。」

「私の相手が疲れるはずないじゃん、ねー千雨。」

「アハハ・・・ハ・・・ありがとうございます。」

「・・・疲れないよね?・・・千雨?」

最後に余計なことを言って、クルトは部屋から出て行った。

その後乾いた笑いをする千雨に元気を取り戻してもらうのに時間がかかったが、

街に出て、おみやげを買い集め、私達は魔法世界から家に帰ることにした。

その晩、千雨の部屋

「ねえ千雨？ 私と居て疲れないよね？」

「大丈夫だよ先輩、気にし過ぎだよ。」

「だよね、クルトが勝手にそう言ってるだけだよね。」

「先輩といると素の自分で居られるからね、疲れるなんてことはないよ。」

「だから、ちうたんって好き。」

「ちよ、先輩っ！ どこ触ってるんだよ。」

「……………どっつて……………ねえ？」

「ちよ……………やめ……………あっ……………んう……………」

「ちうたん……………暖かいね……………」

……

……

・

「もうダメっ！　ダメだって、先輩！！」

「えくだって……ほら……ココ……ちうたんが……」

「んっ……くっっ！　……あ……ああ！？」

……

……

・

「マジで……ハアハア……もう……ダメ……」

「……だってちうたんまだ、6回しか……」

「……もう十分……ハアハア……寝かせて……くれ……」

「……しょうが無いちうたん……じゃあ寝ていいよ、私が勝手にスルから。」

「……っ！？　ちよっと……待った……」

・

・

・

翌朝

（マジで先輩の・・・相手は疲れる・・・なんてもんじゃん・・・  
ね？・・・） ガクッ

神様から頼まれたお仕事。

その23（後書き）

23話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その24

side 超

大学工学部 研究室

「ふう〜、人工筋肉は工学部品と違って神経使うネ。」

「でも、その分うまく使いこ何故は細かい動きや微調整の効く動きが再現できますからね、研究者としては興味深いですよー!!」

超・葉加瀬の研究室では、茶々丸の新ボディの最終調整が行われている。

「この数値でどうかナ？」

「そうですね、仮想テストでは問題有りません。

テストの人格プログラムで動作試験に入ってもいいと思えますか？」

「ならば早速テストに入るネ。」

「では、早速テストプログラムを起動して動作試験をさせておきます。」

葉加瀬はノートPCからプログラムの起動準備に入る。

「テストに入ったらしばらくは時間があきますね、どうしましょうか？」

「そうネ、茶々丸の様子でも見に行こうカ。」

「わかりました。」

テストプログラムの起動を確認し、実機での稼働テストが問題ない事を確認後

私と葉加瀬は研究室を出て、エヴァンジェリンの家に向かった。

エヴァンジェリンの家への移動中、葉加瀬と茶々丸の最近様子について話す。

「それにしても最近の茶々丸は凄いですね。」

感情面の動きが活発で、データから推測すると

最近では嫉妬や独占欲なんかも出てきているようですよ。」

「それはいいことなんだが・・・相手がネ・・・」

「・・・相手が問題ですよね・・・」

茶々丸が主に好意の感情を向ける相手・・・ソプラノ。

「もう少しまともな相手は居なかったのかな・・・」

「環境が悪いんじゃないでしょうか？」

あの家の住人やお客って、ほとんどソプラノさんに毒されていますよ。

「

「毒されるって・・・葉加瀬も言うようになったネ。」

「あ、コレはその・・・」 / /

葉加瀬が慌てて否定しようとするが、口にしてしまったものはどうしようも無い。

「まあ、葉加瀬にとってもいい傾向だと思っネ。



少なくともソプラノ相手に葉加瀬が遠慮する所は最近見たこと無いヨ。」

「それは・・・その・・・あの人相手に遠慮とか、気を使おうて言うのがなんか・・・」

「なんとなく言いたいことは分かるヨ、彼女（？）相手にそう言うのは必要無いネ。」

ソプラノ自身、気にして無いし、遠慮もないからネ・・・

だからかな、あの気難しい千雨サンや 葉加瀬も彼女とは素で応対してる。」

「わ、私はっ！・・・まあ、あの人は超さんを除くと一番付き合やすい人ですね・・・」 / /

「ソプラノが突き抜けて変態だからネ。」

葉加瀬も自分の嗜好に気を使うこともないし、

ソプラノを見てるとそんな細かいことを気にしている事が馬鹿らしくなってくる、

とか、そんな感じじゃないかな。」

「・・・そうですね、あの人のそばにいと、すごく気が楽ですね。」

葉加瀬は気がついてるかな？ 今すごく穏やかでいい顔してる」  
ト……

「……そういつ超さんはどうなんですか？」

「つぶ！……ゴホッ……ゴホ……な、何言い出すカ？」 / /

「超さんだつてクラスの中で、素を出してるの私かソプラノさんしか居ませんか？」

「……ひ、秘密を共有しているという意味で話しやすいって言うことじゃないカ？」

「違いますね。少なくともソプラノの前での超さんは年相応の学生に見えます。」

「……そ、そうかな？」 / /

「そうですよ。」

しばらく無言で二人で歩いていると、エヴァンジェリンの家が見えてきた。

「ほ、ホラ、もうエヴァンジェリンの家が見えてきたヨ！」

「何をそんなに焦っているんですか？ ……超さん……まさか

！？」

「まさかって何がッ!? 私はソプラノとはなんとも無いよ!」  
／／

「……ッ、フフ 超さんのそういう所、初めて見ましたよ  
」?

「………葉加瀬え……」／／

「ほらほら、着きましたよ。」

「……まったく、あんまり人をからかうもんじゃないヨ。」

(はあ……葉加瀬もさっき言ってたけど、私達もソプラノに毒  
されてきてるのかな。)

葉加瀬がエヴァンジェリンの家の呼び鈴を鳴らし、茶々丸が応対に  
出る。

そうして私は気持ちを入れ替えて、玄関をくぐった。

s i d e ソプラノ

私と千草が居間でお茶をしていると誰かが来たようで、茶々丸が応対に出る。

「誰かきはったんやろうか？」

「さあ、千雨でも来たのかな？」

千草と話していると、玄関の方から茶々丸が超と葉加瀬を連れてやってきた。

「あゝ超と葉加瀬が、いらっしやい。」

「お初にく、ウチは天ヶ崎千草います、ソプラノお嬢様の召使やつてます」

よろしゅうお願いいたします。」

超と葉加瀬を見た千草が席を立ち、優雅に自己紹介と挨拶をする。

「はじめまして、私は超鈴音と言っネ、まだ少し日本語が苦手だけどよろしく願いますヨ。」

「わ、私は葉加瀬聡美です。 よろしくお願ひします。」

「わ、私はソプラノ・マクダウエルです。 よろしくお願ひします。」

「???? わ、私は絡繰茶々丸です。 よろしくお願ひします。」

私が葉加瀬のモノマネで挨拶したのにつられて、茶々丸も挨拶を始める。

「もう、ホントにつ!!! ソプラノさんが変なことをするから

茶々丸まで私のモノマネをし始めたじゃないですか!!!」

「私のせいなの?」

「そうです!」

「千草あ、私のせいなの?」

「お嬢様は何も悪いことあらしまへんで。」

「千草!」 「お嬢様!」

私と千草が抱き合う。

「……………どうすればいいネ。……………コレ。」

「嘲笑えばいいと思うよ。」

茶々丸が皆にお茶を入れてくれる間に心を立て直した超と葉加瀬。

「それで、今日は何かあったっけ？」

「今日は茶々丸の様子を見に来ただけネ。」

「……………絶好調みたいですね、いろんな意味で。」

「あの……………お嬢様、こちらの方達は茶々丸はんのお知り合いですか？」

「この二人はね、エヴァと3人で茶々丸を作った人達だよ。」

私のことやエヴァの事も知ってるから、後多分千草の事も茶々丸のデータから知ってるよ。」

その一言で千草が呪符を構えて警戒体制に入る。

超は泰然としているが葉加瀬はびっくりしたようで超の後ろに隠れている。

「あゝ、大丈夫だから千草。彼女達は学園側じゃなくて

どちらかと言えば学園の敵対者だから大丈夫だよ。」

「せ、せやけどお嬢様ぁ・・・」

「千草も茶々丸を通して見られるのに慣れるまでは気になるかもしれないけど

なれたら少し気持ちよく・・・じゃなくて、彼女達もプライベートを覗くとか

そついう趣味は無い・・・はずだから安心・・・して？」

「「そんな趣味はありません（無いネ）っ!!」」

「・・・何も安心出来る要素があらへんのですけど・・・」

「してませんから！覗きなんてしてませんよ千草さん!!」

「そつだヨツ！そんなことしてないかラ!!」

二人は必死で千草さんを説得している。

そんな中に茶々丸が爆弾を放つ。

「お二人は千雨さんの仮契約の様子や、マスターとソプラノ様の逢瀬を

録画保存していますが、まずかったのですか？

これからはそういう場面は見ないようにしたほうがいいでしょうか？」

ピシッ！！

空気が割る音がする・・・

「い、いやっ！ 近寄らんとして変態っ！！ ウチの身体はお嬢様に捧げたんです！

あんさんらに汚されるのはごめんやっ！！」 / /

千草が私の背に隠れしがみつく。

千草の吐息が首筋にかかってくすぐったい。

茶々丸の爆弾発言により千草に変態の烙印を押された超と葉加瀬はその場にへたり込む。



「あの〜・・・なんていうか・・・大丈夫？」

「しばらく放っておいて欲しいネ・・・」 I l l o r z

「私は・・・変態じゃない・・・変態じゃないんです・・・」 I

I l l o r z

「何かまずかったでしょうか？」

「・・・茶々丸はもう少しTPOを弁えた発言ができるようになる  
うね。」

「はい、頑張ります。ソプラノ様。」

「なんだ？ この状況・・・？」

ちょうどその時、二階から降りてきたエヴァが居間の様子を見たが、  
何が起きたかわからないようだ。

「マスター、私頑張ります。」

「……???? あ、ああ、頑張れよ、茶々丸。」

混沌が支配するエヴァ家、この状況は別荘で訓練の終わった

千雨とチャチャゼロが帰ってくるまで続いていた。

ある日のエヴァ家 居間

「旦那さん、お茶 入りましたえ。」

「ん〜ありがとう、千草は日本茶入れるのうまいよね。」

京都補正かな？ かな？」

「そんなんあらしまへんよ、ん〜強いて言うなら愛情やるか？」

「千草の愛の味だね！」

居間では私と千草、エヴァとチャチャゼロがくつろいでいる。

「おい、千草、私にも一杯入れてくれ。玉露が良い。」

「オレニモー。」

「あんたら・・・自分で入れてんか、今忙しいんや。」

「忙しいも何も姉様と話してるだけじゃないか。」

「旦那さんのお世話がウチの仕事や、っちゅうわけで今は仕事中華。」

「屁理屈を言うな！茶々丸が居ないからお前が入れろ！」

「ほんまにこの金髪チンチクリンは・・・茶ぐらい自分で入れれるようにならへんと」

「いつか旦那さんに捨てられるえ。」

「姉様がそんなことくらいで私を捨てるか！・・・・・・・・・・捨てないよな？」  
「ーーー」

「大丈夫だよエヴァ、安心して。エヴァはそのまま元気できてくれればいいんだよ。」

「ハツハツハ！ それ見たことか！！ 私達の絆はお茶くらいでは壊れんわっ！！」

「いつまでその自信が続くか見物や。」

エヴァと千草はなんだかんだで口喧嘩も多いが

概ね仲は良好だ、唯我独尊のエヴァと

エヴァの我侭もおおらかに受け入れ 時に流す千草、エヴァ家は今日も安泰だ。

「そうだ、姉様は聞いたか？」

あのぼーや、修学旅行の件が効いたらしく、

ジジイに修行の追加を願いだらしいぞ。」

「へー、まあ、ネギ先生には結構きつかったからね。

けど、いいんじゃない？ 向上心があるのはいいことだよ。」

「何か最初は私のところに魔法を習いに来ようとしたらしいぞ？

ジジイが慌てて止めたんだとか。」

「へー、それはそれで面白いことになりそうだったのに。」

「何が面白いものか！ いい迷惑だ。」

「そうかな？ 才能があるから育てるのも面白いと思うんだけど？」

「ぼーやの才能は認めるが、あの性格ではな……もう少し何とかなったら」

「考えんでもないんだが。」

「じゃあ、性格の方面でなんとかなったら魔法の一つでも教えてあげたら？」

「そうすれば それなりにエヴァの言うことも素直に聞く子に育つかもよ？」

「ふむ、それくらいなら……まあ、それもあのぼーやがもう少し現実を知ってからだな。」

「お茶、入りましたえ。」

「何の話ですか？ なんや、面白そうな感じじゃったけど。」

「千草がエヴァと、ついでに自分と私、チャチャゼロのお茶を入れてやってきた。」

「オー キツネオンナノチャハ ナカナカウマイナ。」

「そう思うんやったら、せめて名前くらい呼びなや、幼女人形。」

「今話していたのはネギ先生のことだよ、何か修行を追加でやるんだった。」

「へー、あの子が、このか様並に魔力は大きかったんやから将来が楽しみやな。」

「だが今はただの魔力馬鹿だ、あんなものは使いこなして意味がある。」

そういう意味では千雨の方がよっぽど使えるな。」

「エヴァは直弟子には甘いようです。」

「弟子の惚気乙や。」

「自分の弟子に誇りを持って何が悪いっ!」 / /

「全然悪くないよ、ただ千雨には絶対言っちゃらないんだよね。」

「ツンデレ乙や。」

「ツンデレオツ。」

「うるさい うるさい うるさい!」 / /

「釘乙。」 「釘乙や。」 「クギオツ。」 「……つく……」

・ギリギリ!」 / /

皆で散々エヴァをからかう、彼女はこういう所はほんとうに可愛らし飽きない。

side 千草

ほんまにこの家は居心地が良いですな。

あの金髪チビもあの時のことが嘘のようや・・・あんな恐ろしい力持ってるくせに

ここでは普通のおチビさんや。

京都のあの夜は、どうしようもなかったし、ソプラノはんの案なら  
仇討ちもできるから

ソプラノはんのモノになる言っただけど・・・このままココにおっ  
てもええかもしれへんな。

ウチ一人でココを出て行ったら、間違いなく西か東の追手に捕まっ  
てしまうやろ。

ここに居れば、仇を討たせてもろて、あんな強い人達の保護下に居れて

追手に怯えることも無い・・・ソプラノはんも優しいしな。

・・・あかなあ。

コレで無事に仇まで討たせてもろつたら、ほんまにココから・・・あの人から

逃れられへんようになってまうし、逃げるなんて不義理犯そつとも思われへんやろ。

(ほんま・・・いけずな人や・・・。) / /

とにかくっ！今は自分の為にも・・・まあ、少しはソプラノはんの為にも、

力を着けて何があっても動けるようになってかんとな！



「あの子の話で思い出したんやけど、旦那さん、ウチにも修行付けてくれへんやろか？」

「千草の修行か……エヴァは魔法だし 私は結界くらいしか教えること無いし……」

「そうだ、書庫に呪術書が結構あつたから、」

「それを読んでもらつて実践の訓練は私達が相手をするつて言うのでどう？」

「せやな、ほならそれでお願いできますやろか。」

「結界も少し覚えたいから旦那さんお願いできますか？」

「了解、それじゃあ千草さんにも指輪渡しておこうか。」

「……ゆ、指輪っ!? あかん! あきまへんっ!!」

「ウチらまだ知り会つたばかりや、いくらなんでも早すぎます！」

「そら、旦那さんの気持ちはいつでも受け入れる準備はありますけど」

「もう少し順序を踏んでおくれやす! 仮定を楽しめないなんて……旦那さんはいけずや!」 / / /

結婚指輪と勘違いしたのか？

初めて見るが、慌てる千草はすごく可愛かった。

「……………貴様、何の話しをしている？」

その指輪じゃないぞ。」 #

「……………ちょ、ちょっと勘違いしただけやおまへんか。」 / /

「私が言う指輪は、修行に使ってる魔法球の中で老化を抑えられる効果のある指輪だよ。」

本当は指輪の魔力が枯れるまで老化を抑える効果があるが

魔法球限定だと言っておく。

「……………そ、そんな夢のような指輪が……………あるんですか……………  
……………」

す、すぐにおくれやす！！ ウチにその指輪をつ！！！！」

千草が私の服の襟をつかんで振り回す。

「わ、渡す!!! ……渡すからっ! ……は、離して!」

老いはすべての女性の天敵のようで、千草も例外ではなかった。

これで、私と仮か本契約したら不老になると言ったらどんなことになるか…… 1111

この日以降、エヴァの別荘の住人が一人増え、

千草とお互いいい修行相手が増えた。

千草は今までの下積みがあるのか、やはり呪術系が得意で

私教える結界は苦手なようで、そっちの才能がないのが残念だと嘆いていた。

別荘内部の城内広間ではチャチャゼロと千雨が訓練をし、

脇の木陰に練習を兼ねた結界を敷いて読書中の千草と

お茶を楽しむエヴァ、私、茶々丸がいる。

チャチャゼロと千雨の訓練は、チャチャゼロが一方向的に攻め、

千雨はそれを回避、防御、魔法での攪乱などの方法で

攻撃を受けないことに専念している。

当初よりの千雨の希望、倒すことよりも己の生存を中心に修行している為、

千雨の回避、逃走能力は凄まじい。

そのかわり火力は完全に捨てているので、

SLB以外の魔法で上級の相手を倒すことは無理だろう、

千雨自身もそれでいいと納得している。

「千雨はんはほんまに凄いですな、あの人形の攻撃全部躲してはるで。」

「修行の賜だよな、幻術や魔法の射手（改）を織りませて

本気で回避に徹したら、並の相手じゃ本体の姿すら確認できなくなるよ。」

「ほんまですか？ さすが旦那さんの従者というだけはあるんやな。」

ウチも旦那さんの恥にならんよう頑張りますから よろしゅうお願いします。」

「うん、でも千草はもう十分に私の従者として合格点超えてるから無理はしないでね。」

「はい」

「ふん、茶々丸、お前も私の従者として相応しい姿を見せろよ。」

「了解しました、マスター。」

私達が話している間に向こうも今日の修行が終わったようで

コチラに休憩にやって来る。

「お疲れー 千雨、チャチャゼロ。」

「おゝ、今日も疲れたあゝ。」

「サイキン チサメトヤツテモ オモシロクネーゼ、

ムカシハ アンナニイヒメイヲ アゲテタノニヨ。」

「……毎度毎度あんな目に合わされてたまるかよ。」

「だが千雨もまだまだだな、そろそろチャチャゼロも本気を出すよ  
うにするか?」

「オー マジカ? ソレナラマタヒメイヲ キカセモラウゼ。」

「勘弁してくれよ……せつかく無傷で済むようになってきたのに  
……。」

「それでは修行にならんからな、少し考えてみよう。」

「先輩、先輩からも何とか言ってみてくれよ。」

「エヴァもやるのはいいけどほどほどにね、

千雨は女の子なんだから傷なんか残したらかわいそうですよ。」

「……全く、姉様は家族には甘すぎる。」

茶々丸から渡されたスポーツドリンクを飲む千雨とワインを飲むチ  
ャチャゼロ、

二人を加え、ちょっとしたお茶会になる。

そんな時に千草から疑問が上がる。

「ココでお世話になるようになって、皆の修行は何回か見させてもろうたんやけど」

ウチの旦那さんが修行してる所見たこと無いんです、

旦那さんはどれくらいの腕前なんですか？」

「あゝ姉様な・・・なんて言ったらいいか・・・」

「先輩か・・・」

「アネハナ・・・」

「ソプラノ様は・・・」

「え・・・なんかまずいこと聞いてしもうたやるか？」 1111

「いや、従者として主の実力を知っておくのは当然だ、問題ない。

ただな・・・」

「ただ・・・？」

「姉様はココで本気は出せないんだ、出すとこの魔法球が壊れる。

本気じゃなくても、姉様の楯というか羽は私達じゃ破れないから  
防御に徹すると何もできなくなる、回避も数百年の積み重ねがある  
から

近接戦闘じゃ私くらいじゃないとかすることできん、

攻撃は食らうと私以外だと下手したら即死で訓練にならないのだ・・・

「

「・・・・・・」

「剣術とか武術、投擲とかな、限定した条件でならいいんだが

さっきの千雨のような総合での戦闘訓練は相手が居なくてできない  
んだ。」

「・・・ほんなら旦那さんの戦闘の力はこの中では？」

「最強って言うか最悪だな、質が悪すぎる。」

姉様が本気で私を殺しに来たら何もできずに殺されるだろうな。」

「・・・エヴァはんが・・・ですか？」 1111

「・・・百聞は一見にしかずか、ここなら多少は大丈夫か。」

姉様、千草にアレをやってやれ。」



「え、やるの？」

「千草には見せておいたほうがいいだろう？ 従者なんだから。」

「しょうがないか・・・じゃあ千草、今からいつでもいいから私に攻撃してみて。」

「・・・やるからには本気で行きますえ？」

旦那さんの従者としてみっともない所は見せられへんよって。」

千草がそう言うと、目付きが変わり、千草がまとう空気も変わったような気がする。

「行きますえ・・・」

「茶々丸の位置はつと・・・限定空間は3mでいいかな？  
我に仇なす事を 禁ず。」

「お札さん！！お願いやつ！！」

私の宣言と共に空間を限定して私の世界を構築する。

千草はお札に魔力を込め起動しようとするが、反応がない。

「……はっ？ あれ？ どういう事や……？」

その後千草は何枚かお札を試すがすべて起動しない、  
チャチャゼロからナイフを借りて私に斬りかかるが、そうしようとすると身体が動かなくなる。

ピシッ！

「姉様っ！ もう限界だ！！ 魔法球がもたん！」

「おっとと、了解っと。」

エヴァの合図と共に構築した世界を元に戻す。

それと同時に魔法球内の魔力が一気に減り、

維持にすべての魔力を使うようエヴァが調整する。

「ふう、危なかったぞ姉様。」

「外でやったほうが良かったかもね。」

「先輩……もう少し加減できないのか？ それ。」

「これは加減とかは……してる方なんだけど。」

「な、なんやったん……今の？」

「ウチ何もでけへんかった……。」

落ち込む千草をエヴァが励まそうとする。

「あ、あんまり気にするなよ千草。」

「分かっただろ？ 私が何もできずに殺されるといった意味が。」

「……え？ じゃあエヴァはんも同じようになるんですか？」

「ああ、姉様の本気 능력は世界を創る、体験したからわかるだろ  
う？」

「そないな……アホな……神さんでもあるまいし……。」

「千草、私のこの能力は凄い分リスクも大きくてね、

起こした結果の分その振り返しも大きいんだ。

現に今の少しの間でさえ この魔法球が壊れそうになったでしょう？

外ならもう少し負荷が分散されるけど、

ココだと魔法球内にしか負荷がかからないから魔法球が持たないんだよ。」

「………そないな力……。」

「そう、こんな力は簡単には使えない、だから使うときは、

それなりの準備をしてから少しだけ使うんだ。

さつきみたいな強引な使い方はほとんどしない、

それこそ私の人生で数えるくらいしか使ったことはないよ。

だから説明のために今は使ったけど、普段は使わないものと考えておいて。」

「わかりました。」

「普段私が戦う必要があるときは、この剣とこの楯、あとは身につけた技術かな。」

私は千草に数本の黒鍵と光鷹翼を1枚見せ説明する。

「この剣は私が魔力を込めると刃ができて、投げてしばらくすると勝手に戻ってくる。」

あとこの楯、光鷹翼って言うけど、ようはすごく硬い、エヴァでも

破壊できないよ。」

「へ〜エヴァはんでも無理ですか。」

「大分昔にエヴァが躍起になって破壊しようとしてたね。」

「ふんっ……まだ諦めたわけではないぞ！」

「まあ、そんな感じだよ。私はほとんど戦わないけどね。」

「姉様に戦わせたなら必要以上に周りが破壊される。」

千草気をつけるよ、姉様が投げた黒鍵はあそこの城壁くらい楽に貫通するぞ？

受けようなんて死んでも思うなよ。」

「……あはは……」

千草もあまりの非常識の連発に、顔をひきつらせている。

「あれ？先輩の黒鍵って楯に向けて投げたらどうなるんだ？

矛盾って例え話の奴。」

「盾の方が硬いよ。黒鍵事態は少しい剣くらいの性能だから。」

「千雨……あの楯、気をつけるよ？」

昔姉様が黒鍵を持つ前、あの楯の形を変えて剣のように使ってたが、頑丈な岩でも水のように切り裂いたぞ？」

「マジかよ……先輩、非常識もいいかげんにしろよ？」

「さすがウチの旦那さんや、惚れ直してしもつたやん！」

さつきまで凹んでいた千草が私に抱きついて大喜びし、

それを見たエヴァと千雨にボコボコにされる。

「バカ姉がつ！………あ、まずい。」

「どうしたエヴァ？」

「さっきの姉様の力とか茶々丸が見てるよな？」

「……あ……超か。」

「いてて、それなら大丈夫だよ、さつき力を使ったときに茶々丸の位置まで囲んだから、

茶々丸には悪いけど、今日の別荘内の記録はできないようになってるよ。」

「……確認しました。本日別荘に入って以来の記録が存在しま

せん。

現在進行形で記録が妨害されてるようです。」

「一時的なメモリには残ってるけどデータとして記録はできないからね。」

メモリも今から晩ご飯でも作ってる内に書き換えられるだろうからね。」

茶々丸が悲しそうな顔で私を見つめる。

流石に記憶を勝手にいじるような真似になって罪悪感が湧く。

「ソプラノ様……」

「ごめんね、茶々丸、こればかりは……ね。今度何か埋め合わせするから。」

「はい、ソプラノ様の立場上しょうがないことだと理解しています。

お気になさらないください。」

「うん、ごめんね……」

茶々丸の手を握り、もう一度謝る。茶々丸も私の手を優しく握り返してくれる。

「なんだ、その……私も少し迂闊だった、許せ茶々丸。」

あと分かってると思うが、千草も口外するなよ？」

「ウチの旦那さんに仇なすようなことウチがするはずあらしまへん。」

「今日は皆疲れたから早めのご飯にしようか？」

「オウ サケデモノモウゼ。」

「お前はさつきから飲んでるだろう……茶々丸、今日は肉が食いたい。」

「了解しましたマスター。」

「じゃあ私と千草さんで手伝うよ。」

先輩は……エヴァとゆっくりしててくれ。」

「ん、おまかせした。」

少し早めの夕食を皆で楽しみ、そのまま飲み会へと進行し、夜は更けていった。



「それで、先輩に言ってやったんだよ。

先輩を私のモノにするって！」

「違うよ千雨、それは私が言ったんだよ。」

「そうだったけ？」

「そうだよ、その後千雨が、センパイ〜 もう好きにしてえて言っで。」

「そんなこと言うわけねーだろ！ なあ、エヴァー！」

「貴様どうでもいいが私の尻から手を離せ……」

「ホラ、エヴァも違っつて。」

現在飲み会が進行し、いい感じに千雨が出来上がっている。

エヴァと私を両方に侍らせ、セクハラしつつ仮契約の時の思い出話をする。

「それで、その仮契約って何なの？ 千雨はん。」

「仮契約って言えばあれだろ？ キスだよ、濃厚な。」

「違うよ千雨、舌で唾液を交換し合うんだよ。」

私もいい感じに出来上がっていた。

「へーお二人共 そんなことしはったんですか？」 #

「千草様、その時の様子が高画質で録画してありますが？」

「ほんまでっか！？ 後でゆっくり見させてもらいましょか。」

「御意。」

「マトモナノハ オレダケカ・・・」

「私もだ！ 全く・・・千雨と酒を呑むといつもこれだ・・・」

「ソウイッテモ イツモスキナヨウニ サセテルジャーナーカ キモチイイノカ？」

「馬鹿か!!」

千雨はな……好きなようにさせないと追っかけてくるんだ……どこまでも……な。」

過去にトイレまで追っかけられたことを思い出したようだ。

「それに私が姉様以外に感じるかつ!!」

「エヴァにゃんの愛にお姉ちゃん感動した! 今日飲もう! エヴァの愛に乾杯っ!!」

「エヴァの情欲につ!!」

「なにが情欲だ、千雨!!」

「マスターの歪な愛に。」

「エヴァはんの病的な愛に!!」

「貴様らいいかげんにしろお~~~~っ!!」

神様から頼まれたお仕事。

その24（後書き）

24話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その25

side 夕映

図書館島

私は今のどかと共に、修学旅行後 ネギ先生から預かった地図について

ここ、図書館島で話をしています。

そして、今まで機会がなくて聞けませんでしたが

今回 聞きたかったことを聞くチャンスが来ました。

「・・・ネギ先生、あなたは魔法使いですね？」

私は修学旅行の出来事、学園の状況、

このかさんのお父さんの話、ネギ先生から預かった地図

そして、先日の学園長室での千草さんの話、なぜか語られないソプラノと千雨さん。

これらの事から推測し、この学園が大規模な魔法使いにより造られ運営される学園であることをネギ先生に問い詰める。

「あの、その、あわ……」

すすすすいませんダメですーっ！

「あ、ネギっ!？」

「逃げたです!？」

私の質問でどうしようもなくなったのか、ネギ先生は神楽坂さんを置いて逃亡し

結局、神楽坂さんからも忠告されるだけで、詳しい話を聞けなかった。

「お願い、夕映ちゃん。魔法の事を調べたり、ネギに聞くのはやめてくれない？」

「しかし、アスナさん私達は・・・」

「別にいじわるとかそういう意味じゃないの・・・」

私もネギも・・・ううん、魔法の世界に関わると この間みたいに危険なことがあって

時には命にも関わることがあるの。

だから二人にはそんな危ないことには関わってほしくないの、友達として・・・」

「アスナさん・・・」

「ゆえ・・・今日はもう・・・」

「そうですね、すみませんアスナさん。」

この話はまた今度聞きます。」

「・・・諦めてはくれない・・・かな？」

「ええ。」

その場は一旦分かれ私とのどかは寮の部屋に帰る。

「ゆえ〜、どうしようか？」

（ソプラノとの約束があるからのどかは連れていけないですね・・・）

「・・・私は少し心当たりがあるのでちょっと出かけるです。

のどかは明日の朝、ネギ先生が一人で地図の場所に行かないか

見張るので、準備をしておいて欲しいです。」

「う、うん、わかったよ。」

「それでは、行ってきます。」

のどかを部屋に置いて、私はソプラノの住むエヴァンジェリンさんの家に向かう。

エヴァンジェリン邸



辺りはもう陽が沈みかけている・・・

私はエヴァンジェリンさんの家に着き 呼び鈴を鳴らす。

呼び鈴を鳴らした少し後、扉が開き 中から茶々丸さんが顔を出す。

「綾瀬さんでしたか。」

「こんにちわ、今日はどういった御用でしょうか？」

「こんにちわです。今日はソプラノと話したい事があってきたです。」

「ソプラノは居ますか？」

「ええ、ソプラノ様は今 マスター達とお茶を飲んでいます。」

「どうぞ中へ。」

「お邪魔するです。」

茶々丸さんに招かれ、家の中へ入り、居間と思われる所に案内される。

ここではソプラノと、エヴァンジェリンさん、あと どこかで会ったような・・・

綺麗な和服のお姉さんとお茶を飲んでいただきます。

「こんにちは、ソプラノ。」

「あゝ夕映、いらっしやい。夕映もこっちに来なよ、一緒にお茶しよ。」

「ふん、綾瀬か。まあ茶くらいだしてやろう、茶々丸、綾瀬の分も用意しろ。」

「かしこまりました、マスター。」

「はじめまして、お嬢ちゃん。ウチは 天ヶ崎千草 言います。

よろしゅうに。」

「は、はじめまして、綾瀬夕映です。よろしくです。」

挨拶も済ませ、ソプラノに招かれるまま、席に座る。

「そ、ソプラノ、今日は実は折り入って相談があるんです！」

「なんか力が入ってるね。まあ、まずはお茶でも飲んで落ち着い

て。」

「すみません、ご馳走になるです。」

茶々丸さんの入れてくれたお茶は、私がいれるのとはまた違って美味しい。

今度入れ方を聞くのもいいかもしれないと思ったです。

「……ふ〜、茶々丸今日も美味しいよ。いい仕事だよ。」

「恐悦至極。」

「私の従者だ、これくらいあたりまえだ。」

「ウチかて日本茶なら負けまへんえ。なあ、お嬢様。」

「千草の日本茶はさすがの茶々丸でもかなうかな？」

「全力で頑張ります、ソプラノ様。」

「私も紅茶なら少しは美味しく入れられるですけど、ここまでは……」

「夕映の紅茶も茶々丸とはまた違って美味しいよね。」

最初は失敗も多かったけど。」

「そ、それは言わないでほしいです・・・」 / /

こんな感じでしたら早くお茶談義をし、落ち着いたところで今日の本題に入る。

「今日はソプラノにお願いがあつてきたです。」

「ん、なにかな？ 夕映がわざわざ家に来てお願いなんて。」

「わ、私に魔法の事を教えて欲しいです！」

私が魔法について教えて欲しいと言うと皆が静になる。

「・・・夕映は、どこまで知ってるかな？」

「私が今知っているのは・・・」

そうして私が今知っている内容を、推測を交えてソプラノに話す。

ネギ先生の事、エヴァンジェリンさんの事、この学園の事、

修学旅行でのこのかさんの実家の事、図書館島の地図の事・・・

一通り話し終え、ソプラノの反応を待つ。

「ん〜、学園長も何やってるんだか……」

「ジジイは引きこむ気なんだろう？」

まあ、とにかく気になることがあったな、図書館島の地下か……

あの坊やなら明日にも行きかねんな、どうする？」

「学園長に教えて恩を売るか……着けて行って、情報を得るか……」

「あそこの情報など今更いらんだろう？」

「この間の貸しで閲覧許可は取ったぞ。」

「それなら情報を教えて貸しにしておこうか、

そんなにたいしたことは要求できないけど 塵も積もればなんとやらって言うし。」

私の知らない学園長とソプラノたちの関係……

やっぱりソプラノ達はかなり高度な魔法使いで

学園長と対等……か、上くらいの権限があるようです。

「じゃあ、茶々丸、ちょっと学園長に連絡しておいて。

ネギ先生が明日にでも図書館島の地下に行きかねないって。」

「了解しました、ソプラノ様。」

茶々丸に指示を出し、話は終わったのか、ソプラノがこちらを見る。

「さて、夕映のことだけど……どうして魔法を知りたいの?」

「修学旅行の時やこの学園、そして魔法、

この世の中にはまだまだ私の知らないことが沢山あります。

それを学べる機会があるなら是非とも学んでみたいんです。」

「ん〜つまり知的好奇心かな?」

「端的に言ってしまうとそういう事になります。

でも……! 遊びやそんな気持ちじゃないですっ!」

「うん、夕映がそれなりに真面目に言ってることはわかるよ。

だけど……それじゃあ魔法を教えることはでき無いよ。」

ソプラノに拒絶された・・・魔法の事を拒絶しているんだと分かっ  
ていても辛い・・・

「どうしてですか!? な、何がいけないんですか!?!」

「夕映は修学旅行のことを見ているから魔法の世界が危険だってわ  
かるよね?」

「はい。でも、ちゃんと訓練もするですし、覚悟もあります。  
」

「ほう・・・面白い。覚悟があるといったな?」

私の台詞にエヴァンジェリンさんが反応する。

「あ、あるですよ!」

「ならば見せてみるといい、その覚悟。本物ならば私が魔法を教  
えてやるつ。」

「本当ですか!」

エヴァンジェリンさんは修学旅行の時を見ても、かなり高位の魔法  
使いのほず。

それにソプラノの妹ですから、ソプラノの次に教えて欲しい人です。

「ああ、約束しよう。我が名にかけてな……綾瀬夕映、私の目を見る。」

「……え？」

エヴァンジェリンさんの目を見るが、別に変わった様子はない。

そうしていると、不意にエヴァンジェリンさんが私の右腕を掴み……

「さあ、覚悟とやら……見せてみる。」

腕を切り落とした。

「……え？……痛い！？……いたい……手が……  
……あ……ああつつあゝゝ！！！？？」

「さあ、綾瀬夕映 貴様の覚悟、どう見せる？」



「ああああつつあゝゝ、手っ!? 私の手が……あああつつあつあゝ!」

「どうした? 綾瀬? まだ貴様の悲鳴しか聞こえてこんぞ?」

痛い痛いいたいいたいイタイイタイ痛い

私の手が無い、血が止まらない、涙も鼻水も、何もかもが止まらない、

痛みと喪失感で何も考えられない、目の前が歪んで見える、頭が冷たい、

腕が熱い、床がぬめって立つことができない、血で視界が埋まる、赤い、紅い、アカイ……

足が震える、誰かの声が聞こえる、何もわからない、腕が痛い、目の前が紅い、

腕がない、寒い、誰かの笑い声が聞こえる、イタイ、大事な人が私の名を呼ぶ、痛い

「ふん、駄目だな。

所詮こんなものか……」

誰かの声と何かが弾ける音が聞こえた後にガラスの割れる音が聞こえ  
急に痛みが収まり、視界の赤がなくなる。

「…………え、ゆえ！ 夕映っ！！」

「…………え？ い…………たくない？…………？」

「夕映っ！ しっかりして！！」

「ソプラノ…………？」

私の大事な人が私の名を呼ぶ。

「ソプ…………ラノ…………ソプラノ…………」

「そうだよ、夕映。 私だよ。」

ソプラノが私を抱きしめている…………温かい…………寒さも震えもど  
こかに消えていく…………

誰かの鼓動が聞こえる、目の前が涙で歪む、でも温かい…………

ただ…………ただ、暖かった。 心も体も暖かくなっていった。

「ふん、おい千草、風呂の用意をして綾瀬を洗ってやれ。」

着替は私のでいいだろう。後今着ている服を洗ってやれ。

茶々丸は掃除だ、全く、ガキの世話はこれだから嫌なんだ。」

エヴァンジェリンさんの指示で皆が動き出し、私は千草さんに連れられお風呂に入れられた。

お風呂場で千草さんに身体を洗われるが、なぜ洗われているのか？

なぜ、お風呂に入っているのかわからなかった。

お風呂から上がり、ソプラノに暖かいココアをご馳走になってようやく頭が働き始めた。

「わ、私は……あ、あの、ソプラノっ!？」 // // //

「いいよ、夕映、落ち着いて、私はここにいるから。」

ソプラノが私の肩を抱いて頭を撫でてくれる。

それだけで気分が落ち着いていく………が、思い出して  
しまった……

私がさっき恐怖のあまり失禁してしまったことを……。

「~~~~~!!??」 / / /

それから私が落ち着くまで、30分以上かかった。

「綾瀬様、今日は泊まっていてってください。」

寮で同室の宮崎さんには先程連絡をしておきましたので。」

「……はい、ありがとうございます。」

「夕映、落ち着いた？」

「……はい、ありがとうございます。さっきはみつともない所をお見  
せしました。」 / / /

「うっん、気にしないでいいよ。」 (流石の私も、恐怖で失禁  
では興奮できないよ。)

「ん？ 何か言ったですか？」

「うっん！ 何も！」

そうして落ち着きを取り戻した私は恐る恐る、エヴァンジェリンさんの方を見る。

「ふん、どうだ綾瀬？ 貴様の覚悟とやら、役に立ったか？」

「……………いえ。」

「まあ、さっきのは幻覚だ、実際に腕を失ったわけじゃないが、いい経験ができただろう？」

これに懲りたら魔法を習いたいなんて馬鹿なことを言うのはやめることだな。」

あれがいい経験なのかは分からないが、2度としたくないですし、2度もできるものじゃないでしょう。

そんなことを考えていると不意にソプラノと目が合う。

彼女はどんなんだろうか？ 魔法の危険性は身に染みた、嫌というほど、でもソプラノは？

「・・・ソプラノは、魔法が怖く無いですか？」

「こんな目に・・・あったことがあるんですか？」

私の悪い癖だ、気になると聞かなくや気が済まない、知りたくなる  
そして、無意識に聞いてしまった。

「私？ 大怪我をしたことはあるし それなりに危険な目にもあったことはあるよ。」

「・・・怖くなかったですか？」

「怖かったよ。泣いたこともあるし、吐いたりもしたね。」

あ、エヴァもそうだよ、あの時のエヴァは可愛かったな。

夜なんか一人で寝られなくなって私にしがみついて・・・」

「余計なことは言わなくていいんだ！！ バカ姉がつ！！！」

エヴァンジェリンさんがソプラノを引っ叩く。

その様子を見て不意に笑がこぼれた。

「さあ、夕映 今日のもう寝よ。」

何も喉を通らないでしょう？」「いついつ時はさっさと寝た方がいいよ。」

「……はい、そうするです。」

ソプラノの進める通りに今日はもう寝ることにする、

確かに何かを食べる気にはとてもなれない、まだ胃がキリキリしている。

そのままソプラノに連れられ、寝室に着く。

誰の部屋かわからないが綺麗に掃除がされている。

「さあ、夕映 横になって。」

寝付くまで私が一緒にいてあげるから。」

「………はい。ありがとうございます。」 / /

まるで子供をあやすような態度に羞恥心が掻き立てられるです。

でも、あれだけ醜態を晒して今更何を取り繕うものがあるのか……

私はおとなしくソプラノの好意に甘え、布団の中でソプラノにしが

みつく。

「今日は大変だったけど眠れば少しはすっきりするからね。」

「・・・・・・・・・・はい。」

先程の恐怖のせいか、今ほど人のぬくもりが今程ありがたいと思っ  
たことないです。

・・・・・・・・・・先程の恐怖・・・・・・・・不意に右手を握ったり開いたりしてみ  
る・・・・・・・・・・ある。

それに気がついたのか、ソプラノが私の右手を握り締める。

「大丈夫、ちゃんと夕映の手はあるよ・・・」

「・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・グスッ」

涙が出た、嬉しいのか、悲しいのかわからない、ただ涙が出る。

私はソプラノに抱きつき布団の中で理由のわからない涙を流し続け  
る。

そんな私を包み込むように抱きしめてくれるソプラノ・・・・・・・・



ここまでしてもらって、私はこの人に何か出来ているだろうか？

不意に疑問が沸き起こる。

最初は偶然の出会い、本を読んでもらった、相談に乗ってもらった、助けてもらった、彼女に我俣をぶつけた、そして今、癒してもらっている。

そう考えると私は彼女に甘えるばかりで何もしてないことに気がつく。

お茶をご馳走した？ 違う、飲んで欲しかった。

お菓子をご馳走した？ ただ笑顔が見たかった。

そう考えだすと酷く自分が惨めに思えてくる。

何もできず、ただ甘えていることに・・・酷く嫌な人間なんじゃ無いだろうか？

悪い癖が疼きだす。

「・・・ソプラノは・・・私なんかと居て、楽しいですか？」

「……うん、楽しいよ

夕映と本読んでていろんな表情に変わるのを見ると面白くて、

お茶入れてもらって、だんだん私の好みに近づいて、

一緒にお菓子とか食べて、一緒に居ると暖かくなるね〜

……こうして抱きしめて……夕映がココに居ることを感じて。」

／／

「……私も……同じです。」

同じだったんですね……」／／

今思うと何で魔法を知りたかったんだらうか？

こうしていると満たされる、幸せです、これでいいじゃないですか？

……違う、コレは今だけ……朝には、眠れなくなってしまう……

……ああ……思い出した。

いや、分かった。

ソプラノと一緒になりたかったんですね。

彼女が魔法を使えるから、私も使いたかった。

いや、違う、同じ世界に居たかったんですね。

魔法なんてその為の口実……どうでも良かったんですね。

でも、今はそうは行かない。

朝にはコレがなくなってしまう、また前に戻ってしまうです。

私は今、魔法を知りたい理由を知った。でも今日……恐怖も知った。

右手が疼く、一度は失ったと思った。

違う、その余裕もなかった、ただ痛みと恐怖に翻弄されたです。

そういえばあの時誰かが私を呼んでいた……ああ、思い出しました。

あの時私を呼んでいたのはソプラノだったんですね。

大事な人が私を呼んでいたのに、気が付きもしなかったです、

今になって思い出すなんて……。

・ ソプラノは恐怖に翻弄される私を助けようとしてくれていたのに・

魔法の世界は怖い、エヴァンジェリンさんが怖い、

ソプラノも怖いと言った……ソプラノも怖い？

こんな恐ろしい目に彼女があっていた？

私はその時どうしていたんです？

また彼女がこんな目にあった時、私はなにができるんですか？

ダメッ！！ 今のままじゃ、このまま魔法の世界に、彼女の世界に  
一緒に居なかつたら

ソプラノが恐怖に震えるときに私はなににもできない。

こんな恐ろしい恐怖に、怯えるソプラノを一人になんてできないで  
すっ！

私が、今度は私がソプラノを守るんですっ!!

「ソプラノッ！」

「え？ なに夕映？ どうしたの？」

ソプラノにおもいつきり抱きつく。

「ソプラノも怖かったんですね？」

「え、うん、色々怖いことがあったよ。」

「私が、今度は私が居るです！ 私がソプラノを守るですよっ!!」

「夕映……本当にいいの？ さっきも分かっと思っけど、魔法の世界は怖いんだよ？」

「怖いです、もうあんな思い二度とゴメンです。」

でも！ そんな所にソプラノを一人で置いていけないです。

ソプラノが怖い時は私が居るです。一緒に居るんです!!」

「夕映……そっか、私が怖い時は夕映が守ってくれるのか……」

じゃあ、夕映が怖い時は私が守るよ……ごうやって」

「はい・・・」

ソプラノと私は布団の中で強く抱き合う。

「明日、もう一度エヴァンジェリンさんをお願いします。」

私には魔法の力が、ソプラノと一緒に居る力が必要なんです。」

「うん、頑張つて。夕映が怖い時は私がいるから、思い出してね。」

明日・・・すごく怖いですけどもう一度エヴァンジェリンさんをお願いします。

今度こそ・・・まほう・・・を・・・。

・・・

・・・

・

明朝 エヴァ家

朝、目が覚めた私の目の前は黒一色

何事かと思い、体を動かそうとするが動かない。

すごく暖かい……？……？……？……？……あれ？

昨晚の出来事を思い出す。

「……………つ……………!!!?」 / / /

ソプラノとだ、抱き合って……………!!

「むぐう……………! ん……………!! そ、ソプラノ起きるです!!

朝ですよ!!

「……………ん……………あさあ……………あれ? 抱き心地が……………」

「朝です! 私ですっ! タク映……………です!!

「……あ、ごめん夕映え……あふう……おはよう夕映。」

「おはようです、ソプラノ。起きるですよ。」

「うん、ごめんね。あのまま寝ちゃったみたい。」

「そ、それはいいんです。」 / /

「じゃあ、私着替えてくるから、夕映は居間に先に行つてて。」

「分かつたです。それじゃあ後で。」

ソプラノが先に部屋から出て行き、私も軽く髪を梳かしてから居間に向かう……？

自分がいま着ている服を確認する…… / / /

下着は黒で、かなり品のいい生地のようなのだが異様に小さいローレグ、隠す所が隠しきれていないんじゃないかと疑問になる。

その上にスケスケのネグリジェ、思いつきり下着が見えている。

誰の趣味だろうか？

無いよりマシのようだが、逆にある方がまずく感じる……



居間に着くと茶々丸さんと千草さんが食事を作っている。

エヴァンジェリンさんも新聞を読んでいるし、千雨さんがなぜか人形を頭に乗せている。

「おお？ 綾瀬か・・・また凄い格好だな。」

「こ、これは私のじゃないです！」 / /

「なんだ、私の下着に文句があるのか？」

「ああ、エヴァのか。 納得した。」

「素晴らしい趣味だろう？」

「・・・まあ、素晴らしいな。 ある意味。」

「みんな おはよう。」

「姉様か、おはよう。」 「先輩おはよう。」 「おはようござい

ます。」 「お、おはよう。」 / /

「夕映は朝から刺激的な格好だね、お姉ちゃんそう言うのが大好きです。」

「うち、違うんです。 これはエヴァンジェリンさんので！」 / /

「大丈夫 大丈夫、すごく似合ってるから」

「そうじゃないですう〜!!!」 / /

「お嬢様、朝食はもう少し待っておくれやす。」

「うい〜。」

朝のエヴァンジェリンさんの家の様子・・・初めて見ましたが

修学旅行の時の怖い様子など感じることも無く、

皆、楽しそうに、まるで家族のように振舞っています。

「おい、茶々丸、そういえばぼーやの方は結局どうしたんだ？」

「指示通りにネギ先生を尾行しましたが、予定通り図書館島の地下に向かいました、」

地下の広場で竜種に遭遇、混乱している所を私が回収し、学園長に引き渡しました。

その際 同行者に宮崎さんが居ました。」

「そうか、やはりまだ父親が絡むと暴走しがちになるな。」

「しょうがないよ、何年も思い続けてたんだからそう簡単には割り切れないよ。」

「忘れると言ってるんじゃない、もう少し状況を見て対処できんかと思ってな。」

「まだ若いからね、本当なら友達と遊んでる年頃だから

そこまで求めるのは行き過ぎだと思うな。」

「あのぼーやも難儀なもんだ・・・周りは英雄として求め、

自らも父親の後を追って英雄になりたがるか。」

「ん、それだけじゃないような気もするんだけどな。

だけどネギ先生、母親についてはどう思っているんだろうね？」

「災厄の魔女か・・・どうせ周りが何も教えてないんだろう・・・」

ソプラノとエヴァンジェリンさんがネギ先生の事を話しているようですが

私にはよくわからない話ばかりです、ネギ先生のご両親の話のようですが・・・

とにかく、今は自分のできること優先です。

朝食の時間までもう少しあるようなので、早速決意が鈍らない内に

エヴァンジェリンさんに話をする。

「エヴァンジェリンさん！」

「……ん、何だ？」

「もう一度お願いします！ 魔法を教えてくださいです！！！」

「……貴様、昨日あれだけ醜態を晒しておいてまだ言うか？」

「昨日のことはなにもいえないです。 自分でも馬鹿だったと思っています。」

でも今は、今日は違います。」

エヴァンジェリンさんが私の顔を見る。

「……確かに昨日よりはマシなようだな。」

だがマシなだけで……果たしてどうかな？」

「正直わかりません。 でも私には必要なんです！」

「ならば試してやろう、だが昨日のような幻覚で済むと思うなよ。」

エヴァンジェリンさんは右手に光る剣のようなものを出し……

今度は現実だぞ？　利き腕は勘弁してやるが……逆はいいよな？

私はとつさに右手をかばおうとしたが逆の手を狙っていたようで左腕を落とされる。

「……っ!?　い……あああっあああ……!??!」

「なんだ……昨日と同じか？」

「ぎい……ああアアアあ……!!?」

痛い、イタイ、いたイ、いたい、痛い、痛い!!

昨日と同じ、いや昨日より痛いっ!

現実？　エヴァンジェリンさんは昨日は私に目を見るように言った。

吐き気がする、昨日から何も口にして無いから何もでない、

血溜まりが床にできる、イタイ、脂汗が出る、涙が、鼻水が、足が体が震える、

頭が冷たい、胃が痛い、痛い、目の前が見えない、紅い、

立って居られなくなる、イタイ、寒い……

「綾瀬夕映、どうだ？」

「今助けを求めるなら治療してやるぞ？」

「腕も元通りにしてやる。」

「わからない、助かる？ 腕か元に？」

「助けて欲しいといえ、そうすれば楽にしてやる。」

「楽に？ 痛くなくなる、怖くなくなる？」

「だがまだ、魔法を学びたいなどというなら・・・腕は  
ラメロ。 アキ

「授業料だ、安いものだろうか？」

「腕がなくなる？ アキラメル？ なにを？ 腕を？ 嫌だっ！」

「た・・・」

「…………え…………ゆ…………し…………り…………」

声が聴こえる…………温かい声…………

「…………プラ…………ノ…………ソ…………プラノ…………」

「…………え…………ゆ…………え…………夕映…………夕映っ！」

今度こそはつきり聞こえる、私の大事な人の声です！

「い…………ぎい…………っだ…………だい…………じょうぶ…………です。」

「夕映っ！　しっかり。」

はつきりと聞こえる。

そうです、ソプラノです！　私はソプラノと一緒に居るんです！！

腕を見る、無い。

床を見る、血溜まりと、他の液体。

ソプラノを見る、腕の血止めのために私の腕をつかんで血まみれです。

不意に髪をつかまれ、エヴァンジェリンさんの顔のすぐ前に顔を持つて行かれる。

「綾瀬夕映、助けを求めろ、そうすれば腕を元に戻してやる。

だが まだ魔法を学ぶなどというなら、腕は諦めろ、授業料だ。」

なんて理不尽な、腕を諦めろ？ 無理です、ならば治療？ 魔法は？ どうでもいいです

じゃあソプラノは？ それだけはダメですっ！！！！

私はエヴァンジェリンさんを睨みつける。

「どうする？ 綾瀬夕映。」

「……ゴホッ ……わ、私は……ソプラノと、ソプラノと……一緒に居るんです……」

私の大切な……人と……一緒に居るんですうっ……！！」



そう叫んだ瞬間………パリン………何かが割る音がする。

紅い世界が……割れる？

それと同時に腕の痛みが何もなかったように引いてく。

目の前は紅くはないがぼやけて見える、腕は？ あり。腕  
……腕  
がある？

これは現実じゃないんですか？

座り込んだお尻が気持ち悪い、嘔吐感もある、胃も痛い、でも腕は痛くない、ちゃんとある。

何が起きていたのか把握しようと考えていると

ソプラノが私の左手を握り、そのまま私を抱きしめる。

「夕映、大丈夫だから、ちゃんと手もあるからね。」

「ソ、ソプラノ？ 大丈夫ですか？ 怖くない、ですか？」

「私は大丈夫だよ、夕映こそ大丈夫？ 怖くない？」

「私は、大丈夫ですよ。ソプラノと一緒に居るですよ。」

少しは頭が回るようになり、周りの状況を見る。

苦虫を噛み潰すエヴァンジェリンさん、無表情の茶々丸さん、ほっとしたような顔の千雨さん

チヨットムツとしてる千草さん、私を抱きしめてるソプラノ。

そして腕もある、お尻が気持ち悪い私……お尻が気持ち悪い？

「つゝゝゝ！！？？ ま、また……またですか！？」 / / / /

「あゝゝなんだ、千草、茶々丸、昨日と同じようにな。」

「ほんま、ええかげんにしてくれへんか、お嬢様のやったらいくらでもええけど

なんでこないな小娘の……ブツブツ」

「綾瀬様、お風呂場の方に。」

「まあまあ、千草、私も手伝うから。」

「お嬢様にこないなことさせられまへん！ ウチに任せておくれやす。」

「あゝ、私はどうしようか？」

「千雨は掃除を手伝え。」

「はあゝ……分かったよ。」

「……………」 / / / / /

死にたいです……さっきの腕のことなんてこれに比べたら……

ソプラノにも見られたです……もう消えたいです。 / / / / /

……

……

……

お風呂で身体を洗い、昨日汚した制服が洗って乾いているようなのでそれに着替え

もうしわけなさ一杯で、処刑台（居間）へ向かっています。

「……………なんと云ったらいいか……………ごめんなさい。」  
///

「……………あゝ何だ気にするなよ、綾瀬。私は何も見なかった。」

「綾瀬様の失禁動画はデータより削除しておきました。ご安心を。」

「夕映、あんまり気にしないで……………ね。」

本当に……………このまま消えたい……………です。

「綾瀬夕映。」

「はいです。」

「まあ、何だ色々あったがとりあえず合格点はやれるから

魔法を教えてやってもいいが、どうする？」

やるなら半端なことは許さんぞ、最強の魔法使いになる以外の道はない。」

「お願いするです。私には必要なんです。」

「あきまへん！！ それはあきまへんでエヴァはん！！」

このお漏らし娘はウチに取って強大な敵や！

野放しにしとつたらウチの旦那さんが、ウチの旦那さんがあ！！！！」

「訳の解らんことを言い出すな千草！」

「せやかて！ このお漏らし娘はウチの旦那さんを狙ってる！さっきのかて聞いたやろ！」

「ちよつと耳をかせ、千草。」

ゴニョゴニョ……ゴニョ……！！

「そ、そう言うことなら……しゃあないな。」

何を言ったらあんなに反対していた千草さんが納得するんですか！？

「まあ、そういうわけで、いいな。」

「夕映！ 頑張つてね。」

「はいです！」

「千雨もいいな？」

「私はなあ……まあ、綾瀬なら大丈夫……か？」

「でわ、綾瀬夕映！ 貴様はたった今から私の弟子だ！！

私の弟子に相応しい魔法使いになるようビシビシ行くからな！！」

「はいです！……つて、あれ？

ソプラノは教えてくれないんですか？」

「あゝ私は2つくらいしか魔法使えないんだよ。」

「……は？」

「姉様に魔法に関しては期待するな。」

私が見つちり仕込んでやるから安心しろ。」

「……え、ええ〜！！！！？？」

こうして私、綾瀬 夕映は色々な物 ( ? ) を犠牲に魔法使いへの  
の一步を踏み出した。

S i d e 千草

「エヴァはん、ほんまに大丈夫やるな？」

「大丈夫だ、綾瀬は姉様を女だと思い込んでいる。

仮に綾瀬から手を出しても姉様が男だと気がついたら自ら身を引くさ、ククク。」

「せやな・・・あのお漏らし娘は百合の園の住人のようやし。」

「・・・千草、その言い方はよせ、百合というのは特にダメだ。」

「？ まあそう言わはるんなら。」

神様から頼まれたお仕事。

その25（後書き）

25話目 投稿



神様から頼まれたお仕事。 その26

麻帆良学園 女子中等部 3 - A

今日も最後の授業が終わり、HRも特に連絡事項はなく終わる。

「エヴァ帰りでしょうか？」

「そうだな姉様。」

「あ、先輩、私は後で行くよ。」

「夕映はどうする？」

「私は部活の後に行くです。」

それぞれが放課後の過ごし方を決め、席を立とうとした時・・・

「ごめんやす〜。ソプラノお嬢様はいらっしゃるやるか？」

千草さんが私の迎えにやって来たので、軽く手を振って居場所を教

える。

「あ、お嬢様お迎えに参りましたえ。」

学園都市内では着物も着崩さず、上品な振る舞いの千草さんはそれなりに目立つ、

ましてや中等部にやってきて、お嬢様お迎えに参りました だ、

これで目立つなという方が無理だ。

そして……

「「「「「「「「ええ〜〜っ！！」「」「」「」「」

当然こうなる……

「え、ちょっとどういう事ソプラノさん！ この人誰？」

「あ、この人最近噂の着物美人〜！」

「この人が噂の？」 「京都弁を操る謎の和服美人、その正体は？」

「ソプラノちゃんがお嬢様って？ エヴァちゃんは？」

千草・・・どんな噂になってるの・・・？

その後しばらく質問攻めに会うが、朝倉さんが学園長に口止めされてるので

いつもは代表して質問をする朝倉さんが、今日はそそくさと教室から逃げ出した。

今になって朝倉さんのありがたさがわかる・・・あの人はあの人で必要な人だったんだ。

下校時

「あはは・・・今日は大変やったな。」

「大変なんてもんじゃないよ・・・」

「千草さんも もう少し目立たないように入ってきてくれればいいのに・・・」

「ごめんやす、初めてお嬢様をお迎えに行くよって興奮してもうてな。」

「次からは気をつけるよ 千草、もうあんなのはゴメンだからな。」

「マスター、私ももう少し派手にお仕えたほうがよろしいでしょうか？」

「おまえは なんで今の会話でそういう判断になるんだ!！」

「いえ、少しマスターがうれしそうだったと感じたもので。」

「お前のAIはどうなってるんだ・・・」

そんなこんなで皆で会話しているとあつという間に家に着く。

「それじゃあ着替えてくるから千草はお茶の用意してもらえるかな？」

「着替のお手伝いはいりませんやろか？」

「さ、さすがにそこまではいいよ。」

「せやけど。」

「あの・・・流石に着替まで手伝ってもらつと悪いから・・・ね？」

「もう、旦那さんはいけずやな、ウチがやりたいのに。」

「馬鹿やってないでさっさと着替えてこい！」

「じゃあまたね。」

私は千草につかまらない内に部屋に逃げ込む。

「そついえばエヴァはん、いつになったら旦那さんとの仮契約 許し  
てくれはりますの？」

「お前……それ朝も聞いたぞ……」

「そら、許してくれはるまでいくらでも聞きますえ。」

「……何がお前をそこまで駆り立てるんだ？」

「女いうもんは お預けくろつてると余計に欲しなるもんですやろ  
？」

「そつ言ってOKを出したら今すぐにも仮契約しにいくんだろ  
うが。」

「そらそつや。」

「……だからキス以外の方法ならいいと言ってるだろう。」

「ウチは接吻がええんです。 千雨はんには許したんやろ？」

「何でウチはアカンのです？」

「別に千雨も許したわけじゃない、アレは勝手に暴走したんだ。」

「ならウチも勝手に暴走したらええんやな」

「……いいわけないだろう……はあ。」

「ため息つきたいのはこっちや、ほんまに……はあ。」

二人は一旦別れ、それぞれ用事を済ます。

「今日は玄米茶を入れてみましたえ。」

「ふむ、これもなかなか……」

「おちつく〜。」

「……コレは何か特殊な入れ方をしてるんですか？」

「丁寧に飲む人の事を考えて入れるんや。」

「なるほど……勉強になります。」

「……おい、今の説明で何がわかったんだ？」

「エヴァにゃんにはわからないのか……」

「マスター……」

「え？ 私がいけないのか？」

千草の入れてくれたお茶を飲みながら、学校の話や

昔話などで盛り上がっていると、千雨がやってきた。

「お邪魔します。」

「千雨、いらっしやい。」

「千雨さん、いらっしやいませ。」

「いらっしやい、今千雨はんのお茶も入れますよってちょっと待ってな。」

「さんきゅー。 チャチャゼロはまた寝てんのか。」

「アイツは放っておけばいいんだ、酒を呑むか寝てるかなんだから。」

「この学園にいる間はしょうがないよ、戦闘なんてそんなに無いんだから。」

「今度もう少し家事や他のこともできるよつにさせるべきか・・・」

エヴァがチャチャゼロの改造計画を立案しだす。

千雨も来たことでまた話が違う方向に盛り上がり、時間がたつのを忘れる。

「千雨はんは、和服の衣装は作らへんのやるか？」

「そつちはエヴァの方が好きだからな、エヴァが作ってるよ。」

「何だ千草、和服が欲しいのか？」

話次第では考えてやらんこともないぞ。」

「エヴァはんが作りはるんですか？」

想像もつきまへんな。」

「失礼なことを言うな、茶々丸の着物も私が作っているんだぞ。」

千草が茶々丸が先日着ていた着物を思い出している。

「あれを？ ほんまですか？」



「本当だよ、エヴァは裁縫とかそういうのが得意だから。」

「へ〜意外やな〜、家事関係は全滅やと思ってましたわ。」

「……お前、私を何だと思っているんだ？」

「金髪チンチクリンのお嬢様？」

「幼女吸血鬼？」

「永遠の合法ロリ？」

「私のマスターです。」

「よし、分かった。茶々丸以外全員表に出ろ！」

怒ったエヴァが立ち上がり庭に出ていこうとする。

「まあまあ、エヴァはん、落ち着いておくれやす。」

エヴァはんが裁縫が得意ならお願いがあるんやけど。」

「……っち、後できっちり話をつけるからな！」

それで何の頼みだ？」

「こないだな、着物を見てきた時にええ生地があつてな、

それで浴衣でも作って貰おう思ってたんやけど、

このへんにはええ仕立屋がどこにあるかわからしまへんで困ってたんや。」

「ふむ・・・浴衣か。もうそろそろそんな季節だな。」

「作れますやるか？」

「問題ない、後で採寸させる。作ってやる。」

「ほんまですか？ありがとうございます。」

「残った生地は私が貰うからな。」

「それは好きにしてくれやす。」

「いいな、エヴァ、私にも作ってくれよ。」

衣装の話に千雨が食いつく。

「いいけど生地はあるのか？」

「そこが問題だよ、和服の生地って結構高いから・・・」

「よし、それじゃあココはお姉ちゃんが皆の分、反物を買ってあげよう。」

「マジか！ さすが先輩。」

「ええんですか？」

「いいよ、今度皆で買いに行こうよ。」

茶々丸とチャチャゼロ、後夕映の分も。」

「私もいいんですか？」

「いいよ、茶々姉妹はお揃いでいこう。」

「……作るのは私なんだが……」

「エヴァもたまには従者に褒美をあげないと、信賞必罰の精神で。」

「うち……しょうが無い。 姉様私には着分は反物を寄越せ

よ。」

夏に向けて浴衣の話題で盛り上がり、日も落ち始めた頃、夕映が来た。

「お邪魔するです。」

「いらっしゃいませ、綾瀬さん。」

「夕映、いらっしやい。」

「こんにちわ、夕映はん。」

「綾瀬も来たのか。」

「こんにちわです。」

「おい、千雨。地下で寝てる駄人形を起こしてこい、別荘に行くぞ。」

「ん、夕映も今日から魔法の訓練か？」

「はい、そうです！のどかはネギ先生に頼んで、魔法先生から教えてもらうそうです。」

「結局あのぼーやも折れたのか、まあ、宮崎が相手では分が悪いか。仮契約もしてるようだし。」

「私ものどかに誘われたんですが、エヴァンジェリンさんに教えてもらえると話したら」

ネギ先生が怯えだして……。」

「ネギ先生もあの時のことが忘れられないんだね……。」

「あれを忘れるのは無理だろう……私もたまたま思い出すし。」

「エヴァはなんかしはったんですか？」

「前にね、エヴァがネギ君を凍りづけにしたことがあるんだよ。」

「……それは少しひど過ぎやおまへんか？」

「アレはジジイの依頼でやったことだ！ 私の趣味じゃない。」

「よく言っぜ、私もやられたからな、千草さんも気をつけるよ？」

千雨が千草を怯えさせてから倉庫へチャチャゼロを起こしに行く。

「ウチそついう趣味はあらしまへんから……エヴァはん堪忍してや。」

「人間を凍りづけにする趣味など無い！！」

千雨がチャチャゼロを連れてきたので、皆で魔法球の中へと移動する。

「じ、コレは……高いです……」

「綾瀬……漏らすなよ……」

「それは言わないでほしいですっ!!」 / /

鬼のような剣幕でエヴァに詰め寄る夕映。

「わ、悪い、もう言わないから・・・な？」 1111

しばらくは夕映の前での発言には気を使ったほうがよさそうだと、

アイコンタクトで会話した結果、全員一致のようだ。

城内の庭に集まり、エヴァが修行の説明を始める。

「それでは千草は、引き続き呪術書を読んで使えそうな術のピックアップ作業だ。

千雨は今日は綾瀬について教えてやれ。

教えるのも復習になるだろう。

姉様は千雨のサポートをしてやってくれ、魔法の感覚を掴むのには姉様が

手伝ったほうが早いからな。」

「お願いするです、ソプラノ、千雨さん。」

「ああ、綾瀬も頑張れよ。」

「旦那さん、ウチがんばりますえ。」

「千草も頑張つてね。目的達成のためにも。」

「ええ、わかってます。」

復讐のことを思い出したのか、千草の表情が怪しいものになる。

「千草さんの目的ですか？」

「それは夕映は知らなくてもいいよ、千草の目的は千草だけのものだからね。」

「……？ はいです。」

夕映は釈然としないようだが、この件に関しては知らない方がいいだろう。

まだ夕映は魔法の世界に踏み込んだばかりなんだから。

「綾瀬の得意系統は風と火みたいだな。」

私みたいに一極集中でもいいけど、まずは両方満遍なくやるか。だが、それ以前に最初はコレだ。」

千雨がおなじみの初心者練習用の魔法杖を取り出す。

「これは何ですか？」

「コレは初心者練習用の杖だよ。」

これを使って最初に魔力を使うことに慣れるために覚える魔法を練習するんだ。

こんな感じだな。」

そう言うと千雨は実際に夕映の目の前で、初心者用の火を起こす魔法を唱える。

あっさり火がつくが、私がそれを使えるようになるまでどれだけ苦労したか……………

「わっ！ 凄いです！」

「まずはこれができるようにならないとな。」



「が、ガンバルです！」

「呪文の詠唱は覚えるとして、魔力を認識することだが・・・先輩  
お願い。」

「やっと私の出番だね！」

「ソプラノ、お願いするです。」

「うむうむ、じゃあ夕映は楽な姿勢で立って、足は肩幅で重心は傾  
けないでね。」

私の指示通りに姿勢を整える夕映。

「じゃあ目をつぶって、私がこれから夕映の背中に魔力を押し付け  
るからその感覚を覚えて。」

「はいです。」

夕映の背後に回り 手に魔力を収束して夕映の背中を撫でるように  
収束した魔力を押し付ける。

「んっ！・・・う・・・あ・・・なんか、くすぐ  
つたい・・・ですっ。」

「今は先輩が高濃度の魔力で綾瀬の背中を撫でてるからな。

その感覚が薄まったような感じでイメージしてみてください。」

「わか・・・んあ・・・っただすう。」

しばらく夕映の背中を魔力で撫で回すが、度々喘ぎ声に近い声を出す夕映、

私が悪いわけではないが、千雨の視線が痛い、私は悪くないのに・

でも、少しだけ、狙ってやっていますが！

徐々に魔力の濃度を薄めていき、通常の魔力でも夕映が反応するところまで

時間をかけて根気よくやる。

この作業は正直疲れる、エヴァが私くらいしか今ここにいる人ではできないだろう。

「どうだ、綾瀬？ そろそろ自分の体全体にその感覚がまとわりついているのがわかるか？」

「……んっ……はい、何か身体の中からと外から……あ……感じるです。」

「よし、杖を渡すからその感覚を杖に集めるようにイメージするんだ。」

「はいです。」

夕映は杖を握り、魔力を集めていく。

なかなかいい感じだ、普通ならこの感覚を掴むのに時間を取るが

私やエヴァのような強力な魔力を持つ人に感覚を引き出してもらえば才能次第ですぐに感覚がつかめる。

夕映は魔力量は少ないが、魔力制御の才能があるようだ。

千雨と同じタイプだ。

「よし、綾瀬、その感覚を意識して呪文を唱えてみる。」

呪文は      プラクテ   ビギ・ナル   火よ灯れ      だ。」

「はいです……プラクテ   ビギ・ナル……火よ灯れ！」

ボツ

「……………え？……………マジ？」

「……………ついた……………火が点いたですよ！！」

「お〜やるな綾瀬〜、私は数日かかったのにもうできたのか。」

(何が数日だ！！ 私は年単位だよ！！)

……………もうやだ……………この娘達…………… orz

「ソプラノ！ 私にも魔法ができたですよ！！」

つく、笑顔が眩しい……………この笑顔を前に下手なことは言えない……………

「そう、よかったね、夕映。 この調子なら結構早く思い通りに魔法が使えるようになるね。」

「はいです！！」

喜びはしゃぐ夕映……………私は頑張ったよ……………すごく頑張って笑顔で夕映をばげましたよ……………

エヴァが私の横に来てそっと肩を撫でてくれる。

「姉様は頑張ったよ・・・飲もう、今日はおもいつきり飲もう。」

私が最後まで付き合うから・・・な？」

私の目から涙がこぼれ落ちる・・・いい妹を持った私は幸せだ・・・

「なあ、チャチャゼロはん、旦那さんどないしはったん？」

「アア、アレハナ・・・アネヲ ソットシテオイテ ヤツテクレ

アイツハ スゴク・・・ガンバツタンダ。」

「?????・・・はあ・・・」

日頃のチャチャゼロからは考えられない様子に

どう対応していいかわからず、困惑する千草。

私とエヴァ、チャチャゼロでその夜はおもいつきり飲んだ。

翌朝

皆で朝食を食べながら、夕映の今後の育成方針を話す。

「とりあえずはどんな状況でも落ち着いて魔法を使えるようになってもらって、

そこから先どうするかだよね？」

「綾瀬は体格も小さいからな、前衛は無理だろう。」

「じゃあ、千雨タイプ？」

「そこまで極端じゃなくて、普通に後衛魔法使いでいいんじゃないか？」

「いや機動力は必要だろう、通常の3倍くらいは。」

「お前は何の通常を基準にしているんだ？」

「あ、あの……」

「通常の私？」

「無茶を言つな、お前の通常は異常だと認識しろ。」

「とりあえず魔力制御に重点をおいて、瞬動は早めに覚えようよ。」

「あの……」

「夕映はんにも呪術を教えてもええやろうか？」

「それは……まて……それも面白そうだな、東西のハイブリット仕様か！」

「あのっ！話を聞いて欲しいです!!」

なんども声をかけても無視される、

夕映にはまだエヴァ家のテンションはきついようで

業を煮やして声を張り上げた。

「何だ、綾瀬夕映、私の指導方針に文句があるのか？」

「ち、違つですよ、ただ、私は守るの魔法を覚えたいんです。」

「はあ、守る？私の弟子のくせに？」

「ちょっと待ってエヴァにゃん、千雨が前でかき回して

夕映は後衛で防御固めて固定砲台って言うのもいいんじゃない？」

「だがなあ、こいつの魔力じゃ威力はたかがしてれるぞ？」

「そこで、ウチの出番や！ 呪いなら威力は関係ないんじゃないやろうか？」

腹下しの呪いとか戦闘中に掛けられたらかなり辛いで？」

「そつちの方向での後衛か・・・今までにはないタイプで面白いかもな。」

「せやで、お札を使えばそれなりに威力も出せるやろし、ええと思うで。」

「よし、方向性は決まったな。」

防御固めて、呪いと魔法で固定砲台だ。」

「ええええつ！！！」

夕映の意見は微妙に通った形になったが

本人が満足しているかどうかは定かではない。



とにかく夕映の育成方針が決まりつつあった。

「ち、ちがうです・・・私が思っていたのとは違うんですよう・・・ソプラノお、助けてです・・・」

夕映がエヴァ家のテンションに付いていけるようになるのはまだまだ、先のようにだ。

この日から、あたりに夕映が毎日エヴァの家に通うようになり、

本屋>夕映>私達 へとネギ先生グループの修行の様子などの情報が来るようにもなった。

ネギ先生たちの修行方法は、魔法学校の基本に沿っていて

学園の魔法球を使ったり図書館島の魔法書などで勉強したり、  
着実に進んでいるようだ。

ネギ先生個人は古ちゃんに武術を習ったり、刹那さんと神楽坂さん

を交え

実戦形式の訓練を繰り返しているという。

たまに高畑先生も参加しているようだ。

夕映の方は順調に成果を上げており、週末は泊り込みで魔法球にこもっているおかげで

初級魔法なら問題なく発動できるようになり、基本的な体術や、無詠唱魔法の

訓練に入るようになった。

こんなにすぐに魔法が使えるようになるなんて・・・

妬ましい、ああ妬ましい、ねたましい。

千草の研究は順調そのもの、敵討ちも呪う方向で行くらしく

近いうちに実行できそうだとのことだ。

最近千草からは良く仮契約をせがまれる。

私としてはすることは全然OKなのだが、エヴァが怒り出すので、  
なんとか説得する方法を考えないと・・・

千雨はSLBを確実に当てる方法を エヴァと研究している。

魔法の射手 (改) をさらに改造して電気での麻痺硬直時間をさらに延長、

数秒から、10秒くらいまで延長に成功し、新たに麻痺の射手と改名、

今後は雷の投擲のような、刺さって しばらく維持されるような持続性能を

持たせられるよう改良することだ。

これが完成したら障壁を抜けて相手を硬直、麻痺させ、SLBの詠唱時間を稼ぎ

打ち込むことができるようになる。

千雨にも闇魔法を覚えさせようか？ という案も出たが、相性はそれほど悪くないもの

器が小さく、取り込めても中級魔法がせいぜいで、その割にリスクも大きいという理由で

現状は麻痺の射手の改造を優先することにした。

今日の別荘での修行も終わり、皆でエヴァの家へ帰り、

軽いパーティーのような食事会を開いて皆で騒ぐ。

「まったく、私の弟子はどうしてこうも……」

「何が不満なんだよ？ 綾瀬だって覚えはかなりいいほうだと思うぞ。」

「貴様らの覚えがいいのは私も分かってる、おぼえはいいんだが火力がな……」

「しょうがないだろう、コレばかりは。」

エヴァは千雨や夕映の火力に不満があるようで、酒を飲みながらグチをこぼす。

「私の弟子ならそれらしく大規模な殲滅魔法を撃つたり、火力で押しよすよな……」

「お前と一緒にするなよ……エヴァみたいなのはレアケースで

普通は大魔法なんか一人で撃たないんだろう？」

「だがなあ……」

理解はしているが納得がいかないようで、ブツブツと文句を繰り返す、エヴァ。

「まあまあ、千雨も夕映も人間だから真祖のエヴァと比べたらだめだよ。」

二人共人間の範疇で言えばかなり優秀な方なんだから。」

「せやでエヴァはん、お二人ともウチの知る限りじゃ一番才能があるんやから、

贅沢言つたらあきまへんえ。」

「……はあ、しょうが無い。だが諦めたわけではないぞ、知恵を活かして

必ず私の弟子に相応しい魔法を使うように鍛えてやるからな！」

「勘弁してくれよ・・・」 「私はできれば、防御の魔法を・・・」

エヴァも自分の弟子には甘いのか、真祖の知識で作る魔法がどれだけの物か・・・

二人が変に狙われないように、狙われても大丈夫なようにしてあげないと。

「そんなことよりもエヴァはん、いつになったらウチに旦那さんの仮契約を

許してくれはるんです?」

「貴様もしつこいな、だからキス以外の方法ならいいと言っているだろう!?!」

「それやったら意味が無い言ってますやん!

千雨はんには許したくせに狡いですえ!」

「なんども言っているだろう、許したんじゃないで、勝手に暴走したんだ。」

エヴァと千草が仮契約の許可のことで言い合いを始める中、

夕映が千雨に仮契約のことを聞いている。

「千雨さん、仮契約とはどういうものですか？」

「ん、仮契約か？ まあ、簡単にいえば魔法使いが自分の従者と契約して守ってもらうんだ。」

契約した従者は魔法使いを詠唱中なんかに守って、

魔法使いは自分の魔力を従者に与えて身体能力を強化したりできるな。

腕のいい魔法使いだと従者にアーティファクトって言うアイテムが出る場合がある。」

「千雨さんは・・・ソプラノと契約してるんですか？」

「ああ、私は先輩の従者ってことになってるな。」

アーティファクトも出たぞ。」

千雨は私の従者であることにそれなりの誇りを持っているのか、

少し自慢気で、うれしそうに夕映に語る。

「へーどんなものか聞いてもいいですか？」

「私のはな、杖となんていうかローブのようなもんだ。」

杖の方は、魔力の伝導率が私に最適に調整してあって、

カートリッジって言う、魔力のタンクを使って魔法の威力を上げることが出来る杖なんだ。

ローブの方は、少し防御の効果の高い普通のローブだ、ただし重さは殆ど無いな。」

「凄いです、千雨さんにぴったりですね。」

「そ、そうか……?」 / /

「私もソプラノと契約したらアーティファクトが出るとは思いますか?」

「ん〜出ると思うが……エヴァがあれば、私もちょっと……な。」

千雨がエヴァと千草の方を指さし、夕映に話す。

最後の方は声が小さくて夕映には聞き取れなかったようだが、

千雨も私にこれ以上従者ができるのは反対のようだ。

「ええですよん！ ウチが勝手に旦那さんと契約するのが嫌やったんなら



「エヴァはんが監督下の下でやったほうが納得出来るやろ!？」

「お前がキス以外の方法でやればいいだけのことじゃないかっ!?!」

「せやからそれやったら意味が無い言ってるんや!」

「結果は同じじゃないか!」

「過程が大事なんや!?!」

「うゝゝゝっ!?!」「ググ・・・・・・・・っ!?!」

しばらく二人のにらみ合いが続く。

「・・・・・・・・はあ、わかりました。ウチも少し大人気なかったわ。

「こういう事には必要なもんを忘れてました。」

「ようやく諦めたか・・・・・・・・」

「エヴァはん、ウチと旦那さんの仮契約を認めてくれたら、

京の知り合いに頼んで有名呉服店の最高の反物を用意させてもらいます。」

「・・・・・・・・なん・・・・・・・・だと・・・・・・・・?」

私を買収するというのか?」「 ー ー ー

エヴァの顔色が悪い、京都の呉服店の反物というのがかなり効いているのか……

「エヴァはんも仮契約事態は認めてはるんやろ？」

あとはただ少し目を瞑ってくれたらええだけや、その間に終わりますよって。」

「私に京の呉服店の反物で姉様を売れというのか!」

「ちやいますやん、エヴァはんが正妻いうんはウチも認めています。」

千雨はんも妾や言うてましたやん、ただウチもお仲間に入れて欲しい言うてますのや。」

「め、妾っ!?! どういう事です!! 千雨さん!!」

脇のほうで夕映が千雨に掴みかかって千草の発言について聞き出そうとしてる。

「……しかし、これ以上姉様の周りに女が増えるのは……」

「エヴァはんかて女や、わかってますやろ？」

ウチがどないな気持ちで旦那さんと一緒に居たいと望んでるかくらい  
」

「つく……だから……仮契約は認めると……」

「そこをもう少し曲げてほしいんや、一生に一度の大事な事、

同性やったらどないな方法で旦那さんにモノにされたいか……分か  
つてくれるはずや。」

エヴァが珍しく口で劣勢だ、京の反物というのがよほど効いたのか？

……流石にそれはないか……千草さんの気持ちが下手に  
分かってしまうから

強く出れないんだろう。

私もそこまで鈍感じゃないし。

「……しかしだな……」

「ほんま……強情な人やな。」

……あ、そういえば去年の農林水産大臣賞を取った最高の玉露が  
昨日届いたんや、旦那さんに振舞おう思ってたんやけど、まだ封を開

けてなかったような。」

「……千草……貴様……」 111

「エヴァはんの懐の深さを見せてもろうたら……ウチも何かお礼をせなアカンな。」

「……グツ……ギギ……」

おゝ、エヴァが凄いい剣幕で千草を睨みつけてるな。

冷や汗がすごい勢いで吹き出してきてる。

「エヴァはん、正妻としての貫禄……妾のウチに見せてくれまへんやろうか？」

終わったね……ただでさえ折れてるエヴァ、さらに貢物の反物

+ 最高の玉露、

その上、千草が自分を下にしてエヴァに貫禄を見せると来たもんだ、

コレで断ったらエヴァの貫禄なんてあつたもんじゃない。

「……クソっ!! ……天ヶ崎千草っ!!」

今回は私が折れてやるが、次はないと思えよっ!!」

「エヴァはん、ほんまありがと〜ございます」

コチラは決着がついたが、脇では 千雨と夕映の攻防がまだ続いている。

しかしこの時エヴァは自分のミスに気がついていなかった……

『エヴァはん、正妻としての貫禄……妾のウチに見せてくれまへんやろつか?』

千草がこの時に自分を 妾 と言って話をすり替えていたことに。

神様から頼まれたお仕事。

その26（後書き）

26話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その27

麻帆良学園 女子中等部 3 - A

修学旅行から日も経ち、クラスメイトが思い出話をする事も減り、学園の様子も、通常の授業風景に戻りつつある。

そんな中、神楽坂さんが明らかに「私 怒ってます。」 オーラを出して教室に入ってきた。

「ねえ、夕映、神楽坂さんどうしたの？

なんかすごい不機嫌なんだけど。」

「アスナさんですか？ のどかの話だと、何かネギ先生が怒らせたようですよ。」

「あの二人もよくやるね。」

喧嘩するほど仲がいいとでも言うのかな。」

「そうですね、なんだかんだであの二人は仲がいいですから。」

学校全体にHRの開始を知らせる鐘が鳴り、クラスメイトもそれぞれの席に着いて

先生の到着を待つ。

しばらくし、挙動不審なネギ先生が到着、神楽坂さんの不機嫌オラが増し、

ネギ先生がおかしな態度をとるが、それ以外は問題なく授業が行われた。

昼食時 屋上

青空の下、いい風が流れて気持ちがいい、思わず昼寝をしなくなるような陽気の下

屋上でエヴァと茶々丸を待っていると、超と葉加瀬が先にやってきた。

「ソプラノが一人とは珍しいネ、後の人はどうしたネ？」



「ん〜、茶々丸が少し学園長に呼ばれてね〜、エヴァも一緒についていったよ〜。」

「何か眠そうですね。」

「こんなにいい天気だとね〜、午後は休んで保健室で寝てようかな。」

「いい身分だね。」

「羨ましいですね、私もこんな日は研究室に籠っていたい〜・・・」

「それは何か違うと思う・・・」

「そうだ、いい機会だから聞いところか、超の計画の方は順調？」

「今の所 問題なく進行してるヨ、茶々丸のデータが役に立ってるから」

「そちらの方は予定より早く進行してるネ。」

「そっか〜、順調なのはいいことだね。」

「そうネ、私もいい機会だからついでに聞いておこうカ、」

「ソプラノは私の味方にはなってくれないのかな？」

「だって、超の計画って何やるか聞いてないんだもん、」

それに協力しろって言ってもね。」

「エヴァンジェリンには必要だったから話したが、本来はあまり計画の話は広めたくないネ。」

だから 私からはあまり多くのことは話せないヨ。」

「それはつまり私はあまり必要じゃないということでしょう？」

だったら今は中立でいいかなーと思ひまして。」

「……本当のことを言うとソプラノは ぜひこちら側に来て欲しいネ。」

私の作戦に必要というわけではないが、敵に回ってほしくないという意味でネ。」

「そう思っただったら、計画の概要は話して協力を求めないと。」

「そこが悩み所だヨ、話して協力してくれなかったリスクを考えると話せない、だけどこちら側に来て欲しい、色々な意味でもネ……」

私と超はしばらくお互いを見つめ合い、不意に同じタイミングで笑みが溢れる。

「今回は縁がなかったようだね。」

「そうだね、賭けに出るにはBetが大きすぎるヨ、ソプラノは。」

「残念だね、超を落とすにはもう少しBetを安くしないとダメなのか。」

「安い男の娘は嫌いネ。」

「我俣だね。」

「そういう女だから落とし甲斐あるんじゃないかな？」

「あんまり難易度が高いと男も寄ってこないよ？」

「その時は科学と心中するヨ。」

「やれやれ。」

「それが超さんですから。」

青空の下で少女（？） 3人で笑って過ごす。

心の中こそ見なければ絵になる風景だった。

季節の変わり目なのか、天候の変化も激しくなり

雨の日が増え 屋上で食事を取ることが難しい季節になってきた。

神楽坂さんとネギ先生の様子もいつも通りに戻り、

周りの生徒もやれやれといった所、

魔法関係の事件も無く、このまま穏やかに過ごせたらどれだけいいか・・・と

家でお茶を飲みながら穏やかな日常に感謝していると、学園結界に妙な変化が現れた。

「・・・ん？ 今なんか変な変化がなかった、エヴァ？」

「ああ、妙だったな、異物が入り込んだにしては反応が小さいし

普通の人間にしては妙だ。」

「とりあえず、皆には警戒だけは怠らないように連絡しておこうか？」

「そうだな、ジジイはどうする？ 無視でいいとは思つが。」

「ん、自分で気が付け、って意味で放っておこうか。」

私達に被害が来なければ基本的に放置でいいっしょ。」

「ん、じゃあ私は探知用のコウモリでも放つか。」

「じゃあ、連絡は私がしておくよ。」

役割を決め、私は千雨や夕映に念話で連絡、千草、茶々姉妹には口頭で連絡する。

「旦那さんにエヴァはん、お疲れさん。」

「お疲れさまです。」

それぞれの役割を果たして、夕方のお茶を再開しようとした時、

茶々丸がチャチャゼロを頭に載せて千草と一緒に、お茶とお茶菓子を持ってやってきた。

「ありがと、三人共も座んなよ。」

「おおきに、ほな失礼して。」

「失礼します。」 「オウ。」

千草が私の横に座り、茶々姉妹もエヴァの横に座る。

「何か、侵入者があったとか聞いたんやけど？」

「今の所はどつちかわからないって言うのが本音かな、反応が妙だね。」

「そうですね、とりあえず旦那さんがさっき言ったように警戒だけしておきます。」

「ついでに貴様の修行の成果を見てやる、この家の結界はお前が敷け。」

「任せてや、旦那さんの修行の成果、見せてやるよって。」

「ふん、口だけで終わるような醜態を晒すなよ。」

「出来の良さにびっくりせえへんように気をつけや。」

この二人は口は悪いがお互いそれなりに信頼しているようだ。

多少言い合っても気にした様子もない。

コレが千雨だったら喧嘩になるし、夕映だったら落ち込むだろう。

仲がいいんだか悪いんだか・・・

「そういえば千草、お前 最近仮契約の話をしなくなったな？」

あの話の後、すぐにでもやると思っていたんだが。」

「あんな事の後でできますかいな、もう少しええ雰囲気やないと、せつかくの儀式なんやから。」

「まあ、わからなくはないが・・・な。」

「ん～・・・せやなせつかくエヴァはん言い出してくれたんやから、今夜やらせてもろつてもええかもね。」

「また急だな・・・」

「何で今夜なの？ 千草。」

「さっきのことがあったやろ、侵入者云々って話。」

「肝心の時の手札は多いほうがええし、今夜は月もええ感じで お日柄もええしな。」

「まあ、貴様がいいならいいがな・・・多少ムカつくが。」

「そこはエヴァはんも一度は認めたんやから気持ちよう手伝ってや。」

「分かっている、だが、ムカツクものはしょうがない。」

「ウチも気持ちはわかるから、これ以上はよう言いまへんわ。」

「・・・ふんっ。」

エヴァと千草が気持ちを入れ替えるためにお茶に口を付け、  
静かな時間が流れる。

「……ふう、それで、どこでやるんだ？」

術式は私が書いてやるから言え。」

「そうですね……外のお庭を借りてもええやろうか？」

月明かりの下でなんて雰囲気も十分やろう？」

「千草さん、外は雨が降っていますが？」

「ケケケ、ザンネンダッタナ。」

「えゝそんな殺生な。」

「ならば別荘の中でいいだろう？」

用意くらいしてやる。」

「エヴァはん……ほんま、おおきに」

「……ふんっ、私の偉大さが分かったら今後は態度を改める」と  
どだな。」



「……それを自分で言わなきゃいいんだよ。」

「つぐ……」

オチが付いたところでその場は皆で笑って 別荘へ向かうことにした。

「私達は夜まで研究室にいるから姉様達は好きなようにしている。

いいか千草、夜まで余計なことはするなよ？ 絶対にするなよ？」

「エヴァ……それじゃあやれって言ってるように聞こえるよ。」

「う、うるさいっ！ 真面目に余計なことはするなよー!!」

「安心してや、今日はエヴァはんの顔を立って

エヴァはんが想像するようなことはしまへんから。」

「……姉様、信じているぞ。」

「そこはウチに言っんとちやいますか……」

「お前は油断できん……油断すると肝心なところで寝首を掻かれか

ねんからな。」

「ほんまに……」

「マスター、行きましょう。」

呆れた様子の千草と私を置いて、エヴァが茶々丸に引きずられて研究室に行く。

「……ツフフ。」 「……フフ。」

エヴァの様子を微笑ましく思い二人で見合つて笑い、私と千草は庭でお茶の続きをすることにした。

「ほんまに、エヴァはんは可愛らしい人やな。」

「エヴァのああいうところは本当に飽きないね。」

その後も、エヴァとの約束（？）を守つて、私と千草は

夜まで穏やかなひとときを楽しんだ。

『おい、庭園に用意しておいたからあとは勝手にやれっ!!』

日も沈み、夕食も摂りのんびりしていると、不意にエヴァから一方的な念話が入ったので

指示通り、庭園に千草と向かう。

「「なんとまあ……」

庭園に二人でたどり着くと、そこには仮契約の魔法陣が光り輝き

その周りを祝福するかのようになんな花が咲き誇り、満天の星空の元

月明かりが差し込んでいた。

風が穏やかに流れ、花の香りが私達を包む。

「本当に……エヴァは変なところで気を使うんだから。」

「ほんま、最高の雰囲気や……後でエヴァはんにはなんかお礼

をせなアカンな。」

「・・・千草、行こうか。」

私は仕草に向かって手を差し出し、エスコートをする。

「・・・はい。」 / /

千草は私の手を取り、ゆっくりと光る魔法陣に二人で向かう。

歩みを進める間も花の香りを乗せた風が穏やかに私達を撫でていく。

私と千草は何も言葉を交さず、手を握りあい、ただ無言で進む。

やがて魔法陣の上に立ちお互い見つめ合う。

「千草・・・」

「はい・・・」

私が千草の名を呼ぶと、千草は静かに私の前に膝立ちになり、

私を見上げる姿勢になる。

「千草・・・いい?」

「・・・まっとくれやす。」

潤んだ瞳で私の目を見つめる千草が待ったをかける。

「お願いや、ウチのことは気にせえへんでええから・・・」

ただ強引に、貪るようにウチを・・・奪っていつておくれやす。」

「・・・いいよ、私が千草を、奪つ。」

その宣告と同時に千草の後頭部を掴み、強引に顔を持ち上げ千草の唇を奪つ。

「・・・っんふう〜!・・・んっ・・・っう〜!?!?」

「・・・んっ・・・ちゅ・・・ぐちゅ・・・じゅ  
る・・・っ!」

唇を奪った瞬間千草の目が見開き、私はその目を見つめながら

唇を重ね、舌をねじり込み、千草の舌を舐め回し、

唾液を流しこみ、千草の唾液をすすり、口内を蹂躪する。

その間も見つめ合ったまま、徐々に千草の目が淀んでいく。

「んっ……じゅ……る……ちゅ……んぶう……  
ず……ちゅ……」

「……ちゅ……うぶ……ぐちゅ……ちゅ……  
……んっ……ぶはっ……」

私はただひたすら千草の唇と口内を蹂躪し 舌を奪うように啜り付き  
唾液を交換し、千草を汚していく。

その間千草は私の服を掴み、私の舌での蹂躪に耐え、時折身体を震  
わせ

私にされるがままで行為を受け入れ続ける。

そうしてどれくらいの時間がたったか、千草が私の服を掴む力も無  
くなり

手をだらしなく放り出し、私が掴んだ千草の頭を離したら

そのまま倒れこみそうな状態になるが、それでもなお濁った瞳で私を捉え続ける。

そうして千草を味わった後に、千草の唇を開放する。

「……………ぷはっ……………はぁはぁ……………大丈夫……………千草？」

「……………ハア……………ハア……………んっ……………ふ……………はぁ……………ウチ……………」

開放した後千草はその場にへたり込み、肩で息をしている。

足元には光を失った魔法陣と一枚のカード、

周りは風に煽られ空に舞う花びらと、空から差し込む月明かり。

肩で息をしへたり込む千草、それを見下ろす私、なんとも言えない風景だろうか……………

やがて息を整え、落ち着きを取り戻した千草が髪を整えわたしを見つめる。

「ハア〜・・・旦那さんウチ、どないしたんやろ？」

「え？ 覚えてないの？」

「・・・？ ああ ちゃいます、覚えてますえ。

ウチ旦那さんと仮契約したんや・・・ただ・・・な、

ものすごく途中で意識がなくなってしもつて・・・。」

「あゝ、ちょっとやりすぎたかもしれないね・・・。」

「いや、ええんです。ウチがお願いしたんやから。

ただ、もったいない感じがしてもつて・・・あんな凄いのを覚えてへんなんて。」

「あはは・・・。」

千草が落ち着いたようなので、足元のカードを拾い、複製を千草さんに渡す。

「はい、コレ千草のカードだよ。」

「あ、ありがとうございます。」



受け取ったカードを大事そうに胸に抱む千草さん。

私はカードの絵柄を見ると、平安時代のお姫様のような着物を着込み両手で包み込むように石を持っている千草さんが描かれている。

「千草にもアーティファクトが出たようじゃなかったね。」

「旦那さんほんま、ありがとう。」

「……せやけど、着物はええけど、この石みたいなのは何やろうか？」

「なんだろう？ エヴァなら何かわかるかな？」

「とりあえず出してみましょか、え〜と アデアット？」

千草の詠唱により石が呼び出される……が、なんか……すごく普通だ。

「な、なんか……普通に石だね。」

「せやるか？ なんや、ウチにはええ感じの気配を感じるんやけど。」

「とりあえず、エヴァにでも聞いてみようか？ 『エヴァ〜、手が

あいてたらちよつと来て。』」

私と千草、二人で石を眺めながらどんな効果があるのか考えていると、

呼出に応じてくれたエヴァがやってきた。

「なんだ姉様、終わったのか？」

「あ、エヴァ ちょっとこの石を見てよ。」

「ん？・・・って何だ！ この禍々しい石はっ！？」

「?? エヴァにはそう感じるんだ、私には普通の石に見えるんだけど。」

「ウチにはなんや、ええ感じの石に見えるんやけど？」

「どこがだ！！ 恐ろしく禍々しい気配を放っているぞ！」

「茶々丸とチャチャゼロはどう？」

「私には特には、解析しても普通の石のようですし。」

「オレニモ フツウニ イシニミエルナ。」

「人によって感じ方が違うのかな？」

皆であーでもない、こーでもないと話していると鑑定が終わったのか、エヴァが騒ぎ出す。

「おい、コレはアレじゃないかっ!? 殺生石のレプリカみたいな石だ!」

「殺生石ってあの白面金毛九尾の狐の?」

「そうだ、アレの模造品というかそんな感じの石だ。」

「で、なんで人によって感じ方が変わるんやるか?」

「それは多分千草のせいだ。」

「ウチ?」

「そうだ、千草の認識によって性質が変わってるんだ。」

「……? だったら私には無害でエヴァにはすごく有害、

つまり千草はそういう認識だっけって言うこと?」

「詰まる所そんな感じだ、これで千草が私をどう思っているか分かったな。」

「なんというか……敵対?ライバル? そんな感じだろうか?」

「へ〜えらい石なんやな。」

「そうだな、お前に取っては最高の物だろうな。」

「何でですか？」

「その殺生石はお前の呪術の増幅器としての役目がある、

そしてその効果はお前の認識で変わる。……つまり。」

「ウチが嫌いな人ほどその効果は増幅する？」

「そういう事だ、お前が憎めば憎むほど際限なく

その石はお前の術の効果を上げてくれるだろう。」

「………両親の仇が相手やったら………」

「………恐ろしい効果だろうな。」

千草が殺生石を抱きしめて私に向きつれしそくに微笑む。

「旦那さん！ほんまにええもんをありがとう！

これで親の敵討ちも成功間違いなしやっ！！」

「私も千草に喜んでもらえてよかったよ。」

殺生石を抱えてうれしそうにはしゃぎまわる千草。

それを複雑な表情で見つめるエヴァ。

「姉様も厄介なものを出してくれたな……あの石を使って呪われたら

私でもキツイぞ……。」

「あはは……千草には後でちゃんとっておくよ。

エヴァや皆に使わないように。」

「本当に頼むぞ……はあ〜。」

「マスター、元気をだしてください。」

「お前らはいいいよな……あの石の効果が薄そうで……. . . . .つてあのバカっ!!！」

「何やってるんだ!!!!！」

エヴァの声にびっくりしたが、エヴァの視線が向いてる方を見ると

千草が石を中心に魔法陣を書き呪符を並べている。

「おい、千草っ！　　まて、落ち着いて話をしよっつー！！」

すでにほとんど出来上がっているようで、千草は呪文を唱え始めている。

「まて、話しあえば解決できる問題だ！！　姉様が泣いているぞ！！」

「………っ、鋭っ！」

「あゝあゝあゝ~~~~~！！??？」

掛け声と共に千草が呪符を石に貼りつけ呪い(?)の魔法陣を起動する。

「ちよっ！　　まずっ！　　防御障壁全力展開いっ！！」

エヴァが障壁を全力で展開する……が、エヴァに特に変わった様子はない。

千草の方を向くとなにやら怪しい影のようなものが千草に巻き付いている。

「……………？ なんだ？ 失敗したのか？」

「マスター大丈夫ですか？」

「あ、ああ……私は大丈夫だ。」

千草に巻き付いていた影が、千草自信に飲み込まれていく。

「なんだあいつ？ 誰を呪ったんだ？」

「さあ？」 「今ここにいる人ではないようです。」 「オレモ二モ ナニモオキテネーナ。」

「……………千草？……………大丈夫？」

影のような物が身体に入り込んだ千草の様子を見るが、特に変わった様子はない。

「……………ん、ふうく、うまくいったようやな。」

あ、旦那さんお騒がせしました。」

「……………おい千草、今誰を呪ったんだ？ さっさと吐け！」

あわてて千草に問い詰めるエヴァ、かなり動揺しているようだが  
そんなにあの石は効果があるんだろうか？

「落ち着いておくれやす、今は自分を呪ったんです。」

「……は？ ……なんでわざわざそんな事を。」

「どれくらいの効果があんのか確かめてみたかったんです。」

せやけど、この石すごい効果やな、この呪いは掛けたウチにも解け  
へんかもしれへん。」

「バカ！ そんな呪い掛けてどうするの！！」

「旦那さん落ち着いてくれやす、今掛けた呪いは別に悪いことはありません  
まへんから。」

「本当？ 大丈夫でしょうね。」

「現在千草さんの体調には以上はありません、ソプラノ様。」

「大丈夫やって、心配掛けてえろつすんません。」

「本当に、もうやめてよ、こう言うのは。」

「はい 今ウチに掛けた呪いは、

ウチが一生旦那さんのモノで居続けなきゃいけない呪いです。」



「「「「……は(八)?」「」」」

「……まで、落ち着こう。もう一度言え 千草。」

「せやから ウチが一生旦那さんのモノで居続けなきゃいけない呪いです。」

「……なぜそんな訳のわからない呪いを作り、自分に掛けた。」

「ウチの決意表明や。コレでウチはもう旦那さん無しでは生きてられへん」

「……千草……そう言うのは嬉しいんだけど、もうやらないでよ……心臓に悪いよ。」

「はい、この呪いはもう封印や。」

「おい、千草 さっさとその呪いを解け。今すぐだ!」

「ゴメンな、ウチには無理です。」

「ふざけるな! 掛けた貴様がなぜ解けない!」

「ウチにも予想外に強力に効いてしもってな、

石がウチの気持ちを汲んでくれたんと違うやろうか?」

「貴様！ 本当だろな!？」

「何やったらエヴァはんが解いてくれてもええんやで?」

「よく言ったな？ 解いてやるうじゃないか。」

千草を観察し呪いの構造を調べだすエヴァ、千草は黙ってエヴァにされるがままで居る。

「……………おい、ふざけるな、何だこの呪いはっ!!」

お前にこんなに強力な呪いが掛けられるわけがないだろう!!」

「そないな事言うても、できたモンはしょうがないやん。」

「どうしたの、エヴァ？ そんなに強力なの?」

「強力なんてもんじゃない、こんな物今まで見たことがないっ!! 規格外に強力な魔力にでたらめな式、オマケに変な意思まで籠っている。」

どうしてこんなデタラメで成立しているのか理解できん。」

「へへ、この石使っとそんな呪いもできるんだ。」

「おい、千草、貴様間違ってもこの石を私に使うなよ!!」

いいな、わかってるんだろぅなっ!？」

「だいじょうぶやって、使いませんって。

仮に使うてもここまで強力な呪いにはなりまへんから安心してや。」

「約束だぞ! 約束したからな!！」

よっぽど千草の呪いが怖いのか、何度もしつこいくらいに念押しをするエヴァ。

千草もエヴァに掛けるつもりは毛頭ないようで、子供をあやすように

エヴァの相手をし、話しに付き合っている。

何はともあれ、千草と新たに仮契約をし、私の契約者は三人になった。

別荘内で就寝、翌朝 魔法球から出る。

すでに陽が沈み、室内は雨音が聞こえるだけになっていた。

「ん？ コウモリが何か拾ってきたようだ。」

「例の結界の違和感の話？」

「ああ、どうやら異物は・・・4〜5つか4つは反応が弱いが1つは隠しているのか？」

なかなかの魔力のようだが、ジジイ共で十分対処できるだろう。

場所が一つは女子寮内に入り込んでいるが・・・別の場所を囲んでいるな、

千雨や綾瀬が狙いでは無いようだ。」

「じゃあ、千雨達に念話で追加情報だしておくよ。」

「私は一応茶々丸達に話しておく。」

「りょーかい。」

エヴァが茶々丸達の元へ行き、私はその場で千雨達に連絡する。

『・・・そういうわけで、学園内に侵入者がいるから気をつけてね。』

『了解先輩、しかし女子寮内にもう入ってるのか・・・めんどろうだな、』

今日は部屋にこもってることにするよ。

この部屋の結界は硬いから外よりかよっほど安全だしな。』

『ん〜、一応気をつけてね。じゃあ私は夕映の方に連絡するからこれで。』

『ああ、おやすみ、先輩。』

『おやすみ、ちうたん』

「ばっ!?!?.....ち切りやがった.....まったく.....」  
/ /

続いて夕映に連絡する。

side 夕映

『ゆえゆえ〜、聞いてるう?』

「ぶふう〜っ！ な、なんですかいきなり変な呼び方をして！」

『気にしないでゆえゆえ。』

『ちよつと待つです。』 『あいあい。』

「夕映？ どうしたの？」

「何でもないですよのどか、先に入ってて欲しいです。

後からすぐ行きますから。」

「そう、じゃあ先に入ってるね。」

「はい。」

のどかを先にお風呂に行かせてソプラノとの念話の続きに入ります。

『……さっきの呼び方はやめて欲しいです。』

それより何でのようですか？」

『怒らないでよう……それはいいとして、用事はさっきの続報だよ。』

『侵入者の可能性がどうかという話ですか？』

『そうそう、学園内に5人くらい入り込んで、一人はもう女子寮に入り込んでるんだって。』

『何でそんな大事なことを先に言わないですか！』

もう のどかを一人でお風呂場に行かせちゃったですよっ！！』

『あゝまずいね、お風呂場で違和感のない装備をして』

付いて行ってあげたほうがいいかもね。』

『もちろんです、とりあえず指輪と髪留めを魔法触媒に変えて行くです。』

私は話しながら、引き出しからソプラノに貰った魔法触媒を取り出し急いでのどかを追う。

『エヴァが言うには強い反応でも学園の先生達で対処可能な強さだから』

大丈夫らしいんだけど、夕映の実戦はこれが初めてになるかもしれないから』

慎重に落ち着いてね。』

『分かったです!』

『……チャチャゼロよりはましな相手だと思っから。』

『嫌なことを思い出させないでほしいです!』 1111

あの悪魔人形の事なんて早く忘れたいんですっ!!

『一応サポートに回るから今回は夕映ひとりで頑張ってみて。』

『……ソプラノは来てくれないんですか?』

『ちゃんと見守ってるよ、でも、夕映もいつかは経験しないといけないことだから……』

今回は……夕映を信じてるよ。』

『分かったです、私がソプラノを守れると証明するですよ!』

『……信じてるよ、夕映。』

『安心して見ててほしいです。ソプラノ。』

『うん、じゃあがんばってね。』

『はい、またです。』



私は急いで浴場の のどかの元へ向かい駆け出す。

「きゃあ!？」 「何コレー!？」 いやあ〜ん ぬるぬる〜っ!  
「?」

「っ!？ 遅かったですか!？」

浴場の方からクラスメイトの悲鳴が聞こえてくる。

私はそのまま飛び込もうっ……

『敵と相対するとき正面から当たろうなんて言うのは愚の骨頂。  
特に貴様のような非力な魔法使いは力でなく技や知恵で当たること  
を常とせよ。』

(そうでした! 私は非力な魔法使いなんです、正面から飛び込んでもなにもできません。)

私は着衣のまま浴場の入り口脇へと駆け込み覗き込む。

湯けむりで多少視界は悪いが・・・何か液体のような物に包まれたのどか達が

外に出ていくのを確認したです。

私は一旦浴場から出て外へ向かい、液体に包まれたのどか達を追っていった。

神様から頼まれたお仕事。

その27（後書き）

27話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その28

side 夕映

麻帆良学園 女子寮近郊 夜

攫われたのどか達を追って、私は木々に隠れながら見失わないように追っていく。

ちょうど雨音が私の足音を消してくれるので、

隠密行動がまだ苦手な私にはちょうどいいです。

そうしてしばらく追っていくと、

広いステージのような場所にのどか達は連れられていった。

(ココは大学部のステージですか?)

ステージ脇の裏口から入れないか調べる……鍵がかかっている  
ように

ここから入るのは無理そうです。

そうして隠れて近づける場所を探していると、黒い帽子でコートを  
着た初老の男が

……神楽坂さん？ と液体のような物に包まれた刹那さんと那波  
さんを連れてきた。

（これはまずいです……人数が多すぎて私一人じゃ運べないです。  
）

そうして様子を見てみると、液体のようなもの それぞれから 小  
人？ のような

小さい少女達が現れ初老の男の元へと向かう。

（ますます、まずいことになったです。 敵が4人も居て人質が7  
人……最悪です。） 1111

何か話しているようなので、少しでも情報を仕入れるために音に集  
中する。

「私達特製のその水牢からは出れませんヨ。私あめ子。」

「すらむい。溶かして食べられないだけありがたいと思いな。」

「ぷりん・・・」

「一般人が興味半分で足突っ込むからこーゆー目に遭うんだぜ。」

「ま、強力な魔法でも使わない限りこの水牢は中から絶対壊れねーヨ。」

「

・・・！ 強力な魔法を使わないと 中からは破れない。

ならば 外から ならばどうですかね・・・。

「こんなことをして何が目的なのよ！」

「なに たいしたことではない、仕事でね。」

『学園の調査』が主な目的だが・・・

『ネギ・スプリングフィールドと』 キミ・・・ 『カグラザカア  
スナが今後どの程度の

『驚異になるかの調査』も依頼内容に含まれている。」

（あゝあゝ やっぱりネギ先生ですかっ！ 何かあると大抵あの先生ですね！！）

オマケにアスナさんも仲間とは、のどかには悪いですが今後ネギ先生は

（ 要注意人物に指定させていただきます。）

「……が あの時からどの程度使える少年に成長したかは、私自身 非常に楽しみだ。」

おっと話を聴き損ねるところでした、

どうもあの初老の男とネギ先生は知り合いのようですね。

（ん？ 空が光ったです？ ……ってネギ先生！？ ……と誰？）

空から魔法の射手が降ってくるが 初老の男は片手で受け止める。

「あう……！？」

(状況も確認せずにいきなり攻撃って、何考えてるんですか、ネギ先生！)

……ん？ 何で神楽坂さんが反応するんですか？ それにあの首飾り……光ったです。)

もう少し情報が必要なようです、それにネギ先生が来てくれたおかげで

人数も増えてきたし敵の4人もネギ先生に集中しているようなのでのどかを助けやすくなったです。

「貴方は一体誰なんです！？ こんなことをする目的は！？」

「いや、手荒な真似をして悪かった ネギ君。

ただ人質でも取らねば 君は全力で戦ってはくれないかと思ってね。

私はただ君達の実力が知りたいだけだ。

私を倒すことができたら彼女たちは返す、条件はそれだけだ。

これ以上話すことはない。」

先程の話通り、では、目的は決まりでしょう。



ですが勝てなければのどか達を返さない、やる気をださせる口実だとも言えますが

言葉通りの可能性もあります、のどか達の救出はやはり必要です。

私が必死に敵の情報と のどか達を助ける案を考えているのに

ネギ先生達はどちらが先に戦うかでモメる始末・・・

まあ、後半 ネギ先生が一緒に行こうと誘ってる所はいいですが、

もう一人の方はあてに出来なさそうです。

そうしている間にも少女たち3人がネギ先生達襲いかかる。

初撃こそ食らったものの、ネギ先生達は近接戦闘で少女たちを押し  
ていく。

（あの子達・・・打撃が効いてないですね。 ネギ先生達がスライ  
ムだと

言っているようですから打撃は効かないでしょう・・・

しかし私に取っては力モです。 炎の魔法ならば行けそうです。）

ネギ先生と少年Aはスライム娘達を蹴り飛ばし、初老の男の方へ向かう。

すぐに立てなおしたスライム娘達だが少年Aが分身（？）して迎撃

ネギ先生が魔法の杖と瓶のようなものを持って初老の男へ攻撃するようだ。

「はああ！」

ネギ先生の叫び声と共に、無詠唱で杖から魔法の射手が発射される。

初老の男は片手で受け止めるが懐に入り込んだネギ先生が、

小柄な体系を生かした歩法で背後に回る。

（ああいう所はうまいですね、魔法の射手をうまく目くらましにしています。

私にもアレならできそうです、要練習ですね。）

背後に回ったネギ先生が瓶のようなものを初老の男に向ける。

「僕達の勝ちです。」

「ネギ！」

「封魔の瓶！！」

ネギ先生の詠唱と共に初老の男が瓶に吸い込まれていく……が

「え……ひゃ……あああうっ！！？」

アスナさんの悲鳴と共に、すぐに初老の男は瓶から出てくる。

「アスナさん！？」

え……な 封印の呪文がかき消された！？」

「ふむ……実験は成功のようだね。」

放出型の魔法に対しては完全だ。」

（やはり……！）

アスナさんに掛けられた首飾りを元に魔法の効果が消されている。

アスナさんが反応している所や、修学旅行の話、のどかの話、ソプラノの話

これらを総合すると、アスナさんの魔法無効化能力を首飾りを經由して

あの初老の男が使えるということですね。

私が思考している間に初老の男が本気で戦う気になったようで

ネギ先生と少年Aを圧倒していく。

二人も善戦しているが、遠距離からの魔法がすべて消されているのできついです。

初老の男が私の推論を裏付けするかのようになり、アスナさんの魔法無効化能力について

ネギ先生達に語りだす。

その様子からも初老の男が本気でネギ先生潰す気はなく、

力を見るためだということが分る。

「さて、私に対して もう放出系の術や技は使えないぞ？」

男なら・・・拳で語りたまえ！」

そう言い放つと初老の男はネギ先生に攻撃を再開、しかしネギ先生もうまくかわしている。

その間にネギ先生の使い魔のオコジョがアスナさんに向かって行くが、

あっさりとスライム娘に捕まる。

ネギ先生達も初老の男に攻めつづけられ、徐々に体力を奪われる。

（まずいですね・・・あの初老の男強すぎです、私の火力ではどうにもできません。）

今私にできるのは・・・のどか達を逃がし、学園の先生たちに連絡することでしょうか。

あとはアスナさんの首飾りを外せばネギ先生達も戦いやすくなるですね、

そうならば時間稼ぎもお願いできそうです・・・（

私のできることを確認、

せめて刹那さんが目を覚ましていてくれればよかったんですが、ここが潮時です。

私が入スナさんの首飾りを外すに動こうとした……その時！

ネギ先生達の方から凄い魔力が溢れ出している。

その方向を確認すると、初老の男は帽子を取り顔は人間ではない異形の者。

その顔を見ているのか、ネギ先生は明らかにおかしい様子。

「あ……あなたは……」

「そうだ、君の仇だ　ネギ君。」

あの日、召喚された者達の中でも　ごくわずかに召喚された爵位級の

上位悪魔の一人だよ。」

あの悪魔がネギ先生の村を襲った一人ですか……

話は続いているようだが、ネギ先生が今にも突っ込んでいきそうな感じですよ。

コレはまず……いや！ ココが私にとっての勝機ですっ！！

悪魔の話が終わりネギ先生が動くその直前！！

「戦いの歌！ 続いて 魔法の射手 火の6矢ですっ！！」

横合いから思いっきり殴りつける。

非力な私が戦闘で最大の効果を発揮する唯一の方法！

私の放った火の矢が2本ずつ水牢にあたり水牢が弾ける、

それに気を取られたスライム娘を無視して神楽坂さんの首飾りを筆  
り取る。

「っ！？……あうっ！！ ……って夕映ちゃん！？」

ネギ先生は私の出現に気を取られた悪魔を一方的に殴りつけている。

（時間がないです、ネギ先生は放っておいて私のやることをやるで  
す。）

「続いて魔法の射手　火の2矢！！」

自身の主（？）の悪魔が一方的にやられ、いきなり現れ水牢を破壊した私に

あっけに取られ判断に迷っているスライム娘達をよそ目に、アスナさんの拘束を

魔法の射手で解く。

「のどか！！　封魔の瓶を私に！！　アスナさん、古さん！！　那波さんと刹那さんを！」

あとは皆逃げて他の先生達を呼んでくるですっ！！」

ネギ先生達の方は暴走するネギ先生を少年Aが正気に戻している最中。

スライム娘たちはバラバラに動く私達の誰を狙っているか混乱中。

その際に　のどかが封魔の瓶を取り私に渡す、アスナさんと古さんも指示通りに

動いてくれているようで、那波さん、刹那さんを抱えている。



混乱しているスライム娘は丁度良く3人固まってどうするか相談中。

（今まで最悪でしたが、今日は今この瞬間が最高にツイてるですね！）

スライム娘たちに向かって瓶を構えネギ先生のさっきの詠唱を唱える。

「封魔の瓶!!」

「いやあぁ〜んデスウ!」 「また瓶の中カヨ〜ツ!」 「まあ悪役デスシ・・・」

これで敵は一人! 分散して逃げれば誰かが魔法先生を呼べるです。

「今だ!ネギ君!!」

（って、ちよ〜〜〜と待つですっ!朝倉あぁ〜〜〜っ!!）

朝倉のバカ娘がネギ先生を煽って敵を倒すように指示を出す。

また、それに乗ったネギ先生と少年Aが調子に乗って悪魔に向かって突っ込んでいく。

6人に分身した少年Aが突っ込むが、悪魔に迎撃されネギ先生に悪魔が向かう・・・が

分身の中に1体本体がいたようで、

悪魔の攻撃を堪えて下方から悪魔の顎めがけて一撃を放つ。

「じ・・・おっ!？」

「ネギ!」

「うん!」

悪魔の上半体が浮いたところへネギ先生の

無詠唱魔法の射手を肘打ちに乗せて悪魔に打ち込む。

そのままネギ先生は続けて魔法の詠唱を開始。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 来たれ 虚空の雷 薙ぎ  
払え」

「ぬづうっ!」

「うわああっ 雷の斧!」

轟音と共に雷が悪魔に落ち、悪魔はその場に崩れ落ちる。

私はその間に威力は低いが広域を火で包む魔法の詠唱準備に入る。

エヴァンジェリンさんに叩き込まれた 「相手が死ぬまで油断をするな。」 と言う

教えに忠実に動く・・・まるで人形のように。

（あのお仕置きはもうたくさんです! ちゃんと止めを刺すですか  
ら、

お仕置きはいやですう〜!!） 1111

ネギ先生と人間の姿に戻った悪魔は何か話しているようですが

お仕置きに怯える私の耳には何も入ってこない。

ただ悪魔が立ち上がったなら魔法を打ち込むことだけに集中するです。

「ふ・・・ふふははは ネギ君、君は飛んだお人好しだなあ、

やはり戦いには向かんよ。」

ビクッ！

「・・・」

危ないです・・・危つくネギ先生ごと焼くところだったです。  
1111

「コノエコノ力嬢・・・おそらく極東最強の魔力を持ち・・・  
修練次第では世界屈指の治癒術師ともなれるだろう。」

成長した彼女の力を以てすればあるいは・・・  
今も治療のあてのないまま静かに眠っている村人達を直すことも可能かもしれないな。

まあ、何年先になるかは わからんがね。」

「・・・！」

「ふふ・・・礼を言っておこう ネギ君。」

いずれまた成長した君を見る日を楽しみとするよ。

私を失望させてくれるなよ少年……

……そしてその名も知らぬ少女よ。」

悪魔が私の方を向いて語りかける。

「私に気配も察知させず虎視眈々と勝機を狙い、

そして状況をひっくり返したその知謀、見事。

君のその才に敬意を表して 君の封印したスライムの使い魔3体を君に進呈しよう。

君ならきつと私以上に彼女たちを使いこなしてくれることだろう。」

「……全く、いい迷惑です。」

「ふふ……はははっ！ そう言うてくれるな、最後に君の名を教えてくださいませんか？」

「……魔法使いが簡単に名乗るなど呪術の師匠に教えられています。」

「ははっ、いい師匠を持っているな。ならば次に会った時に聞くとしよう。」

できたら君のような才ある娘の使い魔として召喚されたいものだ。

ふふふ……あははははっ!!」

最後にそう言っつて悪魔は姿を消したです。

刹那さんを起こし、那波さんだけ寝かせたままで

皆がネギ先生の元に集まり無事を喜んでいる。

そんな中、私は悪魔が消えたのを確認して、周囲も確認。

敵が完全に居ないことを確認してネギ先生の元へと歩いていく。

#

「皆さん無事でなにより……あ、夕映さん!

すごかったですね夕映さん! いつの間にあんな……え?」

ゴスツ!!

殴った、ネギ先生を思いつきり、魔法の身体強化がある状態で殴ったです。

「ネギ先生は何を考えているんですか!!」

状況も確認せずにいきなり魔法の攻撃!

敵を前にして味方と口論! 敵の言葉に乗って暴走!

せっかく私が皆を助け、分散して逃げて味方の魔法先生を呼びに行こうかと

思っていた時にそのバカ倉の指示に乗って格上の相手に正面から立ち向かうなど!

負けたらどうするつもりだったんですかっ!!」

「おい、小さいねーちゃん! 勝ったからええやんか。」

「黙るです! チビガキ!!」

ゴスツ

余計な口を挟んだ少年Aの頭を殴りつける。

地面を転げまわり悶絶している。

「そんなものは結果論です!! あそこでネギ先生がうまく敵を引

きつけつつ

結界の外へ誘導してる間に私達が分散して逃げて、魔法先生達を呼んだほうが

多くの方が確実に助かるのは分かってるはずですよ！　どうなんですかネギ先生！！」

今の私は普段の私からは想像できないのか、

寝ている那波さん以外、皆黙ってバツの悪そうにしている。

「は、はい！　そのほうが確実にだと思います！」

「ならば何故、戦闘の素人であるバカ倉の口車に乗ったのですか！！」

「そ、その……アレは……つい……」

「ついじゃないですっ！！」

ゴスツ！

「つつ~~~~~！！？」

「仮にも教師が　つい　で皆を危険にさらしてどうするんですか！！」



このことは学園長にも報告しますから覚悟するですよ！

しっかり戦闘時の心構えでも教えてもらうといいです！！」

「はい！ 了解しました！」

「それから バカ倉あ！！！」

「あ、あの夕映・・・ちゃん、私は朝倉で・・・」

「黙るです！！！」

「はいっ！」

「バカ倉は何故あそこであんな指示を出したんですか！！」

貴方は何か戦闘の訓練を受けたり軍の士官学校にでも通っているんですか？」

「いいえ、特には何も・・・」

「だったら素人は黙ってるです！！」

あそこでもしネギ先生が負けたらどうするつもりなんですか！？

のどかや他の皆にに何かあったらどう責任を取るつもりなんですか！？」

「・・・いや、アレは・・・ノリとつか。」

「ノリで皆の命を危険に晒したんですかっ!？」

アホですか!？ バカなのですか!？ 死ぬのですか!？

この事はきつちり学園長に連絡してお灸を据えてもらうつから覚悟するです!！」

「はい!! すいませんでした!!！」

「まったく! このかさんの護衛はどうなってるんですか? 刹那さん。」

「いえ、あれは……お風呂場だったので……」

「……それは言い訳になるんですか? 少し頭冷やしますか?」

「……..なりません。 もう十分冷えました。」 1111

「貴女、私より強いですよね? この中では一番強いはずの貴女が率先して捉えられてどうするんですか!

このかさんの護衛だというなら

風呂場でもナイフの一本、呪符の1枚でも持ち込んでいるんですか?」

「いいえ……流石にお風呂場には……」

「それでこの様ですか?」

「……なんとも言い訳の仕様もございません。」

「次は無いと思ってほしいです。」

「かしこまりました！」

私は順番に一人づつ全員を睨みつける。

「そこで寝ている那波さん意外全員魔法に関係しているんですね？  
今後はもう少し気の入った訓練をしてほしいです。

この世界がどれだけ危険なものかよく分かったはずですが、

今回は運が良かったですが、この中の誰かが死んでいても不思議じゃなかったんですよ？

そのあたりをもう少し考えて訓練して欲しいです。」

「ハイ！ わかりました！」

「分かってくれたならいいです、今日はもう帰りますよ。」

「はい！」

こうして私の初の実戦は無事に済んだものの 頭の痛い結果となつたです。

side ソプラノ

「アツハツハツハツ！！ 見たアレ？ 夕映が軍隊の教官みたい。」

w

「内心ハラハラ半ばオロオロだったようですが・・・無事でよかったですねマスター。」

「茶々丸、お前な いい加減その方向のツツコミはよせ。」

まあ、夕映の成長具合とぼーやの潜在能力が見れたのは

思わぬ収穫だったよ。 ヘルマンとやらには 礼を言わねばな。

面白いものも見れたしな。 クク。」 w

「茶々丸、録画してた？」

「はい、最高画質で音声もちゃんと拾っています。」

「流石茶々丸、相変わらずいい仕事よ。」

「恐悦至極。」

「後でジジイにも見せてやろう、少しは訓練内容も考えるだろう。」

W

「それにしてもあの悪魔、夕映に可愛い使い魔もくれたようだし、いい経験になったよ。」

「・・・あの娘達可愛かったな、私に出来ないかな？ 夕映。」

「姉様がくれといえは喜んで渡すと思うが、やめておけ。」

「アレは綾瀬が勝ち取ったものだ。」

「それにアイツにはちょうどいいだろう、打撃の効かない前衛だ、多分斬撃も効かないぞ。」

「しょうが無い、スライムプレイはお預けされておくか。」

「姉様が攻められる方になればいいんじゃないか？」 W

「い、嫌だよ！ スライムに処女奪われるなんてっ！！」

「マスター、ソプラノ様、変態的な会話は外ではお控えください。」

「「す、すみません。」」 ーーー

「何はともあれ、夕映はすごかったね」

「ああ、自分の手札をよく理解して最高に生かせる場所でカードを切ってきた。

アイツは魔力は人並みだが知恵で何倍もの効果を出す。

実に鍛え甲斐があるな！　クククッ！！」

「……夕映も明日から大変だ。

エヴァに目をつけられちゃ。」

「フッフ、綾瀬　夕映っ！！　今こそ貴様を認めてやるよ、

私がどこに出しても恥ずかしくない立派な悪の魔法使いに育て上げてやるぞ！！

綾瀬夕映っ！！　　アーンハッハッハッハッ！！」

「マスター、近所迷惑です。」

「むう、す、すまん。」

こうして夕映の初めての实战は見事勝利で終わり、  
その賞品に可愛いスライムの使い魔3人と、  
エヴァに本格的に目をつけられるという結果で終わった。

後日 別荘内

「な、何でですかっ！？ 昨日より一気に修行の難度が上がってる  
じゃないですかー！！」

「ハツハツハ、綾瀬夕映！ 貴様の才はその程度じゃないだろう？

さあ、この攻撃を躲して見せるー！！」

「む、無理ですー！！ あたり一面氷漬けにする魔法なんて回避しよ  
うがないですっー！！

いや、いやあああつああ〜〜つ！ 助けてです ソプラノお〜  
っー！！」

少し離れた場所でお茶をしている、私と千雨と千草。

「あゝ・・・とうとう綾瀬も通過儀礼を受けたか、意外に早かったな。」

「ウチもこないだアレ やられましたえ。」

エヴァはん無茶苦茶やりおるから、ほんま堪忍して欲しいわ。」

「まあ、アレもエヴァなりの愛情表現なんだよ。」

あ、ホラ すらむい あめ子 ぷりん おいで」

呼んだら素直に私の元にやってきて、私によじ登る3人。

「ホラ、ジュース飲む？ それともこっちのミネラルウォーターの方がいい？」

「水をクレ」。」「私も」。」「・・・じゅーす。」

「あゝもう この子達可愛いな」

「ホラ、水だぞ、ちゃんと冷やしてあるぞ」。

「ほらほら、こっちはジュースやで、誰も取らへんからゆっくり飲むんやで？」



氷漬けになった主を放って私達の所でお茶を楽しむスライム娘達。

新たな家族を迎え、今日もエヴァ家は平穏であった。

「さ、寒いですう〜。

なんで誰も助けしてくれないんですかあ〜!!

ソプラノあ〜、助けて欲しいですう〜。」

神様から頼まれたお仕事。

その28（後書き）

28話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その29

麻帆良学園都市内 エヴァンジェリン邸 放課後

先のヘルマンによる学園都市、女子寮襲撃事件により警備体制の問題が発覚し、学園都市所属の魔法使い一同が特別訓練を実施。

なお、この訓練は時間の関係から魔法球で行われたが、

一部の魔法使い（女教師など）から抗議の声が上がったが、封殺された。

ネギ先生の関係者一同も、再度 魔法の隠匿や、

魔法の世界の危険性に着いての座学や訓練を追加。

さらに一部の人間（ネギ先生、朝倉、桜咲）には特別訓練や授業が追加された。

「まあ、こんな感じで学園長達も 今回の事件は結構重く受け止めてるらしいよ。」

「……あ、コレ イチゴが美味しい。」

「実際侵入されていていように遊ばれた形だからな、

コレが暗殺だったら見事成功していただろう。」

「……ん、このロールケーキ スポンジがしっとりしていていいな。」

現在エヴァ家、居間では 私 エヴァ 茶々丸 チャチャゼロ 千草 で、

新しいケーキの試食会を兼ねて、先の事件についての話をしている。

「今日朝倉さんが妙に元気がなかったのはそれが原因ですか。」

「そうみたいだね、夕映が大激怒してた様子の動画を学園長に見せてやったら

その日の内に呼び出されてたからね。」

「あいつにはいい薬だが……どうせ数日で忘れるだろう。」

・・・茶々丸、このロールケーキもう一切れだ。」

「はい、マスター。」

「朝倉さんもだけど、他のネギ先生のメンバーも笑ったね、

昨日のエヴァのシゴキで目の下に隈作った夕映が教室に入ってきた瞬間に

皆 綺麗に立ち上がって迎えてたからね。」

「アレは笑ったな。」

「本屋ちゃんなんか一緒の部屋でどうしてるんだろっ?」 W

「ずっと正座で居るとか、布団に引きこもってるとか、そのあたりじゃないか?」

「ウチも見てみたかったわ、夕映はんの怒ってるどころ。

あ、このモンブラン少し甘さがたりへんな。」

「今度茶々丸に動画を見せてもらおうといいよ、アレは一回は見ておいたほうがいいね。」

「茶々丸はん、お願いできるやるか?」

「わかりました、いつでもおっしゃってください。」

しばらくケーキを食べながら夕映の勇姿の話で花が咲く。

夕日が窓から差しこみ始め、

テーブルに出されたケーキも一通り食べ終わり、話の種もできった  
辺りで

不意に千草の表情が暗くなる、その様子を見た皆の口が閉じ

千草の次の言葉を待つ。

「・・・すんまへんな、少し旦那さんにお話があるんですけど。」

「なに？ 千草。 言いつらい話？」

「少し暗い話やし、空気読めへんようで申し訳ないんやけど・・・」

ウチの仇討ちの話なんです。」

千草の仇討ちの話、その言葉を聞いてエヴァの表情が少しだけ険し  
くなる。

「準備が整ったの？」

「はい・・・旦那さんとの仮契約のおかげで、アーティファクト言  
うんですか？」

えらい大層なもんもろうたおかげで　すぐにも実行に移せそうです。」

「・・・アレか。　それで？」

「いつやるんだ？」

「できたらすぐにでも・・・と言いたいんやけど、

相手が魔法世界におるんが大半なんで向こうに行かなあきまへん。

それで、旦那さんには少しお暇をいただきとう思いました。」

「ふん・・・貴様が居なくなるのは私としては歓迎したいところだが・・・」

それには及ばん。」

「・・・どういづことやるつか？」

「貴様の仇討ちに関しては私も手伝うことになっている。

主に移動に関してだな。」

「エヴァには魔法世界で千草の仇が住んでる都市に

転移魔法のマーカをつけてもらってあるんだ。

実際マーカを付けたのはエヴァじゃないけどね。

指定の場所に移動するための転移魔法をエヴァに使ってもらおうように頼んであるんだよ。」

千草がエヴァを見つめ困惑の表情を見せる。

「せやけどそこまでしてもらおうたら・・・それにエヴァはんにまで・・・。」

「私は約束は丁寧に守るようにしてるんだ。」

それに千草がいないと私が困るし。

そういうわけで早めに終わらせて千草には私のお世話をしてもらえないとね。」

「旦那さん、エヴァはん・・・。」

「そうだな・・・次の週末の二日間が終わらせるか。」

呪うのにそれほど時間はかからないんだろう?。」

「え・・・あ、それは大丈夫です。石を使えば呪い自体はすぐ終わるよって。」

せやけど・・・ほんまにええんですか?。」

「何を気にしているか知らんが、恩に感じているならば」



帰ったらお前にできる最高の京料理でも作れ。」

「は……はいっ！ 任せてや、最高の料理をご馳走しますえ！」

「それじゃあ、今週末は魔法世界に行くということだ。」

「……そうだ、茶々丸はどうする？ 連れて行くの？」

「いい機会だから2日掛けてしっかりメンテナンスしてもらおうか？」

最近簡易の整備しかしてないだろう。」

「ここ最近は何易整備のみです、マスター。」

「そついう事ならちょうどいい、後で超に連絡しておこう。」

「オレハモチロン ツレテイクンダロウナ？」

今までずっと黙っていたチャチャゼロがいきなりしゃべりだす。

「寝てたんじゃないんだ。」

「キュウニクウキガ カワツタカラナ メガサメタ。」

「まあ、お前は付いてくればいいのか。」

千草の護衛でもしている。」

「キツネオンナノ ゴエイカ? マアイイカ テメーノノロイヲ  
ミセテモラウゼ。」

「あんさんに見せるために呪うんちゃうんやで・・・まったく。」

「よし、茶々丸は外出時の着替えの用意をしておけ。」

「はい、マスター。」

「あ、旦那さんの分はウチがやりますえ。」

「・・・・・・・・それはいいんだけど、下着を女物だけにはしないでよ。」

この間それで凄い恥ずかしかつたんだから。」

「千草、姉様の下着は全部女物でいいぞ。」

「かしこまりました。」

「ち、ちよつとお~~~~!?」 / /

思わぬ展開で週末の予定が決まったが、

千草の仇討ちが早く終わるのはいいことだと思つので

今週中で終わらせてるように・・・・・・エヴァと千草に頑張っても

らおう・・・

今回私に出来ることは何も無い事に気がついた・・・ 111

Orz

麻帆良学園女子中等部 3 - A 午後

最近 3 - Aを除いたクラスの様子がピリピリしてきている。

何事かと思い千雨に聞いたところ中間試験が近いということだ

試験勉強に余念が無いようだ。

「千雨は試験勉強とかしてる？」

「私はそんなにしてないな、最近は何だか特別な点取ろうと思ってないし。」

「前はあんなに一生懸命だったのに・・・どこで教育を間違えたのかしら？」

「先輩は私の母親か？」

まあ、もう少し成績上げてもいいかと思うんだけど、

最近は専門的な知識ばかりに偏っちゃて。」

「千雨はそんな感じしますよね。」

「……まあ、いい方に受け取っておくよ。」

「エヴァは……言うまでもないね。」

エヴァの方を見てテストについて聞こうと思ったが……やめた。  
幸せそうな顔で寝ている。

エヴァはそのまま健やかに育って欲しい。

「そっいえば先輩、今週末どこかに出かけるんだって？」

「ええ、少し外国の方に用事がありました。」

「外国……？ ああ、『外国』ね。また急な話だな。」

「でも、2日ですぐ帰ってくる予定ですから、月曜は普通に登校しますよ。」

「そうか、まあ、気をつけて行ってきてよ。」

「はい、何かおみやげを用意しますね。」

「なんか悪いな。でも期待はさせてもらっよ。」

「フフ わかりました。」

私達の話が少し聞こえたのか、

離れたところで本屋ちゃんや早乙女さんと話している夕映が、

こちらをチラチラと見ている。

『ちゃんと夕映にもおみやげを用意するから安心してて』

「ち、違っです!」

「・・・? 夕映?」 「? 何が違うの?」

「あ、・・・すみません、少し考え事をしていたんです。」

「そう?」 「・・・? スンスン こ、これは! ラブ臭!」  
「?」

「訳の分からないことを言っんじゃないです。」 / /

我が3 - Aはテスト前でも平和一色だった。

季節の変わり目で天候の変化が激しく、ジメジメとした梅雨が近づ  
く中、

学園では中間試験に向けて生徒が神経を磨り減らし、

教員もテストの作成や事務に追われ同じく精神を疲労させている。

そんな中でも我が3 - A、とりわけエヴァ家に入出入する面々は

中間テストのことなどお構いなしに、いつも通りの日常を過ごして  
いた。

そして来る週末。

千草との約束を果たす為、私とエヴァ、チャチャゼロを率い、千草  
は魔法世界に旅立つ。

「ナー アネヨ、オヤツハイクラマデダ？」

「おやつは1000円までだよ、チャチャゼロ。」

「チーズハ オヤツニハイルノカ？」

「ツマミは今回は入りません。」

「……馬鹿やってないでさっさと来い！」

ゲートまで転移して、魔法世界に行くだけだろうが。」

「……旦那さんにチャチャゼロはん、もう少し緊張感を持ってくらはりませんか？」

茶々丸はすでにメンテナンスのために超の元へ行き、

私達もこれから魔法世界へ出発しようとしていた……

「せっかく千草のために緊張をほぐそうとチャチャゼロと頑張ってるのに……」

「嘘をつけ、姉さま達は素でやってるだろう。」

「……はあ、ほら、行きますえ。」

颯爽と玄関から出て歩き出す千草。

「……一人でどうやって行くつもりなの？ 千草。」

「……」 // //

「……お前まで姉様達のペースに飲まれてどうするんだ。」

視線を外し、赤面して戻ってきた千草に 私たちは掛ける言葉もな  
く、

エヴァは転移魔法を使い、私達をゲートに転移、そのまま魔法世界  
へ転移した。

魔法世界   メガロメセンブリア   郊外某所

「ここが魔法世界ですか、なんや変わった建物が見えはりますね。」



「千草は昔来たことがあるかもしれないと思ってただけだね。」

「そうやね、小さい頃に来たことはあるかもしれないけど」

覚えている記憶には無いですね。」

ここからだともMMの町がある程度見渡せる。

かなり高い建造物に、所々で飛行船(?)のようなものが飛んでいる。

海沿いの街なので潮風の匂いもする。

「おい、観光はあとでもできるんだ、さつさと用事を済ますぞ。」

「そうだね、ここを合わせて3箇所だっけ?」

「はい、同じ都市に居れば 大体呪いは届きます、リストだと3箇所済みますえ。」

それにこの都市なら中に入らなくても大丈夫そうや。」

「ならばさつさと結界でも敷いてここを終わらせるぞ。」

「エヴァと千草は準備してて、私はここの知り合いに連絡入れておくから。」

「クルトとか言う奴か?」

「そうそう、近くまで来たからね。」

それに話を通しておけば、便宜も効くだろうし。」

「まあ、その辺は姉様に任せるとしよう。行くぞ千草　チャチャ  
ゼロ。」

「はい、行きまひよか。」　「オウヨ。」

エヴァと千草　チャチャゼロが人目の付きにくい場所へ移動し、  
私も付いて行きながら念話でクルトに連絡をとる。

『幼女愛玩癖のあるクルト・ゲーターさん。』

聞こえていたら返事してください。』

『……失礼な捏造はやめて下さい。』

念話は盗聴される可能性だってあるんですよ。

それに私は年上が好きなんです。』

『ごめんごめん、クルトはアリク　『何の用でしょうか?』　……  
怖いよ?　なんか……』

『簡単に要件だけ済ませるよ、今から例のC・Aの件でMMで行動

を開始します。

次に新オスティア、アリアドネーと移動し用事を済ませるのでよろしく。」

『とうとう実行ですか。 わかりました貴女なら大丈夫だとは思いますが』

MMでなら何かあったときはコチラで処理しておきます。』

『お願いね、あと終わったらクルトの家に顔出すから泊めてね、宿代もバカにならないし。』

『……ちゃんと変装して来てくださいよ。』

『了解、妙齡の美女に変装していくよ。』

『………来ないで結構です。』 #

『じゃあまたね〜。』

「はぁ………あの人………全く。」

MM郊外の林に私たちは移動し、結界を敷いて

千草は呪いの準備を始める。

「チャチャゼロー、チーズ少し分けてくれない？」

「オレノチーズハ タカクツクゼ？ ポテチ ヒトツカミダ。」

「ん、商談成立ということだ。」

「・・・姉様、だらけ過ぎじゃないか？」

「しょうがないよ、私何も手伝えないんだもん。・・・特に魔法関係は。」

「・・・拗ねるなよ、姉様。」

そうしている間にも千草は着々と準備を進めていく。

陣を書き、符を並べ、縄を組み、人形を配置する。

私達はしばらくその様子を眺めていた・・・

「ん、コレで準備は整いました。」

「少し人形が多いね。」

「そうなんです、この街にほとんどの相手が住んでるんで

どうしても多くなってしまっんです。」

「そっか。」

あ、呪いの内容は・・・聞かない方がいいか。」

「そうですね、聞かれると効力が落ちてまうんで。」

旦那さんには聞いてもろうてもええんやけど、今回は堪忍してください。  
い。」

「いいよ、今回は千草の好きなようにしていいよ。」

「せやけど・・・ほんまにええんですか？」

千草が思いつめたような顔で私を見つめる。

「ん？ 何が？」

「仇討ちとは言え、これやってしもうたらウチは人として最低の外道になってしまうやろ。」

そんな女を旦那さんの手元に置いておいてええんですか？」

「そんなことは気にしなくてもいいよ。」

私はそれも踏まえて千草の願いを叶える助けをし、ここまでの準備

を重ねた。

すでに同罪だよ？ それにこの方法で千草の願いは叶うんでしょう？」

「……確かにこの方法なら確実に両親の仇討ちになるやる……せやけど……ウチは……汚れたウチを旦那さんに捧げとくない。」

「じゃあ……止める？」

「無理や……コレをやめたらウチはウチでのうなってしまう。」

「ならいいよ、私は千草が自身を汚れたと思っていても気にしない。」

その想い事 千草を貰う。」

「……せやけど……」

悩む千草、私にはどうしてあげることできない。

これは千草が自分で決めなければいけない問題だから。

「おい、天ヶ崎 千草。 私を見る。」

「……エヴァはん……。」

千草が戸惑った表情でエヴァを見る。

「貴様に私はどう見える？」

「・・・エヴァはんは、いつも気丈で誇り高くて・・・幼く見えるけど綺麗で。」

「一つ余計な単語が入ったが まあいい。」

私も家族の仇をこの手で討って手を汚した身だ。

その私が貴様にとって気丈で誇り高くて綺麗に見えるならそれでいいんじゃないか？

少なくとも私や姉様、その駄人形も、家族の敵を討つ貴様が汚れたとは思ってないぞ。」

都合のいい部分だけ省いたエヴァの台詞だが、

私達にとってはそれが全てだ。

「いいじゃない、仇討ち。」

そうしなければ先に進めない、生きていけないほど両親が好きだったんでしょ？

両親の仇がたとえ戦争の結果でも 恨まずにはいられなかったんでしょう？

私が同じ立場でエヴァを失ったとしてもきつと同じことをするよ？

いいえ、私の場合はもっと酷いでしょうね、・・・相手の国ごと滅ぼしてやる。

千草なんて私に比べたら可愛いもんじゃない、相手の部隊だけでいいなんて。」

「……………旦那さん。」

「私は、そんな千草が とても愛おしく思うよ。」

「貴様は正義ではない、悪だ。 だが、それを納得しているならばいい。」

私達は貴様を受け入れよう。

いつか悪として討たれるその日まで 共に歩んでやろう。 私と姉様がな。」

「ヤリテェヨウニ ヤリヤアイインダヨ フクシユウナンテヤッタモンガチダ。」

「エヴァはん……………旦那さん……………チャチャゼロはん……………」

千草の目から涙が一粒零れ落ちる。



「ほんま・・・おおきに・・・ウチみたいな女に・・・そないに心を砕いてもらうて。」

千草がその場に座り込み、私達に向かって手を付き頭を下げる。

「ほら、千草。そんなに畏まらなくていいから立って。」

これからまだ大仕事があるんだから。」

「さ、さつさと立て、馬鹿者が。」

貴様も私達に思っ所があるんだったら自分を卑下するような真似は  
今後は慎め！

馬鹿者が・・・」 / /

馬鹿者というのは大事なことだったようだ、エヴァなりの励ましな  
んだろっ。

「せやね、ウチにはまだやらなあかんことがあるんやった。」

「ふん、だが中途半端な気持ちでやるなよ。」

貴様のその石は貴様の怨みや思いが強ければ強いほど

効果を發揮するんだ、呪うんだったら徹底的に呪え。」

「ケイキイイノヲ タノムゼ。」

「分かってます、ウチの今までの恨み、今ここで晴らします!」

千草が陣の中心に立ち石を両手で持ち、集中する。

「お札さん、お札さん、ウチのこれまでの恨み・・・憎い相手に届けておくれやす。」

千草の言ノ葉と共に陣に置かれた呪符が浮かび上がり、

人形に向かって相対し、やがて同時に燃え上がり、消え去った。

「・・・ふう、何も帰ってこんな・・・成功や。」

「まあ、私達が手伝ってやってるんだ、

これで失敗などという無様な真似をされたらかなわんからな。」

「・・・手伝いって言っても、ココに連れてきたただけけどね。」

「ぐっ・・・姉様はつれてくることも出来んではないか!」

「あ〜っ！！ エヴァ、それを言うんだ！ 私はちゃんとターゲットを調べたり

移動用のマーカーを用意したり色々してますっ！！」

「それだって基本的に依頼してやらせてるだけじゃないか！

私は自分の魔法で干草をここまで連れてきてやってるんだ！」

「私が指示をして人を動かしてるんだから 私がやってることじゃない！」

「姉様一人では何も手伝えないか！

少なくとも魔法に関しては姉様は役立たずだっ！！」

「オイ ゴシユジン ソノセリフハマズイ！」

「・・・酷いつ！ エヴァは私のことそんな風に思ってたんだっ！！」

「（泣いたっ！？）・・・い、いや・・・その・・・何だ、私も少し言いすぎた・・・かな？」

「うわあぁ〜っん！ 干草あ！ エヴァったら酷いんだよ！！

私が魔法ほとんど使えないこと知ってるくせに、酷い事言うんだよ  
お！」

私は千草の胸に飛び込み泣き出し、

千草は子供をあやすように私を抱いて頭を撫でる。

「ほらほら、旦那さん、泣き止んでんか？」

可愛いお顔が台無しや、ウチにいつものかわいい笑顔を見せてんか？」

「うううう………だって……エヴァが……エエヴァアがあ……グス………」

………ニヤ」

「あゝああゝゝっ！！ 千草！ だまされるな！！」

姉様は嘘泣きしてるだけだ！ 今たしかに笑ったぞっ！！

千草の胸に顔を埋めてセクハラしているだけだ！！」 #

私の身を切る巧妙なセクハラがエヴァにバレてしまったようだ。

「かましまへんで？ ウチのこの身はすべて旦那さんのもんや。」

胸に顔を埋めるくらい何時でもさせたげますからな。」

「…………えへへ。」 / / /

「つく…………この、バカ姉があゝ!!」 #

ゴスッ!

エヴァにおもいつきり殴られ、千草から引き離された後 ボコボコにされた。

その後、エヴァにやられた私の傷も治り。

その間に片付けも済んでいたようで、私達4人はその日の内に

残りの2箇所での呪いも無事に終え、メガロメセンブリアの

クルトの家へ宿泊のために移動した。

クルト・ゲートル邸

クルトの家の門で警備の人に私達が訪ねてきたことを連絡してもらい 少し待つと

中からメイドさんがやってきて、私達を家の中へ案内してくれた。

玄関に入り、私達は客間へと案内される。

「いらつしゃいませ、ソプラノさん、それとエヴァンジェリンさんと天ヶ崎さん

チャチャゼロさんでよろしかったですかね？」

「今日はお世話になるね。」

「ふむ、なかなか良い品を使っているな。」

「お世話になります。」

「オマエツヨソウダナ アトデヒトシヨウブ ヤラネーカ？」

「ハハ、勝負は遠慮しておきますよ。」

それにしても今日来てくれてよかった、

私 もう少ししたらオスティアの方へ仕事で行く所でしたよ。」

「へーいいタイミングだったみたいだね。」

「そうですね、大したおもてなしは出来ませんが

腕のいい使用人がいますので、料理はちょっとしたものですよ。」

「ほう、楽しみにさせていただきます。」

「ウチも楽しみにさせてもらいます。」

「サケモイイノヲ タノムゼ。」

「ええ、少しコチラで待っててくださいね。」

下ごしらえはすでに済んでいますので。」

その後、私達はクルトの家で食事をご馳走になり、

クルトの昔の話や、今の魔法世界の話、メガロメセンブリアの名物の話などで盛り上がった。

食事と歓談の後、お風呂に案内され順番に入り。

その後、それぞれ2人ずつ、エヴァとチャチャゼロ、

私と千草に分かれて寝室に案内され、それぞれの夜を過ごすことにした。

「千草、お疲れ様。」

「いいえ、疲れてなんかいまへんで、ようやく親の敵を討てたんです。」

これで、ウチの望みは叶えてもらいました。

あとはウチが旦那さんの望みを叶えるだけです。」

「それは これからゆっくりと叶えてもらうことにするよ。」

「……何なら、このままウチで楽しんでくれても……ええんですえ?」 / /

千草は私の手を取り胸に埋めながら囁く。

「それは素敵なお誘いだけど今日はやめておくよ……人の家だしね。」

「せやったね……ほんなら家に帰ってから ゆっくりと楽しんで



おくれやす。」

今私達は、クルトが気を効かせたのか、大きいダブルベッドが一つの部屋に

案内されたので、お言葉に甘えベッドに向い合って寝ている。

「……………なんや……………こうして終わってみると……………何も湧いてこんもんやな……………」

「……………そんなもんなのかな？……………昔、エヴァもそうだったよ……………」

終わった後は、しばらくぼーっとしてることが多かったな。」

「エヴァはんも……………そうなんや……………」

メガネを外し、髪をおろした千草はいつもとは雰囲気違って見え

今の心境のせいなのか、哀愁が漂い 妙な色気を感じる。

「なんか……………何もなくなっけしもうたような、

旦那さんに京都でウチの計画全部潰されてしもうた

「・・・あの時と同じような気持ちに近い気がします。」

「・・・今まで張り詰めていたものが、なくなったからか・・・なんだろうね？」

しばらく二人で手を握り合い、そのまま静かな時が流れる。

答えのない千草さんの喪失感、私は何かしてあげることとはできるだろうか？

ふと そんなことを考えていた。

「なあ、旦那さん・・・ソプラノはん・・・後生やから・・・ウチに口付けだけ・・・してくれへんかな？」

「・・・千草。」

「こないな時に・・・こうして触れ合っていると、何でかしらへんけど・・・」

人肌が恋しくなる・・・せやけどソプラノはんには、そないな気持ちで抱かれとうないんや。

寂しさや、喪失感を埋めるのに抱かれとうない・・・ほんまに心からウチを捧げたい、

せやけど・・・今このままでおったら・・・ウチ、寂しくて・・・  
なんや・・・悲しくて・・・」

「・・・千草・・・大丈夫、私は此処にいるよ。」

握った千草の手を、さらに強く握る。

「せやから・・・後生やから・・・ソプラノはんのお情けを、  
くれまへんやろつか?」

「・・・千草。」

「ソプラノはん。。。」

私の名を呼ぶと千草は目を瞑り、顎を上げる。

「・・・ん・・・ちゅ・・・」

「・・・ん・・・んっ・・・ちゅ・・・」

しばらく触れるだけのキスをし、しばらくお互いの唇の感触を味わ  
うと

次は啄むようにお互いの口や頬に何回もキスをする。

「ん……ちゅ……ちゅ……ちゅ……んっ……」

「……う……ちゅ……あ……んう……」

その夜は しばらく時間をかけ、お互いを確認するよつにキスをし  
て過ごし

最後に深いキスをして抱き合っつて眠りについた。

私が目が覚めた時、すでに千草は起きていたようで、

目が合った時に頬を染めていた。

妙に私の顔、主に口の周りが濡れていたが寝ている間に何かがあったようだ。

その後 お互に着替え、身だしなみも確認し、

部屋から出たところ、目を腫らしたエヴァが扉の前で立っていた。

「ゆうづべはおたのしみでしたね。」

私の朝は妹の暴力で始まった。

神様から頼まれたお仕事。

その29（後書き）

29 話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その30

魔法世界 メガロメセンブリア クルト邸

昨日は千草の仇討ちで魔法世界各地を周るので忙しかったが、  
頑張ったおかげで、今日は一日観光にあてることができる。

窓から心地良い潮風が流れ込み、朝日が差し込み千草の髪を輝かせ  
る。

エヴァの朝から 姉妹の語り合い に応じた私は爽やかな千草の様  
子とは打って変わり

路地裏の野良猫の様相を呈している。

朝食に呼びに来たメイドさんが私の様子を見て悲鳴を上げかけたが、  
そこはプロ根性、落ち着いた態度で私達4人を食堂へと案内する。

「なにやら朝から凄い事になっていきますね・・・」

貴女のそんな姿、初めて見ましたよ。」

「なに、気にするな。いつもの事だ。」

「いつものことですから気にせえへんといってください。」

「シヨクゼンシユヲ タノムゼ。」

「私って・・・もしかして嫌われてるのかな・・・?」

「それで、皆さんは今日はどうされる予定ですか?」

クルトは何も無かった事にするのが最善と判断したのか、

そのまま話を続けた。

「今日はこの街を観光して、夕方には帰る予定だ。」

「そうですね、私は仕事があって案内などはできませんが、



ゆっくり見ていってください。いい街ですよ。」

「うむ。昨日は家の姉がいきなり泊めて欲しいなど頼んで悪かったな。」

「こうして朝食の手間まで掛けてしまつて。」

「気にしないでください、日頃お世話になっていきますから」

「これくらいなんでもないですよ。」

「こちらに来たときは我が家を別荘替わりにでも使ってください。」

「昨日はいきなりで土産も何も持ってきてないが、」

「次来的时候は向こうのうまい酒でも持参しよう。」

「それは楽しみですな。」

朝食を食べながらエヴァが昨日のお礼を兼ねた会話を進め、

「千草とチャチャゼロは邪魔をしないように静かに食事をする。」

復活した私も社交会話はエヴァに任せて食事食べていたが、

聞いておかないといけないことがあることを思い出した。

「あ、そうだ。」

クルト、出かける前に聞いておこうと思ってただけど、  
ラカンさんの居場所知ってる？ ジャック・ラカンさん。」

「また、意外な人物の名前が出てきましたね。」

知ってますよ、たまに連絡も取り合いますし。」

「ラカン・・・と言うと、あの紅き翼の奴か、姉様？」

「そう、ちょっとお願いごとができそうだね。」

クルト、悪いんだけど居場所を教えて欲しいのと、  
紹介状が何か一筆書いてくれないかな？」

「それは構いませんが、何を頼むつもりなんですか？」

言うては悪いですが、戦闘以外ではあまり役には立たない人物です  
よ？

その分戦闘での信頼度は・・・いろんな意味で規格外ですが。」

「そうでもないよ、あの人は意外な所で頼りになるよ。」

「・・・例えば誰かの子守とか？」

「・・・その関係ですか。あまり私達に不利になる話なら考

えなくてはいけませんか？」

「それはないよ、逆に有利に働く話だと思うよ。」

クルトが少し考え込んでいる・・・

「ふむ、わかりませんね。具体的に何を頼むつもりなんですか？」

「まだ確信があるわけじゃないけど、数年の内に会うよね？ 彼とあの子。」

その時に手札を増やしてあげたいんだ、周りの子達の為にも。」

「・・・わかりました、食後に手紙と彼がいる場所のメモを渡します。」

それでいいですか？」

「ありがとう、助かるよ。あの人放浪癖があるようだから、捕まりにくいんだよね。」

「ふむ、私には関係ない話のようだな。」

私とクルトの話も一段落ついたところで、エヴァが会話に入る。

「エヴァも関係ある話だよ。」

「今の話のどこに私が関係するんだ？」

「手札の所かな、エヴァの闇魔法の習得用の巻物あるでしょ？」

「アレを借りようと思ってるんだ。」

「な、待て姉様。アレは将来千雨がその気になったら教えようと思っていたヤツだ。」

勝手に持っていくことは許さん！」

「あ、千雨用なんだ・・・じゃあ、もう1枚作ってくれない？」

「・・・簡単に言うがな・・・アレは私の開発した貴重な技術だぞ？」

ハイそうですかといって渡せるものじゃないぞ。

そもそも誰に・・・あのぼーやか！」

「やっぱ気がつく？」

「当たり前だ！ 紅き翼、子守、コイツが損をしない話、

あのぼーやの周りという・・・宮崎か、夕映が悲しまないようにする為だな。」

「まあ、そんなところ。ネギ先生に何かあったら本屋ちゃんが悲しんで、

夕映も一緒に悲しむ。 最悪一緒に本屋ちゃんになにかあるかもしれないしね。

回避する為の手を打てるなら打っておきたいと思ってね。」

「まあ、わからんでもないが、そもそもあのぼーやに習得できるかどうか……。」

「この間のヘルマンや夕映経由で聞いた本屋ちゃんの話から考えても素質はあるから大丈夫じゃない？ フォローはラカンさんに任せて。」

「あのラカンさんがフォローなんてしますかね？」

「するんじゃないかな？ 英雄だし。」

「都合よく英雄扱いだな……。」

「そこは会ってから考えようよ、会ってもない人をどうこう言えないし。」

「しかしあのぼーやに私の魔法をね……気が進まん。」

「そこは夕映の為だと思って、お姉ちゃんもお願いするから。」

「……保留だ。 今すぐ返答する気にならん。」

これから観光しようというのに気が滅入る。」

「そうだね、また今度ゆっくり考えよう。」

「では、私は先に部屋に戻って手紙の用意をしておきます。」

「あ、悪いね、クルト。」

「いいえ、代金はきっちり請求しますので。」

「しっかりしてるな。」

「誰かさんにいろんな目に合わされていますから。」

「ちえ〜。」

「姉様はろくな事をせんな。」

「旦那さん、今度ゆっくりその時の話を聞かせてもらいますえ?」

「……お手柔らかにね。」

「旦那さん次第です。」

「なら大丈夫だね。」

その後クルトの家での朝食を楽しみ、手紙とメモを貰って

私達はクルトの家を後にした。

クルトの家を出て、私達は向こうで待っている皆のおみやげを探しながら

観光を楽しんでいる。

「しかし、茶々丸を連れてこなくて正解かもしれんな、潮風があまりよさそうな気がせん。」

「そうだね、チャチャゼロは大丈夫なの？」

「ココニスマタクハナイナ ナイフガサビツキシウダ。」

「そっちの心配なの・・・」

「あ、旦那さんあそこ見てんか。 なんや、屋台に行列ができてますえ？」

「本当だ、なんだろう？」

私達は屋台の方に近づくと甘い匂いがして来て、中を覗いてみるとそこにはクレープのような、変わった食べ物売っている。

「なんかクレープみたいだね、お菓子かな？」

「うむ、よし千草、並んで買ってこい。」

「ウチは旦那さんの従者や、チャチャゼロはんにも言ったらええですやん。」

「む・・・よし、チャチャゼロ並んで買ってこい。」

「ジブンデナラベヨ　ゴシユジン。」

「なんという役に立たない従者だ！」

「なんという傲慢な主人だ！」

エヴァにつま先を踏みつけられる。

「みんなで並ぼうか・・・？」

「そうですね。」

「うち、仕方がない。」

「オイ、アネ　アタマニノセロヨ。」

4人でクレープのような食べ物の屋台に並びながら、

皆へのおみやげの話をする。



「ところで土産は何か考えているのか？」

「一応ね、千雨はこの間まほネットの端末を上げたから 今度は夕映はそれにして

千雨はこの世界の布を買っていこうと思ってるんだよ。」

「布？ 魔法付加できるアレか？」

「そうそう、千雨のコスプレ用に何か使えるかもしれないし。」

「ええかもしれませんね。」

少し多めに買って行って ウチにもなんか作ってもらえんやろか？」

「頼んだら作ってくれと思うよ。」

「エヴァは茶々丸に何か考えてる？」

「ああ、こつちに来る前に少し調べたんだが、魔法金属を取り扱ってる店があるらしくてな。」

この街じゃないんだが、後で注文だけネットでしていこうと思ってる。」

「へー、エヴァらしいというからしくないとつか……」

「どっちなんだ！」

「従者の性能アップを求める研究者としてはらしいし、

傲慢な主人としてはらしくないというか・・・」

「姉様とは帰ったら話し合いが必要なようだ。」

帰る頃には忘れていることを願うばかりだ。

話しているうちに私達の順番が来て、人数分のクレープのような食べ物を買ひ、

食べながら観光を続ける。

この後も食べ物屋によったり、おみやげを買ったために店を探したり、休憩のために入った店で、チャチャゼロが刃物を取り出し、一時騒然としたり。

色々あったが、私達の魔法世界観光は無事に終え、

家に帰った時には皆疲れ果て、食事も軽めに済ませすぐに眠ってしまった。

「何かエヴァは今日ずっと寝てたな。」

「昨日何かあったのか？」

「遊び疲れたんでしょ、結構はしゃいでたから。」

「エヴァはんは昨日えらいはしゃぎようでしたな。」

「……いいご身分だな。」

「う、うるさいぞ！」 / /

「マスター、ご安心してください。涎は出ていませんでした。」

「そんなことを報告しなくていいんだ！ ポケロボがつ！！」

「……お前本当にメンテナンスしたんだろうな？」

「一部金属疲労を起こしていたパーツを取り替え、」

「AIもバージョンアップして、性能が1・2%向上しました。」

「超が変な改造してないだろうな……まったく。」

「そつだ、千雨 おみやげがあるよ。」

「本当か？ 楽しみだね。」

「ほら、エヴァ、さっさと帰ろつぜ。」

「ガキかお前は……。」

「う、うるせーな。 おみやげはいつでも嬉しいもんなんだよ！」

先輩、エヴァは放っておいていこうぜ。」

「まってよ、千雨。」

「千雨はん、おみやげは逃げまへんから落ち着いておくれやす。」

おみやげがあると聞いてはしゃぐ千雨と、

茶々丸のメンテナンスになにやら不満げのエヴァ

いつもどおりの茶々丸と千草と私で家路につく。

「え〜っと、コレが千雨のおみやげ。」

「？ コレって布だよな？」

「そうだよ。」

「・・・布がおみやげ？」

「そう。」

「そう・・・なんだ。」

なにやら不満げな千雨・・・かわいそうなのでそろそろネタばらしをする。

「実はこの布、ただの布じゃないんだよ。」

なんと軽い魔法を付与できる布なんだ、

認識障害のマントなんかもこの布を基本にしてアクセサリとかで強化して作るんだよ。」

「え、マジか！ へ〜凄い布なんだ〜。」

私の話を聞いて千雨が生地を手にとって眺める。

「千雨にコスプレに何か使えると思ってね。」

発光する布とかできるよ。」

「それはマジで使えそうだな。」

「……そういえば中間テストの後に学園祭があるじゃない？」

それで確かコスプレのコンテストがあったはずだから千雨出てみた  
ら？」

その布で衣装作れば結構面白いと思うよ。」

「あゝ、悪い。私そういうイベントには出ないんだ。」

HP上で公開するか、先輩たちの前くらいでしか着ないからな。」

「もったいないよ、せっかくかわいいのに。」

「かわいいって……」 / /

「何で出たくないの？」

「私だとばれると色々うるさいからな。……は、恥ずかしい  
し。」

「残念だ……まって、そうだ！」

この布に認識阻害を掛けて千雨だと認識できないようにすればいいんだよ。」

「そんなことできるのか？　あまり強い効果は無理なんじゃ……」

「千雨じゃなくて　ちう　だと認識をずらすようにすれば出来るんじゃない？」

「出来るかもしれないけど、私じゃな……それに……恥ずかしいし。」

「じゃあ、エヴァに聞いてみよう。　エヴァ、エヴァにやうん！」

上から走る足音が聞こえてくる。

「大声で恥ずかしい呼び方をするな！　バカ姉！」

出会い頭にいきなり頭を叩かれる。

「それで、何のようだ！」

「いや……やっぱりいいよ、先輩……」

「実はね、おみやげでかった布あるじゃない？」

アレに認識障害をかけたんだけど、弱い効果しか掛けられないから服を着た人を認識させなくするんじゃないかと、別人だと思わせるようにできないかと思って。」

「ふむ、そういう事か。」

「いや、考えなくていいぞエヴァ。」

「少しアクセサリが何かで強化してやればそれくらいなら簡単にできるぞ。」

「無視すんなよ！」

「出来るって、千雨。」

「いや、できてもそれを着て外に出るのは……」

「お前が着るのか。」

しかし何でそんなに嫌がるんだ？」

「この布を使って作るコスプレで学園祭のコンテストに出ようって話になって。」

「いや、なってねーから。」

「ほう、面白そうだ。私も協力してやろう。」

「面白そうだって言うならお前が出るよ。」



「何で私がそんな恥ずかしいものに出なければならんのだ？」

「ふざけんなっ！！ わ、私だって恥ずかしいから嫌なんだよ！

！」 / /

エヴァの理屈に千雨がキレて騒ぎ出した。

「駄目だ、もう決めた。 千雨が出る。」

「勝手に決めんな！」

「ねえ、千雨どうしても嫌なの？ お姉ちゃん千雨の晴れ姿がみた  
いな。」

「……つく、……い、いくら先輩のお願いでもこれだけは聞け  
ないんだ。」

「どうしても？」

「……どうしても。」

「じゃあ私が一緒に出てあげるから一緒に出ようよ？」

「え？ いや、でも……ほら……恥ずかしいから。」

「千雨と中学最後の学園祭の思い出作りたいな。 お姉ちゃんはその  
思います。」

「……ほら、作るのにも時間が……ね？」

「しょうが無い……最後の手段だ。」

私は千雨に近づいていき、耳元で囁く。

「千雨と一緒に出てくれたら……ゴニョゴニョをゴニョたゴニョをゴニョゴニョゴニョ。」

千雨の顔が一気に朱に染まり、顔から湯気が出ている。

「出る。学園祭のコスプレコンテストに出る。」 / / / /

「おい、姉様！ 千雨に何を言った!？」

「別にたいしたことは言っていないよ？」

「いいから教える!!」

「しょうが無いな、」

ただ一緒に出てくれたらゴニョゴニョをゴニョたゴニョをゴニョゴニョゴニョって言ったただだよ。」

「……私もだ。」

「え？」

「衣装を作るのに協力してやるんだ、私にもそれをやらせろっ!!」

エヴァが私の服の襟をつかんで揺すり出す。

「分かつ・・・た！ 分・・・かつた・・・から!!」

「約束したぞ！ 必ずだぞっ!!」

「分・・・かつた・・・から、離し・・・て・・・!」

エヴァの手で私はどこか別の世界へ旅立とうとしていた時、

千雨は妄想の世界へ旅立っていた。

「・・・・・・・・へへ・・・・・・・・エへ・・・・・・・・っ！ そ、そうだ！

そうとなったら衣装は着作らないと！

テスト勉強なんてやってる暇はねえっ!!

おい、エヴァ時間が無い！ 最高のクオリティで作るためにも早速作業に入るぞ！」

「ああ、分かった！ 最悪別荘の使用も許可する。」

「行くぞ！ エヴァ！！」 「よし！ 任せろ！！」

二人は意気揚々と2階に上がって行った。

「なあ、旦那さん。 あの二人大丈夫なん？ ……色々。」

「少し人より集中力があって、思い込んだら真っ直ぐな娘達なんだよ……。」

「……そうやるのか？」

千草に何か変なところの心配をされる二人だった。

陽も落ちそうな頃、家の呼び鈴が鳴り、茶々丸が応対に出ると

夕映が通常の修行のために家に来た。

「こんばんわ、ソプラノ。」

「こんばんわ、夕映。」

「そうだ、忘れない内に渡しておくよ。」

「ん？ なんですか？」

「おみやげ、昨日魔法世界に行ってたからね、そのおみやげ。」

「わざわざ、ありがとうございます。」

私は箱に入ったまほネットの端末を夕映に渡す。

「これは何ですか？」

「コレはこっちで言う携帯端末、小さいパソコンみたいな物だよ。」

これを使えばまほネットってところにアクセスして、

魔法の事を調べられるんだ、千雨には前に渡してあるから聞くとい  
いよ。」

「こう言うのは千雨の方が得意だからね。」

「わかりました、今度聞いてみます。」

「うん。」

「夕映はん、お茶が入りましたえ。」

千草が夕映のお茶を持ってやってきた。

「あ、すみませんです。」

「かましまへんで、ウチの仕事やさかい。」

「千草は働き者だから助かるよ。」

「そう思っただしたら、そろそろ 別の お仕事の方もさして欲しいんですけど?」

「そっちはほら、なかなか二人つきりになれないから……ごめんね。」

「???」

夕映にはまだ少し早い会話だったようだ。

「それで、エヴァンジェリンさんはいますか?」

「あゝエヴァはね……今 千雨となんか忙しいよう……」

「? そうですね。 それでは今日は千草さんをお願いします。」

「はいな、すぐ用意しますんで待っててや。」

「はい。」

今 夕映は基本的に魔法から覚えるようにしているが、

少し前から魔力の扱いに慣れてきたので、

スライム娘達との連携や、千草からも幾つか呪いや呪符も習っている。

使用する種類は少ない代わりに、起動までの速さを重視して修得するようだ。

相手が警戒して障壁を強化する前に呪符や呪いを叩き込んで

戦闘や逃走を有利に運ぶと言う話だ。

準備の終わった千草が夕映を連れて地下の別荘へ向かう。

「ほな、旦那さん、ウチらには行ってきます。」

「行ってくるです。」

「行ってらっしゃい〜。」

「茶々丸はん、ウチの旦那さん頼みましたえ。」

「はい、お任せください千草さん、浮気などをしないようにしっかりと見張っておきます。」

「……………茶々丸……………メンテナンスで少し変わったね……………」

「そうですね？」

「変わったよ……………なんていうか……………エヴァに少し似てきた。」

「……………どういう事でしょう？ 少し詳しくお話していただけないでしょうか？」 #

「え？ ……そこでそういう反応なんだ……………」

「二人は放っておいて行きましょか、夕映はん。」

「そうですね、行きましょう、千草さん。」

「ちよ、この状態で私を置いていくの？」

「ソプラノ様、まだ話をしていただいております。」

「さあ、飲み物も用意しましたので、ゆっくりとお聞かせくださいませか？」

いつの間にかテーブルには飲み物とお菓子がこれでもかと積まれて



いる……

千草と夕映もいつの間にかいなくなっている、エヴァと千雨も上に籠っている。

……逃げ道はないようだ。

「ナニヤツテンダ？」

救いの神現る！！

「ちゃ、チャチャゼロ！ 実は話したいことがあって……！」

「姉さん、夕映さんの修行を見てあげてくれますか？」

今地下の別荘に入ったばかりです。」

「………ア、アア ワカッタ……イモウトヨ。」

私の旅はここで終わった。

2階のエヴァの部屋。

「それで私が19歳のバリアジャケットで先輩がA・Sの時のにするんだ。」

レイハさんは超に作ってもらったのがそのままA・Sに使えるし、

私はアーティファクトの方が使える。」

「わかった。」

では肩のフィールドジェネレーター部分に認識障害を強化する用に印を刻もう。」

「それで、もう一着作ろうと思ってるんだが、こっちは認識障害は  
いらぬい。」

ただの衣装でいい。」

「何故そんなものが必要なんだ？」

「バカッ！ 先輩とゴニョゴニョの時にはこっちの衣装を着てもら  
うんだよ！」

そのほうが役に合うだろう、見た目も……その……ア  
しだし。」

「……っ!? そ、そうだな! 流石我が弟子だ、素晴らしい!  
!」

「そう褒めるなよ、とにかく時間がないから急いで型紙を作らない  
と。」

「よし、姉様の身体の寸法は私が把握しているから問題ない。

あと白い方は私の分も作れ、費用は出すし別荘も使ってい。」

「わかった。完璧な衣装を作ってやるぜ!!」

「し、下着も衣装に合わせて新調しなくてはな!」 / /

「……わ、私の分も頼む……」 / /

「ああ、任せろ。弟子の面倒もちゃんと見てやるぞ、私は。」

今年の学園祭が不穏な空気に包まれる一端を、ここでも担っていた。



神様から頼まれたお仕事。 その30（後書き）

30話目 投稿

さて、なんとか30話に到達することができました。  
これもひとへにこの作品を見てくれている人達のおかげです、あり  
がとうございます。

感想もアレから何件かいただき、一部文字の修正をしました。

今後の投稿状況ですが、数日か1週間くらいは今のペースで大丈夫  
ですが

しばらくしたらプライベートの方で忙しくなる予定なので  
投稿ペースが多少落ちると思います。

1週間開くとか、そういう事は無い予定ですが  
ペースが落ちる可能性があるのでここに記述しておきます。

神様から頼まれたお仕事。 その31

1学期最初の中間テストで我がクラスは散々な結果を叩き出したに  
もかかわらず

誰一人気落ちすることもなく、学園祭に向けて全力疾走。

しかし・・・そんな3-Aでは、未だに出し物を何にするか決めて  
いなかった。

「だから我が超包子の料理人が料理を叩き込んでやるといっネ!

クラスの出し物を超包子の中等部支店にするヨ!」

「それで儲けはどうやって配分するつもりなんですか?」

「パテント料金を10%貰って残りを山分けネ。」

「超ちゃんが儲けたいだけじゃない!!」

「クギミーはうるさいね、料理の味の心配はほぼ無くなるからいい  
じゃない力。」

「ダメよ！ そんなの。」 「クギミーって言うな！」

「それじゃあ、あの……喫茶店は どう？」

「当たり前すぎるよ、アキラ。」

「そうだよ、他のクラスでも結構見るよ。」

「でもウチのクラスだけの目玉が何かあれば勝てるんじゃない？」

「勝つって……誰にですか……」

「ゆーなそれだっ！！」 「ええ！？」

「ウチは一般受けからマニア受けまで揃ってるからね！」

ただのウエイトレスじゃなくて何か付加価値があれば……」

「………使用人………？」

なにやら教室が騒がしい、昼食を終えた 私、エヴァ、茶々丸、3人で教室に入る、

その時 誰かが茶々丸を見てそう呟いた。

「………メイド………？」

「「「「「それだっ！！」「」「」「」

「「「・・・は？」「」

そこからはよく覚えていない・・・なにやら茶々丸が皆に揉みくちやにされ

私とエヴァも巻き添えになり、メイドがどつとか服をどこで買ったとか・・・

私は、あとから来た千雨に救出されるまで巻き添えで揉みくちやにされていた。

エヴァはまだ茶々丸と中にいる・・・

再会できることを切に願う・・・

一通り話を聞き終わったのか、ようやく開放された二人は



真っ白に燃え尽きていた。

その後 授業が始まる直前までなにやら話し合いがなされ、

えらく上機嫌の委員長が明日衣装を用意するので試着をしよう。

と、言う話で決まっていたようだ。

ようだ・・・と言うのは、途中で私は保健室に逃げ込み、

後から夕映に話を聞いたと言う 又聞きの結果である。

この話を夕映から聞いた直後、私は翌日学校を休もうとしたが、千草に連行された。

翌日、 3 - A 教室

「茶々丸、ココって学校の教室だよな？」

「そのとおりです、ソプラノ様。」

「・・・頭が痛くなってきた、私は保健室に行くぞ。」

「ちよ、エヴァ一人で逃げるなんて狡いつ！」

「離せ、姉様！ いつも姉様が使っている手じゃないか、

私が使って何が悪い！」

「マスター、早く教室に入ってください。」

HRに遅れます。」

私達が教室に着き、ドアを開けたらそこにはメイドさんが居た。

一部バーテンの格好をしているものもいたが、

クラスメイトがメイド服を着て、委員長が立ち居振る舞いを教えているのだ。

教室を見渡すと、隅のほうで隠れるように千雨がうずくまっている。

「ねえ、千雨・・・何があったの？」

「・・・知らねーよ、私が教室に来たときには既にこうなってた。」

「ソプラノ様、先日クラスで話していたメイド服の試着の件では無いでしょうか？」

「・・・茶々丸、その話はするな。」

エヴァにとっては軽いトラウマのようで、昨日の話をする顔色が悪くなる。

「あゝ、そういやそういつ話をしていたな。」

「何も、朝からやらなくてもいいのに・・・」

4人で話しているとHRの合図の鐘が鳴る。

「ほら、もうHR始まる時間になったし、これは今日のHRは潰れるね。」

「どつでもいいけど、どこに座ればいいんだ？」

席は無茶苦茶に動かされてるぞ。」

「しょうが無いからこのへんで座っていよう。」

「・・・茶々丸、保健室にいく」「もう鐘がなりました、マスタ！。」「・・・諦めるしか無いのか。」

私達3人で諦めの境地に入り、茶々丸はいろんな種類のメイド服に少し興味があるのか、

それぞれの服を観察している。

そうしていると教室のドアが開き、ネギ先生が入っていくる。

「おはようございます。」

「……………いらっしやいませー ようこそ、3・Aメイドカフェ  
『アルビオーニス』へ!……………」

「……………頭が痛い。」

「私もだ……………」 「私も……………」 「皆さん元気がいいですね。」

・  
いつの間にウチのクラスの出し物がメイドカフェに決まったのか・

委員長を筆頭に、みんなノリノリでネギ先生を相手に接客の練習を開始する。

「まあまあ、ネギ君 どうぞぞぞ？」

「ホラホラ ミルクもいつとく？」

ネギ先生への接客をよそに、バーテン役の五月さんと長瀬さんが  
シェイカーでカクテルを作り出す。

作ったカクテルを、ヤケになったエヴァが試飲をしていた。

「お、いけるな さすがだ。」

「ちよつとエヴァ！ それ本物のアルコール？」

「ん、そうみたいだな。」

「……何考えてるんだよ……バレたら停学食らうぞ。」

そうしている間も、ネギ先生への接客は続く。

「ネギくん 私もこのカクテル飲んでいーかなー。 サラトガ・  
クーラー」

「は、はあ どうぞぞ。」

「よ、社長 太っ腹!！」

「あゝ〜ん 胸の谷間に栓抜きが落ちちゃった、ネギ君取ってー」  
「？」

「ぶっ!？」

「釘宮さん 一応ノンアルコールのカクテルなんだ・・・」

「しかし、メイドカフェというものはこういうモノだったのか。」

「ちよつと待てよ! コレは明らかに違うだろう!？」

「キャバクラかなんかと一緒にしてんじゃねーよ!」

「千雨さん、キャバクラとはどういったものなのでしょう?」

「そんなこと私に聞くなよ、ポケロボット!」 / /

誰がどこで間違った知識を入れたのか、

接客はどんどんエスカレーターし、それに比例してネギ先生への代金もエスカレートしていく。

「ネギ君見て見てー、まだ色々衣装用意してあるよー」

そこにはメイドと思われる要素がかなり減り、大河内さんのバニー  
スーツで

一気に教室内の色気を増した。

「一万二千円になります。払え。」

「うひいっ!? 見ただけでですかっ!?!」

「何で私だけバニー・・・」

その後もどんどんエスカレートしていき、ブルマ、ナース、巫女、  
スク水、赤ずきん(?)

など、明らかにコスプレ喫茶、もしくは性風俗店に様相を呈して  
くる。

「2万円ネ 払え。」

「ひいっ・・・ぼ、僕のお小遣いが・・・」

「千雨は参加しないの?」

「先輩・・・何か勘違いしてないか？」

それにこんなメイドカフェじゃねえ、

私に全権を委ねれば客の五百や千なんかすぐにでも・・・」

「あ、突っ込むところそこなんだ・・・」

「お前ら 朝っぱらから何をやっとするかーっ！っ！」

「ひいっ！？」

「新田先生 私たちは真面目に学園祭の出し物の討議を・・・」

「もうHRは終わっとする！！ ネギ先生もネギ先生です！」

「はっ！っ！」

「全員正座ーっ！っ！」

「「「「「ギャーっ」」」」」

流石にここまで騒げば他のクラスにも聞こえるのか、



新田先生が怒鳴りこんできて、この騒ぎは収束した。

## 翌日のHR

「なかなか決まらないので、みんなのアイデアから僕が厳正に選考と抽選をした結果

3-Aの出し物を「お化け屋敷」に決めたいと思うのですが、

ど……どうでしょうか!？」

「「「「「いいんじゃない?」「」「」「」

「よおしくっ!!　そうと決まれば思いっきり怖い奴を!!」

「お化け屋敷ならお化け屋敷で色々やりようはあるってもんよ」

「おー!?」

こうして3-Aの出し物はお化け屋敷に決まった。

2日後

麻帆良スポーツ

3 - A教室に「霊」再び!?

度々廊下に張り出される新聞部による掲示物。

それに我が3 - Aに幽霊が現れるという記事が載った。

「姉様、あれってまさか……」

「あゝ、容姿からすると間違いなさそうだね。」

「……おい、その姉妹。」

まさか本当に幽霊がいるなんて言うんじゃないだろうな?」

「は? 何言ってるの?」

「そ、そうだよな。 いるわけねーよな!」

「いるに決まってるだろう。」

「……………!? ……あはは、冗談が過ぎるぜ、エヴァ。」

「? いるわよ、ウチのクラスに。」

「……………なん……………だと……………?」 1111

千雨の表情が一気に青白くなる。

「……………なんだ千雨、お前幽霊が怖いのか?」

「ば、バカ言うな! そんなもの……………別に……………」

「ツプ、千雨も意外な所で女の子だね。」

「わ、笑うことねーだろう、先輩! いいじゃねーか別に! 幽霊が怖くたって!!」 / /

「ごめんごめん、別に千雨が幽霊が怖いから笑ったんじゃない、変に意地を張るから可愛くて……………プツ。」

「……………つゝ」 / / /

「あのなあ、良く考えてみる?」

ココに吸血鬼がいて、魔法使いも居るんだぞ?

魔法世界で獣人も見たし、この間は悪魔も出ただろう?

幽霊がいたって別におかしくはないだろう?」

「……………まあ、そう言われれば……………」

「そうだよ、それにこの子は別に害はないし　いい娘だから怖がらなくてもいいよ。」

少しホツとしたのが、千雨の顔色も普段どおりに戻る。

「だけど、先輩たちのその言い方、何か知ってるのか?」

千雨の間に、私とエヴァの表情が少し曇る。

「……………まあね。　この子、相坂さよちゃんって言うんだけど、

この娘には少し悪いことしたかな　　と　　思　　っ　　て。」

「……………?　この幽霊の生前に会ったことがあるのか?」

「ん?　無いよ。」

「……………千雨、そこまですておけ。」

「?　なんかエヴァらしくないな。」

「私もエヴァも、直接的には関係ないんだけど、間接的に……ね。」

「まあ、二人が聞かないで欲しそうだからこれ以上は聞かないよ……」

「ん、ありがと千雨。」

気を聞かせてくれた千雨のおかげで、その話はそこで終わるものだ  
と思っていたが

その日の午後、

千雨から幽霊の件について私達の様子がおかしいと聞いていた

夕映から連絡があり、今夜 幽霊の除霊を行うという話を聞いた。

「あゝまずいな、どうしようか エヴァ？」

「ん……私としても無理やり除霊はちょっと……な。」

「もう少し早く彼女の事に気がついてればね……」

中学に入学してあのクラスに入ってようやく気がついたからね。」

「ああ、その頃にはもう自分が何に執着して地縛霊になっているか  
すら

分かっていないようだったからな。」

中学に入りあの教室で初めて相坂さんを確認し、調べた時には既に手遅れで

彼女が何に対して執着心を持ち、地縛霊をやっているのかわからない状態だった。

当時、私が関与することも考えたが、当時の学園との関係で

動くことが躊躇われたため、彼女には少し罪悪感が有る。

中学に入り相坂さんを確認後、私とエヴァは彼女の様子をしばらく観察し、

執着の元を確認するつもりだったが、未だに何に執着しているのかわからない。

本人に聞くということも考えたが、彼女の様子を見る限り

彼女自身にも解ってないようだったし、原作との乖離を恐れた私は措置を先送りにした。

そういう意味でも、死因と状況の先送りという意味で彼女には

辛い思いをさせているが、ココに来て万が一除霊されるようなことになれば

彼女にも悪いし、後々問題にもなるので、影から除霊の阻止と言う方向で動くことにする。

「それじゃあエヴァ、除霊の阻止はしておこうか。

彼女が望むならいいけど、強引な除霊は気が引けるし彼女にも悪いしね。」

「わかった、私も間接的にアイツの死に関係しているからな。

ここで強引に除霊されるのは本意ではないしな。」

私達は茶々丸を連れ相坂さよの除霊を阻止するために

夜の学園へと向かった。

3 - A 教室 屋外

私達は認識障害を使って、教室の外から監視している。

「……エヴァ、どう?」

「・・・姉様だつて見えるだろうか？」

「こつこついう時は吸血鬼の能力を当てにしないと。」

「・・・はあ、まあいい。今宮崎がアーティファクトで相坂の思考を読んでいるようだな。」

本屋ちゃんが相坂さんの思考を読んでいるようだが

風向きがおかしい、怯えた様子で本を閉じ、周りが慌てている。

「マスター、宮崎さんは悪霊だと言っていますか？」

「なに？　まずいな・・・って！」

茶々丸の高性能マイクで声を聞いてもらっていたが、

本屋ちゃんは彼女を悪霊だと思ったようで

それに慌てた相坂さんが、無理に力を引き出し、ポルターガイストを起こす。

「あ、あのバカ幽霊！　今そんなことをしたら逆効果だろう！」

「うわあ〜、酷い事になってきたな〜。」



「おい、姉様、現実逃避するな！」

くそ、大騒ぎになってきてるぞ、……まずいなあいつらが出てくる。」

除霊に参加していたクラスメイトは大騒ぎ、

相坂さんが誤解を解こうと色々するが、すべて逆効果になる。

クラスの人間ではどうにもできないと判断したのか、

とうとう龍宮さんと桜咲さんが出てきてしまった。

「まずい、龍宮が本気になったら視認されるぞ！」

……クソッ 言ってるそばから！」

「二人共行くよ！ 彼女をとりあえず逃がして龍宮さん達から匿うよ。」

相坂さんが龍宮さんに視認され、攻撃をされたので慌てて教室から逃げ出す。

私達は相坂さんが逃げる方に先回りして

別の教室に認識障害結界を敷いて相坂さんを誘導する。

「茶々丸！ 相坂が次の角を曲がったところで閃光弾を撃ちこめ！」

「マスター、私には相坂さんが見えませんがどうしましょう？」

「あゝゝ！？ そうだった！！！」

「エヴァ！ そんな所で漫才してないで！」

茶々丸、私の合図で2階の階段踊り場に閃光弾！」

「了解しました、ソプラノ様。」

相坂さんが上から階段を降りて角を曲がる直前！

「茶々丸今！！」

「閃光弾、発射します。」

相坂さんの逃げる速度と、指示と発射までのタイムラグが

ちょうどいいタイミング出会い龍宮さんと桜咲さんの目の前で閃光弾が破裂する。

「相坂さよ！ こっちだ！」

「は、はい！」

龍宮さんと桜咲さんが目の回復を待っている間に、

エヴァが結界内に相坂さん呼び、うまく誘導することができた。

この結界内なら誰にも気づかれずに済むので

相坂さんを落ち着かせて、事態を終息するように説得する。

「大丈夫か？ 相坂？」

「は、はい、おかげさまで・・・って！ 一緒のクラスのエヴァン  
ジエリンさん！？」

「ああ、そうだ。」

「大変だったね、相坂さん。」

「え？ ソプラノさんも？ 私が見えるんですかっ！？」

「そうだよ、私とエヴァの二人には見えてるよ。」

「本当ですか？ 私が見えてるんですか！？」

数十年ぶりに人と会話ができて嬉しいのか、

相坂さんはかなり慌てた様子かと思いきや、いきなり泣き出す。

「ふえええ〜ん 私・・・私い、やっと私のことが見える人にい  
〜！」

「ああ、ほら、泣かないで、ね？」

「だって、だってえ〜！」

「ああ、面倒くさい！ 相坂さよ！ 今はそれどころじゃないだろ  
う！」

「だってえ〜！」

「やかましい！」

すかつ！

エヴァが相坂さんを叩こうとするがすり抜ける。

「うち、幽霊はさすがに普通では殴れんか。」

「ほら相坂さん、落ち着いて、話なら後でもできるから 今は私達

の話聞いて。」

「・・・グスッ・・・はひ・・・グズ・・・」

「とりあえず、相坂さんはどうしてあのクラスにずっと居るの？」

「・・・私・・・気がついたらあそこにて・・・でも誰にも気がついてもらえなくて・・・」

寂しくて・・・皆が楽しそうなのが羨ましくて・・・私も友達が欲しくて・・・」

でも気がついてもらえなくて・・・寂しくて・・・」

「わかった、友達が欲しいんだよね？」

「・・・はい。」

話がループしそうな所で遮る。

「じゃあ、落ち着いてゆっくりと皆にそう言いたいよ。」

私達も少し力を貸すから落ち着いて・・・ね。」

「え？でも私誰にも見えなくて・・・」

「エヴァ、できそう？」

「ああ、多少強引だが少しくらいなら大丈夫だろう。」

靈魂と言う概念は私にはわからんが、

相坂を強化する感じで多少強引に魔力を注ぎこめばなんとかなるだろう。

千草の受け売りだな。」

「千草さんを連れてこようと思ったけど、

流石に桜咲さんたちと顔合わせるとまずいからね。」

エヴァが少し強引な身体強化魔法を利用して魔力を注ぎこむと

相坂さんの存在感が少し強化され、よりはっきりと見えるようになった。

「よし、今なら落ち着いて集中すればばーや達にも見えるだろう。」

「あわわ、なんか力が湧いてくるような気がします！」

「いい、相坂さん。時間がないから簡単に説明するけど、

ネギ先生達をこの教室の近くに誘導するから

落ち着いてゆっくと、友達になって欲しいって言うのよ。

ネギ先生達ならきつと分かってくれるから。」

「え……でも……私い……」

「相坂さん！ 友達が欲しいんでしょう？」

だったらここで少しだけ勇気を出して、ね？」

「……でも……」

「このままだったら、また前みたいに また誰にも見えなくなっちゃうよ？」

今ここで勇気を出して皆に認識してもらえば、少しは見え易くなるはずだよ。

私達も力を貸すから勇気を出して。」

「……ソプラノさん達は、私と友達になってくれないんですか？」

「今の相坂さんじゃだめだよ、相坂さんは私達に友達になって欲しいって言ってくれた？」

「……いいえ。」

「じゃあどうする？」

「……友達に……私と友達になってくれませんか？」

「いいよ　相坂さんがよければ私が友達になる。」

「・・・まあ、私も・・・なんだ、なつてやらんこともない。」  
／／

「？　私でよろしければ。」

「・・・本当ですかっ!!」

私達の答えに相坂さんが心底嬉しそうな表情になる。

「ええ、本当だよ。」

ね、勇気を出せばできたでしょう?」

「・・・あ、はい!」

「さあ、次はネギ先生やクラスの皆だよ。」

今ならみんなにも見えるはずだから頑張つて、私達もここから見えるから。」

「はい、頑張つてみます!」

「茶々丸、外で少し物音を立ててネギ先生を近くに誘導できそう?」

「はい、今なら同じ階にいますので簡単に誘導できます。」



「じゃあ、お願いね。」

「かしこまりました、ソプラノ様。」

茶々丸が指示通り廊下で物音を立て、ネギ先生をこちらに誘導する。

龍宮さんと桜咲さん、朝倉さんが一緒に居るようだ。

「じゃあ、皆が教室に入ってきたら落ち着いてね。」

皆に思いを伝えたいって集中すれば今なら大丈夫だから。」

「はい、頑張ります。」

私達で成功しヤル気を出した相坂さんを教室に置き、

私達は窓から外に出て様子を伺う。

「ネギ先生！ この教室から気配を感じます。」

「わかりました、まず僕達が話しますから、いきなり攻撃はしないでくださいね。」

「はい。」

「ネギ君、行こう。」

「はい。」

教室の扉が開きネギ先生と朝倉さんが入ってくる、

後ろには桜咲さんや龍宮さん、駆けつけたクラスメイトも一緒に来ているようだ。

「相坂さん……ですか？」

「……はい。」

「さよちゃんは友達が欲しかっただけなんだよね？」

「え？……あ、はい！」

あの！ 私と友達になってくれませんか！？」

ネギ先生と朝倉さんが微笑んで相坂さんに答える。

「僕で良ければ。」 「私で良ければ。」

「あ……はい！　ありがとうございます！..」

二人の答えを聞いて緊張の糸が切れたのか、

力が抜け、相坂さんが以前のように視認しにくくなる。

「消えた……」

「ネギーッ　どうなったの？」

「アスナさん。」

『無事成仏したようです。』

『そう……よかったね……』

ネギ先生や駆けつけたクラスメイト達はいい笑顔で天を仰いでいる。

龍宮さんだけが、まだ居ることを確認しているが、

なにかいい話っぽい雰囲気が出て　皆　雰囲気に酔っているようで、

龍宮さんの話を聞く人はいなかった。

「なんかいい感じで収まりましたね、エヴァにゃん。」

「ああ、コレでもう相坂が除霊されることはないだろうな。」

あと、にゃんって呼ぶな。」

「所でマスター、相坂さんとは どなただったんですか？」

「は？ どなたって相坂だろう？」

お前も友達になるって言うてたではないか？」

「いえ、マスターとソプラノ様が寸劇でもやっているのかと思い、

空気を読んで言うてみただけですが。」

「……………どうしてそういう方向ばかり お前は気を効かせるんだ。」

「……………まあ、いいじゃない、うまくいったんだから。」

茶々丸には帰ったら説明してあげるよ。」

「？ はい、お願いします。」

今夜何が起こったかイマイチ理解しきれていない茶々丸。

この後何回か説明したが、科学の申し子である茶々丸に

彼女を説明するのはすごく骨が折れた……

神様から頼まれたお仕事。

その31（後書き）

31 話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その32

side 葉加瀬

『……ジリリリリッ!』

『グッモーニン! グッモーニン!』

『ピポピポ ピポピポ』 『ジリリリリッ!』

「……ん……んがっ!」

気持ちよく眠っている所に騒音が鳴り響く。

私は手元を探り騒音の元を排除できる、道具を探す。

『ボガッ!』

枕元にあつたおもちゃで騒音の元、目覚まし時計を止め ゆっくりと目を覚ました。

「んー・・・」

時間を確認すると午前7:00 まだ思考のはっきりとしない頭をなんとか動かし

昨日 何故この時間に目覚ましをかけたのかを思い出そうとする。

「そうら、屋台の仕事があつたら・・・

学祭中は 大変らなー もー。」

今朝、超包子で朝仕事があることを思い出し、

急いで着替え、身だしなみを軽く整え、セグ エイ超包子に向かう。

「ハカセ、また研究室に止まったつんですか？

カゼひきますよー。」

「らいじょうぶでぶー。」

「全く、研究以外のことにはホントだらしないんだから。」

「いってきまーぶ。」



超包子に着くと店はもう開店していて、私以外のメンバーは既に仕事についている。

「おはようございますー。」

「むむ、遅刻アルヨ ハカセー。」

おはようございます。

「ニーツアオ ハカセ。」

ネギ老師、今日も着てるネ。 すっかりウチの常連ヨ。」

「ほほう……あの人は着てますか？ ソプラノさん達。」

「今日は来てるよ、茶々丸がこっちに来てるから、一緒に来たよ。」

超の教えてくれた方向を確認すると、ソプラノさんとエヴァさん、千草さんが食事をしている。

茶々丸は接客に動き回っている……よく見ると髪の毛をアップにしてまとめている。

アレでは放熱処理がうまくいかずに、熱がこもってしまっただろう。

「だめだよー、茶々丸ーッ！」

「？ あ．．．ハカセ。」

「ダメだよ、髪上げたりなんかしちゃー。」

それは放熱用なんだから、何でこんなことしたの？

オーバーヒートしちゃうよ？」

「それは．．．」

「あくまずかった？ それ私が千草に頼んでやってもらったんだよね。」

私達の会話を聞いていたソプラノさん達が反応し、声をかけてきた。

「だから言っただろう姉様。」

「エヴァだって、通常的生活なら問題ないって言ったじゃない。」

「茶々丸はんだって たまにはお洒落したってええんやおまへんか？」

「いえ、私は．．．」

「オシヤレ？」

「ダメなの葉加瀬さん？ せっかく可愛くなったのに．．．茶々丸

も喜んでたし・・・」

(どうやらソプラノさんが思いつきでやったよね・・・それはいいとしても、

茶々丸が喜んでいたというのが気になりますね。)

「ん～・・・茶々丸、少し点検したいことがあるから

放課後研究室によってくれない？」

「ハ・・・了解しました。」

side ソプラノ

キーンコーン カーン・・・

放課後 3 - A

「ほいじゃみんな、学祭準備 来れる人は夜7時半からお願いね。」

「朝倉さん9時以降はダメですわよっ。」

「それより今年はその「学祭伝説」ウチのクラスで誰かやる人いるかなー。」

「何 あんたあんなのマジで信じてるの?」

「いや、割と本気で御利益あるらしいよ アレ。」

「何の話アルカ?」

授業も終わり、朝倉さんによる学祭準備の連絡があったが、

クラスメイトはそれぞれの放課後の過ごし方をしている。

帰宅する者や部活動に参加する者、その他の者、

それぞれが行動を起こす中で、釘宮さん達が変な話をしていた。

「何ってホラ、学祭最終日に世界樹の下で好きな人に告白すると絶対うまくいっちゃってゆーアレだよ。」

「……………」

「なんと！？ それは初耳ネ。 ロマンチック。」

「割とゆーめーな言い伝えだけど、告白じゃなくてキスって説もあるよ。」

「……………で何よ あんたする訳？」

「いや、しないって、相手いないし。」

世界樹の発光現象に合わせて告白することにより、

思いが伝わりやすくなったり、強力な暗示効果を発揮することは確かにある。

「姉様、今年だったか？」

「そうだね。」

前回の発光現象の時は私とエヴァで魔力を世界樹の樹液で固めて

指輪を幾つか作ったが、今年は超が動くはずだ。

彼女の望みを叶えさせるわけにはいかないが、

話した所で聞き入れるとも思えない。

やはり当初の予定通りに、泳がせて学園長たちが阻止できれば良し。  
でなければ、私が阻止して、

彼女の魔法陣を利用する方法で行くか……そのための準備はできて  
いることだし。

「だから私はしないってば。」

「またまた くぎみんってば照れちゃって。」

「クギミーンとかくぎみんとかゆるーなーっ！」

「クギミーン告白するってー！」 「クラーー！」

「……………」

「ふん……………くだらんガキ共が、毎年飽きもせず同じような会話を……………」

「帰るぞ茶々丸。」

「八。」

「……あ、マスター。私ハカセに点検で大学の研究室に来说  
言われています。」

「ん、そうか。」

「では、私達も一緒に行きましょう。」

「なんだ姉様いきなり。」

「今日は暇ですから私も茶々丸の点検に着いて行きますよ。」

「ふむ……まあ、いいか。よし、私も行こう。」

「わかりました、マスター、ソプラノ様。」

私達3人で葉加瀬さんの研究室へ向かうことにした。

放課後 大学部研究室

「ハカセ、失礼します。」

「ん？」

大学の研究室に来た私達を迎えたのは、怪しい装備に身を包んだ葉加瀬さんだった。

「なんだ、また変な備品が増えてるな。」

少しは片付けたらどうだ？」

「エヴァさんに言われたくはないですよ、茶々丸から聞いてますよ？掃除はすべて茶々丸にやらせているそうじゃないですか。」

「私は自分の研究室は掃除しているぞ。」

「私だつてしています……あれ？」

葉加瀬さんがついさつきまでいじっていた怪しい研究物がバチバチと火花をあげ、徐々に火花は大きくなっていく。

「まずいつ！茶々丸、姉様逃げるぞっ！！」

「了解、マスター。」



「姉様っ……っ、もういない!？」

「あれ? 皆さんどうしたんですか? ……はにゃ?」

葉加瀬が気がついたときには既に遅く、火花が薬品に引火し爆発。

……しかし爆発の規模にしては研究室の被害は軽微だった。

「すみませんー、ちょうど実験中だったのでー。」

「実験中なら余所見をするな! 危つく私達まで巻き込まれるところだった。」

「ハカセ、大丈夫ですか?」

「だいじょーぶ だいじょーぶ、さて、じゃあ早速点検させてもらうよー。」

「ハイ。」

「ハイー じゃあ上を脱ぎ脱ぎしましよーか。」

「えっ……」

「ここで脱ぐんですか?」

「うん？」

「お　茶々丸のヌードが見られるなんて、眼福眼福」

「馬鹿なことを言うな姉様。」

茶々丸は私達の視線が気になるのか、チラチラと私達の方を見るが、根負けしたのか、ゆっくりと制服を脱ぎだした。

「茶々丸のヌードは人間にはない艶めかしさが……」

「……姉様……私にあまり近寄るなよ、変態がうつる。」

「エヴァにはまだ早いか……葉加瀬さんはわかってくれるよね？」

「……うーん、どこも以上はないけど、モーターの回転数が上がってる、」

茶々丸、状況はどう？」

（無視か……葉加瀬さんなら理解してくれると思ったのに……）

「それが・・・その 奇妙な感覚が・・・どう言語化すればいいのでしょうか。」

おそらく ハ・・・ハズカシイというのが・・・その・・・妥当かと。」

「おおっ!? ハズカシイ!？」

茶々丸の人工知能が進化してきているのは知ってたけど、

ここまでとは・・・ほ、他には!？」

「胸の主機関部辺りがドキドキして 顔が熱いような・・・」

「ホントだ あつい!？」

「いったいどういう原理なんでしょう・・・AIの進化はいいとしても・・・」

人間と同じように外部に表現するためにワザとモーターやボディに干渉しているのか？

AIがそこまで自己進化することがあるのでしょうか？

人工知能のプログラムだけに留まらず、他のプログラムにまで干渉して進化する？

それは本来ウイルスとして除去されるべきものですが、

茶々丸のシステム事態には異常はなかった・・・茶々丸のAIの自

己進化は

私や超の想定を遙かに超えるものだというのでしょうか？

だとしたらウイルスとして除去するのは早計か？

このプログラムの進化がAI本来が持つ機能だとするならば、

制作者はここまで想定していたのだろうか？

茶々丸が今表現している感情が羞恥だとするならば他の感情はどうでしょう？」

「あゝハカセ、おい、帰ってこい。」

「・・・どうする？ 葉加瀬さんがこうなったらしばらくは帰ってこないよ？」

「あの、私お茶でも入れてきましようか？」

「そうだな、点検はもういいから服を着て茶でも入れてこい。」

「了解、マスター。」

「いえ、そうです。 今考えれば茶々丸は以前から感情を持ち

尚且つ表現する傾向がありました。

エヴァの命令を無視することもありましたし、ソプラノへの異常な執着も……」

この後茶々丸がお茶を入れてきてくれて

思考が暴走している葉加瀬さんを肴にお茶会を楽しんだ。

「ダメです！ まだ判断をするにはデータが足りません！！

茶々丸！ データ集めに協力s……あれ？」

「あ、やっと帰ってきたよ。 エヴァく 葉加瀬さん帰ってきたよ。」

「……んあ……ああ、帰ってきたか。 ふ あく。」

「……えつと？ どうしたの？ みんな。」

「どうしたもこうしたもないだろう、お前がまた暴走しただけだ。」

「……アハハ……って違うんです。 それどころじゃなくて、

茶々丸にデータ集めに協力してもらわないと。」

「それで？ 具体的に何をやるんだ？」

「……なめ？」

「お前は頭がイイのか 馬鹿なのかどっちなんだ？」

「ひ、酷いですよ！ ちょっと思慮が足りなかっただけですよ！」

「葉加瀬さんの評価は置いておいて、まだ何か点検するの？」

「あ、ボディの方はもういいです。」

「ちょっと茶々丸の記憶データの方を調べさせて貰いますので。」

「言うが早いか、葉加瀬さんはノートPCから茶々丸に有線の接続端子を繋ぎ」

「茶々丸の記憶データを確認していく。」

「ふむ！ 日常生活においては問題行動はないようですね。」

「流石私達で作った娘です。」

「おお！ エヴァさんの寝顔フォルダがありました！」

「こ、これは……信じられません……エヴァさんがこんなにかわいい顔で……」

「私がかわいい顔をしてたら何か問題でもあるのか？ ハカセ。」

#

「ほう、人物ごとにデータが分けられてますが、ソプラノさんが一番容量が大きいですね、

次いでエヴァさんですね。」

「おい、茶々丸、どういう事だ？

なぜマスターである私のデータ量が姉様より少ないんだ？」

「……………黙秘いたします。」

「おい！ 何故そこで黙秘権を行使するんだ！」

「あ、今の会話でエヴァさんのパラメータが少し減少しました！

主に好感度と尊敬度です。」

（なに、その大雑把なパラメーター……）

「今ので下がるのか！？ 質問しただけじゃないか！」

「ハカセ、そろそろ止めていただけないでしょうか？」

「もう少しだから！ ああ！ 茶々丸の体温が上がって来てる。

記憶を覗かれることで感じる感情は、怒りや羞恥、それに恐怖。

体温が上がっているということは怒りか羞恥ですね！」

「・・・そこまで分かっているならそろそろ勘弁してあげなよ・・・  
葉加瀬。」

私の中でも葉加瀬の好感度や尊敬度のパラメーターが下がってきていた。

「ダメです！ 科学の進歩に この程度の犠牲はつき物なんです！

ああ！ ソプラノのフォルダの中の奥の奥、非表示設定で隠しフォルダが作ってあります！

しかも頻繁にアクセスしている！？ コレは確認しないと！！」

「あ・・・ダメ・・・！」 / /

葉加瀬が隠しフォルダを開き、中に会った画像ファイルを開くとそこには・・・

「・・・」 / /

「・・・」 / / /

「・・・」 / / / /

「ああ・・・」 / / / / /



いつぞやの私とエヴァがキスで血を飲ませている時の画像が高画質で表示される。

「お、おまつ!! あの時見ていたのっ!？」 / /

「あ、あの・・・偶然と申しますか・・・そのっ・・・」 / /

「・・・かなりいいポジションで撮影してるよね。」

ん？ この同名で拡張子が違うファイルは・・・動画？」

「あ、それはっ!！」 / /

「見てみましょう。」 / /

葉加瀬の光速のキー操作で動画ファイルが再生される・・・

『駄目だ!! さあ、さっさと舌を出せ!!』

『・・・もう・・・しょうがないか・・・。 あ〜ん。』  
/ / /

『フッフ、この方法で血を飲むのも久しぶりだ・・・』 / / /

「あゝ……コレだったの……。」 / /

「………なんということだ……。」 / / /

「……アハハ……またこの動画を見ることになるなんて  
……」 / / /

「………うう。」 / / / /

以前 この動画が超や葉加瀬に見られ、気まずい雰囲気の数日過  
したことを思い出す。

「ゴホンッ、気を取り直して……この動画が最近閲覧されたのは、  
昨日の夜みたいね。」

その頃の茶々丸の行動記録は……？ 削除されてる？」

「どういう事だ、ハカセ？」

「茶々丸のこの時の行動記録が削除されてるんですよ……って、  
消されたのは数分前？」

葉加瀬が茶々丸を見るとバツが悪そうに視線をそらす茶々丸。

「茶々丸ー、行動記録は貴女に何かあったときに重要になるから

消さないように言ってるわよね？」

「……いえ、あの……」

「それは後でいいだろう？ 昨日の夜の何時頃なんだ？」

「え〜と、9時頃ですね。」

「その頃といえば、朝食の仕込みをやっていたと思うぞ。

千草が茶々丸が一人でやると言っ、台所から追い出されたと言っていたな。」

「あ〜そんなこと言ってたね。」

「??？ どういう事？ 料理しながら動画を見てた？」

まあ、いいです。 茶々丸の中のデータは消されていますけど、

バックアップがあるからそちらで確認してみましょう。」

「あつ！ ハカセ……」

「フフン 甘いわよ茶々丸、重要データのバックアップを取るの  
基本よ！」

葉加瀬がノートPCから外部のサーバーにアクセスして、茶々丸の  
行動記録を呼び出す。

「え〜っとこの時間は・・・？ 料理はしたけどすぐ終わってる、

その後・・・え？ 茶々丸が蒞弱をな m 「ダメーッ！！」 っ  
ぶ！」

葉加瀬が茶々丸の昨夜の行動記録を読み上げるのを阻止する形で

茶々丸がロケットパンチで葉加瀬を突き飛ばす。

「こ、これは・・・開発者である私に攻撃を加えるなんて・・・

自力でコマンドプログラムの優先順位を書き換えたというのっ・・・  
？

ふ・・・ふふふ 成長したね、茶々丸・・・」

葉加瀬が何かいい顔でブツブツと呟きながら倒れこむ。

「チが・・・違うンデす。 ちガチガガガガガ g ピー  
ッ！」 / / /

「おい、どうした！？」

「茶々丸大丈夫っ！？」

茶々丸が煙を吐いて震えだす。

「ぼ、暴走ですっ！！ 思考回路に負荷がかかりすぎたか！」

「何だと！」 「ちょっと葉加瀬！」

「ち ち 違うんで デ ですーっ！」 / /

「おいつ！ 茶々丸〜！！！」

茶々丸が煙を吐きながら研究室の外へと駆け出す。

「まずい！ なんとか止めないと！」

『アラート！！ アラート！！ 緊急事態発生！！』

試作実験機が暴走！！ 棟内を逃走中！！

工学部職員は全力で捕獲に当たれ！！』

「まずい！ ココの職員に任せたら……大丈夫か、逆に職員の方が危ないですね。」

「アホか！ さっさと茶々丸の居場所を探せ！！！」

「そつよ葉加瀬！ 私達が止めるから場所を随時連絡しなさい。」

『尚 実験機は協力的な光学兵器を搭載している、各員 十分に注意されたし！！』

「エヴァさん、この無線機を持って行ってください！

私がナビゲートします！」

「わかった！ 行くぞ姉様！！」

「ええ、エヴァ！」

私達が葉加瀬に無線を受け取り、研究室から出る時に下の階の方から爆発音が聞こえる。

下に向かっていているようなので、とりあえず階段を降り 下へ向かう。

『エヴァさん！ 茶々丸を見つけたら右胸を押してください、

点検中だったので停止信号を受け入れるはずですよ。』

「わかった、姉様も聞いたな？」

「OK、茶々丸の右胸を揉めばいいのね」

「アホかつ！ 押せといつたんだ！」

『茶々丸は現在エヴァさんたちの進行方向、下にいます。』

「わかった、姉様面倒だから飛び降りるぞ。」

「ん、認識阻害かけてねー。」

私とエヴァは窓から一気に飛び降りる。

落ちる時 視界に茶々丸を確認したので、茶々丸の目の前に降りるように制御する。

「茶々丸っ！」 「みっつけ。」

「っ!？」

いきなり目の前に落ちてきたエヴァと私に茶々丸は戦闘時の反射行動で

手を出し取り押さえようとしますが、私は足払いをして

エヴァが茶々丸の手をそらし回転させ、仰向けにさせて右胸を押し

私は茶々丸の左胸を揉む。

「大丈夫か？ 茶々丸。」

「・・・なんともいえない感触が」

「ま、マスター？ ソプラノ・・・。。。え？」 / / /

茶々丸が左胸を揉んでる私の手を見つめ真っ赤になって止まる。

「何をやってるんだ姉様はっ！？」

「左胸を揉んでも止まるじゃない。」

「アホかーっ！！」 #

エヴァにしこたま殴られ私も停止（気絶）する。

その後、私と茶々丸を回収したエヴァと葉加瀬、工学部の職員の人達、

茶々丸はメンテナンスで研究室に泊まり、

私はエヴァに連絡を受けた千草に引き取られ家に帰った。

家に帰り 目を覚ました私には、



エヴァと千草の二人による詰問と お仕置きが待っていた。

翌朝 超包子

「いやーゴメンネ 茶々丸。

昨日はちょっとやりすぎちゃったよ。」

「い、いえ 私の方こそ工学部棟に多大な損害を……」

「いいのよ、アレくらい、いつものことなんだから。」

「は、はぁ……」

「でも……安心してねー 茶々丸。」

昨日の話、茶々丸が蒟蒻でソプラノとのキスの練習していたのは内緒にしておくから。」

「は、ハカセツ!？」 / / /

真っ赤になってハカセの口を塞ぐ茶々丸。

「んむ〜・・・もあつ！・・・」 / /

「あ、ああ すいません!?」

「・・・ぶはー、いいよ いいよ。」

私もこんな所で言うことじゃなかったしね。」

「すみません。」

「私も悪かったよ、そうだ！ そのお詫びってわけじゃないけど、

次の茶々丸の新機体に機能を追加しておくよ！

キスとかその先のこともできるようにしてあげるからっ！！」 / /

「・・・っ!！」 / / / /

「私に任せておいて！」

完璧に仕上げて どこに出しても恥ずかしくないボディにしてあげる!！」

「あ、あのハカセ、そこまでしていただかなくても・・・」

「だめよ！ やるからには完璧に仕上げてみせる!!」

「・・・すごく恥ずかしけど、茶々丸のためだからね!！」 / /

／／

こうして茶々丸の新しいボディに新たな機能が追加され、

エヴァ家の面々にとって複雑な存在になりつつあった。

「所で、ソプラノは何でウチで働いてるアル？」

「ああ、それは昨日 茶々丸を穢したから慰謝料替わりだよ。」

今、私は葉加瀬が着ている超包子の衣装を借り、

このお店でアルバイトをしています。

「いらっしゃいませ」

「ご注文はお決まりですか？」

「・・・なんで先輩はノリノリなんだ？ 罰ゲームなんじゃないのか。」

「・・・私に聞くな！」

「ウチの旦那さんは何着ても似合いはりますなあ。」

「それは褒め言葉になるのか・・・？」

「さあ？」

「・・・はあ、もういい。さっさと食って行こう、頭が痛くなってきた。」

「ありがとうございました。」

またのご来店を お待ちしています。」

学園祭前の ある一日の出来事だった。

神様から頼まれたお仕事。

その32（後書き）

32話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その33

麻帆良学園女子中等部 3 - A

学園祭開始 数日前。

「ダメだーヤバイよ！」

「間に合わないよーっ！」

「あああ 間に合いませんわ！」

だからもっとうまく決めておくべきだと言ったのに……

ハカセさん達はメカのチェックで……ええと まき絵さん達は内装  
d.....」

我が3 - Aでは学園祭の準備が間に合わず、一分生徒は連日徹夜し  
たり

深夜までの作業に追われ、私とエヴァも珍しく夜まで学校に残って  
作業を手伝っていた。

「こんにちはー」

皆さんどうですか？」

「…………ネギ（君） 先生！…………」

「ヤバイよ ねぎくんっ。」

「間に合わへん。」 「ネギ君手伝ってくれないーっ！」

「まあ ネギ先生に手伝わせるなんてとんでもない！」

「ネギ先生は 先生一年目ですしゆっくりしてらっしゃってくださいね？」

「は、はい。」

「いいじゃんいいinchよ ケチーッ！」

「あ、そつだネギ君！」

私達 学祭でライブイベントに出るんだよー？」

「そつそつ 先生見に来てよ？」

「え、あ ハイ。」

「ああっ ソコズルイですー!」

「さんぽ部の学園一周さんぽイベントにも来てよー!」

「!」 「!」 「!」 「!」

ネギ先生が教室の様子を見に来て作業の進捗を聞くが芳しくない様だ、

委員長を交え話をしていると桜子さん達に学園祭のイベントに誘われ

その触発された他の生徒達にも同じように

次々とそれぞれが参加するイベントに誘われている。

「学園祭の予定かー、エヴァと茶々丸は何か予定あるの?」

「私は囲碁部に参加の予定だ。」

「私は茶道部で野点をしますのでそちらに参加します。」

ソプラノ様もよろしかったら来て下さい。」

「OK、茶々丸。 時間は後で相談しようね。」

囲碁部って最近ポケ ンの交換会場になってることって有名な?

裏ではポ モン部って呼ばれてるらしいじゃない。」



「アレは別に意図してやっているわけではない、気がついたらそう  
なっていたんだ。」

「学園長が名誉顧問をしているからどこも文句が言えないって聞いたよ。」

「……ジジイは元から囲碁部に顔を出していたんだが、  
部室で私とポケ　ンの交換をしていたら

周りも交換して欲しいと言い出して気がついたら……」

「……エヴァ達のせいじゃない。」

「……ぐっ。」

「まあ、それはいいか。　エヴァは囲碁大会で茶々丸が野点か。」

「先輩、どうでもいいけど先輩もコスプレ大会に出るのを忘れない  
でくれよ?」

私達が話していると千雨がやってきた。

「忘れてないよ、私が誘ったんだから。」

衣装の方は準備進んでる?　千雨に任せっきりだけど。」

「進むも何も、もう出来てるよ。」

丁度いいから今夜にでも試着してもらおうか、サイズの調整もした  
いし。」

「ん、OK。じゃあ今夜ね。」

その後も雑談しながら手を進め、

夜の9時頃 千草さんが私を迎えに来るまで作業を続けた。

残ったクラスメイトは、徹夜で作業を進め、表のゲートは完成させたようだ。

翌日 早朝

家で私、エヴァ、千雨、茶々丸、チャチャゼロ、千草さんの6人で朝食を食べる。

今日のメインの当番は千草さんで、和食だ。

「味噌汁に里芋はなかなか合うね。」

「私は豆腐にお揚げの方がいいな。」

「なにいつてんだエヴァ、豆腐とわかめが基本じゃないか？」

「野菜がぎょうさん入ったほうが健康にええと思いますえ？」

「味噌の味が野菜の味で濁るから私はシンプルの方がいいんだ。」

「マスター、もう少し野菜を食べてください。栄養が偏っています。」

「私は栄養よりも味を優先しているんだ。」

「それは嫌いな野菜食いたくない言い訳だろう？」

「そ、そんなことがあるわけ無いだろう！」

私を誰だと思っているんだ！」

「野菜嫌いのお子様だろう？」

「我儂なお子様ちゃうん？」

「マスター、人参を食べてください。」

「エヴァはもう少し偏食を治そうね。」

「うるさい！朝食くらい静かに気持ちよく食べさせろっ！」

味噌汁の好みの話から エヴァの偏食について話が移行し

エヴァが袋叩きにあって怒りだしたので話を変える。

「エヴァは今日のクラス作業は手伝うの？」

「ん、今日は囲碁部の方に行くから 行くとしてもその後だな。」

「じゃあ、私もそれに合わせて行くのかな。」

「私も先輩に合わせよ。」

「そういえば、学園祭の準備もそうだが、ジジイが今朝 学園の魔法使いを集めて

何か打ち合わせをするとか言っていたな。

その時間に広場に来ないように釘を刺されたぞ。」

「じゃあ、あえて来いっていうことかな？」

「芸人じゃないんだから……。」

朝食を済ませた私達は、それぞれの用事を済ませるために外出。

私は家にも暇なので、エヴァと待ち合わせの時間まで

千草と二人で散歩がてら 学祭前の学園の様子を見物することにし

た。

「千草は学園祭はどうするの、

どこか見に行きたい所とかある？」

「ウチは、旦那さんのお供で着いて行きますえ。

こっちの学園の事はわかりまへんから 旦那さんについていきます。」

「そう？ どこか見たい所あつたら言つてね。」

「ありがとうございます。」

千草とのんびり歩きながら学園内を散歩する。

学園内は学祭の準備で皆忙しそうに動きまわっている。

中には学祭が開始する前から既に販売を開始している屋台や、

前夜祭のチケットを売っている人がいたり、独特の賑わいをみせている。

そんな中、何か屋根上を走って かなりの速度で移動している人達

がいた。

見た感じ先頭のフードをかぶった人を追っているような感じだ。

「千草、あの人達なにしてるんだろう?」

「なんや、忙しいですな。」

「・・・? あれ? あのフードの娘はん、超はんやあらへんやろうか?」

「ん? ・・・あぁ、似てるね、追っているのは学園の先生たちみたいだね。」

何かやらかしたのかな?」

「・・・どないします?」

「まあ いいんじゃない? 学園の先生たちが追っているなら

そんなに手荒なことにはならないでしょう?」

最悪記憶消されるかもしれないけど、命に関わることはないでしょ。」

「

「そうですね、ほな 見なかったちゆうことで」

「千草はそういつとこドライだよね。」

「・・・少し 薄情やと思いますか？」

「ん？ いいや。」

私もそうだし。

私も基本 家族が身内以外はあまり気にしないからね。

今回 超は、命の危険はないようだし、

彼女もある程度の危険は承知でやっているからいいでしょう。」

「・・・そうですか。 ほな ウチも旦那さんに家族や思ってくれはるんやね？」

「そうだね、千草はもう私達の家族だね。」

「ほんまですか！ ウチ嬉しいです。」

路上で女子中学生 (見た目は小学校高学年。) と大学生か社会人に見える千草が

いちやついている姿は、仲の良い姉妹にでも見えるのだろうか？

周りの視線が生暖かい。

( 超も原作通り動き出したようだね・・・ )

千草と散歩も終わり、一度家に帰ってお茶、チャチャゼロとのんびりしていた所で

エヴァから連絡があり今からクラスの作業に行くといっているので、千雨と合流し

3 - A へ行き、作業を手伝った。

その甲斐もあり、なんとかお化け屋敷は完成し、

前夜祭にも間に合うことができたので、

千草を呼び皆で前夜祭を楽しむ。

空には飛空船が飛び、花火が打ち上がる。

世界樹がつつすらと神秘的に発光し、夜の空を彩る。

私達は出店を見て回ったり、至る所で行っているイベント等を見て周る。

口の周りにたこ焼きのソースを付けたエヴァに ソースのことをわざと教えずにいたり、



出店のお約束、水風船を千草が鮮やかに取ったり、

コスプレをした人や、ちょっとしたナイトパレードのような行列があったり

幾つかの学園が合同で行っているにしても かなりの規模で、

そこら辺の遊園地のパレードよりも派手に行われている。

今回の前夜祭は私達は制服や私服で参加しているが

明日の本番の学園祭では、皆それぞれの服装で参加することにした。

私も初日は千草とお揃いの和服で参加することにした。

「しかし、この学園のお祭りはすごいんやね、

まるで遊園地のイベントみたいや〜。」

「私も小学生の頃から見てるが、明らかに異常だよな〜。」

規模が大きすぎるし、一つの町ぐるみだからな。

観光客もやって来るって聞くし。」

「この時期はうるさくてかなわんな、学園に通う前だったら

どこかに観光に出かけていたんだが……」

「まあ、もう3回目だから エヴァもいい加減なれたでしょう?」

「なれたというか……呆れたというか……」

「マスターも喜ばれているようで参加してよかったです。」

「まで、私のどこが喜んでいるんだ?」

「……だって……なあ。」

「……ねえ。」

エヴァの姿を見ると……片手に水風船、片手にポテトフライ。

茶々丸が綿菓子とリンゴ飴を持ち、エヴァの頬はたこ焼きのソースが付いている。

誰がどう見ても祭りを全開で楽しむ少女である。

「……な、何だというのだ。」

「何でも無いよ、エヴァはちゃんと淑女として祭りを観覧してるよ。」

「

「そ、そうか？ ならばいいんだ。

・・・あ、おい 茶々丸！ あそこの屋台で本場のわらび餅が出ているぞ、付いて来い！」

「はい、マスター。」

エヴァの様子を見た私たちは、来年も学園祭に参加しようと思い誓った。

学園祭前日 深夜 エヴァ邸

「先輩、この間出来なかったコスプレ大会の衣装の試着、出来なかったから 今やりたいんだけど、いい？」

「ん、いいよ。私は何着るんだっけ？」

「先輩はこっちの衣装だよ。」

「お、かなり出来がいいね　スカートも膨らんで固定されてるし。」

「エヴァがかなり気合入れてたからな。」

出来の方は今までで、最高の出来だと自信を持って言えるぜ！」

「いや、すごい出来だとは思っただけど・・・なんで下着まで用意してあるのさ・・・」

「やるからには完璧にやらないとな、その下着を穿く前に、このサポーターを穿いてくれよ。」

「・・・マジで？」

「マジだ、人にコスプレ大会に出るように行ったのは先輩なんだから先輩もちゃんと約束を果たしてくれないとな、一緒に参加してくれるんだろっ？」

「いや・・・参加はするけど・・・ここまでやるとは思わなかったよ・・・」 / /

「着心地を確認したいから穿いたら後で見せてくれよ？」

「いや！　いい！　遠慮しますっ！！」

こんなの着心地が良くても逆にそっちの方が困るっ！！」 / /

「だめだって！ 衣装はちゃんと確認しないと！」

「マジで勘弁してください。」 or z

この後散々千雨を拝み倒し、なんとか下着の確認は勘弁してもらえたが

その後にエヴァに同じように詰問され、千雨以上に説得に時間を要した。

結果、一応試着はするが 下着姿は見ないということで納得してもらえた。

寝る前に千草と明日着る着物の確認だけして、今日は眠ることにした。

「きょうの学園祭では私達はクラスの方にいかなくてもいいんだっけ？」

「ハイ、私達4人　マスター　ソプラノ様　千雨さん　私　は裏方なので

お化け役のや受付担当の人以外はいかなくていいようです。

そのかわりに午前中にビラ配りが有ります。」

「ん、了解。」

「面倒だな・・・」

「ビラ配りで済んだんだからいいじゃないか。」

なんなら本物の吸血鬼がお化け屋敷に参加するか？」

「・・・馬鹿者、笑い話にもならん・・・そんな羽目になったら屈辱で表も歩けん。」

「ほな、旦那さん。朝ごはん食べたらず着物の着付けをしましょか？」

「りょうかい　千草。」

「姉様は和服か？　私とチャチャゼロは洋装で行くつもりだ、千雨はどうするんだ？」

「メンドクセーぜ。」

「わ、私は制服でいいよ。」

「そうか？ つまらんな・・・お前もたまには着飾ることを覚えておけよ。」

「ちうたんはコスプレ大会で一気に目立とうとしてるんだよ。」

「ああ、なるほど。そこに勝負をかけるわけか。」

「何の勝負だよ！ それに目立とうとは思ってない！

先輩がどうしてもっていうから出るんだ！」 / /

「まあ、そういう事にしておいてやるう。」

「・・・納得がいかねー。」

千雨が不満げにつぶやくが エヴァは意に介さず朝食を済ませていく。

私達も手短に朝食を済ませ、千草と着物の着付けをし、学園祭初日を迎える。

私達は家を出て、ピラ配りのためのチラシを受け取るために教室へ向かう。

その途中でなにやら懐中時計をもってはしゃぐネギ先生と桜咲さんに出会った。

「何をくるくるとはしゃぎ廻っているんだばーや？」

「わひゃあっ！」

「あ……え、エヴァンジェリンさんに 皆さん、おはようございます。」

「あ、エヴァンジェリンさんも仮装ですか？」

お人形みたいでカワイイですねー。」

「ガキの世辞などいらん。

……それより貴様、面白うそうなモノを持っているな？」

「懐中時計ですか？ 今時珍しいものを持ってますね、ネギ先生。」

「せやねー、なかなか面白うそうな感じのする時計ですな。」

「ヒトゴミワラワラ アー殺シテエナー。」

私とエヴァ、千草、千雨もなにやら怪しい視線を送っているが



それに気がついたネギ先生が慌てて時計を懐に隠す。

「えっ………？」

いえ これは そのっ………」

「何だ？ 隠すとは増々怪しいな。」

「ミヨーナマリヨクノ サドウヲカンジルゼ。」

私もネギ先生の懐中時計を確認するが、世界樹の魔力に反応しているように感じる。

（超のカシオペアか……ネギ先生の手は無事渡ったようだね。）

「どれ よこせ。 なぁに 悪いようにはせん。」

「オマエノモノハ ゴシユジンノモノ ゴシユジンノモノモ ゴシ  
ユジンノモノダ。」

「あ、あの…… いえっ……」

すすす すいませーん！

「あっ コラ待てー！！」

ネギ先生と桜咲さんは懐中時計を抱えて走って逃げ、

エヴァとチャチャゼロが追いかけていく。

「エヴァはんの物言いも強引やったけど、なんや おかしな子やっ  
たな〜。」

「あの先生は存在自体がおかしいんだから これくらいどうでもい  
いんだよ。」

ネギ先生に逃げられたのか、エヴァ達が戻ってきた。

「なんなんだあのぼーや？」

ちよつとからかってやっただけなんだが、あの反応は大げさじゃな  
いか？」

「エヴァには色々痛い目に合わされてるから怯えてるんじゃないか  
？」

「そんな訳があるか！」

「いや、あながちそうかも知れまへんで。」

「……おまえもか、天ヶ崎千草。」

「まあまあ、ネギ先生のごことは置いておくとして、まずはビラ配りを終わらせようよ。」

千雨は午後にはコスプレコンテストがあるんだから、時間もあんまり無いことだし。」

「そうだな、ビラ配りなんてさっさと終わらせないと、午前中に遊ぶ時間がなくなるしな。」

「ほな、ウチもお手伝いさせていただきますえ。」

「ツチ・・・しょうが無い。 さっさと行くぞ、貴様ら。」

その後エヴァ達と教室へ行き、チラシを預かりビラ配りに精を出す。

その間に何度もネギ先生や、桜崎さん、他にもネギ先生の関係者を

見かける機会があったが、見るたびに衣装が変わっていたり

至る所で目撃したという話を耳にするので、

カシオペアを使い、いいように遊びまわっているようだった。

ビラ配りはエヴァ達の洋装、私と千草さん、茶道部から駆けつけた茶々丸の和装

千雨の制服効果もあって一気に終わり、午前中は結構な時間がい

たので

それぞれ好きなように行動することにし、

エヴァとチャチャゼロは囲碁部、茶々丸は茶道部、千雨は家に帰り  
衣装のチェック、

私と千草は学園祭を楽しむことにした。

「しかし、昨日の前夜祭もすごかったですけど、今日の本祭もすご  
いですな〜。

朝の開会の時なんか飛行機がとんでましたえ？」

「アレはすごかったねー、花火が一気に上がったり、飛行機が飛ん  
だり、

飛行船から紙吹雪を撒いてたしね。」

「ウチ学園祭や思うて少し舐めてましたわ。

ここまで大規模にやるなんて思いもよりませんでしたえ。」

「私も3回目だけど、何回見ても規模がとんでもないよね〜。」

「なんや朝から熱気がすごおて、気疲れしてしまいましたわ。」

「そうだね・・・少し休憩がてら超のお店にでも行くっか？」

飲茶でも楽しんで休憩しようよ。」

「そうですね、ほな 行きましょか。」

私と千草は二人で超包子に向かい歩いていく。

途中でもやはりネギ先生達に何回か会い、千草が不思議そうにして  
いたが

特に話題になることもなかった。

超包子

「流石に超包子は繁盛しているようですね？」

「？ おお、ソプラノカ、いらっしゃいアル」

「いらっしゃいませー。」

いらっしゃいませ。

「とりあえず軽めのオススメの飲茶を貰えるかな？ 2人分。」

「わかったアルヨ、席について待ってて欲しいネ、持っていくアル。」

「ん、ありがとう。」

「行こうか千草。」

「はいな、お嬢様。」

私と千草、二人で席で待っていると超がお盆に料理を乗せてやってきた。

「おまちどうさまネ。ご注文の超包子 オススメ飲茶セットネ。」

「あ、超 ありがとう。」

「いえいえ、お客さんには当然ヨ。」

ソプラノは学園祭楽しんでる力？」

都合のいいことに超の方から話題を振られたので、応じることにする。

「ええ、午前中はピラ配りがあったのであまり時間は取れてないけどそれでも楽しんでます。」

「そう力、それは良かったネ。」

所で、エヴァンジェリン達はどうしたネ？」

「今は別行動中なんだ、お昼には千雨と一緒にコスプレ大会にでるから」

よかつたら応援に来てね。」

「時間が取れたら応援に行くヨ。」

・・・それならばエヴァンジェリンに伝言を少し頼んでいいかな？」

「いいですよ、どんな内容です？」

「よかつたら今日の夕方から開催する、私主催の武道大会に出て欲しい。」

そう伝えてくれるかな？」

「わかった、エヴァにあつたら伝えておきますね。」

「お願いするネ。」

用件を話し終わったのか、超が仕事に戻ろうとするので

私は聞きたいことを超から聞くことにする。

「ねえ、超。 そっちの方は順調？」

超は表情を変えること無く答える。

「順調ヨ、今の所予定通り進んでいるネ。」

「そう、じゃあ 私も少し本腰を入れて超を落とす気にならないと  
まずいかな？」

「私は高い女だヨ？ それにソプラノにはいい娘達がいるじゃない  
カ。」

「私の勘がね、学園祭で超をゲットしろって言うんだよ。」

「そのためにもここらで超の値段を下げさせないとまずいと思ってね  
。」

「・・・それは怖いことを聞いたね。」

「女の価値を無理やり下げるなんて あまりいい趣味とは言えないヨ  
？」

「超の女としての価値は下げるつもりはないよ、むしろそこは上げ  
ていこうかなど。」

「超の価値は違う所にもあるでしょう？」



そこを私達の土俵にまで持ってこれたら勝てると思うんだよね。」

超の表情が微妙に変わり、笑顔ではあるがそこに感情は感じない。

「……ソプラノは私の邪魔をするつもりなのかな？」

「超が何をするかわからないのに邪魔なんてできるの？」

「……ただ、私や私の家族に害が及ばない限りはどうするつもりもないけど。」

しばらくお互いを見つめ合う。

「……私は何かとんでもないことを見逃しているのかもしれないネ。」

「そう？ それなら超がつまづいたときに 優しく 助け起こしたらチャンスがあるかな？」

つまづいた時のケガまではどうしようもできないけど。」

「そうネ、そういう時弱くなる女もいるようだネ。」

私が それに当てはまるかはその時までわからないけどネ。」

「そうであることを祈ってるよ。」

それにたまには多少強引な所を見せるのもポイント付きそうだし。」

「流石に複数の娘を侍らしている人は言うことが違うネ。」

私はどうせなら一対一がいいネ。」

「……そこはホラ、何とか話し合いや交渉で……だめ？」

「まあ、条件次第だと思うヨ。」

「うまく行くと願いたいよ。」

「それじゃあ、私は仕事があるからこれで失礼するネ。」

お二人はゆっくりしていくといいヨ。」

「ん、ありがと。お仕事頑張っつてね。」

超が仕事に戻り、私も千草と飲茶を楽しむことにした。

事 今回の超の計画に関しては私は絶対的な手札を持っている。

後は勝負の時に私がテーブルについている事と、

最良のタイミングで手札を切ることに集中するだけだ。

「お嬢様、あ考え中のところ申し訳あらへんのやけど。

少しお話ししましょうか？」

「……な、なんででしょうか？」

千草がヤバイ……何がヤバイって目付きがヤバイ、

nice boat を彷彿とさせる目付きをしている。

「えらいあのお嬢ちゃんには 積極的になりはるんですね？」

そつえば、どござにおあずけ食ろつとるお嬢はんもいはりましたな。」

「そ、その事に着いては弁解をさせてもらえないでしょうか？」

「聞きましょうか。」

「あの！ そ、そついう事には雰囲気というものが重要だと思っんですよ。」

空気も読まずに行動に移してはお互いのために良くないと思いません。

「……それで、おあずけ食わしてると?」

「そ、そういう意図では全く御座いませんで……」

ただ、最近何かとあってそう言った雰囲気作りというもの……その。」

「せやったら、いつになったら雰囲気作りができますのや?」

「……いつと申ししても……。」

「つまりお嬢様にヤル気がないということですか?」

「い、いえ! 決してそのようなことでは!」

「ほなら、その気になったらいつでも雰囲気を作れる言うことですよるか?」

「そこまでは申しませんが、最大限の努力はさせて頂く所存であります。」

黙りこみお茶を口にする千草、私はその間判決を待つ被告のような心境で

千草が口を開くのを黙って待つ。

「まあ、今日は外言つこともありませんんで この辺にしておきましょか。」

「あ、ありがとうございます。」

「せやけど、そこまで言い張りましたんや。」

今夜、長くても学園祭期間中には何とかしてくれはるんやろ？ ソプラノはん？」

名前を呼ばれてここまで恐怖を覚えたのは今日が初めてだ・・・

と、とにかく、学園祭期間中に何とかしないと何が起こるか想像もつかない・・・

いや、想像したくない！

とにかく私の学園祭期間中は 今 この時を持って人生最大の危険な期間となった。

神様から頼まれたお仕事。

その33（後書き）

33話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その34

麻帆良学園 学園祭 1日目 昼

「千雨、準備できた？」

「ああ、こっちは準備OKだぜ、先輩。」

私と千雨は学園祭ゲリライベントのコスプレ大会に参加するため、  
衣装や小物を持ってイベント会場に向かう準備をしている。

「それじゃあ、千草はイベントの間は自由に学園祭を楽しんできて  
ね。」

私達はイベントが終わり次第、家に戻ってくるから 合流するなら  
その時間に合流ということだ。」

「はいな、旦那さんたちも頑張っておくれやす。」

千草は私達に着いて来たいと言ったが、千雨が恥ずかしいから来るな、と

ゴネたので付いてくるのを諦めたようだ・・・表向きは。

「それじゃあ千雨行こうか？」

「ん、それじゃあ千草さん、行ってきます。」

「いつてらっしゃい。」

荷物を持って家を出て、イベント会場へ向かう。

会場に更衣室が用意されているので、着替は向こうですることになっている。

「結構ギリギリだけど、イベント開始の時間には間に合うの？」

「着替えの時間いれても十分間に合うからいいんだよ・・・」

会場にはできるだけ長く居たくねーからな。」

「え〜なんで？」

「なんでって・・・恥ずかしいし、あそこには私のHPを見る奴らも来るらしいから」



あまり話したくないんだよ。」

「そう？ 人によってはそういう人と交流するのが楽しいっていう人もいるみたいだけど。」

「私は逆に ネットとリアルは分けたいんだ。」

「千雨がそう言うなら仕方ないか。」

イベント会場に千雨と雑談しながら向かい、

参加受付のギリギリの時間に会場に到着、2人で受付を済ませることにした。

「参加名はどうする？」

「私はHPのハンドル名で行くよ、先輩はどうするんだ？」

「実名はさすがにまずいだろうし。」

「そうだね、そこまで考えてなかったよ。」

「じゃあ、とりあえず ちう妹 ってことにしておいて。」

「……なんだよそれ。 やっつけもいいところだろう。」

「いいんだよ、今日だけだしね。」

「まあ、先輩がそれでいいならいいけど……」

そうして参加受付を終わらせ、更衣室へ向かう。

「あ、先輩ちよっとまってくれ。」

「ん？ どうしたの？」

「ちよっとトイレに付いてきてくれないか？」

「……え？ 千雨……そういう趣味なの？」

お姉ちゃん……恥ずかしいけど、千雨が望むなら……頑張るよ……」  
／／

「ちげーよっ！！」

更衣室でバレるとまずいからトイレで着替えるんだよ！」  
／／

「あ、そういう事ね。」

勘違いしちゃった。」

「どんな勘違いだよ……」

とりあえず、トイレで人払いと認識障害使って、人がいなくなった  
ら着替えよっぜ。」

「ん、了解。」

私達はトイレで認識障害を使い衣装に着替える。

途中で衣装の着方がわからず千雨に手伝ってもらい

なんとか無事 着替えることができた。

コスプレ大会 参加者控え室

「結構参加する人が多いね。」

「このイベント自体 ゲリラ的にやってるイベントだけど

その筋では有名なんだ。」

「そっか〜・・・あ、アレ千雨が前HPに載せるのに着てたことあるキャラじゃない?」

「ああ、あのキャラは前やったことがあるな。

だけど縫製が少し甘いな、遠目じゃわからないけど近くで見られると目立つな。」

「そういうと千雨はエヴァに似て職人肌だね。」

「……………あいつに似てる……………私が？」 1111

千雨の中では、エヴァに似てる というのは褒め言葉にはならない ようだ。

……………まあ、なんとなくわからなくもない。

控え室では、私達を見て話をしている人や、遠目にチラチラとこち  
らを見る人達がいる。

千雨はその筋では有名なので目をつけられているのだろうか？

さっきの話で少しブルーが入った千雨を励ましてる間に

とうとうイベントが開始され、参加登録順に名前が呼ばれていく。

「とうとう始まったみたいだね。」

「ああ、先輩は台詞やポーズの方は大丈夫か？」

「ああ、問題ない。」

「……………その台詞は不吉だからやめてくれ。」

「最高のポーズを頼む。」

「・・・だまれ。」

「すみません。」

でも、本当に大丈夫だよ、アレだけ千雨に仕込まれたんだから。」

「まあ、先輩は演技力だけは なぜか異様に高いからな。」

私も思わず抱きしめそうになったし。」

「人生長く生きてると色々あるんだよ。」

「どんなことがあれば声まで変わるんだよ。」

聴き比べでもしない限り素人には判断つかないレベルだぞ。」

「ちうたんだって出来てるじゃない。」

「私はこの服の認識阻害効果を利用してるんだよ。」

そう、今私と千雨は殆ど同じ声でしゃべっているのだから

傍から見ると どちらがしゃべっているのかわからないのだ。

周りも少し困惑した表情でこちらを見ている。

そうこうしている間にもイベントは進行していく。

某朝の子ども向けアニメの白黒のペアがいたり、マニア向けのキラの人がいたり

中には初期のバツタ型 改造人間の人もいたりして、なかなかカオスの状況だ。

「ちうたん、もうすぐ私達の番だよ。」

「私達で最後だから気合入れねーとな。」

先輩が先に出て場を盛り上げて、私がそれを潰すから 手はず通りに頼むよ。」

「了解〜。」

そして私達の出番がやってきた。

『それでは今回のコスプレ大会最後の参加者です！

19番と20番、ペアでの登録で観客の皆様の中にも

この名を知ってる人がいることでしょう。

それでは登場してもらいましょう、登録名　ちづさんと　ちづ妹  
さん　ですっ！ー！』

私達の登録名が呼ばれたので先行して私が出陣する。

私は舞台の真ん中に小走りで向かい、ワザと途中でつまずいて転び  
そうになる。

その際に客席から　あぶない！　などの声上がる。

そうして舞台の真ん中に立ち、レイ八さんを両手で握り締め、

少し赤面し緊張した様子で自己紹介を始める。

「わ、私、高町な　は9歳　小学3年生です！」

私の自己紹介で客席が盛り上がったので一気に畳み掛ける。

レイ八さんを脇に抱え、私はツインテールの片方のリボンを解き、

涙目で解いたりボンを客席の方に向け台詞を放つ。

「……名前を、呼んで？」

この台詞で 知ってる人は な は コールの合唱。

知らない人も後につられて名前を呼ぶ人が現れ、会場は大盛り上がり、

・・・しかしその時 大どんでん返しで、舞台の上 看板の影から  
千雨が降りてきて

客席に向け指を指し言い放つ。

「・・・すこし、頭冷やそうか？」

千雨が現れた瞬間 異様な威圧感が会場を支配し、

ご丁寧に千雨の目付きはTV版、その表情で言われた台詞で一気に  
会場は静まり返る。

私もそれに合わせてレイ八さんを客席に迎え構え

威圧した表情で客席を見つめる。

沈黙が支配する客席、しばらくするとアチラコチラから

「魔王だ・・・」 「・・・白い悪魔だ。」 「二人もいる・・・  
終わった。」



「・・・管理局の悪魔が現れた。」 「魔王が降臨した・・・」  
「もう終わりだ・・・」

などと聞こえだし、客席が絶望に包まれる。

そして私のレイ八さんと千雨の指先がピンクに光りだし

光が膨れ上がっていく、それに合わせて客席が阿鼻叫喚に包まれる。

私達の杖や指先の光が最高に大きくなった時、

パン！ と言うクラッカーの音のようなものが聞こえ

杖や千雨の手袋から紙吹雪が飛びだし客席に降り注ぐ。

呆然とする客席に向かい千雨が微笑みながら台詞を放つ。

「私達の教導の意味、分かってくれた？」

客席で何が起こったのか理解するのに数秒かかったが

少しの沈黙の後、一気に拍手や歓声が沸き起こる。

客席の歓声に応え、控えめに手を振り最後に笑顔で自己紹介をして  
舞台を後にする。

「ちつと・・・」 「その妹、」

「二人で大小そろって 高町な はでした」

その後の大会での結果を見ずに私達は会場から逃げ出し

急いでトイレで着替え家に帰宅した。

後でネットで知ったのだが、優勝は私達二人だったようだ。

イベント以降の千雨のHPではアクセスが殺到し、

私の事や、何故最後の表彰式に出なかったのか？

イベント時の衣装の写真は公開しないのか？ 今後のイベントの参加予定は？

などの質問があったと言う話だ。

コスプレイベントが終了して私達はエヴァの家に帰宅。

帰る途中、広場で龍宮さんがネギ先生とモデルガンで大量虐殺を行っていたが

・・・彼女、日頃の生活に何か不満でもあるんだろうか？

帰宅後千雨はHPの更新をするということでノートPCで作業を開始、

私は千草がまだ帰ってきていないようなので、

お茶でも飲みながら千草の帰り待つことにした。

陽も陰ってきた頃、家の呼び鈴がなったので私が応対に出てみると夕映がメイドのような服を着て立っていた。

「こんにちはです、ソプラノ。」

「こんにちは 夕映、さあ 入ってよ、お茶でも入れるよ。」

「いいえ、今日はソプラノとこれから学園祭を見てまわろうと思つて誘いに来たんです。」

「あ、そうなんだ

じゃあ少し待ってて、千雨に伝言だけ頼んでおくから。」

「はいです。」

私は家に戻り千雨に夕映と出かけてくる旨を千草に伝えてもらえるように頼んで

簡単に身だしなみを整えて夕映と学園祭見物に出かけた。

「実はソプラノに少し離しておきたいことがあります。・・・。」

「ん？ 何？ 大事なこと？」

「いえ、特別何かあったという訳ではないのですが、少し気になります。

信じてもらえるかわかりませんが・・・ネギ先生が、

超さんからタイムマシンを借りたと言い出しまして・・・

私も実際に信じられないのですが、ネギ先生が二人いたんです。」

「・・・あれか、それって懐中時計みたいな形じゃなかった？」

「知ってるんですか!？」

「いや、夕映に話を聞くまでは知らなかったけど、今朝ネギ先生に会った時に

持っててね、怪しい魔力反応があったからエヴァが取り上げようと

したんだけど

逃げられちゃって・・・そういう事だったんだね。」

「・・・はい、超さんから借りたというのも怪しいのですが

実際にネギ先生は二人いましたし・・・」

「んー、そうか・・・ねえ、夕映これから少しエヴァの所に行きたいんだけど

付いてきてくれる？」

「はい、わかりました。」

夕映の話を聞きエヴァに カシオペアの機能を話す口実になったので  
超に頼まれた武闘大会参加のこともあったのでエヴァのいる囲碁部  
に向かうことにする。

その道中・・・

「あ、あのソプラノ！」

「どうしたの 夕映？」

「そ、ソプラノは学園祭の最終日は何か予定はあるんですか？」

「私は特に予定はないよ、誰か家の人と回ろうかなって思ってたくらいかな。」

「そ、それなら私と一緒に見て回りませんか!？」

「いいよ、それじゃあどこかで待ち合わせでもする?」

「それでは朝にでも私が迎えに行くですよ。」

「了解、じゃあ最終日の朝ね。」

「ハイ」

それ以来上機嫌の夕映と囲碁部まで手をつないで向かった。

囲碁部に付き、受付をやっている娘にエヴァを呼んでもらい、

エヴァとチャチャゼロと夕映、道中で茶道部に寄り 茶々丸と合流し

5人でオープンカフェに入り、今後のことを話すことにした。

「……ふむ、と 言うことはばーやはその時計を使って学園祭を  
何回も

廻っているということか。」

「そう聞いてるです。少なくとも私と会った時は3回目だと聞いたです。」

「で、姉様は超から私に武道大会に出て欲しいと頼まれた訳か。」

「そうだね、そう伝えるように頼まれたよ。」

チャチャゼロが好きそんな話題だが、外ということもあり今は黙っている。

「そもそも、超鈴音が今回の学園祭で謀を企んでいることは知っているが、

私に武道大会に出るよう進めたことは、恐らくそれほど重要ではあるまい。

当初から私は中立を貫くと伝えてある。

だが、坊やにそんなシロモノを渡した意図はなんだ？」

「ネギ先生の言ってることを100%信じるとして、

超はタイムマシンを作れてネギ先生に渡した。

ネギ先生を使つて実験？・・・ネギ先生を自分の計画に引き込むため？」

「超の性格上、人体実験をするなら自分の体を使うだろう。」

「・・・しかし、ぼーやは、単純に学園祭を楽しんでいるんだよね？」

「そうですね、何か隠し事があるような感じでは無かったですし・・・」

「あのぼーやに隠し事は無理だからな、綾瀬がそう言うなら間違いないだろう。」

超はもともと学園の連中には目をつけられていた、

単純に立場を考えるのならぼーやが超に着くことは考えにくい。

説得するとしても、あのぼーやのことだ、

ジジイ達と話し合えと逆に超を説得にかかるだろう。」

「エヴァさんは超さんの計画を知っているんですね？」

それを教えてもらうわけにはいかないんですか？」

超の目的がはっきりしないことに焦れた夕映がエヴァから聞くこととする。

「・・・ああ、目的と概要だけな、だが超と約束した以上



お前たちに話すわけにはいかん、私にも立場というものがある。」

「では、ネギ先生を引きこむことに失敗した場合、超さんはどう出ると思うですか？」

「まず、排除にかかるだろうな。」

あいつの性格からしてばーやの命を奪うという選択を取る可能性は低いが

何らかの方法で排除するだろう。」

「危害を加えずに排除する ですか・・・超さんはネギ先生にタイムマシンを渡した、

ネギ先生は実際に過去に何回も戻って着ては学園祭を楽しんでいる・・・」

夕映が考え込んで話が途切れたので、

エヴァに意見を聞いてみようと思ひ、私は前から思っていた疑問を口に出す。

「そのネギ先生が飛んだ過去が、本当に過去なのかな？」

私はそのあたり疑問だね。」

「しかし実際ぼーやは最低二人目撃されてるぞ。」

ん？ そついえば今日はよくぼーやを見かけると思ったな・・・過去に戻っているからか？」

「その過去が誰の主観の過去なのかね・・・」

少なくともネギ先生本人に取っては過去じゃないと私は思うな。」

「ん？ まあ、確かにぼーやが3回分の記憶を持って学園祭を何回も廻っているなら

ぼーやにとつての時間は過去に戻っているとは言えないが

状況は間違いなく過去に戻っているだろう。」

「・・・その辺、超はどう考えているのか、お姉ちゃんはその思いますよ。」

「・・・姉様・・・何を知っている？」

急に話が超に飛んだことに訝しんだものの、

私が超の計画を知っているのではないかと、と言つ疑問がエヴァから出る。

「エヴァは気にしないでいいよ、中立なんですよっ？」

「うち・・・まあ、いい。」

それで綾瀬、超がぼーやにタイムマシンを渡した意図がわかったか？」

「もう少し待ってください・・・タイムマシン・・・時を移動する道具・・・時？」

過去に行ける・・・なら未来は？」

夕映が思考の海に飲まれているようなので

私はエヴァと別の話をする。

「それでエヴァ、武道大会はどうするの？」

「は？ そんな面倒なもの出るわけがないだろう。」

「え？ 出ないの？ 多分超が主催してるくらいだからクラスの人とか他にもいろんな人が出ると思うよ？」

「だからどうだと言っただ、興味がない。」

「お姉ちゃんエヴァのカッコいい所みたいなの。」

「なら後で模擬戦でも何でもしてやる。」

「そもそも、そんなに気になるのらば自分で出ればいいじゃないか？」

「私は病弱キャラだもん、出ようとしても止められるか参加拒否されるよ。」

「超なら認めそうな気がするぞ？」

「そもそも 私は超に誘われてないし。」

「何故 姉様はそこまで私を出そうとするんだ？」

「……まさか、私を出場させる事で 奴に貸しても作るうと思ってるんじゃないだろうな？」

「……バレた？」

「絶対に出ないぞっ！！」

「ちえー………そうだ じゃあ一緒に出ようよ。」

「はあ？ さっき自分で止められると言ったではないか、意味がわからん。」

「だから私とエヴァ、セットで出るんだよ。」

「二人一組で。」

「そんなルールがあるのか？」

「ない。」

「だめじゃないか。」

「超なら認めるよ、きっと。」

茶々丸お願い。」

「承知。」

私は茶々丸の連絡用回線で超に連絡をとってもらい経緯を説明する。

「……お前達、何故そこまで息がぴったりなんだ？」

打ち合わせでもしていたのか？」

「気にしないで。」 「気にしないでください、マスター。」

超が回線に出たので早速話をすすめる。

「あ、超？ エヴァの武道大会の事でちょっと話があった。」

『どうしたネ？ やっぱり断られた力？』

「そうなんだ、そこでお姉ちゃん ちょっとアイデアが浮かびまし

た。」

『どづいづことカ？』

「カクカクシカジカ……と言つことと私とエヴァ、セットで出れるようにならない？」

『まるまるつまつまと言つことカ……それならこれでどうかナ、

二人にセットで出られると賞金を確実に持って行かれるから 私としても困るネ、

そこで ソプラノには帽子でもかぶってもらつて、

それを取られたらアウトということとでどうかナ？

どうせ、ソプラノはまともに戦つつもりなんて無いんだろつし

エヴァンジェリンにもいいハンデになると思つネ。』

超が少し考えこんで妥協案を出してきた。

「ん、それでいいよ。」

「ちよつと待て！ 私は出るなんて一言も言っていないぞっ！……」

『じゃあ、それで進めるネ。』

「お願いね。これでエヴァが出ることになったんだから貸し1ね。」

「おい！ 私はでないぞ」「マスター、お静かに。」お前は誰の従者なんだっ!？」

『……押し売りみたいな手口ネ……少し悪辣だが

エヴァンジェリンに出て貰えるのは大きいからよしとするネ。』

「超ゲットまで確実に一歩進んだね、覚悟しておいてよ。」

『どんな覚悟が必要か恐ろしい物を感じるヨ……』

それでは私は準備があるからコレで切るヨ。』

「ん、それじゃあね。」

超との回線が切れ、無事武道大会に出れることが決まった。

「勝手に話を進めるな！ 私は絶対に出ないぞっ!!」

「……なら、エヴァは私が武道大会に出るような男達に

好きなように弄ばれてもいいと言っの?」

「姉様が自分で戦えばいいだろう!」

「私は病弱だから戦うなんて無理だよ・・・エヴァだけが頼りなの  
に・・・」

エヴァへの常套手段、泣き落としにかかる。

「・・・つく、その手はもう効かんぞ！　そうそう姉様の好きなよ  
うにされてたまるか！」

「茶々丸・・・エヴァのせいで私がお嫁に行けないカラダにされた  
ら、私を貰ってくれる？」

「ソプラノ様・・・主人の咎は従者の咎、私が生涯お守りします。」

「茶々丸・・・」　「ソプラノ様・・・」

エヴァをチラ見すると　何か文句を言いたいが、言ったら負けだと  
思っているのか

顔を真っ赤にして歯ぎしりをしている。

「大丈夫ですよ、ソプラノ！　私が一緒に出て守ります！！」

ソプラノに何かあっても私が一生側に居るですよ！！」



ココに来て思わぬ参戦、夕映が飛び入り参加をしてきた。

これにはさすがに黙ってられないのか、エヴァが食って掛かる。

「何を言い出すんだ綾瀬夕映！！ 姉様には私が居る、貴様は引っ込んでいろ！！」

「ソプラノを一人野獣の群れに放り出すくせにエヴァンジェリンさんは黙っているです！！」

「何が野獣の群れだ！ ただの武道大会だろう！！」

「そんな所 私に言わせれば野獣の群れです！

ソプラノ一人行かせる訳にはいかないです！！」

「貴様のような未熟者に姉様を任せて置けるか！

私が出て、姉様には何人たりとも指一本触れさせんっ！！」

「・・・茶々丸さん、録音しましたか？」

「はい、さすが綾瀬様です。」

「・・・え？」

「ソプラノ、エヴァンジェリンさんが一緒に出てくれるそうですよ。  
よかったですね。」

「あ……ありがとうございます?」

(え? まさか……夕映、エヴァを煽った今のは 計算……?  
)

何が起こったのかいまいち理解出来ないエヴァと

夕映の恐ろしさを知り、狐につままれたような表情の私。

「エヴァンジェリンさんとは それなりに長く濃い付き合いをさせてもらっているんです、

コレくらいはさせてもらわないと……」

「綾瀬 夕映……貴様……」 1111

日頃のエヴァの修行に千草の修行、夕映の中で何かが変わりつつあるようだ……

「でも、ソプラノを守るのも、何かあっても一生側に居るといっても本心ですよ？」

「あ、ありがとう 夕映。」 / /

私の手を両手で握って真っ直ぐ見つめながらそう告げる 夕映。

どこまでが計算でどこまでが本心なのか分からなくなり

混乱する私だった・・・

side 夕映

（千草さんに教えてもらった通り、

エヴァンジェリンさんはソプラノのことで熱くなった時が隙だらけになりますね。）

- ・ 夕映に強力な助言者が付いていることを エヴァは知らなかった・

神様から頼まれたお仕事。

その34（後書き）

34話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その35

麻帆良学園祭 初日 夕方

「ほら、エヴァももういい加減機嫌を直してよ？」

「……………ふんっ！」 #

「コンナ オモシロソウナハナシノ ナニガキニイラナインダ ゴシュジン？」

「エヴァも出るって決めたなら何時までも拗ねるなよ。」

「そうですねエヴァンジェリンさん、頑張ってソプラノを守るですよ。」

「貴様が言うな綾瀬夕映、この事は一生忘れんからな！」

「エヴァはんも機嫌直してえな、今晚はエヴァはんの好きな食事作るえ？」

「私も頑張って作ります、マスター。」

現在 私達は武道大会に参加するため、会場に向かっているが、エヴァが一向に機嫌を直してくれないので 皆で機嫌をとりながら移動している。

会場に近づくに連れ、エヴァの機嫌の悪さも加速度的に増していく、流石にこのままではまずいのでエヴァの機嫌を取るため

皆で 何かいい案はないかと悩んでいた。

『どうする？ 流石にこのままだとエヴァがキレて大会をぶち壊す可能性も出てきたよ・・・』

『そうなくても別にええんとちゃいますか？』

それはそれで面白そうや。』

『いや、ダメだろう。 エヴァが切れるのはいいが騒ぎを起こしたら先生達も』

さすがに黙ってないだろう？』

『そうですね、騒ぎを起こすのはまずいんじゃないでしょうか。』

『・・・ほとんどお前が原因だな。』

『あ、アレは・・・ソプラノに良かれと思って話を持っていっただけで・・・』

『まあ、今はエヴァの機嫌だ。』

手っ取り早いのは先輩が生贄になることじゃないか？

・・・腹がたつけど。』 #

『それはあきまへん！　ウチは反対や。』

『？　ソプラノが生贄とはどういう意味です？』

『綾瀬さんは知らない方がいいと思います。』

『？？　茶々丸さんがそう言うなら深くは聞きませんが・・・』

『じゃあどうするんだよ？　今の状態のエヴァの機嫌をとるなんて私達には無理だぞ？』

『・・・無理やね。』 『無理です。』 『無理ですね。』  
ムリだ。』

『・・・しょうが無い　ココは私が一肌脱ぐしか。』

『それはあきまして！』

『よくわかりませんが、嫌な予感がするので反対です。』



皆で何か方法はないか考えるが一向にいい案が出ない。

そうしている間にも予選が行われる会場 龍宮神社に着いてしまい、

エヴァの機嫌が最悪になった。

「ね、ねえ エヴァ？」

「・・・なんだ？」 #

エヴァがいかにも 『私キレてます。』 というヤバイ表情で私達を睨みつける、

それを見た皆が 我先にとその場から逃げ出そうとする。

「あ、私観客席の方で応援してるから、二人共頑張つてな！」 1  
11

「ウチらも応援してますさかい、頑張ってくださいな。」

行きましたよか？ 夕映はん。」

「は、はい、ソプラノ、エヴァンジェリンさん頑張ってくださいね。」 1111

「マスター、お二人は超さんの所に行く予定でしたね？」

私はこれから少し用事がありますのでこれで失礼します。

姉さんは客席で千雨さんと一緒にいてください。」

「ジャーナ　ゴシユジン。」

特別枠で参加するため、超の所に行かなければいけないとは言え、

私一人、皆に見捨てられエヴァと二人つきりで置いて行かれる。

私はエヴァと腕を組んでいるので逃げられない・・・

ココは腹を括り、決死の覚悟でエヴァのご機嫌取りに全力を出す。

「ほら　エヴァ、とりあえず超の所に行こ？」

「・・・・・・・・ああ。」

(声が低っ！？　これは相当頭に来てるな。)

「ね、ねえエヴァ？　そろそろ機嫌を直してくれないかな？・・・  
」？

「・・・・・・・・誰のせいだと思っているんだ？」　#

「私のせいです。」 1111

「……大体最近の姉様はだな、千雨にはいいように扱われ手を出す、

オマケに千草、綾瀬と続いて女に手を出した挙句、今度は超鈴音だ。いったい何人の女に手を出せば気が済むんだ？」

これは不味い、夕映への怒りかと思っただけなら矛先が私に向いてしまった。

「手を出してしまったのは千雨だけでして……。」

「言い訳をするな！ 綾瀬はともかく千草はどうせ手を出すつもりなんだろう？」

「……まあ、私もガキじゃない。あの二人なら認めてやらんこともないが、

姉様の正妻は誰だ？」

「エヴァです。」

「分かっているのなら 最近私に対する態度に問題があるとは思わないか？」

「……ほとんど毎晩エヴァとは夜を共にしていると思いますが。」

「そういう話じゃないっ！ そんな話をこんな場所で持ち出すな！」  
／／

この話ではないようだ。

「姉様は今日の午前中、学園祭を千草と回ったよな？」

昼は千雨とイベントにも出たそうだな？

私とは何時回るつもりなんだ？」

「エヴァの囲碁部へは先日顔を出しましたし 二日目にも顔を出す予定です。」

「それだけか？」

(ここで下手なことは言えない……)

確か最終日は夕映との約束があったが午前中だけにしてもらって、

最終日の午後から翌日までエヴァの予定を組めばなんとか……)

「……最終日の午後から時間をいただけないでしょうか？」

翌日の朝まで 全力でお世話をさせていただきたいと思えます。」

「ほう？ 姉様が私の世話をしてくれるのか？」

学園祭最終日の午後から振替休日すべて使って。」

学園祭の振替休日は何日あっただろうか・・・

少なくともここでの選択肢は一つだけ、

それにエヴァが私に嫉妬してくれていたのが すごく嬉しい。

この状況で私に断るといふ選択は存在しない。

「うん 私がエヴァをお世話するよ！」

「・・・な、なんだ気持ち悪い・・・姉様は何を企んでいる？」

「何も企んでないよ、エヴァは私が皆と仲良くしてるから嫉妬してくれただよね」

「ぶふうっ！ ば、馬鹿を言うな！！ この私が嫉妬などするわけ無いだろうっ！？」 / /

「恥ずかしくなくてもいいよ、私はエヴァのお姉ちゃんで旦那さんだからね。」

エヴァのことはなんでも分かるんだよ？」

エヴァも嫉妬発言で完全に毒消を抜かれたのか、

私の愛情100%の態度にしどろもどろになり、怒りも霧散したよ  
うだ。

「…………ちっ！　そ、そこまで言っただったら覚悟しておけよ！  
散々こき使ってやるっ！！」

「エヴァの愛情表現は歪だけど、お姉ちゃんは受け止めてみせるよ  
！！」

「…………もう好きにしるっ！！」　／／／

私はエヴァとベツタリと腕を組み、恥ずかしそうにするエヴァを連  
れて

超の元へ向かう。

「……………どついう状況力？」

出会い頭に困惑する超。

「貴様が私に参加するように言い出したんだろっが!!」

この貸しは高くつくと思えよ!!」

「エヴァのことは気にしないで、恥ずかしがってるだけだから。」

「姉様は黙っている!!」 / /

「……まあ、そう言っなら話を進めるヨ?」

ソプラノにはこの帽子をかぶってもらって、それを取られたら負け

ということにさせてもらっネ。」

「……ふん、姉様に近づけなければいいんだろっ? 楽勝だ。」

「いや、少しは手加減して欲しいネ。」

ソプラノはその格好でいいのか?」

超に指摘されて自分の格好を確認するが、一度家に帰り着替えたので、

今はエヴァと対になった色でリボンの多いフレアスカートの洋服

エヴァは色違いで白い服を着ている。

「私達はこのままで問題ない。」

「どうせそれほど動く必要もないしな。」

「それではこの帽子を持って私に着いて来て欲しいネ、

これから開会式とルールの説明をするから、その時にエヴァ達のことを説明するヨ。」

「ん、りょーかい。」

「面倒だな・・・」

超に渡された、いかにもお嬢様風の白いリボンが付いてる黒いつば広帽子

私は帽子をかぶり、エヴァと腕を組んで超についていく。

「あれ？ エヴァちゃんにソプラノちゃんじゃん、どうしたのこんな所で？」

「朝倉さん、こんにちわ。」

「ふん、貴様か。」

「朝倉には今回の大会の司会を頼んでいるんだヨ。」



「そういう事　二人は今日はどうしたの？」

「私達は特別枠で参加する予定なんですよ。」

「へ・・・？　二人が？　エヴァちゃんとはとかくソプラノちゃんは大丈夫なの？」

「それも含めてこれからルール説明の時に話すネ。

行こうか、朝倉サン。」

「おっけ～。　さあ、景気よくやるよ～」

マイクを持ってノリノリの朝倉さんが、拜殿の表に出て参加者達に向かって

開催の挨拶をする。

「ようこそ！！　麻帆良生徒及び　学生及び　部外者の皆様！！

復活した　『まほら武道会』　へ！！

突然の告知に関わらずこれ程の人数が集まってくれたことを感謝します！！」

朝倉さんの挨拶で皆がコチラを注目し話を聞く体制に入る。

参加者をよく見ると、見知った顔が何人か見える。

「ほらほら、エヴァ、ネギ先生達や古ちゃん達も参加するみたいだよ？」

「ふん、私の相手にもならん。」

朝倉さんにより、簡単な大会の説明が行われる。

「優勝賞金一千万円！！」

伝統ある大会優勝者の栄誉とこの賞金 見事その手に掴んでください！！！！

では、今大会の主催者より開会の挨拶を・・・

学園人気 NO.1 屋台 『超包子』 オーナー 超 鈴音！！！！

ネギ先生達、3-A関係者は皆驚いているようだ。

「私が・・・この大会を買収して復活させた理由はただひとつネ。

表の世界、裏の世界を問わず この学園の最強を見たい、それだけネ。」

観客席がざわめく、一般人には裏の世界 というのが検討あつかないようだ。

「20数年前まで！」

この大会は元々裏の世界の者達が力を競う伝統的大会だたヨ。

しかし主に個人用ビデオカメラなどの記録器材の発達と普及により  
使い手たちは技の使用を自粛 大会自体も形骸化 規模は縮小の一  
途をだたと・・・

だが 私はここに最盛期の 『まほら武道会』 を復活させるネ！  
飛び道具及び刃物の使用禁止・・・そして呪文詠唱の禁止！！

この2点を守ればいかなる技を使用してもOKネ！！」

呪文詠唱の説明の所で魔法関係者の表情が変わる。

「案ずることはないヨ、今のこの時代 映像記録がなければ誰も何も信じない。

大会中 この龍宮神社では完全な電子的措置により

携帯カメラを含む一切の記録機器は使用できなくするネ。

裏の世界の者はその力を存分に振るうがヨロシ！！

表の世界の者は真の力を目撃して見聞を広めてもらえればこれ幸いネ！！

以上！！」

「では詳細の説明に移らせていただきます！！」

朝倉さんによる ルール説明が行われる。

その間に私は夕映達と念話で先程の超の発言について話す。

『さて、皆はどう思った？』

『怪しいです。』

あの言い方では魔法使いに魔法を使え、と促しているように聞こえるんです。』

『そうだよな、賞金をちらつかせて魔法使いの生徒辺りに魔法を使わせようとしてるように聞こえるよな。』

『記録には残さないから魔法を使え・・・ですか。』

しかし もし超さんが記録に残していたら・・・？』

『まあ、あの超のやることだ、間違い無く記録してるぜ。』

『せやるな。では、その意図はなんやる？』

魔法使いに魔法を使わせて記録、それを使って何をするんやる？

脅迫にしてはやることが大げさすぎやしな。』

『この大会で撮った映像を元に学園を脅迫したところで

組織の力が違いますから潰されるのがオチですよ。

それにネギ先生に渡した時計がこの大会に繋がりません。』

『そもそも、脅迫するとして何が目的だ？』

金が欲しいなら あの超だ、普通に稼いだほうが安全だし確実だろ  
うし、

タイムマシンなんか持ってるんだ、クジでも買えよって話だ。』

『わかりまへんな、情報が少なすぎて。』

皆は超の真の目的について議論を交わすが、

いまいち判断がつかないようだ。

そうこうしている間にルール説明が進行し、私達の話になるようだ。

「さて、今司会からルールの説明をしてもらたが

私の方から特別な参加者を紹介したいネ。」

超の合図と共に私とエヴァにライトが当てられる。

それに合わせて私はお辞儀をする。

「この二人、血はつながってないが姉妹で私のクラスメイトね。

今回、この二人にはペアで特別に参加を許可したヨ。」

超の発言により参加者の方から疑問の声が上がったり

私達を知っている人達からも　なぜ？　と言った声が上がっている。

「彼女、黒髪の姉の方の話なのだが、彼女は病弱で入退院を繰り返して

今回の学園祭でも多くのイベントに参加できずに悲しい思いをしていたネ。

学園に所属していながら学園祭のイベントに参加できない彼女のため

クラスメイトの私が主催するこの大会に

特別枠として妹と共に参加をすることを私が進めたネ。

姉の方はもちろんただの素人、いや それ以下の体力しかもっていないが

妹の方はかなりの使い手で、私の知る限りでは最強と言っても過言ではないヨ。

そこで、彼女達姉妹の特別ルールとして、

通常のダウン等の勝利判定以外に

姉の方の帽子を取った時点で勝ちとする特別ルールを作るネ。」

私の話で同情する人が居たり、エヴァの話で疑問の声が上がったり色々な声上がるが、追加ルールが私の帽子を取ったら勝ち とう事で

皆一様に納得してくれたようで、特に不満の声が上がることはなくなつた。

基本善人が多いこの学園で、見た目少女の私達を殴ったりするより

帽子を取るといふ 安全な勝利判定ができたということ

逆に安心する人が多いようだ。

中には女性参加者には、帽子の着用を求める声が上がくらいだった。

「ああ 一ついい忘れてるコトがあったネ。

この大会が形骸化する前、実質上最後の大会となった25年前の優勝者は……

学園にフラリと現れた異国の子供、 『ナギ・スプリングフィールド』 と名乗る

当時10歳の少年だった。

この名前に聞き覚えのあるものは……がんばるとイイネ？」

『……完全にネギ先生を狙った台詞だったね。』

『そうですね、これでネギ先生は全力でこの大会の優勝を目指しますよ。』

『ネギ先生に対する手札は着々と揃っているわけだ……』

『超はんもなかなか回りくどくて 分かりにくいことしはりますな。』



「こつこつ手合いは最後の最後まで本心を見せんもんや。」

「では、参加希望者は前へ出てくじを引いてください！」

予選大会はくじ引きで決まった

それぞれ20名人組のグループで行われる バトルロイヤル！！

予選会終了ギリギリまで参加者を受け付けます！！

年齢性別資格制限一切なし！！

本戦は学祭2日目 明朝午前8時より！！

ただ今より予選会を始めます！！」

こつこつして学園祭初日、まほら武道会が開催された。

「エヴァ〜どつちがくじを引く？」

「姉様が引いていいぞ、どのブロックに出ても私がすべて殲滅してやるからな。」

「流石エヴァ、頼りになる妹を持って お姉ちゃんは幸せです。」

「ふ、ふん。　誇りに思えよ。」　／／

私達がくじを引く順番になり、私がくじを引く……

「どれどれ……F組だつて。」

「ならば早速向かうぞ、一気に殲滅してくれる。」

さつきから物騒な言葉を吐き続けるエヴァの腕を組み、

私たちはF組の試合会場に向かった。

F組の会場に行くと　どこかで見た顔かと思つたら高畑先生を見つけた。

「高畑先生、こんばんわ。」

「ああ、ソプラノ君にエヴァ君か　こんばんわ。」

「やったね、エヴァ　高畑先生に守ってもらえば楽勝だよ。」

「ふむ、まあ　高畑なら問題なかつ。　私達に誰も近づけるなよ。」

「おいおい・・・まあ、下手に君達に手を出されるよりかは僕がやったほうが安全かな。」

私とエヴァは腕を組んで高畑先生の近くで雑談、

予選会は高畑先生に任せることにした。

こうして予選会は進行し、各所で朝倉さんによる軽快な語り口調で大会を盛り上げ、参加したクラスメイトも順調に勝ち上がっていった。

「それにしても高畑先生は何で参加したんですか？」

「ん、僕かい？ ネギ君が参加すると聞いてね、ちょうどいい機会だから」

ネギ君の修行の進行具合を確かめようと思ってね。」

「そうなんですか。それは楽しみなんじゃないですか？」

「そうだね、最近手合わせして無かったから楽しみだよ。」

今回は僕も技を使っていくからね。」

高畑先生の技、居合い拳で高畑先生は私達に近づく選手達を倒していき

順調に選手の数を減らしている。

そんな中で気合の入っている人がいたようで、

高畑先生の居合い拳で沈まずに持ち直した人が、

私の帽子を取ろうとして手を伸ばしてきた。

「くっ……高畑にはかなわねえ。

お嬢ちゃんには悪いが、俺もこんなところで終わるわけにはいかねえ。

その帽子、貰っていくぜ！」

セリフと共に 私の帽子に手を伸ばしてきた男だが

エヴァがその手を取り、伸ばしてきた力を利用して投げ飛ばし

あご先を軽く蹴り、意識を刈り取る。

「ふん、私の姉様に手をだそうなど1000年早い、殺されないだけありがたいと思えよ。」

「助かったよ〜 エヴァ〜。」

「こ、こら！ 姉様！ 抱きつくなくなっ！！

おい高畑！ 貴様きつちり倒さんか！！」

「あはは、ごめん ごめん。

ケガをさせないように加減が難しくくて。」

「次からは殺す気で倒せ！ 姉様に指一本触れさせるんじゃないぞ  
！！」

「あ、ああ 気をつけるよ。」

私の腕の中でもがくエヴァが、高畑先生に一通り説教をして 腕から脱出する。

こうして一悶着あったが、私達は無事に予選通過、明日の本戦へとコマを進めた。

「皆様お疲れ様です！

本選出場者16名が決定しました！！

本戦は明朝8時より 龍宮神社特別会場にて！

では 大会委員会の厳正な抽選の結果決定した

トーナメント表を発表しましょう！！

……こちらです！！」

まほら武道会 トーナメント表

Aブロック

佐倉愛衣 VS 村上小太郎

大豪院ポチ VS クウネル・サンダース

Bブロック

長瀬楓 VS 中村達也

龍宮真名 VS 古菲

Cブロック

田中 vs 高音・D・グッドマン

ネギ・スプリングフィールド vs タカミチ・T・高畑

Dブロック

神楽坂アスナ vs 桜咲刹那

マクダウェル姉妹 vs 山下慶一

「私達はDブロックだね。」

「どこでも同じ、優勝は私達のものだ。」

「先輩、お疲れさま……ってというか、先輩は何もして無かったな。」

「ソプラノ無事ですか！？ 怪我とかしてませんか！？」

「夕映はん 落ち着きなや、お嬢様は怪我どころか 触れられもし  
とらへんで。」

「ナンダヨゴジュシン チガタリネーヨ、フヌケタカ？」

「黙れ駄人形。それに綾瀬、私が姉様に怪我などさせるか。」

「そんなこと言っただって エヴァはほとんど高畑先生に任せてたじ  
やないか。」

「あんな物私が手を下すまでもない。」

「まあ、二人共無事でよかったよ。」

「じゃあ今日は帰って祝勝会でも開こうか？」

「せやね、ウチも腕によりをかけて料理しますえ。」

「お手伝いします、千草さん。」

「今日は私も手伝うよ。」

「私も今日は そちらに泊めてもらってお祝いするですよ。」

「サケダー!!」

「じゃあ帰ろうか？ エヴァ。」

「ああ、そうだな。」



こうして超の不穏な動きはあったものの

私達の学園祭初日は無事に終りを迎えた。

深夜 エヴァ家 地下室

そこにはエヴァの別荘に侵入する私の姿があった・・・

神様から頼まれたお仕事。

その35（後書き）

35話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その36

麻帆良学園 学園祭 二日目 早朝

「ほら、旦那さん起きてんかあ！

武道会に出るんやろ？」

「ん〜・・・あと5日・・・」

「単位がおかしいで・・・はよ起きへんと・・・ウチが旦那さん喰ってまうで？」

がばっ！！

「おはよびついでいますっ！ 千草サンっ！ー！」

「おはよう・・・なんでコレやとすぐ起きるんや・・・女として複雑やわ。」

いつもの時間に起きたにしては部屋の明るさがおかしい・・・今何

時だろうか？

「……ん？ 千草あゝ今何時い？」

「今は5時ですえ。」

「……は？ 何でそんなに早い時間に私を起こすの！」

「せやかて、旦那さん武道大会に出るんやろ？」

「はよう朝ごはん食べて胃を落ち着かせる時間おかへんかへんで？」

「そこまで慎重にしくてもいいのではないのでしょうか……」

「念には念をおしてや、従者のウチとしては旦那さんの体調管理は万全を期さへんとな。」

「……私は最高の従者を持って幸せだよ……」

「そない褒めんといてください」

千草に嫌味は通じないようだ……

「まあ、いいや。」

それじゃあ指示通り 朝ごはんを食べますか。」

「下に用意はできてますから、着替えて顔洗ってから来てや。」

「はいはい、そうしますよ。」

言っことを言つと、千草は部屋から出て行った。

私は着替えて洗面、トイレを済ませ、居間へと向かう。

「おはよう〜。」

「……………んあ？」

「おはようございます、ソプラノ様。」

「旦那さん はよ席に着いてや。」

居間に行くと 居るのは明らかに寝ぼけているエヴァと いつも通りの茶々丸、

それにさっき私を起こしに来た千草だけだった。

「あれ？ 皆は？」

「他の皆さんは観客として見ているだけなので、もう少し後に起きます予定です。」

「……お互い、良い従者をもったね……エヴァ。」

「……す……」

エヴァは完全に寝ぼけモードだ……

席についた私の前に千草がご飯をよそう、

茶々丸がエヴァの横に座り、エヴァの口に次々と食事を入れていき

エヴァは寝ぼけているにもかかわらず、次々と食事を食べていく。

この家では割とよく見られる光景だ。

「ほんまは験担ぎにヒレカツでも揚げようかと思ったんやけど、

普通に消化のええもんで揃えました。」

「流石に朝から揚げ物は……ね。」

今日は千草達は皆 試合を見に来るの？」

「そのつもりです、旦那さん達の晴れ舞台やさかいな。」

「……そんなに大したものではないともうよ？」

私何もしないつもりだし。」

「そないな事言わんと、がんばっておくれやす。」

「千草に恥をかかせない程度にかんばります。」

「はいな、……あ、ご飯のおかわり要りますか？」

「いや、いいよ。今日は軽めにしておくれよ。」

私達4人は食事を軽めに済ませ、しばらく歓談。

エヴァが本気で寝ないように 時折茶々丸と千草が

揺らしたり、鼻を摘んだりしている内に目が覚めた様で、

部屋に戻って大会に着ていく服を選び始めた。

私と千草も部屋に戻り服を選んでる内に、

千雨と夕映が起きてきたようで、服を選んで居間に戻ったら朝食をとっていた。

「それじゃあ、二人が御飯食べて着替えたら皆で会場に行こうか？」

「ん、了解。」 「わかったです。」

「すみません、ソプラノ様。」

私は超鈴音から呼ばれているので、「同行することはできません。」

「え？ そうなの？」

「姉様、しばらくは茶々丸の好きなようにさせてやってくれ。」

できたら 詳しく話しを聞くのもやめて欲しい。」

「ふ〜ん・・・まあ、エヴァがそう言うならいいよ。」

（超の計画のことが・・・なら仕方が無いか。）

二人の食事が終わり私も部屋に戻って着替え、戻ると エヴァも用意ができている様で

居間に全員が集合、茶々丸以外はそのまま会場の龍宮神社に向かうことにした。

まほら武道会 選手控え室



私達が控え室に着く頃には 私とエヴァ以外の全員が揃っているよ  
うで

ネギ先生達はクラスメイトや高畑先生と集まって会話中、

他の選手もそれぞれストレッチや精神の集中などで

それぞれ思い思いに過ごしている。

「皆おはよ〜」

「「「「「「おはよう。「「「「「

「あ、本当にソプラノも出るんだね。」

「お手やわからにね、神楽坂さん。」

私の帽子を取る時に間違えてハリセンで叩かないでくださいね」

「そ、そんなことしないわよ!」 / /

「え、エヴァンジェリンさん……あの、おて、お手柔らかにお  
願いします!!」 1111

「ん? ぼーやか、……そうだなぼーやと当たる時は少し本気  
でやってやるっか?」

「い、いいえ!! そんな滅相もない!! 結構ですっ!!」 1  
11

「なんや？ ネギ、このちっちゃい嬢ちゃんそんなに強いんか？

そうは見えへんけどな。」

「こ、小太郎君！！ 黙って！！」 111 「ちよつとアンタこつち来なさい！！」 111

ネギ先生と神楽坂さんが小太郎と呼ばれた少年を引きずって隅の方に移動する。

「……ふむ、順当に行けば2回戦で桜咲、貴様か……」

「アスナさんに勝てればですが、2回戦で会えたらお手柔らかにお願いします。」

「……桜咲、貴様 少し不抜けているようだな。」

「……どういう事ですか？ エヴァンジェリンさんとも言えども聞き捨てなりませんか……」

「言葉通りの意味だ……そうだな、2回戦で少し貴様に現実というものを教えてやろうか。」

「エヴァンジェリンさんとも言えども、

今回のルールでは簡単に勝てるとは限りませんよ？」

「・・・フフツ、ハハハッ、どうやら本当に不拔けているようだ、貴様が私に勝てる？　あり得んな、今の貴様なら我が弟子の綾瀬でも対処できる。」

「私が、私の剣が夕映さんに劣るといっているのですかっ!？」　#

「フフツ、そのあたりを2回戦で貴様に叩き込んでやるさ、

楽しみにしておけよ？　桜咲　刹那。」

エヴァは桜咲さんに言いたいことを言うたとさっさと控え室から出ていってしまっ。

私も桜咲さんにあまり気にしないように言い　軽く頭を下げてエヴァに着いて行く。

「エヴァが桜咲さんに絡むなんて珍しいね？

何かあったの？」

「あいつ自身には多少興味はあるが、今回はそれじゃない。

桜咲が不拔けたままでは私達に害が出てくるからな、

今の内に矯正出来るなら矯正して、ダメなら排除しようと思ったま

でだ。」

「……近衛さんの事か。」

「奴は既に2回、近衛を殺している、護衛としては失格だ。」

そのたびにジジイが私達に絡んで来るようではうっとおしくてかなわんからな、

今日の試合で見所がないようなら ジジイに言ってクビにするか、  
最悪……。」

エヴァも私と似て 身内以外には基本的に興味が無い。

修学旅行はアーウェルンクスが相手だったからしょうが無いとも思えるが、

先日のヘルマンの件は不味い……

今日の2回戦、桜咲さんが神楽坂さんに負けるようなことがあれば  
論外、

勝ってエヴァと当たった時、醜態を晒すようだったらエヴァは排除  
にかかるだろう。

彼女にとって今日は分岐点になる日かもしれない。

その後選手控え室で朝倉さんと超に本戦のルール説明が行われた。

ルールは能舞台での15分1本勝負、

ダウン10秒 リングアウト10秒 気絶、ギブアップで勝敗が確定。

時間内に勝負がつかなかった時は、観客によるメール投票で勝敗を決める、

と言う内容だった。

こうしてそれぞれの思惑が絡むまほら武道会 本戦が始まった。

第一試合 犬上 小太郎 vs 佐倉 愛衣

彼女と小太郎君は知り合いのようで開始前に幾つか会話がされ、

その後、試合が開始された。

試合開始直後、佐倉さんがアーティファクトを出し構える。

「ねえ、この学園の魔法使いって魔法を隠匿しなきゃいけないんだよね？」

あれ・・・いいの？」

「ダメに決まっているだろう！ あんなことをすれば超の思い通りだ。」

私とエヴァは選手席の少し離れた場所で並んで座る。

さっきの控え室でのこともあり、ネギ先生たちが私達に近寄ってくることはないようだ。

そうしている間にも試合は進行する。

小太郎君は相手が女性ということもあり、どう攻めようか悩んでいたようだ、

瞬動で一気に佐倉さんの懐に入り2発の拳の風圧で場外に吹き飛ばす。

佐倉さんは泳げないようで、場外の池で溺れているところを

小太郎君が救出、1回戦の勝利を収めた。

第二試合 大豪院 ポチ vs クウネル・サンダース

序盤 大豪院さんが一気に攻撃を仕掛けるが、深いフードをかぶるクウネルさんは

落ち着いて攻撃をさばいている。

「エヴァどう思う?」

「ふむ、フードの方が勝つだろうが・・・アイツ・・・妙な違和感があるな、人間か?」

「やっぱりそう思う?」

私、あのフードの方 心当たりがあるんだよね。」

「・・・どういう事だ、姉様。」

「あの人多分、図書館の司書さんだよ。」

ほら、エヴァも図書館島に本を取りに行った時会ってない?」

「知らん、私が本を取りに行ったときは、

申請しておいた本が所定の場所に置いてあったからな。」

「そうなんだ、私話したことはないけど、一度だけ見たことがあるんだよね。」

まあ、ぶっちゃけるとクルトの定時連絡で話には聞いてたんだけど。

あの人紅き翼のアルビオレ・イマだよ。」

「……なんでそんな奴がこんな所に出てくる……ぼーやか？」

「普通に考えたら超が絡んでいるこの大会で不手際が起こらないように」

学園長が依頼したか、ネギ先生に関係あるか……

案外エヴァが暴走した時の抑えだったりして。」

「あいつ一人で私を押さえる？　笑わせるな　姉様。」

まあ、何れにしても注意はしておいたほうがよさそうだな。」

「そうだね。」

試合は大豪院さんが終始押しているように見えたが、

クウネルさんが隙について顎を掌底で打ち抜き



大豪院さんの意識を刈り取り、勝利を収めた。

朝倉さんの勝利宣言の間、ネギ先生の方を見ているようだった。

「めっちゃ見てるね、ネギ先生を。」

「ああやって意識させているんだろう、どうやらぼーやに用事がありそうだな。」

「そうだね、少なくともネギ先生に何か関係ありそうだね。」

他の件も複数絡む可能性があるから、安心はできないけど。」

「ああ、分かっているさ 姉様。」

第三試合 長瀬 楓 vs 中村 達也

この中村さん、一般人にしてはかなり鍛えてるようすで、

気による遠距離攻撃ができる人だったが、

いきなり一発目で見せたのがまずかったか

二発目に撃つ時に長瀬さんに背後に回られ

首と後頭部の間を打ち 脳震盪を起こさせられてダウン。

長瀬さんの勝利に終わった。

「彼は普通の人にしてはすごかったね、気を撃ったよ。」

「ああ、だが恐らく周りに自分より優れた使い手がいなかったんだろっ、

あんな一発目から使っているようではな・・・

ああいうのは相手の油断を誘って、ここぞという時に使わないとな。

それに相手が悪かった、長瀬相手ではあんな攻撃二度目は効くまい。

フフツ それにしても長瀬も一発目は内心ビックリしていたかもな  
?」

「一般人がいきなり気を撃ってきたらビックリするかもしれないね。  
」

第四試合 龍宮 真名 vs 古菲

「お待たせしました!!」

お聞きくださいこの歓声!!

本日の大会の大本命、前年度ウルティマホラ チャンピオン!!  
古菲選手

そして対するはこの龍宮神社の一人娘!! 龍宮真名選手!!」

彼女達の様子を見ると かなり本気の様で、表情にも気合が入っている。

「この試合はエヴァも楽しみなんじゃない?」

「そうだな、練習とは違ってそれなりに本気の試合のようだし

龍宮が有利だとは思いますが、古菲もこのルールなら十分勝ち目はある。

しかし龍宮のあの服・・・何か仕込んで着ているかもな。」

「古ちゃんも帯を仕込んでいるようだしね。」

「そういえば姉様は中国拳法も使ったな？」

「八卦掌だね、昔 護身用にね。」

私は攻撃力は十分あるし、当時は回避の技術の方が必要だったからね。」

「そういえば、姉様と体術のみで訓練すると いつも泥仕合になっ  
たな・・・」

どっちも回避かカウンター狙いの技が多かったから・・・。」

「あ、ほら！ 始まるみたいだよ！」

試合開始の合図と共に龍宮さんが構えを取るフリをして、

それに古ちゃんが気を取られた隙に 手元から何かを打ち出し

古ちゃんの額に直撃した。

「あー やっぱり仕込んでたね・・・五〇〇円玉？」

羅漢銭かな？」

「だが古も回避は間に合わなかったが衝撃は殺しているようだぞ、

吹っ飛び方が大げさだったしな。」

その後龍宮さんが 朝倉さんに下がるように指示を出し、

朝倉さんが下がったところで、古ちゃんに向かい一気に攻撃を開始する。

古ちゃんもうまく回避しているようで、直撃は無いものの

かすったり撃ち落としたりしている。

「龍宮さん あの服の中に何枚五〇〇円玉を仕込んでいるのかな？」

「威力を出すために この国で一番重い硬貨を使うのはいいが

かなりの金額になりそうだな、古も避けているから内心穏やかじゃなさそうだ。」 w

龍宮さんの猛攻を回避と防御で耐え切り、龍宮さんが五〇〇円玉を装填する際に

古ちゃんが一気に間合いを詰める。

古ちゃんの攻撃を龍宮さんが回避したものの、古ちゃんに腕を掴まれ懐に入り込まれた、

得意の間合いで一気に勝負を決めるつもりようだ。

「ほう、なかなか古もやるもんだな、あの隙に懐に入り込むとは。」

「でも、龍宮さんの羅漢銭って投げるんじゃないかって指で打ち出してるから」

「……近接でも使えるみたいだね。」

私達が話している間にも古ちゃんが攻めるが 龍宮さんがうまく古ちゃんの顎を狙って

五〇〇円玉を打ち出し、古ちゃんも衝撃を逃がす為に吹き飛んだが

その体制を崩した所を狙って龍宮さんが一気に攻撃をかける。

古ちゃんもなんとか立ち上がるうとするが、そのたびに四肢を撃たれ立ち上がることができなくなる。

「ふむ、勝負かつきそうだな……古はここで諦めるかな？」

「どうだろうね？」

皆が様子を見守る中、選手席の方からネギ先生の一喝が入り、

古ちゃんが 尚も立ち上がるうとする。

「まだやるようだな、なかなか見どころのある奴だ。」

「ネギ先生の声でヤル気を出したみたいだね、コレは愛の力かっ！？」

「……………はあ、まったく、あのぼーやの死因は女関係だな。」

古ちゃんの起き上がりを潰すべく 龍宮さんが五〇〇円玉を撃ち出すが、

服の帯をつまき使い打ち落とした古ちゃんが

そのまま帯を龍宮さんの首に帯を巻きつけようとする。

龍宮さんも回避は無理と踏んで、腕で首の防御をし 窒息や首の骨折を免れる。

龍宮さんはすぐさま帯を外すべく、

引きつけた帯の一点を狙って連続で五〇〇円玉を打ち出し

帯を破るが、古ちゃんも 龍宮さんの帯が外れるまでの間に

一気に帯を使った技、布槍術で畳み掛け

龍宮さん、古ちゃん、共に一進一退の攻撃を繰り返す。

攻撃の間に古ちゃんが腕を撃たれたが、龍宮さんの左腕に帯を巻きつけることに成功し

一気に龍宮さんを引き付ける。

一気に引つ張られた龍宮さん、引きつけた古ちゃん

二人共お互いにカウンターを狙う体制に入り

二人が接近した時、周りに響くほどの衝撃音がなり

会場が静まり返る。

古ちゃんが先に崩れ落ちたが、二人の会話の後

龍宮さんの服の背中部分がはじけ飛び、龍宮さんが倒れる。

「へー、古ちゃんが硬気功で耐えて浸透勁を打つたみたいだね。」

「耐久力で古が勝つたようだな、龍宮もあの距離で古の浸透勁をくらっては



流石に堪えられなかったようだな、アレは内臓に効くからな……」

「前、エヴァに私が打った時は大変だったね。」

「……姉様のバカ力と気で打たれたからな……私じゃなかったら悲惨なことになってるぞ？」

「でも、私はその後に悲惨なことになったけど……ね。」

昔エヴァと体術の訓練で浸透勁を打ち込んだ時、

エヴァがその直後吐いて私はエヴァの吐瀉物まみれ……

しかもその後に怒ったエヴァに氷漬けにされ放置された。

二人の試合は古ちゃんの勝利宣言がされ

ネギ先生達が付き添いの元、二人共医務室へ運ばれていった。

その後、試合会場を修復する作業の為一時中断となり、

私達は千雨たちのいる客席の方へ一度向かった。

「皆楽しんでる〜?」

「……………楽しむ? ……何を?」

チャチャゼロを頭に乗せた千雨の顔色があからさまに悪い……

夕映や千草が心配そうに見つめる。

「……………何考えてんだあいつ等。」 1111

「ど、どうしたの千雨、顔色悪いよ?」

「先輩……一緒に転校しよう。いや、いつそ海外に住もう。」

「お、おい千雨 馬鹿なことを言い出すな。」

「馬鹿? 馬鹿はアイツ等だろう?」

あんなことをしてたら今日にでもバレるだろう!?

これ見てみるよ!!

そう言っつて千雨が取り出したのはノートPCの画面、

そこには先日予選会で敗退した気の使い手が

インタビューに答えている記事が載っていた。

「……あらら。」

「あらら、じゃねえよ！ 思いつきり顔出してバレてんじゃねーか！

ご丁寧に画像付きだよー！」

「これを見る限り超さんの情報統制は意味を為してないですね。

いや、茶々丸を作った超さんの技術力ならここまで目立つ物なら

何とかできるはずですよ。」

「……コレが超はんの目的の一つや違いますやろか？」

「気や魔法を公の物にすることがですか？」

「せや、この大会、賞金を工サに裏のもんに その技を使わせ、

この記事みたいに情報を公開し、世間様にその存在をバラす。」

「ですが何のためですか？」

「そうだけ、それにこの記事だけだと、ただの似非記事扱いが関の山じゃないか？」

「せやから目的の一つ 言ってますのや。」

「目的の一つですか……コレがいったい何に繋がるんです……」

「？」

皆で、超の計画に着いて考えるが まだ情報が足りない。

結局答えは出ないまま時間が流れていった。

「とりあえず、千雨はこのまま情報の流れを監視してて。

私達は試合があるから一旦戻るよ。」

「ソプラノにエヴァンジェリンさん、できるだけ派手なことは控えて欲しいです。」

「わかった、それにあの程度の相手なら、体術だけで十分だ。」

「りょーかい。 エヴァを見はっておくよ。」

「ちょっと待て、私は体術だけで十分だと言ったはずだぞ？

見張られる覚えなど無い！」

「ほらほらエヴァ、時間がないよ。 早く戻ろう。」

「これ、待て！ 引っ張るな！！

話はまだ終わってないぞ 姉様！！！」

私はエヴァの腕を組んで選手席まで引きずっていった。

そして試合会場の修復も終わり、次の試合が開始される。

「皆様 お待たせしました！！

板の張替えが終了しましたので、第五試合に移らせて頂きます。

それにしても、レベルの高い大会になってきました！！」

第五試合 田中 vs 高音・D・グッドマン

試合開始前に高音さんが選手席に向かってなにやら喚いているが  
肝心の相手のネギ先生がいないようで、それを指摘され赤面している。  
る。

気を取り直して対戦相手の田中さんに全力で来るように挑発、

その挑発に乗った 田中さんが口を大きく開け

試合開始の合図と共に 口からビームを発射する。

「凄いエヴァ！！ 口からビームだよ！！ ビームっ！！」

「はしゃぐな姉様！ はずかしい。」

その後もビームやロケットパンチで攻撃を続け

なんとか回避していた高音さんも とうとう片足をつかまれ

ビームの直撃をくらってしまふ。

「おいおい、ビームの直撃を食らったぞ？」

蒸発したんじゃないか、死んだか？」

「あ、でも粉塵から人影が見えるから大丈夫っぽいよ。」

煙が晴れ、その中から高音さんが田中さんに向かってなにやら叫んでいるが……

私には高音さんの様子が刺激的すぎて、何を言っているのか頭に入らなかった。

当の本人、高音さんは……胸はほとんど露出してパンツも一部吹き飛び

必要な部分をなんとか隠している状態だった。

「うわゝ、うわゝ……茶々丸!? 茶々丸う!! 録画してるっ!?」 / / /

「馬鹿者!! 見るな!! 姉様は見なくてもいいんだっ!!」

エヴァが私の顔にしがみつき視界を塞ごうとする。

私はなんとかこの目に焼き付けようとエヴァを剥がそうとする

そうしていると どこからか念話が入ってきた。

『はい、ソプラノ様 バッチリと録画しております。』

「おいっ！？ どこで撮っているんだポケロボ！！ 消せ！ 今すぐ消せっ！！」 #

「流石茶々丸っ！ 最高の仕事をしているよ！！」

『恐悦至極。』

「このバカどもがアア〜！！」 #

私やエヴァが遊んでいる間に、服を吹き飛ばされほとんど裸に近い高音さんが

恥ずかしさから田中さんに殴りかかり、田中さんはそのまま空の彼方に消えていった。

こうして武道大会 第五試合は高音さんの勝利で終わり、

次の試合・・・高畑先生 対 ネギ先生の試合の順番が来た。

観客席



「……おい、茶々丸がどこかにいないか捜すんだ。」 #

「どうしたんです？ 千雨さん。」

「せやで、どないしはったん？」

「あのヌード姿の女の人を見た先輩が何もしないと思うか？」

「そうは言っても……ほら、エヴァンジェリンさんが妨害しているですよ？」

それにソプラノが何で女性のヌードを見たがるんですか？」

「エヴァはんが隣におるから、お嬢様も馬鹿なことはせえへんやろ。」

「バカっ！ お前は達はまだ知らないのも仕方が無いけど

こういう時は常に茶々丸が撮影に回ってるんだ！

今もどこかで撮影しているはずだ！ 探せっ！！」

エヴァ家に来て年季の長い千雨には こういう時の茶々丸の行動が完全に把握されていた。

「千雨さん、茶々丸さんなら ほら、あそこに。」

夕映が指さす方を見ると解説席にちゃっかりと座っている茶々丸の姿が。

様子を伺つと、高音さんを凝視しているようだ。

「あのポケロボー！！　ちゃっかり一番いい席をキープしていたのか！？」

「……いや、普通に考えたら超さんの指示では。」

千雨による茶々丸の撮影妨害は不可能な状態だった。

神様から頼まれたお仕事。

その36（後書き）

36話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その37

麻帆良学園 学園祭 二日目

現在、先の高音さんの試合で破損した舞台修理の為  
試合は一時中断している。

私とエヴァは選手席でジュースを飲みながら雑談をして  
時間を潰していた。

「次は 高畑先生とネギ先生の教師対決だね。」

「教師対決か・・・本来だったら親子と言っても違和感がないぞ。」

「高畑先生、年の割に老けてるからね」 魔法球でも使いすぎたの  
かな？」

「あのジジイの下で働いてるんだ、精神的な疲労から来てるんじゃないか？」

「あはは、それはあるかもね。」

「まあ、それはいいとして 次の試合、普通に考えたら高畑の勝ち  
は硬いだろうな。」

「そうだね、今回の大会のルールはネギ先生よりも、むしろ高畑先  
生に有利だからね。」

「高畑も魔法の詠唱ができないなんて難儀な体質だからな。」

アイツの使う技もそうだが、アイツの本領はむしろ戦術的な思考の  
強さだろう。

本気を出されたら ぼーやなど何もさせてもらえずに終わるだろう  
な。」

「そこは高畑先生もネギ先生の成長を楽しみにしているみたいだが  
ら、

むしろ全力を出させてもらえと思うよ。」

「ふむ・・・そう考えれば ぼーやにも十分勝ち目はあるだろう。」

高畑の性格だ、真正面から受けて立つだろうし。」

エヴァと話をしている間に、舞台の修理も終わったようで

朝倉さんから試合再開の放送がかかる。

「舞台の修理が終わりました。」

選手のお二人は舞台へどうぞ！」

ネギ先生はクラスの皆のエールを受け、気合も十分。

高畑先生はいつも通りの飄々とした態度だが、どこか楽しそうでもあった。

「お、出てきたよ、エヴァ。」

「ふん、ぼーやは緊張で手と足が同時に出てるぞ……大丈夫なのか？」

「しょうがないよ、相手もそうだしネギ先生に取っては昔お父さんの出場した大会だしね。」

あの歳だし、緊張もするよ。」

二人が、舞台の立ち位置に着き

高畑先生はやる気充分、ネギ先生も高畑先生の様子を確認し

程良く緊張も抜けたようで、やる気満々のようだ。

「ネギ先生も緊張が少しは抜けたみたいだね。」

それにしてもネギ先生あのロープ、何か仕込みはあるのかな？」

「ぼーやの性格から考えたら何も無いだろう？」

むしろそこを逆手にとって何か仕込んでいたらぼーやを見直すがな。」

二人の準備が整った様子を見た朝倉さんが 試合開始の合図をかける。

「それではみなさま お待たせしました。」

第六試合………Fight!!」

試合開始の合図と共に、ネギ先生は身体強化魔法を使い戦闘態勢に入る。

その様子を見た高畑先生は 居合い拳でネギ先生に数発 牽制攻撃をするが、

ネギ先生が瞬動で横に回避、ネギ先生の足元の板が高畑先生の攻撃で破損する。

「ほう、流石に何回か共に訓練をしているせいか、

高畑の技をある程度把握しているようだね。」

「そうだね、うまく高畑先生の動きを読んで回避したね。

瞬動もうまく使いこなしているみたいだし。」

その後も高畑先生が何回か居合い拳を放つが

動きまわるネギ先生を捕えきれずに回避される。

「高畑もぼーやの様子を見ているようだね、

攻撃の出がいつもより遅いな、移動もしないようだ。」

「まだ、お互い様子見だろうね。」

・・・お、ネギ先生が仕掛けるみたいだよ。」

ネギ先生が高畑先生の攻撃に目が慣れたのか、

回避しながら無詠唱の魔法の射手を3本 高畑先生の打ち込む。

高畑先生も居合い拳で打ち落とすが、



その間を取られネギ先生が瞬動で高畑先生の懐につまぐ潜り込んだ。

「へー、あの時間で無詠唱 魔法の射手が3本出せるんだ。

学園長もかなりしごいてるようだね。」

「ぼーやの年も年だしな、習得はかなり早いだろう。」

「それにしてもすごいね、あの年というのを考えても

かなり習得が早いんじゃない？ 才能かな？」

「本人にヤル気があって年も若い、それに才能もある、

ジジイ達も仕込んで さぞ楽しんだろうな。」

懐に入ったネギ先生は、小柄な体型を活かして

高畑先生から離れないようにしつつも、高畑先生の身体を利用した動きで翻弄し

一気に攻撃を続ける・・・が そこは高畑先生も防戦一方とはいえ

一撃も貰っていない。

ネギ先生が高畑先生の正面に回った時、高畑先生が狙っていたのか

右ストレートでネギ先生の動きを潰そうとするが

ネギ先生の瞬動で背後に回られる。

背後を取ったチャンスではあったが、距離が少し遠い。

高畑先生もすぐさま反応してネギ先生を近づけないように攻撃するが、

小柄な体系と中国拳法の独特の動きで うまく飛び込んできたネギ先生に接近を許し、

そのまま近接で打ち合うが ネギ先生のフェイントに引っかかり

一瞬隙を作ってしまう。

ネギ先生はその隙を見逃さず、高畑先生の鳩尾を肘打ちで撃ち

高畑先生がひるんだ間に 魔法の射手を3本右手に纏わせ

先程打った高畑先生の鳩尾にダメ押しとばかりに攻撃、

それを読んでいた高畑先生にガードされたが、高畑先生は場外まで吹き飛んでいった。

「ネギ先生やるねー、うまく懐にもぐりこんで 高畑先生に一撃入れたよ。」

「ふむ、だが詰めがまずかったな、肘打ちに魔法の射手を1本でもいいから込められたら

最後のストレートは入ったんだがな、そのせいで間合いが空いてしまった。

高畑も もうぼーやを懐には入らせまい。」

「エヴァは辛口だねー。」

「格上相手に詰めを誤れば、相手を本気にさせてしまい 後は潰されるのみだからな。

まあ、ぼーやの年にしては十分過ぎる技を持っているがな・・・」

「吸血鬼騒動以来、ずっと訓練してるみたいだからね。

並の魔法使いじゃ もうネギ先生に勝つのは難しいだろうね。」

「単純な力だけならば・・・な。」

場外に吹き飛ばされた高畑先生だが、舞台の周りの水面に立ち

舞台に向かってゆっくりと歩いてきている。

ネギ先生も確認したようで、数秒ほど見合った後

お互いに攻撃を仕掛け、場内外問わずの格闘戦を開始する。

「元気だなー、二人共。」

「姉様……その物言いは私達には危険だぞ……」

「エヴァはまだ年の事気にしてるの？」

「いいじゃない、私達永遠の10代なんだから。」

「べ、別に気にはしてないが……指摘されるとムカツクだけだ……」

「そう言うのを気にしてるって言うんじゃない……」

「姉様は黙っている！」

「はいはい。」

エヴァの女の子らしい悩みを確認していると高畑先生がネギ先生の隙をついて

舞台上に蹴り飛ばし、十分な間合いを取ることに成功した。

高畑先生が居合い拳で攻撃を開始し、ネギ先生がなんとか回避しようとするが

先程の攻撃とは違い、高畑先生も本気で打っているので

技の出が確認できずに、何発か直撃を貰っている。

その後も回避しようとするがうまく行かず、何発か貰う覚悟で

高畑先生に瞬動で突っ込むが、あっさり足を引っ掛けられかわされる。

よろけているネギ先生に高畑先生が居合い拳を打ち込むが、

ネギ先生はなんとか瞬動で回避、しかし舞台の角に追い込まれてしまった。

角に追い込んだことでメッタ打ちにするかと思っていたが、

高畑先生が瞬動でネギ先生の背後に回り込み攻撃、

反応が遅れたネギ先生は なんとかガードはしたが反対の角に吹き飛ばされてしまった。

その後高畑先生が、なにやら話をしながらゆっくりと舞台中央に近づいていき

ネギ先生とある程度間合いのとれた場所で止まった。

「む……やはりアレを出す気が。」

「……ネギ先生、終了のお知らせ。」

高畑先生は片手に気、もう片方に魔力を込め、手を合わせて合成。

本来反発する気と魔力を操作し、自己の能力を跳ね上げる技法、咸卦法

その様子を見たネギ先生は驚愕の表情で固まっているが

高畑先生の一撃目は回避しろ、との忠告により回避行動をとる。

ネギ先生のさつきまでいた場所には、

高畑先生の攻撃で衝撃音と共に大穴が開き、客席がどよめきだした。

「さて、ここからがぼーやの正念場だ。

どこまでやれるものやら……」

「まあ、高畑先生もそれなりに加減はしてくれるでしょうし……

でも、骨の数本は覚悟かな。」

高畑先生が幾つか言葉をかけた後に 攻撃を再開。

ネギ先生は全力での回避行動を取り、高畑先生の攻撃から逃げまわる。

しかし高畑先生もそこは甘く無いようで、通常の居合い拳を混ぜた攻撃で

ネギ先生の行動を制限し 確実に追い込んでいく。

瞬動を駆使して回避はするものの、高畑先生も瞬動でネギ先生の裏に回り

咸卦法での居合い拳を放とうとする・・・が、ネギ先生が無詠唱の風障壁で防御、

防御は成功したものの、その間にさらに背後に回られ

攻撃を食らい、二発目はギリギリで回転して回避したが、

上からの三発目、障壁を発動はしたものの 直撃を食らってダウンを取られてしまった。

「ふむ、ここまでか？ ぼーや。」

「一応障壁は間に合ったからダメージ軽減はできてるだろうけど精神的にはどうかなー。」

朝倉さんが慌ててネギ先生の元へ駆け寄り、その様子を確認、

これ以上は不味いと判断したのか、高畑先生の勝利を宣言しようとする。

会場からも朝倉の判定に疑問が出たり、これ以上は無理だという意見が上がったり、

騒がしくなってきたが、高畑先生がネギ先生に言葉をかけ、

それに続いて神楽坂さんや、クラスの皆の声を受け、なんとか立ち上がった。

「あゝ立ち上がったね、ネギ先生。」

「だが、何か手はあるのか・・・ん？ 何かしかけるようだな。」

立ち上がったネギ先生は無詠唱でなにやら仕込んでいるらしく、

魔法の射手が13本ほどネギ先生の周りで待機状態に入っている。

その後正面から高畑先生に突っ込むが、攻撃は回避され

カウンターを食らいそうになるが、防御しその勢いそのまま場外の石灯籠の上に立つ。



「タカミチ！ 最後の勝負だ！！」

「……いいだろう！ 受けてたとう、その勝負！！」

次が最後の一撃だ！！」

ネギ先生の宣言に高畑先生も乗り、この試合の最後の一撃をお互いに宣言する。

「あゝ……高畑の悪い所が出たな。」

「それなら最初からだよ、勝つつもりはないんだもん。」

高畑先生はネギ先生がどこまで出来るか知りたいだけだからね。」

ネギ先生は魔法の射手を放つと同時に自身も瞬動で突っ込む。

高畑先生は真正面から咸卦法での居合い拳 豪殺 居合い拳を放ち  
迎え撃つ。

打ち合いになるかと思っていたが、ネギ先生が高畑先生の攻撃の当たる瞬間に

風障壁を展開し、高畑先生の攻撃を防御し、

魔法の射手を纏ったネギ先生の突撃を 高畑先生は真正面から受けてしまう。

粉塵が巻き起こる中、

高畑先生はなんとか耐え切ったようだがネギ先生を探すが見つからない。

いや、私達からは見えているのだが ネギ先生は遅延魔法を用意していたようで

魔法の射手を待機させ高畑先生の背後に立っている。

準備が整ったネギ先生が高畑先生の背に触れ、

高畑先生もそれで気がついたようだが既に遅く

その後のネギ先生の攻撃をまともに受けてしまい今度こそダウンを取られる。

「・・・ふむ、まあ ここまでやれるなら合格点か。」

「高畑先生も満足したようだね、

あの遅延魔法の使い方は夕映にも覚えさせたほうがいいかもしれないな

いね。」

「そうだな、綾瀬も勉強になただろう。」

明日からの修行に遅延魔法も組み込むとするか。」

夕映の修行はさらにハードな物へとなっていく・・・夕映に明日はあるのか!?

「スライム三人娘に火炎魔法 それに呪いか、

これで遅延魔法も覚えて・・・夕映も大概 節操のない方向になってきたね。」

「まあ、アイツは頭で勝負するタイプだからな。

手札は多いに越したことはないだろう。」

「使いこなせばの話じゃない?」

「使いこなせば、じゃない、使いこなさせるのが私の役目だ。」

「・・・夕映、頑張ってる・・・私は応援することしかできないよ・・・」

舞台では、10カウントでのネギ先生勝利が宣言され

会場は一気に湧き上がる。

クラスの皆がネギ先生の勝利を喜び、賞賛し、高畑先生も起き上がったように

互いの健闘を喜び合う。

舞台では戦闘による修復作用が既に始まっており、

本日何度目かの大会中断、

観客も飲み物を買に行ったりトイレ休憩を入れるものなど様々だ。

私とエヴァも一度皆と合流し、現状の確認をし合う。

「で、どうだ？ 千雨。」

「・・・まずいな、確実にこの大会の話がネットに流れてる、画像付きだな。」

「幾つかの画像の撮影角度を見ると、茶々丸さんのいる方向になるです。」

茶々丸さんは今回超さん側ということになりますね……。」

「そのへんはエヴァはんも織り込み済みなんやろ？」

「……まあ、な。」

「この件でエヴァや茶々丸をどうこう言ってもしょうがないよ、

始めからそういう契約で茶々丸が家にいるんだし、

エヴァも制作に協力してるんだから。」

「べ、別にエヴァや茶々丸を責めようとか思ったわけじゃねーよ。

勘違いするなよー！」

「」「」「シンデレレ。(や)。「」「」

「どっこもデレてねーだろっつー！！」 #

私は怒り出す千雨をなだめ、話を進める。

「千雨のデレについては家で議論をするとして、」  
「しなくていいんだよー！」

超の計画が私達にどういふ影響をおよぼすか、

それによって 放置か潰すか決めないとね。」

「私は中立を約束している以上手は出さんからな。」

「エヴァが中立ってことは先輩に害が出ることじゃないってことか。」

「少なくとも現状 魔法を公開しようとしているということは害にならないんですか？」

「・・・学園に所属する魔法使いだけだったら・・・あまり良くはないな。」

関係者からたどられて、私や先輩に飛び火しかねない。

私はそれだけで 超の計画は潰したいところだ。」

「私ものどかのことがあるので、のどかには静かに暮らしていて欲しいですし。」

「ウチは別に この魔法使いが困っても関係あらへんからな。」

むしろ どんどん困って欲しいところや。」

「私はみんなで静かに暮らしたいな。」

私の希望を聞き、千草が少し考えこむ。

「・・・せやったらエヴァはん。」

「なんだ、千草。」

「エヴァはんの試合、できるだけはよう終わらせてくれへんやろか？」

ほんまはお嬢様の帽子取られて負けて欲しいんやけど。」

「なぜだ？ 私がどう戦おうがあまり関係ないんじゃないか？」

「ウチのお嬢様が静かに暮らしたい言ってるんやったら

ここで目立つのはあかんやろ？」

エヴァはんが好き勝手暴れてもったら、少なくとも いい方向には  
いかへんやろ。」

「ふむ・・・まあ、それくらいなら私の立場には関係ないか。」

「とにかく今は情報がたりまへん、今のウチらにできることは

できるだけ目立たずにこの大会を終え、備えることくらいや。」

「まあ、超からもエヴァに大会に出て欲しいって言うだけで

魔法を使えとか、暴れるとは言われてないからね。

体のいい所で負けるのがいいだろうね。」

「ちょっと待て姉様、私は負けるなんてまっぴらゴメンだ。」

「エヴァンジェリンさんは黙ってて欲しいです！」

ソプラノと私の生活がかかっているんですから。」

「誰と誰がだ、私と先輩の平穩がかかっているんだよ！」

「千雨はん 何言うてるんや、ウチとお嬢様の愛溢れる暮らしや。」

「貴様らは引っ込んでいろ！」

姉様には私がいるからいいんだ！」

エヴァの発言に千雨、夕映、千草が反応する。

「そのエヴァはんがすっかり超はんの言うことを断ってくれたら

こないな事にはなっへんのや！」

「そうです、なんで中立なんて中途半端なことをするんですか！」

「お前 今から超の所行って撤回してこいよ。」

エヴァが突っ込んだせいで、逆に集中砲火を浴びてしまう。

「し、しょうがないだろう、私だってこんな大会に出たりするのは



思ってたかったんだ。

外から超がやることを眺めて 酒の肴にでもなればと思ってただけなんだし……。」

「全く、このお子様吸血鬼は……。」

「世話のかかる人です。」

「とにかく、時間もあらへんし……エヴァはん。」

「……な、なんだよ……。」

「エヴァはんの試合は魔法なんか使ったり、遊んだりせんと すぐ終わらせてや。」

「わ、わかったよ……。」

エヴァもここでへんに言い返したら不味いと思ったのか

千草の言う事を素直に聞くことにしたようだ。

舞台の修復も終わりそうなので、私と少し落ち込んだ様子のエヴァは

選手席へ戻る……そこには なぜかメイド服（？） に着替えた

神楽坂さんと桜咲さんに会った。

「……何だ貴様ら？ どこかの家政婦にでもなったのか？」

「……う、うるさいわね！ 放っておいてよー！」 / /

「その……超さんがこの服で試合に出ろ、と 言う指示らしくて・  
」 / /

「二人共可愛いよ、その格好で私の家でメイドさんやって欲しいくらいです」

「い、嫌よ！ 毎日こんな格好するのー！」 / /

「私も……その、この格好はさすがに……」 / /

二人共似合っているのに……そんなにその格好は嫌なのだろうか？

……後で超に言って同じ服を用意してもらおう。

「おい 桜咲刹那、貴様私に当たる前に負けるなどという無様な醜態を晒すようなら

覚悟しておけよ？ 大事なモノを失いかねないぞ？」

「……どういふ事ですか、エヴァンジェリさん。」

エヴァの発言に刹那さんの表情が一気に変わる。

「貴様の今の立場は相当危ういものだということを目覚める。」

この上さらに醜態を晒すようなら　　もはや次はないぞ?」

「……ですから、それはどういう事かと聞いているんですっ!?

もはやエヴァンジェリンさんといえどもその言葉　聞き流すわけには行きません!」

「ここまで言ってもまだ気がつかんのか・・・貴様には失望したよ、桜咲刹那。」

「エヴァ・・・そこまでしておいてあげなさい、

桜咲さんは次試合なんだから・・・桜咲さんもごめんなさいね、

エヴァが少しいいすぎたみたいで。」

「……いえ、ソプラノさんに謝っていただけなくても・・・」

「ふん、姉様も罪なことをするな・・・ここで止めるとは。

まあ　いい、次の2回戦で私が直接教えてやるっ。」

「……エヴァンジェリンさんも慢心されませんように、

今回のルールではどうなるかわかりませんよ?」

「あ、あの・・・私も負けるつもりはないんだけど・・・」 1111

「しかしアスナでは無理アルかなー。」

私達の話聞いていたのか、古ちゃんや長瀬さん達も来たようだ。

「んー厳しいでござるな、修行も頑張っているようござるが・・・

」

「フフ・・・そうとも限りませんよ。」

古ちゃんや長瀬さんの言葉に反対の意見を述べながら

神楽坂さんの背後から クウネルさんが現れた。

いきなり背後に現れたクウネルさんに神楽坂さんが不思議そうな顔で

振り返ると、いきなりクウネルさんが神楽坂さんの頭を撫で回した。

「ちよちよちよつと！ イキナリにするんですかー！？」

「……………」

「フフ……改めて間近で見ても信じられませんよ アスナさん。

人形のようなだったあなたが、こんなに元気で快活な女の子に成長してしまおうとは……………」

『エヴァ、あの男に触れられないようにね。』

『？ わかった。』

「友人にも恵まれているようですし、ガトウ・ガクラ・ヴァンデン  
ヴァーグが

あなたをタカミチ君に託したのは正解だったようですね。

……………何も考えずに、自分を無にしてみなさい アスナさん。」

「……………あ、あんた 誰……………」

「いいですか、ネギ君からの魔力を受け取るとき……………」

何も考えずに力を抜いて自分を無にするのです……………」

そうすればあなたにもタカミチと同じことができますよ。」

「え……高畑先生と……!?!」

言いたいことだけ言っているとクウネルさんは去っていきこうとする。

「ど、どーゆーことですか!?!」

てゆーか あなた一体……!?!」

アスナさんが追おうとするが、いきなり消えてしまう。

「消えた!! 何者アルか 今の人!?!」

「……!?!」

この場に答えを持つ人は私とエヴァのみ、エヴァは特に言つつもりもないようだ。

……だが、このまま去られても面白く無いので少しからかってやることにする。

「あゝるゝびゝおゝ」 「え?」クウネル・サンダースですよ綺麗なお嬢さん。」「……」

「あら、まだいらしたんですか？」

「それはそうと……お嬢さん、貴女　どこかで私と会ったことがありましたか？」

「ごめんなさい、クウネルという人とは初めてです。」

「少し似た人なら知っているのですが、その方と間違えたかもしれませんがね。」

「そうですか……それならばいいんですが。」

「ええ、本当にそっくり。性格も似ているのかしら？」

「確か私が知っている方は、人の過去を知りたがる本当に趣味の悪い人でした。」

「そ、そうでしょうかね？　いい趣味だと私は思うのですが……」  
「――」

「人には色々とあるでしょう？　貴方にも……」

「……ふむ、自分の知らない所で知られているこの状況、

あまりいい気持ちではありませんね。」

「ですが　相手の同意を得ているのならばいい趣味だと思いますがね。」

「――」

周りの人達は私達の会話について来られないのか

皆一様に不思議そうな顔で私とクウネルさんを交互に見つめる。

「ここは少し部が悪そうですね、私はお暇することにします……が、

アスナさん……私が少し力を貸してあげましょう、

もう二度とあなたの目の前で 誰かが死ぬことのないように。」

「え……」

最後に神楽坂さんに そう告げて、クウネルさんはまた消えていった。

「そ、ソプラノちゃん!! あの人の事知ってるのっ!?!?」

「いいえ? 知りませんよ?

あの人に似てる人を知っていたので、間違えたみたいです。」

「だ、だって、さっきあの人とまるで知り合いみたいに……」

「神楽坂、貴様 次は試合なのだろう?

ほら、朝倉が呼んでいるぞ?」



舞台の方を見ると朝倉さんが手を振って神楽坂さんと桜咲さんを呼んでいる。

二人が舞台の方を見た間に私とエヴァは選手席の隅へ移動する。

「ソプラノちゃ……っっていない！」

「アスナさん、今はとりあえず試合の方に行きましょう。」

「そ、そうね……」

神楽坂さんも試合の開始が迫っていてはあきらめざるを得なかったように。

二人で舞台の方へ移動していった。

side 長瀬 楓

「…………古。」

「ん？ どうしたアル 楓。」

「今……エヴァ殿とソプラノ殿が移動したの、気がついたでござるか？」

「いや、特に気がつかなかったアルよ。」

「そつでござるか……」

(エヴァ殿はともかく……ソプラノ殿の気配も全く気がつかないでござる……)

ソプラノ殿も もしかしたらエヴァ殿並の使い手なのでござるか……？)

こうして第七回戦、神楽坂さん 対 桜咲さんの試合が始まる。

神様から頼まれたお仕事。

その37（後書き）

37話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その38

麻帆良学園 学園祭二日目 武道大会 第七試合

「さて、とうとう 神楽坂さんと桜咲さんの試合だね。」

「桜咲が勝って当たり前の試合なんだが・・・」

「どうもさっきのクウネルとか言う奴の入れ知恵が効いてるようだな。」

舞台上の試合の様子をしてみると、

神楽坂さんが桜咲さんの動きについていけているようで、

つい先日まで素人とは思えない打ち合いをしている。

「・・・というか、あいつらの武器はなんなんだ？」

「もう少し何とかならんのか・・・。」

「神楽坂さんのハリセンはともかく、桜咲さんのモップはメイドさ

んにはあつてるんじゃない？」

「そういう問題ではなくてだな……はあ、もういい。」

試合をしている二人の武器はともかく、剣術としてみた場合は

なかなかの勝負だ……だがやはり桜咲さんの方が優勢で試合は進み、

神楽坂さんのハリセンをバク転でかわし、逆立ちの体制で停止

そのまま神楽坂さんを蹴り飛ばした。

その後桜咲さんが追い打ちをかけるが、ハリセンで捌かれ

追撃は回避している。

「本来の神楽坂の運動神経を考えても以上だ……なにかおかしいな。」

「さっきのクウネルさんの関係じゃない？」

ほら、あそこで立ってるけど……念話でアドバイスしてない？

プロテクトが硬くて私には傍受できないけど。」

「……ふむ、確かに何かしているようだな。どれ……。」

エヴァがクウネルさんの念話を傍受している間に

試合中の二人はにらみ合いに入る・・・が 神楽坂さんが客席のネギ先生に向かつて

なにやら喚いている・・・「私がちゃんとパートナーとしてアンタを守ってやれるって所を

見せてやるわ!!」・・・愛の告白のようだ。

「・・・おい、冗談じゃないぞ、クウネルとか言う奴、神楽坂に咸卦法を使わせているぞ。」

「マジ？ 教えてすぐ出来るようなもんじゃないでしょ・・・元から使えたとか？」

「どついう事だ、姉様。」

「さつきクウネルさんは神楽坂さんをガトウって人から高畑先生が引きとって

ここに連れてきたような話をしていたじゃない？

ガトウって紅き翼の一人、つまり神楽坂さんは紅き翼と関係があるって言うことだよ。」

「・・・ふむ、そう考えれば幼少の時に誰かが吹き込んだ可能性も

あるが・・・

咸卦法などそんなに簡単に習得できるものじゃないぞ・・・魔法消去能力といい・・・

神楽坂にはまだ何か秘密がありそうだな。」

「学園長の孫の近衛さんと同室でネギ先生も同室・・・

神楽坂さんの能力だけの話で終わらないだろうね。」

咸卦法を使う神楽坂さんが桜咲さんと尚も打ち合うが、

徐々に神楽坂さんが優勢になっていっている。

「戦い方もうまくなってきたね、コレは咸卦法だけじゃ説明がつかないけど、

エヴァ、クウネルさんがアドバイスでもした？」

「ああ、桜咲の攻撃を読んで教えているな。

・・・しかし、桜咲も手を抜きすぎだな・・・ああ、言わんことじゃない。」

エヴァと話している間に桜咲さんの横からの攻撃を

神楽崎さんがうまくしゃがんでかわし、桜咲さんの次の攻撃の先を  
取り

そのまま体当たりで倒し、流れるような動きで首筋の横にハリセン  
を突き立てる。

「・・・桜咲もこれで目が覚めるだろうが、遅すぎたな。

実戦なら死んだぞ。」

「試合だというのと、相手が神楽坂さんだから 試合を楽しんでい  
るんじゃない？」

「勝負を楽しめるような立場か・・・アイツは・・・」

その後、桜咲さんはハリセンを払いのけすぐに立ち上がるが

神楽坂さんに押され始める。

「桜咲め・・・技を使うかどうかで迷い始めたな。

動き、特に攻撃に迷いが出始めた。」

「なるべくなら使いたくないだろうしね。」

「油断して最初からつぶしに行かないから ここまで追い込まれる  
んだ、まったく。」



「まあまあ、彼女も神楽坂さんがどこまで出来るか楽しみなんだからその辺はしょうがないじゃない。」

桜咲さんの動きに変化が見え始め、さっきまでの躊躇した動きも消えた、

技を使う気になったようだ。

「……ん？ 神楽坂がクウネルの助言を断っているようだ、

様子がおかしいぞ？」

桜咲さんの神鳴流の遠距離攻撃、斬空閃 散 を神楽坂さんが回避したが

様子がおかしい……というか表情がだんだん消えて行く。

桜咲さんが回避した神楽坂さんに追撃をかけようとした時、

神楽坂さんの咸卦法の出力が急激にあがり、持っていたハリセンが大剣に変化、

桜咲さんの攻撃を大剣で受け、桜咲さんのモップを真っ二つにする。

神楽坂さんの武器が刃物に変わったのを見た朝倉さんが

止めようとするが、神楽坂さんは無視して桜咲さんに上段から切り落としの攻撃を加える。

神楽坂さんの知人や観客がどよめく中、

桜咲さんは神楽坂さんの攻撃を冷静に体術で処理、

神楽坂さんの振り落としの攻撃に 桜咲さんは突っ込んで腕を取り足を払い、剣を振り下ろす力を利用して回転し、地面に押し倒した。

その後、神楽坂さんの刃物の使用により反則負け、

桜坂さんの勝利で 第七試合は終了した。

「桜咲さんはどうだった？ エヴァにゃん。」

「だめだ、やはり次に私と当たるときに自分の置かれている立場と  
いうものを

叩き込む必要があるな。

このままでは何れ 修学旅行や先日の悪魔襲撃を繰り返すことになる。」

「桜咲さんもかわいそうに・・・難儀な人に目をつけられて。」

「ふん、ほら姉様行くぞ、次は私たちの試合だ。」

「りょーかい。わかっているとと思うけどすぐ終わらせてね。」

「分かっている・・・アイツらに細かいことで一々責められてはかなわん。」

舞台も特に問題ないようなので

このまま次の第八試合、私とエヴァの試合が始まる。

「それでは続きまして第八試合 -

『3D柔術』の使い手 山下慶一郎選手対・・・

今回の主催者権限での特別参加！

麻帆良中囲碁部 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、

そしてその姉 麻帆良中帰宅部 ソプラノ・マクダウエル

の姉妹による 特別ルールでの試合です!!!」

名前の呼出に合わせて山下選手が舞台に上がり、

続いて私とエヴァが舞台に上がる。

「今回の特別試合ですがもう一度ルールを簡単に説明させていただきます。

マクダウエル姉妹の試合限定ですが、

通常の勝敗条件以外に、ソプラノ選手がかぶっている帽子を

対戦相手が取った場合、その時点で勝利となります。」

「エヴァ、お願いね。」

「任せろ 姉様。

姉様には何人たりとも 指一本触れさせん。

私はエヴァの数歩後ろに下がり、山下さんとエヴァがにらみ合う形となる。

「それでは始めます！」

・・・第八試合・・・Fight!!」

「お嬢ちゃんを殴る趣味はないんでな、後ろの娘の帽子をいただくぞ!!」

そう言いながら山下さんはエヴァの横を通るように突っ込んでくるが・・・

完全に意を消したエヴァの腹部への掌打を食らい一撃でダウンした。

「おおーっつと！ 一撃!! 一撃でダウン!!」

子供のような少女の一撃で山下選手ダウン！

この大会・・・何が起こるかわかりません!!」

朝倉さんのカウントが行なわれている間に

エヴァが私の元に戻ってくる。

私はエヴァに腕を取り、そのまま腕を組む形で 私達は舞台を降りる。

「エヴァー、お疲れ様。」

「この程度疲れる内にも入らん。」

そのままカウントは進み、10カウント入ると同時に私達は舞台を降り

選手控え室に向かう。

「10！！ マクダウェル姉妹の勝利ーッ……っであれ？  
い、いない……」

こゝこほん コレで1回戦すべての試合が終了しました！！

試合結果をスクリーンで御覧いただきましょう！！」

## 2回戦

村上 小太郎 vs クウネル・サンダース

長瀬 楓 vs 古菲（負傷のため長瀬楓の不戦勝。）

高音・D・グッドマン vs ネギ・スプリングフィールド

桜咲 刹那 vs マクダウエル姉妹

「2回戦は20分の休憩をはさんで開始します。

尚 2回戦からはお客様も増え 混雑が予想されます。

臨時観客席も御用意させていただきますが なるべく詰めて……

「

選手控え室では、ネギ先生達が1回戦の検討を讃え合ったり  
2回戦に向けてお互いを奮起させているようだ。

私とエヴァは千雨達が控え室に着いたので合流し、

情報の流出具合を確認する。

「どう？ やっぱ情報は流れてる？」

「ああ、1回戦の試合はすべて画像付きで流れているな。

エヴァの試合は すぐ終わらせてくれたから

画像はあっても写りの悪いのが1枚くらいだ。」

「エヴァが完全に意を消してくれたからね、

動画から抜き出すくらいしかできないと思うよ。」

「次の試合も この調子でよろしくです。」

「……分かってる。」

「なんや、えろつ素直やな、なんかあつたん？」

「……貴様らにこれ以上つまらんことで責められたくないだけだ。」

「まあ、エヴァが協力してくれるんだからこの話はいいじゃない。

……取り合えず 千雨、このネットの状況

ネギ先生達にも教えておいてあげてくれない？」

「な、何で私なんだよ！」



「だって、このノートPC、千雨のじゃない。」

「ぐっ……分かったよ！」

夕映、行くうぜ。」

「はいです。」

千雨と夕映は、私のお願いを聞いて、ノートPCを持ってネギ先生達の方へ行った。

いつも思うが、表でチャチャゼロを頭に乘せた千雨は

傍から見たらどう見えているんだろうか？

「さて……エヴァ。」

「な、なんだ姉様。」

「桜咲さんにどうやってお説教するつもり？」

「説教など……まあいい、とりあえず一度叩き潰してだな  
「ストップ。」　なんだ千草……？」

「刹那はんを叩き潰すのはええけど、そないな事したら大騒ぎになるやろ、

もう少しやり方を考えてくれへんか？」

「む……わ、わかった。」

それじゃあ幻術空間に引きずり込んで……そこでならどうだ？」

「……まあええやろ。」

そない長い時間をかけたらあきまへんで？」

「分かっている！ 現実時間では数秒で終わらせる。」

「ありがとうね、エヴァ。」

「ふんっ……」

これで二回戦でエヴァが派手なことをしないで済む様になり

私と千草は一安心……そこへネギ先生達の方から

長瀬さんが古ちゃんを連れてやってきた。

「エヴァ殿 ソプラノ殿、二回戦進出おめでとうでしゅね。」

「おめでとつアルね。」

「ふん、当然の結果だ。」

「あ、長瀬さん 古ちゃん、ありがとう。」

それにしても古ちゃんはせっかく勝ったのに残念だったね、怪我大丈夫？」

「コレくらいの怪我は大丈夫アルよ、すぐに治るよ。」

「しかし、エヴァ殿がお強いのは知ってはいたでござるが、

体術だけでもあそこまでとは思わなかったでござるよ。」

「すごかったアル！ 攻撃の起こりが全くわからなかったアルよ。」

「アレくらい造作も無い。」

「そうでござるか？ 拙者や古にもあの動きは未だ無理でござるよ。」

時に、エヴァ殿はあのような武術をどこで習われたのでござるか？」

「・・・？ 昔京都で ある爺さんに教わったのを手慰みに覚えただけだ。」

「そうでござるか、エヴァ殿にそのような武術を教えることが出来る御仁だったら

拙者も一度会ってみたいものでござるな。

ソプラノ殿は会ったことはあるのでござるか？」

私に話を振ってきた？

・・・エヴァの方を見ると表情はいつも通りだが、

長く一緒にいた私が見る限り違和感を感じる。

エヴァも気がついたようだ、・・・長瀬さんは私のことを探りに来た可能性がある。

「私はその頃エヴァとは一緒にいなかったですから

会ったことはないんですよ。」

「そうでござるか？ お二人はいつも一緒にいるようなので

てつきり会ったことがあるのかと思ったのでござるが。

拙者もその御仁と会えなくて残念でござる」

嘘は言ってない、私はその頃 試衛館で剣術を習っていたから。

「ごめんさいね、知っている人だったら紹介できるかもしれないかなんですが。」

「気にして無いでござるよ、むしろ畏まらねば拙者が困るでござる。」

『まほら武道会 第二回戦参加選手は、選手席の方へ移動してください。』

繰り返します、まほら武道会 第二回戦参加……』

「あ、エヴァ私達のことじゃない？」

「そつだな、行くぞ姉様。」

「ほら、長瀬さんも行きましょう。」

「そつでござるな、一緒にさせていただきますでござるよ。」

千草は千雨、夕映、チャチャゼロと合流して客席へ

私達は舞台脇の選手席へ移動した。

舞台では、既に小太郎君がやる気満々でクウネルさんを睨みつけている。

「では2回戦 第一試合を始ませさせていただきます！」

村上選手 対 クウネル選手……それではFight!!」

朝倉さんの試合開始の合図と同時に小太郎君はクウネルさんに突っ込むが

小太郎君のストレートにカウンターで掌底をあわせられ吹き飛ばされる。

その後クウネルさんが小太郎君に挑発、それに見事に乗った小太郎君が

6体の分身と本体で攻撃をしかけるが、回避され続ける。

分身で攪乱をし、背後に回った小太郎君の攻撃もかわされ、

逆に背後に回られて、掌底で場外に吹き飛ばされる。

場外からの狗神を使った攪乱攻撃から接近し、直撃を当てることができたが

クウネルさんに効いた様子は全くない。

「……あのクウネルとやら、やはり実体ではないようだな。」

「うん、本人は図書館島の地下かな、やっぱり。」

「しかし、アレは反則だろう？」

アレを倒そうと思ったなら正攻法じゃ無理だぞ。

むしろ魔力での通信障害や術式自体破壊する方向で攻めないとな。」

「大会のルールではエヴァくらいしか無理だろうね。」

「まあ、実力でもあのガキじゃ勝てないから同じことなんだが……  
どうしたものか。」

「少し嫌がらせでもする？」

エヴァがここでクウネルさんと分身の魔力妨害しても反則にはならないと思うんだよね。

それが反則なら本体がここにいないクウネルさんは場外のカウント負けだからね。」

「面倒くさい、私と当たる時になったらやればいいだろう。」

見た目にもわからんだろうしな。」

小太郎君はクウネルさんの攻撃で地面に叩きつけられ、

本来の力を出すために獣化し、起き上がろうとするが

クウネルさんの重力を操作する無詠唱魔法で潰され意識を失った。

「きよ 強烈な一撃だ!!」

こ・・・これは 村上選手・・・村上選手 気絶!!

クウネル選手の勝利ー!!」

小太郎君は医療班に医務室へ運ばれて行き、

舞台では修復作業が既に開始されている。

選手席のほうを見ると、ネギ先生がソワソワとしているが

小太郎君の元へ行くことはなさそうだ。

一度 自身も盛大な敗北を エヴァから受けているので

その経験からか、こつという時はそつとしておいて欲しいと分かっているようだ。

やはり精神的にも、現段階での力量も原作より

今のネギ先生の方が優れているようだが・・・将来的には不安要素が拭えない。



修復作業中、朝倉さんから次の試合に関する放送が入る。

「先程お伝えしたとおり、残念ながら第十試合は

古選手 左腕前腕骨折による棄権のため

長瀬 楓選手の不戦勝とさせていただきます。

続きまして 2回戦第十一試合

ネギ・スプリングフィールド選手 対 高音・D・グッドマン選手・  
・・・」

次の試合は個人的には最注目選手、高音さんの試合だ。

「・・・茶々丸・・・準備はいい？」

「・・・お任せください、ソプラノ様。」

「・・・何の準備だ？ 姉様。」

「・・・っ!?!?」

隣に座っているエヴァを見たら、

まるで汚物でも見るような目で私を見つめている。

「え、何のって……ほら あれだよ!？」 1111

「あれとは何だと聞いている。」

「……あ、あの……」それでは第十一試合……Fight!  
「! ほら!」

試合が始まったよエヴァ!」

「試合などどうでもいい、今は大事な話中だ。」

「……え〜っと……ほら……あの……あ、明日!」  
最終日のエヴァとのデートできていく服を茶々丸のに用意してもら  
っていて……」

「ほう、茶々丸が姉様の服を用意……か、

千草でなく、わざわざ私の従者を使つてか?」

「茶々丸の方がエヴァの好みを把握していると思ひまして……」

1111

私がエヴァに詰問を受けているころ、ネギ先生と高音さんの試合の方は

高音さんがしょっぱなから影の魔法全開、

影で創りだした人形を使つての攻撃をネギ先生が回避、

ネギ先生も攻撃をするが、高音さんの影によって完全に防がれている状態だ。

防戦一方かと思われたネギ先生だが、

瞬動で高音さんの懐に潜り込み

近接から魔法の射手を高音さんに直接打ち込むことでダメージを体内に与え

高音さんの意識を刈り取り、意識を失つた高音さんは

まどつていた影の制御ができなくなり、全裸の状態を観客に晒すことになってしまった。

「え、エヴァ、ほら！ 大変だよ！ 高音さんが！！」

「私の話はまだ終わってないぞ。」

「いいからとにかく見て！！」

「なんだと言う……あ、アレは……あれだ、公然猥褻罪とか

脱がしたばーやが痴漢とか強制猥褻とか……」

「私も流石に高音さんが可哀想になってきたよ……」

「……今日2度も脱がされ、しかも今回は全裸か……哀れな。」

高音さんの惨事にエヴァも怒りが霧散したのか、あきれ果てたのか・

これ以上私が追求されることもなかった。

『ソプラノ様、撮影は完璧でございます。』

『……茶々丸、流石だ。』

今日帰ったら私が螺を巻こう。』

『恐悦至極。』 / /

私と茶々丸の意思疎通は今日も完璧だった。

神様から頼まれたお仕事。

その38（後書き）

38話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その39

麻帆良学園 学園祭2日目 まほら武道大会 2回戦 第一二試合

舞台の損傷もそれほど激しく無いようで

私達と桜咲さんの試合はこのまますぐに行なわれるようだ。

「お待たせしました、続いて2回戦最終試合

桜咲選手 対 マクダウエル姉妹、

この試合で学園最強ベスト4が決定します。」

朝倉さんの呼出で私達と桜咲さんが舞台上上がる。

「桜咲 刹那、今回の試合で 今の貴様が置かれている現実というものを

教育してやるぞ。」

「・・・先程から何度も聞いてますが、私の置かれている立場が貴女にわかるとでも言うのですか？」

「少なくとも貴様よりは私の方が理解していると思うが？」

貴様も理解していたらそんなに不抜けていられるはずがないからな。

「

「貴女から見て、私はそんなに不抜けているというのですか？」

「ああ、最悪だな。貴様が私の従者なら即刻処断している所だ。」

「・・・」

私達の立ち位置は桜咲さんとエヴァが対面し、私は舞台隅の方に移動する。

「それでは 第十二試合・・・Fight!!」

「さあ！！ 来るがいい 桜咲 刹那！ 教育してやるぞ。」

「くっ・・・!!」



エヴァの気合の入った台詞とは裏腹に

その立ち姿は傍から見たら棒立ち、

しかし刹那さんや ある程度武道の経験がある人が見たら

付け入る隙がない完全な自然体に見えるだろう。

攻めあぐねている桜咲さんに、焦れたエヴァが先制攻撃を仕掛ける。

「来んのか？ ならばコチラからいこう。」

エヴァが左手の人差し指を桜咲さんの方に振ると

桜咲さんの右腕が本人の意思に反して動き出す。

次にエヴァがその指を引くようにすると、

その動きに合わせて桜咲さんが一瞬中に舞い、地面に転げだす。

何が起きているのかわからないのか、桜咲さんは急いで起き上がるが

エヴァの指先の動きで桜咲さんの手足が勝手に動き出し、

仰向けで海老反りのような体制で固定される。

「・・・糸っ!?!」

「その通り、ようやく気づいたか? 人形使いの技能さ。

試合でなければこれで終わりだぞ?

以前の貴様なら とう簡単には行かなかっただろうな?」

エヴァがさらに指を動かすと、桜咲さんに絡まった糸が締め上がり

桜咲さんは苦悶の表情で悲鳴をあげる。

「ぐっ・・・あ・・・がつ!?!」

「以前の貴様には生まれと鬱屈した立場からくる、

触れれば切れる 抜き身の刀の様な佇まいがあった。」

「桜咲選手、不思議な力で押さえつけられています・・・これはっ  
!?!」

「それが何だ、このザマは?

この学園で貴様のお嬢様と和解、神楽坂やぼーや達、クラスにも友人ができたようだな?

まあ、そこまではいい、私は全く興味がないがな。

だがそこからだ……貴様、分かっているのか？

貴様は既に2度、今これが試合ではなく殺し合いなら3度目か、

近衛木乃香を殺しているんだぞ？」

エヴァの台詞に桜咲さんが驚愕の表情でエヴァを見つめる。

「そ、それは……どういふ事……や。」 1111

「言葉通りの意味だろうか？」

修学旅行、私が介入しなかったら貴様のお嬢様はどうなっていた？

先の雨の日、護衛の貴様が付いていたにも関わらず攫われたな、

拳句に貴様より圧倒的に実力が劣る夕映に助けられる始末。

そして今、私の糸が鋼線で私その気なら

貴様の身体はばらばらになっているだろうな。

どうだ？ 3回もお嬢様を殺した気分は？」

「あ……あ……うあああああ~~~~!!」

指摘されたことを受け、恐慌状態に陥った桜咲さんは

エヴァの糸を強引に切断し、エヴァに襲いかかる。

桜咲さんはモップで斬岩剣をエヴァに打ち込むが

打ち込んだモップはエヴァの鉄扇でそらされる、そのまま腕を取られ  
重心を崩され、関節を捻り、糸を駆使して地に押さえつけられる。

「護衛が冷静な判断をできなくてどうする？」

これで4度目か？ 何回お前の大事なお嬢様を殺せば気が済むんだ  
ろうな？

私など姉様を一度でも……いや、触れることすら許しがたいな。」

「ぐっ……あ……がっ！」

「さて、このままでは埒があかん……」

桜咲 刹那、私の目を見る。」

エヴァを睨みつける桜咲さんに幻術を掛け

体感時間の感覚すらも狂う幻想空間へ引きずり込む。

私は、二人が戻ってくるまでの間この場で待つ。

side 刹那

(くっ………ここは………)

辺りを見回すと真っ白な石で作られた闘技場のような広い場所。

その周りは海のように潮風が吹いていて、空は澄んだ青空だ。

そして手には刀が握られている。

「夕凧？ ……それにこの格好は鳥族の服……」

「さて、ここなら落ち着いて話ができるな、桜咲。」

声のする方を確認するとエヴァンジェリンさんが空に浮いている。

「桜咲、少しは自分の置かれている立場が理解できたか？」

「……………私が……………護衛失格ということですか……………」

「まだ理解できていないようだな、護衛失格？」

そんなもの修学旅行以前の問題だ。

護衛する者が対象人物から逃げ回っていてはな……………

まあ、それも学園で改善はしたが、その結果 今度は周囲への警戒が薄れた。」

「ち、違いますっ！ 私はそのようなことは……………」

「自分でも気がついてるのだろう？ だから言葉に詰まる。」

貴様はあのぼーやについてどう考えている？」

「ネギ先生ですか……………？」

あの人はあの年にして、素晴らしい志を持って 「そんな話ではない。」

「……………どういう事ですか？」

「あのぼーやが近衛木乃香に取って危険かどうかだ。」

「…………お嬢様を取って…………必要な方です。」

「…………本気でそう思っているのか？ 馬鹿なのか貴様…………」

それともぼーやに惚れておかしくなったか？」

「…………くっ！」 / /

「修学旅行での原因はあのぼーやだぞ？」

悪魔の件もそうだ、アイツはぼーやの力量を見るために近衛を人質に取った、

近衛にとってぼーやは最重要の危険人物だろうが！！」

「……………っ!？」 ーーー

エヴァンジェリンさんの指摘に何も反論ができない…………

私が間違っているのか？

ネギ先生は…………お嬢s…………このちゃんにとって……………

「本来貴様が護衛を名乗るならジジイに直訴して近衛とぼーやを

一刻も早く引き離すことが先決なのではないか？

・・・いや、そもそも貴様は既に2度も失敗しているのだ

自ら護衛の任を離れ、京にでも帰るのが筋だろうな。」

エヴァンジェリンさんの指摘が一々心に痛い。

すべてその通りだ・・・私が護衛を第一とするならネギ先生は遠ざけるべきだし

既に2度も失敗している私が未だに護衛の任についていること自体おかしい・・・

このちゃんに関西にとつても関東にとつても最重要の人物、

その護衛の私がこの体たらくでは・・・

・・・？ いや、そもそも何故エヴァンジェリンさんともあるう人がわざわざ私にそんな指摘をしてくるのか？

「・・・え、エヴァンジェリンさん、あなたにとってその辺の塵にも等しい

私の事に、何故ここまでされるんですかっ!？」

「貴様はどこまで不抜けているんだ？」



それとも知らされていないのか？

ならば あえて教えてやるが、本来ジジイ共と私達は不干渉が常の立場なのだ、

それが先の修学旅行でジジイが私達に泣きついてきた、

近衛木乃香やぼーや、関東 関西の組織を救って欲しいとな。

私にとっては知った事ではないが、貴様らに騒がれても困る、

故に京都では関与してやったが、その代償は決して小さいものではなかっただろうな。」

初めて聞く話だ・・・学園長とエヴァンジェリンさん達は相互に協力体制を

結んでいるものだとばかり思っていた。

修学旅行の後、学園長室でエヴァンジェリンさん達に今後関与しないように

言われはしたが、そういう事だったとは・・・

「私達にはその気になったら貴様や近衛木乃香、

たとえジジイだろうがぼーやだろうが・・・

私達に干渉するのならばすぐさまその場で殺してもいい契約を結んでいる。

「……つまり京都での一件で貴様らを皆殺しにしてやってもよかつたんだぞ？」

「そ、そんな馬鹿なことがっ!？」 1111

それではエヴァンジェリンさん達の気分次第で

私達などいつでも殺されてしまうということ……そんなことが有るわけ……

「まあ、貴様ら末端の人間は知らなくていいことだからな、

ジジイも説明してはいないようだし、帰ったらジジイに聞いてみる  
といい。

さて……少しは自分の置かれている立場が理解できたか？ 桜咲  
刹那」

エヴァンジェリンさんの言っていることがすべて本当だとしたら、

私の今の立場は薄氷の上で何も知らずに踊りでも踊っているとしても  
言っつのか……

護衛にも失敗、このちゃんも私も いつ死んでもおかしくない、

学園長だってそうだ・・・私の失敗でエヴァンジェリンさんに救出など頼んで、

自身は殺される覚悟だったはずだ・・・

にも関わらず私は呑気に学園祭を楽しんでいたというのか・・・

1111

「さて、少しは自分の置かれている立場というものが理解できたか？」

「・・・私は・・・私・・・このちゃん・・・」 1111

「ふむ、少しは理解出来ているようだな。」

では、時間も無い 試合といこうか？」

試合？ エヴァンジェリンさんを確認すると 私の直ぐ目の前まで迫ってきている。

エヴァンジェリンさんの攻撃をとっさに防御したものの

私は吹き飛ばされる。

「ハハハハハツ 話にならんぞ！」

どうした！？ 貴様の力を見せてみる！！」

「くっ……！？」

エヴァンジェリンさんが振り下ろす爪を剣で受けるが

とてもじゃないが受けきれるものではない！

私はまたもやそのまま吹き飛ばされる。

(ほ……本気だ！！)

空に吹き飛ばされた私は翼を出し、

それを飛ぶエヴァンジェリンさんの動きに対応できるようにする。

「近衛を守ると行ったな？ 桜咲 刹那。

この程度で誰かを守ろうなど片腹痛いわ。

いいか桜咲、貴様 この試合私に負けたならば……剣を捨て 京に帰れ。」

エヴァンジェリンさんの右手には巨大な氷塊が作られ、私に向かって投げつけられる。

「剣を・・・このちゃんも・・・」

「そうだ、腑抜けた貴様がそのままここに居ても

私も学園も、そして近衛木乃香にも悪影響でしか無い。

・・・邪魔だ。

己が力を持って、選ぶがいい。」

私に叩きつけられる氷塊を切断しエヴァンジェリンさんへ向かう。

「ハハッ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い我に従え 氷の女王・・・っ」と

呪文の詠唱は禁止だったか。」

私はエヴァンジェリンさんに斬りかかるが通常の攻撃では

彼女の障壁を抜くことはできない、

すぐに反撃をもらい私は防戦一方となる。

「ほらほら、どうした桜咲!!」

(勝てない……!!)

「剣は……お嬢様を守ることは私の全てです!

これがなければ 私は……生きていきません!!

どちらも……簡単には捨てられませんっ!!」

「ハッ! 全てか、大仰だな! くだらん!!

全て だとか 夢 だとか、誰もがよくやる勘違いさ!!」

私は突進してきたエヴァンジェリンさんに首をつかまれ

地面に叩きつけられ そのまま地面に擦りつけられる。

「そんな大層なモノにすがらずとも 日々の小さな幸福と愉しみが  
あれば

人間って奴は生きていけるらしいぞ!?

フフ・・・誰もが夢敗れて 裏切られる！！

それでも生きられると知って つまらん大人と相成る訳だ、

が・・・それも悪くない。

・・・お前もそうして生きるがいい。

刹那。」

「！？」

私は巴投げの要領でエヴァンジェリンさんを蹴り飛ばし、彼女から逃れる。

「で・・・でも！！」

「貴様はすべて忘れて 京で一般人としても生きるがいい。

近衛のことも剣も、ぼーやも忘れて 幸せに暮らせ。」

すべてを捨てて幸せに暮らせ？

・・・そんなこと出来るはずがない。

「それでも尚 この地に留まると言つのならば・・・

それだけの力を示してみせよ！ 刹那っ！！」

「っ！！！」

（あれは・・・マズイ！！）

エヴァンジェリンさんの右手、その指先一本一本に

高濃度の魔力が凝縮され剣の形状になり

氷の割れるような音が鳴り、周囲の空気すら凍結していく。

私は自身の持つ最高の結界を張り、攻撃に備える。

（神鳴流 対魔戦術 絶対防御！！ 四天結界 独鈷鍊殻！！）

エヴァンジェリンさんは右手を振り上げ私の結界をあっさり砕き

私はそのまま吹き飛ばされる。



(か・・・勝てるはずがない この人に・・・)

本気になったエヴァンジェリンさんがこれほどまでの魔物とは・・・

いや、本気かどうかも怪しいモノだ、この人はさっきからまるで遊んでるようだ。

しかし 理不尽な話だ・・・力を示せと言ってもこの圧倒的な実力差・・・

いくら幻術空間の中とはいえ、これでは最初から選択肢は無いに等しい。

いや、彼女にとって選択肢など与える必要すらない、

私を消せば済む話だ・・・それなのに何故こうも私に付き合っ  
て・・・くれている？

・・・幻術？ まて！ エヴァンジェリンさんは試合開始前になん  
と言っていた？

『桜咲 刹那、今回の試合で

今の貴様が置かれている現実というものを 教育してやろう。』

・・・教育？ 誰を・・・？ 私を？  
・・・そうかつ！  
！)

「今の一撃 よくぞ耐えたな。」

だが次は耐えられまい、これが最後だ 刹那っ!!」

「……神鳴流 決戦奥義。」

「!？」

……ふん、受けて立ってやろう!!」

「真・雷光剣!!」

「E N S I S E X S E Q U E N S ! !」

s i d e ソプラノ

桜咲さんを中心に爆発がおき、煙が巻き起こる。

その煙の中から桜咲さんがエヴァに向かって斬り込んでいく。

(……エヴァは 受ける気か! マズイ!!!)

私は桜咲さんの視界を防ぐように自分の帽子を投げつけ

エヴァを抱えて桜咲さんのモップの届く範囲から飛び出し・・・倒れこむことにした。

桜咲さんは反射的に私の帽子を掴み取り

目の前から消えたエヴァを探している。

「あっ・・・あっ・・・あっ・・・と何が起きたあゝ!!」

桜咲選手、ソプラノ選手の帽子を手に取っている!

これにより、桜咲選手の勝利となりましたっ!!」

「大丈夫? エヴァ。」

「・・・ああ、私が姉様を守るはずなのに 守られてはな・・・」

「フフ・・・これでは桜咲のことを言う資格はないな。」

「エヴァが無事ならそれでいいよ。」

エヴァは無傷のようで安心した私はエヴァの手を取って立ち上がる。

そこへ桜咲さんが駆けつけてきた。

「だ、大丈夫ですか！？ お二人共！」

「こっちは大丈夫だよ、桜咲さん。」

「よかった・・・あ、ありがとうございます！ エヴァンジェリンさん！！」

「ん？ あ いや・・・何のことだ？」

「先程の教え、確かにエヴァンジェリンさんに教育していただけなかったら

このまま取り返しのつかない事態になっていたでしょう・・・

あの話がなくても、最近の私は思いもよらぬ幸福な状況に流され

タルんでいたと思います。

それをこのような形で諫め諭して頂けるなんて・・・

わざわざこんな手間をかけていただいて、本当にありがとうございます！  
ますっ！！」

何かよくわからないが桜咲さんがエヴァの手を両手で握って

すごい感謝をしている……幻想空間で何があった？

「オ、オイこら 桜咲何をポジティブな方向で勘違いをしているか  
知らんがな……」

「桜咲などと他人行儀ではなく、先程のように刹那とお呼びください！」

「話を聞け！ 私はただ単に貴様に腑抜けられると私や姉様に迷惑  
だったから

使えるか試し、その結果次第で排除しようと思ったただけだ。」

「いえ、そんなご謙遜を エヴァンジェリンさん。」

私 感動しました。」

「ええいつ 手を離せ！！ 私の手は姉様以外握っていいものではない！！」 / /

「まあまあ、いいじゃないエヴァ。」

桜咲さんの場合 尊敬の念から来てるんだし。」

「ソプラノさんも今後は刹那とお呼びください。」

最後の身を呈してエヴァンジェリンさんを救った勇氣、

流石エヴァンジェリンさんの姉であるだけのことはあります。」

本当に幻想空間で何があったんだろうか・・・？

桜咲さんの豹変に私達は驚き、戸惑いながら舞台を後にした。

side 長瀬 楓

「見たでござるか、古？」

「・・・あの動き、本当にソプラノアルか？」

動きの起こりからエヴァを抱いて倒れこむまで何もわからなかったアル。

気がついたら倒れこんだエヴァと帽子を持っている刹那が見えただけだよ・・・」

「拙者も同様・・・爆発と同時に刹那殿を視認した時にはもうソプラノ殿を見失っていたでござるよ。」

これはもう確定でござるな・・・ソプラノ殿もエヴァ殿並か・・・  
いや、エヴァ殿もソプラノ殿に反応していなかったようだから下手  
をしたら

エヴァ殿以上の強さかもしれないでござるな。

京都のあの一見以来、違和感を感じてはいたでござるが

今日この時まで完全にソプラノ殿の力を見誤っていたでござる。

これは一度修行のやり直しも視野に入れたほうがよさそうでござる  
な・・・

はあく自信を無くすでござるなあ・・・

神様から頼まれたお仕事。

その39（後書き）

39 話目 投稿



神様から頼まれたお仕事。 その40

麻帆良学園 学園祭 二日目 まほら武道大会

3回戦 長瀬さんとクウネルさんによる 第十三試合が会場で行なわれている。

表からは爆音や歓声が聞こえてくる、そんな中で 私達は選手控え室にいた。

「は、負けちゃったね、エヴァ。」

「負けちゃったね、じゃない。」

姉様が勝手に勝ちを譲ったんだろうが！」

「しょうがないでしょ、エヴァを助けるためだったんだから。」

それに キリのいい所で負けたほうがいいって、みんなで話したじゃない。」

「・・・私は不愉快だ。」

「幻術破られた後の攻撃、エヴァ受けるつもりだったでしょう？  
どうせ、その時点で私は何もできなくなるんだから結果は同じじゃ  
ない。」

「あ、あれは……つい ノリというか、あそこで避けたら大人  
気ないというか……」

「じゃあいいじゃない、どっちにしても負けで終わるんだから。」

「……納得がいかん。」

先の試合で 私が刹那さんに帽子を投げ、結果負けた事がくやしい  
のか、

しばらくエヴァはふてくされていた。

エヴァの機嫌を取っているところへ

千雨達がやってきた。

「先輩、いいタイミングでやってくれたな。」

おかげで下手にエヴァの力が公開されなくてよかったよ。」

「さすがお嬢様や、最高のタイミングと演出やったで。」

「お疲れ様でした、ソプラノ。」

「ケケ、マケテヤンノ、ゴシユジン。」

「黙ってる！ ボケ人形！！」

エヴァがチャチャゼロの首根っこを掴んで振り回す。

「さて、皆はこれからどうする？」

「ん、私等は別に用事はないからな、適当に学園祭を回るか

それとももう少しここで超の様子を監視していくか・・・」

「それなら 皆に少しお願いしていいかな？」

「なんですか？ お嬢様のお願いやったら何でも聞きますけど。」

「千草以外はここで大会と超の様子を監視しておいてくれないかな、  
ついでにクウネルさんとかネギ先生辺りも。」

「ウチはどないするんです？」

「千草は私についてきてくれない？」

「ちょっと調べたいことがあってね。」

「ウチはかましまへんけど、何を調べはるんですか？」

「神楽坂さん達と一部の人がいないと思わない？」

まだネギ先生の試合が残っているのに、

少なくとも高畑先生や神楽坂さんはぜって見にくるはずだと思うんだよね。

なのに いなくなっている、少し気になってね。」

「それならば私が付いて行ったほうがいいんじゃないか、姉様。」

「エヴァにはここにいて欲しいんだ、

クウネルさんが何をやるか確認するのにエヴァが適任だからね、

他の娘だと彼が相手じゃ誤魔化されるかもしれないから。」

「ふむ、わかった。」

「そういう事で、千雨は引き続きネット関係の監視、

夕映はネギ先生達の方の連絡とか情報収集で

エヴァはクウネルさん関係、チャチャゼロは護衛と言う感じで。」

「わかったですよ。」 「了解。」 「ツチ、ツマンナーナ。」

「それじゃあ千草、行こうか。」

隠密関係の術は私の道具使って最高レベルでお願いね。」

「はいな。」

私達は それぞれの役割分担に分かれ移動しようとしたが、

エヴァの待ったがかかった。

「……ん？ 姉様待て。」

「どづしたのエヴァ？」

「今 高畑からの念話を傍受した、地下で捕らえられたから応援をよこせ、」

と言う内容だ、場所は……この下の方からだな。」

「と、言うことは……高畑先生は恐らく超の調査に行き捕まった。

神楽坂さんは高畑先生を探しているって所かな。

さつき神楽坂さんが高音さん達と何か話していたみたいだからその関係かな。

ありがとう エヴァ、

とりあえず高音さんや神楽坂さんを追跡してみるよ。」

「ふん、当然のことをしたまてだ。」

「ほな お嬢様、ウチについてきておくれやす。」

「こつ言つのはウチのほつが得意ですから。」

千草がエヴァの方を見ながら自分が先導するように言います。

なぜかエヴァが千草を睨みつけるが 私は特に気にせずに

千草に続き 神楽坂さん達の追跡に入る。

武道会会場 地下

私と千草は神楽坂さんの追跡し、武道会会場で地下への進入路を発見  
神楽坂さん達が先に侵入したのか、鍵が派手に破壊されていて  
複数の足跡も残っている。

「これなら追跡は楽そうやな、旦那さん。」

「そうだね、千草は追跡と認識阻害に集中してね。」

周囲の警戒は私がやるから。」

「はいな。」

通路を先に進んで行くと、そこら中に機械の残骸のようなものや

大会選手の田中さんの残骸（？）が散らばっている。

さらに先の方からは、爆発音や悲鳴のような声が聞こえ出した。

「当たりのようだね、千草。」

「当然や、ウチが追跡してるんやさかい。」

声の聞こえる方に移動していくと・・・

そこには全裸でへたり混んでる佐倉さんと気を失っている高音さん、ロボットのような物を相手にしている神楽坂さんの姿を見つけた。

「旦那さん、どないしましょ?」

「うーん、茶々丸がないのが残念・・・撮影機材も持ってきてないし・・・」

「……旦那さん どないしましょつか？」 #

「は、はい……しばらく様子を見てみようと思います。」 1111

(1111) 千草が怒るとマジで怖いよ…… 1111

「助けへんでよろしんです?」

「高音さん達の様子を見ても、せいぜい脱がされるくらいみただし。」

神楽坂さんがやられたら 拘束するために移動するだろうから

それについて行くうよ。」

「そやね、その方が確実に超はんの隠れ家か

高畑はんの所に案内してもらえそやね。」

しばらく神楽坂さんの奮闘を眺めていたが、

不意に通路の奥のほうがり、神楽坂さんが妙な回避行動を取り出した。

「……!? 千草、こっち!」



私は通路脇に千草を引っ張り込む、

するとさっきまで居た場所を衝撃のようなものが通りすぎていく。

「……は、危なかったね。大丈夫？ 千草。」

「ええ、ウチは大丈夫です。ありがとうございます 旦那さん。」

「神楽坂さん達はどくなったかな？」

通路から二人で顔を出して覗くと、神楽坂さん達の元へ高畑先生が刹那さんの式神を連れて現れた。

そのさらに奥のほうでは、気を失っているシスター（？）が二人と

五月さんが居る。

「気分的には五月さんを追いたいけど……既に引き払った後かもね、

高畑先生も彼女に気がついていないけど放置しているようだし

超の拘束から抜けだしてここに居るといふことは

拘束されてた場所には大した情報がなかったんだろうね。」

「ほんなら、このまま神楽坂さん達を追いましょか。」

「そうだね。」

そのまま神楽坂さん達を追跡、

道中 大量のPCや巨大なスクリーンが設置してある部屋に入ったが

やはり引き払った後のようで、

高畑先生達も詳しく調査をせずに通りすぎていった。

私は適当に幾つかのファイルを貰っていき、追跡を続ける。

やがて高畑先生が先導で あるドアを開けると外の光が差し込み、

それと同時に大音量の歓声が聞こえた。

「クウネル・サンダース選手 優勝ーーーーーッ!!」

「あれま、武道会の会場に出たようだね。」

「そうやね、ちょうど決勝が終わった直後やったようや。」

神楽坂さん達はしばらくその様子を眺めているようだが

私達は後ろの方に潜んでいるので、試合会場の様子は確認できない。

そうして様子を伺っていると、朝倉さんの声が聞こえます。

「それでは皆様 授賞式の方へ移らせていただきます。」

その後 超の演説、賞金の授与 最後の挨拶 と続き、

まほら武道会は終了を迎えた。

「千草……ここからは高畑先生を追うよ。」

「？ 戻って超はんの隠れ家を調べませんか？」

神楽坂さん達もこのままネギはんと合流するやろうし。」

「超が授賞式で姿を表せたんだから

高畑先生はそっこの確保に向かうと思うんだ、

……もしかしたら面白いものが見れるかもしれないよ。」

「確かにそうかも知れまへんな、ほな高畑はんを追いましょか。」

私達は高畑先生を追跡、しばらくすると学園の魔法先生達が

集まりだし、皆で超の確保に向かうようだった。

「さて・・・超はどう出るかな？」

「アレだけの人数に囲まれたら、並大抵じゃ逃げ切れへんと思うますえ。」

やがて廊下で超を発見、魔法先生達が超の周囲を囲む。

「待ちなさい 超君。」

「やあ、高畑先生。」

これはこれは 皆さんもお揃いで・・・お仕事ご苦労様ネ。」

「職員室まで来てもらおう 超君。」

君にいくつか話を聞きたい。」

「何の罪で カナ？」

「罪じゃないよ、ただ話を聞きたいだけさ。」

二人の会話に焦れたのか、別の先生が口をはさみ出す。

「高畑先生！ 何を甘いことを言っているんです！」

要注意生徒どころではない、この子は危険です！！

魔法使いの存在を公表するなんて……

とんでもないことです！！」

「フフ……古今東西 児童小説 漫画でも魔法使いはその存在を

世間に対し秘密にしている……というお話は多いネ……何故力ナ？

私から逆に聞こう。

なぜ君達はその存在を世界に対し隠しているのかナ？

例えば……今大会のように 強大な力を持つ個人が存在することを

秘密にしておくことは 人間社会にとって危険ではないか？」

「な……それは逆だ！」

無用な誤解や混乱を避け 現代社会と平和裡に共存するために

我々は秘密を守っている！

それに強大な力を持つ魔法使い等というのはごくわずかだ！！

・・・ち とにかく多少強引にでも君を連れて行く。」

「ふむ・・・できるかな？」

「捕まえるぞ！ この子は何をしてくるかわからない 気をつける  
！！」

超の周囲を囲む魔法先生たちが一斉に飛びかかる。

「フ・・・3日後にまた会おう、魔法使い諸君。」

超は袖から懐中時計を取り出すと、一瞬のうちに消えてしまった。

「・・・さて、千草はどう思った？」

「せやな・・・超はんの言い分も確かにその通りや。

せやけど西の魔法使い共の言うこともその通り、

すり合わせようにも時間がかかるし双方の利害が衝突する話や

話し合いでは平行線で終わるのが関の山やろうな。」

「違う違う、もっと簡単に聞くと 千草ならどっちの味方につきたい?」

「・・・ウチは旦那さんの味方や・・・言うても旦那さんは喜ばへんやろ?」

「そうだね、私は千草が欲しいけど

何でも言うつことを聞く人形が欲しいわけじゃないからね。」

「癪やけど西の魔法使いの方やな・・・

手段はわかりまへんけど超はんが魔法を世間にばらしたら

大なり小なり争いが起き、魔法使いへの迫害も起きかねまへん。

そないなことになったらウチみたいに家族を亡くして恨みに走る人が

たくさん出るやろ?・・・そないな事ウチだけでたくさんや・・・

「

「・・・千草からその台詞を聞けてうれしいよ。」

「何言ってますねん、旦那さんが言わせてるんやろ?」

復讐をウチに果たさせて、その後の虚しさを味わわせ・・・

ウチに新しい家族を与えて・・・ウチを骨抜きにしておいて。

これで戦争の火種を巻くようなことをウチが言うようだったら

旦那さんに捨てられてまづがな。」

「そんな千草だから、多少強引に口説いたんだけどね。」

「・・・ほんま、いけずやわ 旦那さんは。」

こないな時にそないな事言われたら、ウチどうすればええの?」

／／

千草が私の背後から屈んで抱きつく。

「ん〜、今は悪いけど 今夜までおあずけかな。」

そのかわり・・・今夜は千草と二人っきりで過ごしたいな。」

「こないだの約束、果たしてくれるんやね・・・」

「そうだね、待たせすぎたかな?」

「・・・ほんま、待たせすぎや・・・ちゆ。」／／

千草が背後から私の頬にキスをする。



「これくらい先払いは堪忍な、後は夜まで我慢しますから。」

「ごめんね、とりあえず今は超のことを片付けないとね。」

みんなで静かに暮らすためにも。」

「せやね。」

千草は私から離れていつものように私の横に立つ。

「……ふぐ、それにしても超はん、どないして逃げたんやろうか？」

ウチには消えたようにしか見えへんかったのに。」

「私には少し心当たりがあるんだ、

超が消える前に袖から懐中時計みたいなのをだしたでしょう？」

あれ、ネギ先生が使ってた時計と同じ形だったから

きっと時間か世界移動で逃げたんだと思うよ。」

「ほんまですか？」

あんなもんが二つもあるんや……厄介な話やな。」

「2つで済めばいいけどね、」

少なくとも超はあの時計で移動をする手段を持っていて

使いこなせるということは確実だね。」

「ほな 今のでわかったことは、超はんは世間に魔法の存在をバラすのが目的で

時間の移動ができる、ということやるか？」

「そうだね、後はさっきの超の隠れ家から貰ってきたこのファイルに

何か情報があればいいんだけどね。」

「高畑はんには話を聞かへんでええんですか？」

「あ、そうだね、高畑先生からも話を聞いたほうがよさそうだね。

何か私達の知らない情報を持つてるかも知れないし。」

「・・・とりあえず、今はエヴァはん達と合流しましょうか？」

大会も終わったようやし、情報の交換もせなあきまへんし。」

「うん、じゃあ行こうか。」

私はそう言つと千草の腕を取り私の腕と組んで歩き出す。

「だ、旦那さん！？ どないしましたん？」 / /

「私もおあずけされてるからね、エヴァ達の所まではこれくらいいでしょ？」

「・・・ほんま、いけずな人や。」 / /

そうして私達はゆっくりとエヴァ達の元へと向かった。

念話で確認するとエヴァ達は移動して喫茶店にいるようなので合流する。

「お疲れ〜。」

「お疲れ様はそっちじゃないのか 姉様？」

で、そっちはどうだった 何か収穫あったか？」

「こっちは大収穫だよ、超の目的と一部装備の情報が手に入ったでござるよ。」

「何で楓口調ですか・・・コチラはクウネルさんのアーティファクトと目的です。」

目的に関しては既に完遂していますが。」

「じゃあ、早速情報交換しようか。」

まず、当面の超の目的は世間に魔法の存在をバラすこと。

これは魔法先生達の目の前で本人が公言していたから間違いないと思う。

後、例の懐中時計、超も持ってたて使いこなしていたよ。」

「ふむ、もうそこまで知ったのか・・・」

取り合えずコチラの話だが、クウネルとかいう奴の目的は

ぼーやの父親の遺言・・・とでも言うのか、それを聞かせることだ。

後 奴のアーティファクトが他人の人生を記録し、

一時的に再生、記録した人物の能力を使用できるということだ。

決勝では ぼーやの父親の能力を再生していたな。

どうも限定条件があるが、本人自身になることも出来るようだ・・・

あと、ぼーやの過去の話がネット上にばらまかれていたな。」

「何その反則能力・・・私達も記録されないように気をつけないとね。」

ネギ先生の昔の話は・・・超の計画に関係無いと思うけど、何らかの情報操作で必要だったのかな。」

皆一様に表情が暗い、自分の人生の記憶が読まれる事を想像したようだ。

「まあ、彼の目的がすでに達成されたなら

今後干渉してくる可能性は少ないでしょ、やる気なら学園祭の時期じゃ無くてもいいし

今のこの状況なら学園長が止めるでしょうし・・・

まずは超の件をどうするか考えよう。」

「私は以前から言っているように中立の立場を取らせてもらう。」

「この期に及んでまたそれか・・・まあいいか、

私がエヴァに何を言っても聞かないだろうし。

先輩どうする？ 流石に超の計画が成功するのはゴメンだぜ。」

「私も困るですね、のどかもこれから魔法を覚えようというのに

今 その事を公開されてはそれどころでは無くなってしまいますし

どんな目に会うかわかったもんじゃありません。」

「千雨も夕映も反対ということね、千草も反対だそうだし 私も困る。」

そういうわけで エヴァと茶々姉妹を除いた私達は

超の計画を潰す方向で動くことにしようか。」

「そうだな・・・と言っても、どうやって公開するつもりなんだ？」

ネットに画像や動画を公開するとか地味すぎるだろうし

魔法使いの組織もそれなりにでかいんだろ？

もみ消されるのが落ちだろう。」

「その事に関してはまだ情報が足りなくてね、

神楽坂さんを追跡して超の隠れ家に忍び込んだ時に

このファイルを買ってきたんだ、

悪いんだけど千雨と夕映で内容確認していてくれない？」

私は超のところから貰ってきた何冊かのファイルを千雨達に渡す。

「先輩はどうするんだ？」

「私と千草は高畑先生に話を聞くよ。」

どうも超に拘束された時に、何か話を聞いたらしいんだよね。

それが元で超の拘束に動き出したみたい、

だから どういう話をしたのか聞いてこようと思う。

あと、茶々丸の野点に呼ばれてるから、そっちにもついでに顔を出してくるよ。」

「了解、じゃあ私と綾瀬でこのファイルの内容を確認しておくよ。」

あと、大丈夫だと思うけど茶々丸には気をつけてな。」

「こっちは任せるですよ、ソプラノ。」

「お願いね、茶々丸は大丈夫だと思うよ。」

今回は立場が違っちゃったけど家族だしね、

これが終わったら、またみんなでのんびり暮らすよ。

あと、エヴァには悪いけど そういう訳だから

今日の午後の学園祭はチャチャゼロと回ってね。」

「ふむ、そういう事ならしょうがないが・・・明日の事はどうする

んだ？」

「約束の時間までに超の計画を潰せればいいけど・・・

エヴァも もう分かってるんじゃない？」

「ふむ、しょうが無い・・・だがこの埋め合わせはきちりして  
もらうぞ。」

「わかったよ。」

「じゃあ、行こうか千草。」

「はい。」

「二人もお願いね。」

「予定を済ませたら家に戻るから。」

「ああ、またな先輩。」 「任せるです。」

そうして私と千草は野点会場に移動しながら

高畑先生に連絡を取ることにした。



『はるる 高畑先生、今大丈夫？』

『……ソプラノ君か、僕に念話なんて珍しいね 何の用だい？』

『ちょっと高畑先生に聞きたいことがあるんだけど……超とどんな話をしたの？』

『なぜ君がその事を知っているんだい……と聞いても無駄かな？。』

『そうでもないよ、神楽坂さんが急にいなくなったから

あとを着けて行ったら、何でも高畑先生が超に捕まったって言うじゃない？

それで大会後の廊下での騒ぎでしょう？

ちょっと気になってね。』

『……と いうことは、もう彼女の計画については知っているんだね？』

『うん、超も大胆なことを考えるよね。』

『まあ、そこまで知っているなら、彼女と話した事はたいしたことじゃないよ、

例の計画の話を説明されたくらいのものだよ。』

『それだけですか？』

『あ、あと気になるのが……どうも彼女の今回の計画、

世界樹の発光現象がいつもより1年早まったおかげで早まったようだね。』

急拵えで大会を開いたりして計画を調整しているようだ。』

『……それが聞いて高畑先生に話を聞いた甲斐がありました。』

『そうかい？……しかしこんな話を聞きに来たということは

君達も彼女の計画には反対ということなのかい？』

『私達の中では微妙なところですね、

静観する人もいれば反対の人もいるし。』

『できたら僕達、学園の魔法使いに協力して欲しいんだけど？』

『うーん、それは難しいですね、私達が協力するとなると

そちらの組織の問題でうまく連携が取れなくなりそうですし。』

『頭の痛い話だね……君達と協力できれば確実に阻止できると思っただけだね。』

『お互い立場のある話ですから。』

でも、学園の先生だけで孤立無援というわけじゃないということがわかって

よかったじゃないですか？

『そうだね、そう考えることにするよ。』

少なくとも敵じゃないということがわかってよかった。』

『それでは私はこれで、お互いががんばりましょうね。』

『ああ、お互いにね。』

（さて、これで世界樹の魔力の話を引き出せた。

後はどのタイミングで阻止すれば 超の心を折ることが出来るか・

）

神様から頼まれたお仕事。

その40（後書き）

40話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その41

麻帆良学園 学園祭 二日目 茶道部 野点会場

「茶々丸来たよー。」

「こんにちわ、茶々丸はん。」

「ようこそいらっしやいました。」

服はどうされますか？

着物の貸衣装が用意してありますが。」

「私達はこのままでいいよ。」

早速 茶々丸のお茶をご馳走になろうかな。」

「それでは コチラの方においでください。」

茶道部により 用意された日本庭園風の野点会場に

私達は案内され、茶々丸のお茶をごちそうになる。

「ふう、茶々丸はんもお茶を入れるのが上手になりましたな、  
ウチものんびりしていたら、お茶を入れる腕が抜かれてしまっやろ  
な。」

「いえ、千草さんが教えてくださったおかげです。」

「前も美味しかったけど、千草に教えてもらってから もっと美味  
しくなったよね。」

家のおやつ時間は これからも安泰だね。」

「ありがとうございます。」

あ、おかわりはいりますか？」

「お願いね。」 「ウチもお願いします。」

茶々丸が私達のお茶のおかわりを立てる、

私と千草はその間のんびりと茶々丸の動きを楽しむ。

「そつえば茶々丸、超のお手伝いの方は大丈夫なの？」

私の質問に茶々丸の手がピタリと止まり、若干拳動不審になる。

「・・・はい、今は休み時間を頂いていますので 問題有りません。」

「そんなに気にしなくてもいいよ、超の計画の手伝いは

ある意味 茶々丸の存在の原点だからね。

私達はみんな気にして無いよ、

それにこれが終わったら もう完全に自由・・・と言うか エヴァの従者になるんでしょう？

そうしたらまた家で皆で一緒に暮らせばいいよ。」

茶々丸の動揺は消えたが 手の動きは止まったまま、

私達の方を見ないで茶々丸が話します。

「・・・申し訳ありません。」

今回の計画ではどうしても超鈴音に協力しなくてはなりません、

ソプラノ様の意向に添えなくて・・・すいません。」

「気にしなくていいって、エヴァは茶々丸が作られる前から

承知のことなんだし、私も茶々丸の立場は理解してるつもりだよ？

今回の超の件は 私達の関係とは切り離して考える話だからね。

それとも何？ 茶々丸は今回の件が終わったら私達の所に戻らないつもりなの？」

「いいえ！ そんなことはありません。

これまでもこれからも 私はマスターとソプラノ様の従者です。」

「ならいいよね。

私も超の計画を全力で潰しに行くから、茶々丸も頑張りなさい。」

「……ありがとうございます。」

あ、お茶 立て直します。」

「そのままでもいいよ、その味も茶々丸の作ってくれたお茶の味なんだから。」

「ありがとうございます。」

その後、2杯目のお茶を3人で楽しみ

茶道部 野点会場を後々にするが、茶々丸が まだ時間があるよう  
なので



3人で学園祭を楽しむことにした。

学園祭の各クラスの出し物を周りながら、たまに屋台で買い食いをしたり

茶々丸オススメの猫ポイントに行っては猫に餌をあげたりしていた。

「しかし この学園はほんまにおかしな所やな。

料理関係の部活だけで幾つあるんや？

各国の料理で分かれてるし、サバイバル料理なんてもんもあつたし・

・・・

「全部回ろつと思つたら何日かかるんだろつね？

でも、中華料理は超包子が一番だつたね。

人気店つて言うだけはあるよ。」

「ありがとうございます。」

「今後もよろしくお願いします。」

「茶々丸も従業員として鼻が高いね。」

「ん？ 姉様達じゃないか？」

学園祭を3人で廻っていると、ちょうどチャチャゼロと買い食いをしていた

エヴァに会った。

「あ、エヴァ。」

そつだ、少し時間があるなら一緒に回る？」

「そつだな、そつするか。」

姉さま達はどこを回ってきたんだ？」

「私達は茶道部の野点から屋台を何件か見て、

中学校舎を軽く見てきた位だよ。」

「エヴァはんは どのへんを見てきたんです？」

「私か？ 私はこの辺りの屋台を制覇した所だ。」

「え……この辺りって……」

周りを見回すと食べ物屋台だけで数十はあるだろうか、

チャチャゼロを見るとわたあめからチョコバナナとオーソックスなものから

タコスやチリドック、それにアレは・・・ドンドウルマだっけ？

トルコ風のアイスと、どうやって持っているのか不思議だが

凄く器用にいろんな食べ物と装備している。

「・・・全部？」

「全部だ、制覇したからな。」

「そ、そうなんや・・・」 ー ー ー

「マスター、あまり食べては夕食が食べられなくなります。

少し控えてください。」

「む、わかった。」

今度は高等部の方を回ろうと思ったが、明日にでもするか。」

普段どちらかというとき少食なエヴァが・・・祭りの魔力とでも言うのか・・・

「そつだ姉様、夕食で思い出したが、私と茶々丸は今日の夜は

外で食べる予定だ、千草もそのつもりでおいでくれ。」

「ん、了解。」

「はいな、ほんならお二人の分は無しということに準備しておきま  
すえ。」

「それでは もう少し見てまわるか。」

(え？ まだ見るって・・・さすがにもう食べ物食べないよね・・・  
?)

エヴァとチャチャゼロを加え、私達は学園祭を楽しむ。

道中、マスコミと思われる集団に追われるネギ先生達がいたが、

脇道に逃げ込んだ後 観覧車の方に逃げていった。

「それではソプラノ様、私は時間なので 一度葉加瀬の所に戻りま  
す。」

「ん、じゃあ超によろしくね。」

「了解いたしました。」

「じゃあ、私達も一度家に帰るかな。」

千雨達の調べ物の結果も知りたいし。」

「そうか。では私はもう少し学園祭を見てまわるとするか。」

行くぞ、チャチャゼロ。」

「……マダミルノカヨ。」

さすがのチャチャゼロも 呆れているようだ。

「じゃ、じゃあね。」

「……チャチャゼロも頑張ってたね。」

「……アア、マタナ。」

意気揚々と祭りに向かうエヴァと、対照的に げんなりした様子の  
チャチャゼロ。

骨は拾ってあげるからね……チャチャゼロ。

3人と別れた私と千草は、

千雨と夕映のファイル調査の結果を聞きに家に帰る。

「ただいまー、二人共お疲れ様 どう、何かわかった？」

「只今帰りました。」

「お帰り先輩、千草さん。」 「おかえりです。」

「とりあえずファイルの内容は確認したんだけど、

流石にこのファイルからじゃよくわからないことが多いな。」

「やっぱりね、超が残して撤収するくらいだから

あまり重要な情報はないとは思ってたけど。」

「とりあえず、これは推測ですが 何かと学園祭最終日の日付を  
心に

いろんな調査がされてるようですから、

学園祭最終日に大規模な計画があるようです。」

「装備や設備関係の内容が多かったよ、

飛行船や例のロボットの簡単な仕様、

もっと大きいのも有るみたいだな、数はわからないけど。

あと武道会や超包子運営での設備の発注や火薬なんていうのもあったな。」

「それと、よくわからないのですが 学園の何ヶ所かの設備や警備状況を

重点的に調べているような・・・そんな調査報告の概要が残っています。」

「ありがとう、こっちも高畑先生に聞いた話だと

世界樹の発光現象が計画の要になっているようだね。

わざわざそれに合わせて計画を1年前倒しにしたらしいよ。」

「となると、計画の実行は明日の学園祭最終日 ですか。」

私はその後、二人が調べた詳しい情報を聞き

高畑先生から聞いた話とすり合わせ、情報をまとめていく。

そうして時間は過ぎ、陽は沈み 気がついたら夜になっていた。

「現在わかったことは超の戦力の一部、計画の実行日。

世界樹の発光現象を利用するということは

なにか大規模な魔法を使用する可能性があるね。

彼女の性格や調査の場所、これは世界樹の魔力が集まる場所のよう  
ね、

後は武道大会などで事前に魔法の存在する情報をネットにばらま  
いていること。

それらから考えるに、武力による殲滅よりは搦め手、

学園が敷いている認識阻害魔法を逆手に取り

魔法を認識するようにする、なんて感じかな。」

「しかし よくこれだけの戦力と計画を個人で練ったな。

世間で言われてる 天才少女じゃ納得できないぞ・・・」

「・・・そこでお姉ちゃんは思うんだけどさ。

超って 『この世界』 の人間かな？」



「え？ どういう事ですか、ソプラノ。」

「……まさか、そんなSF小説じゃあるまいし……って、あり得るか……」

現にタイムマシンを持つてるんだから。」

「私はアレはタイムマシンだと認めてませんけどね。」

「何でだよ？ 現にネギ先生は何回も学園祭を回ってるんだろ？」

綾瀬。」

「そう聞いているですよ。」

実際に桜咲さんも一緒に過去に来たらしいですし。」

「そこだよ、アレが本当にタイムマシンなら」

ネギ先生の自身も過去に戻らないといけな思考えれないかな。

先生自身が過去に飛んだなら記憶を持つてたらおかしくない？

極端な話ネギ先生が3歳のころに飛んだら3歳になってないとおかしくないか って言うこと。

つまり、それまでの過去の記憶を持つてるということは、

アレは過去によく似た世界に飛ぶ装置、平行世界を渡っていると考えられないかな？」

「？ どういう事だ？」

つまり今、私達の世界にいるネギ先生は平行世界からやってきた・  
・って言うのか？」

「そう。 超の件で言えば、

超は何らかの理由で この世界の未来に良く似た世界からやってきた。  
た。

だからさっき私は 『この世界』 って聞いたんだよ。

本来 あの時計や茶々丸 その他のガイノイドやロボット、

これらは完全に今の科学を超越している、ありえない存在、オーパ  
ーツとでも言うのかな、

しかし 超本人はその記憶も技術も持つてるし、

恐らく最初にこの世界に来た時に使った時計が 類似する装置も持  
ってるはず。

それがタイムマシンと言うのなら、超本人が存在する訳がないし

百歩譲って、アレがタイムマシンで超が過去に戻ってきたと言う事は

その時点で超は存在しない事になる。

彼女は本来この時代には存在しない、

過去の改変されない世界の存在だから、

この世界が改変されたのなら 彼女は消滅してないとおかしくない。

まあ 超自身が過去に飛び 過去の改変を企むということも

歴史に含まれている可能性だってあるけどね。」

千雨と夕映はワケの分からないと言った表情だ、

千草は台所で話は聞いているが、料理に集中している。

「話がややこしくなってきたな、あの時計の話はとりあえず置いておくとして

そもそも超は何で魔法を世間に公開したいんだ？」

「それこそ本人のみが知ることだよ。

だけど古来より 人が過去に行つてやりたいことと言えば

過去の改変、彼女にとって変えたい過去が有り

それが魔法を公開することによって叶えられると言うことじゃないかな。」

「またその話か・・・先輩は超がこの世界、

もしくは過去の人間じゃ無いと言いたいのか？」

「他に説明がつく？」

あんな時計を持って茶々丸や他のガイノイド、

このファイルに乗っているような警備ロボを作れる存在がこの世界の人間だと。」

「……確かに未来人、

または他の世界の科学力を持つてる人間と考えれば納得はいくです。

」

「状況証拠は限りなく黒……か。

魔法じゃ説明が……無理か、茶々丸はともかく あの時計はな・

……」

「まあ、なんにしても私は超の計画は阻止するけどね。

……万が一アレがタイムマシンで超が未来から来た人間だった時、

その時の超自身の存在のためにも。」

「ほらほら、難しい話はその辺にして、ご飯でも食べて一息入れて  
や。」

3人で難しい顔をしていた時に、千草がテーブルにお皿を並べ始めた。

「・・・そうですね、超さんの事は計画を阻止した時にでも本人から聞けばいいです。」

「ああ、とりあえずアイツの事は 計画を阻止してから考えよう。」

「それじゃあ、食事の前に千雨は学園長に連絡して今掴んでいる情報と交換に

向こうの持つてる情報を貰ってきて。

「ファイル関係は明日渡すか、向こうに取りに来てもらえばいいから。」

「ん、わかった。」

「私は食事の準備を手伝うですよ。」

「夕映はん ありがとうございます。」

ringg ringg

ちょうどその頃、家の電話が鳴り出したので手の開いている私が出る。

「はい、マクダウエルですが。」

『私、同級生の雪広あやかと申しますが、ソプラノさんいらっしゃいますでしょうか?』

「あ、委員長さん、私 ソプラノです。」

『ソプラノさん? ちょうど良かったですわ、

今日は急ぎの連絡があつて電話をしたんですけど。』

「どついつた連絡でしょうか?」

『実は急な話なんですけど、超さんが故郷に帰るといふことで学園を退学することになったそうなんですの……』

「そつ、なんですか。」

『そこで急遽、こんや超さんのお別れ会をクラスで行つことになつたんですが

ソプラノさんも来てくださらないかしら?』

「そつですか……実は申し訳ないのですが

今体調が悪くて、家で休養しているところでした。

申し訳ありませんが、私は欠席ということにしていただけませんか?

超さんには後で個人的に挨拶をしますので。」

『そうですか、残念ですわ。』

ソプラノさんは超さんと仲がよろしかったので ぜひ来ていただき  
たかったのですが

体調が悪いというのならしょうがありませんわね。

超さんには私の方から伝えておきますので、どうぞお大事にね。』

「ごめんなさいね、せつかく連絡を頂いたのに。」

『いいえ、後から超さんに連絡してあげてくださいね。』

「わかりました、必ず連絡します。」

『それではお大事にね。』

「失礼します。」

カチヤ

「先輩、誰からの電話だったんだ？」

「ん？ いいんちよくだよ、超が退学するからお別れ会を今夜やる  
んだって。」

それで私にも来れないか？　って言うお誘い。」

「へー、行かないのか？　超に会うチャンスなのに。」

「いいよ、どうせこのお別れ会は無駄に終わるんだしね。」

「ん？　超を学園に残すつもりなのか？」

「そうだよ、これだけ大騒ぎして私達の手を煩わせてくれたんだし  
きっちりお代を頂かないとね。」

（世界樹の魔力を使って色々やってくれるみたいだし、ソッチの方  
もね）

「マジかよ。」

「……浮気は許さねーからな。」

千雨の表情が……無いっ！

これは本気でやばい時の顔だ……　1111

「そ、そういつのじゃ……無い　つもりですのっ！」



「無いつもり？」

「ありませんのでっ！！」 1111

「……………ふん、この件が終わったら少し話でもしようか？  
先輩。」

「……………わかりました。」 1110r z

以前エヴァが千雨には闇魔法の素質が少しあると言っていたが……  
こういう事だったのか……………？

4人での食事も終わり、千雨と夕映は寮に帰宅。

寮で学園長側に超の隠れ家で貰ったファイルを渡すことになった。

今夜 家には私と千草で二人つきり、

実は、昨夜一度エヴァの別荘で千草との約束の準備を先に済ませて  
おいた。

「ねえ、千草。」

「はい、なんやるか？」

「少し 時間ももらえないかな？」

「なら、この洗い物終わったらでよろしいやるか？」

「うん いいよ、ここで待ってるから。」

「ほな、急いで終わらせますから ちょっとまっててや。」

私は居間でソファアに座り千草の台所での姿をぼんやりと眺めていた。

「お待たせしました。」

急に何のようですの？

「ん、千草との約束をね・・・そろそろ。」 / /

「約束って・・・なんやったかな？」

「ほら・・・あの、なんと言いますか・・・私達の関係の・・・  
・進展といえますか。」 / /

「・・・フフッ

ちょっといじわるやったかな、堪忍な。

「・・・ちゃんと分かっていますえ。」 / /

「・・・もっつ、もっつ！」「っつ言つのは恥ずかしいんだから・・・」 / / /

「せやかて、何時までも旦那さんが　ウチにおあずけさしてんやから　ウチかて少しはいじわるくらいさしてもらわへんと　割に合いまへんやろ？」

そう言いながら、千草は私の横に座り　私の腕を抱き寄せる。

「・・・本当に、忘れてたらどうしようかと思ったよ。」

「ウチがこないに大事なこと忘れるはずがありませんやろ。」

千草が私にもたれかかり、頬ずりをしてくる。

「ちよ、待った千草、場所を変えよ？　別荘に用意してあるから。」

「・・・ここまで来て　またおあずけですの・・・そんな無理やわ」

千草は私の太ももの上にまたがり、抱いていた私の手と　残った片手を握りしめ、

両手をソファアの背もたれに押し付け、私の動きを完全に封じる。

じっと 私の目を見つめ、握った手はいつしか指を絡め合い、

吐息が頬をなでる距離でしばらくそのまま見つめ合う。

「あ、あの……千草……さん？」 / /

「なんですか？」

「……このままでは、なにもできないんですが？」 / /

「旦那さんは何もせえへんでええんや、じっとしとき。」 / /

千草はそう言うと、私に顔を近づけ 私の頬にキス、

そのまま啄むように頬を撫で続け、耳元、首筋へと移動しながら

唇での愛撫を続ける。

千草のキスの雨に焦らされ、私はなんとか動こうとするが 押さえ込まれる。

ふと下へ視線をずらすと、着物からはだけた千草の太ももが艶かしく

私の太ももに押し付けられる。

「ち、千草っ、ほら　せめて寝室にいかないでしょうか？」　／／

このままここにいるのはマズイ、エヴァ達が帰ってきたら　と想像するこ

千草に集中することもできない。

焦った私は言葉使いもおかしくなっていた。

「・・・ダメや　ウチが　もう我慢できへんもん。」　／／

千草はそう言つと私にのしかかり、おしりを私の太ももに押し付け

私の口を自らの唇で塞ぎ、舌で私の口内を舐め回す。

私もそろそろ我慢の限界が来たのか、自分でもよくわからないが

千草の舌に答え、お互い深い口付けを交わす。

「・・・んっ・・・ちゅ・・・ふ・・・くちゅ・・・」

「ふっ……ちゅ……くち……んぶっ……」

「……ちゅ……じゅる……ちゅ……」

「んう……ちゅ……くちゅ……ち……っ」

そのまま お互いの舌を味わうが、そこから先に進めない。

千草に完全に押さえ込まれている状態で、

なんとか動こうともがくが、足で抑えこまれている。

私のスカートと千草の着物の裾もお互いの動きで捲り上がってきて

ふと 私は太ももの感触がおかしいことに気がつく。

「ぶはっ……ち、千草 もしかして下着……」 / /

「……フツ、着物の下に下着は普通穿きまへんえ。

襦袢を着るのが普通やる？」 / /

言うことを言い終わると、また千草に口を塞がれるが

今度は片手で私の頭を抱き、片手で私の服を脱がしにきた。

「んう……ちょ、千草 ここじゃ本当に不味いつて。」

「ちゅ……女がええ言うてますのや、旦那さんもさっさと観念しいや？」

そのまま千草に口を塞がれたまま上半身の服は半分脱がされ

服の中に千草の手が侵入し、私の肌を撫で回す。

流石に私も、もう限界なので開いた片手で千草の頭を掴み

もう片手はおしりを掴む。

以前の仮契約の時に感じていたが、千草は今でこそ攻めているが

基本的に受け身のはずだ、こっちが主導をつかめば

なんとか部屋に行くくらいのことではできそうだと判断した私は攻めに転じる。

「んう！……ちょ、旦那さんっ あかんって、今日はウチがやりますから……んうっ！」

「だゝめ、言うことを聞かない従者にはお仕置きしないと」

千草の首筋に吸いつきお尻を掴むように揉みしだく。

そうして攻め続けると 徐々に千草の動きが鈍くなり

されるがままの状態になりつつあった……が

同時に私のスイッチも完全に入ってしまったようで、

もう千草以外見えない状態になっていた……

「あかんっ……んっ……あきま へんって！

あっ……ウチにさしてお……くれやす……んうっ！」 / / /

「お仕置き中は……ちゅ……素直に受け入れないと……従者失格だよ。」

「んあっ！……ほんま……あきま……へ……んう……あ  
あ……

分かりま……したから……かつ……堪忍しておくれや……す  
っ！」

「さあ、出来の悪い私の従者にお仕置きだよ。」



・

・

・

私は今、猛烈に反省している・・・

やってしまった・・・アレから、冷静になるまで数時間かかり、

今の現状を見ると酷い事になっていた。

居間は独特の体臭の匂い、ソファアは色々と汚れ

足元には着物が完全に気崩れ、身だしなみも何も無い状態の

千草が幸せそうな顔で寝ている。

私の服は着崩れてボロボロ、汗だくで髪型も乱れ疲労感が見て取れる。

「こんな状態をエヴァに見つかったら・・・殺される！」

1111

この後 私は全力で掃除を開始。

まず千草を部屋に寝かせ、

居間のソファーと絨毯を庭に放り出し破壊し粗大ごみにする。

窓を全開にし、テーブルから床を雑巾がけし、消臭剤を振り巻く。

エヴァが帰ってくるまで、時間との勝負だったが・・・私は勝利を収めた！

「よしっ！ ソファーと絨毯は消えたけど それ以外は大丈夫なはずだ。」

居間からソファーや絨毯が消え テーブル以外何も無い状態だが

超が攻めてきた（？） とか適当に言い訳をすればいいだろう。

私はその後 風呂に入り着替え、

エヴァが帰ってこないのですその日は眠りについた。

翌日

早朝に、前日の情事で変わり果てた姿の千草が風呂に入浴しようとした所を

その日 なぜか早起きをしていたエヴァに発見され詰問。

その後、私はエヴァに盛大な目覚めの一撃をくらい

学園祭3日目の朝を迎えた。

神様から頼まれたお仕事。

その41（後書き）

41話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その42

麻帆良学園 学園祭 3日目 朝

エヴァによる早朝の目覚ましで、表面上はいつも通りだが腹部に大ダメージをおっている私、

入浴してさっぱりし 肌もツヤツヤの千草を伴い、学園長室に来ている。

「昨晚 情報がそっちにもいつてると思うけど、

超の件、学園側はどう対応するつもりなの？」

「ふむう・・・正直な所、下の方では半信半疑でう。」

超君が 個人レベルでそんな大層な計画を実行出来るはずがないとそんなことを言い出す先生もいる始末じゃ。

一応、地下で多数のロボットが発見されたという報告を受け

見に行かせたんじゃが 既に撤収したようで発見されなくての、  
その事もあって、本格的な警戒態勢はとらずに

まず超鈴音を拘束する事を第一として動いておるのじゃが・・・は  
あ・・・」

「ふうん、まだそんな悠長なこと言ってるんだ。

この学園の魔法使いは呑気なんだね、魔法世界とか戦闘地域に  
全員派遣でもしてやったほうが良い教育になるんじゃないの？」

「そこは儂も頭の痛い話じゃ。

平和な時間が長すぎて、皆警戒が薄れているようでのう

儂の意見を素直に聞いてくれるのは高畑君辺りがせいぜいなんじゃ  
・・・」

学園長も頭が痛い問題のようで、

ため息が着きない。

「とにかく、世界樹の発光現象のピークは今夜辺りだから

それまでに超を拘束するか、計画を潰さないと本当に手遅れになる

よ?」

「うむ、そこは分かっておるんじゃ、超くんの居場所に心当たりがないか、と

言つのと例の時計を調べてみようと思つて

ネギ君を探しておるのじゃが、彼らが皆 消息不明での

そつちも頭が痛い問題じゃ。」

「・・・それつてもう先手を打たれてるんじゃない?

連絡が取れないのは何人くらい居るの?」

「今確認しているだけで、ネギ君や木乃香達を合わせて9人じゃ。

ただし龍宮くんは先日武道大会で儂らの妨害に加わつておるので

彼女は超君側じゃないかと思つておる。」

学園長から消息が不明な者のリストを見せてもらい確認する。

「これつてウチのクラスの武闘派や

ネギ先生の事を知つてる人達で構成されてるじゃない?」

「実はの・・・昨晚 龍宮君以外から魔法球の使用申請が着ていた

ので許可しての

その時魔法球に入っていた者達なんじゃ。」

「魔法球自体はちゃんとあるの?」

「ある。彼らだけが忽然と姿を消したのじゃ・・・」

昨晚君達から貰った情報に例の時計があったじゃろ?

ネギ君が超君に貰ったという、

アレが畏だったんじゃないかと思っておる、侵入された形跡も無いのでのう。」

それに昨晚 超君とネギ君がやりあったようで、

恐らくそこで完全に彼女と決別したんじゃない。

その後計画を練るのと訓練を魔法球でやっている所で・・・」

「・・・飛ばされた、別の世界に・・・か。」

「君も あの時計は時間旅行をするものではないと考えているのかね?」

「あれ? 学園長もですか? 意見が合いますね。」

「僕も昔はSF小説が好きな時期があつての、



少しはかじった口じやが、

君の推論から考えて、超君の計画・・・アレがもし過去の改竄で本当にタイムマシンなら 彼女は恐らく存在しないはずじゃ。

彼女の計画で世界は大きく変わるじゃろう、彼女の生誕が脅かされるほどに。

じゃが彼女は存在し、その思いは変化していない、

ならば考えられるのはいくつがあるが、

平行世界説、彼女の計画の失敗、彼女の過去への逆行自体 歴史の一部か・・・」

「もしくは彼女が本当に人知の及ばぬ天才で自力でアレほどの科学技術を

生み出し 且つ 何らかの現状の世界へ不満を持っていてそれに対しての反抗か。」

「とりあえず今は、超君とネギ君達の居所と彼女の計画の阻止じゃ。

一応 最悪の事態も考えて装備を本国から緊急で送ってもらってはいるが

数が足りなくての、情報にあつた場所をすべて守るのは無理じゃから

警備をしつつ、超君の攻撃があつた場合、

数箇所を限定して防衛することにはしてある。」

「ふうん、まあ しょうがないか、人員も武装も足りないんだから。超の隠れ家の資料はもう調べた？」

「うむ、アレから急いで調査しての、

残された何台かのPCのデータを復旧させることもできたことで

かなりの情報が集まったんじやが、武器関係が主だったの。

正確な数はわからんのじやが、

かなり大規模な攻撃が出来るだけの戦力を持つておるようじや。」

学園長から追加の資料を見せてもらう。

「全てに共通する事は、この時期の世界樹の魔力を使用しておるということ。」

あと、銃の火薬が花火の発注書に紛れ込ませてあった話を聞いておったから

調べてみたんじやが、特殊な弾丸を開発しておるようじや。

ある特定の世界というのか・・・

仕様書には任意の空間をだいたい3時間後に飛ばせると記載されておったのう。」

「へー、これ凄い厄介な弾じゃない？」

あ、それで龍宮さんが向こう側なのか、狙撃のプロだしね。」

「うむ、正直彼女の狙撃を回避するのは難しい。」

じゃから防衛する場所も遮蔽物が多く防衛しやすい順番になっておる。」

やはりこの銃弾が厄介か、長距離から狙撃されたら

世界樹の制御の出来る私以外はエヴァでもきついだらうな。

死傷者をできるだけ出さないことを考えた 超の意思が生んだ

最凶の銃弾だね、これは。

「大体わかったよ、ありがとう 学園長。」

「君はどうするのかね？ ソプラノ君。」

「昨日高畑先生から聞いてない？」

超の計画は反対だけど、学園にも協力できないって。」

「ふむ、聞いてはいたのじゃが……しょうがないのかなのう。」

儂や高畑先生はともかく下がのう……」

「まあ、私達はできるだけ目立たないように頑張るけど

いきなりこちらを襲ってこないように注意はしておいてね。」

「了解した。君達は超君側じゃないと連絡をしておこう。」

「じゃあ、行こうか千草。」

「はいな。」

私達は学園長室を後にし、

夕映との約束があるので、夕映と合流することにした。

夕映との待ち合わせの店に着くと、夕映が暗い表情で一人で居た。

「夕映、待った？」

「あ……ソプラノ、聞いて欲しいです！」

のどかが、のどかがどこにもいないんですよ!!」

「お、落ち着いて夕映。」

その話は学園長から聞いてるから、今説明するよ。」

夕映に学園長から聞いてきたネギ先生達が消息不明の話をし

本屋ちゃんも巻き込まれた可能性が高いと話す。

「そ、それならばすぐにでも超さんを捜すです!」

「落ち着いて夕映、本屋ちゃん達は多分無事だよ。」

ただ、超に拘束されたか連絡の取れない場所に移された可能性が高い。

それに今夜には超は動き出すはずだから、その時に超に聞こうよ。」

「で、でも!」

「夕映はん落ち付いてや、学園の先生や警備の人らも探してるんや

もちろん ウチらも捜すけど焦ってもしょうがありませんやろ?

そんな状態で超はんや茶々丸はんにあつたら即返り討ちになってしまっで。」

「・・・そ、そうですね。」

とにかくソプラノ、今日の約束は申し訳ないですけどキャンセルで、私はのどか達を捜しにいくです。」

「そこは私も一緒に行くよ、単独で動いて個別撃破されてもいけな  
いからね。」

それに超の装備のことで新しくわかったこともあるから

その辺も説明するから一緒にさがそう。」

「ありがとうございます!」

「それじゃあ千草、千雨には千草から連絡しておいて。」

私は夕映と行動するから、千草は千雨と一緒にいてね。」

「かしこまりました。ほな、夕映はん お嬢様をよろしゅうな。」

「任せてください、千草さんも気をつけてくださいです。」

千草は私達と別れ、家に帰る。

その後 私と夕映は学園祭を回りながらネギ先生達を捜す。

「あ、見て見て夕映。」

あの トルコ風アイス、昨日エヴァ達が食べてるの見て

私も食べたかったんだ、買っていこうよ。」

「……あのソプラノ、私達はのどこを探しているんですよ？」

そんな暇はないです。」

「夕映は固いなー、アイス食べてたって人探しくらいは出来るよ。」

「……早く買ってくるですよ……あと 私の分も。」  
／／

ふたり分のアイスを買い、

食べながら学園内を歩いて捜すが未だに一人も見つからない。

やはり、未来に飛ばされたんだろうが、そう言っても夕映は納得しないだろう。

私達はそのまま本屋ちゃん達を探して回った。

昼を過ぎ、軽く昼食をとり 再度搜索。

だが本屋ちゃんやネギ先生達が見つかることはなかった。

陽も陰り、夕方に差し掛かろうという時、ついに超が動き出した。

学園長から超の侵攻があったとの連絡を受け

私と夕映は一度家に帰り皆と合流する。

「先輩！ こっちの準備はもう出来てるぞ、綾瀬もあの3人を連れて来い！」

家に付いてすぐ、千雨の激で夕映は地下へ行走る。

「うちも準備完了です。」

「私は・・・特にいらないか、念のため黒鍵が2本もあれば。」

「おまたせです！」

「おまたせ。」 「やっと出番だぜ。」 「・・・出番。」

「よし、それじゃあ作戦を確認するよ。」



千雨と夕映達、私と千草で組んでまずは様子見、

その後 超達が最初に落とされた拠点周辺で千雨と夕映達は待機、

拠点を防衛していた超の攻撃部隊が学園側が防衛してる場所への応援へ行くか

15分で動きがなければ奪還、その後はその拠点のみ防衛するよ。

私と千草は超を直接狙うけど、状況次第で千草を防衛に回すからね。

「

「おう。」「はい。」「……うん。」

「超達の使う銃弾と龍宮さんの狙撃には気をつけてね。

物陰に隠れても跳弾を使ってくるから、物陰でも油断しないでね。

「じゃあ、しゅっぱっつ。」

「待て、姉様。」

「ん？ 何エヴァ、どうしたの？」

「私も姉様と行くぞ、手は借さんが姉様の側なら特等席だからな。」

「そう、じゃあ行くつか。」

「ケケケ、ヒサシブリニアネノ ジッセンガミレルカモナ。」

私達は家を後にし、それぞれが持ち場に着く。

私と千草 少し離れた場所にエヴァにチャチャゼロは

まず学園長達の戦闘の様子を確認するため

学園側の防衛拠点を目指す。

私達が着く頃には戦闘が既開始され、

学園祭のイベントだと思っているのか、

戦闘区域を囲うように野次馬が戦闘を眺めている。

「それにしても超達の戦力は尋常じゃないね、

あそこまで多いとは思わかったよ。」

「ほんまですな、一体一体はそれほど強くはないみたいやけど

数が多いから大変やな、人間と違って感情もないからひたすら突っ

込んできますし

「アレは正面からやり合いたいとは思えませんえ。」

学園側は装備が間に合ったおかげか、

高畑先生達数人で前衛、超のロボット兵を抑え、

後方で数人集まり大魔法を使い一気に殲滅、と言う戦法で防衛している……が

不意に高畑先生が虚空を攻撃、その場所に黒い球のようなものができる。

「見た？ アレが学園長に今朝聞いた飛ばされる弾丸みたいだね。」

「あまり広域じゃないだけマシみたいやな。」

それでも十分卑怯な銃弾やけど。」

高畑先生が銃弾を撃ち落としていくが、

すべては無理なのか、後方で詠唱していた魔法使いが何人か飛ばされる。

徐々に前線が押されていくが、

高畑先生や実戦経験の多い先生達がなんとか持ち直し、  
敵を殲滅していく。

ある程度敵を殲滅したところで、前線で動きがある。

前線の先生何名かが飛ばされ、高畑先生が超とにらみ合っていた。

「数では圧倒的に押ししていたはずなのに この部隊が殲滅されると八  
それに対応があまりにも早過ぎル、

情報漏れもそうだが、実戦経験に差があるのかな？

今後の課題だヨ……」

「たとえ君が 今日一人の犠牲を出さなくとも

一度世界に魔法の存在が知れれば、

相応の混乱が世界を覆うことになる、

それを分かっているのか？ 超君。」

「もちろん承知ネ。

だが この方法が最も混乱とリスクが少ない。

それは高畑先生も分かっているはず。

そして 今後十数年の混乱に伴って

それでも起こり得る政治的軍事的に致命的な不測の事態については

私が監視し調整する、そのための技術と財力は用意した。」

「なるほど・・・しかしそれは危険なやり方であり考えだ。

そういった考えを抱いた者に成功者はいない・・・

ましてや世界の管理などと・・・」

超は 自分の能力や精神力に絶対の自信を持っているようだが・・・

同じような事・・・なのか、

世界を自分で操ろうとし、失敗した者を私は知っている。

・・・造物主だ。

彼は人類に絶望していたようだった。

『我が2600年の絶望を知れ・・・』 彼はナギとの戦闘でそう  
言っただけで消えていった。

彼に何があつたのか分からないが、あの台詞が出るといふことは以前は希望を見出していたのだろう。

私も660年以上生きているのか・・・

それだけ生きていればそれなりの物を見てきた。

しかし彼、人を救おうとした者が最終的に取つた方法があつた戦争だ。魔力の枯渇現象に対して、彼なりに何か救う方法があつたようだが、それでも掌からこぼれ落ちる人間は生まれる、千草の両親のように。

超はまだ若いからしょうがないのかも知れないが

人類の影の部分を直視し、それでも救うと言いつけるだろうか？

超個人にそれだけの器があると いつまで信じられるだろうか？

掌からこぼれ落ちていく人間を見て いつまで心が持つのだろうか？

「世界が安定を得るまでの僅かな期間ヨ 安心して欲しい、

私は うまくやる。」

彼女のこの物言いは、言葉通りで済むだろうか・・・

世界が安定を得るまでの僅かな期間、

その期間が彼女の人生全てで払いきれると 私は思えないが、

超はやる気なんだろう。

「それに、貴方のような仕事をしている人間にはわかるハズ。

この世界の不正と歪みと不均衡を正すには、私のようなやり方しか無いと。

・・・どうかな 高畑先生、私の仲間にならないか？」

「・・・っ!？」

(あ、馬鹿!)

超がその場から消え次の瞬間には高畑先生の背後に現れる。

「隙アリ 僅かに動揺したネ。」

超の右手から例の銃弾が打ち出され、高畑先生は黒い球に包まれる。

「ではまた、高畑先生。」

3時間後 私の計画の成功後の世界で。」

高畑先生は黒い丸が消えると同時に その場から消える。

別の場所では龍宮さんか？

フードを着た女性が他の魔法先生を 同じく例の弾丸で処理していた。

これでこの地点の学園側の戦力は無くなり、超の舞台に制圧された。

他の拠点はまだ戦闘を続行しているが

この様子だと時間の問題だろう。

「おい 姉様、上空にジジイが居るようだぞ？」

エヴァの指摘した上空を見てみると学園長が浮かんでいた。

超と龍宮さんは既に撤収したようだが、学園長が超を確認していた。



学園長はしばらくその場で水晶を片手に浮いていたが、

他の拠点の防衛状況を見て、移動を開始。

さらに上空の飛空船を目指しているようだ。

「なるほど・・・あそこに超が居るみたいだね。

千草は千雨と夕映達の援護にいつてくれる？

私が超に会うまで防衛してくれたらいいから。」

「わかりました、旦那さんも気をつけてえな。」

「戦闘をするつもりはないから、多分大丈夫じゃないかな？

じゃあ行ってくるよ。」

私とエヴァ、チャチャゼロは上空の学園長を追い、飛行船へ。

千草は千雨達が防衛する拠点へ移動していった。

「千雨さん！ デカブツの掃除は終わったですか？」

「ああ、京都のアレよりは楽だったからな。」

見た目はでかいけど私の魔砲で十分対処は可能だった。

夕映の方は大丈夫か？」

「こっちは大丈夫ですよ。」

スライム娘達にウォーターカッターの原理を教えておいて正解でした。

撃ちこめばあとは勝手にショートして動きが止まるようですよ。」

「水ならおまかせですよ。」 「トーフみたいに刻んでやるぜ。」

「・・・しんどい。」

私達の周りには千雨さんの雷の魔法の射手と

スライム娘達の水でショートしたロボットたちが転がり

離れたところでは風穴の開いた巨大ロボが佇んでいる。

敵の攻撃も一時止んだようで、攻めて来る様子はない・・・っ！？

「千雨さん！ 向こうの方からデカブツが2体来ますよ。」

「OK、私はアレを砲撃で潰すから一旦ここを離れるぞ。」

「わかったです。」

千雨さんが一時離れ、私は障壁を広めに貼り物陰に隠れ相手の様子を伺う。

すると私の障壁に何かがあたったような音がすると同時に

黒い球のようなものが出現し・・・すぐに消えた。

(っ！？ アレがソプラノの言っていた特殊弾ですか。)

私と黒い弾のできた場所から銃弾の発射地点を読む。

その方向を見ていると僅かに発光した場所を発見、

私とスライム娘達はすぐにその場を移動、

するとさっきまで私のいた場所で黒い球ができる。

「見つけたですよ！ みんな付いてくるです！」

「了解。」 「おうヨ。」 「・・・コク。」

私は接近しながら魔法の射手を狙撃者に放つがすべて撃ち落される。  
スライム娘達も場所がわかったようで、

狙撃地点に水弾を打つが同じように撃ち落される。

4人で攻撃しながら狙撃者に接近、

流石に4人分の攻撃を処理しきれないようで

狙撃者はその場を離れ、私達に向かって接近してきた!?

「くっ！ みんな来るですよ！」

私達が迎撃体制を整えると、フード付きのローブを来た・・・龍  
宮さん！

「落とした拠点を取り返されたと聞いて見れば・・・綾瀬とはな。  
意外な人物の登場だ。」

「それはこっちの台詞ですよ・・・用がなければ帰ってもらって結構ですよ？」

不味いですね・・・龍宮さんが相手では私なんて敵うはずがない・・・

千雨さんでもきついかわりませんが、いないものはしょうがないです。

「いやいや、そういうわけにもいなくてね。

・・・私も仕事だ、怪我はさせないからおとなしく撃たれてくれな  
いか？」

「銃を突きつけ撃たれるとは、無茶なことを言うですね。

「ごめんですよ。」

時間を引き伸ばすのも無理そうですね・・・

とりあえず千雨さんに連絡だけしておかないと。

『千雨さん！ こっちに龍宮さんが来たので今から迎撃するです。』

『・・・い・・・るか？・・・綾s・・・つ宮相手じゃ・・・  
げろ！』

念話妨害ですか、超さんもやってくれますね・・・

「ならば仕方が無いか・・・排除するまで！」

「・・・っ!？」

龍宮さんはロープを私に向かって投げつける、

私はすぐさま横に瞬動で移動、ロープに着弾した弾丸が黒い球を作り消滅する。

龍宮さんはどこに！　しかし捜すが見つからない、

するといきなり私を衝撃が襲い　吹き飛ばされる。

「ぼーっとしてんなヨ！」

私を吹き飛ばしたすらむいが黒い球に包まれ消えていく。

あめ子とぷりんがウォーターカッターで龍宮さんの銃を切り刻む。

「・・・っち！」

龍宮さんが舌打ちをし持っていた銃を捨てハンドガンを2丁出し構

える。

（時間をかけたら各個撃破されて終わりです！

龍宮さんが素直に詠唱させてくれるとは思えません。

できたとしても、アレをやったら最悪 殺してしまうから使えないですね。

どうするか……む？ 龍宮さんは銃使いですか、ならば！

「あめ子、ぷりん、私が龍宮さんにひつつくサポート頼んだですよ！」

私は龍宮さんに魔法の射手を数発打ち一気に懐に飛び込もうとするが

龍宮さんは2丁拳銃で迎撃しあと数歩のところまで私に銃口が向くが

私は横からあめ子に突き飛ばされ あめ子が撃たれる。

「ぷりん！」

「……OK。」

あめ子に突き飛ばされた私を龍宮さんの目はしっかり追ってきている。

私の今の体制では移動手段がない、

龍宮さんの銃口が突き飛ばされた私に合うが

すぐに後ろからぷりんに突き飛ばされ、今度はぷりんが撃たれる・・・  
が

私は龍宮さんにしがみつくことができた。

「・・・っく、しかし私に抱きついてどうするつもりだ綾瀬？」

「私は龍宮さんには勝てませんが、

この状況なら引き分けには出来るんですよ？」

私は火属性の魔法の射手を暴走させる。

この技は昔魔法を習いたての頃、

魔法の射手を暴走させ大火傷を負った時にひらめいた技と言つか魔法。

私の体の表面に障壁を張り全身を火で包む。

エヴァさんからは火力不足で意味が無い、と言われているが

今この状況では最高の手札です！



「・・・っち！　だがこの程度の火力では私の防護服が煤けるくらいだぞ？」

引き分けにもならんぞ。」

龍宮さんは火だるまの私に冷静に対処し剥がそうとする。

確かに障壁にほとんどの魔力を使っているので

私の持つてる魔力では火力自体は強くない、

しかし紙が燃える程度・・・火薬に火がつく程度の火力があればいいんです。

「いや、引き分けですよ龍宮さん。」

アタナは無事でも　あなたの持つてる銃弾そうはいかないでしょう？」

「・・・なっ！　それが狙いか綾瀬っ!？」

しばらくし、私の点けた火で龍宮さんの予備マガジンで弾が暴発しだし

私と龍宮さんは黒い球に包まれる。

「千雨、あとは頼んだですよ！」

黒い球に包まれ、視界が真っ暗になる。

次の瞬間、私は龍宮さんに抱きついた状態で原っぱにいた。

「……ふゝ、まさか綾瀬にやられるとはな。

格下だと侮ったか……私もまだまだだな。」

「まあ、防衛は失敗しましたが龍宮さんと同時にリタイヤですから……  
良しとします。」

私は龍宮さんから離れ、周りを見渡すと何名かの魔法使いと

スライム娘達がいた。

「すらむい、あめ子、ぷりん、みんな無事でよかったです。」

3人は私にしがみつきそれぞれの頭の上や背中にしがみついたり

手を握ったりしている。

「さて……ソプラノはどうなったですかね？」

こうして学園祭最終日、私の拠点防衛戦は途中退場で終わった。

神様から頼まれたお仕事。

その42（後書き）

42話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その43

麻帆良学園 学園祭 3日目 夜

side 千雨

(まづつたな・・・)

私はデカブツを掃除して急いで防衛地点に戻るが

綾瀬もスライム娘達の姿も見えない。

最後の念話で龍宮がどうか聞こえたから

恐らく龍宮が攻めてきて迎撃に出たんだろう・・・

この防衛地点は まだ落とされていないから

龍宮は何かしたんだろうが、戻ってきた様子もない。

「千雨はぐん、お疲れ。」

私が夕映を探していると 上空から千草がやってきた。

「お疲れ千草さん、それより夕映を見なかったか？

龍宮が来たらしいんだが、念話が妨害されて詳しく聞こえなかったんだ。」

「夕映はんなら、銃使いの嬢ちゃんと相打ちで飛ばされてしまったよ。」

「・・・は？ 龍宮と相打ち？」

千草さんが上空から見た様子を聞いたが

龍宮に突っ込んでいって自身は火だるまに、

例の弾丸を暴発させて相打ちだと・・・？

「はあく、アイツ何考えてるんだ・・・」

「まあまあ、夕映はんがあ銃の嬢ちゃんと相打ちなんて大金星や

ん。

ウチも師匠として鼻が高いで。」

「そういつ問題じゃないだろう・・・で、千草さんはなんでここに?。」

「そや、学園長はんが超はんの場所を見つけたようでな、そこに行くのを旦那さんとエヴァはん達で追っていったな。」

ウチは千雨はん達のお手伝いに行け言われましたんや。」

「そうか、綾瀬の方も あの弾丸が話通りなら無事だろうし、とりあえずはここを守るか。」

「せやね、もうすぐ超はんの方も片がつくみたいやかしそれが終わったら夕映はんを探しに行きましょか。」

「ああ、それじゃあよろしくな、千草さん。」

「じゃらじゃ。」

私は綾瀬達の代わりに千草さんと組み、この地点の防衛を再開する。

side ソプラノ

「なんか上の方からすごい数のロボの残骸が落ちてくるね。」

「ジジイめ・・・年甲斐もなく、張り切っているようだな。」

「オレノブンモ ノコシテオケヨナ・・・ツタク。」

私達は学園長を追い上空の飛行船に向かう、

学園長が張り切っているらしく、

上空の超の警備部隊はほとんどスクラップにされているようだ。

「しかし学園長も飛ばし過ぎじゃない？」

もう 飛行船に着いてるようだよ。」

飛行船の方から様々な魔法の攻撃が見える、

既に戦闘が開始されているようだ。



「ジジイはアレでも極東最強を謳っているんだ、  
これくらいでへばるような玉じゃなかるう。」

私達は飛行船の上に着き 状況確認すると

葉加瀬が魔法陣の上でなにやら詠唱中、

学園長は超と戦闘中のようだ。

「うつわ、すごいね学園長、情報を流しているとはいえ  
超のあの時計を使った戦闘に対応してるよ。」

「確かになかなかやるが、相手が超でまだ良かったな。

時計を使い死角に移動し攻撃、自身への攻撃は時計で回避。

だがジジイとでは戦闘経験が違いすぎる、

あの時計と銃弾は確かに厄介だがジジイくらいになると

読みが違つからな・・・あゝ ほらカウンターを貰った。」

最初こそ学園長は攻撃をしていたようだが、

無駄と悟ったのか、完全にカウンター狙いの戦法に変えたようで  
超に軽い牽制を入れて時計を使わせ、

死角に現れた超にカウンターをあわせる　と言う戦法で超を押し  
いく。

「学園長・・・勝っちゃうんじゃない？」

「・・・全盛期ならばな、だが超もこのままで終わるつもりはない  
ようだ。」

ジジイの体力が持つか、超が押し切るか。」

超は・・・なんとというか、ファンネル？　某アニメでも見ていたの  
か、

4機ほどの飛行型の機械を出し学園長に攻撃を仕掛ける。

しかし学園長もあっさりと回避し、魔法の射手で迎撃、

学園長の体制が若干崩れたところに超が面で押すつもりか

大量の銃弾を空間に並べ学園長に向け一気に発射。

これにはさすがに驚いたのか

学園長は数銃発の魔法の射手を弾幕上に打ち出し迎撃、

自身は瞬動で銃弾の有効範囲から逃れる……が

背後に現れた超が……魔法の詠唱。

時計を利用して飛ぶことで詠唱時間を短縮したのか

炎系の広範囲焚焼殲滅魔法、エヴァのこおる世界に匹敵する魔法で

一気に学園長を中心とした空間を焼き尽くすように魔法を発動。

「ぐっ……これでも食らうネ！ 燃える天空！！」

「ひよ、マズい！！ 魔法障壁 全力展開じゃ！」

学園長は最大で魔法障壁を張り なんとか耐え切る。

「……くっ、なんとか耐えられたのう。」

「……フツ、チエックメイト……ネ。」

「なんとっ!?!?」

しかし、さらに時計で移動し背後に現れた超に 気がついたものの  
対応ができずに銃弾で飛ばされてしまった。

「ふむ、ジジイの年があと少し若ければ最後のアレにも対応できた  
ものを・・・」

防御に集中したせいで、その後の対応に一瞬隙ができたな。」

「それでもあそこまで対応できるだけで十分すごいよ、

流石 極東最強と言われるだけはあるだけであつたね。」

「・・・行くのか、姉様。」

「行くよ、超の願いはともかく それをやられると私が困る。」

「そうか・・・」

「エヴァも来なよ、実は少し手伝って欲しいんだよね。」

超の計画を潰したあとで。」

「・・・わかった、だがこの間の約束はわすれるなよ。」

これが終わったら休み中、姉様は私のモノだ。」

「・・・・・・お手柔らかにね。」 1111

私達は飛行船の上に降り立ち認識障害を解除。

蟠桃に少しお願いをして、超の前に姿を現す。

「はるる、超。」

「ハア ハア・・・ここに来てソプラノに・・・エヴァンジェリン、どういう事力？」

「私は約束通り何もしてない。」

姉様が学園長を尾行してここにたどり着いたまでだ。」

「そうか・・・それで？ ソプラノはどうするのか？」

超は かなり疲れきっているようで 服も煤けているが、

毅然とした立ち居振る舞いで私達に対応する。

「私？ もちろん超の計画を潰すよ？」

「私が何をしようとしているのか知っているのかな？ ソプラノは。」

「何らかの目的のために魔法を世間に公開しようとしている。」

こんな所だよ、私が知っているのは。

どうやって公開するつもりなのか、方法は聞きたいな。」

「……ならば戦う前に少し話を聞いていかないかな？」

「私は戦うつもりはないけど、超の話なら時間が許す限り聞くよ？」

「私を説得でもするのかな？」

まあいいね、私はこの世界の未来からやって来た、ある歴史を変えるために。

そのためにネット等から魔法の存在の証拠をばら撒き、

世界樹の魔力を使い世界中に認識魔法をかける。

魔法の存在を信じやすくなる、と言う魔法を。」

「あの時計があるくらいだからね、その可能性は考えていたよ。

世界樹の魔力を利用するのもわかってたけど……そんな魔法を使うとはね。

それで？ 超が変えたい歴史って言うのはどういう歴史かな？」

「……別にたいしたことではないヨ、どこにでもある不幸な美少女のお話だヨ。」

しかし これを行ない、私が影から監視し、手を加えれば

私の未来より この世界はより良い方向に向かう！

・・・だからソプラノ、私の味方になってくれないか？

・・・！！？」

「フフツ、・・・高畑先生はその手で油断を誘われていたね。

超の言っていることは本当なんだと思う、少なくとも私にはそう見えた。

でも、話の最中に相手に危害を加えるというのは美少女のやることじゃないよ？」

傍から見たら私も超も微動だにしていない、

葉加瀬やエヴァが何が起きたのか不思議そうな顔をしている。

「・・・何をしたネ？」

「さあ？」

超は私を睨みつける、一方私は涼しい顔で超の視線を流す。

「どっしたんですか！ 超さん！」

超の異常に気がついたのか、葉加瀬が超に異常がないか聞くところ。

「・・・カシオペアが、使えないネ。」

「そんなっ！ ここに来て故障ですか!？」

「いや、さっきの使用まで異常はなかった・・・

ソプラノが現れてから動作が止まったようだね。」

「時計の故障を私のせいにされても・・・ねえ、エヴァ。」

「わ、私に話を振るな！」

私がこの場に降り立った時点で私の周囲数十メートルで

世界樹の魔力がない空間を作っている

「超の目的は自身の過去の改変、ついでに世界をいい方向に。

これであってる?」

「身も蓋もないネ、だが概ねその通りだよ。」



「そう、こう考えたことはない？」

超はこの世界にきて変わった？

計画が成功しているのならこの世界に来た時点で

超自身に何らかの影響がないとおかしい・・・そう考えたことはない？

「・・・・・・・・」

「超ならもうわかってるよね。」

この計画は失敗した、もしくは超がこの計画を起こすこと自体歴史に織り込み済み、

・・・そして、ここは過去ではない、過去によく似た平行世界。

このどれかに該当する可能性が高い、と。」

「・・・何が言いたいネ。」ギリッ

超は歯ぎしりをし、私を睨む。

「特に何も、私は魔法が公開され世界が混乱したら困る。」

だから止める。」

「私は 私の望みを叶えるヨ、

・・・だからソプラノにはしばらく退場してもらおう。」

超は銃弾を指に挟み構える。

「すどっつぶ、私は超と戦うつもりはないよ。

美少女、ましてやこれから口説こうと言う娘を力づくでなんて・・・  
ねえ。」

「・・・ならば、どうやって私を止める。

私の計画を止めたかったら私を倒し、ハカセの詠唱を止めるしか無いネ。」

「そう？ そんなことしなくても一声かけるだけで止められるのに・・・」

「一声？ ・・・まさか茶々丸が裏切る？ ありえないネ、

ハカセも私の側、エヴァンジェリンは中立、ならば誰を動かすつもりネ？」

「・・・蟠桃って子よ。」

「ばん・・・どう？ ・・・まさかっ!?!?」

『蟠桃、魔力放出を停止。』

余剰魔力を樹液にして固形化作業開始してちょうだい。』

私の声を念に乗せ世界樹へ伝える。

そうすると世界樹の発光が止まり、空間に放出していた魔力も無くなる。

side 千雨

私と千草さんがロボット兵を相手に防衛戦をしていると急にロボットの動きが止まりバタバタと倒れだす。

「?・・・先輩が超を止めたのか?」

「そうみたいやね、学園内に満ちていた魔力が減ってきたみたいや。

・・・旦那さんがやったみたいやね。」

「わかるのか？ 私には魔力が減ったことしかわからないけど。」

「さあ、ウチにも分かりまへん、ただ そう思っただけや。

・・・！？ これは主従の愛の力っ！！」

「馬鹿言うな！ だったら私にもわかるはずだろう！」

「千雨はんは愛が足りないんちゃいますか？」

「お前だってさっき分らないって言ってたじゃないか！」

「そうでしたっけ？」

「そっだ！」

「まあ、何はともあれウチらの勝ちやね。」

「そっだな・・・はあく疲れたく、魔力は先輩からいくらでも貰えるけど」

体の負担はどうしようもないからな。

早く帰って寝たい。」

「帰るのはまだですえ、まだ仕事が残ってるんやから。」

「わかってるよ・・・はあ、早く終わらせてくれよ、先輩。」

side ソプラノ

「何がどうなったネツ!？」

「わかりません! ただ認識魔法に必要な魔力が激減し

もう発動できないくらいの数値を示しています。」

「ね? 戦わずともあなたの計画を潰してあげたよ、超。」

「・・・どういうコトネ! 何故あなたの一声だけで世界樹が答える!？」

「その問いに答える必要なんて無いでしょ？」

超達の計画は今崩壊した、それだけよ。」

「ハカセ! 認識魔法はっ!？」

「……超さん。」

もう、魔法は使えなんです……魔力が足りませんから。」

超はたった一声で自分の数年掛りの計画が崩壊したことで

一時的に混乱しているようで、さっきの葉加瀬の報告も聞き逃していた。

「そんな……私の計画がこんなことで終わるのか？」

「さて エヴァ、これで今回の事件は終了。」

あなたの中立の立場というのも無しということでもいいかな？」

「そうだな、ここまでのようだ。」

「……まだネ！ まだ終わってない！！」

ソプラノ！ 世界樹の魔力……

貴女ならもう一度、世界樹の発光現象を起こせるのではないノカ！  
？」

「……それに答える必要がある？」

「答えるネ、ソプラノッ!!」

「……イヤ。」

「答えろっ！ ソプラノ・マクダウエル!!」

超が私に答えを求めるために掴みかかるが、

エヴァに組み伏せられ、エヴァの糸によって抑えこまれる。

「超鈴音、貴様の計画は終わったんだ。

それに姉様に手をだそうなど、100年早い。」

「……答えるネ……ソプラノ、お願いだから……

私は敵と戦いもせずに負けるの力？」

「戦ったじゃない？ 直接の戦闘は無いけど私は超の計画の

根幹をなす世界樹の魔力を奪った。

私にそれが出来ることを調べられなかった貴女の情報戦での負けで  
しよ？」

「……確かにそうだが まだ負けてないネ！

まだ時間はある、世界樹の発光をもう一度起こすことが出来れば！  
だから答えるネ！ ソプラノ！！」

超もこの計画のために人生を掛け数年後しの準備をしてきたからか・  
・

中途半端な負け方じゃ 心が認められないか。

「敵に教えを乞うか・・・超、今の貴女の計画にとって重要なこ  
の情報

教えろと言われて はいそうですか って教えると思っ？

この私が。」

「くっ・・・」

「ほら、時間はどんどんなくなっていく、貴女はどうするの？」

超が知っている私の情報は多くない、

今超が私に差し出せるもので情報が得られる可能性があるもの

それは自分自身だが、それを差し出すということは計画の破綻を意  
味する。



私がやめると言ったら聞かなくてはいけない。

手詰まりで私に襲いかかるならそれもいいが・・・さて、どうするか。

「わ、私が！ 私がソプラノさんのモノになります！」

だから超さんに教えてあげてください！！」

「・・・ハカセ。」

超の願いと想いを知っている葉加瀬が 超が最後のチャンスを手にするために自分を私に差し出すと言い出した。

「ここで葉加瀬が出てくるか・・・

葉加瀬、その言葉の意味、ちゃんと分かっているの？」

「分かっています、私を好きにしてください構いません！」

だから・・・だから超さんに教えてあげてください・・・最後の・・・

いえ、彼女が納得する結末を！」

「・・・ハカセ、ダメだよ・・・ハカセがそんなことになるなんて

私は望んで無いヨ。」

「じゃあどうするんです、超さん！」

この計画には私も納得して参加しているんですよ、

私の身一つで情報が得られるなら安いものですよ。」

超は葉加瀬を見つめ、葉加瀬も超を優しく見つめる。

しばらくそのままにいるが、超にも次の策はなく情報の対価もない状態で手詰まり、

かと言って葉加瀬を差し出すわけにもいかず

無言のまま時間だけが無為に過ぎさっていく。

「しょうが無いか・・・葉加瀬、その対価では多すぎる。

貴女には・・・そうね、今後私を好きになるように努力しなさい。」

「・・・は？ 好きになるように努力？」

「そう、私は何でも言うつことを聞く人形なんていららないの。

女の子の心をねじ曲げて私を愛せ、なんて言うつもりもない。

だから私を好きになる努力をして、それでダメなら別にいい、でも 努力して私を好きになったら・・・葉加瀬ともイチャイチャしようかな。」

「・・・ソプラノ。」 「ソプラノ・・・さん。」

超と葉加瀬が私を意外そうな顔で見つめるが、

私の言った意味がわかったようだ。

つまり、これは何もしなくてもいい、私に何か聞かれても

努力しても駄目だったとか 私の粗を適当に並べればいいのだ。

私はダメ人間と自覚しているので 私の粗何か探せばいくらでも見つかるだろう。

「それでいい？ 葉加瀬。」

「・・・え、ええ。」

「じゃあ、超に教えてあげようかな。

発光現象は起こせるよ、私が頼めばね。」

「・・・本当力？」

「取引に嘘は言わないよ。」

「……ならば……ならば私と勝負するネ!!」

BETは私がソプラノを愛す努力をする、ソプラノは世界樹に発光現象を起こさせる!」

さっきとは打って変わり超の表情から影が消え、

いつも通り……何時にも増していい顔になっている。

「フフツ、超はがめついね、その掛金じゃダメだよ。

追加で 超は少なくとも23年間かな、次の発世界樹の光現象までこの世界に留まる。」

どうせその時計も世界樹の魔力な無しじゃ動かないんでしょ?

だったらこの追加は安いものでしょう?

なんだっいたらこっちの世界の超鈴音が生まれるまで居ればいいよ、

この世界の超の不幸を貴女の手で変えてあげるのも面白そうでしょう?」

「OKネ、最低23年、最高は……私がソプラノのモノになったら

好きなだけ一緒にいてあげるネ！」

「勝負の方法は？」

「もちろん！ この拳で！ ルールは無し、相手のダウンのみ！」

「私は超を殴れないって言ってるのに・・・私は超を押さえ込んだら勝ちね！」

「そう簡単には行かないヨ！！！」

超が銃弾を捨て魔法と自身の格闘技術で私との勝負に出る。

超は近接戦闘のために私に突っ込んで来る。

私もそれに答え、超の攻撃をかわす。

超の攻撃を私は手でいなし、重心を崩させるが、飛行魔法の応用が倒れることもなくそのまま私に攻撃を続ける。

「器用なことをっ！ 私はそんなに飛ぶのうまくないのに！」

「ハハッ、これくらい飛行魔法が使えば当たり前ネ、

・・・ふっ！ できないソプラノがおかしいヨ。」

「っと 危ない、私が魔法苦手なのはしょうが無いじゃない！」

練習してもでき無いんだから・・・っと」

接近戦では埒があかず、私の魔法が苦手という言葉聞いたのか、超が中距離戦に移る。

無詠唱で魔法の射手を数十発打ち込んでくるが

私は回避出来るものは回避し、できないものは光鷹翼で受ける。

「なんだネ、その楯は！ 魔法使えるじゃないカ！」

「これは魔法じゃなくて私の能力だよ・・・っと。」

「ちっ・・・これならば、ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル！」

超が瞬動で一気に距離をとり魔法の詠唱に入る。

「エヴァ！ 葉加瀬をお願い！」

「わかった。 来いチャチャゼロ。」

「アア、オレモサンカシタカタゼ。」

エヴァに葉加瀬の方に攻撃がいかないように守ってもらい

私は超の魔法を正面から受ける。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王、

来れ浄化の炎 燃え盛る大剣。

ほとばしれ ソドムを焼きし火と硫黄。

罪ありし者を死の塵に。

私の最大魔法を受けるよソプラノっ！！」

「女の嫉妬の炎かな？ それとも癩癩かな？」

「誰が嫉妬カ！ あゝもう！

とにかく受けるネ、 燃える天空！！」

超の右手から爆炎が私に襲いかかる。

私は光鷹翼を3枚展開し 2枚で蝶の羽のように展開して超の魔法を受け、

もう1枚を大雑把な氷の結晶のような形にして

飛行船や博士達に行かないように防御する。

「ぐう……あああぁっあゝゝゝ!!」

「ちよっ!? 視界一面火の海だよ!」

十数秒ほどあたり一面が火の海だったが 徐々に火が消えていき

視界も晴れてくる。

超は身体に呪紋が現れてはいるが、まだしっかり意識はあるようで

飛行魔法で空に浮いている。

「……ハア……ハア……なんなんだネ、その光る楯……  
ハア

ビクともしないネ……反則だよ……ハア。」

「超、もうそろそろいいんじゃないかな、

そっちはもう限界っばいよ?」



「ぐっ……ハアハア……わ、私はまだやれるね……

ソプラノこそ……早く……降参するネ……ハア。」

「……しょうが無いな、本当に。」

「おい姉様！ 超にもう魔法は使わせない方がいいぞ。

あの呪紋処理は自身から無理やり魔力を引き出してる、

限界まで使えば超は死ぬぞ！」

「ちょ、そついう事は早く言ってよっ！！」

エヴァの指摘でこれ以上超に魔法を使わせることはできない……

しかし超の方を見ると……やる気満々だ。

「あ、あのー 超、魔法は止めて接近戦にしない……かな？」

「ハア……ハア……接近戦では……私に勝ち目など無いネ。」

「もういい姉様。面倒なら腕の一本くらい切り落とすか、

黒鍵でミンチにしてやれ！」

「ちょっと！ エヴァンジェリンさん！！」 1111

「・・・無茶苦茶言うな、エヴァは。」 1111

しかし 超は本気でそうでもしないと止まりそうにない・・・どうしたものか？

私の考える暇もなく、超は再度さっきの魔法を打とうと詠唱を開始する。

「その楯が壊れるまで打ち込んでやるネ!!」

ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル!」

「・・・ええい、こつなつたら最後の手段!」

私は身体能力を5割まで上げ、縮地で一気に間合いを詰める。

「契約に従い 我にS ナツ!?!」

「その唇、貰った!!」

私は左手で超の右手を掴み、右手で超の腰を抱き

キスをして超の口を塞ぎ詠唱をできなくする。

「ん~~~~むう~~~~!!??」 / /

「んっ……ちゅ……くちゅ。」

私達のその様子を見ていたエヴァが騒ぎ出した。

「あ あ~~~~し、舌入れた!!

おい、姉様舌は入れなくてもいいだろうっ!??

「うわあ~~~~うわ~~~~」 / /

超が振り解こうと暴れだすが、超の右手を掴んでいた手を離し

超の頭を固定し逃がさないようにして、超の口内を蹂躪する。

「ん~~~~!!……んっ!……ちゅ……んむっ!??

「……ちゅ……じゅる……くちゅ……ち……  
んっ!??」

びつくりした超に舌を軽く噛まれるが、お構いなしにキスを続ける。

超が私の舌を噛んだことを気にしたのか、私の舌を舐めるように舌を動かしてきた。

「……ん……ちゅ……くち……じゅ……ちゅ……ゴク」

「……っ……ちゅ……ち……ちゅ……じゅる……」

超の身体から力が抜け、手はだらりと垂れ下がったまま。

舌だけが私の動きに反応し動いている状態で

私が抱いていなかったら このまま地面に落ちているだろう。

超の力が完全に抜けた所で最後の詰めをし彼女を開放する。

「……んっ……ちゅ……じゅる……ゴク……ん  
んっ……んんっっ!!?!」 ビクッ

「……ん……ちゅ……くちゅ……ぐちゅ……ちゅ……ちゅ……じゅ……ぷはっ。

ふっ ごちそうさまでした」

放心状態の超を抱いたまま飛行船の上に戻り

超をゆっくりと下ろした。

「私の勝ちだよな？ 葉加瀬」

「……勝ちと言いましょつか……なんと言いますか……」

そっちの方向で勝たなくてもいいのでは……」 / / /

葉加瀬は超に駆け寄り、怪我がないか確認するが

疲労は激しい物の、見た感じでは無傷であることを確認しほっと息付いていた。

「この……アホ姉があゝゝ!!」 #

「ぐほっ!?!?……」

いきなり突っ込んできたエヴァの右ボディをモロに食らい

私はその場につずくまる。

「あんな方法で勝たなくても、いくらでも方法はあるだろうが!!」

超など黒鍵を投げて風穴を開けてやればいいのだ!」 #

その後・・・超が意識を取り戻すまでの数分間・・・

私はエヴァにお仕置きをされ続けていた。

神様から頼まれたお仕事。

その43（後書き）

43話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その44

麻帆良学園 学園祭 3日目 夜

学園上空 飛行船

「……どういう状況か？」

現在 飛行船の上ではズタボロな私の上にエヴァとチャチャゼロが座り

葉加瀬がエヴァに強制認識魔法の術式を説明している。

「あ、超さん 目が覚めたんですか！」

「よつやくお目覚めか？ 超鈴音。

貴様には色々と話さねばならんことがある。」

「……？ どうい……う……っ！？」  
／／／



先程の勝負を思い出したのか、超が真っ赤になる。

「そ、ソプラノ！　なんてことをしてくれるネッ！！

無理やり私の唇を奪うなんて！　し、しかも舌っ！！」　／／

「しょうが無いでしょう、そうでもしないと超を止められなかったんだから。」

「これならまだ殴られて気を失うとかの方がよっぽどマシネ！」

「私も悪かったとは思ってるけど、勝負の上での出来事ということ  
で納得しない？」

「出来るわけないネ！　この件は後できっちり話をつけるから覚悟  
するネ！」

「と、とにかく超さんも落ち着いて、これからどうするか考えまし  
よっよ。」

「どうするも何も・・・このままだと逃亡生活力？」

世界樹の魔力がないと帰ることもできないし、ソプラノとの賭けも  
あるシ・・・」

「その辺は一応考えてあってね、

今エヴァにお願いして作業してもらってるところだよ。

どう、エヴァ？ できそうかな？」

「こっちの方は問題ない。」

超の術式を利用して学園内に記憶改竄魔法をかけるのも簡単だ。

だが既にばらまかれた情報については、茶々丸次第だな。」

「葉加瀬、茶々丸の方はどうだって言ってる？」

葉加瀬が無線機で茶々丸に連絡をとる。

「あ、はい。 茶々丸 そちらの方は進行状況はどうですか？」

『はい、葉加瀬。 学園の警備関係のデータは既に掌握済みでしたので』

あと30分ほどで指示されたデータはすべて消去、改竄できます。』

「・・・？ ソプラノ、何をするつもりネ？」

「説明すると、今回の学園祭での超達が起こした事件関係の証拠となる物、

監視カメラ等の映像やデータを 茶々丸がすべて消去、改竄して、

超の使おうとした強制認識魔法をエヴァが改造、

この学園内に学園祭の3日間での超関係の記憶を変更、

ロボット関係は隠せるものは隠して、

ダメなものは適当にどこかの組織のテロだということにするようにして、

超自身に関しては、学園祭は普通に生徒として遊んでました、

というように皆の記憶を改竄しようかなど。」

「そんな事まで考えていたのか・・・？」

「超が学園にこのまま所属している為には 必要だったからね。」

「あ、それなら超さんの退学のこと記憶改竄出来るんですか？」

エヴァンジェリンさん。」

「ん？ 出来ると思うが・・・少しその辺手を加えておくか。」

超、これは大きい貸しになるからな、貴様の技術は手放すには惜しい、

今後は私のために馬車馬のごとく働けよ。」

「お、お手柔らかに頼むヨ・・・」 1111

エヴァは引き続き作業に戻り、葉加瀬も手伝っている。

どこに居るか分からないが茶々丸も作業をしていてくれる事だろう。

「そつえば超、あの銃弾で飛ばされた人達はどこに行ったの？」

「あれか？ アレは作戦開始から大体3時間後の世界に飛ぶようにしてあるから」

もうすぐ皆現われると思うヨ、場所は河原の芝生の所ネ。」

「そうなると・・・少しまずいな、」

この記憶改竄魔法って多分学園長や高畑先生クラスだと

レジストされる可能性があるんだよね。」

「確かに私は一般人を対象で魔法をかけるつもりだったから

魔法使いにはレジストされる可能性はあるネ。」

「・・・ふむ、学園長には話を着けておかないとマズイかもね。」

「そうだね、学園長や高畑先生だけで済めばいいガ

その下の魔法先生達まで覚えていたら何をされるかわからないネ。」

「千雨達にこっちに来てもらうついでに学園長と高畑先生にも着て

もらっかな。」

私は念話で千雨に連絡をとる。

『ちうたくん、起きてる？』

『・・・ようやくかよ、そっちは片がついたのか？』

『うん、こっちはもう大丈夫だよ。』

千草や夕映は無事？』

『あゝ悪い、私がデカブツ相手にしているときに龍宮が来たらしくてな、』

夕映と一緒に例の銃弾で飛ばされたんだ。』

『一緒に？』

『ああ、千草さんが空から少し見てたらしいんだけど』

龍宮に抱きついて火達磨になってな、』

ほら、綾瀬が前に失敗した時に思いついたとか言ってた魔法で。』

『あれか・・・』

『それで龍宮の銃弾を暴発させて一緒に飛ばされた・・・というこ』

となんだ。』

『そっか、龍宮さんと引き分けということか。』

夕映もかなりやるようになったね・・・これはエヴァが知ったら大変な事になりそうだ。』

『・・・またアイツの修行メニューが増えるのか。』

『それじゃあ、千草と一緒に・・・河原の芝生のところ知ってる？』

あのへんに もう少ししたら飛ばされた人達が集まるって話だから

夕映と学園長と高畑先生を拾って私のところに来てくれない？』

『学園長と高畑先生も一緒にか？』

『うん、少し話をつけておかないといけなさそうだからね。』

私達は上空の飛行船の上にいるから。』

『りょーかい、じゃあ、千草さんと早速見に行ってくるよ。』

『・・・あんまり河原に近づかないようがいよ？』

転移してきた誰かと合体・・・なんてことになっちゃうかもよ  
『？』

『・・・サラッと、怖いこと言うなよ。』 1111

『じゃあね。』

「これでよし、千雨達に学園長と高畑先生も拾ってきてもらおうように頼んでおいたよ。」

「そうか、じゃあどうやって話を付けるか考えておくネ。」

「頑張つてね。」

「ソプラノは手伝ってくれないのか？」

「もちろん手伝うけど、こつこつという話は超の方が得意そうだし。」

「こつこつ所で、甲斐性を見せておくと 私もコロツとってしま  
うかも知れないネ。」

「超が学園に技術提供をして恩赦を貰うっていう感じでどうかな？」

「……変わり身が早過ぎる。」

その後しばらく私達は作業や、交渉の進め方を話しながらすすります。

「？ あれ？ ネギ先生ってどうしたんだっけ？」

「ネギ坊主か？ 彼らは特別に1週間先に飛ばしたネ。」

「・・・何でまたそんなことを。」

「彼らは私のカシオペアで学園祭を楽しんだようだからネ、

まあ、その代金みたいなものだヨ」

「あゝ、かわいそうにネギ先生達・・・」

(しかし、次に会えるネギ先生達や夕映が私の知ってる皆なのか・・・少し不安だな。)

「ねえ 超、そのカシオペア、少し見せてくれない？」

「いいけど、どうするね？ 今の状態じゃ動かないヨ。」

「ちょっと試したいことがあってね。」

私は超からカシオペアを受け取り、私の魔力を少し流しこんでみた。

カチッ カチッ

「おゝ やっぱりそうなんだ。」

「な、何で動くネ！？ 世界樹の発光現象でも起きてない限り



並の魔力じゃ動かないはずなのに……」

「そこは私の秘密ということで。」

はい、返すよ。」

超の手に渡ると、とたんに動作が止まる。

「あれ、止まってしまったヨ……残念ネ、動き出していたら

さっきの戦闘に戻ってソプラノのキスを阻止できたのニ。」

「私にとっては甘酸っぱい思い出なのに……」

「私にとっては忘れたい過去ヨ。」

「……ねえ 超、そのカシオペアだけど、少し改造してみてくださいない?」

「……どういう風に改造するのかな?」

「それを使って移動した場合、移動する前の世界に確実に帰ってこれるように。」

「……ソプラノが言っているのは 時間のことじゃないんだよね……」

「私にはそれで本当に過去や未来に移動できるのか不安なんだよ。」

それを使って誰かが飛んで、次にその人に会った時、

本当にその人が私の知っている人なのか不安で・・・ね。」

「・・・・・・・・私達、これを開発した人達の中にもそういう話は有ったネ。」

だから、実際に使おうとしたのも私が初めてなんだヨ。」

「出来れば使ってほしくない、

使っても確実に私の知ってる超が戻って来てくれるようにして欲しいんだ。」

「・・・わかった、少し考えてみるヨ。」

それにできるだけ使わないように・・・

と 言っても今の私には使えないけどネ。」

「お願いね。」

私は超の目を見つめてもう一度お願いをする。

その時 私はどんな顔をしていたのかは分からないが、

超は優しく微笑んで言ってくれた。

「・・・わかったヨ。」

30分くらい過ぎた頃だろうか、

エヴァの作業も終わり葉加瀬が記憶改竄魔法の魔法陣書き換え作業をし

茶々丸からも作業は終了し、現在はチェック作業をしていると連絡があつた。

そんな時に千雨から もうすぐこっちに着くと連絡があつた。

「皆もうすぐこっちに来るって、学園長達も一緒だよ。」

「わかつたネ、さて ここで失敗しては最悪オコジヨ生活かな、ソプラノは私がオコジヨになっても好きでいてくれるのかな？」

「ん〜、そこは悩むところだね。」

「・・・そこは肯定するところじゃないのか？」

「お前達は・・・馬鹿を言ってないで葉加瀬の作業でも手伝ってる！」

「はいはい、わかったヨ。」

「じゃあ、私は……………」  
L o r z  
「……………」

「姉様は魔法関係は本当に駄目だな……………」

「……………そういう事は口に出さないでください。」  
l l l

しばらくすると千雨が先導し、学園長達や千草、夕映に

なぜか龍宮さんもやってきた。

「先輩、待たせた。」

「旦那さんお疲れ様。」

「ソプラノ、無事でしたか？」

「みんな無事みたいだね、夕映は何か無茶したんだって？」

あれ？ スライム娘達は？」

「あ、アレは仕方がなかったんですよ。」

ああでもしないと龍宮さんを止めることができなかつたんですから。

あと彼女達は先に家に帰ってもらったです、疲れていたようなので。

「そっか、彼女達にも後で」褒美あげないとね。」

「しかし・・・まさか綾瀬が自爆技を使うとはな、私もしてやられたよ。」

夕映は私のことも記憶しているし、火達磨にもなったよう

今の所私の知っている夕映のようだ。

「学園長に高畑先生も お疲れ様でした。」

「老体には答えるのう、しかし、またソプラノ君の厄介になったよ  
うで悪かったの。」

「僕も油断しましたよ・・・だけどいい機会でもありました、

まだまだ覚悟が足りないと実感したよ。」

「まあ、皆話すことは色々あると思うけど、

時間も無いし今必要なことを先に話すよ。」

それから私は学園長や千雨達にこれからやることとしていること、

記憶改竄魔法の事について話。超達の処遇についても話した。

超達の処遇については建前上 私達の監視下に置き、

カシオペアや例の銃弾の使用は封印とすることになっている。

「……つまり超君はこのまま学園に在籍生徒として過ごすという事か。」

「私はその方向で進めるつもりです……けど、

学園長もハイそうですかって言うわけにもいかないよね？」

「そうじゃな、これだけの事件を起こしておいて放置したのでは……」

「そこで私から提案があるネ。」

「ふむ、……まず超君の話を聞こうかの。」

「今回の事件は私なりに世界のことを思ってたことネ、

とは言え学園や皆に迷惑をかけたことを先に謝罪させて欲しいヨ。

その上で、学園に与えた物的損害は私の方で費用を負担させてもらうネ、

後 私が今後学園に在籍するに当たり、学園の警備や設備に関して

協力をさせてもらうヨ。

言っでは何だがこの学園の警備状況はまだ甘い、

だが私が協力すればその穴を埋めることが出来るヨ。」

「ふむ、謝罪の方は受け入れよう、君にも思うところがあったの事なのだろう、

高畑君からも、さつきも、君がやろうとしていたことは聞いた。

農らの立場からすれば到底看過することはできんが

その想い自体は理解はできる・・・未来から来たというのは些か信じがたいがの。

学園の損害も修復費用を出してくれるなら人的損害も無いようじゃし

・・・まあいいじゃろう。

君が警備関係に協力してくれるなら頼もしいことじゃ。

・・・農個人としては悪く無い話とは思っが、

組織の長としてこのままというわけにはいかん。

皆の記憶から事件自体をなかった事にするからには

下手に罰することはできん・・・が

超君には強制証書で一筆書いて貰うことになる。

今後 学園に対して故意に破壊活動を行わない、学園の運営を阻害しない、

最後に魔法を世間に公開するようなことはしない、と言う内容でな

」

「強制証書にサインするのはいいネ、だが期限を設けて欲しい。

私としても学園に敵対するつもりはないガ

今後、この学園がおかしなことになったら止める力があるネ。」

学園長はしばらく考える。

高畑先生となにやら話をし、答えを出したようだ。

「ならば超君がこの学園に在籍している間でどうかの、

今後 中学高校大学さらには大学の研究機関へと在籍してくれば

学園にとってもいい事になるだろうし、超君も僕らを監視しやすかるう。

僕らも君に見放されんようにするつもりじゃし、



君もそれに協力してくれれば心強い。

・・・それにどうせソプラノ君が絡んでおるのじゃろ？

彼女の元に置かれるというならば世界に魔法を公開しようとするれば止めるじゃろつ。」

「ふむ・・・では学園への退学届はいつでも受理するようにして欲しいネ。

出ようとしたら書類上で止められて出れなくなったでは困るからネ。

できたら提出した時点で強制証書の効果が切れるのが望ましいヨ。」

「わかった、君の退学届が学園の教師に手に渡った時点、ということにする。」

あと、これは個人的なお願いなのだが、

時間がある時にネギ君や木乃香達の修行に付き合っただけでやってくれんかの？」

「・・・ふむ、まあ、時間があつて気が向いた時でいいなら付き合っネ。

私もネギ坊主には少し興味があるからネ。」

「葉加瀬君と籠宮君は・・・」

葉加瀬君には超君と同じ強制証書にサインしてもらおうとして

龍宮君は、今回も仕事かね？」

「ええ、今回は個人的に思うところはありませんが

超とは契約の上での仕事です。」

「ならば、今後学園への敵対の仕事は受けないでほしいんじゃないか？」

「強制証書にサインはできませんが、約束します。」

「そうか、後で細かい話は詰める必要があるが、いいじゃろう。」

葉加瀬君もいいかな？」

「はい。」

後、茶々丸はどうなりますか？」

「ふむ・・・本来なら儂らは彼女には干渉できんのじゃが・・・」

「ならばしばらく茶々丸に超の警備の仕事でも手伝わせよう。」

パソコンなどの電子関係なら成果は期待できるだろう。」

「そうか、スマンの。ではそういう事じゃ。」

学園長と超達の話もまとまったようで、

早速私が強制証書を出し、学園長に内容を記入してもらう。

「・・・こんなまで用意していたの力？」

「あゝ、これは別のことに使おうと思ってね。」

「別のこと？ どういうコトだ姉様。」

「・・・いや、超との話次第で必要かなと・・・」

「どうなったらこれが必要な話になるんだネ・・・」

まさか、私に奴隷契約でも結ばせようとしていたのカッ!？」

「ちっ、違うよ!？ そんなこと考えてないよっ!！」

「おいっ! 姉様どういう事だ、女を奴隷扱いなど・・・そこまで腐ったか!！」

「先輩・・・見損なっただよ・・・が、我慢出来ないなら私に言ってくれば・・・」

「旦那さん・・・そらやり過ぎや。」

「? ソプラノは・・・そんなことしないですよね?」

「違っつて! 超が勝手に言ってるだけだっつてっ!！」

ち、超もなんとか言っよ！」

「さあ〜？ 私は何も知らないヨ？」

私はエヴァに胸ぐらをつかまれ振り回され、

両手は千雨と千草に固定されて逃げることもできない。

夕映はエヴァがやりすぎないように落ち着かせようとしている。

「あの、超さん・・・少しやりすぎなのでは？」

「私の計画を潰されたんだから、これくらいやらないと気が済まないヨ。」

・・・でも まあ、これで勘弁してやるネ。

私も賭けに負けた身、

かわいそうな私はソプラノを愛す努力をしないといけないからネ。」

「超さんは自分から言い出したんじゃないですか・・・私なんて・・・」

「ハカセはそれこそソプラノの奴隷になってもおかしくないんだから」

「儲け物だとも思うネ。」

「……お互いこれから苦労しますね。」

「あの人を好きになる努力なんて。」

「本当にネ……。」 / /

「何か私がない間に複雑なことがあったようだな。」

「え、ええ、色々有ったんですよ……。」 / /

「……?」

エヴァは私に馬乗りになり千雨と千草一緒にあってさらに詰め寄る。

「違うというなら 何故あんなものを用意していたんだ!」

「だから、交渉次第で使うかな」と思ってただけで、

「奴隷とか強制的に何かさせようと思ってるわけじゃないんだって!」

「先輩はそんなに私達に不満があるのか!??」

「昨晚ウチと夜を共にしたばかりやおまへんか!」

「だから皆に不満があるとかそういう話じゃなくて!」

「皆も少し落ち着くです！ はーなーれーるーでーすー!!」

いい加減に話が進まないと思ったのか、超と葉加瀬が

私達の仲裁に入る。

「エヴァンジェリン達もその辺にしておくネ、

今はまだやることがあるんだから帰ってからじっくりと話をするといいヨ。」

「そうですね、まずはやることだけやってしまいましょう。」

「うち、姉様 帰ったら別荘でじっくりと話を聞かせてもらおうかな！」

「私も一緒に行くぞ、エヴァ。」

「ウチもや、詳しく聞かせてもらいましょうか?」

「皆さんだけでは心配です、私も行くですよ。」

(別荘とか!?!?!?!学園祭の振替休日×24日と言つことか...  
終わった。)

エヴァと超、葉加瀬が記憶改竄魔法の準備をする、

千雨達も手伝いに参加し魔法がろくに使えない私だけが暇になる、

そんな私に高畑先生が話しかけてきた。

「少し聞きたいんだけど、ソプラノ君が超君を倒したんだろ？」

「どうやって倒したのか今後参考までに聞きたいんだけど。」

「私と超が戦う時には、あの時計とかが使えなくなってたので

普通に魔法と体術でしたから参考にはならないかと思いますよ。

そついう意味だったら学園長の方がいい話を聞けると思うよ、

あの戦闘はすごかったなー、

学園長普通に超の動きにカウンターを合わせていたから。」

「本当ですか学園長！」

「ふおふおふお、俺もまだまだ若いものには負けんぞい。」

「でも、年には勝てなかったんだよね、

最後には集中切らしてやられちゃったし。」

「……うむう。」

「今度高畑先生と模擬戦でもやってあげなよ、

学園長も少し身体を動かしておいたほうがいいだろうしね。」

「是非お願いします、学園長！」

「わ、わかった、また今度落ち着いたときにでも。」 1111

エヴァ達の方が準備ができたようで

こちらにやってきた。

「姉様準備ができたぞ、今度は世界樹の魔力は使うのか？」

「いや、余剰魔力は前みたいに結晶化しちゃったから

今回は……私の魔力で行こうかな。

学園長、少し強めにかけてもいいですよね？

下手に魔法先生達にレジストされてもまずいから。」

「うむ、そこはしょうがないかの。」

彼らには気の毒じゃが、魔法を世界に公開されることを思えば、



超君が協力してくれて警備が改善するし

下手に覚えておかない方がいいじゃろう。」

「じゃあエヴァ、調整お願い。」

詠唱は葉加瀬がやるの？」

「はい、と言ってもほとんど呪文を読むだけです。」

「今回は学園都市内にかけるだけだからすぐに終わる。」

姉様は葉加瀬の正面の魔法陣で魔力を放出してくれ……1割もいらないか。」

「りょうか〜い。」

「おい、全員外側の魔法陣の中に入れ。」

ここから出たら記憶が改竄されるぞ。」

私は指定された魔法陣に立ち魔力の放出を開始、

葉加瀬はそれに合わせて呪文の詠唱を開始した。

「……あの……エヴァンジェリン、これで1割使ってるだけなの力？」  
「……」

「ん？ そうだが、どうかしたか？」

「どうしたも何も・・・何故これほどの魔力を・・・

いや、こんなもの人間に扱えるものじゃないヨ。

これだけの魔力を持っていて本当にソプラノは魔法がまるでダメな  
の力？」

「逆だ馬鹿者、これだけの魔力を持っているから魔法が使えないん  
だ。」

こんな馬鹿でかい魔力精霊に直接流してみろ、

すぐにパンクして精霊が消滅する。

自分で操ろうにもコントロールが難しすぎる、

F1のエンジンでラジコンを動かすようなものだ、まともに動くは  
ずがない。」

「・・・学園長はご存知でしたか？ ソプラノ君の力。」 1111

「僕は先代から聞いていただけじゃ・・・これで1割とはな・・・

彼女が本気になったらこの学園など一瞬で消し飛びかねんのう。

儂らの目の前で 今見せてるのは警告も兼ねてか・・・

最近何かと彼女達に頼ることがあったからの。

今後は今まで以上の気を引き締めんといかんわう……」

葉加瀬の詠唱後、光の柱が空にそびえ立ち、

光が一気に強くなり拡散、学園都市内を覆い尽くし徐々に収まっていた。

「どう、成功した？」

「術式は正常に動いたようです、後は下に行ってから確認するだけですわね。」

「学園長、とりあえず学校の先生誰かに連絡とってみて。」

「うむ、向こうも混乱しておると思つしの。」

学園長が下の魔法先生に連絡を取り状況の確認をする。

「あ、そつだ高畑先生、ネギ先生達1週間後に帰ってくるらしいよ。」

「え？ そんなに先なのかい？」

「何でも、超がネギ先生にカシオペア、あの時計貸してたんだけど、それを使って学園祭を何回も回って遊んでたらしくてね、その代金というか、貸しというか、そんな感じで魔法球に居るときに1週間後に飛ばしたんだってさ。」

「そ、それはまたなんとも言いがたい・・・大丈夫なのかい？」

「動作に関しては問題ないから大丈夫だと思うよ。」

最悪、超の持つてるカシオペアで迎えに行くっててもあるし。」

「そうかい、ならば安心・・・なのかな。」

「連絡がついたぞい、地上の先生達はテロリストと戦っていて

あの河原に集まっていた、と言う感じで記憶が改ざんされているよ  
うじゃ。」

「じゃあ、学園長達は地上の先生や魔法使いをお願いね。」

私達は残ったロボとかの回収に入るから。」

「うむ、では、明日にでも超君は一度学園長室に来てくれんかの、細かい打ち合わせをしたい。」

「わかったネ、行く前に連絡を入れるヨ。」

「今回は迷惑をかけた・・・とても言うのかな、

お疲れ様、ソプラノ君にエヴァ君達も。」

「「「お疲れ様でした。」」「おつかれー。」」「ふん。」

「・・・ナニモヤルコトガナカタゼ。」

学園長と高畑先生は飛行船から降り、地上で事後処理に入った。

「さて、私達も片付けをして帰ろうか。」

超、どれくらいの魔力があればロボ達の回収作業が出来る？」

「通常の世界樹の状態より少し多めにあれば動くだけなら問題ないヨ。」

「ん、じゃあ・・・」蟠桃、結晶化した魔力を使用してもいいから

通常より多めに魔力を放出してちょうだい。」・・・OK。」

私が念話での指示を出した直後から空間に魔力が満ち、

世界樹に薄い発光現象が起こる。

「それでは、私達はガイノイドを回収後、隠れ家に隠しておくヨ。

・・・そうだソプラノ、茶々丸の姉妹機が何体かあるから

使ってやってくれないかな？

彼女達にも茶々丸と同型のAIを搭載しているから

うまく育てれば茶々丸のように感情や自己意識が芽生えるかも知れないからネ。」

「私からもお願いします。」

今回の計画のために生み出されたとはいえ、このまま廃棄されたのでは

不憫なので・・・出来れば彼女達にも茶々丸のように育て欲しいです。」

「んゝ、どうしようかエヴァ？」

「いいんじゃないか？ 最近夕映や千雨達が派手に暴れるから

別荘の管理に困っていたんだ。

茶々丸の姉妹機なら年齢など関係ないしな。」

「私達が暴れるんじゃないかってエヴァが暴れるんじゃないか・・・」

「そうですね・・・エヴァンジェリンさんが派手な魔法を使うからです。」

「せやなあ、一々エヴァはんはやることが派手やから・・・

この間なんてウチが隠れていた塔をまるごと破壊してましたし。」

「あ、アレは・・・たまたま、その・・・ええい、貴様がこそこそするから悪いんだ!!」

「ほら、これや。」

こんな感じで面倒になって派手な魔法を使うんや。」

「「そうそう。」

「くっ・・・今はその話はいいんだ、とにかくその茶々丸の姉妹とやらは

家で預かる、いいな!」

「ありがとうございますエヴァンジェリンさん。」

「よろしく頼むネ、私もママに見に行くようにするカラ。」

超と葉加瀬は話が終わるとコンソールを空間に呼びだし

次々と指示を出していき、回収作業を進めているようだ。

「夕映で思い出したけど、夕映、龍宮さんと引き分けたらしいよ。」

「ちょ、それは秘密ですよソプラノ!!」

「なに、どういう事だ?」

「そうそう、ちょっと聞いてくれよ……」

千雨が千草と一緒にうれしそうに夕映の武勇伝をエヴァに聞かせる。

二人を黙らせようとする夕映を私が背後から抱き留め

所々で龍宮さんに確認が行き、龍宮さんも肯定する、

エヴァとチャチャゼロがその話を聞き夕映の方を見た。

「ほう……綾瀬夕映、貴様見所があると思ったら

既にあの龍宮を手玉にとったのか……面白い、面白いぞ!!」

「オイ ガキ、コンドカラナマエデヨンデヤルゼ? アヤセユエ。」

「け、結構です!!」 ムー

「確か……超が面白い呪紋を使って魔力の底上げをしていたな、

よし、後で超から聞き出して貴様用に作り上げてやるぞ。」



そうすれば今度は引き分けなどではなく完全勝利をさせてやるぞ！」

「ほう、今度は綾瀬が私に勝つというのか？」

「いらぬですよ！ 龍宮さんも黙ってて欲しいです！」

私はもっと防御とか回復とかそっちの方向がいいんです！」

「何を馬鹿なことを、龍宮と引き分けて回復もクソもあるか。

超の呪紋を改造して、今の貴様の不完全な燃える天空じゃなく

完全な魔法として打てるようにしてやるうというのだ、

これなら私の弟子として相応しい火力だ！

明日からさらに修行のペースをあげるぞ！ 八八八ハッ！」

「いゝゝゝゝゝゝゝやあゝゝゝゝゝゝゝつ！！！！！！」

夕映の叫び声が学園の空にこだます。

こうして私達の中学3年の学園祭は終を迎えた・・・

「姉様、何を黄昏ているかわからんが

帰ったら別荘で話があるからな、逃げるなよ？」 #

「そつだよ先輩、時間はたっぷりあるんだ、 ゆっくり 話をしよう。」

「今夜は楽しみやわ、旦那さん どないな言い訳を聞かせてくれるやるか？」

エヴァは怒りの表情、千雨は虚ろな瞳、

千草は怪しい微笑で私を見る目だけは笑ってない状況、

私の学園祭は まだまだ終わらないようだった。

神様から頼まれたお仕事。 その44（後書き）

44話目 投稿

さて、学園祭辺も大体終了しました。

この時点で44話と当初の予定より長くなってしまいましたが  
ここまでお付き合いしてくれた方はありがとうございます。

以前もここに記載したとおり、  
更新ペースが次回より多少落ちると思いますが  
見てくれている人は今後とも宜しく願います。

予定では1〜2日で1話投稿ペースで行く予定です。  
長くても3日はかけないつもりです。

しかし、次の魔法世界編は原作ほど長くないようにしますが  
話の整合性を取るためストックを数話作ってから投稿  
ということになる可能性もあるので、  
その際は更新予定日をここや活動報告に記載しておきます。

神様から頼まれたお仕事。 その45

慌ただしかった学園祭も終わり、今日は振替休日。

学園内では後片付けが行なわれ、

超の攻撃により破壊された一部の建物などの修繕が

急ピッチで進み、徐々に日常の学園へと戻っていく。

本来なら私やエヴァも後片付けに駆り出されるはずだが

強制的に病気休養扱いにされ、

私はエヴァにより 家に軟禁状態にされていた。

「お茶のおかわりは要りますか？ お嬢様。」

「ん、今はいいぞ。」

それよりも小腹が空いた、何か甘いものを頼む。」

現在 家では椅子に座り読書をしているエヴァを

武道大会で刹那さんが着ていたのと同じデザインのマイド服を着た私が

エヴァのメイドとして仕えていた。

「お嬢様、焼き菓子を御用意致しました。」

「ん、私が自分で食べると指が汚れて本を読むのに邪魔だ。

食べさせてくれ。」

「かしこまりました。」

私は少し前に焼いたばかりのマドレーヌを一口サイズに切り分け

エヴァの口へと運ぶ、エヴァもそれを黙って食べながら読書が続けている。

そもそも何故こんな状況になったのか？

昨晚、超との出来事が終わり家に帰宅、

その後 エヴァや千雨、千草、夕映と私で別荘に行き

1週間かけて説教、皆のご機嫌取り、

夕映を除いた3人との大人のお付き合いが行なわれた。

夕映以外はそれで済んだのだが、

自分だけ契約してないことに以前から不満を抱えていた夕映が

私達が夜な夜な密会を繰り返したことが発覚、

エヴァのシゴキ等の不満もあり ここに来て爆発、仮契約を迫られ

私が男の娘だと どう話したものが悩んだ結果、

後日二人つきりで話しあう約束をすることになってしまった。

ようやく釈放されたが、エヴァとの以前からの約束により

休日中は茶々丸の代わりに私がエヴァのメイドになることになってしまった。

しばらくエヴァの食事を手伝っていると

来客を知らせるベルが鳴ったので 私が応対に出た。

「はい、どなたでしょうか？」

「・・・早速 私があげた服を着て楽しんでいるようだネ。」

「こんにちわ、ソプラノさん。」

「ソプラノ様、ただいま戻りました。」

「「こんにちわ。」」

「超に葉加瀬いらっしやい、茶々・・・丸？ おかえり〜、少し変わったね。」

そっちの二人は・・・例の妹さん？」

「丁度いい機会だったから茶々丸を新ボディに変更したんだヨ。」

性能自体は以前より少し上がったただけだド

人工皮膚と人工筋肉を大量に使用したことで

以前より繊細でなめらかな動きが出来るようになり

より人間に近づいたヨ、それに胸も柔らかかいヨ」

「・・・す、素晴らしい。最高だよ茶々丸！」

「お褒めに預かり光栄です。」 / /

「貴女はどこに感動したんですか・・・」

知りたいような知りたくないような……。」

「後こっちの二人が昨日話した茶々丸の妹ネ。」

「個体名はまだ無いからそつちで着けてやって欲しいネ。」

「「これから よろしくお願いします、ソプラノ様。」」

「よろしく。 とりあえず立ち話も悪いから入ってよ。」

「今はエヴァしかないけど。」

「それじゃあ お邪魔するネ。」

「「「おじゃまします。」」」 「ただいま戻りました。」

超達を連れエヴァのいる居間へと移動する。

「ん？ 何だ大人数で騒がしい……茶々丸帰ったのか。」

「ただいま戻りました、マスター。」

「うむ、お前は今日は休んでいる。」

「今は給仕はソプラノがやる事になっている。」

「？ どういう事でしょうか？」



「・・・まあ、その・・・罰ゲームみたいなものだと思ってもらえれば。」

「喋ってないで客がきたなら茶の用意くらいしろ、ソプラノ。」

「はい お嬢様、ただいま。」

「超鈴音、私達はどうしましょう、」

お手伝いしたほうがよろしいでしょうか?」「」

「今はエヴァンジェリンとソプラノの好きなようにさせるネ。」

「かしこまりました。」

「では、私は一度着替えてきます。」

超と葉加瀬はここでお待ちを。」

私が皆のお茶を用意している間に茶々丸が着替えを済ませ降りてくる。

テーブルに全員のお茶とお茶菓子を並べた所で話が始まった。

「それで、その二人は例の茶々丸の妹か?」

「そうだヨ、まだ個体名は決めてないのでそっちなで名前を決めてや  
って欲しいネ。」

あと茶々丸がエヴァンジェリンをマスター登録しているから

こっちの二人はソプラノをマスターに登録しようと思ってるけど

問題ないかな？」

「別に構わんぞ、私にはチャチャゼロと茶々丸がいるからな、

そう考えれば人数も合うだろうしな。

名前は・・・どうする？ 私が付けるより姉s・・・ソプラノがつけた方がいいのか？」

「そうですね、お嬢様に任せておくと

茶々零 とか茶々ー とかつけられそうですねから。」

「何かマズイのか？」

(マズイヨ・・・) (それはちょっと・・・) (無いよね。)

( )( )( )( )

茶々姉妹にはよく分かっていないようだ。

「そうですね・・・お茶繋がりで、ラトナとピュラでどうですか？」

つなげてラトナピュラでたしか紅茶の名前になります。

双子だし、姉も 茶々 っつついてるくらいなのでいいかなと。」

「・・・まあ、いいんじゃないかな？ 茶々零よりは。」

「そうですね、茶々一よりは。」

「・・・おい、言いたいことがあるならはつきり言ってみる。」

「何も ありません（ないネ）。」「」

「じゃあ向かって右のほうの・・・二人共そっくり過ぎて分かりにくいね、」

後で色違いのヘアバンドか何かあげるから着けてね。

右のほうの貴女がラトナで左の貴女がピュラね。」

「「かしこまりました。」「」

「 个体識別名 ラトナ 登録しました。」

「 个体識別名 ピュラ 登録しました。」

「「ソプラノ・マクダウエルをマスターに登録しました。」「」

「これからよろしくね。」

あ、エヴァをセカンドマスターとして登録しておいてね。

茶々丸のセカンドマスターが私だから。」

「了解しました。」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルをセカンドマスターに登録しました。」

「この二人も茶々丸と同じ人工筋肉を使用した新型ボディだが

茶々丸と違って低年齢仕様になってるネ。

戦闘に関しては茶々丸のデータを入力してあるが

ボディに慣れて無いのでよかったですら戦闘訓練もつけてやって欲しいネ。」

「OK」 茶々丸みたいな個人戦じゃなくて集団での戦闘を

教えてみるのもいいかもね、丁度家にはスライム娘達がいるから

千草も交えて一緒に訓練させてみようかな。」

「よろしく頼むヨ。」

この二人についてはこれでいいかな。」

名前をつけて、マスター登録をした二人は私の背後に移動し控えるように佇む。

「そつだ超鈴音、貴様が使っている呪紋があつただろうアレのデータは持っているのか？」

「持っているけど、アレはエヴァンジェリンにはいらぬんじやないか？」

それにお薦めしないヨ。」

「私じゃなくて綾瀬だ、綾瀬用に改良して使えるようなら

使わせようと思つてな。」

「ふむ・・・私もその作業に参加していいかな？」

無茶されても困るし、興味もあるネ。」

「こちらとしては望むところだ、

科学知識に関しては貴様の方が上だからな。」

「ならば、明日にでも資料を持ってくるヨ。」

あと綾瀬サンの血液か体液のサンプルがあればいいネ。」

「わかった、用意しておこう。」

こうして夕映のいない所で彼女の強化計画は着々と進行していく。

エヴァはなかなか人を懐に入れたいけど入れたら最後、

どこまでも面倒見がいいからな・・・まあ、鞭8 飴2の割合だけど。

「お嬢様、夕映はいいけど千雨の方はどうするんですか？」

あんまり夕映ばかりかまってるとうねてしまいますよ。」

「ないな、ありえん、アイツが拗ねるとしたら姉s、ソプラノが絡むことくらいだ。」

さっきから何度か私の事をいつものように呼ばうと間違えている。

もう面倒ならこのプレイを止めて普通に話したらいいのに・・・

「だが・・・そうだな、いい機会かもしれん。」

そろそろ千雨に私の間の魔法を覚えさせるか。」

「お嬢様は以前 千雨さんには使えるけど才能はないと

仰っていませんでしたか？」

「確かに、千雨に才能はない。

使うだけの闇の属性はなんとかあるが器がないからな、

取り込めるのはアイツの得意な雷属性だけだし

千雨の魔力の大きさから言っても中級の雷の暴風でも取り込むのが  
やっただろう。」

「それでも覚えさせるんですか？」

「そうだ、千雨の長所はスピードだ。

アイツが雷の暴風を取り込めばスピードがさらに強化されるし

雷属性の威力も上がるから千雨オリジナルの麻痺の射手も

かなりの時間相手を拘束できるはずだし、砲撃の詠唱も加速するし  
な。

十分覚えるだけの価値はある。」

「そういう事ですか。

でも闇に取り込まれないように気をつけてあげてくださいね。」

「まあ、そこは大丈夫だろう。」

才能がないのが逆に幸いているから

闇に取り込まれるまではいかないだろう、一応用心はしておくがな。

「

「それで思い出しましたが、ネギ先生の方はどうします？」

私としては覚えさせてあげたいんですが。」

「ぼーやか・・・そうだな　超鈴音。」

「ん？　なんだネ。」

「貴様確かぼーやに修行をつけてやって欲しいと

ジジイに頼まれていたな、一度本気でぼーやと戦え。」

「は？　私が力？」

「そうだ、時計や例の銃弾無しの超に勝てたならばぼーやの習得用の巻物を用意しよう。」

「何で私がそんなことをしなくちゃいけないのヨ・・・。」

「物のついでだ、それに学園祭の事件でぼーや達も思うところがあるだろう。」

超と一騎打ちで白黒付ければぼーや達もすつきりするだろうっしな。」

「はあ、そういう事なら仕方が無い・・・の力ナ？」



「超さん私達はこれからも学園にいるんですから

ネギ先生達と揉めたままというのはあまりよくないですよ。」

「わかったヨ、やるよ！ やればいいんでシヨ・・・」

その後、学園長達と今朝方話したことや

茶々丸やラトナとピユラのボディの仕様、

学園祭での思い出や、これからの生活のコトなどを話し

穏やかな時間を皆で過ごした。

陽が沈み、涼しい風が流れだした頃、

話も一段落し、超と葉加瀬は女子寮へ帰宅、

茶々丸とラトナ、ピユラが夕食の支度を始め、

私はエヴァの傍らでエヴァの相手をしていた。

超達が帰りしばらくした後、学園での作業が終わり、

本屋ちゃんがまだ帰らないということ、

しばらく家に止まることにした千雨と夕映、それに私の代わりに学園祭の片付けを手伝ってきた千草の3人が帰ってきた。

「ただいま。」 「今日から暫くお世話になります。」

「只今戻りましたえ。」

「お帰りなさいませ。」

「ん。」 「」「おかえりなさい。」「」

「なんだ、先輩まだやってたのか……って、誰この娘達？」

「茶々丸さんにそっくりですね。」

「せやね〜、茶々丸はんの妹さん？」

「この娘達は今日から家で暮らすことになった茶々丸の妹達だよ。」

さあ、二人共挨拶して。」

「はじめまして、ラトナと申します。」

「これからよろしく願います。」

「はじめまして、ピユラと申します。」

「これからよろしく願います。」

「ん？ お前達学園祭の時この二人と戦わなかったのか？」

「え？ 私は知らないぞエヴァ、あの時いたのか？」

「私も知らないです、千草さんは？」

「ウチもしらへんなあ。」

「私達は学園の魔法使いを処理するよう命令されていたので

この方々は対象には入っていませんでした。」

「そういうことが。」

この三人と、あとスライム娘達が3人がいるけど

皆私達の家族みたいなものだから仲良くしてね。」

「了解しました、友好対象に登録します。」

「あれ？ そういえばチャチャゼロは？」

「ココダゼ。」

私が今日姿の見えないチャチャゼロを探していたら

なぜか夕映のカバンから出てきた。

「そうです！ エヴァンジェリンさんチャチャゼロに言ってやってください！

この子、事あるごとに私と勝負しようとか言い出すんですよ！

学校で大変でしたよ・・・」

「ユエガ オレトヒトシヨウブヤレバ スムンダヨ。」

「チャチャゼロ少し我慢しろ、

今綾瀬の為に超の呪紋を用意している所だ。

それが用意できたらお前に訓練の相手を頼もう。

これが成功したら綾瀬の火力が上がるからな、お前もそのほうが楽しめるだろう。」

「オ、ゴシユジン ハナシガワカルジャーネーカ」

「ちょっと！ エヴァンジェリンさんヤメテ欲しいですよ！」 1

11

夕映とチャチャゼロ、エヴァが3人で微笑ましい言い合いを始める。

そんな折、千草が妙な表情で私とラトナ、ピユラを見つめている。

「千草？　どうかしたの？」

「……いえ、そのお二人、旦那さんとはどういつく関係やるか？」

「この娘達？」

「私達はソプラノ様の従者として使えております。」

「……なん……やて……？」 #

「ヒイツ!？」

(千草、その顔は怖いって……) 1111

「お二人さん、旦那さんの従者はウチやで？」

「承知しております。」

登録データでは天ヶ崎千草さんはソプラノ様の従者として登録されております。」

「・・・え、いや　そういう事や無くて、

ウチが旦那さんの一番の従者やっていうことなんやけど・・・」

「了解しました。」

天ヶ崎千草さんをソプラノ様の一番の従者とデータの書きをします。」

「あ・・・ありがとうございます・・・。」

彼女達のあまりに素直な様子に、どう対応していいか混乱し

逆に申し訳ない気分になったのか、二人と私を交互に見ては

バツの悪そうにする千草。

「ソプラノ様、今後私達は千草さんの指揮下に入ればよろしいでしょうか？」

「え、あ・・・うん　そうだね、あまり無茶な内容だったら無視してもいいけど」

家事や私の世話なんかで困ったら彼女に相談して。」

「かしこまりました。」

「・・・なんや、毒気を抜かれてしもうたな。」

「彼女達はまだ生まれたばかりで、

茶々丸みたいな自我が生まれてないんだよ。

ここに一緒にいたら茶々丸みたいに自我が生まれるんじゃないか？

ということでは私が預かることになったんだ。

千草も仲良くしてあげてね。」

「・・・わかりました。」

ウチが立派な旦那さんの従者に育て上げますから まかしておくれやす！」

「いや、そういう事じゃないんだけど・・・まあいいか。」

新しく超から預かった二人の紹介も終え、

夕食の準備をし、スライム娘達も呼んで食事。

私は食事中もエヴァの給仕をやらされたが

品が悪かったがラトナとピュラが

二人がかりで私の口に食事を詰め込んできたので食事自体は食べる  
ことができた。

……皆の非難の視線が痛かったが。

食後に皆でお茶を楽しんだ後、

早い段階でラトナとピユラ 二人の性能を確認したいと言うエヴァ  
の希望で

皆で別荘に入り、模擬戦をすることとなった。

何戦かしてみた結果、個人の戦闘能力はかなり高いものの

やはり茶々丸と一対一でやると単純なリーチ差で

勝つことが難しくなった。

しかしコンビを組ませて戦ってみた所、無線での完全な同期のとれ  
た動きと

お互いの死角をフォローする戦い方で、

近接戦闘ならチャチャゼロといい勝負が出来ていた。

千草と二人を組ませ、千草は後衛で砲台兼補助、二人で前衛



と 言うフォーメーションで戦えば多少の格上でも相手出来るだろう。

超と葉加瀬が残っていることで茶々丸や妹たちの兵器開発も順調になるし、

私の計画にも超は必須だ。

千雨はエヴァから闇の魔法をならえば単独での生存率は跳ね上がるし、

千草には二人が着いてアーティファクトがあれば大丈夫だろう。

エヴァも好きなように動ける・・・となると残るは夕映だ。

エヴァが夕映用に超の呪紋を改良すると言っていたから

火力は着くだろう、チャチャゼロ達がシゴいているから

並の魔法使いじゃ相手にもならない、スライム娘達もいる・・・

が、彼女には持続力が無い。

瞬間火力は上がるが魔法世界で一人放り出された時、

スライム娘達を召喚すれば短時間はいいが、持久戦になるとマズイ。

夕映から頼まれているように私と仮契約をすれば

問題は解決されるが、そのために夕映と契約を結ぶのもどうかと思う。

彼女は私のことを知らないわけだし……

天候が制御されたこの魔法球の月明かりの下、以前エヴァが破壊した塔の上で

そんなことを考えていると、不意に背後から声をかけられた。

「ソプラノ……どうしたんですか？」

「あ、夕映か……何でも無いよ。」

少し考え事を……ね。」

「そうですね。」

夕映がゆっくりと私のすぐ横まで歩いて着て

私と一緒に月を見上げる。

「……この夜空は何時見ても綺麗ですね。」

「……そうだね。」

「この夜空はエヴァが昔見た最高の夜空を再現してるって言ったな。」

「そうなんですか？」

「うん……多分……あの時の夜空だろうね。」

「あの時……ですか……。」

「どうしたの　夕映？　急に元気がなくなったみたいけど。」

「何でも無いですよ……ただ、エヴァンジェリンさんとソプラノには」

私の知らない思い出があるんだな……と思っただけです。」

「……私達もそれなりに長く生きてるからね。」

夕映ともこれからたくさん思い出が作れるよ。」

「そうですね……」

私と夕映、月明かりの下、私達二人を穏やかな風が撫でていく。

白に咲いている花壇からだろうか？

風から花の匂いがする。

私と夕映はしばらくゆったりとした時間をすごす。

「・・・ソプラノ、前に私が頼んだ仮契約の話、覚えていますか？」

「覚えてるよ、前って言ったって現実世界の時間で言ったら1日もたつてないよ。」

「そうでしたね・・・ソプラノはあの時、まだ私に話してないことがあるから

仮契約は待つて欲しい・・・そう言っていました、

今・・・話してくれませんか？

どんなことでも・・・ソプラノのことだったら受け止めるですよ。」

夕映は私の手を握り、私の目を見つめて答えを待つ。

「そんなに重い話じゃないんだよ。

ただ、ビックリするかな？位の話だよ・・・」

「だったら・・・話してくれませんか？」

エヴァンジェリンさんも、千雨さんも千草さんも、他の皆も知ってるんですよね？」

「……どうしてそう思うの？」

「なんとなくですよ……そうですね、女の勘って奴ですよ」

「女の勘……か。」

「……嘘です。」

ソプラノの態度でわかるんですよ、

皆には遠慮無く接しているように見えますが、こっぴど……」

夕映が握った私の手を取り自分の腕と絡ませ、腕を組むようにする。

「ほら、少し緊張してるです。」

「……そっか、私は緊張してるのか。」

「話して……くれませんか？」

「……そんなに神妙な顔しなくていいよ。」

ただね、私は 男の娘 だっていうだけだよ。」

「ソプラノが男・・・？ 性同一性障害とか言う奴ですか？」

「ち、違うよ。ただ私が男だ・・・て言ったら皆びっくりするじゃない？」

それが面白いからやってるだけだよ、普通に女の子が好きだしね。」

「は？・・・そんなくだらない事だったんですか？」

夕映の力が一気に抜け、あきれ果てたような顔で私を見る。」

「・・・あ、あはは。」 1111

「・・・で、なんでそれを知ってるか知らないかで

仮契約ができないという話になるんですか？」 #

「これ自体はたいしたことないんだけど・・・ほら、

夕映が私のことをどう思ってくれてるのかなって思いました。

自惚れてるつもりはないけど、あんなことがあったじゃない。

エヴァの幻術・・・」

「・・・ありましたね。」

「だからさ、私のこと 大なり小なり好きでいてくれるとは思っ

てただけけど・・・

そうになると性別って大事じゃない？

だからさ、夕映に私のこと教えてそれでも仮契約したいなら・・・  
って思ってた。」

「そうですね・・・私も一時期 本っ気で悩みましたよ。」 #

夕映の声に怒気が含まれる・・・ヤバイ、怒ってるかも。

「それでも・・・それでもソプラノが好きだったんですよ。」 / /

「・・・そっか。」 / /

夕映が私の腕を組む力がすこし増して、私の腕を抱ようになる。

「ソプラノが男とか女とか、どうでもいいんですよ。」

ソプラノがソプラノなら・・・。」

「・・・うん。」

塔の上なので長く当たっていると風が肌寒い、

しかしその分余計に密着する部分からお互いの体温を感じる。

「・・・それで？ どうするんですか？

仮契約、してくれるんですか？」

「あ、それね。 夕映がいいならいいよ。

方法はどうする？ 宝石使うとか、エヴァに術式組んで貰って血でも使う？」

「ソプラノは男の娘で女の子が好きなんですよね？

私が告白したんだから、ここは気を聞かせてくれてもいいんじゃないんですか？」 / /

「え・・・いいの？ その方法で。」 / /

「そんなこといちいち聞き返すんじゃないです!!

こっちも恥ずかしいんですから、男なら黙ってリードするもんです!!

ほら！ これ使ってください！」 / / /

「イ、イエス・サー！」

夕映は私の手に前にどこかで見た球・・・



前に超が用意した簡易仮契約の魔法陣が使える球を私に押し付ける。

その球をそのまま地面に落とすと、足元に仮契約の魔法陣が形成される。

「夕映……」

「……あ、待って、待ってください！」

私ソプラノからまだ気持ちを聞いてないですよ！」 / /

「……男は黙って態度で示そうかと思います。」 / /

「ダメです、こういう事は口にして欲しいものなんです！」 / /

「……ごめんね、夕映だけを愛してるとは言えない。

でも、これからもずっと……夕映が好き、愛してる。」 / /

「……サイテーです……こういう時は嘘でも私だけって言うて欲しいです……」

でも、しょうがないです。

……そんなソプラノが 私も好きですよ……」 / /

「夕映……」

「ソプラノ……」

「……ん…………ちゅ。」

「……っ…………ちゅ。」

風から花の香りがする 月夜の下で 夕映の初めてのキスを貰い

私と夕映は仮契約をした。

「…………ん。」

「…………は……」

「…………ち……ま……」

「……お粗末さまです……全く、もう少し気のきいたことを  
言って欲しかったです。」 / /

「ここで夕映にお知らせがあります。」

「……なんですか、これ以上私をサイテーな目に合わせるつもり  
ですか？」

「人それぞれだと思いますが……夕映は私と仮契約を結んだこと  
により

……限定的に不老となってしまうました。」

(不死については話さないでおいたほうがいいだろうな……)

「……は？」

「不老です。もう年を取りません、契約を解除すれば元に戻るけ  
どね。」

「……もう、私は年を取らないんですか？」

「YES、千草さんは大喜びでした。」

千雨はそれなりに喜んでくれました。

エヴァは……もともと吸血鬼なので変わりませんが。」

「千草さんは……まあ、そうですね。」

「私は……（ペタペタ）……微妙です。」

でも、良いです……少なくとも寿命が原因で

ソプラノを一人置いていくことはなくなりましたから。

そう考えれば結果オーライです。」

「そっか……ありがとね、夕映。」 / /

「はい。」 / /

神様から頼まれたお仕事。

その45（後書き）

45話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その46

昨晚、夕映と仮契約を結び、

その夜はそのまま別々に分かれて眠った。

別荘から出た翌朝、居間で私に会うなり顔を真赤にして挙動不審な夕映を

エヴァが見逃すはずもなく詰問され、

あっさり私と仮契約を結んだことを白状させられた。

「姉s・・・ソプラノは私が目を離すとすぐこれだ・・・」

(エヴァ・・・振替休日中はずっとやるつもりなんだね、お嬢様と召使プレイ。)

「隠すつもりはありませんでしたが、一言 言うべきでした。」

O r z

「・・・とうとう綾瀬もか、もういつそ先輩は別荘に監禁しておくか？」

「鎖で繋いでおきましょか？」

千雨と千草が恐ろしいことを言い出す、誰も止めようとする人はいない。

エヴァ家の良心、茶々丸でさえ私達を無視してラトナとピュラに

台所で調理器具の説明をしている・・・

気のせいかな茶々丸が怒っているようにも見える。

「こんなことが後3回も続くのか？ まったく・・・

おい 綾瀬夕映、今日の修行は覚悟しておけよ。

特別コースでみっちり鍛えてやるからな！」

夕映が助けを求めようと周りを見回すが、

誰も目を合わせようとしない。

唯一私だけが視線を合わせた、両手を合わせ謝罪。

夕映の無事を祈ることしかできなかった。

「・・・もう、次の朝日は拝めないかも知れないんですね。」  
11 1

「夕映、不甲斐ない私を許してね・・・」

「ワケの分からんことを言うなバカ共が・・・それで？」

夕映に何かアーティファクトは出たのか？」

「あ、そういえば出ましたよ。」

これがカードになります。」

私はエヴァと夕映にカードを渡し、確認してもらった。

カードには制服姿で黒い三角帽子に黒のマントを羽織った

夕映の姿が描かれているが、

何故が赤い糸が巻かれた細長い木製の糸巻き、

どこかの国でボビンとか言っていただろうか？

そんな不釣合いな物を持っている。

「何で格好はよく見る魔法使いなのにボビンなんだ？」

これはレースを編む時に使う奴だろ、確か。」



「さあ？ 私にもちよつと・・・夕映は心当たりある？」

「無いですね、とりあえず出してみますか？」

「そうだな、出してみる。呪文は分かっているな？」

「大丈夫です・・・それでは、アデアット。」

夕映の手元が光りだし、絵に書かれていた糸巻きが出てくる。

巻かれている赤い糸から微弱な魔力を感じるが

特にそれ以外では何も無いようだ。

「どうだ夕映、何かわかるか？」

「糸から何かあったかい感じはしますが、それ以外は特に何もありませんね。」

「ふむ、少し調べてみるか。」

研究室にいくぞ、付いて来い夕映。」

「はいです。」

「あ、私も一緒にします。」

「ソプラノは朝食の準備があるだろう、私の朝食でも用意している。

久しぶりにソプラノの焼いたフレンチトーストが食べたい。」

「かしこまりました、お嬢様。」

「オレノブンモ ヤケヨ。」

「OK。」

エヴァは夕映を連れて研究室へ行き、私は台所で調理を始め、

千雨は居間でスライム娘達に絡まれながらのんびりと過ごし、

千草は私の手伝いに来たようだ。

「しかし何でフレンチトーストなんやる？」

「私も 今までマスターからその料理を指定されたことはありません。ん。」

「あゝこれね、昔 私が良く朝食に作って出してたんだよ。

簡単で美味しいからね。」

「思い出の味 言っちゃつなんやるか。」

「そうかもね、連日で続いた時はさすがに嫌がったけど、

今でも誰もいない時にたまに作れって頼まれるよ。」

「ほな、ウチの分も焼いてくれへんかな？」

「ん、いいよー。 ついでだから今日は皆の分も私が焼くよ。」

茶々丸達はサラダとスープを作ってたて。」

「「「わかりました。「「「はいな。」

その後皆で朝食を作る、ラトナとピユラが私に張り付き

調理の様子を見て作り方を覚えようとしているようだ。

朝食が出来る頃にはエヴァと夕映も居間に戻り、

皆で朝食を食べながら調査の結果を聞くことにした。

「うむ、久しぶりに食べるな、姉様のフレンチトーストは。」

「ソプラノ、じゃないのか？ エヴァ。」

「……朝食くらい黙って食べ。」 / /

千雨がエヴァをからかう、そんな様子を見て皆も苦笑したりして

朝食のひとつときを楽しむ。

「それでお嬢様、夕映のアーティファクトのことは何か分かりましたか？」

「ああ、大体のことはな、なかなかにふざけた道具のようだ。」

「旦那さんの仮契約でできた道具やからな」

「変なもんやとは思いますが。」

「どづいご事です？ 千草さん。」

「・・・その喋り方がいい加減止めまへんか？」

調子が狂いますわ。」

「エヴァお嬢様に言ってくださいな。」

「振替休日の間はずっとその口調だ。」

「ほんまかいな・・・」

「ソプラノの話はいいとして、夕映のアーティファクトだが、

まずこの糸だが並のことでは切れん、

ハサミやナイフ、軽く魔法で切ってみようとしたが切れなかった。」

「へー こんな細い糸がそんなに丈夫なのか。」

「妙な思念を感じたから調べてみたが……」

非常にムカつく話ではあるが、

この糸の強度は夕映のソプラノに対する感情が関係して変化するよ  
うだ。」

「「「……」」」 #

千雨と千草、茶々丸の周囲の温度が一気に下がる。

「それ以外はこの糸自体は普通の糸だ。」

ボビン、糸巻きの方は魔法発動体として使える、

通常の杖より少し性能が高い程度だ、夕映用に調整されてると言え  
るだろう。

さて、問題はここからだ。」

「まだあるのか？」

「これが本当の意味でのこのアーティファクトの能力だろう。」

この糸を使って円を組むと 円に沿って球状に魔力と物理両方の障

壁が貼られる。

その強度は夕映が出せる最大の強度に比例している。」

「へー せやったら最高の障壁を張りながら攻撃や呪いも使える言うことですか？」

「確かにそれもできるが、そんなものじゃない。

この障壁の内部では弱い回復効果があつて、擦り傷程度なら数秒で治る。

そしてこの障壁の強度はな、障壁内部の者がさらに障壁を展開しようとするとうとすると

糸で貼った障壁の強度にプラスされる。

つまり 夕映が糸の障壁の中で自分も障壁を全力で使えば

強度が2倍になるということだ。」

「やったじゃないか、綾瀬が欲しがってた防御と回復、一気に手に入つたな。」

「はい！ これがあれば皆を、ソプラノを守ることが出来るですよ！」

「せやけど夕映はんが貼れる障壁やったら2倍になつても

高畑はんや学園長はんクラスが本気になつたら破られるんちゃいま

す？」

「そう思うだろうか？ 私も当初そう思ってたいたことではないと思っ  
ていたんだが・・・」

この障壁はな、内部の者が展開した障壁なら

誰だろうと何人だろうと効果が上乗せされる。

つまり通常なら夕映とスライム娘3人分、千雨や千草が入ればその  
分も

私が入れば当然その分も上乗せされる。

糸の長さも数十メートルはあるからな、結構な人数が入れることに  
なるぞ。」

「凄いいじゃないですか夕映さん、

何人かで防御に徹したら凄いい障壁になりますね。」

「ありがとうございます・・・でも、そのしゃべりはヤメテ欲しいです。」

「実は後でもう一つ実験したいことがある、

ソプラノが入って例の楯、あれを使った場合どうなるのか試してみ  
たい。

私の想像通りなら・・・最凶の障壁になるだろうな。」

「先輩の楯って……アレか。」

「あないな強度で障壁貼られたら 誰の攻撃も効かなくなりますえ。」

「私とソプラノが組めば、誰にも傷つけられませんよ。」

「……なあ エヴァ、今日の綾瀬の訓練、私も参加するよ。」

「……ウチも参加します、夕映はんにはすこしお灸が必要みたいやからな。」

「マスター、私と姉さん、妹達も参加します。」

「ヒイツ!?!」 1111

今ここに夕映包囲網が完成してしまった……

「そ、ソプラノも私のサポートで参加してくれますよね!?!?」  
1111

「だめだ、ソプラノは千草や茶々丸達が抜けた分の家事があるからな。」

「……そ、そんなあ。」 1111orz

こうして私の今日の労働と、夕映の過酷な修行が決定した。



朝食後、夕映は皆に引きずられて地下の別荘へ行き、

残された私は午前中の時間すべてを使って家の家事を済ませていた。

昼、皆と一緒に現れた夕映は憔悴しきった様子で

居間のソファーに倒れこみ、その日 夜まで起きなかったという。

昼食を皆ですませた後、エヴァが出かけるというので私と茶々丸が

付いて行こうとした所、私だけでいいと言うエヴァに

茶々丸が不満そうな気配を発するが、

エヴァがなにやら耳打ちした後に納得したようでおとなしく引き下がったので

私とエヴァ 二人っきりで外出することになった。

普段なら並んで手をつなぐなりして歩くところだが

振替休日中 私はエヴァのメイドなので一歩下がった位置で  
エヴァに着いて歩いていく。

学園内では昨日一日である程度学園祭の片付けも進んでいるようで  
大きい展示物などがいくつか残っているが  
ほとんどの物は順調に片付けられていた。

都市部で何店か周り買い物をした後、

私とエヴァは少し遠回りしながら超包子に向かうことにした。

「お嬢様、どうしてわざわざ遠回りしていくんですか？」

「ん、一応自分の目でも確認しておこうと思ってな。」

学園祭3日目にやった例の魔法が正常に効いてるかどうかな。」

「千雨さんと千草さんが 一応昨日確認していましたね。」

何でもネギ先生達は観光に着ていた地元の貴族一家の

案内と警備、通訳を兼ねた結果気に入られて

自国に招待されたって話らしいですよ。」

「ククツ、ジジイも次から次へと考えるものだな。

来週ばーや達が戻って来た時が楽しみだ。」

「あー、エバちゃんにソプラノちゃん。」

「ん？ 佐々木に・・・何だ貴様ら。」

エヴァと一緒に歩いていると背後から

佐々木さんと明石さん、大河内さんの3人がやってきた。

「こんにちわ、皆様。」

「「こんにちわ。」「こ、こんにちわ。」

「なんか今日はソプラノちゃんすごい格好してるね。」

「はい ちょっとゲームをしたら負けてしまいました、

振替休日中は私がエヴァのメイドさんをやることになってしまったんです。」

「何その罰ゲーム、面白そうー 今度やるときは私達も混ぜてね」

「はい、その時はお誘いしますね。」

「・・・で、貴様らは いったい何のようなんだ？」

「あ、そうそう、超りん見なかった？」

私達探してるんだけど、店の方にいなかったんだよね、

携帯もつながらないみたいだし。」

「超か？ 昨日家に来たが今日は見てないな。」

「私も今日はまだ見てないですね。」

「そうなんだ、見つけたら私達がさがしてたって伝えておいてよ。」

「かしこまりました。」

でも、いったいどういった理由で超さんを探しているんですか？」

「いや ちょっと学園祭で張り切り過ぎちゃってさ・・・」

お小遣いがピンチなんだよね、

だから超りんの所でバイト募集してないかと思ってね。」

「皆さんそうなんですか？」

「アハハ・・・」 「お、同じく・・・」

「わかりました、会ったら伝えておきますね。」

「お願いね、それにしても話し方や態度までメイドさんなんだ。」

「エヴァが徹底してますので・・・」 / /

「ハハハ、ソプラノさんも頑張ってるね、じゃ〜ね。」

「また学校だね。」 「・・・またね。」

3人は私達が向かう方向とは違う方向に駆けて行った。

「・・・ちゃんと効いてるみたいだね。」

「そうだな・・・行くぞソプラノ、しっかり私に付いて来いよ。」

「かしこまりました、エヴァお嬢様」

その後二人で超包子に歩いて行き、

遠目に少し見えたところで歩みを遅くして様子を伺ってみたが

特に心配する様子もなく、いつも通りの営業光景だった。

「こんにちわ、葉加瀬、五月さん。」

「邪魔するぞ。」

「あ、二人共いらっしやい。」

いらっしやいませ。

あ、その服早速着てるんですか？

「ええ、やむを得ない事情で早速・・・」

・・・な、なんか詳しく聞かない方がよさそうですね。

注文は何にしますか？

「軽めで甘いものを頼む。」

かしこまりました。

五月さんは早速調理に取り掛かる。

「そう言えば、超さんはいらっしやいますか？」

「超さん、さつき戻って来たよ。」

今着替えてるから もうすぐ来ますよ。」

「出てきたら 私達のところに来るように伝えてくれ。」

「はい、わかりました。」

「ああ、そうだ、ハカセお前も一緒だぞ。」

「？ わかりました。」

しばらくすると注文した品を持って超と葉加瀬がきた。

「ご注文の飲茶セットネ。」

あとソプラノには注文のウエイトレス2人ネ」

「わゝ、お持ち帰りは出来るんですか？」

「そこは交渉次第ダヨ。」

「だ、ダメに決まってるじゃないですか!？」 / /

「馬鹿なことをやってないで座れ。」

超と葉加瀬が対面の席に座った所で

エヴァが認識阻害魔法を使い 話を始める。

「今日はどうしたネ 二人だけで。」

「別に二人だけっていうのに意味はないですよ。」

あ、そうだ、佐々木さんと明石さん大河内さんが

バイトしたいって言ってましたよ。」

「おお、丁度古がないから人手に困ってたところヨ。」

後で早速連絡してみるネ。」

「その話はどうでもいいとして、超にハカセ、今お前達暇だろう?」

「暇というか・・・店の営業は大忙しだヨ。」

「私もそれほどでは・・・個人の研究の時間も取れるようになりましたし。」

「だが、前ほどではあるまい。」

実はな姉s・・・ソプラノとも前から話していたのだが

茶々丸とついでに双子姉妹の装備の件でな。

追加武装を作っちゃって欲しい。」

(ラトナとピュラは双子設定なんだ・・・)



「ふむ、それは別にいいんだが目的が解らないとただ漠然と作れと言われても困るネ。」

「ソプラノ、話していいな？」

「いいですよ。」

わざわざ私に確認を取るエヴァの姿に超と葉加瀬は少し緊張した様子になる。

「実は魔法世界で少し暴れる可能性がある。」

「エヴァお嬢様、その言い方だと誤解を招きます。」

概要だけ話しますと、近々魔法世界で

大きな戦闘が行われる可能性があります、

その際に今の火力だと心もとないので少し強化して欲しいんです。」

「その大きな戦いというのはどう言ったことネ？」

「なんと云いますか・・・政情不安を突いたテロみたいな物です。」

「しかし、別に こっち に居ればあまり関係ないんじゃないの力ナ？」

「そこは止事無き事情がありまして。」

「・・・私達には聞かせられない内容なのか？」

「難しい所です。」

「へえ〜・・・女の唇を無理やり奪って 口説いて その女に隠し  
事力。」

「ぶふうっ!」

「きゃー! 何するんですか! 服にかかっちゃいましたよ!」

「うわっ 汚いぞ姉様!？」

「先ず大惨事になったテーブルを拭く。」

「えー・・・話を戻しまして、そうですね・・・」

超さんは 完全なる世界 って単語に聞き覚えはありますか?」

「・・・アイツらカ。」

「? 超さんは何か知ってるんですか?」

「超さんは知ってるようですね。」

「・・・そうか・・・この時期、あの事件・・・確かにテロが起こるネ。」

それにしても私でも記録で知ってるだけなのに、なぜソプラノガ？」

「その辺は秘密なのです。」

そういう事で関係者にはある程度

自衛のための戦力が必要なんですよ。」

「????？」

「わかったか超鈴音。」

今 茶々丸達に何が必要か。」

「ああ、魔法世界のどの地域でも

単独で戦い、帰還できるだけの性能力・・・それに対軍用の装備力。」

「超さんの知ってる知識だと やはりネギ先生はその時期に行きますか？」

「行くネ、この世界のネギ坊主が行くかどうかは

まだはつきり断言できないが、備えは必要ネ。」

・・・ちよつと前まで私が計画を完遂させることしか考えてなかつ

だから

茶々丸には一応の用意しかして無かったネ。

だが 私もしばらくこの世界に居るのならば、

茶々丸や妹達にできるだけの備えをさせるのが制作者としても

親としてもやっておかないといけないことだネ。」

「・・・なにか、起こるんですか？」

「ハカセには後で研究室で話すヨ。」

とにかくその依頼、確かに聞いたネ。」

「あと超広域で使用できる通信機や発振器も頼む。」

場合によっては各地で動かないといけなくなるかも知れないからな。」

「わかったネ。」

それにしても・・・二人共完全なる世界の首謀者は掴んでいるのか？」

「一応ですけど、それとエヴァお嬢様には今まで調べてもらっていませんけど」

超さんにも後で見てもらったほうがいいでしょうか。」

「何か面白いものでもあるのかな？」

「2番目の鍵が一本。」

「・・・それは是非とも見てみたいネ。」

「魔術的な見地からはエヴァに研究してもらいました、

超さんには科学的な見地から見てもらって、

理想は3番目の鍵が茶々丸達に使用可能になることです。」

「確かにアレが使えれば 向こうの世界では敵無しネ、

それに敵が使ってきてても対処できるようになるネ。」

「アレはなかなか興味深いからな、貴様も面白い研究ができること  
だろう。」

超が神妙な顔をして私に向き合う。

「ソプラノ・・・一つだけ、これだけは答えてくれないか？」

「向こうの世界の問題を、ソプラノは解決できるのか？」

「・・・出来ますよ、」

超さんの力が是非とも必要ですが。」

「本当カツ!?!」

「そうですね、私の秘密を一つ 教えてあげましょうか。」

私は世界樹の管理人です。」

「世界樹の管理人……?」

「そう、管理人。」

話は変わりますが、

木って愛情を持って育ててやるとすくすくと育ちますね、

その成果の最たるものはソメイヨシノですか?

アレ実は最初の一本以外、接木や挿し木、取り木で増やしたんです  
ってね。

・・・世界樹の取り木や挿し木って、時間がかかりますが、実は出  
来るんですよ?

元の樹よりも力はもちろん落ちますけどね。

それに世界樹同士はリンクする、もうわかりですか?」

「取り木?・・・リンク?・・・そう力!!」

「っち、姉様はそんなこと教えなくてもいいんだ！」

私だけ知っていればいいことを……ブツブツ。」

エヴァが私と二人しか知らない秘密を他人に知られたせいで不貞腐れる。

しばらくエヴァをなだめ、超たちの方を見ると……超が涙を流している。

「ちよっ！？ ち、超どうしたの？」

「？ 超……さん？」

「え……？ あ、私泣いていたのか……」

「変なものでも食ったのか？」

「だ、大丈夫ヨ……いや、大丈夫じゃないかも知れないネ。」

「……おい、本当に大丈夫か？」

「ゴメン、エヴァンジェリン……私だめかもしれないヨ。」

「……超さん？」

ガタツ！

超はいきなり立ち上がり私に抱きつき、声こそ出さないが泣き始める。

「ちよっ!?!?」

「ああああっあ~~~~!!」

「エ……?」

「……グス……ありがト……本当にありがとう……ネ、ソプラノ。」

「え? あ……よしよし、いい子だからね。」

どうしていいか解らずパニックになった私は、

とりあえず子供をあやすように超の頭を撫でる。

「……グス、これで私は……私達は……いや、この世界の私達は

あの火星の荒野ではなく、緑の世界で生きて行けるんだネ……」

「……そうだね、超ほど急がずに、」



徐々にこちらと交流出来る体制を作る必要はあるし

向こうも植林とか活発にやってももらわないといけないけど、

その時間は十二分にあるよ。

向こうの世界の協力者も居ることだし、最悪強攻策もあるし

それに超の協力があればゆっくりやっても十分な時間はあるよ。」

「・・・うん、うん！ わかったヨ！」

しばらく泣いた後、落ち着いた超が私からゆっくりと離れる、

離れる途中で止まり、しばらく私の顔を見つめる。

この間の超との会話で一つ確証が持てた事がある。

原作はどうか知らないが、

今ここにいる超は恐らく魔力が枯渇し、

向こうの住人が火星の荒野に放り出された世界で生きてきたんだろ  
う。

私が与えたヒントで、

私は何をしようとしてるのか理解したから故の反応だと思う。

「ソプラノ……」

「ん？ なんですか超さん。」

「……フフツ。」 / /

超が私の顔を見ながら不意に微笑み、足元に何かを落とす。

「……チュ……んっ。」

「？……んう……っ!？」 / /

「あぁあぁあつっあ……!!」 #

「うわ……」 / /

超がいきなり私にキスをし、

当たりが光りだし 一枚のカードが足元に落ちる。

「……んっ……フフ、学園祭最終日、あの夜の約束……  
こんなに早く達成されるとはネ……予想外だヨ、我的愛人」  
//

「え……？」 //

「おいっ！ 超鈴音っ！！」

貴様 私の姉様に何をしてくれるんだっ！！ 今すぐ離れろ！！」

#

「え？ 我的愛人って……え〜っと……え、えっ！！」 //

1714

超の突然の行動に怒り出すエヴァ、

そして手持ちの電子辞書で超の放った言葉の意味を調べて

赤面する葉加瀬。

これで認識障害がかかってなかったら、

私は明日からこの学園内を歩けない事になっていただろう。

「嫌ネ、私はただ 学園祭最終日の夜の約束を果たしているだけだ  
ヨ。」

ソプラノを愛する努力をしているだけネ。」

「そんなことはどうでもいいから 今すぐ離れろっ!!」

エヴァが超から私をひっぺがし抱きかかえる。

超は少し不満そうにするが足元に落ちたカードを拾い複製し

一枚を私の懐に差し込んだ。

「今日は予想外の収穫があったネ

この世界に着て今日ほどよかったと思う日は無いヨ。」

超は私との契約カードに軽く口付けをし、

葉加瀬の横に歩いていき、葉加瀬の腕を取り立ち上がらせる。

「さ、ハカセ行こうカ。

やることは沢山あるヨ。」

「ちよ、超さん 離してください。」

「ほらほら、行くヨ。」

あ、エヴァンジェリンにソプラノ、ごゆっくりどうぞ。

きょうの料理は私のおごりにしておくネ」

葉加瀬を引きずりながら超は店の方に戻っていった。

残された私とエヴァ・・・私に残された選択肢は多くない。

「・・・私が甘かったようだ、こき使ってやれば

少しは反省するかと思ったが・・・この様子では

千雨や千草の言つとおり、本当に家に鎖で繋いでおいたほうがよさそうだな、姉様。」

「・・・今回は私が悪いんでしょうか？・・・エヴァお嬢様。」

1111

「そんなもの関係あるのか？

今の姉様は私の召使いだろう、だったら主の好きなようにするまでだ。」 #

「・・・超・・・恨むよ・・・」 1111

こうして学園祭で強引に超の唇を奪った報復だろうか？

最悪のタイミングで私の唇が超に奪われ、

本日 夕映に続き私の地獄が今始まった。

神様から頼まれたお仕事。

その46（後書き）

46話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その47

学園祭より数日後・・・

振替休日も既に最終日になり その夜、

私はようやく釈放された。

夕映、超と連続で仮契約を結んだことにより激怒した

エヴァ、千雨、千草達により、冗談かと思われた

鎖につながれての監禁生活を送らざるをえない状況になり

家で皆のメイドをやらされ、つい先程開放、

私は久しぶりに安眠することができた。

しかし、気のせいだろうか？

メイド生活の後半は夕映や超、葉加瀬達も混じり

私をこき使っていた気がするが、いまいち記憶がはっきりしなかつ



た。

side  
超

エヴァ家 居間

「それで、何で貴様もどさくさにまぎれて姉様をこき使っていたんだ？」

「いや、こんなチャンスはめったに無いと思って  
つい調子にのってしまったヨ。」

「ソプラノもかわいそうです・・・」

「いや、綾瀬もおもいきり変な注文していただろう。」

大体、先輩に小説読ませるのはいいけど、

食事中にあんなインモラルな小説読ませるなよ。」

「せやで、旦那さんが辺に演技着けて読みだすから

食事の味なんか解らしまへんかったし。」

「あ、アレは内容がわからずに頼んでしまっただけで、

私の趣味とかでは・・・」 / /

「まあ、私は貴様らの反応が笑えたからいいがな。」

「その後で綾瀬様にはソプラノ様の音声だけ抜き出した

朗読音声をお届けしましたが、みなさまもご入用ですか？」

「ぶふあゝ!!！」

「うわっ!?! きたねーよ 綾瀬!」

「す、すみませんです!」 / /

「・・・ウチには後でくれまへんやろか？」 / /

「かしこまりました。」

「お前達な・・・」

「ええやんか、音声データぐらい。」

「・・・はあ、好きにしる。」

それで超、貴様のアーティファクトの調査が終わったんだって？

「終わったよ、私のアーティファクトはすごいヨ。」

「へーどんなのだよ、見せてくれよ。」

「いいヨ・・・アデアット。」

私が呪文を唱えアーティファクトを出すと、

皆の反応はいまいちすぐれないものだったヨ。

「・・・コレあれだよな。」

「アレやね。」

「アレですね。」

「そうですね？どっどっ見てもアレなんですよ。」

「？」

「「卵ですか？」」

「卵だな。どっどっ見ても。」

「そうだよ、卵だよ。」

私が呼び出しテーブルの上に置いたのは

誰がどう見ても卵、鶏より少し小さくウズラより大きい白い卵。

「で？ この卵はどんな卵なんだ？」

「この卵、信じられないことに時間が止まってるんだよ。」

「時間が？」

「そう、この卵の時間が止まってる。」

「それで？」

「だからすごく硬いヨ、私の持つどんな工具でも割ることができなかったヨ。」

「そういう事じゃなくて、

何の動物の卵かとかどんな能力が使えるのかとかそういうのだよ！」

「さあ？」

「さあ？・・・って、結局何もわからなかったのか！？」

「これが何の卵かは結局解らなかったネ。」

「他には？」

「このカードの絵柄に書いてある装備は、

私の学園祭の夜の時の装備なんだけど

B・C・T・L以外フル装備で使えるヨ、なんと！ カシオペアも使えるヨ。

ただし、ロックがかかっているようで、

恐らくソプラノの許可がないと長時間の移動はできないみたいだけどネ。」

「・・・そっちの方がすごくないか？」

あの時計は反則じゃねーかよ・・・って言うかB・C・T・Lって何だ？」

「強制時間跳躍弾の略ですよ。」

「単純に戦闘能力で言えば卵より 私の戦闘服の方が優れているネ

それに私の戦闘服だからverUPも思いのままネ。」

「じゃあ、この卵は？」

「時間の止まった、絶対に孵化しない ただの卵だヨ。」

「なんてしょーもない物を先輩は・・・はずれか？」

「何を言うか 千雨サン！ この卵は凄い卵なんだヨー！！」

「だから どこがどう凄いか説明してみてくれよ。」

「調査の結果、どういわけか

この卵はこの世界にしか存在しないことがわかったネ。

しかしそのおかげで 私がカシオペアでどの時間軸、

ソプラノ流に言えばどの世界に飛ぼうとも、この卵を座標に設定すれば

私は必ずココに戻ってくる事が出来るんだヨ！

試しに別時間に飛んで卵を出そうとしてみたが出てこなかったネ、

ただなぜか魔力供給だけはシツカリされていたと言う謎仕様。

私が時間移動していた間の録画映像を見たら、

この卵だけがその場に残されていたヨ。

つまりこの卵は私とソプラノを繋ぐ架け橋・・・

言わば 愛の結晶なんだヨー！！」 / /

「ちょっと待て貴様!!」 #

「ふざけんなよ超!!」 #

「馬鹿なこと言ったらあきませんで!!」 #

「ちょっと待つですよ!!」 #

「超鈴音、少し落ち着いてください。」 #

「超さん・・・少し言い過ぎではありませんか?」 #

「・・・」 #

「?」

「ジュースおいしいです。」 「ウマー」 「・・・ズズ。」

「サケノメヨ オマエラ。」

一部全く別の話が入ったが、なぜか皆怒りだしたネ。

「どうかしたのか?」

「何が愛の結晶だ! 寝言は寝てから言え!」

「そつだぞ超、何で卵が愛の結晶なんだよ!」

「超はんは疲れてはるんや、

ええ医者紹介したるから明日にでも行きや。」

「超さん調査で徹夜してたから・・・少し寝たほうがいいですよ。」

「言うに事欠いて あ、愛の結晶なんて、ふしだらです！」 / /

「・・・綾瀬さん、その想像は行き過ぎなのは。」

「そうは言っても、私がソプラノを愛そうと努力してできた結果がどこへ行ってもソプラノの元へ帰ってこれる道標だから

そう表現してもおかしくないのではないかな？」

「余計な事は言わずに、この世界の座標だと言えればいいんだ！」

「そこはほら、私も女だから。」 / /

「余計な表現はつけなくていいんだよ！」

「気持ちはわかるけど、はた迷惑やわ。」

「まあ、とにかく この卵はこの世界の座標になるといつのことぞ。

時の卵 クロノト ガーとでも名付けようかな！」

「ああ、はいはい、死の山でも探してこいよ。」



「いや、時の最果ての方が・・・」

この後も時の卵について皆で調べたが、

どう調べても時間が止まっているということ以外は

ただの卵だったネ。

s i d e    ソプラノ

翌日の朝、目が覚め居間に行く

超や千雨達    女子寮組は昨日の内に寮に帰ったようで

千草や茶々丸、双子が朝食を作っていた。

昨日までの疲労がまだ抜けていないようで、

エヴァと私、姉妹でぼーっとしたまま朝食を済ませ、

学園に引きずられて登校、HRは高畑先生が代理で登場。

何かネギ先生達がどうかテストがどうか説明していたが  
全く頭に入っていない。

気がついたら最後の授業が終わり、  
クラスの皆は帰り支度をしている。

千草に迎えに来てもらい家に帰ったが、

流石にここまで疲労が溜まっているのはまずいと感じ、  
帰ってからすぐに魔法球に入り 現実時間で3時間ほど  
休養を取ることにした。

庭園の芝生で昼寝をしていたのだが、  
頭に妙な違和感を感じつつすらと目を開けてみる。

「・・・茶々丸？」

「おはようございます、ソプラノ様。」

目の前には茶々丸の顔があり、後頭部には柔らかな感触が。どうやら知らないうちに茶々丸に膝枕をされていたようだ。

「ん……あれ？」

茶々丸何時からこうしてた？

「私が着てから2時間と15分ほど経っています。」

「……そっか。」

私は陽の光が眩しかったので茶々丸の方を向き横向きの体制に変わる。

茶々丸はそつと私の頭を撫でる。

「ん……ん？ 茶々丸の太ももが柔らかくて いいにほい？」

「はい、今までのボディでは金属の硬い足でしたが今のボディなら人工筋肉と緩衝材を操作することで

快適な膝枕を提供できます。

ハカセの話ですと 私の太ももの感触については  
かなり試行錯誤を重ねたそうで、自信作だと言っていました。」

「ほほう、自信作とな。 どれどれ・・・」

私は茶々丸の太もみに頼ずりをし感触を確かめる。

「・・・んっ・・・ピクッ・・・んう・・・。  
／／

「お、柔らかさもさることながら肌触りも素晴らしいね。」

茶々丸は私にされるがままにジツとして、私の頭を撫で続ける。

文句が出ないことをいい事に、さらに続ける。

「・・・んあ・・・ん・・・ハア・・・ハア・・・うあ  
っ！」／／

ブチッ！

「痛ったあっ!?!」

調子に乗ったバチが当たったのか、

私のセクハラで悶えた茶々丸が無意識に撫でていた手を握ったことで  
髪の毛が何本が引きぬかれた。

「ああ！ すいませんソプラノ様！」

「つつく・・・いや、気にしないで茶々丸、

私が調子に乗ったのが悪かったんだから。」

茶々丸は私の髪の毛を握った場所を撫で続ける、

「それにしても流石、葉加瀬が自信作というだけあって

この感触はたまらないね。

今度から昼寝する時は毎回茶々丸の膝枕にしようかな。」

「はい、いつでもお呼びください。

膝枕以外でも今まで以上にお役に立てますので。」

それから陽が沈むまで、まったりと茶々丸と過ごし

別荘での夕食は茶々丸に作ってもらい、二人つきり食事を楽しみ

食後はテラスでお茶を飲んでいた。

「そう言えば、茶々丸と二人つきりでごうしてのんびりするのって  
久しぶりじゃない？」

「そうですね、前回から97日ほどでしょうか。」

「そんなに経つのか、

私も茶々丸のセカンドマスターだし家族なんだから

もう少し茶々丸と一緒に時間を作ってもいいかもね。」

「はい、是非とも。」 / /

それから茶々丸にお茶をもう一杯入れてもらい

のんびりと夜空を眺めながら過ごし、眠るには丁度い時間になって  
きた。

「それじゃあ今日はもう寝ようか。」

茶々丸は明日には向こうに戻るんでしょう?」

「はい、何時間もマスターを放っておくわけにも行きません。」

「そうだね、今頃茶々丸を探しているかも知れないしね。」

「はい。」

「・・・そうだ　今日は折角だから茶々丸、一緒に寝ようか?」

「ハ?　い、いえ従者が主と同じベットに入るなど・・・」

「でも、茶々丸は家族でもあるでしょ?」

家族ならいいと思うけど、茶々丸は私と寝るのイヤなの?」

「・・・・・・・・わかりました・・・・・・・・お、お供します。」　／／

私は茶々丸を伴って寝室に向かう。

家では基本的に私の個室があるが

ほとんどエヴァか千雨、千草と寝ているので、

たまに一人になると妙に寝付きが悪い時がある。

今後　一緒に寝る人に茶々丸やラトナとピユラが入ってくれれば

そういう日もより少なくなる。

というわけで今日は茶々丸の抱き心地、

抱き枕性能を確かめることにしてみた。

「じゃあ、茶々丸寝よつか。」

「はひ！ ふ、不束者ですが、よろしくお願いします！」 / /

「？ こ、こちらこそ・・・？」

私が先にベットに入り、後から茶々丸が入ってくる。

しかし、茶々丸は私から少し離れた場所でジツとして

コチラの方に来る様子はない。

「ほら、茶々丸もつとこつちに来て。」

「はい、しつれいいタシます。」

しょうが無いので 茶々丸を呼んで近くに来た所で

私は茶々丸に抱きついた。



「はふ〜・・・暖かくてや〜らかいな、

茶々丸の抱き心地も 膝枕に負けず劣らず最高だね〜。」

「そ、ソプラノ様！ イキナリそんな、もう少し手順を……………ソプラノ様？」

私は茶々丸の胸に顔を埋め身体に足を絡め

「アラの子どもがが母親に抱きつく様な体制で茶々丸に抱きつく。

「すすん、いい匂いで、これならぐっすり眠れそう〜……………」

「…………ソプラノ様…………？」

「…………ん〜…………す〜…………す……………」

「寝てるんですか…………？」

「…………す……………」

「…………呼吸、脈拍、脳波すべて睡眠時のデータとほぼ同一ですね。

「

データの検証の結果、ソプラノ様は本当に寝ているようです。

昼間にアレだけ寝たのに、居間もまたこんなに早い寝付きで・・・

それだけ疲労が溜まっていたのか。

「す〜・・・す〜・・・んあ。」

試しに鼻を摘んでみましたが起きる様子はない。

せっかくハカセにボディを改良してもらい

ソプラノ様に今までできなかったご奉仕できる機会だと思ったのに・・・この人は。

あまりにも気持よさそうに寝ているソプラノ様、

私のようなガイノイドを家族と呼んでくれる主などマスターとこの

人以外いるだろうか？

・・・超やハカセもそうですね、

と言いますかこの家の人は皆そうでした。

姉さんや、私に妹達、私達は恵まれていますね。

妹達もきつと私や姉さんのようになるでしょう、

今の私ならデータや確率を無視して信じられるような気がします。

私にしがみついて一向に離れる様子がない 私のセカンドマスター・  
・

このままソプラノ様を包み込むように抱き、

今のこの感覚と音声、匂いのデータを保存しておくことにした。

「……………す……………す……………」

もぞもぞ……………

「……………？……………んあっ！」 / /

ソプラノ様が眠って32分ほど経過した所で

急にソプラノ様の手が動き出し、私のお尻を揉み出す。

「ソプラノ様っ！……………んう……………お願いっ……………します、

やめっ……………んあ……………あ……………くっ。」 / /

動きは止まるどころか激しくなり、

片手は背中を撫で回し もう片手はお尻、

私の胸に押し付けられた顔もモゾモゾと動きだす。

離れようにも足まで絡みついて離れられない。

「……………うん……………え？……………あ……………ソプラノ様？」

「す……………す……………」

(こんなことしてても寝てるんですか!?)

なんという寝相の悪さ・・・)

私はソプラノ様に身体を弄ばれながらも起こさないように

服の袖を噛みひたすら耐える。

「…………つ…………ん…………あ…………つ…………」  
//  
/

・

・

・

side ソプラノ

部屋が明るくなり、カーテンの隙間からも朝日が差し込む。

外から小鳥の鳴き声が聞こえ…………頭の上から異様な声が聴こえる…………  
…………?

「…………んあ…………あれ？」

この感触は・・・千草じゃないし・・・あ、茶々丸と寝たん  
だっけ。」

「・・・？全・・・あ×？？〒・・・ae・・・っ・・・」  
// // //

私は茶々丸から離れ様子をみると

ピクピクと痙攣しながら頬は真っ赤になり、

濡れた袖を啜え、虚ろな瞳は涙で濡れ、

何か理解出来ない言語を呟いている。

「ちょ、茶々丸！ しっかりして！！」

「・・・そプラ野サマ・・・」???.」 // //

その後10数分ほどその状態が続いたが、

なんとか茶々丸は言葉の通じる状態になった。

「・・・茶々丸大丈夫？」

「・・・はい、ご迷惑をおかけしました。」 // //

「本当に大丈夫？ いったい何があったの？」

「いえ、何もありませんでした。」

ソプラノ様が私に抱きついたままお眠りになられあそばされ、

『ほんの少し』 動かただけでそれ以外には何もありませんデシ  
タ。」 / /

「そう？ ……一応戻ったら超か葉加瀬に見てもらってね？」

起きた時の茶々丸の様子はちょっとおかしかったから。」

「畏まりました。」

「?……とりあえず朝ごはんは私は自分で作るから

茶々丸はゆっくりしててね。」

「はい、ご迷惑をおかけします。」

朝食の準備をするために 廊下に出て台所に移動しようとした…  
が

茶々丸に一言 言う為にはドアから顔だけだして茶々丸に話しかけた。

「あ、そうだ、茶々丸 また一緒に寝ようね。」

「…………ツ!？」 / /

「茶々丸？」

「は、ハイ！ いつでもお呼び下さい！

即参上します!？」 / / /

「？ ホントにゆっくり休憩しててね、あと超達に見てもらっただよ。」

「はい。」

茶々丸の返事を聞き 今度こそ私は台所に向かい移動する。

「…………ソプラノ様といつも一緒に寝てるマスター達は

いったいどうやってアレに耐えてるんでしょうか？」

私は一人で朝食を食べた後、茶々丸の様子を見に行くと

まだベットで横になっていたが



自己診断プログラムを走らせているとのことだ

そのまま寝かせておいた。

昼少し前に茶々丸は別荘から家に戻り、

一人になった私は、また庭園の芝生で昼寝をすることにした。

side 茶々丸

「マスター、お聞きしたいことがあります。」

「ん、ようやく出てきたか。」

「こっちも聞きたいことがある・・・が、」

「まあ、いいだろう。お前の質問とやらを先に話してみる。」

「はい、マスターはソプラノ様とお休みの時

「いったいどうやって あの寝相に耐えていらっしやるんでしょうか？」

「……は？」

「ソプラノ様のあの寝相の悪さといいますが、手癖が悪いといいますが、」

「マスターはどうやってアレに耐えて一緒にお休みになっているんでしょうか？」

「……お前もアレを体験したのか。」 111

「はい。」 / / /

「そうか……あれはな……耐えるのは無理だ。」 111

「？ でもマスターはほとんど毎日のように」

「ソプラノ様とおやすみになってらっしやいますよね？」

「では、どうやってあの状態で眠れるのですか？」

「そもそも、姉様がああなるのは数年に一度有るか無いかだ。」

「確かなことは言えんが」

「姉様が極度に疲労した日などがああなる可能性があるな。」

「アレに遭遇したら耐えようと思わずにさっさと諦めて身を任せ」

気を失ったほうがいい。」 1111

「……そうなんですか。」

「ん？……待て、ガイノイドのお前が何で姉様に弄られてそんなことを聞きに来る。」

感覚器官を切るなりすればいいじゃないか、

そもそもアレをやられて快感など……」

「……」

「まさか……茶々丸、そのボディ人工皮膚や筋肉だけじゃ無く

そっち方面も……」

「……」 / /

「おい、答える茶々丸!？」

「……黙秘いたします。」

「私相手に黙秘権などあるか、ボケロボ!

そうなんだな! 貴様出来るんだな!」

「マスターはしたくないです。」

淑女としての慎みを持ってください。」

「変な質問をしに来たお前が言うな!」 / /

「私はマスターやソプラノ様にご奉仕するのが務めです。」

戦闘から家事、将棋の相手まで、

主の期待に様々な対応ができるようになっております。」

「そっち方面は対応しなくていいんだっ!」

「マスター、そっち方面とはどの方面でしょうか?」

「ぬあああつゝゝつ!! ああ言えばこう言う!」

そんなこと昼間から言えるか!」 / /

「マスター、今は夕方です。」

「うがあああつあゝゝゝ!!!」 #

頭を掻きむしりながら真っ赤になって地団駄を踏むマスター、

……可愛すぎます。

録画してマスターの秘蔵フォルダに保存しておかないと。

（しかし記憶をよく検索したら、

ソプラノ様に私がそう言った行為に対応していると

伝えていませんでした、別荘での夜はAIが若干暴走気味でしたし・  
・

従者として主人にはしっかり伝えておかないといけません。）

この後従者の義務として主であるマスターに

私のスペックについての話をした直後、

マスターが外に走って行きましたが・・・

超とハカセは大丈夫でしょうか？

神様から頼まれたお仕事。

その47（後書き）

47話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その48

学園内は学園祭の面影は既に無く

次のイベント言うべきか・・・期末テストに向け

生徒はテスト勉強に、教師は試験作成に忙しそうにしている。

そんな6月末、とうとうネギ先生達が帰ってくる日になり

学園長と高畑先生が

帰還予定場所である魔法球が置いてある部屋の周囲で待機していた。

私とエヴァは暇つぶしにと学園長室で水晶を使って様子を眺めている。

学園長達が中で待たないのは、一応転移時に合体事故等が

起こらないように心配してである。

・・・ネギ先生が外道スラム化など笑い話にもならない

そうして様子を見てみるとネギ先生達が扉を開けて出てきた。

「……………気になってたのに 出鼻をくじかれちゃったねーっ。」

「では早乙女さん私達と一緒に図書館島地下へ偵察に行きま……  
す……か？」

が、学園長に高畑先生!？」

「フオツフオツフオ、お帰り、刹那君、それにネギ君達も。」

「どうしたんですか学園長!？ それにタカミチまで……」

「……………どうしたもこうしたもないよネギ君、君達は超君にして  
やられたんだよ。」

「え? ……どういう事ですか?」

その後学園長と高畑先生にネギ先生達が魔法球に入った後、

何が起きたか、学園祭最終日の超との決戦、

超の目的、私達のことは隠され、

援護の部隊に超達は敗れ、超の高いスキルを今後



学園の警備方面で活用し、破壊活動や魔法の公開をしないことを強制証書にサインすることで恩赦を与えるという説明をしていた。

尚、事件を隠匿するために大規模な記憶の改竄をしたせいで

このことを知っているのは学園長と高畑先生だけなため

口外しないように口止めもされた。

「え・・・？ と、言うことは・・・」

「今日は6月末でもう学園祭は終わっておるよ。」

それに、もうすぐ期末テストじゃ。」

「「「「「「「「「「ええ〜！！」「」「」「」「」

「さて ネギ君、君が持つておる時計じゃが、

「コチラで預からせてもらおうかの。」

「え？ この時計ですか？」

「今となつてはただの動かない懐中時計じゃが、

それは超君との話で破壊することになっておる。」

「でも……コレは……」

「ネギ君、君は学園祭前に我々が超君を捉えようとした時に超君を庇ったそうじゃな？ まあ、その段階じゃ僕らも見逃したから強くは言えんが」

その結果、君は超君に貰った時計を僕らに報告もせず複数回使いなんども学園祭を体験する。

それ自体も危険なことじゃが、その後も報告をせず自分達だけで解決しようとし、超君の罠にはまり

こうして1週間後に飛ばされることになった。

間違いないの？」

「……はい。」

「起こってしまったことはそれとしても、

君は教師でこの学園に所属しておる、自分の生徒を庇いたい気持ちはわかるが

その結果の責任は取らねばならん、わかるの？」

「……でもっ！ 僕達は僕達なりに超さんを止めよう……」

「学園長私達にも責任があるんです！」

「学園長！ ネギ先生だけ処罰するのは……」

そもそも私にも学園の警備を担当していながら報告しなかった責任もあります。」

「おじいちゃん！ ネギくんだけに罰を与えるのはやめて！

ウチらにも責任があんねん！」

ネギ先生を庇おうと神楽坂さん達が学園長にすがりつく。

「フォッフオ、皆も落ち着きなさい。」

別に今回のことでネギ君一人に責任を押し付けて処罰しようとは思っておらん。

そもそも僕らも超君にやられた口じゃからの、

さっきも話したが、超君を止めたのは応援の部隊じゃからの。」

「……では、学園長。」

「じゃがネギ君や君達をこのまま何も無しで終わらせるわけにもい

かん。」

「……はい。」

「そこでネギ君には減俸20%を3ヶ月、あと今回の件での反省文、超君を庇った事はいいがその後、時計を何回も使用した事についてや儂らに報告しなかった件、

今後こう言った場合どう対応するかも含めての反省文の提出。

それと皆も含め、もう一度魔法の世界と一般との付き合い方についての座学と訓練

……それに……」

「……………それに?」「……………」

「君達のクラスはテストの点数がこのままじゃとまた学年最下位らしいの?」

学校を何日も休んだ分も含めて補習を受けてもらっつ。」

「……………ええ……!」「……………」  
「……………ホッ。」

「ちょっとネギ！ なに一人で安心してるのよ！」

「そっだよ！ ちょっと今のはひどいよ！」

「あ、いいえ！ 別に安心してなんか！」

## 学園長室

「アハハハッ！ 見たエヴァ？」

「流石にネギ君も減俸、反省文、座学に訓練ときたら応えたらしいよ。」

「ククッ、神楽坂達も ああもあからさまにホッとされては頭に来たか？」

「珍しく宮崎まで怒りだしているぞ。」

「きっと魔法球で超達と戦うための作戦を立てるか  
訓練でもしてたんだろうね？」

「意気揚々と出てたら もう事件は終わってて」

「しかも お小言に罰を貰えばみんな頭にも来るか。」

ネギ先生達に戻り、しばらく皆で揉めたもの

学園長に一喝され皆しゅんとなっている。

その後 時計が学園長に渡された。

「さて、君達もこのまま黙って罰を受ける。では納得も行くまい？

そこで、訓練も兼ねて

君達を代表してネギ君に超君と一騎打ちをする機会を与えてもいいが

・・・どうするかの？」

「・・・え？」

「君達も話がついたとは言えこのまま超君と今まで通りに

過ごすというわけにもいかんじゃろ？」

そこで、超君と試合でもしてもらって今後の禍根を断とうという「  
となんじゃ。」

これは超君もすでに同意しておる。「

「でも、超さんは 確か格闘経験があると言っても……」

「フオッフオッフオ、そこは心配しなくてもいいぞい、

実は秘密じゃが、高畑くんも僕も彼女にやられてしまったの、

あの時は例の時計や装備があつたとは言え それは言い訳にはならんしの。

装備を限定しての彼女でも今のネギ君より強いかもしれんぞ?」

「が、学園長やタカミチを!?!」

「ちよつと! 古ちゃん知ってた?」

「いや、確かに超は私の師匠だけどそれは拳法だけの話アル……」

「超君は魔法も使うからネギ君にとってもいい勉強になると思うよ。」

「いや、でも……。」

「何もこれは意趣返しと言っわけでもないんじゃ、

先程話した通り、今回のことは彼女も彼女なりに

世界のことを考えてやった結果じゃ、そこに妙な悪意はない、

じゃから僕らも彼女にある程度の枷を与え





「……これ以上聞きたいことがあるなら……拳で聞くといいネ！」  
「……くっ、わかりました。」

超さんにはまだ聞きたいことがありますから試合聞かせてもらいます！」

「フフッ、やる気は十分のようネ。」

学園長、このまま魔法球で勝負ということでしょうかナ？」

「ふむ、いいじゃろっ。」

「……と、その前に時計を返してもらえるか？」

皆の前で破壊しておいたほうがいいだろうシ。」

「うむ、これじゃ。」

学園長が超に時計を渡し、受け取った超が床に落とし震脚で踏みつける。

学園長達の様子はいまいちわからないが、

ネギ先生達が少し残念そうに見守っている。

「これはもう必要無いからネ。」

それに私以外が持っていたら 今後どんな災厄を有無か解らないからネ。」

「さて、ではネギ君達には再度魔法球に入ってもらつことになるが

この試合で今後 遺恨を残さぬようにの。」

「はい!」「わかつたヨ。」

その後、超と学園長達、ネギ先生達が魔法球の入り口の魔法陣で消え水晶の映像もただ、部屋を写すのみとなった。

「試合は見なくてもいいよね?」

「少しう興味はあるが・・・まあ、いいだろう。」

超の力が見たければ千雨辺りとやらせればいいしな。」

「そう言えば、その千雨は闇の魔法の習得はどうなの?」

「2日前に終わったぞ。」

アイツ用に調整したし私の使ってる姿を何度か見ていたからな、

苦勞はしたみたいだが 予想より早く覚えることができたようだ。」

「そうなんだ、やっぱり相性はそんなに良くないの？」

「ああ、予想通り自分で使う雷の暴風を取り込むのがやっとだな。

それこそ魔砲でも取り込めたらかなりの戦力になるんだが

千雨の器では無理なようだ。」

「でも、よかったよ、無事成功して。」

「そうだな・・・あの調子ならすぐに使いこなすようになるだろうし  
後遺症も心配せずに済みそうだ、そこは相性が悪いのが逆に作用し  
たな。」

「そっか、千雨が悪魔になるなんてちょっと嫌だからね。」

「しかし、麻痺の射手を取り込んだら

千雨に触っただけで麻痺効果が出たのはいい誤算だった。

アレで近接戦闘で千雨はかなり有利になるぞ。」

「本当に？ 攻撃したらこっちが麻痺なんて反則じゃない。」

「ああ、素手か通電物質の装備で触ったら最後

その後無防備な所をボコボコにされるぞ。」

「げー、今度から千雨を怒らせないように気をつけないと。」

「……そこは普段から気をつける。」

特に見るものがなくなったので学園長室を後にし

私達はその日は早退して家に帰ることにした。

その日の放課後、超が家に来て試合の結果を報告しにきた。

どうやら超はアーティファクトを使わずに戦ったよう

良い所までいったけど、魔法の打ち合いで

詠唱時間差を突かれ負けてしまったという話だった。

「ハハハッ　なんだ超鈴音、

貴様ともあろうものがそんな初歩的なミスで負けたのか？」

「……ちよつと熱くなってしまっただけダヨ。」

ネギ坊主が魔法の打ち合いに来たから応じてしまっただけネ。」

「ククッ、それにしても抜けてるな、

それともカシオペアや装備に頼りすぎたか？」

「エヴァンジェリンは少しうるさいヨ！

・・・大体、アーティファクトを 使わずに手加減してやったんだ  
カラ

負けることもあるネ。」

「それが装備に頼った結果だと言ってるんだ・・・クク。」

「・・・ぐぬぬ・・・ ソプラノ〜金髪のチビがいじめるんだヨ〜。

「かわいそうな超ちゃんだね〜、エヴァは後で怒ってあげるからね。」

超が泣く振りをして私の太もみに泣きついてくる、

私は超の頭を撫でながら慰める。

「エヴァはんもいい加減にしときや・・・いつか痛い目に会うぞ。」

「エヴァなんかほっとけよ超、後 ついでに先輩から離れる。」

「フフン 今は貴様らに何を言われても腹が立たん、

しかしアレほどの事をしでかすお前がボーヤに負けるとはなぐ。」

「マスター、お茶とケーキが用意できました。」

居間でじゃれあいながら話してる私達に

茶々丸とラトナ、ピユラがケーキとお茶を持ってきた。

「おお、これは都市部で有名なあの店の苺のロールケーキか！

いつもの下校時では行列ができていてなかなか買えんと言う。」

「はい、今朝妹達を買ってきてくれました。」

「そうか、褒美に今度私がお前達の服でも作ってやるう。」

「「ありがとうございます、エヴァンジェリン様。」」

エヴァは大好きなロールケーキを前にしてご機嫌な様子、

千雨や千草も久しぶりにここのケーキが食べれて嬉しそうだ。

食堂の方を見ると既に口の周りがクリームだらけのチャチャゼロと  
スライム娘達が

満面の笑みを浮かべている。

今日は葉加瀬や夕映は来られなくて さぞ残念だろう。

一方、超は対照的に先程までの事が頭にきてるのか

エヴァを睨んでいたが、不意に怪しい笑みを浮かべた。

「このケーキも久しぶりだな

さっそくいただこうか・・・なッ!？」

エヴァがフォークを持ちケーキを食べようとしたその瞬間、

目の前のロールケーキが一瞬で消え去った。

「フアフアフア、このケーキはいふあぶあいていくネ。」

声が出た方を見ると、居間の出口でほっぺにクリームを付け

口いっぱいロールケーキを含んだ超が

不敵に笑いながら逃げ出そうとしていた。

超のお皿を見ると、見事に自分の分のケーキも食べているようだ。

「なあああ〜〜っ!? 超鈴音 貴様っ!!」 #

「エふぁんふえリンともあるうものふぁ

この程度の動ひを見切れぬとふぁ・・・モグモグ

自身の膨大な魔力に 頼り切ったが故力ナ?

では、さらバ!!」

超は口の中のケーキを食べ 言いたいことを言つと逃げ出していった。

「待てっ! 超鈴音!!」

貴様は犯してはならん罪を犯した!

もはやただではおかん!」

エヴァが叫びながら超を追って居間から出ていく、

私達は呆然とその様子を見ていた。



「……エヴァも超をからかいすぎるから。」

「マスター、大人げないです。」

「ククツ いい気味だよ。」

「せやから言いましたのに……フフ」

それから数時間後、息を切らせ怒りで目が血走ったエヴァが帰ってきたが

その様子から超を捕まえることに失敗したのは

誰の目にも明らかだった。

翌日、学園に登校し教室に入った時、

超を視界に収めたエヴァが瞬動で超の背後に回り襟を掴み拘束、

そのまま早退すると言い放ち、超を引きずって帰っていった。

夕映と葉加瀬は何が起こったのか解らないといった表情、

私と千雨、千草はやれやれといった感じでエヴァを眺めていた。

その後、超がどうなったか解らない・・・

私には無事を祈る以外の選択肢はなかった。

食べ物の恨みは真祖の吸血鬼をも狂気に駆り立てるようだ。

その日のHRでネギ先生達が帰ったことにより

クラスの雰囲気は明るくなり、大騒ぎで1時間目のネギ先生の授業は全く授業にならなかった。

放課後、ネギ先生と神楽坂さん刹那さん近衛さんの4人は

学園長による罰の補習や訓練を済ませた後

図書館島の方へ皆で出かけてき、

その後他のメンバー達も同じ方向に出かけていった。

それから数日、テスト前だというのにいまいち緊張感のない3 - A

HRでネギ先生がテスト勉強をするようにハツパをかけ

一部ヤル気になったようで授業風景が少しおとなしくなった。

本屋ちゃんを情報源に変な教会の神父の話の聞いたり

ネギ先生が挙動不審になる等あったが

それ以外では学園内はいつも通りの風景だった。

エヴァ家 居間

「なんですかエヴァンジェリンさん 急に呼び出して、

これから部活で図書館に行く予定だったんですが。」

「来たか綾瀬。」

「来たかじゃないです……って超さんにソプラノも?」

放課後、最近超とエヴァが研究室でなにやらやっていたようだが

満足気な顔をして部屋から出てきて

茶々丸に携帯で夕映を呼ぶように指示を出していた。

・・・そして今に至る。

「私はココでくつろいでただけだよ、

夕映に用事があるのはエヴァと超じゃないの？」

「そうだ、喜べ綾瀬夕映！」

とうとうお前用の呪紋の試作品が完成したぞ。」

「私用の呪紋って・・・？」

まさか、学園祭の時に超さんの肌に浮いてたアレですか？」

「そうだ！ まあ、お前用の奴はあそこまで全身に浮き出ないし

掛かる負荷もそれほど大きくない。」

「その辺が私とエヴァンジェリンとの研究の結果ネ。

夕映さん用の呪紋は日常では魔力的負荷が少しかかるが

全力で魔法を使うときには負荷が無くなり

逆に呪紋に溜め込んだ魔力を放出することで

今の夕映さんが全力で使う魔力の

最大で1.5倍位の魔力が使えるようになるネ。」

「さらに普段から魔力の負荷がかかることにより

魔力の最大値を上げる修行効果も有るといふ至れり尽くせりの呪紋なのだ！

これで、訓練すれば貴様の出来損ないの 燃える天空 も超が使う  
くらいの

威力で使うことが出来るようになるんだぞ！」

「……へ〜 そうなんですか。」

「あれ?・・・反応が薄いネ。」

「おい、夕映もう少し喜んでもいいんだぞ?」

「喜べと言われましても、そんなに魔力や攻撃力が上がっても・・・

ソプラノと仮契約した時に出たアーティファクトで私は満足ですし。

」

「これだけ魔力が上がれば千草に習ってる呪いも

呪符の威力も上がるんだぞ？」

「そうだヨ、それに防御障壁の効果も上がるヨ。」

「あ、それは嬉しいです。」

もともと最初から防御や治癒系の魔法が習っていたと言っていた夕映だ

攻撃力が上がる、ではうれしいどころか微妙なのだろう。

「人を傷つける、と言うことになるのだから。」

「で、どうする夕映、早速埋め込んでみるか？」

「埋め込むのはそんなに痛くないヨ、

注射一本打てば明日には身体に馴染んでるはずダヨ。

消すのも改良したから注射で3日もすれば消えるヨ。」

「うーん……どうしましょうか？ ソプラノ。」

「何でそこで姉様が出てくるんだ……」

「ソプラノも黙ってないでなんとか言うネ……主に進める方向で。」

「

「そんなこと言われてもね〜・・・でも、後で消せるみたいだし

夕映の身を守る手段が増えるのはいいことだから私は良いと思うよ。」

夕映は私の言葉を聞き少し考えこんで答えを出す。

「そうですね・・・じゃあお願いするですよ。」

「おお！ さすが我が弟子、早速やるぞ超。」

「わかってるね、既にここに用意してあるヨ。」

超はカバンから消毒液とコットン、

小さな箱のようなものから注射器のようなものを取り出して

夕映のすぐ横に座り夕映の腕を消毒し始める。

「あの、打つ前に聞きたいんですが、

それほんとうに大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ、夕映さんの血液やDNAとの親和性は確認済みだよ。」

「あと、どんな紋様が出るんですか？」

「指先から肘までと背中、肩甲骨辺りに少し、

あと使ってる時は眼の色が少し変化すると思うネ。」

「そうですね・・・まあ、それくらいなら。」

「それじゃあ行くヨ、少しチクツとするかも知れないヨ。」

「・・・いや、何で子供相手にするみたいな態度なんですか。」

超が夕映に注射を打つが特に痛みはないようだ。

エヴァのうれしそうな表情が妙に気になる・・・

「よし！ では明日にでも早速広域殲滅呪文を夕映に教えてやろう！

何なら今から別荘で寝ていくか？」

「・・・それがうれしかったの？ エヴァ・・・」

「夕映がようやく私の弟子に相応しい魔法を使えるようになるのだからな！」

「どんどん使って行けよ！」

その内 炎獄の魔術師 とか言う二つ名でも名乗ると良い。」



「そんな物騒な二つ名いらないですよ!!」

「本当に……どこまで弟子に甘いんだか……」

「今回は私も面白い研究ができてよかったヨ、」

この知識は茶々丸達の武装にも活かしてみせるネ。」

「……まあ、エヴァンジェリンさんが喜んでくれるのは嬉しいですけど」

何か微妙な感じですよ……。」

使える魔力が上がり魔法障壁やアーティファクトの障壁の効果も上がって

本来ならもっと言んでもよさそうなものだが

エヴァが攻撃魔法ばかり教えようとするので複雑な心境の夕映だった。

神様から頼まれたお仕事。

その48（後書き）

48話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その49

side 葉加瀬

大学部 研究室

「はあく……どうしますかね。」

「……ハカセ大丈夫か？ そんな本に埋まっテ。」

「あ、多分大丈夫ですよ。」

私の周りに大量に積まれている本……様々な機械工学の本がメインだが

その内側、最近読んだ本が置かれてる所には

心理学、哲学書、医学書、そして

ここには似つかわしくない恋愛小説が置かれている。

「はあゝ……」

「……何か悩みでもあるのか？」

「と言っか誰がどう見ても『私、悩んでいます。』といった風に見えるヨ。」

「悩みというかなんと言いますか……」

「ソプラノのことかナ？」

「ひえっ!?!」 / /

「あ……」

私は素っ頓狂な声を上げ立ち上がると、

積みかっていた本が一気に崩れだし、私は本に埋まってしまった。

「もがゝ……ふなゝゝゝっ!！」

「だ、大丈夫かハカセ！」

超さんに救出してもらい、なんとか本の山から這い出し

窒息しかけたため、呼吸を整える。

「本当に・・・何やってるネ ハカセ。」

「す、すみません・・・」

「それにしても、ハカセが恋の悩みとは。」

「ち、違いますよ！ 私がこ、こ、恋なんて!？」 / /

「何で疑問形ネ、ほら、こんなものをハカセが読んでるとしたら

そう考えても仕方が無いネ。」

超さんの手元には一冊の本・・・私が読んでいた恋愛小説だ。

「そ、それは！ 返してください！」 / /

超さんから小説を奪い取る。

「別に取ったりしないヨ・・・だけど相手が相手だから難題ネ。」

「・・・ちゃ、超さんだって人事じゃないじゃないですか・・・」  
/ /

「まあ、そうだけどネ・・・」

しかしハカセがそんなに前向きに取り組むとは思ってなかったヨ。

適当に誤魔化すことだってできるはずなのニ。」

「そういう超さんはどうして・・・あ、あんな事を。」 / /

私は不意に思い出した、超さんが泣きながらソプラノさんに抱きつき  
キ、キ、キスしたことを。

「あ、アレは・・・その・・・ネ、気持ちが高ぶってと言うか  
なんと行っていいカ。」 / /

「学園祭の夜の約束があったにしてもやりすぎですし・・・  
やはり・・・あの話を聞いたからですか？」

「それは、まあ・・・ネ。」

あの時は計画を潰されて少し気が抜けてたし、次の発光現象の時に  
帰るか

その前に新しい計画を立て直すか悩んでいたからネ。」

「私も詳しくは聞いてないので、

超さんがなんであそこまで感情を乱したのか分かりませんが

余程のことなんでしょう、あれ以来超さんのソプラノさんに対する態度は一変してますから。」

「詳しくは話せ無いけど・・・アレは私の計画を根底から覆す話だったからネ。

それも私よりいい方向デ。」

「それだけですか？

それにしても些か超さんの態度は不自然に感じます。」

あの日以来、超さんは以前に増してソプラノさんと一緒にいる時間が増えた。

2年越しの計画が潰されたのに、

以前のようなお互いを探り合うようなことも無くなり

今まで見たこともないくらい自然な笑みを浮かべるようになったし感情を表し怒るようになった。

「そこは乙女の秘密だヨ。」

ただどーっただけ言えることがあるとすれば・・・

本気で惚れてしまったみたいネ。」 / /

この顔だ、今まで見たことのない超さんの本当に幸せそうな笑顔。

頬を染めて少しはにかんで幸せそうに笑う・・・

ソプラノさんが超さんにこの笑顔をさせているんですね、

私では無理だったのに・・・

私が2年かかっても引き出せなかった超さんのこの笑顔、

超さんの友達としての自負はある、親友と言ってもいい

その私が出来なかった事をソプラノさんはやってしまった。

こういう時はソプラノさんに嫉妬心が沸いてもおかしくないはずなのに

不思議と出てこない、それ所か嬉しくなる。

感謝したくなる、私の友達にこんな笑顔をさせてくれて・・・

チクッ

あれ？



おかしい

嬉しいはずなのに、超さんのこの顔を見るのが・・・辛い？

なんでだろう・・・嬉しいけど、これ以上見ているのが辛い

ソプラノさんには感謝してる、

あの人の事を考えても辛くない・・・

あの人が超さんに与えたこの笑顔を見るのが辛い。

(私は・・・)

? 今のはなんだろう？

「・・・カセ、ハカセ、大丈夫力？」

「え・・・？ あ、大丈夫ですよ、何でもありません。」

「そうか？ なんかつらそうな顔してたけど気分でも悪いのかな？」

「いえ、そういうわけではありません、少し考え事をしていただけです。」

「そう？ ならいいけど・・・今日はこの辺にしておこうか力。」

ハカセも考え事で疲れてるみたいだシ。」

「すみません、本当に少し考え事してただけですから。」

「・・・そうだ、ソプラノのところにいくといいヨ。」

「な、なんでそこでいきなりソプラノさんが出てくるんですか!?!?」  
／／

「・・・多分私の予想が当たっているなら、

ハカセの考え事はソプラノが解決できるはずネ。

何なら今日は泊まってくるといいヨ。」

「だ、だめですよ！ あの人の部屋になんか泊まったら!」  
／／

「別にソプラノの部屋に泊まらなくてもいいネ、

仮にもし ソプラノの部屋に泊まったら・・・ハカセといえども許せないネ。」

この顔は本気だ・・・ツ!? 1111

超さん眼はうつすらと色も変わって、肌には呪紋も浮き出ている。

「・・・じゃあなんでそんな許せない事が起こる可能性があるのに

泊まって来いなんて言っんですか？」

「ハカセは私の友達だヨ、友達の悩みはできるだけ解決してあげたいネ。」

「……だけど色恋は別ネ、これは女の勝負だから譲れないヨ。」

「だからどうして私の考え事が……こ、恋とかそういう話になるんですか……」 / /

「……女の勘？」

「非科学的です、超さんらしくもない。」

「アハハ、それは冗談として、

ハカセもソプラノを好きになる努力をする約束をしたんでシヨ？

だったら会いに行くくらいはしないとダメだヨ。」

「……もう、分かりましたよ、会ってきます！」

約束も……ありますしね……」 / /

「そうだヨ、約束もあるからネ。」

「約束が……あるからですよ……」 / /

その後私は超さんに追い出せれるように研究室を後にし

ソプラノさんの元へ・・・しゅしゅ・・・行くことにした。 / /

side 超

(ハカセは気がついていないみたいだけド・・・)

さつき私の顔を見た時、すごく悲しそうな顔だったネ。

最悪 ライバルが増えるかも知れないけど、

ハカセにあんな顔はさせたくないヨ・・・頼んだよソプラノ・・・)

side 葉加瀬

「はあ・・・来たのはいいけど、何話せばいいんだろっ?」

私は今エヴァンジェリンさんの家の玄関前にいる。

あれ以上研究室で超さんと一緒にいたら何を言われるか分からないし  
何故か 超さんの顔を見てると居心地が悪く感じたので  
とりあえず来たが……どうしたものだろう。

数分ほどそうして悩んでいると、不意にドアが開き  
中から茶々丸が出てきた。

「玄関前にだれかいると思ったらハカセでしたか。  
いらっしやいませ。」

「あ……茶々丸、そ、その調子はどう?」  
「おかげ様で新しいボディは良好です。」

どうぞ中には行ってください。」

「うん、ありがとう……」

茶々丸に案内され居間に入ると、

何やら奇っ怪な風景が目に見え込んだ。

下着姿の夕映さんがラトナとピュラにそれぞれ腕を拘束され

その姿をエヴァンジェリンさんとソプラノさんがソファーに座り眺めている。

夕映さんは真っ赤になって、逃げ出そうとしているようだが

双子がちりと腕をつかまれているので

逃げる事ができないようだ。

「離してください！ 人前でこんな格好にされるなんて聞いてないですよ！」 / /

「しょうがないだろう、ちゃんと呪紋が起動しているか確かめないといけないんだ、

私達のことなら気にするな、と言うか何度か寮の大浴場で

お互いの裸くらい見てるだろう。」

「エヴァンジェリンさんは良くてもソプラノが居るじゃないですか！

せ、せめて下着だけでも着替させて欲しいです！」 / /

「別に今の下着で十分カワイイよ、夕映。」

だけど意外だね、夕映がそんな大胆な下着を着るなんて。

上はデザイン自体は普通だけど生地の面積が小さめだし、下もローレグなんて・・・

小さな下着から見えるお尻の割れ目が最高です、ごちそうさまです  
「！」

「み、見ないでください！！」 / /

「下着のセンスはいいが、色がな・・・白じゃなくて黒はないのか  
？」

「そんなのあるわけ無いです！ この下着だってエヴァンジェリン  
さんが

無理やり私に持たせたんじゃないですか！」 / /

「そうだったか？」

「そうですね！」 / /

エヴァンジェリンさんが立ち上がり 夕映さんの髪の毛を持ち上げ  
用としている時、

茶々丸が皆に私が来たことを知らせる。

「あの、マスターにソプラノ様、ハカセがいらっしやいました。」

「あ、葉加瀬いらっしやい。」

「ん？ ハカセか、今少し忙しいから座ってお茶でも飲んで待ってくれ。」

ほら 夕映、観念しておとなしくしろ。

髪が邪魔で背中の中の呪紋が確認出来んじゃないか。」

「なんでわざわざここで確認するんですか……」

エヴァンジェリンさんの部屋でいいじゃないですか。」

「あ、私が一緒に見たいっていったからなんだ。」

「ソープラーノーっ！！」 / /

「いや、まさか夕映を脱がして確認するとは思ってなくてさ。」

「おい、茶々丸に姉様、夕映の髪の毛を持ち上げる。」

「髪の毛が多すぎて一人じゃうまく背中が見えん。」

「了解しました、マスター。」

「OK、夕映変なところ触ったらゴメンネ」

「触る気まんまんじゃないですか！」 / /



私はいつの間にか茶々丸がいれてくれたお茶を飲みながら  
ソプラノさん達の様子を眺める。

「ほら姉様、夕映の髪を持ち上げる。」

「了解！・・・あ。」

「ひゃっ！どどこ触ってるですか！」 / /

「あ、ごめん」

「馬鹿やってないでさっさとやれ！」

それから時間にして十分ほど、

皆で夕映さんを陵辱（？）した結果、

検査は無事終了し、呪紋は問題なく起動しているとの

エヴァンジェリンさんの診断結果が出た。

「・・・もう、お嫁に行けない身体にされてしまったです。」

l l l o r n z

その様子を見ていた私は、一つ印象に残ったことがあった。

（茶々丸や双子も・・・みんなすごく楽しそうだな。）

私と超さん、エヴァンジェリンさんで創り上げた娘達、

双子はまだ表情にあまり現れないが、

茶々丸はここでの生活を楽しんでいるようだ。

娘達をこの家に預けたのは正解だった・・・・・・が

その考えとは裏腹に、超さんの笑顔同様、娘達の姿を見るのが辛かった。

（私はソプラノが・・・）

ん？　　まただ、さつき超さんの時にも感じた不快感。

茶々丸達が幸せなのに何故不快感何か感じるんだろう？

夕映さんは服を来て部屋の隅でうずくまっている。

エヴァンジェリンさんはご満悦のようで、上機嫌でお茶を楽しみ

茶々丸と妹達もそれぞれの仕事に戻っていた。

「お待たせ、それで葉加瀬今日はどうしたの？」

「いえ、特に用があったというわけではないんですけど

近くに寄ったもので・・・」

「そうなんだ。

あ、そう言えば茶々丸や妹達の新しい装備のことなんだけど・・・」

その後、私とソプラノさんは茶々丸達の装備や

新しいボディ、追加パーツの話で盛り上がり、

途中エヴァンジェリンさんも参加し 議論を重ねた。

3人で話し込んでいたら美味しそうな匂いがしたので

周りを見てみたら、既に窓の外は陽が沈み  
テーブルには食事が並べられている。

「あ、もうこんな時間なんですか。

そろそろ帰らないとマズイですね。」

「え、もう帰っちゃうの、御飯食べていけば？」

「そういうわけには……。」

「ハカセ、先程超鈴音から連絡があり

ハカセは本日コチラで預かって欲しいと言っていました。」

「え？ どういう事茶々丸？」

「何でも最近のハカセは研究室に籠ってばかりなので

少し気分転換させてやって欲しい、とのことでした。」

「……また、超さんは勝手な。」

「ふむ、そういう事なら別荘を使っていけ。

ハカセに潰れられては茶々丸達が困るからな。」

「いえ、そんないいですよ！」　　――

このままではなし崩しで話が進んでいってしまふ。

私はそう思いなんとか帰ろうとしたがエヴァンジェリンさんやソプラノだけでなく

茶々丸達にも説得され、結局食後に別荘に放り込まれてしまった。

「はあ、何やってるんでしょうかね・・・私は。」

別荘で茶々丸や双子に接待され、マッサージや温泉を楽しんだ後

私は夜の庭園で椅子に座り一人で黄昏ていた。

「ハカセ　元気が無いようですが？」

「あ・・・茶々丸か、そんなことないよ、

ここの所　学園祭の計画がダメになって少し気が抜けてたみたいだけ、

今日はいい気分転換になったよ、ありがとう。」

「そうですか？」

それにしても気分がすぐれないようですが・・・

やはり ソプラノ様をお連れしたほうが良かったのでしょうか？」

「な、なんでそこでソプラノさんが出てくるのよ!？」 / /

「女性は落ち込んだときは好きな男性に慰めてもらおうといいと

データにありましたので。」

「だから、何で私の好きな人がソプラノさんなのよ!」 / /

「体温や脈拍等、ハカセの視線の動きや日常の行動から推測しました。」

「ぐっ・・・」 / /

「ハカセの行動は他の方々と比較しても、男性に好意を抱いている時の

初期行動に酷似しています。」

「その比較した対象に問題はないの?」

「問題ないと思います。」

身近な人と言えば、千雨さんや綾瀬さん、千草さんに宮崎さん、神楽坂さん

佐々木さん、得意な例では桜咲さん等も含まれています。

マスターについては初期の段階のデータが無いので対象には入れていませんが。」

「・・・わかった、もういいよ。」

ここまであからさまなデータと比較されて

それと告示していると言われれば言い訳の仕様もないでしょう。

・・・桜咲さんが若干微妙ですが。

それにしても私がよりによってソプラノさんに好意を抱い・・・てる？

そんなことは・・・あれ？

茶々丸に指摘され考えてみると・・・

今日の超さんや茶々丸達に抱いた不快感は・・・もしかして嫉妬？

私が？ 誰に？ この場合は明らかにソプラノさんに・・・

（え？ 私・・・ソプラノさんに恋愛感情を抱いているということ

っ!?) / /

「どうしたんですかハカセ、顔が赤いですよ?」

「う、ううん! 何でも無いよ!」 / /

茶々丸にデータで指摘され 自分でも自覚してみて

今日のことを思い返してみると・・・

アレは超さんや茶々丸達に嫉妬していたんだとわかる。

(うわ)、科学に魂を捧げた私ともあろう者が、

よりによってソプラノさんに恋愛感情を持つなんて・・・) / /

「ハカセ、本当に大丈夫ですか?」

体温が上昇して心拍数も上がっていますが。」

「だ、誰のせいだと思ってるの!」 / /

「? 私は何もしていませんが。」

「いや、ごめんね、確かに茶々丸は悪くないよ・・・」

ただ人に指摘されて ようやく自覚した私が鈍かったただけだよ。



今後はもう少し冷静に自己分析を出来るようにならないとね・・・」

「指摘・・・ですか、ハカセは今までソプラノ様に好意を持っているという事を」

「自覚していなかったということですか？」

「わっっ！ そんなこと口に出さなくていいのよ！！」 / /

茶々丸に飛びつき口をふさぐ。

タイミングの悪いことに、丁度その時に好意の対象の人物が現れた。

「何か楽しそうなことになってるね、どうしたの？」

「な、何でもない！ 何でも無いから！」 / /

「モガ・・・モガ・・・」

「それにしても、葉加瀬には珍しい行動を取ってるみたいだけど。」

「大丈夫ですから！ 本当に何でもありませんから。」 / /

私は茶々丸を開放し黙っているように指示して、

座っていた椅子に戻り、自分の感情を落ち着けようと必死になる。

(これはまずい・・・自覚した途端にその相手が目の前には、  
どんな顔をしていいか全く解らないよ・・・) / /

「それにしても顔が真っ赤だけど、まあいつか。

どう、少しは気分転換できた、葉加瀬？」

「・・・はい、気分転換はできましたよ、いろんな意味で。」 / /

確かに気分は転換できただろう、

今まで自覚して無かった感情に目覚めたんだから。

しかし いざ自覚してみると新しい問題が出てくる。

(っゝゝ！ な、何を話していいか全く思いつかないよ。) / /

私の気分は落ち着くどころか慌てる一方。

しかもさらに私を追い込むように、茶々丸が席を外そうとする。

「それではソプラノ様、私は仕事がありますのでハカセをお願いします。」

「ん、りょーかい。」

「ああ・・・そんなぁ・・・」 / /

(ど、どうしよう こんな時は何を話していいか・・・)

「あ、あの！ 今日はいいい天気ですね？」 / /

「え？ そ そうだね・・・ここは夜だけど。」

やってしまった、魔法球の中で今は夜、

この状態でイキナリ天気の話も無いだろうに・・・

「ま、まぁ、葉加瀬も研究で忙しいのはわかるけど

根を詰めすぎてもダメだよ、たまには休まないと。」

「はい・・・すみません。」

(これは・・・イキナリ天気の話なんかしたから、

まさか、疲れて頭がおかしくなってるでも思われた!？」

1111

「だ、大丈夫ですよ、本当に！」

疲れてどうかなってるとかそう言っのじゃないですから！」

「う、うん、わかってるよ。」

・・・そう言えば、こうやって葉加瀬と二人っきりで話すのって初めてかもね。」

「・・・そうですね。」 / /

ソプラノさんの何気ない二人っきり と言う言葉に反応してしまい  
顔が熱くなる。

それからしばらく二人で学校のことや学園祭での事を話すが

最初の方で何を話していたのか覚えていない、

後半の学園祭の話でようやく落ち着いて話ができるようになってきた。

「そう言えば 飛行船の上で超を追い込んでいた時に

まさか葉加瀬があんなこと言い出すとは思ってなかったよ、

今にしてはいい思い出けど・・・

「ただ、あの時私が葉加瀬の言う通りにしてたらどうする気だったの、

女の子なんだからもう少し自分を大切にしないとね。」

「あ、アレは・・・なんと言いますか、

超さんが見ていらなくて、私にあの時できることを考えたらああいう結果に・・・」 / /

「気持ちはわかるけど、今度ああいう事になったらもう少し落ち着こうね。」

「ハイ・・・」

「・・・でも、あの時葉加瀬がああ言ってくれたから

超がうまく説得できたし、私も葉加瀬を口説こうかなーと思ったんだけどね。」

「えっ!?!?・・・ど、どういう事ですか?」 / /

「ほら、あの時は私も少し超を追い込みすぎたかなー と思ってたんだよ、

あの後どうやって超を説得しようか考えてたんだけど・・・

そんな時に葉加瀬が横から話に参加してくれたから。

葉加瀬を引き合いにして超に持ち札を全部使わせて

計画の失敗を受け入れさせることができたし。

あそこで超に全力を出させずに中途半端で終わったら

後でまた何かやらかす可能性があったし。」

「違います！ 私を口説くとかそっちの話です！」 / /

私は 口説く気になったという話を聞きたくて、

つい ソプラノさんに正面からしがみつき 詰め寄る形になる。

「あ、そっちの話？」

「そっちの話ですよ！」

「話す、話すから落ち着いて……」

「あっ！？ すいません。」 / /

「葉加瀬を口説くとか言うのは……」

それまでは葉加瀬は好きだったけど

友達としてって言うだけで 特に口説こうとか、

女の子としてどうこうとかは思ってたんだよ。

でも、葉加瀬が超のために自分を捨てても・・・っていうのを見て  
いい娘だな〜って思ってた。

だから葉加瀬と超に情報を教える対価として

私を好きになる努力を〜って条件をつけてみたんだ。

「・・・そんな感じなんですけど。」 / /

「・・・そ、そうだったんですか。」 / /

その話を聞いて最初の方は自分を女の子として見てもらえてなかったと

がっかりしたが、話を聞くにつれ あの時の私を褒めてやりたい気分になる。

昔はどうか知らないが、少なくとも今は私を女の子として見てくれて

口説こうとした、ということだ。

……実際は既に口説かれつつあるのだが。

「で、どうかな葉加瀬、そっちの努力の方は？」

「……ま、前向きに努力しています。」 / /

「え……？　そ、そうなんだ……」 / /

それから私とソプラノさんは、お互い特に話すこともなく

茶々丸が寢室の準備ができたと呼びに来るまで、二人で庭園で過ごした。

1807

茶々丸に寢室に案内されベットに潜り込んだが

ソプラノさんとの話が忘れられず、その日は眠れずに悶々としていた。

翌日、一晚眠れずにいたおかげで　私はひどい顔をしていたようで

茶々丸に寢室に連れ戻され、お粥を食べようやく眠り



起きた頃には別荘から出て、エヴァンジェリンさんの家でもう一泊。精神的に疲れていたようで、意外にすぐ眠ることができ

翌朝、着替の為 早めにエヴァンジェリンさんの家を後にし寮に帰ることにした。

「ハカセく、朝帰りとはなかなかやるネ」

「……よく言いますよ、自分で仕向けたくせに。」

「あんまり怒らないで欲しいネ、ハカセが疲れてるみたいだったから気分転換になればいいと思っただけだヨ。」

「ええ、いい気分転換になりましたよ、本当に！」 #

「そんなに怒らなくてもいいじゃないカ。」

「別に怒ってませんよ、少しムっとしてるだけです。」

「人、それを怒りと呼ぶネ。」

「まあ、いいですよ。」

・・・そうですね、超さんには言っておきましょうか。」

「ん？ なんだネ？」

「私・・・ソプラノさんが好きみたいです、

超さんは親友ですが、ソプラノさんとくつつくには協力できませんから。」 / /

「・・・やっとハカセも自覚したみたいだネ。」

「知ってたんですか？」

「バレバレだったヨ。」

ライバルになるか、運命共同体になるか、

その辺は解らないけど、親友として これからもよろしくネ」

「はい」

こうして私の悩みの一つは解消され

新たに悩みが増えたが、以前までのように滅入ることはないだろう。

「でも、私の方がリードしてるから、

ハカセも頑張らないと 差を取り返せなくなるヨ。」

「もうっ！ 分かってますよっ！！」 / /

神様から頼まれたお仕事。 その49（後書き）

49話目 投稿

次回更新は2日くらい開くかもしれません。

神様から頼まれたお仕事。 その50

学園では1学期の期末テストも終わり

あとは夏休みへと一直線、

学園内の雰囲気も期末テスト前よりかなり明るくなり

クラスの皆も 夏休みをどう過ごすか、と言う話題で盛り上がっている。

ちなみに、期末テストの結果は最下位はまぬがれたもの

下から3番目でなんととも言いがたい結果だった。

そんなのんびりとした日常を送っていると、

珍しく学園長から連絡があり、少し相談したいことがあるとの事だった。

「……今日は一体何のようだジジィ。」

「うむ、エヴァ君にソプラノ君、よく来てくれたの。」

今日は特に何かあったというわけではないんじやが、

ちよつと相談に乗ってもらいたいじや。」

「珍しいですね、学園長が相談に乗って欲しいなんて。」

学園長室で応接用の椅子に向い合って座り話を聞く。

「実はネギ君達が図書館島で司書の……」

あそこの司書は紅き翼のアルビオレ君にやってもらっているんじやが

そこでネギ君の父親の話を聞いてきたらしくての。

神楽坂くん君から英国文化研究倶楽部というクラブを作って

イギリスに研究に行きたいと言う申請があつての。

表向きには言わなかったが、夏休みを利用してイギリス、

さらには魔法世界に行くつもりのように……

「一応今は検討すると言っているが、どうしたものかと思っている。」

「ふん、そんなことか・・・どうせイギリスに行っても

奴らだけでは魔法世界へのゲートは使用できない。

放っておけばいいだろう？」

それが嫌なら許可など出さなければいい。」

「そうですねー学園長が許可でもしない限り大丈夫だとは思いますが・・・

でも、確か向こうにはネギ先生が通ってた魔法学校があるんですよね？

そこの校長あたりが許可証を発行したらマズイのでは？」

「ふむ、儂としてもそれが心配なんじゃ。」

「一応釘をさすことは出来るのじゃが、

万が一許可を出されても彼らだけでは向こうの世界では心許なくっての。

「一応向こうにも知り合いがいるので、

最悪面倒を見てもらうことは出来るのじゃが・・・」

「そうですね・・・ダメだと抑えこむとネギ先生の事ですから  
一人で勝手にイギリスに行きかねませんし

ネギ先生が行けば何人かはついていくでしょうし。

ここはイギリスまでで止めて、

向こうにも魔法世界への通行許可を出さないようにしてもらい

最悪、ゲートを通った場合に備えて魔法世界の知り合いって人に

向こうで見はってもらうのがいいんじゃないですか？

今のネギ先生なら魔法世界の危険性を説いて聞かせれば

そんなに無茶はしないでしょーし。」

「やはりそんな所かの。

僕としても魔法世界に行くこと自体はいいのじゃが

彼らだけでは心許なくての、それにまだ早い。

せめて高畑君の開いている時間が合えばいいんじゃないが・・・」

学園長が考えていたことも私とだいたい同じような内容だったようで

新しい案が出なくて悩んでいるようだ。



それにしても学園長の向こうの知り合いというのは

元老院関係・・・は無いが、彼らの思想は危険過ぎるし。

今はクルトの掃除が進行してるから向こうも切羽詰っているだろうし。

となるとラカンさんか？

ここは確認しておいたほうがいいかも知れない。

「時にお聞きしますが、

学園長は魔法世界ではラカンさんに依頼するつもりですか？」

「ひょつ、ソプラノ君は彼の知り合いなのかな？」

「何回か見たことがあるだけですよ、

丁度今度の週末に彼に依頼をしに行こうと思ってるので

司書さんと知り合いならそうなのかな」と思ってる。「

「ふむ・・・まあ、君ならいいじやろつ。

確かにラカン君に頼もうかと思ってる、

魔法学校の卒業試験が終了した後

彼にネギ君の修行を頼もうと思っておっての、

些か時期が早まるが、今回の事でネギ君達が

向こうに行ってしまったら彼に護衛と修行を頼もうと思っておる。

儂としては君が何の依頼をするのが気になるがの・・・」

「まあ、そこは学園長の邪魔になるような話じゃないから

安心していいですよ・・・たぶん。」

「・・・おもいつきり不安になったんじゃが。」

「取り合えず話はそれだけか？」

「ならば私たちはもう行くが。」

「うむ、手間を取らせて悪かったの。」

話も終わったようなので、席を立ち学園長室から出る。

「じゃあ行こうかエヴァ」

「ああ、ジジイ もう少ししたら例のモノの進化を手伝えよ。」

「うむ、わかった。」

学園長室から出て家に帰る途中、

私は気になったことがあるのでエヴァに話をしてみた。

「さっきの学園長の話だけど、

もしかしたら夕映もイギリスに行くかも知れないね。」

「・・・宮崎か？」

「うん、私達が話したら心配して付いて行くことするだろうし、

それに多分 本屋ちゃんが話すと思うし。」

「確かにな・・・」

「エヴァはその時どうする？」

「私は別に夕映の好きにすればいいと思うが・・・」

呪紋が間に合ったのが幸いしたが、

それでもアイツ一人だと多少心もとないな。」

「そうだね、スライム娘達がついていくとしても

ネギ先生がトラブルに巻き込まれた最悪の時、

私達みたいに放って自分と本屋ちゃんだけ逃げるとか

できないだろうからね。」

「そうだろうな・・・そうなると道連れにされるか。」

「だから私としては千雨と茶々丸について行って欲しいんだよね。」

「何でその二人なんだ？」

千雨はまだわかるが茶々丸が行く理由が解らんのだが。」

「千雨は話せば行ってくれると思うけど、

やっぱりあの子も優しいところあるから判断面で心配だね。

その点、茶々丸なら厳命しておけば最悪の時は

強制的に連れて行ってくれるだろうし、電子的サポートもできるからね。」

茶々丸には悪いけど、最悪の2択の場合は彼女なら選んでくれるでしょうし。」

「確かにそういう信頼度で言えば茶々丸なら問題ないだろう。」

「超に頼んである長距離無線を使えば

魔法世界に居る限り連絡は取れるだろうし

連絡が取れば私とエヴァがいけるからね。

皆に発信機を着けてもらって、茶々丸を中継すれば居場所の把握もできるし。」

今回の魔法世界では放っておいたら原作よりメンバーが少なくなっ

て最悪ネギ先生達が全滅の危機になりかねない。

できるだけメンバーは変えず、さらにサポート体制は完全に取っておきたい。」

「千草や超はどうする?。」

「超は茶々丸達の装備研究と訓練だね、

千草は茶々丸が抜けた分家事を頑張って貰わないとダメだろうし。」

まあ、最悪の場合を考えてみたけど、

普通にイギリス観光で終わる可能性が高いからね。」

「あのぼーやの場合に限っては常に最悪のケースを想定したほうがいい、

その上で奴は必ずその少し斜め上に行くだろうな、  
準備しすぎて困ることはないだろう。」

「そうかもね、エヴァと戦って氷漬けにされ、

修学旅行ではあんな事件に巻き込まれ、帰ってきたら悪魔が来て  
学園祭では超にあんな時計を貰い拳句に1週間後に飛ばされる。

こんなの誰も予想しないよ。

もしかしたらイギリスに行ったら変な世界に紛れ込んで竜王に会って  
世界の半分貰って帰ってくるんじゃない？」

「絶対にありえない話だが完全に否定することもできん・・・。」

1111

「とりあえずこの話は皆にはまだしないでおこうよ、

週末魔法世界に行くのに そんな話を聞いてたら皆楽しめないよ。」

「そうだな、奴らにとっては観光だと言ってあるからな。」

家についた私とエヴァは 今回の学園長の話はとりあえず置いて、

その日は週末の旅行の準備をして過ごした。

それから数日、学園長もイギリス行きの話をししばらく保留にし

ネギ先生達の訓練の進行次第で結果を出す、

と 神楽坂さんに話した結果、ネギ先生達は訓練にさらにヤル気を出し

凄まじい上達速度だと学園長も喜んでいた。

しかし、私はその話に一抹の不安を抱えていた。

私達はというと、週末の観光の話しで皆盛り上がり、

超や葉加瀬も今回は一緒に行くので

家に来て、私達にどんな所か説明を受けては、観光の計画を立てていた。

週末の早朝、とうとう魔法世界観光に出発し、

最初はMMを観光、超は今の魔法世界の様子に感動した様で着いた当初は目に涙を貯めていた。

クルトは家にいるか確かめたがしばらく帰ってこないようで、今はオステイアの方にいるという話をメイドさんから聞いた。

本日の旅館の当てがなくなってしまう、

しょうがないので今日の宿は予定を繰り上げて転移し

自由交易都市 グラニクスで宿をとることにした。

皆には街を観光してもらい、この街や魔法世界の状況を知ってもらおう。

私は千雨だけを連れ、

この街のハズレに住んでいるというラカンさんを尋ねることにした。

「なあ、先輩 双子や千草さんじゃなくて何で私をつれてきたんだ？」

「今回会う相手に、ある依頼をする予定なんだけど



その説明にエヴァか千雨じゃないと説明が難しい内容があつてね。

そついう事で千雨には観光できなくて悪いけど付いてきてもらったんだ。」

「い、いや、私は先輩と二人つきりだから逆にいいんだが……」  
／／

その後、千雨と腕を組んで目的地まで歩いていく。

「ほら、見えてきた。」

あの家に水場に居るって話だよ。」

「へへあんなところに住んでるのか。」

どんな人なんだ、そのラカンって人は？」

私も何回か見たことがあるだけだから人格についてはなんとも言いがたいけど

巨漢で見るからに強そうな人だった……かな？」

「何で疑問形なんだよ……」

「いや、なにせ何十年か前の話だったし。」

「・・・もう　なんとか面影が分ければ良いレベルじゃねーか。」

「だ、大丈夫だよ、早く行こう！」　1111

私は先行して水場へ向かって進み、

千雨もやれやれといった様子で渡しについてくる。

水場に着くとパラソルを差してその下で

昼寝をしている男の人がいた。

「あの～すみません、ジャック・ラカンさんでしょうか？」

「・・・・・・・・ZZZ・・・・・・・・ZZZ・・・・・・・・」

「すみませ〜ん、起きてくれませんか？」

「・・・・・・・・ZZZ・・・・・・・・ZZZ・・・・・・・・んがっ・・・・・・・・ZZZ。」

「

#

私は男の人の頭を蹴飛ばし、池にぶち込む。

「おい！先輩なにしてんだよ！？」

これから依頼をしようって奴を蹴飛ばしてどうするんだよ！」

「ゴメン、ゴメン、他の人ならこんなこと無いんだけど彼だついで・・・」

「ついじゃねーよ！」

まったく、先輩が人を問答無用で蹴り飛ばすところなんか初めて見たよ。」

その後すぐに池の方で水柱が立ち、

私達の目の前に蹴り飛ばした男の人が飛んできた。

「おいおい、人が寝てるとこいきなり蹴り飛ばすなんて

どんな教育受けてんだ・・・って、なんだ可愛い嬢ちゃんの二人組か。

俺を蹴り飛ばした奴はどこ行ったか知らねーか？」

「あ、それ私です。」

なかなか起きてくれなかったので、少し目覚ましが必要かと思いまして。」

「黒い方の嬢ちゃんか、なんだ サインでも欲しいのか？」

普段だったら1サインにつき10万だがせっかく着てくれたんだから特別にただにしてやるぜ。」

「違いますよ、今日はラカンさんをお願いしたいことがあってきたんです。」

話の前にまずコレを読んでくれませんか？」

私はポシエットからクルトの紹介状をだしてラカンさんに渡す。

「ん？ なんだこりや・・・クルト？ へへ 懐かしい名前だな。」

んっ・・・メンドクせえ。」

「おいおい・・・」 1111

そう言ってラカンさんは手紙を読まずに脇にあったテーブルの上に放る。

「この手紙を持って来たってことはあいつと知り合いなんだろ？」

だったら大抵のことは聞いてやるぜ・・・もちろん金次第だな。」

「ありがとうございます、お願いしたいというのは

ラカンさんが今度受ける予定の仕事で

ネギ・スプリングフィールドの護衛と修行というのがあると思うんですけど、

あってますか？」

「おう、確かにそんなことを頼まれたな。」

ラカンさんは隠すつもりは全く無いようで、あっさり話してくれた。

やはりこの人相手は変な小細工よりも正面から言ったほうがよさそうだ。

「その依頼でネギ先生・・・あ、私は彼が教師をやっているクラスの生徒なんですけど」

ネギ先生の修行で機会があったら

この巻物の魔法を習得させてあげて欲しいんです。」

ポシエットからエヴァの闇の魔法の巻物を出しテーブルに置く。

「なんだこの巻物？　かなりヤバイ魔力を感じるが、何の魔法だ？」

「口で言うより見せたほうが早いと思いますので

お見せしますね、千雨　お願いね。」

「……このために私を連れてきたのか……ったく。」

千雨は着ていたローブを置くと集中し、

麻痺の射手を1矢手に出し待機状態にする。

「何だその魔法か？」

「いえ、ここからです。」

「ちゃんと見ててくれよ……術式固定！」

「おっ!?!」

「……掌握！」

「おいおい、そういう事か……」

「魔力充填、術式兵装！」

「コレがこの巻物で習得できる闇の魔法です。」

「マシかよ・・・闇の魔法って言ったら、

あの 闇の福音、黒百合の主の魔法じゃねーか。」

「・・・あの黒百合の方はあまり口に出さないようにお願いします。

本人がすごく嫌がるので。」

「ん？ エヴァンジェリンを知ってるのか？」

「ええ、私の妹です。」

それで闇の魔法についてですが、

よかったらこれから千雨が攻撃しますので防御してみてくださいませんか？」

「おう、いつでも来なメガネの嬢ちゃん。」

千雨はラカンさんの了解がとれたので腹部に向かってストレートを打つ、

ラカンさんはそれを受けるが、

受けた瞬間に全身に電気が流れ体がしびれだす。

「あばばばば・・・っく、気合抵抗！」

ラカンさんはどういう原理か、気合でしびれを克服し通常の状態に戻る。

千雨は自分の役目は終わったとばかりに闇の魔法を解除し

置いていたローブを着直す。

「何だ今のは、パンチ自体はヘナチヨコだったが痺れはハンパなかつたぞ。」

「闇の魔法は魔法を取り込んで、その魔法の属性や効果次第で様々な強化がされます。

今のは彼女のオリジナル魔法、麻痺の射手を取り込んだので

彼女自身にスピードをメインとした身体強化と麻痺効果が付加されました。

ですから彼女のパンチで身体が痺れたんです。」

「すげー魔法だな・・・だが俺様には無理っばいな。」

「ええ、お察しの通りこの魔法はある種の才能が必要で

彼女も魔法を覚える才能はあつたんですが、

器が小さいために取り込める魔法に限界があります。



そこで話は戻りますが、

ネギ先生の修行の時に貴方が彼を見て大丈夫だと判断し 彼が望んだ場合、

この巻物を渡して闇の魔法を習得させてあげて欲しいんです。」

「・・・ふむ、話はわかったが 俺様が教えるよりその嬢ちゃんか

エヴァンジェリン本人が教えてばいいんじゃないか？

嬢ちゃんはエヴァンジェリンの姉なんだろう？」

「そこは複雑な事情があつて私やエヴァが彼に関わるのは望ましくないんです。

かと言って彼に潰れられても困る、

そこで万が一のために保険として貴方にこの巻物を預かって欲しいんです。」

「わかった、だが条件がある。」

「お金でしたらできるだけ希望に添えるようにしますけど？」

「いや、面白いモノ見せてもらったから金はいらねー、

だが 黒いお嬢ちゃん、アンタと一戦やってみてーな。

「アンタかなり強いだろ？」

「いえいえ、私なんて全然ですよ、学校じゃ病弱で有名ですし。」

「嘘だな、嬢ちゃんの学校のことは知らねーが、

そこら辺の魔法使いより弱いとはとても思えないな。

「って言うかパツと見、力の底がわからねー。」

「……困りましたね。」

「お金に関しては用意していたが、

まさかこんなことを頼まれるとは思わなかったし。

かと言って私とラカンさんが戦えば

周辺にどんな被害が出るかわかったものじゃない。

「……そうですね、私がそれなりに本気で一度だけ攻撃しますので

それをラカンさんが受けるって言うのでどうですか？

「こんな子供を殴る趣味もないでしょうし。」

「ああ、いいぜ。」

そのかわり俺様も本気で防御するから中途半端な攻撃だと

そっちが怪我するぜ？」

「そうですね・・・じゃあ剣を使つていいですか？」

「何でもいぞ。」

私はローブを脱ぎ、腰のカバンから黒鍵を一本出し魔力を多めに込め刀身を出す。

「では突きを一回だけだしますので剣なり楯なりで受けてくださいね。」

「・・・おう、いつでもきな嬢ちゃん。」

「では、行きます。」

私は黒鍵を右手で持ち、腰を落とし右手を引き剣先はラカンさんに向け

左手は刀身に添え、牙突の構えを取る。

ラカンさんは自身の身長ほどの一本の大剣を出し、

それに気を流し防御の体制を取る。

ラカンさんの準備ができた所で、身体能力を8割ほどにし

変則の縮地で突っ込み、右手でラカンさんの大剣に突きを放つ。

この縮地の歩法は黒鍵を投擲する時の鉄甲作用を

突きの威力に乗せれないかと考えて編み出した歩法で

突きや移動ののスピードは落ちるが剣先に

突進するスピード、私の体重、突きの威力とスピード、さらに鉄甲作用が乗るので

エヴァの障壁も簡単に貫通することができる。

まあ、ラカンさんは大剣に気を通して防御に徹しているので

大丈夫だとは思うが・・・

黒鍵の剣先がラカンさんの大剣にあたった時に感触が無い。

マズイと思ったときにはもう遅く、あっさり大剣を貫通してしまっ  
た。

そのまま大剣を串刺しにしたまま数メートル程進んでようやく止まり

ラカンさんの安否を確認するが、

とっさに身体を回転させて回避行動を取ったようで、

脇腹を押さえていたが、それほど深手ではなかったようだ。

「大丈夫ですか・・・？ ラカンさん。」

「おいおい嬢ちゃんマジかよ・・・」

剣の防御も魔力障壁もあっさり貫通か？

舐めてたつもりはなかったしそれなりに気合は入れたんだが

コレは本気で防御しても抜かれるな・・・

ハハハッ！ 回避が間に合わなかったら俺様も串刺しだったな！」

「・・・笑い事じゃないですよ、本当に。」

「いいじゃねーか、この程度の傷で済んだんだ。

それにしても予想以上に強いな、流石闇の福音の姉というだけはある。

どうだ？ 今度は本気で一試合やらねーか？」

「やりませんよ……でも、約束ですから巻物の件お願いしましたよ。」

「ああ、任せとけ。」

嬢ちゃんに心配させちまったみたいだしな、

ナギのガキが来た時にはちゃんと覚えさせてやるからな。」

「いや……彼が望んだ時だけでいいんですよ……」

「わかったわかった、それにしてもまだじょうちゃん達の名前を着てなかったな、

そっちのメガネの方は千雨でいいのか？ で、嬢ちゃんはなんて名前なんだ？」

「私はソプラノです、ソプラノ・マクダウエルです。」

あっちの娘は、長谷川千雨です。

もしかしたらこの娘とは又会う機会があるかも知れませんが

その時は宜しくお願いしますね。」

「おう、まかせとけ。」

「え？ 私がまたこのおっさんに会う用事があるのか？」

「そこはもしかしたらって言うくらいの話だよ。」

「ふうん、まあいいか。」

千雨が若干納得行かない様な表情をするが

深く聞いても無駄だと悟ったのか、あっさり諦めたようだ。

「そうだ、ソプラノ達は今日の宿はどうするんだ？」

泊まる所がないならここに泊まっていてもいいぜ、

お前達なら特別にただにしてやるよ。」

「いいえ、町のほうで連れが待ってますので一旦街に戻りますよ。」

「そうか、またこっちに来たときは顔出してくれよ。」

今度はソプラノの攻撃を本気で受け止めれるようにしておくからよ。」

「それは御免被りますが、こっちの方に来たときは顔を出せてもらいますね。」

「じゃあ、行こっか千雨。」

「ああ、じゃあおっさんも元気だな。」

「千雨の嬢ちゃんもな。」

ラカンさんの住む水場を後にして私と千雨は街に帰る。

しばらく千雨と二人っきりで色々楽しんだあと、

エヴァ達と合流しその日は町の宿屋で宿泊、

翌日アリアドネーや新オスティアなどを観光し

私達は学園の家に帰ることにした。

オスティアでクロトに会えないか聞いたが仕事でダメとのこと、

話を聞く限り、ここの総督になってるとかどうとか、

ということは掃除の方は予定より遅れたが 無事終わったのだろう。

コレで千雨や夕映、茶々丸に魔法世界を一通り体験してもらえたし

都市の情報も得られたはず、

超にこっそり各地に連絡用の中継器も設置してもらったし、

原作通りにいかないのが安全上は一番いいが、全員がバラバラに飛ばされても



この世界の地理情報を与えてあるので

すぐにでも街に避難することが出来るだろう。

side 千雨

「千雨はん、旦那さんと二人っきりの時に変なことしとらへんやろな？」

「変なことってなんだよ……まあ、変なおっさんにはあつたな。」

「変なおっさん？ なんですのその人。」

「なんて言ったらいいか……でかくて非常識に強いな。」

私の麻痺の射手を気合で耐えて解除したり

先輩の攻撃を正面から受けようとしたりしてたな。」

「なんやのそれ？」

「まあ、私もちよつと話したくらいだし、大して解らねーよ。」

「ふうん……で、旦那さんと変なこととはしとらへんよな？」

「千草さんもしつこいな……」

「千雨はんがちゃんと答えへんからやないか。」

「へ、変なことはしてねーぞ……変なことはな。」 / /

「……今日はウチが旦那さんのところに行きます。」

文句はあらしまへんよね？ 千雨はん。」

「……くっ、わかった。」

だが、エヴァには内緒にしといてくれ……アイツにはれると後がうるさい。」

「わかりました、コレは貸しにします。」

「はあ、本当に頼むよ千草さん。」

「はいな」

「まったく……早く先輩の部屋に逃げ込めばよかったよ……」

千草さんは上機嫌で先輩の部屋に向かったが……

慌てた様子ですぐに戻ってきた。

「千雨はん！ 旦那さんどこに言ったか知りまへんか！？」

部屋にも居間にもおらしまへんのや。」

「いや、私は知らねーけど・・・」

「ソプラノを探してるんですか？」

「夕映はん知ってますん？」

「ソプラノなら超さんに引きずられて外に出ていきましたけど、

なにか、超さんが旅行のお礼に是非ご馳走したいと言っていましたけど、

「何やて！・・・あの女狐めえ！！」 #

（いや、狐キャラはアンタだろう・・・）

千草さんは慌てて外に出かけていったが、

その後 どうなったのか私には解らなかつた。

神様から頼まれたお仕事。

その50（後書き）

50話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その51

私達は学園に戻り、翌日から通常通り授業に出る日々を過ごし、とうとう皆が待ちに待った夏休みに突入。

夏休みに入ってから千雨はこっちの家はずっと泊まり込み、

夕映もほぼ1日おきに寮とエヴァの家を行ったり来たりの生活をしている。

超と葉加瀬、エヴァが別荘で茶々丸達の兵器開発や鍵の解析作業に入り

千草と双子を交えた実戦向けの修行をし

私は修行が終わって別荘から出てきた千草と

世界樹周辺や久しぶりに村の方にも顔を出してのんびり過ごしている。

そんなある日、エヴァが変なことを言い出した。

「ぼーや達の修行の様子を見に行くぞ。」

「……は？ 何で急にそんなことを？」

「超からぼーや達の修行の話聞いてな、

今現在の程度やれるか気になったのもあるが、

私の闇の魔法を覚えさせる可能性があるからには

一度この目で見ておこうと思ってな。」

「あ、そういう事なんだ。」

ん……じゃあ学園長にでも聞いてみようか。」

学園長に確認を取った所、

今日の夕方から魔法球で訓練をするとのこと

その時に超と一緒に私とエヴァが見に行くことになった。

その後 皆で修行したり双子のコスプレ披露会を開いたりしながら  
すこし

夕方、学園の魔法球へ出かけた。

学園所有の魔法球内部

コチラの内部はエヴァのとは違い、内部は学校の校舎や合宿が出来そうな宿泊施設に温泉も完備されていた。

丁度私達がついた頃、ネギ先生達が戦闘訓練をしていて

ネギ先生は長瀬さんと体術の訓練中のようにだった。

「お、皆やってるね。」

「え？・・・超さんとソプラノさんに・・・エヴァンジェリンさん！」  
「！！！」

エヴァの姿を見たネギ先生の顔が一瞬で青くなる。

ネギ先生の声で気がついた神楽坂さんも同様で

対照的に刹那さんがうれしそうな表情になる。

「超から貴様達の修行の話聞いてな、暇だったから見に来てやったぞ。」

「修行中にごめんね、あ、これスポーツドリンクと果物の盛り合わせ、

みんなで食べてね。」

「あ、はい、ありがとうございます・・・」

ネギ先生に荷物を渡して、私とエヴァは脇のベンチに座り、

私達の横に案内役なのか、刹那さんが座る。

超は魔法戦闘の訓練の相手をするように、

長瀬さんと交代し、ネギ先生と訓練を開始した。

しばらくその様子を眺めていたエヴァが痺れを切らしたのか口を出し始めた。

「おい、いつまで準備運動をしているんだ？

さっさと本気でやらないか。」

「あの、エヴァンジェリンさん、アレがいつもの訓練なんですけど・・・」

「なに？ あんなぬるい事をいつもやっているのか？」



「はい・・・エヴァンジェリンさんの所はいつもはどんな感じなんですか？」

「いつもは普通に私が相手をしているだけだが？」

「・・・エヴァ、それじゃあ解らないよ。」

えぐっと、いつもはエヴァが相手に合わせて・・・」

「相手に合わせて？」

いつものエヴァの修行風景を思い出す・・・

戦闘訓練では 相手に合わせてはいるが、

基本相手が大怪我しない程度にボコボコにしているだけ、

それが終わった後には悪い所を指摘され精神的に追い込まれる。

だが、なんて説明すればいいだろうか・・・

「相手に合わせて、怪我しないように・・・ボコボコにしてるかな。」

刹那さんから目をそらして、事実を言っつ。

「・・・ボコボコですか、

やはりエヴァンジェリンさんはそういう感じなんですか・・・」

刹那さんも予想はしていたようで、

納得の表情だった。

エヴァの台詞を聞いていた小太郎君が

古ちゃんとの訓練を止め、向こうからやってきてエヴァに噛み付いた。

「おう、嬢ちゃん俺達の訓練がぬるいっていうなら

さぞかしそっちは凄い訓練をしてるんやろな？

せやったら是非とも俺に教えてくれへんか？」

「ちょっと、小太郎君！」

「ほほう、面白い狗だな。

よし、では私が直々に訓練をつけてやるう。」

「エヴァンジェリンさん、小太郎君も落ち着いて、

ソプラノさんも止めてください！」

「あゝ、エヴァがこうなったらもう無理ですよ。

あ、医療関係の魔法が使える人を呼んでおいてくださいね。」

私と刹那さんがそう話している間に二人は闘技場の中央へ移動していき

ネギ先生達は私達のいるベンチへ集まり二人の様子をみている。

「あ、アスナさん 小太郎君は大丈夫かな・・・？」 1111

「ほっときなさいよ、何回言っても分からないんだから

あのガキは一度痛い目にあつたほうがいいのよ。」

「エヴァンジェリン殿程の御仁ならうまく加減するでござろ？」

「・・・エヴァちゃんに加減する気があれば・・・ね。」 1111

一度エヴァと戦って力を見ているネギ先生と

その光景を見たことのある神楽坂さんは小太郎君の無事を祈るのみ。

対照的にエヴァに好意的な刹那さんや、

エヴァの実力が見れることが嬉しい長瀬さん古ちゃんは楽しそうな表情で

その他のメンバーはそれぞれ心配そうに二人をみている。

そんな中でついにエヴァと小太郎君の訓練という名の公開いじめが開始。

開始と同時に小太郎君が突っ込むが、

あっさり数メートル程投げ飛ばされ、着地点に魔法の射手を

数十本打ち込まれ小太郎君はガードするしかない状況に追い込まれる。

なんとか耐えたものの、エヴァはすでに背後に移動しており

小太郎君を空中に蹴り飛ばし、

自身はすぐに瞬動で空中に移動して、

まだ蹴られた衝撃で体制を整えられない小太郎君を地面に叩きつけ、

詠唱を開始。

「あゝ、エヴァの通過儀礼か・・・」

「な、何ですか？ 通過儀礼って？」

「アレはね刹那さん、エヴァと訓練したものは皆通る道なんだよ。

一応念のために解凍用の魔法薬を持ってきておいてよかった。」

「か、解凍用って・・・ソプラノさん、エヴァンジェリンさんは

まさかアレをやるんですか？」 1111

「そう、ネギ先生も一度経験したアレですよ・・・」

地面に叩きつけられたがなんとか耐えた小太郎くんが

エヴァを探して空を見上げる・・・が

既にエヴァの詠唱は完了しており、アレが放たれる。

「ハハハッ！ 行くぞ狗っころ、えいえんのひょうがー!!」

エヴァの魔法が放たれた時には

既に一度経験して詠唱から判断したネギ先生が

皆の前に立ち魔法障壁を展開し、皆を極低温から守る。

超もすぐにエヴァが何をやるか気がついていたようで

私の背後に立ち 私と一緒に魔法障壁で守ってくれた。

こうなったらもうエヴァは絶好調、

周りの皆は二人の試合の様子を見て顔面蒼白、

なぜか刹那さんだけが尊敬の眼差しでエヴァを見ているのが気になったが……

「さあ、仕上げだ！ こおるせかい！！」

エヴァの魔法で小太郎君の氷像のいっちょ出来上がり。

ご機嫌のエヴァは空で高笑い、

対照的にネギ先生達はかなり不安な様子で小太郎君の氷像を見つめている。

その後、エヴァが戻って来たので 私が魔法薬で小太郎君を解凍し、

近衛さんがアーティファクトを使い回復魔法をかけ

小太郎君の身体は試合前の元気な状態に戻ったが

精神的にポロポロのようで、これ以降エヴァに二度と口答えする」とはなくなった。

「・・・まあ、あんな感じですよ、エヴァの修行は。」

「ゆ、ゆえがあんなに強くなったのがわかる気がする・・・

強くならざるを得なかったんだね。」 1111

「流石に毎回あんな目に会うのはゴメンでござるよ・・・」 1111

「私もあんなの相手じゃどうしようもないアルヨ。」 1111

「・・・あの、私もエヴァンジェリンさんと訓練させてもらえないでしょうか？」

「「「「「「「「ええっ!?!」」」」」」」」 1111

「ほっ、面白い刹那。」

本来なら断るところだが貴様の訓練をつけてやるぞ。」

「はい、ありがとうございます！」

ご機嫌の刹那さんを連れ、エヴァは再度闘技場へ。

その後 刹那さんは本気でエヴァに向かっていったが

ボロボロにされ木乃香さんが急いで治療、

刹那さんはボロボロにされたが何か掴めたのか

満足そうにエヴァにお礼を言っていた。

それを見たネギ先生が恐怖を克服するために、

自分も訓練をつけて欲しいと頼み

つられて長瀬さん古ちゃん神楽坂さんも参加、なぜか超も巻き込まれ、

五対一の訓練が行なわれたが、結果は当然のごとくエヴァの圧勝。

その後 皆を治療して家に帰った私達、

エヴァはその日 一日中上機嫌で過ごした。



この日以来、ネギ先生達の戦闘訓練が増し

打倒エヴァの目標が掲げられたと言う。

しばらくそんな夏休みを過ごしていたが

ネギ先生達と委員長を代表にクラス何人かが海に遊びに行くというので

夕映と千雨も一緒に参加、

私と千草、エヴァと茶々丸、超と葉加瀬は家でのんびり留守番をすることにした。

家で過ごす私達は現在居間でエアコンを付けてくつろいでいる。

超と葉加瀬は技術的な話をしている私にはチンプンカンプン、

エヴァはソファに座り携帯ゲーム機でゲーム中、

茶々丸と双子は皆のお茶の用意をして、

千草は私の横に座り読書をしている。

私はというと、スライム娘達にお菓子とジュースを提供する代わりに

彼女達の水温（？）を低めにしてもらい

私に張り付いてもらっている。

コレが柔らかいやら冷たいやらでこの時期最高に気持ちがいい。

ソファーに寝転がる私に三人がそれぞれ覆いかぶさって

皆でお菓子やジュースを楽しんでいる。

「しかし、日本の夏は暑いね。」

もう一步も外に出たくないよ、いっそ夏休み中この娘達とずっと家で過ごす！」

「そやるか？ 確かに暑いけど家の中でじっとしてるのもあきませへんぞ。」

「そうだぞ姉様、そんな所でダレてないで

もっときちんとしてくれ。」

「とうか、そいつらを独り占めするな。」

「……でもエヴァ、千草もインチキしてるよ、私知ってるんだよ、」

千草が帯の内側に体温調節の呪符を隠しているの。」

「あら、バレてました？」 / /

「それはもちろん知ってるよ。」

この間 悪代官ごっこやった時に帯から落ちてきたからね。」

「あの時ですか、アレはよかったんやけど、目が回るのが難点やね。」

「……姉様達は何をやってるんだ。」

「エヴァもやりたかった？」

「やらんっ!!」

「ちえー、アレはアレで面白いのに。」

「そっだ、千草も私にもその呪符頂戴。」

「ええですけど、ある程度伸ばして貼らないとあきまへんから

その洋服には貼り付ける所がありまへんで？」

「ん〜、じゃあ浴衣に着替えてくるよ。」

よし、あめ子、すらむい、ぷりん、君達も浴衣に着替えるんだ!」

「めんどくせー。」 「わかりました。」 「・・・追加でオレ  
ンジジュース。」

「ほなウチは呪符の用意してきます。」

「・・・おい、千草、私の分もだ。」 / /

「あ、千草サン、私の分も頼むヨ。」

この服はポケットが深いから呪符も真っ直ぐ入ると思っシ。」

「わ、私もお願いしていいですか？」

白衣の裏地に貼りつけねばいいと思っつので。」

「・・・はあ〜、はいはい、わかりました。」

茶々丸はんはラトナはんピュラはん、

しばらく給仕は頼みましたえ。」

「「「了解しました。」」」

その日はそんな感じで皆のんびり過ごし、

夏休みを楽しんでいた。

翌日、ジャンケンに負け エヴァとお菓子の買出し当番になった私達は

買い物のついでに学園に寄り

ネギ先生達のイギリス行きの話がどうなったのか聞くことにした。

「ジジイ入るぞ〜。」

「学園長こんにちわ。」

「・・・また今日はなんとというか・・・意外な格好じゃな。」

私とエヴァは両手にお菓子が詰まった買い物袋を下げ

学園長室に着ていた。

「うっ、うるさいジジイ、私にも都合というものがあるんだ。」 / /

「今日は私達が買い物当番になってしまって・・・」

で、ついでにこの間のネギ先生達のイギリス行きの話が  
どうなったのか聞こうと思ってきました。」

「ふむ、あの話か。」

「一応向こうの魔法学園の校長にできたら許可を出さないように頼んで  
イギリスでの調査のみということで許可することにした。」

あと念のために魔法世界の方では

いつでも動けるようにラカン君に頼んでおいたんじゃが・・・

ソプラノ君向こうで何かやったのかの？

ラカン君が君に是非ともよろしくと行っておつたんじゃが・・・

できたらネギ君と一緒にこっちに遊びに来いとか。」

「あはは・・・別にたいしたことはやってないんですけどね。」

仕事を頼む時にちょっとあつただけで。」

「そうか？ 特に問題ないようならいいんじゃないか。」

「そう言えば、ぼーや達の修行の方針はジジイが決めてるんだっ  
たな、

少し気になったんだが、あの修行はどういう方針なんだ？」

「君が興味をもつなんて珍しいの、

ふむ、彼らの修行の方針はまだ彼らの身体は成長途中ということであまり肉体に負担のかかる修行はせずに、

今は基礎とそれを柔軟に使える思考と応用力、

後は覚えが良い今の時期に難度の高い

無詠唱魔法や瞬動、虚空瞬動等の技術を教えておるの。

アスナ君に関しては咸卦法の発動速度や持久力も鍛えておるが。

何か気になったことでもあったかの？」

「・・・いや、そういう事ならいいんだ。

特に問題もないようだし 私が特に口を出すようなことでもあるまい。」

「そうかの？ ならいいんじゃないが。」

「それじゃあ学園長、私達は皆が待ってるのでこれで失礼しますね。」

「うむ、それでは。」

「邪魔したな、ジジイ。」

学園長室から出て家に帰る途中で、

さっきのエヴァの質問について聞いてみた。

「エヴァは何かネギ先生達の訓練に関して思うことでもあったの？」

「……いや、ジジイのやり方はそれはそれで悪くない。

ただ、闇の魔法の件があるだろう？」

それで な……」

「……器の事か。」

「ああ、アレを使うつもりなら

今の内にできるだけ器を大きくする修行をするのがいいんだが、

まあ、使うかどうかわからんし、私の弟子というわけでもないしな。

口を出す必要もあるまい。」

「そっか……」

エヴァの闇の魔法は取り込む魔法が強ければ強いほど良いし



複数取り込めばその効果も複数乗る場合があるため

器が大きければ大きいほどいいのだが

器以上に取り込んだら暴発の危険性もある。

だから器は大きい方がいいのだが、

今のネギ先生はその訓練をしていない。

器が大きくても制御できなければ取り込まれる危険性が増すが

これは闇の魔法を覚えてない今はどうこうできる話でもないので  
関係ない、

この事がどこかで変な方向に働かなければいいが。

家に帰ると、丁度魔法球の研究施設から出てきた超と葉加瀬に会い、  
大事な話があるというので私の部屋に案内して話しを聞くことにし  
た。

「色々話すことはあるんだけど、

まず鍵の方だが大まかな調査が終わったネ、

もう少し詳細に調べることはあるがこの件は目処が付いたと思ってもらっていいネ。」

「そうなんだ、流石超と葉加瀬、

その調子なら他の部分で少し余裕ができそうだね。」

「いえ、私はデータを処理したくらいでほとんどは超さんのおかげですよ。」

「葉加瀬の処理が早いからこそこっちの方も手際よく進んで助かったヨ。」

その後茶々丸達の武装の話では、対人用武装については目処が立っているそうで、

対軍用でも以前私が出した注文で本当にいいか確認されたくらいで

特に問題はないそうだ。

「しかし、なんであんな兵器を思いついたのやら、不思議でたまらないヨ。」

「アレは昔見たロボットアニメであったんだよ、

条件が整った状態でアレを敵陣に打ち込んだら

一発で戦況が変わるだろうからね。」

「そしてその状況はソプラノにしか作り出せない……カ？」

反則にもほどがあるネ。」

「まあ、アレを使わないのが一番いいんだけどね。」

「確かにそうですね……あんなの防ぐ方法なんて無いですよ。」

「茶々丸の最強の手札だからね。」

それじゃあ、予定よりも超の仕事が早いから先行して

別のお願いをしようかな？」

「どこまで人使いが荒いのか……」

「ゴメンネ、でもコレは世界中で多分 超しかできない事なんだよ。」

「……まあ、そこまで頼られるのは悪い気はしないが、

とりあえず内容を聞こうかな？」

その後、1時間程かけて超と葉加瀬と話し合い、

私の計画の最後に必要な装置の開発について検討を重ねる。

「……前に聞いた時にも信じられなかったけど、

本当にやる気なんだネ、ソプラノは。」

「時間は十分稼げる、技術は超が用意できる、

組織的な援助はクルトが済ませてくれるし

元老院の正常化には、

皮肉にも完全なる世界が後押ししてくれることになる。

現状の手札でも問題ないけど、もう一枚手札が欲しいかな。」

「ソプラノは欲張りだネ……でも、

この方法なら私の前の計画よりも更に最良の結果が残せるからネ、

私も全力でがんばるヨ。」

「私も頑張ります!」

「うん、二人共ありがとうね。」

これが終わったら皆で 何の憂いもなくのんびり生活を送れるから

ね、

その時は二人も思う存分楽しんで。」

「わかったヨ……でも 私としてはそのためにも葉加瀬には是非とも

頑張て欲しいんだけどネ……別の意味デ。」

「？ 私が何を頑張るんですか？」

「そこは後で二人つきりで話そうカ、ソプラノの前で話すことでもないからネ。」

「？」

超と葉加瀬は話が終わった後、

茶々丸達にお茶をご馳走になってから帰っていった。

神様から頼まれたお仕事。

その51（後書き）

51話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その52

ネギ先生達が海から帰り、

千雨や夕映も帰宅。

なぜか海に遊びに行ったのに、帰ってきたら人数が一人増えてたが  
アレがネギ先生の幼なじみって人かな？

ちょっと見ただけだが おしゃまな感じの可愛い子だった。

その日の夕方、

茶々丸と双子、千草が夕食の支度をしている時に

夕映が困ったような顔をして私を訪ねてきた。

「ソプラノ、相談があるんですが 少しいいですか？」

「ん、いいよ、何か困ったことでもあったの？」

あ、でも 恋愛相談はエヴァがいるところでされたら困るけど・・・

「

「違うですよ・・・流石にエヴァンジェリンさんがいる所で  
そんな事を相談する勇氣はないですよ。」

「・・・何で貴様の恋愛相談が私に聞かれると困るんだ？」

「き、気にしないでください！」

それよりも聞いて欲しいのはのどか達のことなんですよ！」

1111

この話を深く探られるとマズイと思ったのか

夕映はすぐに話しをすり替えてごまかそうとした。

「本屋ちゃんがどうかしたの？」

「はい、実は以前から話は聞いていたんですが

海に行った時に相談されたことなんです。

ソプラノは初めて聞くかも知れないですけど

アスナさんが部長として英国文化研究倶楽部というのを作っただけ  
です。

名目上はイギリスの文化を研究する、ということなのですが



実際はネギ先生のお父さんを捜す手がかりを追うために

イギリスに行く口実として作られた部活なんです。」

「へーそんな部活を作ったんだ、

その目的なら本屋ちゃんも参加してるんだらうね。」

「はい、のどかも参加しているのです。」

それ自体はいいんですが、ここからが問題で……」

「……ふむ、大方この夏休みを利用して

イギリスに観光に行こうということか？」

「はい、そうなんです。」

「別にイギリス観光なら行けばいいんじゃない？」

「……あ、お金の相談でもされた？」

「ちがうです、のどかはちゃんと貯金とかしてる方なので

そんな相談は受けません、それに部活の活動費用で

捻出できるという話ですし。」

「じゃあなにが問題なんだ？」

「・・・実は、ネギ先生の父親の手がかりは魔法世界にあるそんなんですが

イギリスに行つてネギ先生の実家を調べた後に

向こうのゲートを使って魔法世界に行こう、

と朝倉さんとハルナが企んでいるようでした。

その旅行に私も一緒に来ないか？

と、のどかとハルナに誘われてるんですよ。」

「・・・魔法世界に行くのにはネギ先生や神楽坂さんはどんな反応してるの？」

「話の当初はネギ先生が一人で行くつもりだったようですけど

神楽坂さんが止めて、その後のどかや他の皆と話した結果 みんなで行こう、

と言つ話になつたんですけど、

今度はネギ先生と神楽坂さんがあまりのり気で無いようで・・・

学園長にも注意されたと言つてたこともあつて、

イギリスで調査だけと言つたことになつたんですけど、

あの二人が唆さないか心配で・・・」

やはりネギ先生と神楽坂さんへの教育はいい方向に進んでいるみたいだ。

安全重視で皆をできるだけ巻き込まないように考えるようになってくれている。

しかし、今回の事が父親の事が絡んでいるだけに

そう簡単に諦めがつくものでもないか・・・

何か一押しあったら神楽坂さんはともかく、

ネギ先生はちょっと危ないな、親のことだからこればっかりはしよ  
うがないか。

「それで、夕映はどうしたいの？」

「私はできたら一緒について行ってハルナが暴走しないように

見張っておきたいんです、

朝倉さん一人なら騒いでも大丈夫だと思いますし。」

「うん・・・エヴァどう思おっ？」

「ふむ……夕映一人では少し心もとないな。

止められなかったりした場合 魔法世界に付いて行くことになるんだらう？」

お前一人ならスライム娘達もいるし大丈夫だと思うが

周りに足手まといがいる状況ではきついだらう。」

「……やはりそう思いますか。」

『エヴァ、前話した通りの展開になってきたね。』

『うむ、となるとやはり千雨と茶々丸を同行させるのか？』

『それしか無いだらうね、行くなと行っても聞かないと思うし

行くなら準備だけはさせて置いてあげたいからね。』

『……仕方がない、茶々丸は私から話すからいいが

千雨は姉さまが説得しろよ。』

『りょーかい。』

「……じゃあ夕映、こう言うのはどう、

千雨と茶々丸と一緒に連れて行くって言うのは？」

「え？ でも、こんなこと頼んでもいいんでしょうか？

皆に迷惑では……」

「二人には私とエヴァから話しておくよ。

夕映一人で行かせるには心配だし

なんだかんだ言ってもクラスメイトだからね、

話を聞いたら二人共皆のことも心配すると思うし

費用が出るなら　ただでイギリス観光が出来るって言うことでしょうか？

そう考えれば夏休みの旅行だと思えばかなり贅沢な話だよ。」

「……そうですか。

な、なら　お願いできるですか？

ソプラノ達の話の後に　私からも二人にお願いするので

話しておいてくれますか？」

「OK」　そうとなったら日程が決まったら教えてね。

後一応最悪のことを想定して

夕映達三人にはそれなりの装備を用意するから持って行ってね、  
ネギ先生達も参加人数がわかったら人数分の発信機を用意するよ、  
もしはぐれたりしても茶々丸に調べてもらえばすぐに分かるから。」  
「ありがとうございます！」

皆さんにはお世話ばかりかけて申し訳ないですよ……」

「私には夕映の愛で返してくればいいからね」

「……じゃ、じゃあ何か考えておくです。」 / /

「ほう……面白い事を言っじゃないか、夕映。」

ならば私には何をしてくれるんだろうな？」

「うっ……そ、その……考えておくです。」 1111

私がつい 夕映をからかったおかげで

エヴァが変な矛先を夕映に向けてしまい、

夕映は引きつった笑顔でエヴァに対応している……少し悪いことをしたかも。

それから少し話をした後、夕映は寮に帰り

続きは夕映の報告を待ち、

私とエヴァはそれぞれの準備をしてその日は夜を迎えた。

食事も終わり、入浴、寝間着に着替えて

私の寝室のベッドで千草とまったりしていた時。

「……ねえ千草、少し嫌な話していいかな？」

「どないな話ですやるか？」

「あらい改まって……」

「千草のね、復讐の話なんだけど。」

「……確かにこれから旦那さんと寝ようっていう時に話す話やあらしまへんな。」

千草の表情が硬くなり、私の手を握る力が入る。

「実は千草の復讐する人が、一人追加されるかも知れないんだよね。」

「

「どごういっ事やるか？」

「千草の御両親が亡くなったあの戦いが

誰かの何らかの目的で作為的に起こされたものだとしたら

その誰かは復讐の対象になる？」

「なります。」

千草は真っ直ぐ私の目を見てすぐにそう答える。

「即答か・・・やっぱりね。」

「旦那さんにはそいつが誰かわかってますの？」

「・・・見当は付いてる、名前や今いる場所とかは解らないけど

ある組織のトップだからね、その組織を追っていけばわかると思う。

「

「そうですね・・・旦那さん、ウチとの約束は覚えてくれますやろ  
」？」

「うん、だから千草にはその人に復讐する機会を用意するつもり。

・・・だけど、もし人に復讐するつもりなら



少し私のお願いを聞いて欲しいんだけどな。」

「まずは旦那さんの話しを聞かせてもらいましょか。」

それから私と千草はベツトで時間をかけて話をし

最終的には納得してもらえたが、

私が今まで隠れて動いていたことも説明しなければならぬこととなった。

「……今までそないな大層なことをウチにも隠れてやってはったんですか。」 #

「なんと言いましょうか、千草を巻き込むわけにはいかないと思いまして。」

しかし、今回の事で千草との約束を守るためにも

話さざるをえない状況に相成った次第でございます。」 orz

ベツトの上で正座で座る千草に私は土下座の体制で話を続ける。

「・・・話を聞いて理解はできません。

せやけどウチを仲間はずれにして エヴァはんはともかく

超はんや葉加瀬はんとこそこそやっていたのは面白く有りまへんな。

」

「彼女達はどうしても必要な人だったので・・・」

「せやから理解はしてる言ってますやろ？」

「・・・でもウチは旦那さんの従者やろ？」

自分の主が黙ってこそこそやつとつたら面白くありまへんで、

そこは分かってはるんやろな？」

「はい、分かっております。」

「せやつたらどうしますの？」

「はい、今後この件に関しましては千草さんには一切隠し事はしません。

それと今宵は誠意を込めて千草さんにご奉仕致したく存じます。」

「主が従者に奉仕してどないするんや、

ウチはそないな情けない主は要りまへんえ。」

「……で、ではどうしたらいいでしょうか？」

「それくらい自分で考えや……言いたい所やけど

情けない主を支えるのも従者の務めやから教えたるわ。」

「ありがとうございます。」

「……ウ、ウチが旦那さんのモノやっではつきり分かるように

ウチを好きなようにつこうたらええんや。」 / / /

「……え？ そ、それって……」

「こないな恥ずかし事何回も言わせんなや！」 / / /

「……うん、ゴメンネ、情けない主で。」

私は土下座の体制から起き上がり、千草の手を取り

その手を撫でる。

「そないな事最初からわかってます、

せやけどしょうがないやん……こいつの惚れた弱みい  
うんやろな。」 / /

「……じゃあ惚れさせた責任を取らせてもらおうかな。」 / /

「はいな………せやけど中途半端なことや許しませんで。」

千草が隠し事をしていた事で拗ねてしまい

機嫌を直してもらう方に更に時間がかかり、

結局私が眠れたのは陽が登ろうかという時間だった。

千草の方は途中からほとんど意識が飛んでたみたいだけど……

翌日、午後になりようやく私と千草が目を覚まし

居間に入るなり 遊びに着ていた千雨とエヴァに白い目で見られたが

以後ことが悪かったのは私だけで、千草にいたっては

余裕の表情で二人の視線を流していた。

エヴァが先日の夕映のイギリス行きの話茶々丸に話すついでに  
千雨にも大体の話をしていたようで

私が千雨に話すことは大して無かった。

「・・・そういう事でエヴァからも聞いたと思うけど

千雨と茶々丸には夕映に付いて行ってあげて欲しいんだよ。」

「私も海に行った時に綾瀬達はその話をしていたのは聞いていたけど

まさかこんなことになるとはな、

まあ、イギリス旅行に行けると思えば安い駄賃か。」

「最悪の状況になったら高くつくと思うけどね。」

「そうならないように私達がついていくんだろ？」

茶々丸も向こうではよろしくな。」

「はい、千雨さん。」

「とりあえず夕映が本屋ちゃん達に二人も付いて行っていいか？

って言うのと一緒に行く人の人数とか聞いてきてくれるから

続きの話はその後でね。

人数が増えたことで旅費が出た場合は私が補填するから

そのへんは心配しないでね。」

「ありがと先輩、しかしイギリスか」

確か食事がマズイって話を聞くけどどうなんだろうな？」

「文化的な事情もあるけど、最近は昔よりマシになったって聞くし最悪茶々丸がいるから作ってもらおうといいよ、お菓子は美味しいって言うし。」

「そうだな、茶々丸には向こうで色々世話になる可能性が高そうだ。」

「なにを言っているんだ？ お前は今でも十分世話になりっぱなしだろう？」

「うっ……や、やっぱり私もこの家に住むようになったら

なんか家事を担当したほうがいいかな？」 1111

「少なくとも今のお前に料理は任せたくはないぞ、私は。

イギリス料理より酷いものが出てきかねん。」

「ば、馬鹿にするなよ！

寮では一人で住んでるんだ、

料理も掃除、洗濯もそれなりにはできるんだからな！」

「それなりだろう？ それではやはり料理は任せられんな。」

「そう言うエヴァは何が出来るんだよ？

せいぜい裁縫位だろう。」

「私の裁縫技術を舐めるなよ！」

「エヴァの裁縫技術は認めてるよ、他に何が出来るのかって話だよ。」

「わ、私がやらなくても私が作った従者がやれるならば

それは私がやったことと代わりはあるまい。」

「……自分で言ってる、少し苦しいと思わなかったのか？」

「う、うるさい！」 / /

居間ではいつものように千雨とエヴァの言い合いが始まったが

兎にも角にも千雨と茶々丸が一緒に行ってくれることになり

ネギ先生達のイギリス行きはとりあえずマシなものになるだろう。

夕映からイギリス行きの参加メンバーを聞き

千雨や茶々丸の参加も無事認められたようで、

私達は準備を進めつつ、出発の日まで過ごす。

超がネギ先生達の訓練に参加する日に

私と夕映、千雨にエヴァ、茶々丸もついて行ったが

海から帰ってきた時からたまに学園内で見ると

アーニヤちゃんと言う娘が訓練に参加していたようだが、

エヴァの顔を見るなり真っ青になって震えだしたり

私の顔を見るなり真っ赤になったり、なかなか面白い娘だと思った。

後で聞いたのだが、エヴァのことは闇の福音として



私の事は、性別の件は隠してあるが、

夕映と契約しているということが、本屋ちゃん経由で知られたらしく  
私と夕映が百合の関係だと思われるようで、

自己紹介をされた時、

ソプラノお姉様とか呼ばれた時はさすがにびっくりした。

夕映も困ったような表情をしていたが・・・

いったい彼女はどんな説明を聞き、どんな想像をしたんだろうか？

茶々丸の装備の方は旅行に間に合うもので、

携帯できるタイプの物のテストをしている取せてもらったが

超のファンネル（？）のような物4機と高周波ナイフ

それにレールガンを用意してくれた。

あとイギリスに行く時は、補助電源装置もあるということ  
かなり充実したものとなった。

千雨の方も闇の魔法はなんとかエヴァに合格点を貰えるレベルになり、

一度雷の暴風を取り込んだところを見せてもらったが

移動速度や雷系魔法の効果UPも凄いが、

砲撃魔法の詠唱速度がかなり上がったおかげで

かなり凶悪な感じになっていた。

もともと かなりの遠距離でも届く魔砲なので

集団相手だと近づく前に一方的に蹂躪されることだろう。

夕映の方も呪紋に慣れてきたようで

戦闘中でも問題なく呪紋の使用を切り替えられ、

超に燃える天空を習ったおかげで

連発こそできないが、ここぞという時の火力不足に悩むこともなさそうだ。

スライム娘達もチャチャゼロに鍛えられたこともあり

夕映もそろって4人揃っている状態なら

大抵の困難にも耐えられるだろう。

こうして、ネギ先生達に同行して3人がイギリスに行く日を迎えた。

エヴァ家 玄関前

「皆大丈夫？ 忘れ物とか無い？ パスポートは持った？」

「……先輩はお母さんか。」

「ソプラノは心配すぎですよ、

持たせてもらった装備だって こんなに必要なんですか？」

「念には念を重ねてだよ、エヴァと超の特製小箱に入ってるから

かさばらないし持つてることもバレずに済むでしょ？」

「それはそれでありがたいんですが……」

「まあまあ、いいじゃないか。」

ソプラノが皆のことを心配するのは愛情の深さだと思えばいいネ。」

「そういう事しておくよ・・・」 / /

「同じくです・・・」 / /

「はい。」 / /

「・・・皆現金なことだね。」

茶々丸、みんなに持たせた発信機の動作は問題ないかな？」

「はい、現在もバッチをつけてる皆さんの位置は把握出来ています。」

問題なく動作しています。」

「少し性能を上げようと思ってギリギリまで作業しましたが」

問題なくてよかったですね、超さん。」

「そうだね、動作テストも問題なく終わってるから大丈夫だとは思  
うヨ。」

3人とも荷物も発信機も問題ないようで私としても一安心だ。

「よし、では貴様ら3人に言うておくが、

最悪の状況でお前達の命と他の人間とどちらか選ばなければならな  
い時になったら

迷わず自分達を選べよ、お前たちは何があっても絶対帰って来い。」

「エヴァンジェリンさん出発前に縁起が悪いですよ……。」

「いいから黙って聞け、綾瀬夕映。」

常に最悪を想定しておけ、

お前達にはその最悪から生還できるだけの準備はさせた。

私と姉様がそこまでやってやったんだ、

貴様らが揃って帰ってこなかったら師としての面目がたたんし姉様が悲しむ、

お前達は何があっても帰って来い、わかったな？」

「……ハイ!」「」

(エヴァ……?)

エヴァが弟子や従者思いだとしても、

この口上には何か違和感を感じる……が

気のせいだろうか？

「じゃあ 皆元気でね、生水には気をつけてね。

変な人について言ったらダメだよ？」

「だからソプラノはお母さんですか・・・」

「じゃあ、先輩行ってくるよ、お土産には期待してくれよ。」

「行ってくるですよ、ソプラノ。」

「では、行ってきますソプラノ様。

ラトナ、ピュラあとは頼みましたよ。」

「行ってらっしゃいませ、茶々丸姉様に千雨さん、綾瀬さん。」

「私の分のおみやげも忘れないでヨ。」

「皆さん気をつけてくださいね。」

「シヌナヨ〜。」

「縁起が悪いわ、悪魔人形！

・・・皆さん行ってらっしゃい。

茶々丸はんエヴァはんはウチらが面倒見ておくから安心してや。」

「ふん……まあ、せいぜい頑張つてこい。」

「皆、歯を磨くのを忘れてたらダメだよ、お風呂もちゃんと入るんだよ。」

「はいはい、ソプラノ母さん行つてきます。」

そして3人はネギ先生の実家、

イギリスへ旅立っていった。

「……あ、でもあの娘達つて夏休みの宿題終わらせたっけ？」

「……やってないんじゃないか？」

「ウチも終わったとは聞いてまへんで。」

「シユクダイツテナンダ？」

「そうですね、確か半分くらいしかやってないと思いますよ。」

「あの3人共、夏休みの宿題は未完成です。」

「まあ、無事帰れたらせいぜい苦しむといいさ。」

「そういうエヴァもやってないけどね。」

「私はいんだ、茶々丸にやらせ……………いないじゃないか！」

「……………」

「自分で頑張つてね。」

「自分でやるネ。」

「私も流石にちょっと……………」

「どつせなら皆の分もやってあげたらどつですやろっ。」

「ナア、シユクダイツテナンダヨ？」

「宿題とは学校などで生徒に課される自己学習の課題、

ノルマのようなものです、チャチャゼロ姉さん。」

「……………なんていうことだ、この私が自分で宿題をやるなど……………」

「……………」



「いや、エヴァはどんなに宿題やりたくないのよ……」

神様から頼まれたお仕事。

その52（後書き）

52話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その53

ネギ先生達と千雨達がイギリスに出発したが、

その日の昼に千草と学園内を散歩していると

どうもいつもと様子がおかしい・・・というか、

中等部の女子寮近辺がいつもより静かだ。

超包子でお茶のついでに葉加瀬に話を聞いたところ、

委員長を筆頭に何人がイギリスについていったと言う話だった。

「・・・何を考えているのか、こんなことなら委員長を巻き込んで

スポンサーになってもらえば千雨達の旅費（おみやげ代）を

補填できたかも知れないね。」

「そうですね、それにしても最近の中学生は剛毅やね。

ほとんど思いつきでクラスメイト連れ立って海外旅行やなんて。」

「・・・委員長は規格外なんだよ。」

「わ、私の研究費もネギ先生が関係するといえは  
委員長がスポンサーになつてくれますかね？」

「帰ってきたら聞いてみれば？」

「っていつか、葉加瀬 研究費足りないの？」

「・・・はい、超さんの計画に参加していた時は

超さんが出してくれてたんですが、

これからは関係ない部分では部活の経費が自費なので

少しきつくなるんですよ。」

「そうなんだ。」

じゃあ、私の注文する物とか請け負ってくれたら

研究費少し出してあげるよ。」

「本当ですか！？ 是非やらせてくださいー！」

「・・・旦那さん、葉加瀬はんに何作らせるつもりなんや？」

「べ、別に変な物作らせようとしてるわけじゃないよ。」

ちよつと最近私に対するエヴァの態度に横暴な面が目立つから嫌がらせで、

妙に心をささくれだてる表情と電子音声でしゃべるAI搭載の

エヴァの生首人形を作ってもらって、

エヴァの寢室に仕込もうかと思っただけだよ。」

「……そういう事するから、

エヴァはんの態度が悪くなるんとちゃいますか？」

「AI搭載の心理兵器ですか？」

実に興味深いですね！ 早速開発に入りたいと思いますっ！！！」

「葉加瀬はん……。」「 1111

葉加瀬はMADモードに入って脳内で人形のプログラムを考えているのだろう。

千草も諦めた様な表情で葉加瀬を見つめるだけで

それ以上何も言うことはなかった。

3人＋スライム娘達のいない家は少し静かになったが

それでも超と葉加瀬、それに五月さんが夕食を作りに来てくれたり  
私達は楽しい夕食時を過ごしていた。

飛行機の乗換の時に茶々丸から連絡があったが

特に問題ないようなので、その日は私達もそのまま就寝した。

翌日もいつも通り平穩にエヴァの相手をして過ごし

夕方に茶々丸から連絡をもらったが、

向こうでやはり委員長達と遭遇したらしく、

ネギ先生の故郷まで着いてきたが特に問題は無いということだった。

今日は超達は来なかったが 私達は夕食を済ませ就寝。

寝室で寝ていた私とエヴァは早朝 ラトナとピュラに起こされるこ  
とになった。

『先輩・・・マズイことになった。』

「どうしたの千雨、委員長達に魔法でもバレた？」

『そっちのほうがどれだけましか・・・いや、マジじゃないがこっちも十分マズイ、

・・・明日の朝、魔法世界に行くことになっちまった。』

千雨の話を聞いたエヴァと千草はやっぱりか、

という感じで諦めの表情だ。

「・・・はあ、どういふ経緯でそうなったの？」

『ネギ先生の故郷で向こうの魔法学校の校長に会ったまでは良かったんだ。』

向こうの校長も魔法世界に行く話は避けてくれたみたいだったしな。

『

「じゃあ、なんでそこから魔法世界に行くことになったの？」

『向こうの地下室でネギ先生の故郷の人達が石化されてる実物を

皆が見ちまったんだよ。

ネギ先生の幼なじみが神楽坂や宮崎達を連れてな……」

「朝倉さん達は？」

「アイツらは実物は見なかったんだが、

様子のおかしい神楽坂達から話を聞いてな、

そこからだ、朝倉と早乙女が口火を切ってネギ先生の父親の情報や

石化の解除方法の情報が魔法世界に無いか？ って話になって

ゲートが近くにあるなら調べに行こう、とか言い出してな。」

「ふむ、ぼーや達はどうした？」

「ネギ先生と神楽坂は最初は反対してたんだよ。

だけど、本屋や近衛と桜咲が石化した人達を見たせいで

朝倉達の意見に乗ってな、綾瀬も強く反対できなかったみたいだったから

私が反対しては見ただが、無理だった。

遠まわしに非難までされたよ。」

「そう……お疲れだったね千雨。」



『まあ、あいつらの気持ちも理解はできるからその件はいいんだけど、』

ネギ先生も本当は行きたいんだろうけど、教師という立場もあるし

向こうの世界の危険性は学園長からしっかり聞かされてるのもあって

賛成とは最後まで言わなかったんだが、

向こうの校長が妙に気を効かせてくれたせいで

ゲートの出口の都市から出ない、

引率についての魔法使いの指示に従う。

と 言う条件で魔法世界を実際に体験し都市で情報収集をする、

って感じの妥協案になっちまって……』

「……まあ、しょうがないよ、」

千雨はよくやってくれたみたいだし。」

『……あの、ソプラノ？』

すみませんです、私も冷静に考えれば反対できたんですが

あの石化した人達を見てしまったせいで

どうしても強く反対できなくて。』

「いいよ夕映、気にしないで。」

「おい、茶々丸聞いているか？」

『はい、マスター。』

「二人も聞いておけ。」

いいか、向こうに行ってもし最悪の事態になった時はわかってるな？

お前達3人は絶対帰ってくるんだぞ。」

(・・・やはり 以前からこの件に関してのエヴァの態度は腑に落ちないな・・・)

『了解しました、マスター。』

『・・・わかったです。』

『ああ、分かってる、そのための装備も預かってるしな。』

「あなた達3人のMMでの武器の携帯許可証が装備品の中に入ってるから

それを向こうで提示しなさい。」

「クルトに用意してもらったものだから問題なく持ち込めるはずだよ。」

『了解。』

流石に向こうに行って暴走するようなら、力づくでも止めてやるよ。」

「ん、じゃあ皆頑張ってるね。」

『ああ、先輩達もこんな時間に急に連絡して悪かったな。』

『おやすみ。』

『おやすみです。』

『おやすみなさい。』

「…………おやすみやあらへんかな。」

「……ここはもう朝や…………少し早過ぎるけどな。」

『…………おやすみ。』

それから私達は少し早い朝食をとり、

超達が起きるであろう時間に超と葉加瀬を家に呼んだ。

「さて、悪い方の予定通りネギ先生達が魔法世界に行く事になりましたよ っと。」

「あゝ、やっぱりそうなるの力。」

「マズインじゃないですか？」

「まあ、面白くはならんな。」

「……こつちは朝から叩き起されて最悪や。」

千草はまだ機嫌が悪い様で

皆が私に 「どうにかしろ！」 という視線を送ってくる。

「……あ、あの千草？」

「何ですか？」

「ち、千草の怒った顔もかわいいよね。」

千草以外の皆は 「お前は 何を言ってるんだ？」 という表情で私を睨みつける。

「……………」

「…………千草？」

「…………もう、いややわぁ 旦那さん」 / /

(( (え？ 今のでいいの？) ))

言ってみた私も 自分でかなりやっちゃまった感じが強いと思ったが、  
どうやら正解だったようで、

この後少し話しただけで千草の機嫌は治ってしまった。

「そ、それでこれからどうするネ？」

「あ、ああ……とりあえずお前達二人には

持ち出せる研究器具をすべて別荘に放り込んでもらって

城の部分だけ持って私達も先行して魔法世界に行こうと思う。」

「了解ネ。 でもこの件があったから最近ほとんど別荘で研究し

ていたネ、

着替を少し用意するくらいですぐにでも出発出来るヨ。」

「私は少し荷物があるので・・・ラトナとピュラの二人を借りていいですか？」

重い物もあるので。」

「ん、わかった、ふたりともお願い出来る？」

「了解しました、ソプラノ様。」

「じゃあ、私達は・・・エヴァ、村の方に行って苗木を数本持つてこようか？」

丁度いいから少し先行して植えてデータを取って行かない？」

「ふむ、わかった。」

問題は無いと思うが、早く植えて損をすることはないからな。」

「超の方も例のヤツ 丁度いいから向こうで実験して

うまく行くようなら先行して設置していいこうか。」

「了解ネ、向こうで実験できるなら予定より早く実働に移せると思うヨ。」

コチラも同じく早ければ早いだけいいからネ。」

「千草の準備の方は大丈夫？」

「こっちも大丈夫やで、方陣と呪符に時間がかかるけど

それも向こうでも出来る作業やしな。」

「よし。」

それじゃあ 皆そういう事で準備に入ってね。」

こうして私達はネギ先生達に先行して魔法世界に入ることとなった。

「所で向こうの拠点はどうするの力？」

「私達の心強い宿屋さんに頼むつもり。」

丁度オスティアの総督になってるっていう話だしね。」

「確かに、アイツは頼りになるな。」

「？ まあ、二人がそう言うなら信用するネ。」

その頃、オスティアのある執務室では……

「……なにやら嫌な予感がしますね……以前この感覚があった時は

彼女に酷い目に合わされましたが、今度は何を押し付けられるやら……」  
「……」

クルトは手元のベルを鳴らし秘書官を呼ぶ。

「お呼びでしょうか？ 総督。」

「今日これから私を訪ねて……数人ですかね、女性が訪ねてくると思いますが、

彼女達の戯言はすべて無視していいですから

黙って私の所に連れてきてください。」

「はぁ……連れてこればいいんですね？」

「そうです、彼女達……主に長い黒髪の女性が

ある事ない事言うつかも知れませんが黙殺してください。」



「かしこまりました。」

「お願いします。」

ただし、くれぐれも 丁重 お願いします。

決して機嫌を損なわせないように。」

「わかりました、よく分かりませんが 丁重且つ耳を貸さずに連れてきます。」

オステイア総督、クルト・ゲーデル。

彼の勳は、ある人物によって無理やり鍛えこまれていたが、

今回のこの先手を打った対応は、余計な注文を付けたせいで逆に被害が拡大し、

後日彼のスキャンダル記事が新聞に載るのだった。

翌日

「はぁ・・・此処に来るのももう何回目か、

とにかく、今回 は来たくなかった・・・。」

「千雨さんは何回か来たことがあるんですか？」

「ん？ ああ、先生か・・・私と夕映、茶々丸は何回か来たことある。」

「そうですね・・・その時はどんな感じでしたか？

やっぱり危険な生物に襲われたりしたんですか？」

「いや、そう言うのはなかったな。」

私達は街中を観光してただけだし。」

「そうですね、街中なら危険はないですよね？」

「いいえネギ先生、この都市は比較的安全ですが

地方の都市だと街中でも賞金稼ぎや盗賊、冒険者等が

普通に武装しているので、

油断していたり辺に絡まれたりすると危険なので気をつけてください

い。」

「ゆえ・・・本当なの？」

「本当ですよのどか、

ですから私達は此処に来るのを反対していたのです。」

「皆さんそんなに警戒しなくてもこの都市内なら大丈夫ですよ、

この治安は良い事で有名ですから。

皆さんは今回 基本的にこの都市で魔法世界を体験するだけですので警戒することよりもこの世界を楽しんでいってください。

ほら、あそこの階段を上がれば入国手続前に外が見えます、

いい景色ですので是非見ていってください。」

「ありがとうございます、マクギネスさん。」

ネギ先生達は皆で展望台に向かっていった。

丁度今なら他の皆に注目されずに私達の入国手続きを済ませられるので、

先行して入国手続きを済ませることにする。

「長谷川千雨様、綾瀬夕映様、絡繰茶々丸様ですね、  
コチラがお預かりしていた荷物です。」

皆様は国内での武器の携帯許可証があると申請されていますが、  
確認させていただいてよろしいでしょうか？」

「あ、はい。これです。」

私達はエヴァから預かった荷物から免許証のような物を受付の人に  
渡す……が

なにやら受付の人の様子がおかしい、

すぐくびっくりした表情で固まっている。

「は、はい、確認させていただきました！」

元老院発行の特種 武器携帯許可証ですね……私初めて見ま  
した……」  
「……」

「え？ と、とにかくこれで荷物を普通に所持していてもいいんで  
すよね？」

「はい！ どのどござい自由に!？」

受付のお姉さんも拳動不審で埒があかない用なので

私達は荷物を受け取りそそくさとその場を後にするが

受付の人達はなにやら話し込んでいる。

「あの娘達何者なんですか!？」

あれって軍の特殊部隊とかが持つてる許可証ですよ?

あんなの教本以外で見たことなんかありませんよ。」

「知らないわよ、見た感じ普通の娘に見えるけどどこかの諜報員とか?」

高度な認識阻害魔法とか使ってるのかな?」

「でもあれって軍で使う殲滅兵器とかも持ってるんですよ?」

「そんな物持つてるんですか!？」 1111

「・・・なあ、茶々丸、許可証の件 お前知ってたか?」 1111

「はい。」

「ならもつと早く教えて欲しいですよ！」

まさかそんな凄い許可証だとは思わなかったですよ……」  
「――」

「そうですね、すみませんでした。」

ただ教えても提示した時点で同じ反応だったと思いますが？」

「私達の心の準備ができるだけ違うじゃないか……まあ、いいや。」

まさかエヴァもこの装備の中にそんな殲滅兵器なんて入れてないだろっし……」

入れてないよな？ 茶々丸。」

「……」

茶々丸は私と夕映からあからさまに目をそらす。

「ちょっと！ なんとか言ってくださいよ！！」  
「――」

「おい……マジかよ。」  
「――」

「冗談です。この中にはそのような装備は入っていません。」

「脅かすなよ……お前そういうところ少し先輩に似てきたぞ……」

「・

「本当でしょうか」

「なんで少しうれしそうなんですか・・・」 #

「・・・私達に渡された装備は主にサバイバル用装備がメインで

私達がこの魔法世界のどこでもしばらく生存できるような内容になっています。」

「・・・千雨さん、茶々丸さんが話題を逸らしたですよ。」

「ああ、本当に変なところばかり あ姉妹の影響を受けてやがる・・・」

「・・・この許可証が発行されたのは、

私の装備でそのような兵器が含まれているためです。

お二人の場合はあまり関係ありませんので気にしないでください。」

その後も茶々丸は 強引に説明をしていき

私達の話聞き流し続けた。

「いや、だからその説明はもうさっき聞いたって・・・」

お、ネギ先生達も入国手続き終わったのか？」

「あ、皆さん。」

ハイ、今皆の手続きが終わったところです。」

「ネ、ネギ先生ーっ！」

大変よっ！

ゲートに密航者が・・・あなたの生徒よ！！」

「っっえっ！？」

ネギ先生と随行の女性、マクギネスさんを追っていくと、

そこには警備の魔法使いに拘束された佐々木、明石、和泉、大河内・  
・・に 村上！？」

すぐにネギ先生が近づいていき事情を聞く。

「・・・さ、最悪だ。」

「なんであの5人がいるですよ！」



「生体センサーには反応はなかったんですが……」

ネギ先生が事情を聞こうとしてるが向こうもパニックで埒があかない、

どうにか5人をなだめようとしてるが……… つ!?

この悪寒は……京都の時のか？

「綾瀬！アーティファクトで障壁を張れっ！

茶々丸武装そして周囲を探索！」

「！ハイです。」

「了解しました。」

ネギ先生も気がついたようで、すぐに皆に指示を出して

警戒態勢を取っている……… つ！

「ネギ先生横に飛べっ!！」

「え？………っ!」 ーーー

「ネギイ！！」

私の声になんとか反応したようで

すぐにネギ先生は横に飛んだが、わずかに間に合わなかったようで  
左腕を深くえぐられてた。

「ネギ先生！！・・・くっ

古！ このかお嬢様をここへ！」

「ネギッ ネギ！ 何でっ・・・やだ どうしよう、こんなに・・・」

桜咲が指示を出して治療と防衛体制を取ろうとするが

神楽坂がネギ先生の出血を見て軽いパニック状態、長瀬や古、桜咲  
に狗のガキだけが

まともに動ける状態だ。

近衛のアーティファクトで治療しようとするが入国手続きの時に

武装をを封印したようで、その封印の中にアーティファクトも入っ

ているようだ。

「だめです……くっ……皆逃げてください。」

「ネギ先生ツ、止血だけでも！」

そんな状態のところ、に畳み掛けるように次の攻撃が来る。

桜咲達はなんとかしのいだようだが、警備の魔法使い達が

命は無事のようにだがやられてしまった。

そこへ白髪のカギを筆頭に

フードをかぶった魔法使い風の二人と深い帽子をかぶった女があらわれる。

「久しぶりだね神鳴流剣士、それに犬上小太郎に

ネギ・スプリングフィールドとその仲間達……

幾分 力をつけたようだけれど、僕の一撃でこの有様だ。

その眼鏡の彼女に声をかけられなかったら、もう終わっていたんじゃないかい？

・・・しかしその3人、君達は彼らとはひと味違うようだけれど・・・ん？

その長身の君は・・・闇の福音の従者か・・・なるほど。」

「フェイト・アーウェルンクス!？」

白髪のがきが右手をネギ先生達に向け用としたとき、

長瀬と桜咲、犬神（だっけか？）が攻撃を阻止しようと動くが

長身のフードの男と女、白髪にがきにそれぞれが返り討ちにあう。

その様子を見ていた神楽坂が興奮気味に白髪にがきに問う。

「な、何なのよあんた達っ!! 何が目的!？」

私達を尾行て来てたの!？」

「尾行? まさか。」

君達にここで出会ったのは全くの偶然だよ。」

「ぐ・・・偶然ですって・・・?」

「君達の学園の人間は

ずいぶん君達の安全と情報管理に気を配っているみたいだよ?

僕ですら この場で会うまで君達が着ているとは知らなかった。

それがこんな事態を招くとは、皮肉な話だね。

・・・僕達の目的はここ、君達は今回は無関係だ。」

「むっ むむむ無関係でっ こ、こんなっ・・・

なっ なんな何様なのよ あんた達イツ！」

「アーニャー！」

「不幸な事故だよ、まさかネギ君に・・・その眼鏡の女性、

二人が僕達に気がつくとは思わなかった。

ただ、気づかれてしまった以上仕方ない、

応援を呼ばれるわけにはいかないからね。」

あゝまずいな、私まであの白髪のカキに目をつけられちゃった・・・

1111

ネギ先生の傷は、回復魔法の使い手が居ればなんとかなる程度だが

今は近衛しかいない。

その近衛の魔法にも3分制限がある、3分以内なら完全に直せるが

その制限時間までもう少ししか無いな。

綾瀬の障壁内に先生を放り込めれば多少はましになるか。

『茶々丸、隙を見てネギ先生を綾瀬の障壁に放り込むぞ。』

『了解しました。』

私は意識化で麻痺の射手を2本出せるように準備して

隙を見て闇の魔法で取り込んで動けるようにする。

そんな中白髪のがキの話も終わりに近づいたようだ。

「丁度いい、僕の永久石化で全員舞台から退場してもらおうかな。

・・・では、桜咲刹那、君から・・・」

白髪のがキが桜咲に攻撃を仕掛けようとした時、

ネギ先生が飛び出し、白髪のがキを殴り飛ばす。

「そんな事は・・・この僕がさせない！」

僕が・・・相手だ！」

(今だ！ 麻痺の射手2矢、掌握！ 術式兵装完了。)

バキンッ・・・！

「・・・ネギ！」

神楽坂の方でも武器をしまっていた封印具が破壊できたようで、  
全員の武器が出てくる。

近衛を中心に神楽坂と古が陣形を組み

すぐにネギ先生の治療を出来るように

近づこうとするが、白髪のがきに懐に入られ攻撃を食らう・・・その寸前、

桜咲が間に合い、白髪のがきを近衛から引き離すための攻撃をする。

「茶々丸！ ネギ先生を近衛の所に！」

綾瀬はその周囲にアーティファクトで障壁を！」

「了解。」

桜咲が白髪のカギを引き離す間に

治療をしようとするが、上から長身のフードの男の攻撃が来る。

それに反応した神楽坂が攻撃を相殺し、なんとか近衛達は無事に済んだ。

その間に私と茶々丸でネギ先生を近衛の元に連れていき

綾瀬がアーティファクトで障壁を展開する。

「マズい、神楽坂左だ！」

「え？ 千雨ちゃん？」

「馬鹿ッ！」 「ぼーっとすんなや！」

深い帽子をかぶった女に神楽坂が切られそうになるが

犬神が間に合い帽子の女を蹴り飛ばす。



白髪のカキの方は桜咲と古、長瀬が3人がかりで抑えているようで  
近衛は綾瀬がスライム娘達を出して障壁の強化をしている。

「コタロ あんたやられたんじゃない?」

「ああ、やばかったわ!

それよりネギは!?!」

ネギ先生の方は近衛の治療が間に合ったようで  
傷が修復していつている。

他の皆も体制を整えなおしたようで、

相手もそれぞれ一度引いて、陣形を整える……が、

一人は後ろのほうでゲートの石碑に何かをしようとしている。」

「なるほど悪くないね……君の仲間をゴミといったことは取り消  
そう。」

なかなか楽しい時間だったよ、今度会うときは本気で戦ってみよう

かな？」

「待てっ 君達は一体何者なんだ！？ いったい何を・・・」

「残念だけどそろそろ時間だ、今回はここでお別れだよ。」

「待てって！ 君が今何をするつもりでも、僕が止めるぞー！！」

白髪のがきがネギ先生に一気に近づこうとする・・・

「ちっ！」

「・・・っ！？」

私はネギ先生が攻撃をもらいそうになる瞬間、

横から白髪のがきを蹴り飛ばす。

「・・・驚いたな、僕に反応できるなんて・・・ふむ、君は少々危険なようだ。」

「はっ！ 言ってる。 エヴァに比べたらためーなんかぬるいぜ。」

（っち・・・つい庇っちまったがまずったな、完全に目をつけられた・・・

しかも、靴の裏がゴムのせいで麻痺化もできなかったみたいだ。ただどあいつらも時間がないようだし、

ここはハツタリで時間を稼いで……後で先輩にでも泣きつこう。」

「なるほど……君も闇の福音の従者か……」

「残念だが私の主はエヴァなんかじゃねーよ。」

「……それは増々見逃せないな、君ほどの従者を従えている魔法使いがいるなんて。」

しかし時間もないしどうしたもの……かつ！」

白髪のがきが会話の途中で魔法による攻撃をしかけてくるが

そんなものは散々エヴァにやられてる私にとってはどうということはない。

白髪のがきの魔法攻撃を回避しコチラも麻痺の射手を打つが

単発では相手の障壁を突破でき無いようだ。

ネギ先生や桜咲達は今の私達の動きには付いてこれないようで  
他の魔法使いと女の方を警戒している。

「その魔法はかなり厄介だね、

障壁突破効果を乗せたオリジナルの魔法の射手・・・かな？

それにそのスピードに回避能力、身体強化の魔法は・・・いや、ま  
さか・・・ね。

しかし、この距離では当たらないか・・・ならっ!」

白髪のがキが中距離の魔法の打ち合いでは

時間を浪費するだけだと判断したようで接近戦に持ち込んでくる・・・  
・・・が

（かかった）

白髪のがキの初撃を横にステップして回避し次の相手の攻撃、

私を近づけさせない為に牽制で打った攻撃だろうが、

それをあえて防御する。

バチッ！

「ぐっ・・・！？」

「フッ！」

私に触れたことで麻痺の射手の効果が発動し

白髪のがきの動きが一瞬止まる、その隙を逃さず

蹴りに1発分の麻痺の射手を乗せ蹴り飛ばす。

「アデアット！」

すぐさまレイ八さん呼び出し

この杖装備時に出来る限定魔法その2を使う。

「麻痺の射手 連弾、ガトリングモード！」

この魔法は通常だと一回で40発程を同時に打つのがやっとの私が

少数ずつ連続で打ち続けたらどうなるか？

と、研究した結果、この杖を装備してる時限定で  
ひたすら麻痺の射手を直線上に打ち続ける事をできるようにしたガ  
トリングモード。

私と最高に相性が良いこの杖を使っても

連発しているためにどうしても麻痺の射手に使ってる魔力にムラが  
できる、

しかしそこはカートリッジでカバーできるため

精神的にかなり疲れるが、その気になればそれなりに長時間打ち続  
けられる。

本来なら多数を相手にする時にはうまく魔法だが

このガキ相手ではスピードがなんとか追いつけるくらいで

それ以外では全てにおいて相手が上だ。

相手の意表を突いてなんとか一瞬でも麻痺させた今この瞬間に

畳み掛けるにはSLBでは詠唱に時間がかかりすぎるので、

これで押し込むしか無い。

「くっ……！」

ネギ先生、今のウチに撤収しろ！！」

「しかし千雨さん！」

「そうだぜ姉ちゃん、それに今の内に一斉にかかれば！」

「馬鹿か犬！！ 相手の力量くらいいい加減分かれ！」

あのガキだけじゃないんだぞ！」

白髪の子の方を皆が見ると障壁に集中しているせいで

向こうも動けないようだ。

幸いにもどういわけか他の奴らは手伝う気はないようだ。

「くっ……この魔法、なんとか耐えることはできるけど、

僕の方も障壁に集中しないとすぐに抜かれそうだよ。

君がアーティファクトを呼ぶ瞬間の隙がなければ

障壁が間に合わずに蜂の巣になってたかもね。」

「はっ、それはなーよ。」

この魔法は一発一発は軽いからな。」

「でも、これだけ打ち込まれたら 流石に僕も生身じゃたえきれないよ。」

数秒ほど打ち続けるが一向に相手の障壁を抜ける様子がない。

「……くっ、そろそろ根を上げてくれないか？」

「そつちこそ、そもそも君の魔力量は一般の魔法使い程度なのに何故こつも打ち続けられるのか、実に興味深いよ。」

君の名前を聞いてもいいかな？」

「誰が教えるか！」

そうしている間に後ろに下がっていた小柄な魔法使いが

ゲートの中心にある巨大な石碑を破壊し

長身のフードの男と帽子の女が小柄な魔法使いに近寄る。

「楔の破壊完了、離脱用ゲート確保、脱出できます。」



「うん、ほなズラかりましょか〜」

「おい・・・僕を置いていくつもりかい？」

「まだやってたのかフェイト・・・」

「僕としてもそろそろマズイんだけど・・・」

しょうがない、彼らにもゲートを・・・ 「強制転移」 彼らをバラバラに・・・

世界の果てへ。」

「！！ 待てっフェイト！」

「ネギ君・・・こちら側へ来るには君は少し

ぬるま湯に浸かりすぎていたんじゃないかな？

ここからの現実には僕から君へのプレゼントだよ。

・・・と言っか本当にそろそろ障壁を張り続けるのもきついから

ここらで失礼するよ、眼鏡のお嬢さん。」

周りや私の足元に魔法陣が展開される・・・これは転移魔法か！

私は攻撃を止めて、茶々丸達の所へ移動し闇の魔法も解除する。

「おい！ まずいぞ・・・って！

茶々丸！ 何でさつき手伝わなかったんだよ！！」

「いえ、向こうの帽子をかぶった女性の剣士に警戒されていたので動けなかったんです。」

「くそっ、おい ガキ！！ 逃げるならお前達だけで逃げるよ！」

「いやいや、ここに君達を置いていくと要石を破壊したことによるゲートの魔力暴走に巻き込まれて危ないよ？」

「だったら少しは安全な所に送るんだろうな！」

「君には是非とも僕達の所へ来てもらって もてなしたいんだけどこの人数での転移魔法は場所を特定するのが少し困難でね、

短時間じゃ細かい設定は無理だから

悪いけど君達の行き先は僕にもわからないよ。」

「ちっ、もう間に合わない、茶々丸、綾瀬！ 手を！！」

茶々丸や綾瀬と手を繋ごうとするが間に合わない、

綾瀬はなんとかスライム娘達を瓶に戻せたが  
ネギ先生達も全員バラバラになっている。

「千雨さん！ 綾瀬さん！」

「綾瀬！ つ！！」

「きゃ〜〜つ！」

茶々丸がロケットハンドで私の足を掴むが、

綾瀬には届かなかったようで、綾瀬だけ別のところに飛ばされてしまった。

「……あゝ最悪、魔法世界には来なきやいけないし

変な白髪のカキに目をつけられるし

綾瀬とははぐれるし……先輩に怒られるだろうな……  
拳  
句にこれだ。」

「これ と申しましても……ジャングルですがなにか？」

私達は状況を確認するために空に飛び地形を確認しているが……  
強制転移で飛ばされると、そこはあたり一面木が生い茂っている。

俗に言うジャングルという場所だった。

神様から頼まれたお仕事。

その53（後書き）

53話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その54

side 千雨

魔法世界のとあるジャングル。

「なあ茶々丸、そろそろココがどの辺か分かったのか？」

「はい、以前訪れたことのあるグラニクスと言う街の北東の位置になります。」

後、少し近くに2つ、もう少し離れて1つの発信機の反応がありません。」

「ふうん、グラニクスというところか、前に先輩と行ったところだな。」

少し近くにはラカンとか言うおっさんもいたっけ。」

「どうされますか？」

一度マスターに連絡を取ってから近くの二人に合流、

その後もう一人に合流して近くの街に向かうのがいいと思います。

「？」

「連絡って・・・エヴァ達は向こうの世界だろ？」

「そんなトコと連絡取れるのか？」

「マスターから万が一の時は、まず連絡がとれるか試せ、  
と言う指示を受けてますので。」

「まあ、いいか、それくらいなら直ぐだろうし。」

「はい。では通信を試してみます。」

茶々丸が通信を試している間に

私は預かった装備からサバイバル用の道具を幾つか出して  
移動の準備をする。

今はまだ日が沈む前なので、

せめて一番近い発信機の所は確認しておきたい。

「千雨さん、マスター達と連絡が取れました。」

「・・・ちょっと待て、お前の通信機ってそんなに高性能なのか

「？」

「・・・通常の物よりは遥かに高性能です。」 #

(え？ そこ怒るところか・・・)

自分のスペックを疑われた事に腹が立ったのか？)

「マスター達が向こうの世界に居れば流石に無理ですが、  
今皆さんはコチラに来ているそうです。」

「へへ、昨日魔法世界に行くとは言ったけど、  
もうこっちに着てたのか、流石だな。」

side ソプラノ

さつき茶々丸から連絡があり、大体の報告を受けたので

超と葉加瀬に発信機を持つてる皆の場所を特定してもらった作業を頼む、



千草はなぜかチャチャゼロを連れて魔法球で呪いの呪符作成をしている。

私とエヴァで茶々丸と通信をしている。

『エヴァー聞こえてるか？』

「ああ、聞こえているぞ。

貴様達二人は一応無傷のようだな。」

『こっちは大丈夫だ、夕映だけとははぐれてしまったけどな・・・』

「まあ、夕映の方はこっちでも今超達が発信機から搜索している。」

『悪い・・・私達が付いていたのに。』

「まあ、そこは後できっちり修行のやり直しをしてやる、

とりあえず貴様達は近くの2人の反応を確認しろ。」

『・・・わかった。

その後はどうする？』

「ふむ・・・近くの街で待機するか搜索か・・・どうする姉様？」

「それじゃあ、途中の街を搜索しつつ

グラニクスにでも向かってもらおうか？

ゲートに来なかったなら、あそこにラカンさんが居ると思うから

二人には他の皆を捜索してもらって感じてどう？」

「ふむ、面倒ごとは奴に任せるか、そもそもアイツが本来の目付役だからな。

しかし・・・そうだな、変更だ。

とりあえず近くの3人の無事の確認して、

危機的状況でなかったらグラニクスの場所だけ教えて

自分でこさせろ、罰ゲームだ。

後はラカンの家に行き、奴にすべて押し付けてこい。

ただし三人の内誰かがぼーやだった時は

引きずってでもグラニクスのラカンに会わせてこい。

他のガキを捜すにしても何をするにも

奴と一度会わせておけば後はなんとかするだろう・・・

聞いてたか？ 千雨。」

「ああ、大丈夫だ。」

しかし罰ゲームかよ・・・まあ、あのメンバーだったら大丈夫か。  
じゃあ、私達はとりあえずその方向で動くよ。

今日中に確認したいからすぐに移動を開始する。」

「了解、二人共無理しないでね。」

あと、その生水は飲まないように。」

「・・・それはもういいよ。」

じゃあな、先輩、エヴァ。」

「マスターそれでは失礼します。」

「うむ。」

通信が切れ、私達は超達の方の作業の進捗を確認する。

「どう？ 発信源から誰がどこに居るか特定できそう？」

「まだ、全員じゃないけどある程度は特定できつつある。」

ちなみに夕映さんはアリアドネーに居るようだネ。

座標では街の中から反応があるから。」

「そっか、それじゃあエヴァ、そこまで転移できる？」

「あそこなら大丈夫だ。 マーカーがあるからな。」

「じゃあ超達は作業を続けてて、私とエヴァで夕映に会ってくるから。」

「会ってくる……？」

回収しないの力？」

「うん、街に居るならばらく街で発信機を持ってない5人を

探してもらおうと思って、街に来るかも知れないし。」

「そっという事力。」

「そうですね、各地の大きめの街には

誰か配置しておいたほうがいいかも知れませんか。」

「姉様、時間が惜しいからさっさと行くぞ。」

「……エヴァも弟子が心配みただから行ってくるね。

ラトナ、ピュラ二人をお願いね。」

「かしこまりました。」

そうして超から携帯型の受信機を受け取り、外への移動中。

「そつだ、出る前に少しクルトと会って行こうよ、

搜索に関して彼に少し頼んでいった方がいいし。」

「ふむ、ならば早くいくぞ。」

クルトの執務室に着き、私達はノックして入室。

「どうしたんですか、お二人共？

コチラは少し立て込んでいるのですが・・・」

クルトは何人かに同時に指示を出しながら

たくさん書類に囲まれている。

「その立て込んでいることについてだよ、

各地のゲートポート連続破壊事件でしょ？」

「流石に耳が早いですね・・・」

では、早速どういった内容か聞きたいのですが。」

「まず犯人は完全なる世界、アーウェルンクスと長身と背の低い魔法使いが二人に

女性の剣士、これは京都の件以来行方不明の月詠ちゃんだろうね。」

「ふむ、彼らが動き出しましたか・・・」

「知ってるかも知れないけど、その時にネギ先生達も巻き込まれてね、

アーウェルンクス達と鉢合わせして戦闘、

その後転移魔法で魔法世界の各地に飛ばされたんだよ。

その飛ばされた中に私達の仲間もいてね、その事で相談に来たんだ。」

「その事件の証拠は何かありますか？」

「茶々丸から通信で電子的な映像を送ってもらうことが出来るよ、

茶々丸と千雨は既に連絡が取れてるからこの二人は問題ない。

夕映もこれから会いに行くから問題ないと思う。」

「それならばどついう相談ですか？」

特に貴女が動くようなことはないと思いますが。」

ネギ先生達がね・・・発信機をつけてある人達は問題ないんだけど勝手についてきた5人がいてその娘達も一所に転移させられちゃってるんだよ。」

「ふむ・・・その娘達を含めて彼らを搜索して欲しいと？」

「それもなんだけど、アーウェルンクスが手を出してきた場合・・・例えばネギ先生に罪を被せるとかね。」

「・・・そうですね、丁度その時に彼らがゲートにいたのなら彼らに罪をかぶせて隠れ蓑にするのはいい手かも知れませんね。」

「その場合彼らは賞金首になると思うんだけどクルトの手が届く範囲ではなるべく穏便になるようお願いしようと思って。」

「わかりました、私としても彼になにかあるとマズイですし

オスティア領内と・・・MM領内では彼らに罪が掛かった場合

重要参考人として手配します。

その際 生きたまま怪我をさせずに捕らえるように厳命しておきます。

そうすれば向こうからオスティアかMM領内に  
保護を求めて来るかも知れませんね。」

「MMの方は動かせるの？」

「ええ、膿はこの程度なら問題ないくらい出てますし

彼らにしてもネギ君を失うわけにはいかないでしょう。

今回の事件とあわせて この機会に一気に膿を出し切ってしまいま  
すよ。」

「ありがとうね、あとこれからアリアドネーに行くんだけど

向こうで通用する身分証みたいなものない？」

「すぐには難しいですね、私は向こうの人達には警戒されていますか  
ら。」

元老院時代にかなり派手に動きましたからね。」

「そっか、じゃあしょうがないね。」

「姉様、話が終わったなら急いで向こうに行くぞ。」

「了解、じゃあ、クルトよろしくね。」

「わかりました。映像データの方宜しく願いしますね。」



流石にそれがないと動きようがありませんから。」

「了解。」

こうして、クルトに搜索をお願いし、

私とエヴァは魔法学術都市、アリアドネーへ向けて移動した。

side 夕映

アリアドネー ある宿屋。

「……全く参ったですよ。」

今私の目の前には、ベットで眠っている獣人だと思われる少女が居る。

そもそも何でこうなったのかは少し前に遡るが、

白髪の少年達の転移魔法で千雨さん達とはぐれて飛ばされた私は

この街の道の真ん中に転移させられたんですが

転移後に、急に横から魔力反応と拘束で接近する物体があったので

反射的に蹴り飛ばしてしまったんですが・・・

「まさか、エヴァンジェリンさんの修行の成果がここまであったとは・・・」

エヴァンジェリンさんの修行（虐待）によって

反射的に自分に接近するものを蹴り飛ばす癖というか、

防衛行動がついってしまった・・・

（そもそも あの悪魔人形が私の死角からばかり攻撃してくるのが悪いんですよ！）

私が蹴り飛ばしてしまった少女は、一向に起きる気配がない。

一応アーティファクトで擦り傷等は治療してあるのだが・・・

そんな時、急に部屋のドアがノックされた。

『すいませーん、ここに綾瀬さん居ますか？』

「・・・・・・は？」

この街で私の名前を知ってる人なんか居ないはず・・・

(まさかこの声っ!?)

私は勢い良くドアを開け、誰が来たのか急いで確認する。

「そ、ソプラノですか!？」

side ソプラノ

「……うわっと!」

ドアがいきなり開けられ夕映が飛び出てくる。

「……おい、夕映。」

誰が訪ねてきたのかわからないのに いきなりドアを開ける奴があるか。」

「ソプラノにエヴァンジェリンさん……え? なんでもこつちに?」

まあまあ、とりあえず中で話そうよ。

私達は部屋の中に入り、ベットで横になっている少女を確認したが

眠っているようなので、一応認識阻害をエヴァにかけてから

お互いの状況を確認し合った。

「それでは千雨さんや茶々丸さんは無事なんですね?」

「そうだよ、二人共夕映だけが別に飛ばされちゃったから気にしてたよ。」

「お二人には悪いことをしたです・・・」

私がスライム娘達をしまうのに手間取ったばかりに。」

「まあ、そこは後で再訓練ということだ。」

それにしてもそこのガキ・・・」

見た感じ着ている服はここの魔法学校の制服だな。」

「そうなんですか？」

まあ、どこかの学校の生徒だとは思ってましたが・・・」

獣人の少女は疲れていたのか、いまだに気持よさそうに寝ている。

「ふむ・・・丁度いいな。」

おい 夕映、貴様しばらくこのガキと同じ学校に通え。」

「・・・は？ 何言ってるんですか？」

私は今すぐのどこを探しに・・・」

「まあ、聞け。」

宮崎や他のメンバーは今超や千雨達が捜している。

しかし貴様も知っての通り今回、

発信機を持ってない5人が巻き込まれて転移させられた。」

「……はい。」

「発信機を持っててそれなりに訓練を受けた宮崎や他の連中はともかく

この4人はできるだけ早急に探す必要がある、分かるな？」

「はい。」

「そこでお前はここの魔法学園に通い、この街を中心に搜索するんだ。」

無事ならまず間違いなく街に避難しようとするだろう、

発見したらお前が保護するんだ。

宮崎や他のメンバーは私達の方で探しておく。」

「………はい。」

自分で本屋ちゃんを探しに行けないのが悔しいのか、

夕映は声のトーンも下がり俯いている。

「夕映、本屋ちゃん達は私達で捜すから、

この街の周辺は夕映が探してあげて。

「……それに　ここの学校ならウチではあまり勉強できない

回復や防御の魔法も勉強できるから、ね？」

「まあ、後で貴様がここで学んだ成果を私に見せることができれば

追加の修行は少し減らしてやろう。」

「……結局なくなりはないんですね。

わかりました、私はここの街を中心に搜索をします。」

それからしばらく、渡した装備内容を説明したり、

地図を出し　街の地形を確認、お互いの連絡方法等を確認していると

眠っていた獣人の少女が目を覚ました。

「……う……？　あれ？　私は……え？　こごとこつ！？」

獣人の少女は飛び起きて周りを確認し、私達と目が合う。

「あの・・・あなた達だけですか？」

「ふむ、私達はMMから着た旅の者で、コチラの方に仕える者だ。」

エヴァが躊躇なく嘘を吐く、

自分達は夕映に仕える使用人だという設定のようだ。

「そうなんですよ、コチラの方は、ユエ様とおっしゃいまして

本日はコチラの魔法学校に入学の手続きのために参ったんですが、

何があったのか分かりませんが、

貴女が道の真中で倒れていまして、

外傷がないようでしたのでこの宿屋にお連れして

貴女の目が覚めるのを待っていた次第です。」

「え？ ええっ!？」

「ほら、ユエお嬢様、はしたないぞ。」



「そうですねよ、ユエお嬢様。」

私とエヴァは逃亡生活でこの手の嘘をつくのは慣れているが

イキナリ作り話が展開されたことで夕映は混乱している。

「あ、そうなんですか。」

なんか、お世話になったみたいで・・・あ、私コレット・ファラン  
ドールと言います!」

「これはご丁寧に、私は風香と申します。」

「私は史伽だ。」

「・・・はあ!？」

「お嬢様はしたないですよ。」

申し訳ありませんがお嬢様は故あって家名は名乗られないのですが、  
MMである地位の方、現在は新オスティアで地位のある職について  
おられる方の

血縁ということだけ理解していただければいいと思います。」

「はあ・・・そんな方なんですか・・・」

この間クルトには先手を打たれておもしろくなかったので、

ここで軽く復讐しておく。

「貴女の着ている制服を見る限り、魔法学校の生徒さんですよね？」

よろしければ学園への案内をお願いできないでしょうか？」

「あ、はい。私で良ければ！」

こうして私達4人は彼女の案内で魔法学校へ向かう、

道中 彼女が辺に冷静になり、夕映に蹴飛ばされたことを思い出さないように、

次から次へと質問や会話を繰り返す、なるべく急いで学校に向かう。

この学校の長、ここでは騎士団長も兼ねて総長と言っらしいが

クルトの名前を使って面会の許可を取り、彼女の部屋に案内しても  
らう。

「こういう時に彼の名前はほんとうに役にたつ。」

「……失礼します。」

「ようこそ、アリアドネーへ。」

「私がここ責任者をやっているセラスです。」

「あなたがこの学園に入学希望をしているという娘達かしら？」

「いいえ、入学させていただきたいのはコチラのユエ様だけです。」

「私達はユエ様の使用人です。」

「そうなの？」

「……しかし、見た感じ彼女は入学の必要があるとは見えませんね。」

「セラスさんは私達を軽い探査魔法で調べているようだが」

「私達3人には並の探査魔法は効かない。」

「……どづい事ですか総長？」

「セラス様、ユエ様はある方面に特化して勉強なされたので  
バランスが良くないのです。」

そこでこの学校で治療や防御の分野で

勉強させていただきたいと思いつた次第です。」

「そう・・・この学園では学ぶ意欲のあるものは

どのような人でも入学できますが・・・ユエさん、

彼女の身分を証明する物は何かありますか？」

「それはコチラで大丈夫だと思います。」

私が前に出てセラスさんの机に夕映がMMでつかった

武器の所有許可証を見せる。

この場合は、他国なのでMM所有許可は関係ないが

身分証くらいにはなるし、彼女ならばこれで通用すると思う。

「・・・へえ、こんな物を持つてるなんてね。」

しかし、こんな物を出されてただの入学許可って言うのは

少し腑に落ちないわね。」

「詳しくは申せませんが、ユ工様に入学許可と滞在許可をいただきたいのです。」

この学園や国に害意を持ってないということの証明のために

あえてこの書類見せ、貴女に許可をいただきに参りました。」

「ふ〜ん・・・彼女をここに入学させて何をするつもりなのか聞いてもいいかしら?」

コレットさんに此処から先を聞かせるのは少々マズイか・・・

「コレットさんに退出してもらってもいいでしょうか?」

「構わないわよ。」

「コレットさん、少し席を外して貰える?」

「はい、総長。それでは部屋の外で待っています。」

コレットさんに席を外してもらい話しの続きに入る。

「目的の一つは彼女が治療や防御の魔法を学びたいということ、

もう一つはただの人探しです。」

「その捜している人は犯罪者か何かかしら？」

「そうですね、魔法も使えないただの一般人ですが、

一応不法入国と言うことになっていますね。

ご存知かも知れませんが、先日のMMでのゲートポート破壊事件の際に

テロリストの転移魔法で散り散りに飛ばされてしまいました、

彼女達がこの街、学校に避難してきたときに保護するため

ユエ様に滞在していただき、彼女達を保護できた時は

この学園に一時入学と言う手続きをとって欲しいのです。」

「そういう事なら 申し訳ないけどお断りさせて貰うことになるわね。」

この学校を利用するようなことを許すわけにはいかないのです。」

流石にこの頼み形では入学はできないか・・・だが

この名を聞いたら恐らく考えが変わるだろう。

「そうですか、でもそのテロリストや被害にあった人間の名前を聞いたら

考えが変わると思いますか？・・・お聞きになりますか？」

「一応聞かせてもらおうかしら。」

「犯行を行なったテロリストは 完全なる世界、

転移魔法の被害にあった中で貴女が気になるのは、

ネギ・スプリングフィールド、彼でしょうか？」

「・・・そんなバカな・・・彼は旧世界で教師をしているはず。

それにその組織は・・・」

「丁度事件の日時に その彼が教え子を伴って魔法世界を見学に来ていたのです、

彼女、ユエ様もその教え子の一人です。

そして不法入国扱いの5人は彼に内緒でゲートまで着いてきたせいで

コチラの世界に来てしまった生徒達です。」

「・・・なぜ、わざわざその情報を私に教えたの？」

「それはあなた方にも警戒しておいてほしいからです。」

「その情報の信憑性は？」

「それくらいはご自分でどうぞ。」

旧世界、麻帆良学園の学園長か、ジャック・ラカンさんに聞けば  
ネギ君の事だけはすぐ分かりますよ。

オスティア総督でもいいですけど・・・貴女は彼を信用できないで  
すかね？」

「・・・わかりました、確認が取れるまでは仮入学で彼女を預  
かり」

確認が取れ次第本入学、関係者がこの街に来たときは保護します。

一応オスティア総督にも聞いてみます。」

「彼に話を聞く時は私達の事を出してもらえれば」

ゲートポート破壊事件の真犯人についても情報をくれるかも知れま  
せんよ？」

貸しを作る形になるでしょうが。」

「・・・さつきからMMの書類やオスティア総督の名が出てくるけど

貴女達 彼と知り合いなの？」



「一応知り合いになりますね、貴女からしたら他国の政治家、ましてやかなりの辣腕で、強行的な手法も平気で使う彼を信用できないのは仕方ない部分もあるかと思いますが、なぜ彼があんな手法を取って急ぐように活動していたのかその内分かると思います。」

きつと その時になつたら彼の評価が一転しますよ。」

「・・・だから今回は貸しを作っても真犯人を聞いておけ・・・と？」

「そのへんは政治的な判断なのでお任せします。」

それではユエ様の入学手続きの方お願いします。」

できたらさっきの彼女、コレットさんの親戚とかユエ様の名前をなるべく隠す方向で書類の手続きの方お願いします。」

「わかったわ、コレットさんが了承したら彼女の親戚として、ダメなら私の遠縁の者として扱っておくわ。」

「ありがとうございます。」

ユエ様もそれでよろしいでしょうか？」

「……いいですけど、その喋り方は似合わないのでもやめて欲しいです。」

夕映には従者風は不評だったようだ……

エヴァは大喜びなのに。

「セラスと言ったな、一つ聞きたいことがある。」

「……どうぞ。」

「お前はこの世界が後何年持つと思う？」

「エヴァ……」

「質問の意図がいまいち解らないですが、

……数十年やそこらではこの国家体制は崩壊しないのではないかしら？」

「そうか……ならばいいんだ。」

この後 部屋の外で待っていたコレットさんを中に呼んで

話をして、ユエは彼女の親戚として学校に通うことになった。

夕映を学校に置いていき、

私とエヴァはオスティアの拠点に戻るために

周囲の目につかない場所に移動する途中・・・

「・・・姉様は時々虚しくならないか？」

「ん？ 何が？」

「この世界を守ろうとしても真実を知るのはクルトの一派や超達だけ、

奴らはああやって生きてはいるが、

この魔法世界の魔力が尽きるか鍵の魔法で一瞬の内に消える。

自由意志を持つてはいるように見えるが、ある意味作られた存在だ。

・

それを守ることに虚しくなることはないか？」

「ん〜私はそう言うのではないな。

この世界や彼らを守ることは私の平穩を守ることに繋がるし、ほら  
・  
・  
」

私はエヴァと手を繋ぐ。

「こうやってこの世界の人とも触れ合えるし、理解し合える。

この世界が遠い昔に誰かに作られたものだとしても

大した問題じゃ無いんじゃない？

エヴァだってチャチャゼロや茶々丸、ラトナにピユラを助けるため  
なら

大抵の無茶はするでしょう？

それとも彼女達は作られた存在だから、

壊れてもまた代わりを作ればいいとか思ってる？」

「……ツフフ、そうだったな。」

姉様は……いや、私もアイツらをただの人形や機械だとは思ってなかつたな。

「千雨や千草や夕映、超に葉加瀬、家に来る彼女達は皆そうだよ。」

「そうだな……、全く……家のバカ供は……。」

スマン、変なことを聞いた。」

「……ねえ、エヴァ。」

「何だ姉様。」

「魔法世界に来る少し前くらいから……」

エヴァの様子がおかしい気がするんだけど、何かあったの?」

「……いや、何も無いぞ。」

少なくともここ数年……」

いや、世界樹の地に来てから特には何も無い。」

「そう……ならいいけど……。」

神様から頼まれたお仕事。 その54（後書き）

54話目 投稿

仕事の都合で若干遅れましたが  
次回更新は1〜2日で更新できる予定です。

神様から頼まれたお仕事。 その55

新オスティア クルト邸

アリアドネーの魔法学園に夕映を預けることができた私達は、一度オスティアに戻り、超達による搜索の状況を確認していた。

「それじゃあ、ネギ先生の幼なじみのアーニヤちゃん以外は全員のたまかな位置は把握できたんだね？」

「アーニヤさんも場所は把握できてるんだけど、ちょっと厄介な場所ですね。」

「場所は分かるの？」

「・・・旧オスティア周辺ネ。」

「あゝ・・・と、なるとマズイね。」

完全なる世界の連中に攫われた可能性が高い・・・ん？

待てよ、逆に考えたら魔物が何かに襲われたんじゃないかなければ

彼女が居る所が奴らの本拠地になるのか……」

「発信機は主に振動での発電を利用していますので、

反応がそのまま7日くらいで消えたら彼女の生死はかなり危険です、

ただし反応が消えなかったら彼女は囚われたか

まだ生きてる可能性が高くなります。」

「了解、じゃあ彼女の反応は逐一監視しておいてね。

それと、本屋ちゃんの様子はどう?」

「彼女の反応は転移後しばらくして 発見された位置から移動して  
るヨ。」

迷わず近隣の町の方に移動しているようだカラ

誰かに保護されたと見ていいと思うヨ。」

「そっか……じゃあ夕映のこともあるし、

エヴァー一応確認しに行く?」

「ふむ、そっだな。」

確認だけして売られるとかじゃない限りは放っておくか。



奴も図書館島探検部だったし、

見に行った訓練でもそれなりの危機回避能力は見せていたから

逃げに徹すれば早々やられることもあるまい。」

「……そだね、じゃあ見に行きますか。」

「それじゃあ彼女の反応が向かっている街に場所を地図にマーキングしておくヨ。」

本屋ちゃんの居る所はもうすぐ陽が沈む時間だと思つので

安否確認するにしても、保護するにしても都合がいいから

時間を見てエヴァと向かうことにした。

とある町の宿屋の一室

私とエヴァが別の町に転移後この街に来るまで

急いで飛んで数時間ほど掛かった。

既に深夜といえる時間に差し掛かるので

宿屋の周辺も静まり返り、近くの酒場から聞こえる声も

それほど大きくはない。

そんな夜の闇の中、私とエヴァは本屋ちゃんの反応がある部屋に忍び込む。

『深夜に女の子の部屋に忍びこむのもなかなかオツなものだね、エヴァ。』

『・・・何を言ってるんだ？ 色々大丈夫か？』

『エヴァだって昔はやってたじゃない、こんなこと。』

『失礼な事を言うな！ 私は血を吸うために仕方なくやってただけだ。』

『忍びこむという意味では、やってることは同じじゃない。』

『・・・お？ 本屋ちゃん発見？』

『まったく・・・取り合えず見た感じ派手な外傷はないようだな。』

『……どつする？ パクつとやつとく？』

『やらん！』 「おい、起きろ宮崎！」

私がエヴァをからかったせいで機嫌が悪いエヴァが

本屋ちゃんの寝ているベットを蹴る。

「……ん……起きる……起きるからゆえ……あれ？」

エヴァンジェリンさん？」

「起きたか宮崎、貴様 今日何があったか覚えているか？」

「え？ え〜つと……そ、そうだ！ ネギ先生 ゆえー！！

……あれ？ 何でエヴァンジェリンさんがここに？」

「寝ぼけてるのか？ ……全く。

ゲートポートで転送させられた後のことを覚えているのか？」

「まあ、待つてよエヴァ、本屋ちゃんも少し落ち着いて。」

本屋ちゃんは寝ぼけているのか、

少し落ち着かせてから話しを聞くことにした。

「・・・ふむ、どこかの遺跡だかに飛ばされて

たまたまそこを調査していた冒険者の一団に拾われて

同行を願い出た、これでいいのか？」

「はい・・・というか、何でエヴァンジェリンさんとソプラノさんが

こつちの世界に居るんですか？」

「私達のことはどうでもいい。

貴様の無事が確認できた以上もう用はない、

あとは好きにするが良い。」

「ゴメンネ、本屋ちゃん。

エヴァは少し機嫌が悪いみたいで・・・」

「誰のせいだ！」

「・・・はあ。」

私達がいきなり現れて 質問攻めにしたせいで

本屋ちゃんの思考が少し着いてきてないようだが、

彼女の無事は確認できたので、私達はこのまま帰ることにする。

冷たいとは思いますが、

彼女の場合 原作での重要な立ち位置を占めるので

私達がここであまり干渉するのは良くないと思うし。

「それじゃあ、本屋ちゃんの無事も確認できたから私達は次に行くね。」

「……つ、次って！ 他の人達は無事なんですか？」

「とりあえず、千雨、茶々丸と夕映は無事だよ。」

夕映には直接会って話したし。」

「そうですね……。」

とりあえず親友の無事が確認できてうれしそうだが、

他のメンバーがまだということとで、素直に喜べないようだ。

「私達はこれで帰るけど」

本屋ちゃんは今まで訓練したことを思い出しながら気をつけてね。」

「あの・・・私は一緒に行けないんですか？」

「甘ったれるな、貴様とてこつという事があると承知で

訓練をしてばーやに付いてきたんだらう？」

「だったら自力で何とかするんだな。」

あんな事件があり、みんなと離れ離れになって寂しかったらう。

私達と会えたがイキナリ置いて行かれるでは

彼女も納得はいかないだらうが・・・それよりも、エヴァの反応も違和感がある。

今のエヴァなら夕映の所に連れて行く、と 言い出してもおかしくないのだが・・・

まあ、今はエヴァを説得しなくて済むからいいとするか。

「ゴメン本屋ちゃん、私達にも色々事情があつて連れてはいけな  
いんだけど」

皆の居場所は渡したバッチで確認して、こつやってみて回ってるから。

とりあえずは、自分の身を守りながら

グラフィクスか新オスティアと言う場所を目標にして

何かあったら自分で判断して行動してね。

そんなに急がなくていいから、

ゆっくり慎重に 訓練したことを思い出して頑張ってね。」

「……はい、皆のことよろしくお願いします。」

「貴様はまず自分の心配しろ。」

ほら、この指輪とナイフをやるから自分の身は自分で守れよ。」

エヴァはそう言つと指輪と鞘に収まったナイフを本屋ちゃんの方に  
放り投げる。

「これは……?」

「指輪の方は魔法触媒だ、杖の代わりだ。」

あとナイフは火の魔法がかけてあるから

ライター替わりや身を守るくらいの役には立つだろう。

・・・後で返せよ。」

「あ・・・ありがとうございます！」

これはアレだろうか？

エヴァなりの激励と、また会おうということか？

「ふん、では行くぞ、姉様。」 / /

「またね、本屋ちゃん。」

私達は窓から外に出て、転移のため街の外に向かう。

「それにしても エヴァはきついこと言う割には

要所要所でしつかりハートを掴みに来るね。」

「訳のわからんことを言うな、

私はアイツになにかあると夕映に影響があるから 保険 をかけた  
までだ。」

「ふん、あれが 保険 ね・・・



少し大ききだけど、そういうことにしておこうか。」

「……っち。」 / /

その後町の外の人目につかないところで転移し

私達は新オスティアへ帰った。

帰った私達は、クルトの勧めで、

ずっと調査をしていていた超達と

魔法球から出てきた千草達を呼び、皆で食事を取りながら、

お互いの情報を交換し、今後の対応を考える。

「夕映はんや千雨はん達も無事でよかったですな。」

「そうだね、まさかあのタイミングでアーウェルンクス達とやり合  
うとは

流石に予想もできなかったけど、みんな無事で何よりだよ。」

「しかし当面の問題は、発信機の反応がある人達より、発信機を持ってない5人のことですが、

彼女達をどうやって捜すかですが・・・」

「アリアドネーとグラニクス周辺に飛ばされたなら、

夕映とラカンさんがいるから多少はマシなんだけど、

それ以外の所だと正直どうしようもないんだよね。

個人的に賞金でも掛けて捜索するっていう手もあるけど。」

「クルトにゲートポート破壊事件の重要参考人として

手配してもらえばいいんじゃないか？」

「アレは向こうが罪を擦り付けてきた時の案だったけど・・・

そっちの方が手っ取り早いかも知れないね。」

「こういう人探しは個人の力より組織の力のほうが役に立つからね。

正直私達が動くより、クルトサンに頼んでおいたほうが

確率的には上だと思うヨ。」

「そのへんはしょうがないか。」

「それより、ソプラノとエヴァンジェリンには数日後に少し力を貸してもらえないかな？」

「ん？ 内容にもよるが、何をやるんだ？」

「まさか使うとは思ってなかったんだけど

茶々丸用の武装で、衛星軌道上に打ち上げて

使う兵器があるんだけど、その打ち上げと初期起動魔力の件で

二人の力を借りたくてネ。」

「・・・そんな物騒な物を持ってきてたの。」 1111

それってアレですか？

某ドー ハンマー的な・・・

「いや、私も当初の私の計画で

どうしても武力が必要な時に限定的に使うかな？位のつもりで用意してただが

対軍装備が欲しいっていつてたから使ってみようかな下。」

「どういう武器か聞いてもいいかな？」 1111

「興味があるのか？」

細かい説明は省くけど、衛星軌道に打ち上げて太陽光や

魔力をエネルギー原にしてるんだけど、

地上で対象にレーザーで照射して、

その目標に向けて協力なレーザーが打ち出されるんだヨ。」

やっぱり・・・原作ではネギ先生と茶々丸の仮契約でできた

アーティファクトだと思ったけど、超がここにいるおかげで

今の茶々丸にも使えるのか。

「ちなみに茶々丸やラトナ、ピュラ、私が見えるネ。」

原作より質が悪くなっている・・・

「問題は連射が効かないという事と、

私達の誰か一人しか一度に使えないということだね。」

「・・・ん？ 太陽光はともかく、魔力はどこから吸収してるの

？」

「魔力自体は初回起動時に貯めておいた魔力を使うんだけど

基本的には太陽光から発電した電気を使うから

魔力自体はそれほど必要ないヨ。

一応簡易型の魔力炉を積んでるから、よっぽど連射しない限り大丈夫ネ。

その起動時の魔力をソプラノをお願いしたいんだけど。」

「その魔力つてさ、これで代用できる。」

私は普段から着けてる世界樹の樹液から作った指輪を見せる。

「それなら全然問題無いけヨ。

むしろそれを使えば魔力面ではほとんどの問題が解決されるネ。」

「この間の学園祭の時結晶化した奴、

あの後魔力を満たすのに幾つか使ったけど数個程余ってるんだ、

1個衛生兵器に使ってみたらどうなる？」

「特に一発辺りの威力が変わるといふことはないけど

長期間運用が可能になると思うネ。

もう少し研究すれば、レーザーのタイプを

拡散型とか連射型に出来たりするかも知れないけど、

研究には時間的に数カ月はかかると思うヨ。」

「別荘使つて数カ月？」

「使わずに通ケ月ネ。」

超と私はお互いの目を見つめ合い、ニヤリと笑う。

千草とエヴァは我関せずの構えで、

チャチャゼロは刃物じゃないので関心の無い様子、

ラトナとピュラはマイペースで給仕を行っている。

「……まさか、ソプラノさんに超さん……改造するつもりで  
すか？」

ただでさえそんなデタラメな兵器を。」 1111

「葉加瀬……君は科学者としてスペックアップ出来る物を

目の前にしてやらずにおけるの?」

「ハカセ・・・私と共に科学に魂を売り渡したハカセなら 分かっ  
てくれるよネ?」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・分かりましたよ、私も協力すればいいん  
でしよう。」

こうして二二三〇式 超包子衛生支援システム 「空とび猫」 は

「空とび猫(改)」へと進化することとなる。

後日 葉加瀬がちゃっかり自分にも使えるように改造していたのは

MAD科学者としては譲れない一線だったんだろうか・・・

その後も今後の対応について話し合い、

植樹を開始するため しばらくはオステイアの近くから

動かないほうがいい私は、ここで植樹の作業。

超達は衛星兵器の改造を追加し、引き続き作業をし

千草も呪符の制作、完了後は家事に戻る。

エヴァとチャチャゼロは今には特にやることがないので

何かあったらすぐ動けるように待機。

クラスメイトの搜索は、クルトと千雨、茶々丸、夕映に任せることになった。

その日は話し合いが終わった後で各自就寝。

翌日、千雨達と連絡を取り、

その後どうなったのか聞くことにした。

『よう、先輩。 そっちはどうだった？』

「こっちは夕映に会ってきたよ、結構元気そうだった。」

『え？ 会ってきただけか？』

ガッ



「発信機のない五人がいるからね、

一応各地で捜索係りを置いたほうがいいと思って

街で待機しながら探してもらうことにしたんだ。」

『へ〜よくアイツが納得したな。』

宮崎辺りを探しに行くとか言うかと思っただけど。

『ドカツ』

「そのへんはなんとか納得してもらったよ。」

その話の関係で本屋ちゃんの無事を確認することになってね、

本屋ちゃんにも会いに行っただけど、元気そうだった。」

『会ったのかよ・・・』

「・・・あのさ、なんか後ろから聞こえてくるけど そっちは何やってるの?」

『ああ・・・アノ音が・・・』

実は私達が最初に発見したのが いきなりネギ先生だったんだけど

見つけた時には気を失ってな。

ほっとくわけにもいかないから看病してたんだけど

どうも体内で魔力が暴走してるらしくてな、

起きたら適当に魔法ぶっぱなして放出させようかと

茶々丸と話してたんだけど・・・」

「それがどうしてそんな騒がしいことになるの？」

『いや、私達の移動した時の・・・匂い？　かな

それを追って犬神が後から来たんだけど、

ゴッ

丁度　犬神が来る前にネギ先生が起きて早々落ち込み初めて、

どうしたものかと思ってたら、

イキナリやってきた犬神がネギ先生に喧嘩を売りだして

このザマだよ・・・

ドオオンッ

聞こえてくる爆発音はかなりの音だが・・・大丈夫なのか？　1111

「・・・そっちは大変みたいだね。」

『まあ、丁度いいから私達も好きにやらせてるんだけどな。

これが終わったら三人目の確認に行くよ。』

「とりあえず、三人目確認してグラニクスでラカンさんに預けるまでは」

大変だと思うけど、ネギ先生達引っ張って行ってよ。

預けたら二人には他の皆を確認しに行ってもらうから。

『マジかよ・・・先輩達は何するんだ？』

「私達は色々準備したりね、超達もしばらくは研究で缶詰状態だし。」

『はあ・・・しょうがないか、』

そもそもこっちに来るのを止められなかったのが問題だし

他の奴をほっっておくのも気が引けるしな。

ん？ 先生達も終わったみたいだから

二人の簡単な治療をしたらすぐに三人目の所に行くよ。』

「りょーかい、じゃあ頑張ってね。」

何か問題があったらすぐに連絡するんだよ。

茶々丸も困ったらすぐに連絡するんだよ。」

『はいはい、それじゃあな。』

『了解しました、ソプラノ様。』

『それでは失礼します。』

茶々丸との通信が切れ、私は苗木の世話に戻る。

苗木の方は特に問題ないようで

ここまで育ててくれた村の人達にはいくら感謝しても足りないだろう。

帰ったら一度皆に温泉旅行でもプレゼントしようかと思う。

しばらく苗木の近くで魔力の調整をしながらお茶をしていると

休憩中なのか何か用事なのか・・・超が私の所へやってきた。

「やあ、ソプラノ、そっちは順調カナ？」

「こっちは順調だよ、ここまで育ててくれた村の皆には感謝だね。」

そっちはどう?」

「こっちも作業自体は問題ないネ、

例の作業も もう少しで量産体制に入れるし

空とび猫も調整が少し難しいが

まあ、なんとかなると思うヨ。」

「そっか、じゃあ超は休憩?」

「いや、ソプラノに用事があつてきたネ。

作業自体は言った通り問題ないんだけど、

人員に多少問題があつてネ。

それを何とかしてもらおうと思つて相談に来たネ。」

「人員? って言うと葉加瀬しかいないか・・・

葉加瀬に何かあつたの?」

私は考えてみるが、葉加瀬の様子に特に変わったところはない・・・  
はず。

「問題というのは、葉加瀬とソプラノの関係についてだよ。」

葉加瀬もアレで奥手なところがあるから

彼女から何か行動を起こすということとは考えにくくてネ。」

「……私から何か行動しろと?」

「察しが良くて助かるヨ。」

「私としてはそれほど焦る必要があるとも思えないんだけど?」

「ソプラノの時間間隔で話をしていたら葉加瀬はおばあちゃんになつちゃうヨ。」

「そこまで酷くはないと思うんだけど……」

彼女も……別荘時間合わせてもまだ十分若いでしょう?

そんなに焦ることもないと思うけどな。」

「若い時は若い時なりの経験をしておくべきだと思わないか?」

私は少なくともそう思うヨ。」

「ふむ、超の言うことも一理あるけど……まあ、いいか。」

ここでいくら考えてもしょうがないし、一度葉加瀬とゆっくり話してみるよ。」

「そうしてあげてほしいネ、」

できたら仮契約をしてくれると私としても安心出来るネ。」

「……これから起こること？」

「そう、私達は身を守る方法があるけど、ハカセには自身には何も無いネ。

ラトナとピユラがいるけど それでも一人になった時に

何かアルとナイとは大違いだからネ。」

「うーん、仮契約の方法自体ではその考え方は賛成出来るんだけど

……超は自分と同じ方法でやれ、と思ってるんでしょう？」

「それはお二人に任せるヨ。」

「その辺も含めて葉加瀬とは話してみるよ。」

「よろしく頼んだヨ」

それでは私は甘いものでも食べてくるネ。」

「ん、じゃーねー。」

side 超

「さて、これであの二人が仮契約を結ぶなり

チユーするなりしてくれればハカセとも対等になるからネ。

私が親友として手を貸すのはここまで、ここからは女の勝負だよ。

・・・ハカセ。」

「っ!？」

廊下の角を見ながらハカセの名を呼ぶ、

するとそこからハカセが申し訳なさそうな顔で出てくる。

「・・・気が ついていたんですか？」

「私はこれでも少しは武道をかじっているし それなりに実戦も経験してる身ネ。」

ハカセみたいな素人の気配も読めないようじゃ 訓練しなおしだよ。」

「・・・全く・・・もう。」



「ちゃんと私が渡したあの球は持っている力？」

「・・・持ってますよう。」 / /

「じゃあ、後は頑張るとよろしい。」

今夜はお祝いで私が美味しい料理を用意しておくネ。」

「よ、余計なプレッシャーはかけなくていいんです！！」 / /

「アハハハ、じゃあ今日の所は邪魔者は去るとするヨ、

でも、明日からはこうは行かないからネ。」

後はハカセに任せて私は食堂の向かった。

side 葉加瀬

「本当にもう・・・余計な気ばっかり効かせて。」 / /

私は白衣のポケットに入っている超さんから貰った

簡易型の仮契約の魔法陣を展開できるボールを握り締め、

想い人の元へと向かう・・・

神様から頼まれたお仕事。

その55（後書き）

55話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その56

side 葉加瀬

新オステイア クルト別邸 夜

アレから数日が立った……

結局 超さんに散々お膳立てしてもらいながら

あの後ソプラノさんとお茶をただけで、

何もできずに帰ってきてしまったのだ。

「あ〜、私は何をやってるんだろう……

あれだけ超さんにお膳立てしてもらったのに、

いざ ソプラノさんの前に出たら何も言えなくなっちゃったよ〜。」

1111

私はこの家の主のクルトさんに用意してもらった

個室に備え付けられたベットの上が転がりまわっている。

「科学に魂を売って、実験ではどんな危険物も平気で扱えるのに  
ちよつとその・・・皮膚接触と言っか、

一時的粘膜接触をする程度のことでのこの様。

・・・・・・・・・・・・・・・・はう。」 / /

ソプラノさんと口付けをする想像をしただけで

顔が火照ってくる・・・どうも、この行為は私にはかなり難易度が  
高いようだ。

「・・・・・・・・セ、ハカセ、大丈夫ですか？」

「へ・・・・・・・・？ うわっ!？」

あ、貴女達何時からいたの!？」

「先程ドアをノックしましたが返事がなく、

中から若干異常な声が聞こえたもので葉加瀬の安全の確認のため  
2分16秒ほど前から室内に侵入しました。」「

そんな前から部屋にいたなんて・・・全く気がつかなかった。

「そ、そう・・・別に異常はないから、大丈夫だよ。」 / /

「「そうですか。」

それでは超鈴音からの伝言を、お伝えします。」「

「え？ 超さんから？ 何かあったのかな・・・」

「「ハカセのヘタレ。」「

「ぶふうっ！！」

「「以上です。」「

「そんな事のために貴女達はきたのっ！！」

「「いえ、本題はこの後です。」

超鈴音の指示でハカセとソプラノ様との関係を進展させるお手伝いを

するように言い付かっています。」「

「ラトナとピユラ・・・貴女達が？」

「はい。」「

・・・正直この手の話題を扱うには

この娘達にはまだ少し早いんじゃないだろうか？

・・・いや、逆に今のこの娘達ならデータと計算で思考される部分が多いから

客観的な意見を聞けていいのかも？

「そ、それじゃあ少し手伝ってもらおうかな？」

「はい、お任せください。」

それではハカセ、参りましょうか。」「

二人はそれぞれ私の腕を組み、

私をどこかに連れていこうとする・・・まさか、

このままソプラノさんのところに連れていくつもりか!?

「ちょ、ちょっと待って!

貴女達、私をどこに連れていくつもりなの?」

「まずは浴室にハカセを連れていき、身体を洗淨する予定です。」  
「

「え?・・・私そんなに臭う?

徹夜で作業とか無い限り、ちゃんと毎日お風呂には入ってるけど・・・

「性交渉の前には女性は身体を洗淨し、

清潔にしたほうが男性は喜ぶとのデータがあります」「

「へ・・・ち、ちょっと待ちなさい!

貴女達 私に何をさせるつもりなのよ!!」「 / /

「ハカセとソプラノ様との男女間の関係を進展させるため

お二人には性交渉をしていたかどうかと思っと思っていますが?」「

「どう考えたらそんなに一気に話が飛ぶの!」「 / /

「ハカセの法的な年齢では結婚は無理なので、



婚約、もしくは恋人関係になっていただくため、手っ取り早く性交渉をしてもらい、

それを口実にソプラノ様に責任を取っていただくのが

一番最短で お二人の関係を進める事が出来る方法だと思いますが、何か？

・・・避妊具を使用していただくので、

妊娠にご心配はしていただきなくて結構です。」「

「OK、わかったわ。

貴女達にはこの件で手伝わってもらわなくて結構です。」「 1111

客観的に考えるとか以前に、

この娘達には人間社会の倫理観を学んでもらう必要がある。

これは今後の課題ね・・・

「しかし、私達は超鈴音に指示されています。

八カセが抵抗した場合、多少強引にしても良いと許可をいただいています。」「

「まって！ 超はこの事を知ってるの!?」 111

「いいえ、方法については私達に一任されました。」

「じゃあ、まず超にこの方法でいいか聞いてきなさい！」 #

「方法は私達に一任されてますので、この方法を実行します。」

言うことを言い終わるとラトナとピュラの二人は

問答無用で私の両腕を拘束したまま、廊下を引きずっていく。

「ちょ、まって！ いやあゝ！！ 誰かあ、助けて！！」 / /

私を引きずって二人は進んでいく・・・が

進行方向に丁度千草さんがいるのを視認できたので

急いで千草さんに助けを求めることにした。

「ち、千草さん 助けてえ!!!」

「・・・ん？ なんや葉加瀬はんに双子やないか、どないしたん？」

「とにかく、この娘達を止めてください!!」

「私達は超鈴音に指示に従っているだけです。」

「まあ、とにかく話を聞かせてえな。」

「はい、実は……」

双子が真面目な顔をして説明をする。

数日前の私の不甲斐ない話から始まり、

それを知った超さんがラトナとピュラに私の手伝いをするように指示したこと。

その後彼女達の独特の思考で発案した、

酷く倫理的に問題のある計画を説明する。

千草さんは特に表情を変えずに双子の話を聞いている。

「ほんならウチの旦那さんに葉加瀬はんを抱かせようとした言っ事やな。」

「表現方法が若干異なりますが、概ねその通りです。」

「ふん……まあ、確かに手っ取り早いかも知れへんな。」

旦那さんも葉加瀬はんも奥手みたいやし、

手っ取り早く関係を進めるにはいいかも知れへん……。」

「ちよつと！ 千草さん止めてくださいよ！」 1111

「それでは私達は八カセを洗浄しますので、これで失礼いたします。」

「あゝ、ちよつと待ちいや、まだ話は終わってへんで。」

「何か問題があるでしょうか？」

「確かに関係を進めるだけなら その方法で進むこともあるかも知れへんけど

その後二人が円滑な関係を続けられるかは分からへんやろ？」

「「その後の関係については特に指示を受けていませんので。」

「せやつたら、二人共考えてみなはれ。」

無理やり二人に関係を持たせたら旦那さんと葉加瀬はんは

その後気まずくなると思わへんか？」

「「……そういものなのですか？」

「そういもんや、特に女の子の初めては大事な事や、

それを娘のような立場のあんたら二人とは言え、

強制されて関係を持たされた、なんてことになったらトラウマになりかねまへんで？

そもそも旦那さんが嫌言ったらどないします？

それを聞かされた葉加瀬はんは、

自分が拒絶されたと思って傷つきますやろ？

ラトナとピュラの二人かて、旦那さんと葉加瀬はんが仲良うしてほしいやろ？」

「はい・・・確かにその通りです。」

この娘達はこんな方法を使うと言いながらも

私とソプラノさんに仲良くして欲しいと思っていたのか・・・

本当にこの娘達にはまだまだ経験が足りてないようだ。

だが、私達に仲良くしてもらいたいと言うのは

それはそれでこの娘達が成長しているということだから

そこ だけは喜んでいいのかも知れない。

「せやったらこの方法は止めて、

葉加瀬はんも納得出来る方法を考えましょか？」

「はい、わかりました。」

流石千草さん、言い聞かせるように二人を諭して

穩便に済ませてくれた。

こう言うのを大人の女と言うのだろうか？

「あ、ありがとうございます千草さん！」

おかげで（私の貞操）が助かりました。」

「どういたしまして……ほんで葉加瀬はん？」

「な、なんですか？」

「旦那さんと口付けで仮契約しますの？」

「いや、それは超さんが言い出しただけで、私としては……その・  
・」

「ふん……してもええとは思ってるけど、

きっかけが掴めへん、そこまで急ぐことでもない、言つところやるか？」

「あう……」 / /

「……私達には、よく分かりません。」

「二人共、その辺は今後の勉強やな。」

丁度いい見本が目の前におるんやからしつかり観察するとええよ。」

「「はい。」

しつかりと観察し、録画して勉強したいと思います。」

「何言つてるんです、やめてくださいよ！」 / /

この人は私を助けるつもりがあるのか、それとも単にからかっているのか……

「少しくらいからかうのは堪忍してや。」

ウチかて旦那さんの唇が奪われるかどうか何や、

本音言つたら少しおもろないところもあるんやで？」

「あ……その、すいません。」

「謝らんでもええよ、別に怒ってへんから。」

「ただ少し嫉妬してるだけやからね。」

「その・・・千草さんはいいんですか？」

私がソプラノと仮契約というか・・・そのき、キスしても・・・  
／／

「ウチは旦那さんがなにしようが　ウチを捨てへんでくれたらそれでええんや。」

・・・まあ、女としてはおもしろないけどな。」

「・・・私には少し理解できません。」

「葉加瀬はんには葉加瀬はんの想い方があるように

ウチにはウチの想い方があるから、そこは別に理解出来んでもええ  
と思つよ。」

「はい・・・。」

「まあ、今は葉加瀬はんのことや。」

と、言つてもぶつちやけると旦那さんをお願いすればええだけなんや  
けどな。」

「そ、それが・・・その、いざ　言つとなるとなかなか・・・」



「葉加瀬はんの年頃やと

そういうことに抵抗があるのもしょうがないのかも知れへんけど、あんまり行為自体にくくって考えへんほうがええで。

それよりも どうして旦那さんと仮契約したいのか、

それを考えればええと思うよ。」

「……どうして仮契約したいか……ですか？」

「超鈴音はハカセに自分の身を守る手段を持つためにも

ソプラノ様と仮契約してアーティファクトを手にしたほうがいい、

と言う方針だそうです。」

「それもひとつの考え方やな、でもそれやったら別に口付けせんでもええやん。」

他の方法でもええのに、葉加瀬はんは口付けの方がええんやろ？」

「……」

確かに 単純にアーティファクトを手に入れただけなら

別に他の方法でも良い……でも私はひとつの方法に括って考えている。

どうしてか・・・

超さんや皆に差をつけられるのが悔しい？ 仮契約の証として？

差をつけられて悔しいのも、証としても根本にあるのは、

ソプラノさんが好きだから・・・

「・・・・・・・・」 / / /

「・・・・・・・・答えは出てるみたいやね。」

ほんならウチが少し手を貸しましょうか。」

千草さんは彼女のアーティファクトである殺生石を出す・・・

・・・何故私に力を貸すのにあの石が必要なのだろうか？

「葉加瀬はんには今から呪いをかけます。」

「・・・・・・・・は？」

千草さんが私に呪いをかける？

しかも あのアーティファクトはエヴァンジェリンさんでさえ  
恐れるほどの効果を発揮する物だ、それを使ってまで私にかける呪  
い？

私が思考の海に浸っている間に、

千草さんは呪符を使い私に呪いを掛けていく。

「おふださんおふださん、ウチの願いを聞いておくれやす。」

「ま、まっってください千草さん！」

千草さんの持っていた呪符が燃え尽き、

それと同時に一瞬私の身体に軽い痺れが流れる。

「ふう、無事葉加瀬はんに呪いが掛けられましたえ。」

「・・・本気だったんですか、

そ、それで・・・どんな内容の呪いを私に掛けたんですか？」 1

11

「内容は・・・」

「内容は・・・？」

「今日中に旦那さんに口付けしないと今後一生、

旦那さんに会えなくなる呪いです」

「なあっ！？」 1111

今日中にソプラノさんにキスしないと 2度と会えなくなる？

そんな馬鹿な呪い・・・不可能・・・と言い切れ無い・・・

エヴァンジェリンさんが恐れたあの石を使ってまでかけた呪いなら

もしかしたら本当に・・・

「千草さん！ な、なんてことをしてくれましたか！！」 1111

「言い出す勇気がないんやったら、

言い出さざるをえない状況に追い込んだらええと思つて。」

「それにしてもこんな方法を使わなくても！」

「ハカセ、本日中ということだと後3時間もありませんか？」

「なっ！？ もうそんな時間なんですか！？」

「葉加瀬はん、旦那さんやつたら庭の苗木のところに居ましたえ」

「くっ！・・・千草さん！後で話がありますから！！」

「ハカセ、正確には後 2時間47分34秒しかありませんが？」

「

「あゝ、こんなことしてる場合じゃない！」 1111

私は庭にいるというソプラノさんの元へと駆け出した。

side  
超

「・・・と まあ、こんな感じでよかつたんやろか？」

「上出来だよ 流石千草さん、頼りになるヨ。」

二人も 今日はお疲れだったネ。」

「「いえ、これもハカセとソプラノ様のためですから。」

私は認識障害魔法を使い廊下の角からハカセ達の様子を見ていたが

千草さんも流石だったが、思いのほか双子の演技がすごく

ハカセは完全に騙されたようだ。

私が逆の立場だったとしても、双子のあの様子では信じてしまっただろう。

「しかし千草さん、あの呪いの時、本当に魔力反応があったけど

ハカセに何かしたの力？」

「ちょっと気分が高揚する、軽めの戦意高揚の術を掛けただけです。

「戦意高揚ネ・・・今のハカセには丁度いいのかもネ。」

「女の子としての戦いやからね。」

「フフツ、それじゃあハカセの成功を祝って、祝杯でも上げよう力。」

「もう成功の祝杯ですか、少し気が早いんじゃないですか？」

「そこは成功を願うのもかけてるからネ。」

「ほな、ウチもお付き合いしましょか、

今夜は一人寝で寂しい夜になりそうやし。」

「それは悪いことをしたネ、お詫びに取っておきをだすヨ。」

「それは楽しみや。」

「「では、私達はおつまみを作ります。」」

「ありがとうネ。」

side ソプラノ

「ふむふむ、もう少し土に栄養が欲しいと。」

私は世界樹を介して苗木の育成に今何が必要なのかを聞いている。

土に栄養が欲しいか・・・やはり新オスティアは空中に浮いている  
陸地だけあって

地上よりも土の栄養価が低いのか？

気温は調整しているから問題ないか。

そんな事を考えながら苗木の様子を確認していると

廊下の方から葉加瀬が血相を変えて私の所へ走って着た。

「そ、ソプラノさん！ お願いがあるんですが！」 1111

「ち、ちょっと葉加瀬落ち着いて。」

葉加瀬は私の直ぐ目の前に来ると

私の肩を両手で掴み、息がかかるくらいの距離で騒ぎ出した。

「これが落ち着いてられますか、

と、とにかく時間がないので要点だけ言いますが・・・」

「・・・要点とは？」

「わ、私と今すぐ・・・き、キ、キスしてください！」 / / /

「・・・は？」

「訳は後で説明しますから！」



ああ、もう2時間半くらいしか時間がない！」 111

「・・・いや、まずは落ち着いて深呼吸してから訳を話してみなよ。

まさか説明に2時間以上かかる話でもないでしょ？」

「た、確かにそうでしたね！」

説明自体は数分で終わるので聞いてください、実は・・・」

葉加瀬から話を聞いたが・・・超もラトナとピュラも、

オマケに千草まで何やってんの・・・

葉加瀬と私？ の応援するのはいいけど

もう少し方法があるでしょうに。

「え〜っと、要は千草に今日中に葉加瀬が私とキスしないと

二度と私に会えなくなる呪いを掛けたので

急いで私とキスしたいと。」

「そ、そうですね・・・」 // /

「・・・ちょっと待ってね、数秒で終わるから。」

「? はい。」

私は葉加瀬に何か魔力の反応がないか調べてみる。

魔法が使えない私でも、千草が本当にそんなすごい呪いを掛けたなら魔力反応くらいあるはずだし、それくらいなら私でも感知できるはずだ。

しかし調べてみてもそんな様子は全くない……と言つことは……

「あのね 葉加瀬。」

「はい。」 / /

「葉加瀬にはそんな呪い掛かってないよ。」

「……はい?」

「だから、葉加瀬に呪いなんか掛かってないよ。」

「……え、でも千草さんが……」

「千草が冗談でも葉加瀬にそんな呪い掛けるわけ無いじゃない、

大方 そう言えば葉加瀬が私のところに来て

仮契約なりキスなりせがむだろうと思ったんでしょ。

それに あの石だって、

千草がよっぽど嫌うか恨んでるか、

それとも何ならかの負の感情を抱いてる人以外には

大した効果は出ないんだから。」

「え、でもエヴァンジェリンさんは・・・」

「エヴァはあれだよ、・・・自分で言うのも恥ずかしいけど

私との関係で千草にとっては最大のライバル・・・みたいなところがあるから

それでエヴァには効果が強く出るんじゃない？」

「はぁ・・・じゃあ、私は今日中にソプラノさんとキスしなくても・

・・・」 / /

「・・・・・・ いや！ 万が一ということもあるかも・・・

それに葉加瀬にもお願いされたし、

私も葉加瀬としたいな・・・キス。」 / /

「・・・ひえっ!？」 / /

葉加瀬が私の目の前でびっくりして硬直している間に

彼女の腰に手を回して抱き寄せ、

葉加瀬が椅子に座っている私を見下ろす形になる。

「ちよ、ソプラノさん・・・冗談・・・ですよね？」 / /

「私は本気だけど？」

葉加瀬はさつき本気私にお願いしに来てくれたんじゃないの？

私と二度と会えなくなるのが嫌だから、

あんなに急いできてくれたんでしょ？」

「そ、それはそうなんですけど・・・」 / /

「葉加瀬がどうしてもしたくない って言うんだったら

私を突き飛ばしてでも戻ってくれてもいいよ。

でも、私とキスしたいって思ってるのなら、

このまま葉加瀬からシテ欲しいな」

「あ、あうう・・・」 / / /

葉加瀬は真っ赤になって私の腕の中で狼狽えている。

私は葉加瀬が本気で拒絶しない限り開放するつもりはない。

「せっかく超やラトナやピユラ、千草が作ってくれたこの機会

葉加瀬は無駄にしてもいいのかな？」

「うう……あ、あのせめてソプラノさんからシテくれませんか？」

「だぐめ 葉加瀬が最初に言い出したんだから葉加瀬からシテよ。

あ、超が持ってた簡易で仮契約の魔法陣を作れるあの球

持ってるなら使ってもいいよ。」

「ううう……何でこんなことに……」

葉加瀬はゆっくりと右手を白衣のポケットの中に突っ込み

何かを握りしめている、恐らく超が渡した仮契約の球だろう。

私達はしばらくそのままだったが、

やがて葉加瀬が観念したのかポケットから手を出す。

その手にはやはり超の仮契約の球が握られている。

「あの・・・目をつぶってくれませんか？」 / /

「ん、OK・・・これでいい？」

私は目をつぶり顔を葉加瀬の方に向ける。

数十秒ほど立った時、足元に何かが落ちる音がして

私の顔に葉加瀬の両手が添えられる。

手が添えられてから徐々に私の顔の前に

何かが近づいてくる感じがして、鼻先が触れるかどうかの時・・・

「葉加瀬・・・好きだよ。」 / /

「っ!?!?・・・私もですよ。」 / /

私達の足元の魔法陣が光り輝き、一枚のカードが舞い降りた。

その頃、食堂では超とラトナ、ピユラ、千草がプチ宴会を開いていたが

そこに騒ぎ声を聞きつけたエヴァがやってきた。

「ん？ 貴様ら何をやって・・・」

おい、超 お前まで酒を飲んでいるのか？

珍しいこともあるな。」

「あ、エヴァンジェリンか、エヴァもこっちに来て一緒に飲むといひヨ。」

「せやで、エヴァはんも一緒に飲んできな。」

「飲むのはいいが・・・妙にテンションが高いな、

なにか良い事でもあったのか？」

「良い事といえばあったような無かったような？」

「確かに、ええ事なんやけど 複雑な気分でもありませんな。」

「何だ、ワケがわからんぞ。」

おい、双子、コイツらに何かあったのか？」

「はい、今回は葉加瀬さんとソプラノ様が仮契約をなされたお祝いで

アルコールを飲んでおられます。」

「……おい、ちょっと待て。」

何で姉様と葉加瀬が急にそんな事になるんだ？」

「私達と超鈴音、千草さんで葉加瀬さんをけしかけました。」

「おおい！！ 貴様ら何をしてくれたんだ！！」 #

「「「うるさい(三)！！」」」

「……お、おおう。」 ーーー

「ほら、エヴァンジェリンも飲んでいくネ！」



飲まないとやっつけられないヨ。」

「せやせや、ほらエヴァはん、ここに座ってまずは一杯。」

「あ、ああ……。」

結局エヴァは二人に気圧され、なし崩し的にプチ宴会に参加。

エヴァ自身も日頃の鬱憤が溜まっていたのか……

この日のプチ宴会は翌朝まで続き、

クルト邸に貯蔵してある飲料用のアルコール類はこの日、すべて消えた。

神様から頼まれたお仕事。

その56（後書き）

56話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その57

新オステイア クルト邸

昨晩は葉加瀬と仮契約し、カードを受けたった後、

葉加瀬は真っ赤になって すぐに自分の部屋に駆けこんでいった。

その後は私も自室で就寝。

翌朝、夜通し騒いでいたエヴァ達に葉加瀬は捕まり

どこかに拉致されていった・・・

質問攻めにでもあっているんだろう。

エヴァ達が戻ってくるまで時間があつたので、

朝食を待ちつつ、千雨達に連絡を取ってみる。

確か昨日までは回復したネギ先生と小太郎君を連れ

町の方に移動中だと言っていたはずだ。

本来、ネギ先生が回復次第 先生だけを連れて行くはずだったのだが

小太郎君が合流してしまったのでそういうわけにもいかず、

空を飛んで長距離移動をできない為地上を移動、

予定より3人目の反応のあった街まで

到着するのが遅れていると聞いている。

「で、反応見る限りもう街には着いてるみたいだね。」

『ああ、こつちの時間で今朝方街が見えるところまでこれたからな。』

今はネギ先生達と私達、別れて搜索。

私達は茶々丸がいるから3人目の反応を探しているけど・・・

それよりも先輩、どういう事だよ?』

「え？ 何が？」

『ニューズ見てねーのかよ！』

「あ、ゴメン、私今起きたばかりなんだ。」

『はあ・・・いいからニューズ見ろよ。』

ネギ先生達 賞金首で手配されてるぜ・・・まあ、この街では私達もただだけ。』

「あ・・・手配されちゃったんだ。」

『されちゃった じゃねーよ・・・』

でも なんか知らないけど、私達3人は地域限定で手配されてるみたいなんだよ。

MMやアドリアネー、新オステイアだと私達が手配されずに

ネギ先生達も犯人じゃなくて重要参考人扱いで保護する用意があるとか・・・

まるで自分で出頭して来い、と言わんばかりの内容だったよ。』

「それ、私達が先に手を打っておいたんだ、

アドリアネーについては自信はなかったけど、

向こうの責任者の人、クルトにちゃんと話を聞いてくれたみたいだ

ね。」

『そついう事か。』

でも、どうせなら手配されないようお願いしたかったよ……』

「そこはまあ、私達でもなんともならない部分何で。」

『まあ、いいや。』

この街で3人目の反応を確認してからグラフィクスに向かうよ。

確か、この街にいるのは朝倉の可能性が高いんだっけ?』

「りょーかい、一応その発信機の識別だと朝倉さんだね、

あと、それ以外になんか変なことがあつたらすぐに連絡してね。」

『了解、それじゃあ私達は搜索を続けるから。』

「うい、茶々丸も頑張つてね。」

『はい、頑張ります、ソプラノ様。』

千雨達との通信が終わった頃、

憔悴した様子の葉加瀬を引きずりながらエヴァ達が食堂にやってき

た。

ちなみに双子は調理中、

チャチャゼロはさつき葉加瀬が連れてかれる時にはエヴァ達といたが  
部屋で寝てるのか？ とにかく今は一緒に居ないようだ。

「あ……え、エヴァ、それに皆もおはよう。」 ⅠⅠⅠ

「……おはよう姉様。」

「おはよう、ソプラノ。」

「旦那さん、おはようございます。」

「……よう。」 ⅠⅠⅠ

「葉加瀬……大丈夫？」

「……ええ……肉体的には……精神はボロボロですけどね……  
フフツ。」 ⅠⅠⅠ

なにやら葉加瀬は、かなり精神的に追い込まれているようで

引きつった笑みが痛々しい。

それにしてもエヴァだが、いつもなら激怒していてもおかしくないのだが

今日は妙に静かだ・・・

「え、エヴァ今日はどうしたの？」

調子でも悪いの？」

「姉様にはそう見えるのか？」

「・・・いいえ、別に体調が悪そうには見えないけど。」

「なら大丈夫だろう、私も特に異常は感じないしな。」

「そ、そう・・・？」

エヴァは不気味な静けさを保ちつつ 淡々と朝食を済ませ、

いつものように食後のお茶を飲んでいる。

さて、朝食が終わり、食後のお茶の時の話題は

超が口火を切り、昨晚の葉加瀬との仮契約で出た

アーティファクトの話になった。



「さっきハカセに話を聞いた時にカードは見せてもらったけど  
まだアーティファクトは見せてもらってないんだよね。」

ソプラノもいることだし早速お披露目をしようヨ。」

「お披露目も何も・・・このカードに書かれてる葉加瀬はんは

どう見てもいつも通りの白衣の格好で、何も変わってへんで？

・・・なんや不敵に笑ってはるけど。」

「しかしこの絵だと、葉加瀬の右手が途中から無い・・・と言うか  
空間に飲み込まれてるとでも言うのか。」

何か空間に干渉する能力でもあるんじゃないか？」

エヴァも葉加瀬のアーティファクトの話になると

好奇心が出たのか、いつも通りの雰囲気になる。

「私もちよっとカード見てみようかな。」

葉加瀬のカードを出して見てみると、

白衣姿の葉加瀬が不敵な笑みを浮かべて右手を

背後の空間に突っ込んでる、

とでも表現するのか、それ以外では特に普段の葉加瀬と変わった感じはない。

「うーん、わからないな。」

とりあえず葉加瀬、アーティファクト出してみてよ。

あ、呪文は知ってる？」

「大丈夫です、えーっと アデアット。」

葉加瀬が呪文を唱えると、葉加瀬の服とメガネが光りだしたが

光が収まった時の葉加瀬の姿は特に変わった様子はなかった。

「ふむ・・・その白衣にさつきとは違い多少の防御能力が付加されてるようだな。」

並の魔法使いの魔法の射手くらいなら軽くレジストできそうだな。

それにメガネからも多少の魔力を感じるが・・・どうだ？

何か変わった感じはあるか葉加瀬？」

「そうですね、いつものメガネよりは見やすいですね。

それに遠くのものを見ようとすると、

カメラのズームや望遠鏡みたいに拡大するようです。

あと……気になるのがなんか照準の様な物が出たり消えたりするんですよ。

じゃまだな〜と思うと消えるみたいです。」

「ふむ、その照準が気になるけど

それ以外は望遠機能のあるメガネ見たいだね。

と、なると後はこのカードの絵にある葉加瀬の右手の事力……」

「影の魔法を使った転移や収納の魔法があるがそれみたいな物か？

葉加瀬、何かに手を突っ込むイメージで右手を動かしてみる。

引き出しでも水の中でも空間でもなんでもいいから、イメージしな  
がらな。」

「はあ……じゃあとりあえずやってみます。」

葉加瀬が何度か右手を動かしているが

何回目か、急に葉加瀬の右手が空間に沈み込むような感じで消えていった。

「わっ！ なんですかこれ！？」

ちゃんと感覚はあるのに、手が消えましたよ！」

「ハカセ、今何をイメージしながら動かしたネ？」

「は、はい。」

今は倉庫や収納場所みたいな感じですか？

私が開発したものを収納してる倉庫があるんですけど

そこに手を突っ込む感じでやったらこうなりました。」

「何か掴めたりするの？」

「いいえ、特に何も無いですね。」

「ふうん、収納場所だったら からっぽだから何も無いんじゃない？。」

「ほんなら葉加瀬はん、このお茶菓子のクッキーをしまってみたらどうじゃ？」

「いきなり食べ物力？」

まあ、とりあ会えずハカセやってみるネ。」

「はぁ……ん、ダメみたいですね。」

さっきのイメージの延長で、クッキーをしまうイメージでやってもできないみたいですね。」

何回か葉加瀬は手を動かしているが、

さっきみたいに手が消えることはない。

「食べ物だからダメなんじゃないか？」

おい、この空のカップはどうだ？」

「はい、やってみます。」

それからカップ、スプーン、お皿とテーブルにあるもので試してみ  
るが

どれもダメなようで、手を変えたり色々やってみたが  
うまくいかなかった。

「ふむ……何ならいいんだ？」

手を突っ込んで何も掴めないということなら

葉加瀬の倉庫と繋がっているわけでもなさそうだし・・・」

「ふむ・・・ハカセこれはどうか？」

このケータイ電話とこっちのハカセが前私に作ってくれたペン。

両方順番に試してほしいネ。」

「はぁ・・・一応やってみますけど。」

一度も成功しないので、そもそも物を収納できるのか半信半疑な葉加瀬。

超の携帯を試したがうまくいかず、

諦めの様子でペンの方を試すと・・・

「「おっ!」「あっ!」「入った・・・」

「あ・・・入りました! 入りましたよ!」

「ふむ・・・やはりそうカ。」

「どついう事だ超?」

「今のペンは葉加瀬が作った物。

今までは陶器や金属や食べ物で駄目だった。

次は電子部品が含まれた物だがこれも違う、

材質はあまり関係ないんじゃないかと思ったんだヨ。

そこで条件を変えてさっきのペン、

アレは以前ハカセが私に作ってくれた物、

ハカセの作品といえる物だネ。

つまり ここまでの条件から考えると、

ハカセのアーティファクトはハカセが作った物を収納できるんじゃないかな？」

「ほう、おい葉加瀬、今度はさっきのペンを取り出してみる。」

「はい……あ、あります！」

手を突っ込んだらすぐ握めました。」

葉加瀬が空間に手を突っ込んですぐに出すと

手にはさっきのペンが握られていた。

「へ〜・・・じゃあ葉加瀬、この紙ナフキンを一回入れられるか試してみて。」

その後その紙ナフキンで鶴かなんか折ってもう一度試してみて。」

「はい・・・とこのままだとダメですね。」

では、これで鶴を折って・・・。」

「これは意外な才能ネ、葉加瀬が折り紙を折れるなんて。」

「いや、鶴くらいなら誰でも折れるでしょう？」

「そうなの力？　じゃあ今度教えてほしいネ。」

「いいですよ・・・っと折れました。」

では、早速。」

紙のナフキンで折った鶴はなかなか見事な出来だった、

その折り鶴は次の瞬間には葉加瀬の手によって

空間の中に収納されていった。

「お〜 この程度の加工で葉加瀬の制作物として認識されるんだね。」



「この様子なら、私とハカセとの合作でも大丈夫かもしれないネ。」

「・・・そうだ！ おいラトナこっちに來い。」

「はい、エヴァ様。」

何かごようでしょうか？」

「葉加瀬コイツだ！ こいつで試してみる。」

「イキナリ人体実験はちょっと酷いんやありませんか？」

「馬鹿者、コイツが入れば大きさに制限はほぼないと考えられるだろう。」

それに普通に出してしまえるんだから問題ないだろう。」

「それは面白そうですね！」

ラトナが収納できるなら超さんとの合作でもいけるとも考えられますから

かなり有効になりますよ！

早速試してみましよう！」

葉加瀬も成功して法則が分かってきたことで

エンジンがかかってきたのか、知識欲に忠実になってきた。

「ハカセ、実験の前に少しお時間をいただけますか？」

「ん？ 何？ 別にいいけど・・・」

ラトナは私の前まで来ると、お辞儀をして話します。

「ソプラノ様、本日限りで私はお使えすることができなくなるかも知れませんが

これも制作者からの指示、

誠に遺憾ではありますが万が一の時はピュラをよろしくお願いします。」

「ちよっ！ ラトナ!?」 1111

「ピュラ、私に何かあったら貴女が一人でソプラノ様にお仕えするんですよ。」

決してハカセを恨んだりしないように。」

「はい、ラトナ・・・お元気で。」

「ちよっと貴女達！ 縁起でもないこと言わないでください!」

「……ちよつとしたジョークです。」

「「「「「心臓に悪いわ!」「」「」」

「本当に……どこでこんな悪質な冗談を覚えてきたんだか……

そんな事言われたら私もやりにくくなりますよ。」

(……でも、実験はやるんだ。)

「それじゃあ行きますよ。」

「どつぞ。」

葉加瀬はラトナの手を掴んで軽く引くようにすると

空間が波打ち飲み込まれるようにラトナの姿が消えて行く。

「おおく成功ネ！ これではほほ大きさは人形くらいまでは

問題ないということだネ。」

「やりましたね 超さん！」

「ふむ、これは茶々丸でも大丈夫ということになるな。」

「あゝ、葉加瀬喜んでるとこ悪いけど、

何でもいいからすぐにラトナを出してあげてくれない？」

「せやで、はよう出してあげてーな。」

「そうですね、すぐに試してみます！」

心配そうに葉加瀬の様子を見つめる私と千草、

それに反してエヴァや葉加瀬、超は研究者の血が騒ぐのか

妙に嬉しそうなのが気になった。

そんな心配をよそに、葉加瀬が手を突っ込むとラトナは

入った時の姿であっさりと出てきた。

「ラトナ大丈夫？ なんとも異常はない？」

「はい、ソプラノ様。」

多少時刻に誤差がありますが以上はありません。」

「ちょっと待つネ、時刻に誤差があるって どれくらいネ？」

「2分25秒ほどです。」

「その時間って・・・まさか、ラトナ向こうで何か見たか？」

「向こうと申されましても、

ハカセに手を引かれて何かに飲み込まれたと思ったら

今のこの状態で、時計が遅れていたんですが。」

「・・・これは興味深いネ、つまりハカセのアーティファクトに収納されている間は

時間は止まってると言うことか・・・？」

「生物を入れておいたら冷蔵庫変わりになって便利ですなあ。」

葉加瀬はんに料理を覚えて貰うとええかもしれまへん。」

家事を担当している千草から実に生活感あふれる提案が上がる。

「料理はともかく、これで茶々丸や双子達の装備の持ち運びで

困ることは無くなったネ！」

「ちょっと待って下さい、ラトナは歩けるからともかく

他の彼女達の装備なんて、私重くて持てませんよ。」

「……あ、そう言えばそうだったネ。」

葉加瀬筋力トレーニングでもするか？」

「……遠慮しておきます。」 111

「……ふむ、そう言えばさっき葉加瀬はメガネに照準のようなものが出たといったな？」

「はい、今も見ようと思えば見れるみたいですけど。」

「もしかしたら、その照準で狙った場所に収納した物を打ち出せるんじゃないか？」

試しにさっき折った鶴を……あの花瓶にでも撃ち出してみる。」

「撃ち出すと行ってもどうするんですか？」

「そんなもの……気分だ。」

さっきの折り鶴を思い浮かべてメガネの照準で狙って……あとは気分です。」

「なんとなく曖昧な……でも、興味深いのでやってみます。」

「興味深ければやるんやな……」

葉加瀬は花瓶に向かって立ち、

試行錯誤してるようだが、

しばらくすると葉加瀬の背後からさっきの折り鶴が花瓶に向かって・  
・飛んでいった？

「おい、ちょっと待て！ 何で只の折り鶴があんなふうに飛ぶんだ  
！非常識な！」

「完全に空力を無視した飛び方だったネ・・・

折り鶴が紙飛行機みたいに飛んでいったヨ。」

「私も知りませんよ、鳥の鶴が飛ぶみたいに考えたらああなっただ  
んですから。」

「・・・まあ、飛び方はいいとして」「」「良くない！」「」  
良くないとして

狙ったところには飛んだの？」

「あ、それは大丈夫みたいです、現に花瓶に当たりましたし。」

「・・・なんて非常識ナ、あんな空力を無視して飛ぶんだったら  
科学はいらないヨ。」

「魔法を使うあんさんが言うことじゃないやろ・・・」

「じゃあさ、葉加瀬が銃弾を作ってそれをイメージして飛ばしたら結構いい武器にもなるんじゃない？」

「……それは………実に面白いですねっ!!」

葉加瀬の眼の色が急に変わりだした。

(しまった！ 余計なことを言ったかも……) 1111

「なにか使いにくい倉庫替わりかと思ったら、意外に使い勝手のある物みたいだし

これで葉加瀬も自分の身くらいは守れそうだな。」

「そうですね、研究者の私にはすぐに仕舞えて取り出せるっただけで十分ありがたいです。

……フフフ、しかもそれを撃ち出せるなんて。」

「……そ、そうか。」 1111

エヴァもようやく葉加瀬の変なスイッチが入った事に気がついたようだ。



しかも超が火に油を注ぎだす。

「後で私のB・C・T・Lでの技術を応用した銃弾の開発をしようヨ、葉加瀬。

単純に火薬を詰めてもいいし、発光弾として目くらましにしてもいいし

色々開発のしがいがあるヨ。

しかも射出装置がいらないから弾頭の大きさも規格も無視できるし、

葉加瀬の訓練次第で連射とかも出来るかも知れないヨ。」

「それは面白いですね！ 是非とも研究しないと。」

なにやら物騒なことを話す超と葉加瀬。

あの二人のMAD科学者は兵器や火薬が大好きなんだろうか……？

そういえば葉加瀬の研究室はよく爆発してたっけ。

「……アレは人間弾薬庫にでもなるつもりなのか？

だからカードの絵もあんな不気味な笑みを浮かべていたのか？

流石に私もついていけんぞ……」

「さあ？ 普通に料理でも覚えてもらえれば

旅先で いつでもあったかい料理を食べれるようになりそうなのに……」

「私は普通に倉庫か荷物運び用にも使って欲しいんだけど、

あの様子だと どんなことになることやら……。」

お茶会の後、葉加瀬と超はすぐさま研究室に入っていく

その日は出てこなかった……

夕方頃、

私はエヴァと庭でお茶を飲んでいたら千雨達から緊急の連絡が入ったので

私とエヴァ、二人で話を聞いてみることにした。

『マスター、ソプラノ様、状況に変化がありましたので連絡をいた

しました。』

「ふむ、何があったんだ？」

わざわざ連絡を入れてくるくらいだ、ぼーやが捕まりでもしたか？」

『まだそちらの方がマシかと思います。』

まず一つ目ですが、発信機のバッチが見つかったのですが

着けていたと思われる朝倉さんが発見できませんでした。』

「ほう、アレは金具には気をつけたから

ちゃんと着けていればそうそう外れるものではないはずなんだが・

」・

『針の部分に衣類等の布が付着していなかったので

単純に付けずにポケットかカバンにでも入れていたのだと思われるま  
す。』

「まあ、仕方ないんじゃない？」

ちゃんと身につけるように説明はしたけど

それを無視したなら当人の責任だよ。

それに朝倉さんなら街にたどり着いたら

どつとでも生きていけそうな気がするけど。」

『ネギ先生達は心配していますが。』

それと、二つ目ですが・・・』

「まだあるのか・・・それで、何だ？」

『はい、村上さんと思われる人が数人の女性と一緒に』

奴隷商人らしき人達にグラフィクスへ連れていかれたようです。

そのうちの一人は体調を崩していたと複数の目撃情報があります。』

「・・・はあく、何でそう厄介な方に行くかなー。」

『今千雨さんが すぐにでも向かおうとするネギ先生達を押さえています』

私達はこの街でもう一度朝倉さんを搜索しながら旅の準備をし

完了次第グラフィクスへ向かう予定です。』

「そうか、お前達はその予定通りに動け。

向こうに着いたらばーやをラカンに合わせるのもわすれるなよ。」

『かしこまりました、マスター。』

「姉様の方でなにかあるか？」

「え？ …… そうだね、茶々丸達には特に無いよ。」

大変だと思うけど頑張つて、千雨にもそう伝えておいてね。」

『かしこまりました、それでは通信を切ります。』

茶々丸との通信が切れ、

私はエヴァの様子を伺うが 特に変わった様子はない。

村上さん達がここで発見されたことや、朝倉さんのバッチの件にしても

もう少しリアクションがあってもよさそうなものなんだが…

「……？ 姉様どうかしたか？」

「ん？ いや、何でも無いよ。」

これからどうしようかなー と思つて。」

「そうか？ …… ならいいが。」

「それよりも村上さんと一緒にいた娘達はどうしようか？

グラニクスならすぐに転移できるから、

先手を打って確保できるけど。」

「……そうだな、とりあえず確認だけしに行くか。」

あまりぼーや達に関わるのも嫌だが、

村上や一緒にいた者が訓練を受けていない者達なら

分かっているそのまま放置するのも気が引ける。」

「そう？　じゃあとりあえず私達でグラニクスに向かおうか。」

「わかった。」

では、着替えてくるから玄関で落ち合おう。」

「りょーかい、じゃあまたね。」

私は一度エヴァと別れ外出用の服に着替え、

エヴァと二人でグラニクスに向かった。

は、  
（それにしても、エヴァが村上さん達のことをここまで気にするとは、

こっちのエヴァはかなりやさしい娘に育ってくれた……

だけど、本当にそれだけだろうか？

何か引つかかるものがあるんだけど・・・まあ、今はあの娘達と

完全なる世界、それにこの世界の事に集中するか、

事が終われば時間はいくらでもあるから

エヴァとはその後にもゆっくり話せばいいし。(

神様から頼まれたお仕事。

その57（後書き）

57話目 投稿



神様から頼まれたお仕事。      その58

自由交易都市      グラニクス

河口に作られたこの街は周囲は比較的肥沃な土地な上、  
海運や空輸などを使い交易が盛んなので、

この世界の都市としてはかなり裕福な部類に入る。

しかし この世界の主要の国家や政府から比較的離れているので  
治安が若干悪い。

村上さん達が奴隷として契約しているのなら

保護者次第では無国籍であることよりも安全だと言える。

私とエヴァは、グラニクスの移民管理局で村上さんと一緒に

誰が誰の奴隷になっているのか調べている。

「1」指定のありました名前の女性につきましては、

昨日、ドルネゴス様の正規の奴隷として登録されています。」

「そうですか、その時に他にも数名登録されていませんか？

できたら彼女が登録された数日前から調べてもらいたいのですが。」

「かしこまりました……ええつと、同日に彼女他2名が登録されていますが

それ以外には居ませんね、数カ月前には居ますが。」

「同じ日に登録された人はなんていう名前の人ですか？」

「はい、大河内アキラ、和泉亜子、この2名ですね。

契約書がありますので確認されますか？」

「お願いします。」

私とエヴァは見せてもらった契約書を確認するが、

村上さんと大河内さん、和泉さんが3人で100万ドラクマで契約したようだ。

「ふむ……この経緯について何か聞いているか？」

「概要ですが、この3人の内の一人が風土病にかかってその治療薬の代金として奴隷になったと聞いていますが。」

「そうか・・・」

「多少暴利ではありますが、命には変えられません。」

そう考えれば、この辺りでは比較的良心的な値段ですね。

彼女達は運が良かったほうですよ。

ドルネゴス様はこの街では 比較的真つ当な商売をなさっている方ですから。」

「ありがとうございます、おかげで助かりました。」

「いえいえ、私の方も過分な菓子代をいただきました、

また御用の時はご指名ください。」

「はい、その時はよろしくお願いします。」

移民管理局を後にし、私はエヴァとドルネゴスさん言う人が経営する、

闘技場のひとつに向かってる。

闘技場につくと、一際目立つ使用人風の服を着た、

大柄な猫耳……と喋っていいのだろうか？

全身毛皮に包まれた猫耳の獣人の女性が居たので

彼女に取り次いでもらおうと思い、話しかけることにした。

「あの〜すいません。」

「はい、当闘技場に何か用かい？」

「こちらドルネゴスさんの経営する闘技場ですよね？」

「ああ、そうだけど、ドルネゴスは今 地方に出かけているので会えないよ。」

「そうですか。」

それなら奴隷の売買契約等を担当しておられる方はいらっしやますか？

「ああ、それなら私だよ、ここの奴隷長をしている。

皆からはチーフって呼ばれてるよ。」

「そうなんですか、それなら丁度良かったです。」

「実はそちらで数日前に契約された3人の奴隷に関してなんですが。」

「3人？・・・ああ、あの変わった格好の娘達かい。」

「一人が病気で治療薬の代金として契約してるよ。」

「名前は村上夏美、大河内アキラ、和泉亜子でよろしいでしょうか？」

「そうだよ、その名前で契約書にもサインしてもらってるみたいだね。」

「変わった地方の文字みたいで、私には読めなかったけどね。」

「実は彼女達のことでお願ひがあるのですが・・・」

「奴隷売買だったら基本的にウチは本人に確認しないとできないよ。」

「そこも含めた事なので聞いてもらえますか？」

「とりあえず立ち話も何だから、中に入りな。」

「その3人も呼ぶかい？一人は寝込んでるから無理だけど。」

「いえ、彼女達には内緒にして欲しいんです。」

「なんか込み入った事情みたいだね・・・まあ、それも含めて中で

聞くよ。」

私達はチーフ（奴隷長）さんに案内され

闘技場の内の応接室で お茶をご馳走になる。

「それで、話を聞こうか。」

「はい、実は……」

私はチーフさんに事前に此处に来るまでにエヴァと話した内容に

少しアレンジして話す。

まず一つが、彼女達の借金を私が肩代わりする。

これは彼女達が他の者に売られることを防ぐ為だ。

チーフさんは本人の意思がないと所有権は売らないと言っていたが

あくまで 基本的 であって、特定の権力者が相手ならそうはいかないだろう。

私達が借金を肩代わりしておけば、

既に売ったと言えるので問題を回避できる。

もう一つが、借金を肩代わりした上で、

彼女達をここでしばらく奴隷として預かって欲しいということだ。

これは原作の筋道から外したくないからで

彼女達が奴隷としてここで働いていれば、

ここを拠点に他の皆も集まってくるし、ネギ先生の修行の口実にもなる。

闘技場のイベントはいろんな意味で外すわけにはいかない。

「ふうん、変なことを頼むもんだね。」

しかしねえ、あの娘達の借金の肩代わりは

ウチとしても早くお金を回収できるに越したことはないけど、

そのままここで預かるのはね・・・

あの娘達を使って稼いだ代金はこっちで賣ってもいいのかい？」

「はい、でもできたら変な仕事はさせないでほしいんです。」

体売ったりするような。」

「ウチはそんな事はしてないよ！」

働いてもらうにしても店の売り子やウエイトレス、掃除なんかの雑用だよ。」

「それなら安心です、それなりに体調に気をつけてもらえれば

そちらの好きなように使って、その分の仕事代はそちらで収めてください。」

食費や経費などもかかるでしょうから。

それに借金の額の1割ほど手間賃として払うつもりなので

そちらの方も お収めください。」

「それは剛毅なことだね。」

そういう事なら、こっちとしても儲かって万々歳だからいいけど・

あんたら何のためにそんな事を？

借金の額にしたって結構な大金だし、

あの娘達にそんな価値があるのかい？」



流石に話が美味しすぎて、この街でそれなりの経験を積んでると思われる

彼女には怪しまれるか・・・

「・・・実は彼女達は、私達とこれからここに来るであろう人達の知り合いなんです。

ちょっとした事故があつて離れ離れになつてしまつたんですが、複雑な事情があつて私達が直に接触するわけにはいかないの

こつやつて裏からサポートしているんです。」

「ふん・・・まあ、そういう事ならいいんだけどね。

あの娘達の知り合いなら変なやつに買われるよりよっぽどいいだろうし。

で、あの娘達の借金の建て替えや プラスの謝礼金については

何時頃振り込めるんだい？」

「それについては強制証書でサインをいただければ本日中でも可能です。」

「若そうに見えるけどしっかりしてるね。」

わかった、証書の方は内容を確認したらサインをしよう。」

「いいんですか？ あなたにそこまでの権限を与えられてるんですか？」

「この奴隷達のことは私に一任されてるからね。」

報告はもちろん必要だけど、この話はこっちとしてもかなりうまい話だからね。

ドルゴネス様も文句は言わないだろう。

そう言えば肝心のことを聞きそこねたけど、

あの娘達はその後どうするんだい？」

「そちらでしばらく預かっていただき、

彼女達の知り合いが来たら 恐らく彼女達を開放しようとして

資金稼ぎを行うはずですが、その費用ができたらお金をそちらで一時的に預かっていただき

その後 私の口座の方に振り込んでください。

それで、私達の経費はそちらに払う謝礼金のみと言うことになる計算です。

多めに稼げたようでしたら、

謝礼金分も利息と称して回収できれば更にいいですね 「

「ふうん、100万ともなればかなり稼ぐのに時間がかかると思うけど?」

「その辺は彼らはそれなりの腕を持っていますし、

彼らの仲間が集まり皆で稼げば数カ月もあれば稼げると思います。」

「その間私の方はあの娘達を預かっておけばいいんだね?」

「そういうことになります。」

「……わかった、あとは多少細かい点を詰めて、

問題なければ取引成立としよう。」

私としてもあの娘達の知り合いに所有権を渡すなり

開放できるならそっちの方がいいからね。」

彼女も獣人ということとそれなりの差別も見てきたんだろう、

そういう事情から奴隷という立場の子に同情的な感情を持つのも理解できる。

「はい、それじゃあエヴァの方で何か気になることとかない?」

「……特にないな、それでいいと思うぞ姉様。」

私がエヴァを名で呼んだ時と、エヴァが私を呼んだ時に  
チーフさんが妙な反応をする。

「ちょ、ちょっと待っておくれっ!？」

「……そっちの金髪のアンタ……もしかしてエヴァンジェリン  
って名前かい？」

そしてそっちの黒髪の方は……ソプラノ……？」

「? なんて知ってるんですか?」

「おおかた、賞金首の時の手配書でも見たんじゃないか？」

「……でも、姉様の顔も名も知られてないはずだな……どうい  
うことだ?」

「本当かい……」

「こ、これは失礼しました!」 1111

どういふ事かしらないが、私とエヴァの名前を確認したとたんに  
彼女の態度が一変する。

いきなり席を立ちあがり、床に平伏しだした。

「ち、チーフさんいきなりなんですか!？」

顔を上げてください。」

「いいえ、知らないとはいえ黒百合様とその主様にあのような口を聞いたのでは。」

ビクツ #

久しぶりにその名を聞いてエヴァの額に血管が浮き出す。

……しかし平伏している相手に怒鳴るわけにもいかず、

額がピクピクしている。

「……その二つ名を知ってるってことは……あの村の関係者の方ですか?」

「はい、私の母方の先祖にあの城下の出身の者が居まして

祖父母や母からお二人、あともう一人の従者の話は聞いています。

大層お世話になって、私達の家系が今あるのも貴女方のおかげと……」

「・・・あ、あの、別にさっきの話し方で結構なので、

あと椅子に座ってください、今回はコチラがお願いに来たほうなので。」

「・・・やはり本物は違います・・・違うね、

今まで偽物に何度かあったことがあるけど

そいつらは名前を傘に来てカネを筆りに来たりしてたからね。」

「私達の偽物なんていたんだ・・・知ってたエヴァ？」

「姉様が知らないことを私が知るわけ無いだろう？」

姉さまとずっと一緒にいたんだ。」

チーフさんは椅子に座るとさっきと同じ口調で話しました。

「いや、悪かったね。」

本物かどうか確かめるのにはこの手が以外に使えてね。

私が話に聞いている本物は、話し方なんか気にしないし

金を要求したりしないからね。

ああやって態度が変わるようなら偽物だと思えって教えられてるんだよ。」

「へ〜、すっかりした親御さんですね。」

「それにさつき黒百合様っていったらどう？」

あの時エヴァンジェリン様の方は怒ってたからね。

あの城下の出身の者は敬意を込めてそう呼んでるけど

本人は不本意で、その名で呼ばれると怒りだすって話だったし。」

「……あのバカ共め……私が怒るとわかっててワザと呼んだのか……」 #

「ハッハッハ！そこは勘弁しておくれよ。」

さつきも言っただけど皆 尊敬と愛着を込めてその名を呼んでるんだから。」

「……つち。」 #

エヴァも怒りはするがその辺は分かっているので、

舌打ち程度でこの場は済ませるようだ。

「しかし、お二人の願いとあっては借金の方はともかく

謝礼金なんか受け取るわけにはいかないよ。

あの娘達の借金分だけでいいから謝礼金の分は無しで証書を買っておくれ。」

「しかし・・・いいんですか？」

ドルネゴスさんに話の方は付けれるんですか？」

「あの娘達が働いてくれる分だけで食費や経費抜いても十分黒字だからね。」

その辺は大丈夫さ。

それにお二人から金なんかとつたら先祖に顔向けできないよ。」

「・・・そうですか、それなら今度何か別の形でお礼でも。」

「いや、私がこうして生きてられるのも先祖が貴女達のお世話になったからさ、」

逆にこっちが何かお礼したいくらいさ。」

「・・・はあ、じゃあその分はあの娘達の管理のほうでお願いします。」

労働はちゃんとさせてもらっているんで、

何か体調不良やトラブルとか有ったらお願いします。



掛かった経費はコチラで持ちますので。」

「その辺は任せておくれ！」

ウチは奴隷や闘士の扱いはしっかりしてるからね。

あの娘達は無事その知り合いの子達に引き渡すまでしっかり面倒を見るよ。

それに、仮に迎に来なくても

しっかり生きて行けるように仕込んでやるから大丈夫さ。」

「ありがとうございます。」

その後、強制証書に契約内容を書き込み、

双方の確認の上サインを貰い、私達がお金を振込み次第

この契約が施行されるようになった。

私達とチーフさんはその後 お茶を飲みながら昔話をし

あの城下人たちの子孫は今でも横のつながりがあり、

エヴァの賞金を取り下げるのにも、

あの時の真相を語り継ぐことで 一役買ってくれていたようだ。

私とエヴァは闘技場を出てすぐに銀行に行き、

村上さん達の借金を振込んだ。

これで彼女達はしばらく働かなくちゃいけないが

彼女達の身の安全はそれなりに保証できた。

ちなみに、この契約をしたことは千雨や茶々丸には黙っておこうと

エヴァと話し合った末決めた。

「しかし、あんなところで昔の知り合いの子孫に会うとは思わなかったね。」

「そうだな、私もこれはさすがに予想して無かった。」

「それだけ私達が年を取ったということかな。」

「……私は今でも十分に若いつもりだ。」

「エヴァは今でもピチピチだからね。」

「その言い方はやめろ！」

「……それにしても今はどこに向かっているんだ？」

そのまま転移で帰るかと思ったたら寄るところがあるとかで

かれこれ数十分は飛んでいるが。」

銀行でお金を振り込んでから私達は街を出て

本来ならある程度目立たない所で転移するのだが、

せつかくグラニクスに来たのでラカンさんがサボらないか釘を差すために

彼の家に向かっている。

「今はラカンさんの家に向かっているんだよ。」

サボってたら釘を差しておこうかと思っただね。」

「ほう、私も映像記録などしか知らんが、あの紅き翼の英雄殿か。」

「

「私達とは正反対だね、かたや元賞金首、かたや世界を救った英雄の一人。」

「まあ、私達には賞金首かその辺の一般人のほうが楽しいな。」

「そうだね、家でのんびりするのが一番だよ。」

「……そうだな。」

そうして飛んでいるとラカンさんの住んでる湖が見えてきた。

「……これはどうしたらいいんだ？」

私達が着いたとき、

湖のほとりに刺さったパラソルの下でラカンさんは気持よさそうに寝ている。

「あ、この人は声を掛けたくらいじゃ起きてくれないんだよ。」

って言うか、この前は起きてくれなかった。」

「じゃあどつするんだ?」

「前は湖に蹴り飛ばしたんだけど・・・エヴァがやる?」

「いや・・・流石に初対面の人間を蹴り飛ばすのは。」

「じゃあどつしようか?」

「ふむ・・・少し冷やしてやるか。」

そう言つとエヴァは氷属性の魔法の射手を数本出す。

私はラカンさんのお腹の部分のシャツを少し持ち上げ肌を露出させる。

そこへエヴァが待機状態の魔法の射手を入れて・・・中で暴発させた。

「うひゃおおおおおっお~~~~!!!???」

「・・・変な悲鳴を上げないでください・・・気持ち悪い。」

「うおっ!・・・ってなんだソプラノの嬢ちゃんか・・・」

心臓に悪い起こし方するんじゃないよ。」

「そういうラカンさんはちゃんと仕事してるんですか?」

「ああ？ 仕事ってなんかあったか？

闇の魔法の事か？ まだナギのガキはきてないぜ？」

「はあ………麻帆良の学園長かMMの元老院から依頼がありましたか？

もうネギ先生こっちの世界にきて 早速トラブルに巻き込まれてますよ？」

「………あ。」

「………おい。」

「………忘れてましたね？」

ラカンさんの額から汗がダラダラと流れだし、私達から視線を外す。

「………そ、そんな事よりその金髪の嬢ちゃんは誰だ？

初めて見る顔だが、なかなか強そうじゃねーか。」

「………もういいです。」

とにかく、ネギ先生は今グラフィクスに向かってきてますから

そこできっちり会うなり影から護衛するなりちゃんとしてください

よ。

それと、彼女は私の妹のエヴァンジェリンです。」

「ふん、まあ、姉様の手前 よろしくしてやるう。」

「おう、よろしくな。」

あとナギのガキの件はちゃんと覚えてるから安心していいぜ。」

「……安心なんかできますか？」

彼、もう賞金首になってますよ?」

「……は? 何があったんだ？」

いくらナギのガキにしてもイキナリ賞金首とは……ナギ以上だな。」

「しょうがないですね……実は……」

ラカンさんにネギ先生が魔法世界に着てからトラブルに巻き込まれて

今日に至るまでの簡単な経緯を説明し

千雨や茶々丸と一緒にグラニクスに向かってきてる件や

一緒に着てた娘達が各地に飛ばされた件等を話し、

グラフィクスで村上さん達が奴隷として働いていることも説明しておく。

「へー、大変だな。」

「……貴様が迎えに来てればこんなことはなかったんだろうがな。」

「……こ、こつちにも色々あつてなだな！」 1111

「気持よさそうに寝てましたけどね。」

まあ、いいです、彼のことは頼みましたからね。」

「ああ、任せとけ。」

「本当に頼みましたよ……」

「それで、その奴隷になつてる嬢ちゃんたちはどうするんだ？」

「こつちで回収するの？」

「彼女達は私が手を打ちましたから大丈夫です。」

いい機会なので、彼女達には自分の犯したことの過ちを確認してもらうついでに



ネギ先生の修行の口実にもなってもらいます。

それに下手に彼女達を連れて動きまわるより

彼女達はあそこで住み込みで働いていたほうが安全でしょうから。」

「ん？ よくわからねーが、何でネギのガキの修行の口実になるんだ？」

「それはですね・・・。」

ラカンさんに今日グラニクスで行った契約関係の簡単な説明をする。

「なるほど、その娘達の謝金返済を口実に闘技場で稼ぐなり

各地で搜索しながら稼ぐなりで修行させるのか。」

「はい、ラカンさんにはその際の拠点としてここを貸してもらおうなり

彼らの訓練を觀てもらおうなりしてもらえば

麻帆良かMMの方から頼まれた依頼とも並行して行えると思つのですが。

闘技場で稼ぎながら偽名か何か他の娘達に分かる名前では

目立って集合の目印になつてもらおうって手もありますが、

その辺はネギ先生達の自主性に任せてあげてください。」

「わかった、ソプラノの嬢ちゃんの案に乗って……そうだな、少し知り合いの手を借りてネギのガキの腕前を見てやるか。」

「お願いしますね、それじゃあエヴァ、行こうか？」

「ああ、さっさと帰って食事によろ。」

「おう、ちよつとまってくれ！」

よかつたらエヴァの嬢ちゃんの闇の魔法を見せてってくれねーか。」

「ああ？ 何でそんなめんどくさいことを……」

「ネギのガキに闇の魔法を見てやる時に

やつぱ本家を見ておいたほうが教えやすいだろうからな。」

「……ふむ、ならば私からもぼーやの修行の注文をつけるが、

もし闇の魔法を教えるならばーやの魔力の器を広げる訓練をやっておけ。

わかったか？」

「OK OK、千雨の嬢ちゃんの時も見たが、

アレは確かに器が大きければ大きいほど使えそうだったからな。」

「わかってるならいい、ならば本家の闇の魔法を見せてやろう。」

なぜか 妙に乗り気なエヴァが魔法の詠唱を開始する……

アレは えいえんのひょうが か、

あれを取り込んだエヴァに触れたらその瞬間に氷漬けにされるからな。

……なんでわかるかって？

そんなの昔エヴァを怒らせた時にやられたからに決まってるじゃない。  
……

「……術式固定、掌握。」

えいえんのひょうがを取り込んだエヴァを中心に

冷気があふれだし、エヴァの足元の地面が凍り付いている。

「これが私が使う時の基本だ。」

更に雷属性や風属性を取り込んでもいいし、

もう一発分同じ魔法を取り込んでもいいだろうが、

そこまでやる必要がある相手は今まで一人しか知らん。」

「ほほう、やっぱり本家は違うな、

流石 闇の福音と呼ばれるだけはあるな。

術の安定度や内包する魔力が桁違いだ、なんか容姿も変わっちまってるな。

もしかして今エヴァの嬢ちゃんに触ったらその瞬間に凍っちまうんじゃないか？」

「まあ、よっぽど魔法抵抗力のある奴じゃないと触れた瞬間に氷漬けだろうな。」

「よし、わかった。

もう解いてくれていいぜ……っていつか解け！

寒いしこのままだと湖が凍っちまう。」

ラカンさんの指摘で湖の方を見てみたら既にエヴァから10m位の水は凍っていた。

「しかし、よっぽど熟練しないとハイリスクハイリターンな魔法だな、

それに術の安定と器の拡大か・・・なかなか厄介な修行になりそうだ。」

「まあ、そのへんは様子を見ながらおねがいします。」

「ああ、そうだ。」

精神修行の方もしつかりやらせておけよ？

ぼーやは相性がいいみたいだからな、

術に取り込まれたら最悪魔族に転化する可能性もある。」

「マジか？

全く・・・いまここで見ておいてよかったぜ。」

千雨の嬢ちゃんを見ただけだったら

精神修養の方は疎かにするところだった。」

「千雨は相性は悪い分、そう言った面では心配しなくていいからな。」

「だけど 今日私達に来てよかったですね。」

お互い いろんな意味で。」

「そうだな、俺もおもしれーもんが見れてよかった。」

「・・・しかし嬢ちゃん達姉妹はどうなってるんだ？」

「あんたらが姉妹喧嘩なんかしたら その辺の街や島なんか消し飛ばさ  
だろっ？」

「・・・姉妹喧嘩してたことあったっけ？」

「・・・記憶にはないな。」

「・・・まあ、仲がいいのは結構なことだ。」

「ラカンさんだって聞いてますよ？」

「ナギさんと喧嘩するたびに地形を変えてたって。」

「地図が変わったこともあったそうじゃないですか。」

「・・・まあ、そんな事もあったかな。」

「ハハハッ！」

その後ラカンさんと少し細かい打ち合わせをしてから、

私達は新オスティアに帰った。

神様から頼まれたお仕事。

その58（後書き）

58話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その59

新オステイア クルト邸 庭

私は数日前にクルトに無断で庭に設置した東屋で

穏やかな日差しの中、お茶を飲みながらこれまでの事を考えていた。

2週間ほど前にエヴァと二人でグラニクスへ行き

村上さん達の間接的な保護と、

ラカンさんの尻を蹴り上げた結果、

グラニクスでは原作通りにネギ先生と小太郎くんが

村上さん達の借金返済の資金を稼ぐために闘技場で戦い、

資金稼ぎと修行を同時に進行している。

村上さん達搜索の時に、グラニクスの移民管理局で



朝倉さんとも無事合流できたようで

あの町周辺では発信機の反応した人達は全て回収できた。

どうやら朝倉さんは学園長に相談して作ったさよちゃんの依代を

こっそり持ち込んでいたようで、

さよちゃんに協力してもらって逃亡生活を送っていたようだ。

当初、千雨と茶々丸はネギ先生達をラカンさんに預け

すぐにでも他のメンバーを捜索に行きたかったらしいのだが、

ラカンさんと千雨が連絡をとった時に、

表には出ずにしばらく裏から観察したい、とラカンさんが言ったとの事で

私にどうしたらいいか連絡が来たが、

彼の意思を尊重するのと、原作通りに進行させる為、

しばらくはラカンさんの希望通りにするようにと話しておいた。

実際、発信機の反応を見る限り、

神楽坂さんと刹那さん、近衛さんと長瀬さんは合流しているようだ

し、

古さんの反応も原作通り山に向かってる。

本屋ちゃんの反応もちゃんとするので問題はないだろう。

エヴァがあの子に持たせた指輪とナイフは

それぞれ持ち主の危機に反応して自動防御と自動迎撃の効果を

エヴァが持たせてある。

多少大げさな保険だったが、

彼女の場合は重要な役割を占めるので まあいいだろう。

早乙女さんは派手に商売をしているせいか、

クルトの情報網にひっかかり、

遠目に監視しているようで、何かあったらすぐに保護すると連絡をもらっている。

佐々木さんと明石さんも、先日ネギ先生がインタビューに応えた時に

二人の名を呼んでいたのがコチラも原作通りに進行するだろう。

念の為にクルトに調査してもらおうようお願いしてあるし。

千雨と茶々丸は村上さん達になにか危害が加わらないか

護衛を兼ねて監視しているようだが、

彼女達の扱いがかなり良く、

奴隷どころかそこらの店で働くよりも好待遇で

監視の必要も無く、しばらくは暇な日々を送っている。

夕映は学校で回復魔法を習いながら、

放課後はコレットさんと街中を搜索と言う名の観光をしている。

彼女には村上さん達が発見されたことは伝えてあるので

捜すとしたら残りのの二人だけと言っている。

学校の方では実力を隠し、落ちこぼれとして振舞っているようで

コレットさんもどちらかという成績は良くない方なので

妙な親近感を持たれ、仲良くしているようである。

セラスさんからは他の生徒達の実力向上為に、

本気を出すように何度か頼まれたようだが、断っているようだ。

さて、私達という異物がいるが、

ネギ先生達の方は概ね原作通りに進行している。

村上さん達の保護や他のメンバーの監視、一部保険をかけたりしたが

緊急の連絡がない限り、

しばらくは彼らについて特に行動を起こす必要はないだろう。

私達の方も、樹の方は順調だし

超の研究もほぼ終わり、生産の為の装置もほぼ完成間近。

葉加瀬のアーティファクトもちよっと訓練してみたら

意外なほどの性能を見せ、対象に視線を合わせることで多重ロック  
オン出来る為、

収納する兵器によっては文字通りの人間火薬庫になる。

超のオーバーテクノロジーにより、ある意味、

私達の誰よりも危険な存在になりつつある……どうしてこうなったのやら。

クルトの方は、アリアドネーのセラスさんとの関係は多少改善したものの、

今までの彼の強引な政治活動により、

MM、新オスティア以外ではかなり警戒されているようだが

それは今後、私達の計画の第一段階の完了後に

徐々に改善していこうし、皆がこの世界の本当の姿と

彼の今までの行動原理を知ったら嫌でも改善せざるを得ないだろう。

世界樹とエヴァに超、そして魔法世界ではクルトが居なければ

この計画は実行できなかつたし、

できなければ ネギ先生が造物主を倒すまで私はどこかで昼寝でもするか、

私がネギ先生にくつついていつて彼（？）を消し去るくらいし

かできなかっただろう。

そういう意味では、あの似非幼女神に最初に世界樹の管理者にされたのは

アイツの掌の上で踊ってるだけじゃないか？ と疑いたくなるが、

まあ、今となっては言ってもしょうがないことだろう。

少なくともこの世界で皆に会い、のんびり暮らせるのは

アイツのおかげだし、その対価がアイツの掌で踊ることなら

最後まで踊りきってやる。

「・・・姉様、ぼーっとしてどうした？」

「ん？・・・エヴァか、何でもないよ。」

「こっち　に着てから何か問題は無かったか考えてただけだから。」

私がぼーっと考え事をしていると、

不意に背後から声をかけられた。

「そうか・・・」

「どうだ、木の様子は？」

「いたって順調だよ。」

この調子なら来年中にはある程度根もはって安定すると思うよ。

正直、気候条件だここは空に浮いてる島だからかなり厳しいけど

ここでこれだけ安定してるなら

他の場所だともう少し楽に育てられるだろうね。」

「そうか、ならば安心だな。」

「エヴァはどうしたの？」

「一人でこんな所に。」

「葉加瀬の訓練の方が終わったのでな、散歩だ。」

「そうなんだ、葉加瀬の方も順調みたいだね。」

「ああ、あのアーティファクトは只の倉庫代わりかと思ったら

かなり厄介な代物だったからな。

・・・いや、葉加瀬だからこそ厄介なのか。

普通の・・・千雨辺りが持ったら只の洋服ダンスだからな。」

「そうだねー、葉加瀬と超のコンビだから

何が出てくるか分かったもんじゃないよね。」

「私はあの中から核弾頭が出てきても驚かんぞ・・・」

「アハハ、それは流石に・・・ないよね？」 1111

「・・・」

(え？　なんでそこで黙って目をそらすの？　訓練で何かあったの・・・?)

「そう言えば、姉様には聞いて置かなければいけない話があったな。」

「ん？　なに？　聞いて置かなければいけない話って。」

「・・・葉加瀬と仮契約した時の話だ。」

あの時　私はエヴァにスルーされ、葉加瀬が取調べ　(?)　を受けたから



終わったと思っていたが……ここにきて出てくるのか…… 1  
11

「その話ですか……葉加瀬から詳しく聞いたのではなかったでしょうか？」

「ああ、葉加瀬からは皆で詳しく聞かせてもらった。

ただ、こういう証言は関係者全てから聞いておかないといけないと思っただけだ。」

「……あ！ 私お茶の用意してくる……っ！」

私がお茶の用意をしようと席を立ち上がろうとするが、

エヴァに腕をつかまれ動きを封じられる。

「……座れ。」

「はい。」

この後、2時間ほど掛けて私はエヴァにあの時の説明と釈明をし、もはや恒例行事となりつつある、

エヴァのご機嫌取りがこの時から開始された。

side 千雨

あれからネギ先生達は闘技場で順調に資金を稼いでいるが、

いかんせん100万というのは額が大きいせいか

稼ぎ終わるまで時間がかかる。

(時間も無いし、ここは私も一つ手を打ったほうがいいのかも知れないな・・・)

今、私と茶々丸は ここグラフィクスのある一つの闘技場内にある

食堂で村上達の監視というか・・・警護をしているが、

アイツ達は本当に奴隷だろうか？

扱いが異常に良い・・・良すぎる。

私達もこの街に来て幾つかの店や闘技場を見て回ったが

奴隷をこんな好待遇で扱ってるところなんて無い。

いや、ここ以外の奴隷と比べても明らかに待遇が良いのだ。

あの筋肉バカのラカンさん（一応歳上なので敬称を付けるが）もそうだ。

あの人はなんだかんだ言ってもネギ先生達の警護を頼まれてるくせにしばらく影から様子を見るだとか、

村上達に対しても、状況を教えたにも関わらず動こうとしない。

明らかにおかしいので数日前から聞き込みをし、

奴隷長にも問い詰めたが結局はぐらかされた・・・・・・・・・・が

気になる単語を聞いた・・・黒百合だ。

周囲からの聞き込みでは村上達は次の買い手が決まっ

て今は見習い期間で、ある程度仕事を仕込んだら

本人達に確認して了承次第引き渡すということらしい。

ここの闘技場の経営者の方針では

奴隷を売買するときは本人の意思確認をするそうなので

ネギ先生達と会えた以上、村上達が他所に行く心配は殆ど無いだろう。

しかし奴隷長はその事を否定した、

そんな話は無い、と。

おかしいと思って問い詰めたがはぐらかされ、

その時に奴隷長の口から不意にこぼれた単語が黒百合だ。

他の人が聞いたら何のことか分からない単語だが

私にはその単語から連想できる人物がいる。

「なあ、茶々丸、黒百合と聞いたら誰を思い出す？」

「そこから私が連想するのは言葉通りの花、もしくはソプラノ様がマスターでしょうか？」

「だよなあ・・・」

そう、先輩達なんだ。

そもそも、よく考えると今回のイギリス旅行から魔法世界での事件での

先輩達の行動がおかしいのだ。

イギリスで魔法世界に行くかも知れない、と話した当日に

私達に先行してこっちにきたフシがある。

これはいくらなんでも早過ぎる。

私達に持たされた装備にしてもそうだ。

ある程度の武装は分かるが

サバイバル装備やこっちの世界のお金、

まるで私達がサバイバルをすることが分かってたような充実ぶりだった。

そう考えるとおかしいことはどんどん出てくる。

イギリス旅行前に私達を連れて魔法世界を観光したこと。

回った都市の中には私達が今いるグラニクスや

綾瀬がいるアドリアネーも含まれている。

それに私はラカンさんに会わせられた。

MMや一部の都市で私達のテロ事件での扱いが違うこと。

そう考えていくと村上達の待遇や奴隷長の口から出た黒百合という  
単語、

ラカンさんが今だに全く動かないのも先輩達と打合せした末の行動  
かと思えてくる。

今回 私達が魔法世界に来た時のあのテロ事件、

何らかの事件が起こることは情報として知っていたんだろう。

こっちにはクルトさんがいる、あの人はMMではかなり偉い人だから

そう言ったテロ活動の情報も掴んでいてもおかしくないし

それを先輩達に話していてもおかしくない。

現に学園長達も先輩達も魔法世界に来ることには反対していた。

ある程度分かっていたが正確な日時は掴んでいなかった。

だからアレだけ反対しつつもイギリス行き自体は強行に反対できなかったし、

万が一の時のために私や茶々丸、綾瀬を付けて装備も持たせた。

しかし、不確定要素で巻き込まれた5人がいた。

私達が先輩達に村上達の件で連絡を入れた後すぐに

確保に来たんだらう、その時に奴隷長が交渉をした。

奴隷長は獣人で一部の獣人達の間で黒百合とその主の名は有名だと聞いてる。

その交渉に来た前後にラカンさんにも話を通した。

だからラカンさんは村上達のことを知っても動かない……動く必要がない。

そう言えばラカンさんから先輩の話を全く聞かない。

前回会った時はかなり執着していたようだから

何か聞かれてもおかしくないはずなのに全く聞かないのは事前に会ったからか……

「私も色々頑張ってはいるけど、

先輩達にとってはまだまだ保護する立場なんだな……」

「どうしたんですか？ 千雨さん。」

「いや、自分の不甲斐なさにな……」

「？ 千雨さんの行動に特に問題はないと思いますが、

何か気になる点があったでしょうか？」

「ああ……これは私の勝手な想像なんだけどな……」

私は今考えていた妄想にも近い推論を茶々丸に聞かせる。

「なるほど、確かにマスター達の行動には

色々と先行して情報を掴んでいた様子が見受けられます。」

「そう考えると自分の不甲斐なさに落ち込むよ。

私は先輩に守られてばかりなのかな……ってな感じでな。」

「そんな事はないと思います。」

マスターやソプラノ様は千雨さんや夕映さんを信頼しているからこそ



今回の旅行に同行させたんだと思います。」

「……そうかな？」

「そうです。」

マスターと特にソプラノ様は計画を立てる時においては

安全と確実性を重視する傾向にあります。

そのお二人が千雨さんをネギ先生達に付けたんですから

それは信頼してのことだと考えられます。」

「……じゃあ、私たちはこれからどうしたらいいと思う？」

「まず、この事は私と千雨さんの二人だけの話にしておいたほうがいいと思います。」

私達に何も言わずに村上さん達を保護したとしたならば

彼女達やネギ先生達には知られたくないはずですよ。」

「そつだよな……先輩達はネギ先生達には

なんか成長を促してる様な様子があるからな。

エヴァの闇の魔法をわざわざ覚えるチャンスをやったり

ネギ先生達の訓練に超が参加することを黙認したり、

エヴァが訓練を見にも行ってたな。」

「今回のこともその面があるのかも知れません。」

ならば今私達にできるのはネギ先生達のサポートをしつつ

残りのメンバーを速やかに見つけることじゃないでしょうか？」

「じゃあ、今はしばらくネギ先生達のそばにいろってことだから、

サポートしろってことか。」

「そうですね。」

どうしても気になるようでしたら、直接マスター達に聞くのもいいでしょうが。」

「そうだな、私の勝手な妄想で村上達の事を放っておくのは不味いからな。」

私もこっちの世界に来て疲れてて都合のいいように妄想してるだけかも知れないし、

・・・今日の定時連絡の時にでも聞いてみるか？」

「では、今日の定時連絡の時は少し長めに時間が取れるようにしましょう。」

「ああ、頼むよ茶々丸。」

茶々丸とそんな話を話していると、外の方から騒ぎ声が聞こえてきて、

その後、担架に乗せられたネギ先生（青年ver）が担ぎ込まれてきた。

着いて行くと和泉達3人も着いてきたよう

泣きながら付き添いのトサカさんに問い詰めていたが

街中で決闘をやらかして右腕を切られたようだ。

しかし綺麗に切断されたため、問題なく治療できるとの事だった。

『そう言えばネギ先生 最近やけに強くなることにこだわってたな。』

『そうですね、千雨さんも何度か修行に付き合っ

て欲しいと頼まれたよう

で。』

『ああ・・・村上達の監視や他の事もあったから断ったけどな。』

『私も同じような状況です。』

『・・・あのゲートでの事件を気にしてるのか？』

アレは別に先生だけの責任ってわけでもないと思うけど。』

『ネギ先生は今回の旅行の発案者でもありますし、』

教師という立場もあるので責任を感じているのではないのでしょうか？』

『まあ、こればかりは私達がどう言ってもしょうがないか・・・』

本人の気持ちの問題だしな。』

『そうですね。』

私と茶々丸が念話で話していると、

ネギ先生の怪我を見ても動揺してないと取られたのか、

和泉達に話しかけられた。

「ねえ・・・千雨さん、魔法の世界って・・・あんな怪我することってよくあるの？」

「ん？ 和泉か。」

ああ、私は腕切られたことはないけど、骨折位の怪我だったら何回

かあるぞ。

私に魔法を覚えてくれた奴がスパルタでな……」

腕を切られたといえは、綾瀬がそんな幻術見せられてたな、

普通の中学生がいきなりあんな物見せられたから……

あの時の綾瀬の様子はしょうがないといえはしょうがないんだけどな。

忘れてやりたいけど、なかなか思うようには……

「……ねえ、千雨さんに魔法を教えた人って……誰だったのかな？」

「それは……」

「……  
そうか、ここで普通に教えたんじゃコイツらのためにならないのか・

「……なあ、大河内、お前達は どうして今ここに居るのか分かってるのか？」

「え？……どづいづ事？」

「今お前は特に考えずに私の魔法の師匠のことを聞いたかも知れないけど」

その好奇心のせいで今この世界にきて奴隷なんて目にあってるんじゃないのか？」

「……それは……。」

「別に聞くことが悪いとは言わないけど、

もう少しよく考えたほうがいいんじゃないか？」

私の魔法の師匠はかなり厳しいからな、中途半端な気持ちで聞いたり接触しようとしたりするとひどい目に会っぞ？

……なあ、小太郎？」

「ああ……アレは俺ももう勘弁や……。」 1111

一瞬 村上が小太郎に話を聞いたそうにしたが

今まさにその態度についての話をしているせいなのか

思いとどまったようだ。

「別に聞くことが悪いとは思わないし、お前達ももうこの世界に着てるんだから」

魔法のことを知ること大切だろう。

だけど今大河内が私に質問した時そこまで考えたか？」

「それは……」

「今お前達はすごく危うい立場になりかけたんだということに気がついてるか？」

好奇心でネギ先生を追いかけてこの世界にきて、和泉は死にかけてなんとか助かったけど奴隷になって、奴隷として売られた先が悪ければ

それこそ体を売るような羽目になるんだぞ？」

「……っ!?」「」 1111

3人は皆自分の体を抱え込むようにして、若干震えている。

これは少し意地が悪い言い方だけど、

コイツらにはよく効くだろうからあえて言ってみたが……言ってみても気分悪いな。

今後はもう少し考えよう……

「そろそろ自分の行動や言動に気をつけるようになってもいいと思うぞ。」

「……………」

「良く考えて 覚悟を決めて、」

それで魔法の知識が必要だと思ったら、その小太郎か

ね、ナギさんに聞くなり、なんなら私や茶々丸でもいい。

とにかく私が言いたいのは

これからはもう少し自分の言動には慎重になるようになってことだ。」

「……………うん。」

「まあ、今はナギさんのケガのこともあるし皆色々あって混乱してるだろ？」

今日は私が奴隷長に話をしておくから今日は早めに休んどけよ。

行こうか、茶々丸。」

「はい、それでは皆さん失礼します。」

私は茶々丸とその場を後にし、和泉達の件を奴隷長に伝えるために移動する。



『なあ、茶々丸、私うまく言えたかな？』

『なかなか良かったと思いますよ。』

少なくとも3人共ちゃんと考えてくれると思います。』

『エヴァや先輩ならもう少しうまくやれるのかも知れないけど』

私にはこう言うのはキツイな、できればもう二度とやりたくない。

』

『そうですね？ 結構向いてると思いましたけど。』

『・・・勘弁してくれよ。』 1111

神様から頼まれたお仕事。

その59（後書き）

59話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その60

新オステイア

今から1週間ほど前の千雨からの連絡で、

ネギ先生がどうやらグラニクスの街中で決闘をやらかした様で、

決闘で受けた怪我を治療してもらった後に話を聞いたところ、

その時にラカンさんと無事接触したようで

彼に修行をつけてもらうことになった との事だ。

街中での決闘の数日後には、闘技場でのインタビューを受けた効果  
が出て

神楽坂さんと刹那さんから連絡をもらったようだし、

ネギ先生のメンバーも順調に集まっている。

その後の連絡で朝倉さんがネギ先生と仮契約をし

搜索や諜報活動に向いているアーティファクトを貰い

そろそろ皆の搜索の旅に出たいということなので、

朝倉さん+さよちゃんに茶々丸を護衛に付けて

搜索の旅に出てもらうことになった。

千雨が自分も着いて行きたいと言ったが、

ネギ先生が闇の魔法の習得するようなら

彼女がいたほうがいいだろうし、

それに使える治療用の魔法具を持たせてあるので

しばらくはグラニクスで村上さん達の護衛をしながら

ネギ先生達の様子を見てもらおうように頼んだ。

茶々丸と千雨が分かれるので

連絡用の通信機を一度千雨に渡すためにグラニクスへ行っただが

丁度その場に奴隷長さんが居たために

せつかく来たんだから ということでも料理を御馳走になり 部屋を  
用意してもらい、

その日はエヴァには先に新オスティアの方に戻ってもらい

私は久しぶりに千雨と二人っきりの夜を過ごした。

さて、それから数日後。

朝倉さんと茶々丸も搜索の旅に出て

ネギ先生もラカンさんの所で修行を開始、

修行に向かう日に挨拶ついでに千雨もラカンさんに会い、

ネギ先生が闇の魔法を習うようなら連絡を貰うよう話をつけ

すぐにグラニクスに戻ったという話だった。

ネギ先生の修行は初日に通常の修行を開始したが

すぐにネギ先生が時間がないのもっと早く強くなりたい、

と 言い出したので、これ幸いとばかりにラカンさんが闇の魔法の件を

ネギ先生に話したため千雨は街に戻ったその日に

すぐにラカンさんの所へとんぼ返りになったため、

腹を立てた千雨が戻った直後 ラカンさんとネギ先生を蹴り飛ばしたらしい。

何やってんだか・・・

side 千雨

「何で来たその日からイキナリ闇の魔法の話をしてるんだよ！

先輩もネギ先生の様子を見て力を望んだらそれとなく話せって言うてただろう！」

「だからちゃんと様子を見てたじゃねーか、

あの街中でのカゲタロウだったけ？

アイツとの決闘を見てぼーずには向いてると判断したんだよ。」

「・・・本人は納得してんのかよ？」

「闇の魔法つてアレですよね？

千雨さんがゲートでフェイトと戦った時に使ってた魔法ですよね？

あの時の千雨さんを見てアレから不思議でしょうがなかったんです、

本来千雨さんの通常の魔力であそこまで戦えるはずは無いんですけど

ラカンさんに説明してもらって少し分かったんです。

それに僕には時間がありません・・・何年も修行すれば強くはなれるでしょうけど

今、僕達が生き残る為には すぐにもフェイト達と対抗出来る力が必要なんです。」

「・・・まったく。」

おっさんがどんな話しをしたんだか・・・

まあ、ヤルなら早いほうがそれだけ修行に時間が取れるからいいか。

「  
ネギ先生を見るが・・・

エヴァや学園長達に散々仕込まれたせいでガキの割に考え方が落ち着いてきてるし

危機意識も他のクラスメイトに比べてしっかり持っているようだ。

・・・これならなんとか大丈夫だろう。

「ったく、しょうがねえ・・・

じゃあ先生、とりあえず今日の所は普通におっさんと修行した後に

瞑想でも坐禅でも何でもいいけど、

自分のやりやすい方法で精神を落ち着けて もう一度よく考えてみてくれ。

それでも闇の魔法を覚えるなら 明日にでも習得用の巻物を使ってもらっけど

覚悟はしておいてくれよ？

かなりキツイし、力を得る代償に払うものも大きくなるかもしれないからな。」



「はい！」

「それとおっさん、少し頼みたいことがあるんだけどいいか？」

「こんなに早くやることになるかと思ってなくて用意がまだなんだ。」

「なんだ？ ぼーずが巻物の幻想世界で訓練するだけだから

千雨の嬢ちゃんは別に見てるだけでいいんじゃないか？」

「私の時でも習得の訓練中は身体に掛かる負担がかなり有ったからな。」

ネギ先生は相性がいいらしいし、それ用に用意してもらったものがあるから

準備したいんだけど、私じゃ魔力が足りないんだよ。

本当は何日かかけてゆっくり補充するつもりだったけど

明日やるなら間に合わないから、おっさんにやってもらおうと思うんだけど。」

「あ？ なにやるかしらねーが、

俺様の力が必要ならそれなりの代金を払ってもらわねーとな」

「・・・聞くだけ聞いてみるけど、いくら払わせるつもりなんだ？」

「金はいらねーぜ、って言うか後でぼーずからはきっちり出世払い

でもらうけどな。」

「えっ！？ お金があるんですか！？」 111

「当たり前だろ？ 修行を無料で見てもらおうなんて話しあるわけないだろう？

まあ、ぼーずは出世払いだからいいが

千雨の嬢ちゃんの場合はそうはいかねーなあ。」

「おっさん・・・まさか無いとは思うが 私の身体とか言い出したらコロスからな。」 #

「ハハハッ！ 俺が千雨の嬢ちゃんみたいながきを相手にするかよ。

そついう事は後10年後に言いに来な。」

「よし、わかった、そこでじつとしてる。

一発で仕留めてやるから。」

「あわわ・・・ちょっと待って下さいよ千雨さん！

今ラカンさんに死なれたら闇の魔法が覚えられなくなっちゃいますよ！」

私はアーティファクトを出して杖に全力で魔力を集中させたところで

ネギ先生に止められた。

「おっと、待て待て、

しかし見方を変えれば身体って言うのはあながち間違いないじゃないか。」

「……じゃあ何させるつもりなんだよ、はっきり言えよ。」

「じゃあ言うが、ネギのぼーずがここで修行していく間、

千雨の嬢ちゃんもここで一緒に修行していきな。」

「……はあ？ 何でだよ？」

「そうですよ、僕にはお金を取るとか言うくせに、

千雨さんには修行していけなんておかしいですよ。」

「ぼーずの方は、俺様が声を掛けたとは言え

そつちから頼んできたから金とつてもおかしくねーだろ？」

「……大人って………卑怯だ。」 1111

お？ なんかいいい感じにネギ先生が暗くなってる。

闇の魔法習得にはいい傾向かも知れない。

「で、なんで私はわざわざおっさんが修行を見るなんて気になったんだ？」

「単純に好奇心もあるが、

ぼーずに聞いたが 嬢ちゃんもフェイトとやりあったんだろ？」

「・・・やりあったというか・・・まあ、戦ったといえばそうだけ  
ど。」

「俺様が見た限り千雨の嬢ちゃんじゃ、

フェイト相手にやり合って引き分けに出来るはずなんて無いはずだ。  
」

「相手が手を抜いてた感じだから、別におかしくはないんじゃない  
か？」

「手を抜いてても千雨の嬢ちゃんの魔力じゃ

大人と子供くらいか、それ以上に差がある。

よっぽどうまく戦ったか・・・なにか闇の魔法以外に秘密があるか  
だ。

その辺に俺様としても興味があつてな。」

「・・・ふん。」

私は他の魔法使いと違うのは自分でも認めているけど

ここでこのおっさんにも目をつけられるとはな。

この世界にきて白髪にガキに続いておっさんかよ・・・

こっちに来てからロクな事がねーな。

「それにいつもはエヴァに訓練をつけてもらってるんだろ？」

たまにはエヴァ以外と訓練するのもためになるし

これからこの世界で奴らに襲われる可能性も考えれば

やって損することはねーと思うぜ？」

「まあ、私としてもここでおっさんと修行して生存率が上がるなら

それに越したこしたことはないからいいけど・・・後で金を請求するとかは無しだぞ。」

「分かってるって。」

千雨の嬢ちゃんを騙して金なんか取ったら

ソプラノの嬢ちゃんかエヴァに何されるか分かったもんじゃねーよ。

「

「・・・？ ラカンさん、ソプラノさんやエヴァンジェリンさんとお知り合いなんですか？」

「あ・・・・・・・・・・ぼーず、ちょっと此処で待ってる。」

「・・・・・・・・はあ？」

ラカンのおっさんは私を引きずって木陰まで連れてきた。

「なあ、これって知られてますかったか？」 1111

「・・・・・・・・良くはねーけど、口止めされてないならいいんじゃないか？  
だけど先輩 学校では力を隠してるから あまり言いふらすのもまずいぞ。」

「そうか・・・じゃあ適当に知り合いの知り合い位にしておくか？」

「まあ、ここまで来て他人です、じゃ通らないから・・・

おっさんがエヴァの知り合いってことにでもしとけよ。

それなら姉を知っててもおかしくはねーだろ？」

「そうだな、その線で行くか。」

「だけとおっさん、何でそんなに先輩に気を使ってるんだよ？」

おっさんの性格なら つい口が滑ったぜ、ガハハ とか言って済ませそうなものなのに。」

「いや、ソプラノの嬢ちゃんやエヴァとは一度ガチで戦ってみたいんだが、

俺様があんな見た目少女をいきなり襲ったらただの変態だろ？」

だからなんとか話を付けて戦う方向にしたいんだけど・・・」

「それで先輩達の機嫌が悪くならないようにしてるのか？」

エヴァはともかく先輩は諦めたほうがいいと思うけどな。」

「なんでだ？ むしろソプラノの嬢ちゃんのほうが話がわかりそうにみえるが。」

「私が先輩に出会ってから結構経つけど、

先輩が本気で戦ってる所なんて一度も見たことないぞ？」

っていうか、前私と一緒にここに来た時、

おっさんと軽く手合わせしたのが初めてくらいだ。」

「ほう、ますます興味が湧くな。」

このおっさんが先輩を女（？）として認識してるのかどうかはともかく

先輩のとの（戦い） ことを想像してニヤけてるのその姿は  
・・・どう見ても変態だった。

その後ネギ先生の元に戻り、おっさんが適当にごまかした後は  
闇の魔法とは関係ない普通の戦闘訓練をして終わった。

訓練が終わり、ネギ先生が瞑想をしている間に  
おっさんに頼んで魔力を溜める効果のある宝石に魔力を溜めてもら  
う。

これは明日、ネギ先生の闇の魔法を習得するときを使う物で、  
習得の時 精神だけの幻想世界で訓練をしている間に  
ネギ先生の身体が精神に引きずられて傷つく場合がある。



私の時も軽く皮膚が裂けたり、吐血したりしたそうだが  
闇との相性のいいネギ先生だと更に酷くなるとのことで

昨晚 先輩に説明されて持たされたものだ。

これは持続的に治療をする限界を張る魔力を溜めておくもので、

この宝石に満杯に魔力が溜まっていれば、3〜4日はもつそうだ。

ネギ先生の魔法習得には体力的なことがあるので

2日が限界だが 十分にもつだろう。

「だからって言って、私が一人でやったら数日掛かるものを

こんな短時間でやられても腹がたつだけなんだが？」

「これくらい普通にできるだろう？」

「……こんな芸当が出来るのはおっさんか先輩やエヴァくらい  
なもんだよ。」

「まあ、とにかくこれで千雨の嬢ちゃんはしばらくここで修行は決定だな。」

「はぁ……やるからにはマジでやるけどお手柔らかに頼むぜ？」

「おう、まかせとけ。」

とりあえず、明日ぼーずが巻物を開いて幻想世界に入ったら実戦形式で試合だな。」

「……私は お手柔らかに って言ったばっかりだよな？」

「まずは千雨の嬢ちゃんがどこまで出来るのか知っておかないとな。」

それには実戦が一番だ。」

「……おっさんが戦いたいただけなんじゃないのか？」 1111

「ハハハッ、気にすんな！」

その日、ラカンのおっさんに用意してもらった部屋で私は就寝。

ネギ先生も夜中まで今後の事を考え込んでいたようだが ちゃんと寝たようで、

翌朝見た時にはすっきりした顔をしていた。

「じゃあ準備するから少し待っていてくれ。

すぐ終わるから。」

「ハイ！」

私はおっさんに用意してもらった部屋にベッドを運んでもらい

その周囲に結界を敷いて起動する。

軽く自分の指を切ってみて無事治療されるのを確認してネギ先生を呼ぶ。

「よし、じゃあネギ先生はそのベッドに横になってくれ。」

「……あの、闇の魔法の修行をするんですよね？」

ベッドに横になるのはなにか必要なことなんですか？」

「何だ、おっさんから聞いてないのか？」

闇の魔法は幻想世界で訓練するんだよ。

先生がいきなり倒れこんでも運ぶのが面倒なだけだから

最初から横になってたほうがいいだろ？」

「そついう事なんですか。

でも、この結界はなんですか？

治療用の魔法に似た感じの式みたいですけど・・・」

「治療用だぞ、昨日も軽く話したけど

闇の魔法は習得時に身体に負担がかかるからな、

その治療用だと思ってくれればいいよ。

それにしてもおっさん・・・何も話してないんだな。」

「こつ言つのは事前にチンタラ説明するより

漢ならぶつつけ本番でやってやれ だろ？」

「私は女だからそついうのはよくわからないな。

まあいいや、じゃあベットに横になったらこの巻物を開いてじつと  
してれば

エヴァの幻影が出てくるから、

後は勝手に幻想世界に引つ張りこまれてしごかれるから。」

「えっ……エヴァンジェリンさんが出てくるんですか？」 1111

「そうだけど何かまずいことでもあるのか？」

「いや……別に……」 1111

話には聞いていたけど、

ネギ先生は前からエヴァには

こっぴどい目に合わせられてきたようだし、

エヴァにトラウマでも感じてるのか？

「じゃ、じゃあ……行きます。」

「おう。」

ネギ先生が巻物を開くと巻物に掛けられていた魔法が起動し

エヴァの幻影が現れてネギ先生を幻想世界に引きずり込んでいった。

「……………先生起きてるか？」

「……………」

「返事がない、ただ寝ているだけのようだ。」

「いや、幻想世界に引きずり込まれたんだろう?」

「こつこつのはお約束だと思って。」

特に問題もないようだし、

しばらく様子を見て治療の魔法も掛かっているようなら

先生は寝かせておくか。」

「2日かかってダメならやめさせるんだろ?」

じゃあ今日は千雨の嬢ちゃんの修行をするか。」

「・・・誰も見てなくてもいいというわけじゃないんだけど。」

「大丈夫だって、ちゃんと治療用の結界も効いてるんだろ?」

ぼーずが寝てる間はやる事ないんだから多少目を離しても大丈夫だって。

それに俺なら心配と気合でわかる!」

「おっさんが言つとマジに聞こえるから質が悪いな・・・まったく・・・」

じゃあ実力図るだけなら数分で大丈夫だろ?」

今日はそれしかないぞ。」

「そこは千雨の嬢ちゃん次第だな。」

しばらくネギ先生の様子を見てみると、

予想通りに皮膚が裂け血が吹き出したりしたが

すぐに治療魔法で治療されてるのを確認したので

私はおっさんと外に出て、実戦形式の試合をした。

「なあ……おっさん本当に人間か？」

実は真祖の吸血鬼とか悪魔とか言わねーよな？」  
1111

「正真正銘人間だぜ。」

結果は惨敗もいいところで、

闇の魔法で雷の暴風を取り込んだ状態の私のスピードに

普通に対応してきた。

「正直私のスピードに普通に対応してくるとは思わなかったんだけど。」

「スピードはたいしたもんだったぜ、

それだけなら俺も ほんの少し 本気を出させられたからな。

だけどやっぱり火力不足だな。

あと戦闘技術の方はまだまだ伸びると思うが・・・やはり火力がな。

嬢ちゃんが使える最大威力の魔法は雷の暴風なのか？」

「いや、切り札は別にあるけど

まともにやったらおっさんに当てる自信はまったくないぞ？」

「なんだ、必殺技持ってたのか、やるじゃねーか！

しかし、必殺技が当たらないって言うのはどうかと思っぜ？」

「本来は私の麻痺の射手を食らったら人間なら身体構造上麻痺するんだよ！

その間に当てるはずなのにおっさんは気合で耐えてるじゃねーか、

いったいどんな身体の構造してるんだ？」



このおっさんは出鱈目だ。

麻痺の射手くらって気合で耐えるとか。

10本くらい束ねてぶち込んでやっても少し動きが止まったくらいで平気な顔してるからな。

「まあ、アレは相手が俺じゃない限り普通に効くだろう。」

実際フェイトにも効いたんだらう？」

「まあ、少しだけな。」

不意をついて1本分しか当てられなかったから

切り札に魔砲は打つ余裕なかったけどな。」

「その切り札は詠唱に時間がかかるとか

当てにくいとかなにか問題でもあるのか？」

「詠唱は闇の魔法で強化すれば5秒くらいで済むんだけどな。

当てるのは真っ直ぐ飛ぶ砲撃みたいな感じだから

麻痺させて動きを封じるか不意をつくかしないと駄目なんだ。

「一応拘束用の魔法も研究してはいるんだけど。」

「ほう……ならば千雨の嬢ちゃんはずまず麻痺の魔法を確実に当てる訓練と」

拘束用の魔法、後は切り札の魔砲とやらをなるべく早く出す訓練か。

どうせ闇の魔法で取り込むのは無理なんだろう？

出来るならやってるだろうしな。」

「ああ、アレは私には取り込めない。」

「しかし自分で使う魔砲が取り込めないとはな、

よっぽど闇の魔法の相性がわるいのか？」

「違うよ、単純に使う魔力がでかいからだよ。」

私に闇の魔法の才能があっても、

自分の持つてる魔力の6倍以上の魔力なんか取り込めねーよ。」

「何でそんな魔法が使えるんだ？」

面白そうだからちょっと見せてみるよ。」

「なんでおっさんを楽しませるためにやらなきゃいけないんだよ。」

「師匠の命令は聞くもんだぜ。」

いいからやってみるよ。

そうだな・・・あそこに見える柱に打ってみるよ。」

「・・・つたく、いいけど本当にあの柱でいいのか？」

「ああ、なんだ？ アレを破壊できない程度の威力なのか？」

「・・・まあ、いいか。」

話すより見たほうが早いし。」

「おう、早く見せてみな。」

本当ならこんなとこで見せたくはなかったけど

このおっさんの実力だけは確かだし

私もあの白髪のカキに目をつけられてヤバい立場だし。

ここで実力を上げて、

生きて先輩のとこに帰れるようにしないといけないからしょうがな  
いと割りきって

魔砲を見せることにする。

アーティファクトの杖を呼び出し、

魔砲の詠唱を開始、カートリッジを全部使い私の前方に魔力を収束させて……

そこに向けて杖を 一気に振り下ろす！

「スターライト ブレイカー！」 『Starlight Breaker』

私の前方に収束した魔力が砲撃となって

おっさんの指定した柱を貫くどころか完全に消滅させ

その後方、結構遠くにあった山まで撃ち貫いた。

「……あー、そのなんだ………お前馬鹿だろ？」

「なっ！？ お、おっさんがやれって言ったんだろ！！」

それにおっさん だけ には馬鹿なんて言われたくねーよ！！」

#

「いや、千雨がエヴァとソプラノの嬢ちゃんの弟子だって忘れてたぜ……」

舐めてたつもりじゃないんだが、ここまでやるとは思わなかった。

もう嬢ちゃんなんて呼べねーな。」

「まあ、この魔砲はエヴァが作った魔法だから多少派手なのはエヴァの趣味だろう。」

「それもあるけど、俺が言いたいのはそういう事じゃねーよ。

いいか、例えば俺の魔力が100だとしても思いっきり全力で攻撃したって

せいぜい30も使えばいいほうだ。

だがさっきの試合でも今の魔砲でもそうだが

千雨は一回に使う魔力が多い、

普通の魔法の射手でも自分の魔力を100とした場合の

10や20は魔力が込められてるから、

持つてる魔力の割に変な麻痺や障壁突破効果が高いんだ。」

「へー、そういうもんなのか。」

「・・・そういうもんなんだよ。」

普通はありえん、こんな戦い方してたらすぐに魔力切れを起こして  
ブツ倒れるんだが、どういいうわけか千雨は魔力切れを起こさないな。  
どうしてだ？」

「は？ そんなの先輩と仮契約してるから

魔力が供給されてるせいじゃないのか？」

「・・・やっぱりあの嬢ちゃんは只者じゃないってことか・・・

あんな千雨、普通そんな大量な魔力を無尽蔵に供給されねーんだよ。  
それにあの魔砲だ、アーティファクト使って魔力を何倍にもした拳  
句に

収束して撃ち出してよく杖が壊れねーもんだよ。

しかもエヴァの教育方針なのか、

千雨にはあんな馬鹿でかい魔力をつかったら身体への負荷が  
かなり大きいはずなのに平気な顔してるけどな、

いったいどんな訓練してきたんだ？」

「どんな訓練って・・・とりあえず全開でひたすら魔法打ち続ける

とか？

・・・そう言えば修行始めた当初は変な薬を飲まされたな、

魔力の回復に効くだとか言って。」

「・・・・・・・・どうせそんなこつたるうと思つたぜ。

千雨は自分が持つてる魔力は俺やぼーずよりはるかに少なくせに  
さっきの魔砲で使つてる魔力は俺が攻撃に使う分と同じかそれ以上  
なんだぞ？

まあ、俺が全力を出せば もっと すごいけどな！」

「おっさんが非常識なのは十分理解してるよ。

そうだな・・・・・・・・アレだろ。

私の最大MPはおっさんより少ないけど先輩のおかげでMP減らな  
いから

マ ンテ連発してるみたいな感じだろ？」

「何だそりゃ。 どの国の言葉だ？」

「・・・・・・・・そうか、この世界にはDQ無いんだつたな。

わすれてくれ。」

この後おっさんとネギ先生の所に戻り、

ネギ先生の身体が血ですごいことになっていたので拭いてやったりしながら

おっさんと現実世界に有るゲームやDQの話をしたり

私の今後の修行の方針などを話したりしながら過ごした。

「なあ、そのDQって言うゲームとか言うのは面白いのか？」

「身体動かすのが好きなおっさんには向いてねーよ。」

「その辺歩いてるとモンスターが襲ってきてそれをボコると金ももらえるんだろ？」

「だから、現実じゃなくてゲーム！

TVの画面の中での出来事なんだよ！！

プレイしてる人間はTVの前でコントローラー使って操作してるだけだっけ。」



「でもよ、ぼーずが今やってる闇の魔法の巻物みたいに

そういう幻想世界作ったら面白そうじゃねーか？

どれだけ暴れても文句言われずに遊べるんだぜ。」

「おっさんそういうの作れるのか？」

「それは俺の専門じゃねーな、エヴァならどうだ？ 作れねーか？」

「・・・エヴァなら作れるんじゃないか？」

実際闇の魔法の巻物作ったんだし。

「・・・おっさん、まさか・・・」

「ふむ、戦闘好きな奴に売ったら売れそうだし

俺も好きにおもいつきり暴れても文句が出ないのは楽しそうだな。

今度エヴァかソプラノの嬢ちゃんに会った時にでも頼んでみるか。」

「幻想世界でプレイヤーが実体験できるDQか？」

「・・・ちょっと面白そうだな。」

神様から頼まれたお仕事。 その60（後書き）

少し遅れましたが60話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その61

グラニクス 郊外 某所

side 千雨

さて、後数時間でネギ先生が闇の魔法の巻物に精神が取り込まれて  
2日目が過ぎようとしている。

今おっさんは湖で水浴びをしている。

私は携帯ゲーム機でRPGのアイテム探しをしながら

ネギ先生の様子を見ているが

少し前から血が噴き出るのが止まったし

体の傷も増えていないようなので

この様子ならもうしばらくしたら目が覚めるだろう。

私の時はエヴァが事前に説明してくれていたのもう少し早く習得できたが、

やはり もうちょっと説明してから巻物を開かせたほうが良かったろうか？

数日前におっさんの家からグラにクスに戻って

いきなり出戻りで呼び出されて気が立っていたとは言え

少し申し訳ない気がしてきた。

「……………ん……………は。」

「お？ 先生目が覚めたか？」

「ということはうまく闇の魔法を習得できたみたいだな。」

ネギ先生は私の顔を見ると、

青くなったり赤くなったり、表情も驚愕 動揺 怒りと

複雑に変化していくが向こうで何かあったのか？

「……ひ、酷いですよ千雨さんっ!!」

魔法の習得だっていうからきついとは言っても

勉強や魔力運用のことかと思ってたのに

あんな……何度死ぬかと思ったか……」 1111

「……いや、その何だ、

あんまり事前に丁寧に教えても先生のためにならないと思ったし・

・

ち、ちゃんと習得できたみたいだからいいじゃねーか!」

「……つまりああいう訓練だと分かって黙ってたんですね?」

#

「そりゃあ、私もやったからな。」

「……」

ネギ先生がジト目で私の顔をじっと見つめてくる。

な、なんか先生の感じが変わったな。

闇の魔法を習得した影響がもう出てるのか?

「千雨さんって・・・昔はもっといい人かと思ってたんですけど

エヴァンジェリンさんに似てると思いますよね。」

「なっ!？」

い、いくら先生でもそれは聞き捨てならないぞ、訂正しろ!!

私がエヴァに似てきたなんて・・・それじゃあ、人間として終わってるじゃないか!」

「・・・千雨さんの中のエヴァンジェリンさんって

どこまで評価が低いんですか。」

side ソプラノ

「・・・く　ちゅんっ!」

「・・・?　なにエヴァ、可愛いくしゃみなんかして。」

「ん、いや・・・なんか急に鼻がむずむずしてな。

誰か噂でもしてるのか？」

「そういつ時って大抵いい噂じゃないよね？」

「まあ、別に言いたい奴には言わせておけばいいさ。」

「そついつものかね？・・・でもエヴァ、

噂の話はどうでもいいけども少しちゃんとしてよ。

ここは 一応 私達の家じゃないんだから。」

こうして今のエヴァの状況を確認してみると・・・

クルトの別邸の庭に勝手にパラソルを突き立てて

リクライニングチェアに寝転がり

私がつってるジュース入りのコップのストローを啜えながら

携帯ゲームで遊んでいる。

千草は私の横で芝生の上に座って本を読んでいるが

ラトナとピュラはエヴァに使われ扇子で扇がせたりお菓子を食べさせ

せたりしている・・・

どこの貴族だ？

いや、どごその貴族でもここまで人をこき使って好き勝手しないだろう。

「あの・・・エヴァがゲームやるのはいいけど

吸血鬼がわざわざこんないい天気の中、外でやらなくてもいいと思うんだけど。

それにジュースやお菓子くらい自分で食べなさいよ。」

「こないいい天気だからだろう？

こんな日に部屋に引きこもってたら健康に悪いだろう。

それにちゃんとパラソルも差してあるから陽には直接あたってないぞ？

大体 主人が従者を使わなかったら従者の仕事がなくなるじゃないか。

従者に仕事を与えるのも主の務めだ。」

「また好き勝手言って・・・」



大体私はエヴァの従者じゃな。「葉加瀬・・・」もう一杯ジュース飲みますか？」 1111

くそう・・・葉加瀬の仮契約からもうだいぶ時間が経つのに

一向に許してもらえない様子がない・・・

私はこのままエヴァにこき使われる人生を送るしか無いのか・・・

「旦那さん・・・この自堕落な吸血鬼には

そろそろしつかり言い聞かせたほうがよろしいえ？」

「そんな事言っても・・・エヴァだし。」

「旦那さんが甘やかすからつけあがるんやで？」

ここはしつかり姉の威厳を取り戻さなあきまへん。」

「・・・千草、もしかして私をエヴァにけしかけて楽しんでない？」

「そないなことありまへんで？」

「じゃあなんで私から目をそらすのさ・・・」

「ほ、本を呼んでるからや。」

「ふうん・・・本を呼ぶんだ、千草は・・・」

「・・・・・・・・」

「馬鹿なこと言ってないでさっさとジュースをもってこい、姉様。」

「は、はい、かしこまりましたー。」

私の姉としての威厳は当分取り戻せそうになかった。

side 千雨

エヴァの評価についてはネギ先生と私では

今だに大きな開きが有るようだから、

この件に関してはその内じっくりと話す必要があるそうさだ。

少なくとも私がエヴァに似てるなんて言い出さないくらいには・・・

「お？ ぼーずが目を覚ましたのか？」

「ああ、おっさんか・・・とりあえず自分で目が覚めたみたいだから  
うまく闇の魔法を習得できたんじゃないのか？」

「よし、じゃあぼーず、とりあえず両腕に魔力を集中してみな。」

「両腕・・・ですか？」

ネギ先生が両腕に魔力を集中すると模様のようなものが浮き上がってきた。

「よし、闇の魔法の習得はうまくいったようだな。」

「これが・・・あれ？ でも千雨さんには確かこんな模様出ないですよね？」

「ああ、私は先生やエヴァほど素質は無いからな。」

よく見れば浮き上がってるかも知れないけど

私が自分で見た感じじゃ、見えたことはないな。」

「だが気を抜くなよ？」

お前はよつやく自分の得物を手に入れたに過ぎん。

修行はここからが本番だぜ？」

「……は、ハイ！」

「じゃあ、先生の方もうまくいったようだから私は街の方に帰ろうかな。」

「待ちな、千雨も俺の修行を受けていくって約束だろ？」

「……ちっ、覚えてたか。」

おっさんの手からの脱出には失敗したが

ネギ先生も闇の魔法を習得し、

これから先生の修行も本格的なものになっていくだろう。

……私はその内隙を見てここから逃げ出すことにでもしよう。

数日前、千雨からの連絡で無事ネギ先生は闇の魔法を習得したよう  
で、

そのままラカンさんのところでしばらく修行するそうだ。

何故か千雨も一緒に訓練することになっているようだが

たまにはエヴァ達以外との訓練もしたほうが千雨のためになるだろ  
う。

それ以外にも、茶々丸から古ちゃんを回収したとの連絡があったり

神楽坂さん達と長瀬さん達が合流したり、

本屋ちゃんがネギ先生達と連絡が取れたり

佐々木さんと明石さんの居所が分かったりと

次々と良い報告が上がってきた。

相変わらずアーニヤちゃんの発信機の反応は動かないので

アーウェルンクス達に監禁（保護）されているだろう。

「ここに居たのかソプラノ。」

エヴァから聞いたんだが、私とハカセが研究室にこもっている間にかなりのメンバーが発見、回収されたんだって？」

「うん、こんなに早く把握できるとは思ってなかったけどね。」

これで発信機の反応も合わせれば

無事全員発見できたことになるね。」

「そうだね、この状況だと一番危険なのはアーニヤサンか・・・」

「他のメンバーと違って彼女は敵の手に落ちてる可能性が高いからね。」

「・・・ソプラノさんは彼女についてはどうするつもりなんですか？」

「そうだね・・・出来れば助けてあげたいし

アーウェルンクス達も被害者は少なくしようとして動いているから

助けられるとは思っけど・・・最悪、

私達の計画と成功と引き換えになったら彼女は見捨てることになるかも知れない。」

「そんな・・・」

「ハカセ・・・ハカセも分かっていると思うけど

彼女一人と計画の成功、それで救える人達とは秤にかけるまでもないヨ。」

「大丈夫だよ葉加瀬、別に今見捨てるってわけじゃないよ。

ネギ先生達も助ける為に頑張るだろうし千雨達も手を貸すし、

それに私達も出来る範囲で助けるつもりだから。

さつきは最悪の話をしただけで、計画自体は今現在最良の形で進んでいるんだから。」

「・・・そう、ですよ。大丈夫ですよ。」

「そうだヨ、私達もネギ坊主達も頑張っているから

ハカセも元気を出して出来る範囲で頑張るネ。」

「はい！」

「……そう言えば葉加瀬の研究ってなにしてるの？」

少し前から葉加瀬のアーティファクトの関係で

研究だか開発だかしてるって言うってたけど。」

「研究の方はもう大体終わっているヨ。」

今は量産体制に入っているから、

もう私達は機械の調整くらいしかやることが無いネ。」

「……一応聞くけど、何を量産しているの？」

「武器、主に弾薬だヨ。」

「……葉加瀬のアーティファクトから撃ち出すんですよ、  
分かります。」

「葉加瀬が一人で作らなくても、

葉加瀬が主に開発に関わった機械が作った弾薬なら

アーティファクトに収納できることが分かったからネ。

今から各種弾薬と茶々丸達の武器を作って収納しておけば

何かあった時にもすぐ対応できるからネ。」

「……葉加瀬、今からでも遅くないよ？」



料理とか覚えて平和利用の方向に軌道修正しない？」

「もちろんそれはそれで覚えますよ。」

でもせっかく汎用性が高いんですから

いろんなコトに利用したほうがいいじゃないですか。」

最初は便利な倉庫かと思ってたのに、今では武器庫か・・・

私達の中で一番戦闘能力が無いと思ってた葉加瀬が

下手したら一番危険な存在になる日もそう遠くないのかも知れない・

2168

side 夕映

アリアドネー 魔法学校 図書館

ソプラノとの連絡でのどかやネギ先生達の居場所が

ほぼ特定され、順調にメンバーを回収していると聞き

私がこの街で学園に通う必要が無くなり

ソプラノ達の所に戻っていいか？ と聞いたが、

戻るのは何時でも戻れるのでせつかくだからこの学校で

医療系と防御系の魔法を習っていくと良いよ、と言われ

私は渋々ながら今もこのアリアドネーの魔法学校に通っている。

ソプラノとの仮契約で寿命の心配をせずに彼女（？） と居られるのはいいが

やっぱり一緒に居られないのは寂しい。

その事を伝えた翌日にはエヴァンジェリンさんが気を効かせて

ソプラノをアリアドネーに連れてきてくれたのは嬉しかった。

そんな事もあったが、

今こうして医療系の魔法を習う機会を持てたのはありがたいので

中等部に通っていた頃より真面目に学校に通っている。

「……………」

「なーに見てるの ユエー！」

「……………なんだコレットですか。」

見ての通り治療魔法の魔道書ですよ。」

「ユエは少し真面目すぎない？」

「せっかくここに通わせてもらってるんですから

治療魔法を覚えられるだけ覚えていきたいですからね。」

「もー、勉強ばっかじゃなくて少しは流行りの情報も知っておかないとダメだよ？」

これなんか知ってる？」

今話題のグラニクスの拳闘士、かの伝説の英雄と同姓同名の

ナギ・スプリングフィールド！」

コレットの見せてくれた録画映像にはネギ先生が認識阻害で化けた

姿が写っていた。

「この人がそうですか？」

「そう！ 今話題のナギのそっくりさん、いいでしょー

私も紅き翼のナギさんのファンクラブに入ってるんだけど

彼、本当によく似てるんだよね。」

そう言いながらコレットはファンクラブの会員証と映像を比較してを眺めている。

「そうなんですか・・・でも、私はもう少しこう 優しい感じのほうがいいですかね。」

「そう？ このナギさんも十分優しそうな感じだけどなー。」

「フン、相変わらず情報が遅いですわね、コレットさん！」

「!？」

声の方を見ると我がクラスの委員長、エミリィ・セブンシープさんが居た。

「な、なんだよ委員長ッ！」

「貴女方のような人達がナギ様のファンを語るとは笑止！」

「・・・いや、私は語ってないですよ？」

「と、とにかくこれを見なさい！」

「なっ・・・そ、それは!?!？」

委員長が持つてるカードには

コレットが持ってた物と同じナギさんの顔が描かれたカードだった。

「かつかか 会員番号78いーッ!?!？」

「二桁台なんて・・・そんなバニヤニヤ！」

コレットがかなり動揺しているようだが

あの会員で二桁というのはそれ程にすごいんだろうか？

図書館の中というのに二人はにらみ合って大騒ぎしている。

とりあえず私は二人を放っておいて治療魔法の魔術書を読み直すことにした。

翌日

私が学校に行くときいきなりコレットに引っ張られて

廊下の掲示板の方に連れて行かれたが、なにやら人集りができている。

「ほら、これ見てユエ！」

「なんですか……え〜っと……」

コレットが指差すプリントを読むと

オスティアの記念式典の警備任務で

各学年から2名選出し警備部隊としてオスティアに行けるようだ。

希望者が多数の場合は選抜試験を行うとも書かれている。

「なるほど・・・で？」

「これがどうかしたんですか？」

「オスティアの記念式典で開催される闘技大会に例のナギさんも出るんだよ！」

「それで私達もこれに参加して一緒にナギさんを観に行かない？」

「いや、私は・・・コレットだけで参加すればいいのでは？」

「訓練なら付き合いますし。」

「えゝ 一緒に行こうよユエー！」

「それにこの大会2名で一組だから私だけじゃ出れないし。」

「・・・そんなにオスティアに行きたいんですか？」

「うん！ お祭りも楽しみだし、ナギさんに会えるかも知れないし

「！」

「・・・しょうがないですね、コレットにはお世話になってますし

「選抜試験には一緒に参加しますけど、

「選ばれなくても我慢してくださいよ？」

「うん！　ありがとう！　ユエー！」

「ふふん、そんなに簡単に行くでしょうか？」

「委員長！？」

「貴女達のような落ちこぼれコンビが

このような名誉ある任務に選ばれるとお思いですか・・・甘いですね！」

「うげ・・・やっぱり委員長も志願・・・？」

「当然です！」

その後コレットと委員長が少し言い合いをした後

私は廊下をコレットに引きずられて行く。

「もー委員長めっ！」

新入りのユエがメキメキ力をつけてきたから

目の敵にしてるんだよ！」



「そうなんですか？」

私は治療系と防御系以外はポロボロの成績なんですけど……」

「その二つでユエは委員長に勝ってるじゃない、

それがきつと気に入らないんだよ！」

「そういうものですかね？」

「でも委員長アレで実力はすごいからな

勝てないよ……」

「落ち着くですよコレット。」

委員長に勝ちたいなら特訓するですよ。」

「でも……私勝てるかな？」

「今の委員長の實力なら、コレットも頑張れば十分追いつけますよ。

特訓するなら私も付き合いますし。」

「そ、そうだよね！一緒に頑張れば大丈夫だよね！」

「ええ、私は防御呪文でうまく防御して、

コレットが頑張って攻撃魔法を覚えれば十分勝てますよ。」

「え……攻撃魔法って？」

「二人一組でペアで戦闘するんじゃないですか？」

委員長なんかコレットの魔法でボコボコにしてやるですよ。」

「いや……ユエ、選抜試験は魔法の筈で100キロ飛ばすだよ……」

一応妨害は許されてるけど、攻撃魔法は厳禁だから

妨害には主に武装解除の魔法を使うんだけど。」

「何だ……そうなんですか。」

私は警備隊の選抜試験なのでつきり戦闘かと思ったですよ。」

「……ユエって治療や防御の魔法ばかり覚えてるくせに

時々過激なこと言い出すよね。」 1111

「そうですか？」

私の周りの知り合いは平気で攻撃魔法撃ち合うので

あまり気にならなかったんですけど、過激だったんですか……」

どうもソプラノやエヴァンジェリンさんと付き合っていると

一般の常識から離れていくようです・・・

これは気を付けないとダメですね。

それから数日、授業後にコレットの特訓に付き合い

私も久しぶりに実戦形式で訓練をしましたが、

この魔法学校はやはりエヴァンジェリンさんの訓練と比べると

レベルが低いようです・・・まあ、あの人が規格外過ぎるんですが。

とにかく、今は時間がないのでコレットには

攻撃魔法の時の魔力収束をメインに、後は効率的な運用法を覚えて  
もらい

私はそれを回避しながら防御魔法で受け流す訓練をする。

後は飛行速度を少しでも速くすることでしょうか。

コレットの魔力自体は私より多いと思うのですが

引き出し方や魔力の操作がまだ下手なせいで、

魔力が無駄に分散しがちです。そこを重点的に訓練し、

千雨さんの障壁突破の時の魔力運用を参考にさせてもらい

コレットには武装解除の魔法をなるべく1点に収束して撃ち出す訓練をしてもらった。

私としても、コレットの収束した魔法を

防御障壁で受け止める訓練になるので一石二鳥だ。

実践では障壁を受け流すように多数配置すれば

ここの生徒が使う多少強力な魔法でも、

ほぼダメージ無しで受け流すことが出来るようになるだろう。

万が一傷を負っても、ここで習った治療魔法や、

アーティファクトを使えばすぐに治療できるので問題は無いはずですよ。

「……ハアハア……何で魔法が当たらないの……

ユエ動きが速すぎるよ……」

「そうですか？」

でも、これくらいの速度は当てられるようにならないと  
実戦だとほとんど当たりませんか？」

「選抜試験は、箒での100キロラリーだって……」

「そ、そうですね。」

完全に今回の目的を忘れていたです……

それにしてもなんで箒なんかで飛ぶんでしょうか？

もっと小さい魔法触媒を身につけて飛行魔法で飛んだほうが

戦闘になった時は便利なのに……

「でも、箒で飛んでる相手に当てるんですから

これくらいは当てられるようにならないとダメですよ。」

「…………ユエって意外にスパルタだよね。」

それに何でそんなに速く動けて避けるのもうまいのに成績が悪いの？」

「う…………そ、それは…………私は…………ほ、本番に弱いほうなんですよ！」

それでテストなんかだと緊張してしまつて。」 1111

「そうなんだ、じゃあユエは本番に緊張しないようにする訓練をしないかね。」

「そ、そうですね…………どんな訓練をするか分かりませんが。」

この後しばらくコレットの魔法の特訓をした後、

私達は寮に帰り身体を休めることにしたが…………

コレットが緊張をしないようにする訓練だとか言い出して

私に恥ずかしい格好をさせ寮内を歩かせようとした時は

彼女には悪いけど意識を刈り取らせてもらったです。

「あ、あんな恥ずかしい格好、ソプラノにも見せたこと無いですよ。」  
／／／

神様から頼まれたお仕事。

その61（後書き）

61話目 投稿



神様から頼まれたお仕事。 その62

side 夕映

アリアドネー 魔法学校

オステイア記念式典、

警備部隊への特別参加卒を掛けての選抜試験、開催日。

どうもコレットの特訓 最後の調整で時間をかけすぎたようで

既に会場の方では参加者紹介が始まっている。

コレットを起こしてる時間がないので、

私は文字通りコレットを引きずって会場まで急いで移動した。

「お、遅れて申し訳ないです！」

『ここで遅れて登場です！』

最後の参加者、ユエとコレットのチームです！』

会場内のアナウンスで私達が紹介されるが・・・

コレットは目を回したまま起きる様子がない。

このままではしょうがないので多少強引にコレットを起こす。

「ほら、コレット目を覚ますですよ！」 バチッ

苦手ではあるが一応使える雷系の魔法の射手を待機状態で軽くコレットに当てて

コレットの目を覚まさせる。

「うひゃっ！・・・え？ izzzzzz?」

「ここは選抜試験の会場ですよ。

もう開始間際ですので気合を入れますよ。」

「あわわわわ・・・もう し、試験が始まっちゃったの?」

「落着くですよ、アレだけ特訓したんだから大丈夫ですよ コレット。」

「そそそ、そうだよね あんなに特訓したんだし大丈夫だよね

コエお姉さま。」

「……………どつでもいいですけど、そのお姉さまって言うのはヤメるです。」

「は、はい。」 / /

コレットの特訓中に彼女の回避訓練で

エヴァンジェリンさんのやり方を真似て少し派手にやり過ぎたのか・  
・

魔法の射手を乱れ打ちにして彼女に回避させていたのだが

……………何故か途中から彼女の私の呼び方にお姉さまがつくようになつてしまった。

大体私のほうが背が小さいし、体型も……………アレなのに

何故コレットからお姉さま呼ばわりされなくてはいけないのか……………

委員長達も不思議そうな顔でこっちを見てるし、

この学校では目立つつもりはないのにいい迷惑ですよ。

『では、各選手・・・位置についてください！』

「ほら、行くですよ。」

「うん！ が、頑張ろうね！！」

参加チームは全員所定の位置に付き、私とコレットもスタート位置につく。

「私は予定通り後衛だね。」

「ハイ 私は前衛で盾役になるので、

コレットはしっかりと魔力を収束させて落ち着いて狙って撃つですよ。」

「了解！！」

『・・・位置についてえ・・・よい・・・スタートッ!!』

アナウンスの合図で皆が一斉に飛び出す。

私とコレットもなかなかいいスタートを切れたようだ

3番目の位置をキープできたようだ。

『さあ 栄えあるオスティア記念式典 警備兵の3年生選抜百キロ  
レース、

いよいよスタートです。

ご存知のとおりレース中は妨害自由!

硬度30m以上の飛行は反則!

10箇所のチェックポイントを通過した後、

ペアでスタート地点まで帰ってゴールです!

現在のところ トップはエミリィ&ベアトリクス組。

2位はフォン・カツツェ&デュ・シャ組、

そして なんと3位には 落ちこぼれ コレット・ユエ コンビ!

「！」

「2位が見えましたよ！」

コレット特訓通りに行くですよ！」

「合点 コエ！」

前方射程範囲に 2位のコンビが固まって飛行してるのが確認できたので

特訓で練習した私が前衛で盾になるフォーメーションで一気に勝負をかける。

2位のコンビも気がついたようで私達を撃墜するために

魔法の詠唱を開始している。

この大会であまり派手に目立つわけにもいかないの

私も無詠唱魔法や大規模の魔法は止めて

コレットが使える魔法と同レベルの魔法で対応する。

「来ますよコレット！」

「合点！」

私とコレットの主な戦術はこうだ。

相手の魔法を私が受け流すように配置した障壁で防御し

その隙を着いてコレットが1点収束した魔法を撃つ。

時間がなかったのでコレットに無詠唱や凝った戦術を訓練する時間はなかったが、

基本のこの戦術で委員長位の相手なら正面から当たれば十分対応できるはずだ。

それに生徒への直接攻撃魔法は禁止されているが、

間接的に使って煙幕がわりに使ったりは出来るはずなので

序盤で勝負をかけてトップに出られれば

特訓したコレットの出せる最大速度なら逃げることが出来るはず  
です。

「熱波、武装解除！」

2位コンビの武装解除魔法を私の障壁で受け流す。

やはりこの学校で学んだおかげで障壁の強度が結構上がったようですね。彼女達の魔法くらいなら正面から受けても問題なく防御できそうです。

私が障壁で攻撃を受け流した直後、コレットが予定通り攻撃魔法を放つ。

「風花・武装解除！！」

相手もほぼ私達と同じ戦術のようで

盾役と攻撃で別れて対応しているようですが

障壁の貼る位置や強度が甘いようで、

コレットの武装解除魔法が相手の障壁を突破し

2位のコンビ二人の制服を脱がすことに成功した。



「キヤ！」 「いや〜っ！」

「やた！」

「コレット！ 気を抜かないようにするですよ！〜！」

「は、はい ヌエお姉さま！」

「だからそれはヤメるです！〜！」

「このまま一気に委員長達を落として逃げきるですよ！」

「OK〜、加速！〜！」

委員長コンビまで まだ少し距離がありますが

相手は迎え撃つつもりのようで、

その場で反転して止まり、魔法の詠唱を開始している。

「コレット！ 速度はそのまま、詠唱を開始するです！」

委員長の魔法は私が受け流すです！」

「わ、わ、わ、それは難しいよ〜！」

「とにかく詠唱を！ 来るですよ！」

「ええ〜い！ アネット・ティ・ネット・ガーネット！」

委員長の詠唱も完了したようで杖を私の方に向けて魔法を撃ってくる。

「氷結・武装解除！！」

あまり調子にのって障壁を多重展開すると目立つので

3枚で流すように配置し委員長の攻撃を受け流す。

バキッ！

一枚が抜かれたが、2枚目と3枚目で無事受け流すことに成功、

「なっ！？ 弾いた？ いや、流したんですか!？」

「委員長の首、貰ったあ！ 風花・武装解除！！」

「ちい、甘いですわ！！ 氷結・武装解除！！」

「きゃあ!」 「な・・・なななあ!？」

委員長とコレットは相打ちのようで、お互いの上半身の制服が脱がされている。

しかし・・・コレット・・・何でこの大会でノーブラなんですか。

少し離れたところで待機していたベアトリクスさんが、

戻って来て私達を攻撃してきたが、

私がコレットの盾になり障壁を展開し攻撃を防ぎ、

コレットに私のローブを渡す。

「コレット、このまま逃げますよ!！」

「が、合点承知い!！」

ベアトリクスさんが委員長の無事を確認して自分のローブを渡しているようですが

待機したままなので今の内に一気に加速して引き離すことにする。

「ユ、ユエエ〜速いよお〜!」

「このまま逃げ切れればもう戦闘は無いはずですから

残った魔力を多少無理に使ってでも逃げきるですよ!

コレットももう一息だからガンバルですよ!」

「わ、わかった、ガンバルウ〜!」

コレットもこのまま逃げ切れれば戦闘が回避できると分かってくれたのか

ちゃんと私の今の速度についてきてくれている。

筈じゃなくて指輪が髪飾り、アーティファクトが使えればもう少し

楽にいくと思うのですが、

学園側に辺に目をつけられても困るのじゃないですね。

私とコレットは順調に飛行してこのまま逃げ切りで

レースは終わりかと思っていたが、

魔獣の森を迂回して飛行していた時、森のほうから何か騒がしい音が聞こえてくる。

「コレット！ この森を迂回することはルール上はどうなんですか？」

「一応問題ないけど危険だから誰も抜けようとは思わないはずだよ。」

「でも、何か騒がしいですが……って誰か飛び出るですよ！」

森のほうから 「助けてー！」 という声と共に

二人の人影が飛び出してきて、それを追うように大型の魔獣が飛び出してくる。

「な、アレ委員長達だよ！」

「森を抜けてきたんですか……それにしても厄介なものを拾ってきたですね……」

「このまま逃げたら……だめですよね？」

「……ユエ、それはちょっと酷すぎるよ。」

むう、ソプラノ……はともかくエヴァンジェリンさんだったら賛同してくれそうなんですが

・・・流石に自分でも 言ってる少し薄情だと思いましたが。

「アレは・・・鷹龍!？」

委員長のヤツウ・・・近道しようとしてとんでもないの

拾ってきちゃったのね。」

「鷹龍ですか・・・風属性ですね・・・ならなんとか言い訳は立つ  
でしょうか・・・」

鷹龍に追われてきた委員長達が鷹龍に吹き飛ばされた木の破片に当  
たり

地面に不時着する。

鷹龍はその委員長たちに向けてプレスでの攻撃態勢に入る。

「な、カマイタチプレス!？ 逃げてえ!!!」

「・・・しょうがないですね!」

私は委員長達と鷹龍の間に立ち、プレス攻撃を受け止める体制に入  
る。

「……なっ！ ヌエさん！？」

ベアトリクスさんも障壁を展開して受け止めようとするが

私が展開した5枚と彼女の障壁でも

このまま正面からだを受け止めるのはきついようで

障壁が削られていく音と感触が伝わってくる。

「何故私達を……いえ、何故素人の貴女が龍種のプレスを防げるほどの……」

「少し黙ってて欲しいです！」

くっ……このままだとさすがに無理ですか……しょうがないです……。

委員長にベアトリクスさんもこれから起こることは

誰にもしやべらないでくださいよ！！」

「な、何を……それは！？ 仮契約カード……！」

私は懐から仮契約のカードを出し、アーティファクトを召喚。

更にスライム娘達3人を召喚する。

「あめ子、すらむい、ぷりん！　アーティファクトでの障壁展開するですよー！」

「合点！」　「承知！」　「……の介？」

糸巻きから糸を引き出し委員長と私達を囲むように展開する。

この辺りの技術はエヴァンジェリンさんの人形遣いの技術を叩き込まれたおかげで

今なら目を瞑っていても出来る……というか、そういう訓練もさせられた……

鷹龍のプレスをしなぎ、爪での攻撃を障壁で逸らして回避し私は委員長を、

コレットはベアトリクスさんを連れて鷹龍から距離を取る。

「魔法使いの従者！？」

「仮契約はまだしも、アーティファクト……それに使い魔まで持つてるなんて……」

ユエさん……あなたは一体……！？」



「委員長、ベアトリクスさん！」

怪我はないですか!？」

「は……はい。」 「はい。」

「コレット！ 私達が隙をついてこの鷹龍を森に連れていきますから委員長達を連れて安全なところまで退避するです！」

「お……おおう。 了解!！」

「な、ユエさん！ 一人では無理です!！」

「そうです！ アレは下位種とは言えれっきとした龍種です！

貴女達では……」

たしかに私とスライム娘達だけでは少々面倒ですね……

「……そうですね、じゃあ皆さんには困役をお願いするですよ。」

「」「は……?」「」

「コレットとベアトリクスは回避を主にしつつ魔法の射手で鷹龍を煽って

森のあそこの岩の当たりまで迂回しつつ誘導してください！」

相手の攻撃を受けるときは正面からでなく

斜めに障壁を展開して流すようにしてください。

私と委員長は先行してあの岩の当たりで準備をしていますから！」

「な、ユエさん、何を勝手に……」

「ふたりともお任せするですよ！」

「は、はいユエお姉さま！」 「わかりました。」

コレットとベアトリクスさんは私の指示に従ってくれるよう

鷹龍に魔法の射手を打ち煽って森の方へ誘導していく。

「委員長、私達は岩場の方へ先行するですよ！」

あめ子、すらむい、ぷりん、一旦戻しますよ。」

「もう出番は終わりかよ。」 「かしこまりました。」 ……  
後でお菓子。」

「皆の出番はちゃんとありますから。」

あとぷりん、お菓子は帰ってからです。」

「ち、ちよつとユエさん！」

私は委員長を連れて目的の岩場へ森の中を移動する。

「ヒドイ人ですねあなたわっ！ 危険な囿役を押し付けて！」

「奴は風属性ですから、障害物の多い森の中なら回避に徹すれば

あの娘達は大丈夫ですよ、それに一番危険な役目はちゃんと私達がヤルですよ。」

「委員長、貴女が使える魔法で

あの鷹龍の翼に傷をつけられそうな魔法はあるですか？」

「む・・・あの障壁さえなければなんとかできそうな魔法はありますが。」

「ならばお願いするです。」

私が足元に障壁引きつけますから上からあの羽根を狙って攻撃してください。

とにかく奴を飛ばないようにしてください。」

「むむ・・・この際しようがないから協力しますが、

あなた一体何者なんですか？」

「それは秘密です、委員長達は私達が居なければあの龍種にやられていたんですから

さっきの口止めの件とこの事を聞かないということは聞いてもらっていますよ。」

とにかく今はあの鷹龍を仕留めるですよ。」

「むむむ……」

私達は目的の岩場へ付き、再度スライム娘達を召喚、

委員長には岩の上で待機してもらおう。

「皆いいですね、私がああ鷹龍の目を引いて障壁を足元に貼らせませす。」

その後委員長が上から羽を狙って攻撃します。

今度はそつちに気が行くとおもいますので

皆は状況を見てウォーターカッターで羽を切り刻んでください。

その間に私は魔法の詠唱と結界の準備を済ませますから、

皆が私が用意する結界に避難してください。

後は龍の丸焼きの出来上がりですよ。」

「任せとけ!」「まかせてください。」「……ジュースも付けて。」

「……ぷりん……貴女最近要求が多くなってきてるですよ……」

まったく……ソプラノが甘やかすからです。」

コレット達がうまく攪乱しているのか、

森の方はかなり大騒ぎのようです。

『コレット、準備OKです。』

そのまま岩場の方に誘導してください!』

『……』

『そのまま直進です、私が見えたら散開退避ですよ。』

『了解』

コレットが達が見えてきたですね……ここから勝負です。

「フオア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ!

火精召喚・槍の火蜥蜴15柱!!」

火蜥蜴を召喚し向かって右側の足元から地を這うように攻撃させる。

私はその間に瞬動で逆のほうに移動し、

魔法の射手の詠唱を開始し、足元を狙って撃つ。

「・・・魔法の射手、火の30矢!!」

「グルアア!」

火の精霊と魔法の射手を続けて打ったことで

鷹龍の意識は完全に足元に集中され障壁も足元のみ貼られている。

「今です! 委員長!!」

「くっ・・・素人のくせに私に命令を・・・どうなっても知りませんよ!!」

氷槍弾雨!!」

「ギャ!」

完全に無防備なところへ委員長が氷の槍で攻撃、

スライム娘達もそれに合わせて鷹龍の羽を切り刻みに掛かる。

「いつくぜー！」 「それ〜！」 「・・・だるい。」

私はスライム娘達の避難用にアーティファクトで結界を貼り

意識を集中し呪紋を起動しありったけの魔力を込めて

止めの魔法を準備する。

「フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ！」

契約に従い、我に従え、炎の霸王。

来たれ！ 浄化の炎、燃え盛る大剣！

ほとばしれ、ソドムを焼きし火と硫黄。

罪ありし者を死の塵に。」

「ちよ・・・ユエさん！ その魔法はっ!？」

「・・・はっ!? ここも不味いですわ!!」 1111

「不味い!? コレットさん! ここから逃げますよ!!」 1111

「え? なんで?

十分距離が離れてるじゃない?

「足りませんよ!!」

ユエさんが使おうとしてるのは、広範囲焚焼殲滅魔法です!

下手したらこの辺りも火の海になりますよ!!」

「エエ!! うそお〜!?」 1111

「皆結界に入ります!」

「おう!」 「了解。」 「・・・しました?」

「食らうですよ! 燃える天空!!」

「グルアアアアアアアア!!」

私の燃える天空で鷹龍を中心に辺り一体が火の海に包まれる。



委員長とスライム娘達の攻撃で無防備になった所で

これを喰らえば龍種といえどもなんとか倒せたでしょう。

辺りから魔法の炎が消え、多少木が燃えているが

これくらいならスライム娘達に消化してもらえば大丈夫でしょう・  
・あ 1111

委員長達は・・・どうなったのですかね？

私が周囲を見回すと後ろのほうから声がかかる。

「・・・ユエさん・・・貴女私達ごと焼こうとしましたわね？」  
#

「ユエ・・・さすがにアレは酷いんじゃないかな？」 #

「ユエさん・・・攻撃する前に避難勧告くらいしてくれてもいいんじゃないですか？」 #

「ち、違つですよ！」

あの鷹龍を倒すにはアレくらいの魔法が必要かと思っただけですよ

！」「 1111

「そうですね！ あの魔法！？

なんで貴女があんな魔法使えるんですの！

あんな魔法個人で使うなんて

よっぽどの高位魔法使いでないと無理なはずですよ！」

「ですから、それも含めて秘密です・・・

そ、その一応委員長達を助けたんですからその貸しとして黙っていてもらつですよ！」

「そんなの私達を焼こうとした時点でチャラですよ！」

「そつだよユエ！」

何であんなすごい魔法使えるのにあんな成績なのよ。」

「・・・わざと悪い成績をとっていましたね？」

「あ・・・あう・・・と、とにかく私は何も教えることはできないんですよ！」 1111

「ユエさんには後できつちり、

私達と話す機会を作ってもらわなければならないわね。」 #

「そうそう、キリキリ吐いてもらわないと。」 #

「しっかりカツドンも用意しておくので。

請求書はユエさんに回しますが。」 #

「……なんでこんなことになるんですか……。

ただ私は静かに治療や防御の魔法を習いたいだけなのに……」

111

この後、学校への帰路でコレット達にしつこく質問攻めにされたが

私は黙秘し続け、なんとか何もしやべらずに済みましたが……

これからずっとこんな生活が続くんですか？

(ソプラノ)……私、もうそっちに帰りたいですよ……)

取り合えず、学校に戻ってなにか聞かれたら鷹龍の風の攻撃で

火が広がったといえればいいわけにはなるでしょうし。

後はなんとか委員長達を口止めすれば大丈夫でしょう……

口止め……出来れば……。 111

「あ、皆、ゴールが見えてきたよ。」

「でも、レースも何もあつたもんじゃなかったですわね。」

あんな目にあつて……散々ですわ。」

「それもこれも、委員長が無茶なショートカットをしようとしたせいなんだけどね。」

「うつ……。 111」

「？ なにか騒がしいですね。」

私達がゴール地点につくと生徒の皆が駆け寄ってくる。

ビリの私達の歓迎にしては少し妙な感じですが……

「すごいよあんた達！」

「学生があんなのを倒しちゃうなんて！」

「ねえ！ どうやって倒したの？」

映像だと森の中だから良く見えなかったんだよね。」

「あ……そうか、龍種を倒したから。」

「げ……」 1111

あの戦闘が映像に写ってたんですか。

こゝこれはまずいことになったのでは……。 1111

「そのとおりよ。」

この選抜試験は 有能な候補生を選ぶためのもの。

お祭り中のオスティアはかなり物騒になるから

即戦力がほしいのよ。」

「……総長！」

「森の龍種を倒せる実力があるならその資格は十分だわ。

龍を倒したのものには特別枠を与え、合格としましょう。」

「「「ええーっ!?」「」

「……いや、私はいません。」 111

委員長達やコレットが皆に囲まれて賞賛を浴びる中、

総長が私に近づいてきてそっと耳打ちする。

「コレさん。」

「ひ、ひゃい!?!」

「貴女があそこまでの魔法を使えるなんて知らなかったわ。

映像には細工をしておいたから生徒の皆にはわからないけど

私は しっかり 見てましたから。」

「……あ、あのですね……アレは。」 111

「あんな許可証を持っていたり、知り合いには変な人が多いから

少しは出来ると思っていただけであそこまでとはね……どう?」

貴女にその気があるなら少し調査させてもらっけど

正式にウチの騎士団に受け入れることも出来るわよ?」

「……い、いえ、結構です。」 111

「そう？ でも、気が変わったら何時でも私のところに来てね。」

「できたら今回の警備隊の件も私は外して欲しいくらいなんですが……」

「別にいいけど、私も騎士団入りを断られたショックで

つい うっかり あの時の戦闘記録の映像が

生徒たちの目に止まっちゃうかも知れないわね。」

「……オスティアでは頑張らせてもらうです。」 111

「頑張ってね。」

こうして私達4人は特別枠オスティアの祭りでの警備隊入りが決定してしまった。

（本当……今すぐソプラノの所に逃げ帰りたいです。

……いつそ隙を見て逃げるですか？

治療魔法も防御の魔法もひと通り覚えたことですし、

確かソプラノから預かったお金があれば、オスティアまでの旅費には十分なはずです。

コレットも合格できたなら、義理は果たしたことになるでしょうし。  
)

「あゝユエ見つけた！

委員長！！ ユエ見つけたよぉ〜！！」

「さあ、ユエさん！

キリキリ吐いてもらいますわよ〜！」

「ユエさん・・・コチラに取り調べの用意がしてありますので。」

「・・・もう勘弁して欲しいです。」  
　　一一一



神様から頼まれたお仕事。

その62（後書き）

62話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その63

新オスティア クルト邸

街では現在オスティア終戦記念祭が開催中。

魔法世界の各地から様々な人種の人達が集まり

先の大戦の集結を祝っている。

ネギ先生や千雨達は無事にオスティアで開催される拳闘大会の出場権を獲得し、

村上さん達を連れて ここ新オスティアに着ている。

神楽坂さん達4人もオスティアには着ているようで、

本屋ちゃんが若干離れてるが、やはり同じようにこちらに向かってきているようだ。

夕映はオスティア終戦記念祭での警備隊に入り、

やはりコチラに来ているようで、

茶々丸も、早乙女さんと合流し、

早乙女さんが購入した飛行船でこちらに向かっている。

これで、アーニヤちゃん以外は全員、オスティアに到着、

もしくは向かっていると言つ状況になる。

少し前からクルトも祭りの準備や、来賓の対応に追われて

こちらの家へ帰ってくることも少なくなっているので

この家は実質、私達が占拠した状況になっている。

「つて言うか・・・なんで貴方がこんな所にいるんですか?」

「ハツハツハ、固えーこと言うなよ。」

嬢ちゃんと俺の仲じゃねーか。」

ここはクルトさんの別邸なのだが、

庭に設置したテーブルに座る私の目の前には何故か

ラカンさんが座って一緒にお茶を飲んでいる。

「どういう仲ですか・・・それにここはクルトさんの家ですよ。」

「アイツの家なら俺がいても何も問題ないな。」

「ハア・・・もういいです。」

それで？ 今日は何の用事なんですか？」

「おう、とりあえず報告と招待だ。」

ぼーずには無事に闇の魔法を教えといたぜ、

まあ、千雨から連絡は言ってると思うがな。

後はこれだ。」

ラカンさんはテーブルの上に何枚かのチケットのようなものを置く。

「これは？」

「今度ぼーずが出る拳闘大会のチケットだ。」

「一番いいVIP席だから見に来るならこれを使えよ。」

「まあ、見に行こうとは思ってましたが・・・」

それに、何でラカンさんがこんないい席のチケットを持ってるんですか？」

「ああ、俺はあの大会のスポンサーの一人だからな、

表には名前はだしてねーが。」

「・・・でもこの席ってもしかしたら

他国の偉い人とかも一緒に座る席なんじゃないですか？

そんな所に私やエヴァが行ってもいいんですか？」

「たぶん大丈夫なんじゃねーか？」

「・・・アリアドネーのセラスさんには会いたくないんですけどね  
」。

「あ？　なんかやらかしたのか？」

「別にやらかしてはいませんが、知り合いを預けるときに面会して  
・  
・

その時の偽名を使っただんですよね。

バレちゃいますけど・・・まあ、いつか。」

「それくらいならいいんじゃないか？」

あ、そうだ、この大会俺も出るかも知れないから

ソプラノの嬢ちゃんもエヴァと出るか？

今なら主催者権限でねじ込んでやるぜ。」

「出ませんよ・・・それにラカンさんが出たらネギ先生の借金返済計画が

ダメになりますよね？」

「そんな時は、地味に稼げばいいんじゃないか？」

アイツらなら100万くらい その気になればすぐ稼げるだろ。

なんだっいたら俺が金を貸してやってもいいしな、利子はきっちりもらうが。」

「ラカンさんの物差しで言わないでくださいよ。」

まあ、いいですけど。

ラカンさんが出たいというなら別に止めはしませんよ。」

「ぼーずの成長も楽しみだが、

おまえさん達が出てくれると俺は嬉しいんだけどな。」

「私達が出て勝っちゃったら大変なことになるじゃないですか。」

それに会場が壊れちゃって試合どころじゃなくなりますよ。」

「ハツハツハ！ 俺に勝てるってか？」

「私の妹は強いですからね。」

「ソプラノの嬢ちゃんは強くないのか？」

「私は病弱で売ってますから。」

「おまえさんが病弱なら俺は入院患者だな。」

まあ、いいさ、今回は最初から無理だと思ってたからな。

だが、その内いつか相手してもらおうぜ？」

「こんな子供を殴りたいなんて・・・ラカンさんは変態ですね。」

「・・・・・・・・それを言うなよ・・・俺もそこは気にしてんだから。」

その後ラカンさんとお茶を楽しんだ後、

ラカンさんは用事があるとかで帰っていった。

さて、村上さん達の借金返済の状況だが、

原作通りのラカンさんの参戦の可能性で ネギ先生達には不幸な事になったが

ネギ先生の拳闘大会の優勝賞金狙いとは別口で

千雨がなにやら単独で動いているようで、

ネギ先生達のプロフィールの情報を賭けの元締めに売ったりして資金を稼ぎ

稼いだ資金をネギ先生達の試合に手持ちのお金と合わせて全額つき込み

かなりの額を稼ぎ出したようで、

このオスティアでの拳闘大会で

もしかしたら千雨が資金を稼いでしまっ可能性が出てきた。

まあ、その時は 後で稼いだお金は全額千雨の物にでもしてもらえばいい。



新オスティアに来て何日か経ち

神楽坂達4人と合流したり、ネギ先生が和泉の先生への恋愛感情を知ったり

色々あったが、この世界に来て離れ離れになったメンバーも順調に集まりつつあるし

ネギ先生達とは別口にやっていた私の資金稼ぎも順調に進んでいる。

「さて、ぼーず・・・闇き夜の型、いってみる。」

「ハイ。」

今はオスティアの人気の無い展望台で

・ネギ先生が闇の魔法の習得状況をおっさんに見てもらっているが・・・

先生の技術の習得速度は 私には嫌になるほど速くて複雑な気分になる。

天才って言うのは、こういうヤツのことを言うんだらうか・・・

魔法がまともに使えない先輩が知ったら 怒り狂って先生をボコボコにしそうだ。

まあ、先生の修行を見る代わりにおっさんとの修行で戦闘技術もそれなりに上がったし

先生に雷の投擲の魔法を教えてくださいましたが・・・

魔力消費がきつくて実戦じゃ使えねー ー ー ー

私じゃ、闇の魔法での雷の暴風との同時使用は結局無理だった。

その代わりにこの魔法の術式から麻痺の射手を打ち込み維持する

バインドの魔法に転用できる部分があったから

先生に頼んで組んでもらい、

バインドが実戦で使えるレベルになったからいいとするか。

「ダメだ、ダメだ!!」

てんでなっちゃいねーぞ。」

「.....」

「やはり1ヶ月じゃあ さすがの天才少年でも無理だったか？

不安定すぎるぜ、実戦じゃ まだ使えねーな。」

「……………」

ネギ先生の動揺が型に現れたのか、わずかに先生の魔力が揺らぐ。

「おおっと、心を乱すんじゃないぜ。」

くっくっく……………しかしまあ問題山積みで大変だな、ぼーず。

告白のコトやら、借金のコトやら、皆の安全のコトやら、謎の敵の  
コトやら……………」

お姫様のコトやら。」

「……………っ!？」

お姫様……………というのはアスナさんのコトですか？」

「あの薬は、俺様の指示通り飲ませたんだろ？」

なら安心だ、この問題は解決だぜ。」

ここオスティアに来るとき先生に

変な紙の包をおっさんが渡していたがアレのことか？

「ラカンさん！　そういう事じゃなくて・・・」

「今のお前の目標は全員の無事帰還だろ？」

だったら。これ以上は知らなくていい。」

「誤魔化さないでください！！」

アスナさんが・・・父さんやこの世界とどんな関係があるって言うんですか！？」

「今まで本当に気がつかなかったか？」

あの娘の特異さに・・・魔法無効化という超希少特殊能力・・・

両親の不在・・・近衛家・タカミチとの幼少からの付き合い・保護・

お利口なお前さんが少しも不思議に思わなかったと？」

「ラカンさん！！」

なるほど、たしかにおっさんの言う通りなら・・・

私はそれほど親しくなかったからわからなかったが

神楽坂はかなり特異な環境にあるし

只の一般人とはとても考えにくい。

先輩やエヴァがこの辺を知らないということは考えにくいが・・・

そう言えば先輩達がネギ先生を鍛えるような真似をしたり

妙に魔法世界に来たときの対応が早かったりしたのも

この件となにか関係があるんだろうか？

私に何も言わなかったという事は、知らなくても問題ないという  
とか？

それとも知られると問題が有るということか・・・一度聞いてみる  
のもいいかも知れない。

「・・・ネギ先生〜!!」

ネギ先生とラカンのおっさんが言い合いをし

私は神楽坂や先輩のことを考えていると

朝倉が連れていた相坂のチビ人形が飛んできた。

「ネギ先生ッ！」

「さよさんっ!?!」

「ハイ、さよですうっ!」

本屋さんが大変なんです!

仲間皆の動きをアーティファクトで追っていた朝倉さんから緊急連絡で……!

「えっ!?!」

「本屋さんが仲間とオスティアに向かっていたんですが、

西50キロの地点で強力な賞金稼ぎ集団におそわれて……!

「助けに行かなきゃ……!」

「先生杖なしで飛べんのか?」

「そうか……僕の杖もあの時以来行方不明で……」

「ぼーずは闇の魔法より先に飛行魔法を覚えるべきだったな。」

「……言ってる場合かよ。」

「足ならあるよっ!……!」

「！」

私達は声の方を見ると・・・

そこには巨大な金魚・・・？ の形の飛行船に乗った早乙女と茶々丸達がいた。

「ヤッホー ネギくうーん！！」

「ハルナさん！！」

「・・・何であいつらあんな船に乗ってんだ？」

「中古品かつちゃった

いやあ〜こつちに来てからこの溢れる才能で一儲けしちゃってね！」

「ネギ坊主！！」

「古老師！！」

「これをつ！！」

古がなにやら布に包まれた棒のようなものを

ネギ先生に向かって投げつけてきた。

「僕の杖!!！」

「おうよ!!！」

「カモ君!!！」

「俺っちが探し当てといてやったんだぜ!!！」

「先に行つてて!! ネギ君!!！」

「私達も後から追います。」

「朝倉さん・・・茶々丸さん・・・ハイ!!！」

「オイ ぼーず!!！」

「はい・・・」

「・・・使うのか？」

「ハイ!!！」

「使い過ぎに気を付けろよ？」

「今のお前じゃ・・・呑み込まれるぞ。」

「・・・大丈夫です!!！」



「敵は賞金稼ぎを専門とする 強力なプロフェッショナル集団のようです。」

事態は急を要します、お気をつけて。」

「わかりましたっ!!」

「オイツ先生!!」

「行ってきます!! 千雨さん!」

ネギ先生は私の話も聞かずに慌てて杖で飛んで行ってしまった。

「……ってちげーよ……あゝあ、行っちゃった。」

「千雨さん、なにか問題ありましたか?」

「茶々丸、お前も行くんだよな?」

「はい、朝倉さん達とこの船で向かう予定です。」

「じゃあ、ネギ先生に異状が出たら力づくでいいから気絶でもさせて止めるよ。」

先生はまだ闇の魔法を覚えたばかりで、

エヴァが使うような本当の意味でのあの魔法を知らない。

呑み込まれる前に止めるよ。」

「分かりました。」

私の忠告を聞いて茶々丸達も宮崎達の所へと向かっていった。

「つたく・・・先生も人の話は最後まで聞いて行けつての。」

「まあ、ぼーずにとってはそれだけ大事な生徒なんだろう？」

漢ならアレくらいのほうがちょうどいいぜ。」

「おっさんも適当なんだから・・・」

先生が闇の魔法に呑まれて魔族にでもなっちまったら

先輩に怒られるどころか、

エヴァにどんな目に合わされるか分かったもんじゃないんだからな。

「まあ、そんな時は俺のせいにもしていいぜ。」

エヴァと戦ういい口実になるかも知れねーからな。

・・・それにソプラノやエヴァがぼーずにあの魔法を教えるつも

りになったのも

いずれ飼いならすと信じてるからだろ？

じゃあ、千雨はその信じた二人を信じるよ。」

「……かつこいいいこと言っても いざとなったらおっさんに責  
任取らせるからな。」

「その辺は任せとけよ。」

「せいぜい言ってる……あの二人を本気で怒らせたら

どんな目に会うか自分の身で知るといしさ。」  
「――」

side 夕映

「はあ~~~~」

「……コエ、それ今日で58回目のため息だよ。」

「コレットト……わざわざ数えてもらわなくてもいいですよ。」

「ユエさん！　せつかく栄えある騎士団に参加できるのですから  
もう少ししっかりしてくれませんか？」

「私は別に参加したくなかったんです・・・」

私達はアリアドネーから飛行船に乗せられ、

新オスティアに向かっています・・・

やはり無理矢理　学園を辞めてでも逃げ出すべきだったでしょうか・  
・

「ユエさん、貴女の事をちゃんと聞かせてもらおうのを

諦めたわけじゃありませんのですよ？」

どうしても言いたくない。

警備隊には素直に参加するから勘弁して欲しいと言ったのは貴女で  
しょう？

何なら今ここで詰問を再開してもいいんですよ？」

「・・・分かってるですよ。」

もうここまで来たら腹を括って警備隊の仕事をやるしか無いようですね。

これが終わったら退学届を出してソプラノのところに逃げることにするですよ。

side ソプラノ

「……うん、そう、わかった。

じゃあ千雨今夜は茶々丸もこっちに連れて皆で食事でもしよ。

ついでに超に茶々丸のメンテもしてもらおうから。」

『ああ、じゃあまたな、先輩。』

千雨からの緊急の報告でネギ先生達が本屋ちゃんを助けに行き、

その際、闇の魔法を使用して無事撃退したようだ。

闇の魔法の副作用も目立って出ていないようなので問題なさそうだ。

「姉様、今のは千雨か？」

「うん、さつき本屋ちゃん達が賞金稼ぎの集団に襲われたんだけど、ネギ先生達が助けだして無事に合流できたんだって。」

茶々丸や他のメンバーとも合流できたみたい。

夕映はまだこっちに向かっている途中だからダメだけど、

今夜は皆で一度集まって食事でもしようと思うんだけど、どうかな？

茶々丸のメンテと新装備のこともあるし。」

「そうか、ならば今夜は使用人に言って少し豪華な食事にしてもらおう。」

「お願いね、私は超と葉加瀬に茶々丸のメンテの準備をしてもらうから。」

後、千雨達にも もう一度連絡しないと。」

「うむ。」

そう言えば、千草がさつき探していたぞ？

オスティアの祭りを一緒に観に行きたいとか寝言を抜かしてたが。」

「うーん、夜までまだ少し時間があるから行ってもいいけど・・・  
千雨達が来るとなると明日にした方がいいかな、皆で明日一緒に回  
ろうか？」

「わかった、今夜はともかく

明日以降も千雨と茶々丸はぼーやおもりがあるから無理だろう。

私達は祭りを楽しませてもらうとするか。」

「そう言えば、チャチャゼロは？」

ラトナとピュラも今日は姿を見ないけど・・・。」

「・・・あのバカ供は放っておけ。」

「何かあったの？」

「街中で行なわれている賭け試合に出ると言い出したから好きにさ  
せた。」

「・・・チャチャゼロは本当にそう言うの好きだよな。」

「夜までには帰ると言っていたから問題はないだろう。」

・  
チャチャゼロとラトナとピュラがあの娘達だけで街中に行くのか・・・

一体どうなることやら。

side ラトナ、ピュラ

「ハツハツハ！ ナンダ？

コノテイドデオワリカ？

サツキハ ニンギョウガドウコウ イセイノイイコトヲ イツテイ  
タガ、

ソノニンギョウフゼイニ ヤラレテチャセワネーナ！」

チャチャゼロ姉さんの対戦相手は既にボロボロになって気を失っている。

姉さんは刃引きしたナイフを使っているので

致命傷にはなっていないようですし、放置しておいても問題ないでしょう。



「「チャチャゼ口姉さん、流石です。」」

「オウ、イモウトタチヨ コレガコシユジンノ

ジユウシャタルモノノ タタカイカタダ！

テキハテツテイテキニ タタキツブシ キョウフノ ドンゾコニツ  
キオトスنداゾ。」

「「はい、とても勉強になります。」

私達もソプラノ様の名に恥じないように敵を叩き潰して

恐怖のどん底に突き落とします。」」

「ヨシ、ジャアツギハ オマエタチガヤツテミロ。

ホラ、ツギノチヨウセンシャハ イナイノカ？」

後に語られることになるが、

オスティア終戦記念祭に不意に現れた殺戮人形姉妹による

この日、限定で、オスティア市街地で行なわれた

賭け野試合 全滅の幕開けであった。

side ソプラノ

・・・？ あ、野試合で思い出したが

ラカンさんから拳闘大会の招待を受けていたんだった。

ちょうどいいのでエヴァに話をしておこうか。

「あ、そうだ！

エヴァ、ネギ先生達が出る拳闘大会だけど

一緒に観に行かない？

この間ラカンさんが来てVIP席のチケットを何枚かくれたんだ。

千草や超、葉加瀬も一緒に行っても十分な枚数があるよ。」

「ほう、だが見に行ったところでばーやが優勝して終わりだろう？

闇の魔法を使うとこまで行くかどうかも怪しいものだ。」

「それが、ラカンさんが出るらしいんだよ。」

ネギ先生の修行の成果を見るとか何とかで。」

「・・・なかなか面白そうだな、それならば見に行くか。」

「じゃあ千草達にお弁当作ってもらって超と葉加瀬も誘って皆で行こう。」

「いや・・・お弁当はいらないんじゃないか・・・」

この後、千草と超、葉加瀬にも連絡して、

拳闘大会見学の確認を取ったり茶々丸のメンテの用意をしてもらいながら、

私達は千雨と茶々丸の到着を待った。

「いや、だから私達は他の用事があるから行けないんだって・・・

再開のパーティーはお前たちだけでやってていいから。」

「そんな事言わないで千雨ちゃん達も一緒に食べていじごよ。

ネギ先生のおごりなんだから食べ放題だよ?」

「・・・え? ハルナさん・・・皆の分僕が出すんですか?」 1

11

「こつこつ時は先生が出すもんでしょ?

ね? みんなもそう思うよね?」

「こつこつこつこつ!」「こつこつこつこつ」

ネギ先生は宮崎達を救出し、早乙女達と合流して皆で戻ってきた・・・  
が

早乙女が皆で合流できたお祝いに、

パーティーをやるうと言い出し、私達もそれに巻き込まれつつあった。

「・・・あゝ もう!」

だから私達は先約があるんだからお前達だけで食ってるよ！

ほら！ 茶々丸行くぞ！

あんまり待たせると何言われるかわかったもんじゃないからな。」

「はい。では皆さん失礼します。」

「ちえ〜、しょうがないな。」

じゃあ、ネギ君！ 私達は村上さん達と合流してパーティーだよ！」

「・・・はあ、分かりました。」

ああ・・・賞金が有るとは言え、できるだけお金は貯めておきたいのに・・・」 1111

私達はネギ先生達と別れて、

先輩達の待つクルトさんの家に向かって走って移動する・・・が

なぜか余計な物が着いてきている。

「おっさん・・・どういっつもりだ？」

ネギ先生達と飯でも食ってこいよ。」

「ああ、どうせアイツらあの様子なら夜通し騒ぎまくるだろうから後でアツチにも顔を出さず。」

「じゃあ、何で付いてくるんだよ？」

「千雨達はソプラノの嬢ちゃん達のとこに行くんだろ？」

「ぼーず達が皆と合流できたように、」

「お前達も合流できたんだから今日は皆で飯を食おう、ってな感じじゃねーか？」

「……なんでおっさんはそういうとこばっかり勘がいいんだ？」

「伊達に千の刃を名乗ってねーぜ！」

「二つ名と食事への嗅覚は、あまり関係有りませんね。」

「まあ、いいや。」

「先輩に追い返されたらおとなしく帰れよ。」

「なあゝに、もう代金は渡してあるから」

「追い返されることはねーよ。」

事前にソプラノ達に渡された、拳闘大会のVIP席チケット。

コレが偶然なのか計算なのかは分からないが、

この日のクルト邸で行なわれた夕食会の席には

ジャック・ラカンの姿もあった。

神様から頼まれたお仕事。

その63（後書き）

63話目 投稿



神様から頼まれたお仕事。 その64

新オスティア クルト別邸

「お、見て見て！

あの隅っこの方にクルトがいるよ。」

「なんだ、脇役みたいだな。」

「この祭では脇役でしょう、メインはMMの議員とヘラス帝国の皇族でしょうし。」

私達は今、オスティアのクルト別邸で

記念式典の映像を見ながらお茶を楽しんでいる。

式典では、20年前の大戦で、敵国同士だった

MMとヘラス帝国の代表がお互いに握手をし、

大戦の終結と、今後の友好関係を誓い、

魔法世界の平和を願う宣誓をしている。

先日、千雨や茶々丸、それに勝手についできたラカンさんを招いて、夕映達がいらないが、久しぶりに皆で夕食会をして楽しんだが彼女達は今後の予定もあるため、その後宿へ戻っていった。

結局昨日もクルトは昨晚も帰って来なかったが、かなり忙しいようだ。

式典の映像で確認する限り、少し疲れが見えるような気がした。

「クルトは忙しいみたいだね。」

「まあ、しょうがないだろう。」

祭りの警備や行事に合わせて

裏でMMから特別に呼んだ兵の兵站等もあるんだ。

それに今年は祭りは20周年なんだろう？

文字通り寝てる暇もないだろうな。」

「せめて、祭りが20周年と言うのとネギ坊主の件がなければ寝る時間くらいは取れたかも知れないかもネ。」

「お祭り、ネギ先生関係、完全なる世界への警戒、一気に重なりましたからね。」

私も研究の修羅場で何日か徹夜したことはありますから少し気持ちがわかります。」

「クルトはんって偉い人やったんですね、日頃の様子からだちょっと想像できまへんわ。」

「ちよつとエヴァ特製の栄養剤でも届けてあげようか？拳闘大会のVIP席で会えるかも知れないし。」

「まあ、持って行ってやるのは構わんが・・・」

「アレは効果が強いから飲んだら逆に1週間は眠れんぞ？」

「まあ、いいんじゃないか？」

「下手に疲れが出て変なミスをするよりよっぽどいいと思うシ。」

「クルトなら大丈夫だよ。」

「クルトだしな。」

「……ソプラノさんもエヴァンジェリンさんも、

お二人とも……クルトさんがどうなっても良いって感じで考えて  
いませんか？」

「そんな事思ってないよ？ 葉加瀬。

それくらいのこと潰れるような子じゃないし、

これくらいのごことは何度も経験してるから大丈夫、と言っ意味だよ。

「はぁ……クルトさんも結構大変な人生を送ってるんですね。」

「なに、祭りの後で潰れても別の薬で回復させてやるから大丈夫だ。」

「徹底的に こき使っつもりなんですわ……」 1111

「それよりも、拳闘大会の予選は観に行かなくてもいいの力？」

ネギ坊主達は出てるんだ口？」

「予選で落ちるような子達じゃないから大丈夫じゃない？」

それよりも今日はお祭りを楽しもうよ。」

「……………そもそも姉様が寝坊するから

私達はこんな時間にこんなトコで映像などを見る羽目になったんだが？」

「エヴァも一緒に寝てたじゃない！」

私だけのせいじゃないよ！」

「ウチはちゃんと起こしに行きましたえ？」

扉に結界が張ってあって開けられませんでしたけど。」

「そんな事が出来るのはエヴァしかいないじゃない！」

どうせ外が五月蠅いからってエヴァが部屋に結界張ったんでしょ？」

「し、しょうがないだろ！」

祭りの期間中だか知らんが夜中まで馬鹿騒ぎしてる馬鹿共のせいだ

うるさくて集中できないから ちよつと軽く……………」

「ウチも解こうとしましたがどこかなり固い結界でびくともしまへんでした。」

「……………」

「……………わ、私は悪くないぞ！」 1111

「集中できなかったってどういうことかな？」

二人は部屋でナニをしてたのかな？」 #

「え？ 部屋で二人でって……あわわ。」 // /

「人の家やからウチも我慢してましたけど……」

エヴァはんは抜け駆けしはったんですか。」 #

これは不味い……下手したら私にも飛び火が来る。

エヴァに皆の目が言ってる間に……

「……………」

「田さん どう行きますの？」

「ビクツ！？」 い、いや……時間もないし、祭りに良く準備をしようかな……と。」 1111

「……………たしかにそうだね。」

時間もないし、お祭りに行く準備をしないとネ。」

「そ、そうだぞ！ 各自部屋に戻って着替えて玄関に集合だ！」  
1111

「では、準備をします……」

あ、エヴァはんは祭りの期間中、今後 夜は一人で寝てください。」

「な、なんでそうなるんだ!!」

「抜け駆けした罰に決まってるヨ。」

「超、お前は関係ないじゃないか!」

「確かに、今は関係ないかも知れないネ。」

だけど旅先でのお祭りの夜……なかなかいい雰囲気ネ……」

「お、おい……まさかお前……」 1111

「え……ちや超さん……」 // /

「超はんはええこと言いますな、旅先の夜ですか。」 // /

「超は流石にまだそういう行為は不味いんじゃないかな……?」

別荘での時間を考えても年齢的に……ね?」

「ソプラノはロリコンだから問題ないんじゃないカ?」

「ちょ、待って、その不名誉な称号は流石に 「エヴァに手を出し  
といて

違っつて言うのはどうかと思うヨ?」 ……グググ……」

「おい！ 姉様何でそこで言葉につまるんだ！」

「……だって……しょうがないですよね？」

「しょうがありませんな。」

「鏡を見てくるネ。」

「くっ……。」

クソう……解つては……解つてはいたんだ……

でも、認めたくは無かったんだ……

この日、私とエヴァは久しぶりに本気で泣いた。

結局、超達に正面から現実を突きつけられた私とエヴァは

彼女達の言い分を呑まざるを得ない状況に追い込まれ、

祭りの期間中、私とエヴァは二人っきりで寝ることは許されないとになった。



さて、着替えて認識阻害の魔法をかけてもらい、皆でお祭りに出かける。

エヴァは何かを忘れるように祭りを楽しみ、

私はそんなエヴァと一緒にになって様々な屋台でやけ食いをしていた。

そんな私達を見つめる千草、超、葉加瀬の生温かい視線が心に刺さったが、

既に私は守るべき名誉も誇りも失った身・・・

今の私に怖いものなど あまり無い。

数時間もするとエヴァも落ち着いてきたようで

エヴァなりに落ち着いて祭りを楽しめるようになり、

一旦休憩のため、皆でオープンカフェでお茶をすることにした。

「ん？ 何か張り詰めた空気がすると思っただら……」

「アレはぼーや達じゃないか？」

「え？ どこ……つて本当だ。」

ネギ先生と神楽坂さんに刹那さん、ネギ先生と一緒に席に座ってるのは……

「アーウェルンクスかな？」

「アレは確かにフェイトはんですね、」

「なんや、えろつ陰悪な雰囲気やね。」

「あの二人何かあったの力？」

「京都やゲートの件は知ってるけど」

「ネギ坊主があそこまで敵意むき出しにするなんて珍しいネ。」

「なにか話をしているようですけど？」

「とりあえずエヴァはバレないように障壁の準備と」

「アーウェルンクスが何か仕込んでないかチェックしてみて。」

「もうやってる。」

「……何か強力な魔法具を持っているようだな……」

内容まではわからんがかなりの代物だろう。」

「超、葉加瀬、アーティファクトをいつでも出せるようにしておいて。」

ラトナ、ピュラは葉加瀬を護衛して。

千草は私から離れないでね。

チャチャゼロは……エヴァの指示で動けばいいか。

最悪、エヴァの障壁を抜かれるようなことがあったら私が楯を使う。

皆に怪我をさせるような事にはならないから安心して、葉加瀬。」

「了解ネ。」 「は、はい。」 「はいな。」 「かしこまりました。」

「ヨシ、アノガキヲキリキザモウゼ」 「……じっとしてる。」  
「……ツチ。」

さて、予定外にこの場面に出くわしてしまったけど……

ここはおとなしく見ておいたほうがいいかな。

ネギ先生達の話は進行しているようで……あ、ネギ先生がテールを蹴り上げた。

「超、発信機の状況今調べられる?」

「ラトナ、ピユラどうかナ?」

「お待ちください……すぐ近くに千雨さんがいるようです。」

その他にも数名、こちらに向かってきています。」

「どうするんだ姉様?」

「っそ私達であの白髪の子捕まえてみるか?」

「もう少し様子を見ようか……こんな正面から出てきて彼だけとは思えない。」

「そうか……まあ、それがいいのかもな……」

「……? エヴァはんらしくありまへんな。」

「エヴァならあの白髪の子捕まえて拷問位やるかと思ったヨ。」

「お前達は私を何だと思ってるんだ……」

そんな目立つことするか。

そんな事ばかりしてたら 今頃こうして私と姉様が生きてるはずないだろう。」

「あゝ確かにそうかもネ。」

ドーン

遠くの方から爆発音が聞こえてくる。

「少し離れた所でなにか動きがあるようだな。」

「そうだね・・・あ、神楽坂さんが・・・。」

ネギ先生たちの方も動きがあったようで、

神楽坂さんがネギ先生とアーウェルンクスをハリセンで叩き、

ネギ先生になにやら説教をして、

ハリセンを剣に変えてアーウェルンクスに突きつける。

その後、幾つか会話が交わされ、

とうとうネギ先生達とアーウェルンクスとの戦闘が開始されてしまった。

アーウエルンクスが刹那さんに無詠唱で石の柱を打ち出したが  
刹那さんはそれを懐で切断し、アーティファクトの短刀で攻撃、  
それを回避しつつ後方に下がった

アーウエルンクスをネギ先生が追撃するが回避される。

その後アーウエルンクスが上空に飛び多数の巨大な石柱を魔法で出  
現させるが

射出の妨害のためにネギ先生も上空に飛んでいった。

「ほう、アレだけの期間でアレだけ闇の魔法を使いこなせるとは、  
ぼーやはやはり才能があつたな。」

「刹那サンも腕を上げたようだね」

もう私じゃ接近戦では勝ち目がまるでないヨ。」

「でも、超さんはアーティファクト使えば無敵ですよ！」

「そうでもないヨ、実際学園長には攻撃をしのがれ続けたからね。

まあ……今のバージョンアップした私の装備ならか勝つ自信が

あるけどネ。」

「せやけど・・・あの石の柱、このまま落ちてくるんちゃいます?」

「まあ、大丈夫じゃないか?」

神楽坂が何かするようだぞ?」

神楽坂さんは大剣を構え 咸卦法の出力を上げていき

一気に剣を振り抜く。

するとその方向にあった石柱の一本が消滅していった。

「は〜・・・あんな事出来るんやね〜、あの娘。」

「魔法無効化能力をある程度使いこなすことが出来るようになった  
みたいだな。」

「エヴァにとっては天敵になるかもね〜。」

「ふん、あの程度の剣術なら魔法を無効化されても問題ない。

それに我が従者の一人、葉加瀬なら使用武器は実体弾だからな、

逆に蜂の巣だ。」

「何時から私がエヴァンジェリンさんの従者になったんですか・・・

「

「姉様の従者なら私の従者でもある、

それに訓練も私がつけてやったのだから私の弟子だ、何も問題はな  
い。」

「まったく……………」

side 千雨

「ふう、さっきの全方位攻撃はまずかったけど、早乙女の楯があっ  
てよかったな。」

「め、目がまわるう……………」

「あいたた…………皆大丈夫ですか？」

ネギ先生の目の前に白髪の子供が現れ、

私は救援でラカンのおっさんや他の戦闘出来るメンバーを呼ぶが



宮崎と早乙女が間に合ったものの

おっさんが到着する前に敵と思われる角の生えた女に襲われ、

早乙女のアーティファクトで呼び出した乗り物を宮崎が操作をして逃げる途中、

敵の全方位攻撃を受け、なんとか私の障壁と早乙女の楯で攻撃自体は防御できたが

墜落して、今に至る。

さて、敵のアーティファクトを見る限り

音を使った攻撃の速さと威力はすごいが、

狙って撃つまでの間が長いので私一人なら問題ないし

倒そうと思えば倒せるんだが……

白髪のカギがいるから目立つわけにもいかないし、どうするか……

「今の攻撃が効きませんか……

ですが私もその読心術の少女は逃がすわけにはまいりません。

フェイト様の為、ここは私の命に変えてもその読心術の少女だけは

「ここで倒して行きます!」

逃げる途中で宮崎が詠んだ敵の名前、ブリジットとかいったか。

その女が私達に攻撃をしようとバイオリンを構えた瞬間、

横から犬上が現れて、ブリジットのバイオリンの弓をへし折った。

すぐにブリジットは距離を取り、新しい弓をよびだす。

「犬上か、ちょうどいいところに来たな。」

「「コタロー君!」!」

「・・・なんとか間に合ったで。」

それにしても、千雨の姉ちゃん何やってんや?

姉ちゃんならこの女くらいなら倒せるやろ?」

「ば、馬鹿! 私の名前を出すな!」

白髪のがきが近くにいらんだぞ!」

せっかく認識阻害の魔法で子供の姿に化けてるのに

私のことがバレたら白髪のがきがこっちに来かねない。

「あゝそうやったな、姉ちゃんフェイトに・・・

まあ、せやったらここは俺にまかせとけや。

ダチに手え出した落とし前、つけさせてもらうで。」

「あなたは・・・犬上小太郎ですね。

フェイト様からキョウトでのおはなしは伺っています。

ヘルマン伯爵の任務も血迷って邪魔されたようですね？

任務自体は成功だったようですが・・・」

「ああん？」

「貴方については、実力もないくせに口だけは一人前、

感情的で直情傾向、やはり子供は使いにくい・・・と。」

「てめえ・・・ぶん殴りたいんか!!」

・・・さて、犬上がマジで頭に着てるのか、演技か・・・

どちらにしても時間は稼いでくれそうだから、

宮崎達を連れて逃げるか？

私一人じゃ、二人はキツイか・・・

「お相手しますよ、子犬さん」

「上等!!」

犬上は見た感じ、7体近くの分身を出していつせいにブリジットに襲いかかる。

ブリジットの方も体術はそれなりに出来るようで、

バイオリンの攻撃と合わせてうまく躲している。

そんな時、私のすぐ横に黒い子犬が一匹近寄ってくる。

「・・・そういうことか、頼んだぞ犬上。」

「ワン!」

戦闘の方は犬上（分身）がうまく押しているようで

ブリジットの背後に周りこみ殴りかかろうとするが、

足元からイキナリ鳶のような物が生えてきて、

背後に回っていた犬上を拘束する。

「私の攻撃手段をアーティファクトだけと思ったなら愚かですね。

やはり子供は子供。」

あの女、植物も使うのか・・・なら地上での戦闘は避けたほうがいいな。

「何やコレッ!？」

木の根が絡みついて・・・」

「私の種族の固有能力です。

さて、このまま締め潰してしまうのも悪くはないのですが・・・」

「ぐあああ・・・・・・なーんてな」

犬上（分身） はやられたふりをしているようだ。

油断していたブリジットのさらに背後に回っていた分身で

ブリジットのスカートを捲り上げる。

すぐさまソレに反応して、ブリジットも攻撃を仕掛けるが、分身が消滅しただけに終わる。

私の近くにいた子犬の方も準備ができたようで、

足元の影が広がり、私と宮崎早乙女が影に飲み込まれていく。

「キヤー！」 「ななな、なんだこれ!？」

「間に合ったか？」

「ああ。」

じゃあな、木の姉ちゃん。

女殴る趣味はないんで俺達はこのまま逃げさせてもらうぞ。

・・・ほなな。」

「くっ・・・!!！」

ブリジットは私達に攻撃をしようとしていたが、

その前に影に飲み込まれて、無事逃げることに成功する。

「ふう、なんとか皆無事に逃げられたな。」

「千雨の姉ちゃんが本気でやってくれたら

俺もあんな面倒なことせんですんだんやで？」

「私だってあの女だけだったらそうするよ・・・

だけど白髪のがきが居たから私も元の姿になったり

魔法を使うわけにもいかなかったんだよ。

下手に私が狙われてみる？

宮崎や早乙女を守り切るなんて不可能だぞ？」

「まあ、そういう事ならしゃあないか・・・

ほんで？ これからどうする？」

「あ、あのー！」

「何だ宮崎、どうした？」

「わ、私をあの白髪の少年の所につれてってくれませんか？」

「・・・いやだ。」

「え、千雨ちゃんそれはないんじゃない？」

「絶対嫌だ！ 私はアイツに目をつけられてるんだぞ！」

今度アイツにあつたら前回みたいに油断を誘って

なんとか硬直状態に持ち込むなんて無理だ！！

それに他にもアイツの仲間がいるんだから今度こそやられるだろ！」

「あ、あの千雨さんには別の事をお願いしたいんです。

移動の方はコタロー君にお願いしたいんです。」

「あ？ 俺か？」

「はい、コタロー君のさっきの影の転移だったら不意をつけると思  
うんです。」

まずは近くまで転移して様子を見てから

白髪の少年のすぐ側に転移してください、

それから私がアーティファクトで彼の名前と思考を読みますから

その後、すぐに何回か転移して逃げ出すんです。」

「へへっ・・・なかなかおもしろそうやな。」



「今後の対策のためにも、

このチャンスで彼らの作戦などを知っておくとかなり有効だと思うんです。」

「そういう事なら・・・。」

「あの・・・それと、できたら千雨さんにも一緒に来て欲しいんですけど・・・。」

「やっぱりそうじゃねーか！ 嫌だ！」

「あの、千雨さんが例の麻痺する魔法で白髪の少年の動きを

止めてくれたら確実に思考を読むまで出来るんです！

お願いします！！！」

「・・・宮崎・・・ゲートで私があのかきに

目をつけられてるのを知った上で言ってるんだろっな？」

「・・・はい、千雨さんに危険なことをお願いしてるのは分かっています・・・。」

でも、ここで彼らの目的を知っておけば、

皆で一緒に帰れる確率も上がるんです！

お願いします！！！」

「……………つち。」

面倒なことになったな……私としてはあのガキとは二度と会いたくないし

会うとしても側に先輩かエヴァが居る状態がいいんだが……

宮崎か……ふむ、こいつに貸しを作っておくのは……使えるか？

「……………しょうがねーな……いいかこれは貸しだからな。」

後で私が何を頼んでも聞いてもらおうぞ？

「は、はい！ 私で出来ることなら！」

「なぐに……千雨ちゃん、のどかに変なこと頼むつもりじゃないでしょうね？」

「別に変なことは頼まねーよ……ただちょっと私の知りたいことを調べるのに

最悪、宮崎のアーティファクトがあれば知ることが出来るからな……

「・

「あまり変な事で無いならいつでも言ってくれば協力します。」

「あぁ……………」

ただどこの手段は……きつと先輩を裏切ることになる……

自分の好きな人の心を強制的に覗く……か。

この手を使ったら私は最低の女だな。

少し早まったかも……使えとなれば どうしても使いたくな  
つちまう。

さて、どうしたもんかな……

神様から頼まれたお仕事。

その64（後書き）

64話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その65

新オスティア 市街地

side 千雨

私達は白髪のカキの仲間を追われて、

なんとか犬上の機転で逃亡に成功したものの、

宮崎が白髪のカキの思考をアーティファクトで読みたいと言い出したため

交渉の結果、私も協力することになってしまった。

「ほんなら千雨の姉ちゃん、

時間もないし、すぐにでも出発してええんか？」

「待ってくれ、転移の前に私も闇の魔法を準備していく。

後、早乙女は騒ぎが収まるまでどこかに身を隠してろ。」

「りょーかい、私はこの先は足手まといになりそうだしね、  
そうさせてもらおうわ。」

早乙女に指示だけした後、

私はアーティファクトを出し、雷の暴風を取り込んで

麻痺の射手はいつでも出せるように魔力を集中し待機させておく。

「よし、いいぞ犬上。」

まずは少し離れた所に転移して様子を見てから

隙をつく形で近くに転移、私が白髪のがきを攻撃して麻痺させるの  
と同時に

宮崎が名前と思考を読む、その後何回か複数転移して攪乱しながら  
逃亡。

あのがき相手だと硬直時間はそんなに期待できないから

宮崎の本の内容なんか確認せずにすぐに逃げる。

これでいいか？」

「ええで。」

「はい、ごつちもそれでOKです。」

「……はあ、しょうがない、行くか。」

「はな、いくで！」

犬上は私と宮崎の肩に手を当て、影での転移を開始する。

最初に私達が出たところは先生達がさっきまで居たオープンカフェから

一本路地を入った場所、そこから少し移動し、野次馬に紛れて様子を覗くと

先生と白髪のがきが川の上に立って格闘戦を繰り広げている。

かなり激しい戦闘のようで、白髪のがきが出した石柱や岩がそこら中に刺さっている。

「アイツらは忍者かなんかかよ……何で水の上に立ってるんだ……

犬上、白髪のがきの隙をみていつでも転移できるようにしておけよ。

「

「ああ・・・お!? ヤバイ、ネギが吹き飛ばされて闇の魔法が解けてみたいやで!」

「せ、先生!」

「静かにしてろ気づかれるだろ!

丁度いい、今あのガキは先生に集中してるし、

石柱がいい感じに視界を塞いでくれる、行くぞ、犬上。」

「ああ、準備はええな・・・行くで!」

私達は白髪のがキが出した石柱の脇に転移し、

すぐさま攻撃に移る。

「失望させないでくれ・・・その程度ではないハズだろう?」

全てはここからだ・・・っ!??」

「遅え!」

「なっ!??」



私はアーティファクトの杖の先端に収束させた麻痺の射手30本を  
白髪のカギの障壁につけ発射と同時にカートリッジを1発打ち込んで  
障壁を貫通して麻痺の射手を叩き込む。

「…………グツ…………ガア…………!？」

「我、汝の真名を問う!」

「くっ…………コタロー君にのどかさん! 千雨さんまで!」

障壁を抜いたことで接近できた私は続けざまに

白髪のカギの手足と脊髄の位置に麻痺の射手を打ち込んでいく。

レジストされる速度より私が打ち込んでいく速度のほうがやや勝っ  
ているようだ

徐々にはあるが白髪のカギに刺さった麻痺の射手が増えていく。

「クソ、時間がねえ! 宮崎早くしろ!」

「は、はい! え〜っと…………Tertium…………テルティウ  
ムさん!」

あなたの目的は何ですか!？」

「よっしゃ! フェイト、俺らを舐めすぎたようやな!

ネギ、今の内に逃げとけよ! ほな、行くで!！」

犬上は私達を抱えて影で転移を開始、次々と場所を変え転移していき  
17箇所目で転移を終了し、宮崎のアーティファクトの確認をする。

「どや!？」

「はい、大丈夫です。」

無事思考を読めたようです!」

「よっしゃ、大収穫や!

俺は戻ってネギの脱出の手伝いに行くから

姉ちゃん達はどこかに隠れとけや。」

「ああ、ほら宮崎行くぞ。」

「待ってください、私もアーティファクトで援護を!」

「何！？ アカン！」

せっかく思考を読んだのに今姉ちゃんがやられてもったら

無駄になってまうやる！

もう、十分……。「やはり君達は危険な存在だったようだね。」  
「まずっ!？」

声の方を見ると、あの白髪のがきが既に魔法の詠唱を完了した状態で  
コチラに向けて攻撃準備に入っている。

「どきい!!！」

「あっ!？」 「ちっ!!！」

犬上が宮崎を突き飛ばし、私は突き飛ばされた宮崎をかばうように  
前に出て

魔法障壁を全力展開する。

「石化の邪眼……」

白髪のがきの石化魔法に防御が間に合わなかったようで

犬上は右手と右足、あと身体を少し石化させてしまった。

「コタツ・・・!?」

「ヴィ・シユタル・リ・・・」させるかよ!」・・・むっ!

私は白髪のカギの詠唱を妨害するために

アーティファクトの杖での接近戦を開始。

エヴァにそれなりに槍術は仕込まれてるし

前回と違って、雷の暴風を取り込んだ、私の最速状態だが

白髪にガキにはそれほど通用せず、お互い有効打を当てられずに硬直状態に持ち込むのがやっとだった。

「くっ・・・そっ!

マジかよっ。」

「それは・・・こっちの台詞だよ・・・っ!

まさか近接戦で、素手と武器有りとは言え、

「……僕が……ここまで手が出ないとはね。」

少しでも隙があれば、麻痺の射手を取り込んで

私が素手で触るかすれば隙を作れるが……やらせて貰えそうにない。

「あゝっ……クソッ！」

魔力はともかく……体力と集中力がもたねー！」

「ふむ……前回と違って、君に触れても……あの麻痺硬直は……っ　なさそうだね。」

「……あ、まずっ！？」　　1111

私の集中力が切れ始めた所で、

白髪のがきに懐に入られてしまい、杖を手放してしまう。

すぐに瞬動で距離を取ろうとしたが、

ガキの方も私と全く離れずに付いてくる。

「てめっ！　離れる……って！」

「それは・・・断らせてもらつよ・・・」

君に時間を与えたら・・・何をされるか分からない・・・

ある意味、君は今のネギ君より性質が悪い・・・このまま押し切らせてもらう。」

素手の近接戦では私に勝ち目は殆ど無さそうだ・・・

おっさんに修行を見てもらわなかったら

既に終わっていきそうだが、それでもこれ以上もちそうにもない。

「しかし、僕と同じ防御重視の戦い方か・・・もう少し君が攻めてくれれば

もっと早く決着がつきそうなのに・・・」

「・・・あゝ！マジでやりにくい!!」

「そろそろ、終わりにしよう・・・ヴィ・シュタル・リ・シュタル・ヴァンゲイト・・・」

「・・・っ!?!」

私は攻撃を捌くのに精一杯だが、白髪のカキの方はまだ余裕がある

ようで

攻撃しながら詠唱を開始、この近距離で例の石化魔法を食らったら私にはレジストできそうにない。

「・・・災なる眼差しで射よ。石化の・・・」ちっ、ここまでか!?」　っ!?」　ゴツ!!」

白髪のがきの石化魔法が放たれる直前、

上空から何かが降ってきてがきの腕を私の方向から逸らした。

私はその最後のチャンスを見逃さずに、

白髪のがきを蹴り飛ばし、急いで麻痺の射手を追加で2本取り込む。

「みなさん！　大丈夫ですかっ!?!」

「っ・・・先生か?」

「はい！　ネギ先生。」

「遅いで！　ネギッ!?!」

再度アーティファクトを召喚しなおし、戦闘体制を整え確認したと

ころ、

上から降ってきたのは、ネギ先生だったようだ。

これでさっきよりはマシな状態になった。

「……君か、よく転移魔法もなしに 追ってこれたね……」

ああ、そうか、君は天才だったね、特に基礎魔法の。」

「そんな事はどうでもいい、フエイト。」

この人達……この人には指一本触れさせない。」

「えっ!? ネギ先生と千雨さん、そんな関係だったんですか!?!」

「……」

「アホかつ! どう考えてもお前のことだろうが!?!」

「「「……」」」

「あ、あう……」 / / /

「ネギ!?!」



宮崎がポケをカマしていると、

白髪のカギの頭上から剣を振り下ろしながら神楽坂が援軍に参加してきた。

「神楽坂明日菜か・・・」

「アスナさん！」

「安心して ネギッ！」

町の人達は無事よ！

あの柱は私が全部消しといたわ

この、私があつ！！」

「・・・は、はい。」

神楽坂のポケが関係あるかどうか分からないが・・・

更に上空から大量の剣が降ってきて、

そのすぐ後に近衛を抱いたラカンのおっさんが降ってきた・・・

この街はポケをカマすと味方が降ってくるんだろうか？

とにかく、この場で心強い人が来てくれた。

「おいーース、俺も混ぜろや。」

「ラカンさん！」 「このか！」

「ウロチヨロしてんじゃねーよ おめえら、探しちまったぜ。

さあて、いつちよやるか……ん？

……てめえは。」

「なるほど……新世界最強の傭兵剣士に成長著しい英雄の息子・

それに謎の眼鏡の娘に新旧両世界のお姫様とは……さすがに分が悪い。」

「俺のことは無視かい！」

「君は早々にリタイヤじゃないか。」

「ぐぬぬぬ……」 #

「私の事は無視してもらって構わないぞ？」

「いや、意味にはもう2度も邪魔されているからね。

僕達としても、僕個人としても君は要注意人物だよ……長谷川千

雨さん。」

「……げっ、もう名前がバレてるのか。」

「……」

「では、ネギ君、」

今日の所はこれで引かせてもらおうよ。

次を楽しみにしている。」

「フェイト待ッ……」「口より手だぼーず。」

「……え。」

ラカンのおっさんが大剣を白髪のカキに向かって放り投げるが

向こうの転移のほうが速いようで、逃げられてしまった。

「チッ……逃がしたか、」

「お、終わったん？」

みんな無事でよかったわー。」

「おーい、このか姉ちゃん、無事ちゃうでー。」

「……」

「ハイイ、コタ君、今、治したげるなー。」

近衛は犬上の石化の治療を開始。

何はともあれ、宮崎の案に乗ったばかりにかなり危ない目にあっただが

私も含めて、皆無事（？）でよかった。

宮崎がネギ先生に先程の無茶の件で怒られているが、

まあ、先生の説教くらいは食らってもいいだろう。

「どうかしましたか？ ラカンさん・・・」

「ん？・・・あのフェイトとか言うガキな・・・」

遠い昔にあったことがある。

俺の記憶が正しければ、思っていたよりも厄介な相手だ。」

「・・・」

「フェイトと本気で戦い合っつもりなら時間はねえが・・・」

アレを完成させる必要があるな。」

「フェイトについてラカンさんが知っているコト・・・」

全部話していただけですか？」

「5000万」

「払えません!!」

「過去話はやめよーぜー、なげーし、女でねーし。」

「ラカンさんっ!!」

「ハイ、ハイ、んなコトより 撤収だ 撤収!

そー言えば、ウチらお尋ね者やったな。」

「お、もう来たで!!」

「各員散開!!」

各個に逃げろ、ぼーず 千雨、囀り頼むぜ?」

「え、あ、ハイ!!」

「ちよ、何で私までなんだよ!!」

「千雨だったら余裕で逃げ切れるだろ?」

俺達は荷物抱えてだから手間なんだよ。」

「おっさんなら楽勝だろうが!

それにこの街なら捕まっても、そうひどいことにはならねーから

「困なんかいらねーじゃねーか！」

「手配のことがなくても、あれだけ騒げば器物破損位は食らうだろ？」

「俺は罰金なんか払いたくねーんだよ。」

「なんて勝手な・・・」

「ま、まあまあ、千雨さん・・・僕達も今は1ドラクマでも必要ですし」

「拳闘大会を出場禁止にされても困りますし、ここはお願いします。」

「うち・・・なんで私が・・・ブツブツ。」

「私達はこの騒ぎで捕まったり罰金、拳闘大会の件などで」

「文句がつかない為にこの場から急いで逃げることにした。」

私はコレットとペアでオスティア終戦記念祭の警備をやっています  
が……

忙しすぎるでしょう……これは。

次から次へと通報が来ますがキリがないです。

それにこの鎧、暑いし動きにくいし視界が邪魔だし……

いっそソプラノとの仮契約のアーティファクト装備の方がマシです。

「あゝ、またです！」

コレット、今度はあの闘技場の方で騒ぎとの通報です。「

「もうっ！ 何で騒ぎの場所がアチコチ移動するのーっ!？」

「む……なにか来るです、コレット障壁展開!！」

先ほど通報があつた方角から何か二人の人影が

高速でこっちに向かって飛んできます。

私がコレットに警戒をするよう伝えるが

向こうの速度がかなり早くあっという間に接近される。

「くっ！ 相手が速いし、剣が重い！

邪魔です！！」

私は剣を急接近する相手のほうに放り投げ、

指輪の魔法触媒で魔法の射手を15本程ちらして撃つ。

「・・・っ!?!」

「お?・・・警備にしては反応いいな。」

「!!!」 「!?!」 「!!!」

「ま、待つです！ そのアナタ！」

対象の小さい人影の方は虚空瞬動で移動後、私の箒の上に立つが・・・

この人って・・・先生?

「空中ジャンプ・・・虚空瞬動!?!」



「夕映さん！？ 夕映さんなんですか！？」

「は？ 先生？」

「おいおい・・・先輩に聞いてはいたが・・・こんな下」で・・・

もう一人の方は・・・千雨さん？

何でこんなところで・・・

「ユエ！わかったよ！

そいつは賞金首の犯罪者だよ！

この国では重要参考人だけど、他国では立派な凶悪犯罪者だよ！

可愛らしい外見にだまされちゃダメだよ！

どうせ一緒の女の人も悪い人に決まっています！

目付きがかなり悪いですから、ろくな女じゃないですー！」

「・・・コレット・・・」 1111

「・・・この女・・・いい根性してるな？」 #

（あ・・・もう、コレットの馬鹿娘・・・

千雨さんを怒らせたなら私でも止められないですよ……（ 1111

「その少年に目付きの悪い女っ！

おとなしく観念なさい！

すぐに応援が来るわ、抵抗は無駄だよ！」

『おい、夕映！』

『は……千雨さん！ 何でこんな所で騒ぎなんか。』

『それはこっちの台詞だ。』

と、とにかく今は私達が知り合いだとばれると不味い。

私が軽く麻痺の射手を打つから適当に食らってくれ。』

『わ、わかったです。』

多少きつなくてもこの鎧には防御障壁と墜落防止装置があるので、

……でも痛くないようにお願いしますよ。』

『難しい注文を……』

あと、このバカ女はボコボコにしてもいいよな？」 #

『……できれば少しは加減をお願いするです……』

これでもルームメイトなので。』 1111

私と千雨さんが念話で話していると、

まずいことに委員長達が援護にやってきた。

「その重要な参考人！」

武器を捨てて降伏なさい！！」

『は、早くするです！』

「先生！とにかく今は逃げるのが先だ！」

今すぐそこから離れる！！」

「は……はいっ！」

先生が離れた所で千雨さんの方を確認すると……

アーティファクトまで出してる・・・私はともかく・・・コレットは酷い事になりそうですね。

「そのバカ女あ、落ちてろ!!」 #

「ひっ・・・!? き、キヤアアーーツ!?」 1111

千雨さんはそう叫ぶと私には数本の麻痺の射手と、

コレットにはその10倍位の麻痺の射手を打ち込んできた。

私は軽く回避する真似をして腕に1本くらいそのまま墜落。

だがコレットの方は一気に視界を埋める勢いで

千雨さんの麻痺の射手が飛んできたことで

軽いパニック状態になって障壁を展開することを忘れ、

鎧の防護機能だけで麻痺の射手を受けるがあっさり抜かれ

まるでハリネズミのように身体中に麻痺の射手 ( ? ) が刺さった状態で落ちて言った。

(・・・千雨さんも新しい魔法を開発したんですかね？

麻痺の射手が刺さったままになるなんて初めて見ましたけど・・・

コレット・・・大丈夫ですかね？)

その後、私は意識があつたので様子を見ていたが

無事に千雨さんと、ネギ先生は逃げ出せたようで、

皆で下に降りて治療を受けていると、

委員長が悔しかったのか騒いでいた。

「くっ・・・バカな!!」

子供と女一人に逃げられるとはっ!!」

「外見で判断はできません。

倍数の4人がかりで追い切れなかったのです。

相当な手練ですよ。」

「ユエさん、コレットさん、仇は必ず取りますよっっ!!?」

「私の仇はいいですが・・・コレットの方は・・・」  
1111

私はコレットの様子を確認するが・・・酷い。

麻痺の射手が刺さっているとは言え、

電気の塊みたいな物なので痺れはするが外傷は殆ど無い・・・のだが

・・・見た目が酷い。

流石にこのハリネズミ状態なんというか・・・見た目にはグロイ。

法的とは言え私と同年代の少女には少々きついものがある。

コレットのトラウマにならなければいいのですが・・・

・  
(今後・・・千雨さんを怒らせるとこいついつ日に会うんですね・・・  
私も気を付けないといけませんね。)

神様から頼まれたお仕事。

その65（後書き）

65話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その66

新オステイア クルト邸

先日、千雨や茶々丸、夕映からの連絡で、

ネギ先生達がアーウェルンクス一行と交戦し

なんとか撃退した事や、その逃亡中に夕映と鉢合わせた事

正式（？）にアーウェルンクス達と敵対関係になった事、

本屋ちゃんのアーティファクトでアーウェルンクス達の目的の判明や

ラカンさんから過去の戦争時の話を映画で見せられた事

等のさまざまな連絡を受け、それぞれに現状を伝えた。

その後、茶々丸だけに極秘で神楽坂さんが拐われた事を伝え

ネギ先生達や千雨には伝えないように連絡しておいた。



『しかし、理解できません。』

何故、神楽坂さんを拐われたことを秘密にして

代わりにしている彼女をそのまま野放しにする必要があるんですか？

「彼女にはネギ先生達をアーウエルクスやアーニヤちゃん、神楽坂さんの元へ

案内してもらおう役目をしてもらおうと思ってね。」

『今 詰問して隠れ家を吐かせるんじゃないでしょうか？』

それに彼女が素直に案内するとは思えませんが・・・』

「今はまだ時期じゃないんだよ。」

村上さん達は今だ奴隷のまま、そして旧オスティアのゲート探索

その辺の情報が揃ってない間にネギ先生達に神楽坂さんの事を伝えて

アーウエルクスの隠れ家についでいって、

救出できたとしても結局 皆で旧世界に帰還することはできない。

それ所か 振り返ちにあったり、取り戻せたとしても更に向こうが奪還に動き出して

泥沼の状態になりかねないでしょ？

そっちは非戦闘員の村上さん達を人質にでもされたらどうしようもないんだし。

だったら、旧ゲートポートの位置を確定して村上さん達の奴隷契約を破棄して

神楽坂さんやアーニヤちゃんを奪還、そのまま旧世界に逃げこんで

非戦闘員だけでも学園に保護してもらって体制を立て直したほうがいいでしょ？

彼女が非協力的だった場合は、

最悪エヴァが魔法で記憶を読むか操ることも考えてるし。」

『おっしゃることも分かりますが・・・』

「今回、アーウェルリンクス達がネギ先生達の前に姿を見せて

騒ぎを起こしたのは神楽坂さんを攫うためだけど、

向こうの作戦を実行するにしてもかなり大規模になるから

実行すればすぐに解る、動いてないと言うことは

まだ向こうも準備に手間取ってると考えられる。

それに、もう分かってるかもしれないけど

この件に関しては私達もクルトも既に把握してるし

阻止のための準備はほとんど整ってる。

ネギ先生達の件はむしろイレギュラーで、私達やクルトにしてみたら

計画の邪魔になるからおとなしく祭りでも楽しんでもらいたいくらいなんだよ。」

『……だからあの時、私に最悪ならネギ先生達を見捨ててでも

千雨さん達を保護しろという命令をしたんですね。』

「そついう面もある。」

この世界とネギ先生達、天秤にかけられないでしょ?」

『……はい。』

「もちろん見捨てるわけじゃないよ、

クルトにしてもネギ先生の存在は大きいからなんとか取り込もうとしてるみたいだし

私達も本気で見捨てるつもりなら

既に茶々丸や千雨、夕映はコチラに戻ってるだろうし。」

『はい。』

「茶々丸達は、ギリギリまでネギ先生達に協力してあげて。

本当にもうダメな時は私やエヴァ、クルトが動く。」

『分かりました、神楽坂さんの件は伏せておきます。』

「ありがとう、発信機の反応が複数有る点を聞かれたら

夕映の発信機か、磁場の異常か何かでごまかしてくれればいいから。

貴女達はそのまま予定通り、

旧ゲートポート探索をしてくれればいいから。

ついでにアーウェルリンクス達の隠れ家が見つければラッキーだし。」

『分かりました。』

「茶々丸には嫌な役目を押し付けちゃってるけど

この件が終わって家に帰ったら何か茶々丸がしてほしいこととか

ほしい物があつたららご褒美に用意するからもう少し頑張ってるね。」

『……はい、それでは失礼します。』 / / /

「あ、待って！」

『はい、なんででしょうか？』

「後で千雨に会った時、千雨に茶々丸の新武装を渡しておくから受け取っておいてね。」

『はい、分かりました。』

「それじゃあ、頑張ってるね。」

『はい、それでは失礼します。』

茶々丸の口調が途中若干変わったのが気になるが  
なんとか納得してもらえたようだ。

「茶々丸はなんとか納得させられたようだな。」

「・・・ひどいよエヴァ、こんな役目私一人に押し付けて。」

「こづいうのは私よりも姉様のほうが得意だろう？」

「超の方が得意だよ！！」

「私が言っても茶々丸は納得しなかったと思うヨ？」

「そうですね、茶々丸のマスターはエヴァさんとソプラノさんなんですから。」

「茶々丸姉さんは、ソプラノ様の言うことなら聞くと思います。」

「……おい、私はどうなんだ？」

「……黙秘させていただきます。」

「おいっ!!」 #

「まったく……普段は皆茶々丸をこき使うくせに、

都合のいいときばかりそんな事言ってる。」

「とにかく、茶々丸はんの口止めには成功したんやからええなないですか。」

今この時期に神楽坂はんが拐われたなんて知られたら

大騒ぎで拳闘大会やゲート探索どころじゃ無くなってしまいますえ。」

「そうだぞ、ぼーや達にこれだけの件をまとめて処理させるのはきついだろうしな。」

まずは村上達と旧ゲートの探索をやらせて

それが片付いたら神楽坂達や白髪のカキ達との決戦をさせればいい。

「

「まったく……私はいい妹を持ったよ！」

「そう褒めるな。」

「むう………」

「とにかく今日の拳闘大会の予選試合は観に行くんでシヨ？」

「だったら早く準備してでかけようヨ。」

「はあ……そうだね、できたらVIP席かどこかでクルトにも会って」

「話しておきたいこともあるし。」

茶々丸の口止めもなんとか無事に済み、

多少皆（特にエヴァと超）に言いたいことは残ったものの、

私達は拳闘大会の会場へ向けて出発した。

新オステイア 拳闘大会会場 VIP席

拳闘大会 予選、現在ネギ先生チームの予選が行なわれているが

ネギ先生が一人で相手をしているようで

小太郎君は高見の見物。

試合の方はネギ先生チームの圧勝ですぐに終わってしまった。

「フン・・・勝ったんだったら 笑顔の一つでも見せるや。」

「ですよね、愛想悪いとファンが減っちゃいますよ。」

「おい！ 超！ そのサンドイッチは私が食べようと思っていたんだぞ！！」

「そんな事聞いてないよヨ、早い者勝ちネ。」

「エヴァンジェリンさん、こっちに同じものがありますから・・・」

「私はアレを食べようとしてたんだ！！」

「具は同じ何んやからええやんか・・・」

「おい、お前ら・・・試合を見に来たんじゃねーのかよ。」



「そんなモノはどうでもいい！ 私のサンドイッチの方が大事だ！」  
#

「エヴァンジェリン様、お静かにしてください。」

「……ゴジュジン……サスガニ バシヨヲワキマエヨウゼ。」

「

チャチャゼロが場所を弁える！？

……今日は、この新オスティアが沈む日にでもなるんだろうか。  
……

「これはこれは……」

拳闘大会の陰の出資者が顔を見せるとは珍しい……」

「ん……？」

声の聞こえる方向を見ると、

褐色の肌で角の生えた高貴そうな女性が数名の警護を従えて

VIP席にやってきた。

「おお、久しぶりだな！」

「じゃじゃ馬第三皇女じゃねーか オイ。」

「な、貴様！？」「殿下に無礼であろう！」「

「良いのです、下がりなさい。」

「しかしテオドラ殿下！」「

「命令です。」

「ハ・・・ハッ！」「

テオドラ皇女の命令で警護の人は部屋から出て行き

この部屋にはラカンさんとテオドラ皇女、私達だけになった。

「・・・時にジャック・ラカン、その者達とは知り合いか？」

「ん？ おう、俺がコイツらをここに招待したんだ。」

「あ、初めまして。」

私ソプラノ・マクダウェルと申します。

私達はこのラカン様の愛人です・・・ 「ちよつと待てえ！！！」  
「・・・何か？」

「ジャック！ どういう事じゃ！？」

お主 妾に隠れて愛人なんか囲っておったのか！？

し、しかも ひいふう……は、8人もっ！？」 #

「……8人って……チャチャゼロも数に入ってるみたいだね。」

「オ、オレモラカンノ アイジンカ？

カオハ コノミジャーネンダガ ドレダケ キリキザンデモ

イキテソウナトコロハ イイナ。」

「…… 何だ？

俺が愛人囲ってちゃおかしいか？

それにお前 地が出てるぞ、いいのか？」

「やかましい！ そんな事はどうでも良いのじゃ！！

わ、妾が城に誘ったときは袖にしたくせに

こ、こ、こんな小娘供を囲うなんて……お主……ロリコンじゃ  
ったのか……」 1111

「違う！ それは断じて違う！！

嘘だ！ ちょっとお前をからかおうと思って冗談を言っただけだよ！！」 1111

「・・・そ、そんな・・・ 昨晩は久しぶりに私達皆を

アレほど情熱的に御召しなっただけだということに・・・」 1111

「おい！ やめろソプラノ！！ このままだと本当にシャレにならない！！」 1111

「・・・ジャック、冷たいではないか。

昨晩は久しぶりに抱いてもらえたに、用が終わればポイツと捨てるのか？」

「せやでジャックはん、

閨ではウチのこと最高やってなんども言ってくれたやしまへんか。」

「そうだヨ、せっかく実家の反対を押し切ってジャックの元に来たのに」

もう飽きたのか？ ワタシは捨てられてしまふのか？」

「ジャック様・・・」

「え・・・えっと、ジャックさん、捨てないでください？」

「ハデニ ヤリアオウゼー。」

「お、お前ら……」 1111

「……ジャック……お前という男は、そこまで堕ちたのか？

あの時の勇姿は一体どこへ行ってしまったんじゃない？

妾のジャック・ラカンはどこへ消えてしまったんじゃない……」 1

111

「もう本当に勘弁して下さい!!」 11110rZ

ラカンさんが冷や汗ダラダラで土下座までしてきたので

こちらへんでからかうのを勘弁してやることにして、

テオドラ皇女へ私達の関係を説明、時間はかかったがなんとか納得はしてもらえた。

「なるほどのう、ジャックの仕事の知り合いか。

そうならそうと最初から言えば良いのに。」

「いや、少しラカンさんをからかってみようかと思ったら

ラカンさんもコチラに乗ってきてしまったので

つい、悪乗りしてしまつて。」

「そうじゃ、そもそもジャックが調子にのつて此奴らの策に乗ったのが悪いんじゃない！」

「お、俺だつてまさかあんな事になるなんて思わねーよ……」

「――」

「本当は私達、クルト様の愛人なんです。」

「……ふ、ふん！ もうその手には乗らんぞ？」

あの堅物が愛人など困うものか。」

「いや、それはマジだ。」

実際こいつらはクルトの家に住んでるしな。

嘘だと思つたら今度訪ねてみるといい。」

「……う、嘘……じゃろ？」

「私達皆、本当にクルトさんの家に厄介になつてますよ。」

「な……なん……じゃと……」

あの堅物が……世の中わからんもんじゃの……」  
「――」

そうして、テオドラ皇女が若干勘違いしたままだが  
しばらくラカンさんとテオドラ皇女の昔話を聞いていると  
またこの部屋にやってくる人がいた。

「よお、伝説の英雄にお転婆姫。

それに……誰だ？

この部屋に来てるといふことは、どこかの国の関係者……でしょ  
うか？」

「あ、貴女達……風香さんと史伽さんだったかしら？」

「あ、セラスさんお久しぶりです。

ユエ様は元気でしょうか？」

「え、ええ、彼女は優秀で良くやってくれているわ。

今もこの街の警備隊で働いてもらっているところよ。」

「何だ？ セラス知り合いか？」

俺にも紹介してくれねーか？」

「紹介と言っても……貴方のほうがよく知ってるんじゃないか？

MMのゲード……現オスティア総督の知り合いでしょう？」

「初耳だぞ？……お嬢さん方、私はMM元老議員のリカードと申しますが」

よかったら お名前を聞かせていただけませんか？」

「はい、私は鳴滝風香と申します、

コチラは妹の…… 「ちょっと待てい！」 ……なんでしようか？」

「こ、コヤツらは……お主達はそうやって会う人会う人に偽名やら肩書きを偽っておるのかっ!？」

どうもテオドラ皇女はラカンさんほどノリがよろしくないようで

私達の自己紹介が不満のご様子。

しょうがないので、皆で普通に自己紹介をした。

「はぁ……じゃあ、貴女 私にも偽名を名乗ってたのね？」

「いや、色々と問題が有りました。



マクダウエルの姓を名乗ったら嫌がられるんじゃないかな」と思  
つて。」

「別にそれが理由でユエさんの入学を断ったりしないわよ・・・ま  
つたく。」

・・・？

あれ？ マクダウエルの姓を出したのにテオドラ皇女もリカード議  
員も反応しない？

エヴァがネギ先生の生徒だというのは知ってるはずだから名前は耳  
にしてるはず。

ゲートでのネギ先生達の事や

鳴滝姉妹の名やエヴァの名が出たから

リカードさん辺りは気がついててもよさそうなものなだけだな。

「その様子だと、クルトの愛人とか言うのも本当かどうか分からん  
な。」

「いや、待てテオドラ・・・クルトの奴の愛人の噂は本当かもし  
れん・・・」

実際MMに居た頃からアイツの家に女が出入りするのは目撃されて

るし

ゴシップ誌だが、一部でそういう報道も有る。」

「だから、私達は今クルトさんの家でお世話になってるのは本当ですって。」

ラカンさんも一緒にこの間食事しましたよね？」

「ああ、一緒にメシ食ったぜ。」

「……偽りばかり申すかと思ったら、そんな真実を少し混ぜてくるなんて……」

お主達 性質が悪すぎるぞ。」

「それにしても……あのオステイア総督がね……」

人は見かけやじゃわからないものね。」

「ほんにのう……」

「アイツもなかなかやるもんだな」

「……クツクツク。」

真相を知ってるラカンさんがお腹を抱えて笑いを堪えている。

クルトへのいたずらもこのへんにしておくか。

「じゃあ、今日はクルトの野郎と この娘達の幸せを願って飲もうぜ！」

「・・・いいのかしら？」

「いいんじゃないか？ どれ妾も一杯・・・」

「ハイハイ、じゃお子様はジュースな。」

「なっ！？ 妾のどこがお子様じゃー！！」

「見た目は10代じゃねーか。」

「こつ見えても妾は30代じゃー！」

ヘラスの族は長命じゃから見た目が若いからといって子供扱いするでないわー！！」

「お！ 騒いでないでお前らもこの映像見ろよ。」

さっきの試合の映像だぜ。」

リカードさんの指摘で室内に流れている映像を見ると

さっきのネギ先生達の試合が流れていた。

「ああ、ナギの下手なモノマネとかで話題の色物拳闘士じゃな？  
妾も注目しておるぞ。」

「これでも拳闘には詳しいからな。」

「此奴、色物ながら実力は確かじゃ。」

「あー そいつな。」

「ナギの実の息子だぜ？」

「「何イツ!?」「つ!?」

「何だよ、知らなかったか？ 意外だな。」

「いや、だつてお前、ナギの息子はまだ10歳そこそこのガキだつて……」

「あ……変装か!？」

「まあ、かなり手の込んだ変装術みたいだからな。」

「パツと見じゃ見破れないのはしょうがねーか。」

「なんじゃ、つまらん。」

「それなら優勝はアイツで決まりではないか。」

ナギの息子なら強くて当たり前じゃ。」

「あら？ その言い方は 彼に対して公平さを欠くわね。」

「ふふ……そうだな。」

それに……優勝がアイツで決まりつてのもどうかな？

わからねえぞ？」

「ん？ なんでじゃ？」

「なんつーか……俺もちよつと本気でアイツに興味が出てきてなあ。」

さっきこの大会にエントリーしてきたとこだ。」

「あ、ラカンさん結局出るんですか？」

「ああ、ソプラノの嬢ちゃんには前話したな。」

アイツの様子を見てやる気が出てきたからな、

嬢ちゃんにも俺様のかっこいいところ見せないとな。」

「何でジャックがクルトの情婦にいい所を見せねばならんのじゃ！」

「かっこいいかはともかく、

出る以上はがんばってくださいね。」

「おう、任せときな。」

「妾を無視するな〜っ！！」 #

こうして拳闘大会へのラカンさん出場が決定し。

ネギ先生達の難題がまた一つ増えていった。

それにしても、ネギ先生の情報が入ってきたとはいえ、

さっきの鳴滝姉妹やマクダウエルの名で反応しなかったことや

今でも私達のことをスルーされてる辺り、

MMでもヘラスでも私達の事はそんなに警戒されてないのかな？

「私達がクルトさんの愛人だって言うのは

もう ここでは決定事項なんですかね？」

「まあ、いいんじゃないか？」

別に、ここでどう言われようが何か変わるわけでもないシ。」

「言いたい奴には言わせておけ。」

「・・・ウチらが面白がって言わせたんやけどな。」

「アイツ ソノウチ ヒロウデタオレルンジャナイか？」

「チャチャゼロに心配されるとは・・・」

「「そう言えば、持ってきたエヴァンジェリン様特製の栄養剤はどうしましようか？」」

「念話で呼び出すか、帰りに総督府にでもよってみるか？」

「そうだな、

その時は魔法で変装でもしてせいぜい愛人らしく振舞ってやるか・・・  
ククツ。」

その後、予選Dブロック決勝では

以前、ラカンさんの依頼で街中でネギ先生を襲撃したカゲタロウさんの相方として

ラカンさんが呼び出され会場内は騒然。

一部偽ナギのように偽物かと騒がれていたが、

予選開始早々にラカンさんが加減して打った右パンチで

対戦相手はKO、闘技場に右手の跡がくつきりと残り

その威力から誰がどう見ても本人だと分かり

会場内では大歓声が沸き起こった。

side 千雨

ラカンのおっさんが出場とは・・・村上達を優勝賞金で助けるのは無理かな・・・

ネギ先生達と先ほど選手控え室のおっさんのところへ文句を言いに行ったが・・・



先生が白髪のカキと決着をつけたがってるのは分かるし

そのガキの強さがラカンのおっさんの映画や説明でおっさんやや、

先生の親父さんと同レベルだというのもわかるが・・・

いくらなんでも早すぎるだろうに。

先生と犬上はおっさんに煽られてやる気になったのはいいが、

私が用意してた資金を使って村上達を開放する案も

本気で考えないと駄目だろう。

一応結構な額がたまってきてるし

先生達が決勝まで優勢で勝負を進めてもらって

決勝で掛金全額ラカンのおっさんに掛ければ

掛率次第でなんとか足りる額に届くはずだ。

足りなかったら先生達の準優勝の賞金も少しは出るだろうし

最悪早乙女の船を売っぱらうって言うのもあるか。

「まったく・・・あのおっさん碌な事しねーな・・・」

「でも・・・確かにラカンさんに勝つのはともかく

全力で当たれるくらいの実力が無いと

フェイトと戦うなんて無理だというのは分かります。」

「まあ、たしかになー。」

「そういう意味では、今回の件。

いい試金石になるのは確かなんですが・・・」

「せやけど夏美姉ちゃん達の件があるからな。」

・・・

・・・

・

「はあ・・・」

「「はあ・・・」」

「と、とにかく一度戻っておっさんの情報を集めてもう一度検討し

「。じぢ」

「そ、そ、じぢぢぢすね。」

「。せぢぢ。」

神様から頼まれたお仕事。

その66（後書き）

66話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その67

新オスティア クルト邸 庭園

ラカンさんがオスティア終戦記念祭で行なわれる

拳闘大会に出場を決め、

優勝賞金で村上さん達の借金返済をしようとしていたネギ先生達が慌てふためき その事で千雨から私の所へ連絡が来てから数日・・・

千雨にはとりあえず 「頑張っつて」 と伝えたことで

この件に関して私が手を貸すことは無いと判断したようだ。

その後、ネギ先生達が対ラカンさん戦闘の為に修行を開始。

その修業にヘラスのテオドラ皇女やMM議員のリカードさん

アリアドネーのセラスさんも協力してくれているようで

テオドラ皇女の持ち込んだ魔法球を使ったりして修行をしている。

闇の魔法の習得に使う巻物に宿っているエヴァの擬似人格も

意外と協力的なようで、闇の魔法に関しても修行の方は順調に進んでいるようだ。

「千雨から聞いた話だと、ネギ先生

千の雷を習得してそれを取り込む気みたいだよ。」

「ふむ・・・まあ、ぼーやなら出来るんじゃないか？

千雨にしたら複雑な心境だろうがな。

つい最近闇の魔法を覚えたばかりのぼーやにあっという間に抜かれるんだから・・・」

「そうだね。

だけど千雨は好戦的な性格じゃないから、

その辺、うまく割りきってくれるといいんだけどね。」

「あまり酷く凹ん出るようなら姉様が慰めてやればいいだろう。」

(・・・でも、そうやって私が千雨を慰めると

たぶん・・・エヴァの機嫌が一気に悪くなるんだろぅな・・・)

何はともあれ、ネギ先生達の修行も順調なようぞ

決勝までの試合もかなり余裕に消化していつている。

試合の度にネギ先生達の修行の成果が現れているのか、

かなり速い上達速度のようぞ、

ネギ先生と小太郎君が交代で一試合ずつ消化しているが

ほとんど有効打を貰うこと無く順調に勝ち進んでいる。

密かに私達も賭けでネギ先生達には儲けさせてもらっている。

掛率はあまりよくないが、対戦相手の実力を見る感じでは

決勝まで ネギ先生達の勝ちは確実のようなので

確実に稼ぐことができ、稼いだお金でエヴァ達は祭りで豪遊し

超と葉加瀬は稼いだお金で武器弾薬の製造費用に当て

私と千草は堅実に貯金をしている、

エヴァは稼いだお金でチャチャゼロとラトナ、ピュラを引き連れ、

市街地の出店のほぼ半分を制覇したそうだ。

さて、決勝までネギ先生達は打倒ラカンさんに向けて修行、

茶々丸や刹那さん達はその間に旧オスティアでゲートの探索、

私達は祭りを楽しみながら、アーウェルンクス達の警戒、

と、オスティア終戦記念祭の日々を過ごしている。

そんな中でようやくクルトに会う機会を作ることができたので

私とエヴァ、千草の3人でクルトに会うため総督府に行くことにした。

オスティア総督府 応接室



「クルトもなんか大変みたいだね。」

少し痩せた？」

「そうですね・・・測ってないので分かりませんが、

少し痩せたかも知れませんね。」

まあ、会合やらで外食が多かったので

少し太ったかも知れないと思っていましたので ちょうどいいでしょう。」

それで、今日はどんな用事でしたか？」

「まずはこれ、エヴァ特製の栄養剤。」

これを飲めば疲れなんか吹っ飛ぶから本当に危なくなつた時に飲んでね。」

そのかわり1週間は眠れなくなるかも知れないけど。」

「・・・一応頂いておきますが、1週間寝られないのは勘弁して欲しいですね。」

「なに、これを飲んだ後で眠りたくなつたら 私が睡眠薬を処方してやるさ。」

「こっちは逆に1週間は眠り続けるがな。」

「……もう少し、効果の押さえられたものはないんですか？」

「……」

「有るが面白くないじゃないか。」

「私はモルモットじゃないんですけどね……」

「それと、今日の本題はまずこれ。」

私は千草に預けてあった鞆から細長い綺麗にラッピングされた箱を渡す。

クルトはひと通り箱を見た後開封し、中に入っていたネクタイを見つめる。

「……おや、これはなかなか洒落たデザインですね？」

なにやら微弱な魔力も感じますが……」

「わからないように押さえてはあるんだが、

やはりお前くらいになると気がつくか。

これは例の鍵を研究して、その研究結果から創りだした糸で作ったネクタイだ。」

「……アレ、ですか。」

それで、どのような効果があるんですか？」

「これを着用していれば、幻覚魔法や認識阻害、

精神感应や記憶を読まれる等の魔法の効果をレジストできる。」

「それは、政治家の私には実にありがたいものですね。」

「これは今後、本屋ちゃんのアートファクトで

クルトの思考が読まれるのを阻止するために用意したものだよ。

あのアートファクトもかなり強力だから表層の思考は読まれるかも知れないけど

深い部分は読まれないはず。」

「私が今後 彼女にアートファクトを使われるような事態になる  
と?。」

「計画の段階でネギ先生と会う機会があるじゃない？」

きっと本屋ちゃんをつれてくると思うんだよね、ネギ先生なら。」

「まあ、確かにそうでしょうね……私が彼でもつれてくるでしょう。」

「その時にクルトの思考が読まれて

私達の計画がバレると困るんだよね。」

「私も貴女方の計画には参加しているわけですし

そのような事にはならないようにするつもりですが？」

「でも、クルトの持つてる魔法阻害のアイテムだと少し心配だからね。」

彼女のアーティファクト、いどのえにつき はかなり強力だから。

「

「……確かに、そうかも知れませんが……」

特別室では一応魔力消失結界は用意していたんですが。」

「だからこのネクタイしていつてね

これをしていけば表層の意識を読まれるだけで済むし

それを利用して思考誘導も出きるだろうし。」

「分かりました、ありがたく頂いておきます。」

「それと…… 『完全なる世界』 の解除方法もわかったから

完全なる世界を制圧次第、二人に……彼女に会えると思うよ。」

「……本当……ですか？」

「こんなことで嘘言ってもね〜。」

「どうする？」

奴らの制圧に合わせてMM本国での計画を実行して

過激派や当時の不正を働いた議員を粛清して一気に片付ける？」

「……そうですね、彼女が戻った時に驚かせてあげましょうか。

もう世界に彼女の敵はいないんだと……」

「ついでにナギさんに言っておく？」

『おまえに彼女はふさわしくない！』とか」

「フフ……、それも面白そうですがそれはいいです。

彼女は彼を選んだんです……私ではできないことを彼がやったんですから

彼にはできないことを私がやってやりますよ。」

「なんや、ナギはんからアリカ姫を寝とるんちやいますのか……

せつかく面白そうになってきはったのに。」

「人を何だと思っているんですか……まあ、その話はいいでしょ。」

今日は折角いいプレゼントを幾つも頂いたんですから

変な話を敢えてしなくてもいいでしょう。」

「そうだね……と言いたいところだけど もう一つ話があるんだよ。

例の鍵、そろそろ私達の分に何本か預かりたいんだけど。」

例の鍵とは、造物主の掟 と言う特殊な鍵状のアーティファクト。

最高位の Great Grand Master Key を頂  
点に

7本の Grand Master Key 劣化版でかなりの本  
数のある Master Key 。

20年前の戦争の時、造物主がナギさんにやられた時に私が密かに  
パクってきた

Grand Master Key の1本を エヴァと超で解析  
し、

その情報を元にクルトに探してもらっていた Master Key  
y の話だ。

「アレですか、向こうの抵抗もあって予定より本数が足りないのです。そちらに回せるのは・・・3本ほどですがよろしいですか？」

「いいよ、鍵がいるのはむしろそっちだろうからね。」

「私達は自分で使うよりも周りを守る時に使っただけだし。」

「逆にそっちの方は鍵や兵士は足りてるの？」

「従来の警備に加えて、今年は終戦20周年ということで兵士を増員していますし」

「私が個人で雇った私設部隊も用意しましたから」

「新オスティアが落ちることはありません、私が落とさせません。」

「むしろヘラスやアリアドネーの来賓の方に何かあった時、」

「後で政治的問題が起こることのほうが心配ですね。」

「その為にも鍵はできるだけコチラに欲しいんですよ。」

「アレで障壁を張らないとアチラの方々は一溜まりもありませんから。」

「じゃあ、私達は3本でいいよ。」

「あと、大規模な攻撃があった時は、」

ウチの方からも防衛に人を出すから その時は味方識別はしっかりしておいてね。」

「分かりました、その辺は徹底しておきます。」

・・・彼女達にカスリ傷でも負わせたら後で貴方に何されるか分かりませんか。」

その後、クルトと細かい打ち合わせや

拳闘大会でネギ先生とラカンさん、どちらが勝つか？

祭りやオスティアの観光で、クルトのオススメの場所などを聞いて

私達は総督府を後にした。

クルトとの打ち合わせの翌日、

ネギ先生達は試合以外では修行の為 ずっと魔法球に籠っている。

闇の魔法に関しては、エヴァの仮想人格が付いているため

もう千雨が教えることも無く、村上さん達も奴隷長に見てもらっているから安全になり



千雨は暇になったので、家（クルト邸）に呼んで

私達と一緒に遊びに行くことになった。

夕映も一緒に呼ぼうと思ったのだが、

彼女は警備の仕事でスケジュールが埋まっているらしく、

明日にならないと休みがもらえないとの事。

声を掛けた時にはひどく落ち込んでいたので

明日、時間を見て私達と一緒にお祭りを見ることと、

来年のオステイア終戦記念祭の時は、

最初から最後まで皆と一緒に遊びにこよう、と

約束して今は我慢してもらった。

ネギ先生の闇の魔法上達の件で、千雨が少し落ち込むかと思ったが特に気にした様子はなく、

逆にここまで一気に引き離されると落ち込むとか言うのを通り越

して

呆れるほどだったと言う話した。

久しぶりに私達と一緒に祭りや観光を楽しみ、

千雨もネギ先生達のお守りから解放され、ストレスが発散できたよ  
うで、

夕食時にはエヴァ達と一緒にになって、お祭りの戦利品を見て楽しんで  
いた。

そして夕食後に皆でお茶会をしている時、

丁度いいので千雨に一本、鍵を渡しておくことにした。

「で、話ってなんだ先輩。

祭りで買ったお菓子が欲しいならエヴァに言ってくれよ?」

「エヴァのお菓子の話じゃなくて・・・千雨にはネギ先生達の所に  
戻る時に、

あるアーティファクトを持って行ってもらうけど、

このアーティファクト・・・鍵は誰にも奪われないようにね。

それに、ネギ先生達にも知られちゃダメ。」

「・・・わかった、けどなんでそんな大事な物？ それを私に預けるんだ？」

「千雨はアーウェルンクス達に目をつけられてるでしょ？」

それにネギ先生達と一緒にいれば嫌でもアーウェルンクス達と対峙することになる、

その時に身を守る為にと言うのと、相手がこれと同じか上位の鍵を持ち出した時に、

自分や周りの人達を守るのに使って欲しいんだ。」

「その鍵はそんなに高性能・・・って言うかヤバイのか？」

「詳しい使用方法は・・・魔法だからエヴァに聞いて・・・もらえるといいんだけど・・・」

「・・・いや、そんな涙目になるんだったら

最初からエヴァに説明させればいいじゃないか・・・」

私が悲惨なほどに魔法が苦手なことは分かっていたが

この鍵すらまともに使えないとは思わなかったよ。

「と、とにかく、この鍵を使った魔法や障壁相手だと

魔法世界の住人は完全に無力だと思ってくれていいよ。」

「・・・おいおい、魔法世界の住人って、おっさんも含まれるんだろ？」

そんな強力な道具なんか私が持ってもいいの？」

「詳しい話は今はできないけど、魔法世界の住人は完全に無力化されるけど」

旧世界、私達やネギ先生達、千雨の魔法は普通に効くから大丈夫だよ。」

「へ、なんか複雑な話だな。」

「そう難しく考える事はない。」

この鍵を使えば相手が鍵を使ってきた時に対抗できる。

それに逆におそらく白髪の子供も魔法世界の住人だから

奴らの攻撃も今ならこの鍵でほぼ無効化出来る、

とりあえずそう考えておけばいいよ。」

そう、神楽坂さんが捕らえられている今なら・・・

エヴァ達の研究の段階ではすべての機能を使うことはできなかったが  
神楽坂さんが向こうにいる今なら使うことができる。

Grand Master Key や Great Grand  
Master Key と正面から

やりあわない限りアーウェルンクス達個人の魔法なら十分これで無  
効化出来るはずだ。

彼らも、計画実行時以外では鍵の存在は隠しておきたいはず、  
千雨相手に鍵を出してくる様なマネはしないだろう。

万が一出してきた時は・・・その時は

もう千雨達をネギ先生達に同行させる事はできないだろう。

「本当かつ!？」

それならありがたい。」

「せやけど向こうが鍵使こつてきたら条件同じやない?」

「千草さん・・・もう後ほんの少しくらい

長く夢を見させてくれたっていいじゃないか……」

「現状を正確に確認するのは大切な事だヨ？」

「……人事だと思って好き勝手言ってくれな。」 #

「そうでもないヨ、その鍵の分析や調査は私と葉加瀬、

エヴァンジェリンでやったんだから、

ちゃんと私達も千雨サンのサポートはしてるヨ。」

「そ、そうか……悪かったな、私も少し言いすぎた。」

あの白髪が本当に厄介だな……このまま何も無しでもう一度会うようだったら

本気でネギ先生達置いて逃げそうだ……そういう意味ではこの鍵は助かるよ。」

「そう言ってくれるとワタシも調査したかいがあるヨ。」

「とにかく鍵の使用方法は後でエヴァに聞いてもらうとして、

その鍵の存在はできたらギリギリまでネギ先生やアーウェルンクスには

見つからないようにね。

アーウェルンクスがその鍵を見たら必ず奪おうとするだろうから  
使うタイミングは慎重にね。

最悪、鍵は奪われてもいいけど、千雨はちゃんと帰ってくるんだよ  
？」

「ああ、わかった。

・・・それはいいけど どうやって持ち歩くんのだ？

私のアーティファクトと違ってこのままじゃ出し入れができないから

こんなの持ち歩いてたらおもいつきり目立つだろうし。」

「それは後でエヴァの説明があるけど、それをしまう専用のネック  
レスを作っているから

それを身につけて、使う時だけ出すようにすればいいよ。」

「ネックレスに収納した状態ではどんな探知魔法でも

わからないようにしてあるから大丈夫だよ。

ソプラノとエヴァンジェリンと私の合作だから

ネックレスを持って帰ってよっぽど詳しく調査でもしない限り分か  
らないはずネ。」

「それなら安心だな。

とにかく助かったよ、あの白髪相手だと

もうほとんど手札使い切った状態だったから。」

「あと、茶々丸の新武装が出来てるから

後で超から受け取って千雨から渡しておいて、

茶々丸にはもう連絡してあるから。」

「わかった、けどあんまり重い物は勘弁してくれよ。

茶々丸の武装って言うのと銃火器とかなんだろ？」

「大丈夫ヨ、重さなんてほとんど無いカラ。

千雨さんが普段学園に通うときに持っていく鞆より軽い小さいヨ。

」

「そんな物で大丈夫なのか？」

「それ自体には攻撃力は無いからネ。

それは只の照準をつける装置だから。」

「まあ、良く解らんが・・・渡すだけでいいんだな。」

「それだけでいいヨ。」



「了解だ。」

「じゃあ 千雨はこの後エヴァに詳しい使い方を聞いて  
皆今日はもう寝よう。」

明日はネギ先生の決勝戦だから皆で見に行かないと。」

「そうだな、私も明日朝一で戻って先生達の様子を見に行かないと。」

「……チサメノ カオヲミルノモ ……キョウデサイゴカ・  
・ツ！？」

「おい、殺戮人形……洒落になってねーから止める。」 #

千雨はチャチャゼロが台詞を言い終わると同時に

チャチャゼロの頭を掴んで自分の目の間にもってきて睨みつけた。

「チサメノ シボウフラグヲ オツテヤロウト オモッタダケジャ  
ネーカ！

コノママネテ アシタノアサニ 『先輩……先輩のくれたこのネ  
ツクレスで私 頑張るよ！

今度先輩に会った時……今まで言えなかった大事な事を伝える  
よ。』 / / /

トカイツテ デテツタラ オマエシヌゾ？」

「・・・おい、チャチャゼロ、今のは誰の真似だ？

いつの間に声真似なんて高等技術身に付けやがった？

それに私は先輩に伝える大事な事なんてとうの昔に伝えたよ！！

それにお前の言い方 それ自体が死亡フラグだ！」

「シボウフラグナント イロイロアルジャーネーカ。

コドモガデキタトカ カエツタラケツコンサルトカ。」

「千雨サン子供ができたのカツ!?」 1111

「おい千雨！ 貴様どういう事だっ!!」 #

「できてねーよっ!!」

いや、できそうなことはやってるけどまだだよ!!」 / / /

「・・・二人共、チャチャゼロの冗談だっってわかってますか？」

「冗談にしては少し性質が悪いでんな・・・

チャチャゼロはんには少しお灸が必要なようや。」 #

チャチャゼロなりに千雨を気遣っているのは なんとなく 解るが  
本人の性格なのか、やってることが変な方向に悪質なので性質が悪い。

結局 千雨や千草、超、エヴァの怒りを買って

袋叩きにあっているが・・・まあ、辺に気落ちするよりはよっぽどいいので

このままやらせておくことにする。

このまま彼女達に付き合っていたら明日の朝起きられそうもないので

葉加瀬に寝るように勧め、

私はラトナ、ピュラを連れ寝室へ移動し、このまま就寝。

翌朝、顔中に落書きがされて

食堂で椅子に縄でくくりつけられているチャチャゼロを見かけたので

縄を解いてやり、洗顔してくるように勧めた。

他の娘達も起きてきたようで、少し早めの朝食を取り

千雨は死亡フラグになるような台詞を吐くこと無く

ネギ先生達の所へ出かけて行った。

そうしてとうとう、拳闘大会 決勝戦。

ラカンさん カゲタロウさん VS ネギ先生 小太郎君の試合を  
迎えることになった。

side 夕映

オスティア闘技場 上空

「はあ……千雨さんはソプラノ達と楽しいお泊り会。

それに比べて私は昨日も今日も警備のお仕事ですか……」

「ユエ元気をだしてよ、私だって毎日毎日警備の仕事でうんざりしてるんだから。」

今日の決勝戦も観客席で見たかったのに、こうしてモニターで見  
しか・・・」

『ユエさん コレット！ 警備に集中なさい！！』

「委員長のせいでしょ！ 本っ当に くじ運悪いんだからッ！！」

『お黙りなさい！ 私だってこの目で見たいです！！』

「もう今度からくじは委員長には引かせないからね！

委員長に任せると なぜか悪い所悪い所狙ったように引くんだから  
！」

「まあ、しょうがないです。」

明日休みを貰えたのでヨシとしておけます。」

神様から頼まれたお仕事。

その67（後書き）

67話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その68（前書き）

皆さん明けまして おめでとございます。

去年から始めたこの2時創作小説も今回で 68話目、

これも一重に 見ていただいている皆さんのおかげです。

原作の方はこの先どうなるか分かりませんが、

私が書いてるこの小説は、

原作 単行本31巻発売の時点での情報で物語を作っていますので

今後出る話で設定がおかしくなることも出てくるとは思いますが、

あとは最終話まで打ち込むのみとなっておりますので

お暇な方は できるだけ最後までお付き合い下さるようお願いします。

僭越ながら、

今年も皆さんにとって良い一年でありますように願っております。

神様から頼まれたお仕事。 その68

新オステイア 拳闘大会 VIP席

今日の朝一で 千雨がネギ先生達の所へ行き

その後 私達は家でのおんびりと過ごした後

決勝戦の時間前に十分会場につくように家を出て来た。

VIP席に私達が到着したときには、

MM議員のリカードさんやアリアドネーのセラスさん

ヘラスのテオドラ皇女は既に席に着いて試合開始を待っている。

「皆さん こんにちは。」

「ん？ お主らか・・・試合が始まる前に間に合ってたの・・・っ！」

思い出したっ！！



お主達、何がクルトの愛人じゃ！

あの時は急なことで分からんかったが

あとで調べてみたら、お主達はネギの生徒じゃないか！

それにそこに居る金髪は闇の福音、

ネギに闇の魔法を教えた張本人じゃろう！」

「今頃気がつくなんて遅すぎるな・・・ずいぶん呑気な皇女殿下に元老議員殿だ。」

「いや〜・・・あの時はいつ気がつくかと思つて楽しみにしてたのにラカンさんやクルトさんの愛人騒ぎの方に気がいつてるみたいで

完全にスルーされましたからね。

マクダウエルの姓を出したのにスルーでしたし。」

「あの時、私達はずいぶんとヒントを出してやったぞ？

ぼーやの生徒の鳴滝姉妹の名を偽名に使つたり

マクダウエルの姓を出したり、認識障害の魔法も使つてなかったから

私達の顔くらい確認していたら気がついてても良かっただろう？

ずいぶんと呑気なものだな・・・この20年で平和ボケでもしたか？」

「あ、あの時は急な事だったゆえ・・・」

「やれやれ・・・完全なる世界が各地のゲートでテロを起こしてなにやら企んでいるというのに・・・これではな。」

「クルトも気が休まらんわけだ。」

「確かに　クルトからゲート事件の情報は本国に届けられているが、だからといってあの時点でナギの息子が拳闘大会に出ていると

事件とは全く関係がない生徒が目の前に居るなんて普通気がつかないだろう。」

それに元老院の方でも今回の終戦記念祭に関しては警備を増員しているし

ネギのぼーず達の嫌疑を晴らすための調査も全力でしている所だ。」

「つまり私達がクルトに情報を流してそれを聞かなかつたら

今でもぼーや達をゲートポート破壊事件の犯人として追っていたということがあるか？

だから不抜けているというのだ。」

これでは完全なる世界の連中に好きなようにテロを起こされるわけだ。

どうせ数日前にぼーやや神楽坂が襲撃されたことも

クルトから連絡を貰っただけで自分達で何も情報を掴んでいないんだらう？

こんな所で呑気に試合を眺めていたり、

ぼーやの修行を見ている暇があるのか？

国を背負う立場の者なら他にやることがあるだらう？」

「くっ……」

「……」

「エヴァ、そろそろ……ね。」

「ふんっ……姉様に免じてこれくらいにしてやるか。」

エヴァの辛辣な意見が彼等に刺さるが……

本来なら私が言って彼等に明日以降の対策を

しっかりとってもらおうと思っていたのだが……先に言われてしまったな。

「ほら、皆あまりピリピリしないで今はネギ先生達の決勝戦を観戦しましょう。」

「だけど、肝心のネギ坊主達はまだ来てないようだね。」

「そろそろ試合開始の時間じゃないか？」

「遅れてるのかな？」

「ぼーやの事だ、試合放棄ということもなかるう。」

「決勝戦開始数分前になるが、まだネギ先生達が会場に現れる様子はない。」

「観客席では試合開始はまだか？　ネギ先生達が逃げたんじゃ？」

「等と騒がしくなってきた。」

「司会兼審判なのだろうか？」

「悪魔の羽と尻尾の生えた女性がなんとか試合開始まで持たせようといろんなトークで間を持たせようとしている。」

「そう言えば皆この試合どっちに賭けた？」

「ウチは今回は予想がつかへんから止めておきました。」

「ワタシも。」 「私も今回は止めておきました。」

「オレタチハ キノウマデノ マツリデ コズカイツカッチマツタ  
シナ。」

「「チャチャゼロ姉さんに使われてしまいました。」

「貴女達は・・・テオドラ皇女達はどうですか？」

「妾か？ 妾は応援の意味を込めてネギに賭けたぞ。」

「俺も一刻とは言え自分の弟子だからな。」

「ぼーずに賭けたぜ。」

「貴方達・・・皇女と元老議員が賭け事に積極的に参加してごうするんですか・・・」

「じゃあセラスさんは賭けなかつたんですか？」

「・・・そ、それは・・・ね。」

「何言つてやがる、セラスも一緒に掛札買いに行つたじゃねーか。」

「セラスもネギのぼーずに掛けてたぞ。」

「こ、こら！ リカードッ！」 / / /

「皆さんやっぱり自分の弟子が可愛いんですね。」

「そういうお主はどっちに賭けたのじゃ？」

「私はエヴァに言われてラカンさんに賭けました。」

「ほう、闇の福音はラカンが勝つと？」

おぬしも一応弟子なのだからネギに賭けてもいいと思ったのじゃがな。」

「アレは別に弟子というわけじゃない、

姉様に頼まれたから闇の魔法の習得書を作って渡した結果、

ぼーやの手元に渡っただけだ。」

「そうなのか？ てっきりお主が弟子にでも取ったのかとおもったのじゃがな。」

「才能は認めるが・・・な。」

エヴァはなにやら複雑な表情でテオドラ皇女から目をそらして闘技場を眺めた。

闘技場ではラカンさんがマントを羽織って仁王立ちで

ネギ先生達が出てくるのを待っている。

丁度その時、ネギ先生達の選手出場ゲートから二人の人影が現れた。

場内のモニターにもそれぞれの選手の顔がアップで映され

見た感じお互いやる気満々、ネギ先生達もかなり気合の入った表情をしている。

『大変長らくお待たせしました!!』

両チーム共 選手が揃いました!

もはや言葉は無用、

早速 決勝戦を開始したいと思います!』

今すぐにでも試合開始の合図がかかろうかという時、

ネギ先生は腰の小さいバックから手帳のようなものを取り出し戦闘体制に入る。

小太郎君も構えを取り、気を集中しているようだ。

『それでは決勝戦……開始!!!!』

試合開始の合図と共にネギ先生は呪紋の詠唱を開始。

詠唱を妨害するためにカゲタロウさんが遠距離から影を伸ばして攻撃するが

小太郎君が前衛に出て防御、その間にもネギ先生の詠唱は続き

呪文の詠唱は完了したようだ。

「ふむ、アレは千の雷か、ぼーやも使えるようになったんだな。」

「ええ、ラカンさんと訓練はしていたようですが

私が協力して実戦でも使えるようになりました。」

「アレを千雨が使えれば我が従者に相応しい火力を持たたのにな・  
」

「・・・千雨は私の従者だつて。」

それにアレには劣るけど　すごい魔法使えるからいいじゃない。」

「しかし、アレは広範囲攻撃に向いてないからな。」

「全く、エヴァンジェリンは火力バカなんだカラ。」

あんな魔法個人で使えるほうがおかしいネ。」



「・・・よく言いますよ、超さんだって似たような魔法使えるくせに。」

「ワタシは必要に迫られた上で、ドーピング込みでダヨ。」

「そんな話は後でええやないですか、試合の方に集中せんとあきまへんで。」

闘技場の方ではラカンさんがアーティファクトで槍を取り出し

本気なのか、かなりの気を込めて上空に飛んでから

ネギ先生達に向かって投擲した。

「うわ、まず！」

「ほら、姉様近くに寄れ。」

ラカンさんの投擲した槍が着弾と共に爆発、

闘技場周辺を巻き込んで地面が揺れ、

辺りには砂埃が舞い、闘技場が確認できない状態になっている。

揺れのせいで部屋の調度品の一部が破損したが、

私はエヴァの張った障壁に守られ、干草や超達もそれぞれ障壁を張って

破損して飛んでくる瓦礫や破片から身を守り、無事だったようだ。

今の攻撃でテオドラ皇女は転んでしまったようだ

ラカンさんに向かってマイクで文句を付けているが……

思いつきり地の口調で文句を言っていた。

しばらくすると砂埃が晴れて闘技場の様子が見えるようになってきたが、

ラカンさんの攻撃で闘技場の地面を抉られ、

一部の岩盤が隆起してむき出しの状態になっている。

『す、凄まじい一撃！

拳闘界の常識を覆す 桁外れの一撃でした！

ナギ選手は！？

『ま、まさか今の一撃で勝負は決してしまったのでしょうか！？』

ラカンさんはなにやらやり過ぎたと思ったのか

冷や汗を流してネギ先生達の方を見ている……が

砂埃が晴れたその先には、ネギ先生が神楽坂さんの大剣にそっくりな剣を持って

小太郎君共々、無傷で立っていた。

「今の攻撃で無傷やなんてスゴイやおまへんか。」

「そうだね、いくら修行したとは言え考えられないヨ……」

ネギ坊主が持つてるあの剣、あれは明日菜サンの剣と同じ形だけど

あれに何か秘密があるようだネ。」

ネギ先生と小太郎君はラカンさん達が驚いてる間に一気に間合いを詰める。

ラカンさんも反応して何本か剣を投擲するが

ネギ先生の持っていた大剣であっさりと切られて消滅する

そのままの勢いでネギ先生は持っていた大剣でラカンさんに斬りつ

ける。

ラカンさんも自分の剣で防御するが

剣を受けた時にバターでも切るかのようにラカンさんの剣は切られ

慌ててラカンさんも下がってネギ先生の攻撃を回避する。

小太郎君の方はカゲタロウさんに気弾打ち込んだ後

連続で攻撃をしてネギ先生とラカンさんからカゲタロウさんを引き  
離し

それぞれ一対一で勝負に持ち込むようだ。

ネギ先生の方に目を向けると、

大剣は既にしまい、持っていた手帳から一枚カードを抜き出し

それを一番上のページに挿し込み 今度はどこかで見つけた短刀を十数  
本召喚し

ラカンさんの首元に突きつける。

「そうか、あのネギ坊主の手帳。」

誰と契約したのか分からないが、あれがネギ坊主のアーティファクトで

あれを使えば、ネギ坊主が契約した対象のアーティファクトを使えるようになる

と言う効果があるようだネ。」

「それである短刀ですか、あれは刹那はんのやね。」

せやったらやつぱりさっきの大剣は明日菜はんの剣ですか。」

「うむ、あれだけでそこまで見抜くとはお主達もなかなかの腕のようじゃの。」

あれは妾がこの期間限定でネギと仮契約して出てきたアーティファクトじゃ!」

「テオドラ皇女が？」

そらまた驚沢なアーティファクトやね〜。」

試合会場の方を見ると、ネギ先生はアーティファクトをしまい

素手での勝負に出るつもりなのか、

ラカンさん相手に素手の構えを取り、挑発している。

ラカンさんもそれに応じたようで、

いつでもかかって来いとばかりに片手で合図している。

それを確認したネギ先生は、

先程の詠唱して待機させていた千の雷を開放し、闇の魔法で取り込む。

そのままお互い回りこむように動くが、

足元の瓦礫の端につく瞬間、

私やエヴァでも視認できない速度で移動したネギ先生が

ラカンさんの顔面をこぶしで捉える。

「ほう……単に千の雷を取り込むだけでなく、術式をいじっているな。」

「やっぱ普通に取り込んだだけじゃ、ああはならないの?」

「うむ、アレは雷の性質を取り込むのにかなり無茶をしているな。

肉体や魂に通常よりも負荷が掛かるが

その分通常取り込むよりも見た通り、スピードは桁違いだろう。」

「エヴァでもアレは回避不可能なの？」

「・・・初見では無理だな。」

だが、今なら回避は・・・無理だが対策は取れる。」

「本当力？ 私には何が何だかわからないヨ。」

超の言う通りで、私達にはラカンさんを中心にネギ先生の姿が何人か見える。

恐らく止まったり、ラカンさんに攻撃をした一瞬だけ眼に見えるのでそれが残像で残って見えるのだろう。

実際はネギ先生が一人でラカンさんをボコボコにしているはず。

ネギ先生はラカンさんの攻撃にカウンターを合わせて攻撃を打ち込み、

ラカンさんを空中に打ち上げ、その後すぐに自身は追いついて地面に叩きつける。

空中で一度ネギ先生は大きく光った後、

叩きつけたラカンさんに向かって真っ直ぐに、

まるで雷が落ちるように突進していく。

「あれま、ラカンはんやられてしもつたん？」

「いや、まだだろう。」

エヴァの指摘通り、ラカンさんは膝をついてはいるが無事なようで

ネギ先生の攻撃が効いているのか、

攻撃を受けたその場で頭を抱えているが、

そのすぐ背後にネギ先生が現れラカンさんの背に手を付いている。

ラカンさんもすぐに気がついたようだが 時既に遅く

ネギ先生のゼロ距離での雷の暴風を食らって吹き飛んでいった。

小太郎君の方も小太郎君が半獣人化して

カゲタロウさんを殴り飛ばしたところだった。

『ダッ ダ ダウンッ ダウンッ!!!』



ラカンチーム同時ダウン！

こっ、こ これは・・・」

審判の女性もかなり驚いたようで、

慌ててカウントに入る。

この試合は相手チームの死亡、戦闘不能、ギブアップで勝利

または気絶、ダウン状態での20カウントで勝敗が決る。

『ワ・・・1！・・・2！・・・』

コチラのVIP席の方でもリカードさん達、

ネギ先生達に修行を付けてあげた面々が驚いたり喜んだりしている  
ようだ。

「うおおおっ！？」

やりやがったあのガキ共！！

ラカンの野郎 油断しやがったな！」

「ま・・・まさか あの筋肉ダルマがこんなあっさり・・・？」

「どーせ師匠面して最初は2〜3発入れさせてやるうとか思ったんだろ？」

したら想像以上に速い、隙無い、容赦無いでやられちゃったわけだろ！？」

「まあ、確かにジャックらしいと言えばらしいが・・・」

「闇の魔法で千の雷をとり込み、

速度、火力、性能でラカンさんを上回る・・・

口で言うのは簡単だけど、

本当にソレを実現してしまうなんて。

『雷速瞬動』・・・破格の大技よ、おそれいったわ。」

「ああ、あんなもん10日やそこらじゃフツー 物にはできねーぜ  
！」

ネギ先生を見ると勝利を確信したのか？ それとも安心させようとしているのか。

観客席の和泉さん達の方を向いて微笑んでいる。

（ 「……………さて、ここからか。」 ）

「……………っ!?!?」

エヴァが私と同じことを考えている？

……………普通に考えたら、ここで終わったと思ってもおかしくないけど。

一度会ってるからラカンさんの強さを知っているからか？

『英雄ラカン まさかのダウン！』

20カウントでKOとなります!』

『12!……………13!……………』

『カゲタロウ選手も動きません!』

『14!……………15!……………』

小太郎君とネギ先生がなにやら話し込んでいるが

二人はこのまま様子を見るようで、その場から動かない。

『18!・・・19!・・・アッ!?』

カウントが19になった直後、ラカンさんが無造作に立ち上がり

急にここまで聞こえるような大きな声で笑い出す。

「・・・さて、ぼーやどうするかな?」

「・・・」

エヴァの様子を見るが特におかしなところは見えない。

まるでこうなることが当然だと言わんばかりに落ち着いた態度だ。

ラカンさんの方はひと通り笑った後、

急に黙りこみネギ先生の方を睨みつける。

その瞬間辺りに強烈な威圧感が漂い始め、

観客も気がついたのか、これ程の大きな闘技場で客席も満員なのにも関わらず

まるで音が消えたかのような静けさと

ラカンさんから発する威圧感が場を支配する。

ラカンさんがその後構えると同時に、

ネギ先生もいつの間にか用意していた

千の雷をもう一度取り込み、構えようとしたその瞬間、

ラカンさんが一気に距離を縮め、ネギ先生のボディに強烈な右パンチを叩き込む。

2380

カゲタロウさんもいつの間にか影に潜んでいたのか、

小太郎君を影で数カ所串刺しにしてそのまま放り投げる。

ネギ先生もなんとかラカンさんの攻撃に耐え、

体制を立て直そうとする、

背後からのラカンさんの追撃を回避した後瞬動で距離を取ろうとするが

ラカンさんが読んでいたのか、

事前に先回りされて先ほど右パンチを叩き込んだ場所に手を当て

中国拳法で言う寸勁を叩き込まれ吹き飛ばすが、

かろつじて打点を逸らして 多少ダメージを抑えることはできたよ  
うだ。

「やはりラカンも気がついたか・・・」

「ど、どついう事じゃ！」

何でジャックがあのだ雷速瞬動に追いつけるのじゃ!？」

「ふん、あれは追いついたんじゃない、

移動先を読んでそこに先回りしていたんだ。」

「おいおい、いくらラカンでもそんな先読み出来ねーだろう・・・」

「貴様らは気がつかんか？」

あの雷速瞬動と言ったか？

移動先に先行放電が出ているのを・・・」

「先行放電じゃと？」

「ぼーやは千の雷を取り込んで雷の属性を身に宿しているが

そのせいで本物の雷と同じように先駆放電、先行放電、主電撃と

3つの工程で瞬動を行っている。

ラカンはその先駆放電と先行放電を見て反応しているようだな。

移動速度は雷に近づいても、思考速度や演算速度は人間並みだからな。

とは言え、そんな事が出来るのは恐らくアイツか

同レベルの戦闘能力のある奴くらいだがな。」

「そんな馬鹿な・・・」

「その馬鹿な芸当ができるからラカンは最強なんて名乗っているんだろうな。」

エヴァの指摘通り、よく見ているとネギ先生の移動前には

ラカンさんの近くや移動先にわずかに静電気のような光が見える。

しかし、あんな物に反応して攻撃をするなんて・・・

ラカンさんも相当異常な戦闘能力を持っているな。

試合の方はというと、ラカンさんがネギ先生の攻撃を

次々と防御していき、ここぞという大技にはカウンターを当ててくる。

ネギ先生が一度距離を取り瞬動で近づくのに

ラカンさんがカウンターで肘を合わせて殴り飛ばし

空中に浮いてる所に変なポーズをとっていき全身から高出力の魔力を放出し

ネギ先生に攻撃して吹き飛ばす……が

先生もぎりぎりです楽坂さんの大剣を出し空中で防御する、

しかし それも読まれていたようで、

防御で硬直した所をラカンさんに背後に回りこまれ、

気がついてラカンさんの方を向いた瞬間に

腹部に右ストレートを食らい地面に落ちていった。

カゲタロウさんの方もいつの間にか小太郎君がダウンしたようで

着地したラカンさんのすぐ側に移動してきていた。



二人がダウンを取られたところで審判がカウントが開始。

カウントが進んでいくが二人共、立ち上がる様子は今のところ無い。

『9!・・・10!・・・ああ〜つと、ナギ選手気がついたようですよ!』

カウントが10になったところでネギ先生に反応があり、

小太郎君も同じように立ち上がろうとしている。

ラカンさんがなにやら話しかけているようで

その話に奮起したのか、ネギ先生が叫びながら立ち上がった。

「エヴァ・・・ここからのネギ先生から目を離さないでね。」

「・・・ああ、わかった。」

魔法世界に着てからのエヴァは、

私の意図が不明なお願いにも何も言わずに聞いてくれる。

エヴァには未来の話は一回もしたことがない・・・

超から聞いたか？・・・そんな様子もないが、

とにかく今はそれに構っている暇はない。

ここでのネギ先生の切り札の魔法をエヴァにしっかり見せておく事こそが

この拳闘大会 最大の私の目的なのだから、

今この場で彼女の邪魔や気が散るようなことを言うわけにはいかない。

ネギ先生と小太郎君がなにやら打合せした後、

小太郎君とネギ先生と手を叩き合わせた後、

小太郎君が10体以上に分身してラカンさん達に突っ込み

ネギ先生は魔法の詠唱に入る。

それに合わせてカゲタロウさんがかなりの本数、数百から千に届くだろうか・・・

大量の影の槍を出して小太郎君を迎撃しようとするが、先ほど手を叩き合った時にネギ先生のアーティファクトをあずかっていたようで

ネギ先生の詠唱に反応し、神楽坂さんの大剣を出し

カゲタロウさんの影の槍を消し去りそのまま突っ込んで

大剣をカゲタロウさんに突き刺し壁に縫い付ける。

小太郎君がカゲタロウさんと戦闘をしていた隙に

詠唱中で無防備なネギ先生にラカンさんが攻撃を加えようとするが

小太郎君がラカンさんに気弾を打ち出して迎撃、

すぐに自身も分身と共に突っ込みラカンさんと近距離の打ち合いに入る。

流石にラカンさんと正面から撃ち合うのは

小太郎君でもまだ辛いようで

十数秒ほど経ったところでラカンさんのアーティファクトの剣で

地面に縫い付けられダウンとなる。

その間にネギ先生の方も魔法の詠唱が完了し

すべての準備が整ったようで、

千の雷を2発、右手と左手に出し2発とも一気に取り込み

ラカンさんと小太郎君の元へと歩いて行く。

エヴァの方を見るが、彼女は逃げ先生から少しも目を逸らすこと無く

いつもの落ち着いていた表情のまま見つめている。

ネギ先生はラカンさんの直ぐ目の前に行き

一言一言かわした後、

私が気がついた時にはネギ先生の肘打ちが

ラカンさんの腹部に決まっていた状態だった。

「・・・なるほど・・・千の雷を2発取り込み

1発では瞬動中の加速の時しか出せなかった速度を

常時出せるようにしたのか・・・

そんな事までできるとハ、エヴァンジェリンの闇の魔法も奥が深い  
ネ。」

「しかしそんな事がホンマに出来るんやろか？」

「実際に目の前で起こっている事実なので可能なんでしょう。」

それに私達にはほとんど視認できませんが

あれだけの速度で尚自由に動いているんですから

思考速度等も相当上がっているんでしょっね。

千雨さんが闇の魔法を使っている時、

思考速度や反応速度、詠唱速度も上がっているようでしたから。」

ネギ先生の恐ろしい速度の猛攻に

流石のラカンさんも反応しきれていないようで

攻撃はしているがかわされ続けている。

だがそれでもラカンさんの長年にわたって鍛えあげられた  
肉体の耐久力を抜くことができないように

ネギ先生も一旦距離を置いて息を整えている。

「エヴァ・・・見えてる？」

「ああ、大丈夫だ。」

「・・・？ お主達・・・あの動きが見えておるのか？」

「・・・いいえ。」

テオドラ皇女殿下、大変申し訳ありませんが、

集中したいので しばらく私とエヴァに話しかけないようにお願い  
します。」

「・・・う、うむ・・・？」

ネギ先生の猛攻と一旦距離を取った所で

ラカンさんの注意がそれてしまったのか、

さっきまでダウンしていた小太郎君がラカンさんの足元の影を利用して

ラカンさんをその場から動けないように拘束する。

それに合わせてネギ先生が更に距離を取り、

先ほど小太郎君に時間稼ぎをしてもらっている間に用意したのか

雷の投擲と千の雷の合成呪文を右手に構え、投擲体制に入る。

ラカンさんも正面からの術の打ち合い、力比べは望むところで

拳に大量の気と魔力を込め撃ち出す体制に入る。

「バカなっ!？」

何で今更力比べを!？」

「ヤツとの力比べなど自殺行為じゃ!！」

「エヴァ……この次だよ。」

「ああ、姉様。分かっていると云ったぞ。」

「うん。」

闘技場内に大量の気と魔力が集まり

その圧力で闘技場の地面がわずかに揺れ始める。

ネギ先生もラカンさんもお互い力の溜めは十分のようで

ラカンさんが先行してネギ先生に向け

右ストレートに載せた魔力と気を打ち込む。

それに合わせネギ先生は千の雷と雷の投擲を合成した槍を引っ込め

開いた左手をラカンさんの攻撃に向け突き出し

足元に先ほど書かれた魔方陣を展開し、

ラカンさんの攻撃を取り込みにかかる。

「敵弾吸収だと!？」

「バカな、不可能だ!!」



ネギ先生がラカンさんの攻撃を取り込み

先程の攻撃で硬直しているラカンさんの懐に飛び込み

ラカンさんを殴りつけようとした・・・その時、

ネギ先生が吐血し、その場に倒れこみながら

先ほど取り込んだラカンさんの攻撃が内部で暴発、

体中から血を吹き出しながら意識を失ったようで、

ラカンさんが慌てて救護を呼んでいた。

先程の試合で負傷したネギ先生と小太郎君は医務室で

近衛さんのアーティファクトで治療をうけている。

本来なら かなり危ない重症なのだが

取り込んだラカンさんの力が暴発した傷はアーティファクトの治療  
が間に合い

それ以外の傷は通常の治療魔法と薬で治療している。

闘技場      V I P 席

試合が終了した後、

テオドラ皇女達はネギ先生達のいる医務室に駆けこんでいき

今この部屋には私達しかいない。

闘技場も試合が終了したということ

観客が徐々に家路についていく。

「私の予想通りラカンの勝ちだったな。

まあ、無理やりラカンの攻撃を取り込もうとしたせいで

暴発はしたが、あれで器も広がったはずだ。

しっかり処置すれば 次は取り込めるだろうから、

もう一度やったら今度は勝つかもな。」

「エヴァンジェリンはこうなることを読んでいたの力？」

「ふ、まさか。」

「ぼーやがラカンの攻撃を取り込もうなどと考えるはずもなからう？」

確かに闇の魔法の究極の形はアレだが

費用対効果が合わんから 私は開発をやめたんだ、

それをぼーやが使うなど想像もするはずがない。」

「へへ、エヴァはんでもあの魔法はできまへんのか？」

「いや、今ならできぞ？」

「ご丁寧にぼーやが見本を見せてくれたからな。」

まだ術の構成や魔力変換等 改良の余地があるが

あの術ならやろうと思えば出きるだろうな。

それなりに調整と訓練はあるが多分問題ないだろう。」

「よくあの戦闘の瞬間に術式を見切れましたね。」

私なんかネギ先生が次から次へと新しい呪文を出すので

どれが切り札だかわからなくなってきたのに。」

「ふん、私を何だと思っている。」

私がぼーやの術を見切ることに集中すればこれくらい造作も無い！」

「……ほんまやるか？」

「……さあ？」

「エヴァンジェリンがこういう時は少し疑ってかかった方がいいネ。」

「

「おい、超。それはどういう事だ？」

「別に気にしなくていいヨ。」

「……つち、まあ、良い。」

私は今日は色々儲けて気分がイイからな。

よし、今日の夕食は私が好きなモノをおごってやるゾ。」

「本当力！ ならこの町で一番美味しいと言っ店の料理を全品制覇して

超包子の新メニューの参考にするネ！」

「わ、私はそんなに食べられませんよう。」

「——」

「エヴァはんは太っ腹やな。」

「ごちそうになりますえ。」

「ヨシ、ジャアサツソク クイニイコウゼ ゴシユジン。」

ホラ、イモウトタチモ ツイテコイ。」

「「はい、チャチャゼロ姉さん。」」

超達はどこで食事をしようか相談しながら

私達を置いてVIP席を出ていく。

私とエヴァも一瞬呆気にとられたが、

超達に続いて部屋を後にする。

『ねえ、エヴァ。』

『……わざわざ念話で何だ？』

『さっきのネギ先生の敵弾吸収の魔法、

帰ったら急いで組みなおしてくれないかな・・・』

『・・・それは良いが、そんなに急ぐのか？』

『うん、できたら魔法球を使って急いでやってほしいんだ。』

『・・・とりあえず聞くが、どうやって組み直すんだ？』

改良点はあるが、あれはあのままでもそれなりに使えるぞ？』

『・・・鍵の魔力を吸収できるように、』

それに特化していいから 鍵での魔法が

同系統・・・創造主の魔法を吸収できるように組んで欲しい。』

『・・・わかった。』

『・・・理由は聞かないの？』

『今はいい・・・後で、 私達の家 に帰ったらでいい・・・』

『そう・・・』

） ちゃっぱり・・・エヴァは 知ってる のかな・・・（

神様から頼まれたお仕事。

その68（後書き）

68話目 投稿



神様から頼まれたお仕事。 その69

side 千雨

新オスティア とある闘技場の控え室

ネギ先生達の治療もひと通り終わり、

多少の傷は残ったものの、近衛のアーティファクトで重症部分は治療したので

後はよっぽど派手に暴れたりしない限りは大丈夫なようだ。

ネギ先生達はラカンのおっさん相手にあそこまで健闘できたので

戦闘に関しては満足しているようだ

やはり優勝できなかったのが気になるようで、

村上達を救う手段を失ったことで多少落ち込んではいるようだ、

その本人達があれだけの戦闘を終えたネギ先生達が

ほぼ無事に帰ってきた事で安心していて

自分達の処遇については、先生達に無理させるよりは

しばらくはこのままでいいと考えているようだ。

「さて、準優勝の賞金が20万ほど出たけど

皆の手持ちのお金と合わせても50万いくかどうかって所か・・・」

「すみません・・・僕達が勝っていればこんなことにはならなかつたんですが・・・」

「な、何言ってるん、ナギさん。」

ナギさんはウチらのためにあんなに頑張ってくれて・・・

ウチ、それだけで・・・本当に十分や。」

「亜子さん・・・」

「でも、手持ちのお金と合わせても半分の50万いくかどうかですから

皆を解放するにはもっと・・・」

「なーに、また稼げばいいーよー!」

そう言えば、和泉はまだ今の変装してるネギ先生の事を  
親戚のナギって人だと思ってるんだっけ。

大河内に口止めはされたけど、

いい加減本当のことを言った方がいいような気がするが・・・

「ういース。」

「あ、ラカンさん・・・」

「ギャアアツ！ 出たあつ、人間核兵器！！」

「夏美姉ちゃん・・・なんやそれ？」

「ほほう・・・ホレホレ！ 人間核兵器だぞーっ」

「いやあああつ オカされるううう！！」

ラカンのおっさんが村上が怯えるの面白がって

上半身の服を肌蹴た状態で村上を追っかけまわす。

「やめとけ、おっさん。」

「・・・っ！ アバババツ！」

私が麻痺の射手をおっさんの頭に打ち込んで止めさせた。

「何の用ですかラカンさん・・・」

「あ、ああ、おまえさん達のこと少し気になってな・・・

ほら、あれだ・・・賞金を取り逃しちまったことだし。」

「誰のせいや・・・」

「で？ 準優勝でもいくら出ただろう？」

いくら足りねーんだ？」

「あ・・・皆の手持ちを集めて、なんとか50万に届くかどうかって所です。」

「そうか、じゃあ無一文ってわけにもいかねーから

俺が70万程貸してやるうか？」

利子は月1割でいいぜ？」

「何たる暴利・・・・・・・・・・しゃあねえな、おっさんはいいよ、

私が100万出すよ。」

「「「えっ!?!」」」

「どうせこんなことになるかと思ってな・・・

さっきの決勝戦、私が今まで貯めた金を全額

ラカンのおっさんに賭けておいたんだよ。

いろんなところに賭けたが、

それで勝った分全額合わせると120万くらいになるから

私が無利子で100万貸してやるよ・・・いいか、貸すだけだぞ  
?」

「千雨さん・・・」

「おいおい、千雨姉ちゃんマジかよ?」

「元手に私のお金を多少使ったけど

ここまで稼げたのはグラフィクスから決勝まで s・・・ナギ達が

負け無しで勝ち進んでくれたおかげだからな。

別に無料でやってもいいんだけど、

それだと先生達や村上達の為にならないだろうから

貸してやるよ、私が死ぬまでに返してくれりゃあいい。」

まあ、私が死ぬつつつても、先輩と契約破棄でもしない限り  
寿命は無いみたいなものらしいしな。

「・・・本当にいいんですか？」

「ああ、おっさんに暴利で借金作るよかマシだろ？」

それにナギ達も覚えておけよ？

賞金狙いで大会に出るのはいいけど、

失敗したときの保険も必要なんだ。

今後は何か計画を立てる時は失敗した時のことも考えて立てろよ。

今回はラカンのおっさんの参戦があまりにも異常だったからしょうがないけど

こう言うこともあるんだからな・・・」

「千雨さん・・・ありがとございます！」

「ちえ〜、千雨のおかげで稼ぎそこねたな。」

「何言つてやがる、おっさんだつて本当は利子なんか取るつもりねーくせに。」

だからと言つて無料でやられちゃナギ達の為にならねーからな・・・  
これくらいでいいんだよ。」

「ハハツ・・・そうだな、俺様としたことが、少し甘かったかもな。  
まあ、決勝戦での最後の敵弾吸収陣が成功してたら俺もやばかったし、

今回のアレで闇の魔法の器も広がったろうから次やったらわからねえしな。」

それに、そこまでに色々見せてくれた新呪文や戦術、戦闘技術、  
どれをとつても一流魔法大学の教授が腰抜かすような一級品だ。

俺には勝てなかったが、もう俺が教えることもねえし、

十分合格点だ・・・お前は今日で弟子卒業だ。」

「ラカンさん・・・」

私は、肩から掛けているポシェットから一枚の紙を先生に渡す。

「ほら、コレが100万の小切手だ。」

ナギ達が治療している間に銀行に行って用意してきた。

これを奴隷長に渡して村上達を開放してやれ。」

「千雨さん……ハイッ!!」

「千雨姉ちゃんサンキューなっ！」

ほらナギに夏美姉ちゃん達も、早速その首輪外しちまおうや!」

「『ハイッ!』」

ネギ先生達は奴隷長を引っ張って、

奴隷長の部屋に用意してある契約証書を取りに部屋から出て行った。

「ふっ……まあ、こんな所か。」

「千雨はよかったのか？」

「100万って言ったらかかなりの金だぞ?」

「さつきも言っただろ?」

あれは先生達の情報を賭けの元締めに流したり



先生達に賭けて作った金だ。

今回は私が勝手にやったが、

実際は先生達が稼いだようなもんだしな。」

「そうか・・・」

「先生達ならその気になりやすぐに稼げる金額だろ？」

それにこれをネタに先生に新しい呪文でも作ってもらう口実にも使えそうだし、

なんて言ったら先生は魔法作ったり合成する天才だからな。

手持ちの20万は私の懐に入ったままだし、そう考えれば私は丸儲けだよ。」

「ちやつかりしてやがるぜ。」

「エヴァの所に世話になってるんだし、

卒業後はあそこで先輩と一緒に暮らす予定なんだ、

これくらいできねーと、エヴァに対抗できねーよ。」

「そりゃそうだな。

・・・じゃあ、俺達もネギ達のところに行くか？

今夜のメシくらいはおごってやるぜ?」

「へえ・・・じゃあ私達皆でおっさんの賞金分食い尽くしてやるよ。」

「へっ、やれるもんならやってみやがね。」

こうしてこの夜は、ネギ先生の準優勝と村上達の開放を祝って

おっさんの奢りで大宴会となった。

side ソプラノ

オスティアでの拳闘大会決勝戦翌日。

千雨からの連絡で、村上さん達開放の経緯を聞いた。

前から裏で千雨が動いていたのは聞いていたが

まさかこの短期間で自力で100万以上のお金を集めてしまつとは

思っていないかったが

後で奴隷長からの振込を確認し次第、

彼女の口座を作ってそこに振りこんでおこう。

昨晚、エヴァに頼んだネギ先生の敵弾吸収陣の改造の方は

まだエヴァが魔法球から出てこないので経過は分からないが

その辺りは彼女に任せるしか無いだろう。

茶々丸の方からも、午前中にはネギ先生達の所へ戻れると

連絡を貰っているので、今日中にはネギ先生達に合流できるだろう。

搜索の方は、旧式のゲートポートがあるとされている建造物の発見、

旧オスティア宮庁街での発信機の反応が2つ、

それと発信機の反応付近でのアーウェルンクス達の部下の発見。

この辺りは事前の情報通りなので

その確認ができた形になる。

夕映の方から、今日休日の申請が通っているそうだと

時間を合わせて午後にも会いたい と連絡が来た、

せっかくなので午後には市街地で会うように約束しておいた。

さて、ネギ先生達の修行もひと通り完了、

後は闇の魔法をもう一段階あげてエヴァと同レベルで使えるようになるだけだが

これはもうアーウェルンクスとの実戦とエヴァの巻物の仮想人格に任せるしか無い。

一応何か問題があってもフォローできるだけの備えはしてあるが

ここ数日私がこの世界に来てから最も忙しくなる日になるだろう。

クルトの方からMM軍の追加やクルトの私兵の配置、鍵の配備で  
新オスティアの警備は飛躍的に改善している。

ネギ先生達の戦力も何名かの仮契約が残ってはいるが

仮にできなくても千雨や茶々丸の戦力強化でカバーできると思っし、  
遊撃に出せるラトナ、ピュラや超、葉加瀬、

最悪 私とエヴァで単純な戦闘においては問題無い。

アーウェルンクスや造物主とネギ先生の戦闘も

先日の決勝戦でラカンさんの攻撃を取り込もうとしたことで

ネギ先生の闇の魔法の器も広がったとエヴァからお墨付きは貰って  
いるので

後はエヴァの敵弾吸収陣の改良が終われば問題無いだろう。

(・・・私もずいぶんと面倒臭いことをやっているけど)

これが終わったら本当の意味でのんびり暮らせるから

もうちよつと頑張りますかね。」

「何を頑張るの力？」

「・・・？ 超か。」

どうも最後の方が声に出ていたようだ。

「ん〜、このお祭りでエヴァや皆に付き合うことかな？

流石に連日この調子だと疲れてね。」

「ソプラノがこの程度で疲れるなんて考えられないネ。

「・・・今回のテロ事件、奴らの最後の仕上げの話カナ？」

「・・・そっか、超は一応知ってるんだっけ？」

「データとして残っていた部分だけドネ。

今晚から明日に掛けて起こる大規模なテロ・・・」

「超の世界ではどうなったの？」

「・・・ネギ坊主が敵の首魁を討ち、英雄となる・・・

だが、その後 何年か後・・・魔法世界は崩壊すル。」

「この世界はそうはならないよ・・・超。」

「ああ、その為の準備も出来てるシ、

既にワタシの知ってる未来とは大きくかけ離れていル。

政治体制も魔力減衰現象も、そしてワタシの研究モ。」

「そう言えば超の例のモノはもう出来てるの？」

「フフツ、気がつかないカ？」

もう既に起動してるヨ。」

「それは・・・全く気がつかなかったよ。」

「まあ、気が付かなくて当然だヨ。」

ほとんど眼に見えないナノマシンによる火星のテラフォーミング。

最低でも数十年から百年近くはかかるカナ？」

「それもこれも、超の知識があればこそだよね。」

「ワタシは魔法世界の住人を地球に迎え入れることしか計画できな  
かった。」

でも、ソプラノの計画なら魔法の補助無しで

この火星自体を人の住める星にすることが出きる。

人類全体の為にはコチラのほうが良い計画ダヨ。」

「そうでもないよ、私はただ皆とのんびり暮らせればいいんだ。

魔法世界が滅んだり、地球に大量の移民が押し寄せて

戦争なんか起きたらあのんびりできないしね。」

「世界を救う理由がのんびり暮らしたいだなんて言うのはソプラノくらいダヨ。」

「世界を救う・・・ね。」

私はただ口を出しただけ、

魔力減衰現象は世界樹、魔法世界の政治体制の改善や後押しはクルト

火星のテラフォーミングは超、私はそれぞれに口を出しただけだよ。

「まあ・・・そういう事しておくネ。」

超がいたずらでも思いついた様な微笑みを浮かべて私を見つめる。

不意に・・・なにか妙に恥ずかしくなったので超から目をそらす。

しばらくそうして二人で過ごしていたが、



ちょうどいい機会なので、エヴァの件について超に話を聴くことにしてみた。

「・・・超に一つ聞きたい事があるんだけど？」

「ん？ なにか？」

新婚旅行の行き先か？」

「その話はまだ早すぎない？」

「・・・じゃなくて、超は・・・エヴァに未来の話をしたことある？」

「・・・いいヤ？」

葉加瀬には学園祭の時に協力してもらったメ

昔、簡単に話したことがあるが、それ以外の人には話をしたことはないヨ。」

「そっか・・・」

「・・・何でそんな事を聞くネ？」

「・・・魔法世界に来てからのエヴァは・・・」

まるで未来の事を知ってるかのような行動・・・と言っか

違和感があつてね・・・少し気になって。」

「ワタシは話してないし、聞かれたこともないけどネ。

ソプラノの気のせいじゃないのか？」

「・・・そうかもね、大事な時が近づいてきたから

少し神経質になつてるのかもね。」

「なんなら精神安定剤でも処方しようか？」

「いいよ・・・なんか変なモノ入れられても困るし。」

「ワタシはそんな事しないヨ。」

「・・・前に私に催淫剤を仕込もうとした前科者が言うことかね  
？」

「・・・さ、さあ、なんの事力ナ？」

「まったく・・・」

(エヴァの件は、すべてが終わった後・・・

私達の家に戻ったら話すと言ってくれたから一先ずはその時でいいか・・・)

side 夕映

オスティア市街地

「イキますか？ いいんちよ……」

「イ、イキ……ません！」

「なんですか その毒々しい色合いで……そのぬるつとした液体が付いている……」

「おおっと いいんちよう そこまでだ！」

「何がですか、コレットさん。」

「声だけ聴いてると変に聞こえなくもない会話はそこまでだよ。」

「訳がわかりませんわ。」

私とコレットは委員長達のペアと一緒に午前中はお祭りを楽しんでいます。

午後はソプラノとの約束があるので

私だけ抜けるように話してはいますが、

どうも、この三人共着いてきそうな予感がしてならないです。

「けど、休みがもらえたのは嬉しいけど

できたら昨日がよかったね！ 委員長。」

「うるさいですね！ コレットさん！

私だって生で観たかったです！

ああ・・・それにしてもナギ様の試合・・・何度思い出しても素晴らしいですわ。

あのラカン様でも気づかぬほどの さりげない魔方陣敷設の手さばき・・・

流れるような連続遅延呪文解放・・・」

( ナギの事になるとオカしくなるですね・・・この人・・・ )

「負けたとは言えあの強さ！

やはりナギ様はナギ様の生まれ変わり！

いえ、息子！

いや、本人に違い有りません！！

「危ないって委員長。」

「お嬢様が楽しそうで何よりです。」

(ここにいたら、あの人と一緒の変人だと思われるでしょう……)

今のうちに逃げないと。

委員長が恍惚の表情で展望台の手すりに立ちながら空を見上げて騒ぐ。

その様子は誰がどう見ても変人。

私はあの人と同じだと思われないために一人そつとその場から逃げ出す……

「……………そう思いませんか？ ヲエさんっ!？」

「……………あれ？ ヲエさんちょっと、お待ちなさい!」

「不味い、バレたです!」

「あゝユエひどいよゝ、私だって委員長と同じ変人だと思われたくないのにい。」

「ユエさん、単独行動は許されていませんよ。」

「私の事はいいので放っておいて欲しいです!」

せめて委員長とだけは一緒のグループだと思われたくないです!」

「それはどういふ事です！ ヲエさん!！」

「見たまんまです!」

周りが注目する中、私が委員長の仲間だと思われないように

早足で市街地の中心部の方へ移動しているその時、

前方から何か見覚えのある人達がこちらに向かってやってくるのが見えた。

(……………あ、あれはのどか？)

それに猫耳が生えているけどアスナさんに、ネギ先生？

何故か皆へんな眼鏡をしています。が認識阻害ですかね？

「ゆ……ゆえ……ゆえ……？」

「……っ。」

「？」

（これは不味いです……のどかに会えたのは嬉しいですけど

私だけならまだしも、委員長達が居る所で会うのは不味いです。

彼等は一応お尋ね者扱いなので、委員長達が気がついたら

すぐにも取り押さえようとしかねない……）

私がこの場をどう切り抜けようか考えていると

そんな事はお構いなしかのように、のどかが私に向かって抱きついてきた。

「ゆえーっ！

ゆえっ！！

無事だったんだね……！

心配したよ……無事で本当によかった……！

「あう……え〜つと……そのですね……」

「ゆ、ゆえちゃんどーしたのよー一体!？」

下の廃都に捕まってると思ってたわよ!」

「え……あの……」

「ゆえ 今までどうしてたの？」

あれー？ その制服は何……？」

「あ、あの……ですね……あう。」

「ユエさん、この方達と知り合いですの？」

委員長はまだ気がついてないようだ……

このままなんとかやり過ごせばごまかせるでしょうか？

「お〜い……やっと追いつい……あれ？」

「お嬢様ツ？」



「ちょ……委員長！」

そいつら指名手配……じゃなくて重要参考人の手配されてる奴らだよ！」

「え……？」

(ちょーーーーっ！！) 「レットオーーーーーッ！！」

なんでこんな時だけ認識阻害見破ったり、記憶力がいいんですか！  
！) ーーーー

「何ですって!?!」

「しまった！ こっちから話しかけたから認識阻害眼鏡の効果が薄まっちゃった!?!」

「ど……どこかで見たコトがあると思ったら！」

ゲートポート同時爆破テロ事件の重要参考人ですか!?!」

いや、委員長は気がついてなかったですが……

委員長は騎士団用の剣を装備してのどかを捕縛に掛かる。

「とりあえず、逃げられるといけないので多少手荒ですが拘束します！」

「キャッ！」

「本屋ちゃん！」

委員長はのどかに捕縛結界弾を打ち出しのどかを拘束する。

あの弾は一応怪我をさせないように捕縛できますが

いきなり撃ち出していいようなものでもないのですが……

「本部、本部！」

こちら休憩中のセブンスープ分隊、手配されている重要参考人を発見！

映像を送りますので至急応援を……っ！!?」

委員長が魔道無線で応援を読んでいる間に

ネギ先生がのどかを捕縛している結界を手で握り

術式を破壊する。

「そ、そんな！ 結界弾を素手で！！？」

「ま、待つてください、アリアドネー騎士団の方ですよね？」

「僕たちは争うつもりは……」

「我が国やMM、ここオスティアでは参考人扱いですが

それ以外の他国では あの事件の犯人として手配されている貴方達を

今ここで逃がすわけにもいきません！

多少手荒いですが、拘束させていただきます！

コレット！ ビー （ベアトリクス） ！ いきなさい！

「え〜いいのかなぁ……」

「かしこまりました、お嬢様！！」

「あ、コレット待つですよ！」

ベアトリクスさんがネギ先生を体術で拘束しようと攻め立てるが

あっさりとかわされてしまう。

その様子を見たコレットは、私の静止を聞かずに

ベアトリクスさんの援護に向かってしまう。

「あゝ．．．何でこうなるですか．．．」

コレットが参加したことで回避だけでは不味いと思ったのか、

二人の攻撃のタイミングに合わせてネギ先生が二人を投げ飛ばすが着地できるように投げたのか少し飛ばされただけで

二人とも無事に着地できている。

「お、落ち着いてください．．．一先ず話を．．．」  
　　↓↓↓

「む．．．」「くっ．．．」

「何をしているんです、装剣なさい　二人とも！

最大出力で仕留めますよ！」

「だめです　委員長！！

まずは話を．．．って!？」

委員長もコレット、ベアトリクスさんも頭に血が上っているようで

私の話を聞いてくれない。

そう言っている間にも三人とも捕縛弾を最大出力で撃とうと  
魔力を込め始める。

「風花・・・」

・  
ネギ先生もそれに対抗して何か魔法を仕掛けるつもりのようなが・

「マズいですっ!?!」

(こつこつ時のネギ先生の取る行動は武装解除の魔法・・・)

それをネギ先生の魔力で行なわれたら・・・) 1111

「くっ、障壁展開です!」

「あっ ダメ先生・・・!!」

今の先生の魔力の出力では・・・」

『候補生 セブンシープ!』

皆聞いている？ 総長のセラスよ。』

「武装解除！！・・・あれ？」

ネギ先生にも予想以上の出力が出たらしく呆然としている。

私はなんとか障壁が間に合ったが、委員長やのどか達は・・・

「な！？」「えっ・・・？」「ひゃ？」「はわ」

「・・・やっぱりです。」「うー」

「あ・・・あれ？」

「こ・・・こんのバカネギはー・・・」

ゴンッ！！

明日菜さんの拳がネギ先生の頭に突き刺さる。

「・・・っ！？」

「あなたは脱がさないと気が済まないのー！？」

「わーんスママセン！ 力の加減がうまくできないみたいで！」



私の心には暗雲が立ち込めたのだった。



神様から頼まれたお仕事。

その69（後書き）

69話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その70

新オスティア市街地

side 夕映

先ほど、街中で下着姿にされたコレット達に

ベアトリクスさんがどこからか出した制服を着てもらい、

今 私達はオスティア市街地のあるオープンカフェで

ネギ先生達にアリアドネーの警備隊に所属している理由を説明している。

「・・・とまあ、そういうわけで私はアリアドネーの警備隊に参加して

このオスティアに来てるんですよ。」

「夕映さんがアリアドネー学園に所属している経緯はいまいち分かりませんけど」

千雨さん達と連絡を取って村上さん達を探していたんですね？」

「はい、皆どこに飛ばされたのか分からないので

アリアドネー方面は私が主に探索していたんです。」

ソプラノ達の事を話す事はできないので

なんとかごまかしつつネギ先生に説明する。

ネギ先生ものどかも、いまいち釈然としない様子だったが

セラス総長がネギ先生に協力的だったというのと

アリアドネー方面ではくれた皆を探しているという理由でなんとか納得してもらった。

「と、とにかく無事でよかったですよー ゆえー。

皆で一緒に日本に帰ろ！」

「・・・え？」

「お待ちなさい！」

のどかが私の手を取り一緒に私にネギ先生達と合流して帰ろう、と誘って来たが、委員長が待ったをかける。

「勝手に話を進めないでいただけます？」

ユエさんは現在 我がアリアドネー騎士団 オスティア警備隊として  
任務中の身です！

更に言えば、このユエさんは試験で自分の能力を偽ったり

授業を真面目に受けなかったり、多少問題がある所がありますが

戦乙女騎士団 士官候補生として将来を嘱望された人材です！」

「……え？ 私 そんな事になっていたんですか？」 1111

これはマズイ……この件が終わったらアリアドネー……いや

魔法世界にはしばらく来ないつもりだったのに

私の知らない所でなにやら将来の就職先が勝手に決まりつつある・

「いくらセラス総長から逮捕しないように指示されたとは言え

こ、公衆の面前で私達にあのような辱めを与えた貴方達は

ゲートポートの件がなくても 十分婦女暴行で逮捕できるのですよ  
！」 / /

「あ、あれは事故といつかなんとといつか……」 1111

「貴方達の様な どの誰かとも分からないような輩に

我が国家にとって優秀な人材をホイホイと渡せるわけがないでしょ  
う！」

「ちよっ……ちよっとまっってください！

そ、その……さっきの服のことに關しては、  
後できちんと謝罪させてもらいます。

僕達の身分についてはセラスさんに問い合わせていただければ確認  
が取れるはずです。

ですから一度確認してみてくださいませんか？」

「……い、一応確認を取りますが、

総長からゲートの件はともかく 服の件に關して何も指示がないよ  
うでしたら

被害届を出して貴方達を逮捕しますからね！」

「そつだよ、そつだよ!」 「…………コク。」 / /

コレット達はゲートの件云々よりも、

公衆の面前で下着姿にされたことのほうが頭に來てるようですね。

……まあ、気持ちは分からないでもないですけど。

委員長はセラス総長に連絡を取り

ネギ先生達の身分の確認と指示を仰ぐ。

『…………という理由で、その子達はサウザンドマスター…………』

ナギ・スプリングフィールドの息子のネギ・スプリングフィールド  
君と

旧世界でのネギ君の生徒達なのよ。』

「えええええ……………!!!??」

何ですってえ……………!!

ナギ様のむすっ…………モッコッ!」

「いいんちよ！ あんまり大きな声出しちゃダメー！

一応一部の国では賞金首なんだから、人目をひいちゃ・・・」

「ほ・・・本当なのですか？

本当にナギ様の御子息なのですか？」

「は、はあ・・・」

なにやら、委員長はネギ先生の顔を見つめながら

怪しんだり 赤くなったり 怒ったり にやけたりと百面相をしている。

コレットやベアトリクスもネギ先生の顔を見つめては表情をコロコロ変えている。

普通に出会ったら感激で握手でもねだるんでしょうがさっきの件があるのでかなり複雑な心境のようです。

委員長達が百面相をしていると、

私達の背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「・・・おや、これはこれは 誰かと思えば、

アリアドネーの名門 セブンシープ家のお嬢様ではありませんか。」

この場にいる皆が声のする方を見たが・・・

そこにはオスティア総督 クルト・ゲーデルさんと付き人の少年、

それにMM兵が完全武装ですべての道を塞ぎ、

私達を完全に包囲していた。

「え・・・？ クルト 『ちよつと待つてください！』  
・・・  
？」

私がクルトさんに気が付き声をかけようとするど、

彼から念話でストップがかかった。

『え〜つと、クルトさん私達になにか御用ですか？』

『夕映さんには特に用事はないのですが、



ネギ君に少し用事がありました。

私がこれからすることを黙って見ててくれませんか？

あと私とは初対面を装ってください。』

『それはいいですけど、ソプラノは知ってるんですか？』

『今日 私がネギ君に接触することは何度も話しているので問題はありません。』

『分かりました、初対面を装って黙ってればいいんですね。』

『はい、よろしくお願いします。』

クルトさんはネギ先生になにか用事があるようなので

とりあえず私は彼の指示通りに事の成り行きを傍観することにする。

「おや……？」

それにそちらの少年は……？

どこかで見たような覚えがありますが……」

委員長がネギ先生達を含めた皆に手で静止するように合図をし

クルトさんに話しかける。

「ゲーデル総督……」

記念祭期間中のオスティア市内での公権力の武装は

我々 アリアドネー騎士団にしか許されてないと記憶していますが  
？」

「いや何……私は幼少より虚弱体質でしてねえ。

恥ずかしながら 何人かの部下を連れなければ

外出もままならないという有様で……」

ごくごく私的なボディガードのようなものです。

お気にになさらないでください。」

この人もエヴァンジェリンさんやソプラノとの付き合いが相当長い  
為か、

かなりの剣の腕前を持っていて、私などよりもよほど強いくせに

堂々と正面きって虚弱体質等と言ったり

これだけの完全武装の兵を率いてボディガードと言っているのける辺

り、

かなり図太い神経を持っているようだ。

クルトさんは政治家をやっているので

それくらいでなければやっていけないのかも知れないが・・・

「総督・・・わっ?」

委員長がネギ先生のローブのフードをネギ先生の頭にかぶせ  
ベアトリクスさんにネギ先生を下がらせるように指示を出す。

「それで?」

その虚弱体質の総督様が 何の用です?」

「いやなに どうも理解しがたいのですが・・・

女の子の集団が 全裸でアーケードで暴れていると言う通報が

総督府に入りましてね・・・

私の街の風紀が乱れるのを放っておけず 慌てて現場に赴いてみた  
のですが・・・」

クルトさんは話しながら懐から数枚の写真を取り出し

私達に提示する。

・・・よくみると顔は巧妙に隠されていますが

いつ撮ったのか知りませんが どうみても委員長達の服が武装解除の魔法で飛ばされ

下着姿になった時の写真です。

「この全裸の痴女集団、

もしやあなた方ではありませんよね？」

「違いますっ！！！」 // /

「それは良かった、

転化の戦乙女騎士団が白昼堂々 路上ストリップ！

等とニュースになったらオスティアは一大事です。

では、調査のため これは焼き増しして部下に配布を・・・」

「「ちよっとーっ!?!?」「 // /

クルトさんは先ほどの写真を部下の兵隊さん達に見えるようにばら撒き始める。

（よかったです・・・あの時防御障壁が間に合わなかったら

私もあんな写真を取られるところだったんですね・・・） 111

「と、まあ 冗談はさておき・・・」

クルトさんは先程の写真を見事な手さばきですべて回収し、

また懐にしまう・・・あんな写真を取られているなんて・・・

委員長達はしばらくクルトさんにいのように遊ばれるでしょうね。

「先程も言いましたが、その少年・・・

どこかで見覚えがあるのですよねえ。」

クルトさんのわざとらしい演技をしながら語る言葉に皆の顔がこわばる。

「さて……どこで見たのか……」

いや、まてよ……？

確か全国でのゲートポート破壊テロの重要参考人の書類で……？

いやいや、違いますね……」

（くっ マズイですわ ユエさん。）

（まあ、あれだけあからさまな演技をしていますから、

何か裏があるんでしょうね……）

「ああ！ そうか、思い出しました！

なんと君は 世界を救ったかの大英雄のご子息ではございませんか！

いや、この地ではこう言い換えたほうがいいでしょうか……

かつて自らの国と民を滅ぼした魔女 災厄の女王……

アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの遺児……と！」

「っ！！！」

ネギ先生がかの英雄の息子だとは知っていましたか、

その奥さんがアリカ姫だったとは。

私も歴史の授業でナギさんとアリカ姫の話は聞いてはいましたが、

その二人に一体何があったのですか・・・

とにかくクルトさんは二人の事もネギ先生の事も

かなり詳しく知っているようですね。

「おや・・・」

「・・・」

「これは意外ですね・・・ネギ君。

これほどの衝撃の事実を告げられてもたじろぎもしないとは。」

「・・・推測はしていました。

だから・・・驚きません。」

「ほお・・・10歳の少年が叫び出すでもなく

泣き喚くでもなく・・・冷静ですね。

これは君に対する評価を 少々改めねばいけないようだ。」

「ですが……貴方は一体何者です？」

僕の……母を侮辱しようということなら、ただ冷静ではいませんですよ。

「い……いけませんネギく……さんっ!!」

「フ……」

ネギ先生がお母さんの事を侮辱されたと感じたのか、

頭に血が登って今にもクルトさんに殴りかからんとするばかりです……が、

クルトさん、どうやらネギ先生を挑発して手を出させて拘束しようということですか。

何らかの意図を持ってネギ先生を拘束、

もしくは手元に置いておきたいように感じます。

「待ちなさい!!」

(?!?……セラス総長。



なぜ、この場にわざわざ……？)

「そこまでよゲーデル総督。」

今貴方にその子を逮捕する権利はないわ。」

「『セラス総長！？』」

クルトさんの兵が通路を塞いでいた一方から

セラス総長が騎士団を率い、クルトさんとMM兵に対面する形で騎士団を布陣する。

クルトさんもそれに応じる形で兵の配置をかえる。

「これはこれはセラス総長、逮捕などとは侵害ですね。」

私はただ 総督として市民との会話を楽しんでいただけですよ？

……尤も 貴女の言うようにこの少年を逮捕などするつもりは有りませんがね。

彼等はこちらオスティアやMMでは重要参考人として丁重に扱う用意がありますし、

彼は かのJ・ラカン氏とあれだけの死闘を演じた偽ナギ本人だ。

虚弱体質の私など睨まれただけで吹き飛んでしまいますよ。」

セラス総長が妙な間を空けるが……念話で会話しているのでしようか？

「おやおや、人聞きの悪いことを言う……いや 思う。

一体何を根拠に？

いやいや 良かった、

口に出していたらコレ……問題になっていましたね。」

セラス総長とネギ先生の表情がこわばったことから

なにやらセラス総長がネギ先生に忠告か警告を

しているところを念話盗聴されたようですね。

クルトさんも、普段私達やソプラノと話す時とは違い

仕事向けの顔でしょうか？

こんな事ばかりやっていたらそりゃセラス総長にも警戒されるですよ……

完全に悪役ですし・・・

それにクルトさんは拳闘大会優勝者のラカンさんとは

同じ紅き翼所属ということで知り合いのはずですが、

ラカン氏　と言う呼び方は他人行儀に感じるですね・・・なにかあるんでしょうか？

「セラス総長。

脇役は舞台袖でおとなしくしてもらえませんか。

さて、ネギ君。

試合は見せてもらった・・・いやはや　驚いたよ、

驚愕したよ、驚嘆したよ、見事なものだ。

君の才能は千の贅辞に価する。

紳士的な試合の中とはいえ

あのJ・ラカン氏とあれだけの死闘・・・

彼に真正面から立ち向かい、勝っていてもおかしくない。

いや、次戦つたら勝ってしまうかも知れませんか。

君の力は本物だ。

全く以て空前絶後だ 前代未聞だ 信じられません。

・・・さて しかし

その力を手にれた君は一体ナニをしようとするのです？

平和な国の学園に戻って平穩に暮らす？

いやいや それはつまらないでしょう。

ネギ君・・・その力があれば君は世界を救える！」

「な・・・何の話を・・・」

どうもクルトさんとソプラノの目的がはっきりしません。

ネギ先生を自分の支配下に置き自由にしたい？

政治家としてならそれも分かりますが、

クルトさんの言ったことが本当なら、

ナギさんの息子としてならともかく、

アリカ姫の息子としての側面も持つネギ先生は

祭り上げるには少々厄介な存在です。

単純に力や能力なら、クルトさんならラカンさんを雇うと言う方法もあるです。

それにソプラノ達となにやら企んでいるのに

ネギ先生をわざわざ巻き込む意図はなんでしょうか？

ソプラノとの計画にネギ先生を巻き込むつもりなら

もっといい方法があるですし。

情報が足りないですね・・・

アリカ姫のことにしたって、クルトさんの話や歴史書が真実とも限りません。

実際エヴァンジェリンさんやソプラノは過去に賞金首として

かなりの悪名を轟かせていましたが

実際にはその逆で、一部では英雄扱いする人達もいるそうですし。

この件はもつと奥が深い話なのかも知れません……

「それとも その力であるアーウェルンクスを殴って満足としますか？」

いやいや小さすぎる、君はそんな小さい男ではないはずだ。

力を持つ者は世界を救うべきなのです……」

クルトさんはその後も ネギ先生が子供の頃悪魔の集団に襲われた村の話や

ナギさんの話し、アリカ姫の話や等を持ち出し

ネギ先生を挑発して行く。

今までネギ先生が知ろうとしてもできなかった内容が

クルトさんの口から 次々と語られる。

その内容が母親の汚名であったり

ネギ先生の幼少住んでいた村の話であったりするが、

クルトさんの口調が終始一貫してネギ先生を挑発しているようで

先生も我慢して聞いてはいるが

拳を握り締め肩を震わせ、明らかに怒りをこらえているようです。

「・・・君には大変な価値がある・・・」

君にはこの世界を支配できる力があるのですよ？

いかがです？ 私と手を組みませんか、

世界の半分を差し上げましょう。」

「・・・な？」 1111

クルトさんも人が悪すぎますね・・・あの悪意に満ちた表情といい

的確にネギ先生の怒りのツボを突く会話術といい・・・

ここにいる人は皆 貴方の事を完全な悪役だと思っていることですよ。ね。

「・・・なんです？」

何の話をしているんですか・・・

何者なんです！　　あなたはっ！！」 #

ネギ先生の激高と共に魔力が放出され、

その魔力の圧力で周辺のテーブルや椅子、道端の小石等が

吹き飛ばされ、その飛ばされた小石がクルトさんの頬を掠める。

「ダメですか・・・世界を支配するということは

つまり 世界を救うということでもあるのですが・・・

子供には難しかったですかねえ。

・・・・・・・・ですがコレで正当防衛が成立しました。

私の実力を行使しても問題ないですね」

「ゲーデル、貴様・・・」 #

「セラス総督、お下がりください。

総員！ 丁重におもてなししなさい。」

クルトさんの指示が出たことで

MMの兵士が全員でネギ先生の捕縛にかかるが、



ネギ先生は闘技大会で見せた千の雷を取り込む闇の魔法で

一瞬の内にMM兵を倒してしまう。

「くっ……仕方ありません！」

あの少年を捉えなさい！

総督を守るのです……！」

「いえセラス総長、それには及びません。」

「っ……!?!?」

セラス総長がアドリアネーの警備隊をネギ先生捕縛に向けようとす  
るが

クルトさんが静止し、一歩前に出たその瞬間、

気がついたときには既に持っていた刀を抜刀し

ネギ先生に斬りつけていた。

「ほお……物理攻撃はまるで効きませんか。

こんな化物を相手に素手で殴り合いとは……

さすが」・ラカン氏と言ったところですか。  
でしたら……」

斬りつけられたネギ先生は片足と片手が飛んだように見えたが  
出血も無く、見た目ほどのダメージも無い。

どうやらあの魔法を使用している間は

自身が雷の精霊と同様に 雷で身体を構成しているようで  
刀などの物理攻撃は効果が薄いようだ。

「魔を調伏する我が剣技、受けてみなさい。」

ネギ先生の手足が元に戻る前に

クルトさんが次の攻撃に移り、

ネギ先生は手足が一時的に斬られたことで

回避することができず、魔法障壁を多重展開し

クルトさんの斬撃に備える……が、クルトさんの斬撃は

ネギ先生の魔法障壁をすり抜け

雷で構成した身体を切り裂き、

どういう原理か私には理解出来ませんが

ネギ先生の身体から出血が確認できた。

「斬魔剣、弐の太刀。

神鳴流は人を護り 魔を狩る 退魔の剣。

斬るモノの選択など 造作もありません。」

「ネツ……」 「ネギ様!？」

ネギ先生が斬られたことで、

今まで黙って話を聞いていたアスナさんや委員長が

ネギ先生を守ろうと先生の前に出ようとするが、

クルトさんが先手を打ち、

さっきのネギ先生の時と同じような斬撃を二人に向けた撃ってきた。

「奥義・斬魔剣 式の太刀・・・使い方次第でこのようなこともできます。」

クルトさんの斬撃を二人はそれぞれの剣で受けようとするが、

それも先程のネギ先生の時と同じように通りぬけ

二人の衣服を切り裂いていく。

「くっ・・・知るかあっ　このヘンタイメガネ!!」

「これはこれはずいぶんとお転婆なお姫様ですね。」

少々調教が必要でしょうか？」

アスナさんは衣服が着られてほぼ全裸に近い状態になっても

クルトさんに斬りつけていくが　クルトさんもカウンター気味に斬撃を飛ばし

アスナさんを迎撃する。

「うっ・・・こんなの私には効かな・・・がっ!？」　　1111

アスナさんは自身の魔法無効化能力で消し切れると思ったのか

反射的に少し身体をずらしたただけそのまま受けようとしたが

クルトさんの斬撃が無効化されずに、そのまま斬りつけられる。

それを見たネギ先生やのどか、クルトさん、

斬られた本人さえも驚いているようだ。

「アスナさんっ！ アスナさんっ！！」

「直撃とは意外ですね・・・大方弾かれるか消されるかと思いましたが・・・ふむ。」

まあ、死ぬような傷でもなし 無力化できたのでよしとしましょう。

「

クルトさんはアスナさんと委員長を無力化し、

倒れこんでいるネギ先生の上に乗リネギ先生を拘束する。

「・・・・・・・・っ！！」 #

「ふっ・・・・・・・・いい目です、ネギ君。」

君はその力で本当は誰を殴るべきか 分かっているのですか？

本当の敵が誰なのかを？」

「!?!?」

「教えて差し上げましょうか？」

「……っ」

「君にとっての真の敵を。」

「僕にとっての……真の敵……?」

「ピンポーン　ここで問題です。」

君にとっての真の敵とは次のどれでしょう？

A　世界滅亡を企む　謎の秘密組織。

B　君の父を奪った誰か。

C　君の村を焼き　君の人生を根本から変えてしまった何者か。」

「!?!?」　「!?!?」

……私も聞きましたが、ネギ先生の村を襲った悪魔の集団を

差し向けた者……クルトさんはその人達を知っているのですか……

ナギさん アリカ姫 そしてネギ先生の村を襲ったモノ達。

クルトさんはネギ先生の過去に関して かなりの事を詳細に知っているようです。

「何をっ……僕の村の事を何か知っているんですか!？」

「フフ……賢明な君になればわかるハズ……」

事件の真犯人は常に……その事件が起こることで

最も利益を得るはずだった誰か……」

「!？」

「おっと ヒントはここまでです。」

もし君がすべてを知りたいと思うなら、

私と手を組みなさい。

君の願いを叶えて差し上げましょう。

もし……断るのでしたら……」

クルトさんはネギ先生の首もとに刀を当ててネギ先生に告げる。

「仕方ありませんね。」

・・・君のような危険な存在は

ここで消えて貰う・・・というのも世の為かも知れません。」

「ネギ先生！！」

のどかの声が聞こえたことでほんの一瞬、

クルトさんが気をのどかに向けた隙に

ネギ先生が事前に待機状態で用意していたのか・・・

千の雷を更に取り込み、拳闘大会でラカンさんとの正面からの殴り  
合いで見せた

闇の魔法で千の雷を2発取り込む段階、雷天双壮で

クルトさんの拘束から一瞬で逃げ出した。

「ぬっ！・・・ほう。」

「お断りします！」



アスナさんをあのような目に合わせる人と手を組むことなどあり得ません!!」

「ふむ……これはまた……こうなると先程のような不意打ちも効きませんし……」

さてどうするか……」

クルトさんはネギ先生の様子を観察しているが、

単純に私から見ても、怪我をしたアスナさんやのどかの居るこの街中で

ネギ先生が全力を出せるとは思えない。

それに先程のクルトさんの攻撃でかなりの怪我を負っているようですし

頭に血が登っていて正常な判断ができるとも思えません。

クルトさんも気がついていっているようで、

ニヤリ と笑ってこのままネギ先生を拘束しようと動き出した時、

どこからか煙幕弾が二人の間に打ち込まれ

煙幕が晴れた時にはネギ先生達はどこかに逃げてしまった。

『夕映さん、ご苦労さまでした。』

『いえ・・・私はただ見ていただけです・・・』

あ・・・一つ、聞いてもいいですか？』

『为什么呢？』

『クルトさんは・・・いいえ、エヴァンジェリンさんやソプラノは

ネギ先生の過去の事を・・・いや、

知った上で私達に何も言わずに放置しているのですか？』

もうここに来てソプラノ達がネギ先生の過去の話を知らないとは思えないです。

しかしそうなると思った上で私達には何も教えてくれないことになるのです。

『・・・ふむ、そうですね・・・私もソプラノさんも真相を把握

しています。

今回ゲートポートでのテロの時期とネギ君達がこの世界に来る時期が偶然重なったため

多少複雑な状況になってきていますがね。』

『そうですか・・・』

『基本的にソプラノさんやエヴァンジェリンさんは

ネギ君の事を放置しているわけでは有りませんが

積極的に関わろうともしません。

補助的に貴方達を派遣したり 一部でネギ君の修行に協力したりしていますが

彼女達はネギ君には独自の判断で動いて欲しいと思っているように感じられますね。

ソプラノさんが夕映さんに特に指示を出さないということは

夕映さんは夕映さん独自の判断で動いて欲しいということでしょうから

あまり私やソプラノさん達の思惑を考えすぎずに

夕映さんの考えで 自由に行動してください。』

『はい……』

『それでは私は今後の予定が有りますのでこれで失礼します。』

『はい。』

クルトさんの話を聞きましたが いまいち釈然としません。

どうしてソプラノが何も教えてくれないのか……

いえ、確かにいきなり ネギ先生の過去の話が聞かされても困るのですが

何も聞かされないと それはそれで何かむしゃくしゃするです。

そう言えば今日は色んなことがあって忘れていましたが

午後にソプラノと会う約束をしていたんですね……

その時にでも少し話をしてみましようか。

神様から頼まれたお仕事。

その70（後書き）

70話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その71

新オスティア市街地

今日の午後は夕映と遊びに行くことになっているので

待ち合わせ場所のカフェでお茶を飲んで待っているが・・・

さっきから少し離れたところから騒ぎ声や戦闘音が聞こえる。

街中で小規模な賭け拳闘大会でも開かれているんだらうか？

この祭りの期間中は、街中でイキナリ賭け試合が普通に行われるので

多少の戦闘音は珍しくはないが、

それにしても少し派手な試合になっているのか、

かなりの音と衝撃波がここまで伝わってくる。

そうしてしばらく待っていると前方から夕映が数名連れて

こちらにやってくるのが見えた。

夕映達に向かって小さく手を振ると、

向こうも気がついていてなのか、

夕映が私に合わせて同じように手を振って私のところにやってきた。

「夕映久しぶり〜、元気だった？」

「久しぶりも何も、この間あったばかりですよ・・・でも敢えて嬉しいです。」 / /

「え？ ユエさんの待ち合わせの相手ってこの人なのですか？」

「そうですね委員長・・・」

だから言ったじゃないですか、男の人とデートなんかじゃないって。」

(.....?)

「コレットさん.....」 #

「い、いや、だってユエ昨日はすごく楽しそうに準備してたから

私はてつきり男の人とデートなのか.....」 1111

（そういう事か・・・）

一応私は男なんだけど今は言わないほうがいいかな。（

委員長と呼ばれた娘がコレットさんに絡んで文句を言っているが

もう一人の黒髪ボブカットの娘はコレットさんをかばうこと無く

素知らぬ顔で他所を向いている・・・

委員長と呼ばれた娘の護衛なのか、周囲を警戒しているようだ。

「もう私が誰と会うのかわかったんですから

コレット達はもうどこかに行ってほしいです。」

「いえ、セブンシープ家の者として挨拶だけはしっかりさせていた  
だかないと。」

私、アリアドネー騎士団所属 エミリィ・セブンシープと申します。

ユエさんとは同じ騎士団員としてお世話になっています。」

「これはこれはご丁寧に、私はソプラノ・マクダウエルと申します。

夕映とは以前在籍していた学校で同じクラスです。」



その頃から良くしてもらっています。」

「……へ？ 風香さん じゃないの？」

「マクダ ウエル……？」

「マクダウエルと言っても かの闇の福音の関係者というわけでは  
ないんです。」

同じ名字ということで誤解を受けますが。

それとコレットさんとは以前会ったときに偽名を使わせていただき  
ましたが

アレは少々込み入った事情があっしょうがなかったんです。

ごめんなさいね。」

マクダウエル姓の事は エヴァが聞いたら怒りそうだが、

ここは夕映の顔を立てたほうが良さそうなので誤魔化しておく。

「い、いえ。 なにか事情があったのなら別にいいんです。」

「それにしてもユエさんとは 以前の 学園でのご学友なのですか。」

「ええ、何か問題でも有りましたか？」

「いいえ、そう言うことではないのですが」

「ユエさんからはあまり過去の話を聞いたことがないので・・・」

「そうなんですか・・・」

別にそう大した話じゃありませんよ？

普通の学校に通って普通に勉強していただけですから。」

こっちの委員長さん話を聞いた感じ、

夕映はあまり自分のことを話していないようなので話を合わせておく。

「い、委員長ももういいじゃないですか。」

ほら、ソプラノ、行くですよ!!」

そう言いながら夕映は私の手を引いて立ち上がりませ

さささこの場を後にしようとする。

「ち、ちょっと夕映。」

「あ、ユエさん！」

「まっつてよユエ。」

「……ふむ、失礼ですがユエさんとソプラノさんは

これからどちらにいかれる予定ですか？

お祭りを見てまわるのなら私達も一緒にさせていただきますか？」

私が夕映に引つ張られて移動しようとした時、

黒髪の娘が私達に声をかける。

「えっと、べつね」「こ、これから私達は大事な用事があるので

これで失礼するです！」　「……と云うことだそうですね。」

私は夕映に引きずられてコレットさん達三人をその場に置いて

人混みの中にまるで逃げるように移動していった。

しばらく夕映に連れられるまま移動した後

私達は人気の無い森の方へと向かった。

「まったくコレット達は・・・ソプラノもせつかく話を合わせてくれるなら

もう少しうまくやって欲しいです。」

「あれ以上うまくやるのは結構キツインじゃない？」

「・・・そう・・・ですね。」

色々あって私も頭に血が登っていたようで、少し言いすぎたです・・・

でも 今回ばかりはソプラノの容姿に感謝ですね。

あれでソプラノが男だとバレたら

後で何を聞かれるかわかったものじゃないですよ。」

「なに？ 夕映はやっぱり私が男の格好とかしてたほうがいいの？」

「・・・別に容姿は気にしませんが

性質の悪い女装癖はなんとかして欲しいですね。

いたずら心で女装するとか・・・私が昔どれだけ悩んだことか。」

「あはは・・・ごめんごめん、あれは夕映を困らせるためじゃなくてもう癖みたいたいになってたから。」

「その癖を直して欲しいんです・・・まあ、今はこの話はいいいです。」

本当は一緒にお祭りを見ながら遊びたかったんですが、

ソプラノには丁度聞きたいことがあったんです。」

「ん？なに？」

「実はさつき、ネギ先生とクルトさんに街中で会ったんですが・・・」

夕映から聞いた話で、先ほど街中で聞こえた戦闘音の原因、ネギ先生とクルトとの出会いの話を聞く。

ふむ・・・クルトは予定通りネギ先生に接触してくれたか・・・

この先クルトには嫌な役目を押し付けてしまうことになるが、

現 MM元老院を解体し新体制に移行した時

旗印としてネギ先生には英雄として立つてもらおうのが現状では最善手だから

クルトには頑張ってもらわなければならない。

しかし、夕映はなにか気にかかることがあるようだ。

「それでソプラノに聞きたいことなのですが・・・

ソプラノはネギ先生の過去の話やその御両親の話、

それと、今回 このような事態・・・

ゲートポートでのテロの事、

これらを以前から知っていたんですか？」

「・・・・・・・・知ってたよ。」

テロ事件が実際、どのような形で行なわれるのか

日時や詳細までは分からなかったけど

事前にクルトから相手の組織が

近々何か事件を起こそうとしているという情報は聞いていたよ。」

「ならば何故・・・！」

「何故？」

「・・・なぜ・・・。」

夕映も何をどう聞いていいのか混乱しているようで

しばらく夕映が落ち着くまで待つ。

「・・・落ち着いた、夕映？」

「・・・聞きたいことがあったんですが、何をどう聞いていいのか・・・」

「じゃあ私が言おうか・・・」

まずはネギ先生の過去の事だけど、

これを私がネギ先生に教えるのは筋違いだし

仮に教えたとしてもネギ先生にどうにか出来る問題じゃないんだよ。

この件は既にクルトが手を打っているからね。

中途半端にネギ先生に情報を与えて暴走されると皆が困る。

すべてを教えればネギ先生が仇討ちに出かねない。

そうになると先生の身近な人が不幸な目に遭う・・・最悪 人を殺したり殺されたり・・・ね。」

「・・・っ！」 1111

本屋ちゃんがそうなった時の事でも想像したんだろうか？

夕映の表情が若干こわばる。

「中途半端に情報を与えても結局は同じ結果になりかねない。

まず間違い無く 魔法世界に来ようとするし

そうしたら今回と同じく 皆で着て事件に巻き込まれる。

その結果、緊急時にクルトが手を貸しても

ネギ先生はその手を払いのける可能性が出てくる。

そうになったら今よりも もっと悪い状況になるよね。

実際に今クルトが裏から手を回して 皆の犯人としての手配を緩和したり

裏から調査したりしてサポートしてるのは知ってる？」



「……………知らないです。」

「それに事件の情報を事前に入手していたんだけど、

学園長はネギ先生達が魔法世界に来ることは反対してたよね？

頭から反対してイギリス行きも止めたら勝手に行きそうだったから

イギリス行きは学園長も許可したけど、

結局 魔法世界に来てしまった……

これはイギリスの魔法学校の校長先生が辺に気を効かせてしまった結果だけだね。

学園長も組織の人間だから当然情報は持っていたけど

なにぶん未確定な情報だから強行に反対することもできなくてね。」

「……………」

「ネギ先生は生まれが複雑で本人に才能があるだけに

こう言うことは周りが慎重にしていかないと、

先生個人以外に周りが不幸な目に会うことがあるから……

学園長もクルトも、そして私もエヴァも慎重にならざるをえないんだよ。」

その結果　夕映や千雨、茶々丸に情報を与えなかったりして仲間はずれにされた気分させちゃったかも知れないけど

その辺は事情があつてのことだから夕映も納得してくれないかな？」

「……はい。」

夕映の返事はYESだけど

頭では理解できても心で納得できない状態なのだろうか……

さっきからうつむいて静かに私の話を聞いている。

「もう　この際だから教えておくけど、

ネギ先生の村を襲つたのはMM元老院の一部の過激派一派なんだ。

この過激派はネギ先生がアリカ姫の息子だというのが許せないらしくてね……

逆にナギさんの息子と捉えて英雄として利用しようとする派閥もあるんだけどね。」

「……では、ネギ先生がもし復讐しようとしたら。」

「そうだね、MMと言う国を相手にすることになる。」

そうだったら真相はどうあれ ネギ先生に協力した人達は間違いなく犯罪者として処理されるだろうね。」

「……のどかが……そんな事に。」 111

「でも、この一派は今はまだ元老院としての籍を持っている人達も残ってるけど」

いずれクルトに全員残らず処理される。

既にクルトはそれだけの証拠も押さえてあるし

その気になればいつでも実行できる用意をしているんだよ。」

「じゃあ、クルトさんは何故あんなネギ先生を挑発するようなことを……」

「それは単純にネギ先生怒らせて手を出させて

ある程度やらせたところで真相を話して

自責の念からネギ先生が自分に逆らえない状況を作ろうとでもしたんでしょうね。」

それにクルトがアリカ姫の事を話したそうだけど、

実際クルト自身 そのことでもかなり悔しい思いをしたみたいだよ。

クルトは事件の真相を知ってるからアリカ姫が無実だということも知ってる。

だからその証拠を集めて無実を証明しようとしている・・・

まあ、彼自身アリカ姫がかなり好きだったみたいだしね」

「・・・私達の知らないところで そんな事が・・・」

「事前にこの事をすべて夕映達三人に話したとして、

もし何かの間違いで本屋ちゃんがアーティファクトで夕映達の思考を

読んだらとんでもないことになるから。

その辺のこともあって皆には何も話さず

ただ必要な備えだけさせて送り出しちゃったわけだけど・・・

「・・・ごめんね。」

「いえ、いいんです・・・」

確かにそれらの事を考えれば私達に何も話すことはできないですし、

あの状況でいきなりネギ先生の過去の話や

魔法世界の状況やテロ事件の話もされても

それほど危機感を持つことも出来なかったでしょうし・・・

ただ・・・その、私はソプラノが私に何も話してくれなかったのは私が頼りにならないとか・・・信頼されてないんじゃないかとか・・・

そんな自分本位な考えでこんな話を聞いてしまっただけです・・・

「そっか・・・色々夕映達には言えないこともあるけど、

私はちゃんと夕映のことは頼りにしてるし信頼もしてる。

もちろん千雨や茶々丸もだけど、ね。」

私は夕映の頭を撫でながら

少しでも夕映が落ち着くように話をした。

「・・・そういつ時はあの二人の事は言わなくてもいいんです。」  
／／

「そっか・・・そうだね。」  
／／

その後、夕映が落ち着くまでしばらく二人でまったりと過ごした。

当初、クルトとの話では

完全なる世界を潰した後、卒業試験を終わらせたネギ先生を指揮官として

完全なる世界の残党や、ネギ先生の村を襲う指示をした元老議員を  
粛清し

アリカ姫の汚名を晴らしネギ先生を旗印にして新体制の元老院を作り

MMの政治体制を徐々に変えていく、と言う予定だった。

しかしネギ先生がこの時期に魔法世界に来てしまったことで

計画を修正、完全なる世界との戦いで戦果上げてもらい

新たな英雄として立ち、後は当初の予定通り MMの元老院の過激  
派を粛清して

アリカ姫の汚名を晴らす。

と 言う計画に修正されることになった。

原作知識のある私からしたら、

修正案の方が本命でその為の準備をして来たわけだが

そのせいで夕映や千雨、茶々丸に情報を与えなかったり

色々苦勞をかけてしまう結果になった。

彼女達にはこれが終わった後で何かお礼をしなくちゃいけないかな・  
・

気がついたら 徐々に陽が沈み始め、

森の中ということとで周りが少し薄暗くなってきた。

「そろそろ陽が落ちるね・・・街の方に戻るっか？」

「そうですね、私も早く戻らないとコレット達がうるさいので

今日はもう戻るですよ。」

「・・・夕映、今日はこれから大変だと思うけど・・・頑張っ

ね。」

「？ コレット達のことですか？

確かに彼女達の追求が大変そうです・・・」

「・・・まあ、それだけじゃないんだけどね。」

「？」

今夜から、ネギ先生達や夕映達にはこの世界に来て

一番大変な時期になるが・・・彼女達ならきつとうまくやってくれることだろう。

いまいち釈然としない表情の夕映と街まで戻り、

一刻の別れの時間が来る。

「後で・・・また会いに行くから、それまで頑張ってね。」

「はい、それでは・・・また。」

今度向こうに戻ったら・・・その、二人でデ・・・遊びにくですよ。

「／／

「OK」 向こうに戻ったら一番に夕映とデートだね」



「・・・っ！」

「・・・はい！」 / / /

こうして一時夕映と別れ、私はクルトの家へ戻り

今夜の準備をすることにした。

私がクルトの家に戻った時には

もう陽がほとんど沈みかけ夜まで間もない時間となっていた・・・

今頃 ネギ先生達は今夜の総督府での舞踏会の準備でもしていることだろうか？

クルトが接触したなら予定通り総督府での舞踏会にも呼ぶはず。

後で一応、クルトに千雨と茶々丸への伝言を頼むついでに確認して

みたが

ちゃんとネギ先生達は舞踏会に呼ばれていた。

私達にも来るか？ と誘いがあつたが

丁重に断つておいた・・・今夜以降 何が起こるか分かっていくせに

こうして嫌味のように誘ってくる辺り

クルトもいい性格をしてきたものだ。

「さてと・・・こんなモノかな？」

「姉様の方は準備できたのか？」

「うん、だいたいね。」

「エヴァや皆の方は？」

「私は問題ない。」

「ウチも準備は完了してますえ。」

「ワタシも完了ネ。」

「私の方は、時間ギリギリまで魔法球内の工場で弾薬の生産をしているところですよ。」

「……………どれだけ用意するつもりなの？」

別にどこかの国と戦争するわけじゃないんだから……………」

「備えあれば憂い無し、といたしますし」

少し前に見せてもらったが、

その時には小さい倉庫いっぱい弾薬の入った箱が有ったはずだけどまだ作つてると言うし……………もう葉加瀬だけで十分なんじゃないだろうか？

2490

「チャチャゼロやラトナとピュラは？」

「ヒサシブリニ オモイキリアバレラレルカラナ ウズウズスルゼ。」

「超鈴音と葉加瀬より支給された武器の装備は完了しています。」

「じゃあ後は鍵の配分だね。」

千雨には事前に渡してあるから 後は超と千草に一本ずつ、

それと後で私とエヴァで夕映に

手持ちの一本の Grand Master Key を渡しに行く。  
「

「夕映サンに Grand Master Key を持たせる根拠八？」

「千雨や茶々丸と違って

彼女は本屋ちゃんに何かあったら必ず着いて行くと思う。

本屋ちゃんはネギ先生達にとっても敵にとっても重要な存在だからね。

今夜の総督府での警備にはアリアドネーの警備員は全員出てるから

夕映と本屋ちゃん、二人を守るにはちょうどいいと思ったから、かな。」

「いつそネギ坊主に預けるという方法八？」

「それも考えたけど、それだと夕映が無防備になってしまう。

夕映の攻撃は敵には効くけど、

単純な戦闘力で考えたら夕映はどうしても不利だから

その分を鍵で底上げしておこうかな。」

「なるほどネ。」

「じゃあ、皆には言っている通り、クルトの情報やラカンさんの情報、後 私の勘で

今夜から数日中にかけて完全なる世界が行動を起こす可能性が高いよ。」

「ソプラノは勘な力・・・まあ、いいけど。」

「今回は敵のアジトも近いことや

高畑先生やクルト達の今までの努力のおかげで

敵もかなり追い込まれていると思われる。

ここで一気に巻き返しに来るんだろうけど

逆に考えれば一気に敵を潰す好機でもあるよ！

今回で完全なる世界を壊滅させて

この魔法世界を維持し、この星を人の住める星にする計画に

敵対するであろう組織を一気に潰し、私達は皆でのんびり暮らす生活を手にするのだ！」

「良く解らん目的だが、まあ、奴らを一気に叩き潰すのは望むところだ。」

あのバカ供がこそこそ動きまわったせいで私にも色々面倒事を押し付けられたからな。」

「ウチは最後の・・・そして本当の意味での両親の仇が討てるんやから」

今回は気合入れていきますえ。」

「ワタシはここで奴らが居なくなれば」

こっちの世界が私の世界のようにならずにするからネ。」

「私も同じくです。」

この星を超さんの生まれた星のようにしない為にも頑張りますよ！」

「オレハ アバレラレリヤ イイカラナ」

・・・マア、スコシハ キアイイレテ ヤツテヤルヨ。」

「ソプラノ様のお世話をしなくてはならないので」

このような雑事はさっさと終わらせてしましましょう。」

「雑事って・・・だけど二人もいい感じに成長してますね。」

ソプラノさんやエヴァンジェリンさんに預けたのは成功みたいです  
ね。」

その後、私達はクルトの家で簡単な食事を取りながら、

アーウェルンクス達の動き、

クルトの隊やラカンさん、ネギ先生達の動きに合わせて

いつでも対応できる体制で待機することにした。

神様から頼まれたお仕事。 その71（後書き）

71話目 投稿

年末から年明け以降、少し更新ペースが落ちていますが  
仕事で時間を取っているというのと、  
話も終盤に差し掛かり、前後で話を合わせる必要があるからです。

話自体は77話くらいまで作ってあるのですが  
上記の関係で、

今後も多少更新日時が開くことがあるかも知れませんが、  
その辺はご容赦ください。



神様から頼まれたお仕事。 その72

新オステイア 総督府 舞踏会会場

side 千雨

今日の午前中、ネギ先生達が買い物に出かけた時に

夕映と鉢合わせ、その後クルトさんにも会ったという話をネギ先生達から聞き、

それを踏まえた上で茶々丸と二人でクルトさんが

これからどう動くつもりなのか考えてみたが・・・

それよりも厄介な問題がネギ先生や村上より上がってきた。

この魔法世界の秘密・・・この世界が

もしかしたら火星に作られたんじゃないかという仮説。

クルトさんからの今夜の総督府での舞踏会の招待状の映像で語られた  
ネギ先生の両親の事や世界の謎、

クルトさんはこれらのほぼ全てを知ると自身で語っていたが、

以前から先輩やエヴァ達と何かこそそそと企んでんいた事に関係あるのだろうか？

思えば、今回の旅行の始まり・・・

学園長は魔法世界に来る事をかなり強く反対し、

ソプラノ達からは、通常ありえないほどの装備を渡され、

MMの武器所持許可証やネギ先生の闇の魔法等の準備をしていた。

こっちに来てからはテロ事件に巻き込まれたが

その時、私達に掛かった手配が国によってまちまちで

私や茶々丸、夕映に至っては参考人として手配すらかかっていない。

今回、私達がこちらに来る以前から

先輩達は魔法世界に来ていたフシがあるし

村上達の奴隷契約に関与した疑いもある。

いくらエヴァや先輩がこつちに顔が利いて

異常な力を持っているとしても

事前にこうなることを予見して準備しておかなければ無理なことが多い。

そこへ来て先ほどネギ先生と村上の話で出てきた

この魔法世界が火星に作られたのかも？ という話だ。

茶々丸のデータでは火星の地形や名称に酷似している部分が多く

それに超鈴音は度々自分は未来の火星から来たと言っていた・・・

私も本人から詳しく話を聞いたわけではないので

皆で茶々丸を問い詰め、なんとか得られた情報では

超は魔法世界でこれから起こるであろう何らかの災害か事件を

回避するためにこっちの世界に来て、  
学園祭で事件を起こしたという話だ。

しかし先輩達に敗れ、説得を受けて今でもこっちに残り  
先輩達とこそそと何かをやっている。

それらの情報から考えると・・・

超が回避したい何らかの災害か事件は  
今まさに現在進行形で進んでいて

先輩達やクルトさん達がそれを防ぐために動いていて  
超もそれに協力している。

そんな中に今回 ネギ先生達や私達がテロ事件に巻き込まれ、  
その火消しを同時に行っている。

私達3人はネギ先生達の警護役なんだろう。

これが超の防ぎたい事件に関係あるのかどうかは分からないが  
状況から考えて無関係とは思えない・・・と、なると午前中に  
クルトさんがネギ先生に接触してきたのは

これからの事に備えてネギ先生達を保護するのが目的か？

・・・しかしそれにしてはネギ先生に接触したときの態度を聞く限り  
挑発的で敵意すら感じさせるものだったと言うし・・・

「だめだ、まだ情報が足りない・・・」

「どうしたんですか？ 千雨さん。」

「ん、・・・クルトさんや先輩達が何考えてるかいまいち分からな  
くてな。」

「いつそのことご本人達に聞いてみてはどうでしょうか？」

「丁度舞踏会でクルトさんに会う機会を作れるのですから。」

「・・・そうだな・・・状況が複雑すぎて、

もう私達の手にも負えないからな・・・。

この状況でいくら考えても情報が足りなさすぎるし、

そんな中で下手に動いて状況を更に悪化でもさせたら目も当てられないからな。」

私と茶々丸は会場の壁際で舞踏会の様子を見ているが、

流石にネギ先生と犬上は人気者のようで

行く先々で御婦人方を引き連れている。

他のメンバーも初めて参加する舞踏会をそれぞれ皆純粋に楽しんでいる。

私と茶々丸はエヴァの認識障害で子供に変装しているため

流石に誰も声をかけてこない。

安心して壁の花の役目をしていた所に、

クルトさんから念話で連絡が来た。

『こんばんわ、千雨さんに茶々丸さん。』

今夜の舞踏会は楽しんでいただけってますか？』

『私達とはかく、ネギ先生達は楽しんでいるみたいだな。』

『そうですか・・・しかしお二人のような女性に声をかけないなんて

この会場に来ている紳士方は見る目がないようですね。』

『今は子供に変装してるんだぞ・・・そんな私達に声をかけてきたら

そいつは間違いなく変態だろう。』

『それくらいの認識阻害は見破れるようにならないといけませんねえ。』

『そういうあんだだつて無理なくせに・・・』

エヴァ特製の認識阻害なんて見破れる奴そつはいないだろう。』

『まあ、たしかにそうですね。』

それはともかくお二人にはソプラノさんより伝言を預かっていますので

まずはそれを伝えます。

お二人には自分が思うように自由に行動してもらっていいそうです。  
』

『なっ……それはアレか？』

ここでネギ先生達を見捨てて先輩達のところに逃げ帰ってもいいってことか？』

『そういう事でしょうね……まあ、お二人はそんな事しないということも』

織り込み済みでしょうが。』

『……ふん。』

『お二人の事を信頼しているからこそでしょう。』

自分が何も指示を出さなくてもネギ君達を守るために

動いてくれるだろうと信じているのでしょね。』

『どつだろつな……』

丁度良かった、私もクルトさんに聞きたいことがあったんだ。』

『なんででしょうか？』

『……この世界……魔法世界でこれから何か起こるのか？』



『ふむ……どうしてそう思うんですか？』

『この魔法世界が火星に作られた可能性や

超の存在、茶々丸から聞いた話から総合すると、

これから何か大規模な事件や災害が起こるんじゃないのか？』

『……なるほど、ソプラノさんが茶々丸さんを貴女達に付けたのは

そういう意図もあつたんですかね……

確かに、おっしゃる通り、この魔法世界は過去に火星に作られた世界で

今まさに崩壊の危機に瀕しています……が、

既にそれらは解決する目処が付いています。』

『先輩達とこそそそ動いていたことが関係しているのか？』

『そうです。』

すべてが終わった後にソプラノさんにも聞いてみるといいでしょう。』

『だったら今回クルトさんがネギ先生に接触したのもその関係なのか？』

『少しは関係有ります。』

千雨さんも知つての通り、私はここオスティアの総督で

MMの元老議員と言つ肩書きも持っています。

その関係でネギ君には是非とも我々に協力していただけたらと思ひ  
ましてね。

なにせ、魔法世界の崩壊の危機は何とかできても

それ以後の政治的な動きで彼の存在は非常に大きいですからね。』

『それにしても、やり方が少々強引みたいだけどな・・・』

それはともかく・・・なんでこんなに簡単に教えてくれるんだ？』

『それは既に千雨さんがある程度真相に近付いているといつのと

隠しておく必要がある段階は既に過ぎたからです。

今、貴女がソプラノさんに会いに行つて聞いたら

私と同じようにすべてを教えてくれるはずですよ。』

私に隠して必要がもう無い？

・・・私から情報が漏れることを恐れて隠していたとすると、

既にこの世界の崩壊云々の話を解決したか、

・・・ゲートを破壊した組織を壊滅させた？

いや、白髪のガキは少し前に堂々とネギ先生の前に姿を見せた・・・

と、なるともう一つの可能性・・・

奴らが情報収集の段階を終えて 本格的に動き出す？

『・・・おい・・・まさか、近いうち・・・今日明日にでもなにか起こるのか！？』 1111

『全国のゲートを破壊した組織が

大規模なテロ活動を行おうとしている、と言う情報を掴んでいます。

『やっぱり・・・あの白髪のガキの組織か・・・』

『その辺りの警備状況については万全の用意を取っておりますが  
なにぶん相手の組織がかなり厄介ですから

不測の事態に対応できるように、

ネギ君達にはできるだけ我々の手が届く場所に居てもらいたいのです  
がね。』

それにしてもクルトさんのやり方は・・・

実際その場に居た人間の話を聞くと敵意しか駆り立てないと思うんだが

クルトさんらしくないな・・・別の目的でもあるのか？

『さて、私の方も予定が詰まっていますので

話はこの辺でよろしいでしょうか？』

『ああ、悪かったねクルトさん、変なことを聞いて。』

『いいえ、当事者である千雨さんや茶々丸さんが気になるのは当然の話ですから。』

あと、一つお願いなのですが、

今後 総督府内で私に出会っても初対面を装ってくれませんか？』

『それはいいけど、何でだ？』

『貴女方には話してもいい話でも ネギ君達には聞かせられない話  
が有りますから。』

私と千雨さん達が知り合いだと知れたら貴女方が後で詰問されるこ

とになりますし

最悪、宮崎さんのアーティファクトでも使われたらいけませんからね。」

『わかった。』

まあ、顔を合わせるとしても廊下ですれ違っくらいだろうけどな。』

『私も了解しました。』

『ありがとうございます、それでは舞踏会を楽しんでいってください。』

クルトさんとの念話が切れ

舞踏会の会場に意識を戻すと

いつの間にかネギ先生達は別れて行動しているようで

佐々木達や一部のメンバーしか会場にいない状況になっていた。

「ふむ、これでこっちの方は大丈夫ですね。」

これでこの後ネギ君との話し合いの場で

万が一千雨さんや茶々丸さんと鉢合わせても

彼女が私と知り合いだということは避けられるでしょう。

宮崎さんのアーティファクトの対策もソプラノさんのプレゼントで  
万全ですし、

後はうまくネギ君を煽り、少なくともMMの人間に協力しないように  
するだけですな。

完全なる世界との戦闘も厄介だが、

なにより厄介なのは、元老院の過激派がネギ君を取り込む事ですか  
らな。

アリカ姫の件で彼を抹殺しようとしたくせに

自分達の身が危なくなつた所で彼を取り込んで体制の立て直しを図

られでもしたら、

私の今までの苦勞が水の泡になってしまいかねませんから・・・

(アリカ姫・・・必ず貴女の汚名を晴らし、

貴女達ができなかったこの世界を救うという役目を、

私のやり方で成し遂げてみせます！

そして貴女もナギも、必ずその牢獄から出して見せます！)

しかしネギ君が怒って多少殴られるのは覚悟してますが、

ほどほどにして欲しい所ですね・・・

こればかりは彼次第ですから・・・頼みますよ・・・ネギ君

1111

クルトさんとの話をしていた時・・・

あのバカガキ供が何をしていたか聞いた所で思わず足が出てしまった。

ネギ先生は古菲と、犬上は村上と仮契約をしてきたというのだ。

犬上はともかく、本当にネギ先生はいつか女に刺されるぞ・・・

私が蹴り飛ばした二人が戻って来ると

タイミングを合わせたようにクルトさんの従者（？）の子供が

ネギ先生を呼びに来た。

「ナギ様。

クルト・ゲードル総督が特別室でお待ちです。



同行者は3名まで許可されています。」

「分かりました。」

「よし、来たわね、行くわよ！」

「アスナさんはダメです。」

「な、なんでよ!?!」 #

「アスナさんは大事な体ですから。」

「へっ?」 / / /

「……せ、先生……まさか、もうその年で……」 111

2512

このガキ……なんて恐ろしいガキなんだ……

10やそこらの年でもう神楽坂を孕ませたのか?

前々から同室で暮らしていたから怪しいとは思ってたけど……

「刹那さん、護衛よろしくお願いします。」

「ハイ。」

なん……だと……？

桜咲は驚くどころか、あの平静な態度……知ってるのか？

しかも公認（？）か？

あの堅物が……なんて恐ろしいガキだ！！  
lll

私も人のことは言えないが、それでも魔法球で過ごした時間を合わせれば

20は越えた年で初めて先輩と関係を持ったんだぞ？

それをこのガキは……

この中で一人驚き戸惑っている私を他所に

ネギ先生は話を進めていく。

「同行者が3名までというのは何故ですか？」

「慣習です。」

「もし、従わなければ？」

「総督はお会いになりません。」

「……………では、まずのどかさ。」

「ひゃ？ ……は、ハイッ！」

「2人目は朝倉さん。」

「サンキユ、ネギ君」

「3人目は千雨さん ……お願いできますか？」

「よ、寄るな！！」 1111

「？ どうしたんですか、千雨さん？」

「わ、私は先生の毒牙には掛からんぞ！」 1111

「どうしたの千雨ちゃん？」

「どうしたって ……お前ら ……なんとも思わんのか？」 1

111

「なんともって？」

「そうか ……コイツら全員既に手遅れなのか ……」

「あの堅物の桜咲が堕ちてるんだ ……他の奴なんか手遅れだろう。」

「いや ……なんでもない。」

悪かったな・・・」

「？

よく分かりませんが・・・とにかく

朝倉さんは情報の分析のサポートをお願いします。」

「OK

それに可能なら録画と中継ね。」

「のどかさん、打ち合わせ通りによろしくお願いします。」

危険な場所に巻き込んでしまってすみません。」

「いえ、そんな・・・私が、おやきゅっ・・・お役に立てるなら！  
／／

「ありがとうのどかさん。」

「おい、コラ ちょっと待てよ！

その二人はわかるが私は何でだ!？」

「？

千雨さんにはいつも傍にいて欲しいんですが？」

「断固として断るっ!!」 #

私にはもう先輩って言う人がいるんだ!

ここに来てネギ先生の毒牙にかかってたまるか!

「ネギ先生、その言い方だとプロポーズにも聞こえますが?」

「へ……? あっ!」

ち、違うんです! 千雨さん誤解です!!」 / /

「うるさい!! 寄るなスケコマシ!」 #

「そ、そういう意味じゃなくて、千雨さんには僕達が冷静な判断を下せない時とかに

いつも客観的に判断してもらっているので、

助言者として側にいて欲しいって言う意味で!」

「本当だろうな……?」

少しでもおかしな行動を取ったら最大火力で魔砲をお見舞いするか  
らな……

後、私の半径1m以内に寄るなよ。」

「は……はい、分かりました……」

こうしてとりあえず助言者として止む終えなく

ネギ先生に着いて行き、クルトさんとの謁見に望むことになった。

『あの、千雨さん。』

『何だよ茶々丸……』

『先程から千雨さんが何か誤解をしているようなので  
言わせていただきますけど……』

『何をだよ……』

『先ほどネギ先生がアスナさんに言った、

大事な身体、と言うのは一般的に

妊娠している女性に対して使う言葉ではありませんが

アスナさんは妊娠していませんので。

一応 念の為に生体スキャンをして確認しました。』

『え……？』 / /

『皆さんに気がつかれなくてよかったですね。』

『……』 / / /

『良かったですね。』

『……いいか、茶々丸……誰にも言つなよ。』

『この事は私とお前だけの秘密だ。』 / / /

『分かりました。』

『……ですが、私のメンテナンスをする時に』

『超や葉加瀬がデータを閲覧する可能性が……』

『こいつ……プライベートの出来事はプロテクトを掛けられるくせに』

『こんなことを言い出すということは……』

『……なにが欲しい？』 1111

『いえ、欲しい物など特に……ただ……』

『……ただ？』

『後日、私がソプラノ様にご奉仕する時に

マスターや他の方が邪魔をされた時などに

ご協力いただけたら幸いです。』

『・・・わかった。』

コイツ本当にロボットか？

人の弱みを掴んで脅迫するロボットなんて聞いたことがない・・・

とにかく、どんなご奉仕をするつもりかわからんが

ロボットの茶々丸なら変な事にはならんだろう・・・

変な約束をさせられたが

朝倉や早乙女にこの事がバレて変な話しを聞かれることがなくなっただけでも

良しとするしか無いか・・・



神様から頼まれたお仕事。

その72（後書き）

72話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その73

新オステイア 総督府 特別室前

side 千雨

ネギ先生に頼まれて

何故か私もクルトさんとの謁見に同行することになってしまった。

案内の子供に連れられ、総督府内を移動し

特別室の前に案内される。

「こちらが総督がお待ちになっている特別室です。

……しかし、楽しいお仲間ですね。」

「え……?」

「いえ・・・あの村の悲劇から 出発した貴方が

あのような友人達を手に行っていることを

少し、羨ましく思っています・・・」

「・・・・・・・・・・」

「今も世界に悲劇は満ち溢れていますからね。

旧世界、新世界を問わず。」

この案内役の子もネギ先生の村のことや

それ以外にも色々知っているようだ・・・

彼が扉の前に立った時 特別室の扉が開き、

部屋の中に入るように案内された私達は

ネギ先生を先頭に 部屋の中に入って行く・・・

「ようこそ、私の特別室へ・・・ネギ・スプリングフィールド君。」

「!!!?」 1111

「1111は!?!」

「っ!?! ネギ先生の……故郷の村……それも6年前の!?!」

「……?」

あたり一面火で焼けた建物、それに石化した人達、

しかし熱は感じないし、焦げた匂いもしない……映像か?

それにしても宮崎が言った通りなら、コレがネギ先生の故郷の村か?

話には聞いてたが ずいぶんとひどい状況だ。

「慌てることはありませんよ お嬢様方、

これはすべて映像です。」

「アンタが総督ね……ずいぶんと趣味のいいおもてなしじゃない。

」

「どござって……?」

どこからこんな映像を?」

「どこからだと思います?」

ネギ先生の間にクルトさんがいやらしい笑みを浮かべながら問いかける……

クルトさんとはそれなりに付き合いがあったが

こんな笑い方ができるとは……エヴァや先輩と付き合いがあるっただけはあるな……

朝倉も宮崎も、明らかにクルトさんに敵意を持っている様子だが、

しかし、これで本当にネギ先生達を保護するつもりなのか?

「いやなに、主題をはつきりさせておこうと思っただけでね。」

君は答えを知りにここへ来た。

しかし……本当に知りたいのは何の答えです?

A、魔法世界の秘密?

それとも B、悪の秘密組織の目的?

それとも C 母の生き様? いやいや、それとも D 父の行方? 「

「そつ・・・」 111

ネギ先生は完全にクルトさんのペースに乗せられてる。

ここらで一度冷静にさせたほうがいいだろうか・・・

「いいえ、違いますね!？」

君が本当に知りたい答えとはこんなモノではない!？

君が知らねばならないのは、君にとっての 真の敵 ！！

6年前!! 雪の日!! この日、この時!!

君の人生を根本から変えてしまったこの出来事!!

君の村を焼き払ったのは一体 誰なのか!!

それだけが君が唯一求める答えのハズだ!!」

「・・・」 111

「確かに君の父を求める気持ち・・・

未来を目指す目的意識は本物でしょう。

しかし、闇の魔法を会得した君は 既に知っているハズですね？

君の本質は……そう、

真の敵への復讐だ!!」

「っ……!!?」 1111

エヴァの闇の魔法は闇の属性がある程度有ることが

習得の必須条件だ……私の場合だと嫉妬心か……

そしてネギ先生の場合は……復讐か。

「先生っ!」 「聞いちゃダメだよ先生!」

宮崎や朝倉の気持ちはわかるが無駄だろうな……

私自身習得の時に嫌って言うほどエヴァに思い知らされた。

その事実から目をそらせるようだったら闇の魔法なんか習得して  
ない。

「君は この飢えが満たされぬ限り

友人達との休日すら満足に楽しめない 雅覧堂の人間です!!」

「知って……いるんですね?」

「君は誰が犯人だと思いますか？」

ここに来てクルトさんの目的が、

少なくともネギ先生達を保護することじゃない事は はっきりしてきました。

前にも皆に話は聞いていたが 明らかに挑発的で

敵愾心を煽り、保護するどころか 自分から敵対するように差し向けている。

するとクルトさんの目的は・・・？

「君のことです、様々な可能性を考えたコトでしょう・・・」

この夜から来る日も来る日も、一人孤独に復讐の刃を研ぎながら・・・  
「・・・」

「そんなつ ネギ先生はそんなコト・・・」

ち、千雨さんもなんとか言っておいてあげてください！！」  
「！！！！」

「・・・宮崎、お前も私が闇の魔法を使えることは知ってるだろうっ？」



アレを習得するには自身の闇と向かい合う必要があるんだ・・・

私もネギ先生も自分の抱える闇はイヤって言うほど理解させられたんだよ・・・」

「そんな・・・」 1111

あの修行で私が先輩に対してどんな気持ちを持っていて

その為ならどこまでやるか、嫌って言うほどわかってるから・・・

逆にアレのおかげで今、先輩達と暮らしていけるといいうこともある。

闇の魔法の修行で自分の嫉妬心を受け入れ

扱っ術を学んだから先輩がエヴァや千草さんや他の人と何かしても

暴走せずに済んでるんだからな。

「ネギ君・・・君の復讐の相手・・・」

A フェイト・アーウェルンクス

B 魔族 C 始まりの魔法使い・・・

なるほど、どれも君の真の敵に相応しい、

彼等が仇なら 君の物語も随分シンプルなモノになった事でしょうが……

しかし……現実というのは往々にして もう少し複雑で……

些かみすぼらしモノです。」

「……………つく！」 111

「真実を話しましょう。」

幼い君を こんな目に合わせた、真犯人は……

我々です。

我々 すなわち……MM元老院。」

「「!!!?!?」「」

「そんな……!?!?」

だって……メガロメセンブリアって……」 111

「我々が、すべての黒幕です。」

いや、待て!

おかしい！

クルトさんがネギ先生の村を襲うならその理由は何だ？

アリカ姫の息子だという件か？

この魔法世界を救おうという人がアリカ姫の息子がじゃまだという理由で

ネギ先生の村を襲うだろうか？

いや、全く話が繋がらない。

それに6年前のネギ先生はほんの子供だ、

ネギ先生の父親が乱入してその時は失敗したとしても、

その後 いくらでも殺す機会はある・・・そして現にネギ先生は今も生きているし

先輩達も明らかに守ろうとしているし、クルトさんが協力しないと手配があんな変な形で掛かるわけがない。

じゃあ、クルトさんがここでこんな事を言う理由は何だ？

・・・MM元老院？

「尤も・・・頭のいい君のコトです。」

当然 この程度の可能性は考慮に・・・っ！

ゴッ！！

「「「！！」」」

まずい！

ネギ先生が切れた！ 111

ネギ先生がクルトさんを殴りつけ、

その衝撃で飛んでいったクルトさんを瞬動で追い、

クルトさんの足を掴み更に殴りつけ地面に叩きつける。

「先生っ！！」

「ちっ、ここでクルトさんを殺してもしたら・・・ん？」

「無理もないよっ、

6年前の事件はネギ君の心的外傷何だよ！

その犯人を告げられて冷静でいられるはずがない、

でもっ・・・！！」

「！？」

ネギ先生が切れてクルトさんを殴り続けている状況に合わせたかのように

私達の周りに大量の魔族が現れる。

「何これ・・・！！？」

「ネギ君の村の光景だよ！ 多分映像！！」

周りに見える魔族はお構いなしにネギ先生はクルトさんの首を掴み腹部を殴りつける・・・が、クルトさんはまるで無抵抗だ。

なぜ、クルトさんは無抵抗なんだ？

殺されるつもりか？

そうしている間も映像は話しに聞いた6年前の事件通りに展開していき

映像のネギ先生は逃げ回る。

本物のネギ先生は今だ無抵抗のクルトさんに攻撃を続けている。

「ね、ネギ先生をモニターしているアーティファクトが・・・

憎しみの文字で埋められて真っ黒に・・・!

こんな・・・!? そんな・・・っ!」

「くそ、まずい闇の魔法の侵食か・・・!?」

本物のネギ先生は身体を黒い霧が包み

羽や尻尾が形成され本物の魔族のような形態に変わりつつ有る。

映像の方は子供のネギ先生が悪魔に襲われる瞬間、

聞いた話し通りなら、ここで先生の父親が助けに来るはず・・・  
そうか!

「ぐっ……ネギ君……流石に闇の魔法に侵食され……魔族  
になってしまつては……」

……くっ！　まず　い！？　身体に力が……」

クルトさんも流石にネギ先生が闇の魔法の侵食で

魔族になるのはまずいらしく、なんとか身体を動かそうとしているが

ダメージが大きくて満足に動けないようだ。

私は無詠唱で出した麻痺の射手を5本ネギ先生に打ち付ける。

完全にクルトさんにだけ集中しているネギ先生は直撃を受け

一時的に動きが止まる。

その間に私は　2本を闇の魔法で取り込み、

ネギ先生に瞬動で接近し顔面を殴りつけ

映像の父親の姿を視界に収めるようにする。

父親の姿を見たネギ先生から黒い霧が少しずつ晴れていき

ネギ先生事態の動きも止まり、棒立ち状態になる。

そこへ宮崎と朝倉がネギ先生の腕にしがみつ

ネギ先生の目を覚まさせるように声をかけている。

「ネギ先生っ!!」 「ネギ君!!」

「騙されちゃダメ、これは罠だよっ!!」

「ネギ先生負けないでくださいっ!!」

「ぐっっっ!!?」

「先生はこんなコトの為に 此処に来たんですか？」

「こんなの違うっ!! こんなの皆や わ、私が大好きな先生じゃないですっ!!」

「だから・・・先生・・・っ!!」

「う・・・ぐ・・・の・・・ど、かさん?」

「・・・目を覚ませ、このバカがっ!!」

宮崎の言葉で意識がもどりつつあったネギ先生にダメ押しで

私が闇の魔法で強化したピンタを打ち付け先生の目を覚まさせる。



「っ……千雨さん……」

「そりゃ私達には この日アンアが味わった辛さは分かんねえさ！  
アンタがこの日から どんだけの孤独と懊悩の夜を送ったかも知ら  
ねえ！

けどよっ ころじゃねえだろ!？

この日アンタに芽生えたのは復讐とかそんなモノだけだったのか？  
だったら どうして闇の魔法を習得できた！

あの修行でエヴァから学んだのは闇の力に吞まれて魔族になって  
勝手気ままに力を振るって敵を皆殺しにする事だったのか!？」

「……ち、違います!」

「そうだろ！ その闇の力を自分で抑えこんで  
闇を克服して、次の一步を踏み出すためだろう！

その力でクラスの生徒を守るためだろう!!」

ネギ先生の目を覚まさせるかのように

映像のネギ先生の父親はケタ違いの威力の雷の暴風で悪魔の群れを  
薙ぎ払う。

その後、映像では子供のネギ先生と父親の対面、  
形見の杖を受け取るシーン、そして別れのシーンが流れ  
本物のネギ先生はその映像をじっと見つめている。

「……………父さん。」

……………う……………ぐっ！」 111

「ネギ君！」 「先生！」

「……………おい、大丈夫か？」

「ハ、ハイ……………スミ……………マセン、皆さん。」

ネギ先生は闇の魔法の侵食をなんとか押さえ込んだようで  
少し苦しんでいるが、身体に変化は現れない。

「……………どうやら、皆さんには助けられたようですな。」

さすがはネギ君のパートナー達ですね。」

「……………ちよっと総督さん。」

アンタ言ってることやってること回りくどくてよくわかんないやね。

結局、何が目的なの？ アンタ？」 #

「フフ・・・目的ですか・・・それは当然、

ネギ君を我々の仲間に取り入れることですよ。」

嘘だ・・・ここまでやって、それが理由とはとても思えない。

「・・・宮崎、そのアーティファクトで総督に聞いてくれ。

6年前の事件、総督は関与したのか？」

「っ・・・!!?」

「千雨さん・・・?」

「は、はい！」

クルト・ゲーデルさん、6年前のネギ先生の村を襲った事件に

貴方は関与しているんですか？」

「・・・。。。」

「……そんな……。」 111

「どうなんだ？」

「6年前の事件にこの人は……関与していません。」

「……そんな、あれだけやっておいて!？」

本屋ちゃん本当に?」

「……本当です、あの事件に関与したのは、

元老院内でも一部の過激派と言われる人達だけだそうです。」

「ネギ先生を狙った理由は解るか?」

「もはや態々アーティファクトを使って頂かなくても結構ですよ・

過激派連中にはネギ君がアリカ姫の息子だということが許せないからです。」

「……総督さんは本当のことを言ってます。」

「……クルトさん……だったら何故こんなことを?」

「フフ……私が関与していないとしても

当時 元老院に所属していた私にも一部とは言え責任がありますか

らね。

そこから逃げるつもりはありません。」

「……そういうことが、総督はMMの元老院過激派にネギ先生が引き込まれ無いように守るために態々こんなことを……」

「千雨さん……どういう事ですか？」

「MM元老院内で6年前の当時は過激派がかなりの力を持っていたんだろが、

恐らくそれ以降、6年前のネギ先生の村の事件で

かなり力を落としたんだろ……」

これはネギ先生達へのゲートポート破壊の犯人としての手配が

MM国内やオスティア、アリアドネーで参考人として手配されていることでは

ここオスティアで総督が権力を持ち、

私達のことがかかっていながら放置していること等で察せられる。

過激派の勢力が強くてアリカ姫の件でネギ先生を抹殺したいのなら生死問わずの賞金首にするはずだ。

そこで此処へ来ての白髪のカキ達のテロ事件の真相、

拳闘大会準優勝の功績、そして恐らくこれから起こるであろう

白髪のカキの組織のテロに対応するために

MMの元老院の過激派がネギ先生に接触して先生が取り込まれないように

態々こんな芝居を打って敵愾心を煽ったんだ。」

「……………」

「そんな……………だったら……………」

「総督さん個人に限って言えば……………仇というよりも　むしろ味方……………」

「だったら何でそんなコトをして……………MMの元老院は危険だ、と、言ってくれれば……………」

「そこは初対面の人間が……………総督とは言えそんな事を言っただって信じるか？」

むしろMMの元老院過激派が接触してきて

6年前の事件の犯人は白髪のカキの組織だといったら？

宮崎のアーティファクトは心を読めるが

何も知らない第三者を介して接触してきたら？

洗脳してそう思い込まされた人物だったら？」

「……恐らく言われるままに……信じてしまつてでしょう。」

「思考は読めるが真実は分からない。」

それがそのアーティファクトの弱点だろうな。」

「だけど、何でアリカ姫の息子だからって、

村ごと焼き払うおうとするほど過激派はネギ君を嫌ったの？」

「……その辺の事は総督が良く知ってるんじゃないか？」

「クルトさん……聞かせてもらえませんか？」

「……まったく、その眼鏡のお嬢さん はやりにくい  
ですね。」

まあ、いいでしょう、しかし口で説明するより実際に見てもらった  
ほうが早いでしょう。」

クルトさんが指を鳴らすと、周りの映像がネギ先生の村から変わり

どこかの空中に切り替わった。

その後、映像はある場所へ移動、

その場所ではネギ先生の父親の若い時だろうか？

魔法で変装している、青年のネギ先生によく似た男の人が黒いローブを来た男と戦っていた。

「父さんっ！？ これは・・・？」

「これは私が知りうる、君の・・・父と母の物語です。」

ネギ先生の父親はローブの男とかなり激しい戦いを繰り広げる。

拳闘大会でのラカンさんが二人で全力で戦っているような

激しい戦いで、私もここまで激しい戦いは見るのは初めてだ。

しばらく戦っているとローブの男のほうは徐々に弱っていく

最後に止めとばかりにネギ先生の父親が

魔法の槍をローブの男に打ち込み、大規模な爆発がおきて

目の前が真白になる。



その後 また場面は変わり、

次はさっきまでナギさんとローブの男が戦っていた場所を

ある戦艦内部から遠目に見た映像に変わる。

先ほど戦っていた場所が光に包まれているが、

映像の音声によると、広域の魔力減衰現象が起こっているようで

それが拡散し、魔法世界を包もうかと言う瞬間のようだ。

そこに戦艦の指揮をしてるであろう身なりの良い女性が

艦隊に指示を出し、光球を囲み魔力減衰現象を抑えこもうとしている。

そしてまた場面は変わり、どこかの城の前で行なわれている式典だろうか？

スゴイ数の観衆の間を悠々と歩く3人の男性が見える。

ナギさんを先頭に、ラカンさんと眼鏡をかけた男性と一緒に

城の方へ歩いていき、先ほど戦艦を指揮していた女性や

褐色の肌で角の生えた女性と共に観衆に向けて手を振っている様子が流れる。

その後 また場面が変わり、

どこかの酒場でナギさんやラカンさん、先ほど一緒に居た眼鏡の男性、

それと酒場に押しかけている客と一緒に大騒ぎする映像が流れる。

2545

その後、また映像は代わり、今度は

新オスティアのような浮遊している島が次々と崩落していき

先程の女性の指揮の元、避難を進めている映像が流れる

ナギさんもなんとか助けに行こうと

通信で女性と言いつけている姿が見えるが

次の映像に切り替わったときには、  
ほとんどの島が落ちてしまった映像が流れた。

その後、指揮をしていた女性の裁判の映像に切り替わり  
弁明をしているようだが、それも虚しく投獄されてしまう。

「20年前のあの戦争では 完全なる世界が裏で暗躍し、  
各国の重鎮を操り戦争を長期化させ魔法世界を荒廃させ、  
最後には墓守の宮殿で大規模な魔力減衰現象を起こさせ  
この魔法世界を滅ぼそうとしていました。

それを救ったのが かつての英雄、ナギ・スプリングフィールドを  
長とした紅き翼。

しかし、ナギは完全なる世界の長、造物主を倒すことはできても  
世界を救うことは出来なかった。

ナギが造物主を倒した後、本来魔力減衰現象は起きない計算だった

のですが

各国の陰謀で 本来起きることがなかった魔力減衰現象を抑えるため、

アリカ姫は自国を犠牲にして魔力減衰現象を押さえ世界を救った・・・が

完全なる世界に操られてたたとは言え、

父王を殺し自らの国を滅ぼし、

各国へ難民の受け入れを承諾させ社会不安を増大させ、

死の首輪法の俗称で悪名高い、

国際的な奴隷公認法を通したことなどでも

彼女は既に多くの非難を浴びていたのです。

いつしか彼女は災厄の女王とよばれ、

彼女の味方を名乗り出る者は次々と去って行きました。

本当に世界を救ったのは、彼女だというのに・・・」

「・・・・・・・・」

その後は、クルトさんの語りと共に映像は流れていく。

「その2年後、とうとうアリカ女王の死刑執行が決まってしまいました。」

当時の私は当然そんな事は看過できず、

ナギ達に連絡しましたが彼等は当時、

世界各地の紛争地域を周り、小規模な救済活動をしていました。

そしてとうとう、運命のアリカ女王死刑執行の日。

それまで私はなんとか女王を救おうと各地で証拠を集めたり

嘆願を出したりしましたがそれも虚しく彼女には

魔法が一切使えず、魔物がうごめくケルベラス渓谷へ突き落とすという

処刑が執行されましたが、ナギ達紅き翼がぎりぎりですぐ助け出し、

その後ナギとアリカ女王は結婚、ネギ君が生まれることになります。

「……父さん、母さん。」

「しかし、私はこのやり方に全く納得がいていません、

これは今も変わりません。」

「クルトさん・・・?」

「これではアリカ女王の汚名も払拭できず、

MM元老院 過激派の不正も告発できない!

ナギ達もつと早く、政治的に活動し、不正の証拠を集めれば

あんな処刑など起こらず、アリカ女王は世界を救った英雄として

何不自由なく生きることができはず!!

こうしている今現在も、当時の元老院の者共はのうのうと暮らしている。」 #

「……………」

「その後、私はある人物に会い、その人の協力を得ることで

MMの不正を暴き、アリカ女王の汚名を晴らす事ができる

あと一步の所まで着ました。」

「……………これが僕の父と母の真相ですか?」

「当時の証言を元に私が作った映像ですが、

これが私が知りうる全てです。」

「……のどかさ。」

「……本当の事を言っています。」

「……」

「こんな事があったから あんな芝居を打ってでも

MMにネギ先生が協力しないようにしたんだね？」

「フフ……それだけではありませんがね……」

私はこれでもオスティア総督でMMの元老議員です。

政治的にもネギ君は大変利用価値のある立場ですからね。

私に手を出したことをネタに 後で 協力を得ようと思いましたが・  
・

今なら普通に頼んでも協力してくれそうですかね？」

「良かったら後いくつか聞かせてくれませんか？」

「まだ何かあるんですか？」

ネギ君の村を襲った犯人、両親の真実、

他に何が知りたいんでしょう、

私には特に思いつきませんが？」

「……この魔法世界、火星に築かれた人造異界、この世界は崩壊するんですか？」

「……どこでそんな話を？」

いや、誤魔化すのは止めましょうか……

確かにこの魔法世界は過去に何者かによって

火星に作られた世界ですがすでに……つなに!？」

「「「「!？」」「」」」

クルトさんとネギ先生の話の途中で 急に室内の映像が消え壁にひびが入り、扉が破壊され外から古と高畑先生が飛び込んでくる。

「ネギ坊主、大変アル！」

外に巨大な悪魔みたいなのが現れて暴れてるアル！」

「タカ……ミチ？」

くっ……古さん、い……今すぐ行きます！」



「古菲君ネギ君を連れて早く行くんだ！」

クルト！ 情報より早いが奴らが来た！」

「……………わかった。」

『司令部！予定通り兵を配置し迎撃準備！！』

敵は恐らく鍵を使ってくる、予定通りの編成で防衛に徹しろ。』

タカミチ、貴様はさっさと外に行って国民の安全確保だ！」

私達は古がネギ先生の肩を抱き、

皆で特別室を後にして、他のメンバーのもとに向かって移動する。

……………しかし、クルトさんが高畑先生を見た瞬間の表情は

尋常なモノじゃなかったのが少し気になった。

side クルト

敵がこのタイミングで攻めてきたのは想定外でしたが

なんとか彼女に貰ったネクタイと思考誘導で

下手に深い思考まで読まれずに済みましたが

ここでタカミチが姿を表すとは・・・

「それはいいが・・・本当に大丈夫なのか？

防衛だけで・・・」

「貴様にちよろちよると動かれては作戦の邪魔になる。

引っ込んでいろ。

貴様達のやり方では またアリカ女王の二の舞になる。」

「・・・クルト。

まだ あの時の事を・・・アリク 「貴様が女王の名を口にするな  
！」・・・」

「あれだけアリカ女王を苦しめ、汚名を被せ、最後に命だけ救った  
から良しとしろだと？」

ふざけるなっ！！

アリカ女王は本来ならもつと幸せな人生を送れたはずの人なんだ！

幸せになるべき・・・ならなくちゃいけない人なんだ！

それをナギや貴様らが・・・紅き翼がもつと早く動きさえすれば・

・・・」#

「クルト・・・」

「貴様は黙って奴らの残党狩りでもしている！

その為の情報でも支援物資でもいくらでもくれてやる！

ただし、この世界を救うのもアリカ女王の汚名晴らすのも

貴様等にできないというのなら 私がやって見せる！」

「・・・それでもナギもアリカ女王もネギ君を授かって、幸せだったと僕は思うよ。」

「アリカ女王やナギが今現在どうなっているかも知らない貴様が・・・っ！！」#

(っち・・・さっきの映像や過去の話、その上タカミチと会ったことで

少し頭に血が上りすぎたようですね・・・)

私は一度 深く深呼吸をして気を落ち着かせる。

ネギ君にやられた腹部などが痛むが、これくらいならなんとか動けそうだ。

「・・・!？」

知って・・・いるのか、クルト?」 1111

「貴様に語ることなど何も無い・・・

さっさと外の奴らを片付けてこい。

一人でも多くのいわれなき不幸に苦しむ 無辜の民を救うのが

貴様達の役目なんだろう。

私はたった一人の女性も、男も、この世界も救ってみせる。」

「答えるクルトツ!!」

ナギとアリカ女王は今も生きているのか!？」

「こんな所で問答している暇があったら

一人でも多くのオスティアの民を救ってこい!

あの二人になら嫌でも近い内に会える……必ず会わせてやるさ。」

「くっ……後で必ず話を聞かせてもらっぞ、クルト！」

「……さっさと行け。」

タカミチは最後に私を睨みつけ部屋を出て行った。

「ふん……会わせてやるさ、必ずな。」

……アリカ女王、ついでにナギも救って見せますよ。」

神様から頼まれたお仕事。

その73（後書き）

73話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。      その74

新オステイア      総督府

s i d e      千雨

闇の魔法の後遺症で苦しむネギ先生を古菲が抱え

私達が特別室から舞踏会会場まで戻ってきた時には

既に来賓客はほぼ避難が完了し、MMの警備兵や

クルトさんの私兵だろうか？

MMの兵と連携して見たことの無い鎧を着た兵士が

先ほど特別室で見たような悪魔の軍団と戦っていた。

上空にはMMの軍艦が何隻も並び、一斉射撃で戦線を維持している。

「ネギ君！ 皆こつちこつち！！」

声の聞こえる方を見ると、早乙女が手を振っている姿が見えた。

周辺では、桜咲や長瀬が悪魔相手に戦闘中で

犬上や神楽坂が村上達、非戦闘員を早乙女の船に避難させているところだ。

早乙女の船の上では相坂と茶々丸が船に備え付けられた銃座に座り悪魔の軍団に向けて攻撃をしている。

「皆あゝ 早く私の船に乗り込んで！」

この場所じゃ、避難したとは言え、総督府が近いから

MMの軍艦も私の船も満足な武装が使えないんだよ！」

「の、乗り込めって言ったって、

そっちの船をもっと近づけてくれないと魔法が使えない私達じゃ

どうしようもないよ〜！」 ーーー

「くっ……分かったわ、楓ちゃん！」



例のアーティファクトで皆くるんで乗せちゃって！

小太郎君はその間戦闘を楓ちゃんと交代して！」

「承知。」

「任せとき！」

「!?!?!?!?! あ、アレは何でござるか!?!?!?!」

「あ、今度は何??!?!?!?! は?」 1111

長瀬が指を差した方向を見ると、

雲海の中から何本物触手のような物が現れて

MMの軍艦を拘束しようと動いている。

軍艦の方も回避行動や攻撃でなんとか回避しているが

このままだと時間の問題だろう??!?!?!?! そう思っていると

雲海から更に触手の本体だろうか?

大型の悪魔が現れて、総督府の舞踏会会場に手をつき

オスティアの浮遊大陸に乗ろうとしている。

大型の悪魔が舞踏会会場に手をついた時の衝撃や、  
会場の破壊で、早乙女の船に乗り遅れた佐々木達が  
空中に投げ出されたが、長瀬がなんとか間に合い、  
アーティファクトのマントで受け止め、落下死だけは避けられるこ  
とができた。

「おいーい、楓姉ちゃん皆は無事かー？」

「大丈夫でござる。」

しかしマズイでござる、バラバラになってしまった……しかし  
これは一体……む？」

長瀬も気がついたようだが

協力的な魔力反応があった方向を見ると

総督府の外壁に作られている塔の上で

ゲートポートを襲った白髪のガキの仲間の黒いローブを着た長身の  
魔法使いが

魔方阵のを展開し悪魔の軍団を召喚してた。

「マズイでござるな・・・敵がうじゃうじゃ出てきたよござる。」

「ちょっと ちょっと！」

これは一体 何なのよーっ!?

ちょっとパル どうなってるの? どーゆーことよ!??

「そんなの私にも分からないわよアスナ！」

イレギュラーよ、完全に想定外っ!!

とにかく逃げて!!

みんなバラバラに逃げてーっ!!

プランBよ!

第2集合地点に向って! そこで拾うわ!!

「了解 (承知) 」「」

私は特別室に行ったメンバー+古菲と、桜咲は近衛と、犬上は村上と、

長瀬は佐々木、明石、和泉、大河内と、一人はぐれてしまった神楽

坂は単独で

計画にあった第2集合地点に向って移動を開始した。

side 夕映

私達、アリアドネーから派遣された警備隊は

オステイア総督府の警備隊と連携して、

来賓客の避難誘導をしながら会場で悪魔（？）相手に戦闘中。

オステイア警備隊の連携がいいおかげで

来賓客の避難は大体終わって………「皆さん、あそこに逃げ遅れた女の子が！」

委員長の指示した方向を見ると悪魔に今にも襲われそうな女の子がいます。

「アネット・ティ・ネット……」 「タロット・キャロット・シ

ヤ……………」

女の子に一番近い位置にいたコレットと委員長が

魔法の射手を詠唱し悪魔に攻撃を仕掛けますが……

「「なっ!?!」」

「……魔法が効かない……いえ、掻き消された!?!」 1111

委員長とコレットの魔法を無効化した悪魔が

攻撃してきた委員長に襲いかかるうとする。

「委員長! 紅き焰!?!」

委員長の魔法が効かなかったが、私が放つ魔法は何故か効いたよう  
で、

悪魔は私の魔法の直撃を食らい、消滅して行く。

「!?!」

……つ装剣!?!」

背後から別の悪魔が襲いかかってきたようで

直ぐ様、警備隊の剣を呼び出し、カウンター気味に突き刺す。

「ベアトリクスさん！」

「ハイ！」

「「アリアドネー九七式 分隊対魔結界！」」

「これでひとまず持ちます！」

応援を待ちましょう。」

「す、すごい ユエー！」

「ユエさんっ、こいつらは一体なんなのですっ!？」

こんな大量の悪魔が一度に発生するなんてあり得ませんっ!」

「悪魔？ 魔族なの？」

「アレはね・・・召喚された魔族じゃなくて、

闇の魔素を編んで作った魔物の影・・・影使いと人形遣い両方の技術を使って

創り上げる人造の魔族みたいなものかな？

20年前の大戦で完全なる世界が使っていた魔法だよ。

・・・そうだよな？ エヴァ？」

「自分の知識に自身がないなら

偉そうにひけらかすような事はしないほうがいいぞ？

姉様。」

「・・・・・・・・・・は？

ソプラノに・・・エヴァンジェリンさん、それに千草さんも・・・  
・？」  
「1111

「はるる、夕映、頑張っているみたいだね。」

「・・・な、なんでソプラノ達がこんな所にいるんですか!？」

side ソプラノ

「・・・な、なんでソプラノ達がこんな所にいるんですか!?!」

「なんでって・・・」

夕映におみやげを持ってきてあげたんじゃない。

はい、コレ。」

私は夕映の手に持ってきた Grand Master Key  
を収納したペンダント持たせ、

一緒にエヴァの作った説明書（？）の巻物を渡す。

私が夕映と話をしている間に、

千草が式神を呼びだし、周辺の悪魔掃討にかかる。

「貴女達! こんな所で呑気に会話しないでくださいます!?!」

「・・・なんですか? コレ?」

「ちょっと! ヌエさん無視しないでくれます!?!」 #

「その巻物は私が作ったその鍵の説明書だ、今すぐ読め。」



「旦那さん、エヴァはん、早うせんと他の方が来てしまいますえ？」

「そうだったね、じゃあ、夕映また後でね。」

「……………は、はあ……………」

どさくさにまぎれて渡すものを渡し、伝えることを伝えた私達は

エヴァの影を使った転移魔法で、外に展開しているMM戦艦部隊の  
旗艦、

クルトが居る場所に転移する。

side 夕映

なんだっただんでしょうか……………今のは？

と、とにかく、ソプラノ達が着た時に千草さんの式神が

周辺の悪魔を一層していつてくれたおかげで

少し時間が稼げそうです、その間にソプラノがくれた巻物の方を讀んでおく。

周辺ではMM警備隊が部隊の再編成をして、

会場の外から攻めてくる悪魔に対して防衛の陣形を再構築している。

「こ、これは……」 111

エヴァンジェリンさんが作ったと言う説明書を読んでいくと、

このアイテム……鍵の非常識な能力に驚く。

それに敵の一部が鍵と同形状の物を持っているのを見ると、

先程のコレットや委員長の攻撃が無効化されてしまった理由がわかった。

(……そう言えばベアトリクスさんの攻撃は効いてましたね。

彼女も旧世界かMMの国民なんでしょうか？

なにはともあれ、今この場においては心強いです。)

「分かりました！ 委員長とコレットは、女の子を守ってあげてください。」

敵には二人の攻撃も防御魔法も効きませんので

回避に徹してください！」

「な、なんで私とコレットだけなんですの！」

「そつだよユエ〜！」

「お二人はこの魔法世界の住人です。

魔法世界の住人の魔法は敵が持っている特別なアーティファクトのおかげで

無効化されてしまふんです。

ベアトリクスさんは恐らく本人か、先祖に旧世界出身者居るんではない。

旧世界出身者以外の魔法は無効化されてしまふので、気をつけてください。」

「そんな非常識な！」 1111

私が巻物を読んで、委員長達を説得している間に

敵が再度侵攻をかけたよつたよう

MMの警備隊が戦闘状態に入っている。

「ユエさん、MMの警備隊も今はなんとか防衛できているようですが、

少々分が悪いですね・・・数が多すぎます。」

「そうですね、向こうもそれが分かっているようで、

徐々に引いてますね・・・それにしてもMM警備隊は落ち着いていますね。」

MMの警備隊はこの攻撃を事前に予期していたかのようで、

敵襲で一時混乱したもののすぐに立て直し、

落ち着いた行動で来賓客の避難や防衛戦に徹している。

「私達には何も連絡がありませんでしたが、

事前にこのテロが予期されていたのでしょうか？」

「委員長・・・そうですね、練度が高いのもあるでしょうが

作戦行動が計画的なのか、落ち着いていますね。」

委員長とコレットが助けた女の子を落ち着かせていると、

MM警備隊と敵との交戦地帯、その横から影が伸びてきて

敵の悪魔を10体ほど倒していく。

「やれやれ、数が多いとは言え この程度の敵に防衛戦ですか？」

「何者だ！ 所属と名を名乗れ！」

「旧世界、麻帆良学園 魔法生徒、

高音・D・グッドマン！」

「あ、あの同じく さ、佐倉愛衣です！」

「あゝ・・・その他2名です・・・」 111

「あゝ！ 美空ちゃん！！！」

「げっ！？」 111

麻帆良の魔法生徒が現れたかと思ったら更に別の場所から

聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「夕映ちゃん！ 高音さんに愛衣ちゃんも一緒に逃げるわよ！」

早くっ！ 私達と来ないと現実世界に戻れなくなっちゃっわよー！！」

「神楽坂さん！」 「アスナさん。」 「え〜と、どちら様？」

「置いて行くわよ、美空ちゃん！！」 #

「お待ちなさい！ 神楽坂さん！

ここの招待客の避難が先ほど終わったばかりで

今私達が引いたのでは、避難船の乗り場まで敵に押し込まれてしま  
います！

ここで時間を稼いでおかないと！」

「そーゆー事なら、私に任せて！

この手の化け物相手になら 私・・・

めっばー強いんだからっ！！！」

アスナさんが大剣を構え敵の悪魔に向かって斬り込んでいくが・・・

ガキッ！！

「あ、あれ？ 何で・・・？」

「!？」

「ア、アス……」

アスナさんの魔法無効化が効かない!？

本人にも予想外の出来事のように

攻撃した悪魔からのカウンターの攻撃をモロに受けてしまい

吹き飛んで壁にたたきつけられ、

その後の悪魔の追撃で、剣で刺されそうになったその時……

悪魔の剣が何者かの攻撃で折られ、

アスナさんに攻撃した悪魔の頭にドレスをきた女性が銃を突きつける。

「私のクラスメイトの汚い手で触れるな、

木偶人形。」

ドレスの女性は悪魔の頭を銃で撃ち抜き、

自分の頭に手をやったかと思うと、変装していたのか、カツラを脱

ぎ去る。

「あ……、あなたは……？」

「全く……世話のやけるお姫様だな。 神楽坂。」

「あ……た、龍宮さん！」

何でここに龍宮さんが……？」

「メガロメセンブリアでテロ事件の調査を進めていたのだが、祭りの初日にここ オスティアに呼びつけられてな。」

「J・ラカン氏の依頼で お前を陰ながら護衛していた。」

「あの、ラカンさんが？」

「よし、話は後だ神楽坂。」

この面倒な場所から離脱するぞ。」

「え、離脱って……逃げるってこと！？」

「こいつらはどうするのよ！？」

「コイツらか……これを全部相手にするのは骨が折れるし、

依頼内容にも含まれていない。」



「そんな！」

「あんな小さな女の子だっているのよ？」

「助けなきゃ！」

「私の仕事はお前の護衛だ。」

それ以外のことは指示されてない。

それにMMの警備兵はかなり練度が高いようだ、

押し込まれてはいるが、あの子が逃げる時間くらい稼いでくれる。

・・・綾瀬も付いているようだしな。」

「むっ・・・私をあまりあてにしないで欲しいです。」

「フフ・・・私にとっては この中ではお前が一番信用できる。」

条件付きの状況とはいえ 私と引き分けた相手だからな。」

全く、余計な人に目をつけられたものです。

しかし、まずはこの場をどうにかしないと・・・

この鍵が説明書通りの能力を持っているなら

コレを使えばなんとでもできそうですが

注意書きに、可能なかぎり誰にも見られるな。

と、言う注意がされているだけに、この場で使うにはまだ早いようです。

「むう……むむむ……わかった!!」

じゃ、私が龍宮さんを雇う!!

それでどう!?

「は……?」

アスナさんが龍宮さんを雇用する案を出したときに

一瞬 龍宮さんの気が緩み、その隙を着いて悪魔の一体が

アスナさんに向って剣で攻撃を仕掛けるが、

龍宮さんが余裕で反応し、その攻撃を銃で撃ち落とす。

「わ!？」

「しかし、新聞配達バイトには、

私の弾代はバカ高いぞ、お姫様？」

「しゅ、出世払いで！！」

「ふむ……まあ、いいか。」

先ほどアスナさんに攻撃を仕掛けた、

悪魔を皮切りに、次々と悪魔がアスナさんや龍宮さんに向かって攻撃を仕掛けるが

龍宮さんは余裕でそれをさばいていく。

(……私 本当にあんな人を相手に引き分けに持ち込んだんですかね？)

「ふむ、お前はなんか出世しそうだ。」

龍宮さんは次々と悪魔を銃で撃ち落としていく、

しかし敵の悪魔も遠距離攻撃が出きるタイプが前に出てきて

龍宮さんを撃ち落とそうとするが、

それに反応した龍宮さんは敵のど真ん中に突っ込んでいき

一気に近距離から二丁拳銃で敵を次々と撃ち落としていく。

(・・・が、学園祭の時は、龍宮さんはきつと手を抜いていたんですかね?) 1111

「ひゃー・・・さっすが。」

「何だ あの人間台風・・・」 1111

「・・・龍宮さん一人に任せておけば・・・だ、大丈夫ですね。」

「聞こえているぞ、綾瀬。」

「お前も警備隊なら少しは手伝え。」

「あう・・・」

「ふむ・・・意外ともろいな、代金は割引でいいぞ？」

「神楽坂。」

「この機会に、この場の敵を一気に殲滅し撤収したほうが賢そうですね。」

「分かりました、私も手伝うので 少しの間、

私に敵を近づけさせないでください。」

私はアーティファクトとスライム娘達を召喚してアーティファクトでの結界を張る。

そして呪紋を起動し、この場の悪魔を一掃する準備をする。

「ほう・・・お前にこの場で何か出来るのか？」

あの時はそれほど大規模な魔法は使えないようだったが・・・ん？

・・・その呪紋・・・超の奴か。」

私の呪紋は服を着ていたら見えない位置にあるんですが、

龍宮さんには見抜かれているみたいですね。

「そう言えば龍宮さんはあの時は超さんの陣営にいたんですけど、  
ならばコレを知っていてもおかしくはないですか。」

「面白い、どこまで出せるのか見せてもらおうか？」

「見世物じゃないです、まったく・・・」

委員長、コレットは 女の子を守って結界内に入ってください。

すらむい、あめ子、ぷりんはベアトリクスさんと一緒に3人を

守っていてください。」

「おうー！」「はい。」「……だる。」

私はMM警備隊の後方、部隊の指揮をしている人の所に移動し

指揮官にこれから魔法で攻撃する事を伝える。

「アリアドネー騎士団、オスティア警備部隊の、ユエ・ファランドールです。」

これから私が燃える天空で敵に攻撃しますので

合図があったらMM警備部隊は防御障壁を全力展開しつつ下がってください。」

「ふむ……君が総督より連絡があった娘か……わかった。」

総督から？ クルトさんから私達の事がちゃんと連絡されているんですか……

まあ、この場に置いては辺に国籍や部隊で対立するよりもずっといいですし

味方識別がちゃんとされているなら特に触れないようにしておきま  
すか……

「では龍宮さんもアスナさん、それに麻帆良の皆さんも

私の攻撃範囲に入ってこないようにお願いします。」

「ああ、了解した。」 「OK、夕映ちゃん！」

「私達は後ろに下がってますので……」

「美空さん！」

よく分かりませんが、私達は後方で援護いたしますわよ！」

「は、はい、お姉さま！」

MM警備部隊を楯役に、龍宮さんが敵の前線に突っ込み引っ掻き回し

アスナさんや高音さん、佐倉さんが龍宮さんが撃ち漏らした敵を

処理していく。

スライム娘や委員長達の所まで敵が押し寄せてこないようなので

私は安心して 魔法の詠唱をしていく。

「……ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄。

罪ありし者を 死の塵に。

……MM警備隊、龍宮さん！

引いてください！」

「おう！ 全体、防御障壁を展開しつつ後退！」

「了解……っと。」

MM警備隊 指揮官の号令でMMの部隊は魔法障壁を展開しつつ後退、

龍宮さんも、私の合図で交代しつつ、

前に出ようとする敵を撃ち落としていく。

それぞれが交代したことを確認した私は、

MM警備部隊の上に飛び、その位置から敵の悪魔の群れに向かって

魔法を撃ち出す。



「行くです！ 燃える天空！！」

全身の呪紋を全力で起動し、

私のアーティファクトの糸巻きから出た高温の炎が敵の悪魔の群れを飲み込み

一気に敵を焼き尽くしていく。

「うわ………す、すごい。」

「ほう……大したものだな。」

まさか綾瀬がこんな魔法を単独で使えるなんてな。」

「くっ……愛衣！ 貴女も炎の魔法を使うなら

綾瀬さんに負けてはいられませんわよ！」

「む、無理ですよ！」

私には中級魔法が精一杯です！」 111

私が打ち出した 燃える天空が収まると、

その炎に飲み込まれた悪魔は、ほぼ 消滅し、

残った悪魔も、龍宮さんがライフルで次々と撃ち落としていく。

「ふう〜・・・これで、この場はなんとか大丈夫みたいですね。」

「君、助かったよ！」

あのままだと　ウチの部隊でも押し込まれていたからね。」

「いえいえ、我々もオスティアの警備を任せられている身ですので、

コレくらいのお手伝いは当然です。」

それに皆さんが戦線を維持してくれたおかげで

来賓客の避難も無事できましたし、皆さんがいなければ

私も魔法の詠唱時間を稼げなかつたですし。」

「とにかく今回は助かった。」

我々は次の作戦行動があるので、これで失礼するが、

また今度　何か手伝える時はいつでも我々の部隊を頼ってくれ。」

「はい、それでは私達も失礼します。」

MM警備部隊の人達と分かれ、私は委員長達や、

アスナさん達が待っているところに向かう。

「ふえ〜、相変わらずユエのあの魔法はすごい威力だね・・・」

「・・・私達・・・前にアレに焼かれそうになったんですわよね？」  
「！！！」

「そうですね・・・お嬢様。」

「そ、そのことはもう何回も謝ったじゃないですか！

それに今は緊急事態なんですよ！

ここはなんとかできたとは言え、他の場所では敵はまだ居るんですから！」  
「！！！」

コレット達にあの魔法を見せたせいで

昔のことを掘り返されそうになるが、

とにかく今は 緊急事態なので昔のことは忘れてもらって

次の行動に移ることにする。

「アスナさん、先ほど逃げると言いましたが

何か当てがあるんですか？」

「あ……そうだ！」

パルの船やネギ達と合流する場所があるから皆そこについてきて！」

「しかし、逃げると言ってもどこに逃げるんですの？」

それに　ここオスティアを放って逃げるなんて、

警備隊の我々は到底できませんわ！」

「委員長、とにかく今は一度引いてください！」

警備隊の任務があるとは言え、攻撃の効かない委員長やコレットではどうしようもありませんし、私とベアトリクスさんだけでも同じです。

ここは一旦引いて、本体と合流して部隊編成をしなさいと。」

「……むう、確かにそうですけど。」

「委員長、私も一旦引いてセラズ総長に連絡を取ったほうがいいと思っよ。」

「くっ……私が引くことしかできないなんて……」 #

委員長も状況を考えたら引くしか無い事は分かってくれたようで

私達も一旦アスナさん達と一緒に避難し、

セラス総長や、ソプラノ達からの次の指示に備えることにする。

「ふむ・・・現状、必要ないことだとは思いますが、

一応、宮崎から先ほど念話妨害が晴れた所で連絡があったので伝えるぞ。

『復活の方法はある。誰かが消されてもあきらめないで。』

・・・だそうだ。

綾瀬、何のことが解るか？」

「はい・・・多分鍵の事ですね・・・」

「鍵・・・？」

どういう経緯かは分かりませんが、のどかも鍵の事を

知ったようですね・・・

復活の方法というのはよくわかりませんが、

エヴァンジェリンさんの説明書によると

敵は魔法世界の住人を鍵の魔法で強制的に

別の世界、異空間に移動させることができるようです。

どういう経緯が分かりませんが魔法世界の住人は

この魔法に抗う方法は無いようですが、

私や旧世界の住人、それにここに配属されているMMの兵士ならば強力な魔法障壁を張ったり等で、なんとか対抗する手段はあるようです。

「この世界に こんな魔法具があつたなんて・・・」

ソプラノやエヴァンジェリンさんはこの事を知っていて

こんな鍵まで用意していたんでしょうね・・・

それにクルトさんやMM警備部隊の落ち着いた行動も、

すべて織り込み済みということですか・・・

「どうした、綾瀬？」

「いえ、何でもありません。」

「そうか。とにかく時間がない。」

神楽坂、離脱するぞ！

春日達も来たほうがいい！

現実世界へ戻れなくなるかも知れないぞ！

「ほえ？」

「う、うん！」

「分かりましたわ。」

「皆、どこから敵が攻めてくるかわからんから

周囲の警戒は怠るなよ・・・行くぞ！」

「ハイ！」

こうして私達は龍宮さんとアスナさん先導の下、オスティア総督府からの撤退を開始した。





神様から頼まれたお仕事。

その74（後書き）

74話目 投稿

神様から頼まれたお仕事。 その75

綾瀬夕映達が神楽坂明日菜達と合流し脱出を開始する少し前・・・

新オスティア 総督府 広場

side 千雨

2593

「ネギ坊主・・・大丈夫アルか？」

「ハ、ハイ 古菲さん、もう何とか一人で大丈夫です。」

この広場を抜ければ 地下通路のシャフトに着くはずですよ。

急ぎましょう。」

「行きましょう千雨さん。」

「・・・ああ。」

今は先生達と無事に脱出することがまずは大事だが、

クルトさんはあの後、古菲達が乱入してこなかったら

何を言おうとしたんだろうか？

（この魔法世界は過去に何者かによって火星に作られた世界ですが・  
・・）

作られた世界ですが・・・か。

あと1分・・いや、数十秒でも時間があればよかったんだが・・

とにかく今は脱出することが先決か。

私達が広場の脇を駆け抜けていると

どこかでかなり大規模な戦闘でもしているんだろうか？

爆発音や銃声、魔法を使用した戦闘の音が聞こえてくる。

「舞踏会会場の方で戦闘が行なわれているみたいですね・・・」

「・・・・・そうだな、今回の舞踏会には

今回の祭りに参加した各国の要人がほとんど参加しているからな。敵が狙うなら最高の機会だろうな。」

「デモ、高畑センセが言うには

来賓客の被害はかなり少なく済んだらしいアルよ。」

「クルトさんもその辺は分かっていたんでしょうね。

かなり厳重な警備状況のようでしたから。」

「そうだな・・・っ!？」

先生ッ!？」

「!？」

広場の方から急に激しく金属同士がぶつかったような音が聞こえたかと思っただら

今度はガラスが割れるような音が鳴り響き、

広場の何も無い空間から重装備のラカンのおっさんが降ってきた。

「ラカンさん!？」

「……ハア、ハア……よお……ポーズじゃねえか。

最後に会えて……良かったぜ……」

「!？」

最後？　どういう意味だ？

ラカンのおっさんは疲労はしているようだが

外傷はそれほど無いが……

私達がラカンさんを確認したその直後、

またガラスが割れたような音が聞こえたかと思ったら、

空間から白髪のがキ……？　が成長したような感じの男が現れた。

「……ツ!?　　フエイト!!!!」

「……ネギ・スプリングフィールド……

ここに空間を開いたのは……あなたの意志か？

ジャック・ラカン。」

「ぬんっ!!」

ラカンのおっさんはすぐに立ち上がり戦闘態勢に入ったかと思ったら自分の周りに大量の剣を主体とした武器を召喚し

フェイトに向かって投擲するが、フェイトの張っていると思われる障壁に

触れると液体のように崩れ落ち消滅していく。

直ぐ様おっさんは巨大な剣を召喚し

フェイトに向かって投擲するが、やはり同じように障壁に当たると消滅する。

「何度やっても無駄だよ、無意味だよ」・ラカン。

全てを分かっている何故向かってくる？」

フェイトが一度目を閉じ、魔力を集中しその後目を開くと同時に何か攻撃したようだが、おっさんはその場から半身身体を動かさ

回避したが、右腕をやられたようだが……なぜか出血は殆ど無い、

どうやら何かの魔法かアーティファクトで創りだした義手のようだ。

「……………!？」

やれやれ……頭を狙ったんだけどね。

ここまで持つだなんて……貴方には本当に感服するよ。」

何かがおかしい……いくらフェイトが強いと言っても

あのラカンのおっさんの障壁をもともせずアレだけの攻撃が出るだろうか？

ネギ先生との拳闘大会の試合でおっさんの実力はある程度分かっているが

私が、フェイトと何回かやりあった経験から考えても

この状況は考えられない……私はフェイトの様子を観察してみるが

フェイトの魔力の充実具合は確かにかなりのものだが

おっさん相手にアレほど圧倒できるほどではない……

それでは二人に何があったのだろうか？

観察していると、フェイトが自分の身の回りに展開している、

武器の中に、見覚えのあるものが一つ浮かんでいる。

「……………っ!？」 1111

見覚えがあるも何も、私が先輩から預かってる鍵 そのものだ。

「今の貴方と僕には圧倒的な力の差がある……象と蟻……

いやそれこそ字義通りに 神と人ほどの力の差……

それを十分に理解している……何故だ？」

「ラカンさんっ!!!」

「来るな!

へっ 若造……フラフラじゃねえか……

そこでおとなしく最後まで見とけ。」

そうネギ先生に言うと、おっさんはやられた右腕の部分に

アーティファクトを使ったのか？



巨大な、おっさんの身長ほどもある巨大な腕のような  
武器を召喚しフェイトに向って構える。

「・・・貴方には似合わぬ無様な武器だ、何故だ・・・？」

何故貴方はそんな顔で戦える？

すべてが無意味だと知らされながら・・・

いや、貴方はすでに知っていた・・・10年前、いや、20年前の  
あの日から・・・

MM上層部がひた隠しにするこの世界の秘密に・・・」

この世界の秘密？

この魔法世界が火星に作られた人造世界だということか？

・・・いや、それにしても話が繋がらない。

魔法世界が人工的に作られたものだとして

それがラカンのおっさんに何の関係がある？

あのフェイトの言い方からすると、

それを知ったらラカンのおっさんの戦意が削がれるような内容らしいが

この魔法世界が人工的に作られたものだとして

それがおっさんの戦意に繋がるだろうか・・・

魔法世界、人工的に作られた世界・・・MM、元老院・・・MMの国民？

鍵、魔法世界の住人にはこれに抗うすべはない・・・MMと魔法世界の住人の違い？

「この世界の無慈悲な真実に。

絶望に沈み神を呪ってもおかしくは無実だ。

事実、これまでに僕が見てきたものは皆そうだった・・・

何故だ？ 真実を知り 尚 20年・・・

何故貴方はこの意味なき世界をそんな顔で飄々と歩み続けられる？」

「ほ？

・・・何だ てめえ、んなこともわかってなかったのか。

真実？ 意味？ そんな言葉 俺の生にやあ何の関係もねえのさ。」

「……ッ、ならば……」

その真実に焼かれて消え去るがいい…… 幻よ ！！」

「……っ、皆下がってください！」 1111

ネギ先生が私達の一步前に出て魔法障壁を全力で展開する。

本来なら私も協力して障壁を張るべきなのだが

私はフェイトの最後に発した単語と今までの思考が噛み合い

一時 思考停止状態になっていた。

そんな状況でも時間は流れていく。

フェイトが大量に召喚した釘の様な形状の石柱が

ラカンのおっさんに向って大量に降り注ぐ。

「ラカンさん！！」

おっさんはフェイトの攻撃で発生した粉塵にまぎれて

フェイトの背後に回りこみ殴りつけるが、

それに反応したフェイトに防御され、近接戦闘に持ち込まれるが  
フェイトの鍵を使った 魔法世界の住人 に対しては必殺の攻撃を  
回避し

背後に周り、フェイトを左腕で殴りつけ、フェイトの動きが止まっ  
た隙に

ついに右手の巨大な拳を叩き込む事に成功した。

「ぐ……こ、これも無意味だよ、J・ラカン。

結果はもう決まっている。」

「……フン。

けど、楽しかったろ？」

「……!!」

「もちつと楽しめや、フェイト。」

おっさんがフェイトの名を呼んだ時、

巨大な右手から爆発音が聞こえ、

肘の部分に突き出していた鉄柱が拳に向かって縮んでいき、

爆発音と衝撃波と共にラカンのおっさんの右拳がフェイトに叩き込まれた。

「ス、スゴイ!!」

あのフェイトを倒してしまったアルか!？」

「ラカンさんっ!!」

おっさんの攻撃で辺りに舞い上がった粉塵が収まり始め、

二人の様子を確認しようとする・・・

おっさんとフェイトが居たその場には、おっさん一人だけが立ち

自分の左腕を眺めていた。

「・・・なるほど、限界ってわけか・・・」

確かにもう結果は決まってやがったな。」

「ラ・・・ラカンさん・・・」

「・・・ぼーず。」

ラカンのおっさんの身体はまるで人体を構成する物質ではないかのように

サラサラと・・・まるで砂か灰のようにゆっくりと風に舞って削れていく。

「まあ・・・なんだ。」

おっさん世代の矜持として拭き残しはサッパリ拭ってやりたかったが、

どうも、全部押し付けることになっちまいそうだ。」

「ラ・・・カン・・・さん・・・？」

「悪い。」

まあ、てめえにならやれるさ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」・ラカン・・・」

「ラ・・・ラカンさんッ！！！！」 ーーー

おっさんは不意に吹いた強い風にそのまま身体を削られて

まるで砂の山が海の波に吞まれるかのように消え去っていった。

( 幻か……… やつぱり……… そういう事だったんだな………  
この世界の秘密というのは。 )

「………」・ラカン。

最後まで……… わからない男だった………」

「な……… 無傷アルか？」 111

「……… フェイト………」 #

「!？」

ダメだ！ 先生!!」

「フェイト……… アーウェルンクスツ!!」 #

ネギ先生は、目の間でラカンのおっさんがやられたことで

理性を失い、闇の魔法を全力で発動し闇の魔法に呑み込まれ始める。

「グウ……… ガツ………!？」

ネギ先生のその様子は、一度だけエヴァに見せてもらった

彼女が全力で闇の魔法を発動した時のように・・・

いや、それよりももっと悪魔に近い姿に魔力を見に纏い、変化していく。

「フ・・・」

「アアアッ!!」

ネギ先生はそのまま怒りに身を任せてフェイトに突っ込んでいく。

フェイトのもとに辿り着く、ほんの数瞬に、

雷の投擲を無詠唱で発動し、フェイトに叩きつけていく。

「ちっ・・・あんな状態なのに　あの魔法を無詠唱で発動するの・・・

こんなの私じゃ止められねえぞ。」　　1111

「やるのかい？　ネギ・スプリングフィールド。」



「クッ!!」

「いいだろう、やろう。                      ネギ君。」

「オオオオツ!!」 #

ネギ先生が理性を無くし、闇の衝動に吞まれ、

フェイトとの戦闘を開始しようとしたその瞬間・・・

「まあ、落ち着け。」

不意に何かネギ先生の頭を殴りつけたように

ネギ先生は前のめりに倒れかける。

「えっ・・・今は・・・ラ・・・」

「・・・・・・・・フツ、心底呆れた男だ・・・愉快だよ。」

「・・・今日はやめとこう      ネギ君。」

「な!?!」

フェイトはそう告げると水の転移魔法でその場から姿を消し、

どこかへ消え去っていく。

「ま、待てっ！ フェイト！！」

『やめとけ やめとけ 今のお前じゃ勝てねえよ。』

「……！！」

ラカンさんッ！？ ラカンさんなんですか！？」

ネギ先生がさつきから聞こえるラカンのおっさんの声の発生源、

ラカンのおっさんを探してあたりを見回す。

するとネギ先生の背後にうっすらと魔力で構成された精霊のような  
・  
・

透けて見える身体のラカンのおっさんが現れ始める。

「おっさん……」

「ラ……ラカンさん……」

『よう』

ネギ先生もラカンのおっさんの姿を見て落ち着いたようで、

魔力で構成された悪魔の様な爪や翼が崩れていき

元の姿に戻って行く。

「ラ……ラカン……さ……ん？」

『ん？ この姿か？ 気合いだ。』

全ては気合でなんとかなる。』

「……おっさん……おっさんと私達じゃ やっぱり……そう  
なんだな？」

私はなんとかネギ先生と古菲に悟られないように言葉を選ぼうとするが

うまく表現できずにいた……が

『ふむ……どう言うわけかしらねえが、千雨は世界の真相は掴めたようだな。』

なら、話は早えぜ。

見ての通り 奴らは世界の秘密に繋がる力を得たみてえだ。

時間がねーから 詳しくは千雨の嬢ちゃんにでも聞けばいいが・・・

俺じゃ 今の奴らにはてんで敵わねえって訳だ。

奴らを止められるのは、お前達だけだ。』

「……………!」

『まあ、ガキのてめえに世界を背負え、とまでは言わねえ。

……………アスナを頼む。』

「え……………?」

アスナさん……………アスナさんがどうかしたんですか!?

『奴らが 造物主の力を得ている以上、

ホンモノのアスナは向こうの手にあると考えるべきだ。』

「え……………? ホンモノ?」

ラカンさん、今なんて!?

『おーう、千雨!』

「な、なんだよ……………」

『余計な事押し付けちまって悪いな。』

あの二人やクルトが 後はうまくやってくれるとは思つが、

今の暴走を見て分かるとおり、コイツはまだまだだ。

バカやらねえように見ててやってくれねえか？

今はぼーずの周りにいる奴で嬢ちゃんだけが

闇の魔法を……己の闇を克服しているみてえだから頼むぜ。

その辺を見てやってくれ。』

「なっ……バ、バカ言ってるじゃねえよ！

何で私が！ 先生の世話は神楽坂の仕事だろう！？」

『今 お前達の傍らにいるアスナはおそらく偽物……替え玉の  
幻だ……』

「なっ……？」

「……！！！」

『いや……偽物とはいえねえか……俺や……この世界のよう  
に……』

「あ……ラ……カンさ……ん……」

徐々にラカンのおっさんの身体が崩れていく……

『へっ……じゃあな、ぼーず。』

闇に食われるなよ？

……後ろじゃねえ、前を向いて歩け！』

「ラカンさんっ！ー！」

おっさんの身体は……ネギ先生の方に置いた右手と口元が残るだけ。

『前を見て歩き続ける奴に、世界は微笑む！』

「ラカ……ン……さ……ン……」

「……」

おっさんは最後の言葉をネギ先生に告げると

風に乗って消えて行った。

「ラカン……ラカンさんっ！ー！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・バツカ・・・・・・・・が・・・・・・・・」

最後に面倒事だけ押し付けて消えてんじゃねえよ・・・・・・・・ったく・・・・・・・・」

ラカンのおっさんが消えていった夜空を眺めてみるが・・・

星がぼやけて見えるだけで、そこにおっさんの姿はなかった。

side 茶々丸

「キタキタキターーーッ！！」

コレだよコレ！！

B級ハリウッド展開！！

私が求めていたのはコレだーーッ！！」

「巨大召喚魔の触手、未だ増殖中。」

周辺空域の飛行魚を片っ端から襲っているようです。」

ネギ先生達と別れた後、私は早乙女さんの船のオペレーターとして巨大召喚魔からの逃亡中。

相坂さんが現在銃座に座って召喚魔の触手や飛行する悪魔達を迎撃してますが

なかなか敵の数が多くて苦戦しているようです。

「巨大召喚魔本体にはヘラス帝国守護聖獣、古龍龍樹が投入された模様です。」

「えええっ マジで!？」

「……って 怪獣大決戦じゃん! 案の定!！」

「オイッ ヤベエぞ!

触手に行く手を防がれちゃった!！」

「なにいいいい!？」



前方を確認すると召喚魔の触手が前方で円を描く様に展開し

私達の船の進行方向を防いでいる。

「やるじゃないっ!!」

光子魚雷 一番二番発射!!」

「一番二番発射・・・しかしハルナさん、退魔魚雷じゃないんですか?」

「ノリよ! ノリ!!」

続いて主砲スタンバイ!!」

「主砲、スタンバイ。」

「魚雷の爆破のタイミングに合わせて主砲を発射して

相乗効果で一気に抜くよ!」

「了解。」

先ほど発射した魚雷が前方の触手に迫って行く。

「今だ! 『主砲ツ・・・発射あ!!』」

「主砲、発射。」

ハルナさんの主砲発射のタイミングが完全に決まったようで

魚雷の爆発と主砲の相乗効果で、

進行方向の召喚魔の触手を破壊。

そのまま私達の船は触手の戦闘範囲から無事抜け出せたようで

ひらけた空域に出る・・・が

「接近警報、右後方から何か巨大な物体が着ます。」

「げげっ!？」

全力回避 取舵一杯!!」

ハルナさんの指示で舵を取り回避行動に移る。

船が回避行動を取った直後、

もともと船が居た空域を何か巨大な手のような物体が通り過ぎていく。

「巨大な物体の正体分かりました。」

「触手を操っていた召喚魔の本体の一部です。」

「そんなの見りゃ分かるわよっ!!」

怪獣大決戦の現場に出ちゃったじゃない!?」  
「――」

「――って、オイオイオイ龍樹あっさりやられちゃってんじゃねえか!?」

「先ほど私達の船に接近した物体は巨大召喚魔の左腕部分を使用し  
ての

龍樹に対する攻撃だったようですね。」

「何冷静に分析しちゃってるのよ、茶々丸!」

「しかしハルナさんが、船のオペレータたる者は

何時いかなる時も報告は冷静にするようにと・・・」

「今はそれどころじゃないわよっ!」

「オイオイ冗談やってる場合じゃねえぜ、二人共。」

龍樹は一発でやられちゃうし、ヘラスの艦隊の攻撃も全く効いてないみたいだぜ。

パル姉！ ずらかった方がいい！

・・・おいつ どうした？

早く逃げねえと！」

「いや、まあ そうなんだけど、いずれ世界を制覇するものとして

ここで逃げる選択はどうかと一考・・・」

「命あつての物種だろおうっ！！

おい、茶々丸の姉さんもなにか言っただけでやってくれ！」

「カモさん、少々お待ち下さい。

はい、それで使用してもよろしいということでしょうか？」

召喚魔の触手から抜け、巨大召喚魔を確認した後、

この船があつた召喚魔から逃げられる可能性を計算したところ

3・25%の可能性しかなかったので、私は超鈴音に連絡を取り

アレに対処できる武装の使用許可を取っている。

『いいヨ、こつちでも龍樹がやられた時点で

どうにかしなくちゃいけなかったからね。

茶々丸の方で処理してくれるならアル・イスカンドリアを使ってもいいヨ。」

『了解しました。』

・・・上の方から武器使用許可が出ましたので

あの巨大召喚魔をこちらで排除することにします。」

「上の方ってどこからさ！」

「おい、茶々丸の姉さん、いくらなんでもそれは無理だろ！」

「大丈夫です、私は甲板に出ますので

操縦の方はハルナさんお願いします。」

「茶々丸ちゃん、本当に大丈夫なの？」

「スペック上、問題は有りません。」

「だけど、アレをなんとか出来る武装って・・・何も持ってるように見えないけど？」

「話は後で伺います、今は時間ありませんので。」

「あ、おい 姉さん！」

カモさんが何か言いかけてましたが、  
時間がないので私は二人を操縦席に置いて、  
甲板に向って駆け出す。

甲板に着くと・・・

さよさんが巨大召喚魔を見て腰を抜かしたの甲板に座り込んでいた。

「さよさん大丈夫ですか？」

「へ？・・・あ、茶々丸さあん・・・あ、アレ・・・

あんなおっきいのどうしたらいいんですかあ？」 1111

「私が対処しますので、少し下がっていらってもらっていていいでしょうか？」

「あ・・・はい。どうぞどうぞ。」

「ヘラスのテオドラ皇女やMM議員、来賓の方々を  
ここでやられるわけにはいきません。」

二二三〇式 超包子衛生支援システム 空とび猫（改） 起動します。」

猫耳形の衛生との通信装置と飛行ユニット、

ネコ型 （？） 照準器を召喚し、私は巨大召喚魔に向かい

照準器で射撃座標を指定し通信機で衛生に送る。

『何それ！？ レーザー照準装置……ってことは、

まさか、夢と浪漫の詰まった衛星兵器ツ！？』

「威力が大きすぎて個人戦闘ではとても使用できませんが、

アレほどの巨大な質量の相手や、

対軍用ではかなりの効果が期待できる武装です。

……艇長、標的との距離を維持してください。」

『りよ、了解！』

「……衛星とのリンク 良好、エネルギー充填完了、

……発射します。」

私が照準器のトリガーを引くと衛星へ発射命令が通信され

衛星から巨大召喚魔へと強力なレーザーが射出される。

レーザーの直撃を受けた巨大召喚魔は一撃で本体部分が消滅し  
本体消滅と同時に触手も消滅していく。

「敵の消滅を確認しました。」

「すごいです！ 茶々丸さん！

あんなおっきい魔物やつつけちゃうなんて！」

「ありがとうございます、さよさん。」

『す……す……す……』

茶々丸ちんすげえー、衛星兵器も搭載してるロボメイドなんて最強  
じゃない！」

「何が最強か分かりませんが、

この攻撃に耐えられる魔獣や魔物は 私のデータ上には存在しませ  
ん。



それよりもハルナさん、この空域の魔物は後は小型の飛行タイプのみですので

「このままネギ先生達との合流地点まで移動しましょう。」

『お、OK』。

茶々丸ちゃんも操縦席に戻ってオペレーターの続きを頼むよ。』

「了解しました。」

ハルナさん達とネギ先生達との合流地点に向かう為、

私は甲板から操縦室へ戻った。

side 千雨

フェイトとの戦いで、ラカンのおっさんが居なくなっていました  
落ち込むネギ先生と私達のところに急に宮崎から念話が届いた。

『先生！ 先生っ！』

時間がないので要点だけ言います！

誰か大事な人が消されてしまっても 復活の方法はあります！

誰かが消されてもあきらめないでください！』

「え．．．？ の．．．どかさん？」

「？．．．．．どういうことだ？ おい．．．宮崎！ 本屋っ！！

っち、もう念話切ってやがる。

と、とにかく先生、私達も早く合流地点に向かおう、

そこで宮崎から詳しく今の話を聞こう。」

「そ、そうですね．．．今はとにかく．．．．．クツ．．．．．」

1111

「ネギ坊主！？」

古菲が様子のおかしいネギ先生に駆け寄ると

そのタイミングに合わせたように私達の周りが光で照らされる。

「ネギ先生いっくっ!!」

皇女様が 軍を出して悪魔を押さえてくれますーっ!

今のウチに逃げましょう!

はやく はやく!」

声のする方向を見ると早乙女の船に乗った相坂がこっちに向かって手を振っている。

「さよっち!

合流地点の皆はどうしたアルか!」

「なんだか連絡が来て、別の船で先に逃げるそうですーっ!」

「ぐ……っ」

「!?!」

ネギ先生の様子がおかしい……

胸を押さえて苦しそうにうずくまっている。

「グツ……う……くっ！」

「ネギ坊主！」 「先生っ！！！」

「あ……がつ……あああっ！！！」

「先生！」 「ネギ坊主！！！」

「クソツ、マズイ 闇の魔法の後遺症が出始めたんだ！」

古菲！ 先生を担いで急いで船に乗せて寝かせるんだ！」

「お、おおう、わかったアル！」

こうしてネギ先生は古菲に背負われて早乙女の船の寢室に担ぎ込まれていき

私達はなんとか無事（？）に早乙女達と合流できた。

神様から頼まれたお仕事。 その75（後書き）

75話目 投稿

前回投稿より少し時間が空いてしまいました。

PCを新調しデータの移動と設定で時間を取られたのですが  
それが終わった後にintelからCore i7-2600で使  
用されるP67とH67チップセット搭載の  
マザーボードに不具合が発覚。

ちょうど私の新調したPCがi2600を搭載したPCなので  
数カ月後にショップにPCを送ってマザーボードを買えないといけ  
ないという罠。

仕事で使うPCなのでショップに送るときに

データも一回消さないとまずいだろうからまた設定のやり直し・・・

orz

神様から頼まれたお仕事。 その76（前書き）

長らく更新が止まっていたんですが、  
プライベートで仕事が忙しかったりPCを買い換えたりと  
色々有り更新ができなくなっていました。

以前ほどの更新ペースは維持出来ないと思いますが  
最近になり少し時間が取れるようになったので  
続きを更新をしていきたいと思えます。

神様から頼まれたお仕事。 その76

新オスティアから旧オスティアへの移動中での飛行船内

side 千雨

先程の新オスティア総督府でのフェイトとの一件で

ネギ先生は闇の魔法の後遺症で一時的に意識を失い

今は、早乙女の飛行船の寝室で眠っている。

私達はアレから綾瀬達と合流し早乙女の船で回収、

宮崎や犬上達は明石がオスティアまでの道中で世話になった

運送関係の仕事をしている一般人の飛行船に搭乗し

2隻の船で廃都オスティアに向けて移動中。

「そもそも私達は何で廃都の方のオスティアに向って私たちは移動

してるんだ？

オスティアは戦場になってるとは言え、

警備隊が優勢だったから戻ったほうがいいと思うんだが？」

「さっきも言ったが、宮崎がアーティファクトで得た情報だと

消されてしまった魔法世界の住人を復活させるのに

必要なアイテムを入手する事と、

ネギ先生の幼なじみと本物の神楽坂を救出すること、

それに旧世界への脱出するためのゲートポートが

廃都オスティアの近くに存在するからだ。」

「いや、だから一度新オスティアに戻ってクルトさんやヘラスのお姫様達の

援護を受けたほうがいいんじゃないかと……」

「MM兵やオスティアの警備隊はともかく、

ヘラスはすでに当てにならんだろう。

龍樹はあっさりやられてしまったし、飛行戦艦の主砲もろくに効いてなかったしな。



・・・何故MM兵やオスティア警備隊の攻撃は効いて

ヘラスやアリアドネーの警備隊の攻撃は効かないのかは謎だがな・

」

『・・・どうしますか千雨さん？』

いっそ、私達の知ってる情報も言っちゃうですか？』

『もう少し考えさせてくれ・・・これは先生達はともかく

お前の同僚や、この世界の人達には酷な話だからな・・・』

『・・・確かにこの世界の人の魔法は完全に無効化されるというのは問題ですが、

情報として教えておいたほうがいいんじゃないでしょうか？』

『は？ 何言ってるんだ？』

綾瀬、お前知り合いのコレットやセブンシップに

お前達は作られた世界の人間だって言えるのか？』

『確かにこの魔法世界は人工的に作られた世界だと聞いてますが

コレット達は関係ないでしょう？』

『おいおい、ちょっと待て。』

お前この世界が作られた世界だという話を誰に聞いた？」

『このペンダントのアーティファクトを預かったときに

ソプラノ達から聞きましたが？』

『……先輩……私には直接何も教えなかつたくせに……

じゃあ、この世界の人達のこと聞いてないか？』

『この世界の人達の事って何ですか？』

『……どうやら私達は お互い情報の交換が必要なようだな。

でないと話が噛み合わない。』

『そうみたいですな。』

「おい、長谷川に綾瀬、念話でこそこそ何を話している。」

「い、いいえ、別にたいしたことでは……」

「そうだぞ、龍宮。」

別にたいした話はしてないぞ。」

「だったら念話など使わず言葉で喋ればいいだろう……」

お前達……何か情報を隠しているな？」

龍宮の目が怪しく光り、私と綾瀬を睨みつける。

魔眼は関係ないと思うが、私達の態度がおかしいのは

完全に見抜かれているようだ。

そうして私達が龍宮に睨まれていると、

不意に龍宮の背後のドアが開き、多少顔色の悪いネギ先生が現れた。

「千雨さんに……龍宮さん!？」

「ああ、先生、目が覚めたか。」

「何故 龍宮さんがここに？」

「ここって……ハルナさん船の中ですよね？」

「私はラカン氏からの依頼でな、

オスティアに来てから神楽坂の護衛を影からしていたんだが

総督府での戦闘があつてから一緒についてきたんだ。

綾瀬達や神楽坂は無事にこっちに船に乗っているし、

宮崎達や他のメンバーも多少問題があったが別の船を確保して一緒に移動中だ。」

「そうですか……」

「少し失礼するぞ。」

「へ？」

龍宮がネギ先生の前に膝立ちになり、

先生の手を取って何か調べているようだが……

「ふむ……重度の急性魔素中毒の症状に似た症状が出ているな……  
なるほど、コレが闇の魔法の影響か……」

「……」

「早急に手を施さなければ、命に関わるぞ、ネギ先生。」

「……分かってはいます、龍宮さん……でも……」

「龍宮、その事だが皇女から貰った魔法球が丁度この船に積んである。」

後で闇の魔法の巻物に居るエヴァの仮想人格に対処方法を聞いて  
処置するというのはどうだ？

できたらお前にも力を貸して欲しい。」

その魔眼なら私達に分からないことも分かるかも知れない。」

「なるほど、ダイオラマ球か・・・」

それならばこの状況でも ある程度時間をかけて治療ができるな。」

「そ、それよりも状況はどうなっています？」

「今は多少計画が早まっているが、廃都オスティアに向けて移動中で

これから宮崎達の方でなにか重要な情報をつかんだということなので

その情報を確認し、作戦を練り直すところだ。」

「分かりました・・・僕もその作戦会議に参加した後に

魔法球で治療に入ります。」

「ならば食堂に行こう、そこに全員集まって情報交換をしよう。」

「はい。」

「じゃあ、私達は・・・」

「お前達も来い。」

お前達はどれも重要な情報を持っているような気がするからな。」

「……分りました。」

私達は龍宮に連れられる形で食堂まで移動する。

宮崎がどんな情報を掴んだか知らないが、

その内容次第では私達の情報も公開せざるをえないだろう……

魔法世界の住人の秘密を……

ネギ先生が食堂に入ると、皆心配していたらしく、

先生の安否を確認できてホッとしたようで食堂内が明るい雰囲気に変わる。

「皆さん!」

「ネギ! 大丈夫?」 「もう立って平気アルか?」

「ネギ先生……」

「お邪魔してまゝす。」

「ネギせん」「ネギくん！」……」「ネギ君大丈夫!？」

「みんな……良かった……無事で……」

「でっ……でもネギ君！ 奴隷長やトサカさんや他の皆が……！」

「すまん……ネギ、俺達が逃げる途中で

フェイト達の仲間の長身のローブの男に襲われてしもつてな……  
なんとか俺達は無事やったんやけど、奴隷長や他の人達がやられて  
もつて。」

「……うん小太郎君、こつちもラカンがフェイトにやられて  
しまつて……」

「ああ……聞いたで。」

「……」

お互いの状況を確認しあい、学校のメンバーは無事だったものの

魔法世界で知り合った人達が、何人かやられてしまった話が出た  
ことで

皆一様に暗い表情になる・・・そんな時だ、

宮崎が普段出さない大きな声でしゃべりだした。

「み、みなさん！」

・・・あ、あの、先ほど皆さんに念話で話した通り、

消されてしまった皆さんを救う方法があるんです！」

「・・・何・・・やて？」

「・・・本当ですか！」

「本当！ 本屋ちゃん！」

「あ・・・あわ・・・は、はい！」

・・・その前にまずはこの世界の事や、

敵の使ったアイテムのことなどを説明しないとイケません。」

宮崎達はフェイトの仲間の黒いローブの男と対峙したということは・

・

この世界の真実をあのアーティファクトで知った可能性も有るのか・  
・・・？



「こ、コホン、それでは私が知り得た情報をお伝えします。」

「……はい！」

「完全なる世界の魔術師、真名デユミナスの心を読み

彼等がこの世界の秘密を知り、それに至るチカラを手に入れたことが判明しました。

まず、この世界の秘密ですが……」

「……」

「この魔法世界は、以前ネギ先生達が推察したとおり、

数千年前にある魔法使いによって火星に作られた人工の世界です。」

「……やはり、そうでしたか。」

「ですが、問題はこれだけじゃないんです……」

「まだ、なにかあるんですか？」

宮崎はこちらの船にのっている綾瀬の知り合い、コレットやセブンシップ達、

それに向こうの船では村上達の顔色を伺いながら言葉に詰まった様子を見せる……

その様子を見た綾瀬は不思議そうな顔をしている。

(……………やっぱりそこまで知ったのか。)

「え……………？ どうしたの本屋ちゃん？

その続きは？」

「あ……………はい……………この世界……………この魔法世界に住んでいる、MM国民等の一部の人を除いて……………他の魔法世界の住人は

その時に……………その魔法使いによって人工的に作られた……………

作られた人達の子孫なん……………です。」

「……………え？」 1111

「……………なにを言ってるの？」 1111

「……………」 1111

宮崎によって告げられた真実は、

ここに居る人の中で おそらく私以外は誰も想像もしてなかった内容だろう。

セブンシップ達は真っ青になってお互いを見つめ

綾瀬や他の人達も一部、龍宮や茶々丸を除いて全員 青くなっている……

「……か、彼等が持っているアーティファクト……

名を 造物主の掟 と言う鍵というか杖状のアーティファクト 「ちよつと待つてよ!!」 「……」

宮崎が重い空気の中、説明を続けようとするが、

それに綾瀬の知り合い……コレットやセブンシップ達が待ったをかける。

「じ……じゃあ、なに？」

私達は……私は……作られた人間だつて言うの!？」

1111

「……」

「・・・なんとか言いなさい・・・なんとか言いなさいよ!」 #

「コレット!」

映像越しの宮崎に向かって怒りの表情で叫ぶコレットを

背後から綾瀬が抱きついて止める。

「コレット待つです!

落着くですよ!」

「これが落ち着いてられるわけ無いよ!」 111

「そ、そうですねっ!

自分が過去に作られた人間の・・・人間と言えるか分からない者の  
子孫だと言われて

落ち着けるわけ有りませんわ!」

「委員長・・・」

「そ・・・そうだよ! そんなの嘘・・・きつとあの子が偽の情  
報を掴まされて・・・」

「そうですね!」 「その通りです! お嬢様が・・・そんな事は  
ありません!」

「だ、だけど本屋ちゃんのアーティファクトは、心を読むから・・・  
あう・・・」

早乙女の船の食堂内は騒然とし、

宮崎達の居る船の方でも、村上達がどうしていいか分からないような表情をしている。

コレット達は映像越しの宮崎にすごい剣幕で文句を言い、

その様子を観ている宮崎も涙目になって、どうしていいか分からない様子だ。

・・・イキナリこんな話を聞かされたコレット達の気持ちも頭では分かるが

宮崎も もう少し言葉を選ぶか、話す人や内容は選ぶべきだったろうな・・・

しかし このままでは話が進まない。

宮崎の話の様子だと鍵の事や敵の目的も分かっていると思われるが

このままだとその話を聞くこともできない・・・

しかし、私には彼女達を止めるいい言葉が浮かばない・・・

そうしてどれくらい時間が立ったのか分からないが、

しばらくコレット達が宮崎に文句を言い、

それを变に神楽坂が弁護したりと、泥沼の様子になった時だ・・・

コレット達の前に茶々丸が歩いていき、コレット達に話しかける。

「すみません、少しよろしいでしょうか？」

「なんですかっ！ 今大事な話しをしてい・・・・・・な!？」

茶々丸がセブンスープの前に行くと、

おもむろに上半身の服を脱ぎ、

腹部の辺りで手をゴソゴソと動かしたかと思おうと腹部が急に開く。

中には筋肉繊維のような物が見えたり機械のような、複雑な部品の集合が見える。

「な・・・貴女・・・!？」  
1111

「「……!?!」」 1111

「はい、ご覧のとおり、私は人工的にある科学者達によって作られた存在です。」

「……貴女。」

セブンシープ達は茶々丸の身体を見て、その生誕の話聞き驚いたことで

頭を上った血が少し降りてきて、多少落ち着きを取り戻したようだ。

その様子を確認した茶々丸は腹部のパーツを直し服を着直す。

「私はこのように先程の宮崎さんの話が真実なら

ある意味貴女達の遠いご先祖と同じのように作られた存在です。」

「……」

「ですが、私には今現在私を家族同然に扱ってくれる人達がいますし

私を機械や道具のように扱う人達も幸いしません。」

「「「……」」」

「私はまだ生まれて数年しか経っていませんが、

貴女方はちゃんと御両親から生まれて 幼少時代を過ごし、

ご友人や ご家族と暮らし、ちゃんとその思い出も有るのでしょうか。

先ほど宮崎さんは魔法世界の住人は、過去に作られた存在だと言いましたが

貴女方が 直接作られた存在で有るわけでもありませんし、

もつと言えば ある宗教では人は神が土から創り上げた存在だとか

科学的には人間の先祖は猿であるとか魚、微生物や単細胞生物とも  
言えます。

そういう意味では魔法世界の住人も、旧世界の住人もそう変わりません。

魔族や精霊は自然発生しますし、今の魔法科学なら人工的に作ることもできます。

過去の先祖の生誕にあまり心を囚われずに、

今の貴女達のご家族や周りにいる人、友人、その人達との思い出や

貴女達の記憶、感情、立場等、

貴女達を人たらしめる記憶や意思、環境を大事にしてください。



少なくともここには私や貴方達の出生がどうだろうと問題にする人はいませんし。

……そうですね？ 綾瀬さん。」

「……はっ！ そ、そうですね！」

私はコレットや委員長、ベアトリクスさんの

遙か遠いご先祖のことなんか知らないですよ。

それに人間じゃないって言えば、二人とも獣人じゃないですか。」

「ユエ……」「ユエさん。」「」

「今大切なのは、敵の情報と目的です。」

貴女方や私、旧世界の人間が昔はどんな動物だったかなど

後でいくらでも研究するなり調査すればいいかと思えます。」

コレット達や私、それにこっちの船に居る人や

映像の向こうで茶々丸の話しを聞いていた人達も

茶々丸の話で少し落ち着いたようだ。

「す、すいませんでした……私も少し言い方が悪かったというか……」

配慮が足りませんでした。」

「……いいえ、私達も少し頭に日が上って言いすぎてしまいましたわ。」

確かに今は私達の遠い先祖の出生や

元がなんだったのかは 今重要なことではありませんでしたわ。

報告を続けてくださいな……そのかわり、

この件が終わったらゆっくりと貴女の話しを効かせてもらいますから！」 #

セブンスープも警備隊ということで、現状 何が重要かの認識はちやんとできるようだ。

ただ、やはり頭には来てるようだが……

宮崎の方も、今の話で落ち着いたようで、報告を続ける。

「で、では報告を続けます！」

先程の話した通りこの世界は作られた世界で

その際、この世界を作った魔法使い、創造主の力を使うことができる魔法具、

彼等がここ数日で使用可能になった魔法具 その名を 造物主の掟  
といいます。」

「造物主の掟……か。」

「造物主の掟には大きく分けて3種類あり、

まず、オスティアを襲った悪魔達が装備していたものが

戦闘用の簡易タイプ、マスターキーです。

簡易用と言っても これを持つ者に魔法世界の住人はまずかないません。

魔法世界の住人が使う全ての魔法が無効化されてしまいます。」

「……それで、私やコレット、

アリアドネー警備隊やヘラスの艦隊の魔法が全く効かなかったんですのね。」

「……………」

「次により高度に創造主の力を模した7本のグランドマスターキー、  
今は1本失われたようですが

今回、魔術師デュミナスやフェイトが持っていた物です。」

「……だからラカンさん程の力を持っていてもフェイトに勝てなかったのか。」

「そして最後に 一つの グレートグランドマスターキー。

そこから引き出せる力や権限は この世界を作った創造主と同等とされ

まさに 世界 の最後の鍵と言えます。

そしてこの鍵の力を使えば消えてしまった人達を

もとに戻すことが出来るはずなんです。」

「待ってくれ、そのグレートグランドマスターキーを使えば

死んだ人間も生き返す事が出来るのか!？」 1111

龍宮がいつもの落ち着いた様子とは打って変わって

なにか綻るような表情で宮崎に質問する。

いつもの龍宮らしくない態度だが……何かあったのか?

「いいえ、死んだ人間は生き返すことはできませんが、

今回、敵組織 完全なる世界はどういう理由からかは知りませんが  
この魔法世界の住人を殺害することをしていないようなんです。」

「……どういう事だ？」

だが、あの悪魔の攻撃でやられたものは砂のように消えてしまったぞ？」

私もラカンのおっさんが消えたときの様子を思い出してみるが

おっさんは砂のように消えていったはずだ。

「どうやら彼等は マスターキーを使つての攻撃を受けたものを  
ある限定空間に送つて 監禁しているようなんです。

何故そのようなことをするのか、

それと敵の目的までは読む時間がなかったので……すみません。」

「いいえ、これだけの情報を得られただけでもすごいですよ！」

「ああ、いくら いどのえにつき の力があつたとは言え

ここまでの情報を引き出すとは……」

確かに……こつちの世界に来て宮崎もかなり成長した。

もともと図書館探検部ということで見た目に反して

それなりに運動神経や危機回避能力は高かったと聞いているが

ここまでとは……

しかし、私が知ってる情報もほとんど再確認と言える内容だったし

特に私が追加することはないが……先輩から預かったこの鍵、

どうしたものか……先輩は私達に自由に判断して行動しろと言っているし。

この場で鍵を持っていることを明かして

然るべき人に持たせたほうがいいんじゃないだろうか？

すでに向こうが鍵を持ち出した時点で

私が持っているアベレージは無くなったし

私はコレがなくても普通に攻撃が通るしな……

綾瀬の様子を見るとやはり同じように悩んでいるようだ

ペンダントを握りしめて考え込んでいる。

「と、とにかく そのグレート・・・なんとかキーを手にいれれば

みんな復活 ハッピーエンドってコトだよな？

いいじゃん！ 簡単じゃん！ 速攻行こうよ！！」

「うんうんっ！

アーニヤちゃんの救出もあるし行こうよ！」

「アスナさん・・・ し・・・しかし相手は・・・」

「ネギ君 ネギ君、あの魔術師さんな」

ウチらには手え出さん言うてたえ？

のどかの話しても魔法世界の人らは一応無事なんやろ？」

「ふむ・・・しかし その前提は変わり得る。

総督府では巻き込まれた形になったが、

自ら闘争の場に赴いた者まで見逃すほど

奴らもお人好しとは思えないな・・・」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

龍宮の指摘はもつともで、皆もそれが分かってしまったのか

不意に 一時の沈黙が訪れる。

「・・・先生・・・それでも私は 私の仲間のために、

私を逃がすために命をかけてくれた仲間のために 力を尽くしたい  
です。」

「のどかさん・・・」

「ネギ君・・・私も・・・この世界でお世話になった人達のために  
何かできることをやりたいんだよ。」

「ゆーなさん・・・」

「ネギさん・・・」 「ネギ君！」 「先生。」 「ネギ先  
生。」 「ネギ！」

ネギ先生はこの船の食堂に集まっている皆や、



向こうの船の映像の人達を眺め、その決意を確かめる。

私もここまで来てこの世界の人達や、ラカンのおっさんを放っておいて

自分だけ逃げるのは目覚めが悪い。

綾瀬の方を確認するとやはり同じ気持のようで、

私の目を見つめ頷く。

「……茶々丸の方を見ると、諦めたような……悲し様な苦しいような、

複雑な表情で私と綾瀬を見ている……

（アイツも複雑な表情が出きるようになったものだが……

何で 今この場である表情が出るんだ？）

「……フウ……仕方ないですね。

みんなで行きましょう！

ただし無理はせずに、先生の言うことは聞いてもらいますよ。」

「いやっほっほっ!」

「そう来なくっちゃ!」

「さっすがリーダー!」

「で、行くの? 行っちゃうのっ!」

「いはいはいえ、まだです、早いです。

僕はこれから 治療と救出作戦検討のためにダイオラマ魔法球に入ります。

皆さんもできたら順番いダイオラマ魔法球で休みをとってください。

「

治療?」

「あ いえ その・・・まあ・・・」

治療という単語に神楽坂 ( ? ) が反応してネギ先生を心配し

体の様子を確認するようにベタベタと触っている。

先生もくすぐったいのか、神楽坂から逃げて

早乙女に航行の時間や航路について質問し、

皆も歓談をしている……が、

この時 食堂内に茶々丸の姿がどこにもなかった。

side 茶々丸

「はい、やはり千雨さんや綾瀬さんもネギ先生に同行して

廃都オスティアに行くようです。」

『……やっぱりそうなっちゃうよね。』

『それはそうだヨ。』

私だってその場にいたら、着いて行かないなんて言えないヨ。』

『私も着いて行っちゃうでしょうね。』

『ウチはちゃんと旦那さんの言うことは聞きますえ。』

『私達も同じです、千草様。』

『ほら見る私の勝ちだ、チャチャゼロ、そのケーキをよこせ。』

『ツチ チサメノヤローハ ヘタレダカラ

ツイテイカナイツテ イウトオモツタンダガ・・・』

『バカめ、私の弟子がそんなヘタレなわけがないだろう。』

『何やってんのさ・・・エヴァ達は・・・』

まあ、とにかく、廃都の方には私達も行くし、

クルトがオスティアの敵を排除したら艦隊を率いて行ってくて言うてるから

こっちでもできるだけサポートするけど

最悪の時は・・・お願いね。』

「かしこまりました。」

『茶々丸もネギ先生達に協力したい気持ちなんだろうから

嫌なことを頼むけど、お願いね。』

「はい、それでは千雨さんや他の方が来るといけないので

これで通信を切ります。」

『うん、じゃあね〜。』

『茶々丸も頑張るんだヨ。』

「はい、それでは。」

side ソプラノ

私はオステイアのクルトの家で

皆と一緒に茶々丸の報告を聞いていたが・・・

茶々丸の声に不満が含まれているような気がした。

「・・・・・・・・ふゝ、やっぱりダメかなあ。」

「ダメだと思っヨ。」

「だよねゝ。」

「むしろ私や超さんには好ましい結果ですけどねゝ。」

「・・・・・・・・何がダメなんだ、姉様？」

「ん、茶々丸もきつと いざっ！ て時になったら私の指示を無視して

千雨や夕映、ネギ先生に協力するんだろぅな、って思って。」

「ふん・・・だが姉様だってそっちの方がいいと思っているんだろぅ？」

「まあ、ね・・・それでこそ茶々丸だから。」

あの優しい娘が目の前で困ってる人を見捨てるなんてできないだろぅからね。」

「茶々丸の親としては、娘がいい子に育ててくれて

嬉しい限りだよ。」

「そうですよね。」

「こっちは心配事が増える一方だよ。」

「旦那さん、はい。」

お茶でも飲んで気を落ち着けておくれやす。」

「ありがと、千草。」

千草から受け取ったお茶を飲み、一心地つく。

いつもながら千草のいれてくれる日本茶は丁度いい温度と  
私好みの濃さで美味しい。

千草は私がお茶に満足している様子を見ると

ニコニコと機嫌よさそうに私の横で微笑んでいる。

私がお茶を楽しんでいると何か気に入らないことでもあったのか、  
エヴァが多少いらつきながら今後の話をする。

「で？ 私達はこれからどうするんだ？」

「いっそばーや達が乗り込む前に私達で乗り込んで制圧してやるか？」

「それは どう考えてもマズくない？」

まあ、ネギ先生達が突入するタイミングに合わせて

こっそり侵入して、裏方らしく仕事を済ませて、

できたら先生達に見つからないようにこっそり帰ろうよ。」

「まあ、見つからないようにというのは絶対無理だと思っヨ。」

「そこはなんとか言いくるめて、納得してもらおう方向で。」

「今後のためとは言え、ソプラノもめんどくさい事をするものだネ。」

「超だって同じ立場だったら似たようなことをするんじゃない？」

学園祭の時だって 成功してたら

こっそり裏から世界を監視するつもりだったんでしょっ？」

「それはそつだヨ。」

私のような知識や力を持った未来人が表で派手に動いてたら

すぐに目の敵にされて消されてしまつヨ。」

「そついうわけだから 向こうではコソコソとネズミのように行こう。」

「全く・・・私の主義に合わんな。」

「キニイラナイヤツハ ミナゴロシニスレバ イインダヨ。」

「・・・こつやって見ると、エヴァンジェリンさんとチャチャゼ口さんって

本当によく似てるんですね。

製作者の心が現れるというか・・・」



「・・・なっ!?!」 1111

葉加瀬の指摘がなにかエヴァの急所に決まったようで

エヴァは顔面蒼白でチャチャゼロを見つめ固まってしまった。

「ん? ドウシタゴシユジン?」

「放っておいてあげな チャチャゼロ。」

「???」

私達は 一人状況がわからず不思議そうな顔をするチャチャゼロと

固まってしまったエヴァを お茶請けにしながら

皆でお茶を楽しむことにした。

神様から頼まれたお仕事。

その76（後書き）

76話目 投稿

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7417n/>

---

ネギま！ 神様から頼まれたお仕事。

2011年6月30日23時13分発行